

Fate/Radiant of X

—E—E—

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダーBLACKとなりゴルゴムを壊滅させ、聖杯戦争を戦い抜いた間桐光太郎。

平和を謳歌していた彼の前に異世界からの侵略者『クライシス帝国』が出現する。

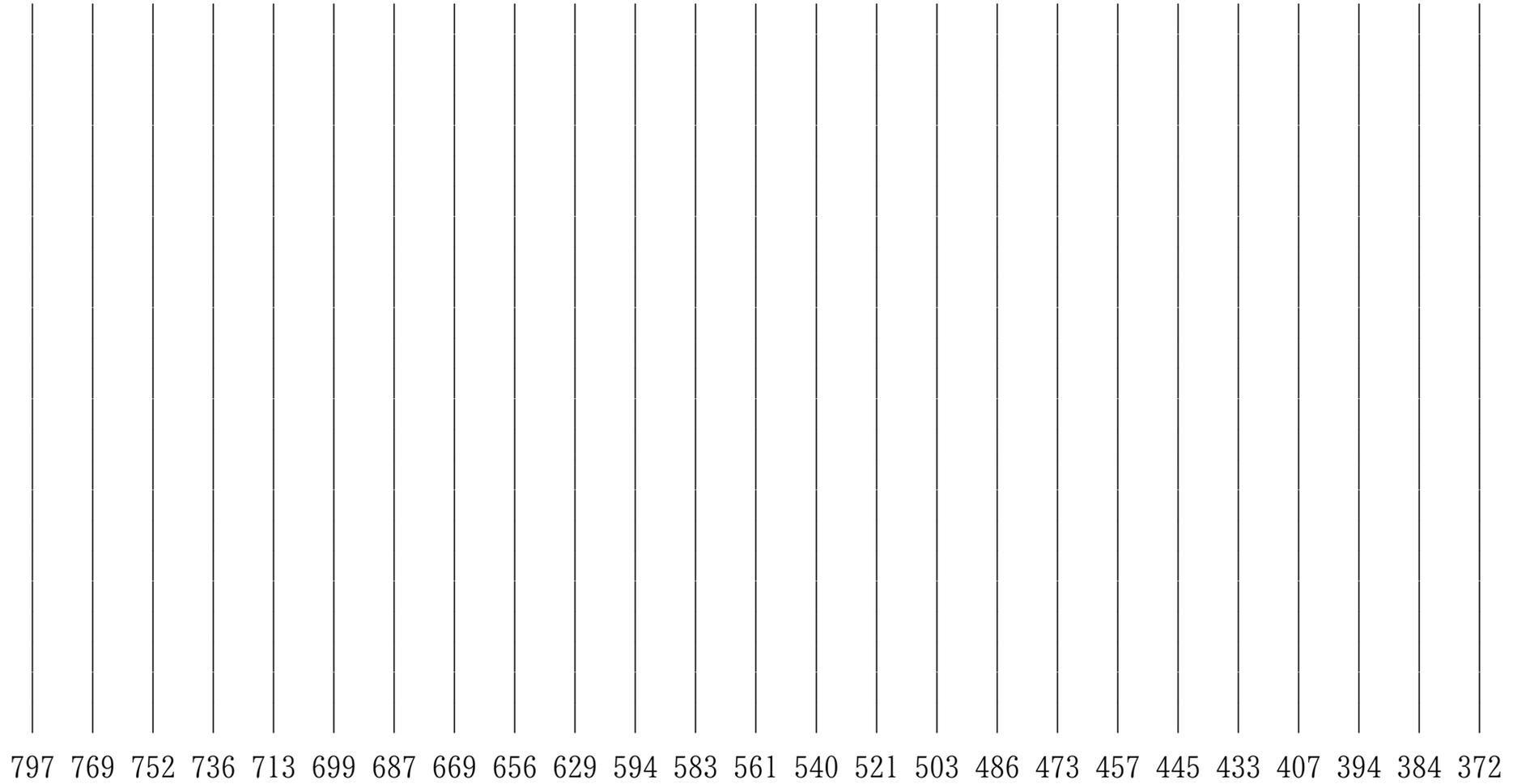
新たな敵を前にして、光太郎と仲間達は再び立ち上がる。守るべきものの為に…

※この作品は以前連載した『Fate／Double Ride r』の続編となります。時折前作の解説を交えながら書くつもりではありますが、合わせて読んで頂ければ幸いです。

目次

第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	プロローグ
362	346	335	321	309	281	264	254	242	228	215	202	174	150	137	128	103	91	80	59	39	20	8	1

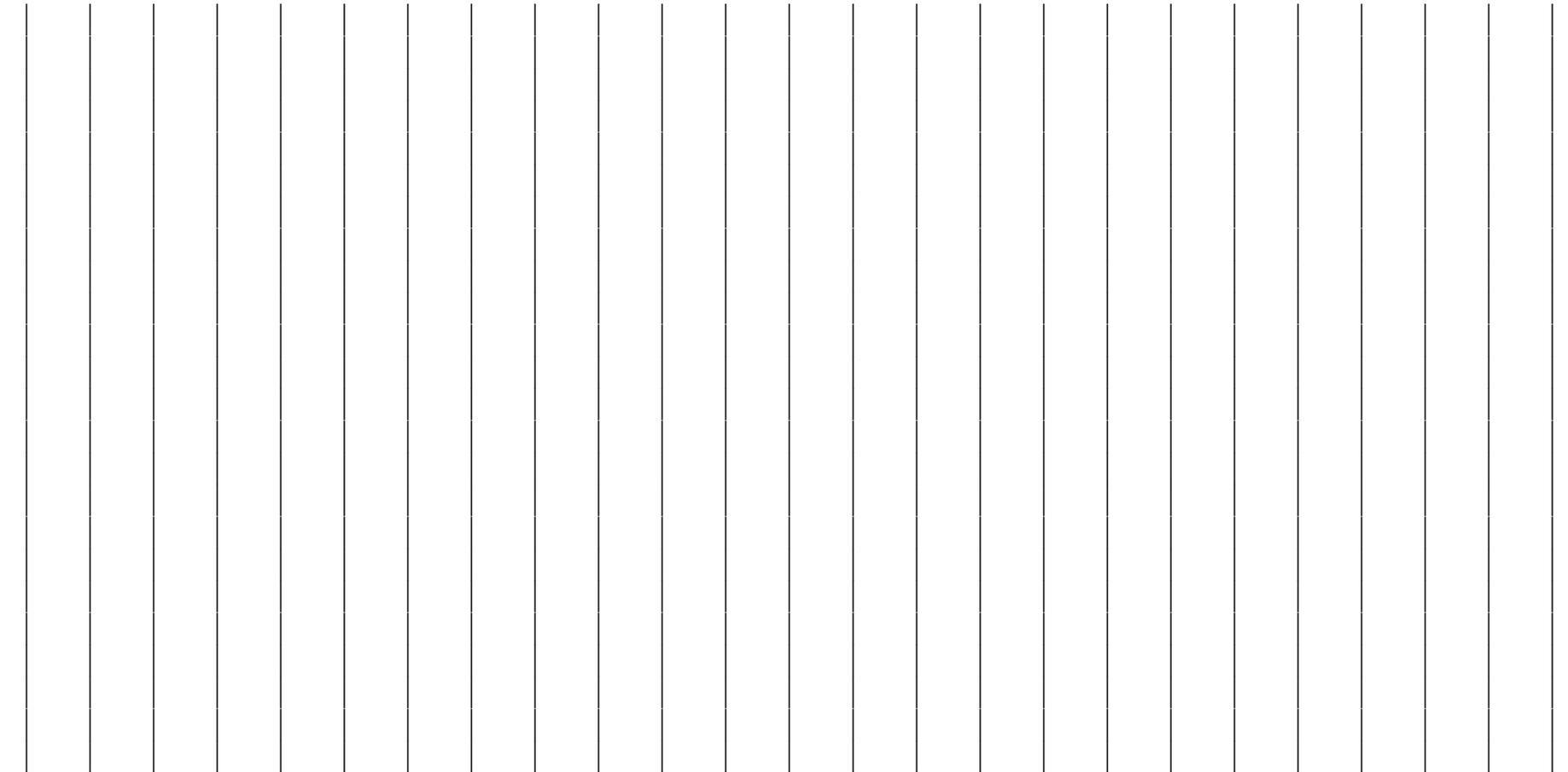
第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話 第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話 第24話



第 7 3 話
第 7 2 話
第 7 1 話
第 7 0 話
第 6 9 話
第 6 8 話
第 6 7 話
第 6 6 話
第 6 5 話
第 6 4 話
第 6 3 話
第 6 2 話
第 6 1 話
第 6 0 話
第 5 9 話
第 5 8 話
第 5 7 話
第 5 6 話
第 5 5 話
第 5 4 話
第 5 3 話
第 5 2 話
第 5 1 話
第 5 0 話
第 4 9 話

126112471224120511791159114411221104109210801059103910231010 997 972 948 939 921 910 898 884 858 824

第9話 第9話 第9話 第9話 第9話 第9話 第9話 第9話 第8話 第8話 第8話 第8話 第8話 第8話 第8話 第8話 第8話 第8話 第7話 第7話 第7話 第7話 第7話 第7話



1628161315941576156515511544153115191503147814701451144114271416140413931381136613571337131312971276

プロローグ

——某国 密林地帯

闇夜の静寂を破り、草木を踏み抜きながら自分達に迫る異形の者達を薙ぎ倒す2人の姿があった。

1人は所属する部隊で支給されているズボンに黒いタンクトップという軽装。だがそれで十分であるという自信を現すように手にした槍を振る振り、飛び掛かる異形を突き、払い、叩きのめしていく。その部隊で彼専用で造られた特殊金属の槍：本来彼が手にするモノと比べたら劣るものの、彼の力を発揮させる業物と言えるだろう。

もう一人は彼とは違いしっかりと完全装備であるが、銃器などの武器を持たず己の拳のみで敵を大地に沈めている。拳を動かす度に漏れる赤い輝き：彼女自身の持つ魔力の残滓が美しい線を残していくが、敵はそんな事を考える暇なく散っていく。

否、目の前の敵に襲い掛かるというプログラム以外にない『機械人形』にそんなことを考える事すらもうできないのだろう。

2人は次々と出現する敵の破壊を続けていた。

その状況を衛星からモニターでとらえたオペレーターは背後に立つ男へ伝達する。

「映像安定。Dポイントへ向かっていた『ファースト』と『ランス』、敵との戦闘に入っています」

「位置情報を確認。別部隊へ応援要請」

「わかった。そのまま目的地の監視を続けてくれ」

「了解」

次々と寄せられる情報を聞き、オペレーターへ指示する男：スーツ

姿の日本人は短く応えると黒い手袋を着用した右手に力を込める。

(今回は…間に合うか?)

「こいつでしめえか」

最後に現れたアンドロイドの胸へ槍を一突きし、機能停止を確認したランサーは同じく敵を五体バラバラにしたバゼットの方へと顔を向ける。義手である拳の調子を確かめえるように強く握りながら足元に散らばるアンドロイドの眺める。未だにバチバチと放電する頭部のレンズに映る自分の顔を見て、バゼットはランサーへと声をかけた。

「雑兵がこちらに向かってきたとなると、この近くにあるということですね」

「ああ。大将の言う通りならそうだろうよ。時間は喰っちゃまったがあと——」

槍を肩に担いだランサーはポケットにねじ込んでいた地図を片手で起用に広げると同時だった。

「これはッ…!?!」

突如2人の足元を揺るがす振動と耳に響く爆発音。バゼットが思わず声を上げて見上げた先…自分達がいる数十メートル先で炎と煙が絶えることなく立ちのぼっている光景であった。そこは確認するまでもなく、ランサーとバゼットが目指していた場所であり、手に持った地図をグシヤリと握りつぶしたランサーは力なく呟く。

「またかよ…」

「……………」

ランサーのぶつけ様のない怒りが込められた呟きを聞いたバゼットはかける言葉が見つからず、黙っているしかなかった。その矢先、2人の元に茂みを抜けて1台のバイクと共に仮面の戦士が現れる。

「2人共、無事か?」

声に反応し、振り返るバゼットはバイクから降り、接近する戦士の

姿が月明かりに当たり露わになっていく。

緑の複眼とマフラー。赤の仮面に左右非対称のボディ。2人の知る戦士とは全くの別人であるが、同じ称号を持つ戦士にバゼットは申し訳なきように報告する。

「すみません『リョウ』。今回も先を越されました」

「…そうか」

短く答えた戦士は爆発が起きた地点から舞い上がる煙を見上げ、立ち尽くす2人の肩へと手を置く。

「…行くぞ。まだ手がかりは残っているかも知れない」

戦士に促された2人は無言で目的地まで進んでいく。表情はやはり、暗いままであった。

「…わかった。2人によく休むように伝えてくれ」

『ああ。しかし、今にも次の候補地へ走りだしそうな勢いだった』

『気が立つのも仕方ない。今回で9回目…どれもが到達の目前で爆破されてしまうんだ』

『今回犠牲者が出なかったのが、せめてもの救いだ…』
「……………」

通信の向こうで声を落とす戦士の報告に送信されたデータに目を通す男は手を止める。今回、自分達が追っている任務の中で『犠牲者』が多く発生していた。そこに何があるのかも知らない一般人、敵の片棒を担ぐ者。

そして、自分達と同じく戦う仲間達。

目的地の近くにいたというだけで、今回のような爆発によって命を散らしてしまった戦いとは無縁の人間もいた。

内定調査中に戻れず、『改造』を受け、人でなくなった者もいた。

それが自分達と多くの任務を遂行してきた戦友のなれの果て。

そして戦友は薄れゆく意識の中で、自分を殺せと願う。

ランサーは表情を表情一つ変えず、戦友の最期の願いを自らの手で叶えた。

『ありがとう』と、胸に穴を開けた戦友の最期の言葉に、ランサーは黙って看取ることしか出来なかった。

『…ランサーにとつては許せない相手だったようだ。人の尊厳を踏みにじったその行為自体が』

「しかし、改造した組織は爆発と共に関係者全員死亡している。だから、その怒りの矛先を犯人にぶつけようとしている所、か」

『結城さん。2人の事なんだが、俺に任せてくれないか』

「…解った。今の君なら大丈夫だろう」

復讐のみで動いていたあの頃とは違う。今の彼：『村雨良』ならば、2人を上手くフォローしてくれるだろう。

『恩に着るよ、先輩』

「ああ。こちらで分かった事は直ぐに連絡する」

これを最後に通信を切った男：『結城丈二』は目の前に広がる資料を整理していく。

今回爆破されたのは密林地帯で観測所に偽装された研究施設。ここでは今回のような人間ではなくアンドロイドを秘密裏に開発し、過去の怪人と同等の力を再現させる実験が行われていたことが伺える。(やはり、妙だ)

丈二はデータベースを操作し、前回、前々回に爆破された研究施設の報告書に関する情報を掲示させる。前回は怪人の製造プラント。そして捕獲された怪人を解剖、データ化して軍事施設に売り込もうとする研究グループ。

どれもが自分達の情報網でも影すら捉える事すら出来なかった組織ばかりである。

考え込む丈二の耳に、何かを知らせるようなアラーム音が届く。データベースの隅で『CALL』と表示され、丈二は通信用の画面を選択し、ボタンを押す。するとデータベースに『KAZAMI』という画面が表示され、通信が開始された。

『俺だ。どうやらまた先手を取られてしまったようだな』

「耳が早いな。全くその通りだ」

丈二は前置きもなく今回の件を切り出した通信相手へ簡潔に報告をする。通信相手は黙って聞き入れ、丈二の話が終わった途端に再び話を切り出した。

『内容は分かった。お前の意見を聞きたい』

「といってもな…まだこれだけだと結論は…」

『ごまかす必要はない』

丈二の言葉を遮った声は、やはり声のトーンを変えることなく、説明を求めた。

『…お前の事だ。結論に至らなくても、可能性は浮かんでいるのではないか?』

「敵わないな。君には」

諦めたかのように丈二は自分のまとめたデータを通信相手宛てに送信する。そして数十秒後、内容を見て自分と同じ見解に達したのか、通信相手からは疑念の声が響く。

『これは一体…?』

「ああ。これまで起きた20以上の研究施設の爆破事件。場所も、国も、研究目的も異なるものばかり。しかし、共通している事柄がある」
データに添付されている写真の横には、小さい紋章が記号のように描かれている。それは蛇が絡んだ鷲、蠍といった自分達を苦しめてきた組織を現すシンボルマークだ。さらには、最近まで存在していたゴルゴムのマークまである。

『みんなどれもがゴルゴム…それだけじゃない。歴代の悪の組織に関わっていた連中だ…』

「ああ。間違いなく組織の流れがあるだろう。ただ…おかしな点がある」

次に丈二が送ったデータは爆破後に撮影された写真。そのどれもが目をつむりたくなるような惨状であるが、丈二の言った不審な点に気が付いた通信相手は説明を受けるまでもなく彼の言いたい事にたどり着いた。

『…研究設備や建物自体の被害が少ない』

「その通りだ。今回の事件は秘密保持や、口封じの為とは思えない」

その施設で行っている研究施設を無かったことにしようとするならば、証拠となってしまう実験施設や痕跡を木端微塵とするはず。だが、これまでの爆破は一部に限定されている。それは――

『研究データ。ということか』

「ご名答。正確には、ある目的に絞った戦闘データ。もしくはシミュレーションデータと言ったところだろう」

『…残されたデータがあつたのか？』

「なんとか修復できたのは、2ヶ所分だけでね。だからまだ確証には至らなかった」

そして丈二によって開示されたデータ…それはある戦士が戦った際の戦闘データ。そして、自分達が所有する怪人であれば、どうすれば戦士を打倒せるかという数百を超える戦闘パターンが収められたデータであつた。

これまでの情報を整理した結果、丈二と通信相手は敵の思惑を推測する

『ならば敵の目的は『彼』のデータの独占すること』

「ああ。そして最終目的は…」

「仮面ライダーBLACK：間桐光太郎だろう」

一時的とはいえ、世界征服まであと一步とせまったゴルゴムを壊滅させた新たな仮面ライダー。組織の残党が注目し、命を狙うのは当然と言えるだろう。しかし、今回の事件ではその組織ですら犯人達によつて全滅されている。これまでの組織が再編されることも、徒党を組んでいる

こともないことから考えられるのは、一つしかない。

『新たな敵…というわけか』

「あまり当たって欲しくない予感だがな」

『…俺は他の連中にこの事を連絡する。結城は分析を続けてくれ』

「了解だ、だが無茶をするなよ。以前のように、戦えなくなったら遅いからな」

『フツ…気を付けよう』

丈二の忠告に笑つて答えた通信相手…『風見志郎』の通信画面は閉じられた。恐らくあちらから通信状態をオフにしたのだろう。

椅子に深く座り直した丈二は再び資料へと目を向ける。敵の目的は推測できたが、その先を読むことは厳しい状況だ。自分達に動きを察知させない行動力からして、これまでにない強大な相手となることは間違いないだろう。

「仮面ライダーBLACK…彼1人では、太刀打ちできないかも知れん」

画面に映る未だ自分達と直接の面識のない11番目の男の姿を丈二はただ見つめていた。

それから1ヶ月後。彼らの予感通り、新たな敵は間桐光太郎へと接触を果たしてしまう。

る間に声を出し続けている凄まじい肺活量を褒めるべきかと陸上部部長は悩んでいたという…

(つたく、英雄を称えて何が悪いんだよ…)

この街を、世界を救ったヒーロー『仮面ライダーBLACK』

都市伝説でしか知り得なかった楓が彼の姿をはつきりと認識したのは、ゴルゴムによって新都が壊滅的な被害を受けた後の報道だった。逃げ遅れた市民が撮影した動画には圧倒的な数のゴルゴム怪人に対して恐れる事なく立ち向かう彼の雄姿が鮮明に映っており、それを見て以降楓は仮面ライダーへ並々ならぬ憧れを持つようになってしまったのだ。

当初は『私のイメージカラーをパクリやがって!』と理解しがたい怒りを向けていたのだが、命を賭して戦いに挑む姿に見て強く感銘を受けていた。

そして平和となり、学校が再開された後に彼を称える話をクラス中に広め、新たな目撃情報を耳にした際には声を上げて喜ぶなど楓の姿はさながらテレビのヒーローに憧れる少年のようであり、彼女の友人達は生暖かく見守っていたのだが、今回のようにエスカレートした行動も度々発生している。

次は氷室が練習で飛び上がった瞬間『ライダージャンプ』と叫んでやるとニヤリと笑いながら計画を立てている時であった。

「んんん?」

自分の歩く道路の向こう。黒い布で全身を包んでいる人影が路上駐輪しているマウンテンバイクの横で立ち止まるとキョロキョロを回りを確認した後にしゃがみこみ、防犯防止のチェーンを工具で切断しようとする姿が目に入った。あれは間違いなく窃盗の現行犯と判断した楓は警察に連絡するよりも先に犯人の方へと駆けだしてしまふ。

目の前で犯罪を見逃すなど仮面ライダーに顔向けが出来ない!その一心で楓は犯人の背後で立ち止まる。

「待て待て待ていっ!!」

楓の声が耳に届いたのか、チェーンを切断してマウンテンバイクに跨ごうとする犯人の動きが止まる。

「お月様の下で堂々と盗みを働くなんざこの冬木の黒豹、蒔寺楓様が見逃さないぜツ!! 仮面ライダーに代わって成敗だツ!!」

決まった…!と内心でご満悦である楓は決めポーズのまま相手の反応を伺う。手を止めていた犯人は立ち上がるとゆっくりと楓の方へと顔を向けながら声を放つ。

『仮面…ライダー…』

犯人はその名を呟きながら黒いそのフードの中に隠された顔を楓へと晒す。その風貌は、人間ではなかった。

顔を覆う頭髮や皮膚、筋肉などなく、ぼんやりと妖しい光を両目に灯した骸骨の顔が楓の姿を見つめると、歯の隙間から音を立てて蒸気を吹き出す。

「で…出た——ツ!!!」

段々と青ざめていきながら一步一步後退する楓は犯人が自分に迫ってこないと確認すると振り向き、全速力でその場を離脱。もう涙目どころか滝の如く目から涙を流しながら…

楓の姿が完全に視界から消えた後、骸骨顔の犯人は今度こそ自転車に跨り、移動を開始するのであった

数日後 衛宮邸

家主である衛宮士郎が鍛錬に使用されている武道場。その中央では2人の男性が対峙していた。

1人は褐色の肌に灰色の髪を持つ、かつてはサーヴァントとして冬木の聖杯戦争に召喚されたアーチャー。アーチャーは両手に竹刀を1本ずつ握り、数メートル先で構えるもう一人の相手を見据える。

「…来るがいい。間桐光太郎」

「では、遠慮なくー」

アーチャーの声に応え、間桐光太郎は床を蹴って対峙する相手へと接近。光太郎は武器を使わず徒手空拳のみで挑むがアーチャーは遠慮や加減など一切せず竹刀を振り下ろした。

「クッ!？」

袈裟切りされる竹刀を右腕で防ぐが続いて光太郎の喉を目がけて竹刀の剣先が間髪入れずに迫る。上体を後ろに逸らしつつ、バツク転で距離を置いた光太郎は再度アーチャーへ接近を仕掛けるが既に相手は左右同時に竹刀を振り上げている体勢となり、待ち構えていた。

同時に迫る2つの斬撃が身体に触れようとする刹那、光太郎は両足で床を蹴り、身体を反転させ天井の梁へと足を着地。

今度は梁を足場として蹴り、自分を見上げるアーチャーに向かい、右足を向けて急落下する。

「トアッ!!」

「又ウッ!!」

竹刀を交差させて光太郎の蹴りを受け止めた衝撃がアーチャーを経由して道場の床全体へと広まっていく。

その揺れを受け、道場の隅に正座で座っている土郎と間桐桜、遠坂凜は息を飲んで2人の戦闘を見守っている。

この2人が闘う理由…それは光太郎が衛宮邸を訪ねた事がきっかけであった。

義妹の桜から自家製の漬け物を持っていくつもりが忘れてしまったので届けてほしいと連絡を受けた光太郎はキッチンに置かれていたタッパーを発見し、バイクで衛宮邸へと到着。

呼び鈴を鳴らすと現れたのは家主の土郎でも桜でもなく、桜の実姉である遠坂凜であった。

以外な人物の登場に驚きつつも挨拶する光太郎の耳に、木製の床に誰かが倒れた音が響く。これは改造された光太郎の強化された聴力によって判断されたものであり、通常の間人ならばまず聞こえない程度の音だ。

凜に尋ねてみると、士郎の魔術指導に立ち寄ったのだが今回は珍しくアーチャーも同行。そしてあの戦いから鍛錬を怠っていないかを確かめてやると今道場で稽古をつけているらしい。

桜は士郎が怪我をした際にすぐ治療が出来るようにと稽古に立ち会い、代わりに凜が光太郎を出迎えたという訳だ。

あの2人は全く…と溜息を付く街の管理人に笑いながら答えた光太郎は届け物を台所に置くと、自分も道場の見学を希望。案内する凜に続いて道場に入ると、既に敗北し床へ大の字になって荒々しく呼吸している士郎を介抱する桜の姿が目に入る。

道場の中央で立つアーチャーの視線はやがて光太郎へと向けられ、今へと至っている。

「まったく、アーチャーだったらあんなに好戦的だったかしら…？」

「た、たぶん何か理由があるんじゃないでしょうか？」

建前上、自分の助手という立場となっているアーチャーが目が合った相手にひたすら喧嘩を売るような行動に呆れ顔となっている凜に桜は苦笑いで答えた。そんな姉妹の会話など耳に入らないのか、士郎はアーチャーと光太郎の立ち会いを見つめている。

（こうして見ていけば、強くなるヒントが見つかるかも知れない…少しでも、一歩でも、俺は強くなりたい。旅立ったアイツとも約束したんだ）

そして一進一退の攻防が続き、2人の動きがピタリと止まった。

アーチャーの竹刀が光太郎の首筋を押さえ、同じく光太郎の手刀がアーチャーの額へと触れる形で。

時が止まったように動きがない2人の様子を見る3人だったが、その沈黙は両者が同時に腕を下ろしたことで幕を閉じた。

竹刀を置き場へと収めたアーチャーは手足の腱を伸ばしている光

太郎へ振り返らず尋ねる。

「…なるほど。腕は訛っていないようだ」

「当たり前さ。何が起こるか、分からないから常にやることはやって
いるよ」

「それは、今街を騒がしている事を知った上でのことだろうな」

「……………」

凜や桜の耳には聞こえない程度の声を放つアーチャーの質問に、光太郎は間を置いて肯定した。

「最近、バゼットさん達からの連絡がまるでない。それに加えて、警告
してくるんだ」

「警告…？」

ようやく顔を向けたアーチャーへ光太郎は苦笑いを浮かべながら、
自身の腹部へと手を当てる。

「敵が、現れるってさ」

その詳細を聞き出そうとアーチャーが口を開こうとした途端に道場へ藤村大河が乱入。自分抜きで道場に集まるなど言語道断とイジけてしまい、その場は解散することになってしまう。

近いうちに冬木に残るサーヴァントであるアーチャーやキャスターを交え意見を交換すると伝え、光太郎は間桐邸へと帰宅する。

『…て、帰ったの？』

「うん。慎二君は、また図書館？」

『どうしても魔術書の方に目を向けちゃうから。週末以外はしばらく
遅くなるかも』

「そっか、気を付けて帰ってね」

『ああ』

固定電話に受話器を戻す光太郎に、買い物袋を持って扉を開けた女性
性が問いかけた。

「シンジからの連絡ですか？」

「うん。今日も図書館で勉強してから帰るってさ」

「なるほど。受験、ですか」

「慎二君なら、どこにでも行けると思うけどね」

間桐慎二は来年の受験に向けて勉強をスタートし、集中する為に新
都にある図書館を利用する頻度が増えていた。大学進学だけでなく、
留学をも視野に入れているとのことだったが、その候補の中には決し
てロンドンは入れないと宣言してる。

その理由は決して話そうとはしていなかったが。

「ああ、買い物ありがとうメデューサ」

「はい。魚の切り身は冷蔵庫でよろしかったでしょうか？」

「うん。今度桜ちゃんが家で夕飯を食べる時に腕を振るってくれるみ
たいだから、楽しみによう」

「そうですね」

と柔らかい笑みを浮かべるメデューサ：聖杯戦争ではライダーの
サーヴァントで召喚された女性はキッチンへと向かっていく。その
後姿を見て微笑んでいた光太郎であったが、その表情はやがて暗いも
のへと変わっていく。

彼女には話さなければならぬ。今、自分達に不吉な『何か』が迫っ
ているということ…

(メデューサには、穏やかに暮らす日々を過ごして欲しかった。もう
少し、長く…)

自分自身の狂気に飲まれ、肉親を手にかけてしまった彼女が手にし
た平穩。可能ならば、彼女にはそんな当たり前の日常の中でずっと暮
らしてほしかったのが、光太郎の本心だった。しかし、光太郎へ向け
られた警告。

かつて冬木を襲った大火災。そしてゴルゴムの大襲撃を予知した
時と同様…いや、それ以上の脅威が自分に迫っていると彼に宿る神秘

の石『キングストーン』が警鐘を鳴らしている。

ならば、自分一人で陰ながら解決できるような状況にならないはず。

そう考えた光太郎は今日、彼女へ打ち明ける決意を固めていた。

(それに、そんなことをしたらまた約束をやぶつちやうことになるしね)

もし、戦いが起きる時は自分も一緒に…

そう言つて、メデューサは光太郎の手を優しく握ってくれた。

だからこそ、彼女の気持ちに応えるためにも光太郎は話さなければならぬ。

それが、愛する彼女との約束なのだから。

「そう、なのですか」

「ああ…まだ確証はないんだけどね」

衛宮邸にいる桜と図書館で勉強中の慎二の帰りは遅い。そのため夕飯を光太郎とメデューサの2人でとる時間が増えていた(単に2人への気遣いでもあるが)。そして食事が終わったタイミングで光太郎は最近冬木で起きている不審な存在が目撃される情報や

自分が抱く不安をライダーへと説明した。その表情は、やはり暗い。

平和な時が崩れるというのも勿論だが、光太郎が再び戦いの中へ身を投じることへの悲しみの方が大きかった。

彼の事だ。また、誰かを助ける為に無茶をするに決まっている。でも、彼の生き方は決して変えられない。自分のような存在を作らない為に、命ある限り戦う。

それが彼の…仮面ライダーの生き方であるなら、信じることしか出来ない。

必ず、自分達の元へ帰ってきてくれるという約束を。

「…ありがとうございます。話してくれて」

「メデューサ…」

「光太郎は、以前のような力を出せない私に遠慮がある。だから、話そ

うか迷っていたんですね？」

「はあ、お見通しか」

「貴方の事で、分からないことなんてありません。同時にそのように私の事を考えてくれてるのが、とても嬉しいんです」

だから、ありがとうございますと微笑むメデューサの顔を見て気恥ずかしくなった光太郎は思わず目を逸らしながら今後の方針を伝える。

「だ、だから今日から街を少し見回ってみようと思うんだ…」

「確かに、少しでも手がかりが見つかる可能性もありますし」

「しばらくは俺が1人で回るから、メデューサには家での警護を任せたい…頼めるかい」

「ええ、任せてください。けど、もし敵の影が大きくなったら」

「ああ。一緒に行動しよう」

庇い合いなどせず、互いに支え合う。それが戦いの中で2人が誓い合った約束でもあった。

(この辺は大丈夫、か)

その日の夜

光太郎はポイント毎にバイクで移動しながら巡回を開始。ヘルメットのバイザーを降ろし、次のポイントへ移動を開始しようとハンドルを握った時であった。

「ッ!?!」

電柱の上に立つ人影。ゆらりゆらりと全身を包む布を揺らしながら、光太郎に姿を見せた直後、別の電柱へと飛び移り移動を開始する。「逃がすかッ!!」

尽かさずバイクを発進させ、人影の追跡を開始。光太郎は見失わぬように人通りの少ない道を選択しながらバイクの速度を上げていった。

だが、追いながらも光太郎は疑問に思っていた。なぜ、あの影は時折こちらを待っているかのように立ち止まっているのだろう。もしかしたら自分をおびき寄せざる為かも知れない。

だとすれば、敵がなにかを仕掛けてくる可能性も…

(だとしても、追わない訳には行かないッ！)

考えるのを後回しにした光太郎は再び追跡に集中する。

だが、光太郎の予測通りに、敵の行動は彼を引き寄せるためのものであった。

やがて電柱から飛び降りた影はある場所へと侵入する。そこは…

「慎二君と桜ちゃんの、学校…」

バイクを停車し、ヘルメットを脱いだ光太郎は影の跡を追い、校門を飛び越えて校庭へと移動する。既に生徒は勿論教師すら残っていない学校には周囲に立つ街灯しか明かりはない。

闇夜の中、光太郎は視力を高めると自分を囲うように現れた敵に対し、思わず声を出して驚愕してしまう。

「お前達…!?!」

現れたのは、自分達が倒したはずのゴルゴムのコウモリ怪人とトカゲ怪人、改造前の素体が5体。どれもが傷だらけであり、恐らくあの戦いを免れた残党だろう。

しかし、光太郎が驚いたのはそこではない。

怪人も、素体も、頭に巨大なヘルメットが装着され、アンテナの先端が明暗を繰り返していた。

「クッ!?!」

状況を整理する前に怪人が遅いばかり、回避する光太郎は後方へ大きく飛び跳ねると、右手を前方に突出し、左手を腰へ添えた構えを取

る。

そこから右半身に重心を置き、両腕を大きく振るうと右頬の前で握り拳を作る。

ギリギリと音が聞こえる程込めた力を解放するような勢いで右腕を左下へ突出し、素早く右腰に添えると入替えるように伸ばした左腕を右上へ突き出す。

「変っ——」

伸ばした左腕で扇を描くように、ゆっくりと右半身から左半身へと旋回し——

「——身ッ!!」

両腕を同時に右側へと突き出した。

光太郎の腹部にキングストーンを宿した銀色のベルト『エナジーリアクター』が出現し、光太郎を眩い光で包んでいく。

その閃光は光太郎の遺伝子を組み換え、バツタ怪人へと姿を変貌させる。

だがそれも一瞬。

エナジーリアクターから流れ続ける光はバツタ怪人を強化皮膚『リプラスフォース』で包み込み、黒い戦士へと姿を変えた。

左胸に走るエンブレム。触覚を思わせる一對のアンテナ。真紅の複眼。そして黒いボディ——

「仮面ライダー…ブラアックツ!!」

ゴルゴムとの戦いが終わり、眠りについていたキングストーンのが甦った今、間桐光太郎は再び仮面ライダーBLACKへと変身。怪

人達と戦闘を開始するのであった。

その様子を学校の屋上から見下ろしているのは、先程まで光太郎を穂群原学園へと誘導した影。骸骨の顔を持つその者は目を光らせ、光太郎の戦いをデータ化し、『ある場所』へと送っていた。

第2話

冬木の街を騒がす不審な存在をキングストーンによる予言と重ねた間桐光太郎は独自に調査を開始。その最中に怪しげな影を発見し、これを追跡する光太郎は慎二や桜が通う穂群原学園へと誘われる。

そこで光太郎を待ち受けていたのは何者かによって機械を組み込まれたゴルゴムの怪人達であった。

光太郎は仮面ライダーBLACKへと変身し戦いを始める。謎の影が校舎の上から様子を見ているとは知らずに…

骸骨の顔を持つ黒い影は、眼下で繰り広げられる光太郎…仮面ライダーBLACKとゴルゴム怪人達の戦う様子を自らの目を通し、自らの主へとテレパシーで送っていた。

映像を受信する者達は遙か上空…成層圏を抜けた宇宙で移動する巨大な物体にある暗室へと集っている。

暗室に映し出される光太郎とゴルゴム怪人の戦い。光太郎が握った拳をコウモリ怪人の腹部へと叩き込まれたその瞬間に発生した威力とスピードが画面横に設置されている巨大な機械によって次々と計測、計算されていく。

「…コイツが、仮面ライダーBLACKか」

機械の身体に革のジャケットを纏った赤い一つ目を持つロボット…『ガテゾーン』は愛銃を指先でクルクルと回しながらホルダーへと収める。

「キエへへへへ！大したことなさそうだな！」

外見とは裏腹に高い声で笑い、獣のような落ち着きのない動きをする『ゲドリアン』は昆虫のような顎の下にある口元を歪ませながら光太郎の戦いを低く評した。

「フン…このような輩に敗れるとは、地球の『創世王』やらの実力など多寡が知れているな」

軍服を纏い、長身であることに反し赤いバイザーの上部に位置する小さな頭部を持つ風貌の『ボスガン』は光太郎を、そしてゴルゴムの首領である創世王を見下しながら嘲笑する。

「スカル魔。そのままデータの更新が終わるまで送り続けなさい」

光太郎の戦いのデータを送り続ける骸骨の影…スカル魔に命令する黒い装束とヘルメットを身に着ける女性『マリバロン』は冷徹な瞳で戦いを見ながらも、コンピュータに次々と送られる情報を取り入れ、自分が収集した情報と掛け合わせる作業へと取り掛かった。

一室に集う地球に住む人間とはかけ離れた姿を持つ4人…映像に映る光太郎の印象を口にした後、再び静寂が訪れると思われたがボスガンは自分達に下された『命令』に納得が出来ず、苛立ちを隠さず小さな口から不満を放つ。

「しかしわからん…なぜ『將軍』はあのような者と謁見されるなど」

「將軍には何かお考えがあるはず。私達が疑問を抱くこと自体が間違っているわ」

「フンッ…」

視線を向けることなくデータの確認を続けるマリバロンの反論に答えず、ボスガンは部屋の出口へと向かう。彼の行先にそれとなく予測がついたガテゾーンはボスガンを呼び止め、彼の口から聞き出そうとした。

「待てよ。行ってどうするつもりだ」

「フフフ…將軍は何も『傷つけず』間桐光太郎を連れてこいとは言っておらん」

嫌らしく口元を歪めるボスガンの狙いを悟ったガテゾーンは、彼の

悪い癖が出たと心中で溜息を付きたくなる。この男、自分達の世界では誇り高き貴族であると自身では口にはしているがその実、自分以外の全てを見下している節がある。

今回も『将軍』が地球人である間桐光太郎に直接会うということが気に食わないことが理由なのだろう。

「それに、あの者が将軍に口答えなど出来ぬよう、我らの力を教えてやるのだ」

「ハア：：なら俺も行く。お前さんは加減ができそうにないからな」

「そういう事なら俺も付き合つてやるぜ！」

珍しく意見が一致した3人は部屋から移動し、テレポトスペースへと向かう。最後にガテゾーンは部屋を出る前に分析を続けるマリバロンへと告げた。

「すまんが行つてくる。データの解析が終了次第、俺の頭に送つてくれ」

「わかったわ。くれぐれも、ボスガンが殺さないように見張つていて頂戴」

マリバロンの忠告に片手を上げて答えたガテゾーンは先にテレポトスペースに向かった2人を追い、移動を開始するのであった。

「ライダー——」

ベルトのエネルギーを右手首に集中。赤い光が灯った手を手刀へと変え、光太郎は自分に向かい同時に駆け出してくる怪人と素体が自分の間合いへと踏み込んだ瞬間。

右足を軸に手刀で真横を切りながら身体を回転。

「——チョップツ!!」

『ギャアアアアアアアッ!!』

手刀によって胴体に横一文字の傷を負った怪人達は傷口を押さええながら断末魔の叫びを木霊させる。そして身体からは炎が上がり、灰

となって消滅した。

(何だったんだ。一体)

光太郎は変身を解かないまま、自分を襲った怪人達の亡骸である灰へと顔を向ける。これまでゴルゴムの残党は海外にしか出没していない。ゴルゴムの守護神とまで言われていた創世王を倒した存在が住まう国では活動が出来ないのではないかというのが義弟の見解だったが、それは十分に納得が出来る意見だ。

ならば、今回現れた怪人達は恐らく海外で身を潜めていた者だったのだろう。

戦いを通して分かったが、怪人達からは自分を恨んで戦いを挑んだとは、とても思えない。可能性があるとすれば、怪人達が身に着けていた機械仕掛けのヘルメット：あれが怪人達を操っていたとすれば、自分を襲おうとした黒幕は別にいる。

そう光太郎が結論付けた時と同時だった。

「これは——!?!」

「光太郎…?」

シャワーを浴びていたメデューサは急ぎバスタオルで身体を包むと急ぎ窓から飛び出し、間桐邸の屋根へと移動する。夜の為人の目に留まることはないが、今はそのようなことは気にしていられない。

「光太郎の気配が…途絶えた…?」

かつてサーヴァントだった時とマスターであった光太郎は魔力供給のためにレイラインによる繋がりでお互いの状況確認が可能であった。それは大聖杯という大元があつてこそであったが、大聖杯は以前の戦いで完全に消滅している。

しかし、光太郎とメデューサは戦いの中でレイライン以外にキングストーンによる力の供給によってより強い繋がりが生じていた。

その繋がりによってそれとなく光太郎が無事であるということが分かっていたのだが突然何かに遮られるような感覚が彼女を襲い、光太郎の存在が掴めない状況へと陥ってしまう。

「光太郎の身に…何かが…!」

ライダーは屋根を蹴り、その身をかつての戦闘装束で包むと最後に光太郎が向ったと思われる方角へと飛んでいく。

(光太郎…どうか無事で…)

「空が灰色に…いや、何らかの結果が張られたのか」

星空がはつきりと見渡せる夜空が今では光太郎の言った通りに淀んだ灰色と化してしまっている。キングストーンの力を使えばなんとか解除は可能かも知れないが、その前に片づけなければならぬことがあった。

「これはお前達の仕業なのか?」

光太郎を囲むように現れた新たな影。光太郎が最初に追っていたローブを纏った骸骨、スカル魔が3人も姿を現す。全員が巨大な鎌を手にしており、今にも光太郎を切り裂かんと距離を詰めている。

「答えろッ!お前達は何者だッ!」

『我らは…怪魔妖族、スカル魔。仮面ライダーBLACKよ、我らと共に来てもらおう』

ようやく口をきいたその声は不気味なほどに低く、生気をまるで帯びていない。光太郎はスカル魔の言葉に応えないまま、無言で構えを取る。それを拒否と受け取ったスカル魔達は地を蹴り、同時に光太郎へと攻撃を開始した。

「クッ…!?!」

鎌の軌道に合わせて鋭い刃を次々と紙一重で回避を続け、一定の距離を取った光太郎は両腕を左右に展開。バイタルチャージによって力の解放しようとしたその時…

「いまだ！機能停止ビーム発射!!」

「なッ!？」

別方向から聞こえた声と共に放たれた光線が光太郎へ次々と突き刺さる。光線が当たった途端、光太郎の全身を駆け巡る痛みとは別の作用が現れ始めた。

「ぎ、キングストーンのがが…抜けていく…!？」

片膝を着き、どうにか倒れずにいたがいつまで持つか分からない。見れば、普段なら眩い輝きを宿すベルトの中央部が鈍く暗い光しか放っていない。まさかキングストーンを弱体化させる兵器を開発していたとは…と思索する光太郎だったが、記憶の片隅に

同じような兵器を思い出す。

その時は義弟と義妹の機転によって身に受けることは無く、そして破壊したはずだ。

「も…しや」

嫌な予感を駆り立てる中、スカル魔とは別に光太郎へと接近する足音。震えながら顔を上げる光太郎の複眼に映ったのは、撤退したスカル魔の変わりに現れた見たことのない異形の姿を持つ3人だった。

「フフフ…ゴルゴムとやらも少しは役に立つものを遺してくれたではないか」

「ヒヤハハハハ！全くだぜい！」

「……………」

弱った光太郎の姿を嬉々として嘲笑うボスガンとゲドリアンの後で腕を組み、ため息交じりに同僚を見守るガテゾーン。彼等の存在も勿論だが、光太郎はボスガンの言葉にゴルゴムの名を呼んでいたことを聞き逃さすわけにはいかなかった。

「ゴルゴムが…遺した…もの。まさかお前達、あの時に」

「なるほど。察しはいいようだ」

「グハッ!？」

ボスガンは光太郎へと近づくと同時に胸部を蹴り上げ、仰向けに倒

れる姿を愉快そうに見つめながら光太郎の疑問へ回答する。

「貴様がかつて戦ったゴルゴム共が残した機械。破壊されたものを修理していた組織から奪い去り、さらに強化したのだよ」

「その効果は絶大だったみたいだなあ。どうだ、思うように身体を動かせないだろうか？」

ボスガンに続き光太郎へと向かったゲドリアンは震えながらも立ち上がるとうとする光太郎の周りをはしゃぐように飛び跳ねている。

「なん、なんだお前たちは…」

「知りたいか…ならば教えてやろうではないか」

どうにか立ち上がった光太郎に向けて腰に下げていた剣を引きくボスガンに静観を続けるガテゾーンは注意を促す。『將軍』が所望するのはあくまで間桐光太郎との対面。殺すことではない。

「やり過ぎんなよ。殺したら意味がない」

「フン、黙ってそこで見ている」

一応は聞いてくれたかと肩を竦めるガテゾーンを余所に、ボスガンは震える足で敵意を向ける光太郎を鼻で笑いながら刃を振り下ろす。

「ガハアッ!!」

切り裂かれた胸板から火花が散り、煙が上がりながらも構えを続ける光太郎に向け、次々と剣撃を放つボスガンは光太郎の耳に届くように大声で自分達の名を、野望を告げる。

「我らはクライシス帝国!この宇宙とは別の次元より地球を征服ためにやってきたのだッ!!」

「なん…だと…!」

「地球人を皆殺しにし、我らクライシスの民が住まう楽園とする。そうすればこの地球にとつても有意義なことだろう。フハハハ…」

「…っ!」

剣を身に受けながらも、敵の目的を知った光太郎は拳に力を込める。

ようやく訪れた平和を壊そうとする者達が現れた。

人々を再び戦いによる恐怖に陥れようとしている。

そんなことを、光太郎は認めるわけにはいかない。

「むッ!？」

「許さない……この星の平和を脅かす奴は……俺が絶対に許さんッ!!」

光太郎が渾身の力で放ったストレートパンチ。狙うはボスガンの顔面であつたが横にそれることで回避されてしまう。

「遅いわッ!!」

避けられ、前のめりになった光太郎の背中にボスガンの剣が叩きつけられる。背中から煙を上げて倒れる光太郎は背中をボスガンに踵で踏みにじられながらも立ち上がろうと手足に力込めるが思うように動かすことができなかった。

「か……身体が……」

「不思議だろお！今のお前は機能停止ビームによってキングストーンのエネルギ―を解放できないだけでなく、本来の力の半分……いや、10分の1も発揮出来ない状態にあるんだよ!!」

「……ッ!？」

屈んで光太郎の顔を覗き込むゲドリアンの説明に光太郎は言葉を失う。もし本当なのなら、自分に抗う術はないのではないか……

「フン……誤解をせぬように言っておくが、貴様が本来の力を持っているたとしてもこの私には手も足も出ないことを教えてくれるわッ!!」
「があ……」

光太郎を踏みつける足に力を加えるボスガンと傷を抉られ、苦悶の声を上げる光太郎の姿を見て気分を高揚するゲドリアン。その同僚2人のやり口にガテゾーンは同じように溜息をつく。

（弱った相手を痛めつけて何が楽しいのかね……ボスガンは元からそうだが、ゲドリアンも悪乗りし過ぎだ……ん?）

ガテゾーンの知能であるメインコンピューターに通信データが送られる。どうやらマリバロンが先ほどの光太郎の戦闘データを送信してくれたらしい。今もなお光太郎を痛めつけているボスガンや観戦しているゲドリアンを余所にガテゾーンはデータの検証を開始。

もはや見るまでもないデータと考えていたガテゾーンだったが、そ

の内容を見た瞬間に思わず声を漏らしてしまう。

「そんな馬鹿な……！」

その数値は驚くべきことだった。

光太郎が怪人達へ向けて放った攻撃力を数値化し、これまで地球に潜んでいた組織から奪った研究データを対比した結果。

仮面ライダーBLACKの戦闘能力はこれまでにない程向上しているのだ。

攻撃を繰り出した破壊力。それに耐える手足の強度。それも、キングストーンの力を籠めることなく、だ。この力ならば彼が戦い始めた頃のゴルゴム怪人であれば、ただの一撃で消滅させるほどの力に該当する。

それは最後に戦いが確認された創世王との決戦の時よりも、短い期間で遥かに強く……

もし彼が対となる世紀王との決戦で見せた力を解放したとしたのなら……彼の戦闘能力の上昇はもはや図りきれない力と化している。もしこのまま成長を続けたら、自分たちにとって恐るべき存在となるだろう。

ロボットである自分がコンピューターによつてはじき出された結果を疑うなどない。しかし、このデータが本当だとしたら自分は……いや、あの場にいた全員が間桐光太郎という存在を侮っていたことになる。改めて光太郎の姿を見ると先ほどと変わらず地に伏しているが、僅かに、徐々に、ボスガンに踏みつけられながらも彼に気付かない程度だが身体を持ち上げ始めている。

(あいつ……力の動力源が絶たれているというのに……何故?)

ガテゾーンには理解できなかった。あれ程までに傷ついた光太郎を立ち上げせようとするものは、なんなのか。

「ではこれで最後にしよう……私の力を思い知るがいい!!」

「やめろボスガン」

「邪魔をするなガテゾーン！こいつに我らの恐ろしさを教えねば…」

「もうこいつには嫌ってほど伝わってるだろうよ。それに…これ以上騒げばお前の命に係わるぞ？」

「何…？」

無防備の光太郎に剣を振り下ろそうとするボスガンは呼び止めるガテゾーンに剣を掲げたまま顔を向けると、折角の楽しみを中断させた事に文句を物申そうとしたが『命』という部分を強調しながら首の辺りを指され、言われた場所へと手を翳す。

ボスガンが触れた場所に発生した小さな違和感。それはボスガンを驚愕させるには充分であった。

「こ、これは…!?!」

「お前さんの首と胴体を繋いでいるパイプ…そいつは呼吸をするための大事な機関だったな。そこに僅かだが亀裂が走ってる。このまま放っておいたら、どうなる？」

「た、確かにこのままでは私の命に危ない。だが、ここにくるまで傷どころか汚れ一つなかったはずだ！」

「なんだあ？だったら誰かに傷つけられたってことかあ？」

「ああ、いるじゃねえか。その本人が足元に」

「…!?!」

ゲドリアンの疑問にあっさりと答えたガテゾーンは視線を下へと向ける。視線の先を追ったボスガンは呼吸を行う首元のパイプをこれ以上傷つけまいと手で押さえながら始めて光太郎に対し、戦慄を覚えた。

「も、もしやあの時…」

「そう…ボスガンに向か拳を放ったあの時…確かに拳そのものは避けられたが、こいつの拳圧でパイプに亀裂を走らせたことになる。もし、こいつの力が本来通りで拳が当たっていたとしたら…」

「あ、ありえん！クライシスの貴族である私がこのような輩に遅れをとるようなことなど…！」

ガテゾーンに突き付けられた光太郎の真の力。認めるわけには行

かないボスガンは再び剣を掲げて今度こそ光太郎へ突き立てようとするが、威圧と共に放たれた声によつて止まってしまう。

『——何をしておるのだ』

「こ、これは…!？」

「將軍のお出ましか…」

「ち、違うのです！この者に我らクライシスの力を示すためであつて…」

『黙れ』

「う…!」

ただ、黙れという一言でボスガンは萎縮しもう姿を見て意識をなんとか保っていた光太郎は謎の声の持ち主がどれほどの力を持つ存在なのかと考えていると、自分がいつの間にか掲げられていると気付く。

「…ぐっ!」

「傷に響くか？まあ我慢してくれ。大人しくしてくれたらこつちから何もしない」

「……………」

「氣を失ったか」

ボスガンは意識を失った光太郎を肩に担ぎ、懐から取り出した小型のコントローラーを数度操作。すると学校全体を包んでいた灰色のシールドが消滅し、遙か上空から彼等を包むように光が差し込む。その光が消えたと同時に、光太郎達の姿は校庭から消えていたのであった。

光太郎の異変を察知したメデューサと街を見回っていたアーチャーが校庭に到着したのは、それから数分後であった。

「っ、っっは…？」

変身が解けていた光太郎が目を覚ましたのは見たこともない部屋の一室…いや、指令室とも言えはいいのだろうか。

地球には存在しないであろう機械に囲まれ、巨大な円から浮かび上がる立体映像は間違いなく、自分達が住む地球を映し出している。

だが、そんな状況確認などする余裕をなくような威圧感が自分へ接近していると感じた光太郎は急ぎ立ち上がり変身しようと構えるを取るが、一向に姿が変わる気配はない。

それどころか、まるでキングストーンの力を感じないのだ。

「変身…でき、ない」

「——当然であろう。ここに放り込まれる前に、貴様へ『変身機能破壊ビーム』を浴びせている。もはや仮面ライダーに変身することはできないのだ」

「誰だ！」

光太郎へと声を放った存在はカツン、カツンと床を踵で打ち鳴らしながらその姿を露わにしていくな。頭部と上半身を黄金の金属で覆われ、漆黒のマントを翻して現れた男が一步、また一步近づく度に光太郎の呼吸が荒くなっていく。

「余の名はジャーク。全知全能であるクライシス皇帝より地球侵略の任を任されし最高司令官である」

「ジャーク…クライシス皇帝…」

聞いたことのない名前に眉を潜めるが、やはり地球を狙う新たな敵であるに違いないと判断した光太郎は警戒を解くことなく、相手の出方を伺うがジャーク將軍の言葉を聞いて目を見開いてしまう。

「間桐光太郎よ…まずは部下による突然の非礼を許してもらおう」

「…そんなことより、何のために俺を呼び出したんだ？」

光太郎は今まで敵対していた相手と違い、謝罪をしたことに驚くが一番の疑問をぶつける。自分を誘い出す為に冬木で騒ぎを起こし、力を封じた上で何をしようというのか。光太郎の疑問に答えるようにジャーク將軍は手を差し出し、試すように告げた。

「間桐光太郎。いや、仮面ライダーBLACKよ。我らクライシス帝国に忠誠を誓い、共に地球を支配しようではないか」

「……………」

「無論、ただとは言わない。クライシスの戦士となった暁にはそちを再び変身できるようにするだけでなく力を今の2倍にし、そちの家族をクライシスの貴族として迎え入れてやろう」

光太郎を連れてきた本当の理由。それは戦力として勧誘することだった。しかもただ従うだけでなく彼と、彼の家族への待遇も考えると言う。

だが、光太郎の返事など最初から決まりきっている。

「断る」

「何故だ？これ以上ない条件ではないか。そちが一番大事にしている『家族』も守ってやる言っているのだぞ？」

確かに光太郎に取っては家族とは最大の弱点となっている。だが、それ以上に力をくれる『彼等』はそんなことを決して望まない。自分達だけが助かり、地球侵略の片棒を担ぐなど、決して許さないだろう。何より、慎二と桜は『弱点扱い』されることを一番嫌っているのだ。そしてメデューサに…そんな情けない自分を見せるわけには行かない。

「…俺は…俺達は地球の支配なんて望んでいない」

「愚かな…地球は我らに支配されれこと真の平和が訪れるのだぞ？ゴルゴムのような侵略者など現れず、争いのない世界が生まれるのだ」
「誰かに支配された平和なんて間違っている！俺達が望む平和は誰もが自由であり、笑い合える世界のことだ！」

光太郎の心からの望み。ジャーク将軍が、クライシス帝国が言う『平和』とは完全に反するものだ。光太郎の言葉を聞いたジャーク将軍はしばしの間を繋いだ後、再度光太郎へと尋ねる。

「…最後に聞く。こちらに付く気はないのだな？」

「俺の信念は…変わらないッ!!」

言い切った光太郎を睨むジャーク將軍は踵を返すと、光太郎の眼前で突如シャッターが下り、スピーカーからジャーク將軍の声が響く。『ならば貴様に用はない。宇宙の藻屑となって、地球が我らに支配される様を見続けるがいい』

「なにを…グっ!?!」

ジャーク將軍の放った言葉を理解するよりも早く、光太郎のいる場所が急激に一方向へと空気が流れていくことに気付く。バランスを取ろうと部屋の一部に捕まるも身体が宙に浮きだしてしまっている。

「こ、これは…まさかッ!?!うわああああああッ!!」

空気と共に光太郎が吸い込まれ、排出されたその先。どこまでも闇が広がる空間…宇宙だった。

(奴らの基地は宇宙に…しかし、このままでは…)

敵の本拠地が地球以外にあると判明したが、宇宙空間に放り出された光太郎はなす術もなく流されていってしまう。絶対零度に近い空間でも恒常性を保っていられるのは改造人間であるが故なのか、少し冷静でいる自分に呆れながらも光太郎は先程まで自分がいた場所を見た。

巨大な蛇のような頭部と昆虫の節足を思わせる無数の足を常に動かしながら移動する旗艦。あれが敵の基地なのかと考える光太郎へと一筋の光が伸びる。

その目指す先は…

「光太郎…?」

図書館を出た慎二は、思わず義兄の名を呼んで空を見上げる。

「光太郎兄さん…」

衛宮邸を後にし、藤村大河に家付近まで送迎された桜は嫌な予感を抱いた。

「が……ああ……」

クライシス要塞から延びた光の槍。

槍は光太郎の腹部をキングストーンごと貫いていた。

(……………)

がくりと項垂れた光太郎から槍が抜かれると、顔を上げることなく宇宙空間に流されていった。

その様子をモニターで見ていたジャーク將軍は背後で膝間着く部下達へ指令を下す。自分達の障害となるのは地球にいる他の仮面ライダー達のみ。

「世界中に散っていた各支部隊へ伝令！今こそ地球征服の為に行動を開始せよ！」

『ハハア!!』

号令に応えたボスガン、ゲドリアン、マリバロン、ガテゾーン達四大隊長は一斉に行動に移る。自分達が指揮する部隊へ指令を出すために次々と指令室を後にするが、ただ一人部屋に残ったガテゾーンは最期を迎えた光太郎の姿を映していたモニターを見上げていた。

「どうしたのだ、ガテゾーンよ」

「いえ、何も…」

「貴様の怪魔ロボットの活躍、期待しておるぞ」

「アイアイサー…」

動力源であるキングストーンなしでもスペック以上の力を発揮した光太郎の力に興味があつたが、今となつては知り得ることは敵わない。ジャーク將軍の言葉に空返事をするなど、この時が初めてであつた。

宇宙空間を彷徨う光太郎は必至に身体を動かさそうと働きかけるが、指先一つ動く気配はない。それどころか力も消え失せ、意識も遠のいていく。

(信彦も、こんな状態だったの、か)

数か月前の戦いで、キングストーンの力を制御していたベルトを破損しながらも自分との死闘を繰り広げた親友の姿を思い出す。彼の場合はキングストーンそのものにダメージを受けたわけではないが、光太郎は

自分のキングストーンが砕け散った感覚がはつきりと分かつてしまっていた。

再生される様子もなく、今こうして考えたり誰かを思い出すことすら不思議なほどだ。

だからだろうか。信彦の事だけでなく、次々と大事な人の姿が浮かんでくる。

(ま、ただ。俺は…こんなところで…)

敵の言つた通り、もう変身することすら敵わないかもしれない。命もあと僅かかも知れない。だが、それでも光太郎は諦めようとしなかった。

その気持ちに応えたかのように手がかすかに動き、その先にある青く美しい星…地球へと手を伸ばす。

(本当に…綺麗だ。俺達が戦って守れたというのなら、これかも…みんなと一緒に…)

震える指の隙間に映る母なる星。その地球の背後から少しずつ、眩い光が広がり始めていた。

(暖かい…この光は、太陽…?)

地球へ様々な恩恵を与えてくれる太陽。その光が光太郎の全身を照らした、その時だった。

(…!?)

砕け散ったはずのキングストーンに力が宿り、急速で再生を始める。これまでにない力と輝きを放つキングストーンの光に包まれた光太郎の意識は段々と遠のいて行った…

「……………」

夜の街を歩き続ける黒い革のコートを纏った青年はふと空を見上げる。虫の知らせというべきだろうか。具体的にそれが何であるかは分からない。

ただ、それが自分に深く関係しているということだけは、わかって

いる。

『どーしたんだいノブヒー、柄にもなく星に願い事かい?』

「なんでもない。それと、その呼び方はやめろアヴェンジャー」

『あんだが俺をアンリマユって呼んでくれたら考えるよ。ったく、もう聖杯は無いんだからクラスの名前は意味がねえって何度言えば…』
「……………」

『ノックしてもしもーっし!?いくら1人言になるからって無視するのはよくないと思いまーす!!』

自分の中にいる『もう1人』の意見を聞き流し、再び青年は移動を開始する。そして空では、一筋の流星が走っていた。

「…、光太郎ツ!!しっかりして下さい!!」

「う…」

「光太郎ツ!?目が…覚めたのですね」

自分の名を呼ぶ声に応じ目を開けて映ったのは、涙目のメデューサであつた。また泣かせてしまったと罪悪感に囚われる光太郎は身を起こそうとするが、全身に痛みが走って動かせない。

「あれ、メデューサ…俺…」

「今は喋んな!身体に障る…」

「慎二…くん?」

「悪いけど、桜をこっちに連れてきてくれ、可能ならキヤスターも」
「わかりました！」

指示に従って移動するメデューサを見送った後、慎二は一体何が起きたのか説明を受けたいほどであった。

何故、義兄が半径数十メートルにも及ぶクレーターの中心で全身黒焦げの重体で倒れていたのかを。

第3話

全貌を露わにした異次元からの侵略者。

その名はクライシス帝国。

戦いを挑む間桐光太郎だったが敵の放った兵器により戦う力を奪われ、変身すら不能となってしまった。

光太郎はクライシス帝国の地球侵略部隊最高司令官であるジャーク将軍に地球侵略に協力するよう誘われるが断固拒否。

自分の言いなりにならない光太郎を用済みと判断したジャーク将軍は光太郎を宇宙空間に放り出したうえに、光太郎の身体に宿るキングストーンごと腹部を光の槍で貫いてしまう。

だが、絶体絶命となった時でも生き延びることを諦めようとしないう光太郎の身体を太陽の光が包む。

光太郎は全身に傷を負いながらも地上へと生還し、仲間達に無事発見されたのであった。

「…もう一度言ってみなさい。彼が、あのような重症を負った原因を」

間桐邸で重症の光太郎へ治癒魔術を施したキャスター…現在名、葛木メデアは客間でテーブルを挟み向かい側のソファに腰かけている間桐慎二の発言を訝しみ、睨むように問いかけた。慎二も負けじと眉間に皺を寄せ、ドスを利かせるように回答する。

「ならもう一度だけ説明するよ」

その空気に飲まれ、不安な表情で桜が見守る中、慎二が放つ言葉は

「全身に残る火傷の原因は、宇宙から地球に落下する際の摩擦熱によるもの。アイツは生身で大気圏を抜けてきたんだよ」

沈黙が間桐家を支配した。

(いやいやいやいやいや…ありえないでしょう?)

部屋の隅でアーチャーと共に事態を見守っていた遠坂凜は妹の義兄が何を戯けた事を言っているのかと全力で突っこみたくなるが、隣を見れば自分のパートナーが真顔で静観しているため自分だけ声を大にして言い出す真似など出来るはずがない。

懸命に遠坂たる者常に優雅たれと自己催眠をかけるように心の中で唱え続ける中、メディアの質疑は続く。

「…そんなことを信じられると思っているの?」

声を低くするメディアの言葉にウンウンと頷く凜の姿を見て悟られぬ程度に溜息を付くアーチャーは神代の魔術師に問い詰められても臆することなく答えようとする慎二の後ろ姿を見る。

「なら、確実に納得できる答えを言っつてやるよ」

ゆっくりと息を吸い、メディアから目を逸らすことなく慎二の口から出た答えは…

「光太郎だぞ?」

「そう、なら仕方ないわね」

間を開けることなく納得の意を見せるメディアに凜は今度こそ我慢が出来ず大声を室内に響かせるのであった。

「おかしいでしょオオオオオオッ!」

もはや悲鳴に近い声を上げた凜へ一同の視線が注がれる。その姿に呆れた様子で顔を向ける慎二とメディアの視線がさらに凜を刺激し、彼女が押さええていた理性を振り払う直前にアーチャーが頭を押さえ、誰もが抱くであろう質問をぶつける。

「凜が疑問を抱くのも真つ当なことだ。いくら奴が：間桐光太郎が規格外の力と肉体の持ち主だと言っても、生物が宇宙から地球へ落下し、生きているなど到底信じられる話ではないからな」

子供をあやす様にポンポンと頭を軽く触れるアーチャーを上目遣いで睨みながらも自分の訴えたい心情を代弁してくれたことに目を逸らしつつ感謝していると、メディアの深いため息が耳に届いた。

「確かに。むしろあの一言ですんなり受け入れてしまった事に自分でも不思議なくらいよ。けど、ここにいる全員がそう言わてしまったら納得してしまうのではないかしら？」

全く魔術師とは思えない考えだと思いつつもメディアはその場にいる全員を見回す。異を唱える者は、いないようだ。

凜も1人だけ大げさに騒いでしまったことが今になって恥ずかしくなってしまう。考えてみればあの人物は単純に戦闘能力が高いというだけでなく様々なありえないことを：条件がそろっていたとは言え、聖杯を浄化しただけでなくサーヴァントに命を与えたという『奇跡』すら起こした男だ。

その彼が今更どんなことを起こそうが不思議ではないのだが、それを受け入れられるかは別の話だ。

もうこの先何があっても驚いてやらないと凜は固く誓うが、残念ながらその決意は後日脆くも崩れ去るとはこの時夢にも思っていないだろう。

「ま、まあ光太郎さんは命には別状はないことがはっきりしたことはいいことだよな、桜？」

「あ、はい。でも、あれから2日も経過して目が覚める様子が…」

空気を変えるべく衛宮士郎は光太郎が重症を負いながらも奇跡的

に生き残っていることへ安堵したことを桜へ同意を求めるが、その桜は意識を回復しないことへの不安を口にする。

光太郎は持前の回復力に加えメデイアと桜の治療魔術によって表面的には傷一つない状態にある。しかし、発見されてから一向に目を覚ますことなく眠り続けていた。

「…脳に異常があるか、医者に診てもらった方がいいかもしれないわね」

「しかし、あの光太郎さんをあそこまで追い詰めるような連中に生きているとばれたら…」

「ああ。間違いなく狙ってくるだろう。いや、向こうが襲撃に来るのも時間の問題だ」

光太郎の様態も考え、より精密な検査を推奨するメデイアの意見に凜とアーチャーは待ったをかける。事実、光太郎を重症に追い込んだ敵が存在するならばいつ現れてもおかしくない。ならば彼自身が目を覚ますまで待つしか彼等には手段がなかった。

「そういえば、ライダー…いや、メデューサは何処にいるんだ？」

「はい、『姉さん』なら光太郎兄さんの部屋にいますよ。ずっと、看病してくれているみたいです」

「ッ!?!」

ただ一人姿を見せていなかったメデューサの居場所を聞く土郎に答えた桜の言葉にある単語に凜は強く反応してしまう。しかし、未だに続く盟約上この場で詳しい話を聞き出すわけにいかず、頭を抱える姿を見てアーチャーは、今度はワザとらしく溜息を付くのであった。

「光太郎…」

自室のベットに横たわり、定期的に呼吸をする光太郎の名をそっと呟くが反応は示さない。ベットの横に設置された椅子に腰かけるメデューサはただ、光太郎が自ら目を開ける姿を待っていた。彼ならば

どのような状態であろうと、彼が守りたいものがある限り必ず立ち上がると信じているから。

(そして貴方は誰かの期待を決して裏切らない人だと知っています。だから、時間をかけてもいい。ちゃんと、目を覚ましてくださいね) メデューサは眠り続ける光太郎の頬を優しく撫でるのであった。

クライス要塞 指令室

「なに…間桐光太郎が生きているだど?」

「はっ。私の情報網によれば奴目はしぶとくも生き残り、今深い眠りについている模様です」

「むう…」

マリバロンからの情報を耳にしたジャーク将軍は先日、自らの手で葬った間桐光太郎の最期を思い出す。あの時、間違いなく宇宙空間で致命傷を負わせたはずだ。

カツカツと足音を立て室内を歩きながら思考を巡らせるジャーク将軍はデータで閲覧した光太郎の戦闘データ…特にシャドームーンとの決闘時や創世王との戦いに現れた力をふと思いつく。

(瞬間的とはいえキングストーンの力を解放した瞬間はデータが計測不能と出た…もし、粉微塵にキングストーンを打ち砕いたとしてもその力が健在なのだと思えば…これほど厄介なことはない)

「…将軍?」

「マリバロンよ。間桐光太郎は目を覚ますことなく眠っているのだな

「？」

「間違いございません」

「ならば間桐光太郎を確実に抹殺せよ。目を覚まさない今ならば、スカル魔でも容易く行えるであろう」

「ちよつといいですかい、ジャーク將軍」

マリバロンへと命令を下すジャーク將軍は自分の名を呼ぶ声の方へと顔を向ける。そこには出入口に背をあずけ、腕組みをしているガテゾーンの姿があった。

「どうしたのだガテゾーン。そちにはアメリカ方面の部隊編成を命令したはずだが…」

「そんなものはとっくに終わっています。將軍、間桐光太郎…仮面ライダーBLACKの抹殺に怪魔ロボット、キューブリカンを同行させて下さい」

「なに？」

キューブリカンと言えば機甲隊長であるガテゾーンが率いる怪魔ロボット最強と謳われる。あのキューブリカンを派遣するとは、ガテゾーンはそれほど間桐光太郎を警戒しているということなのだろうか。

「…よかろう。間桐光太郎の抹殺、そちらに一任する」

『ハッ！』

命令を受け、力強い返事を確認したジャーク將軍は踵を返して指令室を後に、残ったマリバロンはガテゾーンへと尋ねた。なぜ、自分の所有する軍団の最強ロボットを使ってまで身動きの取れない間桐光太郎抹殺へと参加させたのかを。

「…わからん」

「わからない？貴方にしては随分と珍しい物言ね」

「ああ。だが、やるからには必ず倒して見せる。俺のプライドにかけてな…」

既に丑三つ時を過ぎ、まだ誰も眠りについていない時間。

間桐邸の前には黒いローブを纏う3体のスカル魔。光太郎に襲い掛かったヘルメットを装着したゴルゴム怪人の素体が数体。そしてシルク帽を深々と被ったスーツを纏った男性の姿があった。

帽子の陰から見せるその瞳：否、瞳の形へと偽装された熱センサーから眠る光太郎の位置を割りだした男性は屋敷の一面を指さす。間違ひなく光太郎の私室を発見した素体達は雄叫びを上げて塀を飛び越えると庭へと着地。そのまま扉へと一目散に駆け出していくが…

『ギヤアツ!?!』

素体達は屋敷にたどり着くことなく、地へと沈んだ。

1体は頭部を鉄杭の付いた鎖に貫通され、

1体は炎の矢が胴体に突き刺さったと同時に燃え上がり、

1体は全身に毒が回ったかのようにのた打ち回って動かなくなつた。

塀の上を上り、事態を観察していた男性は家の前にいつの間にか姿を現した3つの影を睨む。

「やはり狙ってききましたか。シンジ、リン達に連絡は？」

戦闘装束となり、鎖を強く握るメデューサは隣で器用にも魔力の籠った弾丸を片手で銃へ装填しながら携帯電話に耳を当てる慎二へと尋ねるが首を横に振る。遠坂宅へと連絡をしているが、どうやら自分達と同様に襲撃を受けているようだ。

「先輩は今日メデアさんの所へ泊まって正解でしたね…」

「ああ。冬木で一番安全な場所だ。若奥様はそうとう機嫌悪い見たいだけだな…」

新しい矢を番える桜に捕捉する慎二は柳洞寺のある山から一筋の光が天に昇っていく光景を目にする。どうにか何も知らない寺の人

間に気付かれないうちに終わって欲しいと願いつつ、庭へと着地したリーダーらしき人物へと目を向けた。

「…命令されたのは間桐光太郎の抹殺。邪魔をするならば容赦はしない」

と、手を広げたと同時に指から鋭い爪が姿を現す。どうやら人間の姿をしているだけであって普通ではないらしい。

「…あの者は私が相手をします。2人は一歩たりとも敵を光太郎へは近づけないで下さい」

「はいッ！」

「オーケイ。あの駄兄が目覚める前に片づけてやるよッ！」

慎二は叫ぶと同時に構えた銃から弾丸を発射。弾道は外れることなくこちらに向かって駆け寄る怪人素体の肩へと命中。弾丸が貫通した箇所がブクブクと腫れ上がり、肌が禍々しい紫色へと染まっていた。

今打ち込んだのは、メデイア印の毒入りの弾丸だ。

恐ろしくて触れたくもないと慎二が地下蔵へ封印していたがこの事態を見て開封。改めてその効果を目にし、メデイアの恐ろしさを思い知りながら慎二は再び弾丸を装填する。その隙を付こうと接近する素体だが慎二は焦燥することはない。

「そこですッ！」

桜が矢を放つ寸前。両手に装着された赤い手甲に刻まれた術式により圧縮された桜の魔力が炎となって指先を経由し、矢の先端へと宿ると同時に放たれた。単純な燃焼ではなく、触れた者の全身を包む炎は完全に対象を燃やし尽くすまで消えることは無い。

メデイアに負けず劣らず凄まじい術式を組み上げた義兄に感服しながらも、桜は敵に狙いを定めた。

「フッ！」

庭の中央で金属同士による接触で次々と高い音と共に火花の拡散が続いていた。メデューサが振るう鎖を男の爪が弾き、接近した男の

爪をメデューサは鉄杭で弾き返す――。

先程からその応酬が繰り返される中、メデューサは男の攻撃に違和感を感じていた。

(この男の攻撃…見た目によらず、重すぎる)

いくら聖杯戦争時から力が落ちたとはいえ、自分と手にした武器とぶつけ合えばその瞬間に生じる力によって常人ならば腕が耐えきれず、最悪ねじ切れるはず。だが、目の前の男はその衝撃に耐えるだけでなく、メデューサと同等…下手をすれば彼女以上の力を有していることになる。

つまり、男も人間ではない。

(ならば、手加減は無用――)

逆手に持った鉄杭を男の脳天に突き刺す。

いくら相手が剛力を誇ろうが頭を潰してしまえばそれで終わりだ。メデューサは相手の爪と鎖が接触した直後に鎖を強引に爪と摩擦させるように引き寄せる。ガリガリと削がれる音と共に爪と鎖によって発生した火花が一瞬男の視界を封じ、その刹那を逃さずメデューサは跳躍。

男の頭上へと舞い上がったと同時に鉄杭を帽子ごと相手の頭上へと突き立てた。

メデューサの鉄杭は間違いなく、男の帽子貫いた。

(…そんなんっ!?)

鉄杭は、帽子を貫くだけに留まっていた。まるで固い金属のような男の頭部に、武器を突き立てたメデューサの腕にその衝撃が帰ってきてしまうほどの強度。急ぎ離れようと鎖を植栽の幹へと縛り付け、その場から逃れようとしたがそれよりも早く男に腕を掴まれてしまう。

「くっ…!」

「いい加減…邪魔だ」

冷たく言い放つ男の腹部がバリバリと音を立てて衣服と皮膚を裂いて現れた円柱型の金属。それは紛れもなく巨大な銃口だった。

「ッ!」

メデューサが勘付き、逃れようとするよりも早く銃口からエネルギー

ギーがゼロ距離で放たれてしまう。

男の攻撃による炸裂音の方へと顔を向けた慎二と桜の目に砲撃により吹き飛ばされ、庭の芝生を抉りながら落下したメデューサの姿が映る。

「メデューサッ!？」

「大丈夫ですかッ!？」

駆け寄ろうとする慎二と桜の背後に迫まる影。義兄との戦いの中で研ぎ澄まされた直観が背後に迫った危機を教えてくれたのだろう。そうでなければ2人は振り返ると同時に手にした武器を盾代わりに掲げるといふ手段すら出来なかったはずだ。

スカル魔の振るった鎌によって2人の武器：ライフル銃と弓が真つ二つに裂けてしまう。

武器を犠牲に生き延びた2人は急ぎ立ち上がろうとするメデューサの隣まで移動し、彼女に肩を貸すと自分達へと迫る男とスカル魔と対峙する。

(まずい…ですね)

数と力による圧倒的な戦力差。そして両隣にいる2人は主要の武器を失ってしまったている。だが、それでも…

「桜…拳でも、いけるか？」

「兄さんこそ大丈夫なんですか？確か折りたたみのボウガンしか無かったけど」

「は？それだけあれば僕は十分なんだよ」

「なら安心です！」

それでも、2人は笑っている。笑いながら、義兄を守ろうと命を張っているのだ。

なら、自分だって負けられない。

光太郎を守ろうとする気持ちなら、負けるつもりはないから。

「…ありがとうございます。2人とも」

「大丈夫ですか？」

「あんま無理せず後で休んでもいいんだけど」

2人の支えを解き、自力で立ち上がったメデューサは一度背後にある一室へと目を向け、息を飲むと再度前に一歩出て敵と対峙する。

「…それは、目の前の脅威を払ってからにさせて貰います」

以前にも、似たような空間にいたことがあった。

周囲には何一つなく、真っ暗。前回との違いといえば自由に動ける事だろう。

間桐光太郎がそんなことを考えていた時、背後から接近する気配を感じた。そして振り返ったその先にいたのは――

「…なんで」

そう口走ってしまったのは、当然だろう。

なぜならば、自分の前に現れた存在の姿には、見覚えがありすぎるからだ。

漆黒の身体

赤い一對の複眼

そして腹部に赤い石を宿す銀色のベルト

光太郎が変身する仮面ライダーBLACKの姿が、そこにあった。

『…間桐光太郎』

「その声…」

自分の名を呼ぶBLACKの声。初めて耳にするはずなのにずっと前から聞いていたような不思議な気持ちとなった光太郎は、目の前に立つ存在の正体を知る。もしかしたら、考えるまでもなかったかも

と思いながら10年以上共に過ごした相手へと口を開いた。

「キングストーン…だね」

『説明するまでもないか…やはり今代の主は過去の者共とは違うようだ』

「何度も助けてもらってるからね。それに、今だってこうして生きていられる」

『…今の状況、分かっているようだな』

「ああ。だから、俺は直ぐにでも起きなければならぬ」

光太郎はBLACKの姿を借りて現れた自身に宿る『キングストーンの意味』へ自分が今すべき事を告げた。

彼からも忠告を受けていた新たな敵が出現し、今も光太郎の家族が戦っている。なら、いつまでも寝ている場合ではないのだ。

無言で互いの視線を躲す中、キングストーンはゆっくりと光太郎へ掌を翳す。その手には、小さくもその空間そのものを照らす眩い光が宿っていた。

「これは…?」

『私とお前が手にした『新たな力』だ。砕け散った私を再生させ、重症のお前を生きたまま宇宙から地球へと落下させた未知なる力…』

「あの時の…」

宇宙を彷徨う光太郎が意識を失う前に感じた凄まじき力。何よりキングストーンですら全貌を掴めない力が今、ここにある。

『これを手にすれば、お前はさらに強力な力を手にすることができる。だが、同時にそれはお前をさらに激しい戦いへと投じることに繋がるだろう。それでも、お前は手を伸ばすか?』

「……………」

キングストーン迫られた選択。光太郎は迷うことなく、自らの手をキングストーンの手へと伸ばした。

『…力に得ることを選んだか』

「ああ。敵は今まで以上に強大だ。力が手に入るのなら、俺は迷わない。けど安心してくれ。俺は、力に溺れることは決してない」

『何…?』

思わず聞き返すキングストーンに光太郎は笑顔を向ける。

ただ1人の欲望によって永遠と思わせる時間を力の行使だけに潰えてきた2つの石。彼等はずっと見せつけられてきた。自分達を奪い合う為の殺し合い。それが終わったとしても待つのは次の殺し合いまで力の独りよがりである『王』の力の一部となるしかなかった。

ゴルゴムが滅びた今、血塗られた宿命から解放されたキングストーンは自分の主が再び戦いの渦中へと飛び込むだけでなく、新しい力を手に入れたことでかつての悪夢が繰り返されてしまうのではないかと危惧していた。

しかし、今の主は全く違う答えを自分へと示したのだ。

「俺はこの力を守るために、悪を打つためだけに使う。今までもそうしてきたように」

『だが、お前が力に溺れないという保証はない。あの創世王のように』『それは心配いらぬ。仮にもし俺が外れた道に行こうとするならしっかりと止めてくれる家族と仲間がいる』

『…そうか』

今までの世紀王と違う理由。光太郎には大切に思える存在と、逆に光太郎を認める存在がいるからだ。過去の世紀王たちも力の誘惑に負けず、支えてくれる人に出会っていたのなら、今とは違った結末を迎えていたのかもしれないと考えたキングストーンは続く光太郎の言葉に今度こそ驚かされてしまう。

「勿論、君も仲間の1人だよ」

『なっ…!?!』

「だってそうだろう?俺が仮面ライダーとして戦えたのも、君がいたからだ。こんな時にしかお礼をいえないけど…」

本当に、ありがとう。

その言葉を聞いた時、キングストーンはこの世界に誕生し、初めて自分が『笑った』と自覚ができた。

『ただの力の結晶体に過ぎない私が、仲間か。本当に変わっているな、お前は』

「お互い様だよ。こんな変わってる俺にずっと力になってくれているんだから」

『フツ…』

そして光太郎の掌とキングストーンの掌がゆっくりと合わさり、手の隙間から暗い空間を真っ白に染め上げる程の光が放たれた。

『…いいだろう。使いこなしてみろ。この…』

『太陽の力をな』

月が沈み、暗かった空が群青色に染まっっていく中。

多くの傷を負いながらもメデューサ達は敵を前にしても立ち続けていた。

メデューサの鎖は幾度もなく衝突した男の爪によってついに切り裂かれ、桜の手を覆っていた手甲はボロボロに、慎二は隠し持っていた武器や道具はどうに使い果たしている。

だと言うのに、メデューサ達は倒れることを知らず、目にはより強い闘志が宿っている。

『なぜだ』

「？」

男から先程までとは違う声を発した。どうやら、男達を送り込んだ主が声を送っているらしい。

『なぜ、お前達はそうまでしてあの男を守ろうとする。あの男は既に変身することが出来ない。貴様達の言う『仮面ライダー』ですらないのに、なぜ守ろうとする？守る価値など、ありはしない』

「はあっ…ハハハ…」

男の質問に息切れをしつつも、慎二は笑いだした。こんなにも、下らない質問が敵がしてくるとは夢にも思わなかったからだ。

「お前達ってさ…光太郎の事、全然分かってないな」

慎二は嘲笑する。敵が持つ義兄に対する認識を。

「光太郎兄さんが強いのは、変身できるからじゃありません」

桜は知っている。義兄の持つ本当の強さを。

「…例え力を失おうとも、光太郎が『仮面ライダー』であることには変わりありません」

メデューサは信じる。自分の愛する存在は力を失ったとしても、闘う意思を持つ人であることを。

『なら、見せてもらおうじゃねえか。お前達が命を張ってでも守ろうとする奴の価値を』

男が言葉を止めたと同時に、スカル魔は一斉に走り出す。

覚悟を決めた慎二達も襲い来る敵の攻撃に備えるが、それよりも早く、慎二達の合間を抜けて迫りくるスカル魔を殴り飛ばす黒い背中を見た。

「え…？」

「ごめんツ！遅くなったツ!!」

唐突に現れた彼は肩で息をしながらまるで待ち合わせに遅れた時のように茫然とする3人へと振り返りながら謝る姿に、逆に力が抜けてしまったのは仕方がないことだろう。

仮面ライダーBLACKへと変身した間桐光太郎が、そこに立っていた。

「…おっそいんだよバーカ！」

「兄さんのバカツ!!遅すぎですツ!!」

「誠意が全く感じられません。光太郎は馬鹿なんですか？」

「え、あ、はい。すいません…」

三者三様の思いもしない反応に萎縮した光太郎は謝る他なかった。そんな光景を男の目を通して見ていた者達にとっては、あり得ない事態であった。

「馬鹿な…あれ程叩きのめし、変身機能を破壊しても生きていたというのか」

「へ、へえ。しぶといじゃねえか!!」

背後で戦慄するボスガンとゲドリアンの姿を見ることなく、ガテゾーンはモニターへ映る光太郎の姿を睨み続けていた。ガテゾーンがいつもの雰囲気ではないと悟りながらマリバロンはコンピュータを操作。ひたすら家族へ頭を下げ続けた後、敵に向かい構える光太郎のデータが更新する。

やはり完全に無事とはいかなかったか。前回に収集した際よりパ

ワーが落ちている。特にベルトに宿る光はこれまでに無いほど弱々しい。ジャーク將軍はボスガン達と同じく生きている事に表情に出さないものの驚きつつも、敵を倒す好機を部下に見逃さないように、名を呼ぶ。

「ガテゾーンよ…」

「始末するならいつでも出来ます。だが、その前に…」

空が群青からさらに明るく澄み渡った色へと変わる中、男の声が再び放たれた。

『なぜ、お前は闘おうとする？』

「……………」

男の問いかけに、光太郎は答えない。いや、相手の意図が分かるまで黙っているつもりだ。相手も光太郎の考えを汲んだのか、質問を続ける。

『お前を地獄へ叩き落とした創世王って奴はとっくに滅んでる。お前が闘う理由なんざ、とうにないはずだが…？』

「…目の前で苦しんでいる人や、俺を信じてくれる人がいる。俺が戦える理由は、それだけで十分だツ!!」

『他人の為に、ねえ…分からねえな』

結局、光太郎の回答に納得できず…いや、さらに分からなくなってしまう声の主は会話を切り上げ、今まで控えていた部下へと命令を下す。

『始末しろ』

男が一度ガクンつと項垂れ、再び顔を上げるとメデューサと戦闘を繰り返していたように爪を光太郎達へと向けて歩き出す。スカル魔

もそれに続き、巨大な鎌を振り上げたまま進軍。

対して光太郎はゆっくりとした動きで前へと進んでいく。背後に立つメデューサは敵と相對する光太郎が普段に比べ、力が明らかに段違いに弱っていることを悟っている。

身体の治癒と、変身する為にキングストーンの力を使い切ってしまっているのではないかという不安はある。

しかし、その不安よりも安心感が勝っているのは、何故なのだろう。その答えは、直後に現れた。

(分からない…か。確かに、さっき言った答えはあくまで俺自身が納得するためのものだ。他の誰かに理解なんてされないかもしれないけど…)

少しずつ上る朝日が光太郎の影をより濃く形を作っていく。

「俺は闘う。俺が信じる人達の為に…俺を信じてくれる人たちを守る為に…」

その姿を、しっかりと見せて安心させなければならない。

自分は、大丈夫なのだ。

その為に、光太郎は迷いなく使う。

キングストーンと共に掴んだ、新たな力を。

「太陽よ…俺に力をッ!!」

姿を見せた太陽を掴むように天へ右手を翳し、左手をベルトの前へと移動。

右手首の角度を変え、ゆつくりと右腕を下ろすと素早く左肩の位置まで手首を動かし、空を切るような動作で右側へと払うと握り拳を作り脇に当てる。

その動作と同時に左手を右から大きく振るって左肩から左肘を水平にし、左拳を上へ向けた構えとなる。

光太郎の赤い複眼の奥で光が爆発する。

体内に宿ったキングストーンのと光太郎へと降り注ぐ太陽の力が融合した『ハイブリットエネルギー』が光太郎のベルトを2つの力を秘めた『サンライザー』へと変化。

サンライザーから放たれる2つの異なる輝きが光太郎の全身を包み、彼を『光の戦士』へと進化させた。

黒いボディの一部が深い緑色へと変わり、胸部には太陽の力をエネルギーへと変換する『サンバスク』が出現。よりバツタへとイメージが近づいた仮面にはより強く光る真っ赤な目を思わせる複眼と一対のアンテナ。

再び右手を天に翳した光太郎は敵に向かい、新たな力を手にした名を轟かせた。

「俺は太陽の子——ッ!!」

「仮面ライダーBLACK!! RX!!!」

第4話

クライシス帝国によりキングストーンを破壊され、宇宙空間へ追放された間桐光太郎は謎の力に触れる。重症を負いながらも地球へと帰還した光太郎はメデューサ達によって保護されたが、深い眠りに陥ってしまう。

一方、光太郎が生きっていると知ったクライシス帝国は今度こそ光太郎の息の根を止める為、怪魔ロボット キューブリカンを始めとした刺客を放つ。

これを阻止する為に立ち向かうメデューサ、慎二、桜だったが敵の強大な力によって次第に追い詰められてしまう。

だが、キングストーンと意思を通わせ、仮面ライダーBLACKへと変身した光太郎が間一髪メデューサ達の危機を救い、新たな力を発動させたのであった。

「太陽よ…俺に力をツ!!」

姿を見せた太陽を掴むように天へ右手を翳し、左手をベルトの前へと移動。

右手首の角度を変え、ゆつくりと右腕を下ろすと素早く左肩の位置まで手首を動かし、空を切るような動作で右側へと払うと握り拳を作り脇に当てる。

その動作と同時に左手を右から大きく振るって左肩から左肘を水平にし、左拳を上へ向けた構えとなる。

光太郎の赤い複眼の奥で光が爆発する。

体内に宿ったキングストーンの力と光太郎へと降り注ぐ太陽の力が融合した『ハイブリットエネルギー』により光太郎のベルトは2つの力を秘めた『サンライザー』へと変化。

サンライザーから放たれる2つの異なる輝きが光太郎の全身を包み、彼を『光の戦士』へと進化させた。

黒いボディの一部が深い緑色へと変わり、胸部には太陽の力をエネルギーへと変換する『サンバスク』が出現。よりバツタへとイメージが近づいた仮面、より強く光る真つ赤な目を思わせる複眼と一對のアンテナ。

再び右手を天に翳した光太郎は敵に向かい、新たな力を手にした名を轟かせた。

「俺は太陽の子——ッ!!」

「仮面ライダーBLACK!!RX!!!」

「R…X?」

「光太郎の…新しい力…」

桜と慎二は茫然と姿を変えた光太郎の後ろ姿を見つめている。
遅れて現れた上にさらなる力を手に入れていたとは、なんて出鱈目な兄なのだろう。

「みんな。後は任せてくれ」

そして、その言葉がどうしようもなく頼もしい。

「光太郎…」

そう名前を呟くメデューサはただ嬉しかった。見た事もない姿へ光太郎が変わったという驚きよりも、こうして普段通りに自分達の前に現れ、安心させようと優しい言葉をかけてくれることに。

一方、遙か宇宙では3人とはまるで逆の状況となっている者達もいた。

クライス要塞 指令室

「なんだ…なんなのだあれはっ!?!」

「ゲルーツ!?!す、姿が変わりやがった…」

眩い輝きを放ち、姿を変えた光太郎をモニターで目にしたボスガンは混乱の余りに声を荒げ、ゲドリアンは普段以上に落ち着きなく飛び跳ねるしか出来なかった。

無理もない。二度と変身が出来なくした上で宇宙に放り出し、光太

郎の命とも言うべきキングストーンを確実に破壊した光景をこの場にいる全員が目にしてている。だというのに間桐光太郎は生存し、新たな力を得て現れたのだ。

マリバロンも口には出さないもののボスガンやゲドリアンと同じく動揺している。ゴルゴムの残党や地球上に散らばっていた過去の組織から奪い取った仮面ライダーのデータ：特にBLACKの戦闘データは徹底的に調べ、全てを把握したはずだ。だが、データの中にあのような力など微塵もない。

だとするならば…

「奴は…進化した」

マリバロンと同じ結論に至ったガテゾーンは赤いモノアイを光らせ、食い入るようにモニターを見つめている。

「ガテゾーンの言う通りだ。奴は…間桐光太郎は、我々の知らない新しい仮面ライダーへと進化を遂げたのだ」

杖を強く握りしめるジャーク將軍はマントを翻し、敵の思いもよらない姿に平常心を失いつつある部下へと命令を下した。

「マリバロンよ。魔術師共に放っていた『サンプル』共へ招集をかけよ。全力を持って間桐光太郎を…いや、RXを抹殺するのだッ!!」

「は、はい！招致致しました!!」

「む…」

「え…?」

背中を合わせ、遠坂邸に襲撃した敵と戦闘を繰り広げていたアーチャーと遠坂凜は同時にそんな声を漏らした。自分達に対する攻撃をピタリとやめた怪人や素体は一斉に同時の方向へと目を向けた途端に地を蹴り、屋敷の扉を飛び越えていく。

何が起きたか分からないが、どうやら危機を乗り越えたと大きく息を吐く凜は魔力を込めた右腕をゆっくりと下ろす。

「全く…アーチャーの言った通り警戒しといて正解ではあったけど、

まさか真夜中に来るなんて…」

「敵を倒すのに夜襲も有効な戦法だ。ゴルゴムが間桐の家へその手段を使わなかったのが不思議なくらいだ」

「あんたは…」

相も変わらずな皮肉を口にするアーチャーへと振り向く凜だったが、そのアーチャーは凜の視線など全く気が付く素振りもなく自身が手に持つ剣を見つめている。彼が投影魔術によって生み出した2振りの夫婦剣は折れてこそいないものの刃の所々が欠け、無残な状態となっていた。

投影とは、自身の心象をそのまま形にする魔術。もし砕かれてしまうような武器であれば、所詮それまでの創造でしかない。

先日、とある少年との戯れた際にそう言い放ったのだが…

「…衛宮士郎を笑えんな」

敵である以上、彼は一切の躊躇も油断もなく全力で挑む。だが、今の戦いの結果が剣の状態へと現れてしまった。

自分自身という敵を乗り越える。それこそが投影の真髄だ。折られても、砕け散っても、それ以上に自分を強くすればいい。だが、今のようにただ傷つくだけで済むなど論外だ。

相手を切り伏せることも出来ず、壊されて自身の心を超え、鍛えることすら出来なかった中途半端な状態。それが今の自分であると訴えているように。

(俺も、まだまだということなのか)

かつての力を発揮できなかったからと言いつにすればいい。だからこそ負けるわけにはいかない。

自身の宿命を乗り越えたあの男のように。

同じことを、投影した剣が消滅していく光景を眺めながら少年は

思っていた。

(そうだ。だからまだまだ俺は強くならなきゃいけない)

衛宮士郎は拳を強く握り、決意を固めた直後に後頭部へ鈍い痛みが走る。

「……………っ!？」

しやがみ込んで打たれた部分を抑える士郎は攻撃を繰り出した犯人の方へと振り向くと、メディアが不機嫌な顔で見下ろしている。

「な、何すんだよ!？」

「気取っている所悪いんですけど、急いで朝食の準備をしてきなさい。私は後片付けをしなければならぬわ」

「はあ?」

突拍子のないことを告げるメディアの視線の先を見れば…成程、山門を潜った辺りから戦いの形跡が刻まれている。彼女の魔術によって眠っている一成や住職達が目を覚ます前に修繕を終わらせなければ大騒ぎとなってしまうだろう。

彼女が望む宗一郎との平穏な生活。こんなことで台無しにするわけにはいかないのだ。

「本来なら私が宗一郎様の朝食を…私が、私がつ…!!」

自分で発言し、自身にダメージを負っている奥様の姿を見てこれ以上刺激しないよう、士郎は足音を立てずにその場から離れていく。行き慣れた道を辿る途中、自分とメディアと同じく奇襲をかけた怪人達と闘った宗一郎と遭遇。寝間着のまま戦い、敵が去った直後に学校に向かう支度をするると早々と自室に戻っていた彼の姿は見慣れたスーツ姿だ。

「あ、葛木先生…」

「…今日は学校を休むがいい。藤村先生と柳洞には私から言い繕っておこう」

「えと、はい。助かります」

正直ありがたい話だ。普段鍛えているからと言っても真夜中から朝方までの数時間全力で戦い、その後半日学校で何事もなかった様に過ごすのは酷だ。宗一郎は間桐や遠坂に同じ事を伝言するように

指示すると再び自室へと戻るのだった。

「…よしッー」

では台所を借りて今懸命に隠蔽工作をしているメディアに代わり朝食を急ぎ作り、それが終わったら間桐の家に向かおう。

敵が撤収したということは、何かがあつたはずだ。

敵の狙いである間桐光太郎に。

「引くぞ」

男の一言で背後に控えていたスカル魔達が塀を飛び越え、壁の向こうからはエンジンのうねる音が響いてきた。恐らく、ここまで移動手段として使っていたバイクや車に飛び乗ったのだろう。

「逃がさんッーバトルホッパー!!」

光太郎の言葉に従い、ガレージの奥から緑色のオフロードバイク、バトルホッパーが飛び出し主の前で停車する。バトルホッパーに搭乗し、グリップを回しエンジンの調子を確かめた光太郎は急発進。逃げていく敵の追跡を開始した。

そして、残された3人は。

「よし、追いましよう2人とも!」

「何時にもなく決断が早いなお前。まあ、僕のそのつもりだったけどさ」

両手を胸の前でグッと強く握る桜は同意を2人へと求める。先の戦いで疲労困憊が見るよりも明らかだった桜の目は戦う前よりも生き生きと…というよりキラキラしていることに溜息を付く慎二も早く光太郎の後を追うこと事態を否定していない。

むしろ光太郎の後を追うと桜が言い出さなければ慎二が言ったのだろう。

光太郎の隣に立てるように頑張っている2人。その目標たる人物はさらな前進してしまった。なら、追いつくためにも彼の力を誰よりも早く目にしなければならぬ。

何が義兄を変えてしまったのかという原因よりも、追いつきたいという気持ちは強い2人の姿にメデューサは思わず笑みを零してしまふ。

そんな安心が油断と繋がってしまったのは仕方がないことかも知れない。

「——ッ!? サクラッ!?」

「え——?」

『シヤアアアアアアアアアッ!!』

突如地面から這い出た怪人の素体。メデューサ達が撃ち漏らした者ではなく、他の素体やスカル魔との戦いの最中に地中へと潜伏してずっと機会を伺っていたのだろう。

敵は全て去ったと思いきや、完全な失念。素体は背中を向けている桜の顔を切り裂こうと鋭い爪を振り下ろしそうとする寸前。

「キヤッ!」

短い悲鳴を上げた桜の目に映ったのは自分の手を引き後方へ移動させた代わりに、素体の爪が当たるまであと数センチの距離まで接近されてしまったメデューサだった。

「メデューサねえさ——ッ!?」

その先の言葉が聞けるまで、自分は無事でいられないだろう。そんな諦めが彼女の意識を締める一方、この不意打ちを仕掛けた曲者に対しての怒りがあつた。

(あの人の…私の大切な人を傷つけるようなことは、決して——ッ)

「許さないッ!!」

メデューサは素体に向け拳を放ったのは無意識に行ったことだった。だから、その結果が彼女だけでなく庇われた桜と状況が飲み込めなかつた慎二を驚かせるには十分だったのだろう。

敵の攻撃より早くメデューサに叩き込まれた拳によって、素体の身体は『粉碎』された。

身体を貫くでもなく、2つに割ったでもなく、弾けた。肉片と呼べるモノと判別が付かなくなるまで細かく粉碎されてしまった。

「……………」

メデューサも訳が分からぬまま拳を突き出したまま固まっている。聖杯戦争時と比べ、力が半減した彼女にとっては素体を殴り飛ばすぐらいの筋力しかない。だが、今の攻撃した際に聖杯戦争時と同様、もしかしたらそれ以上の力が自分に宿っていた気がした。

それだけでなく、素体を粉碎したのは、間違いなく『石化』により相手を砕きやすい状態へと変えてしまっていた。相手の動きを鈍らす程度にしか効果を発揮しないはずの魔眼の力も、自分の任意とはいえより強力なものとなっていると分かる。

メデューサは粉微塵となった素体に目もくれず、己の拳を見つめていると不意に肩を軽く叩かれた。

「…シンジ」

「今はたつぷりと自分のことを調べたいところだろうけど…」

「…ええ。今は光太郎を追いましょう」

今は悩んでも仕方がない。しかし、今は敵の討伐に向かった光太郎の後を追う事を優先させると思いこむことで、メデューサは先程の力に関して考える事を放棄しようとした。そんな折、光太郎の後を追う準備を進める中、今度は桜から声を掛けられる。

「あの、メデューサ姉さん」

「…サクラ？」

「助けてくれて、ありがとうございます！」

笑顔でペコリと頭を下げる少女を見て、ようやく固くなった表情を柔らかくしたメデューサは微笑みながら桜へと答える。

「ええ。無事で何よりです」

「見つけたッ！」

バトルホッパーを駆り、逃亡した敵の追跡を続ける光太郎はようやく敵を視界に捉える。まだ日が昇ってからそれ程の時間が経過していないため、周囲に人影や他の車両はない。ならば、今自分と共に疾走する相棒に遠慮させる必要などない。

「このまま飛ばすぞッ!!」

「P i P i P i P i —— ツ!？」

「こ、これは——ツ?!」

バトルホッパーが光太郎に答え、電子音を鳴らした直後だった。

光太郎のサンライザーが放った強い光が、走行を続けるバトルホッパーの全身を包んだのだ。光はバトルホッパーを覆うだけでなく、その形状すら変えていった。

バッタの意匠を遺しながらも流れるようなフォルムとなり、カラーを緑色から青へと変わる。

そのスピードは以前を遥かに上回り、動力源であるモトクリスタルから力強い波動が光太郎へと伝っていく。

「…そうか。お前もパワーアップしたのか」

「P i P i P i P i ツ!!」

肯定するように再び電子音を鳴らすバトルホッパーだったバイクは、主の号令を待つ。

「よし、行くぞッ! 『アクロバッター』 ツ!!」

「マカセロ、コウタロウ!」

ん…？と光太郎は敵から目を離し、自らのバイクへと視線を落とし
た。

「——え？ちよ、ちよつと!?今アクロバッター喋って——」

「イマハ、オウコトガセンケツダ！」

搭乗者に有無を言わず、初めて言葉を発したバトルホッパー改め
アクロバッターはバイクに乗るスカル魔達の追跡を再開する。かつ
てないスピードを出し、光太郎の操縦を無視して。

冬木 新都の外れにある採掘場

アクロバッターから降りた光太郎を待ちかまえていたのは間桐邸に
侵入した男とスカル魔。その前衛には、穂群原学園と同様にヘルメツ
トや機械を身体に組み込まれたゴルゴム怪人が待ち構えていた。
その数は、50を超えている。

クライス要塞の指令室でその光景を目の当りにする4大隊長の1
人、ゲドリアンは勝ち誇るように飛び跳ね後にジャーク將軍の前で膝
を付く。

「ジャーク將軍ツ！これから間桐光太郎が相手をするサンプル共は数
日前に奴目の力を凶る為の捨石と違い、力を以前の5倍に強化した者

共でございませす！」

「ほう…」

「その変わり、無理な改造を施した為寿命はあと数日と言ったところでしようがね…」

顔を上げないゲドリアンの口は、醜く歪んでいた事を他の隊長は気付いてはいても特に追及せずにモニターへと再び視線を移す。

海外に散らばっていたゴルゴムの残党を捕獲し、サンプルとして扱っていたクライシス帝国。洗脳することで自分達の私兵として扱っていた。ゴルゴムを率いていた3大神官、そして創世王が滅びた今怪人達の抛り所は世界にはどこにもなく、失意にあった怪人の中には自ら捕獲された個体も少なくはなかった。

なんの抵抗もせず、されるがままに再改造を受け言われるがままに動く兵。そして、地球の怪人を調べる上での『サンプル』として…

「…だが、散る命には変わりあるまい。無駄に散らさぬため、彼奴の力を確実に凶るのだ」

「承りました」

ジャーク將軍の指令を受け、マリバロンはスーパーコンピューターを起動させた。

光太郎の力を凶る為に。

「行け」

男が短く呟くと同時に一斉に行動を開始した怪人達。段々と距離が縮まるにつれて光太郎も気合を込め、叫びと同時に駆け出した。

「行くぞッ!!」

地響きを立てて迫る怪人達との距離が10メートルを切ったと同時。光太郎はその場で屈むと大地を強く蹴り大空へと跳躍。既に頭

上へと迫っていたタカ怪人とコウモリ怪人達を超え、その高さは60メートルを超える。

「トアッ!!」

落下を始めた光太郎に一時的とは言え自分達より高く舞い上がった事へ怒りをむき出しにし迫ってくる怪人2体だったが、光太郎にその攻撃が当たることなくすれ違ってしまふ。

光太郎は何事も無かったかのように着地し、他の怪人達に向かい構えを取った直後、光太郎の頭上で2つの爆発が起きた。

「なんとということ……!」

マリバロンがスローモーションで分析した結果、光太郎は迫る怪人達の攻撃を躲したただけでなく、同時に手刀を蹴りを怪人2体へと叩き込んでいたのだ。

「ジャンプ力もBLACKを遥かに超え、スピードだけじゃねえ…攻撃力もパワーアップしてやがる」

ガテゾーンも分析に加わり、より強化されたはずの怪人をたった一撃で葬りさった光太郎の動きを必死に追い始める。

「トアッ!!」

光太郎の拳を腹部に受けたサイ怪人が打たれた箇所を両手で押さえながら後退し、続けて突進してくるタمامシ怪人も蹴りを一発受けただけで身体をくの字にして大地へと沈んだ。

背後から腕を振り下ろしたカミキリ怪人の腕を左腕で払うと同時に左肘を叩き込み、回し蹴りで後方に控えていたクロネコ怪人ごと吹き飛ばす。

俊敏性に猛るヒョウ怪人はスピードを最大限の状態でアンモナイト怪人の甲羅を膝蹴りで砕く光太郎の真横へと接近。気付かれる間もなく牙が光太郎の首へと突き立てられると思われたが。

「…グッ…ギイツ!」

光太郎はヒヨウ怪人の方へ身体を向けることなく、自身の右側へ拳を伸ばす。拳はヒヨウ怪人の胸部を叩き、怪人がダメージによる悲鳴を上げる前に素早く腹部、頭部へと続けて裏拳打ち込んだ。

ガクリと膝を付くヒヨウ怪人に続き突進してきたマンモス怪人の牙を掴み、左足を軸にしたローキックを怪人の太腿へと叩きつける。それも一発だけではない。

「ハアアアアアアッ!!」

一度引いた足が地面に着いたと同時に再び同じ箇所へと蹴りを叩き込む：同じ攻撃を5度、6度と繰り返し返し、7度目の蹴りがマンモス怪人の頭部へと炸裂。ヘルメットが砕けると同時に爆発した。

「う、嘘だ：：クライシスに劣るゴルゴム共の怪人共とはいえ俺様が再改造したサンプル共をああも簡単に」

「データの更新が追いつかない：：なんとという凄まじきパワーなの」
「だが、防御力はどうかかな？」

ゲドリアンとマリバロンは光太郎の攻撃によつて次々と倒されていく怪人の姿を見て圧倒される中、ガテゾーンのモノアイは光太郎に忍び寄る一つの影の存在に気付いていた。

「ムッ!？」

怪人の爆発に紛れ光太郎の前に姿を現したスカル魔は手にした大鎌を振う。光太郎は回避することが出来ず、切り裂く音と共に胸板へ斜に大きな傷が刻まれてしまった。

しかし…

「フッフ、これで奴も…なッ!？」

ボスガンは自身の目を疑う。モニターの奥で確かな深手を負った光太郎の傷が、一瞬にして消えたのだ。

これに驚くスカル魔だったが、その一瞬の隙が命取りとなる。大鎌の刃を光太郎が掴み、握り碎かれた直後に拳が顎へと直撃。そのまま光太郎は腕を振り上げ、骸骨の顔に顎からひび割れていくスカル魔は放物線を描きながら吹き飛び、爆発した。

「これは…再生。一秒にも満たない時間でスカル魔に受けた傷を再生させたというの!？」

モニターでスカル魔が光太郎の胸板に傷を付けた直後の映像をスローモーションで分析したマリバロン。光太郎の胸板に深い傷が刻まれた直後に一瞬眩く光り、その光が消えた時には光太郎には傷一つ残っていないかったのだ。

「トアッ!!」

バイクを駆り突進をしかけた別個体のスカル魔2体は同時に大鎌で光太郎を切り裂こうと接近を試みたが、突然目の前を横切ったアクロバッテリーの妨害により操縦が乱れ、そこを光太郎に飛び蹴りを受けてしまいバイクごと転倒。爆発の中に飲まれてしまう。

「なんとという奴だ…」

予想外の戦闘能力に悪態をつく男を視界に捉えた光太郎は膝を付き、右手を大地に強く打ち付ける。大地を蹴って跳躍した光太郎は身体を後転しつつも前方へと落下するという離れ業を見せながら両足にエネルギーを集中。

「RX!!キイックツ!!」

「ぐ、オオオオオオオオオツ!？」

身体を捻りながら両足を胸板へと叩き付けられた男は踏みとどまることが出来ず、数十メートル先へと吹き飛ばされてしまう。

「RXキック…以前奴が必殺技としていたライダーキックの…さ、3倍を超えている…」

「だが、その程度でやられる奴じゃない。怪魔ロボット最強の名は伊達じゃないぜ…」

弾きだされる攻撃力のデータを見るマリバロンはもう読み上げることしか出来ない。その一方でガテゾーンは自分の部下がまだ倒された訳ではないと確信していた。

着地して油断なく構える光太郎は吹き飛ばされた男が何事も無かったかのように立ち上がる姿を見る。しかし、無傷とは言えず衣服の至る所が避け、裂けた皮膚の下から機械のボディを露わになっている。

それでもはや人間へ擬態する必要がないと考えた男は衣服と皮膚を引き裂き、自ら正体を現した。

重厚な機械で全身を包み、関節ごとにむき出しとなっているチューブの束。右手と頭部の横にそれぞれ巨大なレーザー砲を持つロボット…

「それが、お前の正体か」

「我が名はキューブリカン。怪魔ロボット最強の名にかけ、貴様を破壊する！」

言うと同時に右腕から次々とレーザーを照射するキューブリカンの攻撃を光太郎は真横、前方へと転がりながら回避を続けていく。

敵との距離は50メートル前後。何とか接近戦に持ち込もうと考えるが、突如背後に現れたイカ怪人に羽交い絞めを受けてしまう。それだけでなくバラ怪人やサンショウウオ怪人達が纏わりつき、光太郎は身動きを封じられ、これを好機とキューブリカンはゆつくりと照準を光太郎へと向けた。

「貴様…まかき怪人達ごと!？」

「所詮持つてあと数日の命…有効活用しているに過ぎん」

「…ッ!？」

敵の冷徹な言葉に怒りを向ける光太郎は必至に振り払おうと身体を振るがイカ怪人の吸盤は決して光太郎を離そうとしない。そして、キューブリカンはチャージしたエネルギーを右手のレーザー砲を向けた。

「これでお終いだッ!!」

発射されたレーザーは間違いなく光太郎ごと怪人達を射抜き、大爆発を起こす。怪人達の肉片が爆風によって四散する中、自らの勝利を確信したキューブリカンは通信機能をオンにし敵を始末したと報告を送るつもりであったが、それよりも先に主であるガテゾーンからの通信が届く。

『キューブリカン。まだ終わってないぞ』

「は?しかし奴は確かに…」

『奴のエネルギーは全く消えていない。よく見てみる!』

「ッ!？」

通信を終えたキューブリカンは再び爆発へと目を向ける。未だ消えない炎の中からゆつくりとした足取りで現れたのは、『無傷』の光太郎であった。

「そ、そんな馬鹿な…あれだけの攻撃を受けて…」

「…怪魔ロボット、キューブリカン」

トーンを落とした光太郎に名を呼ばれたキューブリカンは寒気を感じる。ロボットである自分がそのような事を感じるなどありえないと思しながらも、光太郎の言葉にはつきりとそれがどのような感

情であるかを認めてしまった。

「かつては世界を恐怖に陥れたゴルゴムの怪人とは言え、自らの目的の為に命を弄び、犠牲にするなど、俺は絶対に許さんツ!!」

『恐怖』

それが光太郎に対してキューブリカンが抱き、彼のAIを支配する感情だった。

「アクロバッターツ!!」

光太郎の叫びに答え、爆走して現れたアクロバッターに飛び乗った光太郎はキューブリカンへと一気に接近を仕掛ける。土煙を上げ、けたましいエンジン音を鳴らしながら迫る敵にキューブリカンは当たり構わずレーザーを乱射する。しかし、正確に狙いを定めず発射されたレーザーは当たることなく、光太郎達とはまるで違う方へと放たれるだけであった。

爆発の中を迷うことなく爆走する中、光太郎はグリップを手放し左手を腰に添え、右手を前方へ突き出した構えとなる。

「行くぞツ！キューブリカン——」

「リボルケインツ!!」

最初の構えとは逆に素早く右手を腰に当て、左腕を大きく回しながら広げた手を腹部のサンライザーへと翳す。

サンライザーの左側の結晶から幾層もの光の線が重なり、洗練された円形の柄が現れる。

中央に赤い風車のようなダイナモがあり、柄を光太郎が掴むと同時に光を迸りながら高速で回り出した。

柄をサンライザーから引き抜くと眩い青い光——圧縮された光のエネルギーが結晶化した光子剣『リボルケイン』を形成。

リボルケインを左手から右手に持ち替え、水平に構えた光太郎は一度飛び上がりアクロバッターの座席へ一度着地し、それを足場にして天高く跳躍する。

「ッ!？」

思わず上を見上げたキューブリガンは急ぎレーザーを乱射。しかし、太陽を背に落下してくる光太郎にかすることは出来なかった。

「トアアッ!!」

「グあッ!？」

光太郎は着地と同時にキューブリガンの腹部へリボルケインを深々と突き刺す。そして担い手である光太郎のエネルギーがキューブリガンへと流れ込んでいく。

柄を握る力を強くした光太郎はリボルケインをさらにキューブリガンへと押し込んでいく。敵が光のエネルギーを内包しきれず、背中から突き抜けたリボルケインの先端や身体の節々からエネルギーが火花となって漏れ出し始めていた。

「この世界に光ある限り、仮面ライダーBLACK RXは不滅。そして——」

「貴様達から、この星に生きとし生けるものを守って見せるツ!!」

後退しながらリボルケインを一気に引き抜いた光太郎は断末魔の声を上げるキューブリカンを背にし、円を描くような動きでリボルケインを振り回し両手首を頭上で交差。

そしてリボルケインを真横へと振るつたと同時に、地へ沈んだキューブリカンは大爆発の中で消えるのであった。

「もう、終わったみたいだな」

「ですね…」

採掘場に到着した慎二と桜が見たのは、光が消失したりボルケインを持ち、自分達へゆつくりと近づくと気づく光太郎だった。その姿はRXからBLACKへ、BLACKから光太郎へと戻っていく。

「お疲れ様でした。こうた——」

迎えようと前に出たメデューサが言いかけている途中、光太郎は糸の切れた人形のように前へと身体を倒れていく。間一髪メデューサが受け止めた地面に沈むことは免れたがメデューサは光太郎を揺さぶり、意識があるかを確認する。もしか、新たな変身による副作用が現れたのかと不安が過るが…

「眠い…」

「はっ？」

自分の顔の横でうとうととして緊張感のない声を聞き、メデューサは思わずそんな声を上げてしまった。

「あの力使うと…とんでもなく疲れる見たい…お腹も減ったし…もう…げんか…いい…」

光太郎はそれ以上話すことなく、寝息を立てている。しばしの間沈

黙が続くが、誰からか分からないがクスクスと、そして大声で笑い始めた。

「な、なんだよこいつ…ククツ…ついさっきまで寝てたくせにまた寝るって…」

「フフツ…兄さんったら。こつちがどれだけ心配したか知らないで…」

「マツタクダ。コウタロウハ、ハンセイシナケレバナラナイ」

「ああ。全く…って何だこのバイク!? 喋ったぞツ!」

「え…もしかして、ホッパーちゃん?」

突然の乱入者に慌てふためく2人を見ながら、メデューサは膝の上に光太郎の頭部を乗せて優しく微笑んでいた。

「お疲れ様です。今は、ゆっくりと休んでください」

メデューサに頬を撫でられる光太郎の寝顔は、先ほどの激闘を繰り広げた戦士と同じ人物とは思えないほど穏やかなものであった。

第5話

間桐光太郎が太陽の力により進化した新たな姿。その名は仮面ライダーBLACK RX。

クライシス帝国は予想外のパワーアップを警戒し戦力を結集するために一時退散するが光太郎は同じくパワーアップを果たしたバトルホッパー：『アクロバッター』と共に追跡を開始する。

一方、間桐家の地中に潜んでいた怪人の素体が桜へと襲い掛かるがメデューサがこれを撃退。その時、メデューサは素体を粉碎した自身自身の力に驚きを隠せずに行った。

採掘場に結集し、光太郎を亡き者にしようとする襲い掛かる怪人軍団であつたが光太郎は圧倒的な力で次々と倒していく。

そして正体を現した怪魔ロボット キューブリカンは怪人達の犠牲も訪わない攻撃を仕掛けるが光太郎は卑劣な敵に対し新たな必殺技『リボルクラッシュ』を炸裂させる。

ついにキューブリカンを倒すのであつた。

その戦いから数日が経過し――

「ハアッ!!……………駄目か」

光太郎は自室でRXとなつた時と同様に右手を天井に翳し、左手を腹部に添えた構えから流れるような動作を何度も繰り返していた。だが、一向に変わる様子はない。あの時はこの構えを取った途端に力が爆発的に高まつたが、その兆しも見られない。

顎に手を添えて考える光太郎はその要因を自分なりに探っているが……

「うくん。やっぱり掛け声も必要なのかな」

すう……と空気を吸い、腹に力を込めて叫ぼうと気合を込める!

「太陽よ……俺にちか——」

「おい……」

「らを——って、慎二君、どうしたの？」

妙に疲れを感じさせる声に反応した光太郎は動作を中断し、額に手を当て眉間に皺を寄せる慎二に尋ねる。ヒクヒクと眉毛を動かすあの顔は明らかに不機嫌である証。もしや大声を出そうとしたことで勉強の邪魔をしたのだろうかと危惧する光太郎だったが……

「別に、大声出そうが訓練しようが構いやしないよ。いざとなれば地下蔵にお前をぶち込めばいい……」

「何気に物騒な発案だね、それ」

「そんな事はどうでもいい……いや、RXについては分からない部分も多いから研究しようとする熱意は買ってやるよ。けどな……」

「自室とはいえBLACK^{その}で練習するってのもどうかと思うんだけど……」

「えくそうかなく」

（うぜえ……）

と、普段なら頼りになる黒き戦士が目の前で首を傾げ間拔けな声を上げる姿を見て慎二はどう罵倒してやろうかと思いついていた。

これが世界を救い、今も新たな侵略者に対して悠然と立ち上がった戦士の素の姿であるというのだから始末に負えない。深くため息をつく義弟の心中を察することなく光太郎は変身を解き、窓から夜空を見上げていた。

「…今日は、満月なんだね」

「話の切り替えが急過ぎだろ。どんだけマイペースなん…」

おちやらけた態度から急変し大人しくなった光太郎の背中を見た慎二は怒鳴るのを止めた。顔など見なくても今義兄が月を見てどのような表情をしているかなんて、手に取るようにわかる。

(気にしない方が、おかしいか)

光太郎の言うように、今夜は雲一つない空には満月が街を静かに照らし、冷たくも夜道の道標となる優しい輝きは、光太郎に嫌でも『彼』を連想させてしまう。

ゴルゴムとの戦いで光太郎は自分と相對する存在。もう一人の世紀王『シャドームーン』…光太郎の親友だった『秋月信彦』と死闘を繰り広げた。互いの持つキングストーンを奪い合い、新たな創世王となる為に…

だが、その戦いそのものが創世王の『意思』が新たな肉体を得る為に仕組まれた戦いと知った際に2人は共闘。シャドームーンの助力により創世王を倒すことに成功する。

全ての因縁に終止符が打たれたと思われたが、傷だらけのシャドームーンはそれでも光太郎の決着を望む。

光太郎は敵対する相手を世紀王シャドームーン以前に幼い時を共に過ごした秋月信彦である彼に対し拳を上げることが出来ず戦意を喪失しかけたが、光太郎を仮面ライダーとして立ち直らせたのも、また彼であった。

涙を流しながらも全ての力を絞り出し、技を放った光太郎はシャドームーンに勝利し、最期に彼が自分の名をはっきりと呼んだと思いつき振り返った時には、落石の中に彼の姿が消えていたのであった。

「……ごめん。なんだかしんみりさせちゃったね」

「無理に笑うなよ気持ち悪い」

振り返り、黙って見守ってくれた義弟が言った通りに作り笑いを浮かべる光太郎は、慎二のように自分へはつきりと正直な意見を言ってくれる事に感謝していた。そうでなければ、もうそんな表情しか浮かべなくなっていたかも知れない。

「落ち込みたい時は好きにだけ落ち込めよ。そんでいつも見たいにバカみたいに笑え。じゃないと……調子が狂う」

「慎二君……」

顔を背けて、彼なりに自分を励ましてくれる慎二へ光太郎は先程とは違う、本当の笑顔となつて礼を述べた。

「ありがとう」

「ふん……」

『兄さんたちー！ご飯冷めちやいますよー!!』

「あー……忘れてた。夕飯出来上がったから呼びに来たんだった」

「それを早く言つてよ！もうお腹空いちやつて……」

桜の呼び声に応じて部屋を後にしていく慎二と光太郎。いつもの会話。いつもの日常。

『人間』を失ってしまった自分に取っては過ぎたものかもしれないと考える光太郎だったが、やはり思つてしまう。

もし、今自分の生活の中に信彦が居てくれたのなら、と。

だが光太郎は知らない。

彼が……シャドームーンが生きている事を。

そして光太郎と同じく、新たな戦いに直面している事を。

月影信彦

それが彼：世紀王シャドームーンが人間の姿でいる際に名乗る名前だ。

シャドームーン：信彦は調整設備が残されていたゴルゴムの拠点で自身の完全な修理を終えた後、拠点を破壊。あてのない旅を続けていた。

資金に関してはゴルゴムの隠し財産を彼の『同居人』が表に出ている際に一部持ち去っており、それを資本金とした株投資をすることで生活には困ることなく：どころか100年先も余裕のある金額を手収めてしまっている。

いつそラスベガスに行こうぜと下品に笑う『同居人』の意見を無視して旅を続けていた信彦はある町へと辿りつく。

日によっては1日と待たずに次の町へと流れていた信彦達だが、彼等はその町へ滞在し1ヶ月以上が経過しようとしていた。

理由は、彼が待ち合わせている人物達と大きく関係している。

その日は休日だからだろう。午前中だと言うのに普段と比べ人通りが多く、特に子供連れが目立つ。行き交う人々が見せる様々な表情を横目で見ながら進む信彦の様子を同居人はやれやれと肩を竦ませる。

(やめてくれよ。唯でさえ淀んだ目してるアンタが挙動不審に辺りへガン飛ばしてたら通報されちまうぞ?)

「安心しろ、その時は貴様も道連れだ」

(うわあーい。うーれしーなー：ま、あんたの気持ちも分からんでもないよ。数か月前はゴルゴム騒ぎ、そんでつい先日はあんな事があつ

たつてのに、笑ってられるとは呑気なもんだからな)

「……………」

信彦の無言は、同居人が述べた事の肯定だった。しかし、自分とすれ違っていく人々を見て信彦は呆れはするものの、愚かだとは思わない。

かつて襲った恐怖に怯える事なく今という日を生きているという一つの強さではないかと信彦は考える。

人類にその強さを与えた男：自分の宿敵が願い、実現させた世界なのだから。

だから信彦はそんな世界を見て回ると決めていた。

死に損なった自分にはちょうどいい役回りであると自嘲する信彦であったが、思いもよらない出会い：信彦を発見して声を掛けてくる少年との出会いによって今も同じ町に留まっていた。

「あ、月影さん！こっちです」

自分が名乗っている名を呼ぶ少年はあどけない笑みを信彦に向けて駆け寄ってくる。やや大きめの眼鏡をかけ、自分の正体を知りながらも未だに怖気着くことのない少年に対し信彦は淡々と声をかける。

「…待たせたか？」

「いえ、俺も今来たばかりで…でも、アイツは先に店で待っているみたいですよ」

苦笑交じりで待ち合わせ場所の前にある店を指さす少年は眼鏡の位置を整えながら行きましようと先導して足を進めていき、信彦も続いて扉を潜る。カラン…と鈴の音が鳴ると同時に開かれた扉の中は落ち着いた雰囲気洋風の作り。店内の奥には少年の言う『アイツ』とされる人物へと目を向ける。

店の一面に設けられたテーブルに座る一人の女性。白い長そでの

ツの肩を持つのツ!？」

立ち上がり、腰に手を当てて指摘してくる女性に小声で少年は注意を促すが、どうやら矛先はあちら側になってしまったようだ。このまま放っておいても構わないが、話が進まないかと判断した信彦はテーブル上に備えてあった灰皿をコンコンと指で突く。信彦の行動に察しが付いた少年は改めて自分達のテーブルを見回すと、誰もが入店時に必ず気かされる問いかけを女性に尋ねた。

「なあ…この店に入った時、ちゃんと禁煙席って指定したのか？」

「え？私はここに座りたいからとにかくここって言ったけど？」

「…はあ〜〜」

「え？なにになに？何がおかしいの？」

額を押さええて深くため息をつく少年が余程不思議だったのか、女性は打って変わり取り乱し、少年が額を押さえつつも反対の手で指差す方へと顔を向ける。

指が向けられた先は、信彦達の座る席が、『喫煙席』のエリアにあると現す看板であった。

「あ……………」

「よーやく理解したかバカ女…」

「うー…」

少年に諭されて静かに席へ戻った女性は「あー」「うー」など親に怒られて上手く言葉が話せない子供のようになりおらしくなっている。ようやく静かになった所を境に信彦は手に取ったタバコを箱へと戻し、備え付けのメニュー表を手取る。

「あの…いいんですか？」

「構わん。嫌な顔をされてまで吸うものでもあるまい」

「ほら、今回はお前に非があるんだからちゃんと謝っとけ」

遠慮がちに尋ねる少年に信彦はメニューから目を離さずに答えるが女性は少年が信彦を庇っていると思いきんだ為か頬を膨らませて再び顔を背けてしまう。

「ふんだツ！いいじゃない、ソイツは結局吸わないことにしたんだからー！」

「あのなあ。いい加減にしろよ」

「な、何よ……」

強めの口調となった少年を横目で見る女性は若干だがたじろいでいる。迫力に押されたというわけでもないだろうが、どうやら少年に対しては信彦程強気にはなれないらしい。

「…今こうしてお前と一緒にいられるのも、身体が安定しているのも、月影さんの助けがあつてこそだろう？だから、そういう風に邪険にして欲しくない」

「……………」

少年の説得に無言で頷いた女性はゆっくりと信彦の方へと顔を向け始めた。メニューを吟味しながらも会話は耳に入れていた信彦はそれに合わせ顔を上げ、少年はこの成り行きを不安になりながらも見守る。数十秒か数分か。時間をとても長く感じさせながら女性はやうやく信彦と目を合わせると…

「ベーツ！」

信彦に向かって目をつむり小さな口からかわいらしい舌を覗かせ、謝ってやるものかと行動で示したのであった。

流石に我慢出来なくなった少年は女性の脳天に手刀を叩き込む。無論加減はしているだろうが、女性は打たれた頭を押さえ、涙ぐみながら抗議を開始する。

「いったーイツ!?何するのよお！やっぱりコイツの味方なんだッ！こ

の浮気者ツ!!」

「なっ?! 誤解を招くような事を言うなバカ女ツ!!」

ギヤーギヤーと再開された痴話喧嘩を余所に信彦は再びメニューへと目を向けていると頭の中では同居人の爆笑が響き渡っている。そろそろ黙らせるために同居人が苦手とするブラックコーヒーでも注文してやろうかと思いつきながらも、目の前で口論を続けている男が再びこうして悪ふざけが出来るなど『あの時』は夢にも思わなかっただろう。

本来ならば出会うどころか、お互いに認識できるはずがない者同士。しかし、出合い…出会ってしまったという言い分の方が正しいかと考えながら信彦は、女性と初めて顔を合わせた際に口から出た冷たい一言を思い出していた。

『アナタ…何?』

まるで親の仇でも見るような冷え切った目で、彼女は信彦へそう告げていた。

それが今では…今でもかなり嫌われているようだが最初よりはましになっているだろう。それも、この少年という緩和剤がいてくれたからだろう。そうでなければ、信彦と女性は確実に殺し合いを始めていたはずだ。そして少年は女性にとってこれまでにない大きな存在

だ。

この町で起きた血塗られた事件を通し、2人は決して相容れない存在同士だと理解した上で今もムキになって言い争い、そして愛し合っている。どのような未来を迎えようとも、『今』を選択した少年と女性の姿は信彦が良く知る2人と重なっていく。

(気になるなら会いに行けってあの頃から言ってるだろ。まったく手に負えない捻くれ者：お願いしますコーヒーに塩なんて洒落になりませんすいませんでした)

同居者を黙らせた信彦は備え付けのベルを鳴らし、注文を受けに来る店員を待つ。いい加減注文しなければならぬだろうし、他人が現れれば熱くなっている2人も落ち着くだろう。

互いに言い分を譲ろうとしない少年と女性――

対象を殺すことに長け、常に死と隣り合わせで生きていた『遠野志貫』

真祖と呼ばれる吸血鬼の白き姫『アルクエイド・ブリュンスタッド』

信彦はこの2人となぜ行動を共にしているのかは、信彦自身もよく分かっていない。

それも、注文したコーヒーが届く頃には思い出しているかもしれないと、注文を聞きに来るはずの店員を待つことにしたのであった。

そして今回集まった理由。

信彦が滞在する三咲町を震撼させた吸血鬼事件の後始末が予想外の展開となつていると知らされるのは、2人の言い争いが終わった後であった。

第6話

間桐光太郎は草一つ生えない不毛地帯を確かめるように一歩一歩進んでいく。ここはどこなのかと辺りを見回すが建造物らしきものはまるで見当たらず、目の前に広がるのは無限と思える程の砂漠だけ。

なによりも、しっかりと影が出来る程に周囲が明るいというのに、空には太陽の形すら見当たらない。それは空全体を覆っている雲：というより工場などで排気されたガスに近い気体が原因なのだろう。

光太郎は立っている場所は自分の知る世界なのだろうかと考えを巡らせているその後ろでは：

「ちよ、ちよつと待ちなさい！歩くペースが早すぎるわよ！」

そんな叫び声が聞こえる方へと光太郎は顔を向ける。

膝に手をつけて呼吸を荒げ、風に飛ばされてる砂塵によって汚れることがないように黒のローブで身を覆っている神代の魔術師は大汗を流して光太郎をキツと睨む。

「ハア…ハア…女性を置いてズンズン進んでいくなんて心配りがなっていないわね」

「あ、ごめん…俺も混乱してて」
「ふんツ…」

呼吸を整え、光太郎に言いたい放題のメディアの顔色は優れない。後から判明したがここでは空気も悪い。ただでさえ体力のない彼女にとつては辛い場所となっている。

明らかに自分の知る地球とは異なる土地。なぜ、間桐光太郎と葛木メディアがそんな場所へと来てしまったのか。

それは数時間前に遡る。

間桐光太郎は学校帰りの桜と合流し、夕飯の材料を買い出しへと繰り出していった。本日は和食にチャレンジしてみたい、という間桐家シェフの希望もあり、特に反対意見はなく…というより慎二はいつも通りに図書館で遅くまで勉強をし、メデューサは間桐家で洗濯物を取り込んでいたので全て桜任せとなってしまうている。

当然光太郎も特に反対する理由もないため桜の荷物持ちとなり、商店街で真剣な眼差しで材料である野菜を選んでいる義妹を見守っていた。

(戦っている時よりも真剣に見える…)

まあ本来は戦って欲しくもないけれどと考えている光太郎。前回の戦いで善戦してくれたが、キューブリカンや弱っている状態で挑んでくるボスガンのような敵と遭遇した時は無事で済む保証はない…

しかし、そう言ってしまうえば慎二を味方に付けて必ず論破されてしまふだろうなと自分が敗北する姿を想像していると八百屋の店長から大根を受け取った桜が笑顔で駆けてくる。

「兄さん！おじさんがおまけしてくれて…どうしたんですか？」

「いや、なんでもない。次は、魚屋さんだっけ？」

「はい！今日のメインは鰯をですネ…」

料理の話をする桜は本当に楽しそうにしている。衛宮士郎の家に通うようになって料理を覚えてから味付けだけでなく食材にも拘るようになり、こうして買い物へ同行すると店員への質問や交渉、如何に新鮮でうま味があるかを見定めるなど普段見られない姿に感心し

てしまう。

そして買い物も終盤。桜は魚屋の前で立ち止まり、行ってきますねと笑顔で光太郎へ伝えた直後、彼女の目は職人の目と変貌してしま

う。いらつしやいと大声で挨拶する店員へ軽く会釈すると陳列された様々な商品の中からターゲットである鰹を発見。10匹程並んでいるが、ここからが本当の勝負だ。

新鮮な鰹はより目が澄んでおり、エラの部分が鮮やか紅色をしている。どれもが同じタイミングで仕入れたものであるが、僅かな『差』は確実にあり、桜は中でも最もうま味のある鰹を選別。見極めた鰹へと指を指した時、全く同じタイミングで左右から別人の手が伸びたのであった。

「え?」

「む?」

「あら?」

見覚えのある肌が褐色の男性とエルフ耳の女性が桜と同時に声を上げる。見知った2人の登場に驚く光太郎であったが、数ヶ月前まではあの黄金のサーヴァントが我が物顔でこの往來を闊歩していたのだからなら不思議はないかと1人納得していると、魚屋の前で3人は今晚のメインディッシュについての話題に夢中となっていた。

「凜のリクエストだね。鰹の切り身を和えたパスタの予定だよ」

「わあ、美味しそうですね。私は大葉で包んで焼いてみようと思うんです。メデューサ姉さんが最近日本酒がお気に入り見たいですからおつまみにたたきもいかなって」

「ほう。それぞれ食材として鰹を活かしたものだな」

「…わ、私はそうね…あじ…フライとか…」

互いの献立に興味を抱くアーチャーと桜であったが、1人自信無下げに発言するメデア。

彼女は過去に様々なアレなものを作っていたことで鮮度のいい材料を見つけていることが出来るようだが、料理に関してはまだ始めたばかりのようである。以前に彼女が間桐家へメデューサを訪ね、寺に住む

少年が姑の如く自分の作る料理へケチをつけてくると数時間にわたり愚痴っていた光景を光太郎は思い出した。

どうにか名誉を挽回しようとした食材を鰯と選択したが、同じ食材で自分よりも高度な品を仕上げる予定の2人の前でつい見栄を張ってしまい自身のハードルを上げてしまったようだ。

真実を知らない桜はそっちも美味しそうです！と笑顔で反応していたがメディアの表情を見て何となく察しているアーチャーは何も言わない。いや、よく見れば無表情を装いながらも一筋の汗を流している。どうやらメディアの『余計なことを言えば…やるわよ?』と目で語っている事に気付いているようであり、同様の視線が光太郎にも送られている。

(いやなんで?)

完全に火の粉が降りかかっている光太郎はアーチャー同様に冷や汗を流しながら視線を逸らすことしか出来なかった。

そんな中、商店街の人々が次々と立ち止まり、ざわざわと声を立て始めた。光太郎は後で腕を組みながら遠目で騒ぎの中心らしき方を眺めている商店街の面々から聞こえた声に思わず反応してしまう。

「なんだアイツは…? 王様の知り合いか?」

「あく確かに時々金色の鎧着てたしな」

あいつはここで過去に何をやらかしてしまったのだろうかという疑問は置いておき、人々を騒がす原因を目にしようかと光太郎は騒ぎのする方へと目を向けるが激しく後悔することとなった。

多くの視線を浴びながらも特に気にする様子もないソイツは馬へと跨り、こちらへと向かっている。動物の骨を思わせる鎧で身を包み、神話などで登場するミノタウルスのように雄々しくも鋭い角を持つ戦士は片手に槍を握りしめている。

そして光太郎を発見し、槍を向けると鼓膜が破らんとするほどの大声を上げた。

「我こそはクライシス最強の怪魔獣人：風の騎士ガイナギスカンツ!!
間桐光太郎よ、正々堂々と戦えいッ!!!」

クライス要塞

「さあ、これからが見物だ」

ボスガンは光太郎を抹殺すべく放った刺客：ボスガンが率いる怪魔獣人大隊に属するガイナギスカンが彼を追い詰めるであろう光景を思い浮かべるボスガンはクククと笑いを上げながら隣で溜息をつくマリバロンへと指示を送る。

「マリバロン。例の準備は出来ているであろうな？」

「抜かりはないわ。後はそっちの怪魔獣人がしくじらなければ完璧ね」

「フンッ！ガテゾーンのロボット共などとは違うことをはっきりさせてやろうではないか！」

ボスガンの力説に耳を貸さず、マリバロンは壁を背にしているガテゾーンへと目を向けると仕方ないから付き合っつてやれと言わんばかりワザとらしく肩を竦めている。

マリバロンは無言でボスガンの言う『準備』を進めるのであった。

(まづいな…)

まさか白昼堂々、商店街の中で戦いを挑んで来るとは思いもしなかった光太郎は焦っていた。大勢の人々を前にして名指しで呼ばれたこともそうだが敵は見るからに手強いはず。

ならばRXとなる事が最良の手段だが光太郎は確実にあの姿へと変わる術を見つけていない。そんなことよりも光太郎は商店街を戦場へ変えるわけにはいかないため、敵を引き離すことを優先させなければと考えた途端、光太郎達を覆う空気が変わる。

注意深く警戒しなければ分からないほどの小さな違和感。ガイナギスカンを警戒しつつ違和感の正体を探ろうとした光太郎だが、意外にも回答は直ぐに現れた。

「…商店街の皆さんが…」

桜は驚いた。突如現れた甲冑を纏った見知らぬ人物が馬上から商店街のヒーローの友人である光太郎へ決闘を申し込んだという面白場面に興味を抱き次々と集まっていたのだが今はまるで興味を無くしたかのよう去つていき、次々と店閉まいまで始めているのだ。

騒ぎを聞いた人間達全てに暗示をかけ、尚且つ人避けの結界を同時に展開できる者など、この場に1人しかいない。

「ふう…まさか商店街に敷いていた結界が役に立つ日が来るなんてね」

メディアは掲げていた手を下げると髪をかき分け、自分の魔術が完璧に発動したことに安堵する。

聖杯戦争時、メディアは冬木の至る場所でも自分が有利に事を進めるように人の目…特に魔術師すら看破がされないように魔法陣を刻んでいた。この商店街も例外ではなく先ほど行使した暗示もメディア自身の魔力に土地を流れる地脈の力を上乘せしたことで成功したことだ。

そのような魔術を詠唱なしに行ったメディアへ桜は羨望の眼差しを向ける。

「すごい…あんなに人で賑わってた大通りが誰もいない」

「あら、修行次第では貴女にだって不可能ではないわよ?」

(地脈の無断活用…凜には言えんな…)

謙遜することなく桜の称賛を受け取ったメデイアは宗一郎以外にはめつたに向けることのない笑顔を見せて、桜の持つ可能性を褒め称える一方、非常事態であるため家で実験をしているであろうマスターへの報告をどうするかを悩むアーチャーであった。

「なるほど…戦いに他の者を巻き込まぬために名乗り出なかつたか…臆病風に吹かれたのかと思つたぞ！」

「…ここでもなければいつでも名乗り出ていたよ」

この商店街では光太郎の顔見知りどころか親友だつて働いている。ゴルゴムの戦いで離れていった人々が戻り、ようやく以前のような活気溢れる場所へと返り咲いた商店街で戦う訳にはいかない。

「フン。安心するがいい。貴様を見つければ元々場所を変える予定だつたのだ。こうしてなツ!!」

「ツ!!なんだ、突然風がツ…!!」

ガイナギスカンが手を向けたと同時に光太郎に向けて突風が吹き荒れる。腕で顔を庇う光太郎だが風の力は段々と強まっていき、少しずつではあるが押され始めている。

(こいつ…風を操ることができるのかツ!!?こうなれば…)

光太郎は足を踏みとどまりながら腹部にキングストーンを宿したベルト『エナジーリアクター』を出現させる。

「変ツ身ツ!!」

ベルトの中央から放たれた光に身を包まれ、光太郎はバツタ怪人へ、そして漆黒の戦士仮面ライダーBLACKへと変身。

「ほう、それが仮面ライダーか。だが、今の姿で私の風に耐えきれるかツ?」

「く、さらに力が強まっていくツ!?!」

変身してもなお敵の風に抗うことが出来ない光太郎は足を舗装されたアスファルトを叩き付け、足首を埋めたことで強引に身体を固定させる。こうなれば根競べだと覚悟をする光太郎だったが…

「兄さんツ!メデイアさんが——」

「なツ!?!」

アーチャーと共に電柱へ掴まっていた桜の声を聞いて光太郎は上空へと見上げる。

「は、離しなさいッ！」

何時の間にか出現したクライシスの配下となったタカ怪人に囚われしまったメディアは振りほどこうとするが激しく吹く風の中で目が開けられず、魔術を使おうにも集中することが出来ずにいた。

「くそ、急いで足を抜かなければ…」

「ならば手伝ってやろうではないか！」

まだジャンプすれば届く距離であるため、急ぎ埋めた足を路面から引き抜こうとした光太郎へさらに強くなった風が叩き付けられる。

「受けよッ！風魔ビームハリケンツ!!」

ガイナギスカンの手から放たれた竜巻によって光太郎の足元のアスファルトは粉々になり、光太郎自身も天高く飛ばされてしまう。

「な、なんて威力なんだ…このままでは身体がバラバラになってしまう。けど、その前に…！」

空へ飛ばされたことでタカ怪人へと急接近できた光太郎はベルトの上で両拳を重ね、ベルトから赤い光を発光させる。ベルトから放たれた光を右拳へと宿し、メディアを抱えたまま上昇するタカ怪人の頭部へと拳を叩き込む。

「ライダーッ！パンチッ!!」

「ギャアアアアアッ!!」

光太郎のパンチによりヘルメットを打ち貫かれ、断末魔の声を上げたタカ怪人はメディアを手放した直後に爆発四散。光太郎は爆発の余波を受けて気を失ったメディアを抱きかかえて着地に備えようとしたが、下へ落下するどころか上昇を続けていたことに驚きを隠せない。

「な、なんだあれは…!?!」

光太郎とメディアが飛んでいくその先で空間がねじ曲がり、黒い穴が出現。身動きが取れない光太郎とメディアはそのまま穴の中へと吸い込まれてしまったのであった。

そして光太郎とメディアは気が付けば砂漠のど真ん中で倒れており、話は冒頭へと戻る。

(…あの穴を潜ったことまでここまで飛ばされたのは間違いないはずなんだと、ここはどこなんだ?)

「悩むようなら、いつその事尋ねてみたらどう?」

「え…?」

メディアが指差す方向から悠然と歩んでくるガイナギスカン。思わず構えを取る光太郎と魔術を発動しようとするメディアであったがガイナギスカンは攻撃を仕掛けてくる様子はない。

「…なんの真似だ?」

「フツ…まずは感想を聞こうと思ってな。どうだ、怪魔界へと来た気分は?」

「ッ!」

怪魔界。

そこは光太郎達の住む地球を侵略するために現れたクライシス帝国の本来の世界。光太郎達は地球から敵が住まう世界へと入り込んでしまったことで改めて周囲を見渡す。

厚い雲で覆われた日の光が届かない世界…クライシス帝国はこの世界を捨て去り、地球へと移住するつもりで入り込んだのであろうかと考える矢先に、ガイナギスカンはもう一つの目的を告げた。

「そして間桐光太郎…お前を完全に倒す為の作戦だ」

「何ッ!」

「この怪魔界は1年で1ヶ月しか日の光が大地を照らすことはない…」

「…?」

自分を倒す事と、怪魔界に太陽の光が届く日が極わずかであること

が関係あるのかと考える光太郎は黙ってガイナギスカンの言葉を待つ。

「貴様がRXとなるために必要な『太陽の光』は今差すことはない。つまり、貴様はこの怪魔界ではRXへと姿を変えることは出来んのだ!!」

光太郎に衝撃が走る。

RXへと変化するには太陽の光が必要だったことにこの時、光太郎は初めて知ったのだから。それも丁寧に教えてくれなければ、今後も敵のみがその情報を掴んだままとなっていただろう。

(どうりで夜に練習しても変わらないはずだ……！)

考えてみれば初めてRXとなった時はちょうど日が昇っていたし、練習中も自分で『太陽よ——』と重要なワードを口走っていた事を思い出した光太郎は砂漠の熱とは関係なく多量の汗を流し始めた。光太郎の様子を見て察しがついたメディアはガイナギスカンへ聞こえない程度に声を上げる。

「あなた……まさか」

「……………」

呆れとも軽蔑とも取れるメディアの冷たい声に光太郎は返事をすることなく、汗を拭うと平静を装いながら構えを取る。

「……だったら、RXなしでも戦うだけだ」

再度BLACKへと変身するために力を込める。
だが、ガイナギスカンは踵を返して離れていく。

「ボスガン様の命令は貴様をここに連れてきて倒すこと…RXへと変身させるなどは言っていない」

ガイナギスカンの言う事が理解できない光太郎は未だ構えを解かず、背を向けたままである敵の様子を伺う。

「あと数時間もすれば一瞬ではあるがこの怪魔界へ太陽の光が差す。その際にRXとなるがいい。貴様との決着はその時だ」

「なぜだ…せつかくの機会を…」

「俺は風の騎士…敵である貴様が全力を出せない状態で倒すなど、私の誇りに反する」

顔だけをこちらへと向けるガイナギスカンの言葉を聞き、敵の送った塩を受け取った光太郎は拳を下げるとゆっくりと頷く。

「日の光が差す頃にもう一度貴様達の前に現れよう。その時まで首を洗って待っているのだな。もつとも…」

振り返り再び歩き始めたガイナギスカンが話す中、光太郎達の足元が揺れ始め、徐々に強い振動へと変わっていく。

「それまでに生き延びられたの話だな」

砂を突き破って現れたのは、数十匹の蠍。しかもどれもこれもが2足歩行で、人間並みの大きさを誇っていた。

「そいつらは突然変異した物だ。せいぜい生き延びよ」

と、光太郎達と同じく現れた蠍を槍で次々とあしらいながらガイナギスカンは今度こそ離れていくのであった。

「くっ——！宗一郎様のいない世界なんかで終わって堪るもんですかッ！」

「同感！よし、いくぞッ!!」

叫ぶと同時に攻撃用の魔法陣を次々と出現させるメディアになり、光太郎は右手を前方へ突出し、左手を腰に添えた構えから重心を

右半身に置き、両手を大きく右側へと振るうと右頬の前で両拳を力強く握りしめる。

ギリギリと音が聞こえる程込めた力を解放するような勢いで右腕を左下へ突出し、素早く右腰に添えると入替えるように伸ばした左腕を右上へ突き出す。

「変っ——」

伸ばした左腕で扇を描くように、ゆっくりと右半身から左半身へと旋回し——

「——身ッ!!」

両腕を同時に右側へと突き出した。

光太郎の腹部にキングストーンを宿した銀色のベルト『エナジーリアクター』が出現し、光太郎を眩い光で包んでいく。

その閃光は光太郎の遺伝子を組み換え、バッタ怪人へと姿を変貌させる。

だがそれも一瞬。

エナジーリアクターから流れ続ける光はバッタ怪人を強化皮膚『リプラスフォース』で包み込み、黒い戦士へと姿を変えた。

左胸に走るエンブレム。触覚を思わせる一对のアンテナ。真紅の複眼。そして黒いボディ——

「仮面ライダー…ブラアックツ!!」

仮面ライダーBLACKへ変身を遂げた光太郎とメディアは囲うように現れた蠍の群れと対峙するのであった。

第7話

間桐光太郎達の前に突如として姿を現したクライシス帝国の刺客、怪魔獣人ガイナギスカン。

メディアの魔術により商店街の人々を巻き込むことを免れた光太郎であったがガイナギスカンの放った攻撃によってメディアと共にクライシス帝国が支配する『怪魔界』へと飛ばされてしまう。

広大な砂漠の中で再度対峙したガイナギスカンから怪魔界では太陽の光は僅かな時間しか降り注ぐことは無く、光太郎がRXへと変身する好機は限られていると聞かされ、焦りを隠せない光太郎。

しかしガイナギスカンはRXとなった光太郎との決着を望み、その場を去る。

その直後、砂漠の中から無数の怪人…突然変異によって人型となった蠍の怪物が光太郎達に襲い始めた。

光太郎は仮面ライダーBLACKへと変身。メディアと共に蠍達との戦闘に突入したのであった。

『なんのつもりだガイナギスカン…なぜRXとなる前に間桐光太郎を倒さなかった?』

モニターに映るクライシス帝国4大隊長の1人、ボスガンは通信器越しとはいえ跪くガイナギスカンへ静かに尋ねる。平静を保っている様子だが、内心怒りに駆られているであろう上官に対してガイナギスカンはただ、ありのままを告げる。

「恐れながらボスガン様。全力を出せぬ相手を下したところで勝利とは言えません」

『愚か者めッ！貴様の都合など知った事ではない…我らクライシスに仇なすRXを一刻も早く始末せねばならんだぞッ!!』

「奴を…RXとなった間桐光太郎を倒せば結果は同じでございます」

『……………』

「……………」

沈黙が続く中、ボスガンは深く息をつくとき先程の激高が嘘のように声を落とし、ガйнаギスカンへと告げた。

『…よかろう。では見事打ち取って見せよ。失敗は…許さんぞ』

「ハッ！風の騎士の名に懸け、必ず…」

「……………」

通信を終えたボスガンは近くに控えていたクライシス帝国の雑兵『チャップ』へと顔を向け、ある指令を下した。

「…ッ!」

「よいな、確実に行うのだぞ？もし、しくじった場合は…」

ボスガンの命令に驚くチャップへボスガンは腰に下げた剣の柄を手に取り、ワザとらしく鏢元を鳴らす。先の言葉を聞くまでもなく理解したチャップは慌てふためきながらもその場を後にした。通信室で1人だけとなったボスガンはモニターへと振り返ると邪悪な笑みを浮かべた。

「そうだ…役に立つてもらおうぞ…私のためにもな…」

笑いを押し殺すボスガン。その姿を首だけとなって浮遊していたガテゾーンに見られていたとは知らずに…

一方、怪魔界の砂漠で戦闘を続けていたメディアは襲いかかる蠍の群れを攻撃魔術で次々と焼き払っていく。

二足歩行で両手には巨大なハサミ。背中には蠍の象徴である毒針を備えた尾を持った怪魔界の砂漠に出没する怪物。

力はそれ程強大ではないが数が多すぎる。砂漠を長距離移動した為に体力を低下していたこともあるが、魔術師である彼女にとって最も危惧していた事が起こり始めた。

(魔力残量が…もう)

サーヴァントから人間へと転生した際にかつての力は半分も使え

ない状態となっていたメディアには体内で生成する魔力量も聖杯戦争時と比べものにならないほど減少している。さらに異世界である故の弊害のためなのか、自然界の魔力であるマナへ干渉が出来ず、行使することすらできずにいる。

(こんなことなら保存してあった魔力を携帯しておけばよかつたわね…)

苦笑しながらも続いて攻撃魔術を練るために魔法陣を出現させるが、もはや呪文の詠唱なしで出現させることが出来ずメディア本人も気が付かないうちに額は汗ばみ、呼吸も荒くなっている。

そのような状態で背後に迫った敵に反応できたのは偶然としか思えない。

「アウツ!？」

「メディアアツ!？」

蠍が尾をメディアに向けて振り下ろすが身体を強引に左へ逸らすことで回避できた。だが完全とはいかず毒針の先端がメディアの腕を掠めてしまう。腕を押さえて蹲るメディアの姿を見た光太郎は自分に接近した蠍の頭を踏み台にして跳躍。倒れたメディアの隣へ着地し、介抱するが先ほどよりも呼吸が荒くなっており、傷ついた腕も変色を始めている。

「クツ!? どうすれば…!？」

自分に治療の知識はなく、毒に関するエキスパートであるメディア本人が苦しんでいる今では方法がない。さらにジリジリと近付く無数の蠍：万事休すと考えた光太郎の頭上で突然何かが破裂した音が響いた。

「何だッ!？」

膨らんだ風船に針を突き刺して割れた程度の音。聞こえた上空を思わず見上げた光太郎の目に映ったのは、砂漠の砂とは違う別の粉塵。粉塵がゆつくりと光太郎達へと降り注ぐと、囲んでいた蠍達が突如悲鳴を上げて地面へと一斉に潜り始めたではないか。

ものの数秒もせず、その場にいる者は呆気にと取られた光太郎と苦悶の表情であるメディアだけとなっていた。

「この粉のおかげなのか…？」

自分の肩に付着している粉を手を取ってみるが触れても匂いによつて気分を害するようなことはない。あの蠍だけが避ける成分でできているのだろうか？

「彼方が、これを…」

「…気付かれるとは、さすがですな」

光太郎は振り返ることなく自分の背後に立つ人物へと問いかけた。尋ねられた本人はあっさりとは認め、穏やかさを秘めた声で答えると顔を覆っていたマスクを外す。

「…私はワールド。その女性はまだ助かります。私の隠れ家で治療をしましょう」

肩が隠れるまで伸ばされてた白髪と顎と口元を覆う髭。怪魔界に住む人間特有のものなのか、額から虫のような触覚を生やしている。ワールドと名乗る老人に先導された光太郎は毒を受けたメディアを背負い、彼の言う隠れ家へと到着した。

光太郎達が戦った場所から数百メートル程先にあった岩石地帯。辺りを見渡す光太郎を余所にワールドは手近にあった岩石の突起した部分を左右へ数度、ダイヤルのように回すとその先にあった3メートルはあろう岩石が2つに割れ、左右へスライドする。岩の間には地下へと続く階段となっており、光太郎はワールドに続き、警戒しながらも後へと続いた。

「…どうだ？」

「ええ…大分楽になったわ。後は手持ちの薬草で体調を整えるから、安心なさい」

「そうか…」

ベットに横たわり、額に手首を当てるメディアの声は弱々しくも普段通りだ。光太郎は音を立てないようにカーテンを閉め、まっていた

ワールドと向き合うように座る。

ワールドの隠れ家は地下数十メートルにあり、室内は積まれた大量の資料とコンピューター、使い古された武器が床に散乱している。そしてテーブルに陳列された様々な薬剤。これは全て砂漠に出没する蠍対策に調合されたらしく、蠍達が嫌がる臭気の粉や解毒剤も全てワールドによって開発されたものだ。

「…あとわずかばかり早く作れたのなら、犠牲者を減らすことができました」

「では、貴方は一人で…」

光太郎の声に無言で頷くワールド。自分の向かいに座る老人の奥には一人で使うには広い空間があった。そこには、かつてワールドの仲間だった者達が使っていた一室のだろう。

「…聞かせて下さい。なぜ、異邦人である俺達を助けただけでなく、匿ってくれたのですか?」

「彼方達ならばクライシス帝国を滅ぼしてくれる。そう、思えたのです」

「クライシスを…滅ぼす?」

思わず聞き返した光太郎にワールドは深く頷いた。ワールドは机の上に置かれてた写真立てを手に取り、光太郎へと差し出す。写真はどこかの風景を撮影したのだろう。青空の下には大地に茂る地平線の彼方まで続くであろう森林や花々、今にもせせらぎが聞こえそうな美しい川が映し出されていた。

「それが、かつての怪魔界の姿です」

「そんな…でもさつきは」

「驚くのも無理はありません。全ては…クライシス皇帝による政略が始まりでした」

ワールドが鎮痛な面持ちで告げた事実にも光太郎は真つ先に自分やメディアが目にした砂漠の光景が浮かぶ。余りにもかけ離れた2つの情景に混乱する光太郎にワールドは説明を続けた。

かつての怪魔界は豊かな自然と人々が共存する素晴らしき世界であった。しかし、クライシス皇帝が突如、軍備を強化するという政策

を立てたことで全てが狂い始める。

怪魔界統一という名のもとに人々を次々と捕え奴隷とし、逆らった者は容赦なく処刑されていった。

そして軍備強化のため、基地を拡大するために無差別に行われた伐採や兵器開発による産業が自然に大きく負荷をかけた事によって発生した環境破壊。その過程で排気ガスが大量に空へと上がり、ついには太陽さえ見えなくなってしまう。

クライシスはもう限界を迎えつつある怪魔界を捨て、かつての怪魔界と環境が類似している異世界の地球を新たな国とする為に進軍の準備を開始。その為に更に人々は捕えられしまい、戦士の素質を持つ者は改造、それ以外の者は『破棄』されてしまったのだ。

このままでは怪魔界は滅びの道を歩む一方であるとワールド達は決起し、レジスタンスを結成するがその情報を既に捉えていたクライシスの部隊に奇襲を受け、ワールドを残し全滅。もうクライシスへ逆らおうとする者は誰一人としていなくなっていた。

「なんて…酷い事を…」

光太郎は固く拳を握りしめ、クライシスに対する怒りを露わにする。光太郎の姿を見たワールドは決意し、彼へ自らの悲願を申し出た。

「異界出身である彼方達を頼るのは筋違いということには十分に分かっているのだが、もう我らには他に手は残されていない。どうが、どうかクライシス帝国を滅ぼし、この怪魔界に平和を——」

「そこのお人好しはともかく、私は遠慮するわ」

「メデイア。もう大丈夫なのか？」

カーテンを開いたメデイアの顔色は毒を受ける前の状態に戻っている。髪を掻き分けて光太郎達の前に移動したメデイアは畳んだシートをワールドの前に置き、出口の方へと向かう。

「解毒剤を提供して頂いたことには感謝します。けど、この世界の為に働くなんて：彼方達に上手く使われるなんて、私は御免よ」

振り向きざまにワールドを睨むように言い放ったメディアはツカツカと音を立てて部屋を後にする。

「：すみません。ちよつと虫の居所が悪かったようで：」

「いえ、滅相もない。彼女の言う通り、本来ならばこれは我ら怪魔界の問題。彼方達を利用すると捉えられても仕方がない」

不機嫌であるメディアを庇う光太郎だったが、ワールドは不快に思うことは無く逆に彼女の意見に納得してしまう。この世界に現れたのは敵の作戦によるものだったが、ワールドとの出会いは全くの偶然と言っている。ワールドにとっては藁にもすがる思いで過ごす日々の中でクライシスが罫を仕掛けてまで追い詰めようとする相手：光太郎の存在は大きな希望となっていた。

だが、メディアから見れば違う見解だった。この世界は自分達の暮らす場所ではない。振りかかる火の粉は払うことは厭わないが、別の世界まで救うことなど自分の範疇ではないというのが彼女の言い分なのだろう。

それに、この世界に来て上手く魔術を行使出来なかったイラつきも重なり、彼女は過去と重ねてしまったのかも知れないと光太郎は考える。

まだ彼女が疑いを知らない少女だった頃。様々な謀略に巻き込まれた結果、帰る場所を失ったメディアは激情に駆られ数々の悲劇を起こして『裏切りの魔女』という烙印まで押されてしまった。

故にメディアは『誰かの都合』に巻き込まれることを極端に嫌悪しているのだろう。聖杯戦争を経て最愛の人と暮らしを始めた事で落ち着き始めたと思っただが、やはり過去は拭い去れない。

「そして、私も平和などと言いながらも、貴方達を利用して叶えようとしていただけかもしれません。息子の仇を」

「息子、ですか？」

「はい：かつてはこの一帯を守護する国に仕える戦士だったので

クライシスの暴挙に耐えきれず反旗を翻した結果…」

その先は聞くまでもないだろう。ワールドは目を伏せ、手にした写真立ては僅かながら震えている。メディアは拒絶し、恐らくは義弟に尋ねれば同じような言葉と同時に罵声も飛んでくるかもしれない。それでも、間桐光太郎の考えはどこの世界でも同じであった。

「…ワールドさん。俺は…」

突如、足元が大きく揺らぐ。地震などではなく断続的に発生する短い揺れに不安を感じたワールドは手元にあったカーソルを操作し、岩の隙間に仕掛けた監視カメラを起動させた。そこに映っていたのは…

「あれは…ガイナギスカンツ?!」

「どうやら、時間になったようだ」

モニターに映るガイナギスカンは背後に控えたチャップ達に次々と爆弾を地面に向けて放つように指示している。しかしどれもが強力なものではなく、地下に潜んでいる光太郎達を崩落に巻き込もうとする威力には程遠い。これは光太郎を地上へと呼び出す為に行っているのだろうか。

「…話は後ほど。俺は行きます」

「さあ、出てくるがいい間桐光太郎。まもなくこの怪魔界に一瞬日の光が照らされる」

その時こそ敵が全力で力を振るえる時。手にした槍を振り回し、柄を砂漠へと突き立てたガイナギスカンは続けてチャップに爆弾を投下するように指示をする。チャップの1人がまた一つの爆弾に点火し、岩石地帯に向けて放り投げる。弧を描いて岩石の一つに接触する寸前、黒い影によって爆弾は弾き返され、チャップ達の足元に落下、慌てるチャップ達が逃げ出す間もなく砂とチャップ達を吹き飛ばしてしまう。

「…待たせたではないか」

「ガイナギスカン…」

光太郎は仮面ライダーBLACKへと変身し、入った時とは別の入り口から飛び出し、爆弾を弾き飛ばすと風の騎士ガイナギスカンと対峙する。

「なぜだ。お前程の男が卑劣なクライシス帝国に与する？ 奴らはお前達の世界を滅ぼそうとしているのだぞ？」

「…私は騎士。ただ命令に従い戦うのみ」

「…そうか。ならば、俺も覚悟を決めて戦う！」

有利な状況となりながらもRXとなる機会を待ったガイナギスカンならば、非情なクライシスのやり方に疑問を抱くと思っていた。いや、光太郎は一方的に期待していたのかも知れない。

ガイナギスカンの言動を見て、彼を…自分の宿敵と同じ正々堂々と戦う人物と思いついた。ただけかも知れない。

ならば、状況に甘えた考えを振るう為にも戦うしかない。

僅かに自分に降り注ぐ日の光。

ガイナギスカンの言った通りに一瞬だけ顔を見せる太陽に向かい、光太郎は手を伸ばすが――

「グアアッ!!」

「何ッ!？」

悲鳴は光太郎の、驚きはガイナギスカンの声だった。

太陽の力を身に受けようとしたその瞬間、光太郎に向けて降り注ぐ爆撃。砲撃が放たれる方角を見ると、自分が引連れた部隊とは別のチャップ達がバズーカを構え、絶えず砲撃を続けていたのだ。

「あれはなんだ!…どこの部隊だ貴様達ッ!」

『私の派遣した部隊だ…』

「彼方は…ッ!？」

付近のチャップが持つ通信器から聞こえた声の主はボスガンであつた。

「なぜですッ!? RXの討伐は私に一任されているはず…」
『その通りだ。ガイナギスカンよ。貴様は宿敵であるRXを命を懸けて討ち取ったことになるのだ…』

ボスガンの冷たい返答と共に通信器を手にしていたチャップが突然地へと沈む。見れば巨大蠍に尾に胸を貫かれており、他のチャップ達も同様だった。

そして蠍達も頭部が妙に膨れ上がっており、正気を失っているように何度も尾やハサミでこと切れているチャップ達の亡骸を何度も何度も突き刺している。

「まさか、この蠍共は…」

『フフフ…どうやらさらに凶暴化させる実験は成功したようだ。ゲドリアンも使えるではないか』

「これも…貴方の手引きなのか」

『チャップ共に凶暴化を促進させる薬品をその砂漠一帯にばら撒かせたのだ。目に入った者は敵としか認識できない程に強力な一品を、な』

『そのような、変異したとはいえ利用するなど…』

『構うことは無い。あの蠍共は我らの実験により変異したものだ。どう扱おうが、怪魔界の支配者である我らの自由なのだ』

「…ッ!!」

声を震わせて尋ねるガイナギスカンに全てが計画通りに進んだことへ狂喜を隠せないボスガンの声が、砂へと落下した通信器から響く。

「このような…このような事が許されるのかッ! 貴族の誇りはどこへといったのですッ!!」

『ガテゾーンなどと同じ失敗をするわけにもいかないのだッ! 私の為に命をかけるがいい!!』

「お…のれッ!」

通信器を踏みつぶしたガイナギスカンは未だ爆撃を受け続け、膝を

着いてしまった光太郎の元へと向かおうとするが、狙いを定めた蠍に標的とされてしまう。

「どけい、害虫どもがッ!!」

槍を振るい、一度に3匹の蠍を両断することが出来たが、さらに数十匹の蠍がガイナギスカンの前へと立ちはだかる。

そして、僅かに照らしていた日の光は完全に消えてしまった。

「まったく、言わんこつちやないじゃないッ!」

不機嫌だったとは言え、光太郎はともかく他人に当たるような発言をして外で黄昏ていたメディアは爆発の声を聴き付け、攻撃を受け続けている光太郎を発見する。携帯していた非常用の薬草で魔力を強引に補充し、バズーカを持ったチャップへ攻撃魔術をしかけようとするが、足元の砂を掻き分け再び蠍の群れに囲まれてしまう。

「本当にしつこいわね…!」

「伏せて下さいッ!」

「ッ!?!」

破裂音と共に1匹の蠍の頭部が吹き飛ぶ。砂漠へと沈む同族の軀を目にし、身に危険を感じて一瞬警戒した蠍の群れを避け、メディアの隣まで駆けてきたワールドは銃器を構えながら、蠍達を撤退させた薬剤を巻こうとてにしたが……………

「ガッ…!?!」

音一つなることなくワールドの胸に矢が突き刺さった。

「…ッ!?!」

「わ、ワールドさんッ!?!」

口から血を垂らし、倒れるワールドの姿にメディアは目を見開いていることしか出来なかった。

光太郎は駆けつけようにも爆撃はやまず、地中から尾やハサミを突き出してくる蠍の攻撃を避けることが精一杯であった。

「あれは…」

蠍達を一掃したガイナギスカンの目には倒れ、メディアに揺さぶられるワールドの姿が映る。同時に数秒間激しい頭痛が起こり、手で頭を押さえるガイナギスカンの脳裏に途切れ途切れにある映像が映し出された。

緑にあふれた故郷

その故郷を焼き払う巨大な飛行要塞

故郷を守るために立ち上がるが、次々と殺されていく仲間たち

どうにか●●だけを逃がし、捕まった自分

そして…

「ウオオオオオオオオツ!!」

雄叫びを上げるガイナギスカンは両手に力を籠め、光太郎の上空へと翳す。

狙うは、覆われた雲の中でまだ薄くなっている部分。

「風魔ッ！ツインハリケーンッ!!」

両手から発生した強烈な竜巻が上昇しながら合流、さらに巨大となった竜巻は雲を突き抜けて成層圏にまで達する。そして、光太郎へと届く一条の光明。

「間桐光太郎ッ！今だッ!!」

「う…オオオオオッ!!」

爆撃も蠍の奇襲にも目にくれず、光太郎は光に向かい手を掲げた。

「太陽よ…俺に力をッ!!」

姿を見せた太陽を掴むように天へ右手を翳し、左手をベルトの前へと移動。

右手首の角度を変え、ゆっくりと右腕を下ろすと素早く左肩の位置まで手首を動かし、空を切るような動作で右側へと払うと握り拳を作り脇に当てる。

その動作と同時に左手を右から大きく振るって左肩から左肘を水平にし、左拳を上へ向けた構えとなる。

光太郎の赤い複眼の奥で光が爆発する。

体内に宿ったキングストーンのと光太郎へと降り注ぐ太陽の力が融合した『ハイブリットエネルギー』により光太郎のベルトは2つの力を秘めた『サンライザー』へと変化。

サンライザーから放たれる2つの異なる輝きが光太郎の全身を包み、彼を『光の戦士』へと進化させた。

黒いボディの一部が深い緑色へと変わり、胸部には太陽の力をエネルギーへと変換する『サンバスク』が出現。よりバツタへとイメージが近づいた仮面、より強く光る真つ赤な目を思わせる複眼と一對のアンテナ。

再び右手を天に翳した光太郎は敵に向かい、新たな力を手にした名を轟かせた。

「俺は太陽の子——ッ!!」

「仮面ライダーBLACK!!RX!!」

RXへの変身を遂げた光太郎は跳躍し、自分に向かいバズーカを放ち続けていたチャップ達の目の前で着地。同時にバズーカの銃口を握り潰し、銃身を支えるチャップごと持ち上げると赤い複眼『マクロアイ』で捉えた地中に潜む者に向け、勢いをつけ振り下ろす。

「トアッ!!」

土埃を上げて鈍い音が響く。やがて埃が晴れた場所にはバズーカを持つていた者とは別のチャップが倒れており、その手にはボウガンが握られている。

ワールドの胸を射抜いたのは、このチャップによるものだろう。

『おのれRX…裏切り者の処刑まで邪魔するとは』

「だまれボスガン…!」

『…ッ!?!』

通信器から漏れたまぎれぬ音……それこそ虫の羽音よりも小さな声だと言うのに聞き取った光太郎は通信器の向こうで戦慄するボスガンに向かい言い放つ。

「怪魔界に住む多くの人々から平穏を奪っただけでなく、自然にも手にかけて破壊するなど……俺は貴様達クライシスを絶対に許さんッ!!」

「しつかりなさい！まだ目を瞑るには早いわよ」

「申し訳ない……私は……」

「言い訳何て今はいいいい！この場を切り抜けてから聞かせてもらおうわよ！」

メディアは倒れたワールドを介抱しながら結界を広げ、今以上に蠍達が近づけないようにしている。だが、それで限界だった。

メディアが聖杯戦争時の状態であるならば、体内だけでなく自然界からの魔力を利用できていれば、群がる蠍達を一気に殲滅出来るだけでなく虫の息となった老人を治癒することさえ可能だったはずだ。

しかし、今の彼女にはそれが出来ない。

さらにメディアは焦っていた。

老人の胸に刺さった矢の先端には、毒が塗られていたのだ。

地下にあった薬品を試すが、急ぎ傷口を洗浄しなければ老人の死期がさらに早まってしまうのだと。

メディアは気付かない。

以前ならば自分のマスター以外ならば倒れようが死のうが、水面に浮かべば消える泡のように気に留める事すらなかったはずだ。だといふのに、今死なせない方法ばかりを考えている。

その焦りが結界に綻びを作り、蠍達が破壊しようと攻撃を強めていく。

「…私が、死んだら地下にある…倉庫に」

「聞かないって言っているでしょうッ!!」

激高するがもはや老人の耳には届かない。このまま自分達の都合を押し付けて、死んでしまうつもりなのだろうか。

だが、そんなことは認めない。

そんな身勝手な死など、メディアは容認できない。

(させないわよ…そんな死に方をするなんて…)

「私は…許せないッ!!」

次の瞬間、結界を囲んでいた蠍の群れの中に無数の巨大な火柱が立ち上る。

生き残った蠍も足元に現れた紫色の魔法陣に囚われると全身が切り刻まれ、押しつぶされていった。

火柱や魔法陣が消失し、残る結界の中ではメディアがワールドの胸に手を当て、傷口を塞ぐと同時に解毒を行っていた。

何故、自分の魔力が爆発的に高まり、同時に幾つもの攻撃魔術や治愈魔術を行使できたのか理解できない。

メディアに取って今はどうでもよかった。ただ、目の前にいる迷惑な老人の命を繋ぐことしか頭にはなかったのだから。

「……………片付いたか」

「そのようだな」

蠍だった断片が無数に散らばる砂塵の中、光太郎とガイナギスカンは一定の距離を持って対峙している。

RXとなり、チャップ達を撃退した光太郎は蠍達と戦うガイナギスカンの隣に立ち、共に殲滅を始めていた。

当初は余計なことをするなと拒むガイナギスカンだったが、光太郎の言葉に黙り、背中を預けるのだった。

「お前は俺に変身するチャンスをくれた。だから、1対1で戦えるまで協力する。それで対等だッ！」

ガイナギスカンにとって、もはや救いの言葉に近いものだった。

忠誠を誓った主から誇りを懸けた戦いを貶されただけでなく、捨石とされてしまったガイナギスカンに残されたのは、もはや光太郎との決着しかない。

振るう槍に力へ更なる強さが宿ったガイナギスカンは迫る蠍達を薙ぎ払っていく。

毒針に刺されようと、ハサミにより装甲が砕けようと、槍を振るい続けた。

自分の全てをかけた戦いをするために――

ガイナギスカン同様に光太郎も傷だらけとなっていた。キューブリカンの戦いでは傷口が瞬時に再生していたが、今では蠍の毒を中和するだけで精一杯なのだろう。

それに、RXの力が何時まで持つかは分からない。だから決着を付けるとした場合は、一瞬で決めなければならない。今の光太郎が放てる最大の攻撃で。

「リボルケイン――」

静かに呟き、右手を腰に当て、左腕を大きく回しながら広げた手を

腹部のサンライザーへと翳す。

サンライザーの左側の結晶から幾層もの光の線が重なり、洗練された円形の柄が現れる。

中央に赤い風車のようなダイナモがあり、柄を光太郎が掴むと同時に光を迸りながら高速で回り出した。

柄をサンライザーから引き抜くと眩い青い光——圧縮された光のエネルギーが結晶化した光子剣『リボルケイン』を形成。

リボルケインを左手から右手に持ち替え、改めて槍を構えたガイナギスカンと間合いを保ちながら光太郎は右へ足を運び、ガイナギスカンは左へと移動する。

やがて互いが足を止めたと同時に砂をまき散らしながら地面を蹴り、互いの武器を振りかぶり接近する相手へと振り下ろす。

「トアツ!!」

「ハアっ!!」

すれ違いながらも互いにダメージを負い、着地の際の一瞬身体のパランスを崩してしまう。その一瞬が、勝負の行方を決定づけてしまった。

「ハアアツ!!」

「が、アアアアツ!!」

ガイナギスカンよりも光太郎が早く、それこそ刹那の瞬間振り返るのが早かった。

リボルケインがガイナギスカンの腹部へと突き刺さり、送り込まれた光のエネルギーが砕けたガイナギスカンの装甲から火花となつて漏れ始める。しかし、それも次第に収まってしまふ。

「く…」

光太郎の手にあるリボルケインの柄の赤いダイナモの回転が静止し、さらには眩い輝きを放っていた刀身が消え、リボルケイン自体も消滅してしまふ。

それだけでなく、光太郎が膝を着いたと動じにRXからBLACKの姿へと戻ってしまった。

(げ、限界…か)

思えばRXの姿が保てなくなるまで戦つたのは初めてであった。だからと言ってBLACKの姿で戦えるほどの余力は、光太郎には残っていない。

そして、それを見逃すガイナギスカンではないだろう。

「間桐…光太郎」

右腕で貫通された腹部を押しさえながら目の前で立つ傷だらけの戦士は…

「見事だったぞ…」

武器を構えたまま、仰向けに倒れていった。

「勝った…ようね」

「め…メデア殿」

「あら、気が付いたようね。喜びなさい、今彼が…」

目を開けたワールドに結果を伝えようとしたメディアだが、ワールドの方が先に警告を言い渡す。

「はやく…逃げるのです!」

彼等には、勝利の余韻に浸ることすら許されなかった。

「本当に…参ったよ」

ガイナギスカンの倒れた方へと顔を上げた光太郎はそんな言葉しか言うことしか出来なかった。

地平線の方から数十機に及ぶ戦車や歩兵が数百。おまけにコントロールが成功したのが、武装をさせた蠍の化け物までいる。

足を踏ん張り、光太郎は何とか立ち上がり、腹部のキングストーンにそつと触れる。

(もう少し、付き合ってもらおうよ)

そして両手を展開し、ベルトの上で拳を重ねてキングストーンフラッシュの体制へと変わったが、それを手で制したのはいつの間にか立ち上がったガイナギスカンだった。

「行け…私が時間を稼ごう」

「ガイナギスカン…どうして」

「私に勝利した貴様があのような有象無象に倒されるようなことがあれば、戦った私の誇りに傷が付く。それだけだ」

「しかしッ…」

「地下に入れば、貴様のいる世界へ戻る為の転移装置がある。それを使うのだ」

「なんで、君がそんなことを知っているんだ？」

「…大体のことは、あの老人から聞いているのだろう」

「…ッ!？」

ガイナギスカンの言葉と、ワールドから受けた説明が重なった。ならば、猶更彼を放っておくわけには行かないと考えていた光太郎の耳に蠍の断末魔が響く。見れば光太郎の足元で槍に串刺しにされた蠍が痙攣しており、クライシスの軍勢は、目の前まで迫っていた。

「行け…早くッ」

「ガイナギスカンッ!!」

「いいか…貴様の世界を…怪魔界の二の舞とするな…」

「……わかった」

光太郎は一度領き、一目散に去っていった。

「間桐光太郎…最期に貴様のような奴と戦えたことを、誇りに思うぞ」

蠍から槍を引き抜いたガイナギスカンは意を決し、軍勢に向けて全力で駆けだしていく。

(さらばだ、我が好敵手よ)

(父よ。彼らを頼みます…)

既に転送装置のある一室まで移動していたメディアは光太郎と互いに無事であることを確認すると頷き合うと、端末を急いで操作し、装置を起動させたワールドによって形成された円形のエネルギーを見る。

これが転送装置なのだろう。

「光太郎殿…これを…そして、『彼』を」

「これは…」

ワールドは光太郎へ小指ほどの大きさであるプラスチックのケース…恐らく何等かのデータが収まっているメモリを手渡すと、さらに端末を操作したことで床が開き、2メートル前後はあるであろう長方形のカプセルがゆっくりと浮上する。

そこには窓が付いており、中を見ると人1人が眠っている。どうやら男性のようだ。

「彼は…？」

「彼方達と同じく、この世界に迷い込んだ者。傷だらけだった所をなんとか治療しておりましたが、ここで匿うのも難しくなりました」

「…わかりました。では、貴方も…」

「いえ、私はここに残り、転送装置を破壊します」

「何を言っているのよッ！」

ワールドの胸倉を掴むメディアだが、まるで動じる様子もない。彼を治療したメディアは自分の言ったことをまるで聞いていないワールドへ苛立ちをぶつけるようだったが、真っ直ぐに見つめてくるワールドの目を見て次第に手の力を弱めていく。

(本当に…なんなのよ)

その目は良く知っている。

自分の隣に立つ男と全く同じ。一度決めたら決して揺るがそうとしない決意に満ちた瞳だ。こうなってはいくら文句を言ったところで、揺らぐ事なんてまず不可能だと彼女は知っていた。

「言っておくけれど、私は彼方の都合を叶えるつもりなんて毛頭ないわ」

「……………」

手を離れたメディアは踵を返し、転送装置の方へと近くへと向かっていく。

「ただ、私達の世界であの連中を倒す頃にはこちら側の戦いも終わっているかもしれないわね…」

顔を向けることなくぼそりと呟くメディアの決意表明に微笑んだ光太郎は手を差し伸べ、ワールドも笑みを浮かべて手を取った。

「…今は、この世界を救えません。けど、いつか、必ず——」

『星総べる王、世界の命運を止める』

「え……？」

「…怪魔界に伝わる言葉です。災いの言葉とされていますが、私はそうとは思えない」

「王の石を持つ彼方なら、きっと救いの言葉としてくれるでしょう…」

「…ツ!?なぜキングストーンのことを…」

重大な事を訪ねようとした光太郎の耳に、爆発音が届く。どうやらすぐ傍まで敵が近づいているようだ。

「さあ、早く装置の近くへ！」

ワールドに促され、カプセルと共に装置へ近付いた事を確認したワールドは数度ボタンを押す。直後、激しい光と共に光太郎とメディア

ア、そして青年が眠るカプセルは怪魔界から消滅したのであった。

「…頼みましたぞ…創世を超えた王よ」

目をつぶり、ゆつくりと唱えたワールドの姿は、爆炎の中へと消えてしまうのであった。

目を開けると、見慣れた森の近くだった。

柳洞寺の裏山。

大の字になって倒れていた光太郎よりも先に起きたメディアは光太郎の方へ顔を向けることなく、本堂の方へと歩いて行った。

(せめて一声かけて欲しいところだけど)

それよりも先に報告すべき相手の場所に向かったのだろうと光太郎は自分のポケットの中で振動する携帯電話へ手を伸ばす。あれだけのことがあってもまだ無事であることに關心しながらも着信履歴を見てみると…

「うわあ…」

思わず声を漏らす程の着信の数。義弟義妹それぞれ30件近くあり、自宅からなんて40件だ。恐らくメデューサが自前の携帯電話ではバッテリーが足りないということと自宅の電話を使ったのだろう。

「どう報告するべきかな…」

隣に並ぶカプセルの中で眠り続ける男性の説明も含め、話さなければならぬことが山積みだ。

が、まずは救助をして貰えなければ始まらない。

ワールドから託されたメモリを眺めると光太郎は覚悟を決めて携

携帯電話の通話ボタンを押すのであった。

第8話

クライシス帝国により怪魔界へと送り込まれてしまった間桐光太郎とメディアはワールドと名乗る老人に助けられる。

ワールドから聞かされた事実：かつて怪魔界は地球と同じく緑溢れる美しい惑星であったがクライシス皇帝の圧政によって進んだ環境破壊によって死の星となり、クライシスはそんな母星を捨て地球侵略に踏み出したことを知る。

卑劣なクライシス帝国に怒りを向ける中、光太郎へ戦いを挑む怪魔獣人ガイナギスカンが現れ、RXへと変身しようとした光太郎だったが、クライシス大隊長ボスガンの差し向けた別働隊によりRXの変身が遮られ、援護に現れたワールドは重症を負ってしまう。

だが、正々堂々とした戦いを望むガイナギスカンの助けにより光太郎はRXへと変身。メディアも急激に高まった魔力によって自分達を困っていた敵を殲滅したと同時にワールドを治療することに成功した。

互いに傷を負った状態でありながらも一対一の戦いに決着を付けた光太郎とガイナギスカンだったが、更なる敵の援軍が現れる。援軍を目の前にして闘う覚悟を決めた光太郎だったがガイナギスカンはこの場を自分に任せ、光太郎へ逃げるように告げる。ガイナギスカンの正体に勘付いた光太郎は迷いながらもその言葉に従い離脱するしかなかった。

光太郎を父親であるワールドに託したガイナギスカンは重症である身体を圧して敵の大軍へと駆け出していく。

ワールドは合流した光太郎とメディアへあるデータの詰まったメモリと医療カプセルに眠る謎の青年を託し、転送装置を起動。

2人が元の世界へと戻すと怪魔界がかつての姿を取り戻すことを祈り、炎の中へ消えるのだった。

光太郎とメディアが地球へ戻った翌日。

とある喫茶店

『怪事件!?ゴーストタウンと化した商店街で起きた謎の破壊後。テロリストによる犯行か?』

——そんな見出しの新聞をサラリーマンが熱心に読む姿を見た月影信彦…の『同居人』であるアンリマユは信彦にしか聞こえない声でぶつくさを文句を放っていた。

「冬木の管理人の苦労は絶えぬようだな」

（んがあッ!その親父捲るの早いんだよ!それにあんたももうチョイ視線を横によせろっての!ぜんっぜん記事が見えねえじゃんっ!!）
「……………」

（おいおい無視ですかあ?あんまこっちの意見流しちゃうようならアントアが寝ている間にこの身体使ってまたナンパを頼むから熱いブラックの一气はやめて下さいって苦ツガアアアアアアアッ!」

現在身体の主導権は信彦にあるものの、五感を共有しているため信彦の視覚で捉えた映像はそのままアンリマユの視覚となっており、味覚もまた然り。

だが好みまでは別のようであり、甘党であるアンリマユと辛い物を好む信彦では相性が非常に悪く食後のコーヒーカーゼートかという事で精神世界ではとてつもなく下らない戦いが繰り広げられているが、普段主導権を握っている信彦の勝率が高く、余りにもしつこい時でない限りアンリマユの要求が通ることはまずない。

アンリマユが言った通りに信彦が眠りに付いている時はアンリマユが表となり夜な夜な遊びに出かけるようだ。

だが、アンリマユの暴挙を許す信彦ではない。

ある程度…ゲームセンターに入り浸るくらいなら許容しているが女性を連れて繁華街へ向かおうとした時は意識を覚醒させ、どうにか足だけを支配するとブロック塀へつま先を思い切り叩き付けてアンリマユが悶絶している間に身体的所有権を奪うなどして他人と深い

関係を持つ事を阻んでいる。

このように力関係だけはずきりとしているのに関わらずアンリマユの軽口は止まることなく、信彦は制裁を続けているのだった。

(あくそっぴいや…)

性懲りもなくまた軽口を言うようであれば再びコーヒーを口にしようとする信彦だったがアンリマユの声色がふざけたものではなく、懐かしむような静かな声に口の前まで持ち上げたカップを止める。

(あん時も、こんな風に朝飯にありついてた時だっけか…)

「そうだったな」

カップを皿に置いた信彦は窓から差し込む日の光を見上げながらそう同意した。

それは1人の少年との出会いから始まった話。

「……………連続殺人事件。これで3件目、か」

喫茶店で注文したモーニングセットを待つ傍ら店に備えてあった新聞紙を広げる信彦はある記事へと注目する。そこには女性の変死体が通行人によつて発見されたという内容だ。

(うへえ…しかも首の骨も折られてるじゃん。悪趣味だなオイ)

「……………」

アンリマユと同じ感想を抱いたことが癪に障ったのか、信彦は新聞を畳んだと同じタイミングで給仕されたセットを無言で食べ始める。頭の中でコーヒーには砂糖5杯!というリクエストも上げられたが信彦は無視してブラツクのまま飲み始めた。

悶絶する同居人の悲鳴を聞きながら信彦は新聞記事にあつた事件…この町で連続して起こっている変死事件にはある共通点へと目を止める。

死体から多量の血が喪失しているということ。

一部の報道では現代の吸血鬼による仕業と煽られているが、信彦から見れば笑えない冗談でもある。

ゴルゴムだけでなく、かつて世界征服を企んだ組織によつて生み出された怪人の中には人間の生血を摂取する個体も確かにいる。

そして、怪人以外にも血を求める者…それをこうもはつきりと文章へ載せているのに人間達は気付こうともしない存在。

もし、この殺人事件が怪人や『そいつら』が関係することならば：

（おんや？随分と興味深々みたいじゃん。もしかして、ご親友と同じくなんとかしてみようってところかい？）

こちらの出方をまっつているのか、挑発的な言い方をするアンリマユを黙らせようとカップを手取るが、既に空であったことに気付いた信彦は一度溜息をつき、仕方なく質問へと答える。

「もし犯人の正体が『死徒』だったのなら、間違いなく『教会』が動く。この場へと現れたら厄介だ」

（あく前も行った先にたまたまそんな奴がいた時に目えつけられたもんね。お前がいるから現れた、みたいなの？）

「……………」

『死徒』…この世界に存在する吸血鬼の呼称の一つであり、多くの人間が知らないだけで珍しくない異端だ。多くの伝承にある通りに人から血を吸い、吸われた者は同じく吸血鬼と化す。

『死徒以外の吸血鬼』に関しては現れることは無いと踏んだ信彦は犯人の対象から除外し、『聖堂教会』が現れる前に死徒を排除する方針を取る。

過去に数度、旅先で聖堂教会だけでなく魔術協会からもいらぬ疑いを懸けられひと悶着あったため、後手に回ることを避ける為の方針だがアンリマユは反対の意思を示さない。普段ならば『めんどくせ〜』など愚痴を言い零しながらも従っていたが今回に至っては信彦の言

うことにただ『へえ』と声を漏らすだけだった。

「…まずはこの周辺を見回る」

（朝っぱらから行動的なこつて…でも相手が徘徊するのつて夜でないかい？）

「今のうちに地理を頭に入れておく。夜中でも視界は問題ないが日中の方が理解が届く」

（なるほどねえ。なら、俺は休ませてもらうわ。はあく、二度寝最高…）

「…好きにしろ」

何かの気まぐれだろう。その時は、信彦はそんなことを考えていた。

駅付近の喫茶店から歩くこと十数分。賑わいを見せる駅周辺から住宅街へと進んでいくと、段々とすれ違ふ人間が少なくなり数分に1人を見かける程度となり、細かな通り道なども複数発見する。

その場所を手に持つタブレットへ入力した周辺の地図と現在地を照らし合わせ、犯人が逃走に使うであろう道を暗記していきながらもふと考えてしまった。

こうして覚えたとしても、事件の解決後にはすぐに町を立たなければならぬ。必要な事とはいえ、記憶した道も風景も町を離れば意味を失うことになる。

（何を馬鹿なことを）

下らないと信彦は一蹴する。

もとより終わりのない旅の道中で立ち寄っただけのことだ。そもそも意味を考えたこと自体がどうかしている。終わりのない旅の中でいずれ朽ち果てる。既に世紀王…そして創世王の存在を必要としない世界で生きる自分にとってはそのような最期が相応しい。

『奴』のように、帰りを待つ者がいない自分には…

そんな自問自答に陥っていたからであろうか。電柱に寄り添い、苦

しげに深呼吸を繰り返している少年の気配に全く気付くことなく接近してしまったのは。

「……………」

もう2メートルもない距離まで近づいてしまった信彦は自分を殴りたくなる衝動を抑えながらどう距離を置いて離れようかと思案する。旅の中で他人と関わる事は一切してこなかった信彦に取っては最早手慣れた事だったはずだ。

しかし、ついには自力で立つことすら出来なくなったのか、少年は前のめりにアスファルトへ向けて倒れそうになり――

「…え？」

「……………」

少年は思わず驚きで声を上げた。寸でのところで信彦は少年の腕を掴み、倒れる事を免れた少年へ目を向けることなく声を掛けた。

「往來で倒れるとは、お前は他人に蹴り飛ばされたいのか？」

「……………ッ!？」

アンリマユに向けるような乱暴な言い回し。特に何かを意図して放った言葉ではなかったが、少年が思わず顔を上げてしまう。

その少年は自分を助けてくれた人物が男性であり、全くの別人だと理解している。しかし、助けてくれた信彦の発言が、余りにも自分の知る人物の言葉と近い言葉だったことに反応してしまった。

「先、生…？」

「……………？」

自分をなぜか「先生」と呼んだ見上げた少年…中性的な顔立ちに眼鏡をかけているが、信彦は違和感を覚える。見た所、少年は弱ってい

ることもあるが大人しく、他人に害を加えるようには見えない。だが、その根本には『別の何か』がある…

いつまでも目を離そうとしない信彦に少年はなんとか足に力を入れて立ち上がると遠慮しがちに尋ねる。

「あ、あの…もう大丈夫ですから」

「む、そうか」

言われてようやく手を離した信彦だが、少年が再びガクリと膝を降りアスファルトへ手をつく姿を見ると溜息を付き、手を差し伸べる。

「住所を言え…送ってやる」

「あ、ありがとうございます…」

それが彼…『遠野志貫』との出会いだ。

それから1週間の間。朝、昼、夜…所構わず信彦は少年と遭遇することになる。初対面時のように体調を崩した所を見つけては世話になっているという親戚の家まで送り、学校帰りや友人の家へ入り浸っている所も発見。もはや偶然とは思えぬ程のエンカウント率である。互いの名を教え合う関係になるまでには、そう時間はかからなかった。

「じゃあ、月影さんはずっと旅を続けているんですか？」

「そんなところだ。用事が済めばこの町からも離れる」

信彦がよく利用する喫茶店のテーブル席で注文した飲み物が届くまでの時間まで、そんな会話を交わしていた。何度か助けてもらったお礼も兼ねて志貴が御馳走させて欲しいという主張に信彦は断る理由がないため了承。

例えば、誰かと言葉を交わすのは旅を開始してから…さらにここまで長く同じ人間と接したの初めてかもしれない。

信彦の言ったことに寂しくなりますねと寂しげな笑顔を浮かべる志貫に、信彦の中にいるアンリマユがふざけた様子もなく信彦へと警

告を告げる。

(おい…わかってんだだろうが、あんま関わってると碌な目に合わないぜ。こいつは…)

「…わかってている」

「え?…どうかしました?」

「気にするな。1人言だ」

「はあ…」

首を傾げる志貫に断りを入れてから信彦は煙草へ火を着ける。

アンリマユの言うことは忠告ではなく警告。そして言われた信彦も警戒した上での会合だ。少年…遠野志貫と関わるうちに、信彦は当初彼に感じていた違和感の正体に段々と気付き始めている。

きつかけは彼の持病である慢性的な貧血のために学校を早退した所に出くわし、肩を貸して家まで送った時だ。

彼の眼鏡がずれ、裸眼を…瞳を見た瞬間。

信彦は志貫に殺されると思ったってしまった。

なぜ、そう考えてしまったのかは定かではない。しかし、ただの人間に過ぎない志貫に改造人間である信彦が目を見ただけで自分が殺されると考えてしまうなど本来ありえない。

だが、その疑念は今も晴れるなく志貫へと接している。

彼の正体を見極める為でもあるが、それ以上に彼が纏っているもの…普通の少年に過ぎない志貫からなぜ『死』を内包していると感じてしまうのか。なぜ、そのような状態で少年は笑って過ごしているのか。

信彦には、理解できない。

だからこそ知りたいのだろうか。ただ歩き続けながら死を待つ自分と笑いながら死と向き合い続ける少年。

一体、どのような違いあるというのかと…

そして数日後、彼が生まれた家へと戻ることになった日。それは信彦は志貫が迎える血塗られた運命と、彼が持つ「本当の死」の意味を知る戦いが始まる日となった。

「あれも、1ヶ月も前のことか」

信彦は煙草を灰皿へと押し付け火を消すと腕時計を見る。

「時間か…」

(えくちよいと遅れていこうぜくどうせ2人は先に着いてるだろうしよ)

「なら猶更遅れるわけにはいかんだろう」

(ばつかさうじやなくて空気が読めって言っただよ！少しでもイチャつく時間作ってやろうって老婆心だろうが)

「なんの話をしているかわからんが、とつとと行くぞ」

(あくあ。ライダーの天馬に蹴られないかねこのお方)

アンリマユの進言を聞かないまま信彦は上着を取り、会計を済ませると待ち合わせの場所へと向かう。

志貫の持つ力と考えることは出来たが、やはりまだ理解はできない。彼が…いや、彼等が互いに思う感情も信彦はまだ分かってはいない。

彼等と行動を共にする理由の一つは、それを理解するためのものかもしれない。

第9話

「光太郎、起きてますか？」

時刻は休日の午前10時過ぎ。メデューサは扉を数度ノックした後に部屋の主である光太郎へと声をかけるが返事はない。

大学で講義のない日や休日でも7時には目を覚まし、早朝のトレーニングを欠かすことなく行っているのだが今日に限り光太郎は起きた様子もなく、それどころか部屋からも出ていないのだ。

「…開けますよ」

もしや先日の怪魔界の一件でのダメージが残っているのだろうか。不安に思ったメデューサは断りを入れてからドアノブを捻り、ゆつくりと扉を開く。

朝日の差し込む光太郎の私室。目につくのは部屋の隅で乱雑に重ねられたバイクの雑誌とダンベルなどの器具。桜から整頓するように注意しても聞かないようなら問答無用でゴミの日に出しても構わないと絶対零度の微笑みで指示されているが、今回は目的が違うの見なかつたことにしたメデューサは光太郎の姿を確認すると、思わず頬を緩ませてしまう。

机の上で組んだ腕を枕代わりにして寝息を立てる光太郎の顔は、何かをやり遂げた後のような、穏やかな寝顔だ。

メデューサは光太郎を起こさないようにそつと肩へ毛布を掛けると、彼が今の時間まで眠っていた原因を発見する。

設置されたパソコンへ幾つもの：メデューサに取って理解不能な機械を接続したことでようやく閲覧出来た異世界の人間から託されたデータ。

ワールドに手渡されてたメモリは地球上のどの機器の規格にも対応しなかつた為、光太郎は自力で解読することを覚悟した。

異界の電子システムを自分の知る限りのあらゆる知識を駆使して、ついに読み込むことに成功する。そしてプリンタからメモリ内のデータを印刷した時に力尽き、座ったまま眠りについてしまったのだろう。

メデューサは床に散らばった紙を拾い上げ、そこに描かれている何かの設計図と、記載された名前を静かに読み上げる。

『ライドロン』…ですか」

宇宙空間を移動するクライス要塞の一室。部屋に一切の証明が存在しない代わりに、鎖で両手を縛られたボスガンへ打ち付けられる激しい閃光が室内を照らしていた。

「ぐおおおおお…!!お、お許し下さいジャーク將軍ツ…わ、私はクライシスの為に宿敵であるRXを…」

「ええい黙れ愚か者めが…その結果、怪魔界へ残した兵力を失うだけでなく、砂漠一帯の指揮を任せていたガイナギスカンを失うなど本末転倒ではないかツ!!貴様はそのまま24時間、この光線に撃たれ続けるがいいツ!!」

「そ、そんな…お慈悲を、ジャーク將軍ツ!!」

部屋に設置されたビーム砲を浴びながら懇願するボスガンの声など聞く耳を持たず、ジャーク將軍はマントを翻して部屋を後にする。

「キシキシキシシシ…抜け駆けしようとするからあんな目に合うんだぜボスガンの野郎は…」

部屋での一部始終をケタケタと笑うゲドリアンはボスガンの悲鳴が木霊する部屋を離れ、自分の依頼通りに事を進めてくれているであろう他の大隊長の元へと向かった。

「む…エネルギーバランスがまだまだか…」

「ガテゾーン！ガテゾーンはいるか!!」

「…騒がしい隊長さんだなおい」

手に持ったパッドから浮かぶ立体映像：新たに造られる怪魔口ボットの作業工程を確認するガテゾーンの元へピョンピョンと飛び跳ねて接近する同僚へ皮肉を送るが聞こえていないようなのでそのまま話を続ける。

「…前に話していた件のことか？ほらよ」

「おう！仕事が早くて助かるぜっ!!」

ガテゾーンは胸ポケットから小型の機械：幾つかのボタンと十字キーが仕込まれたコントロールユニットをゲドリアンに放り投げ、再び調整作業に手を付けながら尋ねた。

「威力は前よりは上げてあるが、今更どう使うつもりだ？RXに通用するとは思えんが…」

「ケケケ：確かにRXに通用しねえだろうが：BLACKならまだ足止めくらいにはなると思わないかガテゾーン？」

「なるほど…：数日前に流星に偽装してバラ撒いた『アレ』の癖りが著しくないから併用するってどこか」

「理解が早くて助かるぜ…：まさか地球の気温じゃあんなにも相性が悪いとは思わなかったからなあ。んじゃ、邪魔するぜい」

コントロールユニットを片手で遊ばせながら離れていくゲドリアンはガテゾーンへ謝礼を述べた口は、相手に勘付かれないように歪めていた。

（ケケケ：RXを倒すのはお高くとまったボスガンでも気取り屋のガテゾーンでもねえ…：ジャーク將軍にお褒めの言葉を頂くのは、このゲドリアン様よッ!!）

「…と、考えてるんだらうがな」

データの入力しながらゲドリアンが頭の中で考えているであろう言葉を予測するガテゾーン。生粋のクライシス人ではないゲドリアンは貴族である事を棚に上げ見下すボスガンや敬愛するジャーク將軍の懐刀であるマリバロンを快く思っていない。さらに地球攻撃軍では同じ境遇でもあるガテゾーンへ今回は頼る形となっているが、ど

こかで敵視している部分もあった。

ボスガンのように手柄を立て、誰かの地位を狙っているのではなく、純粹にジャーク将軍へ認められたい。

ある意味、ジャーク将軍への忠誠は誰よりも厚い隊長であろう。

「ま、その分時間を稼いでくれれば俺も作業に集中できるわけだが」

ゲドリアンへ協力をしたが、RX：間桐光太郎がそうそうに負けるとガテゾーンは考えていない。彼を倒せるのは他の誰でもなく、自分の作り上げた怪魔ロボットののみ。

キューブリガンでは遅れを取ってしまったが、今造り上げている最強の怪魔ロボットであれば、負けるはずがない…

「ふわあ…」

「もう、だらしがないですよ兄さん？」

「ごめん、昨日寝たのが日が差した辺りだったから」

「それ、既に今日の話じゃないですか。メデューサ姉さんから聞きましたよ？」

「あく。やつぱりあの毛布、メデューサだったか…」

隣を歩く義兄の話聞きながら苦笑する間桐桜は現在、光太郎と共に間桐家御用達である診療所へ向かっていた。

「そう言えば慎二君は？今日は藤村先生が不在ってことで部活は休みなんでしょ？」

「今日は午前中に図書館で勉強を済ませてから新都でお買い物をするそうですよ。しかも、そのお買い物物が美綴先輩の付添いなんですって！」

「へえー。衛宮君以外と休日に出かけるなんて珍しいな。あの二人、そんなに仲好かったっけ？」

「さあ、どうなんでしょーねー」

「？」

意外な組み合わせに光太郎は思わず尋ねてみるが、桜はお茶を濁すように曖昧な答えしか返さない。首を傾げる光太郎の顔が面白いのか、クスクスと笑いを漏らす桜。やがて互いに無言となると、2人が向かっている先で眠っているであろう『彼』の話題となる。

「あの人…早く元気になるといいですね」

「うん。そうだね…」

光太郎がメディアと共に怪魔界から帰還した際にワールドから託された謎の青年。ワールドの言葉を信じるならば異世界の人間である彼は光太郎達の世界には存在しない人物であり、無論戸籍もない。

そのため魔術や光太郎の身体にも理解のある診療所へ青年をあずけ、検査も同時に依頼したのだった。

こうして様子を見に行くのも4回目となるが、青年は起きることなく眠り続けている。医師の話では極端に体力を消耗しているが異常はないため、近いうちに目は覚めるという話ではあるが、光太郎は慎二や桜、メデューサに頼み、自分も含めて青年の様子を交代制へ見に行くようにしている。

何故そこまでして彼を気にかけるのかと慎二に問われたが光太郎は彼が起きた時、誰もいなかったら心細いだろうと説明をしたが、なぜか彼を放っておくことができない…そんな思いが光太郎の心を大きく占めている。

「さて、もうすぐ到着だ——」

悩んでいても仕方ないと、目に入った診療所の看板を見てワザとらしく声を上げるがガラスが砕けた音によって光太郎の声はかき消されてしまう。それも一回だけではない。次々と何かがぶつかり、砕ける音が立て続けに発生し、光太郎と桜は目を合わせると診療所の中へと駆け込んでいく。

「先生ッ!？」

「ぐおッ…!」

診療所のガラス戸を乱暴に開いた光太郎達の目に最初に映ったの

は診察室の扉をぶち破り、背中から壁へと衝突して床へ沈む恩師の姿。思わず駆け寄る光太郎と桜は苦悶の声を上げる医師を介抱しようとして膝を着くが、直後に別の悲鳴が光太郎の耳へと響く。

「キヤッ!？」

「桜ちゃんツ!？」

診察室から飛び出した腕が桜の肩を掴み、強引に室内へと連れ込んでしまう。

振り返ったその先で桜の首を左腕で覆い、右手に持ったメスを顔に突き付けている人物…カプセルで眠っていた青年が息を荒らしながら光太郎を睨みつけている。

「…なんだ貴様ら? 俺を一体どうするつもりだツ!？」

「……………」

「答えろツ!…ここは何処だツ!?! 俺は…誰なんだツ!?!」

「…っ」

興奮状態になるのか、青年は三白眼をさらに鋭くし光太郎を睨む。青年から問い質された内容は至極真つ当ではあるが、最後の部分をより強調していたように光太郎は思えた。

(もしかして…記憶喪失なのか?)

「早く答えろツ!?! この娘がどうなっても——ツ」

「分かった。じゃあ一つだけ答えよう」

相手に警戒されないように両手を上げた光太郎はゆっくりと息を吸い、青年を睨み返して口を開いていく。青年も真剣な眼差しを向ける光太郎の言葉を聞き逃せないようゴクリと息を飲み、待つこと数秒

「舌を噛まないようにしてくれ」

「はっ。」

意味の分からない返答に間拔けな声を発した直後だった。

人質にされていた桜は光太郎の言葉に力を緩めてしまった青年の右腕を掌で押し上げ、顔に向けられていたメスで自身を傷つけない範囲まで移動したと同時に青年の足…しかも小指を中心に踏みつけた。「……………ッ?!?!」

声にならない悲鳴を上げる青年へさらなる追い打ちが続き、桜は拳と肘を青年の腹部に当てると魔力を上乗せした状態で強く一步踏み込む。ゼロ距離で叩き込まれた衝撃に仰け反った青年は胸を押さええ後退しながら自分へこれ程までの攻撃を加えた少女を見返す。

コオ…と深く息を吐き残心の為に構えたままであったが、苦しそうに自分を見上げる青年を見てハッと我に返るとアワアワと慌てふためいて謝罪を始めてしまう。

「ご、ごめんなさいッ！…つい癖で護身術を怪人に仕掛けてるつもりでぶつけてしまつて…怪我しませんでしたかッ!？」

癖で護身術を叩き込んでくるとはこの娘、どのような日常を送っているのかと問いただしたくなるが未だ胸が痛み上手く喋れない青年は何度も頭を下げる桜とやっぱり…と言わんばかりに肩を竦ませる光太郎を見て苛立つを通り越し、逆に冷静となつてしまった。

「やれやれ、ようやく落ち着いてくれたか」

「先生、大丈夫ですか？」

「無事なものかッ！見ろ、診察室が荒れ放題だ。妻が旅行中であることが唯一の救いだよ…」

「ハハハ、相変わらず丈夫ですね」

確か力一杯に蹴り飛ばしたはずの初老の男が何事もなかったかのように立ち上がるどころか自分が攻撃を受けた事よりも散らかった室内の心配をしている姿に、青年は今度こそガクリと項垂れてしまふ。

「ふむ…どうやら桜くんの技の跡は残っていないようだな」
「……………」

触診によつて青年は桜によつて怪我を負つた形跡なしとの診断に少女はホツと胸を撫で下ろし、義妹の頭を撫でる光太郎は改めて青年の姿を見る。

肩に触れる程度まで延ばされた黒髪と無自覚に周囲を警戒させてしまふような鋭い目。細見ながらも鍛え抜かれた筋肉質の体軀は何かの訓練を受けたような印象を受ける。

そして光太郎が彼の眠つていたカプセルをこじ開けた時から目についていた額と胸板に残る大きな傷。ワールドによつて治療を受けたのだからそれでもクツキリと残つてしまふ、医師の見解でも消えることのない傷痕だという。

先程はやはり混乱していた為だったのか暴れる様子もなく、医師の質問には落ち着いた様子で答えている。これが彼本来の性格なのかも知れない。何より光太郎と桜が注目したのは…

「では、君自身の名前も分からないということだね」

「ああ。まるで思い出せん」

（渋い声だ…）

外見の年齢からすれば光太郎より下、桜よりは上、といったところだろう。だが若い見た目とは裏腹に声質は低く、一度聞けば耳に残る印象を与える声。

黒いスーツとコートを着用し、煙草を吹かせながらハードボイルドな台詞を放つ姿が異様に似合いそうだ…と2人が同じ想像を浮かべていると医師が椅子を回転させ、これからの方針を訪ねてきた。

「さて、見た所では異常は見られない。ここに来た時は体力の消耗が激しかったが先程の元気な姿を考えれば…言うまでもないな」

「面目ない…」

「ああ、別に責める気はないよ。光太郎君、ひとまず彼を一時退院を進めるが如何かね？片付けを手伝ってもらい寝室は元通りにはなつたが、同じ空間については息が詰まるだろう。外の空気に触れば、何かを思い出すきっかけになるかも知れん」

「なら、泊まるにはとっておきの場所がありますよ！」

医師も光太郎の提案を期待していたのだろう。予測通りの回答に優しい笑みを浮かべ、桜も義兄同様にお任せあれと胸を張っている。

ただ一人蚊帳の外である青年は恐らく拒否権というものはないだろうと覚悟を決めるしかなかった。

「…で？うちに泊める、と。光太郎、前も言ったこと覚えている…？」

「はい…この家に関わる際には思いつきで行動せずみんなの意見を聞いてから、でした」

「へえ…ちゃんと覚えているんだねえ。じゃあ、今日の事は僕が聞きはぐっただけなのかなあ。おかしいなあ」

「…すいませんでした」

間桐家の食卓で頬杖を突き、魔道書のページを捲る慎二は床に正座した光太郎へ視線を向けることなく重圧をかけていく。その光景は既に日常なのか、桜は気にすることなくメデューサと共に畳んだ洗濯物を定位置へと運んでおり、アウエーである青年は一見普通の少年に見える慎二が只者ではないと踏んだ光太郎があそこまで萎縮させる姿を見てこの家のパワーバランスが分からなくなってしまうていた。

「…米10キロ」

「…!?わかったよ慎二君。彼の分の買足しだね！今すぐスーパーへ行ってくるよッ!!」

紙の擦れる音だけが異様に大きく聞こえる中、ぼそりと慎二は呟いた単語を聞き取った光太郎はすくりと立ち上がり、力強く頷くと慎二の要望に答える為に部屋を飛び出していくのであった。

その動きは正に電光石火。リビングのドアが開いたと思った次の瞬間には閉じており、外部に耳を向けるとけたましいエンジン音が遠のいていく。唾然とする青年の横では変わらず読書を続ける慎二へエプロンを着用した桜が呆れた様子で溜息をついている。

「そのお買い物。明日慎二兄さんが行くことになっていたんじゃないやありませんか?」

「そうだった?」

「そうですよ。もう、子供じゃないんですから拗ねるのは駄目ですよ?」

「報告を怠ったアイツが悪い」

拗ねているのは認めるんですねと苦笑を浮かべた桜は袖をまくり、キッチンの奥へと移動する。光太郎の買い物と合わせて夕食の準備に取り掛かるらしい。

「座つたら?」

「あ、ああ……」

どことなく緊張してしまっている青年は慎二に言われるがまま向かい側の椅子に座るが互いに口を開くことがなく再び沈黙が続き、今度は桜が野菜を包丁で刻む音が妙に大きく聞こえている。

「どうして、なんだ?」

「……………」

「どうして、彼は俺を助けてくれる。何者かもわからない、俺を……」

青年には理解できない。間桐光太郎という人物がまるで理解できなかった。ここまでの道中、気さくに話かけていく光太郎に曖昧な返事しか返せなかった青年は光太郎は何故、ここまで自分に警戒せずにいるのか。何故こんなにも、暖かく迎えてくれるのか。

自分自身でもどこの誰なのかも分からない不審な存在を、どうして間桐光太郎という男は受け入れることができるのか。

「馬鹿だからアイツは」

「え……は？」

同じ日に2回も間抜けな声を発してしまったと青年は我に返る前に、慎二の回答は続いていく。

「目の前で困った奴がいたら無条件で手を伸ばす馬鹿。その結果がどうなるかが……助けた相手に裏切られようがそれ自体が罠であろうが光太郎は迷いなく助ける事を優先させる。そんな、馬鹿な奴なんだよ」

貶めているはずなのにその表情は柔らかく、侮蔑の言葉も信頼の裏返しのようなものかもしれない。ああ、この少年は心の底から間桐光太郎という男を信頼している。それはキツチンから横目でこちらの様子を見て、笑みを浮かべて作業へと戻った少女も同様だろう。

それでも、青年は解せなかった。

光太郎がそうまでする理由が、はつきりと分かる形で知りたかったのだ。

「わからん。どうして、知りもしない赤の他人へ手を伸ばすことが出来るんだ？」

「……以前、こんな事を言っていました」

青年の前へ緑茶の入った湯呑を置いたメデューサは懐かしむように、かつての自分と青年を重ね、光太郎が自分へ伝えた言葉を口にする。

まだ聖杯戦争が始まる前。召喚されたばかりの彼女はマスターがどのような人物かを知る為に彼の戦いへと同行した。

その際、怪人は逃れる為に当たり構わずに怪光線を乱射した結果、ビルの瓦礫が子供と子犬に向けて落下。光太郎は迷いなく子供の救助のためにその身で瓦礫を受け、怪人を取り逃がしてしまった。

メデューサはやれやれと肩を竦ませるマスターへなぜあのような

効率の悪い方法を取ったのかと尋ねた。あの場で怪人を倒せば取り逃がすことも無く、被害を最小限に抑えられたかもしれないのと。今考えれば、あの場で怒鳴られても仕方がないような言い分だったが、光太郎は怒るところか笑いを浮かべてこう言ったのだった。

「誰かを助けるのに、理由なんていらナイよ」

「……………」

青年は黙るしかなかった。

彼の行動は誰かに強要されたものでも、己を保つためではない。理由があるとすれば、助ける為。ただ、それだけの為に彼は動くのだと。

余りにも簡単であり、誰にも成しえない愚直過ぎる回答を青年は不思議と不快と思えず、むしろ先ほどまでの疑心が氷解していくような気分となっていた。

「誰かの為なら常に全力…あいつの癖というか、本能みたいなもんだよ」

「ええ。言いて妙とは、この事なのでしよう」
「だから、アンタが気にすることじゃない。台風にでも巻き込まれたと思って、大人しく光太郎に助けられてくれ」

ニヤリと笑う少年に対し、青年の返答は余りにも簡単なものだった。

「ああ。暫く、世話になる」

その時、僅かだが青年は初めて微笑みを浮かべたのだった。

「さて、米はこれでいいし後は…」

『キヤアアアアアアアアアツ!!』

「ツ!?!」

スーパー内で愛用している米袋を掴み、レジへと向かおうとした光太郎は店内の奥から響く悲鳴を聞いた途端に米袋を元の位置に放り投げ急行する。避難する人々を掻き分け、その先にいたのは店内の食料品を口へとかき込んでいる怪人であった。

ダルマのような胴体に比べ手足は長く、トカゲを思わせる頭を持つ異形…そして光太郎の存在に気が付いたのか、手に取った野菜を放り捨て、光太郎へと向かっていく。

「ゴルゴムじゃない…ならば、クライシスが送り込んだ怪人かツ!?!」

光太郎は腹部にキングストーンを宿したベルトを出現させ、一定の構えを取った後にその場で跳躍。戦う為の姿へ変わる言葉を強く叫んだ。

「変身ツ!!」

赤い光に包まれた光太郎はバツタ怪人、そして仮面ライダーBLA CKへとその身を変え、襲い掛かる怪人へと拳を繰り出した。

第10話

スーパーの裏方…アルバイトの青年は惣菜で使用するゆで卵を作る為に冷蔵庫から幾つもの生卵を取り出した時であった。

「あれ、この卵…なんか色違うな？」

他の白い卵とは違い、所々に黒い斑点が目立つ異様な卵。しかし、青年は怪しいと考えたのはそこまでだった。

(ま、いっか。茹でれば一緒だろう)

迷うことなく他の卵と共に鍋へと投入し、ガスコンロを点火したアルバイトの青年は茹で上がるまでの時間をタイマーでセットし、他の作業へと取り掛かる。これが恐るべき怪人を生み出すことになるとは知らずに…

間桐家へと招待された青年は差し出されたお茶をゆつくりと啜る。味にはどこかで口にした記憶があり、少なくとも自分は光太郎達と同じく日本…もしくはそれに近い国の出身かも知れないと推測を重ねていた。

青年の判断材料は無論緑茶の味に覚えがあるという単純なことだけではなく、壁に貼られたカレンダーや本棚の背表紙に掛かっている漢字や日本語が読み取れる点からもだ。

こうして徐々に突き詰めていけば、自分が何者か思い出す日は近いと意気込む青年に慎二は焦る必要ないんじゃない？と相変わらず本から視線を外さず声を掛けている。

余程自分の行動が分かりやすかったのだろうか、青年は自分の内面を見抜いた事に目を丸くした。義兄である光太郎を上手く丸め込んでこき使う口八丁といい、少年の観察眼に感服する。そして、先ほどから一切会話を発生させずとも気にかけてくれる慎二の言葉はありがたいと思う青年だったが、だからこそ早く自分の記憶を呼び戻したいと考えていた。

これ以上、自分という異物が紛れ込むことで迷惑を被る前に、いなくなるべきだ。

青年はこの家に住まう人々：器用に片手で本を手に持ったままページを捲る慎二、ニュースの報道番組に釘付けになっているメデューサ、メインであるビーストログノフの仕上げにかかっている桜へと順番に目を向ける。そしてこの場にはいない光太郎を含め、全員がそのようなことを気にせず受け入れてくれる心優しい人々であると重々承知している。

だからこそ、自分は早く消えなければならない。

ずっと聞こえてくる『声』がさらに大きくならないうちに。

——お前はいるべき場所は、そのような場所ではない

——お前がいるべき、相応しい場所は——…

——この私の——として…

診療所で目覚める直前と、メデューサから光太郎がいかなる人物であるかを聞いた直後からそう自分に投げかける、自分の耳にしか聞こえない悍ましい声。

様子を窺っている慎二にそれだけは悟られぬよう隠しているが抑えれば抑え込む程、声は強くなっていった。

声の主は誰なのかはわからない。

自分に関係する者が囁いているのか、それとも自分自身の内なる声なのか…

どちらにしろ自分のような危険人物は彼らと共にいるべきではないと考えた青年は何かしらの隙：一人きりになる状況となった時、この家を抜け出す決意を固める。庭を見てみたいとでも言えば警戒されることはないだろう。

光太郎は記憶が戻るまで家にいればいいと言ってくれたが自分が何者であるか思い出すことは家を離れた後でも遅くはない。

光太郎へ感謝を述べずに去るのは心残りとなるが、意を決した青年は立ち上がろうとしたその時だった。

慎二はパタンと本を閉じ、メデューサはテレビをリモコンで電源を落とし、桜に至っては調理作業を全て中断し、刻んだ野菜にラップを張っている。

3人が全く同じタイミングで中断したことに青年はもしや自分の行動が見抜かれたかと冷や汗を流すが、当の3人は互いに目配りすると別々に動き始めた。

桜は駆け足で自室に向かい、慎二とメデューサは何やら話しこんでいるようだが事情が呑み込めない青年は恐る恐る慎二へと尋ねてみる。

「その…何かあったのか？」

「…30分たった」

「え…？」

ソファアの底から縦長のケースを取り出しつつ、階段を3つほど飛び越えた返答に困惑する青年にメデューサの補足が入る。彼女の表情に先程の優しい微笑みはない。

「…光太郎が本日向かったのは近所のスーパーです。いつもなら御用達の商店街を利用するところですが夕食に合わせてそちらへと向かったのでしょう。光太郎がバイクを使用しスーパーまで到着するまで7分。御米を見つけ、その他の購入物を探した時間を加えても10分。そして帰宅するまでに7分…つまり光太郎が外出し戻ってくるまでは24分前後でなければなりません」

補足というより光太郎の観察記録を聞かされている青年の頬に汗が流れる。

「…光太郎はどこかに寄り道する場合は必ず遅れるって連絡を入れる。馬鹿みたいいきつちりね…その連絡なしに遅くなるってことは何かに巻き込まれた可能性が高い」

「なっ!？」

ケースから応急処置で溶接されたライフル銃を取り出す慎二からの言葉に幾らなんでも極端ではないかと口から出かかった青年だったが、すぐに押し黙る。

心配性と言っても過言ではない対応ではあるが、彼等にとってはもう『当たり前』となっていている一面なのかも知れない。

（あの者は、常に危険と隣り合わせということなのか。そして、彼等もまた…）

青年にはあどけない笑顔しか向けることのない光太郎と家族である慎二達が日頃対峙しているものとは、一体なんなのか。その疑問は数刻後に判明することとなる。

「お待ちせしました」

背中まで届く黒髪を頭頂部でまとめた桜の姿はジーンズにライダースジャケットを身に付けた彼女なりの戦闘衣であり、袖から見える手首には亀裂の走った赤い手甲が装着されていた。

「姉さん…光太郎兄さんは？」

「聖杯戦争時ほど強くは感じられません…恐らく、『変身』していません。そして、力が徐々に弱まっているようです」

「ちえっ…今日は静かに終わると思ったのにさ」

転生してからも光太郎とはキングストーンの力により繋がりのあるメデューサの分析に愚痴を零した慎二はケースを肩にかけ、他の2人と共に玄関へと向かう。何かを思い出したかのように振り向くと、青年に向けて告げるのであった。

「悪いけど、夕食ちよつと待ってて貰える？なるべく早く済ませてくるから」

「後は盛り付けるだけですから、光太郎兄さんと帰ってから一緒に食べましょうね！」

少年に続き笑顔で話す少女はまるで近所で用事を済ませてくるよ
うな、気軽が声であった。

「それでは、行ってまいります」

最後に会釈したメデューサと共に、3人は今度こそ外へと向かっていく。窓から見ると、青年が気が付かぬ間に2台のバイクが停車しており玄関の前でエンジンを吹かしていた。青いバツタのようなバイクには慎二が、赤と白のオンロードバイクに桜が搭乗。

そしてメデューサの身体から紫色の力がユラユラと立ち昇ると彼女が纏っていた衣服が変貌。すらりとした手足を大胆に露出した戦闘装束の姿となったメデューサが地を蹴り、電柱や民家の屋根を足場にして移動を開始したと同時に慎二と桜もバイクを急発進させ、後を追うのであった。

「……………」

今、間桐邸にはただ1人しかない。青年が望んでいた展開通り、このまま光太郎達の帰りなどみだず、家からいなくなればいい。そうすれば、彼等が迷惑を被ることはなく消えることができる。

だが、青年は慎二達が戻らぬ長兄達の元へ向かう前に聞こえたある単語が耳から離れなかった。

「変……身……」

思わず自分の口に出した途端に、響く頭痛。

知っている。

その言葉を、青年はよく知っている。

だが、完全に思い出すには至らない。

しかしきつかけとしては十分だったのだろう。その証拠に頭に響く今の自分を否定する声はさらに強くなっている。そしてノイズ混じりに浮かぶ様々な風景。確実に、徐々に、彼は思い出そうとしている。自分が何者であるかを。

(だからこそ、長居は無用だ)

そのイメージの中で一番多かったのは、斬り捨てた記憶。数え切れない、多くの者を自分は手に掛けた。手に馴染み過ぎた感覚が段々と蘇ってくる。なおさら、自分はあの者達といえるべきではない。

青年は額を抑えながら玄関の扉を開け、外へと向かう。

門を飛び越えた青年は、短時間とはいえ滞在した洋風の屋敷を見上げる。最初こそその年季の入った造りに恐れ入るものがあったが、あの者達が帰るべき温かい印象が残る場所へと見方が変わった。

もう、自分が敷居を跨ぐことはないだろう。

青年は視界に間桐邸が映らないようにして、駈け出して行った。

「くう…ぐッ!!」

苦悶の声を上げる光太郎は現在、手術台の上に手足を厚さ15センチは超えているであろう金具で束縛されている。その程度であれば光太郎はキングストーンに頼らなくとも引き千切ることは可能であるが、問題は彼が浴び続けている光に原因があった。

(まさか、あの時と同じものだなんて…)

スーパーに突如出現した怪人と対峙した光太郎は仮面ライダーへ変身。暴れながら食品を貪り食う怪人を建物の外へと追い出し、被害の及ばない広場へと怪人を追い詰めた。

今考えてみれば、それ自体が罠だったかも知れない。

怪人は未だ身体が成熟しきっていない為か、光太郎が牽制で打ち出した攻撃でもがき苦しんでいた様子であり、好機と踏んだ光太郎は一撃で決着をつけるべく、両手を左右に広げ、拳をベルトの前で重ねた時であった。

空中を浮遊する小型の機械が光太郎の四方、八方と現れ一斉にビームを照射。

光太郎の力が抜けてしまい、キングストーンの力も弱まる結果となってしまうた。

光太郎が浴びた光はかつて暗黒結社ゴルゴムがキングストーンの力を封じる為に開発した兵器。慎二と桜によって不発に終わるものの密かに回収され修復したものをクライシスが強奪、光太郎が初めて闘った際に使用されたものをさらに強化したようだ。

膝を付いた光太郎に怪人は爬虫類特有の目を鋭くつり上げ、光太郎へ反撃を開始。手出しできない光太郎はダメージを抑えるために、攻撃を受ける際に咄嗟に防御するか、受け身を取ることしかできないでいた。

このままじゃ慎二君達に叱られるなあ、などと怪人の攻撃を受けながらも呑気なことを考えていた矢先に新たな敵が現れる。

『シャアアアアアア…』

威嚇とも受け取れる声を震わせて現れたのは、同種の怪人が2体。ただし、色が青・赤と異なっており、身体も一回り大きい。これは覚悟を決めなければと震える膝を叩き、立ち上がった光太郎へ怪人2体は攻撃することはなく、なぜか光太郎を抱きかかえて何処かへ移動を

開始する。

そしてたどり着いた場所は……

(縁が有り過ぎるな…)

10年程前、幼い慎二と殺人鬼に遭遇し、半年程前に慎二と桜を誘拐したゴルゴムの剣聖ビルゲニアが拠点として使われた廃工場。その中央に設置された手術台に現在、光太郎は拘束されて機能停止ビームを受け続けている。ご丁寧に日の光が入ってこないように窓には全て暗幕が敷いてある辺り対策は万全のようだ。

光太郎が苦しむ光景を愉快そうに飛び跳ねて眺めている小柄の異形は背後に自分へ襲い掛かった怪人と洗脳したゴルゴムの怪人素体、雑兵のチャップ達を従え、歪な口をさらに歪めて耳元でワザとらしく大声で叫んでくる。

「どうだどうだ今の気分はツ？このゲドリアン様にかかればお前を倒すことなんてお茶の子さいさいなのだツ!!」

なぜ日本の俗謡が由来である言葉を知っているのかというのは兎も角、確かにしてやられてしまった。同じ目に合うなど油断以外の何物でもない。どうにかこの場を何とかしなければと両手に力を込めるが、思うように動かない。

だが、光太郎は気が付かなかったが、彼がどうにか動かそうと手足に力を込めている時点で、ゲドリアンは内心で焦り始めていた。

(ウソだろ…なんで『動ける』んだよ)

そう、以前ならば一度ビームを浴びてしまえば指一つ動かせない状態に陥っていたはずなのに、現在の光太郎は強化されたビームを浴び続けながらも脱出しようと手足に力を込め続けている。RXとなっ

たことで力を得たのか、それともこの短期間で機能停止ビームに対する免疫が上がっているのか：いずれにせよ、この男はこの場で始末しなければならぬ。

「よしお前らッ！要塞との映像を繋げッ！動けないこいつを処刑する俺の姿を、ジャーク將軍にお見せするのだッ!!」

ゲドリアンの命令に従い、数人のチャップが通信用のカメラを肩に乗せた途端、カメラは突如炎上し驚いたチャップは逃れる為に放り投げってしまう。

「ああ、ガテゾーンの部屋から黙って持ってきた機械を：お前何てことしやがるッ!」

「それはこちらの台詞ですっ!!」

「さ：：桜ちゃん：：?」

ガテゾーンが聞けば無言で銃口を向けかねない発言をするゲドリアンはチャップを張り倒そうとしたが工場の入り口からカメラを仕留め、自分に向かい怒号を浴びせた存在の方へと目を向ける。

光太郎に名を呼ばれ、カメラを炎上させた犯人である少女は新たに矢を番え、狙いをゲドリアンへと定める。その背後にはライフル銃に弾丸を装填する少年と、鎖を握りしめる長身の女性が控えていた。

「なんだお前らはッ!」

「そこでおねんねしてる愚兄の身内だ」

「客人を待たせていますので、早々にお引き取り願います」

堂々と光太郎の家族である事と彼を解放しろと宣言した慎二とメデューサ達の顔を見て、はてどこかで見覚えがあると顎に手を当てるゲドリアンはああと思いつき出し、ケタケタと嫌らしく笑う。

「ケケケ：：誰かと思えばRXのオマケに元サーヴァントじゃねえか？わざわざ死ににきたってかあッ?」

腹を抱えて嘲笑うゲドリアンだが、突如工場内に響く銃声と共に、上半身を大きく仰け反ってしまう。何事かと慌てるチャップ達が見たのは、煙を吹くライフル銃をゲドリアンに向けていた慎二。慎二は

ゲドリアンが笑い終えたその直後に銃を構え、躊躇なく引き金を引いたのであった。

弾丸は外れることなくゲドリアンの頭部に向けて放たれ、慎二の狙い通りならあの薄汚い口を貫通したはずだが…

「…残念だったなあ小僧」

仰け反っていた上半身をゆっくりと戻したゲドリアンの口部の周りある左右の牙が伸び、煙を上げる弾丸を受け止めていた。顎の奥にある口をニヤリと歪めるゲドリアンを見た慎二はライフル銃を肩に乗せると特に悔しがる様子もなく不意打ちを凌いだ敵へと称賛を送る。

「へえ…流石は敵の幹部さん。早打ちの練習散々したんだけどなあ」

「ケケケツ！残念ながら俺様にこんな小さい玉じゃ——」

ゲドリアンが上機嫌に笑っていたのもつかの間。牙で摘まんでいた弾丸が突如光を放った直後に爆発を起こす。

「ぐ…ギャオオオオオオオッ!!」

両手で顎を抑えるゲドリアンは余りの痛みにのた打ち回り、フーと息を乱して再び慎二を睨んだ。先程とは立場が逆となり、慎二の方が得意げの表情を浮かべ、ゲドリアンの口元で爆発した弾丸と同じものを指で弄んでいる。

「さっすが若奥様お手製だよ。時間差で爆発するなんて、えげつないねえ…」

してやったりとすまし顔の慎二ではあるが、内心ではゲドリアンの発言に激しい怒りを抱いていた。光太郎をあのように痛めつけていることは勿論だが、自分達を光太郎のオマケ扱いしたことだけは絶対に許さない。それは隣に立つ桜とメデューサも同意しているようであり、手に持っている得物を握る手に力が籠っている。

ヨロヨロと立ち上がるゲドリアンは黒ずみとなった口を押えながら控えていたチャップと素体達へと命令する。たかが地球人如きにクライシス帝国の牙隊長である自分がコケにされるなどゆるされないのだ。

「も、もう勘弁ならねえッ！やっちまえ野郎どもッ!!」

ゲドリアンの命令で一斉に走り出すチャップと素体達。新たな弾丸を装填した慎二に続き、桜・メデューサも戦闘態勢に入った。

彼等が戦いを始め時、壁一枚を隔てて敷地内の様子を伺っている者がいた。

(状況は、あまりよくないな)

青年は間桐邸を出て、もう関わることはないと決意したはずだった。

しかし、家から離れれば離れる程、頭に響く謎の声すら霞むほどに彼等の存在が大きくなってしまっていた。

気が付けば青年は慎二達が向かった方角へと身体を向け、無我夢中に走り始めていた。

そして辿りついた廃工場：偶然にしては出来過ぎているが今は感謝するしかない。

見張りのチャップ数体は先に潜入したメデューサ達によって既に倒されており、彼らの持つ棍棒を拝借して足音を立てぬように移動。ついには敵との戦いを始めた慎二達を発見する。

戦闘に関しては、見事としか言いようがない。

慎二の攻撃は遠距離からの精密射撃のみと判断したゲドリアンはチャップや素体達に接近戦をしかけるよう指示を送るが、慎二は敵が刃物で切りかかると銃身を両手で持ち、チャップの顔面へ銃床を叩き込んだ。銃を鈍器替わりにするという危険極まりないが、だからこそ相手も見抜けない戦法なのだろう。

桜は離れた相手は爆発する術式が組み込まれた矢を。接近した相手には青年も身をもって知った掌底や蹴りを繰り返す等、安定した闘法で敵を退けている。

メデューサは2人と比べ身体能力が高く雑兵如きでは敵わないと踏んだゲドリ안의指示でトカゲのような怪人を相手にしている。

青年は当初、光太郎の救出を第一にした行動を取ると予測していたが彼等の力はそれを上回っている。

だが、青年はこのままでは目的を果たせないと結論付けていた。メデューサが相手をしているのは他の個体と比べると小さい1体のみであり、他の色違いは立ち位置を変えず、ゲドリ안의背後へと立っていた。加えて、口元が黒いままのゲドリアンは敵が乱入したというのに慌てる様子もなく静観している。

それどころか、自分の部下が次々と倒されている光景を目の当たりにして笑っているのだ。

(あの余裕な態度。何かをまだ隠し持っているという事か)

分析する青年はゲドリアンの後方で手術台で拘束されながらも3人の戦いをもどかしく見つめる黒い戦士へと視線を向ける。

(彼…なのか)

戦士から聞こえた声と慎二が光太郎と呼ぶことから間違いはないだろう。経緯は分からないが光太郎は姿を変えることができる特異な人物だったようだ。しかし、青年は光太郎が変身できるという事実より、現在の光太郎の姿…仮面ライダーBLACKを見てさらに頭痛が酷くなっていた。

(…あの言葉を聞いた時よりもさらに強くなっている。やはり、俺は知っているのか、彼を…いや、あの姿を)

「ケケケ…やるもんだな」

未だ戦闘中であるメデューサを除き、慎二と桜は大半のチャップと素体を地に沈め、警戒を解くことなくゲドリアンへと武器を構える。拘束された光太郎はゲドリアンの後方。近づいて助けるには容易で

はないが、手段がない訳ではない。懐に忍ばせた閃光弾やそれ以外に隙を作り、怯んだ際に3人の中で俊敏性に長けるメデューサが光太郎を解放する…

敢えて全力で戦わず、怪人へ牽制を続けるメデューサへの合図は慎二がゲドリアンを挑発し、激高した直後。相手を怒らせることには秀でている慎二に取っては造作もない十八番であるが、さあどう言い負かすかと出方を伺った時、慎二の足元に突如として液体が落下する。

漏水や雨水などではない、ヌメリと嫌悪感が走るそれは、生物の唾液。

「…ッ!？」

まさかと思い天井を見上げた慎二の視界に映ったのは、天井を覆い尽くすほどに張り付き、鉄骨にぶら下がっているトカゲの怪人の大軍だった。見る限り、メデューサと戦っている怪人の幼体なのだろうと判断する慎二にゲドリアンの大声が届く。

「ヒャアーハハハハハッ!!ようやく気が付きやがったか…さあ、キュルキュルテンども、やっちまえッ!!」

『シャアアアアアアアアッ!!』

ゲドリアンの言葉に従い、一斉に飛び降りたトカゲの怪人は着地と同時に慎二と桜へ向かっていく。

怪魔異生獣キュルキュルテン

流星に偽造して地球へ降下させた多量の卵を地球人の体内に植え付け、寄生させ意のままに操りクライシス帝国の労働力として利用することが本来の計画であった。

しかし、地球では孵化に必要な温度に達していなかった為にほとんどが卵のままであり、偶然孵化し成熟した2体によって卵を回収。廃工場で放棄されていた巨大な容器の中で温めることで次々と孵化させる事に成功した。

だがその容器内に付着していた化学物質が原因で孵化したキュルキュルテンは本来の半分にも満たない大きさである幼体のままであった。

成熟した2体には及ばないが、人間を追い詰めるには十分であった。

「ぎゃあッ!?!」

素早く動く複数の敵に狙いが定まらず、迷った桜の背中に走る痛み。身体を丸めたキュルキュルテンの幼体が体当たりを受けてしまった桜は武器である弓を手放してしまい、とっさに手甲に魔力を込めてようとしたがキュルキュルテンの方が早く動いてしまった。

桜を囲うキュルキュルテンの幼体達は大きく口を開くと泡を吐き出し、その泡を浴びせていく。

「うツ…なんですがこ…れ…」

身体に付着した泡を取り除く為に手甲から放つ炎で蒸発させようとした桜だったが突然意識が朦朧とし、その場で倒れてしまった。

「さ、さく…ら」

桜同様に敵の泡を浴びてしまった慎二はライフル銃を杖代わりにして倒れることをは無かったが呼吸が荒くなり、自分の体温が急激に上がっていくように感じ、倒れた桜の顔が赤くなっている様子を見て敵の能力を見抜く。

「あの、怪人の泡は…人に高熱を出させるのか…よ…」

「シンジツ! サクラッ!」

ついに床へ伏してしまった慎二と桜の姿を見たメデューサは相手をしていたキュルキュルテンを蹴り飛ばし、救出に向かおうとその場を跳躍する。しかし――

「なっ!?!」

「シヤアアアアアアアアアッ!!」

今までゲドリアンの背後で控えていたキュルキュルテン2体は既にメデューサの背後におり、彼女にしがみ付きそのまま落下すると組み伏せてしまう。振り切ろうと懸命に身体を振るがキュルキュルテ

ンもよりメデューサを拘束する力を強め、抜け出さない。現れた曲者を片付き、上機嫌となったゲドリアンは自分の家族が次々と倒れていく姿を見せつけられた光太郎に対し、高笑いを放っていた。

「ギャハハハハハハッ!! どうだどうだRXツ? 貴様を助けに来た連中は全員潰れたぞ! それにあの小僧と小娘はあと何分持つのかねえ…」

「き…様アツ!!」

怒りの衝動を抑えるつもりもない光太郎の手首を固定していた金具に亀裂が走っていく。それを見たゲドリアンは慌てて手元にあるコントローラーを操作し、光太郎に向けて放たれている機能停止ビームの出力を更に強めた。

「が、アアアアアアッ!」

「お、驚かせやがって…だが安心しろよ。アイツらの前にまずお前を処刑してくれるツ!!」

「こ、光太郎ツ!!」

「いかん、あのままでは…っ!」

光太郎の姿を見て痛む頭も、自身の正体など全ては後回しだ。悲鳴を上げる光太郎に迫るゲドリアンの鋭い爪。

彼等を助ける。

それだけのために駆け出そうとした、その時だった。

「な、なんだ…?」

全てが静止している。

高熱に苦しみながらも義兄に迫る凶刃に向かい叫ぶ慎二と桜も、どうにか拘束を逃れた片手を必死に光太郎へと伸ばすメデューサも、主の機嫌に合わせ、飛び跳ねているキュルキュルテンの幼体も。

身動きできない光太郎の横まで移動し、上を見上げて笑うゲドリオンも。

まるで時間がとまってしまったかのように、動かなくなっている。

青年がおかしいと思ったのはそれだけではない。なぜ、自分が動けるのだろうか？

「どうするつもりだい？今の君には何の力もないというのに」

その疑問に答えられる人物の声が青年の背後から響く。

急ぎ振り返った青年の前にいたのは、男だった。

どこか人を食ったような表情を浮かべ、微笑みを絶やさなのまま歩み寄ってくる男に対して青年は警戒しつつ、相手が何者であるかを尋ねてみる。

「誰だ、お前は…」

「僕かい？なに、通りすがりのトレジャーハンターさ」

「この現象は、お前によるものか？」

「中々冴えているじゃないか。そう受け取ってもらっても構わないよ」

曖昧な回答に敵として認識し、青年は握った棍棒を突出し、青年の喉元へと触れる。少しでも力を込めれば喉を潰すことが出来るというのに、男の態度は崩れない。

「まあ落ち着きたまえ。僕は君の敵ではないさ」

「…何を根拠に、そんなことを言える？」

「証拠を見せればいいのかい？なら簡単だ」

「君の失った『お宝』を見せればいいのかいだろうか？」

自分の…宝？

訳のわからない言葉に目を細める青年の反応にニヤリと笑う男は棍棒をゆつくりと払う。青年も特に抗うことなく手を下ろすがトレジャーハンターを名乗る男に気を許した訳ではない。

さっさと要件を聞き、光太郎達を助けに行かなければならないのだ。

「宝とは、何のことだ？こちら時間も無い。さっさと話してもらおう」

「…へえ。話に聞いていたのとはずいぶん違うな。まあ、当然と言えば当然か」

「なんの事だ？」

「ああ、こちらの話さ。でもその前に君は君である事を思い出さなければならぬね」

表情を崩さない男がいつの間にか手に取っていたのは、派手な装飾が施され、銃口部分が異様に大きい銃だった。

男が武器を取り出したことで一歩下がりが、両手で棍棒を構える青年だが、男は銃の引き金に指をかけてクルクルと回し、懐から一枚のカードを取り出す。

「落ち着きたまえ。これは君を傷つける為に使うものではないよ。しかし…」

ピタリと止めた銃の側面にカードを差し込み、スライドさせると銃身にバーコードのような紋章が現れ、電子音声が発せられる。

『ATTACK—RIDE』

『REMIN』

「痛みが一瞬、あるかもね」

訳の分からない言葉を男が放った直後、銃口を上空に向けてトリガーを引く。

銃から放たれたエネルギーが上昇し、突如軌道を変えて青年へと降り注ぐ。

「グッ!？」

両手を交差して防御をするがエネルギーは青年の全身を覆い、その力を記憶の底へと浸透していく。

まるで狂った歯車を噛みあわせるために、パズルの失ったピースをはめ込んでいくように、青年の記憶にあるノイズ全てを除去するかのような効果をもたらした。

「こ、これは…」

「さあ、思い出すがいい」

「自分が何者で、どのような事をしてきたのかを」

青年は全てを思い出した。

光太郎達に出会う前。いや、怪魔界でワールドに発見され、治療を

受ける前に、自分は何者であったのかを。そして、自分の目的の為にどれ程の命を散らし、光太郎と『似た者』達を利用してきたのかを。

「……………」

カランと、手にした棍棒が落ちる音が異様に大きく聞こえた。

「どうだい？全てを思い出した感想は？」

「…最悪だ」

「だろうね。君の意思はなかったとしても、君自身が起こしたことだ」
青年に対して、男は容赦ない言葉を浴びせる。先ほどまでにからかうような感情が籠っておらず、だからと言って青年を責めるような刺もなかった。ただ、青年の過去に対して自分の感想を述べたにすぎないのだろう。

そして立ち尽くす事数秒。青年は男を背に向けるとしつかりとした足取りで光太郎達の元へ向かっていく。

「…早く時間を動かせ。俺にはしななければならないことがある」

「聞かせてもらえるかい？それは何なのか」

「決まっている。彼等を助けることだ」

男は再びからかうような笑みを浮かべ、青年に問いかける。

「もしや、彼等を助けたことで自分のやったことが帳消しになるとでも考えたのかい？」

「今更そんなことで消えるなど都合よく思っていない。俺が、そうすべきと考えているからだ」

青年の声には過去に犯した罪で自分を責めているような、弱々しきを感じない。だが、男は青年が直ぐにでも光太郎達を救出に向かうことにそれだけは納得が出来なかった。

「なら、その理由を聞かせてくれないかな。君を助けた事への恩か？それとも、助けた後に何かを要求するつもりか？」

「…お前は知らないようだな」

「誰かを助けることに、理由など必要ない」

振り向いた青年の表情には迷いは一切ない。青年の回答に面食らった男だったが、直後にからかうわけでもなく、優しく微笑えんだ。

「…過去に苛まれるよりも今日の前にいる者を守る、か。そんな考えは嫌いじゃない」

頷いた男は再度何処からともなく取り出したアルミ製のアタッシュケースを手に取ると青年へと放り投げた。

「受け取りたまえ」

「…なんだ、これは？」

両手で受け取った青年はアタッシュケースのロックを解除し、ゆつくりと開いていく。そこにあつたのは…自分との因縁深い2つの道具。

「さつき言った君の世界で手に入れたお宝さ。しかし、どうやら僕の手元にあるよりも、君が持つことに価値があるようだ」

「お前…」

「ただし注意したまえ。ご覧の通りの状態だから使用できるのは、あと一回が限度だろう」

注意を促した男は人差し指で青年を差し、まるで銃を撃つような仕草をすると踵を返して去っていく。

「…感謝する」

青年の言葉が聞こえたのか、片手を上げて歩んでいく青年の前方に灰色のオーロラが出現。男がオーロラを潜ると同時に、消失したのであつた。

「慎二…くん。桜ちゃん…」

(こ、こいつ…出力を10倍にしたつてのに、まだ変身が解けない上に動こうとしてやがる)

追い詰めているにも関わらず戦慄が止まないゲドリアンであるが、あと一撃を加えるだけでこいつは死ぬ。キングストーンも防御に使うエネルギーも回せないはずだ。

右手の爪を伸ばし、いざ串刺しにしようと腕を振り上げる途中、更なる乱入者が現れてしまった。

「まてッ!!」

その声にゲドリアンやキュルキュルテンだけでなく、高熱で苦しむ慎二や桜、そして光線を浴び続ける光太郎も顔を向けた。

「あ、あんた…!」

「どうして(こ)に…?」

「……………」

無言で歩み続ける青年をキュルキュルテンの幼体複数が囲うが、青年に慌てる様子はない。ゲドリアンは先程慎二にしてやられた教訓から容赦なく攻撃するように命令したようだ。

「誰だ知らないが、命知らずな奴…さっさとくたばるがいい!!」

どうやらダメージを受けている慎二や桜よりこちらを優先して倒す事に専念してくれているようだ。

彼等を囲っていた幼体が次々とこちらへと集い、八方塞がりとなっている。

だが、不思議と落ち着いている。

まるで、あの時のような状況だと、青年はゆっくりと息を吐くと先ほど受け取ったものの一つを下腹部へと当てる。同時に右端からベルトが飛び出し、青年の腰を一周して左端へ接続・固定される。

「あ、あれは…」

青年が装着した装飾品…形は違えど彼女が良く知っているものと似ている…いや、近いものかもしれない。そして青年は右手にもった『それ』をゆっくりと掲げていく。

『それ』を使うことで再び自分を失う可能性もある。そして、再びそのようなことを繰り返すことも…

だが、青年は決めた。過去のような過ちを犯さない。その為に強い心を持つと。

光太郎達が教えてくれた、ただ誰かを助けるためだけに。

(もう二度と、俺は『俺』に負けんツ!!)

決意と共に、青年はその言葉を轟かせた。

「変身ツ!!」

『ブラッドオレンジ!』

青年が叫ぶと同時に手にした傷だらけの錠前：中央に黒い斑模様の走った真紅の果実が装飾された『ロックシード』を開錠したと同時に青年の真上に突如として現れたファスナーが円を描くように空を切り裂き、ペラリと捲れてしまう。

裂かれた空間は工場とは異う場所なのか、暗い空と植物に囲われている。

そして空間の隙間からゆっくりと降下する錠前の柄と同じく血のように紅い球体：

誰もが目を奪われる現象の中、青年だけは行程を進めていた。

ベルトの中央にある窪みへと錠前をはめ込み、上から錠を押し込むと力強く爪弾かれたギター音が周囲へと響く。

青年はベルトの右側に着けられた小刀のような装飾：カツティングブレードを握り、振り下ろすことでロックシードが展開、キヤスパレットが現れたことで紅い球体は急降下。

青年の頭に被さってしまう。

余りにもシュールな光景に敵も味方も茫然とするが、それだけでは終わらない。

球体から流れるエネルギーが青年を紺色のアンダースーツ・ライドウェアで包むと球体は前後、左右と四方へとゆつくりと展開。青年の背中、両肩、胸を守る鎧と化し、その中から現れた三日月形の角飾りを持つ鎧武者のようなヘッドギア。

単眼である複眼は赤く、黒い模様が走っていた。

果汁のようなエネルギーが飛び散り、腰には長刀。右手には果物の断面のような刃を持つ短刀を握った青年の周囲にヒラリヒラリと紅い花卉が舞い落ちる。

『ブラットオレンジアームズ!』

『邪ノ道オンステージ!』

電子音声が鳴り響く中、青年は散る花卉の中で変身を遂げた自身の名を告げるのであった。

「武神鎧武、推して参る!!」

第11話

とある世界

とある国

そこでは天下を統一する者の座をめぐり常に争いが絶えない乱世の時代であった。

全国の武将達は『武神ライダー』と呼ばれる戦士を従え鎬を削り合いい、いつ果てる事のない合戦が繰り広げられていた。そんな終結の見えない戦いに一石を投じる1人の武神が現れる。

その名は武神鎧武。

凄まじき力を振るう武神鎧武は次々と他の武神ライダーを倒し、刃向う人間は従えた怪人に命じ手当たり次第に血祭りにあげていた。

全ては巨大な神木へ全武神を取り込むことで絶大な力と天下をその手にする為に。

だが、本来の彼はただ平穏な世を望む心優しい1人の人間だった。

彼は農民の出身の兵であり下にいる多くの兄弟を支えるながらも君主に仕えていた。空いた時間があれば家族の面倒や農業に費やす姿に同僚や主すら感服するほどである。

彼は自分が忠義を誓った君主とその武神がこの荒れた国と民草を救い、導いてくれることを信じて主へ尽くし、己を鍛え続けていた。

何の役にも立たない自分だが、それでも君主の力になりたい。

青年はその一心で武芸を独学で学び、都に聳える巨大な御神木へと祈り続ける。

どうか、我が君主の手に勝利をと――

「そんな他力に頼るより、自分で天下を取ってみるってのはどうだい、若者？」

何の前触れもなく青年の背後に現れたのは、民族衣装を纏った男だった。大柄な体に布で口元を隠していても、青年の慌てる様子を楽しんでるように笑っていることが伺える。腰に差してある当に切れ味を無くして久しい刀を抜くが、それでも男は臆することなく話続けた。

「この世界を随分と長く眺め続けているが全くつまらん。武神なんて大層な連中に戦わせてはいるが全てが平行線。変化つてのが起ころうともしない。天下人なんて奴が現れる前に全員野垂れ死ぬつてのがオチだろうよ。無論、お前さんの主もな」

青年には目の前で両手を振るいながら大げさに語る男の言う事が一辺の理解も出来ない。だが、唯一つ理解できたのは、自分の君主と盟友たる武神を侮辱したということだった。この無礼者が吐いた言葉を訂正させようとするが、それよりも早く男は青年へ果実を差し出した。

不気味でありつつも、何故か異様に食欲がそえられる果実が男の掌の上で形状が変化。血のように紅く、黒い模様が走る果実が表面に描かれた錠前へと変わってしまう。

それと合わせ、小刀の付いた妙なバックルを出現する。青年にとっては、見慣れたものであった。なぜなら、『武神ライダー』と呼ばれる者達が腰に装着しているものと、余りにも近いものだったからだ。

「だが、これを使えばお前が変化を作るきっかけとなる。気の遠くなるような戦いも、兄弟達が腹を空かせる日も、全て終わらすことが出来るんだ。誰でもない。お前の手で」

甘い誘惑の言葉。青年は戸惑いながらも必死に抗おうと伸ばした腕を自身の手で制する。だが、その迷いを見過ごす男ではなかった。

「それに、全てが終わっちゃった後にその座を主殿に譲っちゃえばいい。お前の敬愛する主と憧れの武神が傷一つ負うことなく、天下人になれるんだぜ？」

「…こんなにも都合のいい話、あると思うか？」

青年の意識がはつきりとした時には男の姿は既になく、その手にはバツクルと錠前が握られていた。

戸惑いながらもバツクルを腰に装着し、中央に錠前を取り付けた青年は震える手でバツクルの小刀：カッティングブレードを握る。

消えた男の言った事が真実なら、自分の手で乱世を終焉させることができるのなら…それが主や家族の為になるのならば

全ては、終わらせる為。

そう願う男は刃を錠前へと下ろす。

それが、惨劇の幕切りとなった。

武神鎧武へと姿を変えた青年が向かったのは隣国の城。堂々と正

面の門を潜り、天守閣へ進む道中に妨げようとする者達を次々と切り捨てる。赤黒い液体が振りかかるが気にも留めず、標的である武神の元へと向かった。

そして天守閣へたどり着いた武神鎧武は君主を庇うように立ちはだかった武神と対峙。互いに武器を構え幾度か切り結ぶ中、武神鎧武は自分と押し合う武神の力へ驚愕する。

こんなものだったのか、武神の力は、と。

武神鎧武は力押しで相手の体制が崩れた一瞬、腰に備えた刀を抜き、計5回、敵対する武神へ斬撃を叩き付けた。武神の手から武器が落ち、崩れ落ちる姿を眺める事しか出来ない城の主は繰り返し武神の名を告げるが返事をする事はない。

武神鎧武は倒れた武神の胸倉を掴み、ズリズリと身体を引きずりながら城を後にする。

後を追う者など、いなかった。

御神木の前に立った武神鎧武は意識を失った武神を放り投げる。放物線を描き落下した武神は深い湖へと沈むように大樹の中へと消

えていった。

こうして武神を人柱として御神木に捧げれば強大な力が手に入る。そう確信した武神鎧武は次々と武神達に戦いを挑んでいった。

倒した武神を逐一御神木の前へと連れて行く手間を省く為に転送能力を持つウツボカズラ怪人を配下にし、より効率よく武神を倒し、捕獲する算段のついた武神鎧武の快進撃は止まらない。

敵を倒す度に絶望する敵の兵を冷笑し、自身に溢れる凄まじき力に高笑いする武神鎧武。

だが、『内側』では真逆の感情が渦巻いていた。

やめろ

頼むからやめてくれ

武神鎧武の深層意識の更に底。無数の蔦に絡まれた青年が血の涙を流し、戦い続ける武神鎧武へと叫び続けていた。

変身したその時から、青年の身体は別の意思によって奪われてしまいい、彼は自分の手で殺戮が繰り返される光景を見せつけられていく。

自分の意思に反し、敵対しても憎んではない敵国の武神を下し、配下である怪人に命じて多くの兵や民を虐殺する無常さ。

その全てを、青年の身体で行われていた。

嘆き、止めて貰おうと懇願しても青年の声は武神鎧武に届くことは無かった。

それでも青年は止まるよう呼びかけ続けるが、自分の行動は無駄だと言う人物が現れる。

自分に武神へと変わるきっかけを作ったあの男だ。

『今、アイツがやっている事はお前が望んだことを実行しているにすぎないんだぜ？』

『つまりだ。あの武神の意思はお前の意思。天下を取ると言う野望も戦いも殺しも——』

『お前がやったことなんだよ…』

蛇のように身体をよじ登り、耳元へ囁かれる言葉に放心状態となった青年が目にしたのは、自分が仕える君主が膝をつき、途方に暮れる姿と、『自分』の手により御神木の中へと消えていく武神…かつて自分が憧れた存在であった。

『ま、悪く思わないでくれよ。これも、『アイツら』が成長するためなんだ』

『別の世界で『黄金の果実』を奪い合う奴らの戦う場数を増やすための…踏み台になってくれ』

最後に男が言った言葉が聞こえないまま、青年は考えることを放棄した。

もう、当初懐いたものとは違う形でこの世界の戦いが終結する。主と、家族と、誰もが幸せに生きられる太平の世ではなく、自分が招く血みどろな終わりが来るのだと、青年は諦めた。

しかし、そこへ『自分』へと立ち向かう者達が現れた。

1人は自分と瓜二つの姿でありながら、人の死を悲しみ、人を守る為に全力を尽くす鎧武者。

1人は絶望する人に希望を示し、諦める事を知らない指輪の魔法使い。

彼等は別世界の人間でありながらも、仲間達と共に自分達へ戦いを挑んできた。

戦いの中で、強引に御神木の力を解放し融合した武神鎧武に苦戦しながらも突如現れた『運命の巫女』の助力を受け、さらに御神木の贄となった武神達の力を授かった2人の技が武神鎧武へと叩き付けられる。

武神鎧武の『意思』は最後まで自分の敗北を受け入れられないまま、青年の中で消滅していった。

2人の若き武神の攻撃を受け、ようやく身体を取り戻した青年は薄れゆく意識の中で深く感謝を述べた。

ありがとう。自分を止めてくれて、と。

砕け散る鎧を見つめ、やっと罪を償うことが出来ると、青年は目を閉じた：

しかし、青年は死ぬことは無かった。

鎧武者と魔法使いの攻撃によるものか、又は次元の通路を開ける自身の持つ錠前によるものか。

青年は爆発したと同時に生まれた異空間へと入り込み、別世界へと流れ着いていた。

その世界の名は、怪魔界――

これが、青年が思い出した自分自身の過去であった。思い出した時は、そのきっかけをつくった男に恨み言の一つもぶつきたい気分となったが、それは八つ当たりというものだろう。

むしろ感謝しなければならぬ。自分の罪を、こうして思い出せることができたのだから。

今、青年がいる世界は彼の生まれた場所ではないことは明白だ。ならば、青年は間桐家どころかこの世界そのものの異物ということになる。例え異世界だろうが生き恥を晒す気にはなれない青年は自決を考えるが、それは目の前で苦しむ彼等を助けてからだ。

記憶を失い、居場所もなかった自分を招き入れてくれた者達への礼と、自分に人を助ける意味を改めて教えてくれた感謝の為に。

その為ならば呪わしき力を今一度使って見せよう。

あの時のような迷いを抱かず、青年は再度、その力を手にした。

『ブラッドオレンジアームズ!』

『邪ノ道オンステージ!』

自分達の家にいるはずの青年が現れただけではなく、紅い装甲を纏う鎧武者へと変身したことに間桐慎二は状況の整理が仕切れない。だが、そんな中でも懐に備えていた万能薬(若奥様印)を口に含み、熱を下げて状態を戻しつつある辺りが自分の準備の良さに賞賛を送りたくなる。

(アームズ? オンステージ? 何かの詠唱なのか…?)

決して知ることとも理解することもないだろう製作者のセンスに気を取られながらも慎二はゆっくりと歩み始める武神鎧武を囲い始めたキュルキュルテンに勘付かれぬよう、匍匐前進で高熱で倒れている桜のもとへ向かうのであった。

「な、なんだアイツは…RX以外にこの街で仮面ライダーがいるなんて聞いてねえぞツ!」

武神鎧武の登場に驚くのはクライシス陣営も同様であった。

光太郎以外に確認されている『仮面ライダー』のどの姿とも一致せ

ず、データも一切ない。それに一步一步接近する度にあの武者から放たれる殺気が強まっていくように感じる。

だが、こちらがすることは変わらない。邪魔する者は、死んでもらうだけだ。

(それに幼生とはいえこれだけの数、敵う訳がねえツ!!)

ゲドリアンは意を決して、命令を下す。確認するだけでも幼生の数は80以上。一斉に飛び掛ればあんな見かけ倒しなど一瞬であると考えた。

この瞬間までは。

『シャアアアああアアツ!!』

まずは先攻として相手の視界を封じようと頭部にしがみつく一体と、同様している間に左右から噛みつかんと飛び掛かる3体のキュルキュルテン。武神鎧武は武器を所持しているが主戦力であろう長刀は未だ腰に差しており、手にしているのはふざけた形状の小刀のみ。現に飛び掛かったキュルキュルテン達との距離が1メートルも無くなっている…その時であった。

『……ッ!?!』

武神鎧武が果物の断面のような形状を持つ刀…大橙丸を持つ腕は今でも下がったままだ。なのに、武神鎧武へ向かったキュルキュルテン達3体は異なる大きな斬り跡を胴体に受け、悲鳴を上げないまま音を立てて床へと落下。

何が起きたのか、ゲドリアンが理解できない間も武神鎧武は歩みを止めない。

(速い…)

(なんて、剣さばきなんだ)

武神鎧武が振った刀の剣筋をどうにか目で追えたメデューサと

光太郎はそんなありふれた言葉でしか言い表すことが出来なかった。キュルキュルテンが迫った直前に初めて腕を動かし、3体それぞれに3つの斬撃：合計9回は腕を振るってたにも関わらず、攻撃を受けたキュルキュルテンが落下するまでの間に腕を下げ、まるで動いていないかのように振る舞っている。

その光景はキュルキュルテンが飛び掛かる度に起き、武神鎧武が進むに連れて怪人達の軀が増していく。

「せ、接近して駄目なら離れて攻撃だあッ!!」

目に映らない武神鎧武の攻撃に動揺しつつもゲドリアンは次なる指示を飛ばす。見る限りキュルキュルテンは敵に接近したと同時にやられている。

ならば遠くから泡攻撃をしかけ、高熱により苦しませた上で倒す方法を選択。指示に領いたキュルキュルテンは最初に待機していた天井へと飛び上がり、地上にいる数体も距離を充分に取って大口を開きいつでも泡を吐き出す準備を整えた。

だが、敵が攻撃を仕掛ける間を待つほど、武神鎧武は甘くはない。「フンッ!!」

大橙丸を手にした右腕を後に引き、勢いをつけて真横に振るう。そして大橙丸は持ち主の手を離れ、回転しながら上昇し天井へと向かい跳躍中のキュルキュルテンへと迫る。

さらに腰に差した刀：無双セイバー右手で抜きつつ、鐳の後部に位置するあるレバーをスライド。エネルギーがチャージされた直後に引き金を引き、鐳前方の銃口：ムソウマズルから強力な弾丸を次々と発射。大口を開けたキュルキュルテンの口内で爆発を起こした。

ブーメランのように弧を描く大橙丸によって胴体を横一文字に裂かれていく個体の落下と、口から煙を吐いて倒れる個体の音はほぼ同時。戻ってきた大橙丸を左手で受け止めた武神鎧武は再び歩み始める。

同族が次々と葬られる姿に恐怖を抱きながらも自棄となったキュ

ルキュルテンはゲドリアンの指示を待たずに一斉に襲い始めるが、武神鎧武は止まらない。

歩む速度は最初と全く変わらず、正面を見つめたまま悠々と足を運んでいる。だが、二刀流となった武神鎧武は次々と襲い掛かるキュルキュルテンを全て切り伏せた。前後左右上下。全方角から攻める敵に目を向けることなく対処してる。

彼が通過した後はピクリとも動かないキュルキュルテンの軀のみ。その数は、当初いた9割以上。残る幼体は5体だけとなっていた。

「す、すごい…あれだけの数をあつと言う間に」

慎二から受け取った葉でなんと膝立ちで身体を起こすまで回復した桜は驚くしかない。義兄やサーヴァント達とはまた違う戦いを見せる武神鎧武の姿にただ圧倒されてしまう。

だが、彼の内側ではもう一つの戦いが繰り広げられていた。

——離れる

——離れて技をかける

——距離を置き、敵を纏めて一掃するのだ

(黙れ…！)

少しでも気を抜けば再び自分を飲み込もうとするもう一つの意味が青年へ指示を出し続けている。

確かに自分の持つ技ならばこの場にいる敵を一瞬で薙ぎ払うのは

可能だ。

しかし、そうなれば既に動けるようになった慎二と桜はともかく、未だ敵によって拘束されているメデューサと光太郎を巻き添えにしてしまう。

そんなことは絶対に出来ない。もう、自分の手により誰かが悲しむ姿など、見たくない。

そして、恩人である彼等を見捨てる事など出来ない。

押し上げる衝動を必死に抑え、青年は着実にゲドリアンへと距離を詰めていく。

そして敵の動きは突然だった。

「…ッ!？」

身の毛がよだつ敵が打った次の手段に、桜は思わず両手で口を押えながら息を飲む。

まだ生存していたキュルキュルテンの幼体が武神鎧武によって倒された亡骸を両手で持ちあげると口をあり得ない大きさまで広げると次々に丸のみにし、捕食を始めていたのであった。

死んだ個体を飲み込むに連れて身体の一部が大きくなり、ついには床に転がるキュルキュルテンが居なくなるころには、成熟した個体と大差のない、より強く凶暴性が増した5体の怪人は武神鎧武を睨みつける。

「ケケケ…他の幼体を取り込んだ数だけその力は倍になる…さあ、お前達の本当の力を見せてやれいッ!!」

涎を口からまき散らしながら2体のキュルキュルテンが武神鎧武

と迫る。左右から迫る爪の攻撃を無双セイバーと大橙丸でそれぞれ受け止めた武神鎧武は予想以上の力が押し掛かってくることに驚く。初めて完全な防御に徹していた敵を見て好機と睨んだ3体のキュルキュルテンは真正面から突っこんでいく。

ゲドリアンもようやくあの乱入者を始末することが出来ると確信したが、ゲドリアンは知らない。剣技だけが、彼の全てではないと。

「ジャギャツ!?!」

左右の手を封じられても足は自由。武神鎧武は正面から体当たりを仕掛けるキュルキュルテンの胸板に足底を思い切り叩き付け、自身迫った敵を吹き飛ばすことに成功する。続いて迫っていた別個体2体も吹き飛び、落下する個体に衝突し、3体まとめて倒れてしまった。

武神鎧武はその様子を確認する間もなく右足で地を蹴り、左足を軸にして身体を回転。同時に身体を一瞬下げ、力の均衡が崩れた事でバランスを崩した左右の個体に遠心力を殺さないまま足払いをかける。と見事に転倒させ、元の体勢へと戻ると両手に持った刀を上へと放り投げる。

刀が浮遊する間に起き上がろうとするキュルキュルテンの頭部を鷲掴み、前方で転がっている3体に向かって強引に投げ付けた。

『……………ッ!?!』

鈍い音を立てて山となったキュルキュルテン達がうめき声を上げ気絶する中、落下する武器を手にした武神鎧武は無双セイバーを腰に差して動かない怪人達へと接近する。

痙攣する怪人を見下ろす紅い武者はゆっくりと大橙丸を振り上げるが、倒れたままであった1体のキュルキュルテンは突如武神鎧武の足を掴むと口を開く。

「むっ…」

高熱を出す泡を吹きだして目晦ましにするつもりだったのだろうが、泡を吐き出すよりも早く武神鎧武の靴底がキュルキュルテンの口を封じた。

「……………ッ!?!……………ッ!?!」

吹き出そうとした泡を飲み込み、気道を確保できず呼吸困難となったキュルキュルテンはもがき始めるが武神鎧武は怪人を踏みつける力を強めるとバックルの右側にある小刀：カッティングブレードの柄を掴み、一度倒す。

『ブラッドオレンジスカッシュー!』

電子音が響くと同時に武神鎧武の足とキュルキュルテンのふさがれた口を中心に紅いオレンジの断面のようなエネルギーが展開される。エネルギーの断面はそのまま重力に逆らうことなく沈んでいくと気を失った他のキュルキュルテンを含めて押し潰していき、ついには爆発を起こす。

煙が晴れ、地面に発生したクレーターの中心に立っていたのは、武神鎧武ただ1人。

残るはゲドリアン、キュルキュルテン3体となった敵に武神鎧武は無言で紅く、黒く輝く複眼を向ける。どう逃げ出すかと考え始めるゲドリアンはこちらに向けて再度歩き始めた敵の変化を見過ごさなかった。

バチリ、とした音を皮切りに武神鎧武の腹部にあるベルトからスパークが放たれ、全身へと行きわたっていく。

「が、アアアアアアアアアッ!」

先程まで敵に対し声一つ上げることのなかった武神鎧武が武器を手放し、胸を押さえて苦しみ始めている。

ベルト：いや、ロックシードからエネルギーだけでなく火花まで散り始めているではないか。理由は分からないが敵は攻撃が出来ないらしい。ならばとゲドリアンは飛び跳ねながら武神鎧武へと近づくと無抵抗である敵に何度も足蹴していく。

「突然現れて俺の怪魔異生獣を皆殺しにしやがてえ!!許さん、許さんからなあッ!!」

今まで怯えていた分際によく言うど意外に冷静である武神鎧武は自分に変身する力を返却した男の言葉を思い出していた。

『ただし注意したまえ。ご覧の通りの状態だから使用できるのは、あと一回が限度だろう』

(確かに、受け取ったその時から錠前は傷だらけだった。変身できただけでも御の字であったか)

極めつけは、先ほど放った技。それによりついに限界を超えてしまったのだろう。あとどれ程この姿を保てるか分からない。だが、このまま倒れるわけにはいかない。何故なら…

「は…早く逃げてくれッ!!後は俺達だけでなんとかするッ!!」

再びビームに慣れてきたのか、未だ手足の拘束が解けていない光太郎はそんな言葉を叫んでいた。

「そうです。このような輩など、すぐにでも…」

ようやく片腕が自由となったメデューサは肘で自分の身体にしがみ付いている怪人の頭部を叩き付けながら、思い人に続いている。

まさか助けに来たこちらが気を遣わせてしまうとは…どこまでも他人の心配しかしない者達なのだろう。だからこそ、こうして戦う価値があった。

「さあ、大人しく俺様の手で…」

「ぬ…オオオオオオッ!!」

「おおうッ!?!」

青年は全身に走る痛みにも耐えながらも未だ自分に靴底を擦り付けるゲドリアンを吹き飛ばし、手放した武器を拾い上げてとっさに構えた。

あの声はもはや聞こえない。

この異常の為に消え去ったのか、それともこれから自分がやろうとすることに愛想を尽かしたのか。

武神鎧武は理由を求めないまま刀の柄同士を接続。ナギナタモードとなった無双セイバーの鎧へベルトから外したロックシードをはめ込む。

バチバチとさらに強く火花が散っているが構うことはない。これが、最後の一撃なのだから。

「な、何しよってんだ…」

起き上がったゲドリアンの前では赤いオーラを纏い、刀身にエネルギーをチャージして構えを取る武神鎧武の姿。聞くまでもなく、自分に完全な止めを刺すための大技なのだろう。どうにか逃げようとも相手の技がどのようなものかも分からない。慌てふためく間に敵は技を放つ体勢へと入っていた。

『イチ・ジユウ・ヒャク・セン・マン…ブラッドオレンジチャージ！』

「ハアアアアアアアアアアアッ！！」

横一閃。

武神鎧武の咆哮と共に放たれた紅い斬撃は真っ直ぐにゲドリアン

の方へと延びていく。

ひゃあ、と思わず身を屈めるゲドリアンだったが、いつまで立っても痛みが走ることがない。ゆっくりと相手を見ると武神鎧武は武器を真横に向けたまま微動だにしない。

つまりは、自分に当たらずに明後日の方へと攻撃は飛んだわけだ。

「ひゃ、ヒヤハハハハハハッ!!ビビらせやがってこの野郎ツ!どうやら俺の勝ちのようだな」

立ったまま気を失っているのか、ゲドリアンの言葉に少しも反応しない。だが、警戒を怠ることなくジリジリと近づくゲドリアンは敵が何の反応を示さない様子を見て、確実に意識がないと判断して自身の爪を武神鎧武へと伸ばす。

「さあ、これでお終いにしてやる…おい、いいところだから邪魔するな」

自分の肩を掴まれているようだが大方キュルキュルテンなのだろうと判断したゲドリアンは特に顔を向けることなく武神鎧武の脳天から串刺しにしようと手を振り上げる。が、自分の肩を握る力が強まったことでやつと振り返る。

「痛ってえなッ!!さっきから何なんだ!!!お前はしっかりとRXの監視…を…」

無礼な手下に怒号を浴びせようと振り返ったその先にいたのは、キュルキュルテンでも、チャップでも、怪人の素体でもない。

手足を拘束され、機能停止ビームで苦しんでいるはずの、間桐光太郎…仮面ライダーBLACKであった。

なぜだ…と言いたくても口を開ける事すら出来ないほど狼狽えるゲドリアンは視線を手術台の方へと向ける。そこに映ったのは砕かれた金具と、

両断され床に散らばっている機能停止ビーム装置の山だった。

(ま、まさかあの野郎オオオオオツ!!)

武神鎧武が狙ったのはゲドリアンではなく、光太郎を苦しめるビームを照射し続けていた装置。彼の目的は当初から敵を倒すことではなく、光太郎の救出だったのだ。

「……………」

「きゅ、キュルキュルテンツ!!こいつはまだRXになっていない!倒せ!倒せーツ!!」

光太郎による無言の圧力に耐え切れないゲドリアンは急ぎその場から離れ、メデューサを拘束していた2体と隠れていた1体に命じる。囲われた光太郎は自由となったメデューサに視線を送ると、彼女は領きその場で跳躍。立ったまま気絶している武神鎧武の元へと着地する。

「…ありがとうございます」

気を失うまで戦い続けた武神鎧武へ一言感謝を述べたメデューサは彼に肩を貸す形で抱え、慎二と桜の元へと向かう。

敵対するのは、光太郎とキュルキュルテンのみ。

光太郎が脱出したとしても、ゲドリアンは自分達の勝利を信じて疑っていない。光太郎は立ってはいるが機能停止ビームを浴び続けた影響で大した力を残っていない。証拠にベルトから放たれる光は弱く、これならば未だ体力も消耗していないキュルキュルテンが有利と判断したゲドリアンの耳にパリンツとガラスが砕ける音が響いた。「あん?」

音が聞こえた方を見ると、何時の間にか壁際に移動していた信二が銃床でガラスを叩きわり、暗幕ごと突き破っている。あいつ一体なんの真似を…と窓から差す西日の光を追うの先では、ベルトに左手を添えて、右腕を真上に掲げる光太郎の姿。

「し、しまったあああああああああッ!!」

大声を上げてても既に遅い。慎二の手によって太陽の光を浴びた光太郎はクライシス帝国が最も恐れる姿へと変えていたのであった。

「俺は太陽の子——」

「仮面ライダーBLACK!!RX!!」

僅かながらも太陽の力を取り入れた光太郎の力は万全の状態となり、後ずさるゲドリアンへとその指を向けた。

「クライシスッ!!これ以上俺の家族と仲間を傷つけることはこの俺が

その先端は両手を広げ、爪を突き立てようとしたキュルキュルテンの腹部へと突き刺さっていた。

『シャオオオオオオおお!!!』

最後の1体が正面からリボルケインを背後の敵へ突き刺したままの光太郎へと突っこんでいくが、自らの頭上に現れた影：光太郎の背後から飛び上がったアクロバッターに頭部踏みつけられてしまう。

『シャアアアアアアアッ!!』

「トアッ!!」

割れるような痛みにも両手で頭を押さええている隙に、リボルケインが腹部へと突き刺さる。

その身体に内包しきれない光のエネルギーが火花となつて全身から吹き出し始めた直後、光太郎は一気にリボルケインを引き抜いた。

リボルケインを天へと翳し、円を描くように回転させると額の前で両手首を交差。

左手をベルトの上へ。そしてリボルケインを持つ右腕を勢いをつけて右側に振り残心の構えをした直後。

倒れたキュルキュルテン達は爆発の中へ消えるのであった。

「う……」

「気が付いたようだね」

青年の目に映ったのは、やはりというかあの医師だった。やれやれと言って診察室を後にすると廊下から会話らしき声が聞こえる。どうやら廊下で控えていた光太郎達に説明をしているのだろう。

ゆっくりと顔を横に向けると、机の上には自分が武神鎧武へと変身するに必要なバツクルと、そして限界を迎えて砕け散った錠前の破片が並んでいた。

もう、変身することは不可能であろう。

思ったよりもショックではないことを不思議に思う中、光太郎が姿を現す。

「……いろいろと、お互いに説明が必要みたいだね」

「……俺は、そうでもない。お前達を救えたのなら……」

「後は、死ぬだけ……かい？」

「……………」

目を丸くした青年は真顔で見つめている光太郎から思わず目を逸らしてしまう。まさか、見抜かれているとは思ってもしなかった青年に對して、光太郎は話続けた。

「……君に何かあったのかは知らない。でも、眠っている君はずっと謝り続けていた。その声を聴いて、なんとなくそう思ったんだ……」

「それ程の罪を重ねてきた。俺は……償う方法は、そんなことしか知らない。命を……捨てることしか……」

「……………」

そう、戦うことしか知らない自分には、それしか手段を見つけないことが出来ない。だからこそ最後に光太郎達を助け、そして――

「そいつー！」

「ぬがあッ!？」

顔面に薬剤等に乗せる銀色のトレイを叩き付けられた青年は鼻を押さえて悶絶してしまふ。トレイを最初の位置に戻し、薬剤を乗せながら光太郎は青年へと声を向ける。

「その方法で君は満足するかも知れない。けど、俺達は嫌だな。折角知り合つて、助けてくれて、これからお互いの事がわかるって時に、君が死ぬというのは、はつきり言つて反対だ」

「しかし、俺にはそうすることしか…」
「なら——」

光太郎は手を差し伸べる。それがなんであるのか青年には理解ができないが、光太郎は笑顔で青年に問いかける。

「一緒に探そう。君が死なずに罪を償える方法を。1人で分からなくても、みんなとならきつと見つけられる」

「どうして、そこまでするんだ…見ず知らずの俺に、どうしてそこまで親身になれる？」

「…理由なんて、ないよ」
「あ…」

そうして青年は思い出す。メデューサから聞いた話を。自分は何と言つて、光太郎達を助けようとしたのかを。

誰かを助けることに、理由はいらぬ。

「そう、だな。いらぬのだつたな。理由など」

「話が早くて助かるよ。だから、君の方法はとりあえずは保留、つてことにしよう」

「…そうする他、ないようだ」

青年は改めて差し出された光太郎の手を握る。

もしかしたら、本当に見つかるのかも知れない。

この男と共に行動するのなら。

「じゃ、早速我が家へ帰ろうか。先生には許可貰ったし」

「な、いや、いいのか？」

「いいのいいの。それに折角桜ちゃんが準備してくれた夕飯が無駄になっちゃうからね！」

なんだか流されているような気分になっている青年は光太郎に連れられて診察室、そして診療所の外へと出る。そこには待ちくたびれたと言わんばかりの少年と、光太郎と共に自分が来てくれた事を純粋に喜ぶ少女と、言った通りの人間でしようと微笑む女性が待っていた。

青年は、心の中で主と、友である武神へと詫びを入れる。

（申し訳ありません。彼方達への償いに、今一度お時間を頂きたい。それが見つけた時——）

改めて、自分は彼方達に会えることができるでしょう。

青年はこの世界にはいない、届くはずのない言葉を送るのであった。

彼等が家に戻る様子を陰ながら見つめている存在がいた。青年の記憶を呼び戻し、武神鎧武のベルトを託したあの男だった。

「依頼は果たしたよ『神様君』。しかし変わってるよ。敵だった彼を救ってくれだなんてね…ま、結果的には救えたし、報酬も前払いだったしよししよう」

そう呟く男の手には青年が持っていたものとは異なる幾つもの錠前が握られていた。

「さて、士が通ったおかげでこの世界を基準に色々と道が出来た。聖杯…まさに、僕が狙うには相応しいお宝だね」

誰にも聞かせるわけでもなく男…海東大樹はこの世界からいなく

なっただのであった。

一方、クライス要塞

「…ゲドリアンはどこだ。あの大馬鹿野郎は…」

モノアイをいつも以上に輝かせ、身体の節々から煙を上げるガテゾーンは肩には二連装ガドリリングガン、右手にはレーザーライフル、左手にはショットガン、左足にはミサイルポッド、右足には携帯用小型バズーカ。無数の手榴弾をたすき掛けしたという重装備でゲドリアンを探していた。

「や、奴ならば怪魔界に行つて砂漠の動物を撮影しに向かったそうだし…」

貴族のプライドなど微塵もなく、同僚の迫力に終始押されてしまつていたボスガンであった

ジャーク將軍が仲裁に入るまで、コレクションを失ったガテゾーンと犯人であるゲドリアンによる逃走劇は続いたという…

第12話

敵の術中にはまり、囚われの身となった仮面ライダーBLACK：間桐光太郎の救出に向かった間桐慎二、桜、メデューサの3人であったが、クライシス帝国の怪人 怪魔異生獣キュルキュルテンの大群を前にして危機に陥ってしまう。

クライシス帝国 牙隊長ゲドリアンの爪が身動きのとれない光太郎に迫った時、彼らの前に記憶を取り戻し、仮面ライダー武神鎧武へ変身した青年が現れた。

圧倒的な力で次々とキュルキュルテンを蹴散らしていく武神鎧武であったが突如、全身に痛みが走り身動きが取れなくなってしまった。

変身に必要なアイテム『ロックシード』が限界を迎えつつあったが青年は力を振り絞り、光太郎を束縛していた機能停止ビームを放つマシンを一刀のもと切り伏せ、自由となった光太郎はすかさずRXへと変身。

残るキュルキュルテンをリボルクラッシュによって打倒すのであった。

戦いが終わり、怪魔界へと流れ着く以前に犯した罪の意識に苛み、死を望む青年であったが光太郎から罪を償う方法と一緒に見つけて行こうという言葉聞き、生きる道を選択する。

そして…

「にいさん、武さん！ご飯できましたよー！」

自分達のいる場所へと木霊する義妹の知らせる声。呼吸するだけ

でも精一杯である慎二は膝をついて自分の額から落ちる多量の汗を眺めることしかできず、声を出すこともままならない。

「わかったー！」

代わりに応えた青年は手を差し伸べ、慎二は自分と違い汗一つ流していない青年を見上げる。出会ったばかりに見た戸惑いなどいっさいなく、僅かな微笑みだけを浮かべていた。

「…慎二殿は射撃と相手の行動を見抜き、意表を付くことに秀でている。ならば、先日のように敵に接近された時の対応を更に広めれば戦術も広がるう」

「ハアツ…ハアツ…そのため、…組手…だって、のか…？」

「その通りだ。それに慎二殿は筋がいい。近いうちに攻撃を当てられてしまうかもしれないな」

「…どう、だかね…」

青年の手を取った慎二はなんとか立ち上がり、かつて『蟲倉』と呼ばれ訓練場となっている地下室の階段を上がっていく。先に階段を進み、自分へ体術の施した男の背中を見て、本当に笑うようになったなど慎二は思う。

あかがみたける
赤上武

それが武神鎧武である青年が今、名乗っている名前である。

元の世界での頃の名は捨てるという本人の意思を尊重し、慎二達が考えた名だ。

当初は変身後に名乗った『鎧武』でも良いのでは？との意見もあったが、本人より『自分より相応しき人物が名乗っている』という事で却下となった為、『武神』の『武』から振り『たける』はどうだと尋ねた時は

『ありがたく、その名を頂戴する』

と、本当に嬉しそうに笑っていた。

そんな彼：武の提案で空いた時間を前回での戦いで得た教訓を活かし、接近戦でどのような対応も可能とする為の感覚を研ぎ澄ますために体術の訓練を開始した。武の分析では得意とする射撃を伸ばしつつ敵が近づいた際の下地を作っておけば充分であるらしい。

変にお節介な部分な所だけは似ていると言いながらも慎二は了承し、横で聞いていた桜とも日替わりで訓練を受けたいと希望していた。

(それにしても…)

ここ数日共にこの間桐家で過ごして分かった事は、武はこの世界に来る前：正確には武神鎧武となる前から相当の世話好きだったということ。

だからこそ納得できなかった。

(揃いも揃って、何でこうも…)

優しく、良いやつばかりが望みもしない力を手にして苦しまなければならなかったのだろうと。

そんな事を考えながら廊下を抜け、食卓に到着した慎二は桜とメデューサから汗を流してくるようにと浴場へ追いやられてしまったのは余談である。

(あんのトカゲの化け物…ぜってえ丸焼きにしてやる…)

「何日前の話している」

現在拠点として宿泊しているホテルの部屋に到着した直後、突拍子もなく数日前に自分達の前に現れ、食料を食い散らかして去っていった怪人へアンリマユは恨めしく声を上げる様子に信彦は呆れながら

コートを手をハンガーへとかける。

あの時は身体の主導権をアンリマユに握られ、同行する遠野志貴達とファミレスで食事をしていた際に起きた事だ。念願の特大パフェが届きいざ挑もうとスプーンを伸ばした直後に店内で響く悲鳴。何事かと全員で厨房へと目を向けると現れたのはふとましい胴体と比べ手足が妙に細いトカゲの怪人であった。

その場で跳躍し、信彦達が座っていたテーブルに着地した怪人を警戒し離れて構える一同だが、怪人は信彦達に目もくれず、未だ手が出されていないパフェを掴むと一気に食道へと流し込んでしまう。固まること約1秒。

状況を理解したアンリマユは八つ裂きにしてやろうと両手に武器を出現させようとしたが怪人はそれよりも早く窓を突き破り、建物の屋根を足場にして早々と姿を晦ませてしまった。

数日ぶりの甘味が…と膝を着くアンリマユを見て咄嗟に武器を手にしていた志貴は大丈夫ですかと声をかけ、同行者は襲撃時に自分の注文したシフォンケーキだけをしっかりと確保して頬張っていた。

この怪人の名は怪魔異生獣キュルキュルテン。キッチンスタッフの手違いで孵化してしまった個体であり、後日に間桐光太郎に倒される事を彼等が知るのはいよいよ後のことだった。

いつまでも引きずるアンリマユを無視して冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出した信彦は一口水を含むと窓の外を眺める。その部屋は街全体が一望でき、常夜灯や様々なビルから漏れる照明、車両のライトによって夜中だというのに明るさを失っていない。

だが、その中で一部だけ漆黒に染まっている建物が存在した。照明を一つも点灯させることのないその建造物は周辺と比べて不気味なほど異彩を放っている

街の中では有数の高級ホテル『センチュリーホテル』

数週間前に宿泊者、従業員含めその場にいた人間が信彦の知る2人

を除き、一夜にして全員が行方不明となる事件が発生していた。

未だに行方不明者は発見できず、捜査は難航となっている怪事件。

だが、信彦は知っている。ホテルにいた人々は行方不明などではなく、その場で食い尽くされたのだと。

信彦は、その犯人から受けた襲撃を思い出していた。

「…ツ!？」

(なんだこりゃ…)

この街に滞在し、吸血鬼の始末をする為に調査を続ける信彦は一瞬、身が裂かれるような殺気を感じた。彼の中にいるアンリマユも同様であり、表面に出していないというのに冷や汗を流している気分になる。

しかもその殺気には覚えがあった。

「ツチ…!？」

考える前に信彦は駆け出していた。もし、殺気を放った人物が信彦の知る人物ならばと考えを巡らせている間に信彦は街中の公園へと辿りつく。まだ午前中だということもあり人通りも少ない。そのまま周囲を警戒しながら足を進めていく信彦はすんなりと目的の人物を発見してしまった。

「……………」

遊具などなく、数本の植栽が目立つ広場の真ん中で、1人の少年が倒れていた。

学生服を纏い、彼の手元に落ちているのは普段着用している眼鏡と、見た事のない1本のナイフ。

間違いなく、遠野志貫だ。

ゆつくりと近づくと信彦は聴力を強化し、定期的に呼吸や心音を耳にして少年が気を失っていることを確かめると周辺を見渡す。あの殺気が彼から放たれたものであれば、必然的に少年が『殺意』を向けた相手がいるはずだ。

だが、争った形跡はまるで見られず少年にも傷一つない。

この場で一体何が起きたのかと顎に手を当てる信彦に今まで沈黙を貫いていたアンリマユが提案を持ちかけた。

(なあー考えてるとこ悪いんだけどよ、まずはこいつに話を聞くかどうかに移動させた方が無難じゃね)

「…お前にしてはまともな意見だ」

(へえへえ。俺はいつもおかしいですよー…あん?)

「どうした?」

(いや、一瞬『血の匂い』が…いや、気のせいだわ)

特に詳しく説明を求めることはなく、信彦は志貴の身体を起こし、背に乗せると眼鏡やナイフを回収してその場を離れていく。

アンリマユの言う通りに放置しておくわけにもいかない。争ったであろう相手が再び現れる可能性もある。そうならばこの少年の命も…

(いや…どうだろうと、俺には関係のないはずだ。だというのに)

どうしてこの少年を助けようとしているのか。そう自問自答しながらも足早に公園を離れた信彦達であった。

そして信彦達が去った後。完全に気配を遮断していた志貴の『被害者』となった者はなんとか歩行が出来る状態となり、遅れて公園から去っていく。彼等が出会うのはもう少し先の話だ。

「……………」

志貴を自宅まで送り届け、家の中に通されることは数度あった。

だが、それは志貴がまだ有間という親戚の家で生活をしてきた頃の話であり、志貴はどうやらその日から実家へと戻るということになっていたらしい。

そして今、信彦が座っているのは志貴の生まれた家である遠野家の客室である。

彼の生徒手帳に記載してあった住所を元に到着した場所は西洋を思わせる広大な屋敷であった。アンリマユは若干混乱気味であったが信彦は特に反応することなく門扉を抜け、扉の呼び鈴を鳴らす。

すると扉の向こうからパタパタという音が近づき、和服を纏った少女が現れる。恐らくは使用人の1人なのだろう。

若干困った顔をしながらどちら様でしょうか？と当然の質問を受けた信彦は自分が背負っている少年と倒れていた事…無論、公園ではなく道端で倒れていたとある程度お茶を濁してはいるが説明すると志貴が寝室となる部屋へと案内された。

少女に誘導され、部屋のベットに志貴を寝かせてそのまま去ろうとしたが家の主がお礼を言いたいので帰るまで家で待つて頂きたいと言われ今に至っている。

(どうしてこうなった…って状況だわな)

「珍しいな。貴様が今の状況を好まないなど…」

(そりゃまー…お茶菓子なんて頂けるなら大歓迎だけどよ…)

「……………」

先程からアンリマユは軽口をたたきながらも普段と違い、どうにも落ち着かない様子に疑問を抱く信彦だが、その思考は部屋に和服の少女が現れた事で中断してしまう。

「もうしばしお待ちください。主が今、車で戻っておりますので。あ、日本茶で宜しかったですでしょうか？」

「…ああ」

「あ、良かったです！既に入れてしまった後だったのでもし好みでなければどうしようかと思っちゃったんですよ〜」

湯呑を信彦の前に置いた少女：琥珀は笑顔を決やさず初対面である信彦へ話しかけてくる。信彦は琥珀が楽しそうに話す姿：というより彼女の笑顔に不自然さを抱きながらも会話を絶やさない程度に頷き、主の到着をまつた。

「…どうやらお帰りのようです。お話は終わりですね」

残念ですと終始笑顔であった琥珀が扉を開けたその先から現れたのは、またもや少女であった。どこか優雅さを感じ取れる足取りで信彦の対面する形で座ると自己紹介と、志貴に関しての礼を信彦へと伝える。

「初めまして。この家の当主、遠野秋葉と申します。この度は兄を助けて頂き、ありがとうございます」

「…偶然だ。礼を言われるまでのことではない」

学生服：志貴とは学校が違うようだが長く艶やかな黒髪。そして強い意志を秘めた瞳でこちらを見つめてくる少女は信彦の短い返答を聞き、目を逸らさないまま尋ねた。

「…失礼ですが、貴方は兄とどのような関係でしょうか？」

「……ただの顔見知りだ」

彼女の視線は先ほどより強い。威圧をかけているつもりだろうか、偽りであったのなら容赦しないと目で伝えているように信彦には思えた。

しばし睨み合いのような状態が続くが、信彦は一度深く息を吐くと湯呑に残ったお茶を飲み干して立ち上がる。主から礼を聞くという最低限の要求を果たしたからにはもう用はない。

「…これで失礼する。用事もあるのでな」

「お忙しい中時間を頂き、申し訳ありません。玄関まで送らせて貰います。翡翠ー！」

秋葉の言葉と共に音もなく扉が開かれると、給仕服：メイド服姿と言った方が正確だろう。使用人の1人である翡翠と呼ばれた少女は

一礼し、秋葉の背後へと移動する。

良く見れば先ほどまで信彦へ話し続けていた琥珀と瓜二つであるが、双子なのだろうか。大きな違いは琥珀が絶やさず笑顔を向けているとは逆に、翡翠は無表情…感情を表に出していない点だろうと分析する信彦の前へと移動した翡翠が仕事の一部分であるように淡々と伝える。

「…それでは、玄関へお連れ致します」

「……………」

それきり2人は部屋、通路、玄関と抜けていく間に言葉一つ躲すことなく進んでいく。アンリマユだけがその沈黙に耐え切れなかったのか、翡翠と琥珀であればどっちが好みだという質問に信彦は曲がり角に足の小指をぶつけ、悶絶させるといふ回答を出すのであった。無論、自身へのダメージも承知の上で。

門の外へと出た信彦はそのまま翡翠に何も言わず去ろうとしたが、今まで口を開こうとしなかった少女から発せられた声にゆっくりと振り向く。

「あ、あの……………」

「…なんだ」

胸の前で手を握った少女は言おう言わまいか、逡巡しているが信彦は無言で彼女を待つ。そして意を決した翡翠は真っ直ぐ信彦の瞳を見つめると視線を下へと向ける。

「志貴様を助けて頂き、本当にありがとうございます」

「…当主にも言ったが、礼を言われるようなことではない」

「それでも、言わせて欲しかったのです」

「……………そうか」

少女の心からの言葉に短く答えた信彦は踵を返すと今度こそ遠野家から離れていった。

翡翠の言葉は事務的なことではなく、本心からの言葉だろう。彼女が長く屋敷にいなかった志貴とどのような関係にあるかは信彦に興味はない。

ただ…あのような真つ直ぐに相手を見つめ、屈託のない純粹な言葉をぶつけられるのが、信彦は苦手であった。

屋敷から離れ再び街を歩き回り街の地理を頭へ叩き込む作業に没頭し、日はとうに落ちており深夜と言って差し支えない時間となつてようやくアンリマユは口を開いた。

(はく…もう勘弁だぜあのお化け屋敷に向かうのは)

「俺としては貴様が黙っているならばもう少し滞在してもよかつたかも知れん」

(冗談キツイぜ旦那あ。アンタだつてあの家…つかあの胸の小せえ嬢ちゃんが現れた時から理解してたんだろ?)

(あの家は普通じゃねえ。人間以外の何かが混じつてる…そんな人間を狂わせるような空気があった)

「……………」

流石は人間の悪意を一身に浴び続けていたサーヴァントだけのことはあると感心した信彦はアンリマユの言つた通り、屋敷内に漂つていた異様な雰囲気を思い出す。常人では恐らく感じられないだろうが、空気に流れる僅かな『狂気』の残り香。

そしてそれを打ち消すように、上書きするように現れた遠野秋葉から滲み出る人とは違う何か。さらに言えば、あの少女とは自分…いや、自分達と同じではないかと思えていた。

自分とアンリマユが一つの身体を共有しているように、少女も何かを…と、信彦はグシャリと肉が潰れる音が自分の横で響くと同時に思

考を中断する。

目を向ければ、自分が無意識に背後へ放っていた裏拳によって頭部を潰された：狼らしき動物だった肉塊がピクピクと身体を痙攣させて血液を流し続けている。

(うっわえげつなッ！もうちよい優しく殺しなさいよ)

「知った事ではない」

アンリマユが心にもない事をほざいた事を無視し、信彦は続いて現れた新手へと目を向けた。

四足歩行の動物。トラやシカの他にも肉食、草食などなんの統一感もない黒一色の生物の群れに囲まれていた。目は血走り、犬歯を震わせている様子から敵意どころか殺意を向けているのだろう。

(少女と少年だけでなく、動物にも好かれてるとはねく幅が広すぎてびっくりだわ)

「黙っている」

1匹2匹だけならともかく、数十匹もの生物となると今の姿では対応が面倒だと腰を屈める信彦だったが、相手はそんな事を理解もなく待つつもりもない、本能に従う獣だ。

だから何の合図もなく、信彦へ飛び掛かっていく。

「ちッ！」

最初に突撃したシカの頭部を手刀で切断することに成功するが、後に続いてきたハイエナに足を噛みつかれ、思わず膝を付いてしまうと相手が怯んだ事に乗じて次々と獣が押し掛かっていった。

もがき、どうにか動物達を吹き飛ばそうとするが牙を肉へと喰い込ませ離すことが出来ず、ついには群がる獣の中に信彦の姿が消えてしまった。

その光景を離れてた場所で眺めていた長身の人物…黒いロングコートを纏い、そのコートの下は暗く、人としての肉体が存在するかどうかも分からないその男はふむと片目を瞑り、落胆したかのように呟いた。

「最初の一撃を見て只者ではないと踏んだが期待外れか…しかしその肉体に宿る力、取り込んで我が内包する世界の一つとしてくれよう」

その男があとは食い尽くすのを待つばかりと振り返った直後であつた。

爆発と共に獣の群れが細かな肉片へと変わり、血の池となったその中心に立っていたのは銀色の甲冑を持つ世紀王の姿。

「…よもや月の王がこのような場所にいたとはな。私達死徒にとって悪夢と言えよう」

信彦の正体を知った男は、その黒いコートの下、街灯に照らされる影から新たな獣が姿を現す。より巨大、より凶暴な生物を顕現させた男の言葉をさも戯言だと言わんばかりに、信彦は…否、世紀王は言い放った。

「悪夢…？何を言っている。貴様が今から味わうのは、地獄だ」

月下に降臨したシャドームーンはそう宣言し、緑色の複眼を輝かせるのであった。

第13話

餌食となるはずの獲物によって『自分達』が逆に切り刻まれた事実よりも、男は自分の前で正体を現した者への興味が勝っていたのかもしれない。

人としての肉体を捨て、その身に数百を超えるモノを宿す男はただ、自分はどうなってしまうか、その先にあるものは何なのかを探求し続けていた。だが、そう考えていられるのも時間の問題。

いずれは知性が欠落したモノへと成り下がってしまうと分かり切っていた男はせめて自分が自分でいられるうちにその答えを求め続ける中で、1つの可能性を見つけてしまった。

人という器へ収まるにはあまりにも強大であり、許されず、認められない凄まじき力を内包した存在を…

吸血鬼…しいては地球上の生命体全ての理解を超えた神秘中の神秘『キングストーン』

自分とは宿すモノは違えど、扱えば自分自身へ滅びを齎す程の世界ちからを持った存在がこうして対峙している。

男：ネロ・カオスは目の前にいる世紀王へはどう足掻いても敵わないという死徒としての本能よりも、自分の求めた可能性の一つを垣間見る好機という結果を追い求める理性が勝ってしまった。

ゆえに引かない。

自分達を100消費したとしても、この男が持つ力を確かめてみせる。そして知ってみせる。

自身を飲み込む力を持った者とは、なんであるのか。

ネロ・カオスはその身に宿る野獣をさらに分裂、顕現させた。

(カツコつけて啖呵切ったいいけどよ…分かってんだろ?)

「言われるまでもない」

(そうですかい。なら、3分以内にお願ひしますわ)

「……………」

アンリマユへ何の言葉も返さず、シャドームーンとなった信彦は無言で掌に力を込め、緑色の光を帯電させる。

3分間。

それが信彦がシャドームーンとして戦える限界を示す時間だ。

先の戦いでゴルゴムの首領、創世王との戦いでキングストーンの力を制御するベルトを損傷し、その上で力を限界以上に引き出した状態で仮面ライダーBLACK：間桐光太郎と最後の決戦の中で完全に破壊してしまう。

そのまま命を失われると思われたが、大聖杯の消滅時に放たれた魔力と光太郎の願いによりサーヴァントが新たな命を得たと同様にシャドームーンは命を取り留め、魂だけの存在であったアンリマユを身体に宿し現在ののような状態となってしまうていた。

勝利を喜ぶ光太郎達へ悟られぬように去ったシャドームーンは残されたゴルゴムの秘密基地の一つで損傷したベルトを修理することに成功するが、それ以来シャドームーンの姿となるとキングストーンから溢れる力によって全身に激しい痛みが走り、関節の節々から緑色のエネルギーが漏れ出す状態に陥ってしまった。

一つの身体に二つの魂が宿った為か、それともキングストーンが拒

絶反応を起こしているのか。

原因は未だに不明であり、分かっていることはシャドームーンでの戦闘は3分間。キングストーンの力を全開に引き出しての戦闘は1分：いや、10秒も持たないだろう。

それ以上の戦闘を行った場合、シャドームーンは力を振るうどころか自身の力によってダメージを受けてしまい、信彦の姿へ戻ったとしても暫くは身体をまともに動かすこともままならない。

その為、今までは姿を変えず聖堂教会や魔術協会の追手が現れた時も時も信彦の姿のままであしらっていた。

だが目の前の存在はそうは行かない。先程の様子では人の姿ままだど吸血どころか、身体そのものを捕食されかねない。何匹の使い魔を使役しているのかは分からないが、一瞬で決着をつける。

信彦の方針は正しかった。しかし、シャドームーンでいられる時間が限定されているという焦りが結果として彼の洞察力を曇らせてしまふと後に気付かされることとなった。

信彦を囲う獣の群れはネロの号令など待たず咆哮を上げ飛び掛かる。

対して信彦は腕に帯電させた力を路面に向けて解き放つ。

アスファルトへバチバチと音を立てて浸透したシャドービームは信彦の周囲へと広がり、一斉に上に向けて放電。飛び掛かった獣達の肉を焦がし、血を沸騰させ、動かない肉の塊となりバタバタと倒れていく。

続けて現れた全長10メートルを超えるワニは信彦を丸のみにしようとする巨大な顎を上下に解放。目標を捉えて勢いよく口を閉じようとするがワニの上顎を指先で、下顎をつま先で止められてしまう。懸命に顎を閉じようと力を込めるが微動だに動かすことが出来ない。信彦は下あごを止めている足に体重をかけて地面にワニの下顎ごと

踏みつけ、上顎を止めていた指を一度離しワニの鼻先へ五指が喰い込むまで強く握ると腕を振り上げる。ワニはブチブチと顎から上下に千切れていき、2つへと裂かれてしまった。

掴んでいたワニだったモノを放り投げ、ネロに向かい跳躍する信彦の眼前に今度はカラスを始めとした鳥類の群れが迫っていた。

群れの中には現代の地球では既に生息していない体長を持つ巨体を持つ肉食類も紛れているが、所詮は鳥合の衆。

緑色の光を肘の黒い刺に宿し、すれ違いざまに切り裂かれ、翼が散らしていくカラスや鷲、同胞の最期など見向きもせず、鋭い爪を前方へと伸ばす巨鳥の足は信彦の身体へと突き刺さった。

だが、突き刺さった直後に信彦の姿はノイズが走ったように乱れると姿を消失させる。

混乱する巨鳥は周囲を見渡すが、標的である信彦は巨鳥のさらに上へと飛び上がっていた。冷たく輝く月を背後にして両腕のエレボートリガーを緑色に輝かせると眼下である巨鳥へ急落下。

信彦が地上へと着地していた時には、巨大な鳥は4つの塊へと変わり果てていた。

再びネロへと疾走する信彦の前に続いて立ちふさがったのはムカデ。

ただしその大きさは優に50メートルを超えており、ガシャガシャと軋ませる罅で信彦を正面から迫るが、信彦はその巨体を前にしても走る勢いを殺さずに強く握った拳をムカデの額へと叩き込む。

ムカデを粉々に砕くには、それだけで十分だった。

「……?」

あと数歩でネロへ攻撃をしかけられる間合いへと変わった信彦の前に出現したのは、獣ではなく彼自身とは因縁がありすぎる生物だった。

ゴルゴムの怪人。

恐らくはあの男に取り込まれた結果、使い魔と使役されているのだろう。意外な相手に一瞬驚いた信彦だったが、それはあくまで予想外の存在が現れた事に対してだけ。

目の前に立つのは自分の障害以外の何者でもない判断した信彦は怪人を一撃で仕留め、目の前にしても表情を変える様子のないネロ・カオスに向けて手刀を真横へと振るった。

血が足元へ並々と流れる中、信彦の前に立っているのはネロ・カオスの下半身のみ。彼の背後にあるのは、原型をとどめていない生物達から漏れた血の海であった。

「…時間は？」

(50秒つてどこか？意外に苦戦したじゃんか)

「……そうか」

自分でも意外に時間が経過していたと考えた信彦は振り返り、亡骸に向かい手を向ける。目撃者がいては面倒な事になると判断し、全てを蒸発させようとシャドービームを放とうとした、その時だった。

「…すさまじき力だ。それも力の一端に過ぎないのならば、我らに伝わる伝承以上の存在であろう」

急ぎ振り返った信彦の視界に映るのは変わらずに立ち続けているネロ・カオスの下半身だったが、泥人形のように形を崩し、血の池へ

と溶け込んでしまう。

否、もとより血の海などこの場に存在していなかったのかもしれない。

赤いと錯覚していたその液体はどこまでも黒く、底がまるで見えな
い沼と気が付いた時には、信彦はその沼に足元から飲み込まれてい
た。

(ちよっ!?なんだよこれ気持ち悪ッ!!しかもこの泥の中、他にもう
じやうじやというじゃねえかッ!!)

「そうか…奴は、そういう存在なのか」

泥は信彦の足元だけでなく、周囲全てを覆っている。アンリマユの
言葉を聞き、それが何であるか理解した後であればどこから湧いてき
たなどもう疑問すら浮かばない。この泥…泥となったモノは信彦自
身が広めたものなのだから。

「あの生物達は…貴様の使い魔などではなく、『貴様自身』ということ
か」

「然り。もし最初の時点で見抜いていれば当に私は討たれていたかも
しれん。だが、もう遅い」

泥から姿を現したネロ・カオスは信彦の攻撃を受ける前と変わらな
いコートを纏い、何の感情も思わせない表情でそう告げた。

信彦は誤解していた。

この死徒、ネロ・カオスは無数の生物を自分の使い魔として使役し、
敵を追い詰めて配下を増やしていく吸血鬼の定説を行く者だと。

だが違った。ネロ・カオスに使い魔など存在しない。もし使い魔を
総べるしか能のない死徒ならば信彦が倒した時点で焦るか逃亡を企
てるはずだがネロ・カオスは次々と死んでいく生物を目にしても表情
は何も変わらない。

当然だろう。生物達は信彦の攻撃を受けて身体を裂かれ、塵となっ
たとしても死んでは無い。亡骸は泥へと還り、こうして信彦を飲み込
もうと泥の中で胎動を続けているのだ。

それには一つ一つ、統一された『意思』も感じられた。

「全てが一つ。一にして全。それが私という吸血鬼だ」

ネロ・カオス

その名の通り身体に混沌を宿す吸血鬼

両手へと力を込めるが泥から飛び出した蛇が信彦の全身に絡まり、両手首が泥へと引きずりこまれてしまう。

「くッ!？」

(オイオイまずいぜ。あと一分ねえぞッ!!)

「ならば…ッ!」

急かされた信彦は塞がれた両手に力をこめられない代わりに、腹部のベルトへと力を集中させる。

「むうッ」

放たれた緑色の光を受け、泥は信彦をとっさに解放。腕からシャドービームを発射すると街灯へと縛り付け、ロープのように活用して泥からの脱出に成功した。

シャドーフラッシュを受け、その動きを抑制されたことに驚きつつも関心を隠せないネロ・カオスは距離を取った信彦へと目を向ける。「…あの光。『私達』を怯ませるだけでなく、触れた者全てを取り込む『創生の土』の効果を一時的に言えど打ち消すとは…あわよくば貴様を飲み込もうとしたことは愚策だったか」

しかし、と言葉を続けるネロ・カオスの前で信彦は膝を付き、身体の節々から緑色のエネルギーが漏れ始めている。

信彦が姿を変えてから、3分以上が経過してしまっていた。

(あっちゃー、どうする?…白旗上げる?)

「…通用する相手ならばな」

(うん、ありや通じないわな)

何時になく諦めだけは早いアンリマユはいつものようにそっけない答えを出す信彦が自分の軽口に乗ってくる様子から確信する。どうやら打つ手はないようだ、と。

相手を見ただけで能力、心理まで見抜いた上で戦略を練る信彦に取って、時間制限が付くのはデメリットの方が遥かに大きい。今回の場合は最初にシャドームーンの姿へと変わらなければ生物達に全身を食い尽くされる結果となっていただろうし、本体である死徒の特性も分析する時間もなかった。

そして時間を気にせず冷静でいられたのなら、最後に脱出する際に使用したシャドーフラツシユも、逃れるためだけでなく泥の底にいる生物達を暴走させ、自滅させるなどの策を講じることが出来たはずだった。

本当に、間が悪かったのだろうかと思息をつくアンリマユの視界には、テレビか図鑑でしか見た事がない恐竜の頭部を肩から生やすネロ・カオスが迫りつつあった。

表情は先ほどから変わらないはずだが、何故か落胆していると一目で分かってしまう。

「…内側に宿る力が神秘に足るものでも、制御する器は所詮人間であつたか」

「……………」

どうやら何かを自分達に見出していた様子だったようだが、正直知ったことではないというのが信彦とアンリマユの言い分だ。ネロ・カオスが自分：『自分達』のようにその身には大きすぎる力を持った者がどのような存在となつたか見極め、求めた回答へとたどり着く礎となると期待していたとは思えないだろう。

その思惑が悪い方へと傾いた際の失望からくる怒りが、今にも自分達の『死』という形で晴らすことだけは、はつきりと分かる。

「消えよ。その身に扱い切れぬ奇跡ちからを宿したことを恥と知れ——」

随分好き勝手なことを…恐竜がこちらへと牙を向けたと同時に信彦は最後の抵抗として右手にありつた力の力を込めた拳を叩き込もうと敵の接近を待つ。

こんな時、『奴』ならば例えキングストーンの力を失っていたとしても立ち上がっていただろうと拳を握った途端だった。

信彦の眼前に幾本もの刀剣が舞いおり、信彦とネロ・カオスを隔てる柵の如く路面へ突き刺さっていく。

剣の雨はそれだけでは留まらず、信彦を噛み砕こうとした恐竜の目・鼻・耳という急所へ正確に射抜き、咆哮を上げながらネロ・カオスの体内へと還っていく。

突如として攻撃をしかけた相手が立つ電柱を見上げるネロ・カオスは、またも貴様かと言いたげに深く息を吐くと踵を返し、人間の姿へと戻ってしまった信彦から離れていく。

「…興きんが削がれた。二度と私の前へと現れんことだな」

闇へと消えた吸血鬼の去った後を息を荒げて睨む信彦の前に、結果的には自分達を救った者が着地する。

信彦は息を乱しつつも、自分の前で突き刺さった刀剣の形を見た瞬間、放った者が誰であるかよりも先にどの組織に属する者であるのか把握していた。

魔力で生成した黒鍵と呼ばれる剣を投擲に使用し、自分達を含む人間にとっては異端である存在を極端に嫌う者達。

聖堂教会の異端狩り…埋葬機関の手の者がこんなにも早く、しかも
よりにもよってこのタイミングで自分の前に現れてしまうとはと信
彦は続く不運を呪う中、相手はそんな心中などお構いなしに信彦の喉
へ黒鍵の切っ先を突き付けた。

ウインプルで覆う

「……………」

(…なんつーか、最近の修道女ってのはここまでアグレッシブでバイ
オレンスなもんなのかい?)

アンリマユは街灯の光でようやく全貌が明らかになった相手の第
一印象を口にする。

頭を覆うウインプルと修道服という外見以外、教会で祈りを捧げる
姿など想像すらつかない程に冷たい瞳でこちらを伺う女性が信彦を
睨むこと数十秒。互いに言葉を交わさない状態が続く中、女性は信彦
へと問いかけた。

「…質問をします。なぜ、貴方はネロ・カオスと戦っていたのですか
?」

「…移動中一方的に襲ってきたので反撃しただけだ」

嘘はついていない。目的はあって歩き回ってきた所を突然食され
そうになるなど、通り魔より質が悪すぎる。女性はやはり表情を変え
ずに次の質問をぶつける。

「彼方がこの街に滞在する理由は?」

「貴様には関係ない」

「……………」

信彦の悪態にアンリマユは相手を刺激すんじゃないやねえよ馬鹿野郎と
絶叫しているが放っておく。特に相手も気にする様子もなく、ただ
真っ直ぐこちらの目を見つめ続けている。その行為が何であるかを
信彦が指摘した途端、初めて反応を示した。

「言っておくが、俺には暗示は通用せん。それに、嘘を言うつもりもな
い」

「……………」

目を細めた女性は続いて信彦に問いかけた。その内容を耳にした時、これまですらすらと答えた信彦が初めて言葉を詰まらせてしまった。いや、答えられないというよりも、回答に困ったと言った方が正しい内容だった故に。

「彼方は遠野志貴と、どのような関係なのですか？」

「……………」

なぜここであの眼鏡をかけた少年の名前が出てくるのかと悩む信彦を見て何か後ろめたいことがあると考えたのか、女性は黒鍵を握る手に力を込めている。

逆にこの女が志貴を知っている事を聞き返したい所であるが今は分が悪い。正直に答える事しか、今の信彦には出来なかった。

「…ただの顔見知りだ。この街についてからのな」

「では、狙いがあつて彼に近付いた訳ではないと？」

「当然だ。むしろアイツからこちらに近付いてくる」

「そうなんですよねえ。遠野くんって子犬っぽいところがありますし

」

突然雰囲気の変わつた女性は困つたものですよと言わんばかりに額を押さえてため息を着いている。表情が急に変わった様子を見てやや目を点にする信彦の視線に気が付いた女性はハツとしてワザとらしくコホンと咳をすると黒鍵を収め、その場で跳躍。

電柱の上でスカートをはためかせながら、見上げる信彦へと告げた。

「…今回彼方は完全に被害者ですからね。教会からは全力で討ち取れなんて言われてますけど私には実害ありませんし、目的は別にありますのでここで失礼しますね」

最初にこちらへ剣を向けた人物とは別人のように笑顔を向ける女

性はヒラヒラと手を振ってくる。

「それに、後輩の恩人に手を上げるなんてことはできませんから」

信彦がようやく歩くようになるようになったのは、彼女が去ってから1時間も経過した後だった。先に姿を消した吸血鬼の言葉が耳に残り、その手は血が滲むほど強く握りしめて…

その後、自分を追い詰めた吸血鬼が都内のホテルへ訪れた人間を犠牲にし、1人の少年によって討たれたと信彦が知ったのは数日後の事だった。

（あん時は、まあドンマイ？）

「……………」

未だ営業の再開の目途が絶たないホテルの全貌を眺めながら、信彦は飲み干したペットボトルをゴミ箱へと放り投げる。

あの時に受けた屈辱は今でも忘れない。だが、それを晴らすべき吸血鬼はもうこの世界から消滅している。

遠野志貴の手によって。

（今だったら間違いなく瞬殺できるのにね、あん時にボコボコにされた借りが返せなくていやあ残念残念）

「……………」

（あの、どこで入手したのでしょうかその獅子唐——）

自らの味覚を犠牲にしてアンリマユを黙らせた信彦は自分の手を見つめ、やがて力を込めて握りしめる。

「…俺が恨んでいるとすれば、あの吸血鬼でなく己の限界を恐れていた情弱な俺自身だ」

限られた時間しか戦えないという焦りが、あの時の敗北を招いた。だが、そんな弱い自分は、もういない。新たな決意と力を得た今の自分ならば…と考えた時ズボンのポケットからベルの音が響く。

(…なに、メールか)

「…あのシスターからだ」

紆余曲折の末、何故か連絡先を交換したあの時自分達を救った修道女から度々メールが届くような関係となっていた。ただし、その内容は一方的なものばかりである。

(…はあん？あのカレー女、まだ眼鏡のこと諦めてねえの？いい加減観念しろっての)

「どうやら2人で出歩いている姿を見たようだ。なら、あと2時間は続くな」

信彦の言った通り、新着メールが届く音声が次々と鳴り響いている。こういった場合は本人の気が済むまで文章を打たせ、最後に一言添えるのが一番手っ取り早いと判断した信彦は携帯電話をベツトの上には放り投げる。

(にしても…あんだ、随分知り合い増えたわな)

「…知るか」

着信音が鳴り響く中、信彦のどこか照れ隠しを思わせる言葉にアンリマユは笑いを噛み殺すのであった。

第14話

事の発端は1週間ほど前の話だ。

商店街に行き交う人々が集団催眠にかかり全員が3時間ほどの記憶を失っている間に台風が通ったかの如く舗装された路面が捲り上がり、電柱も傾いていたという。

問題はこれだけに留まらない。

その事件の中心にいた人物達はなんと異世界へと連れ去られ、無事戻ってきた際にはこれまた別世界の人間も同行していたらしい。

そしてその人物は空から降ってきた果実を頭から被って――

「いい加減にしなさいよモオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!」

受け入れ切れない内容に遠坂凛は手にした報告書や写真を絶叫と共に天井へと放り投げ、ガンつと額をテーブルへと叩き付けてしま

頭上からパラパラと舞い落ちる資料など気にも留めず頭を抱えた凜はメディアが魔術を白昼堂々披露してしまった事を何故か嗅ぎつけた聖堂教会へどう報告するかと悩んでいた。

秘匿すべき魔術を大勢の前で使用したことは魔術を使う者としての：などとチクチクとこちらをつつくような話が電話越しで数時間も続けた上で納得のいく報告書を提出しろというのだ。

もし監査へ現れた時は、異端を嫌う彼等は今度こそサーヴァント達を差し出せと言いかねない。

聖杯によつて構成された使い魔が命を手にし、一個の生命体となつた者など教会から見たら恰好の標的だ。魔術協会ならば最悪死ぬまで実験動物扱いにするが聖堂協会は間違いなくこの世から消し去る算段だろう。

そうしないのは以前に自分達では彼等の言う『異端』に太刀打ちできず、『異端』に助けられた借りがある故だ。神に仕える身としてはその中心となる人物が済む街ではそんな真似はできないのだろう。

いや、そんな事を許す人物でもないのだが。

報告書は適当にでっち上げると方向性だけは決めた凜の続いている悩みはその場に居合わせていたアーチャーから聞いた話となる。

『——あれは異世界への『入口』と考え間違いないだろう。しかし、魔術無しにあのような入口を開けるとは敵の技術も大したものだ』

と他人事のように感心しているが、大師父のようにそう軽々と世界と世界の境界を越えてくる存在など恐ろしいにも程がある。教会と協会の連中には是非ともこちらを相手にして欲しいものだ。

だが決して立ち向かおうともしないはずだ。

自分達の技術や信仰を絶対のものだと自負していた彼等の心は数か月前に起きたゴルゴムの一斉蜂起によつて粉々に砕かれている。

今まで培った魔術や体術、全てを圧倒的な力と数で蹂躪された2つの勢力は、ゴルゴム以上の脅威となるクライシス帝国の存在に対しては静観する以外に手段はない。

結局の所、侵略者へと立ち向かうのはあの度を超えたお人好し達しかいないのだ。

「それにしたって異世界人なんて…」

桜達からの懇願でその青年がこの世界で生きられるよう戸籍を良い値で売ったのはいいが、話を聞いただけでは彼のイメージがまるでわからない説明を思い出す。

『それから突然大きな果実が降ってきたんです！それを被ったらとても強くなって——』

実の妹の頭を本気で心配してしまった瞬間だった。

なんだその愉快的パワーアップは。凜ですら知っている世界的に有名な配管工が菌糸類を摂取して大きくなるのと同じ原理なのだろうか？

…ともかく見たいようで見たくないその光景は置いておき、間桐家に居候が増えたことでさらに戦いは激化するであろう予感がする凜は居候含めた間桐家：特に桜の身を案じる他、今の自分には力になれることはないと考えながら散らかした資料を回収せねばと顔を上げた彼女の前に既に拾われ、綺麗にまとめられた紙束が差し出される。

さらに顔を上げてみると、普段より3割増しに深くため息をつく遠坂家の居候の顔が目映る。

「せっかくの資料をぞんざいに扱うなど、遠坂家の家訓に反する行為ではないか、凜?」

「うつるさいわね!今片付けようと思ってたの!!」

「そうか、そういう事にしておこう」

目を閉じて皮肉を口にするアーチャーの態度に青筋を立てる凜だが今し方目の前の男に言われた遠坂家の家訓を何度も頭の中で唱え、落ち着きを取り戻すと彼が今にも外出しようとすることに気付く。

「…今日もなの?」

「ああ。心配せずとも夕方頃には戻るさ」

「子供扱いしないで頂戴。用があるのならとつとと行きなさい!」

「ああ、そうさせて貰うとしよう」

刺のある言い方をしてしまったと後悔する凜だったが、当のアーチャーは気にする様子もなく部屋を後にした。

凜は窓から様子を伺うと、しっかりと扉、門を順に潜り徒歩で外出していく、最近ようやく見慣れてきた私服姿のアーチャーを見守ると彼の所持品であるシオルダーバックを見つめる。ここ数日、彼は同じ荷物を持って外出し先ほど言った通りに夕方には帰宅しては戻ったの一言を添えて食事の準備を始めている。

凜は特に理由は聞こうとは思っていないかった。

長い戦いの果てに守護者となり身体も理想も摩耗し続け、聖杯戦争へ英霊として召喚された彼が得ることの出来た2度目の人生。しかしアーチャーは以前と変わらずに凜の目の周りの世話を焼くばかりで自分の時間を持つとうとしていなかった。

だが、行先を告げず外出をするようになって以来普段通りを装っているのだろうが帰宅した彼はとても充実。さらに言えば楽しそうに見えていた。

凜からして見れば人生をやつと自分の為に謳歌する事が出来たと喜ぶ所なのだろうが…なぜか、別の感情が込み上げてきている。

(なんだか、面白くないわね)

彼が何かに没頭し、楽しみなどむしろ歓迎するべきことだ。だが、彼をそんなにも楽しませる『何か』に凜は気に食わない。なんと子供じみた思考なのだろうとすっかりと自覚はしているのだが、気に食わないものは気に食わないので仕方がない。

ありえないと思うが、それが自分以外の人間…それも女性と関わっているということなら…

「…確認する必要があるわね」

それだけで物事を判断するほど凜も愚かではない。だが、効力は無いに等しいとは言え彼のマスターである凜は彼の行動を把握しなければならぬという使命感を自発的に抱くと早速出かける準備を始めるのであった。

しかし、遠坂凜はどこまでも遠坂凜であることを忘れてはいけな
い。

「……………」

「まあ、見られて困るものではないのだがな。君には理解のし難い世界なので伏せていたんだ」

普段とは違う服装と髪型にした上で伊達眼鏡を着用し、尾行を開始したまでは良かったが最初の角で既に待ち構えていたアーチャーへと声を掛けられた凜は裏声を使ってまで別人に成りすまそうと往生際の悪さを見せたが敢え無く撃沈。

こうしてアーチャーの隣を無言で歩きながら行動を共にすることになっていた。

頬を朱に染めている凜はいつそ血祭りに合いたいと叫びたくなるほどの後悔に苛むがそうこうしている間に目的地へと到着する。だが、その場所は凜にとっては以外過ぎる場所であった

「間桐の家…?」

クライス要塞

「…本日は落ち着いているのかしら」

「みつともねえ所見せちまったな…」

通路を歩くマリバロンの周りを浮遊するガテゾーンの頭部は先日起きたゲドリアンへの報復の為に重武装で追いかけて回した事件を詫びながら自らの計画をマリバロンへ説明する。

「前回、前々回とRXが戦った時のデータは十分にそろった。アイツ等が送り出した連中の犠牲も無駄じゃあなかったと俺が今回証明して見せるぜ」

ある一室の前でマリバロンが立ち止まると、ガテゾーンはモノアイから赤外線を照射して扉のロックを解除。ゆっくりと開かれる部屋の中ではある怪魔ロボットの開発が最終段階へと移行していた。

「これは…」

思わず声を漏らすマリバロンの横へと足音を立てて移動するガテゾーンのボディへ浮遊していた頭部が投下・接続されると立ち尽くす彼女の肩へ手を置き、完成を目の前にした怪魔ロボットを前に誇るように告げるのであった。

「見ていろ。このクライシス最強の怪魔ロボットが今度こそRXをなぶり殺して見せる…」

間桐家の地下には魔術師にとっての作業場：言わば工房と呼ばれる場所は蟲蔵が併用して使われていた。だが、蟲だらけの環境ではどうしても進まない研究もあり当主であった間桐蔵硯は別の工房を作成する。

しかし造ったはいいが今度は逆に蟲が居なければ落ち着かない事実に気付いた蔵硯は二つ目の工房：別名『倉庫』はその名の通り不用品などを適当に放り込んで長年放置されていたのであった。

その空間を発見した光太郎達は中を徹底的に改造し、自分たち作業場向きに内装を変更した。それはまさに今進めている計画に相応しき場所へと変貌している。

蟲蔵と同じく石造りで暗くジメジメとしたその空間へは地上から引いた電気や空気の入替えが出来るよう吸気・排気口だけでなく空調機までも備えて環境を整え、壁面も調湿性に優れている漆喰を使用した塗り壁へと変更。

さらにネット環境も整え特注のコンピューターも配置したそこはもはや秘密基地に近い。

だが、そんなものは凜にとっては二の次である。

彼女はそんな空間よりも、間桐光太郎と慎二、その友人の衛宮士郎はともかく自分の同居人までもが共同して作成しているモノに対して本日二度目となる絶叫を木霊させるのであった。

「何なのよそれはあああああああああああああああッ!!」

限られた狭い空間であるため彼女の声は良く響き、全員が思わず耳を塞ぎ作業を中断する程のものだった。

「うるさいわよ」

「あうッ！」

その場にいた者達の気持ち代弁し手にしたファイルの背表紙を凜の頭頂部へ叩き込んだ人物：メディアは頭を押さえて涙目となつて振り返る凜の魂からくる訴えに仕方なく答えることにした。そんな事も理解出来ないのかと軽蔑の眼差しで。

「ねえ遠坂さん？今男共が必死になって組み立てているものは、世間一般から見るとどのような名称とされているか、本当に分からないの？」

強めの口調に思わず萎縮しながらも横目でもう一度確認する凜は優雅が服を着て歩くような上品な言葉使いでも、心許した相手に見える気さくな口調でもなく不安まみれな小声を漏らした。

「…自動車…よね？」

「ええ正解。まさしく車、それ以外の何物でもないわ」

「ごめんなさいやっぱ色々言わせてもらえないかしら？」

メディアは調子を取り戻した凜を無視し、凜へ攻撃を与えたファイルを小休止へ入った間桐光太郎へと差し出した。メデューサから渡されたタオルで額から流れる汗を拭う光太郎はファイルを受け取るとパラパラを捲りながら残る手を顎に当てる。

「やっぱり代替品は難しいか…じゃあ、この部分の設計頼めるかい？」
「もう始めてるわ。あとは図面に落としものが寸法通りのサイズになるかを確認した上での二人に加工させるわ。ギアの負担が大き

くなるから強度も考えないとね」

「それもそうか…じゃあこのまま俺は内部に入れるAI搭載に使えそうな——」

2人の会話がまるで理解できない凜はエプロンをつけ、全員分のお茶を用意した桜に肩を叩かれるまで茫然としていたという。

「異世界の人がくれた、設計図？」

「はい。光太郎兄さんとメディアさんがこちらに戻ってくる寸前に渡されたメモリに…あ、メモリっていうのは図面などの電子媒体を保存できる小さな機械で…」

「……………ありがとう」

逐一わかりやすい説明をしてくれる実妹の優しさが辛い凜は大体の事業を察することが出来た。

怪魔界へとワープした光太郎とメディアはワールドなる人物から託された異世界の青年…現在では赤上武なる人物以外にも手渡されたデータメモリからある設計図を取り出す事に成功した。

そこには現在組み立て作業中である車の設計図であり、光太郎は形とする為にこの場にいる全員へ声をかけたということだ。

元々頼まれたら断ることを知らない土郎や義弟の慎二はともかくとして、まさかメディアやアーチャーが手伝っているとは意外にも程があると思いつながら、何やら向こう側で口論している2人へと視線を向ける。

「だから貴様は甘いというのだ。見ろ、このような乗り物はちよつとしたボルトの緩みや溶接の甘さが命取りとなるのだぞ」

「お前に言われなくても分かっている！自分で気付いたからこうしてやり直してらんだろッ！」

と、見つけた粗に対して非難するアーチャーと反論する士郎の様子は同じ口喧嘩でも聖杯戦争時と比べたら実に愉快的な光景となっていた。しかもどちらとも色違いのツナギを着込んで煤だらけになっている姿が、どこか笑えた。

「ひよっとして、アイツが上機嫌で帰ってきたのって…」

「はい、とても楽しそうに作業してましたよ」

流石に鼻歌混じりではありませんでしたがと言う桜の報告に苦笑しながらも、士郎とかつての彼が学校で備品の修理や整備に追われていたのをよく見ていたが、まさか今になってまで楽しめるとは…いや、備品と車では大分ジャンルが違い過ぎるが。

「それにしても、なるほどね。光太郎さんもちゃんと考えた上での人選ってわけね」

あの2人は投影魔術をする上でモノの構造を理解する事に長けている。それは刀剣という限られた範囲だけでなく、機械類にも含まれているのだろう。それを考えた上で誘ったというのだから、本当に大したものだと凛は感心する。

だが、適材適所で考えるならメディアに関してはどうしても腑に落ちない。

それに彼女は魔術師。自分と同じように近代の文明には疎いはずなのに、何故あのような作業…ブルーライトカットの眼鏡をかけてブラインドタッチでパソコンを操作する姿はとても様になっている反面非常に納得できない姿であった。

桜の説明によれば、元の設計図ではどうしても把握できない部分に関してメディアが設計図から3Dモデルで一端起こし、それを基にして一から光太郎達が作成や代替品を探しにでているらしい。意外にも重要なポジションである。

「…ふう、出来たわ。メデューサ、今プリントした平面図通りに加工するよう坊や達に言って頂戴」

「分かりました。では、一休みしたらどうでしょう？単純な数値の入力だけなら、私でもできますから」

「なら、お願いしようかしら」

眼鏡を外し、作業中は首の後でまとめた長い髪を解くと桜と凧が使用しているテーブル席へ腰を下ろすメディアの前に湯吞が差し出される。その主は先日から間桐家に居候を始めた青年であった。

「どうぞ。粗茶でございますが」

「ありがとうございます。その後、調子はどうかしら」

「すこぶる順調、と言いたい所ですがやはりまだ慣れるモノではありません」

「まあ、聞いた時代が時代ですもの。あと、そのような口調は結構よ。別に彼方には貸し借りのある関係ではないのですし」

「…なら、お言葉に甘えるところでしょう」

「ええ、そうして頂戴」

一礼してその場から離れた武は視線の合った凧にも微笑みながら会釈するとこの空間を後にする。どうやら上で見張りも兼ねているらしい。

「なんとというか…真面目な奴ね」

「武さん、この時代を理解しようと頑張ってますから」

「そう…でも今の問題は——」

武への関心に桜が補足してくれるが今凧が知りたいのはそこではない。凧は両手で湯吞を持ち上げるメディアへと問いかけた。なぜ、自分と同じく近代機器を嫌う趣向にあるコンピューターをあのよう
に使いこなしているのかと。

しかしそう尋ねる凧の口調には自分には使えないのにと
いう妬みが含まれているということ
を視線を向けられているメディアと苦笑い
を浮かべる桜には手に取るように分かってしまう。

「そう目くじらを立てるようなものではないわ。これは——」

湯吞をテーブルに置いたメディアはパソコンへと触れるようになった機会を思い出す。

柳洞寺での家事にもなれ、時間を持って余すようになったメディアは趣味でもあるボトルシップに近いものはないかと調べた結果、手頃の大きさに縮小された造形物の作成に興味を持つ。

商店街の模型店などに通い、やがて専門誌を捲っていくうちにとある商品がメディアの目に留まる。

それは自分の思い描いた形に切削造形法で立体物を造りだす機械：俗にいう3Dプリンターへ非常に強い興味を持ったのだ。

しかしその為には機材は勿論、そのデータを入力するための知識を有さなければならぬ。

そこでメディアは夫である宗一郎の許しを得てパソコン教室に通って基礎知識を学んだ後、参考書やインターネットによる情報から得た技術によりメキメキと腕を上げていった。

その結果、作成ソフトやプリンター自体に改造を施し簡単な小物から部品を一つ一つを造形し、それらを組み立てることで城のミニチュアを作るまでに至っている。

現在では住職の部屋に置いてある熊の置物すらメディアの傑作となっている程であった。

…ここまでの説明は偉く面倒で、この娘に言うこともあるまいと踏んだメディアはお茶を濁すことに決める。

「――主婦の嗜みよ」

「絶対嘘よね今の間を考えてッ!?!」

果たして凜の喉は持つのかと心配するアーチャーはふと自分でも気にかかることがあった。

ちやうど自分の近くに作業によって発生した金属片を回収してい

る光太郎へと尋ねる。

「間桐光太郎。今回の件は私達が呼ばれたのは納得できた。しかしどうしても気になることがある」

「資金の出所ってどこかい？」

無言で視線をぶつけるアーチャーの様子から肯定と受け取った光太郎は何の躊躇もなく、あっさり今回の資金面での協力者の名を告げた。

「ギルだよ」

「あの男か…」

ある程度は予想…いや、考えてみればこんなことに大喜びで手を貸す輩など奴以外にはいまいと、聞いた自分がどうかしていたと言つてアーチャーは台車に背中を当てると未完成である機体の底へと滑つていく。

どうやら底部での調整に入つていったらしい。

アーチャーの質問にでた出資者による贈り物が届いた状況は今でも忘れられない。

設計図の印紙に成功し、赤上武が間桐家に世話になると決まった翌日のことだ。さてどこから手をつけようかと設計図と睨み合いを始めた光太郎は自宅の前で数台のトラックが止まっていることに気付く。

業者の人間に求められ受領書へサインをすると、作業員が次々と間桐家の庭に幾つものコンテナ。その中身は現代の技術では決して精製できないレアメタルの山。そして今まさに入手方法を悩んでいた骨子となる新品の車両が停められたのであった。

ありがとうございます！と笑顔で去っていく業者を見送る間桐家の面々は光太郎が手にした受領書を一齐に目を向ける。差出人の名前には、簡単にこう書かれていた。

K I N G

あの男は日本にいないというのに、どこまで事態を理解しているのだろう。

光太郎は連絡も取れない協力者に届かない感謝を述べながら、ありがたく贈り物を使わせてもらうことにした。

金属類の破片の回収が終わった光太郎は地上のガレージからいつの間にか移動し、組み立て作業の様子を見守っていた友に笑いながら声をかけた。

「どうした？新しい仲間が増えるのが嬉しくなったか、アクロバッター」

「……………」

「…………？」

普段ならば電子音で反応か、最近発するようになった言葉で話してくれるはずの生体バイク、アクロバッターはただ赤い瞳を組み立て途中の機体へと向け、ただ一言告げると反転しその場を去ってしまう。

「…カンタンニイクトイイノダガナ」

アクロバッターの言葉の意味を光太郎が知るのには、完成を間近に控えたマシンの初起動時になるとは、この時は知る事すらなかったのだった。

第15話

冬木の街の管理人である遠坂凜は連日して勃発した事件に頭を悩ましていた時、彼女はアーチャーの出先が気になり尾行を開始する。しかし、あっさりで見抜かれてしまった凜はアーチャーと同行し、彼がこの数日間通っている間桐家の倉庫で間桐光太郎達と共に開発していたものを目の当たりにすると大絶叫。

同じく作業を手伝っているメディアの意外な技術と相変わらず言い争いをする衛宮士郎とアーチャーの姿を眺めながら桜の準備したお茶を啜るのであった。

そして開発の様子を別の場所から見ていたアクロバッターは光太郎に意味深な言葉を残し、その場をさっさとしてしまう。

一方、クライス要塞では機甲隊長ガテゾーンの手により、新たな怪魔ロボットが生まれようとしていた…

「ふわあ…」

「あら、夜更かし？光太郎君にしては珍しいわね」

大学の廊下で噛み殺すことなく欠伸する間桐光太郎の背後から凜とした声が響く。振り向いてみると、かれこれ10年以上の付き合いとなる親友がセミロングの黒髪を掻き分けてクスリと微笑みかけていた。

「おはようリョウちゃん。うん、ちょっと取り込んでいることがあつてね…」

「それでもちゃんと寝なきやだめよ？じゃないと出来ることも出来なくなっちゃうんだから」

「ハハハ。気を付けますよ、紫苑先生」

「もう、まだ実習生よ？」

光太郎の冗談に眼鏡を位置を直して答えた紫苑良子は光太郎と同じ大学で教師になるべく日々勉強に励む生活を送っており、経済学部の光太郎とは授業が重なる事はないがキャンパス内で行動を共にすることがまれにある。

本人達は知る由もないが、爽やかな好青年である光太郎と知的で落ち着きのある才色兼備の良子は大学内では噂になるほどのベストカップル扱いされているのであった。

ちなみにこの件を耳にした光太郎の思い人であるメデューサがちょっととした事件を起こしてしまうのは全くの余談である。

「そう言えば、先週に大輔君のお家に行ったらしいけどその…大丈夫だった？」

「うん、いつも通りだったよ。仕込中をお邪魔しちゃったけどね」

「そう…でも幸いだったよね。商店街のみんなて家にいる時に異常な程強烈な突風が吹いたなんて…」

（そういう事になっているのか…）

あの事件を上手くごまかしてくれた冬木の管理人である遠坂さんに感謝しなければならぬと心で考えながら背筋を伸ばした光太郎は、隣で自分と同じく幼馴染である檀原大輔の安否を気遣う良子の横顔を見る。

何やら最近もちょっとした事できつく言ってしまった手前、大輔と顔が合わせ辛い状況で起きてしまった商店街での怪事件。良子が光太郎へ知っているかと尋ねたのは怪魔界から戻った翌日であり、その

時点ではメディアのかけた催眠術の効果であの場にいた一般人は誰一人として覚えていないのである。

しかし親友を安心させるべく光太郎は良子の目の前で携帯電話を取り出し大輔へと連絡。機器を耳に当てているにも関わらず聞こえてくる元気な声によく胸を撫で下ろした良子の顔は若干ながらも涙ぐんでいたのを光太郎は良く覚えている。

(早く素直になればいいのに)

他の親友2人と同じ意見である光太郎は本日の時間割を確認し、よし、と意気込む。

今日の講義を乗り越えれば、いよいよ起動試験だ。

「やっぱり意外だわ…」

間桐家の『倉庫』と呼ばれる空間にあるテーブルに肘を付き、手で顔を支えながら遠坂凜は同じテーブルの対面に座り、既に役割を終えて手持ち無沙汰となり柳洞寺から持ち込んだ自作の細かな部品を接着剤を用いて組み立てていくメディアの作業を眺めながらぼそりと呟く。

アーチャーの動向を探り光太郎達の共同作業を知って以来、凜は学校帰りに間桐家へと立ち寄り組み立て作業を眺める日々が続いていた。

後暫くすれば帰宅する光太郎による試験を待つばかりだというのに凜の後ろではやれ『貴様の作業では効率が悪い』やれ『何度確認しても越したことは無いだろ!』と未だに口論が絶えず、『お前達いい加減にしてくれないツ!』と代理責任者の次男が大声を上げる状況だ。

それを聞き流す凜の視線に気づいたのか、メディアは作業を止める

と答えるように顔を上げる。

「何がかしら？」

「貴女が協力していることが。てっきり自分には関係ないなんて光太郎さんの要請をつっぱねるかと思ってたから」

「ええ。是非ともお断りしたかったわ」

視線を再び手元に向けると組み立てを再開するメディアはあつきりと凜の推測を認め、最後まで気にくわなかった老人の顔を思い出す。

本来ならば凜の言う通りに自分からクライシスとの争いなどに介入しないつもりでいたメディアであったが怪魔界から戻ってきて以降、気が付けば光太郎の提案に乗り、こうして得意とする魔術以外の分野で手伝いをしている。

それは、彼女なりの借りの返し方であった。

怪魔界での戦いで死にかけたメディアをワールドは解毒剤で命を繋ぎとめた。これは、彼女に取って大きな借りとなっていた。自分を助けた老人の願い：クライシスを倒し、支配された怪魔界へ平和を取り戻すことであるが全てを叶える義理はない。

メディア自身がワールドに言った通りに自分達の住まう世界にクライシスが攻めてくるのであれば迎え撃つ。それで借りを返すには十分過ぎるだろうというのがメディアのスタンスだ。

闘うのであれば、あのお人好しだけで事足りる。メディアは自分と、自分の愛する人との暮らしが守ればそれだけでいい。しかし：

「…なら、なんであの訳の分からない機械を作るの手伝ったのよ」

「いい加減覚えなさい。あれは車という乗り物よ？」

「いいからッ！もういいからそれはっ!!」

数日前に取り乱して大声を上げたことを家に帰れば未だアーチャーにニヤニヤしながら突かれている凜は顔を赤くしてキャス

ターへと詰め寄る。はあ……と溜息をついたメディアは瞬間接着剤をテールに置き、完成品を丁寧になでる。それは手の平サイズに縮小された今回共同作業で製作された機体の精巧なミニチュアであった。「…あの連中が攻め込んできたら、宗一郎様との生活に支障が出る。それだけの事よ」

「……そう。ま、貴女の場合は基準がそれですものね」

取りあえずは納得したと席を立つ凛には言わない理由は他にもしつかりと存在していた。それはまだ、メディア自身すら自覚できない、認めようとしらない理由。

自分達を逃がしたワールドのように、逆らう者に容赦せず次々と命を刈り取っていくクライシスに対して抱く、内側から湧き上がってくる感情。

それが何であるかをメディアが知るのは、もう少し先の話だ。

そして数時間後…

「いよいよか…」

「はいー」

「まさか本当に出来るとはね…」

一同が見守る中、光太郎は桜と慎二と共に完成した機体の全体を見回した。

異世界の協力者によって設計され、仲間達の様々なサポートによって誕生したマシン。

その名はライドロン。

流れるような真紅のボディに蟲の複眼を思わせる黒いフロントガラス。後部に取り付けられた4つの噴出ノズルは見ただけでも逸脱した馬力とスピードを持ち合わせていると思わせる。

最高速度は計算上でも時速1000kmを超え、それに耐えられる強固な作りとなっているマシンの起動試験には、自然と期待が高まってしまふ。

中でも、こつそりと運転免許を取得していたメデューサは平常を装っているが乗りたくてうずうずしている様子が伺える。

そんな姿に微笑みながらドアを開け、操縦席に座った光太郎はハンドルの調子確かめながら、起動するためにキーへと手を伸ばす。

(行きますよ、ワールドさん。彼方が設計したマシンが、ようやく完成します)

開発に協力した全員が息を飲み見守る中、光太郎はゆっくりと息を吐き自分にライドロンの設計図を託してくれたワールドへ捧げる決意と共に、キーを回す――

「アレ？」

動かない。

何度もキーを回し、アクセルを踏んでもライドロンは動かず、それどころか機内のコンピューターすら起動しなかった。

「動かないのだろうか……」

「そう……みたいですわね」

運転席で何度もキーを回し、コンピューターを操作する光太郎の姿を見てそう尋ねる武に桜も落胆した様子で答えてしまう。あれ程必死になって設計図から解読し、みんなの協力があってやっと完成したというのに……と悲しむ桜の頭を普段よりも優しく手を置く相手の名を思わず呼んでみるが、その表情はライドロンが動かない事とは別に気が重い。

「慎二兄さん……？」

「理由は後で見つけるとして……アレを止めるぞ」

慎二の指さした先では、土郎とアーチャー2人。もしやライドロンが動かなかったことでまた口論が勃発してしまったのであろうかと不安に煽られる桜であったが、それとはまた別の問題が発生していた。

2人は向かい合い、床へ座り込みながら光太郎とメディアによつて印字された設計図を片っ端から眺める：睨んでいると言った方が正しい程に凝視を始めてしまった。

自分達が作成時に行つた行程をまた一から見つめ直し、問題点と考えられる事案を次々と手にした手帳へと書きこんでいる。

「お前に任せていたモーターとジェネレーターの直結部とそれに使つた工具全て書きこんでおけ」

「アンタが担当したシャフトとスリープの位置も書いとけよな！」

あのまま放つておくと夜になつても終わらないと踏んだ慎二はどろろにか止めさせようと桜を頼つたのだが、意外過ぎる光景に実姉まで呆けている。

実は仲いいんじやねと思える程に次々と考えられる内容や自身と相手が実行した作業を書き上げていき、全てを出し尽くしたら検証を始めるつもりなのだろう。組み立てに關しては一任されていた2人が互いに罵り合いながらも的確に仕事をしていたのはサポートを担当していた慎二がよくわかつている。完成したライドロンが動かないという失態は自分にあると言いたいのだろうか、連日の作業で疲れが溜まつている状態では問題解決には至らない。

その点も踏まえて専門用語しか口走らなくなつた2人を物理的に止める為、手頃な工具を探していた時であつた。

「いい加減にしなさい」

「んがッ!？」

「クッ!？」

その行動は凜の鉄拳により実行され、脳天に直撃を受けた2人は殴られた場所を手で押さえながら声にならない声を漏らしている。

「ちよつと、士郎はともかくアーチャーまで避けられないってどういうことよ?」

「……………」

腕を組んで見下ろしているマスターに返す言葉も浮かばないアーチャーであった。自分に振りかかる攻撃おろか接近にも気が付かないとはどれだけ集中していたのだろうかと溜息を付く。

拘りのありすぎる職人気質である2人に対し米神を抑える凜は見上げる士郎とアーチャーへ顎でライドロンが停車されている場所を差し、既に運転席から姿を現していた光太郎の姿を気付かせる。光太郎は全員に背中を向け表情を見せないままライドロンの車体を撫でるように触れると急ぎ振り返った。いつも通りの、笑顔で。

「今日はここまでにしよう。みんなありがとう！」

「またあの顔だよ……ったく」

「また、とは……？」

その後、光太郎の一言で解散となった一同は家路につき、間桐家の食卓で武から湯呑を受け取った慎二は義兄の悪癖を説明する。あのままでは士郎とアーチャーの反省会だけでなく、もう一人の協力者も自分を責める状況になりかけていた。

そうはさせまいとあの場を作った笑顔で解散させた光太郎だったが、慎二はそれが気に喰わない。

今回の件で一番に責任を感じているのは、間違いなく光太郎だ。協力を求め奔走し、作業全体を把握した上で設計図の解析、組み立てまで率先して参加した結果があれば、自分だったらとつくに匙を投げている。

それでも諦めることを知らない光太郎が今取った手段は、全員の不安にさせまいと笑顔で解散を言い渡すことだった。

「あんな顔、見てるこっちが耐えられないってんだ…」

「…よく見ているのだな。光太郎の事を」

「10年越えたら嫌でもそうなるよ」

武は目をそらして答える慎二を見て思わず頬を緩ませてしまう。ライドローンの製作の発案者であるが故に一番の重荷を背負っている義兄が取った手段は、作業に関わった人物が自分の責任だと言わせない為に強引に行ったものだ。

あの笑顔は何かを一人で抱えようとする時によく見られる表情であることを知っている慎二は、こうして機嫌を悪くしてしまったのだろう。

今頃一人で溜息でもついてんだろと言って立ち上がった慎二は自室へと向かう。彼がブツブツと言いながら部屋に戻る時は、大抵が何かの調べものをする場合という事を義兄から以前話されたことがあった。それも、誰かの手助けをするためだとも。

「本当に、互いに理解しあっている者たちだ」

羨ましく思いながらも、武は窓の外にいる他の理解者達へと目を向けた。

「……………」

「アツちゃん、何か知っているんじゃないですか？」

ガレージの中で待機しているアクロバッターの隣でチョココンと体育座りしている桜は頭部をフィットと逆方向へ向けるアクロバッターへと尋ねた。

「あの時、入り口の方からこっそりとこちらを見ていたのは、知ってるんですよ?」

「……………」

こうして隣に座ると、バトルホッパーであった時には話せなかった

ことも聞かせてくれたアクロバッターであるのだが、今日に限っては一言も口を聞いてくれない。数日前、凜にライドロンのことを知られた時も光太郎からアクロバッターが作業の様子を伺っていたことは聞いていた桜は、ひよつとしてアクロバッターであれば何かを知っているのではないかと思い、こうして尋ねているのだが…

「…サクラ、これをどうぞ」

「あ、メデューサ姉さん。ありがとうございます！」

暖かくなってもまだ夜は冷えるため、桜の肩にそつと上着をかけたメデューサは顔を背けているアクロバッターの正面へと移動し、視線を合わせる為に片膝をつくとき、真剣な眼差しを向ける。

「アクロバッター…私からもお願いします。僅かな情報だけでも構わない。それが、光太郎の手助けとなるなら…」

「姉さん…」

メデューサが頭を下げたまま、アクロバッターの返答を待つ。メデューサも桜と同じく陰から見ているアクロバッターの気配には感付いており、その視線の先がライドロン、そして光太郎であったこともだ。

「…これから先、戦いはますます厳しくなります。ならば、私達にはより多くの『仲間』が必要となります。貴方のように…」

「……………」

僅かながらに振動したアクロバッターは、傾けていた顔を正面へと持ち直し、ライトとなる赤い両目を点滅させる。それは言葉を話す前兆であると知っている2人はアクロバッターの言葉を聞き逃さないように、前のめりになって顔を近づけた。

「…ライドロンノカイハツニマチガツテイルトコロハナイ。シカシ、ドウシテモタリナイモノガアル」

「そ、それは何なんですかッ!？」

やはりアクロバッターは知っていた。同じマシンだからこそ、見抜けたのかも知れないライドロンに足りない『何か』を知ることが出来ると考えた桜は期待を膨らませてしまおうが、アクロバッターの回答は…

「ソレガナニカデアアルカハシツテイル。ダガ、カイケツスルホウホウヲワタシハシラナイ」

「そ、そんなあ…」

「いいえサクラ。落ち込むのはその足りないものを知ってからでも遅くないでしょう」

「そ、そうですね！アツちゃん、教えてください！」

肩を落としかけた桜だったがメデューサの一言で瞬時に立ち直った桜は胸の前で両拳を握ると微動だにしないアクロバッターへと問いかけた。

ライドロンに足りない何か。それは一体なんであるかを。

「ソレハ、キミタチニンゲンヤサーヴァントダレモガモツテイルモノ。

ソシテ、ワタシモ」

「えっ…」

「ソレガ、ライドロンニハヤドツテイナイ」

「それは…もしや」

「ソウ、『イノチ』ダ」

第16話

怪魔界の科学者ワールドから託された設計図を基に、間桐光太郎は仲間達の協力を得てついにスーパーマシン『ライドロン』を完成させる。

全員が見守る中、ついにライドロンを起動させようとしたが、光太郎が何度操作を重ねても動くことは無かった。

光太郎の判断で後日原因の究明を行うことになり解散となった夜、ライドロンの起動試験の時に陰ながら様子を伺っていたアクロバッターの存在に気が付いていた桜とメデューサはライドロンが動かない原因を知っているのではないかと尋ねる。

無言を貫いていたアクロバッターから言い渡されたその原因は、ライドロンにある物が宿っていない為という回答を得た。

それは…

「命…か」

大学内の中庭に設置されているベンチに腰かけている間桐光太郎は背もたれに身体を預け、昨晩に義妹とメデューサから齎された情報を口にしながら大空を見上げていた。

本日は雲一つない快晴であり、気温は若干低いものの差し込む暖かい日の光が身体に当たるため、肌寒いとは感じない。RXの力を手にしてからは猶更だろう。だが、光太郎はそんな恩恵を受けていると考えられるような余裕はない。

(まさか、ライドロンがアクロバッターと同じ命を持ったマシンだなんて…設計図にはどこにも)

いや、むしろ怪魔界ではあって当然の技術だったのかも知れないと

光太郎はワールドに八つ当たりをしようとした自分を律して自身の額に手首を当てて深く息を吐く。

命を宿す：魔術では使い魔を生み出すなど珍しいことではないが、それはあくまで生物での話であり、無機物の塊であるライドロンに後付けで命を与えるなど不可能な話だ。

桜から話を聞いたメディアから光太郎が嫌がる方法ならばいくらでもあると連絡があったが、彼女も本気ではないだろう。彼女なりの気の紛らわし方だったかもしれないと今更ながら思う光太郎にも手段がないわけではない。

ゴルゴムの世紀王、シャドームーンとの決闘で命を落とした際に自分を密かに匿ってくれたクジラ怪人が一族に伝わる『命のエキス』を使い蘇生してくれた事を後になって聞いた光太郎は、戦いが終わった時クジラ怪人達に改めて感謝を伝えるに住処へとむかった。

だが、クジラ怪人の住まいである洞窟の入り口は塞がれており、何人たりとも入れない状態となっていた。

しばし行動を共にしていたギルガメツシュ曰く、あのエキスは使う者を選ばない両刃の剣となる。命のエキスによってパワーアップした光太郎を目撃した何者に狙われる可能性があった。

そのため光太郎が甦った後にクジラ怪人達は源泉を絶ち、住処をギルガメツシュが地主となった海へと生活の場へと移した。よってこの世界にはクジラ怪人達が保存した僅かな量しか残されておらず、傷を癒す程度が限界で命を宿すには至らない。

(いや、これ以上甘えるわけにはいかない…)

彼等には生き返らせて貰っただけでなく、最後の戦いで一族総出で援護までしてくれたのだ。もし自分を蘇生したのがかつてゴルゴムのイカ怪人から助けた恩に報える為に行ったのであれば、もう十分過ぎるほどの対価を貰っている。

なので現在は振り出しへと戻っている。

別の可能性を模索するか、設計図に未だ読み取れていない部分があるのか。悩みが尽きない光太郎は空を見上げると、急に自分の顔を影が覆った事に声を上げてしまう。

「え……？」

「今日は溜息？本当に忙しそうね」

「リヨウちゃん……」

クライス要塞

「さて、準備はいいか」

「ハッ……」

ガテゾーンの言葉に頷いた新たな怪魔ロボットはその両腕に装着された重火器をガチャリと唸らせ、地球への転送室へと向かっていく。

「あれが貴様の作り上げた最強の怪魔ロボットか」

「ジャーク將軍……」

背後に現れた黄金の怪人に対しガテゾーンは自然な動作で膝を着き、自分の横を通過していくのを確認すると改めて頭を上げる。

「許しを得ずに地球へと怪魔ロボットを向かわせたのは目を瞑ろう。」

その変わり、わかつておるな」

「ええ、必ずや吉報を聞くこととなります。最強の怪魔ロボット、ガンガデインの勝利という報告が」

モノアイを輝かせるガテゾーンの自信溢れる宣言にジャーク將軍は口元を歪ませて部屋を後にするのであった。

「ふうん。つまり、慎二君たちと協力して完成させたものが動かなくて、その原因で悩んでるんだ？」

「まあ、そんなとこ」

極力ライドロンの事を伏せての説明に一応の納得をしたらしい紫苑良子の様子を見てホッと胸を撫で下ろした光太郎は隣に座る幼馴染から貰った缶コーヒーを口に含む。

一緒にいる年月なら慎二と桜以上に同じ時を過ごしている良子を始めたとした親友達にはこうして家族の前ですら言わない悩みを打ち明けることは多かった。大抵が兄妹喧嘩の真つ最中でどう謝れば良いのだろう…という内容だが。

「ん、稔君ならそう言った機械関係は強そうだけど力になりそうにないわね」

「まあ電気工事とは似て非なるものだから…」

今頃自営業である工事屋を継いで張り切っている親友がくしゃみでもしているだろうかと思いつながら光太郎は再び溜息をつこうと肺に空気を含み、吐き出そうとするがその前にコメカミを軽く指で突かれしまう。

「久しぶりね、そんなに悩んでいる光太郎君の姿を見るなんて」

「リヨウちゃん…」

「でも駄目よ？溜息ついてるだけなんて、私達の知ってる光太郎君ならまず行動！だしね」

「ハハハ…そう、だね」

と柔らかい微笑みを浮かべる良子の言葉に、一本取られたと額に手を当てる光太郎。彼女の言う通り、ここで悩んでいても回答は得られないことは出来ない。それに、ライドロンは自分一人で完成させる訳ではない。あの場にいた全員が走る姿を見なければならぬのだ。

「そうだね。俺はまた一人で抱え込もうとしていたみたいだよ」

「気付いたのならよろしい！何の事であるかは聞かないけど、頼ることとは決して恥ずかしい事ではないわよ？私や、大輔君だって力になりたいし、あの金髪の人だって協力してくれるはずだしね。ほら、あの

人って何処からともなく色々なもの取り出せるじゃない?」

「あ…ハハハ、そうだ——」

あの金髪、この大学で光太郎に接触しているうちにかんりの有名人となつてしまつていたようであり、光太郎の知らぬ間に異空間から何かしらを取り出した場面を見られたのかもしれない。

だが、光太郎はギルガメッシュが起こした珍事よりも、良子の言つたギルガメッシュが『どこからともかく——』という言葉から、彼が異空間から取り出した『あるもの』を思い出した。

それは、彼がシャドームーンとの最後の戦いを迎える前に託されたもの。そして、光太郎が望んだ奇跡を起こした要因の一つであるものを。

「そうだ…どうして忘れていたんだ!」

「光太郎君?」

急に立ち上がった光太郎は状況が掴めない良子の両肩に手を置き、悩みなど微塵も見られない瞳で告げる。

「ありがとう!このお礼は絶対するから!!」

「えつと…それは、ありがとう…?」

「うん!…遊園地のフリーパス2枚用意するから、ダイ君と一緒に行ってね!」

「え、あ、ちよつと!?!それって…」

片思いの相手の名を聞いて耳まで赤くなり狼狽える良子の言葉など気にも留めず、光太郎は駐輪場へと走り出しだした。もはや声の届かない距離まで移動した幼馴染みの背中を見送り、落ち着きを取り戻した良子はもう…と困つた笑みを浮かべていた。

彼女は知る由もない。これが光太郎に最高の仲間を生み出すきっかけになつたことを。

「ふう…」

今回も何とか食器を一枚も割らずに洗い物を終えることが出来た。メデューサは手を拭い、エプロンを定位置へと戻すとテレビから聞こえるワイドショーを聞き流しながら席へと座る。

慎二と桜は学校、武は遠坂家を訪ねアーチャーと剣の稽古へと出向いている。二刀流同士、互いに気が合うのかもしれないと考えるメデューサはふと目に留まった模型を見つめる。

昨日の起動試験の前にメディアが時間を持って余した際に作り始め、完成させたライドロンのミニカーだ。それは、光太郎が悩みを偽って浮かべた作り笑いを嫌でも思い出させてしまう。

機械類ではどうしても力になれないことを悔やみながらもメディアと光太郎のサポートに回っていたメデューサはライドロンの本格的な組み立ての前：設計図を抽出した時から光太郎がどれだけの情熱を注いでいたかを知っている。

だから、あのような顔を浮かべた事がとても辛かった。あの人は、あんな悲しい笑顔を浮かべて欲しくない。その為に桜と共にアクロバッターへ聞き出したのだが、ライドロンに足りないものを突き止めたのは良かったものの、余計に光太郎を悩ませる結果となってしまった。

「どうしたらいいのでしょうか…」

指先でライドロンのミニカーの後部を軽く突くと反動で数センチだけ走行する。その後、テーブルの上に置いてあったメデューサの携帯電話から着信音が響く。この時間で連絡があるとは珍しいと電話を取り、発信者の名を見て急ぎ耳へと当てた。

「光太郎、どうしたのですか？」

「メデューサ、今日帰りが遅くなるから！」

『はい：？それは構いませんが、何かあったのですか？』

「見つけた：いや、思い出したと言うべきか。ライドロンに命を宿す手がかりをッ！」

『っ!?それは一体——』

興奮気味に話す光太郎の放った内容に電話越しでも驚いているメデューサの声は遠方から聞こえた爆発音にかき消されてしまった。

「なっ：!?」

それも一度だけで終わらない。3度、4度と続けばもうそれは事故でないことは明白だ。

「メデューサ。クライシスが現れた。俺は今からそっちに向かう」

『：わかりました。私も直ちに』

「いや、メデューサには別の事を頼みたい。俺の代わりに、行って貰いたい場所があるんだ」

『しかし、それでは：』

「これはメデューサにしか頼めないんだ」

『：……………』

そう言ってしまうえば、反論できないことを知った上でのことなのだろう。なんとも、自分の扱いが上手くなったと呆れながらもメデューサは一度息を吐いて光太郎へ了承したと伝える。

「ありがとう。行ってもらいたい場所は、父さんが眠ってる場所なんだ」

『あの場所に？あそこは：あっ!?』

小さく驚きの声を上げたメデューサの反応を見て、どうやら説明する手間が省けた光太郎は電話片手にバイクのエンジンに火を付け、いつでも飛び出せる状態へとする。

そう、これはメデューサしか出来ない、知らない頼みごとなのだ。

『：任せてください。どうにか1時間以内に戻りましょう』

「できるのか？」

『お忘れですか？この身はライダーのサーヴァントとして召喚されたのですよ』

「ああ、ありがとう」

『それは『あれ』を持ち帰った時に聞かせて下さい』

「…ああっ！」

力強く返事をした光太郎の着信が切れたことを確認したメデューサは急ぎ玄関へと向かい、扉を開けたその先では自分達の会話を聞いていたのか、アクロバッターが既にいつでも発進できるようにスタンバイしていた。

「イクノダロウ？」

「ええ、お願いします！」

ヘルメットを装着し、アクロバッターへ搭乗したメデューサはアクセルを回し、アスファルトへ跡が残る程後激しく後輪を回転させ急発進。

目的地へと爆走する。

自分達サーヴァントの命を現代へ繋ぎとめた奇跡を起こした要因の一つを、手にする為に。

「くっ…逃げ遅れた人は…」

煙を辿って工場地帯へと到着した光太郎は未だ爆発が続く場所の中へと飛び込み、誰か取り残されていないかと辺りを見回しながら進んでいくがそれらしき人影はない。

大丈夫かと安心した直後、ゾクリと冷たいものが背中に走る。何者

かが自分へと狙いを定めていると振り向いた時には既に遅く、光太郎は爆発の中へと飲み込まれてしまった。

「……………」

その機影は悲鳴を上げる間もなく煙の中へ消えた標的が現れるのを待っていた。過去の戦いからあの程度で死ぬような輩ではないことは承知している。だからこそ、姿を現すことに何の疑問を抱かぬまま臨戦態勢を保っているのだ。

「トアッ!!」

煙の中から飛び上がり、工場の天井へと着地した敵は関節部から爆発とは別の蒸気を関節部から噴出させ、それを振り払うような動きと共に名を上げた。

「仮面ライダーッ!!ブラアックッ!!」

敵の攻撃を受ける直前にBLACKへと変身を遂げた光太郎は改めて自分へ武器を向けている敵：怪魔ロボットを睨む。

両手と両肩に強力なキャノン砲を備え、広範囲の敵を発見する為に幾つものアイカメラを光らせている。そして重武装のため機動力を確保した結果なのか、下半身が妙に細い。

「ようやく姿を現したな間桐光太郎…いや、仮面ライダー」

「貴様は…クライシスか」

「如何にも！我こそは貴様を倒す為に生まれたクライシス帝国最強の怪魔ロボット、ガンガデインー！」

「俺を…倒す為？まさか、この爆発は俺をおびき寄せる為につ…!!」

敵は怒りに拳を震わせる光太郎に合わせ、武器の狙いを定めている。答えなど、聞くまでもないだろう。

「俺をおびき寄せる為に多くの人を巻き込むとは…貴様は絶対に許さ
んツ!!」

天井を蹴った光太郎は眼下に立つガンガデインに向けて急降下し、
対してガンガデインは集中砲火を開始した。肩・両腕から次々と打ち
出されるエネルギーの塊を全身に受けながらも光太郎は握った拳を
敵に向けて振り下ろすのだった。

第17話

完成したライドロンに命を宿す方法を模索するが一向に考えが浮かばない間桐光太郎であったが、親友である紫苑良子との会話の中である可能性を思いつく。

その為にある場所へと向かうことをメデューサに伝えたと同時に町の方で謎の爆発事故が発生する。嫌な予感を抱いた光太郎はメデューサにある場所へ向かうことを任せ、急ぎ爆発の起きた場所へと急行する。

光太郎から聞いた場所へ向かう為、既に自らエンジンを灯し何時でも発進できる準備をしていたアクロバッターと共にメデューサは託された役目を果たす為に移動を開始した。

一方、爆発の起きた工場地帯へと到着した光太郎は敵の不意打を浴びてしまうが咄嗟に仮面ライダーBLACKへと変身しこれを回避。

姿を現した敵：怪魔ロボット ガンガディンが自分をおびき寄せる為に爆発を起こした事を知り、怒りを向ける光太郎は拳を固く握りしめると敵の攻撃を浴びながら攻撃を繰り返すのであった。

「トアッ!!」

「っ……!」

敵の砲撃を避けることなく飛び込んでいく光太郎の拳はガンガティンの胸部へと衝突。鈍い音が響くがガンガティンの胴体は傷一つ負わないものの、衝撃までは殺しきれずに数歩後退してしまう。

そしてその隙を光太郎は逃さずに次々と攻撃を繰り返していく。回し蹴りを打ち出して発生した回転をそのまま生かして肘打ち、さらに後へと下がったところへ掌底を放つがその手は空を切る。

「ムッ!?!」

再び連射される砲撃を前方に転がりながら逃れた光太郎は体勢を整えて空を見上げる。背中のバーニアから火を噴かせて浮遊するガ

ンガデインは一定の距離を保ったまま両手・両肩に備えた武器を再び光太郎へ狙いを定めると無数のエネルギー弾を発射。

路面を蜂の巣へと変えながら迫る攻撃を光太郎はなんとか逃れながらも距離を取り、空を見上げた。

「よし、今なら…トアッ!!」

意を決して強く路面を蹴り、屋上へと着地したと同時に輝く太陽を掴むように天へ右手を翳し、左手をベルトの前へと移動する。

「太陽よ…俺に力をツ!!」

右手首の角度を変え、ゆっくりと右腕を下ろすと素早く左肩の位置まで手首を動かし、空を切るような動作で右側へと払うと握り拳を作り脇に当てる。

その動作と同時に左手を右から大きく振るって左肩から左肘を水平にし、左拳を上へ向けた構えを取ると、それがスイッチとなり光太郎に更なる変化が始まった。

光太郎の赤い複眼の奥で光が爆発する。

体内に宿ったキングストーンの力と光太郎へと降り注ぐ太陽の力が融合した『ハイブリットエネルギー』により光太郎のベルトは2つの力を秘めた『サンライザー』へと変化。

サンライザーから放たれる2つの異なる輝きが光太郎の全身を包み、彼を『光の戦士』へと進化させる。

黒いボディの一部が深い緑色へと変わり、胸部には太陽の力をエネルギーへと変換する『サンバスク』が出現。よりバツタへとイメージが近づいた仮面、より強く光る真つ赤な目を思わせる複眼と一対のアンテナ。

再び右手を天に翳した光太郎は敵に向かい、名を轟かせた。

「俺は太陽の子——ッ!!」

「仮面ライダーBLACK!!RX!!!」

「ようやくお出ましか」

クライス要塞の一室で光太郎とガンガティンとの戦いを傍観するガテゾーンはモニターでRXとなった光太郎が浮遊するガンガティンへと向かい跳躍する姿を見て思わず声を漏らした。

今日こそは、自分の造り上げた怪魔ロボットがクライシスの宿敵である仮面ライダーを葬りさる日となる。その為に敢えて他の隊長の立てた作戦に与することなくRXの戦闘データの収集に徹し、怪魔ロボット最強のガンガティンを完成させ、今日という日を迎えたのだ。

勝利するための条件は全て揃っている。後は結果を待つだけなのだが：

ガテゾーンはどこかで、自分の懐く別の結果となるのではないかという考えを過らせてしまった。

今までの戦いで起きたように自分の想定を上回る力を、初めてRXとなる前に自分の質問に答えたように、理解が及ばない結果を見せてくれるのではないかと。

(何を馬鹿な…)

その考えを直ぐに否定する。なぜ自分の造った怪魔ロボットが敗北する未来など考えるのか。RXの始末が終わった後に自身のAIにバグが発生していないかを検査しなければならぬと再びモニターへ目を向けるガテゾーンに別の情報がリークされた。

「なんだと…?」

ガテゾーンが手にするパッドを操作し、光太郎達の戦いを中継されているものとは別の映像が画面の隅で再生される。

それは高速道路で他の車両を次々と追い抜いていく青いバイク：アクロバッターと操縦するメデューサの姿だった。

「あれはRXのサーヴァント…主が戦っているにも関わらず別行動、か」

クライシス帝国の標的はあくまでRXだ。取り巻きの人間や、その力をほぼ失っている英霊がどんな行動を起こそうなど眼中にない。捨ておけばいい。

…というのがボスガンやゲドリ안의考えであろうが、ガテゾーンはこれまでの戦い…さらに遡ればゴルゴムとの戦いでも間桐光太郎の傍には常に彼らがいることを認識し始めていた。

生を受けたライダーのサーヴァントであった女を除き、血縁関係の無い弟と妹は魔術に関わっているようだが所詮は人間。だが、彼等が

光太郎を勝利に導いたことは少なくない。

もし、別行動中のサーヴァントによつて何かを齎すとしたのならば

「…テストも兼ねるとするか」

ガテゾーンは地球前線基地へと無線を繋ぎ、生産ラインに入った試作機を起動するように現地のチャップ達へと指示を飛ばす。

勝利を確実にするために。

「これで、三度目となりますね」

光太郎がまだ秋月の姓を名乗っていた頃。その場所には親友である信彦とその妹である杏子、両親と共に訪れていた峠へと辿りついたメデューサは花が添えられている石の山の前で一礼し、頭を上げると石にぶれた文字で『父さん』と刻まれた文字が目に入った。

ここは、かつてゴルゴムのオニグモ怪人によつて惨殺された光太郎の養父、秋月総一郎が埋葬されており、その左右には娘と妻の墓石も作られていた。

しかし、後にその2人が生存していることが明らかになった為、この地で眠っているのは総一郎だけとなる。

「…今回はこのような形でお邪魔して大変申し訳ありません。しかし一刻を争うため、この場を荒らす無礼をお許しください…」

そして一步下がったメデューサは辺りを比べ一度掘り返された地面の上に立ち、手にした鉄杭を振りかぶり先端を足元へと突き立てた。

鉄杭の先端が触れた直後、紫色の魔法陣が現れて押し付けられる鉄

杭と拮抗するがメデューサがさらに力を込めると敢え無く砕け散り、破裂音が木霊すると共に土煙が舞い上がった。煙が晴れると直径50センチ程の窪みが発生。その中央には土に埋まっていたのである。金属製の小さな箱が顔を見せていた。

箱を手に取り、土を丁寧に払い蓋を開けるメデューサは、以前と変わりなく澄んだ輝きを放つそれを手に取る。

ゴルゴムとの最終決戦時。

仲間達の助力を得てゴルゴムの支配者である創世王を倒すことに成功し、続いて立ちふさがったシャドームーンと最後の戦いを迎えようとした光太郎へギルガメッシュは宝庫からある物を取り出し、投げ渡した。

それは持つ者に加護を与えると伝えられているクジラ怪人の一族の秘宝。小石程の大きさではあるが紐でくくられた命のエキスの結晶体であった。

身に着けた光太郎は激闘の末にシャドームーンに勝利し、仮面ライダーの姿を保てなく程まで消耗した身体に鞭打ってひきずりながらもついに大聖杯へとたどり着く。

そして最後の手段：僅かに残ったキングストーンの力を火種にして大聖杯に溜まった魔力を爆発させて大聖杯を消滅させる方法を選択した光太郎は魔力の泉へとその身を投げ出した。

浄化され、無色透明の魔力に落下する寸前、これで全てが終わると考えた光太郎の中で自分に『我が儘になれ』と言って消滅したサーヴァントの言葉が甦る。思うぐらいなら、許されるだろうと光太郎の脳裏に浮かんだのは、過去に自分へ願いを託して滅した祖父と同じ願い。

『みんなと、もっと生きていきたい』

その小さい願いが、奇跡を起こした。

大聖杯に溜まった無尽蔵の魔力

神秘の塊であるキングストーン

命のエキスの力が凝縮された結晶体

3つの力が重なり、大聖杯の消滅と共にその座へと還るはずのサーヴァント達に新たな命を与え、冬木の地へ留まらせるという誰もが驚愕するしかない結果を生み出した。

戦いが終わりしばらくして、結晶を返却しようと同桐家に乗り込んできたギルガメッシュに差し出した光太郎であったが当の本人は受け取らずに持ち込んだゲーム機をリビングに設置されているテレビへの接続作業に勤しみながら語るのであった。

『我の手で真価を發揮せぬものなど宝物庫に入れる価値はない。精々有効に使うのだな』

…などと遠回しに譲ると言うギルガメッシュがこちらに顔を決して向けようとしないう姿に頬を緩ませてしまう光太郎達。だが、結晶は光太郎を甦らせただけでなく、以前の数倍の力を与えた命のエキスと同等の力を宿しているとすれば、その力を狙う輩が現れる可能性がある。

話合った結果、どこか人の寄り付かない場所へ隠すということになり、秋月家の思い出の地が選ばれたのであった。

それとは別に、もう一つの理由が光太郎から述べられている。

『俺に生きるという意味を最初に教えてくれたのは、父さんだから…預かってもらいたいんだ』

誰も異論を上げることなく決行となり、光太郎とメデューサはゴルゴムとの因縁に終止符を打ったという報告と共に、父の墓前に結晶を入れたケースを埋めた後にメデューサの手で簡易的ではあるが土地のマナを利用した結界を張ることでこれまで隠し続けていたのである。

(…結界の術式は私とメディアによって組まれたもの。解除できるのも私達だけということを見越して光太郎は私に任せてくれた。ライドロロンに命を灯す、唯一の希望を)

手に取った結晶を握り、再度総一郎の墓へと頭を下げたメデューサは踵を返し、急ぎアクロバッターが待っている参道へと向かい駆け下りていく。今回はどのような敵が現れたのか定かではないが、もしライドロンの力が必要な敵であるのならば急ぎ戻らなければならない。焦るメデューサが茂みを抜けて山道へ出た直後、彼女へ無数の弾丸が迫っていた。

轟音と共に彼女が寸前まで立っていた背後の樹木に幾つもの穴が作られ、煙が上がる光景を見てゾツとしたメデューサは戦闘装束へと変わり、自分に向けて不意打ちをしかけた不逞の輩を睨む。

「彼方達は…」

メデューサに向けて銃撃を放ったのは、クライシス帝国の雑兵チャップ達だ。しかもそれだけではなく洗脳されたゴルゴムの怪人素体の群れ。その奥には鎖で全身を拘束され、もがき抗っているアクロバッターの姿があつた。

「アクロバッターツ!?!」

「キラ…ツケロ。コイツラダケジヤナイ」

音声と共に頭部を左右へと振るうアクロバッターの言葉通り、大地

を震わせるような足音を響かせてソイツ等は現れた。

「なっ…」

メデューサが驚くのも無理はない。

その身体は機械…サイボーグであることを除きかつて光太郎を苦しめたサイ怪人・タカ怪人と類似した姿であり、生気をまるで感じさせないその雰囲気は生体の部分など一切なく、完全な機械であることが伺える。

「ターゲット…サーヴァントヲ確認」

「コレヨリ殲滅行動ニ移行スル」

モーターによる駆動音を響かせてサイ怪人型は両手に備えたマシンガンを前方へ向けながら前進し、タカ怪人型は背中の翼を展開。彼女の知るタカ怪人を遥かに上回る速度で上昇、急行下しながら腕より鋭い刃を出現させ、メデューサへと狙いを定めた。

「く、思ったよりも早い…!」

光太郎は自身の攻撃を次々と回避するガンガデインのスピードに翻弄されながらエネルギー弾を手刀で弾いていく。

厄介なのは敵の背中に装着されているブースター…360度に展開し、物理法則を無視しているような起動で高速移動する為に光太郎は触れる事すら許されない状況にある。

(なら、一か八かだッ!)

光太郎は立ち止まり、腕を交差したまま敵の攻撃を浴び続ける。正面、左右、背後。様々な方角から射撃を受けていくが大きなダメージを負う程ではない。勝機が来るその時まで、光太郎は守りに徹すると

決めた。

「……………」

動かない標的を警戒しつつも攻撃を緩めないガンガデインは両腕による攻撃を意地しつつ、両肩のキャノン砲へエネルギーチャージを始める。先程まで両手の武器と同様に連射での攻撃も可能であるが、エネルギーを溜める事によって単発ではあるが威力は連射時と比べ数十倍にも膨れ上がる。

その一撃を加えれば敵も一たまりもないだろう。倒すことは出来なくとも、大ダメージを与えることが期待される特大のエネルギー弾を両肩から発射し、その弾道は間違いなく敵へと到達した。

「ガアッ!?!」

エネルギーの塊は光太郎の腹部へとめり込み、重い悲鳴を上げた同時に大爆発を起こす。

煙の中へと消えた標的が健在であるか熱センサーを起動させるガンガデインだが、それには何の反応も示さない。あの攻撃で四散したのであれば御の字ではあるが、『破片』の一つでも確認しなければ勝利したと言えないと創造主であるガテゾーンにプログラムされている。

ようやく煙が晴れたその場所は捲れたアスファルトの残骸と、叩き割られたマンホールの蓋が散らばっていた。光太郎は攻撃を受けた直後、爆発に紛れてこの地下へと潜ったのだ。

「…奴め、地下から」

「その通りだよ」

音もなく敵の背後まで接近した光太郎は振り返るよりも早く、手刀を敵のアキレス腱であるバーニア部へと一閃。

風を切る音と共にバーニア部へ大きな亀裂が走り、火花を吹かせている。これで先ほどまでの移動はできまいと光太郎は拳を引き、ガンガデインの胸板へストレートパンチをお見舞いした。

「トアッ！」

掛け声と同時に命中した光太郎の拳によって吹き飛んだガンガティンは二転、三転と地面を転がり、手にした銃器を杖替わりに立ち上がろうとするが、スピードを生み出す為に軽量化したことが仇となったのだろう。カモシカのような細い脚で重武装した上半身を起こすことが出来ないうでいた。

「貰ったッ!!」

防御に徹したため、RXでいられる時間は残り少ない。

一気に勝負を決める為に光太郎は膝を着き、広げた右腕をアスファルトへと打ち付ける。

地を強く蹴って跳躍し、身体を後転しつつも前方へと落下するといふ離れ業を見せながら両足にエネルギーを集中。未だ起き上がれないガンガデインに向けて身体を捻りながら合わせた両足を突き出した。

「RXッ！キックッ!!」

光太郎のドロップキックがガンガデインを捉え、命中すると確信した光太郎。その判断は間違っていない。だが、それは光太郎の求める結果とは異なるものであった。

「なっ!?!」

光太郎のキックが命中する寸前。

ガンガデインは両手の銃口を路面へと押し付け、そこからエネルギーを放射することで破壊された推進部変わりにして離脱したのだ。しかも腰から上部分のみが飛び上がり、切り離された下半身は光太郎のキックを受けて粉々に砕け散ってしまう。

(なんだ…脆すぎる?)

何度も自分の拳を叩き込んだ上半身と違い、なぜここまで下半身の強度は弱いのか。疑問を抱きながらも両手からの噴射で浮いているガンガデインを睨んだ。

いや、悩む時間も惜しい。敵は半壊状態にある。あとはどうにかしてもう一度キックを叩き込めば勝てると構える光太郎は少しずつ、自分の立つ一帯が小さな振動が起きていることに気付く。

「これは…地鳴り? いや…」

違う。大きな何か地響きを立ててこちらに接近しているのだ。小さな揺れは大きな振動となり、その正体は光太郎の背後にあった工場の壁を突き破り、現れたのであった。

「グ…ガアアアアアアッ!？」

光太郎を跳ね飛ばし、キャタピラを回転させて進むそれはガンガデインの真下へと到達すると反転させて急停止。うつ伏せに倒れた光太郎は痛みの走る腕で何とか上体だけを起こして自分を吹き飛ばした相手を見て思わずその名を擦れた声で呼んでしまう。

「戦車…なのか?」

光太郎の知る陸上戦車と比べて遥かに小型ではあるが、その重厚な

姿と二門の砲身が備えている姿から嫌でもその名を連想してしまう。さらに、この場で光太郎へ攻撃し、ガンガデインの下へ停止していることから、完全に敵であることを証明している。

「どうやらエネルギーのチャージは完全に終わったようだ。これまで貴様に対し小手先の攻撃しかかけられなかったのがようやく報われる」

「何ッ…？」

ふら付きながらも立ち上がった光太郎の身体は陽の光を浴びたことでダメージは回復されたが、敵の言葉に

「つまりだ。今から俺本来の戦いが出来るということだ。完全な姿でな」

ガンガデインの放った言葉に応えるように小型戦車に変化が生じる。

一対の砲身が左右にスライドし、中央から接続部が出現。ガンガデインは手の武器からの噴射を弱めながら降下し、切り離れた腰部から腰戦車と同形の接続部を出現させ、結合。

エネルギーが全身に行きわたり、モノアイが強く発光したガンガデインは真の姿を現した。

「さあ、覚悟しろ！仮面ライダーッ!!」

再び始まったエネルギーの弾幕に光太郎は防御の体勢を取る光太郎だったが、先のように攻撃を弾こうと手を振るうが――

「なっ…!?!」

逆にエネルギー弾の威力によって腕が振りほどかれ、光太郎の全身

に次々とエネルギーの塊が叩き込まれていく。

(これは…さっきまでと威力もスピードも段違いだッ!!)

次々と打ち込まれる攻撃に段々と後退していく光太郎は交差した腕の隙間からガンガティンが元より戦車へ常備され、今では両脇に装備された砲身を真上へと向きを変えて何発もの砲弾を打ち上げていることに気付き、それを追って視線を空へと向けた。

「何を…」

「貴様を倒す仕上げだ」

攻撃を続けるガンガティンの言う理由を光太郎は絶句して知る事となった。

上昇を続ける砲弾は数百メートルの上空で次々と爆発し、それを引き金に雲が空を覆い始める。先程まで澄み渡る青空は灰色となり、燦々と輝いていた太陽の輝きを閉ざしてしまった。

「あれは唯の雲ではないぞ。太陽の光を完全に遮断するナノサイズの反射板を含めた一級品だ。これで、貴様は太陽の光を浴びて再生をすることはできん」

「…っ！」

敵はそうまでして今回は仕掛けてきたのかと光太郎の焦燥感が高まっていく。

自分をおびき寄せた時点で、全ては計画通りだったのかもしれない。敢えて威力を調節した武器で戦いながらRXでいる時間を引き伸ばし、姿を保てる時間が迫ったところで自分の得意とする接近戦を許さない距離を置いての攻撃。

そして太陽の光を遮ることで戦いのダメージを再生させる事も許さない状況へと追い込んでいく。

光太郎は、敵の策に完全に嵌められた。

「さあ、くたばるがいいツ!!」

全ての砲身、銃口を前方へと展開したガンガデインの砲撃が光太郎へと迫る。光太郎はなす術なく、全ての攻撃をその身に受けるしかできなかつた。

「グアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

爆炎にその身を焦がされる光太郎の叫びが、一帯に響いていた。

「これまでの戦いをただ見ていただけじゃねえ。全てはこの時のためよ…」

モニターで追い詰められる光太郎に聞こえるはずもない声をガテゾーンは漏らしていた。これまでの戦いのデータから得た敵の欠点を付いた完全な作戦。

RXでいられる時間や太陽から受ける恩恵。その全てを断ち切られた光太郎には勝てる手段はもうない。

「これで逆転できるってんなら、見せて見ろ…」

「あぐっ!?!」

木の幹へと身体を叩き付けられ、ズルズルと落下するメデューサはボロボロとなりながらも戦意を失わぬ目で前方の敵を睨む。

「殲滅ヲ続行。殲滅ヲ続行」

「芸がありませんね…それしか話せないのですか？」

何度か攻撃を当てることができても表面に傷を負わせることしかできず、ダメージを与えてすらいらない。それに加え、チャップ達の援護射撃で回避に走ってしまい攻撃にまるで集中できない。だが彼女の意識を乱しているのはそれだけではなかった。

(光太郎…！)

今も尚、彼との繋がりが生きているメデューサには光太郎が危機を迎えていることが分かっていた。故にこの場を離脱しなければならぬが、敵は見逃してくれないだろう。

こうなればとメデューサは眼帯を外し石化の魔眼とは別に光太郎と共にいた事で得た力を解放しようとするが――

「その力を使うのはかまわんが、この後の事に支障が出るのだろうか？」

そんな聞き覚えのある声が耳に響いたと同時に黒と白の短剣が次々と機械の怪人へと叩き込まれ、メデューサの前に着地した男は赤い外套をはためかせ、新たに出現させた夫婦剣を構える。

「アーチャー…なぜここに？」

「それに答えるたいのは山々だが、君にはすべきことがあるのだろうか？」

自分のマスターと同様に答えをはぐらかす褐色の男は視線を鎖で拘束されていたアクロバッターへと向けると、そちらにも現れた人物に今度はアクロバッターが声を上げて驚く番だった。

「タケル…？ナゼココニ？」

「遅くなっちゃったな。こいつ等は我々に任せるがいい」

額を黒い帯で縛り、黒で統一された忍者のような装束を纏った赤上武は両手に持った刀でアクロバッターを束縛していた鎖を切断し、その切っ先を警戒するチャップや素体達へと向けた。

「タケル…貴方まで」

「事情はその男から聞いている。光太郎殿を助けに行くのだろうか？」

「ならば早くいけ。この場は押さえておいてやる」

「…感謝します」

短く言葉を切ったメデューサは助つ人2人に警戒する敵を掻い潜り、並走するアクロバッターへ飛び乗ってその場を離脱する。後を任せた2人の方へ振り返ることをせず。

メデューサ達の姿が見えなくなったことを確認し、改めて武と並び立つアーチャー武器を握り直すと不敵な笑みを浮かべた。

「…本来なら関わる事ではないのだが私が手伝った手前、あの車にはしっかりと動いてもらわないと困るのでな。すまんが、貴様達の邪魔立てさせて貰おう」

「素直に助けるとは言わんのだな。だが、意見だけなら一致している」

アーチャーの言い分に苦笑しながらも武は賛同し、未だこちらに仕掛けてこない敵を睨む。

二刀使い同士の共闘が、ここで始まろうとしていた。

第18話

RXへと変身を遂げた間桐光太郎がクライシス帝国の刺客 怪魔ロボットガンガデインとの戦いを始めた頃、メデューサは光太郎の養父、秋月総一郎が埋葬された丘へと向かい、隠された命のエキスの結晶体を回収した。

ライドロンへ命を与えられる唯一の手段を手にし、急ぎ戻ろうとしたメデューサだったが、彼女の動向を掴んだガテゾーンによつて差し向けられたクライシスの新勢力、サイボーグ怪人達が立ちふさがる。

光太郎は急ぎ決着を付けようと奮闘するが、突如現れた小型の戦車と合体し真の姿を露わにしたガンガデインの猛攻によつて逆に追い詰められてしまう。近接戦闘を封じられ、さらには光太郎の再生能力を封じる為に、ガンガデインが打ち上げた特殊な煙幕により周囲一帯の太陽の光が遮断されてしまった。

敵の術中に嵌ってしまった光太郎へ敵ガンガデインの砲撃が容赦なく降り注いでいく。

一方、光太郎の危機を感じ取り、その場を急ぎ離れようと苦戦するメデューサに助っ人が現れる。

アーチャーと赤上 武の2人はメデューサとアクロバッターを逃がし、改めて敵と対峙するのであった。

「奴らは…」

モニターで様子を伺っていたガテゾーンは乱入者の情報をデータベースから引出し、即座に照会させる。

かつての聖杯戦争でアーチャーのサーヴァントとして召喚された英霊と、クライシス帝国…否、歴代の『組織』ですら把握していない『仮面ライダー』へと変身する人物。

特に後者の出現には作戦指揮を取っていたゲドリアンが相当な痛

手を負い、以降この星で確認される赤い果実を見るたびに嫌悪感を醸し出すほどであった。

曲がりなりにもクライシス四隊長の一角であるゲドリアンをそこまで参らせた人間。どうやら変身する様子はないようだが、それでも相手に取って不足はない。

「性能テストには持って来いの相手って訳だ」

ガテゾーンは手にしていた端末を操作し、敵2人と対峙するサイボーグ怪人のデータを更新。相手の得意とする戦法に合わせ、効率的な行動をせよ、と。

「データ更新…完了」

「ターゲットヲ殲滅スル」

共通して装備されたゴーグル部分を怪しく光らせたサイボーグ怪人達はそれぞれの武器を構える。その動きを見計らったように、チャップ達雑兵も一斉に動きだし、アーチャー達を囲うような陣形へと移った。

「なるほど。あのトカゲ共のように本能で襲い掛かるといふわけではないらしいな」

「…赤上 武。雑魚共は貴様が片付けろ」

前回戦った相手との違いに警戒して手にした刀を構え直す武を静し、前に一歩に出たアーチャーへ棍棒を掲げてチャップ達が襲い掛かる。

「待てっ！相手の力は未知数だ。今のお前では——」

間桐家で過ごす中で、それは自然と耳に入る話であった。

聖杯戦争。

その為に召喚された英霊達は此度の戦いの果てに新たな生命を手に入れた代償として、かつての力は半分以上が失われている。以前であれば怪人を一射で葬る攻撃を放つことが可能であったが、今のアーチャーが生み出せるのは手にした黒と白の短刀とクラスの名に相応しい弓矢のみ。

宝具である固有結界どころか、あの英雄のように多数の刀剣を射出する攻撃も不可能だ。

そのような状態でアーチャーは単身で怪人達に挑もうとしている。メディアに無理強いし、転送魔術でここまで赴いたのは一刻もメデューサをライドロンの元へ向かわせ、苦戦している光太郎を助けるため。1人で無謀を犯すためではない。

アーチャーを止めようと武は声を荒げてしまうが、彼の忠告は切り伏せられたチャップ達の崩れる音でかき消されてしまう。

「先に言っておく。確かにお前の思う通りに私の魔力、投影魔術は以前のそれより下回っている。明らかな弱体化だ。だがな——」

チャップ達が沈んだと同時にサイ怪人は大きく口を解放し、装填されていた小型ミサイル2基を同時に発射。ミサイルは狂うことなく標的であるアーチャーへと向かっていくが、アーチャーはその場から微動だにせず両手に持った夫婦剣の先端を前に向ける。

何のつもりかわからないが、あのままでは確実にミサイルが直撃すると駆け出した武の予想は全く違う結果として現れる。

ミサイルは標的であるアーチャーを素通りし、後方にいた武さえ無視して後方に屯していた怪人素体達の足元で落下。10を超えていた素体達は爆発に飲み込まれてしまうのであった。

(まさか、剣の側面で弾頭を撫でるように触れたことで軌道を変えてしまうとは…)

刃を下ろすアーチャーの背中を見た武は、下手をすれば触れた途端に爆発する可能性もあった彼の度胸と剣技へと感服する中、先ほど聞けなかった言葉を走らせる。

「私がこんな奴らに負ける理由になると思うか？」

そう告げるアーチャーの口元は不敵に笑っている。後ろに立つ武にはそうしか思えなかった。

「…承知した。では、こいつらを片付けながら拝ませてもらおうとしよう。かつての英霊ではない。今の貴君の力を」

「最初からそのつもりだ。何故かは分からんが、お前にそう言われると応じなければならん気持ちが強くなる」

「…？」

「気にするな」

自分でも理解が出来ない口上を上げたアーチャーはチャップ達の間を抜け、サイボーグ怪人へと接近する最中、怪人達へと挑むもう一つの理由を胸中で述べていた。

（この先の戦い。あのような連中を一人で倒せないようでは守るものも守れん。俺は…勝たなければいけない）

そう思い知らされたのはクライシス帝国が間桐光太郎抹殺の為、邪魔になるであろう魔術師を狙って刺客を放った時だ。

マスターである遠坂凜と共に戦闘を開始したアーチャーが待つて

いたのは、かつて一刀に伏した雑兵とも言える洗脳されたゴルゴム怪人達に苦戦するという苦い結果だった。

その前日に衛宮士郎や間桐光太郎に弛んでいるなど高説を垂れていた自身がこの様では立つ瀬がない。これから次々と現れるであろうクライシス帝国の勢力から、かけがえのない少女を守ることができない。

だからこそ、アーチャーは勝たなければならない。

勝気で、誰よりも優しい少女を守り抜くためにも。

「まさか、待ち構えていたとは…」

高速道路を疾走するメデューサとアクロバッターを待ち受けていたのは、バイクやジープで後方、前方から追走するチャップの群れであった。

どの乗り物もクライシス帝国の持ち物ではなく、全てが地球産…恐らく強奪したものののだろう。そんな規格ではアクロバッターに追いつくことすら出来ないはずなのだが、敵もただ馬鹿正直に追いかけるだけに留まらない。

バイクのリアシート、ジープの助手席から身を乗り出し重火器を構えたチャップが遠慮なしに撃ち続け、爆発を避けながら左右に機体を流し、路面を滑らずに走り続けることが精一杯であった。

「このままでは…」

「メデューサ…ワタシニホウグヲツカエ」

「な、何を言っているのです!?!」

聖杯戦争時、メデューサはキャスター…メディアと敵対し、互いの全力をぶつけ合った際にロードセクターへ自身の宝具を使用するこ

とで勝利を収めた。

だが、その代償としてロードセクターは大破こそは免れ、通常の移動は出来るものの、最終決戦まで戦闘不能の状態となってしまう。メデューサが召喚する天馬のような幻想種ではなく機械であるロードセクターへの負荷は大きく、たった数秒でボディーが傷だらけになるに至っていた。

いくら再生能力を持つアクロバッターでも、能力を向上させ限界以上のスピードで駆けた後のダメージは確実にある。

さらに言えば敵がまだこれから先、どの位置に潜んでいるか不明確のまま宝具を長い時間使ってしまったら…

「ツカウノハイッシユンダケデイイ。アーチャーノイツタトオリ、キミノチカラヲココデシヨウヒスルベキデハナイ」

「しかし…くッ!？」

赤い目を点滅させるアクロバッターの言葉に逡巡するメデューサの真横で起きた爆発で身体を大きく揺らしてしまう。アクロバッターが自身で立ちなおしたことで横転することはなかったが、敵の追撃はさらに勢いを増していくばかり。

いずれは攻撃を避けきれず最悪の事態を迎えてしまう前に、アクロバッターはメデューサへの説得を続けた。

「…キミノホウグハ、イゼンヨリチカラハヨクナツテイルノダロウ。ナラバ、ワタシヘノフタンモチイサクナツテイルハズダ」

「アクロバッター…」

「キミニヤクワリガアルヨウニ、ワタシモヤクワリヲマツトウスル。コウタロウト、アタラシイナカマノタメニ」

「……………」

敵の爆撃音しか聞こえない中、グリップを強く握るメデューサはやがて無言で小さく頷く。メデューサの手の中へ光と共に顕現したのは、本来は神獣を御し、本来以上の力を発揮させる手綱。

手綱を呼び出すだけでメデューサが持つ魔力の3割が失われ、小さな虚脱感が押し掛かる。光太郎から魔力が供給されていた時とは違

い、今では彼女自身が持つ魔力を消費して宝具を使用している。魔力と共に気力まで削がれた今のコンディションでのアクロバッターの操縦は少しのミスも許されない。

しかし、そんな事を気に留める余裕など彼女達にはない。

覚悟を決めたメデューサは手綱をグリップへと巻き付け、宝具の名を轟かせる。

『ベルレフオーン騎英の手綱!!』

瞬間、アクロバッターの計器は完全に振り切り、エンジンを始めたとしたパーツに本来であれば許されない程の負荷がかかる。だが、それがなんだと言うのだ。自分の役割を果たす為、この程度の『痛み』など、今戦っている光太郎に比べれば…

アクロバッターは赤い目をより強く発光させ、今は自分の操縦者であるメデューサを乗せ、臨界を突破する。

「…イクゾ!!」

「はいッ!」

返事と共にスロットルグリップを何度も回し、それに応えるにエンジンが凄まじきパワーをギア・チェーンを介してタイヤへと伝導する。さらに魔力の余剰効果でアクロバッターは全身をアメジストのような鮮やかな輝きを放った直後。

もうその場にはメデューサとアクロバッターの姿はなく、アスファルトに擦りつけられた黒い跡がどこまでも続いているだけだった。

ガンガデインの圧倒的な火力に押さされている間桐光太郎は攻撃を受けながらも何とか距離を離すことに成功し、少しでも体力の回復を図るために身を潜めていた。

「ハア、ハア、ハア……ここまで力があるなんて……」

瓦礫を背にし、ガンガデインの攻撃を防いではいるが、あの攻撃にどれほど耐久できるのか……光太郎は逆転するための一手を模索するが、敵はそれを待つてはくれない。やがて隠れ蓑としていた瓦礫は爆散し、光太郎も吹き飛ばされ路面へと叩き付けられてしまう。

「があ……」

倒れる光太郎の耳にアスファルトの上を走るキャタピラの重音が響く。顔を上げて見れば、まだ数十メートル近く距離を離しているが、ガンガデインに取っては無意味なのだろう。このままでは的になるだけだと光太郎はよろけながらも立ち上がる。

（だが……なんなんだ？）

太陽を遮られ、再生能力を發揮できない光太郎は焦りよりも、自身に起きている違和感が勝っていた。

違和感……というよりも頭に浮かぶイメージという方が強いかも知れない。ガンガデインの無制限とも言える射撃を身に受ける最中、光太郎は炎に包まれる何者かの影がイメージされていた。

それが誰であるのか、検討もつかない。だが、他人であるとも思えない……

だが、光太郎には確かめる術はない。今確実に止めをさせる距離まで迫るガンガデインは再度光太郎へと狙いを定めた、その時だった。

「っ、この音は……？」

光太郎の背後から段々と大きくなる地鳴り。それはガンガデイン

の重圧あるキヤタピラとは違う。聞き覚えのある、あのエンジン音は
：

自分の横を抜け、ガンガデインへと突っ込んでいく白い影。アクロ
バッターと並び、ゴルゴムとの戦いで多くの危機を乗り越えた友の名
を光太郎は焦りと共に叫んだ。

「ロードセクターツ!!止めるんだツ!!」

イオンシールドも展開しないまま、白と赤のオンロードマシン
ロードセクターはガンガデインの砲撃を機体の所々に受けて傷付き
ながらも突進をやめず、ついにはガンガデインを正面衝突。押し合う
形となった。

押し合う力は拮抗し、ロードセクターのタイヤとガンガデインの
キヤタピラは互いにアスファルトを擦りながら一進一退を保ってい
たが、ガンガデインは突如現れたロードセクターに怒りを向け、砲門
全てを眼下の乱入者へと向ける。

「…小賢しい」

「やめろ…やめてくれツ!!」

駆け寄ろうにも蓄積したダメージで膝を着いてしまった光太郎は
もはや手を伸ばすしか出来ない。指の隙間で現在も光太郎に迫るガ
ンガデインを全力で押し返そうとするロードセクターへ、無情にも敵
の攻撃が降り注いだ。

爆発により起きた強い閃光に一度目を背けた光太郎がその先では
…ボデイから火と煙を上げ、ゆっくりと地面へと沈むロードセクター
の姿だった。

「ウワアアアアアアアアアツ!!」

身体に走る痛みなど顧みず、光太郎はアスファルトが砕け散る程に右手を叩き付け、跳躍。

ガンガディンにRXキックを仕掛けるが逆方向にキヤタピラのベルトを回転させ急後退。光太郎の攻撃は地面を押しつぶすだけに留まってしまった。

「ふん。今度こそ止めだ…」

再度距離を取ったガンガディンの攻撃が光太郎へと迫る。しかし、光太郎は先ほどのように防御の体勢を取らず、倒れたロードセクターを守るように背を向け、覆いかぶさっていた。

「ようやく、止まったか…」

額から血を流し、大木に背を預けるアーチャーは自分の首をへし折ろうと手を伸ばしたまま機能を停止したサイボーグサイ怪人を見る。

全身の関節という関節に白と黒の短刀を突き刺し、オイルが滴り落ちる姿はたとえ機械仕掛けの身体とはいえ見るのも痛ましい。雑兵を片付けながら戦いの様子を伺っていた武はアーチャーによる怒涛の剣撃が今も目に焼き付いていた。

敵の攻撃を避けながら近接戦闘を仕掛けたアーチャーは敵の反撃に顧みず装甲に覆われたサイ怪人の関節部を狙い、斬撃を続けていた。しかし関節部すらも地球上では存在しない金属で精製されてお

り、アーチャーの攻撃が届くまでに幾本もの夫婦剣が砕け散っていった。

敵の目から光が消えるまでの間にどれ程の剣が砕け、魔力を消費したかなど、もう考えるだけで嫌になるほどなのだろう。

それに、戦いはこれで終わりでない。

「…チイツー」

強引に身体を転がして回避したアーチャーが背にしていた大樹が真つ二つとなり、ミシミシと音を立てて沈んでいく。腕に装着した刃を地面へと突き立てているサイボーグタカ怪人は再び大空へと飛翔。上空から急落下し、アーチャーを引き裂こうと狙いを定めていた。

「…残りの魔力も少ないな。それにあの木偶の坊と同じように剣を当てさせてくれる相手でもない、か」

パワータイプのサイ怪人と違い、タカ怪人はゴルゴムにいた時から一撃必殺のヒット&アウェイを繰り返していたと以前光太郎から聞かされていた。

ならば、こちらへと攻撃が届く前に撃ち落とす。

アーチャーが手にした破損した夫婦剣を消し、代わりに黒い弓を投影。矢を上空へと番え、自身に迫る怪人を撃ち落とす為に矢羽を持つ手をより強く引くが…

「なっ…!?!」

視界に捉えたはずの敵が突如として姿を消した事への驚きと、背後に走った痛みを感じたのは同時だった。

タカ怪人は翼からエネルギーを噴射させることでさらに速さを向上させ、ついにはアーチャーの目ですら捉える事の出来ない攻撃を放ったのだ。

「貴様あッ!!」

全てのチャップと怪人素体を切り伏せた武は背中から血を流すアーチャーへ刃を振り上げたタカ怪人へと駆けるが刀を下ろす寸前に再度飛翔してしまう。もはや武の目ではどこにいるかも把握できない高さまで上昇していた。

「奴め…一体どこへ」

「何をしている…赤上武」

空を見上げて敵がどこから攻撃を仕掛けてくるか警戒する武に、弓を杖代わりに立ち上がるアーチャーは低い声で武へ問いかけた。汗を流し、血を流し続けようが彼の目からは戦意が失われていない。ならば、自分の出番はまだなのだろう。

「…貴様自身が言ったはずだ。私の力を、見るとな」

「……………」

武は無言でアーチャーから距離を取る。彼の口にせず、自分の戦いを最後まで見守る姿勢に感謝しながらアーチャーは上空を見る。敵は急降下しながらもその落下速度を保ったまま方向を変え、こちらの死角を狙ってくる。こちらが正確に敵の位置を掴んで射ったとしても回避されてしまうだろう。

（状況は最悪、だな）

太陽の眩しさに目が眩む。血を流し続けていることもあるが、本来であれば倒れても可笑しくはない程の状態であるアーチャーであったが…

「こんな情けない姿、見せるわけにはいかんな」

さらには敗北したなど、この後に言えるはずがない。彼女はただ心配するだろうが、そんな顔など見たくはない。大切な存在にそのような表情にさせてしまう自分の非力さへの怒りが込み上げるアーチャーは強く拳を握りしめた。

「許せんな……自分がここまで力ないとは……っ!?!」

そう口走った直後、アーチャーの身体に異変が起きる。

視認出来るほどの赤いオーラがアーチャーの全身に走り、聖杯戦争時と同じ……否、それ以上の魔力が溢れていた。

「……理由はわからんが、今ならば」

自分に何が起きているかを確かめるよりも早く、アーチャーは手に魔力を送ると今の状況に最適な投影を開始した。敵がこちらの攻撃を察知されてしまうのならば、察知されても追跡すればいいだけのこと。

敵がこちらの異常に気が付き、落下を始めたようだがもう遅い。この投影を終わった時点で、相手の最後だ。

アーチャーが手にしたのは、全身が黒く、機能するのもか怪しい程に刺が目立つ矢。赤い弓兵は天へと番え、雲の遥か上から迫りくる敵を狙い矢を射った。

風を切り、空へと矢が消えていた数秒後。アーチャーが弓を下ろした直後に空の彼方で爆発する音が鳴り響いた。

アーチャーが投影した宝具は赤原猟犬フルンディングと呼ばれる剣を矢へと変貌させたものだった。射手が健在の限り、標的を狙い続ける赤い光となった矢は上空で一度は回避したタカ怪人を追い続け、ついには倒すことに成功する。

弓が消失したと同時に仰向けに倒れたアーチャーは手を軽く握っ

て見せた。先ほどまで自身の中で溢れていた魔力は既になく、もはや空同然だ。暫くは一步もあるけそうにないと自己分析しているところへ、戦いを最後まで見届けいた武が手を差し伸べる。

影が武の顔を射し、どのような表情を浮かべているかは分からない。だが、無視するわけにもいかずアーチャーは普段の何倍も重く感じる腕をなんとか動かし、武の手を掴むのであった。

「…見えたッ！」

なんとか敵を振り切り、冬木へと到達したメデューサとアクロバッターは間桐家の門を潜るがブレーキが上手く作動せずに横転してしまう。ガリガリと芝生を削ってようやく動きを止めたアクロバッターのエンジンは限界を迎えた熱量によって煙を上げている。

「アクロ…バッター…無事、ですか…？」

アクロバッターが横転したと同時に地面へと放り出されたメデューサだったが咄嗟に受け身をとったことで打ち身程度ですんでいる。だが、この家に到達しただけでは終わりではない。

「姉さんッ！大丈夫ですかッ!？」

「まったくアクロバティックな帰り方だなおいつ！」

「サクラ…シンジ…」

自分達に続いて門を潜ってきた桜と慎二はそれぞれメデューサに肩を貸し、倒れたままのアクロバッターを起こすと急ぎ倉庫へと向かい始めた。しかしメデューサは解せない。何故帰ったばかりの2人が現在の状況を把握しているのか。

「…メールが届いたんだよ。ロードセクターからな」

「メデューサ姉さん達が光太郎兄さんの思い出の場所に向かっている

事。そして…自分が、時間を稼ぐってことを」

「時間を…稼ぐ…？」

「マサカ…？」

アクロバツターはメデューサと共に家を出る直前にロードセクターが倉庫にある端末と自身のコンピューターと接続していたことを思い出す。不思議には思っていたが、今は優先するべきことがありその場を後にしていた。

もしあれが光太郎の様子を知る為のものであり、そして慎二と桜に状況を伝えたのだとしたら。

「…猶更、急がなければなりません！」

倉庫内の照明を点灯し、奥には数日前に完成したばかりの赤い車、ライドロンが鎮座している。

身体をよろめかせながらライドロンの前へと移動したメデューサはここまで幾人もの協力を得て持ち帰った水晶…命のエキスの結晶体をフロント部分へゆつくりと置いた。

無論、それだけでは終わらない。

メデューサは眼鏡を外し、一度目を閉じると両手をライドロンへ設置した結晶体へと重ねる。そしてメデューサの身体から紫色の魔力が昇り、全てが結晶体へと注がれていく。

(私に残された力である時と同じ状況を作ることは不可能かも知れない。しかし、光太郎ならば決して諦めない。だから私は…アクロバツターが、ロードセクターが役目を果たしてくれたように…)

ゆつくりと開かれるメデューサの瞳は――

「私も、その役目を果たして見せるッ!!」

光太郎が宿すキングストーンのように、赤い輝きを宿していた。

光太郎が大聖杯の破壊すると同時に起きたサーヴァント達が命を得るといふ奇跡。メデューサはその時と全く同じ状況を生み出すようとしていた。命のエキスの結晶体に自分が宿る魔力ともう一つ。

光太郎が世紀王として真の力を解放しメデューサ自身が消滅しかねない程の魔力を身に宿した結果、メデューサも僅かながらキングストーンの力を扱えるようになるというイレギュラーが発生。この場に光太郎抜きに奇しくもサーヴァント達が命を持つ要因が全て揃っていた。

だが。

「くっ…」

「姉さんっ!」

魔力とキングストーンの光を放ち続けるメデューサは間桐家に到着する前に宝具を使用していた為、ここにきて魔力が尽きかけてしまっていた。倒れそうになるが桜に支えられたメデューサは自分の不調であるにも関わらず、力を注ぎ続けている。このままでは魔力どころか、命すらも危ない。

「メデューサ、お前…」

「いいのですシンジ。これで光太郎が助けられるのなら、私は…」

光太郎と同じように、無理を隠して笑顔を向けるメデューサに変なところだけ真似やがってと口にしたくなる慎二だったが、あえてその言葉を飲み込み、自己修復を続けるアクロバッターへと駆け寄った。

「おい、あとどのくらい掛かるんだよ？あのままじゃメデューサは…」
「…ワカラナイ。スベテハ、カノジョシダイダ」

「くっそ、曖昧なこと言いやがって」

苛立ちを隠せず付近のテーブルを叩く慎二が顔を向ける先では、未だメデューサが震える身体に構わず力を行使している。サーヴァントのように力を使い果たして消滅することはないが、あのまま力を使い続ければ命は危うい。もう、自分に出来るのは祈る事しかないのかと歯がゆく思う慎二は、やはり見守ることしかできなかつた。

（お願い…します。どうか…）

祈りと共に力を送るメデューサを支え続ける桜に嫌な予感と共に決して聞こえたくない音が届いてしまう。少しずつ、少しずつ命の結晶体に亀裂が走り始めてしまった。

「そんな…お願いです！もう少しだけ…！」

桜は懇願するように唱え続けるが、結晶体は応えることなく一度強い光を放った直後に音を立てて砕け散ってしまった。

「うそ…だろ」

その場にいる全員の気持ちに代弁した慎二は、粉雪のように散っていく命の結晶を浴びて、未だ沈黙を続けているライドロンの姿を見る。

あれだけの事をしても、動いてくれなかった。メデューサは立ったまま顔を上げる様子もない。桜もどうして…と掌に乗った塵芥となつた結晶を見て涙ぐんでしまう。

もしかしたら、あの結晶の効力は自分達サーヴァント達へ命を与えた事によって無くなっていたのかもしれない。

今更そんな可能性があってもおかしくないと思いついてしまうなんて：と自分を愚かさと思うメデューサの目から、一粒の涙がフロント部へ零れ落ちていった。

ドルンツ…

「え……？」

その音に全員が思わずアクロバッターへと目を向けるが、当の本人は赤い目を点滅させながら頭部を左右に動かしている。

「ワタシデハナイ……」

「じゃあ……ならッ!？」

「……消し飛んだか……むッ!？」

一斉砲撃により爆炎の中で消えたはずの光太郎の亡骸を確認しようとしてセンサーを起動させたガンガディンは煙の中で立ち続ける人影を発見する。だが、それはデータにあるRXとは異なるものだった。

「……何者だ」

正体を確かめる為にセンサーの感度を上げようとした途端に煙が晴れ、人影が姿を現すがそれは間違いなくRXだ。

では、先ほどの陰は一体……カメラに収めた影とRXを改めて検証すると細部は異なるが体格は酷似しているという結論に至ったガンガ

デインはそのデータをクライス要塞で待機しているガテゾーンへと転送。

そして身体から煙を上げ、膝を着きながら煤だらけとなったロードセクターに触れるRXへとカメラを向ける。どうやら、あのバイクへと話しかけている様子だ。

「ロードセクター…どうして…」

声を震わせ、答えないと分かっているながらも光太郎は倒れた友へと尋ねる。すると、計器の上に設置されていたディスプレイが起動し、マイクから音声が始めた。

「ま…スター…貴方が悲シムコト…ハ…アリマセ…ン」

ノイズ混じりに流れる合成音声。何時の間にそんな物をダウンロードしたんだと驚きながら光太郎はロードセクターの声を聞き逃さないように耳を傾ける。

「コレハ…貴方ヲ助ケル為ニ最モ適切ナ手段デアルト判断シ、実行ニ移シタノデス。ダカラ」

「何を…何を言っているんだ！その為にお前が死んでしまったら…何の意味もないじゃないかッ!!」

「…ソレハ的確ナ表現デアアリマセン。私ハ機械。機能停止トナルダケデ…」

「同じ…同じなんだよ」

「意味ガ…解リ…マセン…」

「教える…教えてやるッ！これから先、アクロバッターと、ライドロンと…お前の、仲間達と一緒に…」

「ナ…カマ……」

モニターはブツリと消え、ノイズの音が途絶えることなく流れ続けた。

無言で立ち上がった光太郎は、データの転送を終えたガンガデインを睨む。光太郎に再び砲門を向けながら、彼の足元にいるロードセクターが完全に停止している様子を確認する。

「ふん…ようやく『壊れた』か。手間を掛けてくれたな…」

「なんだと…」

敵の心無き言葉に怒りを向ける光太郎は力強くガンガデインを指差した。

「怪魔ロボットガンガデインツ!!これ以上俺の仲間を侮辱することは断じて許さんツ!!」

「ほざけッ!立てるようになったのは驚きだが、結局はこの攻撃から貴様は逃れることは出来んのだツ!!」

敵の咆哮と共に放たれた一斉射撃。確かに今の光太郎には防ぐ手段はない。だが、これ以上ロードセクターに被害を負わせない為には、やはり自身が盾となるしかない。両腕を交差して足を踏ん張る。ガンガデインの放ったエネルギーの群れが自身へと迫る気配を感じる中、光太郎は別方向から攻撃とは別の何かが接近していると気付く。

それは、光太郎の知るものとは別のエンジン音。

光太郎が聞こえた方へと顔を向けるより早く、それは光太郎の正面で停止しガンガデインの放った攻撃全てを浴びてしまう。

「今度はなんだ…」

「またも自分の妨害する者が現れたことに苛立ちを隠さなくなったガンガデインの怒りから驚きへと変わる。殲滅すべき敵の前に現れたそれは、自分の攻撃を全て受けながらも傷一つ負うことなくアイドリリングを続けていたのだから」

まるで昆虫の頭部を思わせるようなフロントガラスに、光太郎と同じく長い一對のアンテナ。中央には鋭利な刃『パイルエッジ』を備えた赤い重装騎マシン。

ライドロンが、光太郎の前に現れたのだ。

「ライドロン…なのか？」

「ソウ、キミノナカマダ」

「…っ!？」

光太郎は夢を見ているような気持ちだった。ライドロンが動いただけでなく、アクロバッターと同じように声を出して自分の質問に答えてくれている。

こうして自分の前に姿を現したのも、組み立てに力を貸してくれた仲間達。命の結晶を回収してくれたメデューサとアクロバッター。

そして、今この時まで自分の身体を張り、命を守ってくれたロードセクターがいてくれたからだ。

「…ライドロン。この場から敵を引き離したい。できるか？」

「ムロンダ。ワタシモハヤク、『キョウダイ』ヲタスケタイ」

「…ああッ！」

展開したライドロンのコクピットに飛び乗り、光太郎はハンドルを

握ると正面に捉えたガンガデインに向けてライドロンを急発進。ア
クセルペダルを前回まで踏みつける。

「行くぞおツ!!」

「小癩なあツ!!」

どんなマシンに乗ろうが自分の火力には敵わない。砲撃を続ける
ガンガデインの自信は脆くも崩れ去ろうとしていた。

「ば、バカな…」

ライドロンの装甲は、ガンガデインのエネルギー弾を浴びようが傷
一つ負わずそのスピードも弱まることはない。それどころかさらに
速度を上げて突進していく。ならばと光太郎を一度吹き飛ばした両
肩のチャージ弾を発射するガンガデインだったが、それすらも着弾し
て爆発するだけに過ぎなかった。

「馬鹿な…!」

「行つけえええええええツ!!」

遂にはライドロンのフロントがガンガデインのタンク部分へと衝
突。そのまま抵抗を許さぬまま押し切っていく。既にキャタピラを
全力で前進させていたガンガデインだが、完全に力押しされてしまっ
ている。ならばロードセクターと同じ末路を迎えさせようとゼロ距
離で砲撃を繰り返すが、既に悪あがきに過ぎなかった。

「こ、こうなったら脱出を…なっ!?!」

再び下半身を切り離そうとしたガンガデインは脱出を試みても全
く腰が離れない事に焦る。見れば、腰とタンク部分の接続部分が溶接
されたように溶け合い切り離すことが出来ない。

悲鳴を上げるガンガデインへリボルケインの柄尻を押し、さらに奥へと押し込んで光のエネルギーを流し込んでいく。ガンガデインの全身から流れていった余剰のエネルギーが火花となって全身から吹き出した直後、リボルケインを引き抜くと同時にライドロンは急後退する。

ライドロンから飛び降りた光太郎は断末魔の声を上げるガンガデインを背にし、リボルケインを持った右腕旋回し、両手首を頭上で交差。左手をサンライザーへと翳しつつ、右手に持つリボルケインを真横へと振り抜いた。

残心の構えを決める光太郎の背後で、ガンガデインは大爆発の中に消えるのであった。

ガンガデインの敗北が明らかになったと同時にモニターの画面を消したガテゾーンは踵を返し、その部屋を後にしていく。

自ら作成したガンガデインが敗北したことには何も思うところはない。敵がそれ以上の力を持ってこちらを上回った。それだけの話だ。

だから、ガテゾーンへ苛立ちを覚えさせたのは全く別の理由だった。

「仲間…だど？」

光太郎とメデューサは、乗り物に過ぎないアクロバッターやライド

ロンを仲間と断言した。さらにはロードセクターが中破した際など、仮面で見えなかつただろうが涙すら浮かべていた。

本当に理解できない。自分も含め、機械やロボットなど役目を果たす為生まれ、そしていずれは壊れる運命にある。あのような馴れ合いなど、何の意味がある？

「くだらねえ…」

そして、このような事に怒りをむき出しにする自身にも呆れながら、ガテゾーンは通路を歩み始めたのであった。

「すいません、大門先生…お父さんの遺したロードセクターをこんな目に合わせてしまって」

数日後、光太郎はロードセクターの開発者である大門洋一の息子であり、光太郎のバイクのコーチである大門明の元へと訪れ、頭を下げていた。その背後では事態を見守っているメデューサや慎二、桜が不安な表情を浮かべていた。

明は光太郎達に背を向け、傷だらけとなったロードセクターに端末を繋げてデータを確認作業を行っている。一通り作業が終わり、一度大きく息を吐くと振り返ると強面の顔からは考えられ位ほどの穏やかな表情を浮かべた。

「光太郎君。顔を上げるんだ」

「先生…」

「ロードセクターは自分の判断で君を庇ったのだろうか？ならば、同じ

ことをしないように教え込むがいい」

「え…?」

言葉の意味が理解できない光太郎へ、明は先ほどまで操作していた端末の画面を差し出した。そこには、部分的には破損しているものの、ロードセクターは修理可能ということが示されている。

「幸いなことにエンジンやシステム。それに機能は止まっているがAIも問題はない。ロードセクターは、甦るよ」

「本当、ですか…」

涙を浮かべる光太郎の横から桜が自分自身も涙目になっ
ていながらもハンカチで義兄の目元を吹いてくれている。慎二もメデューサも、涙こそ流してはいないが胸を撫で下ろしていた。

「そして修理するだけでなく、大幅な改良を加えようと思う。これからの戦いにはロードセクターの力も必要だろうか?」

「え?」

明の意外な提案に、光太郎は先ほどとは別の画面に切り替わった端末を見る。そこにはロードセクターの面影を残しつつも全体が強化される設計図とプランが表示されていた。

「これは、一体だれが…」

「信じられないだろうが、ロードセクター自身だよ」

全員が明の言葉を受け取るのにしばしの時間が必要だった。

どうやらロードセクターはクライシス帝国が出現し、光太郎がRXとパワーアップを遂げた時点から自分自身の強化プランを組み立てていたらしい。

これはアクロバッターにすら明かしていなかったことらしく、後ほど話してみると隠し事したことかなりの不満を漏らすのだった。

「…わかりました。手伝いが必要な時は、いつでも呼んで下さい。そ

れに、無償で手伝ってくれる知り合いがたくさんいますからね」

「ほう、そいつはありがたいな」

互いに笑顔で握手を交わした後、光太郎は先ほどとは違い、笑顔でロードセクターへと目を向ける。その主人の笑顔を窓の外から伺っていたアクロバッターとライドロンは戦線を離脱する友へと言葉を送っていた。

（アリガトウ。ソシテマツテイルゾ、ロードセクター）

（ソレマデノアイダ、ワタシタチガコウタロウトモニタタカイヌイ
テミセル）

命を持つ2台のマシンは、その身を張って光太郎を守った仲間へ敬意を表し、決意を新たにするのであった。

第19話

仲間達の協力を得て命のエキスの結晶体を持ち帰ったメデューサはライドロンへ自分の魔力、キングストーンの輝きを合わせて捧げていくが、その最中に結晶体が砕け散ってしまう。

しかし目的を果たせずメデューサが流す一筋の涙がライドロンへと触れた時、奇跡は起こった。

一方、ダメージを受け続け、立ち上がる力さえも失われつつあった光太郎を助ける為にロードセクターはその身を顧みず怪魔ロボットガンガデインへと挑むが返り討ちとなってしまった。

沈んでいくロードセクターを見て再度立ち上がった光太郎の元へ命を宿したライドロンが登場。ロードセクターの無念を晴らすためライドロンに搭乗した光太郎はその圧倒的な力でガンガデインを追い詰め、止めのリボルクラッシュで強敵を打倒す。

戦いが終わり、ロードセクターの開発者の息子である大門明からロードセクターは自ら設計した強化プランにより生まれ変わると聞いた光太郎達の喜ぶ顔を見て、アクロバッターとライドロンはロードセクターが戻るまで彼等と共に戦い続けると誓うのであった。

ロードセクターを大門明へと託したその日の夜。

間桐家の地下空間：通称『倉庫』では赤い車両の前で、同じく赤い服を纏った少女が立ち尽くしていた。

…赤い少女 遠坂凜を離れた場所から見守る一同には、彼女が何を思いライドロンの前へと立ったのかは分からない。桜と士郎は息を飲み、頼むから『命を持つ車なんて魔法の域すら超えてる存在を認められないッ!!』と叫んで宝石魔術を行使することだけは避けて欲しいと望む傍ら、包帯だらけのアーチャーは主の姿を黙って見つめている。

額から流れる汗を拭い、ゆっくりと深呼吸した直後に拳を握りしめた直後に凜の口が開いた。そして皆が注目する発言は…

「ヴィ…」

「Wie geht es dir…?」

何故かドイツ語での挨拶を口走った。

「ニホンゴデダイジョウブダ」

フロント部のライトを点滅させるライドローンの言葉にビクリと身体を震わせ、両サイドで縛った髪の毛まで跳ね上がる程に驚愕した凜は急ぎ振り返ると強化の魔術で脚力を底上げした上で桜達の元へ全力で駆けていく。

そしてアーチャーの背後へ回った凜は彼の体軀を隠れ蓑とし、警戒しながらライドローンの様子を伺う主の姿を見たアーチャーは頭を抱える。この頭痛は怪我による影響だと思いたいと。

「…掃除機の吸引音に怯える猫か君は」

的確過ぎるアーチャーの例えに笑いを堪える慎二をジロリと睨むが今の姿では威厳の欠片もない冬木の管理人へ実妹の桜は慌ててフォロワーへ回る。そこには、新しい仲間であり家族であるライドローンに誤解を抱いてほしくないという思いもあつた。

「あの、遠坂先輩。ライ君もアツちゃんと同じように私や兄さん達のお友達なんです。ですから、怖がらないで同じように仲よくしてください、嬉しいんです」

「こ、怖がってなんかいないわよ！ただ、びっくりしただけで…」

目を潤ませて懇願する桜について声を荒げてしまう凜は視線をライドロンへと向ける。生粋の魔術師である凜だが別にそこまで機械や乗り物に拒否反応を示しているというわけではない。経緯はともあれ、無の状態から創られた乗り物が、命を得た存在となるなど凜が生きた中で見た事など皆無だ。

桜の言動から、会話が可能となったアクロバッター同様に身内同然

に扱われているのは確かだろう。ならば恐れる事など何もないはずなのだがその一步が踏み出せないマスターへアーチャーは荒療治を開始する。

「認めたまえ凜。目の前にそういった存在がいるのだ。頑なに現実を否定するのは、相手を認めないことと同義だぞ？」

「ちよ、ちよっとアーチャーッ!?」

自分の背後に隠れる少女の手を引いて、弓兵は強引にライドロンへと移動させる。

「安心しろ。今に成り果てた私も受け入れられた君なら、できるはずだ」

「……………」

アーチャーに軽く背中を押され、前へと一步進んだ凜。ぎこちない形でライドロンとの会話が始まった様子を見て安心した桜はほんの少しだけ耳が赤く染まっている姉の姿に思わず首をかしげている隣で、慎二は何故アーチャーが治癒魔術を受けずにいるのかを訪ねていた。

「遠坂が治癒魔術せずに通常の治療の上に包帯だけ、か…なんでそんな回復を先延ばしにするようなことしてんだよ」

「あー…聞いた話だと自分に話さず勝手に戦った罰…みたいなもんらしい」

苦笑して答える土郎の回答に呆れたと言わんばかりに目を細め、後頭部をガリガリと搔く慎二は居候の赤上武と共にタクシーで帰還した血だらけのアーチャーを思い出していた。

背中に追った大きな傷は武により応急処置で止血はしていたがそれ以外の火傷や弾痕など、どこの戦場に飛び込んできたのであろうかという姿に動揺した間桐家の面々はタイミング悪く家へ来訪した凜を意識を失っているアーチャーと対面させてしまう。

自分の知らない所で重症を負ったアーチャーを目の前にした凜が慌てふためく姿は記憶に新しいが、どうやらあの様子だと落ち着い後

にながーいお話をしたようであり、今後は自分の断りなしに行動しないと固く誓いを交わしたようだ。

「そしてあと3日は治療魔術をせずに薬局で売ってるガーゼや薬で間を持たせるんだってさ」

「期間が定められている当たりが愛を感じるねえ」

本人が聞けば無言で蹴りを繰り出すような言葉を放つ慎二に今度は士郎が訪ねる番であった。こういった場に必ず立ち合うはずの人物が見当たらないのだ。

「慎二、光太郎さんは？」

「ああ、ちよいと考え事があるんだと」

間桐邸のテラス

間桐光太郎は手すりに背を預け、星が爛々と輝く空を見上げながら戦いの最中、脳裏に走ったイメージを浮かべる。

燃え盛る炎の中で立っていた影。

その形はBLACKでも、ましてやRXでもなかった。

しかし、全くの別人とも言い切れない。

正体は一体何なのだろうか…？

探ろうにも戦いが終わって以来あのイメージは全く浮かぶことが

なく、手がかりが丸でない状況だ。ふう…と息を吐きながら顔をおろす光太郎の視界へ突如自分用の湯呑が現れる。湯気を上げながら鼻腔へ運ぶ日本茶特有の香りは心を落ち着かせくてれる。

「どうした？珍しく黄昏ているようだが」

「武君…」

微笑みながら差し出された、最近青年の特技となりつつあるお茶を受け取った光太郎の隣へと移動し、お茶を一口含んだ武は前振りもなしに訪ねてきた。

「で、何を悩んでいるのだ？」

「……………」

「光太郎殿はこちらが悩む間もなく、この家に住まうよう話を進めていたんだ。こちらが無遠慮に訪ねても、悪くはあるまい？」

啞然とする光太郎だったが武が迷いなく相手の内面に踏み込んでくる勢いは、まるで自分を見ているようなと不覚にも笑ってしまった。こうして悩むだけでも周りを心配させてしまうのならば、いっそ打ち明けてしまおう。無論、この場にいる『2人』にだ。

光太郎は淹れ立ての熱いお茶を一気に飲み干すとテラスの入口付近に向けて声を上げた。

「そこにいないで、こちらにおいでよ！それとせつかく入れてくれたコーヒーも飲みたいしね！」

声を発した方へと視線を向けると、テラスの入口から魔法瓶を手にしたメデューサが気まずそうに視線を逸らしたまま姿を現す。

どうやらコーヒーを作り、武と同じように悩む光太郎と飲みながら話そうとしたところを武へ先を越されてしまったらしい。だが出直そうとも光太郎の悩みが気になりその場で控えていたのだが、当の光太郎に気配を絶って隠れていることも看破されていたようだ。

武はメデューサが光太郎の隣に移動しながら自分に向けるやや鋭さを持った目に気づいていながらも敢えて見なかったことにしてほくそ笑んでいる。

(焼きもちとは、見た目の麗しさとは別の可愛らしさがあるものだ)

本人には決して聞かせられない心中を隠しながら光太郎が試行錯誤で作られたメデューサのコーヒーを受けとるまで、しばし見守るのであった。

「自分の中に、別の存在が…?」

「…と、言ってもあくまでそうじゃないかなって思えるだけなんだけどね」

話を終え、武の疑問に応じた光太郎は湯呑を手で軽く振り、密かに揺れる半分ほどになったコーヒーの波を見つめる。ガンガインの猛攻に耐え続けた際にその痛みよりもその存在感に心奪われたように、戦いに対する集中力を失ってしまったほどだ。

「光太郎。その時、自分でも制御出来ない衝動に起こる兆しなどありましたか?」

「え? いや、特に起きなかったな」

「では、何者かが囁くような声はどうだ? 例えば、目の前の存在を滅せよというような…」

「そんな物騒なことは…」

メデューサと武はなぜ急にそのような事を…と言いかけた光太郎だったが、相談に乗ってくれた2人は過去に自分では抑えられない反転によって苦しんだ過去を持つことを今更ながら思い出してしまった。

2人に嫌なことを思い出させてしまったのではないかと不安になる光太郎だったが、自身の答えた事に安心したように2人は微笑んでいる。

「それならば、まだ大丈夫であろう。もし、そのような声が聞こえ続け、自分を抑えられなくなったのなら何時でも言っただけでいい。切つて捨てても止めてやろう」

「いや、それは笑顔で言うところでは決してないと思うよ？」

武の物騒な発言に冷や汗を流す光太郎を見て、メデューサは彼が困った様子を見せる姿が可笑しいのかクスクスと口元を押さえて笑いながら補足する。

「タケルが言いたいののは、貴方に何が起ころうと絶対に止めて見せるということでしょう。彼方がどれ程の力を持ってそれに飲まれようが私達は決して臆することなく止めて見せます。無論私達だけでなく、シンジとサクラも同意見でしょう？」

確かに、あの2人なら果敢に挑んできそうだと納得してしまう光太郎の肩に手を置いた武は正面から真っ直ぐ見つめてくる。

「そういう訳だ。光太郎殿は何も心配することはない。思う存分、自分の成すべきことを遂げることだ」

そう言っただけで、武は片手を上げてテラスから離れていく。テラスは光太郎とメデューサだけとなり、視線を合わせると思わず2人して笑い出してしまった。

「武君って、あそこまで面倒見があつたんだね」

「フフツ…兄弟が多いと言っていたのも頷けます。あれが本来の彼なのでしょうね」

ストレートに言葉でぶつけてくる分、慎二とはまた違った頼もしさを感じさせる武に感謝する光太郎へ、メデューサは魔法瓶をそっと向けてくる。どうやら冷めてしまったコーヒーを足してくれるらしい。

「ありがとう。本当に、美味しくなったね。最初は豆を挽くのが十分じゃなかった時は…」

「そ、その話はもうなしですっ！光太郎だって以前に砂糖と塩を間違えて…」

など、取り留めのない会話で一喜一憂するメデューサと過ごす時間は、光太郎に取って掛け替えのないものだ。無論、彼女だけでない。義兄妹や仲間達と送る日々は、それだけで光太郎に力をくれている。そんな守ると決めた人々から、自分自身を守ると公言してくれるのならば、恐れることは無い。

武の言う通りに、存分に自分の使命を担って見せる。

だが、光太郎は自分に何が起ころうが仲間達が止めてくれるという言葉に安堵しながらも、やはりあの姿に対しての不安だけは削がれなかった。

一体、自分に何が起ころうとしているのか…

(信彦…お前だったら、どうする?)

答えなど帰ってくるはずがないと分かっているながらも、光太郎はそう心中で呟きながら、影に隠れる月を見上げるのであった。

「俺が知る訳ないだろう」

そう冷たく言い放った月影信彦の言葉に金髪の女性は頬を膨らませて憤慨するのであった。

「何よッーこれくらいの質問に答えてくれたっていいじゃないッ!!」

女性の怒声に周囲は注目してしまう。それはそうだろう。黒いコートを纏い、どこかミステリアスな雰囲気醸し出す長身の男性と外国人モデルと言われても過言ではない女性が言い争っているのだ。どのような修羅場が…と周囲が奇異の眼差しを向けるその内容は…

「風邪には桃缶が良いって本当かどうか、そんなことも言えないのッ!?!」
「だからそんなことは知らん」

スーパーの一角で、そんな会話が繰り広げられていた。

この真祖はどこでそんな知識を知りえたのか…と疑問に思う信彦の中で同居人であるアンリマユが腹を抱えて笑っている。

(ヒヤハハハハハハハハッ!!て、天下の世紀王様がスーパーでお姫様と缶詰で喧嘩っ…く、下らなねえ…!!)

「……………」

確か通過したコーナーに四川の中華セールというものがあつたなと思ひ返す信彦はメーカーの別の桃缶を両手に取り、説明書きを睨むように読み上げている。どうやらもう自分に頼らず自力でその真実を確かめるつもりらしい。

軽くため息を付いた信彦はこのような状況へとなつた原因：遠野志貫が体調を崩して寝込んでしまった事から始まつた。

その連絡を遠野家の使用人から電話で連絡を受けた信彦は本日は集まることは無いだろうと終日を本に費やそうと拠点であるホテルを出た所へこの女性が登場：もと衣着地してきたのだ。周囲の人々が気付かなかつたのは幸いだつたが奇行を流石に見過ごす訳には行くまいと口を開きかけた信彦より早く、女性はムスツとした顔で『ちよつと付き合つて!』と半ば強制的に信彦を連れて移動を開始。

どうやら信彦と同じく志貫が風邪と知つた女性は『日中は玄関から!』という約束を守り正面の門から遠野の屋敷へと踏み込もうとしたら門前払いを受けてしまう。

家の使用人はどうやら当主である志貴の妹、秋葉から決して家には入れないようにと申し付かつていたらしい。オマケに残された唯一の出入口である志貴の部屋の窓には『協力者』によって吸血鬼が苦手としているニンニクが吊るされており、侵入は困難を極めてしまつた。

うーつと恨めしげに部屋を外から見つめる女性の横をその協力者が眼鏡を光らせて通過していく。

せめてお見舞いの品でも持ち合わせる事ですね…

と勝ち誇つた顔で何か特有の香りを放つ包みを持って遠野家の門を潜つたらしい。

信彦は自分の良く知る代行者とよく似通つているその人物がいく

らなんでも病人にあんな重い食物を持つていくはずがない…と、無駄な期待を描くのであった。

そして対抗心に燃える女性は志貴に見舞いの品を見繕う為に普段はそつけない態度を向けている信彦へ協力を申し出たという流れらしい。

はあ…と深くため息を着く信彦は女性…アルクエイド・ブリュンス
タッドと初めて顔を合わせた日を思い出す。

あの冷たい月下で殺し合おうとした日を。

第20話

間桐光太郎が自身の中でイメージされる謎の影に不安を募らせている同じ頃…

世紀王シャドームーン…月影信彦は真祖の姫、アルクエイド・ブリュンスタッドに半ば強引に連れられ、体調を崩し寝込んでいる遠野志貴への見舞品の選別に付き合わされていた。

相も変わらず信彦への態度は変わらないアルクエイドではあるが、信彦の同居人であるアンリマユから言わせれば大分軟化していると言えた。

初めて2人が相對したあの時と比べればと…

信彦が死徒 ネロ・カオスによつて屈辱的な敗北を喫し、本来ならば自分の命を付け狙う聖堂協会に所属する女性に助けられてしまうという事柄から数日が経過したある日。

とある公園で広場が重機で荒らされたかの如く地面が捲り上がり、陥没しているという光景を一目見ようと登校中の学生や出社前の会社人たちが群れとなり屯っていた。

その中には月影信彦の姿があり、あの場で起きたであろう何者かによる戦いの痕跡を見つめていた。

(はぁん、カレー女の言った通り志貴っちがああな化け物をねえ…)

アンリマユは実感わかねえなどと呟くと昨晚自分達に接触した代行者との会話を思い出す。

吸血鬼搜索の途中、ファミレスで適当に夕食をしていた所に突如として現れた女性：シエルは信彦の許可も得ず相席するとメニューを見るまでもなくカレーライスを注文。

届くまでの間に公園で起きた経由を信彦へ一方的に説明したのである。

ネロ・カオスが消滅したことを。

それが、遠野志貴という少年の手によるものだ。

自分を苦しめた吸血鬼を、あの少年が倒したという事実表情を崩しはしなかったものの、信彦とアンリマユを動揺させるには十分であった。

あどけない笑みを浮かべて、馴れ馴れしく自分の名を呼ぶ少年の顔が浮かぶ。戦いとはまるで縁がないはずの、ごく普通の少年：というのが世間から見た遠野志貴の印象だろう。

調べた限り、自分達と同じような改造人間でもなく、魔術協会・聖堂教会とはまるで無関係ということは分かっている。人間である志貴が吸血鬼と戦うどころか、倒してしまうなどありえるはずがない。

だが、思い返してみれば信彦達は志貴の『眼』を見てから、どこかで彼が普通の少年ではないと疑問に：否、警戒していたのかも知れない。

あの怪物を仕留める志貴は、どのような力を持っているのかと信彦達が考察を続ける中、自分が食した分の金銭をテーブルに置いた女性

は笑顔で彼に言い残してその場を後にした。

『もうこれで、この街にいる理由はありませんよね?』と

女性が店を退出する間、信彦は自分に放たれた言葉よりもいつの間にか追加注文され、重ねられたカレーライスの食器の枚数の方に気が取られていた。

その翌日、戦いがあったとされた公園へと足を運んだ信彦は改めて痕跡である抉れた大地へと目を向ける。吸血鬼が放った生物達の残骸など見当たらず、その亡骸を燃やして消したような跡もない。

他にも路面が砕け、引き裂かれるほどの衝撃が起きたようだがあの少年の手によるものではあるまい。

そんな力技がなくても、少年には相手を殺す術がある。

少年との出会いから、接触した日々の中で信彦が不審に思っていた事を一つ一つ繋げていく。

こちらの命ごと射抜かれるような少年の眼。

公園で倒れていたところを発見した際に落ちていたナイフ。

そしてあの埋葬機関の説明ではネロは死んだとは言わず、『消滅』と言った。それが比喻ではなく言葉通りの意味だとしたならば…

「…直死の魔眼か」

（あ？あの兄ちゃん、魔眼持ちだったのかよ。それにしちやあなんかフワフワした雰囲気だわな）

「あくまで可能性だ」

と、口にはするものの信彦は確信を持つての推測だ。

数百に及ぶあの命の群れを完全に消滅させるには、キングストーン
の力を解放した自分や宿敵の攻撃、もしくは英雄王の対界宝具でなけ
れば成しえないだろう。

あの少年1人で行えたとしたら、反則的な相手には反則的な方法し
か倒せない。

そこで信彦が行きついた答えが、遠野志貴が『直死の魔眼』を持っ
ていた場合だ。

生物を含め、万物には生まれたその時から崩壊するまでの『死期』が
内包されている。その死を情報として読み取り、視ることで対象を確
実に殺すことができる。

『魔眼』を少年が持つていたとしたならば、彼の眼を見た瞬間に自分は
殺されてしまうと考え、ネロ・カオスという『存在』ごと消滅させた
ことも頷ける。

だが、もし推測通りに遠野志貴が魔眼持ちだというのならば逆に普
通の生活を送っていることの方に疑問を抱いてしまう。

信彦も知識でしか知り得ないが魔眼は持ち主の視界を常に『死』で
覆い尽くしてしまう。家族や友人達、自分の立つその一歩先にある道
の『死』を視て生きることなど、人間として耐えられるはずがない。
アンリマユが不思議と思ったのはその点なのだろう。魔眼によつ
て常に『死』を視せられ続けている少年があのように普通に暮らして
いるなどまず考えられない。

考えを巡らせている間に公園から離れた信彦へアンリマユは今後の方針を訪ねた。

(んで、どうするつもりだいこの後。カレー女の言った通りに街を離れっかい?)

「……………」

信彦がアンリマユの質問に回答を出さなのまま、その日は夜を迎えた。

信彦はあれから一言も発しないままホテルへと戻り、日が傾き始めた頃に再度外出。この街で吸血鬼騒ぎを聞いた後と同様に周囲の見回りを開始した。

事件の発生率の高い路地裏などを中心に移動する信彦に変わらず囁き続けるアンリマユであったが、何の反応もない。

(なく、めんどくせえ化け物は眼鏡の兄ちゃんが片付けてくれたんだろ?俺達がやることなんて何も無いって)

「……………」

(それに、まだいる吸血鬼を見つけたところでもう意味ないじゃん?教会の連中はとっくに動いてるってことだしさ)

アンリマユの言うことは、この街にきてからの行動方針の一つであった。ゴルゴムの生き残り、世紀王であったということだけでいらぬ疑いを掛けられる彼等の行先で碌な目にあっておらず、今回のような事件に巻き込まれてしまう。

その為に先手として自ら動き根源である吸血鬼を叩き潰すというのが目的であった。

だが、吸血鬼を討伐するための殺し屋は当に到着しており、信彦へも攻撃をする意思を示していない。

ならば、この街へいる意味はすでになくなっていくはずなのに、信彦はこうして吸血鬼の搜索を続けている。

（あんれ〜、もしや吸血鬼に痛い目合わされちゃったからって別人に八つ当たりしよつての？大人げないね〜）

「……………」

挑発とも取れるアンリマユの軽口に何の反応も示さずに信彦は口を開くことなく、裏路地を抜け人通りの多い遊歩道へと移動するが、続くアンリマユの言葉に不本意ながらも反応してしまった。

（まあ、自分にビビって力が出せないようなお方にはお似合いの目的だわな）

ピタリと急に足を止めた信彦へ背後から歩いていた男性がぶつかりし、舌打ちをしてさつていくが今の信彦にはアンリマユに言われたことで、完全に思考が凍り付いている。

「俺が…何を恐れているというのだ」

数時間ぶりに口を開いた信彦は独り言をしている、という周囲の間が奇異の目を向けて通過していることに構うことなく、自分をそのような状況へと追いやった相手へと尋ねた。アンリマユは先ほどまでのような相手をからかうような様子は一切なく、相手の内心を抉るような鋭い言葉を差し向けた。

（だってそうだろうよ。アンタが力が出せないのは身体のどっかがおかしいわけでも、不思議なお石様が不機嫌なわけでもねえ）

（お前が、月影信彦って奴が自身の力を嫌悪し、恐怖している。テメエがテメエを拒否してる状態で力が発揮できなくて当然じゃねえか）

果たして、今自分がどのような表情をしているのであろうかと信彦は立ち尽くしたままうっむいてしまう。信彦が自分でも気付こうとしなかった自身へ抱く感情をアンリマユは見抜いていた。

押しとどめ、気付かない振りをして、蓋をした自身の本心。

世紀王として改造されたシャドームーンは宿敵であるブラックサンを倒し、次の創世王となることが全てだった。だが自身の持つ全てを懸けての戦いは、ゴルゴムの創世王が新たな肉体を選別するためだけであったと知り、反旗を翻す。

結果としては創世王をブラックサンと協力し倒すことに成功し、戦いの決着が付いた。

その後、反英霊の魂と一体化するなど訳の分からない肉体となりながらも生き抜いたが、旅を続けていく中である考えに至ってしまった。

自分は、いずれあのような存在へと堕ちてしまうのではないかと。

かつて秋月信彦という人間の全てを奪った憎き存在は、自身と同じ世紀王だった。ならば、自身も同じような考えに至り、あのような悪魔へと変わり果てない保証など、どこにもない。

自分が最も憎む存在へと変貌してしまおうという恐怖。

故に、自分が持つ力を忌み、シャドームーンとなることを極力避け、身体に宿るキングストーンに語りかけるなど以ての外だった。

信彦がシャドームーンとしての力を満足に扱えず、キングストーンの力に振り回されるのは、当然と言えた。

自身を拒絶する者に、自身は決して応えない。

アンリマユが信彦の本心に気付けたのは、彼の一つになっている故だろう。アンリマユと信彦が共有しているのは身体と五感だけではない。月影信彦、しいてはシャドームーンという個体だ。

そのため信彦の心理状態はアンリマユの心へダイレクトに伝わってしまう。まさに一心同体である彼等には、互いに隠し事など出来ないのだ。

（吸血鬼をブチのめしたところで、アンタが自分を嫌っているっつー事実は変わらない。さつき言った通り、ただの八つ当たりだ）

「…そうだ、な」

（お、珍しく素直じゃーん、それじゃついでのその自販機でホットココアでも…ってなんで無糖ブラックなんてもの押しやがるんですかねアンタ）

既に場所を朝に立ち寄った公園へと移り、アンリマユの希望に反し

てブラックコーヒーを煽る信彦。自分の中で彼が悶え苦しむ様子を
感じながら、不思議に思った。

こうまでの確に自分の内側を見られ、荒らされても、気に喰わない
と考えても不快とは思えない。むしろはつきりと自分のを語ったこ
とで自分がどのような心境であるかを理解することが出来た。

旅を初めて数ヶ月。

自分の中に別の魂が宿るといふこの状態が、自然であると考え始め
ていた。

阿呆な発言をする度に自分の痛みを顧みず制裁を加えるという馬
鹿なやり取りも、協会からの追手に迫れ、ゴルゴム以外の組織の怪人
と対峙した時に協力したことも、悪くないと。

「本当に、どうかしている…」

思わず呟いた信彦は、なら自分がどのような目的で旅を続けている
かなどアンリマユはどうに見抜いているはずと考える。

それでも何も言わないのは、信彦本人が口にするのを待っているか
らなのだろう。

後は、信彦の回答次第という事だ。

もし信彦がアンリマユへと伝えた時、どのような反応を示すのかと
考えていた矢先に、あの少年が自分へと駆け寄っていた。

「ハア、ハア、ハア…やっぱり、月影さんだった…奇遇ですね」

「お前…」

膝に手をついて呼吸を整えながら顔を上げた少年：遠野志貴は屈託のない笑顔を浮かべて信彦の名を呼んだ。現在の時刻は夜の10時過ぎ。学生が出歩くような時間ではない。

ここは一般論を振りかざし、適当なことを言っただけで追い返そうとした信彦だったが、ファミレスでカレーライスを食した女の言葉が頭に過る。

『あの吸血鬼を消滅させたのは、遠野志貴です』

ようやく呼吸を整えた少年はちよつとすみません、と断りを入れてから本来の目的であろう自販機の前へと移動しポケットから財布を取り出す。恐らくここまで来る途中で信彦を見かけたことと思わず走ってきたのだろう。

あいつには何がいいか…と小銭を手にしてどの商品を購入するかを迷っている少年は、やはり吸血鬼を殺す力を持つとは思えないような空気を放っている。だが、自分を一瞬でも寒気を感じさせた殺気を放ち、魔眼を持っていることは事実だ。

或いは、彼ならば…

「おい。お前は——」

よし、と商品の選別が決まり、いざ小銭を投入しようとした志貴へと声をかけようとした信彦だったが、彼の言葉が後から響く女性の大

声にかき消されてしまった。

「しーーーーきーーーーっ!!」

「げっ……………」

「…?」

声の聞こえた方へと振り返り、別々の反応を示す志貴と信彦が視界に捉えたのは、女性だった。

月明かりに照らされ煌めく金髪と紅い瞳を持つ、美しい女性…それを台無しにするように頬を膨らませズンズンと歩き志貴の前へと止まる。

「もう、飲み物を買うだけでどれだけの時間を使うつもりなのッ!」

「いやまてアルクエイド。俺が何か買って来るまでベンチから動くなと言ったよな?それに待ち合わせの3時間以上前から待ってた奴が何で3分も耐えられないんだよッ?!」

「だって…また1人の時間を過ごすなんていやだもの…」

「っ…………」

突如として自分達の前に現れた嵐のように志貴へと接近し、腰に手を当てて怒ったと思えば指先を重ねてモジモジと困った顔を浮かべるなど感情をコロコロと変える女性に少年は何やら顔を赤らめて困った反応をしている。

完全に蚊帳の外となった信彦に気が付いた志貴はワザとらしく咳払いをすると、アルクエイドと呼ばれた女性に頼みもしない紹介を始めた。

「アルクエイド、この人は月影信彦さん。俺の……知り合い、かな？」

なぜ疑問系で言うのか、と考えたが自分達の間係を考えれば逆にその方が良いだろう。この街に留まってから偶然とは思えない程の頻度で遭遇はしているが、特段共に時間を費やしたわけではない。

志貴の言う通り、『知り合い』という関係が一番正しい回答だろう。

そして紹介した志貴は、アルクエイドが自分に知人なんていたんだと失礼な言葉を口走るのではないかと推測したが――

彼女の方へと向いた途端に、背筋が凍りつくような殺気を正面から浴びて、そんな下らない考えなど一蹴する破目となった。

彼女が殺意を向ける相手は、他でもない。今し方自分が紹介した人物、月影信彦だ。

彼を見つめる目は、街を徘徊する吸血鬼の僕や、先日倒したネロ・カオスに向けるどれよりも険しく、そして冷たい。

そんな彼女の視線を浴びても何故、信彦が平然としていられるかという疑問は後回しにして、やっと開けることが出来た口で彼女へと尋ねてみる。

「お、おい。月影さんがどうかしたのか？」

だが、志貴の言葉など届かずに、アルクエイドはさらに鋭さを増した目で信彦を睨んでいた。

「アナタ…ナニ？」

その一言は、心臓を射抜いてしまうような冷たさがあった。だが、そんなことで動けなくなる軟な身体ではないと主張するアンリマユは信彦がアルクエイドに向けて貴様こそなんだ？と冷たくあしらうことを期待していた。

だが、当の信彦に動きがまるでない。

（おい、どうしたんだよ。一目惚れか？）

「……………」

信彦にはアンリマユの言葉など聞こえていない。いや、アンリマユの声やその他の音など届かないまでに、信彦へある情報が次々と流れ込んでくる。

それは一体化しているアンリマユには見えない。キングストーンから信彦へと齎されているが、余りにも膨大な量に信彦の処理が追いつかず、次第に頭痛すら発生している。

「お、前は……」

額を抑える信彦は変わらず自分を睨み続ける女性の名を口にした。

その名が何故、志貴が読んだように『アルクエイド』という名称でなかったのかは、信彦自身にも分からない。

気が付けば、信彦はその名を口から漏らしていたのだった。

「……………朱い、月」

次の瞬間、瞳を金色へと染め上げたアルクエイドによって放たれた攻撃が信彦へと迫っていた。

第21話

勘当された家に戻ると決まったその日から、遠野志貴の日常は激変した。

決して悪用しないと恩師に誓った『力』ですれ違った女性を17の肉塊に切り刻み、絶命させてしまった。

しかし死んだはずの女性は生きていて、世間を騒がせている吸血鬼退治を手伝えと言ってきた。

状況が飲み込めないまま女性：真祖と分類される吸血鬼アルクエイド・ブリュンスタッドと行動する羽目となった志貴は体内に666の獣を内包する化け物の来襲に巻き込まれた。

アルクエイドを狙い、一夜で数百人の命を食い尽くした吸血鬼ネロ・カオスという『世界』を殺した。

街に潜伏している吸血鬼がネロ・カオスと別の存在と知った志貴は再度、アルクエイドに協力すると申し入れた：

笑顔で承諾した彼女と共に、吸血鬼を倒す為に：

——この一週間にも満たない短い期間で、志貴は人間社会ではありえない、知ってはならない体験を重ねてきた。もうこれ以上驚くことなど起こりはしないと程に。

だが、そんな認識は間違いであると、志貴がそうであって欲しいと考えていただけだと思い知らされることとなる。

：目の前で起きていることが、今朝見た『他人を楽しそうに殺している夢』と同様に現実であつて欲しくない。

遠野志貴は自分が貧血で倒れていた所を何度も介抱してくれた、無表情だが優しい人だということ以外、月影信彦という人物については何も知らなかった。

彼自身が語った旅の途中で三咲町に用事があつて滞在しているというこ言葉に何の疑いも抱かなかつた。

いや、もしそれが偽りだったとしても、彼が『人間』であるということだけは、信じていたのかもしれない。

アルクエイドが街を徘徊する吸血鬼の僕以上に敵意：殺気とも取れる感情を向けている事に戸惑う時間すらなかつた。

信彦がぼそりと何かを呟いた途端に、アルクエイドはあのネロ・カオス達を切り裂いた爪を彼に振り下ろした。

結果など考える必要などない。あの爪が振り下ろされた後に残るものは、血と肉の塊と化した信彦がバタリと舗装されたばかりの地面へと沈んでいくということだけ。

彼女に何故そんな事をするか尋ねる前に、そうなってしまうはず、だつた。

「なっ…?!」

志貴はそんな声を上げることしか出来ない。

彼が今まで吸血鬼との戦いで学んだことなどかけらも通用しない、理解が追いつかない光景が目の前で起こっていた。

信彦はアルクエイドの爪を頭上に翳した手首で受け止めていたのだ。

それだけではない。

いつの間にか手首から拳まで銀と黒の鎧で包まれており、信彦の顔にはまるで手術痕のような傷がくつきりと浮かび、微かな光を放っていた。

「っ…いやっぱり、アナタは…!」
「チイツ…!」

アルクエイドが自分の攻撃を受け止めた相手を予想通りの存在だと確信し、さらに腕に力を込めて切り裂こうとするが、信彦は迫った危機から脱する為に力を解放する。

腹部へ緑色に輝く宝玉を宿したベルトを出現させ、そこから眩い輝きを放つと同時に信彦の身体に変化が生じた。

手首を覆っていた装甲が上腕、肩、胸、胴体、四肢へと広がり、信彦の身体を包んでいく。

最後に顔の傷痕を隠すように装着された仮面の複眼が緑色に強く発光。

シャドームーンへと姿を変えた信彦はアルクエイドの腕を振り払い後方へと跳び着地、街灯に照らされた異形の姿に、志貴は言葉を忘れて信彦の姿にただ、驚くしかなかった。

「月影…さん？」

「下がって志貴。アイツは貴方達人間にとって吸血鬼とは違う意味で天敵よ」

「な、何を言ってるんだよアルクエイド…月影さんが、人間の天敵…？」

信彦同様に距離を置きながら志貴の前に立ち、敵として認識した相手に隙を見せないよう振り返ることなく、アルクエイドはそう告げた。彼女が告げる天敵という言葉に、志貴は今の姿へと変わり果てた信彦と自分が対峙した敵の姿が重なるように脳裏を駆ける。

自分の知り合いが、あんな連中と同類だと言うのか。人間を、ただそこにいたという理由だけで喰らい、娯楽の為に吸血鬼へと変えてしまふ奴らと。

未だに信じられずにいる志貴へアルクエイドは畳み掛けるように、信彦がかつて身を置いていた『組織』の名を告げた。

「この前志貴が教えてくれたわね。数ヶ月この国…いえ、世界全体が怪物達…『ゴルゴム』に支配されそうになったって。その親玉が、コ

イツ」

「…っ!？」

「どうして志貴に近付いたかは知らないけど、志貴が考えているような相手ではないわ。地球を支配するなんて、ふざけたことを考えているんだから」

絶句とは、今の自分のような姿を指すのだろう。そう自覚できる程に志貴は彼女が言い伝えたことによつて何を言つていいのか、その意味をどう受け止めればいいのか分からないでいた。

世情に関心を持たない志貴ですらゴルゴムの名前に対して嫌悪感を抱いている。日本、そして世界に未曾有の危機へと陥れた悪の組織だ。

(月影さんが、その親玉…?)

アルクエイドは嘘が付ける性格ではないと、この数日間で分かつている志貴は戸惑うその瞳を信彦へと向ける。アルクエイドの言葉が耳に届いていた信彦は当然、志貴の視線と表情など読み取っている。

その上で、アルクエイドの放つた言葉を否定していない。

つまりは、肯定だ。

「…目覚めた時にはゴルゴムは滅んだつて聞いて安心していただけど、生きていたなんてね。やっぱりその『石』ごと葬らなきゃならぬのかしら?」

ビキビキと鋭くした爪の硬度と切れ味を底上げしたアルクエイドの声は、志貴を見つけた時に見せたような無邪気さは一切なく、どこまでも低く、冷たい。

(おい、理由は知らねーけどあの姉ちゃんガチで殺しに来てるぜ)
「……………」

(できりやあ、今回ばかりは無視しないでくれると助かんだけどなあ——)

「お前は…」

シャドームーンへ姿を変えてから一言も発しない信彦へ苦言を呈しようとしたアンリマユであったが、信彦は接近するアルクエイドへ向け尋ねた。その間も、アルクエイドは歩む速度を緩めないまま信彦へと接近する。

「お前は…あの時と同じ存在なのか？」

距離はおよそ2メートル。互いに相手へ一撃を叩き込むには十分過ぎる間合いまで接近したアルクエイドはゆつくりと口を開く。

「この身がどの器だろうと関係なからう。星へ禍災をもたらす貴様ら世紀王が滅するのは、当然の報いだ」

一瞬、アルクエイドではない『誰か』の側面が現れた直後に放たれた攻撃は信彦の胸部へと叩き込まれた。

「ガアッ!？」

貫かれるような衝撃を受け、呻く信彦は路面をガリガリと抉りながら吹き飛んでいく。胸に受けた攻撃と、背中に走る路面を削った摩擦により2重の痛みが襲う信彦へアルクエイドは月明かりに反射する金髪を揺らしながら再び近づいていく。

(痛ってえ…加減なしだわなあ。女。どんだけ嫌な目に合わせたんだ

よ前の世紀王は。とにかく早く立っておくれよ、残り時間は……

「……………」

(おい、聞いてんのか?)

「……………」

(…アンタ、まさか)

シャドームーンでいられる制限時間を告げても焦りも見せず沈黙する信彦の状態を見て、アンリマユは予てから彼が望んでいた事をこの場で果たそうとしているのではないかと再度呼び掛けた。

(おい!とつと立ちやがれっ!いくらアンタが頑丈だろうと何度もさっきの攻撃受けたら時間をまたずに死んじまうぞッ!!)

「それでも…:かまわん」

仰向けに倒れ、月を見上げる信彦は力無く呟いた。

ゴルゴムとの戦いを終えた信彦は、アンリマユに指摘されたように自身の力へ嫌悪と恐怖を抱き旅を続けてきた。その道中、様々な相手からその命を狙われてきたが信彦には取るに足らない相手ばかりであり、どのような相手だったかも覚えていない。

だが、彼等が口にした言葉だけが、どうしても頭にこびり付いてしまっていた。

『お前は許されない存在だ』

神の意思だと言い訳する者も、自分達の認識を超えると狭い視野を持つ者も、揃って信彦に向ける言葉がそれであった。負け犬の遠吠え

だとアンリマユは笑っていたが、信彦が否定することが出来ず、徐々にその言葉は大きな枷へと変わっていった。

そして旅の行く先々で未だ残る戦いの爪痕。ゴルゴムの一斉蜂起によって未だ復興の目途が立つ気配のない土地も少なからずあり、そのような場所に訪れた時、住まう人々からの拭いきれない悲しみとゴルゴムに対する恨みが、まるで自分への怨嗟のようにも聞こえてしまう。

罪の意識に苛んでいた為なのかは、分からない。だが、それだけの事を重ねてきたという自覚だけは確実にあった。

次々と積み上がっていく負の念に縛られていく信彦はある結論に至ってしまった。

生きていることが許されない存在だというのなら、この身は消えてなくなるべきだと。

だがこの身を砕く相手ぐらゐは選んでおきたい。宿敵は絶対に自分を殺すという手段など取るはずもなく、自身を悪であると断定しながら身体に宿るキングストーンを狙う教会や協会の連中などは御免蒙りたい。

ならば、彼女のようにキングストーンごと滅するというのならば丁度いい。宿敵ならば自分が地球の支配者となるなどと愚かな考えに至るはずもなく、キングストーンの一つが消えてしまえば、新たな創世王を生み出す悲しき運命を背負う者など、今後現れない。

全てをここで終わらせる。

そう考える頃には、真祖の吸血鬼が自分を見下ろしており、再び振り上げた爪を信彦の頭部目がけて振り下ろしていたのであった。

「随分とまあ、勝手に結論を出してくれたもんだなア死にたがり」

「え…?」

(な、に…?)

その驚きは、止めを刺したと考えたアルクエイドと、確実に死んだと思つた信彦によるものだった。

「前々からそうじゃねえかなとは思つたし、いずれは打ち明けると期待してたんだが、土壇場になるまで明かさねえとはねえ…寂しすぎて涙がでああ」

「何、それ…何時の間にそんなものを…?」

先程と全く異なる口調にも勿論だが、アルクエイドは吹き飛ばされ

その後、微動だにしなかった信彦が自分の攻撃を受け止めた武器：獣の牙を模したような黒く、歪な短剣が絡め取るように爪を受け止めており、さらに力を込めることも、引き離すことも出来ずにいることに驚愕する。

(アヴェンジャー…貴様！)

「望んだ結果を迎えようとしたところ悪いんだけどよ。俺、アンタみたいな臆病者と心中なんて御免だわ」

徐々に身体を起こし、アルクエイドの攻撃を受け止めた短剣を反対の手に握る信彦…否、身体の主導権を奪ったアンリマユは漆黒となった複眼をアルクエイドへと向ける。

突然の変貌ぶりに寒気を感じたアルクエイドは伸ばした爪を瞬時に引込め、後方へと跳躍する。着地すると同時に敵も立ち上がり、さらに変化が生じていた。

「何か意味を見出して、その結果が死ぬってんなら、まあ文句はあつてもご一緒するけどよ。今のアンタは逃避の為に死のうとしてる。そんなお粗末なことに巻き込まれたくはないね俺は」

(……………)

「ま、今は黙ってくれてかまわねえよ。話はこの場を切り抜けたあとでだな。話をしてくれればだけだよ」

誰に話しているかは分からないアンリマユの身体に、次々と模様が走るように浮かんでいく。それは文字のようにも、獣のようにも見えただ。

「選手交代だあ、真祖さん！」

「お付き合い願うぜ…っても、あと90秒ねえけどなッ!!」

身体を屈め、両手に持った短剣を逆手に持ったアンリマユはアルクエイドと距離を詰める為に地を蹴る。

その姿は地を疾走する狼のようだった。

第22話

身体の主導権をアンリマユに握られたことで、精神だけの状態となった月影信彦の頭にある記憶が流れ始めた。

拒絶していたキングストーンから流される、蓄積されたはつきりとした記憶であった。

遙か昔の事。

自身の肉体を失い、巨大な心臓のような姿となったゴルゴムの支配者『創世王』は自身が所持する2つのキングストーンのうち、緑色に輝く月のキングストーンを核とし、仮初の肉体を生み出した。

だがその身体には自分で意思や感情など持たず、文字通り創世王の操り人形に過ぎない個体だ。

生み出した理由は、実験のため。

ゴルゴムは5万年に一度、新たな創世王が生まれた際に文明を破壊、地球を支配するがその後再度人類が発展する際は陰ながらの支配のみであり、一部を除いて人類や地球の環境には干渉をしなかった。

それは創世王が2人の世紀王を戦わせ、自分に相応しい新たな肉体を作り出すまでの戯れであるがそれ以外にも大きな理由がある。

惑星が持つ安全装置である『抑止力』の出現を警戒していたのだ。

人類の破滅回避の祈りである『アラヤ』と星そのものが生命延長の祈りである『ガイア』

世界を滅ぼそうとする要因が出現すると同時に生まれ、要因を消滅させる最大のカウンターであり、絶対である防衛本能。

いつ現れるかも分からない難敵に討たれぬ為に創世王は自然や人類そのものを滅ぼすことはなかった。だが人類が数を増やし、ゴルゴムという脅威を忘れて生きていく様が気に喰わない創世王は疑似型の世紀王に破壊活動を命じ、敢えて抑止力を出現させようと画策。

疑似型の世紀王が抑止力に敗れたとしてもキングストーンだけを回収し、自分は鳴りを潜めれば本体には被害は及ばない。そして抑止力の存在を垣間見ること対策が、あわよくば抑止力すら自分の力の一端として取り込み、地球上でゴルゴム以外の生命体を根絶やしすると企んだのだ。

だが創世王の目論みは外れ、どちらの抑止力にも属さない者が疑似世紀王の前に現れた。

それこそが当時の月世界の支配者であり『真祖』の原型となる生命体、『朱い月』だった。

地球を守るためという名目で疑似世紀王と対峙した朱い月であったが、本心を言えばいずれは自分の領地となる地球を荒らす輩を倒す為ではあるが、それ以上にゴルゴムが月の力を秘めた神秘キングストーンを所持していることが許せず奪うつもりだったらしい。

疑似世紀王が手始めに1000人単位の人間が過ごしていた村と周囲数キロの森を焼き払った直後、空から落下する朱い月は洗礼としてドロップキックを背中へと叩き込む。

地面を削りながら吹き飛んでいく疑似世紀王の視線から相手を確認した創世王は自分へ戦いを挑むとはいいい度胸だと応戦を始め、戦いは日が7度昇り、7度沈むまで続けられた。

その間朱い月は周囲数キロ範囲での結界を展開し、被害が及ばないようにしていたが結界内部は大地全てが崩壊したどころかその地に眠る霊脈すらズタズタに引き裂かれてしまう程の被害を蒙ってしまふ。

戦いの内容は信彦が確認する限り、最初こそは疑似世紀王はシャドービームのような光線と、朱い月が腕を振るうだけで生じた衝撃波の応酬が繰り返されていたがそんなことは一日どころか10分持たず、己の拳をぶつけ合うだけとなっていた。

双方一切の躊躇のない必殺の一撃を打ち合い、防衛などせずダメージを受けてしまっているがただの器に過ぎない疑似世紀王は痛みと疲労を知らず、核のキングストーンが常に全身へ力を行き渡らせている。対する朱い月はダメージを受けても常時月から送信される魔力で回復を続けていた。

攻撃を受けた直後に完全回復する戦いは永遠に続くかと思われたが、突如疑似世紀王の動きがピタリと止まってしまふ。その動きに警戒した朱い月も攻撃を止め、相手の出方を伺っていたが突如、水を被った泥人形のように疑似創世王の肉体が崩壊。残った緑色の宝玉だけが結界を突き破り、彼方へと跳んで行ってしまった。

命じられたまま戦い続けていた疑似世紀王：キングストーンはこれ以上戦い続けても抑止力は出現しないと踏んだ創世王に帰還を命じられたようだ。だが、朱い月は納得がいかなかった。いや、恨みすら抱いているように血が滲みでるまで拳を握りしめ、その怒気だけで足元が陥没するほどである。

全力で戦った相手は力の源であるキングストーンを1つだけしか持っていなかっただけでなく、本体である創世王の分身どころか使い魔ですらすぎない傀儡だったのだ。

月の王である自分を弄び、愚弄されたと考えた朱い月はキングストーンを持つ者に対し決して晴れるこのない怨恨を抱くこととなる。

：もしこの出来事が後に他の真祖へ伝えられ、キングストーンを持つ者：世紀王は排除される存在と扱われているのであれば納得がいく。

地球の分身、精霊に近い存在である真祖は地球へ害を及ぼそうとするゴルゴムは敵対する対象であり、そこに刷り込みのように朱い月の創世王や世紀王へ抱く憎しみを植え付けられていたとしたら、アルクエイドと呼ばれている真祖が襲ってきても不思議ではない。

創世王が遺した負の遺産は、世代を越えて直接関わりを持たない者に対しても及んでいる。

信彦ではどうしても拭いきれない深い溝。

それは、真祖に限ったことではない。

過去に文明を破壊された者。逆らって命を落とした者。
その数は決して計り知れない。

(キングストーンを持つ者が命を落とすことで恨む者達の気が晴れる
のならば…)

守り、共にいる人々がいるアイツと違い、何も背負うものがない自分には相応しい末路なのかもしれない。

だが、同居人は認めなかった。

「オラオラアッ！逃げてばっかじゃつまんねえ姉ちゃんツ！！こちらから時間がねえんだからよ！！」

「…ッ！！」

複眼が漆黒に染まり、銀色の装甲に黒い刺青が刻まれたシャドームーンは両手に持った短剣を乱雑に振るっていた。その太刀筋には型というものはまるでなく、首や胴体を定めて狙ってる節すらない。攻撃を凌いだ直後に姿を消したと思っただら意識を向けていない方へと既に移動し、再び乱撃を繰り返す…

故に次の行動が全く読めず、アルクエイドは下がる一方であった。それにアルクエイドが爪で攻撃を加えようとしても歪な剣に爪をからめ捕らめとり、相手はそのままへし折ろうとまで考えている。元々は相手の剣を破壊することを前提にした武器のようだが、本来アルクエイドの爪を破壊しようとするれば逆に短剣が砕け散ってしまうだろう。

だが、短剣はキングストーンの力により精製され、担い手となつて

いるシャドームーンの手も重なり、アルクエイドの爪だけでなくそのまま腕すら砕きかねない威力を持っているだろう。

今アルクエイドにできることは、彼が自身で宣言した限界時間：90秒が経過するまで凌ぎ続けることしか出来ないでいた。回避に徹し、しきりに公園の中央にある時計塔へと意識を向けながら、アルクエイドは自分への猛攻を続けるシャドームーンへ違和感を覚え始める。

（雰囲気さつきとはまるで違う…二重人格？違う、まるで魂そのものが入れ替わったような…）

本性を隠していたという説も捨てきれないが、それであれば最初に自分から攻撃を受け、姿を現した際に明らかになっているはず。推測するアルクエイドの視界の中で獲物を狩る野獣のように迫るシャドームーンの手腕から、緑色のエネルギーが火花のように弾け始めていた。

「く…こんなところで！」

（占めた…！）

舌打ちと共に動きを止めたシャドームーンに対し、アルクエイドは視線だけを時計塔へと向けた。時計の秒針はシャドームーンが告げた時間から1秒以上が経過している。

短剣を振り上げたまま身体を震わす敵に対しアルクエイドは爪を伸ばした右腕を引き、シャドームーンの胴体へと狙いを定める。突き立てる点は腹部のベルトに宿るキングストーン。

これを砕けば世紀王は確実に息絶え、後に同じ存在が現れることは無い…

自分が知り得る、最悪にして最低な存在の命はここで潰える。
アルクエイドは自分の内に知らず育った世紀王に対する憎悪と共に爪を突き立てた…

「なあんちやって」

あと数センチでベルトの中央にアルクエイドの爪が届こうとした刹那、彼女の爪はシャドームーンが握る短剣に阻まれてしまった。強引に押し進めようとも、爪と短剣が擦れあうガチガチという耳触りな音がアルクエイドの耳に響く。

「どう…して?もうとっくに時間が」

「悪いね、どーにも時間を間違えたらしくくてね…」

「本当はあと10秒あったんだわ」

それは言った通りに読み間違えたのか、アルクエイドを欺くためのブラフであつたのかは定かではない。

だが、シャドームーンがアルクエイドの攻撃を阻み、空いている手から短剣を放り投げ拳を放つのに、1秒もいらぬ。

「オラアツ!!」

身の危険を察知したアルクエイドは急ぎ爪を引込め両腕を交差させるという完全な防御の体勢となる。咄嗟にとつた行動が功を成したのか、シャドームーンの攻撃に防御だけは間に合った。しかしその衝撃は相殺しきれず、アルクエイドはボールの如く地面を数度跳ねながら吹き飛んでしまう。

「アルクエイドっ?!」

今まで事態がまるで飲み込めず、傍観するしかできなかった遠野志貴はアルクエイドの名を叫び、急ぎ彼女が倒れている場所へと駆けていく。その姿を目で追うシャドームーンは深く息を吐くと手にした短刀をクルクルと回転させながら銀と黒の装甲を排除。月影信彦の姿へと戻すと志貴に続きアルクエイドの元へと歩んでいった。

「しっかりしろアルクエイド、大丈夫かツ?!」

「し…き…?」

倒れていたアルクエイドを抱き起し、懸命に呼びかける志貴の声にアルクエイドは意識を朦朧とさせながらもゆっくりと自分を支える少年の名を口にした。無事であることに安堵する少年は彼女をゆっくりと寝かせると、遠野の家に戻る日からずっと持ち歩くこととなつたナイフを取り出し、自分達に向かい接近する信彦…アンリマユの方

へと振り返る。

武器を手にはしているが、その表情は迷いが見受けられた。

志貴はまだ、自分を何度も助けてくれた人物をアルクエイドが言う『人類の天敵』として見る事が出来ないからだろう。

「まあ落ち着けよ志貴っち。こいつは念のために持っているだけであって、そっちの姉ちゃんもやりあうつもりはねえよ」

「え……？」

眼鏡を外すかどうかまで悩んでいた志貴にとつてはアンリマユの言葉は意外だった。志貴が余程驚いた顔をしていたのか、口元を歪ませるアンリマユは短剣を背後へと投げ捨て、一度地面へと落下した直後に役割を果たした歪な刃物は消滅してしまう。

「そもそも売られた喧嘩に応えちまったただけだしね。それに互いにもうスツカスカのはずだからさっきので試合終了ってわけさ」

「互いに……？アルクエイドッ!？」

アンリマユの言葉に引つかかった志貴は急ぎアルクエイドへと目を向けると、真祖の女性は苦しそうに呼吸を乱している。ナイフを放り、再度彼女の背中に手を回して丁寧に起こす志貴は金色から普段の赤い色へと戻った瞳で作り笑いを浮かべるアルクエイドの弱い弱い声に耳を傾けた。

「アハハ……ごめ、んね……力を使い過ぎちゃったみたい……」

「この、バカ女。心配させんなよ」

合わせて志貴も無理やり笑いながら答える様子を見て、やれやれと後頭部をガシガシかき回すアンリマユは踵を返しその場を後にしようとするが、気が付いた志貴はアルクエイドを支えたまま自身が持つ疑問を問いただす為に大声で尋ねた。

「あの……ッ！彼方は……俺の知ってる月影さんなんですかッ!!」

「志貴……」

志貴の不安な表情を見て、アルクエイドもゆっくりと先ほどまで殺し合いを行っていた相手の背中を見つめる。戦う前では背筋を伸ばし、全く隙のない姿勢で佇んでいたが今は猫背でどこか頼りない。だ

が、冷たい印象だけは削がれていた。

「あー…悪いけどその質問は後日改めて『本人』から聞いてくんない？俺、疲れて仕方ないんだわ」

アンリマユは振り返ることなく、手をヒラヒラと振って今度こそ公園を後にしてしまう。

残された志貴はアルクエイドをベンチへと座らせ、今度こそ飲み物を購入して彼女へと手渡す。が、プルタブの開け方が分からなかったようであり代わりに封を切って貰うと飲み物を改めて受け取り、一口含んだ後に最初に出た言葉が…

「なんつなのよアイツツ!!こっちは真面目に殺そうとしてたのに嘘つくなんて最低ツ!!」

「いや、殺されそうだからこそじゃないのか?」

「ちよつとお、何でアイツの肩を持つようなことを言うのよつ!」

むーつと頬を膨らませるアルクエイドを落ち着かせ、なぜ初対面のはずの信彦にそこまで攻撃的になるのかを尋ねてみる志貴であった。

「…理由は分からないけど、とにかく憎かったの。それだけ」

「それだけってお前…」

「でも人間だってそうでしょ?吸血鬼や怪人っていうだけで怖がるし、憎む。それと一緒だわ」

「まあ、そうかもしれないけど、少なくともあの人は違う気がするんだけどな」

「えー、どうしてよ?」

そう言われてしまうと志貴も回答に困ってしまう。月影信彦という人物もここ最近知り合った人物であり、シャドームーンへと姿を変えられることもゴルゴムであったことも知ったのは今日が初めてだ。

あの普段とは違った性格と口調も同様に、彼という存在に対する謎は深まるばかりだ。

「…それでも、俺はあの人がお前の言うように人間の天敵とは思えないんだ。ま、お前風に言うなら理由は分からないけど、つてとこだな」
「それって、褒めてるの？」

どこか納得の行かないアルクエイドの顔を見て、ようやくいつも通りの彼女に戻ったと安心した志貴は最後にアンリマユが言った通りに、後日改めて話を聞くようにという言葉を思い出す。

(ということとは、まだこの街にいるってことなのか…?)

一方、公園を離れたアンリマユは段々と歩く速度を落とし、近くに立っている電柱へと背中を当て、コートを摩擦させながらゆつくりと腰を下ろしていく。

「あー…やばかったマジでやばかった…つか真祖がいるなんて聞いてねえぞ。あんのカレー女、重要な情報言わずにいやがって…」

(アヴェンジャー…)

「まああちらさんも理由は知らんが大分力が弱まったおかげで助かったけどもなあ。いやあ俺様名演技！」

(聞けアヴェンジャー)

「んだよ、勝利の余韻…ってのとは違うな。こちとら生き残った喜びに浸ってたんだ。邪魔すんなよ」

(貴様の都合などどうでもいい。なぜ、あの時邪魔をした?)

「邪魔、ねえ…」

頭に響く信彦の声はいつになく不機嫌だ。勝手に戦った、というわけではないだろう。身体の主導権を奪い、信彦の望み通りに死なせない

かった、命を終わらせるつもりだったのだろうか…

「まー俺は自分の由縁があつからあんまどうこういいたかないけどよ」

「自分の命を勝手に低く値踏みしてんじやねえよ糞ガキ」

(…っ！)

その声はこれまでの旅の中で聞いたことも無い、低く冷たいものだった。

「自分が死ねば相手の気が晴れるだあ？今まで黙ってみてりやあんな脇役連中の言葉を真に受けやがって…それでもアンタ組織の座長張ってたのかよ」

(何を…)

「いいか、外野から向けられる悪意なんてのは受け入れるもんであつても縛られるもんじやねえんだよ。ああ、自分はこう思われてるのかぐらいに考えとけ」
(……………)

普段ならば下らんの一言で片づけられた同居人の言葉だが、今に限り信彦を黙らせるには十分な効果があつた。

信彦の記憶をアンリマユが共有したように、信彦もアンリマユの過去に触れていた。

だが、アンリマユには人間であつた記憶というものは無いに等しい。

彼が唯一覚えているのは、とある一族の平凡な青年であつたことと、『悪であれ』という押し付けられた人々の負の感情のみ。人々の勝

手な祈りにより、この世全ての悪を背負う存在へと成り果てた反英
霊。

それがアンリマユという存在だ。

人々の祈りという捏造された呪いによって人で『そういった存在』
となつてしまい、この世全ての悪を背負わされたアンリマユから見れ
ば、信彦へ向けられる悪意など塵芥に過ぎないのかも知れない。

「言つておくが別に俺が昔どうだったとか、アンタの方がましだとか、
そんな事をいいたいんじゃないからな」

(……………)

「アンタが見た通り、もう昔過ぎて自分がどういった理由でああなつ
たかなんてのは覚えてねえし、アンタには関係のない話だ」

だがよと言葉を区切った

「俺が言いたいのは、それだけの事を言われてお前さんが選んだ手段
が『自殺』つてのが気に喰わねえだけだ」

(…何が…言いたい?)

「ようするによ、どんだけの悪意をぶつけられようがアンタと俺は今
を生きてる。だつてのに最終的には言われるがままに死にますなん
て、勿体なくて仕方ねえよ」

本来なら大聖杯の消滅と共に、殻で得たふぎけた人格ごと消滅する
はずだったアンリマユは様々な経由があろうと今を生きている。信
彦と共に。

「悪意上等！つてよ。奴らの身勝手な都合に逆らつてこつちもとこと
ん身勝手に生き抜いてやろうつて気にならないかい？」

(俺は…)

「まあそう簡単に心変わりはないだろうさ。あと…」

「少なくとも、アンタに生きて欲しいって望んでいる変わり者が2人はいるって事は覚えておいて欲しいね」

「そうすりゃちよいとは生きる理由にもなるんじゃないかね？」

信彦が思い浮かべたのは、死んでも変わらず自分を助けようとした宿敵と、運命に抗い生きる道を選んだ銀髪の少女。

2人の顔を思い浮かべた信彦は押し掛かっていたように重く感じたものが、少し軽くなったように思えた。

（あんなれ〜？思った以上に単純だねあんた。んじや今後はあの2人の名前だせば精神的に落ち着くってか〜？）

「黙れ。ん…？」

真面目な口調から一転し、普段通りにからかうアンリマユの軽口に反論する信彦はいつの間にか身体の主導権を取り戻していた。頭の中で、相も変わらず寝そべっている姿が容易に想像できた。

（つーか疲れた〜。今夜の食事は甘いものを所望するぜ。何せ頑張ったんだからな！）

「…いいだろう。そのくらいは」

（マジで!? いや〜たまには頑張ってみるもんだね、しおらしく素でへこんだアンタも見れてたしこんな事滅多にないからなあ。マジで役得ってかんじだわヒヤハハ!!）

「……………」

この時、信彦の額に微かながら青筋が立ってしまったことにアンリマユは気付けなかった。その為、信彦が以前から目を付けていた『紅洲宴歳館・泰山 三咲店』の暖簾を潜った時にアンリマユはようやく己の危機を察することが出来た。

(ちよっ!?!約束が違うじゃねえかッ!!死ぬッ!もう匂いだけで死んでしまうってッ!?)

「安心しろ。食後に杏仁豆腐くらいは注文してやる」

(いやいやその頃にはもう味覚が無くなって味なんて——)

「激辛麻婆の定食。辛さは…増して頼む」

数分後。店内では信彦以外には聞こえない絶叫が木霊するのであった。

(いんやーあの時は死ぬかと思ったわ色々な意味で…けど)

スーパーで付かず離れずといった絶妙な距離を保ったまま志貴への買い物が続いている信彦とアルクエイドの姿を見て、アンリマユは変われば変わるものと考えたが…

「ちよつとノブヒコツ!!私と同じ桃缶買わないでよツ!!」

「別に貴様に合わせた訳ではない。他と比べて手頃だったただけだ」

「何よっ!!」

「ふん…」

(まあ、手を繋ぐほどの仲になったらそれはそれで不気味だけどな)

殺し合うような関係よりは遥かに健全であろう。アルクエイドが抱く憎しみは大きく削がれ、信彦は以前のような捨て鉢ではない。ここまで至るまでは他にも乗り越えてきた問題が多数あるが、それは追って思い出すとしよう。

まずは買い物を終えた後、無事に遠野家へと入れるかどうかは2人にとって、大きな問題だ。

そのような下らない問題ならば、いつでも迎えたものだとはくそ笑むアンリマユの精神は眠りにつくことに決めた。

第23話

「トアッ!!」

「グっ…オオオオオオオッ!?!」

間桐光太郎…仮面ライダーBLACK RXが握るリボルケインが怪魔獣人ガイナガモスの腹部へと深々と突き刺さる。

「ムウンッ!!」

光太郎はリボルケインを握る手へさらに力を加え、ガイナガモスの全身に光のエネルギーを注ぎ込んでいく。ガイナガモスの体内で飽和状態となったエネルギーが火花となって貫かれた背中と関節部から漏れ始めた。

「ば、バカな…この俺がアアアアアアッ!?!」

ガイナガモスからリボルケインを一気に引き抜き、断末魔の声を背にして光太郎は大きく光の杖を頭上で旋回。

両手首を頭上で交差し、左手をベルト サンライザーへ添え、リボルケインを握る右腕を振り払う。

残心の構えを取ったと同時に地へ沈んだガイナガモスは大爆発の仲へ消えるのであった。

「光太郎!」

RXからBLACKへ。そして人間の姿へと戻った光太郎は自分の名を呼び、アクロバッターを駆って接近するメデューサへと目を向ける。戦闘装束である彼女に怪我一つない事に安心しながら光太郎は笑顔で手を振って見せる。

「俺は平気だよ。それより、衛宮くんたちは?」

「はい、メデイアが用意してくれた血清のおかげで無事のようにです」

「サクラノ暗示デシロウ以外ノ者達ハ一連ノ記憶ハ忘レルダロウ」

アクロバッターから飛び降り、自分の隣へと着地したメデューサの報告に胸を撫で下ろす光太郎にアクロバッターは赤い目を点滅させて補足する。今回事件に巻き込まれてしまった義弟である間桐慎二の同級生達：衛宮士郎と光太郎に取っては初対面である3人の少女達はガイナガモスが養殖していた毒蛾ガイナンの放った毒に犯されていた。

現代では絶滅してしまった毒蛾を甦えらせたクライシス帝国はその毒は人の細胞を書き換えて怪人へと変えてしまう恐ろしい効果に目をつけ全人類を怪人化を目論んでいた。しかし駆けつけた慎二と桜、武の機転でガイナンは全て全滅。そして一匹だけ捕獲したガイナンを基にしてメデイアが解毒剤を即座に作り上げることで毒を受けた士郎達は事なきを得たのだった。

「しかしすごいな…捕まえたガイナンからすぐ解毒剤を作り出すなんて。クライシスが養殖するまで地球上にはいなかったんだろ？」

「昔取った杵柄…らしいのですが」

どうやらメデイアが神話の時代：英霊となる以前に毒を研究していた際にガイナンについて目にしていて、ということらしい。本人は若気の至りということとそれ以上口にすることはなかった。

「でも、みんな無事でよかった」

「光太郎…？」

士郎達の生存に安心する光太郎の表情は優れない。今回の戦いにおいても、光太郎はその最中に幾度が敵の攻撃を受けると一瞬だが意識を別に向けていたのではないかと考えたメデューサは、考えられる予感を光太郎本人へと尋ねた。

「光太郎…また、見えたのですか」

「…ああ」

前回のガンガデインとの戦いで光太郎の頭に浮かぶ謎のイメージ。その時は揺らめく炎の中にいる見知らぬ戦士だったが、今回はまた別の戦士だった。

荒れ狂う豪雨の中で静かに立つ赤い目を持つ戦士。自らに降り注ぐ雨などものともしない身を裂く程の激情に駆られていると光太郎には伝わってきた。

「…これが、一体何を暗示しているのかは分からない。でも、俺は向き合うつもりだよ。それがなんであろうと」

「それでこそ、光太郎ですね」

静かに微笑むメデューサは、相も変わらず前向きな光太郎へ頷くと、自走するライドロンから降りて、こちらへと駆け寄って来る慎二達へと目を向けるのであった。

クライス要塞

「ば、バカな…最強の怪魔獣人ガイナガモスが…」

クライシス帝国4隊長の1人、ボスガンは自身が率いる怪魔獣人が敗れ去る光景にそんな言葉が自然と小さな口から漏れてしまう。

そして浮かんでくるのは幾つもの疑問。クライシスの宿敵であるRXがなぜ秘密裏に進めていたガイナンの生息する地へとやってこられたのか。なぜ、クライシスでも1週間という時間をかけてようやく精製できた解毒剤をああも簡単に手にすることが出来たのか。

だがボスガンは悩む時間などなく、司令官であるジャーク將軍から懲罰を言い渡されてしまうのであった。

「ボスガンよ…そちが自身で言った通り、作戦に失敗した暁には…」
「承知、しております…」

作戦が失敗した場合には立案者が自ら罰を受ける。ジャーク将軍の言葉を最後まで待たず、ボスガンは自ら懲罰室へと足を運んでいく。

指令室を抜け、懲罰室までの通路を歩いていくボスガンとは逆の通路で様子を伺っているゲドリアンは悟られぬ程度に同じ隊長であるボスガンを高い声で嘲笑するが、隣で壁に背を預け愛銃の調子を確認めるガテゾーンは小柄の同僚に対してその悪癖に警告する。

「お前さんだつて人の事を笑えんぜ。明日は我が身つて奴だ」

「お、俺の場合はあの訳の分からねえ仮面ライダーが乱入してこなきゃ絶対にRXの野郎を倒せていたはずなんだッ！それもジャーク将軍は汲んで頂いたからこそ俺は罰を受けてねえんだ!!」

本当なら罰を受けていたのだろうか、その作戦時にゲドリアンは勝手に持ち出したガテゾーンの私物である高性能中継カメラを破壊してしまい、怒りに駆られたガテゾーンがゲドリアンを三日三晩追いかけて回すという珍事が発生し、ジャーク将軍が仲裁に入った為にあやふやになったのが事実である。

もし次にゲドリアンが失敗したのなら…と、この先にありもしない罰などガテゾーンは考える必要ないだろうと思いを中断する。

RXは自分の造り上げる最強の怪魔ロボットに今度こそ命を絶たれるのだから。

「大見得を切った割には、大した結果は残せなかったようねボスガンは」

「マリバロン。設計は終わったのか？」

「ええ。彼方が提供してくれたデータのおかげでね…」

コツコツと靴音を通路に響かせ、ガテゾーンの前で立ち止まった諜

報参謀マリバロンはガテゾーンの頭部を指先で怪しくもゆつくりと撫でながらガテゾーンの質問へと答えた。

「それに、ボスガンはガイナンの毒をしつかりと保管してくれていたようだし…使わない手はないわ」

「おーおー、恐ろしい女だねお前さんは…」

「見ていなさい。私の完璧な作戦を」

「……………」

2人だけの空気となり、完全に蚊帳の外となったゲドリアンは足音を立てずにその場を去るのであった。

穂群学園

(俺は、何をしていったんだ…)

弓道部の射場から十数メートル先にある的を睨んだまま、衛宮士郎は数日前に起こしてしまった自らの失態を心中で嘆いていた。

始まりは好奇心に駆られた自称冬木の黒豹…もとい、同級生で陸上部所属である蒔村楓が妙な格好をした連中が付近の洞窟に出入りしているという噂を聞きつけ、そこに向かうと宣言したことがきっかけだ。

楓を止めようとも無駄と悟った氷室鐘と三枝由紀香が仕方なく同行していたところを発見。女子だけでは危険だと付いて行った矢先に怪人と遭遇してしまう。

怯える楓達——鐘はいつも通りだったようだが——を助けるため

に躊躇なく投影魔術で武器を幻想させた士郎は夫婦剣を手にしガイナガモスへと立ち向かったが敢え無く敗北。

さらには洞窟内で無数のガイナンの毒に犯され、危うく怪人となるところであった。

3人の知人が苦しみ、人外へと堕ちていく姿を見て絶望する士郎。全ての人を助けられる正義の味方となる夢と共にここで朽ちるのかと諦めかけた時、その絶望を洞窟の壁と共に打ち砕いた者達が助けに駆けつける。

壁を突き破り現れたライドロンの運転席から防護マスクを着用して自分達に駆け寄ってくる慎二と桜：そしてライドロンを追って光太郎が普段使用しているバイクに搭乗した武によって保護された士郎達は洞窟から脱出。解毒剤を受けて九死に一生を得たのだった。

（慎二達が気が付いてくれなかったら、今頃俺は――）

危機感が、まるで足りていなかった。

新たな敵であるクライシスがいつ、どのような作戦で攻めてきてもおかしくはないと、慎二から聞いたばかりだと言うのに、この体たらく。

1人では怪人に立ち向かっても決して敵わないと分かっていたいながらも自分が行った行動は、無謀としか言いようがなかった。

いや、倒せると過信していたのかも知れない。かつてゴルゴムの再生怪人達と渡り合った自分なら、どうにかできるのだと。

その無謀と過信が、自分だけでなく3人を殺すところだったのだ。

不幸中の幸いか、治療が間に合った3人は慎二作成の魔眼眼鏡を着用した桜によって洞窟に入る前の記憶を書き換えられている。ガイナガモスの姿も、自分が怪物になろうとする恐怖も今は忘れて部活に

没頭している頃だろう。

そしてはつきりと覚えているのは士郎1人のみ。

もしも慎二が以前から噂を警戒して洞窟の正確な場所を押さえていなかったら。もしメディアがガイナンへの対処法を知っていなかったら。もし桜に、あの洞窟へ向かうと言っていなかったら…

今回の戦いで完全な足手まといとなった士郎は拳を強く握り、あの場では自分は何をするべきだったのかと思いつ返す中、後頭部へと衝撃が走る。

「ッダ!？」

「何黄昏てんだよ。邪魔だよ邪魔」

痛みが走る部分を押さえて振り返ると、自分用の弓を肩に担いで呆れ顔で眺めている慎二の姿があった。恰好は士郎と同じく制服で、道着には着替えていない。

「慎二…今日は練習休みなんじゃ」

「そんなことどうでもいいだろ？それよりもどいてくれないか」

「いや場所は他にも」

「僕はどうもそこでき集中できなくてね」

「そ、そうか…」

慎二は相も変わらずこちらの屁理屈を信じて素直に従う友人が今まで立っていた場所を譲ろうと移動するとため息交じりに横目で見ると。だがすぐに目を逸らすと定位置へと立ち、矢を番えないまま弓の弦をゆっくりと引いていく。

どうやら弓張りの調子を確認る為に弓道場へ来た所、開いていたことを良いことに立っていた自分を発見したのかと推測する士郎は、慎二の姿にどこか違和感を感じた。

「慎二…お前」

「なに?？」

「なんか…以前より姿勢が良くなってないか？」

「あ…」

それに肩幅も広くなった印象を受ける。今思い返してみれば、教室での授業中や帰宅する後姿を見てもまるで背筋に針金を通したように、整った体勢となっているのだ。

慎二にも心当たりがあるようで、弦をゆつくりと戻すとさも迷惑であると言いたげにその理由を説明した。

「お節介な居候がいてね…何かと言われてるんだよ」

「…そう、か」

恐らく最近間桐の家に住まうようになった異世界人の赤上武のことでだろう。初対面の時は自分の良く知る人物と似た声に驚かされたが、彼の佇まいを見て何かの武道に精通している人なのか、というのが最初の印象だった。

その彼が異世界の生まれであり、今ではその力を失っているが仮面ライダーへ変身していたと聞いた時は自分以上に同行していた街の管理人が驚き…というよりも受け入れようとしなかったが。

もし慎二が武に手ほどきを受けているならば慎二が以前と違っていることも頷ける。それに気分屋の慎二がその事を愚痴る様子もない事から決して嫌がっていることはないらしい。

つまりは、慎二は更に強くなっているということだろう。もしかしたら、桜も。

新たな戦いを迎えて、ゴルゴムよりもさらに強大な敵と渡り合える為。

ならば自分とは、俯いて考える士郎の考えを察したのか、慎二は目を向けないまま改めて弓を構えた。

「言つとくけど、僕がしごかれてるのと前の事件をどうにかできたの

は無関係だからな」

「え……？」

「あんな事、ただ組手の練習だけでどうにかできるような問題じゃないだろ？ 全ては偶然なんだよ。あの洞窟の噂を僕が知ったのも、お前が知らずに踏み込んだのも」

「……………」

「だから衛宮が気に留める必要なんてない。そもそも、元凶が全部を忘れて能天気にしてるんだから問題ないだろ」

引いた弦が離され、風を切る音だけがその場に響いた。

慎二なりに士郎への配慮のつもりだったのだろうが、そんなことで持ち直すような性格ではないことは慎二も分かっている。だから、次にくるであろう質問も。

「なあ慎二。俺も、武さんに鍛えて貰うことって出来るか？」

「……………」

「慎二は振り返らない。振り返らないまま、質問を質問で返すのであった。」

「それって、何の為だよ？」

「何の為って……」

「お前の悩みって、身体鍛えれば何とかなるもんなの？」

胸を抉られるような言葉だった。

無論、武の指導を受ければ士郎は今よりも強くなるだろう。士郎の目指す正義の味方にも、少しは近づくのもかもしれない。

だが、今士郎が望んでいる鍛錬は、慎二が指摘したようにその場のぎの、悩みを解消するためのものだった。

「どうやら予想通りの考えだったらしく、士郎は何の返答も出すことは出来なかった。そんな士郎の横を抜け、慎二は何も言わずにその場を後にする。」

「お前には、お前に合ったやり方があるだろ……」

相手には決して聞こえないような、そんな声を漏らして弓道場を抜けていく慎二。

もちろん、その言葉は士郎に届くことはなかった。

第24話

怪魔獣人ガイナガモスを討ち取った間桐光太郎だったが、その戦いの中で脳裏に新たな戦士の姿が浮かび上がった。

ガンガデインとの戦いに際しに浮かんだ戦士とは違う、激流のような豪雨の中を物ともしない戦士が：

一方、クライシス帝国ではガイナガモスの敗北によって罰を受けるボスガンを薄ら笑うゲドリアンと、それを自重するように言うガテゾーンの前に次なる作戦指揮を取る諜報参謀マリバロンが妖しげな笑みを浮かべていた。

それから数日後、衛宮士郎はガイナガモスとの戦いに巻き込まれてしまった同級生たちが危うく怪人へと成り果てようとした時に何も出来なかった事を不甲斐ないと悔やむ中、間桐慎二が赤上武に鍛錬を受けている事を知る。

自分も同様に訓練を受けることを申し出る士郎であったが、慎二にそれは悩みを解消するためかと指摘され、言葉を失ってしまうのであった。

(何であんな事を言っちゃったんだ…)

衛宮士郎は新都の大災害後にある広場へと足を運び、広すぎる人工芝の中で唯一設置されているベンチへと腰を下ろして空を見上げていた。

そして未だに耳へ残る友人の言葉。彼の言う通り、仮に武から同じ

指導を受けても、得られるのは以前より力が増したという自己満足。そんなもの、強くなるなどとは呼べないことは自分でも分かっていることだ。

だと言うのに、なぜこうにも焦っているのだろう。

「……………」

無言で茜色に染まった空を見上げる士郎はそつと目を閉じる。今でも鮮明に覚えている戦友との出会いと、戦いに明け暮れた日々が浮かび上がった。

思えば、驚く暇も説明を受ける覚悟もなく衛宮士郎という少年は魔術師同士の殺し合いである聖杯戦争に巻き込まれ、養父である衛宮切嗣から唯一教えを受けた強化の練習を繰り返し、ただ自分の目指す正義の味方になるにはどうすればいいかという自問の日々は呆気なく幕を閉じる事になった。

しかし戦いは聖杯戦争に留まらず、人類抹殺を掲げる暗黒結社ゴルゴムによる聖杯の強奪によって、より混乱に陥ることとなる。

様々な逆境を乗り越えてきた士郎は投影魔術を身に着け、仲間達の助力を得てゴルゴムの聖剣サタンサーベルの投影に成功するにまで至った。

ただ強化の鍛錬を繰り返した頃に比べれば、格段に士郎の力は増しているだろう。

それは共に戦った仲間達も認めてくれる。

だが、先日の出来事の光景…もがき苦しむ同級生たちを目の前にし

て何も出来ず、慎二達が救援に現れるまで身動き一つできなかつた自分を無力であると痛感してしまった。

自分は、あの大火災で助けを求めた人々を見捨て逃げ出した時と何一つ変わっていないのではないかと。

「なんだか、また遠のいた気がする…俺は…」

士郎が何かを言いかけた時、誰かの足音が耳へと響く。まさかここまで人が近づいても気が付かないとは…と己の注意力の散漫を悔やみながら思わず顔を向けると、見覚えのない長身の青年が既にベンチの真横へと立ちつくしていた。

中央にアルファベットが一文字描かれている単純なデザインの長袖シャツにデニムのジーンズ、そして上着のボトムズを片手で持ち、肩に掛ける青年はやや目つきは悪いものの、特段悪い人間には見えな
い。

青年の容姿は特段珍しいものではないが、士郎は青年の両腕…特に気温が低いわけでもない今の季節に手袋を着用しているとは珍しいと、この時は素直にそう考えていた。

「なんだ坊主、こんなに広い場所にお前さん一人しかいねえのか？」

この場に士郎一人しか見当たらない事が余程不思議だったのだらうか。青年はドカリと士郎の隣へと座り、両肘をベンチの背もたれに預けると、その先に数本の樹木と芝生しか見えない景色に対して、

淡々と言い放った。

「しっかし本当に何もねえな。慰霊碑の一つでもあると思ったのよ…」

「そう…ですよね」

「どうやらこの青年は、ここであつて何が起こつたのかは知つた上で訪れたらしい。」

興味本位での観光なのか、それともここで死んだ誰かを弔うためなのかは分からない。ワザとらしく溜息を付く青年は風が撫でる芝生の音に耳を傾けながら俯いてしまつた。土郎と対照的に広場全体を見渡すように上を向いている。

互いに口を開かずしばしの間沈黙が続いていたが、眺めているだけでは飽きてしまつたのだろう。青年は特に深い意味もないこの跡地を見ての感想を口にしたが、土郎は思わず反応してしまつた。

「ま、仕方ねえか。いずれは気を利かせた奴が何か立てるなりするだろう」

「…らない」

「あ？」

「変わらないのかも知れません。このままずっと、時間が止まつたみたい…」

まるで、今の自分にも例えられる比喩なのではないかと自虐するよ
うに呟く土郎。

養父に助けられた、あの時のまま。誰かに助けられるまで、何一つ出来なかつた自分は多少力を付けただけであつて、何も変わつていな

いのではないか…？

先の戦いでのお出来事と自分の発言によつてさらに後ろ向きになつてしまふ士郎に、視線を動かさないまま青年はさも士郎の心情を察したかのように尋ねるのであつた。

「…お前さんも、そうやって止まつたままになるつてわけかい？」
「え…？」

思わず声に出して驚いた士郎の視線は隣に座る青年の方へと向けられる。

「…顔に書いてあんだよ。分かりやすいほどにな」
「……………」

「聞かせろよ。話すだけでも、楽になると思うぜ？」

新都の図書館

「……………」

「どうしたのよ慎二。さつきから全然ペン進んでないじゃん」

自習室の隣から顔を覗き込んでくる美綴綾子の言う通り、間桐慎二は先ほどから参考書のページは進んでおらず、ペン先でノートを突くだけに没頭している。

図書館で勉強を始めたら門限に間に合う時間になるか、綾子が強引に分からない問題を問いたださない限り慎二は勉強か読み取る気にもならない文字で書かれている本の翻訳以外に意識を向けることはまずない。

となると…と原因が思いついた綾子は「ハハアン」とニタリと笑い慎二の耳元で悩みの種であろう推測を呟いてみる。

「あーらら。またきつく言いすぎたあつて顔してんね。そんな気まずくなるんなら最初から言わなきゃいいのに」

「はあ？何で僕が衛宮なんかに気を使わなきゃならないんだよ。意味が分からないね」

「へえ。慎二が悩んでたの衛宮の事だったんだあ」

「くっ…」

思わず顔を上げて反論する慎二の目に映ったのは悪戯成功と言わんばかりに手で口を押えている弓道部部長の得意顔。そんな顔すらと可愛らしいと一瞬考えてしまった慎二は悔しくてたまらない。

不覚にも士郎との会話からどうにも落ち着かなくなっていると悟られてしまった慎二は自分が去った後も射場で立ち尽くしていたあの背中を思い出す。

悪癖と言えばいいのか。衛宮士郎は自分以外が苦しみ、傷つくことがどうしても我慢できないでいる。そのため敵の毒蛾によつて苦しめられた同級生たちの姿が相当堪えてしまったのだろう。

だから我武者羅にでも強くなりたいとあの時思ったのだろうか、小手先の強さを手に入れてどうにかできる程この戦いは甘くない。

敵であるクライシス帝国は別次元の世界から現れ、自分達の住む地球を植民地にするという目的以外に何の情報もなく、さらに力を増した光太郎ですらも何とか勝ち続けているという状況なのだ。

居候である赤上武から桜と共に手解きを受けてはいるが、恐らく自分の身を守るか義兄の邪魔にならない戦いをすることが精一杯となってしまうだろう。

先手が打てず、誰かが苦しみ、悲しむことが避けられない戦いに士郎が黙って見過ごすはずはない。しかし、弓道場で見かけたただ力を

手にしようとして躍起になる様子に慎二はどうしても協力するつもりにはなれなかった。

「ちよつとー？いきなり黙りこんで考え事の続きって失礼じゃないの？」

「あのなあ、以前から言ってるけど僕は一人で勉強しに来てるんだ。いつもそつちが勝手に——」

先程と一転し不機嫌となった綾子へ申し立てようとするが慎二の使用していた席の上で振動音が鳴り響く。見れば慎二の携帯電話へと着信があり、綾子を睨みながらも周囲に気を配り小声で応答した。

「なんだよ、まだ図書館に…なんだって？」

自分の言い分よりも要件を先に言われてしまった慎二の表情が変わる。綾子は慎二の真剣な顔を見て首を傾げるが通話を終えた慎二が参考書や筆記用具を乱暴に鞆へと放り込んでいく姿に慌てて理由を問い質すが慎二は適当に応じてバッグを手に出口へと向かってしまう。

「ちよ、ちよつと急にどうしたのよ!？」

「急用ができた。閉る前に帰れよ」

「はあッ!？」

「埋め合わせは学校で缶コーヒーくらいは奢ってやるよ。じゃあな」

綾子の返答などまたず、慎二は早歩きで自習室の扉を抜け、図書館の外部へと出ると走って周辺の停留所まで駆けて行ってしまった。何が起きているのか全く理解できない綾子は何の説明もせず帰った慎二への怒りがどんどんと膨れ上がっていくが、急に肩を落とすし、

「バカ…」

と小さく呟くことしか出来なかった。

「はあん、つまり大事な時にお前は何もできなかつた」と

「…そんなところですよ」

士郎は青年に当たり障りのないように自分が抱えている悩みを打ち明けた。

ガイナガモスに襲われたことに関しては、ゴルゴムの起こした事件もあり一般人にも怪人が起こしている出来事は浸透していた為に信じてくれるはいるだろう。

青年の反応は話始める前となんら変わらず、時折「へえ」と声を漏らすだけで士郎の説明に疑う様子も無かつた。

だが自分の口から事実を述べたことで、士郎の懸念は一層重くなり、青年の言うように楽にはならなかつた。

(当然だよな。初対面の人に話して変わるものじゃない…)

変わらない。この先、どう敵に立ち向かおうが、自分是不変。それに、誰かの為に戦っているのは自分だけではないのだ。

士郎が真つ先に浮かぶ人物は間桐光太郎。仮面ライダーへと変身し、敵に対して真つ向から挑んでいくあの姿に、何度憧れただろう。

だが、光太郎のようにには決してなれないことは理解している。彼とは違う、自分なりの道を進んでいくと、旅立った戦友に誓ったのに、こうして自分を支えてきたものが、折れそうになっている。

彼のような人物がいるのなら…

「俺がいなくても、きつと誰かが——」

それは、これまでの自分が培ってきたもの全てを否定する言葉だった。これを自分で最後まで言い切ってしまうえば、衛宮士郎が抱いた理念は終わってしまう。

だが、その続きは隣にいる人物から告げられた。

「そうだな。お前が動かなくても他の誰かが動く。世の中、そういうもんだろ?」

「え…?」

出鼻をくじかれた事よりも自分を考えを呼んでいたかのように口を開いた青年の言葉を、士郎は聞き続けた。

「さつき坊主は時間が止まるみたいに、なんて言ってたがそんなことはねえ。時間も人も、常に進んで、動くもんだ。止まらねえし、ましてや戻るなんて、ありはしない」

時は止まらないし、戻らない。確かにその通りではあるが自分はこうして動けずにいる。

「こいつは、又聞きしたことなんだが…俺の先輩に当たる人はお前さんとは違うが、尽きない悩み…それこそ、どうあっても解決しないやつが今でも続いているそうだ」

「え…?」

「聞いた時はえらく後ろ向き過ぎてよ…一度ぶん殴ってやろうかって思ったわけよ。だがな」

ケタケタと笑う青年へどう反応すればいいか分からない士郎だっ

だが、自分と目を合わせた人物の雰囲気ガラリとかわり、その言葉を放った。

「その人は戦う道を選んだ。どんな目に遭おうが、無力だと痛感しようが、歩みを止めない道をな…」

「戦う…道」

『——長い間悩んできた。今でも数えきれない夜の中で』

『だが…何も変えられない夜だとしても、それでも明日はやってくる』

『未来を変える者達の明日だ。その度に戦う事を誓ってきた』

『絶望の痛み——』

『それが俺の力だ』

「かっこ付け過ぎなんだよ…」

「え？」

「気にすんな。つまりは、終わったことでクヨクヨせず前を向けて

ことだよ」

こちらを見て茫然としている土郎の額を軽く小突くと青年は立ち上がり沈みかけている夕日を見つめる。青年に励まされても胸に刺さっている刺が抜けずにいる土郎も立ち上がって尋ねた。

「けど、俺は何もできずに、ただ見てるだけだった…」

「なら簡単だ。そうならないようになればいい」

「そう簡単に…」

「簡単じゃねえか。もう二度と負けない為に強くなり、そしてそいつらを守り抜くという誓いを貫き通す。そいつを俺達は…」

『『正義』って呼んでいるぜ』

「あ…」

見ず知らずの人間の言葉にどうして心が動かされてしまうのだろうか。なぜ、あんなにも自分に押し掛かった黒い感情が晴れてしまうのだろうか。

土郎のそんな心中を察したのか、青年は口元を歪めると上着を羽織り、その場から離れていく。

「じゃあな。あんま遅くまでいるんじゃないぞ?」

薔薇の刺繍がされた背中を見送る土郎だったが、最後にどうしても聞きたかったことがあった。

「もし…もしその正義や理想が本物じゃなく…借り物のものだったらッ!!」

熱が籠ってしまったのあろうか。思わず叫んでの士郎の質問に、青年は振り返ることなく応じた。

「…俺には分からねえよ。だがな、正義そや理想いに中身をやって本物にするのは、お前次第だろうが」

そして青年は、去っていく。青年の姿が見えなくなるまで、士郎はその背中を見つめていた。

いつの間にか戻った熱意と共に拳を握りしめて。

第25話

クライシス帝国の怪魔獣人ガイナガモスとの戦いで己の無力はあ
ると考え、赤上武の指導を受けられるように申し入れた衛宮士郎だっ
たが、彼の望みはただその場しのぎであると間桐慎二に指摘され言葉
を失ってしまう。

新都の大火災が起きた跡地へと足を運んだ士郎は己の不甲斐なさ
に自身の目標を喪失しかけた時、謎の青年と出会う。

この広く何も無い跡地にいずれ誰かが慰霊碑を立てるだろうと言
う青年の言葉を士郎は否定する。まるで時が止まってしまおうよう
に何一つ変わらないのだと。自分のように。

だが、青年は時間も人も常に動くものだとして士郎に伝え、自分の知る
人物はどのような状況に陥ろうが戦う道を選んだのだと語る。

青年の言葉に心動かされた士郎は先ほどの不安が嘘のようにかき
消され、立ち直ったのであった。

一方、同級生の美綴綾子と共に新都の図書館にいた間桐慎二の携帯
電話に着信が入る。通話の相手の言葉を聞いた慎二は理由を尋ね続
ける綾子を振り切り、図書館を後にするのであった。

バスを経由して自宅近くの坂道を小走りで駆けあがっていく慎二
は間桐邸の前で停車している黒塗りの高級車とそれを囲うように立
ち、辺りを見回している黒服の集団を視界に捉えるところを思わず出しては

ならないうめき声を発してしまった。

「うげえ…」

電話で断片的な情報しか知らされていない慎二は帰宅する途中である可能性を考慮していたが、まさか当たってしまうとは…と今日程自身の勘の良さを呪った日はない。もし、自分が考えた通りなのならば今回の件は義兄と義妹、それに最近居ついた居候に全て丸投げしたいのが本音であるが事情が事情だ。

ため息交じりに覚悟を決めた慎二は伏魔殿にさえ思えてきた自宅の門を潜るのであった。

「うわあああああああああああああああッ！コーちやああああああああああん!!」

「大丈夫、大丈夫だよ」

玄関の前どころか居間にまで控えていた黒服の皆様の中でもお構いなしにソファに座る義兄、間桐光太郎の膝に縋り付いて大泣きしている女性の姿を確認すると慎二は先ほどよりも深くため息をつくど、義兄達と対面する形で設置されているソファに腰かけている人物達にも目を向ける。

どちらも光太郎と泣きついている女性とは昔からの顔なじみであり、嵐の如く泣き続ける女性の姿を見て苦笑しつつも、どう声をかければいいのか迷っているようにも見える。

「慎二兄さん、おかえりなさい」

「おう」

出迎えたエプロン姿である義妹の間桐桜はトレイに人数分のお茶

を用意し、女性の号泣を特に気にすることなく湯呑を客人の前に置いていくとそそくさと慎二の隣へと移動する。

「…で、事情は聞けたのか？」

「いえ、まずは落ち着くまで泣いてもらおうって」

「いつもの事か。それにしても…」

2人は視線をキツチンの方へと向けると…なにやらドス黒い瘴気を背後に聳えいる間桐家のお姐さんがシンクの前で桜と同じくエプロンをしており…

「……………」

口をへの字に曲げ光太郎が女性の頭を優しく撫でている光景を見つめながら同じ皿を延々と磨き続けていた。

(怖い怖い怖い…なんで無表情なんだよというか目のハイライトが仕事してないんですけどッ!?)

恐怖を抱く慎二は再度居間へと目を向けるが、幸い客人達とメデューサの間に赤上武が折りたたみの椅子に座っている事で視線に気づかれることはない。恐らくは光太郎も…いや、本当は気付いているのだろうか気が付かない振りをしているのだろう。

良く見れば額にはうっすらと脂汗を浮かべており、向かいに座っている友人の1人は「なんだ暑いのか?」と心配されてもお茶を濁して女性を慰め続けている。

武など視線を遮っている自分の背中にメデューサから放たれる圧力の籠った視線を浴びているというのに平然としているのは見事としか言いようがない。

「…これだと光太郎兄さんが大変ですね。なんとかしてみます」

「なんとかかってお前…」

慎二が言うよりも早く、桜はパタパタとスリッパを鳴らせてメデューサの元へ駆けていく。果たして桜の策とは…と慎二は疑問に思うが、あの状態のメデューサに接近するほどの度胸を持ち合わせている事などには既に疑問すら思い浮かばないのであった。

桜はメデューサの背後へと近づいたが、彼女の気配に気づく様子もなく皿を磨きながら光太郎へ視線を送り続けていた。そして皿をよく見れると本来は無かった丸の模様が走っている…いや、これはメデューサが空ぶき用の布巾を当て、回しながら拭いている間に付いてしまったのだろう。彼女が割れない程度に力を込めた布巾の繊維が押し付けられ、時間をかけて磨いている間にクツキリと跡が残ってしまったのだ。

(…これについては後でお説教するとして)

食器に関して目を瞑ることにした桜はそつとメデューサの隣に立つと、微かだが彼女の唇が動いている。耳を立ててみると蚊が鳴くような細かい声だが、メデューサは確かに声を出している。

「……………コウタロウノヒザマクラ、ワタシモマダシテモラツテナイノニ……………」

「……………」

光太郎が女性に成すがままにされているというより、先を越された事でご機嫌斜めになっていたようだ。

「羨ましいんですか？」

「…っ!?き、サクラッ!?何時の間に…あっ!!」

自分の背後に桜が立っていた事に激しく動揺したメデューサは手

にした皿を床に落下させてしまい、皿は無残にも砕けて散らばってしまふ。その音を聞いていち早く声をかけた武はキッチンを覗き込んで桜達へと様子を聞くが、近場に置かれていた箸と塵取りを手にしたメデューサが捲し立てるように2人へと答えた。

「心配には及びません、すぐに片付けますので武は戻って大丈夫です。それにサクラ、羨ましいという言葉の意味が解りません。彼女は光太郎の幼馴染みにして大切なご友人です。あのような触れ合いも彼等にとつてはさも当然でしょうし、むしろ泣いている女性に膝を貸しているのですからむしろ褒めるべきことでしょう。以前に私がしたように私もされたいなど全く考えていません。ええ、全く考えてなんていませんよ…」

手をせっせと動かしつつ口を開くメデューサであったが台詞の後半で本音が駄々漏れであることに桜と武は敢えて追及はしなかったが、今メデューサが食器の破片を集めようとする方法にだけは口を出さないわけには行かなかった。

「メデューサ殿」

「何でしょう？今手が空いていないのですが…」

「いや、お忙しいのは承知の上なのだが、箸と塵取りの役割が逆なのでな…」

武の指摘を受け、手にした塵取りで破片をかき集め、箸の穂に乗せていくメデューサの動きはピタリと止まる。先程桜から言われた事と重ね、自覚なき奇行へ走った羞恥からメデューサは震えながら目元に涙が滲み始めていた。

さながら雨の日に段ボールの中でこちらを見つめてくる子犬のようにな…」

「じゃあ、一昨日からミノル君とは連絡が…」

「そうなのお…」

ようやく泣き止み、落ち着きを取り戻した女性：善養寺 圭織は目をハンカチで押さえながら光太郎の質問に頷くとゆつくりと事情の説明を始めた。

佳織は1日は穰へ携帯電話でメールを送り、彼からの返信を見てのスタートとなっている。だが、昨日に朝一番に送ったメールは全く返信がなく、朝からトラブルなのだろうかと昼過ぎに電話を掛けるが相手側の電波が届かない場所にいるのか、一切繋がらない状況となっていた。

夕方になった際にはGPSを駆使して場所を探ろうとも反応はなく、穰の私物に無許可で取り付けた発信機の信号も途絶えており最終手段として自宅でもある会社へと連絡すると、穰は朝仕事に出かけてから帰宅していないことが判明した。

(…自宅へ連絡する前に何か危険なワードを聞いたような気がしたけど、何で誰もツツコまないんだよ…)

それとも自分がおかしいのかと自分の持つ常識を疑い始めてしまう慎二は義兄のここにはいない義兄の友人：東堂 穰について思いつく。

光太郎の小学校以来の友人であり、彼等の中では一番大らかな性格であったと記憶している。その性格を表しているかのようによいも眠っているような線目であり、その目が開かれるのは彼の自営業である電気工事の時か、心の底から怒った時のみ、らしい。

高校在学中には既に家の手伝いをしており、傍ら資格の勉強をしていた穰は卒業と同時に仕事を開始。本人が元より機械いじりが趣味であることも幸いして次々と仕事を熟し一線で働ける人材へと成長

を遂げたとのことだ。

その腕は近所でも評判となり、確か何度か間桐家の照明器具がイカれた時にはお世話になっていたものだが、彼が突如として行方知らずになってしまいう心当たりはない。それは顎に手を当てて考えている義兄も同様だろう。

「…この事を警察には？」

「うん…昨日お義母さまへ連絡した直後にい、もう連絡したわよお」

流石に早い、と佳織の返事に頷いた光太郎は聞いた話を整理しつつ、様々な可能性を考える。友人である東堂 穰は交際相手である佳織の普段過度なスキンシップに悩まされながらも彼女を困らせるような…ましてや泣かせることは絶対にはしない。

家族に対してもそれは同様だ。小さな会社ではあるが家族と社員が一つになって頑張っていることを光太郎達は良く知っている。穰が会社に連絡一つ寄越さずいなくなるなどありえないはずだ。

だとすれば考えられることは一つ。穰は何かの事故に巻き込まれてしまったということだ。

「そーいや、何日か前に隣町から飲みに来た客が妙な噂話で盛り上がってたな…」

「それって、工場の技術者や職員が相次いで行方不明になっているやつ？」

「…詳しく教えて貰えるかな？」

手をポンと叩いた檀原 大輔の聞いた話を補足する紫苑 良子から齎した情報を聞いた光太郎は目を細め、2人に噂話の詳細を尋ねる。光太郎の嫌な予感、膨らんでいく一方であった。

「じゃあ、コウちゃん。今日はありがとう…」

「何かわかったら必ず連絡するよ」

「うん、必要な事があったら言ってみてね…うちの組から情報を持って行かせるわあ」

「必要になったら、ね」

情報の交換が終わり解散となった後、光太郎は黒塗りの車の後部座席から顔を出す佳織の言葉に頷き、ゆつくりと発進する車を見送っていた。

間桐家を囲っていた黒服達もとっくに引き上げおり、残るは大輔と良子が帰るだけとなった。

「帰り道は気を付けてね」

「心配すんなって。いざって時は隣にいる紫苑先生がその鉄拳で——
—ろごすつ!?!」

「…あら、鉄拳が何かしら…? 帰りながらゆつくりと聞かせて貰うわよ大輔くん?」

冗談のつもりだろうが、どうやら通じなかった良子の裏拳を腹部に受けた大輔は胸を手で押さえたまま、将来教師志望の幼馴染に首根っこを掴まれて引きずられていくといういつも通りのやり取りを演じ、その光景を微笑みながら見送った光太郎は踵を返し、一連の事件が自分の考えた通りならばと不安を募らせる。

(クライシスの仕業なのか…?)

大輔と良子の話を聞く限り、新都で務めている部品工場や溶接工の技術者や下請業者の従業員が数日前から行方不明となる事件が相次いでいるらしい。それも冬木だけでなく日本各地で発生しているのだ。

これがクライシス帝国によって起こされていることならば敵の狙いは一体何なのだろうか。

予測を立てながら玄関を潜り、メデューサ達のいる居間へと向かう途中に通路に設置された電話からコール音が鳴り響く。

「はい、間桐です」

受話器を耳に当てた光太郎の声が続いて聞こえてきたのは、元気いっぱいである義弟の担任教師である藤村大河女史であった。

『もしもし。穂群原学園の藤村と申します』

「あ、藤村先生。いつも慎二君と桜ちゃんが世話になってます」

『およう？その声は2人のお兄さんですね！こちらこそお世話になっております』

最初に聞こえた凛々しい教職を思わせる声から一変、普段学校で慎二や桜に接するような気さくな口調となつて光太郎と挨拶を躲す大河は早速電話で連絡した理由を明かした。

『そちらに士郎がお邪魔してませんか？もう夕飯の時間なのに帰ってないんですよね〜』

第26話

至急の連絡を受け、自宅へと戻った間桐慎二を待っていたのは、義兄である間桐光太郎の友人である東堂 穰が行方不明となった情報であった。

穰の恋人である善養寺 圭織や檀原 大輔、紫苑 良子の話によれば穰だけではなくこの数日で多くの人間が姿を晦ませていると聞いた光太郎はこの事件にはクライシス帝国の手によるものではないかと予測を立てる。

そんな折、慎二と桜が通う高校の教師である藤村大河から、衛宮士郎が夜になっても家に戻っていないという連絡が入ったのだった…

慎二が間桐邸に到着する数時間前

「ふう…こんなもんかな？」

衛宮士郎は新都の災害跡地で出会った青年からの助言を受けた後に学校へと戻り、依頼を受けたまま放置してしまった備品の修理に没頭していた。

去っていく青年を見送った士郎は自身の胸に刻み込んだ言葉を再度確認する為、自分の聖域である土蔵の中で鍛錬を行おうと自宅へと急ごうとしたが帰宅途中で同級生である柳洞一成からの頼まれごとを思い出したのだ。

一成は士郎の様子を見て気が向いたら、と言ってくれたが頼み事がないがしろには出来ない。鍛錬は夜にゆっくりとやればいいと判断

した士郎は音楽室で合唱部が使用するという空気清浄器や家庭科室常備であるミシンの修理を終え、次の作業に取り掛かるために使った工具を纏めていた、その時だった。

「ほう…若いというのに見事な手腕だ…」

「ッ!？」

この教室には士郎以外に誰一人、生徒も教員もいないはず。だというのに周りを見渡しても声の主の姿はない。手にした工具を放り捨て、立ち上がった士郎は咄嗟に魔力回路に魔力を走らせると両手に白と黒の夫婦剣を投影する。

当に日が沈み、一部の蛍光灯しか点灯させずにいた為に室内の明暗のバランスがより不気味さを強調してしまい士郎の警戒心を高めていく。

「ククク…なんと魔術師だったか。これはいい、マリバロン様もお喜びになるはずだ」

「誰、なんだ…?」

視線を左右に振つても相手の姿は捉えられず、目に付けた獲物が予想以上だった事に喜びを浮かべる声は段々と大きくなっていく。士郎はどこから相手が現れても対応が出来るようにジリジリと後退し、教室全体が見渡せるようにするが、ここで誤算が生じてしまう。

なぜなら…

「…っ!？」

「ククク…まさか敵が『鏡』から現れるとは思うまい」

士郎は後頭部に強い痛みを感じた時には、既に意識が揺らぎ始めていた。

剣が手からこぼれ、膝を着いてしまった士郎はせめて自分に手を下した相手を一目見ようと倒れながら強引に顔を背後へと向ける。

迷彩カラーのズボンに上半身は胴や袖などの戦国時代の鎧を纏い、顔を兜と面具で覆っている。さらに白いマントをはためかせる相手の口元は三日月のように吊り上っている。

そして丁寧にも、相手は自ら自分の名を名乗り出るのであった。

「ククク…。怪魔妖族最強であるこの武陣様の目に掛かったことを幸運に思うのだな」

(クライシス…なのか)

敵の正体を知った士郎の意識は一気に闇へと堕ちるのであった。

「…、…い、しっかりしろ」

「ん…?」

「おー、目が覚めたかー」

「……、は…?」

身体を揺さぶられ、声を掛けられたことで意識を覚醒させた士郎は痛む後頭部を手で押さえ、上半身を起こしながら自分へと懸命に声を

かけ、無事に起きた事へ安堵する青年を見る。

目を瞑っているのかそうでないのかと判断が付きにくい程に細い線目が特徴で着用している作業着とその汚れ具合から、工事に携わっていることが伺える。

周りを見渡すと、土郎と彼だけではなく統一のされていない作業着を纏い、年齢も様々な男性が30人ほどが同じ一室に閉じ込められている状況だ。

「一体、ここは…」

「あー俺達も気が付いたらここにいてなあ。まーわかっていることは、ここは一切電話が通じないってことだなあ」

照明の暗いためか、青年が翳した携帯電話の待受け画面が妙に明るく見えてしまうが、土郎が着目したのは画面の隅に映る『圏外』という文字。携帯電話を持ち合わせていない土郎でも、それが何を意味しているかは理解できる。

他の男達も同様であり、必死に携帯電話を振るわせたり、電波の届く範囲を探す為に室内を右往左往している。

「俺も何度か試したけどなー全然成果なし。お手上げだよ」

「あの…妙に落ち着いていますね」

改めて自分のいる空間が鉄格子の牢屋である事が判明したはいいが、他の者達は懸命に携帯電話を操作したり、なぜこうなってしまったのか受け入れられず頭を抱えている。だと言うのに土郎に声をかけた男は慌てる様子は見られない。

「んー焦ってここから出れるわけじゃないしねえ。出る方法を考えるにしても、まずは何でこんな所に閉じ込められたのが分かってからでも遅くはないでしょ」

「は、はあ…」

落ち着いている…というよりマイペースであるなど感じた土郎は不思議とこの空間に閉じ込められてから青年と話していたこともあつてか慌てる事はなかった。

「…つても、これは昔友達の言つてた事の受け売りだけどなー」

「友達…?」

「ちよつと昔ね、中学校の修学旅行で土砂崩れに巻き込まれた時なんだけど」

「ちよつとじゃ済みませんよねそれツ?!」

彼から聞いた話だと、こういうことである。

中学校時代、修学旅行先で名所である洞窟内の見学をしていた最中に唯一の出入口である場所が数日前に発生した台風の影響で土砂崩れが起き、完全に塞がれてしまったのだ。外への連絡手段もなく、土砂の量から救助が来ても掘り返す時間まで洞窟内の酸素が持たないと話すガイドの話が耳に入ってしまった。彼が所属していた学年全員が閉じ込められてしまい大パニックとなってしまうが、その中でただ一人慌てることなく対処を始めた生徒がいた。

その生徒は閉じ込められたことへの不安から感情のままに泣き、暴れている生徒1人1人と対話を始め、段々と静まっていく様子を見ていた他の生徒だけでなく教師やガイドまでが落ち着きを取り戻していった。

生徒の起こした行動を茫然と眺めていた友人達も生徒に続き、未だ落ち着かない生徒達と向き合い、話し、慰めることで洞窟で騒ぎを起こす人物は誰一人いなくなつた。

そして、一夜明けた後。生徒達が冷静でいられた事に応えたように土砂が切り崩され、駆けつけたレスキュー隊によって無事に保護されたのであつた。

「すごいですね、その人」

「ああ。前からしつかりしてるとは思ったけどあそこまでとねー…それで一度聞いたことあんだよ。なんであんな行動が出来たのかって

さ」

当然の疑問であった。そのような非常事態と直面した人間は多かれ少なかれ取り乱してしまうものであるが、その生徒は逆に場の空気を鎮め、余計な混乱を未然に防いだ。そうなることを見越していたか、それ以上の厄災に巻き込まれた経験がなければ出来ない所業だろう。

ましてや当時中学生だった生徒になぜそのような行動に移せたのか。それは、至極単純な理由だった。

『自分に出来る事を全力でやっただけ』ってさ…笑いながらいったな」

「自分に出来る事を、全力で…」

「そ。だから慌てる暇もなかったんだってよ。普通は慌てるよなーそこで」

青年はカラカラと笑いながら友人の発言を懐かしむように語るが、その言葉は土郎の胸に深く浸透していく。新都の跡地で出会った、あの青年から聞いた言葉と同じように…

「けど、この話にはおまけもあってなー。俺達の学校じゃこつちの方向か伝説となっちまったんだ」

「え?」

余韻に浸る暇なく青年から語られた話に、土郎には心当たりが有りすぎる内容であった。

「そいつのおかげで暴動が起きることなく夜になって、洞窟の奥で平地になつてる場所で眠りについたんだけどなー。何か物音がするなーって起きた何人かが埋もれた出入口の方に言ったら見たらしいんだわ」

「見たって…何をですか?」

「まー俺も直接見たわけじゃないし、今でも信じられないんだけど、洞

窟の所々に置いた懐中電灯のわずかな光に照らされたそこで…」

「バツタの怪人が洞窟を掘り返してるところを」

もはや考えるまでもない。

その生徒とは、中学時代の間桐光太郎だ。

確か一年前までまだバツタ怪人にしか姿を変えられないと話に聞いたことがあった。それに聞いた話だと脱出不可能と考えられるほどの土砂が一晩でレスキュー隊が到着できる範囲まで土砂を掘り返したのがバツタ怪人へと姿を変えた光太郎ならば十分に可能の話である。

青年が光太郎と同級生であることにも驚きだったが、光太郎が仮面ライダーとなる前からこうして陰ながら人を助けていた事と、先ほどの言葉がより大きく考えられた。

（光太郎さんは、その時に自分に出来る事…全力で生徒達を助けたんだ。なら、俺に出来ることは…）

拳を強く握る士郎の耳に鉄格子の向こうからコツコツと何者かの足音が届く。音は段々と大きくなり、複数人で向かっていることが分かる。

「どうやら招待してくれた人のお出ましみたいだなー…つと、そういや自己紹介まだだったねえ。俺は東堂 穰」

「俺は衛宮。衛宮士郎です」

「まあ、とりあえずよろしくね」

身の危険が高まっているというのに慌てず自己紹介するとは。ますます光太郎の友人であることが逆に納得できてしまった士郎は苦笑しながら穰から差し出された手を握り、離れた直後に現れた敵と相対した。

「ずいぶんと集めたようね武陣。最初としては上出来よ」

「ハッ…」

品定めするように鉄格子越しに志郎達を眺めるクライシス帝国の諜報参謀マリバロンの称賛に光栄であると言わんばかりに頭を下げる武陣。その背後には背中に大きなタンクを背負い、そこから接続されたホースをさらに繋いだ銃をこちらへと向けるクライシス帝国の雑兵チャップが現れた。

ざわつく人々だったがマリバロンが手にした鞭を床へと叩き付けると一瞬にして静寂が訪れる。その様子に満足したかのように笑みを浮かべたマリバロンは捉えた人々の表情が再び歪む事を楽しむかのようにその妖しげな口を開いた。

「光栄に思いなさい！お前達は偉大なるクライシス帝国の一員となり、毒ガス衛星の量産に携わるのだからね！」

『なっ…!?!』

その驚きは誰のものだったのか分からない。だが、マリバロンがこちらの理解が追いつかず互いに顔を見合わせる人々などお構いなしに話を進めていく。

「お前達は電気や溶接などの技術が抜きんでている者であることは調

べは付いているわ。後はお前達の脳へ衛星の量産に必要な知識や技術を下ウンロードすることで容易に量産作業へと移行することができると……」

マリバロンの言葉に続いて運び込まれたのは、拘束具が付けられた椅子と、様々な配線が繋がれたヘルメットだ。これにより捉えた技術者へ毒ガス衛星を製作する為に必要である知識を脳へ直接叩き込むことで量産の過程を早めるつもりなのだろう。

無論、クライシス帝国への忠誠心を植え付けるというオマケつきで。

本来ならば洗脳した怪人や素体達を労力として使うつもりだったが、動物の本能で動く怪人や単純な命令しか従わない素体には精密作業が一切できないと踏んだマリバロンは地球で技術に長ける人物を代わる労力にしようと画策。時空嵐の影響で怪魔界とのゲートが不安定である今、怪魔界から技術者の応援を呼べない状況を打破する為の代案であった。

そして計画通りに毒ガス衛星の量産が完了し、世界の主要都市へ狙いを定めたとすれば人類は瞬く間に降伏する。その時、もはや宿敵の仮面ライダーには打つ手などありはしない。

「さて、まずは誰から……お前は？」

「ッ！」

マリバロンは自分の眼を合わせた少年を見て口元を吊り上げるとチャップに命令すると牢を一度開け、数人がかりで士郎を連れ出して彼を拘束具で縛り上げてしまう。

「ちくしょう！離せッ!!」

「アハハハ……見物だわ。お前がクライシスの一員となった時、あの男がどのような顔をするのか？」

士郎がクライシス帝国の宿敵とどのような関係にあるか知った上で高笑いするマリバロンが手を上げると、志郎の頭部へ強引にヘルメットが装着されてしまう。後はマリバロンが手を下ろせば士郎へ毒ガス衛星の技術とクライシスへの忠誠が上書きされてしまう。必死に手足をバタつかせる志郎だが、もはや間に合わない。

牢からも必死に止めるようにとの声も上がっているがマリバロンにとってそれは自分を称える歓声にしか聞こえない。声援の中、勢いよく腕を振り下ろそうとした、その時であった。

突然の地鳴りがその空間に響き、不安を募らせる穰や他の技術者達だったが、それはクライシス側も同じであった。

「こ、これは一体――」

とうとう立つことさえ覚束ない程の強い揺れとなった直後、壁面に大きな亀裂が走る。だが壁になぜ亀裂が発生したのかとマリバロンが考えるよりも早く壁が砕け散り、破片をまき散らしながら現れた赤い影によって数体のチャップが吹き飛ばされてしまう。

武陣と共にすぐ回避したことで免れたマリバロンは赤い車：ライドロンの操縦席から姿を現した黒い戦士の名を驚愕の声と共に叫ばずにはいられなかった。

「お、お前は…仮面ライダーBLACKツ!？」

赤い複眼を光らせ、強化皮膚理プラスフォースの関節から余剰エネルギーである蒸気を巻き上げらせながら登場した仮面ライダーBLACKは自分の登場に動揺するマリバロンに目もくれず、士郎を束縛する拘束具やヘルメットから解放し、さらには多くの技術達を閉じ込

めていた牢の鉄格子を両手で掴み、飴細工のように引きちぎってしま
う。

「さあ、今空いた穴から脱出を！その先に進めば人のいる街まで出ら
れますッ!!」

光太郎がライドロンの突撃によって生じた穴を指さすと、牢に閉じ
込められていた人々は一目散に逃げ出し、穴の奥へと走っていく。そ
の中で、穰は一度だけ自分の救助へ現れ、士郎に手を差し伸べる戦士
と目を合わせる。だが、特に声をかけることもなく一度頭を下げる
と、志郎に先に行ってるぞーとだけ伝えて避難するのであった。

「な、なぜここが…この基地には電波妨害装置によって外との連絡な
どできないはずッ!!」

「お前の言う通り、ここは通常の方法であれば発見できない場所だっ
た。しかし、いくらクライシスでも魔力感知だけは見落としていたよ
うだったなッ!!」

士郎が帰っていないと藤村大河から連絡を受けた後、別の連絡が光
太郎達へと届く。その相手は士郎や慎二、桜が通う学校の教員である
葛木宗一郎からの電話であった。

士郎が使用していた教室から別の気配を察知した宗一郎が教室に
入ると中には誰も居らず、士郎のバッグや工具が床に落ちているだけ
であった。不審に思った宗一郎は柳洞寺で趣味に没頭していたメ
ディアへ連絡し、室内を調査するように頼む。

その結果、士郎の魔力が点々と別のどこかへと向かっている経路が
見て取れたという結果となったのだ。

「くっ…サーヴァントとマスターめ。余計な事をッ!!」

齒噛みするマリバロンの前に腰に差していた刀を抜いた武陣が立ち、その切っ先を光太郎へと向ける。

「ククク。だが貴様も大切な事を見過ごしているぞ間桐光太郎……」

「ここは地下の施設であり、極めつけは日はとうに沈み、今は夜。貴様はRXへと姿を変えることは出来んツ!!」

光太郎の背後で息を飲む士郎は沈黙する戦士の姿をただ見つめることしか出来ない。武陣の言う通り、光太郎の力を最大限に発揮できる姿になるための条件である太陽は当にその眩い姿を潜めている。だが、士郎の予想に反して圧倒的に不利であるのに関わらず、光太郎は余裕の笑みを浮かべる武陣に向かい、一步を踏み出していた。

「言いたいことはそれだけか？」

自分の放った挑発が通用しないことに激高した武陣は両手で剣を構えると血走った眼で光太郎を睨み、振り上げた刀を一気に振り下ろす。

「生意気なツ!! 貴様などに我が『秘技』を披露するまでもないツ!! 死ねいツ!!」

戦い慣れてきた志郎ですら見切ることが出来ない武陣の剣閃。その刃が光太郎の頭部へと届くその刹那、光太郎は左手首で刃を弾くと同時に、強く握りしめた右拳を武陣の胸板へと叩き込んだ。

「……があ……」

胸を手で押さえ、ヨロヨロと後退する武陣に向かい、光太郎は拳を

下ろすとゆつくりと構える。

「確かに今の俺はRXへ変身できない。それに比べれば、BLACKの力は数段劣るだろう…だが、そんなことがお前に敵わない理由になると思っっているのか？」

「…っ……………!?!」

未だまともに呼吸の出来ない武陣は光太郎の言葉でようやく理解する。侮っていたのは敵ではなく、自分であったのだと。

「太陽の力が借りれないのであれば、今自分の持てる力で全力を尽くす。それが俺の戦い方だ」

「…っ!」

穰から聞いた話と、光太郎の言葉が重なる。例え不利な状況だろうと相手に自分の全てをぶつけて戦う姿勢を見せる光太郎の姿が、士郎にはとてつもなく大きく見えた。

「クライシスッ!!俺の親友達を誘拐し、悪事に加担させようとするなど絶対に許さんッ!!」

第27話

学校で備品の修繕に追われていた衛宮士郎はクライシス帝国の怪魔妖族 武陣の不意打ちを受け、意識を失ってしまう。

牢の中で目覚めた士郎は自分と同様に捕らえられた東堂穰から聞いた話から彼が間桐光太郎の友人であることと、光太郎が仮面ライダーとなる以前から全力を持って誰かを助けていたことを知る。

現れた黒幕：クライシス帝国諜報参謀マリバロンは士郎や穰、多くの捕えられた技術者に毒ガス衛星による地球の主要都市へ脅迫する計画。そして衛星を量産する為の知識とクライシス帝国への忠誠心を脳へ植え付けるといふ恐るべき全容を明かした。

マリバロンは手始めに士郎を洗脳しようとしたまさにその時、壁を突き破って赤い機体ライドロンが登場。そしてその操縦席から仮面ライダーBLACKが現れる。

ライドロンの突入によって生じた穴から穰を始めとした技術者を逃がした光太郎は太陽が既に沈み、RXへと強化変身が不能である状態で武陣に戦いを挑むのであった。

「ぐっ…おのれい…!」

攻撃を受けた胸を手で押さえ呼吸を乱す武陣は無言で構え続ける黒陽の戦士を血走った眼で睨みつける。光太郎は相手の殺気に塗れた視線など物ともせず、続けて攻撃をしかけようと一歩前へと歩んだその時――

「これは、警報?」

「フフフ…これで貴様も終わりよ間桐光太郎!」

突如室内の照明が白昼色から赤へと変化し、アラームが鳴動。壁際へと移動していたマリバロンは赤い緊急ボタンを手で押さえつけながら口元を吊り上げ、勝利を隠したかのように光太郎達に向かい言い放った。

「今、この施設の地下にある毒ガス衛星に搭載する予定だった毒ガスタンクの自爆装置を作動させたわ…あと10分でこの施設は消えてなくなるのは勿論、爆発によって拡散した毒ガスが近隣の街へと降り注ぐでしようね」

「何ッ!？」

「じゃあ、街の人たちは…!？」

敵の取った卑劣な手段に驚く光太郎と士郎は最悪の結果を予感してしまう。もし、マリバロンによって起こされた爆発によって近隣の住民や今し方避難した東堂穰を始めとした技術者達が毒に犯されてしまったら…そんな最悪の結末にマリバロンはさらなる追い打ちをかけてくる。

「アハハ…もしかしたら死ぬ事よりも辛い目にあうかもしれないわね…ここに保管されていた毒で、彼方は散々苦しんだのだし」

「ま、さか…」

青ざめる士郎は自分と、自分の同級生たちを苦しませながら人外へと誘おうとした忌まわしき蛾の毒を否応なしに思い出してしまう。

そう、地下に保存されている毒ガスは単に致死性の高いガスではなく、前回の戦いで怪魔獣人ガイナガモスによって養成されていた毒蛾ガイナンを主成分とされた人間を怪人へと変貌させるガスであった。

もし噴出したガスを多くの人間が浴びてしまったら、唯一の手段であるキャスターが精製した解毒剤を持ってしても数も時間も間に合わない。こうなれば手段は一つ。毒ガスが放たれる前に、自爆装置を止めるしかない。

光太郎はこの場を離れ、ガスタンクの場所を探そうと振り返るが、何者かによって羽交い絞めにされ動きを封じられてしまった。

「そうはさせんぞッ！」

「くっ!？」

「マリバロン様ッ!私ごと間桐光太郎を『あの場所』へとッ!!」

「よく言っただぞ武陣ッ!!あそこなら確実にBLACKを葬ることができるのであろうッ!!」

武陣の言葉に頷いたマリバロンは光太郎へ手を翳し、赤い光を照射する。攻撃かと考えた光太郎はダメージを覚悟するが、放たれた光に当てられても不思議と痛みはない。その代わり身体が浮遊したと感じた直後、赤い光の消滅と共に、光太郎と武陣の姿が消えてしまった。

「光太郎さんッ!？」

「死んではないわ。けど、それも時間の問題ね。武陣の力が存分に生かせるあの場であれば、BLACKもお終いね。そして、お前も終わりよ」

光太郎の消滅に思わず名を叫んだ士郎へ光太郎はまだ死んではないと伝えるマリバロンは、自分が入室した入口から響く足音へ耳を傾けながら士郎へと宣告する。

「ここにいるのはさつきその車に轢かれたチャップ達だけではないわ。地上にあるダミーの観測所に控えていた者達もここに向かっている。爆発に巻き込まれて死ぬなんて、甘い最後は許されないわ」

マリバロンの言う通り、解放されたままの通路を見れば何者かの影が段々と大きくなっている。少なくとも3人はいるだろう。

どうにか自分だけで切り抜ける方法を模索する士郎へ、ヘッドライトを点滅させるライドロンは少年の緊張をほぐす様に電子音声を響かせた。

「心配スル事ハ無イ」

「え…?」

自分の意思を持つ赤いマシンはそう告げた時、後一步踏み出せばこの室内に敵の増援が現れてしまう手前となっていた。

「さあ、チャップ！クライシスの僕となったゴルゴムの残党共！あの人間を血祭りに——」

自分が言い切った直後に士郎の殺戮ショーを拝んだ後にゆつくりと脱出すれば良いと考えていたマリバロンだったが、その思考は振り返った際に見たボロボロとなったチャップがゆつくりと倒れていく姿を見たことで凍り付いてしまった。

「道案内」苦勞であつたな」

「まあ、ゆつくり休んでくれよ」

両手に刀を持った赤上武とライフル銃を肩に担いだ間桐慎二の姿が、そこにあつた。

「ば、バカな：！？何故お前達が：そ、それにチャップ達は：」

「地上にいる雑魚共はメデューサ殿と桜殿が相手をしてきている。もう起きている者などいないだろうがな」

「それと、上の建物の屋上にあつた無駄に大きいパラボラアンテナもついでに壊してもらつてるよ。電波は：ああ、良好良好！やっぱあれが妨害してたんだねえ」

驚愕するマリバロンへ鍰元を鳴らした武は不敵な笑みを浮かべ、隣に立つ慎二はポケットから取り出した携帯電話を操作して電波が通じることをワザとらしく強調した。

2人の登場にぽかんと口を開けてしまう士郎へライドロンは再びライトを点滅させる。だから言つただろう？と言わんばかりに。

「おのれ：：けど、結局は終わりよ！BLACKは死に、ここは爆発して人間達は怪人と成り果てるのだからツ！！」

菌噛みするマリバロンは後退しつつ、捨て台詞を放つとその場から姿を消してしまった。

お決まりだねえと息を吐く慎二はライドロンの操縦席に潜りこむと、既にライドロンが解析していた地下設備内に関するデータを閲覧する。この建物を爆破すると同時に毒ガスを拡散させるという敵の手段を既にチャップ達から尋問して聞いていた慎二はその場所を探るべく検索すると、ライドロンがモニターで映し出している凶面の中で2カ所点滅させている不審な箇所を発見。

そのどちらにもここに到着するまでに目を通していた凶面にはない空間だ。一方は現在よりもより深く、もう一方は地上へ近い場所となっている。さらに電気系統の凶面を重ねると最下層の部屋には最低限の電気配線しか送られていない。もう一方には十分な配線は勿論だが隣に非常発電機まで常備されている。

毒ガスという自分達の害を及ぼす危険物の管理をする為に必要な設備の整った保管場所となれば……こちらしかあるまい。

「場所はわかった。偶然にもこの真上にあるみたいだからとつと乗り込もう」

「止める寸法はあるのか？悪いがそちらの方には力になれる自信がない」

「…なんとかすんだよ」

毒ガスタンクの場所は把握できたが、敵が仕掛けたのは秒読みが開始された自爆である。慎二には勿論、武にも爆弾処理のような経験はまるでない。それでも、止めなくてはならない。

ライドロンには地上に戻り、メデューサ達と共に待機するよう伝えて急ぎ目標の部屋へ向かおうとする慎二達に、今まで立ち尽くしていただけであった土郎が呼び止めた。

「慎二、武さん！俺も…俺も連れて行ってくれ！」

「こりないよねお前は。付いてこられても——」

ハア、と溜息を付いて振り返った慎二は真正面から士郎のお節介を拒否するつもりだった。だが、知人の真つ直ぐな瞳を見て言葉を失ってしまう。あまりにも、自分の良く知る目とそっくりだった為に。

「…いいのではないか、慎二殿?」

「武?」

言葉を止めてしまった慎二へ静かに語りかえた武は柔らかな声で士郎へと顔を向ける。

「衛宮殿も今のような状況で、生半可な覚悟で言ったことではあるまい。それに、今は1人でも多くの者に助力が必要だ。聡明な慎二殿なら、そう考えるはずでは?」

「くっつああーもうッ! 足引つ張んじやないぞ衛宮ッ!!」

ガシガシと髪をかき乱した慎二は仕方なしに了承すると床へ八つ当たりするようにズンズンと踏み鳴らして牢の出入口へと向かっていった。素直でない少年の後ろ姿に微笑みながら武も後へ続いていくが、士郎は唯一気がかりを口にする。これは自分だけでなく、慎二にとっても同様のことではないだろうかと武を呼び止める。

「武さん、光太郎さんは…」

慎二達が駆け付ける寸前に敵の武陣と共に姿を消してしまった光太郎を心配する士郎だったが武はその事かと笑い、目的へと歩きながら説明した。

「先ほど慎二殿がライドロンで建物の内部を確認した際に光太郎殿が所持している発信機の信号も合わせて確認している。この建物の中にいることは間違いないだろう」

光太郎がどこかにいる、という説明だけで生きていくかどうかの心配など、微塵もせず話を終えた武は慎二の後を追っていく。

付き合い自体は慎二達より、むしろ自分よりも短いにも関わらず武は光太郎へ絶大の信頼を置かれていることを知り、士郎は改めて光太郎という存在の大きさを思い知りながらも、おいて行かれないよう後

を追うのであった。

「……」

光太郎は気が付けば広い空間の中央にいた。照明は点いているものの全体的に薄暗く、床には乱雑に資材が散らばっている。

そこは慎二がライドロンで分析した際に発見した図面上にない存在しない室内であり、設備の最下層に位置している場所だ。先程から光太郎は赤い複眼を光らせ、マルチアイを発動。

ゆっくりと周囲を見渡すがマリバロンの言ったガスタンクは見つからない。

ならばここに長居している暇はない。

光太郎は急ぎその部屋から離れようとしたが……

「ッ!？」

突如、自分の変身した姿……BLACKが目の前に現れ、身を引いた光太郎だが違和感を覚える。目の前のBLACKは自分とまるで同じ動きをしている。警戒しながらも接近すると、その正体が判明した。

「鏡……なぜ、こんなところに」

光太郎の身長と同じ高さ程のある縦長の鏡。先程マルチアイで探った際には、この空間にはこんな鏡は無かったはず……光太郎が鏡に触れようとしたその時であった。

「ガアッ!？」

胸に走る激痛に光太郎は胸を押さえながら後退する。煙を上げる自分の胸部を見ると、斜めに切り裂かれた跡がくつきりと残っている。

「これは…そうか、これがお前の言っていた『秘技』の正体か、武陣!!」
「フハハハハ…その通りだ!」

光太郎の前に現れた鏡の面がまるで水面に走る波紋のように歪み、その中から刀を手にした武陣が高笑いと共に出現した。

「これぞ鏡渡りの術…私は鏡の中を自在に移動ができるのだツ!!」

「鏡の中を…」

「その通り…そして、この部屋では私の術が最大限に生かされるのだ…」

武陣が手を上げた瞬間、武陣の背後に浮かぶ鏡と同様の鏡が次々と現れる。その数は30を越え、まるで円陣を描くように光太郎の周りへと移動し、左右、前後を鏡に囲んでいく。

「何なんだ…ツ!?!」

「さあ仮面ライダーよ! わが鏡地獄を味わうがいいツ!!」

後方へと跳んだ武陣は再び鏡へと潜りこむと、途端に数十枚の鏡は光太郎を中心に高速で回転を始める。

「これは…ぐあッ!!」

鏡に気を取られた光太郎の背中を切り付けた武陣は光太郎が振り向いた途端に鏡へと潜りこみ、光太郎が意識を向けていない方向から再度切りつけて鏡の中へ…

攻撃と鏡への出入りを繰り返す武陣の出現位置はまるで予測が来ず、光太郎の身体には次々と痛々しい傷が刻まれていき、ついには膝を着いてしまった。

『ハハハハハ…我が鏡渡りの術を思い知ったか仮面ライダーツ!!』

「ぐう…」

光太郎は武陣から攻撃を受け続けているが、ただやられている訳ではない。こちらを翻弄する鏡渡りの術の肝は、光太郎を囲う鏡。これ

を破壊すれば勝機は見えるはずだ。

頬に大きな傷を受けた光太郎はマルチアイで武陣が鏡へと潜った瞬間を見計らい、鏡を破壊すべく床を蹴って前方へと拳を突き出した。だが…

「なツ…い」

ダメージを負いながらも床に亀裂が走る程強く踏みつけて生じた推力はまさに電光石火の一撃のはずだった。しかし光太郎の攻撃は空を切り、鏡は相変わらず光太郎とは一定の距離を保って回転を続けている。

光太郎を一切寄せ付けず、回り続ける鏡の大群に初めて不気味さを覚えた光太郎へ、武陣は圧倒的に有利である余裕のためか、攻撃を仕掛けずに再び膝を着いた光太郎を見下すように高笑いを木霊させる。

「ハハハハハ…この鏡はガテゾーン様により頂いたからくり仕掛けの鏡…貴様の生体反応を内蔵されたセンサーが察知し、瞬時に距離を取るようにプログラムがされているのだよ」

「ガテゾーン…あの、男か」

初めてクライシス帝国と接触した際、無抵抗となった自分をいたぶるボスガンを止め、自分をクライシス要塞へと運んだ一つ目のロボット怪人の姿が脳裏に浮かぶ。クライシス帝国の中でも不思議と存在感のある男の質問に光太郎が答えた後の反応が、今でも忘れられなかった。

『他人の為に、ねえ…分からねえな』

今まで光太郎が敵対した相手は、誰かの為に戦うという意味を示した時は決まって下らない、愚かな考えであるとして一笑に伏していたがガテゾーンの反応は違った。

本当に理解が出来ていないような、迷いが見受けられた。

「さあ、お遊びはここまで…覚悟してもらおうツ!!」

再開された武陣の攻撃に、光太郎はただ身構える事しか出来なかった。

「これだ…」

ライドロンが開示したデータを基に発見した室内へと入った慎二と一郎が見たものは、空間の半分以上のスペースを使って設置された貯蔵タンク。間違いなく、人間を怪人へと変貌させる毒ガイナンが保管されているものだ。

「時間は…チツ、あと3分切ってやがる!」

腕時計が指している時間を確認した慎二は舌打ちすると即座に起爆装置のある場所を探し出す。一郎も続いて周辺を見渡すが、扉一枚を隔てて起きている戦いの方へと意識を向けてしまう。

(いや、集中しろ一郎。武さんは何のために囷を買って出たんだ…)

それは目的地を発見した直後の時。

扉をいぎ開けようとした途端に突如3人を電撃が襲い、振り向いたその先にはサイボーグシカ怪人が巨大な角へ帯電させながら接近し、その背後には武装したチャップ達の姿があった。

それぞれ武器を取る慎二と士郎だったが、武はそんな2人に室内へ入って急ぎ爆発を止めるよう促し、武自身は怪人達へと斬りかかっていったのであった。

(どこだ、どこにある…！)

武に戦いを任せた慎二達は急ぎ部屋へと飛び込むと室内の探索を始めるが、関連するものは現在も見つからない。時間だけが経過していき、次第に焦っていく慎二はまだ室内で目を向けていない部分の推測をしていく。

(室内に唯一置かれているデスクトップのパソコン：キャビネットの中：今衛宮が開いて確認している分電盤の中：改めて考えてみればまるで気を引いているかのように、不自然な配置。だとすれば…)

「お、おい慎二ッ!？」

慎二は呼びかける士郎の声にかまわず、室内のガスタンクの上へと昇り始めた。やがて天井との幅が1メートルもないタンクの上部に到着した慎二は、タンクの中央部にある長方形の部位が、天井の点検口からはみ出ている無数の配線と繋がっている状態を発見する。

長方形には赤いデジタル数字が表示され、その数は段々とゼロへと近づいている。

間違いない――。

「…これか!」

「み、見つかったのか!？」

「ああ、あとはこいつを――」

慎二に続いてタンクの上部へ到着した士郎に同意し、屈んだまま起爆装置へ前進する。残り時間は約2分。後は柳洞寺で控えているキャスターへと連絡し、正確な位置を教えれば転移魔術で起爆装置のみを海にでも放り出せる。それで解決するだろうという安心感が、慎

二を油断させてしまった。

起爆装置へと進む途中、慎二はブチリと何かが千切れた音に思わず足を止めてしまう。

背中に嫌な汗が流れると共に膨らむ嫌な予感。

慎二の予感は当たり、慎二の足によって切断されたワイヤーがスイッチとなり、起爆までの時間が残り30秒を切ってしまった。

「くそッ……こんな仕掛けを……」

初歩的なブービートラップ。

こんなものに引っかかってしまうなんてという後悔の時間すら惜しい。急ぎ電話を繋ごうとするが、携帯電話を手を取った時点で残り15秒。宛先を探し、コール音が鳴っている途中で爆発してしまう。

もはや、手遅れだと、普通なら諦めるだろう。だが、慎二は諦めることを知らず、何かをなそうと自分が持ち合わせている工具をタンクの上へと広げた。

士郎は知らなかった。中学時代から知る友人が、こうまでして戦うことを諦めない事を。そう、彼の戦いは敵を倒すという単純なものじゃない。人知を超えた能力を持つ怪人と対等に戦う事ができなくても、こうして自分に出来ることで戦い続けている。

(…すごいな、慎二は)

見誤っていたのかも知れない。慎二と、妹の桜も同じ年代の少年少女から比べられぬ程に強いだろう。それはただ相手に勝つ為だけの強さじゃない。憧れ、慕っている彼等の兄のように誰かを守れる強さなのだ。

(なら、俺は…)

自分の手を見つめる士郎に、心に響いた言葉が甦る。

『もう二度と負けない為に強くなり、そしてそいつらを守り抜くという誓いを貫き通す。そいつを俺達は…『正義』って呼んでいるぜ』

『今自分の持てる力で全力を尽くす。それが俺の戦い方だ』

(俺に出来ることを、全力で…！)

慎二が彼の行動に気が付いたのは、自分の持つ工具の中からニッパを奪い取るように掴み、既に起爆装置へと手で触れていた。

「おい、衛宮——」

何をするつもだと慎二が言い切る前に、士郎はその言葉を口にす。修行を始めたあの日から、自ら生み出したスイッチとなる言葉を。

「——トレース・オン同調、開始!!」

士郎の魔術回路を走る魔力が起爆装置へと浸透、回路内を駆け巡っていく。

「——基本骨子、解明」

士郎唯一の魔術である投影。その前段階であった強化。そしてさ

らに強化へ辿るまでに行う物体の「解析」。士郎はこれにより学校の備品などの修理や補強を繰り返していた。

目の前にある起爆装置もまたそれらと同じ機械。中にある伝導体や配線が、どの役割を果たし、何のためにあるのかを読み取ることなど、士郎に取って造作はない。

(そうだ…今俺が全力で出来ることは、これだ！)

頭に浮かぶ起爆装置の全体図。その中で最後に装置を起爆させる為に必要な配線を見つけ出す。これさえ切り裂けば、爆発は止まる――

目を見開いた士郎は起爆装置から手を離すと瞬時に夫婦剣の片割れを投影し、起爆装置の一部を切り裂く。

露わになった無数の配線のうち、ただ一つだけをニッパーにて切断した。

作業を終えた士郎がゆっくりと表示灯へと目を向ける。

時間はゼロとなっていたが、爆発する様子はない。

背後で息を飲んでいた慎二は緊張の糸が切れたように、その場へ座り込んでいた。

(どうやら、慎二殿達は上手くいったようだ。ならば…)

この危機をどう脱しようかと赤上武は折れてしまった刀を見つめていた。

以前サイボーグ怪人と対峙したアーチャーに習い、敵の関節部を狙って攻撃をしかけたもののサイボーグシカ怪人の電撃を受け、チャップ達の援護射撃という不利な状態であるにも関わらず、武は慎二と士郎が入った部屋の前から一步も動こうとしなかった。

この先で覚悟を決めた少年たちが死力を尽くして戦っている。ならば、露払いは自分の役目であると決めた武は自分の持つ技の全てをサイボーグ怪人へとぶつけた。だが、力の差はあまりにも大きかった。

(まったく…こんな時にあの忌まわしい力があればと一瞬でも考えてしまうとは…俺も修行不足だったか)

蓄積されたダメージに目の焦点が合わなくなってきた武の前に立つシカ怪人の角に再び電気が宿る。この距離で電撃を浴びてしまえば一たまりもないと頭で理解していても身体がいう事を聞いてくれない。

電撃が今にも放たれようとしたその瞬間。

真横から放たれた鉄パイプによって狙いは外れ、電撃はあらぬ方向へと流れていった。

「なんだってんだこの建物は…結城さんから送られた地図とてんで違うじゃねえか」

意識が朦朧とする武の眼に映ったのは、見たことも無い戦士の姿だった。

「まあ、無事に辿りつけたからいいわな。それに厄介な爆弾とやらも止まったようだし…後はテメエらを片付ければお終いだ」

白いマフラーを靡かせ、こちらへと歩み寄る度に足の裏と床との間に電気が生じている。みれば赤く、アメフトのプロテクターを連想させるような胸部やカブトムシの意匠があるアンテナからも電気が迸っている。

標的を武から戦士へと切り替えたサイボーグシカ怪人は再度角へと電気を走らせ、戦士へと爆進する。

「…いい度胸してるじゃねえか。俺と電気で競うなんてよ」

その突進を受ければ丸太すら折れてしまうような攻撃。その攻撃

を、戦士は角を掴む形で受け止めた。

「へっ…他の国でとつちめた連中よりも骨があるじゃねえか。だがな…」

緑色の複眼を持つ仮面の下で、戦士は笑った。笑った直後に、目を閉じなければ潰されてしまう程に、激しい電気が室内に発生する。

ゆつくりと目を開けた武が目にしたのは、角が黒焦げとなり、前進から火花が散っている無残な姿と成り果てたサイボーグ怪人だった。「俺とやりあうには、ちいとばかり力が足りなかったようだな」

戦士が手袋を詰め直すような仕草をした直後、活動を停止したサイボーグは音を立てて沈むのであった。

援護していたチャップ達はサイボーグシカ怪人が敗北したと悟った時点で逃げ出しており、この場にいるのは壁に寄り添ってなんとか意識を保っている武と、異形から人の姿へと戻った戦士ただ2人。

「お、前は…」

「よくまああの連中相手に生身でやったもんだ。滝さんに負けず劣らずってとこだな」

声を絞り出して尋ねるが前のめりに倒れる武を受け止めた戦士は自分の良く知る人物と連想すると彼をゆつくりと座らせる。そして意識を失いつつある武にある言葉を残し、その場を後にしてしまう。

「門矢の小僧からの伝言だ。お前が持つてるドライバー、無くさずに持っていていろだと。それと——」

「あの悩んでた小僧に言っといてくれ。自分の正義は見つかったの
かってな」

士郎によつて爆破が阻止された時を同じくして、光太郎は倒れはし
ていないものの、全身を武陣の刀で切り刻まれ、特に深く傷ついた左
腕を右腕で庇いながら立ち尽くしていた。

「なんとしづとい奴だ。死ねばさっさと楽になるものを」
「……………」

光太郎の周囲を回り続ける鏡から全く姿を見せない武陣の言葉に
耳を貸さず、ある事に気が付いた光太郎は痛む身体に鞭打って、大き
く一歩全身した。

途端、やはり鏡は光太郎から一定の距離以上縮めることはない。武
陣の言う通り、光太郎の接近を許そうとはしなかった。しかし、光太
郎はそれこそが鏡の欠点であると見抜いていた。

(あの鏡は俺からある程度の距離を保っている。接近させないが、今
以上に離れようとしていない…)

それを試すための一歩。光太郎の前方にある鏡達は光太郎から距離を離すが、背後を回る鏡も光太郎の移動に合わせて踏み出した分接近している。

恐らくは光太郎の攻撃範囲と武陣の鏡渡りの術を最大限に生かせる距離が、今の間合いなのだ。

(これで奴の攻略する方法は掴んだ。後は…いや、悩んでいる場合じゃない)

光太郎は両足に力を込め、背筋を伸ばす。鏡の中に潜んでいる武陣はどうとう観念したかと考え、光太郎の背後の鏡へと移動。背後から急所であるキングストーンごと貫こうと刃を差し向け、鏡から半身を出した時だ。

光太郎は両腕を左右に展開。ベルトの上で両拳を重ねたと同時にベルトの中央から赤い輝きが放たれた。

「キングストーンフラッシュユツ!!」

数々の奇跡を起こしてきたと言われるキングストーンから放たれる輝き。だが、これに対しても武陣は予想済みであると再度鏡の中へ潜りこむ。

様々な能力を秘めていようが所詮は光。自分が潜む鏡には反射されて、自分には届くはずがないと薄ら笑う武陣。

だが、その反射される光こそが、光太郎の狙いだった。

「ウオオオオオオオオオオツ!!!」

鏡によつて反射されたキングストーンフラッシュは当然光太郎へと向けられ、赤い光を浴びた光太郎は絶叫する。だが、それは攻撃を受けた苦しみによる雄叫びではない。

「さあ、今こそ止めを——なツ!？」

武陣が驚くのも無理はない。

光を受けた光太郎の腹部にある玉石は自らの光を受けた事でさらに輝きを増し、傷ついた光太郎の身体を次々と癒していく。

そして、変化はそれだけではなかった。

光を纏った光太郎は右手を天に翳し、左手をベルトの前へと移動。

右手首の角度を変え、ゆつくりと右腕を下ろすと素早く左肩の位置まで手首を動かし、空を切るような動作で右側へと払うと握り拳を作り脇に当てる。

その動作と同時に左手を右から大きく振るって左肩から左肘を水

平にし、左拳を上へ向けた構えとなる。

光太郎の赤い複眼の奥で光が爆発する。

体内で精製される『ハイブリットエネルギー』により光太郎のベルトは2つの力を秘めた『サンライザー』へと変化。

サンライザーから放たれる2つの異なる輝きが光太郎の全身を包み、彼を『光の戦士』へと進化させた。

黒いボディの一部が深い緑色へと変わり、胸部には太陽の力をエネルギーへと変換する『サンバスク』が出現。よりバツタへとイメージが近づいた仮面、より強く光る真つ赤な目を思わせる複眼と一對のアンテナ。

「俺は太陽の子——ッ!!」

「仮面ライダーBLACK!!RX!!!」

「ば、バカな…!?!」

BLACKからRXへと姿を変化した光景に武陣は理解が追いつかなかった。なぜ、太陽がなければ変身できないRXへと変わる事が出来たのか…

(ま、まさか奴は、反射させた光を太陽の代わりに…そんな事があるのかッ!?)

目の前で起こされてしまったからには認める他ない。光太郎の起こした奇跡に武陣は身を引き締めて再度攻撃の機会を伺う。

まだ、こちらの方が圧倒的に有利なのだ。

「まさかその姿へと変わるとはな…だが、いくらRXと言えどこの鏡渡りの術に打つ手はあるまいッ!!」

「残念だが、その打つ手を使わせて貰うッ!!」

鏡の回転を更に早め、光太郎を追い詰めようとする武陣に対し、即座に言い返した光太郎は右手を前方に突出し、左手を腰に添えた構えを取った。

「リボルケインッ!!」

左腕を大きく回しながら広げた手を腹部のサンライザーへと翳す。

サンライザーの左側の結晶から幾層もの光の線が重なり、洗練された円形の柄が現れた。

中央の赤いダイナモが柄を光太郎が掴むと同時に光を迸りながら高速で回り出し、柄を引き抜くと光のエネルギーが凝縮されたりボルケインが姿を現す。

左手から右腕へと持ち替え、さらにリボルケインを真上へと翳す。

リボルケインの光は上空へと向かい急激に伸び、まるで蛇のようなうねりを見せた。

「なんだとツ!!」

武陣の驚きはそれだけではない。リボルケインを鞭のように変えた光太郎は大きく振り回し、彼の周辺を回り続けていた鏡を次々と破壊していった。

「ウオオオオオオオオオオツ!!」

光太郎の咆哮と共に砕け散っていく鏡。その中から一つの影が飛び出し、刀を光太郎へと向ける。無論、鏡ごと砕かれることを恐れて脱出した武陣だ。

「鏡渡りの術、やぶれたりツ!!」

「お、おのれいいいいツ!!」

最も得意とする技が敗れた事により逆上した武陣は羽織ったマントを前方に投げ出しながら光太郎へと駆け寄っていく。

追い詰められたこの状況で考えなしにマントをこちらへと放るはずがないと考えた光太郎は自分に迫ったマントを飛び込みながら回避。着地したと同時に響く背後の爆発は、恐らくマントに仕込まれた爆弾なのだろう。

本当に最後の切り札を使い切った武陣に残されたのは手に持った刀のみ。

両手に持った刀を振り上げ、着地したばかりの光太郎を真つ二つにしようと唐竹目がけ全力で振り下ろす！

しかしそれを見抜いていない光太郎ではない。

武陣が振り下ろすよりも早く、手にしたりボルケインを武陣の腹部へと突き刺した。

「ぬ、がああああああああッ!!」

「ムウンッ!!」

さらにリボルケインを深く突き刺す、武陣の体内へ光のエネルギーを注ぎこんで行く。

武陣の体内で飽和状態となったエネルギーがリボルケインが突き抜けた背部と、関節から火花となって漏れ始める。

武陣からリボルケインを一気に引き抜き、断末魔の声を背にして光太郎は大きく光の杖を頭上で旋回。

両手首を頭上で交差し、左手をベルト サンライザーへ添え、リボルケインを握る右腕を振り払う。

残心の構えを取ったと同時に地へ沈んだ武陣は大爆発の中へ消えるのであった。

「ありがとな、慎二」

「はあ？いきなりなんだよ」

気を失っている武を2人で肩を組みながら移動する中、士郎の言葉に慎二はまるで理解できなかった。文句は言われるような言葉を浴びせた事に心当たりはありすぎるが、礼を言われるようなことは言っていない。

「いや、お前があの時言ってくれなかったら、俺はただ強くなるうとただけだったからさ」

「だから、ありがとう」

「意味わかんねえ…」

思わず目を逸らした慎二が見た士郎の顔は、弓道場で見せた焦りしか見せた顔とまるで違い、晴れ晴れとしている。まるで求めていた答えにたどり着いたかのように。

彼に一体何があったのか。

そんな疑問を抱きながら階段を上がっていった先では、地上の敵を倒した桜とメデューサ。そして先に到着していた光太郎が笑顔で出迎えたのであった。

「まったく、たまの休みに日本に戻ったらとんでもねえお使いになっちゃまったな。まあ、いい土産話も出来たことだしな」

赤いバイクに跨り、後輩と見知った少年たちが再会する様子を離れた場所で伺っていた戦士はヘルメットを被るとバイクを反転させ、静かに発進させる。

「さあて、久々に顔見せにでも行くとするか」

海が見渡せ、美しい花が咲き誇るそこは、彼の掛け替えのない存在が眠る場所でもある。彼…城茂にとって世界の平和を守ることと同様に、大切な場所だ。

「んじや、頑張れよ。後輩」

「ん…？」

「どうかしたのですか光太郎？」

「いや、なんでもないよ。ミノル君が無事だったことを、はやくカオリちゃんに伝えなきゃね」

「はい」

誰かの気配を感じ、思わず振り返った光太郎だったがメデューサ共に家路へとつくのだった。

第28話

クライシス帝国は毒ガス衛星の量産計画の為に間桐光太郎の友人、東堂穰を始めとした電気技術者を次々と誘拐し、その魔の手は学校で備品の修理を行っていた衛宮士郎まで巻き込まれてしまった。

毒ガス衛星を建造する知識とクライシス帝国への忠誠を強要するための装置が士郎へと取り付けられようとしたその時、彼等を救出すべく、ライドロンに搭乗した光太郎：仮面ライダーBLACKが現れた。

葛木宗一郎とメディアの協力によって士郎達が隔離されている施設を知った光太郎や慎二達は技術者達を逃がすとそれぞれの戦いを開始する。

鏡の中を自由に行き来できる術を持つ怪魔妖族 武陣と戦いを開始した光太郎。

施設を放棄したマリバロンによって起動した時限爆弾の解除へと向かう間桐慎二と士郎。

その2人を行かせる為にサイボーグ怪人へと立ち向かう赤上武。

起爆装置を発見した慎二だったが敵の仕掛けた罠にかかり、爆発までの時間が早まってしまふ。しかし、士郎の強化魔術の行程にある『解析』によって爆破に繋がる配線を切断することで、爆発を阻止することに成功。

同じ頃、サイボーグ怪人によって追い詰められた武は電気を操る謎の戦士によって助けられる。戦いのダメージによって意識を失いかけた武へ、戦士はメッセージを残してその場を去っていくのであつ

た。

敵の術中に嵌り傷を蓄積していく光太郎だったがそれを逆手に取り、放ったキングストーンの光を自ら浴びる事でRXへと変身。リボルケインの鞭攻撃によって武陣の鏡渡りの術を破り、必殺のリボルクラッシュで武陣を打ち破るのであった。

メデューサ達と合流し、互いの無事を喜ぶ中、光太郎は自分へ呼びかけたような気がして振り返るが誰も居らず、バイクが遠ざかっていく音が微かに聞こえるだけであった。

衛宮家

そこは許された者しか立つことが許されない、家主にとっては神聖なる領域。

本来であればその人物には踏み入って欲しくないというのが本音であるが背に腹は代えられない。

自分の目標の為ならば、と士郎はその男の背中を見つめていた。

「では、始めるとするか」

男は準備された刃物を手にし、眼下にあるそれに左手を添え、慣れた手つきでゆっくりと刃を通す。

トン：とそれの下に予め敷かれていた木製の板へ下ろされた刃物

が当たり柔らかな音が響く。

男は無言で刃物を上げると左に用意されたケースへ丁寧に置き、今度は右側へ準備された新たな刃物を手に取り、同じ動作を繰り返す。

きざんでは刃物を替えていく肯定が十数回繰り返される中、士郎はただ見ているだけだ。

やがてそれが32回目となった時、男の手がピタリと止まる。

「……どうやら、ここで集中力を切らせたようだな」

「っ……!？」

息を飲む士郎へ目も向けず、刃物を置いた褐色の肌、白髪の男は無情なる言葉を浴びせる。

「言った通りに最初からやり直した。ただし、本数は倍にして貰おう」
「……分かった」

士郎は男の指示に素直に頷くとその場から離れ、彼の工房とも言わべき土蔵へと向かっていく。一連の流れをカウンターに肘をついて眺めていた遠坂凜は目を細めて尋ねてみた。

「……いいの？倍以上の投影になると、あいつの魔力が底をついちやいそうだけど」

「かまわん。限界に近付いた状態でもなお同じモノを生み出す。あの者に出来るただ一つのことをギリギリの状態でも出来ないようであればこの先上へは目指せん」

「まあ、それが彼方の方針だというのなら文句はないわよ。只ね——」

溜息混じりに凜は男：アーチャーの前に並ぶ刃物達を見て呆れながら頬杖を付く。

「いくら投影魔術の指導だからって：キャベツの千切りで一回刻むごとに包丁を替えるっていう試験もどうかと思うわ」

アーチャーが立つ衛宮家のキッチン：そこには既に均等に切り分けられたキャベツの乗ったまな板を間に置き、一度使われた包丁と未使用の包丁それぞれ20本以上が鎮座されていた。

武陣との戦い以来、自分に出来る事を見つめ直す士郎は唯一の魔術である強化と投影の完成を高める為にアーチャーへと師事を仰いだ。最初こそ門前払いであったが頭を下げ続ける士郎の姿を見た凜の鶴の一声に溜息をついて了承したアーチャーはまず課題を与えた。

その内容は外見・質量・切れ味が全く同じ包丁を50本投影する。微々たる違いが出た場合は数を倍にしてやり直しという過酷な内容であった。

士郎は言われた通りに包丁を50本投影し、アーチャーへと提出するとすぐに鑑査が開始される。外見はルーペ、重量は元となった包丁と秤を使って図るなど事細かな内容で進んでいき、最後は切れ味を残すのみとなった。予め準備されたキャベツを包丁で刻んでいき、僅かながらも切れ味が異なる包丁が見つかり、約束通り投影のやり直しとなってしまうた。

厳しすぎる内容に思える凜であるが、幾度と起きた戦いの中で投影

魔術を熟した士郎に対し、今更武器ですらない投影など、基礎の基礎を課題にするのかが疑問であった。

「…奴はなまじ実戦の中…土壇場で投影魔術を高めていった。だが、方法を知っただけで身に染み込ませた訳ではない。だから僅かでも気を逸らせば見た目は同じでも違うモノを作ってしまう」

衛宮士郎の可能性であった存在だから理解できるアーチャーは投影後、未だ消滅しない包丁を手に取りその刃を見つめる。彼に今必要なのは一度イメージした後、意識を別の方へと向けようが投影を完全な形に完了させる。熟達させることにある。

これから先、士郎が投影という唯一無二の魔術をどう扱うかアーチャーにすらその先は分からない。だからこそ、生半可で場馴れした『技』ではなく、基礎を徹底的に叩き込まれた『術』が必要となる。

「…へえ」

「なんだねその顔は」

「べつつにー?」

ニヤニヤと笑う凜に横目で尋ねるアーチャーだったが、あの顔を見れば尋ねるまでもない。自分が衛宮士郎に対し、随分と心を許したなと言いつつ出そうとしているに違いない。見当違いも甚だしい思い違いをしている主がイジリに入る小悪魔モードへとなる前に、話題を切り替えることにした。

「それはそうと凜。今回の課題は君にもメリットがあるものだぞ?」

「…なによメリットって?」

「衛宮士郎が投影した包丁だが、これ程の数があっても使い道がない」

「それはそうよね」

「そこでだ。近日中に新都で行われるバザー市で売ってしまえばその売上げで君が先の戦いで消費した宝石の補充も——」

「温いわよアーチャー、3倍は作らせなさい」

自分の欲望に忠実過ぎる凜であった。

衛宮家の武道場

「……………」

道場の中央に無言で正座し、目を閉じている男…赤上武。

彼は士郎の許可を得て道場に入り、小一時間ほど動くことなく座していた武はそれまで閉ざしていた目をゆっくりと開けると、自分の前へと置かれた因縁深い道具へと目を向けた。光太郎の変身したB L A C Kとは違い一つ目の鋭い眼光を放つ複眼と三日月型の鍬形を持つヘッドギアの横顔が描かれ、小刀のような装飾が付いたベルトのバックル。

武はその名称を未だ知らない。だが、自分を助けてくれた恩人が指したものは、間違いなくこれであろう。

その道具は別の世界で開発者の名を取られ、こう呼ばれている。

戦極ドライバー。武を武神鎧武へと変身させる道具だ。

しかし変身する為に必要であるもう一つの道具であるロックシードは以前の戦いで破損してしまい、二度とあの姿になることはない。砕けたロックシードを目にした時は、自分を殺戮者へと誘おうとする声も聞こえなくなり、誰かを悲しませる事は無くなったと安堵した程だ。

だが先日の戦いの折、窮地に陥った自分を救った戦士の言葉がどうしても忘れることが出来なかった。

『門矢の小僧からの伝言だ。お前が持つてるドライバー、無くさずに持っていていろだと』

門矢という人物の名に、覚えはない。もし戦士の言葉をそのまま受け取るとするならば…その人物は武が戦いの際に一瞬考えてしまった事を可能にすることが出来るのかも知れない。

気が付けば、武は戦極ドライバーを手を取っていた。

(もし、もう一度変身できたとしても、俺は…彼のように戦えるのか?)

間桐家

「あの…メデューサーさん」

「なんででしょう?」

「もう大丈夫だから——」

「駄目です」

自室のベットで横になっている間桐光太郎の言葉を間髪いれず遮ったメデューサーは椅子に腰かけたままジッと光太郎を見つめていた。

友人である東堂穰や他の技術者達を救出した後、光太郎は突如倒れてしまう。光太郎本人は気を失うことはなく、全身に力が入らず立っ
ていられなくなってしまった事に本人が驚いていた。話を聞いたメ
ディアの考えでは、原因はRXへの無理な変身にあるという。

元々は太陽の力を借りての変身にキングストーンの光を代理に使
うとなれば相応のエネルギーを消費してしまう。さらにはRXの力
になって肉体の負担は減ったとはいえ、RXの凄まじい力を振るう為
のハイブリットエネルギーの消費までは抑えられない。

その結果、キングストーンの力は急減し、光太郎自身が身体を動か
すことが困難になってしまったとの見立てだ。

戦いから一日が経過し、動けるようになった光太郎だったがメ
デューサがそれを許さず、今日一日は大人しくして貰うとベットに寝
かせ、こうして監視しているのだ。

心配してくれるのはありがたいが、太陽なしでもRXへと変身出来
た光太郎にとっては一秒でも早く他の案を模索したい一心だ。今回
は多量の鏡があつてからこそ出来たが同じ手段が続くとは思えない。
そうメデューサに説明したが、帰ってきた言葉が：

「…その度に、私達の前で倒れるつもりですか？」

目を潤ませて、震えるような声だった。

そう言われてしまえば何の反論も出来ない光太郎であった。いつ
でもRXとなる方法を見つけても当人の光太郎が力を消耗し、倒れて
しまつては意味がない。彼等の周りが求めているのは光太郎が強
くなることではなく、生きて帰ることなのだから。

「…ごめん」

ようやく絞り出した声を聞いたメデューサは目を拭い、無抵抗の光太郎の頭をそつと撫でる。その行為がどうにも気恥ずかしい光太郎は視線を逸らしてしまうが、珍しい光太郎の表情を見て、可笑しく思ったメデューサはいつの間にか笑顔を咲かせていたのであった。

「…出直すか」

「ですわね」

扉の一枚向こうで2人の会話を聞いていた慎二と桜。

手にはそれぞれスポーツ飲料水と食べやすいサイズに切り分けられたリンゴを乗せた皿を持ったまま踵を返す。今の状態で部屋に入るほど、2人は空気を読めない朴念仁ではない。

同じ頃、知人達と待ち合わせをしていた真祖の姫、アルクエイド・ブリュンスタッドはベンチに腰掛けボウつと青空を眺めていた。

「なあなあいいじゃん？ちよつとそこでお茶するだけだしさあ」
「そんなに時間は取らせないって」

と、先ほどから聞こえる複数の雑音に耳へ傾けず。

以前にも志貴と待ち合わせしていた時にもこんなことがあったなあと思ひ浮かべるアルクエイドは相も変わらず上の空だったが、どうやら今回は以前のように粘り強い人間ではなかったらしい。

「てんめえ…いつまで無視してんだよッ!!」

ナンパ男のリーダーらしき人物が痺れを切らせて強引に連れて行くこうとアルクエイドに手を伸ばす。

男にとって、相手が悪すぎた。彼女がその気になってしまえば触れた途端にその掴んだ腕が細切れにさえしてしまふ恐るべき存在であるのだが、男がそれに気付くことはこれからもないだろう。

それよりも恐るべき存在に目を奪われてしまったのだから。

あと数センチでアルクエイドの肩に触れようとしたその前に、男の腕は横から飛び出した手によって掴まれてしまう。男は邪魔をした相手を確認する前に腕に走る激しい痛みと嫌な浮遊感に襲われる。

「いででででえーッーッ!!」

男は腕を掴まれたまま、黒いコートを纏った月影信彦に持ち上げられていた。1人の成人男性を軽々と、しかも無表情で持ち上げている存在に他の男達は思わず後ずさってしまふ。

「は、離せ、離せ——ッ!!」

聞き苦しく耳触りな声に信彦は男の要求通りに手放すと、急に離された為受け身を取れず尻餅を付いた男は、他の取り巻きに連れられて脱兎のごとく逃げ出したのであった。

「…なんのつもりよ」

と、不愉快であることを全面にだすアルクエイドの質問をぶつける。あのような輩、信彦の手など借りる前に彼女の持つ魔眼で追いつくことだってできたのだ。それに、助けに入ってもらうとしてもこんな無愛想な奴よりも本日も自分を呼び出した少年の方が良かったという本音を口に出そうになった時、信彦はさも当然のように先ほどの質問に応じる。

「この場に警察がくるような状況にしたくなかっただけだ」

「なっ!? アナタ…私をなんだと思ってるのッ!?」

「…聞きたいのか?」

あーあ、また始まっちゃったよと信彦の内側で様子を見守っていたアンリマユは自分に手があるのなら額を押さえたい気分へと変わった。以前よりは解消したものの、相も変わらずギスギスしており下らないことで険悪な雰囲気となる。が、悪化する前に緩和剤となるべき存在が現れた事にアンリマユはほっとしてしまふ。

「すまん、遅れちまったッ!!」

「遅いわよ! どうしたの今日は」

「いやあ、日に日に琥珀さんがしかけた家のセキュリティが上がってき…秋葉たちの目を盗んで脱出するのに「苦労だったんだ」

何やら疲れた様子である遠野志貴は不機嫌となってしまうアル

クエイドに謝罪しながらも信彦へと顔を向ける。

「すみません。遅れてしまつて」

「かまわん。さつさと行くぞ」

「わかりました」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!」

全員がそろつた所でさつさと目的を果たすべく進んでいく信彦に志貴も続いて歩きだし、置いて行かれると急ぎ2人の背中を追うアルクエイドはふと思ひ出した。

そういえば、先ほどの信彦のように弱つた時の自分を助けた者がいたと。

第29話

クライシス帝国による誘拐と毒ガス衛星製造の計画を阻止して数日後。

衛宮士郎は利用されながらもアーチャーに投影魔術の指南を受け、今の自分に出来る事に全力で挑んでいた。

同じ頃、衛宮家の道場を借りていた赤上武は自分の危機を救った戦士の言葉を思い返し、自分に力が戻った場合にどのような選択をするのかと自問する。

そしてRXへ強引に変身を遂げた反作用で身動きが取れない状態になってしまった光太郎は太陽なしでRXへと変わる方法を模索しようとするが、それが自分の隣にいる存在：メデューサを不安にさせてしまうと知り、彼女の言う通りに身体を休ませることしかできなかった。

一方、遠野志貴たちと待ち合わせの場所でナンパを受けていたアルクエイドは助けに入った月影信彦の姿を見て、度合は違うがかつて同じように助けられた状況を思い出していた。

彼女は夢を見ていた。

自室のベッドで陽が高く昇るまで微睡んでいて

自分の寝姿に呆れながらも食事を作りに来てくれる彼が近くにいる

彼に目覚めの口づけを求めて満面の笑みを浮かべている。

そんなありもしない、残酷な夢を。

「あ……」

目覚めたアルクエイドはいつの間にか自分が気を失い、倒れていた
以上に自分が夢見ていた事に驚いた。

自分に与えられた『役目』以外の時間は常に眠りについていてアルクエイド・ブリュンスタッドが知識でしか知ることのなく、初めて見た夢――

(そうか…私って夢が見れたんだ)

震える身体を強引に立ち上がらせたアルクエイドはこの場と街全体に展開されてしまっている術式へと目を向ける。その周辺は自分の手によって死滅した死徒の纏っていた衣服と戦闘の跡が痛々しい姿で残っていた。

ただの悪戯のつもりだった。

自分に対して本当に吸血鬼なのかと、そんな小馬鹿にするような発言をした少年を少し困らせてやろうとしただけだった。

彼の細く、白い首筋にそっと口を近づけた――

それがいけなかった。

ただでさえ残る力が少ない中で必死に抑え込んでいた人間の血を欲してしまう激しい衝動…吸血鬼にとって決して逃れる事の出来ない衝動を抑えていた枷が音を立って崩れ始めてしまった。

破壊衝動に置き換え、死徒を蹴り殺しにしたとしても抑え込めず、聖堂教会の埋葬機関であるシエルが介入しなければ、自分は…確実に遠野志貴の血を吸っていた。

逃れるように志貴から離れたアルクエイドは途中で工場地帯で落下。その場で偶然にも敵である吸血鬼が仕掛けた術式を発見するが、術式を守るように現れた無数の死徒が襲い掛かる中、我武者羅に力を振るった後に力尽きてしまう。

そして夢の中で自分の隣にいてくれる少年の顔を思い浮かべて、アルクエイドは頭を振った。

(ただ目覚めて、殺していれば良かっただけのはずなのに…)

元々今回は自分が助からないことを承知の上で目覚めた。だと言うのに今更一人の人間に恐怖され、会えなくなることの方が怖くなっているなど、本当にどうかしている。

やはり自分は本格的に壊れてしまったのだろうか。

迷いを断ち切る為に、アルクエイドは息を荒立てながら発見した術式が人間の精気を収束させる場所へと向かう。

この時のアルクエイドは気付いていない。

本来の目的である吸血鬼の討伐よりも、術式が発動することで志貴が死ぬことを阻止することが大きくなっている事を。

そして、目的を果たそうとするあまり意識を外に向けず、自分の背後に危機が迫っていたことも。

(馬鹿な…)

月影信彦は脳裏に過る嫌な予感を否定しながらも街中を駆けていく。人目が多いため全力で走れないことを齒がゆく思いながら、ある場所を目指した。

今は自分の中にいるアンリマユは眠っている。こんな時彼の無駄口を聞いていれば少しは気が紛れたかも知れないと考えてしまう自分が不思議であつたが悩む時間すら惜しい。

一刻も早く確かめなければならない。

(生き残っていた事は不思議ではない。だが、なぜ今になって現れる?)

自分が宿敵と共に怨敵を葬った直後に統率が崩れた連中はバラバラとなり、その大半が日本から逃亡している。再起を誓い日本以外で戦力を整えている連中もいるという噂も耳にしていたが、なぜ自分という脅威がいる場所へと現れたのか。

そしてこれが最大の疑問。

信彦が察知した気配と共にいる存在：今は自分と対峙した時とは比べものにならない程に弱々しくなっているようだが、彼女に間違いない。

なぜゴルゴムの怪人達が、真祖の姫に接近しているのだろうか。

ようやく人目の付かない場所へと出た信彦はシャドームーンへと

姿を変え、真向いにあるビルの屋上へと跳躍。そして付近のビルを足場として急ぎアルクエイドがいるであろう場所へと向かうのであった。

「あうツ!？」

短い悲鳴と共にアルクエイドは資材の積まれた山へと背中を叩き付けられてしまう。資材が砕け、粉塵が舞う中でどうか身体を起こそうとする彼女へと近づくのは仇敵の使いではなく、人類の天敵とも言うべき異形の数々。

翼をはためかせてるハエ怪人。

巨大な目を瞬きさせるキノコ怪人。

不気味な笑いを振りまくアネモネ怪人…

その背後には10体以上の怪人素体が手に武器を持ち、ゴルゴムの残党はアルクエイドへ這いよっていく。

(…そうよね。王様がこの街でノウノウとしているんだから配下がいたって不思議じゃない、か)

ヨロヨロと立ち上がるアルクエイドは怪人の出現に驚きを隠せなかったが先日衝突したゴルゴムの世紀王が存在する以上、怪人達を連れていてもおかしくない。

事実は違うのだがアルクエイドにはそれを知る術はない。目の前に迫る脅威に、真組の姫は朱く澄んだ眼を禍々しい血の色へと染め上げていく。

「アアアアアアッ!!」

咆哮と共に駆けだしたアルクエイドが振るった爪は素体数体を難なく切り裂くが腕、足が切断されても動き続ける素体のしぶとさに躊躇するが、アルクエイドは自分の足元で銃を向ける素体：上半身だけとなりながらも攻撃の意思を止めない個体へ腕を振り下ろす。

不快な音と共に飛び散る脳漿が腕にこびり付くが気にしてはいられない。周りを見れば下半身だけが起き上がり、千切れ飛んだ手首が未だに手にしたはずの武器を探しもがいている。

死徒とはまた違った不気味さを持つ素体にアルクエイドは身の毛もよだつ気分を押し殺し、両手の爪を天へと掲げ今ある力を振り絞って振り下ろす。

轟音が止んだ後には、クレーターの中心で息を切らせるアルクエイドの姿のみ。彼女を囲んでいた怪人素体は粉微塵となって吹き飛んでいた。

そう、怪人素体は。

「ッ!？」

突如膨れ上がったアスファルトから飛び出したキノコ怪人の腕が

アルクエイドの足を掴み、バランスを崩した彼女を間を開けずに蔦で縛り上げたアネモネ怪人が建物の影から悠々と姿を現す。

自分に襲い掛かった怪人素体の群れに気を取られ、素体よりも強敵であるはずの怪人達に意識を向けることを失念していたアルクエイドは心中で舌打ちしながらも脱出を試みるが素体達に使った力で既に疲労困憊へと陥り、さらにはキノコ怪人が放つ胞子によって神経が麻痺し、意識が朦朧としはじめていた。

(こんなところで…私は…)

完全に姿を現したキノコ怪人に突き飛ばされ、蔦に束縛されたままアスファルトを転がっていくが、既にそんな事に痛みなどなく、攻撃を受けた事への怒りすら湧いてこない。

アルクエイドはこの状況で自分が助かるとは到底思えずにいた。

吸血衝動により抑えながらの戦いはとつくに限界を迎え、相手は余力を充分に残している怪人が3体。

悲観主義者であるアルクエイドはこの場をどうすればいいかという微かな希望など微塵もなく、ここで終わりだという絶望しかなかった。

(し…きゃ…)

それでも、頭に浮かんでくるのは、自分を特別扱いたくない変わった少年の屈託のない笑顔。

吸血衝動に駆られた自分に怯えながら、止めをさそうと刃を振り上げる埋葬機関の女に対し未だ恐怖で震えながらも一緒に逃げようと

言ってくれた愛しき男。

最後にもう一度、彼の顔を見たらとアルクエイドは倒れたまま身体を仰向ける。

自分に恩恵を与えてくれる月だが、初めて思えてしまう。

あんなに綺麗だったんだと。

これが最後の光景になるのかと見つめるが、ふと目を細めた。

「え……？」

その日は満月であるのだが、まるで巨大な穴が開いたかのような黒い点があり、点は次第に大きくなっていく。

否、それは月に走る模様などではなく、空に浮かぶ月を背景にこちらへと接近する何者かであった。

アルクエイドと同じく接近する者へと気が付いた怪人達に動揺が走るがもう遅い。

遂にその容姿が視認できる距離まで迫った時には、キノコ怪人がその者の蹴りによって突き飛ばされながら身体を炎で包み、消失していたのだから。

キノコ怪人を葬った者は繰り出した攻撃で衝撃を和らげたとしても、あれ程の高さから落下したのに関わらず、物音ひとつ立てずに着地。倒れているアルクエイドへと顔を向けた。

街灯に照らされたその姿は、アルクエイドが敵意を向けていた存在に近いものだった。

赤と緑に彩られ、赤いマフラーを靡かせるその戦士はハエ怪人が夜空へと飛翔した直後にベルトの両脇にある装置を同時に下ろし、怪人を追うように高く跳躍するだけでなく、落下することなく夜空へと舞い上がったのだ。

「飛ん…だ…」

真祖であるアルクエイドには、自分に驚くべきことなど、自分を殺した志貴の持つ直死の魔眼くらいのものだと考えていた。

倒れた自分の目の前で羽ばたく翼もなく、魔術による身体の軽量化もせずに、戦士は飛んだのだ。

混乱するアルクエイドの視界で華麗に空を舞う戦士がハエ怪人を軽やかな動きで翻弄し、ついには戦士の蹴りがハエ怪人の身体を貫いた頃にはアルクエイドの意識は闇へと沈んでいた…

「…っ!!」

まさか弱った真祖を捕えるという簡単な任務だったはずが、突如現れた乱入者に怪人が2体もやられてしまうとは…

残されたアネモネ怪人は逃亡を図るが、身体に走った激痛に悲鳴を上げる。

自分が気が付かぬ間に切り裂かれていたことは勿論だが、それ以上に自分へ攻撃を仕掛けた相手の正体の方が衝撃であった。

「シャドームーン…様…」

両手に赤い刀身の剣を持つ月の世紀王。死んだはずの支配者がなぜここにいるのかという疑問が晴れぬまま、アネモネ怪人はこの世界から消失した。

両手から武器を消失させた信彦は人間の姿へと戻り、倒れたアルクエイドの身を束縛していた蔦を強引に引きちぎり、苦しそうにしているもののまだ息をしていることを確認する。

理由は分からないが彼女の生存に安堵した信彦は自分の後方へと着地した戦士へと振り返る。

戦士もまた、歩みながら姿を人間へと変えると信彦と向き合う。

宿敵との戦いが終わり、この身にアンリマユを宿した後に身体の修理を行っていた信彦はゴルゴムが世界征服を進めていく中で抗い続けていた戦士がいた記録を目にしていた。

彼はその中にいた1人。

つまり…

「仮面ライダー…か」

「ああ、よろしくね」

屈託のない笑顔を青年…筑波洋は信彦へと向けるのであった。

第30話

それは月影信彦と筑波洋が接触する2日前のことだった。

洋は休暇中にフィンランドのある地方に建つ城：今では孤児院となっているその場所を訪れ、友人であるフレイアと共に多くの子供たちと楽しいひと時を過ごしていた。一息入れようと子供達が遊んでいる庭から孤児院の周りは勿論その地域全体の景色が見渡せる一室へと移動し、フレイアがお茶を入れてくると席を外した直後、洋が所持していた携帯電話に着信が入る。

表示される名前を見て、短い休みが終わりを告げたと確信した洋は携帯電話を耳へと当てるのであった。

「日本にゴルゴムの残党が向かっている…?」

『ああそうだ。統率もとれてない連中がこぞって日本のある一カ所に集まっつていやがるらしい』

通話相手から齎された情報に洋は眉をしかめる。数ヶ月前の戦いで支配者である創世王を失ったゴルゴムの怪人達はその統率が一気に崩れ、世界各国の支部を取り仕切っていた幹部怪人も洋達によって倒されている。組織再編を目論んではいるものの、元となった生物の本能に近い動きしかできないゴルゴム怪人には他の個体を統率する程の知能は持ち合わせていない。

しかし、その怪人達が集める者が日本におり、再び世界征服を企むのならば放っておくことは出来ない

『俺や他の奴らも最近組織の施設を狙っている連中の足を追って身動きが取れない。…休み中に悪いとは思うが』

「いえ、前に先輩だつてガモン共和国にいる子供達へ会いに向かう途

中で戦いに向かったんですから。俺一人だけ我が儘言う訳にいきませんよ」

『…すまねえな。けど、別れのキスの一つするぐらいならバチは当たらないぜ?』

「ちよ、先輩!?俺とフレイアさんはそんなんじや…!」

『ハハハ…っておい、うるせえがなんちやらツ!?冗談に決まってる——』

携帯電話の向こうで友人が騒がしくなる前に携帯電話の通話ボタンを切った洋はふう…と息を漏らして振り返ると、部屋の入り口に手に紅茶を乗せたトレイを持った金髪の女性…フレイアが何時の間にか戻っており、その美しい碧眼は悲しみに満ちていた。

「…聞こえていた、みたいだね」

「また、始まったんですね。戦いが…」

「……」

質問に無言で頷く洋を見たフレイアはトレイをそつとテーブルに乗せ、洋の横を抜けるとガラス戸をそつと開き、テラスへと出る。風が彼女の髪をそつと揺らす様子を見て、洋はフレイアの名を呼んだ。

「フレイアさん…?」

「わかってる。私や庭で遊んでいる子供たちがこうして平穩に暮らせるのも、洋さん達が戦って勝ちえたからこそだつて。そして、その為にまた戦いに行ってしまうという事も…」

「だけど、と振り返ったフレイアは先ほど見せた悲しい目…目の前に立つ青年が再び戦いの渦中へ再び身を投じ、傷ついてしまうという隠しきれない不安を拭うため、笑顔を洋に向ける。

「信じています。またこうして私達に元気な姿で会いに来てくれるつて!」

目元に涙の跡を残しながらも微笑みを向けてくれるフレイアに応えるように、洋もまた笑顔で頷いた。

自分を信じてくれる彼女の笑顔が無理矢理作ったものではなく、本

物のでいられるように…

そしてフレイアの元を離れた洋は急ぎ日本へと渡り、怪人が集結していると思われる場所…三咲町へと到着する。

「……………」

信彦は警戒を怠ることなく目の前の人物を睨み続けている。信彦が到着したその時、倒れていたアルクエイド・ブリュンスタッドに手を伸ばそうとした怪人達に向け、手にまとった緑色の雷をぶつけようと力を込める寸前に、彼は空から舞い降りた。

一撃を持つてゴルゴム怪人を倒したその戦士は、記録によれば彼は宿敵である間桐光太郎よりも前に仮面ライダーとして改造され、戦い続けていた存在。ゴルゴムと同じく世界征服を目論む組織と対立し、そして壊滅させた後は身を忍ばせ、次々と現れる世界を狙う組織と戦い続けているという。

彼等が新たにその姿を現したのは数か月前…ゴルゴムが世界征服を宣言すると共に世界各地で潜伏していたゴルゴム怪人が一斉蜂起した際に最後まで人間を守る為に抵抗を続けていた。

この時の信彦は知らないが、創世王の横槍により、自分の手で死んでしまった宿敵が甦る寸前に激を飛ばした先輩の1人でもある。

そのような文字通り正義の戦士である彼が自分を…ゴルゴムを束ねていた世紀王を見逃すはずがない。例え過去の出来事であっても。自分の手によつて怪人1体を倒したとはいえ、今の状況で信彦がアルクエイドを襲えと指示したという内容が一番わかりやすい構図だ。

…つい先日ならば、倒されても構わないという考えだったが今は眠っている反英霊の言葉を受けてから思い止め始めた信彦は自分でも気が付かぬままこの場をどう乗り切るか考え始めていたが…

「さて、落ち着いて話せる場所はあるかな？」

「……………」

変身を解除した洋は身構えている信彦とは異なり、まるで攻撃をする気配を出さず、むしろ気軽に話しかけている。続いて困ったような笑みを作る洋が指差す方へと振る変える信彦が目にしたのは、自分達が到着する寸前までアルクエイドが死徒やゴルゴム相手に繰り広げた戦いによつて生じた痛々しい傷痕。

資材は燃え尽き、アスファルトは獣の爪によつて切り裂かれたように捲り上がっている。

遅かれ早かれ人間が寄ってくれば確かに面倒なことになりそうだ。

「…ついて来い」

「助かるよ」

信彦はまだ警戒を解かない。何の目的があつて自分の前に現れたのかはつきりするまでは、アルクエイドを優しく抱き上げる戦士に気を許す訳にはいかなかった。

「まさか仮面ライダーが姿を現すとは…」

2人の接触を別の場所から浮遊する水晶玉を通して見つめるその存在は異質だった。

全身を白いローブで包み、素顔に影が差すまで深くかぶったフードによって表情は何えない。

だが、水晶に映る信彦を見る目は血走り、彼を憎悪する声と共に吐き出された。

「…世紀王の面汚しめツ!!よくも我が怪人を…」

「なるほど、そいつがお前達の狙いということか…」

ローブを纏った人物の背後に立つ別の人物はそう言うのと既に空となった缶コーヒーマシンの指先で撫でながら横目で同じ水晶玉を見つめる。今度は信彦から洋の手で抱きかかえられ、意識を失っている真祖の姫の姿があった。

「…安心しろ。我らの命を救った代わりに、貴殿の望みを果たす。真祖を目の前に差し出して見せよう」

「俺としてもお前達のような人でない者の魂に触れるという貴重な体験が出来た。それだけでも充分なのだが、な」

片目を瞑り、再度水晶玉を見た男はコートを羽織ると離れていく。

「期待はしないで待ってよう。俺には俺の準備があるからな」

男が完全にその場から離れたことを確認した人物は口元を吊り上げ、見下すように笑う。

「…フンツ。自分の脅威となる者と知らずに我らに身体を与えると、やはり元は人間。愚かな者だ」

水晶玉を消滅させ、男とは逆の方向へと歩み始める。

「復活の祝いだ…挨拶の一つでもせねばな…」

その背後には、不気味な産声を上げる、今までのゴルゴム怪人とは異なる存在を引き連れてた。

「うっ…」

今度は夢を見ることなく目を覚ましたアルクエイドは自分が別の場所で目を覚ましたことに気付く。場所はアルクエイドが志貴と待ち合わせによく利用する公園にある砂場近くに設置されたベンチの上だ。

(私、確か…って、これは?)

ゆっくりと身体を起こすと、自分の身体の下にはどこかで調達してきただろう段ボールが敷かれており、さらには寝ていた上から黒いコートがかかっていたらしい。それにこのコートには見覚えがある。

「……………」

持ち主の顔が浮かんだ途端にコートを払いのけ、壁を伝って立ち上がったアルクエイドは歩いて移動するくらいまで体力が回復していた。ならば長居は無用と立ち去ろうとするが突然耳に響いた会話を聞き、植栽の陰へと隠れる。悟られぬようそつと覗いてみると、自分が嫌悪する世紀王ともう一人…見覚えのない青年が立っていた。

(いけない…!)

今の自分が人間を見るだけで再び底のない吸血衝動に駆られてしまおうと身体を急ぎ屈めるが、何時までたってもあの青年を襲い、血を吸おうとする衝動が湧きおこらない。

何で…と疑問を抱くが直後にその答えは理解出来た。

吸血鬼である彼女は欲するのは人間の血液であり、それが近くにあれば嫌でも彼女は強い欲求が生じてしまう。

だが彼女の瞳に映る2人の人物。元より嫌っている世紀王の血などどつくに人のそれとは別のモノに変わってしまった為、吸血衝動は湧いてこない。

そして同じく衝動が起きないということは、彼もまた…人間ではない。

「ゴルゴムの怪人が、この町に?」

「ああ。理由は分からないがここを中心として集まっているという話だ」

この公園に到着し、アルクエイドを寝かせた後に街へ来た理由を問うた信彦は、すらすらと目的を話す洋の様子を見て恐らく嘘はないと判断した。何かを誤魔化そうとするような話方もないのも勿論だが、彼と話す姿を見て他の誰かと重ねてしまったのかもしれない。

馬鹿正直に戦いを止めようと訴えかけてきた愚かで何処までも優しい宿敵の姿に。

「…では、俺が狙いではないのか?」

「なんで、そう考えるんだい?」

「…俺はゴルゴムの世紀王だ。俺が奴らを集め、再び世界を滅ぼそうとする事が、一番納得のする結論だろう?」

先程浮かんだ考えを口にする信彦の考えに、木陰にいるアルクエイドはその通りではないのかと驚くが、それ以上に驚いた洋が成程と手を叩く様子に思わず首を傾げてしまう。

「ああ、そういう考えもあるよな!」

「…ふざけているのか?」

こちらとしては相手が同じ考えであれば今すぐにも敵対しなけ

ればならないと神経過敏であるのに、青年は笑顔を崩さない。それに、隠れているつもりであろうあの真祖もどこかあきれた様子だが、それによって彼女の気配を察知したようだ。

「あ、気が付いたんだね。身体の調子はどうだい？」

信彦へと同様に笑顔を向ける洋に気を許さず、ジリジリと距離を詰めるアルクエイドの眼は、信彦へと向けているものと同様にまるで気を許していない。

「どういうつもり…？」

自分を助けた戦士が、信彦と同じように自分へ笑顔を向けている青年が変身した姿であると察したアルクエイドは理解できない故に尋ねる。

彼のおかげで自分は命拾いしたのは確かだ。だが、何の理由もなく自分を助けるはずがない。そんな存在など、彼以外——自分と契約した志貴以外にいるはずがない。

だというのに、目の前の青年はアルクエイドの考えをあっさりと覆した。

「君が危なかったから…それだけだよ」

「なに、それ…？」

意味が分からなかった。

人間同士なら同じ種族だからと、納得が出来る。しかし、自分は違う。

アルクエイドは吸血鬼であり、真祖だ。人間を同じ吸血鬼に変え、自分の吸血衝動に負けていずれば自分でも制御できない怪物へと堕ちる存在。

ただ人間と同じ形をしているだけの、中身は化け物だ。きつとこの青年はそれを分かっていない。だから、教えなければならぬ。

アルクエイドは手を差し向け、白く細い指を禍々しく鋭い爪へと変貌させ、赤い瞳を金色に染めて洋へと見せつける。

しかし、彼の表情は、変わらない。

「どお、これでも危なかったからって言える？ 私は、違う。彼方が助けたのは、人間じゃないのツ!!!」

「……………」

「彼方に助けられるような生き物じゃない。人間というなんて、そんな資格…持って、いないの…」

自分に事実を突き付けた埋葬機関と同じ言葉を口にしたアルクエイドは、自分が涙目になっているとも自覚なく語り続けた。

「きつと、近いうちに…うん、もう既に限界なんてとつくに迎えている。私は志貴達を…人間を本能のまま貪り殺すわ！だから…」

あのまま、殺されても良かった。

かつて信彦が抱いた同じ言葉と、アルクエイドの言った『資格』が信彦の胸に突き刺さる。

確かに彼女や、自分のような存在が人間の中で生きていくなど、到底不可能だ。自分達の未来はただ一つ。孤独に消えるしかないのだと。

だが、洋は2人の考えを否定した。

「資格なら、あるよ」

「…ッ!？」

俯いていたアルクエイドはいつの間にか洋が自分の前に立ち、伸ばした爪に触れていることによりやく気が付いた。自分に悟られず近づき、手に触れたことよりも、アルクエイドは洋の言葉に啞然とする。

資格がある？

この男は自分の話を聞いていたのだろうか？なぜそう簡単に自分の言葉を覆そうとするのか？

洋は放心状態にあるアルクエイドに続けて述べていく。変わらず、笑顔のまま。

「確かに君は人ではない。多くの人間は、この爪を見て、その瞳で見られて恐怖を抱くかもしれない。けど——」

「君がそのように言えるのは、君が誰かを思える気持ちを持っているからこそだ」

「その気持ちがあるなら…いや、その気持ちだけを持つだけで、資格なんて十分だよ」

「君は…誰かと共にいられる資格は…ある」

はつきりと告げられた言葉に、アルクエイドへ衝撃が走る。

いつの間にか、洋が触れていたアルクエイドの爪は人と同じモノに戻っていた。

瞳は澄んだ朱へと戻り、頬を涙が濡らしていた。

埋葬機関の女とは真逆の言葉。

そう、ただ言葉にしているに過ぎない。

なのに、なぜこうも心に染みわたるのだろう。

アルクエイドは数歩下がり、それでも自分とは続けようとしたが、洋の口の方が早く開いてしまう。

「もし、どうしてもまだ納得が出来ないようなら、会って確かめた方が納得するかな？」

「会って…？」

もう、まるで理解の追いつかないアルクエイドはハッと周囲を見渡した。

彼女は、ここからそう離れていない場所にある気配を感じ取った。

なんで、なんでここに『彼』がいるのだろうか。

自分は逃げ出したはずなのに。

怯えさせたはずなのに。

あの女から一緒にいられない存在と、散々言われているはずなのに。

アルクエイドの逡巡する中、洋の言葉が彼女の背中をそつと押し
た。

「行ってくるんだ。彼は…君の事を待っているよ」

「知っていたのか？あの女の素性を」
「ここに到着する寸前にね。世界中を回っていると、いろんな人と接
触する機会がある。教会もその一つさ」

アルクエイドがこの場を去った後、信彦は彼女の背中を見守る洋へ
目を向けずに尋ねた。

正直に言えば、この男と話したくない。

アルクエイドへと投げかけた言葉が、まるで自分に向けても言われ
ていたような気分になっていた為だ。今はアンリマユが眠っている

事が本当に幸いした。そうでなければ外側からも内側からも、同じ話をされてしまうだろう。しかし、それでも信彦は確認しなければならなかった。

「…先ほどの言葉は、本気で言っていたのか？」

「ああ、勿論さ。無論、君もね」

「…知っていてそれを言っているのか。俺の、正体を」

「それでも、だよ。君は彼女が襲われた時、先に君が着いていたら同じ事をしたはずだ。だから——」

「だがそれはッ!!まだあの女が手遅れではないからだッ!!」

自分でも驚く程の大声を上げた信彦は洋へと詰め寄る。話をしたくないだと、もう言っていられない。

アルクエイドや自分は、人間ではない。いや、自分は人間ではなくなつたと言った方が正しい。

最初からそうあるアルクエイドは自分の役割だったとはいえ同族を次々を葬っていったが、あくまでその種族の間で押し付けられた話だ。彼女は元来、他の命を望んで奪う者ではない。

だが自分は違う。たとえ改造され、世紀王としての記憶を植え付けられたとしても世界中の怪人に命じたのだ。世界征服の邪魔になる者を抹殺せよと。シャドームーンは直接関与はしていないが、それによる傷痕はこの数か月間で嫌というほど目にしている。

「俺は…俺という存在によって家族をバラバラにし、多くの命を奪う事に加担したッ!!そしてこれから先、創世王のように成り果てるとも分からないッ!!」

アンリマユの言葉によって揺らいでも、決して消える事のない慟哭と未来への不安。信彦…シャドームーンはそれまで心のどこかで溜

めていたものを一気に吐き出すように、洋へとぶつける。

「俺はアイツとは違う！許される存在じゃないんだッ!!」

もう、手遅れなのだ。

宿敵：光太郎とは違い、戻れないところまで堕ちているのだ。彼のように、誰かの為に生き、戦うなど烏滸がましいにも程がある。

信彦は誰かにそうだと認められたった。そうすれば、諦めが付く。自分を終わらせることが出来ると。

「だから俺はッ——」

「それでも」

洋の言葉は、変わらなかった。

「君は、生きていい」

「君は、戦っていいんだ」

「間桐光太郎もきつと、それを望んでいる」

もう、信彦は言い返すことが出来なかった。

どこまでも真っ直ぐと見つめてくる瞳には、なんの偽りもない。

この男は：仮面ライダーは、自分を擁護することも、断罪すること

もなく、光太郎のような生き方を望んでもいいと告げた。

だが直後、2人の間に緊張が走る。

数十メートル先に、街灯の下で全身を白いローブで纏っている影がゆらゆらと浮遊し、信彦と洋の元へと向かっている。

「そんな馬鹿な…」

「…そうか。お前達が」

その姿を見た途端に目を見開く信彦の様子から、洋は自分がここに来た理由…ゴルゴム怪人を招集する存在に違いないと踏み、咄嗟に構えるが――

「がッ!?!」

一瞬の事であった。ローブを纏った存在が手を翳した途端に洋は吹き飛ばされ、街灯へと叩き付けられてしまった。しかも落下するごとなく、ミシミシと音を立てながらくの字に曲がった街灯に押し付けられ続けている。

「ね、念動力か…」

「まさか…やはり貴様なのか、ダロムツ!?!」

「ククククク…流石はシャドームーン様…直ぐにお気づきになられるとはこのダロム、感激いたしております。しかし、私だけではありません

「せんどぞ…？」

洋へと右手を翳したまま、信彦の言葉を肯定した人物は残る左手で自身の顔を覆うフードを持ち、ゆっくりと捲る。その途中、信彦が名を呼んだダロム以外の笑い声と同じフードの中で木霊した。

一方はダロム同様に男の声。もう一つは高い女性の声だ。

信彦の嫌な予感はどうどん大きくなっていく。

そしてフードを取ったその者の顔に、信彦と、苦しみながらも目を向ける洋は言葉を失う。

ローブを纏った者の頭部には、3つの顔があった。

鉄仮面のような男の顔

白く、皺だらけの皮膚を持つ男の顔

刺青の走らせる女性の顔

どれもが溶け合うように歪んだ形で顔を形成し、不気味な笑いを浮かべていた。

ダロム、バラオム、ビシユム：

かつてゴルゴムの3神官であり、後に大怪人となって光太郎とサーヴァント達に敗れ去り、死んだはずの存在だった。

第31話

暗黒結社ゴルゴムの大神官

ダロム
バラオム
ビシユム

長きに渡り創世王の僕として暗躍し、大神官の座に就いた3人は新たな世紀王を生み出し、次代の創世王を誕生させる儀式を執り行うという大役を受け持った。

しかし、想定外の事態が彼等の立場を追い詰めていく。

世紀王ブラックサン：間桐光太郎の離反に始まり、彼の体内に宿るキングストーン奪還の為に差し向けた怪人が次々と敗れ去ってしまう。

積み重なる失敗に業を煮やした創世王は3神官の証であると同時に命とも言うべき『天の石』『地の石』『海の石』の力を用いてもう一人の世紀王シャドームーンを復活するように命令された3人は死を覚悟してそれに従う。

目論み通りシャドームーンは復活し、3人は大怪人として生まれ変わるが運は彼等に向くことはなかった。

シャドームーンとの一騎打ちで光太郎が敗れさり、世界はゴルゴムが手に入れたと有頂天になったのもつかの間。光太郎が復活したと聞いたダロムは最後の手段として冬木の聖杯を強引に起動させ、『中身』を浴びることで理性と大怪人の姿を捨て、より強大な力を手にすることで挑んでいく。

だが、命のエキスにより復活を遂げ、より更なる力を手にいれた光太郎と協力するサーヴァント達の前に敗北を自覚する間もなく倒されてしまうのであった。

しかし、彼等は生きていた。

ダロム達大怪人が本来持ちえていた凄まじき生命力に聖杯の呪いに加わった結果なのか、生きようとする意識が強かったのかは定かではない。光太郎達の攻撃によつて身体を消滅したはずだったが、僅かに残った肉片へと意識を移した3人は光太郎達が創世王を討つべく立ち去った間に比較的に原型を留めて倒されていた怪人素体の体内へ侵入、寄生した。

まさか3体が同時に同じ素体へと寄生したとは本人たちも思いもしなかったが背に腹は代えられず、互いに素体の身体を操作しながら秘密基地を後にしたのだった。

以来、逃亡路に利用した下水道により身体は汚れ、害虫や小動物を必死になって捕食するという、栄光が霞んでしまう程に惨めな逃亡を続けていた3神官を宿した素体だったが、元々定期的にメンテナンスをしなければ通常の間人以下機能しか果たさない素体は限界を迎え、地下からマンホールを開け、地上に出た途端に倒れてしまう。

その時間帯は深夜だったのが幸いし、目撃者はいなかったがこのまま時間が経過すれば朝になれば身元不明の腐乱死体が発見されることになるだろう。

もはやこれまでかと3人の意識は消え失せようとしたが、救いの手が差し伸べられた。

いや、悪魔による誘惑だったのかもしれない。

「ふむ…これは、なかなかどうして…」

缶コーヒ―を片手に持ち、素体を見下ろすその人物は普段自分の配下に吸血を任せ、自身は決して表にはでないはずだったのだがその日は気紛れに外の空気を吸いたいと辺りを徘徊している最中だった。

「なんとみずぼらしく、汚らしく、哀れな存在なのだろうな。人間でもこうにはならない。ましてや消えかけている魂を3つも宿している死体など…面白い」

眼下で風前の灯となっている素体に対し、男は貶めながらも興味を示す言葉を口にするが既にダロム達の耳には届かない。

「ならばこそ、試してみる価値はあるか…」

男が指を鳴らすと、背後からゆらゆらとした足取りで数人の死徒が現れる。死徒達は素体を囲むように座り込むと犬歯をむき出しにし、所構わず素体の身体へと噛みつき、不純物に紛れた血を吸っていく。

「お。があ…あッ!!」

痙攣し、声を上げる素体の姿を見て、男は笑う。

血液を吸い尽くされ、変死体で終わるのか、それとも…

「そして私達は、生まれ変わった」

「3人の意識を宿したまま死徒として生き残った」

「それも親に逆らえないという成約も無しという形だね」

一つの頭部に宿る3つの口から語られた悍ましき復活劇に、念動力で押さえつけられている筑波洋と立ち尽くす月影信彦は驚くしかなかった。

倒された怪人が残った残骸や細胞から培養され、再生怪人として現れることはこれまでの組織でもあったが、まさか吸血鬼：死徒となり復活を遂げるなど前例がない。

それに加え、条件は違うとはいえダロム達がまさか自分と同じく1つの身体に複数の魂を宿して復活したとは夢にも思わなかった信彦だが、今まで己の説明を述べていたダロムが動き出したと同時に咄嗟に身構える。

だが、ダロム達はその場から進まないどころか、膝を着いて信彦に向かい頭を下げる。何のつもりかと構えを解かない信彦へ、ビシユムの声が向けられた。

「お迎えに上がりましたシャドームーン様。今一度ゴルゴムの指揮し、この世界を手中にお納め下さい」

「なっ!？」

「……………」

驚く洋は無言で佇む信彦の背中を見る。信彦は何も言わず、順番に歪な顔から放たれる言葉を黙って聞き続けていた。

「世界に散ったゴルゴムの怪人は、彼方様がここにいると知り、次々と駆け付けております」

「そして憎きブラックサンが力を使い果たし、仮面ライダーへと変身できないまたと無い好機」

「どうか、今一度我らゴルゴム帝国を造り上げるよう命じて下さい」

額を擦りつけて懇願するかつての部下の姿に信彦は、やはり何も言わない。

(さあ、早く我らの話に乗ってくるのだ…)

ダロム達は、信彦が自分達の言葉を聞き、迷いの中にあると考えている。創世王と敵対したのは、自身の肉体を奪われるという事実を知り敵である間桐光太郎と共闘したに過ぎない。彼にとつての脅威となつてしまった創世王が消えた今、キングストーンを所持する信彦こそがゴルゴムの守護者、創世王となるべき存在と甘言を囁けばきつと話に乗ってくるはずだと。

ダロム達は復活してから信彦が魔術協会や聖堂教会の刺客に襲われ、その度に自分の存在を否定され続けていた様を透視で伺つていた。

光太郎のように改造中に逃げ出し、他人の為に戦うという理由もなく、創世王となるためだけに生まれ変わった信彦：シャドームーンにはゴルゴムへ帰還する以外に選択肢はない。

しかし、戻れば『信彦』という器には用はない。

創世王との戦いから数度、シャドームーンへ姿を変えた戦つていたが、どれもゴルゴムにいた時と比べたら見るに堪えないものばかり。本来ならば秒殺すら可能であった死徒27祖相手にすら追い詰められ、人間に助けられる者など、ゴルゴムには必要ない。

こちらの誘いに乗った後は身体から月のキングストーンを取り出し、再び5万年後を迎え、新たな世紀王を見出せばいい。

ゴルゴムに弱者は必要ない。

さあ、早く頷くのだと額を路面に付けながらもいやしく3つの笑い顔は信彦の一言であっけなく崩れてしまう。

「断る」

「…なんと、おっしやられた？」

「断ると言った」

頭を上げ、聞き直すバラオムの投げかけた質問に対し信彦は間髪入れずに明確な拒否を言い返す。この時、初めて3つの顔に焦りが見られた。再び世紀王という栄光を拒むなどありえない、と顔を上げたダロム達は見たものは、表情は崩さないものの、激しい怒りを目に込めて睨む信彦の姿だった。

「…俺は、今更お前達ゴルゴムの王となるつもりはない。ましてや：創世王の後など継ぐつもりなど、御免だ」

「し、しかしッ！ゴルゴムに戻られれば不完全な状態ではなく、かつてのように完全な——」

「余計なお世話だッ!!」

信彦の怒号に白いローブはビクリと震え、思わず気が逸れて洋に向けていた念動力が解除してしまう。自由となった洋は呼吸を整えながら立ち上がる中、信彦はダロム達に有無を言わさず言い放つ。

「…はつきりと言うぞ。俺はもう、誰かの掌の上で踊らされ、奪う側に戻るつもりは…ない」

それは、自分から『秋月信彦』という人物をゴルゴムが奪ったからこそ言える言葉だった。ゴルゴムの戦いが終わった後の旅の中、改

めて思い知らされたのは、奪われたのは自分だけでなく、世界中にも存在するという事実。

自分の指示によって家族、友人、居場所を失った人間を数多く目の当たりにした信彦にとって直接手を下したゴルゴム以上に、命令した自分が許せずにはいた。

故に、世紀王の証であるキングストーンの力を拒み、シャドームーンの力を全力で出せない状態へと陥ってしまうが自分への咎であると受け入れている。彼の内側にいるアンリマユは自身を信じていないから力を出せないと論じたが、ゴルゴムの片棒を担いでいた力など、信じるに値しない。

ダロム達の出現で自身の存在をより強く否定し始めた信彦。俯き、路面を睨みながら拳を強く握りながら今、自分が原因となりこの地へゴルゴムを呼び寄せてしまった責に悔やんでしまうが、それは大きな隙を相手に見せる結果となってしまった。

「があッ!？」

身体が自由が利かなくなった信彦は思わず声を上げる。見ればゆらりと立ち上がったダロムが奇怪な腕を前方に翳し、念動波を信彦へ向けて放っておりワザとらしく悲しげな声を放った。

「おお…なんということだ。シャドームーン様は創世王様がいなくなった事でお疲れの様子らしい」

「これは早々にどこかで休まれて頂かなければならんな」

「ご安心を。我々がゆつくりとお休みできる場所までご案内いたします」

「き…様らッ!？」

強行手段に出たダロム達の念動力を断ち切ろうとシャドームーンへ変わろうとする信彦だったが、アルクエイドのいた場所まで移動する際、既に2分以上あの姿のまま行動していた。今シャドームーンへ変わり、拘束を解いたところで再度掴まってしまうのが関の山だ。

どうすればいい？と身体を動かそうとしながらも躊躇いを見せる信彦は動けただけでなく、段々とダロム達の方へと引き寄せられてしまう。

「くっ…」

「さあ、参りましょうシャドームーン様——」

「そうはさせるかッ!!」

ダロムは自分の声をかき消した相手の声と共に繰り出された攻撃を瞬間移動で回避。その際に信彦への念動力も解除され、解放された信彦は膝をついて自分を助けた者…いつの間にか仮面ライダーへと変身した洋がダロム達と対峙している光景を見た。

「おのれい…邪魔をするなッ!!」

「悪いが、目の前で苦しんでいる人を放っておけない質でね」

悪態をつくバラオムの声に自分の蹴りを回避した相手を警戒しながら構える洋の言葉に、信彦は苛立ちと共に戦士へと言葉をぶつける。

「何を言っている俺はもう…」

敵から解放され、もう動けるようになっていた。だが、洋が言ったのは念動力によって痛めた身体を指しているものではなかった。

「…苦しんでいるじゃないか。君がゴルゴムを抜けてから、今までずっと」

「…っ!?!」

まただ。

どうしてこの男は自分が押し留めているモノに平然と迫ってくる？なぜあの男と：自分と分かれる寸前まで友と呼び続けた宿敵のよ
うに触れてくる？

理解しがたい洋の行動に動きを止めた姿を見計らったビシユムの顔は突如として上を向き、指向性の怪光線を両目から発射する。自分とはまるで違う方向へと発射された方へと目を向ける洋だが、光線は急に角度を変え、棒立ちとなった信彦へと向かっていく。

「危ないッ!!」

「…ッ!?!」

洋の叫びで我に返った信彦の眼前に怪光線が迫る。成程、人間の姿でこれを浴びてしまえば一たまりもなく、身動きが取れなくなってしまうところを先ほど見せた瞬間移動を用いれば自分を連れ去ることなど容易い。と冷静に分析しながらも信彦は自身を助けようと割って入った洋へ詫びるべきだったかと思いつながら、ビームの直撃を待つ。

完全に諦めてしまった信彦の耳に響いたのは、別人の叫びだった。

「グアアアアアアアアアアッ!?!」

今日は何度驚いたか分からない。信彦の視界に映ったのは自分の前に立ち、怪光線を浴びている戦士の姿だった。

「一度ならず二度までも：まずは貴様から葬ってくれるわあッ!!」

ビシユムの眼から怪光線を放ちながらも、両手から別の光線を洋に向けて発射し、その全てが洋へと注がれていく。目を開ける事すらままならない閃光を浴び続ける洋はそれでも両手を広げ、自分の背後にいる信彦へ攻撃が行き届かないよう庇い続けた。

やがて閃光が止んだ後。

ダメージにより変身が解除された洋は信彦に介抱されながら彼の顔を見て笑っているが、その表情が余計に信彦が混乱してしまう。

「なぜだ…どうしてあんな事をしたツ!!なぜ笑っていられるツ!!」

「ハハハ…言ったらろ?苦しんでいる君を放っておけないって…」

「そんな、下らないことで…」

どうして自分などを助ける。ボロボロとなった青年はこんなに傷ついてもなお、自分の肩を掴み、立ち上がろうとする。底知れない相手に警戒を強めたダロム達は離れて様子を伺っていた。

肩を貸す信彦は拒もうとせず、ただ青年が立ち上がろうとする姿を黙って見ていることしか出来ない。

やがて洋が膝を突いている信彦を見下ろす形になり、やはり笑顔で語りかけた。

「さっきの続きになるけど、君が苦しんでいるのは、自分自身を受け入れようとしなからだ」

「当然だ。このような自分など…」

「けど、それが今の君であるという事実は、変わらない」

「……………」

その通りだ。いくら否定したところで、かつてはゴルゴムの世紀王であった事実は変わらない。ならば、自分の苦しみは永遠に続いてしまうのかと考える信彦だが、洋は否定する。

「なら簡単だよ。君が考えてしまう事とは逆に力を使えばいい」

「何を…言っている?」

「だからさ。君が持つ力が誰かを苦しめるなら、君がその力の方向性を変えてしまおうんだ。そうすれば、誰からも、何も奪う存在には、ならない」

綺麗事だと頭では分かっている。そんなもの、知りもしない者の戯言だと。なのに、なぜ先ほどまで憂鬱とした胸が軽くなる？

「君は自分だけでなく、誰かが苦しんでしまうことに耐えられない。けど、その望まない力でさえ、使い方を間違えなければ誰かの涙を止めることが出来るんだ」

洋は自分が初めて姿を変えられてしまった際、目の前で慟哭に暮れる1人の人間を救えた事を思い出しながらも、目の前で迷う若者に伝えた。自分を受け入れさせる為に。

「君になら出来る。過去を苛み、誰かが傷つくことを恐れる優しさを持つ君なら力も、自分を受け入れることが…」

「だから、君は生きていいんだ」

未だこちらに警戒しているダロム達の方へと傷だらけの身体を向ける洋は両手を眼前で交差し、両拳を腰に当て、左手を前方に突き出した構えを取るが、何者かに肩を掴まれ、後ろへと突き飛ばされてしまう。

後ずさりながらも倒れずにいた洋はこちらに背を向ける犯人の迷いの無くなつた声を聞く。

「怪我人は下がっている。元々これは俺が原因で起きたことだ」

「…俺がけりをつける」

「じゃあ、任せるよ」

振り向かなくとも、笑って見ていることが容易に想像がつく。信彦は腹部に黒く、中央に緑色の玉石を宿したベルトを出現させながら前へと進んでいく。

(へへ…ずいぶんとまあマシになったじゃねえか大将)

「…起きていたのかアヴァンジャー」

(まあね。あんな大騒ぎになっただんなら嫌でも起きらあ)

「ならば、邪魔にならない程度に喚いでいろ」

(へいへい。そっちも時間気にして焦らずにな)

「言っている」

アヴァンジャーは戦いの際にはシャドームーンでいられる残った時間などを伝えていたが、今はそんなこと余計なことだなど自分のいる場所を見渡す。

普段ならば薄暗く、淀んだ空間でしかないこの場所に、一条の光が差し込んでいる。

つまり、月影信彦の心理状態を示す光景となっており、現在どのような状態にあるかなど、語るまでもない。

(…未だ、自分はどうかあるべきかははっきりとしない。しかし…)

ベルトから放たれる光が信彦の細胞を書き換え、バツタ怪人へと変貌させた直後、強化皮膚リプラスフォースが瞬時に包み込み、光太郎とは色の異なる戦士へと姿を変える。

それだけでは終わらない。ベルトの光が強まり、銀と黒の装甲が現

れ、信彦の身体へ次々と装着されていく。

最期に頭部を包む仮面が装着され、額のランプと緑色の複眼が強く発光した。

(確かめてみせる。生きて、戦うことでッ!!)

身体から緑色のエネルギーを放電させながら、シャドームーンは構えを取った。

第32話

月影信彦の内側に潜む、かつてアヴェンジャーのサーヴァントであつたアンリマユ。

冬木に出現した聖杯の一部となつていた彼は聖杯の浄化と共に消え、その座へと還るはずだった。しかし聖杯として最後の役目である間桐光太郎の『みんなと共に生きたい』という願いを叶えた直後、彼自身も光太郎の言う『みんな』の中に含まれてしまいシャドームーンの身体に魂を宿すという結果となつてしまった。

果たして、これは偶然だったのだろうか。

他のサーヴァントと違い、自身の姿を記憶と共に失つてしまった彼が他の誰かの身体に宿るとしても、同じ条件であれば願いを叶えていた際に一番近くにいた光太郎に宿る可能性が一番高いはず。

肉体の損傷が激しく、信彦の魂が消えかけていた為なのか、それも他の理由があるのか…？

しかしアンリマユ本人はそんな疑問など一日で忘れ、からかい甲斐のある同居人の厳しい反撃を受けながらも新たに生まれた今を楽しもうと決め込む。

だが、生活を共にしていく中で段々と浮彫となつていく信彦の危うさに目を瞑る事ができなくなつてしまった。

今尚人々に残るゴルゴムによる侵略の傷痕への恨み。

異端であり、許されない存在だと叫ぶ魔術協会、聖堂教会からの糾

弾。

それら全てを当然の報いと受け入れ、表情に出さずとも日々擦り減っていく信彦の姿を見ながら、いつか彼の宿敵のように自力で乗り越えていくだろうと敢えて言葉にせず、死に場所を求めるといふ歪と向き合う日が来ると旅に黙って同行していた。

三咲町にたどり着き、信彦が面倒事に巻き込まれない為とは言え、自ら吸血鬼事件の調査に踏み込んだ時は心変わりのきつかけとなると何処かで期待していたが、結果としてはネロ・カオスに惨敗。己は無力であると痛感する結果となり、さらには真祖の姫 アルクエイド・ブリュンスタッドとの接触により、信彦がキングストーンを持つ世紀王である限り、過去、現在でも否定される存在だと思い知らされることとなる。

ついにはアルクエイドの攻撃を無抵抗に受け、生命を投げ出そうとした際には身体の主導権を握ったアンリマユの奇策により九死に一生を得ることができたが、信彦が何故邪魔をするのだと抗議した時には、思わず自分らしくもなく説教してしまった。

信彦が旅の中で言葉には出さないが今でも気にかけている2人の人物の名まで出している説得以来、アンリマユが浮遊している信彦の内側ともいふべき場所は果ての無い程に黒く、淀んだ空間と成り果てしまった。以前は曇り空の中に立っていたという表現が適切な空間であったが、こうなったのも真祖との接触と、今日の前に現れたゴルゴムの神官達によるものだろう。

だが、信彦の暗闇に包まれた心象風景とも言える場所に一筋の光が差し込む。

思わず光の先を見上げたアンリマユに、信彦の耳を通じて聞き取れた言葉が強く響いた。

「だから、君は生きていいんだ」

「んだよ、随分な簡単な理由で立ち直りやがって…」

思わず額を押さえて苦笑するアンリマユは、未だ影が晴れずにいながら確かな輝きを持ったその空間の中央に立つ。

(こいつは…自分がどうすればいいのか、分からないじゃなくて知らなかったんだ)

子供ですら回答できるような簡単過ぎる理由でこの男は苦しみ、生きることが放棄しようとした。だから余計にアンリマユは許せなかった。この男は不運にも悪の親玉に祀り上げられようとして、本来歩むべき人間としての未来全てを奪われた。

ならば、こいつはその奪われた分、生を全うしなければ割に合わない。

だから見届けよう。こいつがどんな結論にいたるのか。

(つたく、世話のやける半身さんだぜ)

…この身に宿ったのは、もしやその為に引き寄せられたのかとらしくもない考えを浮かべながら、アンリマユは普段通りの軽口を向ける。

これで、いつも通りだ。

身体から緑色の放電を放ちながらダロム達へ足を進めていくシャドームーン：月影信彦の身体は以前と変わらず、時間が経過すると共に痛みが広がっていた。

一歩踏み出す度に身を裂くような激痛が走り、関節部から緑色の過剰エネルギーが火花のように飛び散り、シャドームーンの装甲を焦がしていく。

だが、信彦は止まらない。

3分以上の戦闘に耐えられない身体となり、そのリミットが刻一刻と近づいている今でも、止まる訳にはいかない。

自分の身を挺して庇ったお人好しに、これ以上お節介な言葉を口に

の動きがそこで止まってしまふ。足が路面を離れなくなっただけでなく、痛みを堪えて振るっていた腕も含め全身がピタリと動かなくなってしまう。

(念動力か…)

信彦が動けなくなった様子を不気味な笑いを浮かべる三つの表情は、エネルギーを放電し続ける信彦に向かい、更なる追い打ちをかける為、自分達の影に潜んでいた者の名を叫ぶ。

「さあ出でよ、キマイラ怪人ツ!!」

『キャ…ガアガ…ギイ…』

「……………ツ!？」

街灯によって生じていた三神官の影から這い上がったそれは、これまでに見た事のない異形だった。いや、良く見れば部分部分は信彦の知る者と類似している。

だが認めたくなかった。

なぜならばその怪人は、身体全てがゴルゴム怪人の頭部で構成されていた。

両足となっているサイ怪人とネズミ怪人の頭部の上から乱雑に積まれた怪人の頭部はまるで不格好なダルマ落としのように危ういバランスで重なり、身体の重心も傾いたままズルズルと引きずりながら前進していく。

両手首となっているサンショウウオ怪人とカメレオン怪人の口か

らは絶えず唾液が垂れ流しとなり、胴体を構成しているイカ怪人やケラ怪人達は未だ痛覚が残っている為か、継ぎ接ぎだらけとなっている顔から悲痛な叫びを上げており、そして頭部となっているはクモ怪人・コウモリ怪人・カニ怪人3体の頭部が並んで溶接され、それぞれの頭部が一つとなつてしまった嫌悪感から別の方角へ顔を向け、引き離れようとしている。

三神官はキマイラと呼んだが、神話に登場する同じ名を持つ怪物とはほど遠い、完全な「化け物」と化してしてしまった姿に信彦や、背後で戦う様子を見守っている筑波洋はただ驚くしかない。

それはキマイラ怪人の容姿にはない。あのような姿へと変貌させた三神官への残虐さに対してである。

「貴様達…あれ程大事にしていた仲間である怪人を…なぜ…」

「まさか、彼方からそのようなお言葉を受けるとは驚きましたぞ？」

口調こそ丁寧だが、ダロムの表情は滑稽だと言わんばかりに信彦へと返答する。それは聞くべきではなかったと信彦が後悔する程の変貌…自分の知るゴルゴムの幹部と同じ存在だと考えたくない程であった。

「見ての通り我らは3人が一つになった分、どうにも人間の吸血だけでは物足りず身体その物を食するようになってしまいました…」

「捉えた人間を丸のみにしてもそれでも足りず、最近になってようやく満足のいく食料を見つけたのですよ」

「フフフフ…こちらが呼び掛けるだけで、何の疑いもなくよって来てくれるのですから」

「なんて…事を…」

口もとを吊り上げて語るダロム達の言葉を聞いた洋は先輩から聞かされた情報…世界中に散っていたゴルゴムの残党が日本の三咲町へ集っているのは再びゴルゴムを結成するためではなく、彼等の飢えを満たす為…

自分が戦ってきた敵にも、味方である怪人に対してここまで惨い仕打ちをした者などいない。洋は込み上げてくる怒りと共にダロム達に向かい敵へ非難を浴びせるが、三神官はその怒りすら凍りつかせる言葉を口にする。

「お前達は…自分達の仲間をなんだと思っっているんだ！」

「何を言うかと思えば…だからこうして生かしてやっているのではないか？首だとなつてももがき、生きようとするこの雄姿、素晴らしいではないか…」

「冬木に残る聖杯戦争の記録に残っていた人間の趣向を参考にしたが、ここの面白いとはな…」

「それに5万年後に現れる新たな創世王様を迎えるまでにこの地上から人間共を抹殺し、怪人だけで満たせてしまえば食するよりも増えていく方が多くなる事でしよう」

洋の思考が止まる。ダロム達の言うことがまるで意味が分からないう。どうせ増えるのだから殺し、食し、その命すら弄んでも許されると本気で考えている。いや、同じ命とすら考えていないダロム達に洋は未だダメージの残る身体など顧みず、腹部にベルトを出現させるが、これまで沈黙を守っていた当事者から待ったを掛けられてしまう。

「怪我人は、下がっていると云ったはずだ」

信彦から聞こえた先程と全く同じ言葉。だが、込められた感情は全くの別物となつていることに気付いているのは、洋ただ1人。

未だそれが強がりだと信じて疑わないダロム達は身動き一つ取れず、身体が放出されるエネルギーがさらに強まった信彦に向けてキマイラ怪人に命令を下す。

「真祖の元へ駆け付け付けた段階で2分以上が経過していた。つまり、その姿が保てるまで数十秒もあるまい!」

「せめてもの情け…その姿のまま葬って差し上げましょう!!」

「やれい!キマイラ怪人!!」

バラオム、ビシユム、ダロムの順に頭部から声が響いた直後、キマイラ怪人を構成する全ての頭部の口が大きく展開。本来持ち合わせていない破壊光線を動けずにいる信彦へ向かい次々と発射される。

信彦の身体に触れた途端に連鎖して起こる小規模な爆発。それも10回、20回と続いていくうちに信彦から漏れる微かな声も爆音によつてかき消されてしまう。

どれ程の時間、破壊光線による一方的な攻撃が続いたのだろうか。攻撃中に念動力による拘束を解いているダロム達は土煙の中でキングストーンを残し五体バラバラとなつているであろう信彦の残骸をどう処理してやろうかと思考するが、その前にやるべきことをやっておこうと立ち尽くしている洋へと進んでいく。

ゴルゴム程ではなかったとはいえ、一つの組織を壊滅させた程の改造人間だ。その血肉を取り込めば、より強靱な肉体を作ることが可能だろう。

こちらの気配などまるで気にせず、信彦の立っていた場所を見つめ

ている洋へ迫ろうとしたダロム達の耳に、もう聞こえないはずの声が届いた。

「何をしている。貴様達の相手は、俺のはずだ」

ありえない。

弱った上にあれだけの、仮面ライダーBLACKさえ耐えれない程までに強化された破壊光線を浴びて何故、何事も無かったかのように土煙の中から信彦が現れたのか。

煙による汚れは付着しているものの、彼の銀と黒の装甲には傷一つ負っていない。

さらに言えば何故シャドームーンの姿のまままでいられるのか。制限時間である3分はとうに過ぎており、信彦に痛みを齎している証拠である緑色の放電も先ほどより弱まっている。

だが、そのような事態も些細なことと考えられてしまう光景がダロム達の前で展開されていた。

「ば、バカな…」

「ありえない…こんなことがッ!？」

「なぜ、私達の…私達の…ッ!？」

ダロム達が目にしたのは、信彦の周りを飛び回る3つの光球。信彦の持つ月のキングストーンが放つ緑色の光とは異なり、それぞれが青、赤、紫に輝いている。

そのいずれも、ダロム達ゴルゴムの三神官にとって因縁深いものと同じ光と力を宿すものだった。

改造された直後、自ら放った力で重症を負った信彦は世紀王としての記憶を植え付けられた後に十数年、バツタ怪人のまま眠りについていたが、世紀王として目覚める気配は無かった。

業を煮やした創世王はダロム達が持つ「天の石」「地の石」「海の石」という彼等の神官の証であると同時に命とも言うべき石を用いてシャドームーンを復活させるよう命じた。

キングストーンには届かぬものの、それでも強力な力を秘めた3つの石の力により、シャドームーン：信彦は復活を遂げることが出来たのだ。

今まで体内で純粋なエネルギーとして宿っていた3つの力がキングストーンとは別の力として顕現。

3つの光球が発生させた防御壁によって信彦をキマイラ怪人の攻撃から防いでいたのだった。

「まさか、このような形で現れてくるとはな…」

(いんやく文字通りこんな隠し玉持つてるとは俺ちゃんもびっくり)

自身でも驚いている信彦が手を翳すと、3つの光球は懐いたように掌の上へと集い、互いを追いかけるように回転を始めている。自身の意思に応じて動くキングストーンとは別の力が土壇場で発揮した信彦を完全に見下していた態度から一変し、怒り心頭となったダロム達は標的を洋から信彦へと変えて飛行していった。

「返せ！それは我々が創世王に賜った——」

様に、こちらを敵視しての警戒か、それとも無理矢理生かされて苦しんでいるのか、どちらともとれない雄叫びを上げている。

「…許せ。俺はこのようなやり方しか、お前達を解放できん」

片手に持ったシャドーセイバーの長刀を横に向け、赤い刀身を根本から切っ先にかけて右手でゆっくりと撫でていく。

信彦の撫でた後を追いかけるように刀身は緑色の光を宿していき、さらに3頭の狼が再び光球へと戻りシャドーセイバーの刀身へと浸透する。

緑、赤、紫、青の順番に輝きと放電を放つ剣を両手に持った信彦はその場で剣を大きく振りかぶり、キマイラ怪人に向けて振り下ろした。

「ハアツ!!」

シャドーセイバーから放たれた4色のエネルギーは巨大な狼の頭部を模したものへと変貌し、その鋭い牙をキマイラ怪人を捉えたと同時に爆発。

怪人の姿を残すことなく、燃やし尽くしたのだった。

もう、灰すら残っていない燃えた路面を見つめる信彦の耳に、戦いを見守っていた洋の叫びが響く。

「危ないッ！上からだッ!!」

「ッ!？」

咄嗟に身を翻すと同時に頭上に迫ったエネルギーの塊をシャドーセイバーで切り伏せた信彦は体液を片腕、片足から漏らしながら空に

浮遊するダロム達を睨む。

視線を横に向ければ、未だシャドーセイバーの短刀はダロム達の足首を貫いている。どうやらキマイラ怪人に攻撃を仕掛けている間に自ら足を切断して逃れたらしい。

「おのれい…覚えてるがいいッ!!」

苦悶の表情を向け、ダロム達はその姿を闇に溶け込ませて去っていった。

「お疲れ様…で、いいのかな？」

「……………」

洋の賞賛に信彦は無言で放り投げられていた自分の黒いコートに付いた汚れを丹念に落としていると、今度は無視できない洋の言葉に振り向いてしまう。

「じゃあ、今回の俺の任務を君に任せても大丈夫だね」

「待て、そればかりは聞き捨てならんぞ…」

「本来なら一緒に決着を付けたい所なんだけど、思った以上にダメージが残っていてね」

「……………なぜ貴様が同行することが前提となっている」

その原因が自分である為、強く言い返せない信彦の言い淀んだ表情に、再び優しい微笑みを浮かべる洋。

ダメージが蓄積しているのは確かであるが、信彦が自分の力に迷い続けているようであれば、例え自分がどうなろうがダロム達と戦うつ

もりでいた洋だったが、先程の戦いを見て彼に任せてみたいと考えたのが本音だ。

まだはつきりと生きる為の目的を見つけていない彼であるが、この戦いを通してきつかけを掴んだに違いない。

それまでは見届けよう。

仮面ライダーとは決して名乗らないだろうが、12番目に十分相応しい彼の行き先を。

「生きる…」

その一部始終を気配を決して見ていた真祖の姫は、しばし独り言を呟いた後に自ら足のつま先をコンクリートへ思い切り蹴りつけ悶絶している怨敵の姿を見る。

洋の言葉を受けた後、あの場を離れたアルクエイドであったが背筋が凍るような気配を察知し、再び植栽の陰に隠れて信彦の戦いの様子を伺っていた。

戦いの中で信彦が自分と同様、洋の言葉によって立ち上がらせた言葉を自身で口にした。

ただ本能的に憎んでいた相手が自分と同じよう自身という存在を

悩み、苦しんでいた。その事実には驚くアルクエイドであったが、ああも簡単に割り切れる信彦が羨ましいとすら考えていた。

「いいなあ…」

思わず漏れてしまった憧憬。どの道、やはりアルクエイドという真祖はあの世紀王を許せそうにない。答えは得なくても、きっかけを掴めてしまったんだから。

そしてアルクエイドはつま先を押さえている信彦と、それを大丈夫かと呼びかける『人間』を見て踵を返す。

今度こそ、自分を待っている少年の元へ向かう為に。

(なあんて事があつたなあ)

アルクエイドは肩を並べて先を歩く信彦と志貴の背中を見ながら
心中で呟く。

あれからもなんだかんだで顔を合わせることが当たり前となりつつある信彦に初対面時に抱く程の殺意はない。せいぜいあのシスターより若干上くらいだろうか…？

「何を呆けている。置いていくぞ」

立ち止まってしまっていたアルクエイドに信彦が振り返って注意を促すと、むつと整った眉をへの字に曲げたアルクエイドは小走りす

ると飛び跳ね、志貫の背中へと飛びついた。

「お、おいつ?! 街中で何やってんだよツ?!」

「疲れたー志貴おんぶー」

「馬鹿な事言ってるじゃないツ!!」

「……………」

じゃれ合いを始めた2人を置いて1人歩き始めた信彦を追い、しがみ付いたままアルクエイドを引きずって志貴は追いかけていく。

こんなとりとめのないやり取りの中に、こいつがいても、悪くない。

アルクエイドは笑いながらそう思っていた。

第33話

「お、おのれ…!!」

月が雲に段々と覆われていく深夜。怪魔異生獣ムサラビサラは新都のビルの群を抜け、冬木を二分する未遠川の上空を全力で飛行していた。

自分の主であるクライシス帝国 牙隊長であるゲドリアンの命令通り、自分の使い魔であるムササビで子供たちに毒を蔓延させ、自分はムササビであると思わせ高所から次々と墜落死させる作戦を進めていた。

だが、その作戦をクライシス最大の敵に感付かれてしまう。

必死に逃亡するムサラビサラの眼下に広がる未遠川を水しぶきを上げ走行する機体に目を見張った。

「す、水上を走るだと…!?!」

昆虫の頭部を思わせる赤い機体ライドロンの恐るべき性能に戦慄するムサラビサラ。しかしいくら水上を走れようが飛行する自分に追いつけるわけがないとさらに高度を上げようとするが、ライドロンのドアが開くと片手にライフル銃を持った間桐慎二が車上へよじ登り、不安定な足場であるにも関わらず地表にいるような自然体で立ち、数十メートル上を飛行するムサラビサラを視界に捉える。

ムサラビサラに目を向けたまま慎二は腰に下げているケースからアルミ缶に似た灰色の筒を取り出し、手にいたライフル銃の銃口に取り付ける。それにより銃身の先が通常とは違う重さとなりながらも銃口は全くブレが生じずピタリと夜空を飛び回るムサラビサラへ狙いが定まっていた。

(これも地味な訓練の成果ってやつかね。武大先生に感謝つと！)

内心で居候への賛辞を贈ると同時に打ち出された巨大な弾丸は正確にムサラビサラへと飛んでいく。

だが弾頭自体の重みがあるためかスピードが遅く、ムサラビサラは下から迫る弾丸の軌道を見切りあっさりと躲されてしまった。

慎二の狙い通りに。

「ギギャツ!？」

さて何処に逃げようかと慎二の攻撃を回避したことで余裕を取り戻したムサラビサラは頭上で破裂音と共に自分の周囲が光によって照らされることに驚き間拔けな声を上げてしまう。

見ればムサラビサラの数メートル上で破裂したのは、慎二が発射した弾頭：閃光弾であった。思わず振り返ってしまったムサラビサラはその光を目にしてその眩しさに目を閉ざす。もしやこちらの視覚を遮るといふ小賢しい手段を取ったのかとムサラビサラは思考するが、間違っではない。

慎二が放った閃光弾はムサラビサラを一瞬足止めさせる以上に、ムサラビサラの姿を先回りして河川敷に移動していた間桐桜へ位置を把握させる為のものだ。

「さすが兄さん。言った通りです」

閃光弾で姿がはっきりと目に映るムサラビサラに向け、弓に矢を番えていた桜は義兄の読みに感服すると同時に矢を放つ。

風を切りながら上昇する矢は赤い光を帯びてさらにスピードを増していき、ムサラビサラが自身に迫る脅威に気付いたのは、その矢が

頭部に着弾して爆発した後だった。

「…っ?!?!?!?!」

狙った対象に触れた際に燃やすだけでなく、爆発させる術式まで上乘せする事でさらに強化された桜の攻撃にムサラビサラの顔は表面に焦げ跡が残る程度しか外傷はないが、口内や目などはそうはいかない。

最もダメージを受けやすい部位に走る痛みで顔を手で押さえ、羽ばたくことを忘れたムサラビサラの高度は見ると下がつてしまうが怪魔異生獣の再生能力の故か、段々と痛みが引いたことで自分に不意打ちをしかけた人間の少女を睨むが、相手は既に第2射の準備が整っている。

同じ手を受けない為にさらに上へと上昇を試みたムサラビサラであつたが既に遅く、翼を広げた時には下方から迫った鎖によって両足が縛られた後であつた。

「逃がしませんッ!!」

鎖を辿る先で紫色の髪を靡かせ、戦闘装束を纏ったメデューサがムサラビサラを地表へ引きずり降ろそうと力一杯に力を込める。もし彼女の力が聖杯戦争時と同等であればそれも可能であつただろう。

しかし現代に新生した為かその力は半減されてしまいムサラビサラを逃がさない為に鎖を引き続けることが今の彼女の限界であつた。だが、彼女達の策はそれで終わりではない。

このまま強引に上昇し、自分の足を引く女を振り回してやろうとムサラビサラが考えた矢先、自分とメデューサによって引き合つてピンと伸びた鎖の上を駆け上がつて来る影が次第にその姿を現していった。

少しでも足の付く位置がずれてしまえば落下してしまい、さらに言えば鎖という安定しない道を臆する事無く進んで行き、両手に持った刀を振り上げた赤上武は敵まであと数メートルという距離まで詰めると足場である鎖を蹴り、ムサラビサラの頭上へ飛ぶ。

「ハアッ!!」

掛け声と共に振り下ろされた2刀がムサラビサラの後頭部へ直撃。チャップや怪人素体を難なく切り裂くアーチャーにより投影された業物でもムサラビサラの薄皮一枚傷つけるにも至らない。

だが刀を叩き付けた衝撃でムサラビサラを地上へ落下させるには充分の威力を發揮していた。

河川敷に衝突し、頭を振って立ち上がるムサラビサラはここまで自分を追い詰めた者達：ムサラビサラとは異なり地上へしつかりと着地した武の元へ集う慎二、桜、メデューサを威嚇しながら迫っていく。難敵から逃れる途中ではあるが、ただの人間達にコケにされたままでは我慢できない。

腹いせに皆殺しにしてくれようと牙をむき出しにするが、背後が迫る爆音に思わず身震いしながら振り返ってしまう。

河川敷の向こうから迫る青い機体：アクロバッターを駆り、夜でもはつきりと目に移ってしまう黒い体躯と、関節部と複眼を真っ赤に光らせて接近するのは間違いなくムサラビサラが逃れていた難敵に間違いなかった。

仮面ライダーBLACK：間桐光太郎だ。

逃れようとしても、既に手遅れ。

アクロバッターのグリップを何度も捻り、さらにスピードを上げたアクロバッターはムサラビサラが逃れようと翼を広げるよりも早く、バッターの意匠を遺したフロント部を怪人の胴体に叩き付ける。

さらにキングストーンの力を限定的に全開放した状態で右拳を強く握っていた光太郎はアクロバターの体当たりと全く同じタイミングでパンチを繰り出しており、拳を受けたムサラビサラの顔面は醜く変形させながらめり込ませていた。

光太郎とアクロバターの同時攻撃を受けたムサラビサラは受け身など取れることなく身体を2転、3転と回しながら吹き飛んでいく。

ヨロヨロと立ち上がろうとするムサラビサラに対し、アクロバターから降りた光太郎は尽かさず最後の一撃を打つ為に動作を続けた。

両腕を左右に広げ、ベルトの上で両拳を重ねると同時にベルトの中央部にある赤い石が強く発光する。

右腕を前方に突出し、左腕を腰に添えた構えから両腕を右側に大きく振るい、左腕を胸の前で水平に、右拳を右頬の前に移動。

更に右拳を強く握りしめ、天高く跳躍する。

「ライダーッ——」

エネルギーを纏った右足をムサラビサラに向け落下し——

「——キックッ!!」

胸板へ必殺のキックを叩き付けた。

「グオオオオツオオオツ!？」

光太郎の必殺技を受け、さらに十数メートル先で落下するムサラビサラ。

両手を広げた構えのまま、片膝をついて着地した光太郎は、なんとか身を起こしながらも身体の所々から火を噴き、爆発の中に消えた怪人の跡に残る煙を目にしながらゆっくりと構えを解いて立ち上がるのであった。

「光太郎兄さん、お疲れ様です」

「見事な一撃だったな」

「まあ、あんなもんじゃないの?」

人間の姿となった光太郎へ駆け寄る桜、武、慎二からそれぞれ賛辞を受けた光太郎が自分の無事を伝えようと右腕を上げた直後、その腕を横から現れたメデューサにがっしりと掴まれてしまう。

「あれ…メデューサ?」

「……………」

名を呼ばれても無言で光太郎の手を取って歩き出したメデューサも光太郎と同様、人間の衣服へと戻り眼帯ではなく今では役割をほとんど果たしていない魔眼殺しの眼鏡の向こうに映るその目は、明らかに不機嫌である。

「行きますよ光太郎」

「行くって、どこへ?」

「メディアのいる柳洞寺です。彼女に光太郎の身体を診てもらわないといけません」

「いやいや、もう戦いは終わったんだし…」

「何を言っているのです! 今回の件で、敵の毒を解析する為に彼方の

取った行動を忘れたのですかッ!？」

いつも以上に強い口調となっているメデューサに反論できない光太郎。

そう、今回の敵であるムサラビサラの標的となり、その毒に犯された多くの子供たちを救う為に血清が必要となるのだが、光太郎は無謀にもワザと敵に噛まれ、毒が全身に行きわたらないうちにメディアへ毒の吸引を頼み、何とか血清の精製に必要な毒を手に入れることが出来た。

しかし敵が現れた事で血清の完成をまたず飛び出した光太郎をメディア達が追いかける事となり、今にいたるのである。

「…子供たちは既に全員助かり、怪人も倒されました。しかし、光太郎に何も起こらないという保証はありません」

「け、けど…」

言い訳しようにも強い意志を秘めたメデューサの瞳に睨まれた光太郎は、彼女の持つ魔眼の威力とは無関係に口を開くことが出来ない。

実際には毒を取り出した時点で身体に残った微量の毒は既にキングストーンの力によって除去されているのではあるが、それでも彼女は納得しないだろう。今回の件だって、何となく彼の行動を見抜いていた慎二以外には黙って実行していたため怒られる事は覚悟していた。

が、想像以上に彼女を怒らせてしまった光太郎にはメデューサの気が済むまで言う事を聞くしかないと諦めるしかなかった。

既にドアを解放して待機していたライドロンは2人が乗り込むと目的に向かうため、川の中へ潜水していく。

(いや道路走らないのかよ)

既に夜中なので道路を通行する一般車両はほとんどいないのに関

わらず進んで行くライドロンの姿を見守る慎二は心の中で突っこんでいた。

その後、アクロバッターに乗った桜を先に間桐邸へ帰らせた慎二と武はタクシーを拾う為に道路へと徒歩へ移動中に先ほど繰り広げられていた光太郎とメデューサの会話を思い出していた。

「いやはや、光太郎殿を心配するメデューサ殿の姿は、完全に保護者であつたな」

「……………」

「慎二殿？」

普段なら全くだよと同意する慎二だったが、光太郎とメデューサの姿に、言いようのない不安が膨れ上がっていた。

きつかけは光太郎が太陽の光なしで強引にBLACKからRXへ変身した副作用で倒れてしまった頃からだろうか。いつも無茶をする義兄に対し、メデューサはより心配するようになってしまっている。

それこそ武の言う通り、子供を心配するような過保護の親のような……

「いや、光太郎相手なんだから、あれくらいがちょうどいいんじゃない？」

だが、考え過ぎだとその不安を振り払った慎二は片手を上げ、ちょうど自分達の近くを走行中であつたタクシーを呼び止める。

嫌な予感は嫌な未来を引き寄せる。

慎二の抱いた不安は最悪な形で中してしまう事となる。

クライス要塞

「お、俺のムサラビサラがあ…」

「フン、あれだけ大見得を切って大したことがなかったではないか」

「なにおう!?!そう言うボスガンの怪魔獣人だってあっけなく倒されたじゃねえかツ!!」

「き、貴様…!?!」

モニターでムサラビサラが爆散する光景を眺めていたクライシス帝国の牙隊長ゲドリアンと海兵隊長ボスガンの見苦しい言い争いを呆れる諜報参謀マリバロンはこれまで次々と敗れ去っていったクライシスが誇る最強の戦士の記録を見る。

怪魔異生獣アツチペツチー

怪魔獣人ガイナマイト

怪魔ロボット スクライド

怪魔妖族ズノー陣

クライシス帝国最大の障害である光太郎を討つべく念密な計画を立て、その中にはRXへ変身させない為に真夜中に実行した作戦もあった。

しかし全てが途中で見抜かれてしまうか、予想外の反撃によって計画が破綻。マリバロンが手にするパットに浮かぶ戦士はRXやBL A C Kによって打ち倒されてしまっている。

否、脅威は光太郎だけではない。

先程ムサラビサラが敗れ去った時と同様、仮面ライダーの周りにいる協力者によってあと一歩まで追い込んだ所を邪魔されたのは初めてではないのだ。

「こいつは、色々と作戦を練り直さなきゃならねえようだな」

「ガテゾーン：ようやく部屋から出られたのね」

「まあな。俺の場合はボディーの電源を落とすときやビームを一日中浴びても痛みはない。おかげで、次に製作する怪魔ロボット設計も時間をかけて練れたって訳だ」

「フッフ：転んでもただでは起きないわね」

マリバロンの背後に現れた機甲隊長ガテゾーンはマリバロンの質問に答えながら、未だ言い合いを続けているボスガンとゲドリアンを無視しこの場にはいない司令官の姿を探していた。

「…將軍は何処に？」

「そういえば、先ほどからお見えにならないわね。確か：クライシス皇帝との通信に使う、我々の立ち入りが禁止されている部屋に向かったはず…」

そこは、クライス要塞の中でジャーク將軍がクライシス皇帝へ報告する際に使われる特別な部屋となっており、ガテゾーン達隊長には入出が禁止されている間だ。

ジャーク將軍は地球侵略が進まないことに怒り、その言い分を聞くと呼び出されたのだと考えていた。

もしそうであれば、処分は自分のみで部下である隊長達を引き続き侵略作戦へ参加させるよう懇願するつもりであったが、ジャーク將軍の予測は外れる事となる。

「…まさか皇帝の代理人である貴様がこの通信を送って来るとは、余程のことなのか」

『本来ならば皇帝直々に地球侵略が遅れている事に関してのお叱りが飛ぶところだが、今そのような余裕はこちらにはなくなったのだ』

時空の揺らぎが原因の為か、異世界である怪魔界との通信機に支障が起きており、ジャーク將軍の前に映るモニターはノイズが走り映像がはつきりと映らず音声のみが部屋に響いている。

それよりもジャーク將軍が気になるのは、クライシス皇帝の代理人と名乗る男の言う出来事だ。この通信機を使ってまでジャーク將軍に伝えるとは余程の事態なのである。

『単刀直入に言う。『星騎士』の封印が何者かによって破壊された』

「ば、バカな!? そのような事が…」

ジャーク將軍は通信機から知らされた事実には驚愕する。

星騎士

それはかつて怪魔界を守る太陽系の星の名を冠する称号を持つ7人の戦士をことであり、偉大な英雄でありながら逆賊の汚名でもあった。

星騎士のうち4人が仕えるクライシス帝国に反旗を翻し、怪魔界を支配せんと暴動を開始する。その時、数日で幾つもの都市を焼き払い、数万人の被害者を出してしまったのだ。

残る騎士3人はこれ以上の犠牲者を出さない為、怪魔界の平和を守る為に全力で戦いを挑んだ。

星騎士同士の争いは実に100日を超え、3人の騎士達の命がけの行動により『火星』『水星』『土星』『木星』の騎士の肉体を滅ぼし、その魂を封印することに成功した。

その魂は二度と新たな肉体を持たせない為に、地下100層にも及ぶ地底牢獄に未来永劫封印されるはずだった。

「一体、誰の手に…」

『それはこちらでも調査中だ。そして奴らはこちらの転送装置を利用して、地球に逃げ込んでいることまで分かっている』

「ならば直に討伐部隊の編制を…」

『いや、その必要はないと皇帝はお考えだ』

「なんだとツ!?なぜそのような——」

皇帝の考えが理解できず、帝国の規律を重んじる立場でありながら意見するなど、司令官という肩書を持つジャーク將軍には許されない行為であったが、皇帝の代理人と名乗る男は気に留めることなく、その理由を述べた。

『奴らは常に戦いを求める野蛮人だ。だとすれば地球にいるRXが

黙っている訳がない。奴らがRXを仕留めた後に始末すれば良い」
「しかし、RXと戦う前に奴らが地球を支配するなど考え出せば…」
『その時は貴君に対応を任せよう、ジャーク將軍。いや——』

『かつて星騎士であつた貴君にな、『金星のウイルス』よ…』

その後、一方的に切られた通信機を睨みながら部屋を後にしたジャーク將軍は自室に戻り、部屋の窓から宇宙空間に浮かぶ惑星…地球を見た。

（魂のみとなった連中は恐らく、自分達の能力を最大限に発揮できる人物の姿となっている。人間として身を伏せているのだとすれば、見つけるのは困難）

だとすれば皇帝の代理人の言う通り、RXと衝突するまで待つしか自分には手段がない。

皇帝の決定ならば、將軍の立場としてそれは正しい。だが、遙か過去。自分達の誇りを穢した裏切り者を放置するなど、自分に許されるのであろうか…

「我が盟友達よ…」

ジャーク將軍は自分の愛刀と共に飾られている二振りの劍を見る。

それは命を捨て、4人の星騎士を倒したジャーク將軍と同じく立ち向かった戦友の形見であった。

その日は季節外れの雨だった。

桜は義兄が忘れた傘を届けに新都の図書館へ向かう途中、アルバイトへ向かう衛宮士郎と偶然道が一緒となり、バス邸へ向かっていた。

「へえ、そんな事があったのか」

「はい、遠坂先輩やメディアさんのおかげでニュースにならずに済んでますけど…」

「ハハハ…どうりで最近不機嫌な訳だ」

学校では相変わらず優等生を演じているが、アーチャーに師事を受ける為に遠坂邸に行ってみると髪を頭頂部でまとめ上げ、クツキリと目元にクマが浮かんだ状態で書類を睨めあっている管理人の姿があった。

あれはあれでいい経験だと言って近付こうともしないアーチャーだったが、庶務に全力で当たる彼女の手元には、誰かによって準備された魔法瓶が置かれていた。その下に挟まれた小さな紙の切れ端に記載された内容をつい士郎は目にしてしまう。

『無理はしないように』

そろいもそろって素直じゃないペアだなと苦笑し、姉とそのパートナーの実態を桜へと報告しながら目的地であるバス停が見えてきた頃。

2人は樹木の下にたち、雨宿りをする人物を見て思わず言葉を失ってしまった。

足を太腿まで大胆に露出したデニムに腹部を晒したチューブトップ。赤いレザージャケットと彼等の知る服装とはかなり異なるが、雨雲であつても煌めく金髪を持つ少女。

数か月前に自分の誓いを今度こそ全うすると旅立った少女の名を、士郎達は呼ばずにはいられなかった。

「セイバーッ!!」

「帰ってきたんですねッ!!」

水たまりを踏みつけて跳ね返る事も厭わず駆け寄った2人に気付いた少女は、キョトンとした顔で嬉しそうに呼びかける士郎達へ申し訳なさそうに指先で頬をかきながら弁明する。

「あゝ、悪いけど、人違いじゃないか?」

「え…?」

「そもそも、俺はそんな名前じゃねえしな」

困ったように両手を広げる動作をする少女の声と口調は士郎と桜の知るセイバーとはまるで異なっていた。

「…ごめんな。俺達の知り合いと、余りにも似てたんでつい」

「いいって別に。で、そいつは俺にどこまでそっくりなんだ?」

「ええつと…そうですね、本当に似ていますまるで、親子みたいに——」

謝罪する士郎へセイバーと似た少女がカラカラと笑いながら尋ねた質問に答えた桜の言葉を聞いた少女は笑った。だが——

「へえ……………」

一瞬だが、人を簡単に殺めるような冷たい眼差しを向けたのだった。

その瞳を見て背筋を凍らせる2人は確信した。ああ、やはり自分の知る少女とは別人なのだ。

「ん？どうした突然？何か怖いものでも見たような顔してんな」

「あ、ああ。なんでもないよ？なあ桜？」

「は、はいそうです！あ、良かったらこれ使って下さい。その、ご迷惑をかけたお詫びです」

ガラリと雰囲気が変わった少女に慌てて答えた士郎は桜に同意を求めると、彼女は領きながらショルダーバックの中に予備として入れていた紺色の折り畳み傘を差し出した。

それが何であるかを理解せず受け取った少女は傘を弄り回している間に用途を理解すると、おお…と声を漏らしながら傘を展開する。

「へえ、便利なもんだな。ま、ありがたく貰ってくぜ。じゃあなー！」
降ろしたての傘を喜ぶような子供の如く無邪気な声を出しながらセイバーと似た少女は、その場を後にした。

「先輩…彼女は…」

「…俺達の知っているセイバーとは別人だろう。けど、全くの無関係とは…思えない」

それがただの思いすごしであつたらいい。士郎が思案していると、

バス停に定刻通り、車両が到着していた。

その日の夜

「ふう…人格どころかまさかコンプレックスまで融合してるとは驚きだな。この人物は親子っていう関係に相当根深いものを持っているらしい」

他人事のように自己分析するセイバーと似た容姿を持つ少女は桜から受け取った傘を片手で弄びながらビルの屋上で新都の夜景を見下ろしていた。

「しっかし随分と錆びれた景色だ。数百年前の怪魔界の田舎にすら劣るじゃねえか。ま、環境が整ってる分まだましか」

少女は傘を畳み、レザージャケットの内ポケットに収納すると腕を天に掲げる。少女の掌に光が段々と収束し、白銀の剣が顕現。

「さて、あのヴィルムスが手こずっている相手はどんな奴なのか。この身体でどこまでの強さを持つてるのか、是非とも試させて貰いたいな」

剣を肩で担ぐ少女の眼は、獲物を求める野獣ようにギラつかせ、自身の目標を口にする。

「この火星の星騎士…アルス様と戦うに相応しい相手か…見極めさせて貰うぜ。仮面ライダーBLACK…RX！」

第34話

クライシス帝国の怪魔異生獣ムサラビサラを仲間達の協力を得て倒した間桐光太郎。

戦いが終わり、互いの無事を確かめ会っていたのもつかの間。ムサラビサラによって子供たちに蔓延した毒の血清を作る為に自分からその毒を受けた光太郎を心配する余りに強い口調でメデイアの元へ連れて行くメデューサの姿を見て、間桐慎二は言いようのない不安を抱いていた。

一方、クライス要塞ではジャーク將軍がクライシス皇帝の代理人と名乗る男から星騎士の封印が何者かによって破壊され、地球へと逃げ出したと連絡を受ける。

すぐにでも討伐すべきと主張するジャーク將軍であったが、その意に反し、クライシス帝国にとって最大の障害である光太郎を抹殺する為に敢えて泳がせるという皇帝の決定に黙って従うしかなかった。

それから数日後、新都へと向かう衛宮士郎と間桐桜はセイバーと瓜二つの少女と接触。思わず声をかけたが口調や声の違い、そして本人の申し出から別人であると気付く。

そしてその少女こそがかつてクライシス帝国へ反旗を翻した星騎士の1人、地球に存在していたとある人物の姿と能力を模して新生した火星騎士アルスであった。

「エマーージェンシー！エマーージェンシー！」

クライス要塞の指令室内で響く音声に誰もが発生源である小型ロボットへと目を向ける。

「オイオイ一体なんだってんだ？」

「何をそんなに喚いている？」

それぞれ怪魔ロボットの設計や愛刀の手入れをしていたガテゾーンとボスガンの質問に浮遊する官房長ロボット・チャックラムは捲し立てるように口早く回答する。それは2人の大隊長すら驚愕する内容であった。

「なんと、いう事…」

マリバロンは目の前で火と煙を上げる巨大なカプセルの前でそんな言葉しか漏らすことしか出来ない。その背後では白髪の老人が両手で頭を抱え蹲り、私のせいではない、私のせいでは…と連呼し、懸命に目の前で起きてしまった事から目を逸らし続けていた。

その部屋はマリバロンが監督するとある人物の成長を管理する為に設けられた一室だ。巨大なカプセルの中でとある人物の細胞より生まれた新生児を寝かせ、成長促進光線を常に照射し続けることで成人まで成長させる。

マリバロンがジャーク將軍によって課せられた最重要任務であるはずだった。

しかし、その人物が眠っているはずのカプセルはその日にカプセルのシステムチェックを行っていたチャップが装置で誤動作を起こし突如炎上、爆発を起こしてしまう。

カプセルと装置周辺は炎に包まれ、近づくことさえできない。い

や、その人物の成れの果てを見ない為に近づこうとする気すら起きないのかもしれない。

なぜなら、そのカプセルの中で眠っていたのは――

「ゲルーツ!? ガロニア姫様のカプセルが燃えてやがるツ!!」

「な、なんとということだ…どうしてくれるのだマリバロンツ! この事が皇帝に知られれば、貴様だけでなく我々の命がないのだぞツ!!」

茫然としている最中、騒ぎを聞き付けて部屋へと入ってきた燃え盛るカプセルを目にしたゲドリアンは悲鳴を上げ、ボスガンは動揺しながら自分達に降り注ぐであろう最悪の未来を口にする。ボスガンの指摘にマリバロンは歯噛みしながらも同意する他ない。

隊長達がそう考えてしまうのも無理はない。カプセルの中で眠っていたのはゲドリアンが呼んだ通り、名はガロニア姫。彼女こそクライシス皇帝の細胞から生まれ、帝国の次期支配者となる存在なのだ。

地球を征服した暁にはガロニア姫を地球の王として祀り上げ、後に怪魔界からクライシス皇帝を迎える計画を進めていたが、その姫を失ったことで水泡に帰してしまう。

そしてボスガンの言う通り、ガロニア姫の死なせてしまうという罪を犯したマリバロンに待っているのは、クライシス皇帝の怒りによる断罪。自分は勿論、地球侵略部隊の司令官であるジャーク將軍すらボスガンの言う通り死罪となる可能性もある。

事が他の隊長に知られてしまった以上、マリバロンは隠し通す事など不可能と悟り、自分を右腕として見出してくれたジャーク將軍の不名誉とならぬよう、自分を処罰して頂くしかないと覚悟を決めたその時。

「何の騒ぎだ…」

ガテゾーンを連れてジャーク將軍の登場に、その場にいた者達は即座に行動へ移った。

「じゃ、ジャーク將軍ツ!! 一大事にございます! 姫が、ガロニア姫がお亡くなりになりましたツ!!」

「これも全て監督者であるマリバロンの責任!」

口ぐちに報告するゲドリアンとボスガン。内容は己の保身と罪を総べてマリバロンへと被せるものばかり。事実がそうである為に、マリバロンには弁明の余地はなかつたただ自分に下されるだろう罰を受けるよう自ら申し出た。

「ジャーク將軍。ボスガンの言う通り、全てはこのマリバロンの監督不行届ゆえに起きた失態…:どのよう罰も受ける覚悟はできております!」

膝を着き、首を垂れるマリバロンの懺悔が籠った声が室内に木霊する中、ジャーク將軍は手にした杖の柄を空いている掌へ数度打ち鳴らし、燃え続けるカプセルをしばし見つめた後、ゆつくりと口を開いた。

「ガロニア姫は、本当に死んだのか?」

「ハ?」

ジャーク將軍の聞くまでもないような質問にボスガンは内心呆れながらも大げさに両腕を広げながらも答えた。

「何をおっしゃるかと思えば…:あのような火と爆発に包まれてしまえばいくらクライシス皇帝の御息女と言えど——」

「姫の御遺体を確認したのか?」

先程よりも鋭く、重い一言にボスガンは閉口し、内心ライバルが減るとほくそ笑んでいたゲドリアンもハツとしてカプセルを見返す。

「姫の肉体の一部、血液、お召し物…そのどれかを確認した者はここに
いるのか？」

ジャーク將軍の問いに誰も答える者はいなかった。

ジャーク將軍の言う通り、チャップが誤動作でカプセルを爆発させたという知らせを聞いて部屋へ囲んできた時には、カプセル周辺は既に火の海であり誰もがもうガロニア姫はこの世に存在していないものと考えてしまった。

「ムーロン博士。最後に姫を確認した時は、どれ程成長していた」

「は、はい！確か…地球人で言えば16、7歳程に…」

今まで打ち震えていた白髪の男…研究者のムーロン博士は記憶をどうにか呼び起こし、今から数時間前に見たガロニア姫の姿を思い出す。数か月前までは赤子だった姫が成長促進光線によって見る見る成長する姿に自分の研究成果は確かであると頷いていたはずだ。

「ふむ…」

ムーロン博士の報告を聞き顎に手を当てたジャーク將軍の脳裏にある可能性が浮上する。その考えを確かめるべく、後を見ないまま今も頭を下げ続けているマリバロンの肩に手を置いているガテゾーンへ命令を下した。

「ガテゾーン」

「ハッ」

「最後に姫の様子を確認したチャップへ例の装置を取り付け、記憶を探るのだ」

「マインドスキャン装置ですか？一体何を…ああ、そういうことですかい」

「急げ。そしてテレポートスペースの履歴も全て洗い出すのだ」
「アイアイサー」

ジャーク將軍の意図を読み取ったガテゾーンは立ち上がりながら再度マリバロンの肩を優しく叩くと室内の隅で拘束されているチャップを連れていく。そのチャップも自らのミスでガロニア姫を死なせてしまったという過失から、足取りも重い。

「あ、あのジャーク將軍。ガテゾーンはあのチャップをどうするので…?」

「チャップの頭を除いた所で姫の死の真相は…」

「お前達、何をしている!」

部屋を後にしたガテゾーンの行動が読めないゲドリアンとボスガンの様子にジャーク將軍は2人の方へ振り返り、さらにドスを利かせた声で指示を出した。

「いつまでこの部屋を放っておくのだ! さつさと火を消せッ!!」

「しよ、承知しました!」

「おい、早く消火剤を片っ端から持ってきやがれッ!!」

慌てて室外へと飛び出し、控えていたチャップ達と共に通路を駆ける隊長2人の姿に深くため息を付いたジャーク將軍は状況が理解出来ないまま顔を上げているマリバロンへ自身が抱いた予測を伝える。

「マリバロンよ。どうやらガロニア姫は、我らの予測を上回り恐るべき成長を遂げていたようだ」

今日で3日目となる雨。洗濯物が乾きにくいと内心で不満を募ら

せながらも間桐桜は自宅へと向かっていた。

本来であればこのまま弓道部の練習に参加するつもりだったが家に忘れ物したと気づき、部長である美綴綾子の許可を得て水たまりへ踏み込まないよう気を遣いながら間桐邸へと急いでいる最中である。

(はあ、それにしてもメデューサ姉さん。光太郎兄さんにべったり過ぎるなあ)

桜は可愛らしく表現しているが、実際には光太郎の行動への監視に近い。大学のある日も昼には一度体調は優れているかの報告を義務付け、就寝前と起床時には部屋を尋ねメデューサが納得するまで光太郎の様子を確認。そして週一度の検診に同行までしてるのだ。

自分を顧みない行動が目立つ光太郎にとって効果は絶大だが、どうにも桜は腑に落ちない。以前は、こちらが見ていても暖かい気持ちになる2人の姿を見ていた気がしたのだが…

(エスカレートしなければいいなあ…)

今朝、確か新都で買い物があると言っていた光太郎に対し、必ず検診の時間までには戻ってくださいとやや強めに言ったメデューサ。間違いなく光太郎を気遣ったことだろう。だが、そればかりが前に出て肝心の光太郎の気持ちにくみ取る事を見落としているのではな
いか…

彼女をそうしたものも、最近また何も言わずに行動を起こす義兄にも原因があるのだが…

2人の関係が悪化しなければいいなどと祈る桜は家の付近まで続く長い坂道にたどり着いた時だった。

「あれは…っ？」

見れば大きめの布を両手で掲げながら雨を避けている人物の姿が目に入った。このご時世には不似合いである地面を擦ってしまう程に長い裾のドレス姿の女性であり、背丈も桜に近い。何処に向かえばいいのだろうかと右往左往している辺り、道に迷っている様子だ。

(そういうえば、セイバーさんと似た人を見かけた日も、雨が強かったっけ?)

もしかしたら、また誰かのそっくりさんかも知れないと小さく笑う桜は人物へと接近する。いくら変わった背格好の人だからと言って放っておけない。

「あの、どうかしましたか?」

肩にバックを掛け直しながら歩み寄った桜の声に反応し、ドレス姿の女性がゆっくりと振り返る。

「え———?」

(何なんだ...?)

新都の大型書店を出た光太郎は周囲を見渡しながら人込みの中を進んでいく。

目当てだった参考書が見当たらず、注文しようかとサービスカウン

ターへといざ向かおうとした時、光太郎の中で警鐘が鳴り響いた。

10年前に冬木で聖杯の中身が溢れ大災害が発生した時、ゴルゴムが世界への宣戦布告として新都を怪人軍団で襲わせた時、そしてクラインス帝国出現を予測した時：

そのどれよりも強く、大雨で肌寒いというのに汗が止まらない。

(それ程の事が起きようとしているのか…キングストーン)

過去、そのどれもが光太郎の体内に宿るキングストーンの意思によるものだったが、今のところキングストーンは応えずただ警戒を怠るなど言わんばかりに働きかけている。まずは確かめなければと外に出た光太郎は次第にキングストーンの反応が強まっていることをひしひしと感じ、さらに街中へと踏み込んでいった。

雨音や信号の音、人々の会話が異様に大きく聞こえ、自分の強化された聴覚がコントロール出来ないほどに緊張状態にあるのだろうか。と眉間に皺を寄せ、意識を集中させたその先に、そいつは立っていた。

相手との距離は道路2車線を跨いだ通路の向こう。人が次々と通り過ぎていく中、立ち止まったまま手にした折りたたみ傘をゆらゆらとさせながら光太郎の姿を見る。向こうは光太郎の存在をとつくに把握していたのか、ようやく気付いたかと言わんばかりに口元を歪ませる。

「…ッ!?!」

先程とは比べものに鳴らないほどの動悸と荒くなる呼吸。自分を見つめる者の容姿、手にした見覚えのある折り畳み傘など驚く点はいくつもある。

しかし、それ以上に光太郎は相手への警戒心が強まっていく中、その人物の口はこのように言っているように動かしていた。

やっと見つけた、と。

クライス要塞の一室で、ベットへと横たわっている1体のチャップの頭部に巨大なヘルメットが装着され、そこから数本の配線がモニターへと繋がれている。

ガテゾーンはジャーク將軍の指示通り、カプセルを破壊した原因であるチャップの記憶を呼び起こす装置の準備を整え、キーボードを数度叩く。これでチャップの脳へと行きわたった情報が映像へと映し出されるはずだ。

(さて、將軍の予想通りになるのかなっと)

膨大な記憶の中からつい先ほどまでの出来事へ焦点を絞り、映し出されたのは、チャップの視点でまだ爆発していないカプセルの点検をする様子だった。

(自分以外の視点についても、妙な感じだ)

などとロボットとは思えないなど自虐しながらモニターを見続けるガテゾーン。チャップの視点は機材からやがてカプセルに眠っているガロニア姫へと向けられた。

ムーロン博士の言った通り、外見の年齢は16、7歳程に成長しているようだ。定期的に胸の辺りが上下している辺り、しっかりと呼吸もしていたのだろう。

そして最後にチャップの手がカプセルの表面に汚れや傷がないかと触って確かめていた途端だった。

今まで眠りに付いていた姫が突然目を開き、妖しくも赤く光る瞳をチャップへと向け、ブツブツと口を動かしている。

直後、手にしていた書類を床に落とし、だらりと両手を下げたチャップはゆっくりとした動作でカプセル横の端末を操作を開始。最後に端末の横に設置されたレバーを倒すと、カプセルが音を立てて開き始めていた。

「……これは、催眠術か？」

ガテゾーンはキーボードを操作してガロニア姫の口元を拡大。さらに口の動きから姫が口にした言葉を予測し、モニターとは別の画面に表示させた。

『……か・ら・だ・し・な・さ・い』

「……………」

もし自分が生身の人間であれば、背筋が凍っていたかもしれないなと考えたその後の映像は、やはりジャーク將軍の予想通りの展開となっている。

カプセルを出たガロニア姫はさらにチャップからテレポーツペースまでの道順を聞き出した後にカプセルを破壊するよう催眠術を施し、部屋を後にしている。

マリバロンが部屋へとやってきたのは、それから数分後の事だ。

「なんてこったい」

「ガテゾーン様。転送機の履歴になります」

「おう、ごころうさん」

一言感想を漏らしたガテゾーンに別個体のチャップが要塞内にあるテレポートスペースの転送記録を受け取り、その中で赤い文字で書かれた部分と、ガロニア姫が逃げ出した時間が一致している。

つまり、姫は自分があの場で死んだ事にしようとする自作自演を行った訳だ。

理由は分らんがこれでジャーク將軍とマリバロンの気は少しは休まるだろうと通信機を使い指令室へと繋ごうとしたガテゾーンだが、モニターに映るガロニア姫の顔がどうにも見覚えがある。そして自身のコンピュータのデータを呼び起こし、ガロニア姫の画像の横に、該当する人物の画像を並べてみた。

「…ちよいとやつかいな事になりそうだな」

その画面には違う人物でありながらも、瓜二つの顔が2つ並んでいた。

「えつと…」

「あらあら…」

雨音が鳴り響く中、互いを見つめ合った少女たちはそんな声を出すことしかできない。

「な、なんで私が…」

そのうちの1人、間桐桜はドレス姿の少女の顔を見て思わず眩く。そしてそれは相手も同様だったようだ。

「ワタクシとそっくりさんがいるなんて…あは、こんなことが地球ではありえますのね!」

だが桜とは対照に破顔一笑する少女はずいっと前へ踏み込んで、今度は顔だけでなく桜の全身を値踏みするように見つめてくる。驚くばかりの桜は先日のセイバーの一件を思い出し、もしや光太郎の近い人間と似た人物を送り出すクライシスの策略なのかという考えを浮上させる。

「うくん。やはりこの服ではどうにも動きにくいのですよね。裾が水を吸収して重たくなってきましたし…あ、そうですわ!」

が、そんな考えを持っているとは思えない程様々な表情を見せる自分と同じ顔の人物の様子を見て、桜は警戒をしながらも手を打ち鳴らしてこちらに向けられた笑顔でとんでもない提案が持ちかけられたのであった。

「もしよろしければ、ワタクシと服を交換して頂いてもよろしくて?」

「え?あ、あの…おっしゃる意味が良く分からないのですけど…」

「あら、ワタクシの召しているドレスがお気にめさないのでか? 中々高級の素材を使っているようなのですが…」

「いえ、そうじゃなくて」

「ああ、そう言えば雨に濡れたうえに汚れていましたのね。これは失礼。ワタクシ、自分の事ばかりで彼方の事まで気が回りませんでしたわ」

「私の話を聞いてます?!」

まるで噛みあっていない応酬について言葉を張ってしまった桜に対して、少女は笑顔を崩さないまま桜の肩に触れ、穂群原学園の征服で

あるブレザーをそつと撫でる。

相手の突拍子のない行動にすぐさま身を引いた桜だが、変化は突然現れた。

少女の纏った服が突然光つたと同時に弾け、細かな粒子へと変化。光の中であられもない恰好となっている光景を茫然としてた桜だが、自分と同じ顔をした人物が人通りがないとはいえず姿となつていることに顔を真っ赤にして周囲を見回して、誰もいないかを確認する。

「な、何をやっちゃってるですかこんな往来で——ツ!？」

「大丈夫、もう終わりましたわ」

「え……？」

確かに光が消え失せたと同時に少女は再び服で身を包んだ姿となった。それも桜と全く同じ学生服を纏つて。それだけではない。手荷物や、手にしている傘まで全てが同じなのだ。

「フッフ…ワタクシが着ていたドレスを粒子変換して再構成しましたの。驚きましたか？」

もはや茫然とするしかない桜に対し、少女は再び顔を近づけると、その大きい瞳を赤く染めながら目の前に立つ少女へ訪ねた。

「あともう一つ、ワタクシのお話を聞いてくれますでしょうか？」

「あ……」

少女の瞳を目にした途端、桜は何故か少女の願いを聞き入れなければならぬと考えるてしまう。見ず知らずの少女のはずなのに。だがその考えすら思い浮かばなくなっしまっていた。

「少しの間でいい。ワタクシに、彼方と同じ生活を体験させて下さい。

彼方は、家に帰って頂いてよろしいですか？」

「は……い……」

「では、彼方を知る為に少しだけ記憶を覗かせて貰いますわね？」

既に少女の言葉に頷くことしか出来ない桜の額に人差し指を当て、目を瞑ると桜のプロフィールが流れ込んでくる。

(間桐桜…穂群原学園所属の学生。家族構成は父に兄が2人。姉が1人…いえ、2人ですわね。それに同居人が1人…交友関係は…うん、これで十分ですわね)

読み取った情報に満足した少女は指を話すと踵を返し、穂群原学園へと向かう。

「では桜さん、後でまた暗示を解きに行きますのでお家で待っていてくださいね!」

「ハイ…ガロニアサマ…」

虚ろな瞳で返事をした桜もまた振り返り、間桐邸へと歩き始めた。

「さて、学校…どのような場所なのでしょう…あら?」

ふと少女は自分の髪に結ばれているリボンに気が付き、数度触るとあっさりトリボンを解いて丁寧に畳むと制服の内ポケットへと収納する。

(かわいいのですけど、ワタクシは髪を遊ばせておくのが好きですからね)

黒髪をゆつくりと撫でた少女…ガロニアは向かう。クライス要塞では知りようがない『日常』という場所を目指して。

「遅いですね光太郎…それに、嫌な予感がします」

時計を見上げ、間桐家に戻ると言った時間を既に30分以上経過している。腰かけていた椅子から立ち上がったメデューサは傘も差さずに外へ出るとその身に戦闘装束を纏い、電柱を足場にして移動を開始する。

現在アクロバッターとライドロンは活動範囲を広げたクライシスに対抗する為、ダミーの人形を搭乗させ巡回を行っている。こんな時、2輪の免許も取得しておけば良かったと考えるがそんな後悔は遅い。

一刻も早く光太郎の元へ向かわなければと跳躍するメデューサは自分の眼下で歩く少女の姿が目映った。

（サクラ…？今日は部活があったのでは…いえ、家に向かっているのならば問題ありません。今は光太郎を優先です！）

自己完結させたメデューサと桜はすれ違うようにその場から離れていく。

もし、メデューサがガロニアの催眠術にかかってしまった桜に少しでも違和感を覚え、彼女を呼び止めていたのならば事態は大きく変わったのかもしれない。

だが、それにメデューサが気が付くのは、しばし時間を置いてのことだった。

「新都の大災害跡地。」

人工芝が広がるその土地で2人の人物がいた。

そのうちの1人は全身を銀色の甲冑で包み、片手に白銀の剣持って相手を見据える。強くなった雨に打たれ、飛沫を上げる甲冑には傷一つなく、美しささえ感じてしまう程だ。

「なんだよ……」

対し、甲冑を纏っている人物の声は低い。まるで期待はずれと言わんばかりに、自分と対峙していた者へ下した評価を口にした。

「大したことないな」

黒い身体を全身切り刻まれ、赤い複眼に大きな亀裂を走らせた仮面ライダーBLACKが、倒れていた。

雨は、まだ止まない。

くおまけく

「ふんふんふふくん♪」

ご機嫌にステップを踏みながら学校を目指すガロニアはこれから見るもの全てが楽しみで仕方がない。

あのカプセルの中では叶わない「学校生活」とはいかなるものであるのかと期待に胸膨らませて目指していたその道中。

(衣服が違うだけでこんなにも動きやすいものですね！特に胸の辺りなんてこんなにも余裕があつて…余裕？)

ピタリと動きを止めたガロニアは周囲を見渡しながらそつと制服の第一ボタンを外し、服の中を覗き込む…

繰り返すが、ガロニアは桜と全く同じ衣服へとドレスを交換した。そう、『サイズまでまったく同じ』に。

直ぐ様に衣服の微調整を行ったガロニアは再度学校を目指す。

(まあ、少なからず違いはありますもの。ええ、あります。あるから面白いのですよね、この世界は…)

若干不機嫌となりながらも雨の中をガロニアは行く。

どうやら、容姿の全てが同じとは限らなかったようだ。

第35話

クライシス皇帝の正統なる後継者であるガロニア姫。

ジャーク將軍率いる地球侵略軍によって地球を手中に収めた後、彼女が支配者として君臨するはずであったが、ガロニアを成人させるまで養成させるカプセルが突然の爆発を起こしてしまう。

ガロニア姫養成の責任者であったマリバロンは死罪を覚悟したが、ジャーク將軍はカプセルの爆発はガロニア姫によって起きたと見抜き、ガテゾーンへ調査を命じる。

その結果はジャーク將軍の予測通りであり、16、7歳の少女まで成長したガロニア姫はカプセルの中からチャップへ催眠術を施し、自分がカプセルを抜け出した後にワザと誤動作するように命じ、本人は要塞内のテレポートスペースを利用しどこかへと向かったと判明したガテゾーンは急ぎジャーク將軍へ報告しようとする。

しかし、ガロニア姫の容姿がクライシス帝国最大の敵である仮面ライダーBLACK RX：間桐光太郎の妹である間桐桜と非常に似ている事に一抹の不安を覚えていた。

その予感は当たり、桜と鉢合わせたガロニアは桜と同じ服装になると桜へも催眠術をかけ、家に帰らせると彼女が向かうはずだった穂群原学園へと向かっていく。

知識でしか知り得ない、地球の生活とはいかなるものかと知る為に。

一方、光太郎は新都でセイバーと似た少女…かつて怪魔界を支配せんと暴れ回った星騎士の1人、火星の騎士アルスと遭遇。

雨が降り注ぐ中、全身をアルスが手にする剣によって切り裂かれた光太郎は意識を何とか保ちつつ、自分を見下ろすアルスを倒れたまま見上げるのであった。

(冷…たい…)

滝のような大雨に全身を打たれる中、傷だらけの仮面ライダーBLACK…間桐光太郎はそんなことを考えていた。

傷の深さを見れば、本来ならば血液がとづくに尽きてしまう程の傷を全身に受けている。こうして生きているのは再生能力に力を全て注ぎ、想像を絶する痛みを中和しているキングストーンの力の恩恵なのだろう。

だが、BLACKの再生能力はRXへと進化して以降、以前のそれを上回っているのだが今はキングストーンの力を上乗せしなければ危険な状態に陥っている。それ程彼女から受けた攻撃は強く、深く刻まれたのだろう。

立ち上がるうにも指先が微かに動くことが精一杯である光太郎の喉元に、銀色の甲冑を纏った人物の剣先が当てられる。

(これが…俺の限界なんだな…)

普段では考えられない弱気な結論へと辿る光太郎。

そう考えてしまうには、自分に剣を突き立てた人物の言葉が大きかった。

新都の災害跡地で戦いが始まる前…

自分を見つめたまま、口元を妖しく微笑みながら接近する少女の足音が異様に大きく聞こえる。改造人間にされてしまった光太郎の聴覚は変身する前でも数キロ先で床に落下した針の音すら捉える事が出来るが、今は少女の足音以外、全てが聞き取ることが出来ない。

自分の避けて歩いていく人々の声や足音。数日前から止む気配を見せない雨がアスファルトへ打ち付ける音。少女が接近するにつれて早くなる自分の心音。

どれもが光太郎と2メートルもない距離まで接近した少女の存在によって打ち消されてしまっている。

額に浮かぶ汗を拭わず、光太郎は手にした傘の柄に亀裂が走っている事も自覚せず相手の出方を見る。しかし警戒する光太郎に対し少女の視線は別方向へと向けられていた。

数十秒経過しても、一向に自分へと向けられそうにない少女の目を追って光太郎も顔をゆっくりと同じ方向へと向ける。

「……………」

そこは、冬木でもさほど珍しくないファミリーレストランのチェーン店であった。

「うつまいんだなこれッ!?地球じゃちよつとした金さえ払えばこんな美味しいもん食えるのかよ!!」

「……………」

周囲の反応など気に留めず、少女は口にした料理を大声で賞賛する。何故か相席するよう言われた光太郎は黙ってブレンドコーヒを啜ることしか出来なかった。

「クライシス城で出された堅苦しい宮廷料理とは大違いだ、んく美味しい!」

そんな単語がサラリと出てくるということは間違いなくクライシス帝国と縁のある人物に相違ない。向かいの席に座る光太郎は満面の笑みでデミグラスソースをたっぷりかけたハンバーグを口へ放り込み、頬張る少女の顔を改めて眺めると、やはり自分の知るセイバーとよく似ている。

だが先程のは発言からセイバーとは全くの別人なのだろう。何故彼女と似ているのかは勿論気になるが、それ以上に光太郎は少女の存在を以前から『知っている』ような既視感を覚えていた。しかし、光太郎は間違いなく目の前の少女とは初対面のはずだ。

光太郎は少女は間違いなく初対面のはず。なのに、どうして少女の存在を予め知っていたような気になるのか。少女と接触する寸前まで自身にあった焦りや警戒心はそれが原因なのかもしれないが――

「おおい、聞いてんのか?」

「っ!?あ、ごめん」

「ごめんってなんだよ。ま、敵が白昼堂々現れて飯の同伴申し出たんだからそりゃ混乱するだろうな。ところで、あそこに行けば好きな飲み物選べるんだよな?」

「あ、そうだね…」

「へえ、面白いな。昔はいちいち給仕係が注ぎにくるの待たなきゃならなかったからなあ」

興味深くドリンクバーのコーナーへ向かった少女だが、言葉の中に自然と『敵』と述べられていたことに光太郎の耳に強く残っていた。

その後も少女の質問に応じ、解りやすい説明を続ける度に様々な表情で反応する姿を見て、光太郎は可能であれば争いたくはないという考えが芽生え始めてしまう。

「ふうー、満腹だあ」

「……………」

詰まれた皿の上に乗っていたであろう料理の総量とが少女が摩っている腹部…着用しているのがチューブトップの為、地肌まで見えてしまっているが、明らかにあの胃袋へ入ったとは到底思えない光太郎だったが、もし目の前の少女が騎士王と何等かの関係があるのであれば、納得することなのかもしれないと結論付ける。そう考える他ないのだ。

「さてと。腹もふくれたことだし、自己紹介しとくか」

ナプキンで口を拭い、少女は笑いながらさも当然のように自分の名と目的を光太郎に告げる。

「俺はアルス。怪魔界では火星の星騎士で通っている。目的はお前を殺す事だ！」

「星…騎士？」

目的に関しては初対面の段階で予想はしていたがこうハツラツに言ってしまう少女はこれまでの敵とまるで違うと逆に關心してしまう光太郎。だが星騎士の名に聞き覚えがない為、説明を求めると少女は嫌な顔一つせず説明を始める。

「星騎士…まあこの太陽系と同じようにある惑星の称号を持つ戦士のことだ。怪魔界を治めるクライシス帝国の戦士で最高位である証。俺はその中で火星の称号を持っている。けど、俺達が起こした反乱でその称号もほぼ無意味になっちゃったがなあ」

ハハハと笑うアルスだが、聞いていた光太郎からして見れば怪魔界に混乱を起こした張本人ではないのだろうかと思うが、光太郎の心中など察する事無く少女は説明を続ける。

「裏切った俺達を討伐する為に大軍隊が押し寄せてきたんだけどな。まあその辺は省いて、結局は同じ星騎士の連中に俺達は倒されて肉体は消滅。魂だけになって封印されてたわけなんだけど誰かにその封印を解かれたみたいなんだよ」

「その、誰かというのは？」

「さあな。ただ今でもはつきりと覚えているのは、俺達の魂を地球に転送した奴はこう言っていた」

『地球にいる間桐光太郎を倒せ…その者がお前達の最大の障害となるだろう』

「ってな」

「ちよつと待って。え？訳の分からない相手の言葉を鵜呑みにして俺の所に来たの？」

「ああ。そしてなんとなく冬木中歩いてたら『あ、アイツが間桐光太郎っぽいな』って思ってたんだら大当たりでさあ」

「勘っ!?俺が目的の人物だって勘で当てたのツ!？」

「その通り!馬鹿正直に反応してくれたおかげで助かったしな」

「返す言葉がない…けど、本当に信用できるのか?君に声をかけた人物、どう見ても怪しいぞ」

「しよーがないだろお。この星じゃ他に目的ないんだし、怪魔界に戻るにはお前を殺すのが手っ取り早いんだよお」

説明の中で登場した星騎士達を解放したとされる人物が余りにも不審な点が多すぎて聞き返した光太郎にアルスは唇を尖らせてブーたれている。その子供じみた態度がより光太郎の知るセイバーとは別人であると断定させる材料となってしまった。

それに話を聞く限り、彼女以外の星騎士が地球へ潜伏している事とは間違いない。少しでも情報を手にしようと、光太郎は質問を続けた。

「…話を戻そう。さっき肉体を失ったっていったけど」

「ああ。俺達は常に戦いの中に身を置いていたからな。あとそれなりに功績を残していたから当時の皇帝が俺達星騎士に褒美として戦いの中で死んだ場合一度限り、新しい肉体を得る一呪い《まじない》をかけてくれたのさ」

「新しい肉体を…?」

「けど条件が厳しくてなくまだ前の肉体が健在ならそこに魂を入れれば万事OKなんだがあれいづらに元の身体を塵芥にされた以上、前の肉体は望めない。だから代わりとなる器を創りだして魂を宿すしか方法がないんだ。それもゼロから相応しい肉体を創るのが面倒らしかったのか、過去に実在した人物の肉体のみを複製っていう手抜きっぷりだ」

「そんなことが、可能なのか?」

「こうして俺がここにいることが何よりの証拠だろ?それと人物の肉体を複製する条件ってのが、自分と近い強い願い、意思を持った人

物って限定される。俺の場合はこの星で近しい考え…というか『願い』が一致してこの肉体になったらしいな」

細く、白い指先を見つめながら自嘲するアルスの説明を聞いた光太郎はどこか大聖杯が生み出したサーヴァントのシステムと近い構造だと考えながら、続けての質問をぶつける。

これが光太郎にとって最も重要な疑問だ。

「なぜ、俺を殺すことが怪魔界に戻ることに繋がるんだ」

「ああ、理由は簡単だ」

「そうすれば、嫌でも俺という存在を認識しなきゃならないだろ？怪魔界の連中も、クライシス帝国の皇帝も」

先程まで見せていた年相応の笑顔が欠片も感じられないほど、アルスは冷たい笑みを浮かべた。

「それが…君の戦う理由なのか？」

「ああ。その為なら俺はどんな奴とも戦う。敵わない敵だろうが身内だろうが、俺を認めさせる為に全力で戦ってやる」

光太郎の質問に答えながら、アルスはゆっくりと指先を向かいに座る自身の標的へと差し向ける。

「その為に今回はお前と戦う。間桐光太郎——俺の為に、死んでもらうぜ」

「…悪いけど、俺は死ぬわけにはいかない。君に戦う理由があるように、俺にだってあるんだ。戦う理由が」

目を逸らすことなく言い返した光太郎に興味を抱いたアルスは促す。

ならば言ってみろ。お前が戦う理由をと。

「俺は、誰かを守る為に。もう大切な人々を失わない為に命をかけて戦うんだ」

「……………なるほどな」

光太郎の理由を聞いたアルスは長い沈黙の後、短くそう言って深くため息を付いた。眉間を指先で軽くトントンと叩く仕草をした後に出されたアルスはゆっくりと目を開き、光太郎へと尋ねる。

答えられるものなら、答えて見ろと。

「そうか。それがお前が戦える理由。成程。お前は『そういう』類か。なら聞かせて貰うが——」

「お前がお前の言う大切な人を目の前で無惨に殺されたら、お前は今まで通り戦えるのか？」

光太郎の背筋が凍る。

「お前の言葉からして、どうやら誰かお前に取って大切な存在は過去

に死んでいられるだろう。だからこそ、同じことを繰り返さない為にも前は戦ってこれた。けどな、戦いに絶対はない。誰かを巻き込まない争いなんてありえない。そして運だとか油断だとか、そんな言い訳なんて通用しないかのように、簡単に、誰かが死ぬ」

目の前にいる光太郎に対してのなのか。それとも自身に言い聞かせているのか。アルスは先ほど光太郎に向けた冷たい眼差しに別の感情が入り混じったように声を出す、そのアルスの表情を光太郎に見抜くことは出来なかった。

アルスの発した言葉が、耳の中で強く響く。

幼き頃、目の前で死んだ養父の秋月総一郎。自分に願いを託して逝った間桐蔵硯。彼等の死を見て。彼等の最期を見て。光太郎は命を懸けて戦う覚悟を決めた。

以来、敵によって浚われ、時には傷ついた事もあった。だが、それでも『死んでいない』

光太郎が仮面ライダーとして戦うようになってから『死んでいない』のだ。

アルスの言う、光太郎に取って大切な存在。最初に思い浮かべるのは、やはり共に暮らす存在だ。

慎二、桜、そしてメデューサ。

彼等は光太郎に取って大切な家族であり、苛烈な戦いを生き抜いた仲間であり、心の支え。

もし、その誰かがアルスの言う通りに自分の目の前で殺されてしまったのなら…

「お前は戦えるのか？悲しみに囚われることなく、怒りに駆られることなく、お前の言った決意の元に、戦うことが」

尚も問い続けるアルスに、光太郎に衝撃が襲う。そんな事が本当に起きてしまったのなら、再び自分の前で大切な家族がこと切れる姿を見なければならぬ時があったのなら。

「っ……！」

乗り越えたつもりだった養父の死に様が、再び脳裏に色濃く浮かぶ。同じ光景を、今度は慎二や桜で起きてしまったのなら……考えてたくもない『もしも』が起きた時、自分は、これまで通りに戦えるのか。

光太郎が迷う様を見て、アルスは無言で立ち上がった。

「…即答できない辺り、今まで考えてもみなかつたらしいな」
「……………」

「別にお前の心を乱す為に聞いた訳じゃない。これから殺す相手の考えくらい聞いておこうとしただけだ」

「俺は…」
「いいさ。自分の為に戦う俺と、誰かの為に戦うお前。違いなんてそれだけさ。表に出ろよ」

アルスは赤いレザージャケットを羽織ると、レジカウンターへと向かっていく。

「そろそろ始めようぜ」

ニヤリと笑うアルスに続き、光太郎も席から立ち上がる。もう戦いは避けられないだろう。彼女とは考えが根本的に異なる。それに、彼女から指摘された事に対して光太郎は明確な解答を持ってないままであった。

未だ雨が続く外へと出る準備が済んだ時、堂々と歩んでいたアルスの足が止まり、身体を正目に向けまみ顔のみ光太郎の方へ止める。その表情は先ほどと打って変わり、どこか気まずそうであった。

「あの…や」

「悪いけど…金貸してくれないか？思った以上に食い過ぎたらしい…」

その後、会計を終えた2人は付近のコンビニへと立ち寄り、いつ開設したのかは不明だがATMで代金の差額を下ろしたアルスは光太郎に清算した後、2人は大災害の跡地へと移動した。

「ここなら、邪魔が入らないし、下々の連中が来ることも無いだろう」
「……………」

「意外そうな顔してるな。俺だって可能な限り関係のない連中は巻き込みたくはないさ」

「そうか…」

未だアルスに問われた事が気がかりなのか、覇気の無い空返事をす

る光太郎とある程度の距離を開けたアルスは折りたたみ傘を懐にしまい、身体から力を解放。

身体に張り付いた水分を一気に蒸発させてしまうような熱量を持つエネルギーがアルスを包んだ瞬間、それは銀色の甲冑へと変貌する。

雨を浴びながらも鮮烈に輝く甲冑はどこか光太郎の知るセイバーが纏っていたそれと似通った部分があるが、胴体や籠手だけでなく脚部全体や肩を包むことから彼女の纏っているものよりも重装甲であることが伺える。そして最大の違いはまるで魔物を連想させる大型の角を2本持った兜。

最後に白銀の剣を握ったことで彼女の準備は完了。その剣の切っ先を光太郎に向ける。今度はお前の番と言わんばかりに。

「こっちはいつでもいい。さあ、お前が俺達と、クライシスに脅威となるとされている力を見せて見ろ」

「…変身」

傘を放り投げた光太郎が言葉にした直後、腹部に銀色のベルトが出現。ベルトの中央から赤く眩い閃光が放たれ、その光を浴びた光太郎はバツタ怪人へと変貌。

だが変化はそこで終わらずさらに光が激しくなるにつれて強化皮膚『リプラスフォース』がバツタ怪人の全身を包み、黒い戦士を誕生させた。

全身の関節から余剰エネルギーを蒸気として発散させた光太郎：仮面ライダーBLACKは拳を強く握り構えを取るが、対峙するアルスは変身した光太郎の姿を見た途端に剣を下ろし、まるであり得ないものを見たかのような声を漏らしていた。

「まさか…それは…」

頭部全てを包む兜により表情は目に見えないが、彼女が驚愕してき
ることは確かだろう。しかしアルスの反応は直後、別のモノに変わっ
てしまう。

「く…クククツククク」

「…なんだ」

「は…ハハハハハハハ…ハアハツハツハツハツハツハツハツ!!」

最初は堪えるような小さな笑いだったが、次第に光太郎の鼓膜に響
く程の大きな豪笑へと変貌していた。本来なら笑い転げたいところ
であるアルスだが、何とか耐え抜きまるで状況が理解できない光太郎
に向けてさらに混乱させるような言葉を浴びせた。

「そうかそうか！お前はそういう奴だったか！これは確かに俺達の脅
威となりうる！あの野郎の言ったことは、あながち間違っていないかつ
たわけだ!!」

「何を…言っているんだ？」

「ハハハハ…気にするな！これで納得いったよ。何故俺がお前を間桐
光太郎であるかと決めつけ、お前が俺を察知できたのか。まったく、こ
れが運命…いや、宿命って奴なのか？」

フーフーと呼吸を整えたアルスは剣を握り直し、今度こそ戦いの狼
煙となる布告を光太郎に叩き付ける。

「決めた。お前は確実に殺す！」

瞬間、光太郎は振り返りながら両腕を交差すると身体全身を揺さぶる程の衝撃が走る。

光太郎の背後へと移動したアルスが振り下ろした剣を何とか受け止めた光太郎だが、剣を降ろす手へさらに力を加えられ、徐々に足元か震えていることに気付く。

(このままじゃ…)

まずは距離を取らなければならぬと判断した光太郎は濡れた人工芝を蹴り、後方へと逃れようとするがアルスは光太郎の思考を読んでいたかのように、光太郎が体重を後へとかけたと同時に腹部へ踵を叩き付けた。

「ガッ!？」

思わぬ攻撃を受けて腕の力が抜けてしまった光太郎への追い打ちは止まらない。次々と繰り出されるアルスの斬撃は光太郎のリブラスフォースを削り、裂き、傷を負わせていく。

後方へと移動してもアルスの攻撃を回避することが出来ず新たな切り傷が増えていくだけであった。

一方的。

光太郎は得意とする攻撃することが出来ず、反撃すら許されず、身体に深い傷を負い続けていた。それにアルスの攻撃は片手で剣を振るうという至って単純な方法を先ほどから変えずに振っている。その単純な攻撃すら避けることが出来ず光太郎はダメージを受け続けているのだ。

(なんて重く、鋭い攻撃なんだ。このままじゃ…)

なんとか反撃の糸口を探そうともそれを許す相手でもない。斬撃

が光太郎の胸板へ新たな傷を残し、苦悶の声を上げる光太郎は強引に地面を蹴り、上空へと退避。アルスは追うことすらせず十数メートル上にいる光太郎を見上げるだけで動こうとしない。

チャンスは今。光太郎は右拳を握り、赤い光を宿し落下しながら真下にいるアルスの頭部目がけ、全力で叩き込む。

「ライダーッ!! パアンチッ!!」

赤い軌跡を描きながら振り下ろされる拳。

だが、光太郎の拳は狙った箇所を捉えることなく、アルスの掌に受け止められてしまう。

「なっ…!?!」

「これが、攻撃のつもりか?」

興醒めだと言い捨てたアルスは光太郎の拳を掴むと光太郎の着地をまたず、人工芝へと叩き付ける。鈍い音を立てて人工芝へと沈んだ光太郎は背中に走る激痛に声すら上げられない。

まるで自分の攻撃が通用しない。

その事實は身体に走るダメージより遥かに大きかった。

だが、それでも諦めない。負けられない。

問われた事にはつきりとした答えを出せるまで、死ぬわけには行かないと立ち上がるとした光太郎だったが――

「弱いな、お前」

「こんなんじや、守れるわけないな」

「自分も、お前の言う誰かもな」

アルスの言葉で光太郎の動きが止まった直後、光太郎の胸板に当てられた剣から閃光が放たれる。

それは目が眩む程の激しく赤い雷だった。

「なんだよ…」

「大したことないな」

アルスの下した評価に光太郎は反応せず、ただ倒れている事しか出来なかった。

(本当に、期待外れもいいところだ)

光太郎が変身した時、自分と渡り合える程の猛者であったかも高揚したがいざ戦ってみればあまりにもあっけない幕切れとなってしまうた。

いや、その前に心を揺さぶりすぎたかもと反省するアルスだが、どの道明確な答えを持たないままであればいずれ死ぬ運命にあったのだろう。それが早まったただけだと自分を納得させると剣の先端を起

き上がる様子のない光太郎の喉元へと向ける。

これで自分達を解放した存在の思惑通りになり、怪魔界へと凱旋することとなるだろう。

後は僅かでも剣先を喉へと突き刺せば終わる、はずだった。

「ッ!？」

眼前まで迫った鉄杭を避ける為に後方へと飛んだアルスは着地と同時に今まで自分が立っていた場所へと目を向けると、女が立っていた。

長く艶やかな紫色の髪を持ち、黒い戦闘装束を纏ったメデューサが紅く輝く瞳を殺気で漲らせ視線を向けている。

「何者かは知りませんが…これ以上光太郎を傷つける事は許さないッ!!」

「なるほど、間桐光太郎の身内か…邪魔するってんなら…」

メデューサの言動から光太郎の縁ある者と判断したアルスは彼女との距離が10メートル以上の開きがあるにも関わらず、剣を縦に振り下ろす。

次の瞬間、風を切る音と共にアルスの放った剣圧がメデューサへと迫る。突然の衝撃に身構えるメデューサだったが耐えきることが出来ず、地面を転がりながら吹き飛ばされてしまう。

「く…」

「威勢だけならそこで寝てる奴よりマシだったな。だが、もうちよつと実力差つてのを埋めてから——」

さらにもう一度浴びせようと剣をアルスは剣を振りあげる。敵対する相手の言う通り、聖杯戦争時と比べ力が半減した自分では…い

や、当時の力を持つてもあの相手には敵わないかもしれないと先ほどの攻撃を受けて直感したメデューサは自身に迫る危機に歯噛みすることしか出来ない。

しかし、そんな危機感よりも、自分を庇うように立ち上がった人物の名を呼ばずにはいられなかった。

「光太郎…」

「ほう…まだ立てる力が残っていたか」

全身を切り裂かれたというのに立ち上がった事に関心するアルスを余所に、光太郎は左右に両手を伸ばし、ベルトの腕で両拳を重ねると同時にベルトの中央が赤く発光させる。

眼前で腕を交差させ、ゆっくりと左右に腕を広げていくと徐々に関節部からベルトと同じく赤い輝きが宿り始めていた。

キングストーンの力を全身へと行きわたらせた光太郎はアルスの攻撃によって受けた傷を強引に回復させ、全ての力を前方へ突き出した拳へと収束させていく。ベルトのエナジーリアクターよりも強く、激しい輝きを宿した拳を見てアルスは再び剣を光太郎へと向ける。

「そうだな…お前が戦う理由がそうならば、この場で力を発揮できても不思議じゃない。問題は…俺に届くかどうかだな」

「……………」

「言葉すら発しない…いや、既に意識すらないな、お前」

アルスの推測通り、今の光太郎にはとうに意識はない。ただ、敵の攻撃を受けて倒れてしまったメデューサを守りたい。その一心が身体を起き上がらせ、全てのエネルギーを込めた攻撃を繰り出す体勢となっているのだ。

そんな光太郎に対してアルスは両手で剣の柄を握る。これまで片腕でしか剣を振るっていないアルスにとって、意識を失おうが戦おうとする光太郎に対する敬意であった。

メデューサが見守る中、雨に打たれ続ける2人が動いたのは全くの同時。そして、攻撃を仕掛けた2人は一瞬にてすれ違い、5メートル以上の距離を開けて背を向けあっていた。

光太郎は拳を突出し、アルスは剣を振り下ろした体勢のまま微動だにしない。

だが、結果は直ぐに現れた。

「光太郎ッ!？」

光太郎の胸部から鮮血が吹き出し、地面に沈みながら人間の姿へと戻っていく。急ぎ駆け寄るメデューサが介抱し何度も声を掛けても意識が戻る気配はない。危険な状態だ。

「なるほど、な」

ゆっくりと振り返りながら兜へと手に触れる。兜の装飾である角1本が見事に折られていた事に声を漏らしたアルスは鎧を消失させ、光太郎達へと近づいていく。

「せ、セイバー…?」

「そんなに似てるのか。そこまで言われると一度会ってみたくくなるな」

光太郎を庇うように抱き寄せるメデューサの反応に、自身の容姿と似ているとされる人物に興味を抱いたアルスは懐から折りたたみ傘を取り出し、展開すると踵を返してその場から離れていく。

「起きたら伝えといってくれ。今度は迷いのない状態でやり合おうつてな」

段々と小さくなっていく少女の背中を警戒しながら光太郎を木陰へと移動させ、応急処置を進めるメデューサのポケットから携帯電話の着信音が鳴り響く。

今は光太郎の治療に集中したいところだが、いつまでも鳴りやまないことから非常事態かもしれないと電話を手にして耳へと当てる。それはメデューサをさらに混乱させる内容だった。

「サクラが…誘拐された…!?!」

第36話

間桐光太郎が遭遇したセイバーと似た少女。

彼女こそかつてクライシス帝国に反旗を翻した星騎士の1人、アルスであった。

アルスの誘いで食事に同伴した光太郎は、彼女の狙いが自分の命と知ると、自分にも守る人々の為に負けられないと反論する。

だが、光太郎の言葉を聞いたアルスの『お前の言う大切な人が目の前で無惨に死んだ場合、今まで通り戦えるのか』という問いかけに言い返すことが出来なかった。

光太郎はアルスに対して答えを出さないままアルスと共に新都の災害跡地へと移動。

白銀の甲冑を纏ったアルスは仮面ライダーBLACKへと変身した光太郎の姿を見て驚愕した後、突如大声で笑い出した。

変身した光太郎に何かを見出したアルスの意味深な言葉に戸惑う中始まった戦いは、アルスの圧倒的な力により光太郎はなす術がなかった。

傷つき、倒れた光太郎の喉元にアルスの剣が突き立てられる寸前、駆けつけたメデューサによって間一髪助かったが、逆にメデューサまでもがアルスによって吹き飛ばされてしまう。

メデューサの危機に光太郎は再度立ち上がり、無意識の中で拳に全ての力を注ぎ込んでアルスに挑むが、届いた一撃はアルスの兜を破損させるだけに過ぎなかった。

重症を負って人間の姿となった光太郎を介抱するメデューサに対し、アルスは光太郎へ再戦を言い渡してその場から去っていくのだった。

意識を失った光太郎の応急処置を続けるメデューサに、さらに最悪の知らせが届く。

間桐桜が、何者かによつて浚われたという知らせだった。

光太郎がアルスの食事に行きさせられていた頃と同時刻

「ここが、学校ですね……！」

穂群原学園に到着した間桐桜と瓜二つの顔を持つ少女……クライシス皇帝の娘であるガロニアは校門の外から校舎を見つめ、隠しきれない歓喜と共にそう呟いた。

その日は土曜日の為、授業は午前中で終了し部活に参加する生徒のみが残っているのだが生憎の雨天となった関係で校庭を利用する運動部は総じて中止か室内で出来る運動に従事している。

だがガロニアに取っては些細な問題だ。こうして余分な知識として、だが余分以上に興味を抱いた『地球人の生活』を直に目にする事が出来るのだから。

クライシス皇帝の細胞から生まれたガロニアであるが、そうである

と誰かから教育を受けなければ自身に自覚は芽生えない。当然だろう。成長促進光線を浴びて身体は成長してもそれに伴う知識を身に着けなければ身体が大きいだけの赤ん坊と変わらない。

そこで教育係の責任者となったマリバロンとムーロン博士はカプセル内に睡眠学習装置を設置し、自分は誰の娘であり、何のために生まれ、成長しているのかを身体を成長させると共に学ばせる方法を選択した。

彼方様は偉大なるクライシス皇帝の娘である自分は50億を超える民を支配する存在。

そして滅びの道を辿っている怪魔界を捨て、地球を新たな楽園とするのです。

その為に地球を支配し、全人類を奴隷として支配し、逆らう者は全て処刑。

全ては、クライシス帝国の支配者としての務めなのです。

…本当にそうなのだろうか。

睡眠学習装置で繰り返し言い聞かされるその言葉に、身体を10歳前後に成長した頃のガロニアはそんな疑問を抱いていた。

自分が皇帝の娘として生を受けたというのとはともかく、母なる星を見捨て、他の惑星を支配するという方法がどうにも納得が出来ない。学習装置によればクライシス帝国は高度な化学を誇っており、他の文明を見下しているような一説も学習装置から吹き込まれている。

ならばその化学を用い、環境を改善させることだって不可能ではな

いはず。だが帝国が選んだのは他星の移民。いや、侵略だ。さらにはクライシスの民を救う為、地球の民を奴隷にするか滅ぼすという手段も、学習装置から学んだ『野蛮』という言葉に相応なことではないのか…

知れば知る程矛盾が生じていく最中、ガロニアは侵略対象である地球の事を知る。無論、マリバロンにより偏った知識でしかなかったが、頭の中へダイレクトに映し出されたビジョンの中で、地球に住まう人間は、『笑って』いたのだ。

下等なる地球人は考えなしに、地球という惑星の恩恵に縋ってぬくぬくと過ごしている等と言う雑音を聞き流し、ガロニアは有り触れる生活の中で笑い合いながら生きていく地球人の暮らし…特に同年代の少年少女達が通う『学校』に強く関心を持ったガロニアは自身の身体が16歳となった際に同じ体験を試してみたいと考え、実行に移す。

自分の様子を見に来たチャップに催眠術をかけ、カプセルを爆破…は少々やり過ぎたかもしれないが少しでも自分が死んだのではなく、逃げ出したという事実が発覚するまでの時間稼ぎにはなるだろう。

それに…学習装置で度々囁かれていたクライシス貴族以外の者は全て劣っているという選民意識を植え付けようとする内容が、どうしても好きに慣れなかった。

いずれは逃げ出した事に気付かれるのも時間の問題。なら連れ戻されるまでの間、僅かでもいい。冷たいカプセルの中にしか居場所の無かった自分にも、同じように生活が…ビジョンで見た、誰かと笑い合える事が出来るのか確かめたい。

ガロニアは期待に胸を膨らませ、緊張した面持ちで校門を潜る。た

だ学園の敷地内に足を運ぶというだけでも、ガロニアに取っては大きな一歩だ。

(ついに…入れましたわーそれに…本当に笑いあっていますのね)

すれ違いで下校する生徒達の様子を伺うと、会話の内容は理解できないが談笑しながら校門の外へと向かっている。実物を目にして口元を優しく緩ませるガロニアは、ここまで来たからには自分も同じような事に挑戦しなければと桜の記憶から得た情報を元にして弓道場へと足を運ぶ。

(確か弓道部…でしたわね)

把握した記憶を頼りに弓道場へ向かおうとしたその時だった。

「おい」

呼び掛けるにはあまりにも短すぎる言葉だが、自分に向けられたものだろうと振り返るガロニア。その生徒は、間桐桜にとって家族である者…間桐慎二だった。

ガロニアの催眠術を受けた間桐桜は虚ろな瞳でゆつくりと自宅に向っていた。ガロニアは自分と良く似た桜が外にいては面倒事に巻き込まれてしまうだろうと自宅へ帰らせ、自分の用事が澄んだ後に催眠術を解除するつもりでいたが…

「あれ？私、なんで…？」

数度瞬きした桜は周囲を見渡す。確か自分と似た少女と遭遇し、ドレスを穂群原の制服に変えた辺りから記憶が曖昧であり、それに何故自宅に向かっているのだろう。

「もしかして、あの人が魔術を…」

言いながら、桜はそつと自分のうなじへと触れる。そこにはホクロに見せかけた慎二原案の魔道具が張り付いていた。

聖杯戦争時、ライダーのマスターである間桐光太郎の家族…特に当時は戦う力を持たなかった桜が狙われる事を考慮して、間桐家に残る文献を参考に慎二が編み出した術式を基にいくつかの道具が作られた。

そのうちの 하나가、もし桜がマスターやサーヴァントに拉致監禁され、気を失った場合に少しでも早く意識が回復するよう魔力を全身に循環させる働を促す五円玉前後の大きさの道具だ。

睡眠時以外にうなじへと貼り付けていた道具を現在も重宝していた桜だが、聖杯戦争後にキャスターであったメディアに

『女子たるものそんな目立つものを付けるんじゃないやありません！』

という教育的指導の元、慎二、実姉である遠坂凛との共同開発によってより小型、高性能の道具として生まれ変わったのだ。

大きさは目立たないホクロ程のサイズに変わり、従来の機能は勿論、敵の魔術により催眠にかかった際にはその術を装備した者の肉体に負担がかからないよう時間をかけて解除する術式も盛り込まれている。

今回かかった暗示は軽度のものだったのか、30分もしないうちに解くことができたようである。

「兄さん達にお礼を言わないと」

桜は来た道を振り返り、学校へと向かう。服装を制服に変えたからという単純な理由だが、桜の考えた通りに学校へあの少女が向かったのなら自分に成りすまして何か良からぬことを起こすかもしれない。それに魔術の使い手ともなれば義兄や実姉、衛宮士郎はともかく、美綴綾子や藤村大河、何の関係もない一般生徒に危害が及ぶ可能性を考えた桜はいつの間にか走り始めていた。

水たまりを思い切り踏みつけ、靴下まで濡れてしまいがそんな考えを浮かべる時間すら惜しい。息を切らせてアスファルトを蹴り続ける桜が遠目に校舎の姿を確認した直後、邪魔者が現れた。

（確かこの殿方…間桐慎二。彼女の兄に当たる人物ですわね）

自分呼びかけた男子生徒の顔を見て桜の記憶にあった家族の名を割り出したガロニアは慌てずに笑顔を向ける。

「慎二兄さん、どうかしましたか？」

（フッフ…口調は桜さんとの会話でパターンは把握済み、完璧ですわ！）

内心でガッツポーズを取るガロニアは自分と鉢合わせした桜との短い会話（が成立していたかは怪しいが）で彼女は基本的に誰にでも

敬語で話す人物なのだろうと推測。現に目の前に立つ男子生徒はガロニアが口を開いても特に気にする様子もなく、自分の要件を告げた。

「…一年の男子共がまた用具室の手入れをさぼりやがった。このままだとあのお人好しがまた勝手に整理しかねないから、先にこちらで手を打つ。お前も付き合えよ」

「はい、わかりました！」

自分の横を通過する慎二に続き元気よく返事をするガロニアは怪しむ様子のない少年の背中を見て安堵すると遅れて付いていくが、別の人物によって呼び止められてる。

「おーい、慎二に間桐！どこいくのー？」

（あら、あの方は確か…？）

振り返ると、弓道部主将である美綴綾子が鞆を片手で背負い小走りで近づく姿を見て、ガロニアは再度、間桐桜と関係者である記憶を探る。

「主将、お疲れ様です！」

「うん、お疲れ。どうしたのよ、もうすぐミーティング始まるってのに」

「ミーティング…！」

綾子の口から聞かされた雨天時や月初めに定期的に行う部活動の内容報告や意見の交換するミーティング。それならばより多くの人間と関わる好機だと目を輝かせるガロニアだったが、慎二に待ったをかけられてしまう。

「悪いけど、僕はパス。コイツと用具室の整理してくるから、お前に任

せるよ」

「えっ——？」

あまりにも唐突な展開に声を漏らしてしまったガロニアはどうかミーティングの方へと参加する意思を示そうとするが、ガロニアよりも早く綾子が動いた。

「ちよつと慎二、副主将のアンタが来ないでどうすんのよツ!!それにどうせ一年の男子がサボったからでしょ?」

「なら今回の議題はそれにしてくれ。おかげさまで僕自ら掃除する破目に合ってるってね」

「なら直接言いなさいよ!そうやっていつも面倒事は私に押し付けて…」

「それが主将の仕事だろ?」

「えっと……………」

正にああ言えばこう言う:という2人の口論にガロニアは混乱しつつどう収めるべきかを考えてみるが、一向に思い浮かばない。ガロニアが桜の記憶から読み込んだのは、あくまで桜の近しい人間との関係:それも自分にとって慎二は義理の兄である、程度しか知らない。それ以上の詮索は彼女に失礼だろうと止めておいたのだが、こうなってしまうのならばもう少し深い部分を閲覧しておくべきだったと後悔するが最早遅いだろう。

だが、ガロニアがオロオロとしている間に2人の口喧嘩は終息しつつあった。

「あー、わかったわかった。なら今度図書館で鉢合わせたら帰りになんか奢ってやるから」

その一言で白熱していた綾子の口がピタリと止まり、ジト目で慎二

を睨む。身長差から綾子が慎二を上目遣いする形となるが、睨まれている事に変わりはなく、ときめくような事態はまるで発生していない。

「：新都に出来た新しいカフェの期間限定のセットで手を打ってあげる」

「おい待て。確かあれはカップル限定…」

「勘違いするんじゃないよッ!!ただセットの内容が美味しそうだからアンタを利用するだけッ!!分かった!?!」

と、人差し指を差し向けれる慎二は目を瞑り、了承したと言わんばかりに両手を上げる。慎二の反応に満足したのか、笑みを浮かべて綾子は踵を返しながら、茫然としているガロニアへと目を向けた。

「なんだか見苦しい所見せちゃったね。間桐も怪我はしないようにね」

「あ、はい!」

「僕への配慮は無しですかそうですか」

「アンタは一度棚から落下した荷物の下敷きになるべきだね」

「え、なに?遠回しに怪我しろって言ってるの?」

「ご想像にお任せするよ」

フンつと慎二達とは反対の方へと歩いていく綾子は何か思い出したかのように振り返り、ガロニアへ一言告げると今度こそその場を離れていった。

「珍しいね、間桐がりボン付けてないなんて」

綾子の指摘に内心では動揺しつつも『気分転換です』と言って逃れ

たガロニアは予定通りに慎二と弓道場の用具室へと到着する。当初はミーティングに参加出来ないことが残念でならなかったが、見たことも無い道具に興味を引かれたガロニアは用具室の奥で段ボールの中に活動記録を収納する慎二に自分は何をすれば良いかを尋ねた。

「兄さん、私は何をすればいいですか？」

「んじや、そこにあるハタキで柵の埃を落としてくれ」

「わかりました！」

「ところで、お前ダレ？」

—— 今、彼はなんと言った？

ガロニアは少年に言われた通り、清掃用具を手にした直後に問われた一言で全身が強張る。冷静に、冷静にと言いつつ聞かせながら振り返った先では、作業など投げ出しこちらに険しい視線をぶつける慎二の姿があった。

「な、何を言っているんですか兄さん？そんな冗談——」

「悪いけど、赤の他人に向ける冗談なんて持ち合わせてないんだよ」

「しよ、証拠があるんですか!? 私が間桐桜でないっていう証拠が……」

「そう言いだしてる時点で詰んでるんだけど……まあいいや。まず始めに、何でリボンをつけてないんだ？」

「そ、そんな事が証拠に……」

「なるんだよ」

一歩一歩、ジリジリと義妹へと変装した何者かに警戒心を解くことなく接近する慎二は逆に後ずさっていく少女の焦りの色が段々と濃く浮き出ていく所へ、さらなる追い打ちをかけていく。

「桜はとある理由があつてリボンを後生大事に扱つて付けない時なんて風呂か寝る時くらいだ。汚れて洗つている最中でも、落ち着かないつてんで色の似た別のリボンを付けるくらいにな」

「…っ！」

「それにな、理由は分からないけど桜は僕と美綴が喧嘩を始めると何故か遠くからニヤニヤと笑う気持ち悪い行動を取る。なのに、お前はどうすればいいかとオロオロしている。この用具室の掃除だって、桜だったら率先して始めてるし、僕に指示を仰ぐなんてありえないんだよ」

ガロニアの背中に固い感触が伝わってくる。どうやら壁際まで追いつめられてしまったようだ。

「…いつから、気が付いていたのです?」

「決まつてる。最初からだよ」

「なら、なぜ彼女の記憶にある通り私と接したのですか!?!」

「何言つてんだよ? 一度でもお前の事を僕が『桜』つて呼んだか?」

「あ…」

「わざわざこうして二人きりになる場所まで誘導したのも、たつぷりと事情を聴くためだよ」

慎二の言う通りだ。思い返してみれば、呼び止められた時から自分は少年から『お前』や『コイツ』としか呼ばれていない。もう少年に発見された時点で自分という偽物を疑っていたのだろう。

ならばとガロニアは瞳を赤く輝かせ、慎二の目を睨む。

「ッ!?!」

ガロニアの変貌を警戒して下がった慎二だが、もう遅い。自分と目があった時点で彼女の術中に落ちてしまうのだ。本物の桜と同様に催眠術をかければ、自分の事も忘れさせることも可能だ。もし、慎二がこういつた際に何の対応も考えていなかった場合だが。

「…なるほど、それがお前の魔術ってどこか」

「どうして…」

「オイオイ、動揺して目の色戻ってるぞ。もしあのまま力を強めてればかかったかも知れないのに」

理解できない、と顔に書いてあるガロニアへ慎二は自分の目を指さしながら彼女が抱いているであろう疑問へ答える。

「僕は色々とハイスペックでも魔術はからつきしでね。もし魔術を使う奴が白昼堂々現れた時の対策の一つで、特殊なコンタクトを付けてるんだよ。主に、催眠術を遮る用途のね」

出費は痛かったが遠坂凜経由で購入した宝石を基に作成した対魔術のコンタクトレンズ。メデューサの魔眼など常識外れの魔力に対しては効果は望めないが、今回のように対象に気を使ってくれている程度の催眠術ならば跳ね返すことは容易であるのだ。

さてと、と慎二は茫然としている少女が次にどのような手段に出るかと表面ではニヤリと笑いながら対策を組み立てていく。自分の思い通りにならない相手程、手段を選ばなくなってくる。もし相手が強硬手段に出た場合は手持ちの道具で事足りるか…と思考する中、ガロニアの雰囲気が変わる。

赤いオーラを纏い、黒い髪の毛がユラユラと靡かせながら、右手を慎二に向けて翳す。どうやら慎二の推測は当たってしまったようだ。

「…不本意ではありますが、多少乱暴な方法で彼方の記憶を消させて頂きますわ」

「ハハハ…ずいぶん個性的な口調だな。遠坂辺りと会話させてやりたいよ」

「……………」

よもやあれだけの力を振るいながら虫が苦手とは。この場で義兄が変身した際に一瞬現れるバツタ怪人を見せたらどうなるか試してみたいと嗜虐心が湧き上がってしまった慎二だったがそんな事は後回しであると自身に言い聞かせ、ガロニアの隣に座りこんだ。

「ああ分かった。この蜘蛛をどかしてやるから……こっちの質問に答えて貰うぞ」

「はいいッ!!なんでも答えますわッ!!だから、だから早くしてえッ!!」

そう言つて俯いて泣き出してしまう少女の姿に、慎二は溜息をつく。そして顔を下に向けた事で露わとなった少女のうなじが視線へと入る。

(随分と大きなホクロを持ってんだな)

「やあッ!!」

また一体アスファルトへと沈めた桜は構えを解かないまま自分を囲うチャップの大群を睨む。

桜は学校まであと少しというところで、突然現れたクライシス帝国の一軍に追われ始めてしまった。チャップの大群を指揮するマリバ

ロンは自身の妖術で風を起こし、顔を庇う桜の背後へと移動。すると優しく肩を掴み、今まで聞いたことのない程優しい声を耳元で囁いたのだ。

「ご無事で何よりです、ガロニア姫様」

「…ツ!？」

寒気が感じた桜はその手を振り払い、一目散に逃げ出した。雨が全身を濡らしていることも構わず全力で走る桜の耳に、マリバロンがチャップ達に下した命令が響く。

「彼女のうなじにガロニア姫である証のホクロを確認した！よいか、彼女は憎き間桐光太郎の妹ではない！クライシス帝国の次期支配者であるガロニア姫なのだ!!」

マリバロンが何を言っているのかまるで理解出来ない桜はともかく逃げるしかなかった。義兄達に連絡を取ろうにも電話をかけるタイミングがまるでない。

桜に出来ることはひたすら逃げ、追いついたチャップを叩きのめすという方法しかなかった。

自分に追いついたチャップへと振り返り、一撃で倒しては逃げる…その繰り返しで敵の数を減らしてはいたが底をつく様子はまるでなく、遂には先回りしたチャップに囲まれてしまった。

「さあ、姫。お帰りに…」

一体のチャップが桜の肩に手をつけようとした次の瞬間――

「桜殿から離れろ下郎ツ!!」

民家の屋根から飛び降りて現れた赤上武の一刀によりチャップが

吹き飛ばされた。

「武さんッ!!」

「桜殿、無事で何より。：見下げ果てたぞクライシスッ!!多勢で桜殿1人を襲うなど、恥を知れッ!!」

桜を背後に回し、手にした刀の切っ先をマリバロンに向けた武の罵倒にマリバロンは込み上げた怒りと共に吐き捨てる。それは自分に聞かせた侮蔑の言葉へではなく、武が桜に近付いた事への怒りだった。

「無礼者ッ!!貴様こそそのお方を何方と心得ているッ!!クライシス帝国の次期支配者のガロニア姫にあらせられるぞ!!」

「なに…?」

「確かにRXの妹と瓜二つのようだが、私の目に狂いはない!うなじにある大きなホクロこそが、真のガロニア姫である証なのよ!!」

「……………」

武は桜へと視線を向けると、当の彼女もマリバロンの言葉に困惑している様子だ。それに慎二から桜がもしもの為にホクロに見せかせた道具を身に着けている事を知っていた武に取っても、どうにもマリバロンの言うことがかみ合わない。

もしや、壮大な勘違いをしている可能性すらある。

「…どちらにしろ貴様達の行いを見過ごすつもりはない。覚悟するがいい」

「来るか!」

腰からもう一本の刀を抜き、二刀流となった武に対し、マリバロンも赤く光る鞭を構えた。

一触即発となった両者。雨音だけが響く中、どちらが先に動くのか

と息を飲む桜だったが――

「ならば、私が事を収めるとしましょう」

不気味な声だった。

本来ならば低い声質の声を無理やり引き上げて高くしている、そんな声。

「な、なんだこれはッ!？」

突如武の手足に纏わりついた何か――
それは軟体生物の触手であるが、武の知るそれよりも遙かに巨大だ。締め付ける力は強く、武はまるで身動きが取れない。どこからともなく現れた触手は武が立つ水たまりから這い出ている。ズルリズルリと不快な音を立てて全身を現したそれは、海生物のヒトデに近いものだった。

あくまで形状が近いというだけで、本来のヒトデとは似ても似つかないその醜悪な姿に桜も、対峙していたクライシスの面々も驚愕する。

『シャアアアアアアアアッ!!』

「この…化け物めッ!!」

咆哮と共に武を飲み込もうと口らしき部位を近づける怪物に、武は手首のスナップを利かせて刀を突き立てる。刺されたことで怯んだ怪物から脱出した武はその隙を逃さず、両手に持った刀で何度も切りつける。

『ギャ…ガガ…』

細切れとなりながらも肉片が未だ蠢いている様子に戦慄する武。この化け物は一体…と、倒したことへの安堵が彼に隙を与えてしまった。

「なんとも乱暴なお方だ。折角召喚した海魔が不憫でなりませんねえ」

武が振り返った先には、いつの間にか男が立っていた。

本来ならば武すら越える長身のはずだが敢えて背中を丸めている為か視線が交わせる高さであり、足元まで隠すローブから露出している肩から指先を見れば、屈強な体つきだということが伺える。

だが、そんな考えが吹き飛んでしまう程、男の形相は人間離れたものだった。

例えるなら、カエル。カエルのようにギョロリとした眼球が比喻ではなく飛び出しており、見た者を萎縮させてしまうような淀み、濁った瞳。

男の異様な存在感に一瞬気を取られてしまった武は男の振り上げた拳を胸部に受け、背中からコンクリート壁へと叩き付けられてしま

う。

「が…あ」

ひび割れた壁から抜けた武の意識は刈り取られ、水溜りの中へと倒れてしまう。

「た、武さん!!しっかりしてください…い…」

倒れた武を介抱しようと駆け寄った桜だが、男に後頭部を指先で触れられた途端に武へ重なるように気を失ってしまう。

「さて、それでは手土産も出来たところでご案内して頂きましょう。彼方達の要塞へ」

桜を抱き上げた男はニンマリと笑うと、未だ睨みつけるマリバロンへと尋ねる。

この男は一体何者なのか：敵の敵は味方であるというが、目の前の男は信用どころか、存在を許容することすら難しい。だが男の手に自分達が求める少女がいる限り、手出しできないマリバロンは手に赤い鞭を顕現させたまま、尋ねた。

「貴様は…何者だ」

「これはこれは…お初にお目に掛かります」

片手に桜を抱えたまま、一礼した男はこう名乗った。

「かつてクライシス帝国守護隊 星騎士の一柱でありました…」

「木星の騎士、ジュピトルスと申します」

間桐慎二はワザとらしく溜息を付いた。

雨の中、妹の姿を真似て不法侵入した人物と共に家へと向かっていくことも原因ではあるが、その少女が自分の袖を掴んだまま、ずっと泣き続けているためだ。

「ヒック…グスツ…」

「…もう泣くなよ」

あれからが大変だった。蜘蛛は追い払ったても泣き止む様子もなく、いつまでも整理が終わった報告がないと乗り込んできた美綴と藤村女史に発見され、何妹泣かせてんだと思いつき切り説教され、今に至っているのだ。

言いたいことも聞きたいこともままならないが、もうすぐ自宅。今頃自分達が持たせていた対魔術の道具で正気に戻っているはずだ。後は義兄が帰ってから全員で問い詰めれば事は収まるだろうと慎二

は事態を樂觀視していたことを後悔することとなる。

「……」

「うう……どう、しましたの？」

ガロニアは突如足を止めた慎二の顔を見上げる。

見開き、驚愕するその視線を追うと、ガロニアも泣くことを忘れ、思わず口を片手で押さえていた。

慎二達の進行方向で、辺り一帯にコンクリートの破片が散らばる中で倒れている居候の姿があった。傘をガロニアに押し付け、急ぎ武を介抱する慎二は大声で呼びかけるが反応はない。

急ぎ義兄に連絡しようと携帯電話を取り出した矢先、慎二の足元に見覚えのあるものが水溜りに浮かんでいた。

義妹である桜の宝物。彼女と実姉の絆の証であるリボンが、所々に汚れを付けて、水面で揺らめいていたのだった。

第37話

間桐桜に変装し、穂群原学園へと足を踏み入れたクライシス皇帝の娘であるガロニア。

ガロニアは自分を養成中に睡眠学習装置で吹き込まれたクライシス帝国の次期支配者に相応しき教育よりも、地球人が笑って過ごす日常への興味が勝っていた。

その生活がいかなるものか体験しようとした矢先、桜の義兄である間桐慎二にガロニアが妹の偽物であると見破られ、記憶を消そうと行動するが不意に現れた蜘蛛に怯えて泣き出してしまう。そんなガロニアの姿を目にした溜息をつくしか出来なかった。

一方、ガロニアの催眠術にかかり自宅へと向かっていた桜は慎二達を作成した対魔術の道具の効果によって術が解除され、正気へと戻っていた。

自分に魔術を懸けた瓜二つの少女が学校へ向かったと推測し、急ぎ後を追い始めるが突如クライシス帝国のマリバロンとチャップが現れる。

クライシス皇帝の娘だと言われ、困惑しつつも自分に迫るチャップを撃退しつつも逃走を図る。

だが多勢に無勢であることに変わりなく、とうとうチャップに捕まりそうになったその時、赤上武が助けに現れ、マリバロン達と対峙。互いに睨み合いが続く中、突如として第三者の不気味な声が木霊した。

武は足元の水溜りから出現した怪生物の触手に絡め取られるも何

とか切り伏せたが、背後に現れた男の風貌に一瞬気を取られた隙に攻撃を受け、気を失ってしまった。

さらに桜の意識を奪い、捕獲した男はマリバロンに向かい、こう名乗る。

星騎士　木星のジュピトルスと。

クライス要塞

マリバロン達が連れて帰った少女はクライシス帝国の後継者ガロニアではなく、仮面ライダーBLACK RXの妹である間桐桜だと判明したのは修理を終えた養成カプセルに寝かせた直後のことであつた。

桜を白いドレスへと着替えさせた後、カプセルへ移動させる途中に桜のうなじから黒い何かがハラリと落下。付近のチャップに拾わせ、掌に乗せてみると、それはホクロに似せた魔術防止の道具だと見抜いたマリバロンは急ぎ少女のうなじを確認する。最悪な予感が当たり、自分達がガロニア姫だと断定した少女は間桐桜だと明らかになってしまう。

急ぎジャーク將軍へと報告に指令室へ向かうが、そこでは緊迫した空気が流れていた。

「…っ!？」

室内へと入ったマリバロンはあまりも重い雰囲気呼吸を忘れる程だった。指令室内で対峙している司令官であるジャーク將軍と自分達に接触し、桜を手土産としてクライス要塞への乗艦を求めた星騎士ジユピトルスと名乗る男。

ジャーク將軍は相手を射殺するような殺気を放っているのに対し、ジユピトルスは不敵な笑みを浮かべている。

一体何が起きているのかと壁際で怯えているゲドリ안의盾とされていたガデゾーンの横へと駆け寄るマリバロンは事の顛末を訪ねた。

「どうしたも何も…あのジユピトルスって野郎が突然現れてから將軍がずっとあの状態だ…俺達にもさっぱりだ」

「では、あの男が星騎士というのは本当なのね…」

「そ、そんなことが將軍がお怒りになっていることと関係があるのか？」

一人納得をした様子マリバロンにゲドリアンは未だ迸る殺気を放つジャーク將軍の尋常ではない様子に震えながら説明を求める。コクリと頷いたマリバロンによれば、星騎士ジユピトルスは同士であつたジャーク將軍とは相容れない存在だつたようだ。

遙か過去。

未だ統一されていなかった怪魔界で大きな争いが繰り返してこつていた時代。

クライシス帝国は敵対する部族との戦いの最中にあつた。

相手は1人1人が鋼のような肉体と武術を身に着けた強敵であり、当時星騎士であったジャーク将軍が指揮した部隊との戦いは幾度となく繰り返されていた。

それも相手の首領とは戦いの中で敵対しながらも互いに認め合っていたジャーク将軍は1対1の戦いを持って決着を付けると豪語し、相手も承諾。

決戦の日に備え準備を進めていたジャーク将軍の耳に、敵対部族の集落ごと壊滅したとの情報が入る。

部下の制止を振り切り現場へと向かったジャーク将軍が見たのは、言い表せば地獄としかいいの様の無い、我が目を疑うような場所だった。

自分達と鎧を削り合った戦士達は絶望にくれた表情のまま兵士に拘束され1人、また1人処刑されていく。戦士達の視線にある先は1列に並べられた女子供の首。

そのどれもが杭の先端に突き刺されたまま地表へと並んでいたのだ。

囿によつて戦士たち全員が集落を離れた後、身を潜めていた兵士たちが一斉に力を持たない女や子供を惨殺。戻った戦士達が怒り狂った所を大部隊によつて一気に殲滅したというのが大まかな流れだった。

付近に立っていた兵士の首を締め上げて聞き出したジャーク将軍は、今正に処刑されようとしている部族の首領の姿を目にする。他の戦士同様、生きる気力を失っている首領をせめて助けようと駆けなが

ら止めろと叫ぶが、ジャーク將軍の言葉に耳を貸さず劍は振り下ろされた。

血飛沫と共に転がる首領の首。

その光景を楽しそうに。心の底から愉快だと言わんばかりに血を浴びて笑いを上げる者が、首領の首を落とした劍に付着した血を舐めながらジャーク將軍へと振り返る。

その者こそが、今回の作戦を立案した星騎士ジュピトルスだったのだ。

「…以降、当時星騎士だったジャーク將軍はジュピトルスと犬猿の仲にあつたと言われているわ」

「なんと残酷な…」

「とんだサイコ野郎って訳だ」

マリバロンの話を聞いたボスガンとガテゾーンはそう口から漏らすことしか出来ない。

怪魔界では半ば伝説と化している星騎士の存在。その唯一の生き証人とされてるジャーク將軍は、頑なに自身から過去の話を持ち出すことは無かった。

だが逆に納得してしまう。

厳しくも大きな器量を持つ高潔なジャーク將軍とではあのジュピトルスとでは決して自分達と同じ関係を築けない。

自分達が仕える存在がジャーク將軍であることを幸運に思う隊長陣の心中を余所に、2人の沈黙が破られようとしていた。

「…御無沙汰しております金星のヴィルムス。いや、今の御身分を考えるとジャーク將軍と呼んだ方が宜しいですかな」

「だまれジュピトルス。よくも抜け抜けと余の前にその汚らわしい姿で現すことが出来たな…！」

手にした杖を差し向けるジャーク將軍の声は普段よりも低く、明らかに怒りが込め荒れている。

隊長達であれば恐怖に顔が引きつるようなジャーク將軍らしからぬ感情を露わにした姿にも、ジュピトルスは何の効果は見られない。寧ろさらに上機嫌となっているようにも思える。

「口調にも威厳が付いてきましたねえ。青さも抜け、將軍の地位を任せられる成長を遂げたようです。いえ、『あの2人』を見捨てた時点でもう…」

「黙れと言っているツ!!」

杖の先から発射された光線がジュピトルスの頬を掠める。流石にそれ以上言葉を続けることは無かったが、ジャーク將軍の放った光線で焦げた頬に触れるジュピトルスは恐怖するどころか、見た者に悪寒を走らせるような笑みを浮かべて人間の数倍の長さはあろう舌を口からだらりと下げて頬を舐める。

「どうやら彼方に取っては失言だった様子。これは大変なご無礼を。ではお詫びとして彼方がたが抱えている問題の解決を手助けすることにいたしましょう」

「何だと…？」

ジュピトルスの意外な提案にジャーク將軍だけではなく、後方で様子を伺っていた隊長陣までもが驚く。クライシス帝国に反旗を翻した星騎士の1人が協力を申し出たことに、まず疑問しか浮かばない。しかもこの男の残虐性を考えれば、何か理由があるはずと睨む中、

ジュピトルスの視線がマリバロンを捉える。

余りの不気味さにビクリとするマリバロンに柔らかい笑顔を作るジュピトルスだが先ほどの話も相まって不安しか浮かばない。

「怪魔妖族のマリバロンでしたか？私が連れ帰った娘に関してお話があるのでは？」

「娘…？」

ジュピトルスの妙な言い回しに疑問を抱いたジャーク將軍の声にハッと我に返ったマリバロンは急ぎ桜の件を報告する。

「愚か者ツ!!ガテゾーンの報告通りガロニア姫と間桐桜は見分けが付かぬほど似ている事を知りながらなせもつと注意深く調べなかつた!!」

「申し訳ありません…」

「そう怒鳴るものではありませんよジャーク將軍。おかげでとても興味深い情報を得たのですから」

膝を着くマリバロンへ怒鳴り散らすジャーク將軍に横から割って入ったジュピトルスとはあるデータを中央の画面に表示される。それは現在養成カプセルで眠っている桜と、要塞を脱走する寸前まで計測していたガロニアの持つエネルギー値のグラフであった。

「っ!!?テメエ…解析中の俺のコンピューターにハッキングしやがったな…!?!」

「お、落ち着けガテゾーン!相手はあの星騎士だぞ」

「それにジャーク將軍の前だぞ」

詰め寄ろうとするガテゾーンの身体を押さえるゲドリアンとボスガン。余程自分のデータを軽々と扱うジュピトルスが許せないようだが当のジュピトルスはそのようなガテゾーンに見向きもせず説明を続

ける。

「ご覧の通り、彼女が持っている潜在的な力：地球では魔力と言われているですが最新のガロニア姫の力と比べ、圧倒的に勝っているのです」

「：何が言いたいのだ、ジュピトルス」

「ククク：分かっているながら敢えて問いかけるとは性格が悪い。ならばはつきりといきましょう」

「逃げ出してしまう出来損ないの姫などよりも、彼女をガロニア姫として仕立てあげれば何の問題もないでしょう？」

ジュピトルスの言っていることが、マリバロンにはまるで理解出来なかった。

ガロニア姫を捨て置き、RXの妹をガロニア姫に仕立てあげる？

そんなことが皇帝に知られれば、ここにいる全員の命がない。

もはや問うまでもない事に一番危機感を覚えていたボスガンがジュピトルスに物申した。

「何を言うかと思えば：クライシス皇帝に知られてしまう以前に、汚らしい地球人が我らクライシスの支配者になるなどありえん！」

「あるとしたらどうしますか？」

「なっ…」

「彼方を見るにクライシスの貴族：ならば知っているでしょう？かつて怪魔界でそれまではクライシス人では無かった者がクライシス人となる為に使用された『奇跡の泉』のことを…」

話には聞いたことがある。その泉に三日三晩つかればその者を純粹なクライシス人へと変えるだけでなく、成長まで促し、その能力を

数倍に膨らませることのできる泉があるのだと。

確かにその泉を利用すれば間桐桜を地球人ではなく怪魔界のクライシス人に変えることすら可能だ。

しかし、それでは皇帝の血を引くガロニア姫はどうなってしまうのか…？

「そのような心配は無用です。先程言った通り、クライシス皇帝の思想に反発を抱く者が再度教育を受けた所で同じことの繰り返し…それに成長促進ビームを途中で抜け出してしまえ力の『今のまま』止まってしまう。そうですね」

同意を求めて視線を向けるジュピトルスに、マリバロンは頷くしかない。ガロニアを連れ戻すことを第一に考え、その問題自体は後送りになっているつもりだったが、ジュピトルスの指摘する通りだ。

養成中にガロニアを成長させていたのは身体だけでなく、彼女が持つ『力』をも大きくしていた。今では念動力や催眠術といった類しか扱えないが、予定通り成人まで成長していれば森羅万象に干渉するといっても過言ではない力を持つはずだったのだ。

「だからこそ、捉えた少女を奇跡の泉でクライシス人に変えた後、その潜在能力を解放、精神を完全にクライシス皇帝の娘としてしまえば真のガロニア姫が誕生するのですよ！」

両手を天に掲げ、興奮しながら叫ぶジュピトルスの意見に、もはや反対を申し出る隊長はいない。言っていることは荒唐無稽なのだが、その通りにすれば将来クライシス帝国の為ではあるためだ。

あとは最終決定権のあるジャーク将軍が領いてしまえばこれは決定になってしまうのだが、その将軍が了承しえない事をジュピトルスは口にしてしまう。

「さて、ジャーク将軍。これが上手くいけば、彼方の部下の失態は例え皇帝に知られたとしても許されるでしょう」

「……………」

「皇帝は何より力と実力を重んじる御方。御身の血筋であろうと役に立たない者は切って捨てる無情ですからねえ。そんな恐ろしい方に今回の事を知られたらどうなるか…」
(なんと卑劣な…)

ジュピトルスはよりにもよって、マリバロンたち隊長をダシにしてジャーク将軍に迫っていた。確かに後継者であるガロニアを逃がしただけならともかく、その力の成長を止めてしまったとなれば重大な責任。その全てが、ジャーク将軍一人に負わされてしまうだろう。

ボスガンなどはそれで自身の身は安全と安堵するだろうが、ガテゾーンは自分達を利用しようとするジュピトルスの言い分に拳を強く握っている。

「そしてあなた方の一番の問題である敵…間桐光太郎の抹殺も容易に行えるのですよ?」

「…申してみよ」

「いくら相手が強かろうが、方法は至って簡単です」

「相手の心を殺してしまえばね」

結果から言ってしまうえば、ジュピトルスの意見が通るといふ形で話は終わり、ジュピトルスは作戦を練ると言ってゲドリアンと共に指令室を後にする。

ガテゾーンは作戦遂行時に起動させる怪魔ロボットの最終調整をしながら、ジュピトルスへの警戒心を強めていた。

(アイツは…どこか楽しんでいた。俺達を使いジャーク將軍を脅す時も、RXを倒す作戦を口にする時も、誰かを追い詰めるという行為事態を楽しむような…)

ひよつとしたら、過去にジャーク將軍が敵の部族の首領と決闘する際も敢えてあのような行動を取ったのではないか…

常に自身の嗜虐心を満たす為に動く星騎士 ジュピトルス。

彼がクライシスの敵となったのは、それ故なのかも知れない。

「だが、それでもRXを倒すのに利用させてもらうぜ…」

ガテゾーンがスイツチを入れたと同時に、完成した怪魔ロボットの巨大な目に緑色の光が宿る。

銀色のボディに、背後に備わった4つの鋭利な鎌。宿敵と同じく昆虫をモデルとした特徴的な頭部。

RXのデータを基にし、完成した最強の怪魔ロボット。

「さあ、今度こそ息の根を止めてやる。このデスガロンでな…」

第38話

間桐桜をクライシス皇帝の娘 ガロニア姫と思い込み連れ去ったマリバロンだったが、桜がうなじに貼り付けていたホク口状の魔道具が剥がれ、ガロニアではないという事実によりやく気が付き、ジャーク將軍に報告しようと指令室へと向かうが、そこではジャーク將軍と新たな肉体を得た木星の騎士ジュピトルスが睨み合っていた。

遙か過去に母国の為共に戦っていた味方であるとはいえ強い敵意を抱くジャーク將軍にジュピトルスは逃げ出したガロニア姫を捨て置き、捉えた桜を真のガロニア姫に仕立てあげるべきだと進言する。

そもそもクライシス人ではないと反論するボスガン達に対し、ジュピトルスは怪魔界に伝わる『奇跡の泉』に三日三晩浸れば地球人であつてもクライシス人として生まれ変わらせることが可能だと言い切った。

たとえガロニアを連れ戻したところで養成中に本来身に付くはずの超能力も脱走したことで今以上の力が望めない。ならば今のガロニアよりも高い潜在能力を持つ桜をクライシス人にしたうえで洗脳し、ガロニアだと思ひこませればクライシス帝国にとつても有意義であるという主張に反対する者は誰もいなかった。

そしてジュピトルスの立てた案が採用となり、彼の言う間桐光太郎の心を殺すという不可解な言葉を振り払うように自身が製作する怪魔ロボットの最終調整を行うガテゾーン。自分の手がけた怪魔ロボットで宿敵RXを倒す。それだけの為に。

間桐邸

いつもならば住人達によってその日に何が起きたのか、以前こんなことがあったなど賑わいを見せる食卓では現在長く沈黙が申し掛かっていた。

席に着いている3人：メデューサ、赤上 武、そして桜と瓜二つの少女であるガロニア。目の前に出されてた湯呑に手を付ける事すらせず、ただ黙っている。

「状況を整理するとだ」

そんな重苦しい状況の中ただ1人、普段通りの間桐慎二がキッチンから戻り、自分の入れたコーヒーカップを手に着席した。

「まずお前…ガロニアだっけ？ガロニアは自分とそっくりだった桜を偶然見つけて、少しの間だけ入れ替わろうとした。その時に催眠術をかけて家に帰らせたんだな？」

「その、通りです…」

「んで、メデューサは帰る途中の桜を見かけたけど時間になっても戻らない光太郎を優先させた」

「はい…」

「そして武はガロニアと間違えて桜を連れて行こうと現れたクライシスと対面したけど、見たことも無い奴の不意打ちで気を失った…」

「間違いない…」

1人1人の顔を見ながら改めて確認する慎二の問いに答えるメデューサ達の声は小さい。ふう…と軽くため息をつき一度コーヒー

を啜る慎二はカップをテーブルに置く姿を見て、3人はこれから慎二から出るであろう自分達に対する叱責に思わず身構えてしまう。

慎二に取っては家族である桜が自分が原因で連れ去られてしまったと自責する3人：特にガロニアはここにきて間桐桜がクライシス帝国の大敵である間桐光太郎の家族であると知った時は冷静になるまでにしばしの時間を要していた。だが、心を静めたガロニアにとって敵味方の関係など彼女に取っては些細な問題であり、間桐桜が自分と似ているというだけで多大な迷惑をかけてしまったという問題の方が大きかった。

いや、連れ去られた桜が自分ではないとクライシス帝国に知られた時、最悪命に係わるのではないかという不安が一層大きくなっていく。

桜の日常を完全に壊してしまったと考えるガロニアは責められて当然であると慎二の手で殺される事も覚悟をしていたが、当の本人から出た言葉はガロニアが予想すらしていない事だった。

「んじや、桜をどう助け出すかは光太郎が目覚ましてからだな」

「え……？」

「以上、解散」

「お、お待ち下さい慎二様ツ!!」

コーヒーカップを持って自室に戻ろうと席を立った慎二を呼び止めたガロニアは、余りにもあつさりと話を終わらせた慎二の態度に納得がいかず身を乗り出しながら立ち上がる。武もメデューサも同様のようであり、無言で慎二へと視線が注がれるが、当の慎二は迷惑そうに再び席へと座った。

「なんだよ、話は終わってたろ？」

「その…ワタクシが言うのは大変差し出がましい事を重々承知ではありません。なぜ桜さんが連れ去られてしまった原因であるワタクシに何も言わないのですか？」

「はあ…？」

「そもそもワタクシが桜さんと入れ替わろうなんて勝手は振る舞いをしなければ、こんなことには…」

「いえ、貴女だけの責任ではありません。あの時、もっと注意深くサクラの様子を見ていれば…」

「そんなことはない。あの時、俺が油断しなければ桜殿が浚われることはなかった」

訳が分からないと声を漏らす慎二の返事をまたずに自分が責任があると述べるガロニアに続き、メデューサと武も同じように非は自分にあるのだと主張する様子に、慎二は後頭部をガリガリとかきながら3人へと尋ねた。

敢えてガロニア達が最も聞きたくないであろう質問を。

「じゃああれか？僕がお前達の責任だって喚き叫んだら、桜は帰ってくるのかよ？」

「…っ!？」

「さっきから聞いて見れば自分が悪い自分が悪い…そんな分かり切ってること聞いたところで事態は変わらないじゃん」

「それは…」

「それに桜にだって責任がある。何のために自衛の道具をいくつも持たせてると思ってるんだよほんと」

やれやれと肩を竦ませる慎二の発言に、言葉が出ない一同だったが、最後の桜にも原因があるという台詞は聞き逃せなかったガロニアは自分が置かれている立場を忘れ喰ってかかる。自分が何と言われなくても構わない。しかし、被害者である桜を非難することが家族と言えどどうしても我慢ならなかった。

「慎二様ツ!!彼方は妹君が浚われたというのにそんな…」

「別に目くじら立てる事じゃないだろ？それに、お前じゃないと知ら

れても桜は殺されないよ」

「それは…どういう…」

「考えても見なよ。折角目の仇にしている光太郎の身内っていう切り札を手に入れたんだ。連中は有効活用する為に殺すことだけは避けるはずだよ。僕が敵だったらそうするね」

「っ…」

なんて冷たい…ガロニアは自分の正体を知りながらも丁重に扱ってくれた慎二を優しい人物と考えていたが、家族である桜に対して何故ここまで言えてしまうのか…自分が見た地球人はみんな手を取り合い、互いを助け合う姿は偽りであり、やはり学習装置の言うことが正しかったのか…？

しかし慎二はガロニアの考えなど知る由もなく、今度こそ立ち上がり食卓から去っていく。

「これから僕は対策を練るから、光太郎が起きるまで部屋に入つてこないでよ。その間、お前は居座ろうが帰ろうが、好きにすれば？」

振り返ることなくそう告げた慎二の足音が完全に消えた後、ガロニアはゆっくりと腰かけるとスカートの裾を強く握っている手の甲に水滴が落ちていくことに気付く。

それは、ガロニアが生まれて初めて流す涙であった。

彼女が抱いていた地球人像が打ち砕かれた失望からなのか、何も言い返せない自分の弱さへの悔しさなのか。理由は分からない。声を押し殺して泣き続けるガロニアへ、メデューサはそっとハンカチを差し出すと彼女に冷徹な印象を与えてしまった慎二への弁明を始めた。

「ガロニア…どうかシンジを誤解しないで貰えますか？」

「え…っ…」

「ああは言っていますが、本当はサクラの身が安全である事を一番に望んでいるのは、シンジなんです」

「だって…あんな言い方…」

目元をハンカチで押さえるガロニアにはメデューサの説明に納得が出来ない。なら、どうして心配する素振りも見せず、連れ去られた桜も悪いなどと言うことができるのであろうか。

悪印象しか残らない慎二の言動を、同じく非難の言葉を浴びたはずのメデューサが諭すように、ガロニアの隣に座って説明する。

「確かに、あれではシンジに対して良い印象を受けないでしょう。ですが、彼も狼狽えることを必死に抑えていたんです。今以上に我々が桜の件で落ち込まないように、ワザと突き放すような言葉を選んで自分に悪意を向けさせ、気を逸らすために。だからシンジは敢えてそのような態度で接したのでしょうか。恐らく、今シンジは…」

ドンツ…と鈍い音が慎二の私室の中で響く。照明も付けず、暗い空間の中で震える拳を壁へと叩きつけた慎二は唇を噛みしめ、今し方自身が発した言葉を と共に唱えた。

「何のために道具を持たせた…こんな時の為に持たせたのに、何一つ役に立たなかったじゃないか…クソツ!!」

手首の負傷など考えずに再び拳を壁へと叩き付ける慎二。本来なら、あの場で声を大にして桜が連れて行かれた原因は自分だと叫びたい程だった。万が一に備えて、様々な状況を想定して造った道具も効果を発揮しなければ意味はない。だから、桜が自身で危機を逃れられなかったのは、その場面で役に立つ道具を持たせなかった自分にある

のだと、慎二は考えていた。

だが、これも本人が言った通りに喚いたところで桜が戻ってくる訳ではない。

加えて敵であるはずのガロニアに強く糾弾するべきなのに、自分の立場も忘れ桜を心配する彼女の姿にそんな気が失せてしまう自分の甘さも腹立たしい。

自分は義兄のように甘くない。敵であるなら容赦しないと、考えていた筈なのに。

「似過ぎなんだよ…顔以外も」

泣き虫で、誰かの為に悲しみ、自分の意思をはっきり示すなんて…余計に今回の件で悩ませる訳には行かないと思い、自分への敵意でその感情を上書きさせようとするなんて…

そんな自己満足に巻き込んでしまったメデューサと武への罪悪感から急ぎ部屋に籠った慎二に今出来ることは、ただ祈るだけだった。

「桜…無事でいてくれ…」

「では、慎二様は…だというのに、ワタクシは…」

「いや、あれでは言った通りの印象を受けても仕方ない。俺も、最初は耳を疑ったものだ」

慎二を人でなしと考えてしまった自分を恥じて俯いてしまうガロニアを見て武は苦笑しながらも日頃光太郎へ罵倒する慎二の姿を思い出す。愛情の裏返しと言えば聞こえがいいかも知れないが、慎二と付き合いの長い人物でなければ、彼の考えを読み取ることには困難だ。それが可能であるのは長年付き添っている家族や、衛宮士郎くらのものだろう。

目元を拭ったガロニアは両手を胸の前でグツと握り、桜とは違う向日葵のような明るい笑顔で宣言する。

「…決めました。後で誠心誠意、慎二様へお詫びいたします！考えてみれば、妹君に成りすましたワタクシを断罪なさらずここまでお連れして下さった方が優しくないはずがありません！全力で感謝しなければなりませんわッ!!」

（その場合は照れ隠しで心にもない事を言っただけ後悔する姿が目には浮かんでしまうな…）

慎二の性格上、正面から賞賛されることが苦手であるため、つい口からその場しのぎの悪態が飛び出してしまふ。それを聞いて別の誤解を抱いてしまうのではないかと危惧する武であった。

武と談笑を始めたガロニアの様子を見て、これでどうにかガロニアを落ち着かせる事が出来たと胸を撫で下ろすメデューサだったが、次なる問題が発生してしまふ。

（2階から物音…？シンジの部屋からではない…まさかッ!?）

気配を感じたメデューサは食卓を抜け2階への階段を駆け上がり、重症を負って意識を失ったの人物の部屋の前へと辿りつく。ノックする時間も惜しいメデューサはドアを勢いよく開けたその先で、2階

であるにも関わらず全開にした窓から今にも飛び降りようとする人物の名を呟いた。

「光太郎…」

「…見つかっちゃったか」

ぎこちない笑顔で振り返った光太郎の顔色は優れない。いや、良く見れば脂汗を額に流し、窓枠に触れている手も震えている。さらに床へと目を向ければ血で染まった包帯やガーゼが散らばっており、傷が完全に塞がっていないことを物語っていた。

大きく力を消耗した光太郎が無理を押し立てまで動く理由など、分かり切っていたメデューサは目を細めて尋ねた。

「…聞いていたのですね。桜が、連れ去られた話を」

「…あいにくと、耳はいい方だからね」

光太郎が目を覚ましたのは数十分前。

火星の騎士アルスに敗北し、メデューサに介抱されるまで記憶があつたが次に目を開けた時は自室のベットで横になっていた。起き上がるうにも胸に受けた傷が痛み、立ち上がれない光太郎だったが、強化された聴力によって聞こえたのは、義妹がクライシスに囚われてしまったという最悪のニュース。

寝てなんていられない。

身体を動かすたびに傷口が抉られるような痛みにも襲われるが、たったそれだけのことで起き上がれない理由にはならないと立ち上がった光太郎は丁寧に撒かれていた包帯を解き、メディアから横流ししてもらった血止め薬をたっぷり塗りと塗りたくる。これで傷口が開くことは無いだろうと判断し、いざ部屋から出ようとしたところをメデューサに発見されてしまった。

「…光太郎、ベツトに戻ってください。今の彼方に、何が出来るのですか？」

「……………」

「確かに今は由々しき事態です。ですが、今の状況を打破するためにも、彼方には回復に専念して貰わなければならない」

まずは光太郎が目覚めたことを喜ぶべきなのに、メデューサは本心を隠して冷たく言い放つ。桜がクライシス帝国の手に落ちたと既に知っているのなら、彼が動かないはずがない。

しかし、弱っている光太郎が桜の捜索に向かつてしまえばミイラ取りがミイラとなる可能性が高い。さらに光太郎を倒したあのセイバーと似た少女と再び出くわしてしまったら…嫌な予想しか浮かばないメデューサはどうか思いとどまるように、彼が黙って従わざる得ない言葉だけを選んで突き付けている。なんと思われようと構わない。

もう、大切な人を失いたくない。

その一心から無茶を繰り返す光太郎へ接する際も最近厳しい態度と口調になってしまっていることもメデューサは自覚している。こちらがいくら怒鳴っても苦笑して従ってくれる光太郎に対して内心では謝り、感謝しなければと思うが今回ばかりは光太郎に独自で動いて欲しくない。桜が助かるためならば、光太郎は文字通り、その命を懸けて戦ってしまう。

だからこそ、心を鬼にして光太郎に思いとどまるようさらに目を鋭くして目を逸らす光太郎を説得するメデューサに対し、光太郎の答えは――

「確かに、メデューサの言う通りだ」

サツシを掴む手を緩める様子に息を付くメデューサ。どうやら今回は分かってくれたのかと考えたが、この時、彼女は失念していた。

間桐桜が、間桐光太郎に取ってどれだけ大切な存在であることかを

「だけど——」

「俺は大事な妹が連れ去られて冷静でいられるほど、利口ではないんだ」

「っ!?!光太郎——」

今度こそ窓枠へ足をかける光太郎へ、メデューサは言うよりも早く彼の肩を掴もうと手を伸ばす。

恐らくは怪我が原因して身体の動きが鈍くなっているためか、普段ならばとうに逃げられる距離だったにも関わらず、メデューサの手は光太郎の肩を掴むことが出来た。

だが、その直後。

乾いた音が室内に響いたと共に、メデューサは自身の手走る痛みを忘れてしまう程の出来事に思わず目を見開いてしまった。

「あっ……」

共に歩いていくと決めた際に優しく握ってくれた光太郎の手が、自分の手を弾いた。

光太郎は肩を掴んだメデューサの手を振り払うため、彼女の手を

力を込めて叩いてしまったのだ。

自分の起こした事によく気付いた光太郎は、自分でも信じられないという顔でメデューサの顔を見つめる。いや、驚くと言うより、彼女の茫然とした表情を見て、次第に怯えるように自分の手を見つめていた。

「…くっ」

そして逃げ出す様に、今度こそ光太郎は2階から飛び降りる。時間にして5秒も立っていないうちに遠ざかっていくエンジン音がメデューサの耳に届くが、恐らくアクロバッターが予め下で控えていたのだろう。

メデューサは追いかけることができず、力が抜けてしまったかのように、その場にへたり込んでしまう。

「あのような顔…初めて、ですね」

擦れるような声で呟くメデューサの目には、涙が溜まっていた。

（私は、何をしていたのだろう。彼の為と言って、彼を追い詰めていた）

（ただ、光太郎には無事でいて欲しかっただけなのに…彼に、あんな顔をさせる為ではなかったのに）

今まで彼と積み上げてきたもの。

それに、大きな亀裂が走った。

メデューサは武や慎二が部屋に踏み込んでくるまで、声を押し殺して泣くことしか出来なかった。

長かった雨が止み、ようやく雨雲の隙間から漏れ出した陽の光の下を疾走するアクロバッターのグリップを強く握る光太郎は、自分の為に厳しく接してくれたメデューサの顔が、頭から離れなかった。

(ごめんメデューサ。俺だって、分かっているんだ。けど…)

アクロバッターが走行する振動が傷に響くよりも、彼女を手を叩いてしまったという罪悪感のほうがずっと痛い。

それでも、光太郎は止まる訳にはいかなかった。

桜を、大切な家族を取り戻す為に。

同時に、自分を打ち負かした火星の騎士が言い放った言葉を否定するためだったかもしれない。

『弱いな、お前』

『こんなんじゃない、守れるわけじゃない』

『自分も、お前の言う誰かもな』

今も耳に残るあの言葉。

光太郎は認める訳にはいかなかった。

(俺は桜ちゃんを…大切な妹を必ず取り戻す。そして、みんなのところに戻るんだ！)

決意すると共にアクロバッターを加速させる光太郎は、気付いていなかった。いや、気付けなかったと言った方が正しいだろう。

間桐邸を出た後から、自分とアクロバッターを追従するようにバイクを走らせる人物がいたことを。

アクロバッターを疾走させて数十分。

進路先の中央で仁王立ちする者の影を捉えた瞬間、光太郎は急ぎアクロバッターのグリップを離し上空へと退避。その直後、光太郎の頭部があったであろう位置にした武器を横なぎに振るつた者がアクロバッターとすれ違い、上へと逃れた光太郎へと顔を向ける。

「さすがと言った所か、間桐光太郎…いや、仮面ライダーBLACK RX！」

「クライシス…変ツ身！」

着地をまたずにBLACKへと変身する光太郎だが、それだけでは終わらない。

身体の節々から変身した際の余剰エネルギーである蒸気を噴出させながらも身に降り注ぐ太陽の力を取り込み、腹部のベルトをサンライザーへと変化させる。

「太陽よ…俺に力をツ!!」

叫び、手を天に翳したと同時に眩い輝きで身を包んだ光太郎は着地した同時に奇襲をかけた相手を睨む。

「ほう…早くもRXとなってくれるとは光栄だな」

「貴様…クライシスの怪魔ロボットかツ!？」

「いかにも…」

光太郎の言葉を肯定した怪魔ロボットは手にした武器…鋭利な鎌を背後にマウントし、自らの名を堂々と名乗った。

「我が名はデスガロン。貴様を倒すべく生まれた最強の怪魔ロボットだ」

「そんなことどうでもいいツ!!妹を…桜ちゃんをどこにやったツ!？」

叫ぶと同時にデスガロンへ駆け寄った光太郎は先制攻撃としてパンチを仕掛けるが、難なく回避されてしまう。続いて蹴り、肘打ち、裏拳と次々に繰り出していくがその全てが避けられ、弾かれ、受け止められてしまっている。

「どうした？データにあった貴様の攻撃はもつと鋭く重いはずぞ」「くっ…!」

「こないか…なら、此方から行かせて貰うぞ?」

デスガロンが振るう腕に対し両手で交差して受け止める光太郎だったが威力まで止められず、完全に押し負ける形でアスファルトを転がっていく。そして立ち止まるよりも早くデスガロンは両手に持ったブラスターガンを光太郎に向け、躊躇なく発射。

光太郎へ着弾したと同時に次々と爆発が起こった。

「くっ…があ」

「ふん…倒れることだけはしないか。しかしどうしても妹の身が気がかりであるなら付いてくるがいい」

「何ッ!?!」

「妹の姿を見せてやると言っているのだ。もつとも、そこは同時に貴様の墓場となる場所だがな」

ブラスターを腿に収納したデスガロンが指を鳴らすと大型のバイク…彼の生みの親であるガテゾーンの愛車であるストームダガーの量産試作機であるジェットダガーが転送され、搭乗するとすぐさまに発進。光太郎も胸を押さえながら背後まで移動したアクロバッターに乗り、急ぎ後を追うのだった。

「急ぐぞ、アクロバッター…」

デスガロンの後を追ってたどり着いたのは、破棄された地下駐車場。既に電気すら通っていないはずなのにぼんやりとした頼りない松明で照明が設置されていることからクライシスが準備したのである。

互いにバイクから降りた両名：光太郎は構えながら間合いを詰めつつ、デスガロンに向けて叫ぶ。まるで余裕のない、追い詰められた獣のような咆哮で。

「貴様の誘い通りここまで来たんだ：桜ちゃんを解放しろッ!!」
「そう慌てるな。こちらにも準備があるんだよ」

光太郎とは対照に冷静であるデスガロンは腰に取り付けてあるリモコンを手に取り、中央の赤いボタンを指で押し込む。リモコンからブザー音が響くと光太郎とデスガロンが立つ区画を遮るように壁が出現し、外部を完全に遮断してしまった。

「これは特別な合金で造られていてな。お前が全力でパンチを繰り出そうがヒビ一つ入らんぞ」

「貴様：自分がどうなっても構わないのか」
「言つたろう？俺は貴様を倒す為に生まれたのだと」

これ以上論じても無駄だろう。そう判断した光太郎は強引に口を割らそうと攻撃を繰り出そうとしたが、突然割って入った男の声に動きを止めてしまう。

『これはこれは…聞いていた情報よりもセツカチなお方のようですねえ』

壁面に映し出された巨大なモニター。中央には不気味な笑みを浮かべる男が立っており、傍らにベールで顔を隠す少女らしき人物が立っている。男は右手を胸の前に置き、画面越しである光太郎に対し深々と一礼。頭を上げるとさらに口元を吊り上げて声を放った。

『お初にお目に掛かります。私は木星の騎士ジュピトルスと申します』

「お前も…星騎士か」

つい数時間前に同じ称号を持つ人物に敗れたばかりである光太郎にとっては警戒すべき相手だ。だが、画面に映るこの男は、アルスとはまた違う危険をヒシヒシと感じる光太郎に、先程とは対照にジュピトルスは満面の笑みを浮かべる。

『そう警戒しないで頂きたい。彼方の探し求める少女も、ここにいるのですから』

ジュピトルスにそつと背中を押された少女は自らベールを摘まむと、ゆっくりとした動作で捲っていく。

その下にある顔は、間違いなく光太郎の義妹、間桐桜だった。

「桜ちゃんッ!!」

『桜ちゃんツ!!』

「……………」

ガテゾーンは数メートル先にあるスペースに立つジュピトルスと無表情で立ち尽くす間桐桜の姿を黙って見つめていた。彼等の向かい側に設置されたモニターでは、おびき寄せたRXの姿がリアルタイムで送信されており、これまでに無いほど動揺している姿を映し出している。

今回、ジュピトルスが提案した作戦はこうだ。

おびき寄せたRXに対し、洗脳した間桐桜に彼の存在を拒絶させることよって放心状態にあるところを一気に叩く。

人質に取るよりも、大切な人間に存在を否定される事の方が精神的に追い詰められると笑いながら語るジュピトルスの顔は、許しが得られているのなら10回は殺したくなるような悍ましい姿だった。

だがガテゾーンは何よりそんな卑怯な作戦に自分の製造した怪魔ロボットを利用されるのが我慢ならなかったが、これも全てはクライシス帝国の地球侵略作戦進行の為にマリバロンに説得され、否応なしに従っている。

(こんな形で決着が付いちまうのかよ)

ガテゾーンは不謹慎であると考えながらも、この作戦が失敗することをどこかで望んでいる。間桐桜をクライシス人にする為に怪魔界へと向かってしまったジャーク將軍の指示はあくまでRXの討伐。その為ならば悪魔のような奴に脅される形であっても遂行しなければならぬ。

それでも、ガテゾーンは今でも納得が出来ない。確かに精神的に追

い込んだRXをデスガロンで止めを刺すことは容易い。だがそんな事で本当にRXを倒した事などにはならないと拳を強く握るガテゾーンのコンピューターに通信が入る。

(プライベート通信：？デスガロンか)

(ガテゾーン様。私はどうやら調整不良で弱ったRXに止めを差すまでに戦えそうにありません)

何を言っているのだ。自分の整備は完璧なはずだと自負するガテゾーンの頭部に、デスガロンからの通信は続く。

(その為にRXを戦闘不能の状態に持ち込んだ後、奴を連れてクライス要塞に帰還します。いつでも殺せる状態にしておけば、面目も立つでしょう)

(お前：いいだろう。戻ったら完全な状態で戦えるようにしてやる)

どうやら今回の怪魔ロボットは設計段階以上に創造主よりの性格となってしまうているらしい。デスガロンも今回の策に乗り気ではないようであり、この場合はジュピトルスの案に乗る振りをして後日RXとの全力で決着を付けるつもりらしい。

この通信を同時に受けていたマリバロンへと顔を向けると、呆れた表情を浮かべながらも了承すると言ったジェスチャーをガテゾーンに向けている。

結果を優先するならばジャーク將軍の意思に反するのもかも知れない。だが、あのような男の作戦に頼らずとも、必ずRXを自身の開発した怪魔ロボットで倒して見せると意気込むガテゾーンだったが、そのような考えは潰えてしまう。

ガテゾーンは：いや、クライス要塞に揃う隊長達はジュピトルスという男をまだ見誤っていたのだった。

『さて、間桐光太郎。なぜここに彼女がいるのか、解りますか？』
「くっ…卑怯者め」

ゴルゴムとの戦いで数度同じように人質にされた事はあったが、それは目の前にいての事。現在のようによどことも分らない場所に桜がいるので助ける算段も浮かばない。もし桜がああ宇宙にある要塞にいたのだとすれば、どうすることもできないと悩む光太郎の姿を見たジュピトルスは顎を指で押さえ、フム、と頷く。

『卑怯者とは、心外なお言葉だ…では、こうするとしましょう』

ジュピトルスは隣に立つ桜の背後に回り、桜の背中へ手刀を突き付けると、少女の身体は衝撃を受けたように大きく揺れた。

桜の胸からジュピトルスの血液で染まった腕が生え、手には脈打つ桜の心臓が握られている。

何が起きたが、まるで理解できない。モニターを見つめている光太郎もデスガロンも、同じ空間にいるガテゾン達も同様だ。そんな彼等の視線を受け、さらに口元を歪ませるジュピトルスは手に握った心臓を簡単に握り潰し、勢いをつけて桜の身体から腕を引き抜いた。

流血の海に沈んだ桜の身体はビクリ、ビクリと痙攣するが時間が経過するにつれて頻度が狭まり、やがて完全に動きを止まってしまう。

「あ…あ…あ…」

何が起きた。

この一瞬で、何が起こったんだ？

必死に目の前で起きた事を否定しようとして、考えないようとする光太郎だが、ジュピトルスは突き付ける。彼自身が認めようとしなない事実を。

『これで彼方の言う卑怯という言葉から遠ざかりましたよ、そうです
間桐光太郎！彼方の妹の死を持ってねえッ！！！！』

「ぎ、くらちゃん…桜ちゃああああああああああああああんッ
！！！！」

「ハハハ…ハハハハハハハハハハハハハハハッ！！そうです！これです！それが聞きたかったのです。大切な存在を目の前で失った時の絶望感。それに伴う悲痛な叫び。どの時代でも、どの世界でも、これに勝るものなどありえないのえすよッ！！」

絶望する光太郎の姿に狂喜するジュピトルスは、腕に纏わりつく少

女の血液を辺りに撒き散らしながらも笑い続けていた。

狂っている。

そう言い表す以外にないこの男を評する言葉が見つからない隊長陣が戦慄する中で、ただ一人別の感情で動いたガテゾーンだけが手に愛銃を持ってガテゾーンに迫ろうとしていた。

「ま、待てガテゾーンッ！どうするつもりだ」

「決まってるんだろ…あのサイコ野郎を始末する」

「お、落ち着け！あの娘はクローン！偽物だっ!!」

「何…?」

普段よりモノアイが強く光るガテゾーンをしがみ付くようにとめていたゲドリアンへ説明を求めるように視線を向けるガテゾーンに続き、ジュピトルスに圧倒されていたボスガンやマリバロンも注目している。

「俺の造った怪魔異生獣ドグマログマには放った粘液を浴びた者のクローンを生み出す能力がある。RXのマクロアイですら見分けがつかないほどの精密なクローンをな」

「なるほど…お前がジュピトルスに呼び出されたのはその為であったか」

胸を張って自身の怪魔異生獣を自慢するゲドリアンの言葉に納得するボスガン。確かに真のガロニア姫とするために捕えた桜を殺してしまつては意味がない。だからこそクローンを生み出し、宿敵である間桐光太郎を追い詰める為に利用した。

相手の心を殺す。

正にその通りであり、モニターでは放心状態にあるRXは膝を付いたまま動こうとすらしていない。

「おや、デスガロン。どうしたのですか？今は絶好の機会ですよ」

笑いを止めたジュピトルスは光太郎同様にその場から動きを見せないデスガロンへと尋ねるが、途中で割って入ったガテゾーンから改めて指示が与えられる。

「デスガロン」

『ガテゾーン様…』

「これも…作戦だ」

あのような姿、もはや見ていられない。

当初は連れて帰り改めて決着を付けるつもりでいたガテゾーンだったが、あの状態ではここで倒してやるのも敵の為かもしれない。

背部に備わった鎌を手に取り、光太郎へと迫るデスガロン。しかし、不意に自分の足が何者かに掴まれた感覚が襲う。

「これは——」

「こ、これは、あの時の——」

モニターで様子を伺っていたマリバロンは地下空間内に次々と姿を現す異形…自分も目撃した海魔の姿を確認する。視線をジュピトルスに向けると、恐怖に引きつる顔を表紙に持つ本を片手に持ち、目を爛々と輝かせてその状況を見つめていた。

「あのままではいつ敵が立ち上がるかもわかりませんからねえ」

口もとを吊り上げるジュピトルスは無防備の光太郎へ次々と飛び掛かる海魔の様子を愉快に見つめるが、不意に自分の胸倉を掴まれた事には流石に驚いた。

「どうされましたかな？」

「…今すぐあの化け物どもを引っこませろ」

「これは異なることをおっしゃる。敵を助けると申しますか？」

「とぼけたこと言ってるんじゃないやねえ！あの怪物、RXだけじゃなくデスガロンにまで襲いかかっているんだぞ!!」

ガテゾーンの言う通りであり、海魔達は光太郎を突き飛ばすだけでなく、デスガロンすら敵とみなし次々と攻撃をしかけている。デスガロンも応戦するものの直ぐ様に再生、増殖を繰り返す海魔達に苦戦を強いられている。

「確かに、これは予想外ですな。ですが、彼方の造ったロボットが直ぐにでも間桐光太郎に止めを射していれば私が動くこともなかったのですよ?」

「っ…!」

「フッフ…ご理解して頂けるのなら結構。では、さらに追い込みを仕掛けるとしましょう」

言い返すことが出来ず手を離れたガテゾーンに勝ち誇った笑みを浮かべたジュピトルスは本を開くと再び詠唱を開始。

その身体の元となった人物は海魔のみが召喚対象だったが、ジュピトルスには更なる能力が備わっていた。

「つく、切りがない！」

海魔を鎌で切り裂いていくデスガロンは周囲を警戒しながらも光太郎へと目を向ける。立ち上がる気力すら失ってしまった光太郎を飲み込もうと海魔が次々と張り付いていくが、そこへ更なる乱入者が姿を現した。

突如出現した魔法陣から姿を見せたその群れは海魔ではなく、この地球で怪人に部類されるものだった。

全身が白く、魚のような意匠を思わせるもの。

深い緑色で蟲のサナギの特徴を持つもの。

手にかぎ爪を持ち、モグラのような頭部を持つコートを纏ったもの

：

統一感はあるでないが、全てが怪人。

デスガロンは知る由もないが、これらは光太郎達が住む世界とは別次元よりジュピトルスによって召喚された怪人であった。

『ハハハハ…その者達は『仮面ライダー』と呼ばれる者達に強い恨みを持っていてるようですからね。ここで晴らさせてみせるのも一興でしょう』

「貴様…！」

どこまで人を追い詰めれば気が済むのだと怒りを向けたくなるデスガロンだが、ジュピトルスに届くはずもなく、残酷にも怪人達へとその指示は下されてしまった。

『さあ、止めをさすのです！』

悲しい…

桜ちゃんを奪った敵に対する恨みよりも

桜ちゃんを守れなかった自分の弱さに対する絶望よりも

桜ちゃんが死んでしまった事実が

どうしても悲しい

改造されてしまったばかりの頃、間桐の名を名乗り始めた頃に同じく養子となったあの子は、俺に人としての感情を取り戻させてくれた。

それだけじゃない。

誰かを守りたいと思わせてくれたのも、桜ちゃんがいてくれたからなんだ。

でも、もう彼女を守ることができない。

突然現れたヒトデのような化け物に全身を喰らいつかれても、見た事のない怪人達が襲ってきても、何も感じない。

ただ、悲しいという事以外。

そんな悲しみが心だけでなく、全身に伝わっていく感覚。

俺の意識がはつきりしていたのは、そこまでだった。

怪人達が吹き飛び、海魔が四散する程の爆発が起きたのは、ジュピトルスが指示を出した直後だった。

爆発の影響でモニターにノイズが走り、その姿をはつきりと視認することができない。

ただ分かっているのは…

炎の中、海魔の亡骸を踏みつぶしながら現れたのは、クライシス帝国が把握しているRXの姿とは完全に異なるものだった。

黒と銀、そして橙色で包まれた全身はRXとはまた違う力強さが現れ、ベルトのバックルには大小色違いの歯車のような意匠を受ける。

そして赤い複眼の下には朱い涙を流し続けているようなラインが走っている。

突然現れた敵を脅威と考えた海魔達はデスガロンの存在を忘れ、次々と飛び掛かり噛みついていくが、そのどれもが悲鳴を上げて直ぐに離れていく。その鋭い牙を突き付けた途端に全てが砕けてしまい、噛みつかれた本人の身体には傷一つ入っていない。

怪人達も負けじと数体で囲み殴る、蹴ると攻撃をしかけるがその者は微動だにせず、ダメージを受けた様子はまるでない。

いや、むしろダメージを受けているのは怪人の方であり、腕や足に走るダメージに苦しんでいる。

そして動き出したその者は関節を動かす度モーターが駆動するよな音を立て、緑色の怪人の顔面を掴むと、片手で持ち上げていく。悶絶する怪人の悲鳴など余所に、予備動作などなく真横へと放り投げる。

壁へと衝突した怪人は、床に落下した水風船のように飛び散った。それ以外に、現しようがないからだ。

その光景を見てか、それとも本能で察したのか、あの者に恐怖を感じた海魔達は次々と後退するが、その者は重々しい足音を立てながら迫っていく。

付近にいる海魔を次々と千切り、踏みつぶし、殴り飛ばす。
そこには感情の一切ない。まるで敵を殲滅するための戦闘マシーンのように。

「あれが、RXなのか」

炎に照らされ、全身が露わになった光太郎の姿。だが戦いはデータにない以前に、動きが完全に機械じみたものとなっている。

そして…本来なら赤く輝いているはずの複眼も、今は光が灯っておらず、まるで塗り固められた血のように、赤黒い。

そしてついに最後の海魔が潰れ、モグラの怪人の胸に大穴を開けて爆発が起きた後、光太郎の視線がデスガロンを捉える。

「来るか…」

身構えるデスガロン。このまま黙ってやられる訳にはいかない
と鎌を握る手に力を込めた時——

「なんと無様な戦いだ」

別人の声が響いた。

振り返ったその先……いつの間にか空いた入り口から現れたその男は白いマフラーを靡かせ、緑色の複眼を光らせると、デスガロンの存在など目にも留めず、光太郎へと歩んでいった。

赤い仮面と、ベルトのバックルに左右対称の風車を持つその姿。デスガロンの持つデータと合致する名をそっと呟く。

「仮面、ライダー」

光太郎は接近する男と距離が縮まると容赦なく拳を突き出す。怪人達を容易く貫く威力を持つパンチだが、男は難なく掌でパンチを受け止めてしまう。

「……………」

「威力は大したもののだが……貴様の拳には何も無い。何も込められていない——」

「そんな手ぬるい攻撃で、俺が倒せるとでも思ったか？」

男の複眼を見た光太郎は急ぎ距離を取る。

先程まで海魔や怪人達が抱いた感情…恐怖が光太郎を襲った証拠だ。

「フン…どうやらまだ『戻ってこれる』ようだが…今のように力に溺れるようでは話にならない」

「一度思い知らせてやろう…そのような力、『魂』が宿っていないければただ破壊しか呼ばないことをッ!!」

男が腰を屈め、両手を広げた構えから大きく跳躍。光太郎に向かい落下しながら右足を胸板へと叩き付ける。

それだけでは終わらない。

光太郎の胸板を足場に、男は再度跳躍し、空中で反転。その反動を加えて威力を増した蹴りを再度光太郎へと炸裂させた。

最初の一撃でよろめいた光太郎は二度目の衝撃に今度こそ吹き飛ばされ、壁へと叩き付けられてしまう。

そして落下した直後、その姿は間桐光太郎へと戻っていた。

「———その怪人」

「ッ!?!」

この男の登場から終始圧倒されていたデスガロンは急に自分を呼ばれた事に驚くが、男の口から聞こえたのは意外な言葉だった。

「もし戦闘する意思がないのなら、この場の脱出に力を貸せ」

「…何を言ってる——」

この男は確かに間桐光太郎を倒したが、言動からして光太郎を止める為に攻撃をしたのだろう。しかし、あのように倒せたのなら彼を連れて脱出するのかとデスガロンは考えたが、センサーで男の手足を状態を見て納得する。

光太郎の攻撃を受け止め、さらに光太郎を吹き飛ばした際に拳と足にダメージを負ってしまったようだ。余程、あの姿の光太郎の硬度が凄まじかったのだろう。

だが、それでも痛む様子も欠片をみせないとは、この男のプライドの高さが伺える。

デスガロンは男の条件を飲み、光太郎を抱えて何故か空いている入り口を指指そうとしたが、またもや海魔が胎動を始めた。

どうやら光太郎によって裂かれてた個体から時間をかけて再生したようであり、数はおよそ50近く。

「しづといやつらだ…」

デスガロンは光太郎を担いだまま。男は片手、片足に大きなダメージを負っている。とうとう手詰まりかと観念するデスガロンだったが、男は一步前へと進み。

「下がっている。こいつらは俺が片付ける」

「この数をか…」

「このような群がるヒトデモドキに…手も足も出す必要はない」

男の言葉を理解したのだろうか。海魔達は一斉に飛び掛かったと同時に男のベルトから凄まじき2つの風が発生する。

「吹き飛ベツ！逆ダブル…タイフウウウウウンツ!!!」

2つの風はやがて嵐を起こし、竜巻となり目の前に迫っていた海魔達を飲み込み、すり潰していった。

狭き空間で起きた嵐が去った後、そこに立っていたのは相変わらず光太郎を担ぐデスガロンと、1人の人間だった。

「…行くぞ。敵の増援がいつ現れるかも分からんからな」

一瞥したその目は、デスガロンではなく、気を失っている光太郎に向けられたものだった。

未だ心許さず、警戒しているような冷たい眼差し。

デスガロンはその場から離れていく男…風見志郎の後を黙って追うだけだった。

第39話

「お兄ちゃんっ！」

夕暮れの公園

ベンチに腰かけて学校の宿題を片付けていた光太郎は自分の名を呼びながら駆けてくる義妹へと目を移す。

友達と砂場で遊んでいたのであろうか。祖父がこっそりと買ってきた新しい洋服がもう泥だらけになっている。出会った当初と比べてワンパクに育ったなと苦笑する光太郎はハンカチを手に取り、自分の前で立ち止まった桜の顔に付いた汚れを拭きとると、義妹の口からうー…と小動物のような声が漏れる。

「はい、綺麗になった。楽しかった、桜ちゃん？」

「うん！今日はね、うーんと高いお城を作ったの！」

「そっか、俺も見とくべきだったな」

視線を合わせる為に屈む光太郎に満面の笑みを見せる桜につられて口元が緩んでしまう。

人で無くなってしまった自分を、異形であるバツタの怪人となっても離れようとしなかった彼女がこのまま笑っていてくれるのなら、自分はいくらでも頑張れる。

決心を強める光太郎の耳に、先ほどとは打って変わりトーンの下がった声が届く。

「でもね。もうお城、作れないの」

「胸がすごく痛くて、もう何も作れないの」

唇から一筋赤い液体を垂らし、目は虚ろとなった桜の顔にはまるで
生気を感じさせない。

そして、胸に開いた大きな穴から絶えず血液が流れ続けていた。

「っ…!?」

後ずさった光太郎の背中が硬く、冷たい何かに当たる。

恐る恐る振り返った光太郎の視界に映ったのは、銀色の甲冑で全身を纏った人物が、表情がまるで読み取れない仮面越しに自分の心を揺るがせた言葉を再び口にしていた。

「だから言っただろう…」

「お前は自分も、お前の言う誰かを守れないほどに、弱いつてなあ…」

腹の底から凍える程の冷たい少女の声が、光太郎の顔を恐怖に歪ませる。

仮面ライダーとして生きる道を選んだ光太郎の信念を根本から揺るがせた存在は無言で剣を振るう。真横に飛んで何とか回避した光太郎だったが…

「あつ…あつ…」

アルスが剣を振るったその先で自分と共に戦い、守りたいと誓った人々が倒れている。生きている者など、いなかった。

「ハハハハ…素晴らしい！全く持つて素晴らしい光景です!!!」

大切な人々の死に怯える光太郎の様子を狂喜の笑いと共に現れた新たな星騎士は、愛おしい我が子を抱くように、亡骸となった桜を手を抱えて光太郎の眼前まで迫り、やつれたと顔とは不相応に鍛え上げられた腕をゆつくりと上げていく。

ギチギチと関節を歪ませ、鋭い爪を持った腕が振り下ろそうとする

先は、既に息をする事のない桜の首。

この星騎士は桜を殺しただけに飽き足らず、少女の亡骸まで辱めよう…違う、そうする事でさらに光太郎が苦しむと知っての行動だ。

「や、やめろ…やめてくれッ!」

懇願する光太郎の声に星騎士の口元が大きく歪む。

その声が聴きたかったのです…

言わずともそう顔が語ったと同時に、振り下ろされる星騎士の腕。

光太郎の前で音を立てて落下したソレは、何も言わない。言ってくれない。

大切な家族の『死』すら守れなかった光太郎は狂ったように笑う敵に立ち向かうことすら忘れ、ただ叫ぶことしか出来なかった。

「うわああああアツ!!ハアツ…ハアツ…ハアツ…ハアツ…ハアツ…」

「随分と豪快な起き方をするものだ」

飛び起き、息を乱す光太郎は周囲を見渡すと意識を失うまでいた地下駐車場ではなく、どこかの洞窟だという事に気付く。さらに自分は

敷かれた毛布の上で横になっており、付近の小岩に見覚えのない男が足を組み、視線を光太郎に向けることなく手にした携帯電話を操作していた。

「こ、ここは…それに彼方は…?」

「…どこまで覚えている?」

「どこまで…じゃあ、あれは…本当に」

質問に質問で返されてしまった光太郎は自分の目の前で桜が殺されてしまった光景が脳裏にはつきりと浮かんでしまう。

そこから自分の身に何が起こったかはおぼろげながらにしか覚えていないが、桜の死後、自分が感情を無くした状態で次々と敵である海魔と怪人を倒した感覚が甦ってきた。

桜の死がショックだった事が理由なのかは不明だが、あの時の自分は敵に対して何の感情もなく、何の躊躇もなく、倒し続けた。自分の手で、足で、次々と怪人を葬ったというのに何の感覚もなく。

そうプログラムの組まれた機械のように、目の前にいる敵として認識したものを倒していった。

あれは、本当に自分だったのか。

自分の手を平を見つめる光太郎の様子に構うことなく佇んでいた男はその後の説明を開始する。

「どうやら思い出したようだな。その後、意識を失ったお前を奴に運ばせ、ここに寝かせたということだ」

「奴…?」

男の視線は洞窟の出口へと向けられており、光太郎は立ち上がると出口の傍へと移動。

差し込んだ日差しに目を瞑り、自分のいた場所が冬木付近に位置す

る採石場だと把握する。そしてその中心とも言わべき広場の中央に、こちらに背を向けて立ち尽くす敵の姿があった。

「デスガロン…なぜ…？」

「気を失ったお前をここまで運んだのはあいつだ。そして、お前との決着を望んでいる」

「決着…」

そう。デスガロンは間桐光太郎を倒す為に生まれた。光太郎が気を失い、この採石場まで連れてきた後はクライス要塞との通信を完全に切り、エネルギー反応を感知させぬよう一部の機能を落とすまでに至っている。

自身の創造主が望む通り、光太郎との真つ向勝負を望むデスガロンは光太郎が目覚めるのを待ち続けていたのだ。

例えクライシス帝国への反逆行為だとしても、デスガロンの決意は揺るがない。創造主と、自身の為に。

しかし、再戦を望まれている光太郎の意思は大きく揺れていた。

もしあの時のように感情を無くし、力のままに戦ってしまったなら。

視界に入る者全てを敵としてしか認識しない自分になってしまったら…

いや、自分が抱いている不安はそんな事ではない。

光太郎の心を締めているのは、目の前で家族を殺されてしまった自分への絶望。

ゴルゴムとの戦いも聖杯戦争も、光太郎に取って二度と失いたくなかった存在…間桐家の家族が犠牲になることはなかった。

そして光太郎自身も忘れていた。戦いの中ではこうもあっさりと命が失われてしまうことを。

あの時、ファミレスに同伴したアルスの言った言葉が光太郎の脳裏を過った。

『お前がお前の言う大切な人を目の前で無惨に殺されたら、お前は今まで通り戦えるのか?』

答えられなかった回答が今ならはつきりと浮かんでいる。

大事な家族を失った今、自分に戦いなど――。

「無様だな」

突如聞こえた声に思考を中断した光太郎が振り返ると、目覚める寸前まで自分のそばで待機していた男がいつの間にか背後に立っていた。侮蔑するような冷たい視線を向けて。

「…あの時から多少はマシになっていると思いき日本に来たが…どうやら見込み違いだったようだな」

「何を言って…」

訳のわからない男の言う事に反論しようとした光太郎だが、今に

なって男の声に聞き覚えがあると気付き、さらに叱咤するその威圧感が男が何者であるかを理解させる材料となった。

『仮面』がなくとも、彼が誰であるのか理解するには、それだけで十分だった。

「彼方は…あの時の」

「俺の事などどうでもいい。今は、お前の話だ」

光太郎が一度命を落とした時、魂に活を入れてくれた10人の戦士達。いつか出会える日があるのなら感謝を伝えたいと考えていた光太郎の前に、その1人が存在している。だが男：風見志郎は光太郎の言葉を遮り、彼が今最も聞きたくない事実を突き付けようとした。

「余計な時間を取られないようにはつきりと言ってやろう。今のお前は誰かの死を言い訳に、戦いを放棄しようとしているに過ぎない」

「そんな事…っ！」

言い返せなかった。

今し方光太郎が考えていた事は、桜を守れなかった自分には戦う事など出来ない。言い方は違えど、志郎の言った内容と一致するためだ。反論できず、拳を強く握ることしか出来ない光太郎へ志郎の容赦ない指摘が襲う。

「俺達は確かに常人にはない力を持っている。だが、ただそれだけの事だ。お前は自分が戦っていれば、誰一人として死なないとも考えられているのか？」

「……………」

「だが、戦いから逃げることなど許されない。お前が選んだのは、そう

「いう道なんだ」

「なら…」

光太郎は目の前に立つ志郎の胸倉を両手で掴んでいた。まるで縋るかのよう。

「なら俺はどうすればいいんですかッ!?桜ちゃんを殺されて…ッ戦うとしても、ただ相手を殺す事だけを優先させてしまうようになってしまった俺は…どうすれば…」

涙を流し、胸の内を吐露する光太郎は感情のままに泣き叫んだ。慎二やメデューサがこの場にいたのだとしたら、また感情を抑え強引に笑うかもしれない。だが、この男の言葉に抑圧されていた悲しみに火が付いたように爆発してしまった。

自分が頑張っていれば、みんなを救える。家族だって。仲間だって。顔も名前も知らない誰かだって。

一人で無理でも、メデューサや慎二、桜達と協力すればなんとかなると。

しかし、光太郎へ火星の騎士が言い放った言葉が彼を焦らせ、木星の騎士によってその信念は砕かれた。

さらには自分ですら制御できない力に翻弄され、今のままでは守るべき存在も傷付けてしまうかもしれないという恐怖に駆られてしまふ。

そして、打ち明けるべき相手の伸ばした手を振り払ってしまった光太郎には、その罪悪感から頼る事すら許さないでいる。もはや、光太郎には志郎へ縋るかのようには叫ぶことしか出来ないでいた。

光太郎の慟哭を黙って聞いていた志郎は今も自分の服を掴んでい
る手に、自身の手を掴み…

「知らん。そんな事は、自分で結論を出せ」

光太郎の手を、あっさりとは振り払った。

「その結論を出さないようであれば、これから先の戦いの中で犠牲に
なる人々を、お前は『呪い』へと変えてしまう」

「のろ…い…」

「そして、その時は——」

「お前は戦うことも、仮面ライダーを名乗ることもできないだろうな」

そう言い切った風見志郎は立ち尽くす光太郎の横を抜け、振り返る
ことなく去っていくのであった。

「ずいぶんと荒れていたのだな。いつ声を掛けるべきか迷っていた」
「これはお見苦しい所を。して、この部屋に入ったということは何か用があつてのことなのでしょう?」

顔に付着した海魔の血液を拭き取ることなく話を進めるジュピトルスに戦慄しながらも、ボスガンは内心でニヤリと笑う。この男は確かに危険過ぎるが、利用すれば大きな力になる。上手くすれば他の隊長おろか、あのジャーク將軍を今の座から引きずり下ろすことさえ可能なはずだと。

「私の配下が、間桐光太郎の居場所を突き止めた」

その名を出した途端にジュピトルスの表情が凍る。ギチギチと手にした短剣を握る力が強まり、また先ほどのような事を目の前で起こされてはたまらないとボスガンは捲し立てるように話を続けた。

「そ、それだけではない。ジュピトルス殿の命令を無視したデスガロンまで一緒にいるようなのだ」

「はて、なぜデスガロンが間桐光太郎と共に行動しているのでしょうか?」

「おそらく、ガテゾーンが無駄な知識を与えた事により奴めとの決着を優先させているのだろう。折角乱入者によって意識を失ったRXに止めを差そうとしないなど、まるで理解出来ん」

デスガロンの名を出したことで怒りを鎮めたジュピトルスの様子を見てなんとか話を進めていくボスガンの言い分に、ジュピトルスはニヤリと笑う。何か、面白いおもちゃを見つけたかのように。

「ボスガン: よろしいのですかな? 同僚の部下にそのような言い方をして」

「フン: 所詮奴など誇り高いクライシスの貴族である私の足元にも及ばない存在だ。生物どころか、ガラクタに過ぎん者が隊長を務めるな

ど、同じ隊長である私にとっては屈辱でしかない」

「ふ、フフフフフフ…いい、実によいですね彼方」

「そこでだ…憎きRXを倒し、裏切り者のデスガロンとあの気取り屋のガテゾーンの息巻く姿を見る方法があるのだが…」

「それは興味深い。詳しくお話ししましょう」

「む…」

今まで余分なエネルギーの消費を抑える為に動かずにいたデスガロンの目に光が宿る。自分に近づくエネルギー反応を見て、ようやくその気になったのかと振り返る。

デスガロンから10数メートル先に、仮面ライダーBLACK RXへと変身した間桐光太郎がゆっくりとした足取りで接近していたのだ。

「どうやらあの時と違い、意識ははっきりとしているようだな」
「…ああ」

覇気なく返事をする光太郎の様子に未だデータ通りの力を発揮できない状態であると察しながらも、デスガロンは背部から2本の鎌を手に取り、悠然と構えを取る。

敵に迷いがあるうが、自分の前へと姿を現したからには全力で戦う。それが一方的に通信を切ってしまった創造主に対するせめてもの献上すべきことであると武器にエネルギーを伝わせていく。

対する光太郎はデスガロンの読み通り、迷いの中にあつた。

風見志郎の言った自分が出すべき答えも、『呪い』の意味も解らないまま、変身して敵の前に立っている。

先駆者が言うように、自分には戦いから逃れることが許されないのなら、やはり戦いの中で見つけるしかない。

(こうして、重い気持ちで戦うのは、あの時以来だ…)

不意に思い出したのは、自分が初めて仮面ライダーの名を名乗った時。

祖父である間桐蔵硯の真意を聞いた直後にゴルゴムの放った刺客により命を落としてしまった。あの時も、自分に覚悟があれば助けられたのにと後悔の念が甦る光太郎だが、ふと違和感を覚える。

(いや、俺はあの時、なんで戦えたんだ…?)

喉に魚の小骨がつつかえたような妙な感覚。しかし、目の前の敵はそんな都合など構わずに攻撃を仕掛けてくる。光太郎はその違和感をぬぐえぬまま、デスガロンが振り下ろした鎌に向かい拳を付きだそうとした。

その直後だった。

「ぐあああああッ?!」

「又オオオオッ?!」

光太郎とデスガロンを襲う突然の爆撃。

絶えることなく降り注ぐレーザーやミサイルの雨が放たれる方へダメージを負いながら複眼を赤く光らせ、マルチアイを発動させた光太郎が捉えたのは、クライシス帝国の怪魔ロボットだった。

だが、光太郎以上に驚きを隠せないデスガロンは自分達に攻撃を続

ける者の名を叫ぶ。

「どういふつもりだネックスティッカー！お前は怪魔界の警備を任されていたはず…」

「ウラギリモノ…ハカイスル」

「なっ…!?!」

さらに攻撃を強める怪魔ロボット ネックスティッカーは万力のような腕に装備された追加銃火器や脚部からミサイルを次々を発射し、光太郎達に防御する暇さえ与えない。

その光景は、クライス要塞にも映し出されていた。

「ネックスティッカー!?なぜ奴が地球に…」

「おやおや、あの機械人形は彼方の作品でございましたか？」

「お前…」

「偶然にも間桐光太郎めを見つけ、異界から怪人を召喚してぶつけようとした所、まさか怪魔界にいる彼方の部下を引き当ててしまうとは…そう言えば、怪魔界もこの地球では『異界』でしなただあ…」

モニターに映る自分の部下の姿に驚くガテゾーンの背後から手に不気味な本を手にしたジュピトルスが現れる。さも全くの偶然だと言いつけるジュピトルスにワナワナと身体を震わせるガテゾーンは怒りを隠すことなく問い詰めた。

「ふざけるなッ!!しかもあの様子…俺のコンピューターだけに飽き足らず、ネックスティッカーの頭脳まで細工しやがったなッ!」

「なんの事やら…私の召喚に応じた者は、無条件で私の僕となるので

す。それに、あの攻撃力なら弱った間桐光太郎と、奴目を匿った裏切り者も合わせて処分が出来るのですから正に一石二鳥！彼方がそのように怒る理由が全く分かりませんなあ」

いけしやあしやあと語るジュピトルスに対し、回路がショート寸前まで怒りを込み上げるガテゾーンだが、監視モニターを見た限り宿敵のRXとの決着を優先させるために助けた事は事実。ここでジュピトルスを攻め立てることは出来なかった。

怒りに震えるガテゾーンの姿を気付かれぬようほくそ笑んでいるボスガンの姿を、情報収集を行っているマリバロンは見逃さなかった。

爆発の中、舞い上がる白煙により太陽光を受けられずにいる光太郎は再生能力を發揮することが出来ず、徐々にダメージを蓄積していき、ついには膝を着いてしまう程までに達していた。

(なんて、攻撃だ。ガンガティン以上の火力を持つ敵がいるなんて…)

これに対抗するには先の戦いで光太郎が新たに手にした力を使うしか方法はない。だが、あの時と同様に、目に映る者全てを敵としてしか認識できない機械となったら…

その不安が光太郎の動きをさらに鈍らせししまう。

「RXッ!!避けろッ!!」

デスガロンの忠告も遅く、光太郎の四方へと発射されたミサイルが

爆発。火の海に飲まれた光太郎は遂に地へと伏してしまった。

「があ…あ…」

震える手でどうにか立ち上がろうとするが、まるで力が入らず、身動きの取れない様子を嘲笑う声が攻撃を続けるネックスティッカーのスピーカーから響く。

『ハハハハ…見事です。さあ、私の思い通りの死を迎えない者に情の欠片もありません。最大出力で止めを刺すのです!!』

その不快な音が止むと同時に、ネックスティッカーの胸部が左右に展開。収納されていた巨大な銃身が姿を見せる。ネックスティッカーのエネルギー3割を消費して放つその攻撃はクライス要塞を飛行不能にするほどの威力を誇っている。

既にエネルギーのチャージが完了し、膨大なエネルギーの束が光太郎に向かい照射される。

未だ攻撃が届いていないというのに、凄まじい熱量によって身体のうちこちから悲鳴が上がる。次第に痛みは広がり、エネルギーの塊は光太郎を飲み込もうと目前まで迫っていた。

(こっ、までなのか。答えを見つけないまま…俺は…)

桜ちゃんのいる場所に、向かうのか…

そう諦めかけた光太郎の眼前に、何者かの影が覆った。

「ぐ……オアアアアアアアアアアアアツ!!!」

光太郎の前に立ったその者が手にした武器は、その熱によってあっさり蒸発した。

強敵との戦闘を想定し、これまでにない程に鍛えられた強度を持つ銀色の装甲はところどころ剥がれ落ちていった。

元となった敵への対抗心から似せて作られた緑色の複眼は片方が吹き飛び、もう一方は亀裂が走ってしまった。

ネックスティッカーの放ったエネルギー砲が消えた後、光太郎を庇ったデスガロンは音を立てて大地へと沈んだ。

「デスガロン……なんで」

理解できない。自分を倒すべき敵として買っていたようだが、このように守られるほどの価値など、自分にはない。敵であるにも関わらず、またこうして自分のせいで命を落としてしまうのかと自分を責めようとした光太郎に、デスガロンの声が届いた。

「俺は……き、様を倒す為に生まれた……それが、同じ怪魔ロボットであるネックスティッカーであって、も……許されない、か、らだ」

ノイズ混じりとなってしまったデスガロンの声に、光太郎は倒れたまま身を振りながら近づいていく。

「それでも、俺なんかを庇う必要なんて」

「貴様が……気にする必要は、ない。何故なら……俺の身体が、破壊されても、データは生き残るから、だ」

「え……？」

「俺達怪魔ロボットは、敗れ、る寸前に戦闘データを全て、ガテゾーン

様の元へ、送っている。そのデータを基にし、さらに強力な、怪魔口ボットが、生まれるのだ…」

「だから、俺達のデータは…記憶は…決して…死なない…」

「…っ!？」

後頭部をハンマーで殴られたような衝撃が光太郎を襲う。

デスガロンの言うデータは、人間の言う記憶。さらに言うならば、思いだ。

身体は滅びても、思いがある限り、それは生き続ける。

それは、光太郎自身が強く思い知っていることであつたはずだ。

だと言うのに、なぜ忘れていたのだろうか。

養父が目の前で惨殺された時も、祖父が消滅した時も、光太郎は託されたのだ。

死んだ人間の思いを継げるのは、今を生きる者しかいない。

それを、死んだ者を言い訳ににして放棄する訳には行かないのだ。

「そう…だ。そうだったんだ」

震える手で身体を起こす光太郎は、風見志郎の言った言葉をようやく理解する。

「誰かの死を言い訳にするなんて…いけなかったんだ。戦えない理由を守れなかった人に押し付けて…原因に仕立て上げて…誰かの死に縛られてしまうという…呪いにしてしまうところだったんだ」

誰よりも優しかった妹を、呪いなどにして堪るか。

膝に手を付いて、再度武器を構えるネクステイツカーを見つめる
光太郎の眼は強い光を放っている。

そして、もう一つの結論を伝えなければならない。

あの時、放心状態になった自分の代わりに、力を与えてくれた存在
に。

『きづいていたか…あの時、私がお前へ力を与えていたことを』
「なんとなく、だけどね」

かつてRXとなるきつかけとなった精神世界。

人間の姿である間桐光太郎と、BLACKの姿を借りたキングス
トーンの意味が、そこにはあった。

『あの姿は、かつての世紀王の1人がもう一人の世紀王を倒すために
生み出した姿を模倣したもの。人の感情を一切捨て、全てを滅ぼす為
に』

「桜ちゃんを殺された時、悲しみの感情に縛られてしまった俺を動かすには、その方法しかなかった…そうなんだろう？」

無言で頷くキングストーンの意思は、光太郎の前に手を翳す。そこには様々な色を宿す球体が現れ、光太郎の前へと移動する。

『それはお前が持つ感情…人間で言う喜怒哀楽を司るものだ。それを破壊すれば、いつでもお前はあの力を振るうことができる』

確かにあの力は凄まじい。これから先の戦い…クライシス帝国だけでなく、星騎士達と戦う際にも、必要になるかも知れない。だが、光太郎の回答は…

「ありがとう。でも、俺は感情を捨てない。人としての身体を失ってしまった俺だけ…感情だけでも、心だけでも、人間でいたいんだ」
『…だが、それではお前はこれからも苦しむこととなる。妹を失ったような苦しみが、再びお前を縛るってしまうぞ？』

「いいんだ。俺が誰かの死を悲しむということは、その人の事を考える、何よりの証拠だから」

これまで命を散らしていった大切な人達の姿が、浮かぶ。

「それが痛みであるのなら…俺は痛いまま…いいんだ」

だからこそ、自分は家族と、大切な人々と過ごせたのではないか。自分は捨てない。かつての世紀王が捨ててしまった人としての大事なもの。

それが、自分が『仮面ライダー』として選んだ道なのだから。

強く決心した直後、暗闇だったその空間が鮮やかな橙色へと染め上っていく。

「これは…」

『悲しみに囚われるのではなく、乗り越えていく、か。本当にお前はこちらの予想を超えてばかりだ』

「キングストーン…」

『良いだろう。お前なら使いこなせるはずだ』

『悲しみのその先にある、この力を』

「…っ！」

あれは、現実。それとも…だが、考えるのは後の話だ。

今、こちらへ再び銃火器を向ける敵に対し、ついに立ち上がった光太郎は今度はデスガロンを庇うように前に立つ。

「デスガロン…お前の言うデータ。しっかりと焼き付けておけ」

言うと同時に光太郎は眼前で両手を交差。拳を強く握ったまま、左右へと振り下ろす。

同時に腹部のサンライザーから激しい光を放ち、光太郎の全身を包んでいく。

迸る光の中で、サンライザーはいくつもの歯車を宿すベルトへと変化し、歯車の回転に伴い光太郎を包む白い光が橙色の光へと変化。

光が消失した時、新たな姿となった光太郎が、そこにいた。

前回の戦いで持ちえなかった光太郎自身の意思を宿しているかのように赤く輝く複眼を光らせ、その姿の名を轟かせた。

「俺は悲しみの王子——」

「RXツ!!ロボライダーツ!!」

「コウゲキ…カイシツ!!」

ロボライダーとなった光太郎に向かい、ネックスティッカーは再度嵐の如く銃火器を斉射する。

だが、モーターの駆動音と共に歩む光太郎はネックスティッカーの攻撃を一切寄せ付けず、爆発の中を進んでいく。

ボデイにレーザーやミサイルが着弾しようと、傷一つ付かず、ついには距離が2メートルを切った直後、ネックスティッカーは腕からチェーンソーを出現させ、光太郎へと斬りかかる。

回転する刃が光太郎の身体に触れた途端に火花が散る。しかしそれによってダメージを受けたのはネックスティッカーのチェーンソーのみであった。

細かな刃が次々と剥がれ落ち、光太郎の身体は汚れすら付いていない。

動揺するネックスティッカーに対し、光太郎は胴体にめがけ、勢いよく拳を叩き付けた。

「……………?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

追加武装を着装した都合上、ガンガディンより重量を上回るはずのネックスティッカーが数十メートル先にまで吹き飛ばされてしまう程の威力。

どうにか立ち上がったネックスティッカーは再度、エネルギー砲を展開しようとするが、先程の攻撃により胸部がひしゃげてしまい、銃身を展開することができない。

強引に胸部を展開しようとアームでこじ開けようとするが、光太郎はそのような隙を逃さなかった。

胸の前で両の掌を向い合わせる形で翳し、その間に発生した白色のエネルギーが右手の中へと宿っていく。

幾層もの光の線となり、右手の中で形となったそれはリボルケインの変形、凝縮されたレーザー銃。

光太郎はその武器の名を呼ぶと同時に、引き金を引いた。

「ボルテックシューターッ!!」

放たれた一筋の閃光はネックスティッカーの胸部を貫き、同時に胸部と背部から火花を散らす。

光太郎は肘を曲げ、ボルテックシューターの銃口を上へと向けるとゆっくりと反転する。

「お、俺は：こんなところで：なぜ：ガテゾーンさまああああああアッ!!?!」

最後に自分を取り戻したネックスティッカーは叫びと共に爆発した。

「デスガロン…」

「み、せて貰ったぞ…貴様の…新たなデータ…」

変身を解除し、人間の姿へと戻った光太郎はデスガロンの横で膝をつく。先ほどより複眼に灯った光は弱く、音声もさらに擦れている。

「礼を…言わねば…同胞と、いえ、ど…あのような輩に、操られる者など、見たく…」

「ああ…俺だって許せないさ。桜ちゃんの仇を…」

「その、情報は、まちが、い…だ…間桐、桜は、生きて、いる…」

「な、何だってツ!?それは本当なのかッ!？」

桜は生きている。さらに詳しく聞こうとデスガロンの肩を掴む光太郎だったが、途端にブツリ、という音と共にデスガロンの目から輝きが消失。

自分との正面から戦いを望んだ怪魔ロボットは、その『命』を全うしたのだった。

「…ありがとうデスガロン。お前の思いを引き継いだロボットが現れたのなら、俺は全力で戦おう。けど、決して俺は負けない。今を生きる人と、死んでいった人々の思いを守る為に…」

「気が付いたようだな…」

崖の上から見下ろす風見志郎は、敵であるデスガロンに吊いの言葉を贈る後輩の姿を見て、そう呟いた。

「だが、これから先も選ぶ事を強えられる。お前の戦いは、まだこれからだぞ」

「…仮面ライダーBLACK RX」

後輩の名を呼んだ風見志郎はヘルメットを装着し、バイクを駆って走り去っていくのであった。

第40話

自分の目の前で桜や大事な者の命が失われていく悪夢から目を覚ました間桐光太郎は風見志郎からデスガロンによって助けられたと聞かされる。

決着を望み待ち受けるデスガロンに対し、桜を失い、戦意を喪失した自分には戦う資格はないと意気消沈する光太郎に志郎は死者を言い訳にして戦いを放棄しているに過ぎないと指摘されてしまう。

大事な家族を失い、さらに制御できない新たな力に振り回されてしまふ自分はどうすればいいのかと尋ねる光太郎だったが、自力で答えを見つけなければ仮面ライダーと名乗ることが出来なくなると言い残し、その場を去ってしまった。

結局答えを見つけれないままデスガロンと対峙する光太郎に突如第三者による攻撃が降り注ぐ。

光太郎が望んだ通りの死を迎えない事に憤慨した木星の星騎士ジュピトルスがボスガンと結託し、洗脳した怪魔ロボット ネットクス テイツカーによる攻撃で両者を亡き者にしようと画策した。

再生能力を封じられた光太郎に止めを刺さんとネットクス テイツカーは最大の攻撃を放つ。

ここまでかと諦めた光太郎を身を挺して救ったのは、敵であるはずのデスガロンであった。

既に機能停止を待つばかりとなってしまうたデスガロンは自分がここで朽ち果てても、自分の遺したデータがいつか宿敵であるRXを倒すという言葉に、光太郎は自分が死んでいった人々の託された願い

の為に戦っていたということを出す。

死者を自分を縛る呪いへと変えない為に再び立ち上がった光太郎は自身の中に宿るキングストーンの意思と再び通い合わせ、自分自身としての心を捨てずに戦い抜くと宣言。

キングストーンの意思は光太郎の言葉に応えるように、新たな力口ボライダーへの変身能力を授け、その力により光太郎は見事ネットックスティッカーを打倒したのであった。

デスガロンから桜が生きていると知った光太郎は、いつかデスガロンの意思を引き継いだ怪魔ロボットとは全力で戦うと誓い、桜救出の決意を新たにするのであった。

とある世界

滝壺へ流れ出る清水や草木を揺らす風の音がゆつくと奏でる自然溢れる場所。動植物が静かに過ごす中、1人だけ異彩を放つ存在が先ほどから眉間に皺をよせて目の前に広がる灰色のオーロラへと手を

伸ばしていた。

神妙な顔つきで手を近づけ、あと数ミリでオーロラへと触れる目前、バチリツと音と共に青年の手はオーロラから弾かれてしまった。

「チツ…またか」

これで何度目になるか分からない。数日前から自在に潜り抜けていたオーロラを通過できなくなってしまった青年は舌打ちすると座り込み、胡坐をかいて深くため息をつくいた。

マゼンタ色のシャツの上に黒のジャケットを纏い、常に持ち歩いている二眼レフのトイカメラを首から下げている青年の名は門矢 士

別名『世界の破壊者』とも呼ばれている男であり、仲間内から目つきが悪いと言われている目を更に細め、自分がオーロラへ入れない原因を推測する最中、背後で光と共に現れた存在へと目を向ける。

銀色の甲冑の上に白いマントを纏い、金色の髪にオッドアイを持つ『始まりの男』と呼ばれる人物が光を抜け、ゆっくりとした足取りで士に近付いていく。

神聖なる佇まいを見せるその男は、士が現在滞在する『惑星』の文字通り『神』である存在なのだが、片手に持っている荷物により彼の雰囲気は台無しとなっていた。

「お前…こんな所に住んでて自炊もできないのか？」

「し、仕方ないだろッ!? ここの果実だけじゃ飽きちまったし、最近は前みたいに地球の食い物の味もわかるようになったんだからッ！」

士の指摘に狼狽えながら必死に弁明する男は片手にもった弁当の入った袋——沢芽市支店と書いている辺り彼の街への愛着が分かる——を庇うように背後へと隠すがもう今更である。

「それに舞の奴、新しく生まれた動物の世話に係つきりで飯も作ってくれないんだぜ…?」

「やれやれ…」

絶大な力を持つ存在がわざわざ異星である地球まで行った理由がこれでは、神の名折れもいい所だ。そんな気持ちをやざとらしく口にした士は男…かつて共に戦った仲間、葛葉 紘汰が以前と変わらない面白い奴だと内心では微笑んでいた。

そんな恰好だところが落ち着かないという士の要望を聞き、紘汰は自身の姿を神となる以前の姿…黒髪に自分が所属していたダンスチームのトレードマーク入りのパーカーというラフな格好になると士と向かい合う形で座り込み、士が悩む理由を弁当を突きながら尋ねる。

「で、どうしたんだよ。1週間くらい前にこの星に突然来たと思ったら目的のある世界に全くいけないって…調子悪いのか?」

「違うな。あの世界が俺を拒絶している。ま、大体の理由はわかってるんだがな」

紘汰の買った食料から無断でガラス製の瓶に入った炭酸飲料を手にとると封を開けて一気に煽る。文句を言っても効果がないと諦めている紘汰は好き放題に世界を渡り歩くこの男にも出来ないことがあるのか…と逆に珍しい事もあるものだという考えが顔に現れてしまったのか、空となった瓶の口を向けて不機嫌に口を開く。

「言っておくが俺に問題があるわけじゃないからな。他の世界には移動できるし、たまたま今回そういう事態になっているだけだからな！」

「んぐっ…ゲホッゲホッ…別に疑ってる訳じゃねえよ!そんな怒る

なつて…」

「フン…それにさつき言った原因だが、どうやら俺以外に異世界に干渉する奴が現れたようだ」

「異世界に、干渉…？」

箸をおき、真面目な話になると理解した紘汰は食い入るように土の言葉に耳を傾ける。頷いた土は、自分が目的のある世界へと向かえない理由を語り始めた。

「他の世界の連中に聞いた話だと、戦いの途中で突然魔法陣が現れ、それに怪人が飲み込まれるように消えたという情報がある。恐らくだが、その怪人達の行先が、俺の向かおうとした世界だ」

「そんなのと、お前が行けないのと何の関係があるんだ？」

「次元の干渉ってのは、同じに見えても違うものが多い。俺やあのコソ泥の場合はドライバーの性能によって多世界の移動が可能だが…今回発生した際には違う方法…魔術が用いられてる」

「魔術…？ 晴人さんの魔法みたいなものか？」

「ま、厳密には違うがお前の頭じゃその見解が限界だな。ともかく、その魔術を使う奴のせいだ、あの世界へ向かう方法が魔術による召喚以外に使えなくなつちまつているってことだ」

「え…だって、お前前にもあの世界に行つたんだろ？」

「ああ、我が儘な爺さんとの付添いの後にも何度か、やつかいな『役割』があつて今からちよいと前の『過去の世界』にも飛んだんだが…その際に生まれた道を魔術…というよりも使用者の魔力で浸食されて、完全に道が絶たれてちまつたんだ」

「つまり…魔術で怪人を引き寄せてる道にお前が通る道を上書きされて通れなくなつちまつたつてことか？」

「ま、そんなところだ」

本来ならば自由に並行世界へ行き来する力を持った土がとある世界へ干渉できない理由を聞いた紘汰は自分が何気に馬鹿にされたこ

とにも気づかない程に今回起きた事態が大きいものだと理解する。

士の目的の世界への道が魔術を使う者によって塗りつぶされてしまった今、その『役割』が果たすことが出来ない。以前もそうであったが、彼が動く事態ということは向かう世界そのものを揺るがす事態に他ならない。

「どうにか、その魔術つてのをどうにかする方法はないのか…?」

「いや、至って簡単だ」

「は? そうなのか」

「魔術によってその世界への道が閉ざされてしまっているのなら、その魔術を使う奴をどうにかしてしまえばいい。つまり、倒してしまえば済む話だ」

「おまつ…あんな気難しい顔してそんなんで良かったのかよツ!」

悩んで損したと嘆く紘汰だが、事態はそう上手く運ばない。こちらから干渉不可能世界で魔術を使う者を誰かが倒さなければ、士が目的地に辿りつける日は永遠に來ない。そうなれば、最悪その世界が滅びる可能性すらあるのだから。

しかし希望はある。

その世界にも自分達と同じ存在…仮面ライダーがいる。彼等がその者をどうにかしてくれるのを祈ることしか今は出来ないだろう。

「いや、そうも言っていられない」

「え、なんでだよ?」

こちらが安堵した途端に不穏な言い回しをする士は立ち上がり、未だ消えていなかったオーロラへと身体を向ける。

「あくまで予感だが…このまま放っておけばあの世界だけじゃない…それに伴ってもう一つ世界が。合わせて2つの世界が滅ぶことになる」

「なっ…!?!」

「だから待つだけじゃなく…こちらでも動かなければダメなんだ」

残念な事に、土の抱いた嫌な予感はず外れたことはない。もし本当にこちらが手を拱いている間に手遅れとなってしまう場合、土が向かうべき場所…そこには、かつて自分と敵対した者が。自分達を成長させるという身勝手な考えの犠牲になった者が過去を乗り切って生きる道を選んだ場所なのだ。

紘汰は腰に下げていた錠前を手取る。

果物を横つたそれは赤上 武が以前手にしたロックシードと色以外酷似しているものだった。

「どうにか…できないのか」

神となつて以降自分のすべき事はこの星を守りぬくことであると紘汰も十分に理解している。だが、知ってしまったからには何もせずにはいられない。

仲間たちからは散々と言われているが誰かを優先させ過ぎるこの性格ばかりは治ることはこの先もないのだろう。

「方法は…無くはない」

「ほ、本当かッ!?!」

光明を見出したはずの土の表情は暗いまま、今出来る唯一の方法を紘汰へと説明する。

「そうか…」

「これはあくまであの世界の連中が魔術師をぶつ潰すまでの時間をより短縮させる為の方法だ。それも…確率はかなり低い」

「でも…ゼロじゃないんだろ?」

互いに初対面である間桐桜と瓜二つである怪魔界の支配者、クライシス皇帝の娘であるガロニアと間桐光太郎は向き合う形で座り挨拶を交わしていた。

クライシス帝国にとって憎き敵であると催眠学習装置で教育を受けていたガロニアに取っては複雑な相手ではある。しかし、目の前の青年は敵であるはずの自分に笑顔で接してくれている。

さらにいえば、自分は妹の桜が囚われた原因であるはずなのに……だが、ガロニアにはその疑問よりも、赤く腫れてしまった光太郎の額にどうしても目が向いてしまっている。

こうなったのも光太郎が帰宅した直後のことだ。

メデューサから光太郎が家を飛び出してしまったと聞き、目にも見えて落ち込んで話す彼女の様子を見てすぐの搜索は難しいと判断した慎二と武は翌日に実施すると決める。

そして早朝、既に冬木の管理人である遠坂凜と柳洞寺のメディアに事情を説明：その際にも言いたい放題言われてしまったが桜の誘拐を許してしまった手前何も言えなかった慎二は敢えて身に受けた後、光太郎が普段使用しているバイクを使って行動を開始しようと玄関で靴を履いた直後。

「ただいまー」

などと能天気な朝帰りを迎えた義兄の顔を見た瞬間、厚さ15センチは超えるであろう魔道書の角を光太郎の額へと叩き付けたのだ。た。

鈍い音を聞き付けて玄関に向かった武はしやがみ込み、額を押さえて震えている光太郎が痛がりながらも笑いを見せる様子に呆れながらも無事に戻ってきてくれたかと手を差し伸べる。

その様子を角に隠れて覗いていたガロニアは階段の上で、同じく出迎えに来たであろうメデューサの姿を確認する。だが、どこか複雑な

表情をするメデューサは階段を下ろうかと躊躇している間に光太郎と目が合ってしまう。

普段なら互いに笑顔で言葉を交わす2人なのだが、光太郎が家を飛び出した直前の出来事が原因であろうか。どちらかともなく顔を逸らしてしまい、メデューサはそのまま階段を駆け上がったしまった。

ガロニアが聞いていたのは、言葉を交わさずとも分かり合っているという、彼女が一番目で見たいと望んでいた関係にあったはずだ。だが、今見た限りそのような関係に至っているとは思えない。

魔道書を片手に居間へと向かう慎二を呼び止めたガロニアは理由を尋ねる。

「そういう事もあるんだよ。人との関係をお前が高望みし過ぎてるだけだ」

「そう…:ですのね」

「でも、あんなの一過性だよ。放っておけば嫌でもお前が望む関係を拜むことになるだろうけどね」

「…それは是非ツ!!」

(え?ここいつそれまでここに居座るつもりなの?)

落ち込ませない為に放った言葉がまさか発火材になってしまおうとは思ってもよらない慎二は目を輝かせるガロニアの姿にもはや言葉がでないのであった。

時は戻り、ガロニアの謝罪を周囲の予想通りに笑顔で受け止めた光太郎はこの場にいる全員に自分が家を飛び出した後の詳細。そして、自分を狙って現れた星騎士に関しての説明する。

まさか桜が誘拐されたと同時に新たな敵が現れるとは…:と眉間を抑える慎二に対し、光太郎は悲観することなく、思いを言葉にした。

「大丈夫だよ。あの時は色々あったけど、今なら負けない自信がある。新しい力も使いこなせるようになったしね！」

「ボロ負けしたつてのになんでそう自信満々なんだよ。それにセイバー似のストーカーとの勝負よりも桜を助ける方が先決だろうが」

「ぐ…返す言葉がございません」

「まあまあ。まずは慎二殿の言う通り、桜殿の救出が第一になるのだが…ガロニア殿。クライシスの基地などに心当たりはあるかな？」

慎二にぐうの音も出ないほどに打ちのめされた光太郎を見て、以前の彼に戻ってくれたと一安心した武は茫然と2人のやり取りを眺めていたガロニアへと質問する。

「あ、えくと、そうですわね…」

やはりクライシスでの教えは間違えだったのだろう。偉大なクライシス皇帝に逆らう残虐非道な男…とあつたのだが慎二に頭が上がない姿を見てどうにも一致しないでいた。

だが、間桐光太郎が恐ろしい存在であるということは後に思い知ることとなるとは、この時のガロニアはまだ知らない。

「確かに地球上にはいくつか隠れ家はあるようですが…桜さんを匿うような場所はありませんわね。それに…慎二様の推測通りに人質とするのでしたら、宇宙にいるクライス要塞に…」

「…宇宙じゃ今の僕たちにはどうしようもない、か」

「はい…」

常に地球の衛星軌道上を移動しているクライス要塞の所在位置を把握するのも至難の技だ。申し訳なきように目を伏せてしまうガロニアへ光太郎は優しく微笑みかけた。

「大丈夫だよガロニアさん。今は浮かばなくても、きつと何か手段があるはずだ。それをみんなで考えよう」

「見つかったとしても今度は先走るなよ」

「はい…」

慎二に釘をさされて小さくなる光太郎を見て、ガロニアはつい笑ってしまった。こちらを安心させるような不思議な雰囲気を持つと思ったら家族にはとても弱い…なんて不思議な人なのだろう。

それに口調はきつい、慎二の様子が生き生きとしている様子やずっと難しい顔をしていた武が安心しきっている事に、彼等にとつて光太郎がどのような存在か伺える。

きつとこの場にはいないメデューサや桜に取つても、掛け替えのない人物なのだろう。

もう少し。もう少しだけこの居心地の良い場所にいたいなどとガロニアが考えた矢先、突如光太郎は頭を押さえて蹲ってしまう。

「うっ…!?!」

「おいッ!?!どうしたんだッ!?!」

「いや…大丈夫。どうやら、キングストーンが桜ちゃんの場所…ではないけど行先を告げてくれたよ」

「キングストーンが…?」

思わず駆け寄ろうとした慎二と武を手で制した光太郎は今し方体内に宿るキングストーンから告げられた場所を口にする。そこは、光太郎達が探そうとしたクライス要塞以上に厄介な場所であった。

「そんな…」

思わず手で口を押えるガロニアに取つて、そこは思いもよらない場所であり、なぜそんな所に桜が連れ去られてしまったのか見当もつかない。

が、ここにいる男達はそんなことは気にせず話を進めている。

「場所が分かっているのならば…」

「ああ。本当に合ってるからね」

「それは大丈夫。彼が言ってくれるんなら、絶対に桜ちゃんはいる」

顔を見合わせる武、慎二、光太郎はその場で自分達の取るべき行動を決定した。

「乗り込もう、怪魔界に」

第41話

間桐光太郎が新たな姿『ロボライダー』となり怪魔ロボット ネットクスティッカーを倒した同じ頃：

別世界 地球とは別の惑星に滞在している門矢 士は光太郎達の世界へと渡れない事に苛立ちを募らせていた。

星の神たる存在 葛葉 鉦太は自在に世界を渡り歩く士が向かない世界もあるのかと疑問に思っていたが、それは士本人に原因がある訳ではなく、彼以外に異世界へ干渉する者の魔力によって自分が作った世界への道が塗りつぶされたと士は推測する。

このままでは自分のすべき『役割』を果たすどころか、光太郎達の住む世界を含め『2つの世界』が消滅する危機が迫っていると予感する士の言葉に鉦太は何か出来ることはないのかと尋ねると、士は限りなく低い確率で、世界への道を塞いだ者を光太郎達が倒すまでの時間を短縮させる方法を揭示。

それでも可能性はゼロじゃないと笑って見せる鉦太の顔を見て提案した方法を実行する為に、2人はそれぞれの行動を開始するのであった。

一方、帰宅した光太郎を待っていたのは義弟による会心の一撃と、家を飛び出す寸前に起きてしまった事で関係に亀裂を走らせてしまい、自分と目を合わせることなく去ってしまうメデューサだった。

ガロニアと改めて挨拶を交わした光太郎は連れ去られた桜の救出の方法を慎二や武と話し合う中、キングストーンの意味より彼女の今

いる場所が明かされる。

そこはクライシス帝国の本拠地でもある怪魔界であった。

「で、カッコつけて乗り込むと言った手前、ちゃんと方法は考えてあるんだろっな？」

「大丈夫、万事抜かりないよ！」

胸を叩き、自信満々に答える義兄にホントかよと顔を顰める間桐慎二はこっちこっちと手招きと同時に外へ向かう光太郎の後に武、ガロニアと共に続く。

間桐邸の中庭へと移動した一回を待ち受けていたのは、ライドロンとブルーライトカット眼鏡を着用しているメディアであった。

「メディア殿、何時の間にな…」

「桜さんが拉致されたと話を聞いて、直後にその能天気さんに言われてね…」

武の質問に答えたメディアはジロリと光太郎を横目で睨むと眼鏡のズレを直し、手にしたタブレット端末を操作し、とある画面を全員の目に映るようにかざす。

「これはライドロンの設計図の中にあつたデータよ。文字自体が地球と怪魔界では異なるから解読に時間がかかったけど、どうやらライドロンには怪魔界へと移動できる手段があるようね」

「それは…本当なのか？」

「ライドロンが最高速度の1500km/hに近付くと中に組み込まれたディメンション・ダイブシステムが起動。予め位置が登録されている怪魔界へと空間転移できる…無論、理論上はね。でも、元々この怪魔界の住人が設計したものだから、その世界に向けて移動できると考えれば不思議じゃないわね」

思わず尋ねた慎二だが、ライドロンの設計図から必要な部品を探り出す彼女の言うことなら信用できるだろう。しかし、他文明の文字を解読したり、いつの間にか更なるハイテクや専門用語を使いこなしている辺り、魔術以外の知識をどんどん取り入れている彼女の知識量は計り知れない。

そんな考えを浮かべていた慎二はもう一つ、大きな問題を指摘する。

「移動する手段は分かった。けど、光太郎に取つてもつと大きな問題があるだろう？」

「慎二殿の言う通りだ。俺も聞いた話でしか知らないが、怪魔界の空は常に濃い雲で覆われて、太陽の光が差すことはほとんどないのだろう？」

太陽の光を受けられない。即ち、怪魔界で光太郎はRXへの変身が不可能ということだ。

前回、偶然にも怪魔界へ迷い込んでしまった時は敵である怪魔獣人
ガイナギスカンの助けを借りることによって変身することが出来た
が、今回も同じようにいくとは限らない。

桜を救出する際にはどうしてもRXの力が必要となる。

もしや以前と同じ無理な方法でRXへと変身する方法を使うので
はないかと疑念する慎二の耳に車両のブレーキ音が響いた。

「トラック…?」

運転席を見ると見覚えのある人物がおり、光太郎は笑いながら駆け
寄っていく。

「大門先生！ありがとうございます」

「ようやくシステムも形になって急ピッチで仕上げたよ。彼等の協力
もあつてね」

光太郎と握手を交わす大門明はトラックの荷台から小型クレーン
で積まれている物資を下ろす協力者：衛宮士郎とアーチャーへを見
ながら柔らかな笑みを浮かべる。

あの3人がそろってここに現れるということはもしや…と台車に
乗せられ、シートで覆われている『それ』に慎二達は思わず目が向い
てしまう。

「ありがとう衛宮君。それにアーチャーも」

「礼には及ばん。こちらが好きでやっていたことだからな」

「俺も同じです。それに、これが今の俺が全力で出来る事なんですか
ら」

ツナギ姿の2人の言葉に力強く頷いた光太郎は目の前で鎮座して
いるモノを覆うシートを掴むと、一気に捲り上げる。

そこには、かつて光太郎を救う為にその身を犠牲にした戦友の新た

な姿があった。

機体を包む白、赤のカラーをそのままにヘッド部分はジェット機の機首を彷彿させる形状となり、後部タイヤの左右には大型のブースタワーが追加され、より爆発的なスピードで走る事を期待してしまう。

機体のAI自身による設計とライドロンの製作時に使われたものと同様のレアメタルで覆われたことで、以前の最高速度以上のスピードにも耐えられる耐久性を誇るボディとなった、かつて文明破壊マシンの名のもとに開発されたマシン。

新生したロードセクター…その名は『ロードセクター・ネオ』

「お帰り…ロードセクター」

『お久しぶりです、マスター』

ゆつくりとボディを撫でる光太郎は自分に応えてくれたロードセクターの声を聞き、自分達の所へ帰ってきてくれた事を改めて実感する。その気持ちは慎二も同じであり、顔には出さないものの、光太郎とは反対の方へと移動し、ロードセクターのシートに触れていた。

そして、共に戦場を駆け抜けた兄弟…アクロバッターもロードセクターの帰還に祝福の言葉を送る。

『ヨクゾ戻ツテキタナ。ズツト、待ツテイタゾ』

『ありがとう、これから共戦おう』

強化されたと同時に音声も流暢となった言葉を話すロードセクターや喜ぶ光太郎達の様子をただ一人、唾然として眺めていたガロニアは自分の知識の中にある乗り物が言葉を話すという概念を打ち壊す事にしばしの時間を要するのであった。

この場に遠坂凜がいたものならさらに時間がかかったのであろうと溜息を漏らす慎二はガロニアへアクロバッターやロードセクター達の説明をある程度済ませると話の軌道修正を図る為に試運転をしてみたてたまらないという義兄の後頭部を手刀で叩き、意見を求める。「確かにロードセクターが戻れば戦力の増強になるし、ライドロンの最高速度に付いて一緒にワープ出来るのはこいつぐらいしかないけど、それだけじゃないんだろ?」

「慎二君の言う通り。ロードセクターは以前から問題になっているRXへの変身に対してもちゃんと考えてくれていたんだ」

論より証拠、と言って光太郎はガレージの扉を解放すると奥まで進んでいく。明かりも付けていない為、暗闇の中にいる光太郎の姿は外で陽の光を浴びている慎二達にはぼんやりとしか映らない。

こちらへと振り向いた光太郎は一定の動きと共にその身をバツタ怪人、そして仮面ライダーBLACKへと変身。意図が読めず首を傾げる慎二達を余所に、闇の中で複眼を光らせる光太郎はロードセクターに向かい叫んだ。

「頼む、ロードセクター!!」

『了解。ソーラーチャージシステム、作動!』

ロードセクターの後部が展開し、小型のパラボラアンテナが出現。電子音と共にアンテナの先が光太郎を捉えると、慎二や武が驚く間もなく赤い光のエネルギーを照射する。

エネルギーを受けた光太郎の赤い複眼とベルトのキングストーンがより強い光を放った直後、光太郎は天に向けて手を翳す。

その刹那、光太郎の姿はRXへと変化を遂げていた。

「これは……!」

「太陽の下にいないのに、RXになった……?」

「そう、これが新しいロードセクターの真骨頂! 予め太陽光エネルギー

ギーを蓄えておく事によって、どんな状況でもRXに変身するエネルギーを供給してくれる『ソーラーチャージシステム』だ。これがあれば、怪魔界で太陽の光が差さなくても、俺はRXになることができる」

ガレージの外へと出てきた光太郎は驚愕する武と慎二へロードセクターに新たに組み込まれた新システムの説明し、黒い拳を強く握って見せた。このシステムが有れば例え夜であろうとRXの力を振るえ、光太郎自身がエネルギーを大幅に消耗する無理な変身もする必要が無くなったのだ。

だが、どのようなシステムにも欠点があることを慎二は思い知らされることになる。

「おい…：さつき『予め蓄えていた』って言ったよな…」

「うん、それがどうかしたの?」

変身を解いた光太郎はやや目つきの悪くなった義弟の問いに首を傾げて答える。

「なら、1度の充電にどれくらいの時間を要するかは確認しているんだよな?」

「あ」

固まった表情のままギリギリとぎこちなく首を動かして大門達の方へと振り返る光太郎。反応は様々であり、慎二の指摘に腕を組んで下を向いてしまう明に、光太郎の仕出かした事に呆れるアーチャーと苦笑いしてしまう土郎。

中々言葉を出せない製作陣に代わり、システムの製作にも一枚噛んでいたメディアが口を開く。光太郎に冷たい眼差しを向けながら。

「…坊やの言う充電時間だけど、一度の変身に必要な時間は少なくとも8時間は太陽光を収集する必要はあるわ。それと回数だけ…」

ロードセクターの動力も考慮して現段階では3回分のエネルギーを蓄えるのが限界。それに今使った分を充電する時間：今日中に出来るかしら？」

袖を捲り、腕時計を見ると正午過ぎ。日沈むまでの間に充電は不可能である時間となっていた。

「何無駄使いしてんだよお前はあああああああああああツ!!？」

「ちよ、慎二君それは洒落にならないってツ!!」

おそらくガレージに置いてあったのであろう。機関銃を手にとった慎二は考えなしにエネルギーを消費させた義兄に向けて躊躇なく標準を定めて引き金に指をかける。忌々しくも飛び散る弾丸を全て避ける光太郎を狙い続ける慎二をオロオロしながらも止めに入るガロニアを遠目に見ながら武は明へロードセクターに関して他の機能に関して尋ねていた。

「なるほど、では以前と同じく機体自体を弾丸のようにして体当たりすることも可能なのですね」

「ああ。だが、一つ気になる事がある」

「気になる事…？」

ロードセクターに目を向ける明はAI自身による設計図によって機体を完成させた。開発者である自分すら驚く程の機体スペックに、開発中にはアシスタントの士郎やアーチャー達と共に感服しながらも組み立てたものだ。

しかし、その作業工程の中で唯一、明達に詳細が明かされないまま組み込まれたシステムが存在した。

「謎のチップ…？」

「うむ。ロードセクターのスーパーコンピュータの中枢に組み込んだものなんだが、中身のデータがまるで不明なんだ。どうやらロードセクターが何時の間にか組み立てたプログラムなんだが解析は一切不可能。しかし、取り付けることを強く願っていたのでデータを収めたチップを設計図通りに組み立てたのだが、それが良かったものなのか…」

無論、ロードセクターを信用していない訳ではないのだが、そのよ
うなブラックボックスに近い機能を積んだままの機体を託す事は、マ
シンを取り扱う人物としては素直に納得できることではないのだろ
う。

「そ、それなら問題ありませんよ大門先生…」

息を切らせた光太郎が呼吸を整えながら武と明の間に現れる。遙
か後方を見ると同じく息を切らせた慎二が倒れている姿を見るあた
り、何とか逃げ切ったようだ。

「そのデータをロードセクター自身が作ったと言うのなら、俺達は
ロードセクターを信じるだけです。だって、仲間なんですから！」

なんとも単純な理由だろう。しかし、それでも納得し、信じてしま
えるから始末に負えない。

「…そうだな。機体を信じないで、どうしてマシンを扱えるか…君に
散々教えた事だったな」

「ええー！」

元氣よく返す光太郎の姿に、ガロニアに介抱されている慎二は肩を
竦める。乗り物相手にもはつきりと仲間と言い切るなんて、本当にこ

いつは…と苦笑する慎二にガロニアもふと笑うが自分に誰かの視線が向けられていることに気付く。

それは、どう声をかければいいのか迷っている、衛宮士郎のものだった。

「えつと…私は」

「ああ、慎二から事前に聞いている。本当に、そっくりなんだな…」

ガロニアは桜から読み取った記憶から彼の存在を思い出す。家族と同様、それ以上に彼女の記憶に強く刻まれた衛宮士郎という存在。恐らく、彼女に取って彼は…

「…ごめんなさい。私が我が儘なばかりに桜さんが…」

「いや、誰かが悪いって訳じゃないよ。こうして、桜を助け出そうとみんなが一丸となっているんだからさ」

桜の記憶の中で浮かべていた笑顔の通り、本当に優しい人だ。この少年に今のようない暗い顔をさせない為に、ガロニアは自分の決意をここに表明する。

「…ご安心下さい士郎様。桜さんはこの身に変えても必ずお救いしますわ！」

「え…?」

「怪魔界へと向かう手段がそろった今、後は桜さんを救うだけです。私には少なからず戦う力もありますし——」

「駄目だ」

ガロニアの声を遮った慎二は自力で何とか立ち上がり、その理由を打ち明ける。

「お前を連れては行けない」

「な、何故ですか!?!」

「考えても見ろ。僕らが乗り込もうとしているのはクライシスの本拠地だ。そんな所に皇帝の娘であるのお前が同行してるって周りに知り渡って見ろ。僕らは勿論、それ以上に敵の手に落ちている桜の危険は高まる一方だ」

「…っ!」

「私も間桐慎二と同意見だ」

慎二に同意したのは今まで黙って見守っていたアーチャーだ。ガロニアはどこか士郎と似ていると感じている事など余所に、アーチャーの言葉が続く。

「敵陣に乗り込む際に、わざわざ自分達を巻き込んでしまう爆弾を持って歩く必要はあるまい。君は、この世界で大人しくしているべきだろう」

「しかし…」

「本当に間桐桜を救いたいというのなら、何もするなど言っているのだ」

慎二以上に現実を突き付けられたガロニアの肩が震える。自分のせいで本来いるべき場所から遠のいた桜を命に代えても救い出した。自分に唯一出来る贖罪すら絶たれてしまった自分は、どうすればいいのか…そんな彼女の肩を優しく手を置く存在が現れた。

「なら、その間は私が彼女を守りましょう」

紫色の美しい髪を持ち主、メデューサはその場全員に伝わるように声を発した。

だが、それは逆に言えば自分は怪魔界へ行かないと宣言したようなものだと腑に落ちないアーチャーは目を細くして再度確認する。

「…本気なのか？」

「ええ。私はここに残ります」

きつぱりと言い切ったメデューサの顔はどこか優れない。一通り今回の件を凜から聞いていたアーチャーは恐らくは自分には桜を迎えに行く資格はないのだろうとでも考えているのではと推測する。それも大きく彼女の心を占めている事なのだろうが、メデューサは今、必死に誰かと目が合わないように顔を逸らし続けている事にアーチャーはその理由を見つけてしまう。

なるほど、これは重症だと。

「…わかった。怪魔界には俺と慎二君、武君で向かう。ガロニアさんを頼む、メデューサ」

「…わかりました」

光太郎に顔を向けることなく返事をしたメデューサの横では、唇を噛みしめるガロニアが、誰にも悟られぬよう何かを決意していた。

「へえ…まさか慎二がそんな事を言い出すなんてね」

「こちらのリスクを考えれば当然の事だろう。無論、巻き込まない為という本心を隠した上のことだろうがね」

「さすが、大昔に友達だった事はあるわね」

「凜、何度も言う事だが――」

「はいはい、分かっているわよ」

怪魔界への出発は翌朝にするという事でその場は解散となり、アーチャーは居候先である遠坂の屋敷に戻るとその日起きた出来事をマスターである遠坂凜へと報告。

空間を超える車と、それに追従できるバイクの話になった際には理解が追いつかない為に頭頂部から白い煙が上がっていたが、

『ふ、ふんッ！他の世界に行けるくらい何よッ！魔術協会には自由自在に並行世界に行けるお方がいるんだからねッ!?!』

という友達の友達自慢のような言い分をする凜の姿に笑いを堪えるのが必死のアーチャーであった。

そして遠くない未来。凜の知る以外に世界を自由に渡り歩く人物の存在を知って混乱が頂点に達してしまうのはまだまだ先の話である。

「それで、明日の朝には光太郎さん達は出発する訳ね」

「ああ。取りあえずメディアやメデューサは見送りに行くという話だ」

「ふーん〜…」

空返事と共に窓の外を見る凜の様子に何かを感じたアーチャーだったが、よもや管理人である彼女がそんなことを起こすまいと自分の考えを振り払おうとしたが、凜が次に口を開いた時には酷い頭痛に

苛まれる事になるのであった。

翌日

ライドロンが最高速度に達するまでに十分な距離が必要となる為に冬木市のはずれにある採石場へと移動した一同は自分達の乗り込むマシンの最終チェックに追われていた。

前日に可能な限り太陽光を収集したが結局は変身に必要なエネルギーはチャージできず、2回分のエネルギーを宿したままのロードセクター・ネオに搭乗した光太郎は既に仮面ライダーBLACKへと変身。ライドロンの後を追う際に、アタックシールドを展開しても凄まじい速度に人間の身体では耐えられない事と踏んでの判断だ。

「頼むぞ、ロードセクター…」

そしてライドロンに乗り込んだ慎二と武は自分達の装備を確認し、コンピューターに記されている怪魔界のどこかであろう目的地を再度表示させる。後はこのままライドロンに運転を任せるだけであったが…

「武…」

「ああ、仕方あるまい」

顔を前に向けたまま背後に意識を向ける2人は光太郎からの無線

に意識を切り替える。

『こちらの準備は大丈夫だ。ライドロンの方は？』

「全て良好。後は怪魔界までの特急に…いや、そうもいかないか」

軽口を閉ざしてしまった慎二は最悪だ、と言いながら無線を切ってしまう。

ライドロンの車線上に幾つもの魔法陣が出現し、見たことも無い怪人達が出現したからだ。

「くっそ、どこで嗅ぎつけやがった…」

昨日の自分達の会話を盗み聞きしたのか、それともこれから行う事をなんとなく邪魔しようとしているのか。どちらにしても訳の分からない言葉を放つ怪人が飛び上がってこちらに突撃してくるが、怪人の首を鎖が縛り上げ車線上から姿を消してしまう。

戦闘装束となったメデューサが首を押さえてもがく怪人を踏みつけながら光太郎に向けて叫ぶ。

「光太郎ッ！この場は私達が押さええます。今のうちに出発を…」

「メデューサッ！しかし——」

光太郎の真上へと迫っていたステンドグラスのような模様が身体に走る怪人を攻撃魔術で吹き飛ばしたメデューサは空中に浮遊し、次々と魔法陣を出現させて、光を飛ばしていく。

「グズグズしている時間なんてないわよッ！早くなさいッ！」

「ッ…！分かったッ!!」

アクセルグリップを何度も回した光太郎は自分も戦いたい気持ちを抑えて目的を優先させる。この場には姿を見せない、異世界の怪人を召喚する星騎士への怒りすらも抑えて…

運転席から次々と現れる怪人達と奮闘するメデューサとメディアの姿を眺めるしかない慎二は隣で小さくカチャリとした音…シートベルトを解除した武の方へ思わず振り返る。

「どうやら、この場を何とかせねばならないようだな」

「おい武、まさか」

「女性ばかり苦勞をかけてはなるまい。桜殿を任せたぞ」

「…ツチ、気楽に言いやがって」

「ハハハ、心配無用。慎二殿『達』ならば問題ないさ」

「わかったよ。死んだら承知しないぞ」

「心得た。では…」

両手に刀を手にした武は車線上に出現したミイラのような大群へと駆けて行く。自分達の活路を開く為に戦いに挑む彼等の気持ちに応える為には、行かなければならないだろう。

決意した慎二はゲームセンターでしか触れた事の無い車のハンドルを強く握り、ライドロンのコンピューターに向けて叫ぶ。

「行くぞツ！ライドロンツ!!」

『了解。目的地、怪魔界っ!』

後輪が大地を削った直後に風を切って疾走するライドロンに続き、ロードセクターも後を追う。

計器に目を向ければ既に時速500キロを突破している。だが留まることなく加速し、戦っている武達は既に遙か彼方だ。

時速800キロを突破しても、重力に押されないライドロンの車内に驚きながらも、慎二は前を向いたまま後部座席に隠れている人物達に声を掛ける。

「いつまでそうしてるんだよ、お前ら」

「…あら、気付いて何て意外ね慎二」

「あの、えつと…」

「はあ…」

声を聞く限り、隠れ潜んでいたのは遠坂凜とガロニアなのだろう。

武もライドロンを飛び出す寸前に誰かが潜んでいることは気付いていたが、今朝姿を見かけなかったガロニアはともかく冬木の管理人である凜までいるとは…

だが、管理人として、魔術師として以前に彼女は桜の実の姉だ。桜が拉致されたと説明した際には色々と罵倒を繰り返した後に冷静になつてゴメンと謝ってきたが、彼女がこのまま大人しくしている訳はないとどこかで思っていたが…

後でたつぷりとアーチャーに絞られるだろうがそんな事は後の話。

「付いて来たからには覚悟しとけよ」

「誰に言ってると思ってるの？」

「覚悟なんて、最初から出来ていますわッ！」

「ああそうかい。光太郎、聞いた通りだッ！」

無線に向けて話すと、恐らくは困った顔を浮かべているであろう光太郎の声が響く。

『仕方ないね…行こう、みんなで桜ちゃんを助けにッ!!』

光太郎の叫びに全員が頷いた直後、ついに最高速度に達したライドロンのデイメンション・ドライブシステムが作動し、異世界の扉を突破すると、扉が閉じ切る寸前にロードセクター・ネオが飛び込んだ。

2台のマシンが消えた後には、地表に走る3本の線から煙がゆらゆらと昇っているだけだった。

第42話

クライシス帝国によって誘拐された間桐桜の居場所が怪魔界と判明し、救出する為に準備を進めていく間桐光太郎はライドロンに搭載されたデイメンション・ダイブ・システムを使用し、怪魔界へと転移する計画を立てる。

だが怪魔界では太陽の光が差すことがなくRXへの変身は不可能であるという大きなハンデに不安を覚える慎二だったが、そこに改修され、新たな力を秘めたロードセクターが帰還。

その名はロードセクター・ネオ。

ライドロンと同等の速度に至り、転移に追走できるだけでなく、太陽光がなくなるとも光太郎をRXへ変身させるソーラーチャージシステムを備えられたことで光太郎の戦闘時間を大幅に広げる事が可能となった。

ロードセクターの強化改造に立ち会った衛宮士郎にガロニアは必ず桜を連れ戻すと宣言するが、同じく改造に携わっていたアーチャーと慎二に止められてしまう。

クライシス皇帝の娘であるガロニアが光太郎達と同行した場合、怪魔界での活動に支障が出る。それ以上に桜へ危険が及ぶという理由を聞き、何も言えない彼女を地球に残って守ると名乗りでたのは未だ光太郎との間に不和を残すメデューサだった。

翌日の明朝、出発の準備を整えた光太郎達の前に星騎士ジュピトルスによって召喚された怪人軍団が出現。ライドロンに搭乗していた赤上武は怪人達と戦闘を始めたメデューサ、メディアの助太刀する為に残ると飛び出してしまう。

戦闘が激化する中、ライドロンとロードセクターを発進させた慎二と光太郎は仲間達の無事を信じて怪魔界へと突入する。

出発する以前にライドロンへと隠れていたガロニアと遠坂凜を連れて：

「おやおや…」

クライス要塞の一室にあるモニターを見て、ジュピトルスは拍子抜けとばかりに呟いた。諜報部にあった情報を盗み聞きしたボスガンの進言通り、間桐光太郎達が何かを企て、いざというところを一網打尽にする作戦だったが、どうやら敵の動きの方が早かったようだ。

光太郎達が乗った機会共が揃ってあの場から消えたのは、恐らくどこかへ転移する実験だったのだろう。行き先は気になるが、今はどうでもいい。新たに間桐光太郎を苦しめる方法を思いついたのだから。

「やはり紛い物ではなく、本物を殺せなくてはねえ…」

三日月の如く口を吊り上げて笑うジュピトルスは光太郎を送り出すために、現れた異界の怪人と戦い続ける赤上 武、メデューサ、メデアへと映像を固定する。

間桐桜は新たなガロニア姫に仕立て上げるが為にクローンを作る手間があったが今度はそうはいかない。いや、『加減』する理由がないのだ。一度ならず二度も自分の立てた策を破った光太郎には相応の罰を与えなければなるまい。

身勝手な都合に浸るジュピトルスは尚も抵抗を続けている武達をどのような方法で処刑し、どの部位を光太郎の前で晒してやろうかと悩む中、血相を変えて部屋に飛び込んできたボスガンによって中断されてしまう。

「た、大変ですぞジュピトルス殿ツ！」

「ボスガン、私は今この画面に映る者達の身体を使いどのようなオブジェを築き上げるかイメージを固めているのです。静粛に」

「そんな事を言っている場合ではない！RXが、あの間桐光太郎が怪魔界へと現れたのですぞ！」

「なんとー！」

ボスガンの報告を聞き、ジュピトルスの出目金のような目が驚きに染まるが数刻前に姿を消した光太郎達の行動を見て逆に合点がいく。成程と指で顎をなぞるジュピトルスの表情は再び凍りつくような微笑みを浮かべていた。

「つまり…今度は邪魔が入ることなく間桐光太郎の仲間を殺せるということですね？」

「は？」

「これは絶好の機会です！さあ、次はどの世界から怪人を呼びましようかねえ…！」

手に取った悲鳴を上げるような人の顔が表紙となつている本を捲るジュピトルスの目は玩具を与えられたばかりの子供のように爛々と輝いている。どのような悲痛の声か聴けるか見物ですと呟くその姿は、怪魔界でかつてその名を轟かせた戦士の面影はまるで見られない。

ましてや、自分の生まれた世界である怪魔界にクライシス帝国に取って最大の敵が乗り込んだと言うのにまるで興味を示さない星騎士を見て、ボスガンは自分はとんでもない人物を取り入れようとして

いるのではないのかと、余りにも遅すぎる後悔をする羽目になってしまった。

砂塵と岩のみが自己主張している世界。

始めて異世界へと踏み込んだ遠坂凜の感想はそれだけだった。

本来なら自分の住む世界とは別の場所に訪れた事に対し彼女の相棒が面白がる反応を示すのだが、彼女にはそんな余裕はない。今回の目的：実妹である間桐桜の救出が唯一の目的である凜に取っては場所がどこであろうが既に関係ない。妹を助ける。凜にはそれだけだ。

「…ってなんでいきなりこんな強風に晒されなきゃいけないのよおツ!?」

「気取って岩の上に立って遠い目してなきゃもっと早く気づけたらうけどね。ほらさっさとこれ被つとけ」

雰囲気をぶち壊した突然の突風に不満をぶつけながら髪とスカートを手で押さえる凜へ大きな布を手渡し、全身を包むように促した慎二はライドロンの中で俯いているガロニアへと目を向けた。

怪魔界へと到着後、改めて付いてきた理由はやはり桜を危険な目に

合わせてしまった罪悪感からだった。慎二とアーチャーに言われてもなお桜を助けたいと願うガロニアは寝静まった時間を見計らい、ライドロンへと頼み込んだと言う。

「お願いします。ワタクシを、連れて行って下さいませ！」

『：ソレハ出来ナイ。ワタクシモ慎二ト同ジ意見ダ。ココデ待ツテイテクレ』

「それは十分に分かっていますわ。慎二様とアーチャー様の言葉はきつと正しい。そして間違っているのはワタクシという事も」

『ナラバ…』

「ですが、それでも助けたい。桜さんを本来いるべき場所へと戻すための手伝いがしたいのです！」

ライドロンの前で膝を付き、祈るように手を握る少女は目には涙が浮かんでいた。身勝手な願いであることも十分に理解しているし、自分を乗せるという事はライドロンの主である光太郎達の意向に反するということも。

それでも彼女は懇願し続ける。自分の我が儘を発端に起きてしまった事件を収める為に。

「けど、貴女一人が背負う必要もないわよ」

「え…？」

ドサリとボストンバックを床に下ろした少女はガロニアと視線を合わせるように膝を付くと、彼女の目元をそっと拭う。突然現れた存在にガロニアは名を呼びながら何故、この場に現れたのかを尋ねた。

「凜様…なぜ？」

「貴女と一緒によ」

ガロニアの頭を優しく撫でた凜はライドロンへと歩み寄り、車体にゆっくりと触れる。

「私からもお願い。桜を…私に妹を助けさせて」

「凜様…」

「生まれたばかりの貴方が、光太郎さんやロードセクターを助けに行ったように、私も力になりたいの」

『……………』

祈るように囁きかけた凜の願いを受け止めたか、ライドロンはしばし沈黙続けた後、ドアを解放。人間であつたのなら、深いため息をついていただろう言葉を続けた。

『…光太郎達二ハ後デ私カラ説明シヨウ』

「ライドロン様…！」

感極まり口元を抑えるガロニアの方へと顔を向けた凜は優しく微笑んだ。そして、彼女達に味方してくれたのは、ライドロンだけでは無いらしい。

『ライドロンダケデナク、私モ一緒ニ怒ラレルトシヨウ』

『ならば、この場を見過ごそうとしている私も同罪でしょう』

事の一部始終を見守っていたアクロバッターとロードセクター・ネオは揃って凜とガロニアの前まで移動すると、そんな電子音を響かせ

る。彼等は本当に機械なのだろうかと疑いたくなる凜ではあるが、この場の空気を壊すような発言をするほど間抜けではない。

いや、むしろ感謝しなければならぬ。主の意に背いてまで、自分達の希望を叶えてくれたのだから。

『桜の為ですから。間桐家ではない貴女の為ではありません』

『ロードセクター、君ハ修理中ニ何ノデータヲダウンロードシタノダ？』

叫んで問いただしたい気持ちを必死に抑え、凜はガロニアと共にライドロンの後部スペースに隠れ、夜を明かすことになるのであった。

「はあん、ロードセクターまた随分と勉強したんだな」

「ちよつと、話を聞いという気になるのはそこなの？」

風がより強さを増した為ライドロンの操縦席へと戻った慎二は凜からの説明を受けてそんな感想を漏らした。ジト目で睨む同級生の視線などお構いなく、後部座席で眠っているガロニアへと目を向ける。

怪魔界へと到着するまでの間に小さい欠伸を繰り返していたガロニアは目的地へ到着後、直に眠りについてしまった。昨晩からライドロンに凜と乗り込んだまではいいものの、緊張の余り眠れなかったのだろう。静かな寝息を立てる少女の顔は、やはり自分の義妹とよく似ている。

正面を向いて、先ほどよりは風の勢いが下がったかと砂漠を見つめ

る慎二はふと気になったことを凜に尋ねた。冬木の管理人を強く自負している遠坂の人間が、立場に構わず別世界にこれたものだなと：

「それ、聞いちゃうの…？」

先程までであった凜々しい顔はどこへやら。ゲンナリと周囲に負のオーラを纏った凜だが、どうやらライドロンの前に辿りつく前に相手であるアーチャーとひと悶着あったらしい。

事の詳細を話すと時間が…と言っていたので簡略に経緯の説明を聞くと、こういうことらしい…

自分も怪魔界へと向かうと言い出した凜にアーチャーは猛反対。危険過ぎる、君はこの街の管理人としての自覚はあるのか云々に反論すること数時間。互いに譲らぬまま平行線のまま收拾がつかず夜になった頃だ。

もう桜を見捨てたくないという凜の主張にアーチャーは深く、それもワザとらしく溜息を付くと振り返り、好きにしたままとキッチンに向かつてしまった。

折れた振りをしてくれたであろうアーチャーの背中を目で追うが、今以上の言葉をかけてくれないだろうと準備に取り掛かる為に自室へ向かおうとした凜の耳に、背を向けたままの弓兵の声が届く。

『約束してくれ。必ず生きてここに戻るとな』

『その代わり、君の帰る場所は私が必ず守ろう』

そしてライドロン達マシンが眠っている倉庫への侵入口を聞いた凛は荷物を持ってガロニアと合流したのだった。

「はい御馳走様」

「なんでそんな感想が出てくるのよッ!？」

だって途中から顔を赤らめて話すんだもんこの乙女。こんな所に来てまで惚気はやめて下さい、とは死んでも口には出さない。言った瞬間に彼女はきつと満面な笑みを浮かべてあの手この手で慎二への報復に躍起になるだろうと踏んだ慎二は強引に話題をすり替えた。

「そっぴや光太郎の戻り遅いな？」

「ああ、そう言えば行っておきたい場所があるって聞いたけど、怪魔界に知り合いでもいるの？」

「…ま、同じようなも——遠坂」

「ええ、見えたわ」

すり替え成功と内心でガッツポーズを取ろうとした慎二だったがその話すら遮って予め準備だけは済ませておいた武器を手に取る。

とうに風は止んでおり、それを見計らったかのように人影が次々と姿を現し、自分達の元へ近づいて来る。

慎二は急ぎ無線機のスイッチへ手を伸ばした。

「掘り起こすのも無理、か」

光太郎はライドロンから数百メートル離れた岩石地帯へと足を運んでいた。そこは、過去に一度怪魔界へ迷い込んでしまった際に自分とメディアを匿ってくれたクライシス人の科学者が隠れ家として利用していた場所だった。

（ワールド博士。貴方が俺に託してくれた武君は元気です。そしてライドロンは、無事完成しました。俺達の心強い仲間です）

怪魔獣人ガイナギスカンとの戦いで勝利したのもつかの間。光太郎の存在を聞き付けて現れたクライシスの大軍から自分達を逃がす為に地球への転送装置を起動させ、後を追わせない為に装置を破壊したワールドは隠れ家と運命を共にした。

爆発の中で、光太郎達の無事を信じて。

（…博士の言葉は、決して忘れません。ですが、今は家族を取り戻す事を優先させることを許してください）

光太郎は中でも新しく爆発後の目立つ大岩…その地下にワールドの隠れ家が合ったであろう場所の前でしゃがみ、両手を合わせると今は地球と、そして怪魔界を救う以前に私情を優先させてしまっている

ことを詫びた。

ワールドを始めとした多くのクライシス人がかつて愛した怪魔界を取り戻すことも、光太郎の戦いの一つなのだ。

今だけは自分の家族の為に動いてしまっている光太郎に、ワールドが別れ際に言った言葉が突如として浮き上がった。

『星総べる王、世界の命運を止める』

「あれは、どういう意味だったんだ…？」

立ち上がった光太郎は、ワールドの言った言葉に妙な違和感を覚えた。いや、今まで何故気にもしなかった言葉が今ではとてつもなく不安にさせるのだろうかと必死に意味を探り始めている。

「星総べる王…単純に、今俺がいる怪魔界を統率しているクライシスの親玉だと思ったけど…何なんだこの違和感は？」

顎に手を当て、ワールドの言う星に残る言い伝えにどうしてここまで拘ってしまうのか。その起因は、ここ数日で光太郎に接触を図った新たな敵の出現だった。

火星のアルス

木星のジュピトルス

皆、その名に星の名を称した戦士だ。

まるで結びつくかのように姿を現した敵の存在が、光太郎の疑問をさらに深刻化させる。

「もしかして、星総べるというのは…」

だが光太郎の推測は付近に止めてあったロードセクターの無線によつてかき消されてしまった。

「慎二君、何かあった？」

『悪いけど急いで戻ってもらえる？よく分からない連中が迫ってきてるんだよ』

「分かった、直に戻る！」

ヘルメットを装着した光太郎は一度隠れ家のあった場所へと目を向けると、すぐに振り向き、ロードセクターを疾走させた。

第43話

間桐光太郎達が怪魔界に現れたと知ったボスガンは急ぎジュピトルスへと伝えるが、当人はこれで邪魔されることなく、光太郎を苦しめる事が出来ると禍々しい笑みを浮かべ、次々と異世界の怪人を召喚。その姿は、かつてクライシス帝国を守護したといわれる星騎士とかけ離れた存在であると今になって思い知るボスガンであった。

そして怪魔界へと到着した間桐光太郎、間桐慎二、遠坂凜、そしてガロニア。

光太郎の偵察中、慎二は凜からガロニアがライドロンへと頭を下げ、桜を助ける為に乗せて貰うよう頼んでいたと聞かされる。

一方、光太郎はライドロンの設計図、そして重症を負っていた武を自分達に託したクライシス人の協力者ワールドが隠れ家として使われていた土地を訪れていた。

自分とメディアを地球へと戻してくれた恩人へと報告した光太郎は、ワールドが最後に自分へ伝えた言葉をふと思い出す。

『星総べる王、世界の命運を止める』

今まで気にも留めなかった言葉が、新たに現れた星騎士と呼ばれた敵の存在と共に大きくなっていった光太郎はその意味を探ろうとするが、慎二から救援の連絡を受け、ロードセクターを走らせるのであった。

ロードセクター・ネオのハンドルを握る光太郎はライドロンの元へ走らせながらも、ロードセクターのパワーを身を持って知る事となった。

(前日に碌に試運転してなかったし、怪魔界へのワープで気が付かなかったけど、すごいパワーだ)

光太郎の全身に伝わる新型エンジンの唸りと疾走による振動。普通の人間ならば決して耐えられないパワーは正に暴れ馬だ。しかもまだ一度もフルスピードに達していないにも関わらずライドロンのワープスピードに追従できる速度と耐久性を備えているのだ。もし、フルスピードを出した時は世界がどう映るのか…

と、バイク好きの悪い癖が出してしまった光太郎は頭を振るい、今は慎二達の所へ戻ることが先決だと切り替える。

慎二の通信から、クライシス帝国の手の者が迫っている可能性が高い。ならばすぐに戦えるように変身を済ませた方がいいだろうと光太郎は腹部にベルトを出現させ、ゆっくりと息を吸い、ロードセクターを加速させつつ自らの姿を変える言葉を叫ぼうとした。

「変し——」

『お待ちくださいマスター』

「ん…？どうしたんだ、ロードセクター」

突然待ったの電子音声を発し、光太郎の変身を中断させたロードセクターのAIへと尋ねる。アクロバッターやライドロンと比べ、言葉が流暢になっているロードセクターは光太郎の想像を絶する意見を述べるのであった。

『なぜ、構えから始めないのですか？』

「え？」

『マスターは変身する前に、必ず流れるような動きで構えを取り、変身してました』

「いや、今は時間ないし……」

『これから戦闘となる可能性があるというのに、そんな心構えでどうするのです』

「いや、あの……」

『見せて下さい。マスターの、変身を』

「……………」

本当に、何があつたんだろう……

謎の拘りを訴えるロードセクターの考えが読み取れない光太郎は受理するまでの間に成長していた事に驚き以上に嬉しさ——敵であるガンガティンに破壊された時、初めて言葉を発した事もあり——もあつたが、まさかアクロバッターやライドロンを上回る程の話好きになつていたとは夢にも思わなかった。

慎二達とライドロンから離れて移動中も今、主である光太郎へ立て続けに質問を投げかけており、好む音楽のジャンルは何なのか、どのようなラジオを聞いているのか。そしてメデューサと気まづい雰囲気にあるようだが何があつたのかと、敢えて全員が聞こうともしない質問が出た時には閉口するしかなかった光太郎。

貪欲とも呼べるまでに様々な事を知ろうとする姿勢に関心するが、

流石にこのような時まで……それも飽きる程見ているはずの自分の変身を取って付けたような理由で見たいと言いつつロードセクターに釘を打っておかなければならないと考えるが、時間も惜しい。

光太郎は握っていたハンドログリップを手放し、左手を腰に添え、右腕を前方に突き出した構えを取ると、両腕を大きく右側へ回し、右頬の前へ両拳を移動させる。

ギリギリと拳から軋む音が響く程に強く握られた力を解放するよう右腕を左下へ振り下ろし、再度拳を握って素早く左脇へと添える。

入れ替わるように左腕を右上へと突出し、扇を描くように右から左へ旋回し――

「変ッ――!…」

水平となった左腕を、右腕と共に右上へと突き出した。

「――身ッ!!」

光太郎の腹部から眩い赤い光と共にキングストーンを宿したベルト『エナジーリアクター』が出現。

エナジーリアクターから迸る光は光太郎の細胞組織を書き換え、バツタ怪人へと変貌させる。

だがそれも一瞬。

エナジーリアクターから流れ続ける光はバツタ怪人を強化皮膚『リラスフォース』で包み込み、光太郎を黒い戦士へと変身させた。

左胸に走るエンブレム。触角を思わせる一對のアンテナ。真紅の複眼。そして黒いボデー――

『ブラボーです、マスター』

「……………そうか」

どうやら名乗りまでは不要だったらしく、若干消化不良である仮面ライダーBLACK…変身した光太郎は短く答えてると項垂れてため息を付いた。その姿は、歴戦の戦士とは程遠い姿だったが、ロードセクターが続けて述べた言葉に仮面の下で目を見開いてしまう。

『おかげでマスターが変身時に発生するキングストーンのエネルギー値や消費量、回復に至るまでの時間を計測することができました。感謝致します』

「ロードセクター。まさか、その為に…」

『私の務めはアクロバッター、ライドロンと共にマスターを守り、戦う事。その為にはマスターに関しての情報が必要になります。ですが、データの収集を目的にしていたとはいえ、マスターに不快な思いを抱かせてしまった事は事実。お詫びいたします』

「いや、そんな…謝ることなんて」

生まれ変わったロードセクターにとっての疑問…さらに言えば彼に芽生えた好奇心を満たすための言動だと考えてしまった光太郎は自分を恥じた。そうだ、彼はライドロンが生まれる間際に自らの意思で動き、自分を助けてくれたのではないか。

そして今も、自分の助けになるものと考えての先導したのだ。

何か裏があるわけなんて…

『では次回は地表での変身をカメラ3台による別角度からの撮影することにご協力下さい。同じ変身でもアングルによつてまるで臨場感が異なり——』

「ちよつと黙ろうかロードセクター」

ロードセクターはまた一つ学習する。

行き過ぎた好奇心は時に温厚な人物を怒りに駆り立ててしまうという事を。

光太郎の短い一言に無言の肯定を示す頃には、目的地が目前まで迫っていた。

結論を言えば、光太郎の抱いた危惧は徒労に終わっていた。

ライドロンへと接近し、そして今も好奇の目で眺め、触れている人物達は敵ではなかったのだ。

「慎二君、これは…?」

「ん…?ああ、悪いね。大丈夫だったって無線で送つてなかった」

「いや、大丈夫。まさか、この人達は…」

「クライシス人。それも、ワールドつて人の知り合い見たいだね」

距離を置いてライドロンに群がる人々を眺めていた慎二を発見した光太郎は変身を解除し、協力者であったワールドと同じく白い民族衣装に蟲のような触角を持つ人々へと目を向ける。

年齢や性別は様々であり、衣服の所々に汚れが目立っている。背負った大荷物や手にした鈍く光る銃火器からするにワールドと志を同じくし、所々拠点を変えているレジスタンスのようだ。

ワールドが託してくれたライドロンは怪魔界では設計で止まってしまうていたのか、実物が実在すると知った人々：特に子供たちは触れたり、話しかけたりと実に楽しそうである。

突如現れた異世界からの訪問者である慎二達へ奇異の目を向けるよりもライドロンへの興味の方が勝っていたらしく、変に質問攻めに遭うよりはマシだったと胸を撫で下ろす慎二の説明にクスリと笑うと、初老の男性が光太郎へと向かってくる。

「騒がしくして申し訳ない。貴方達は：ワールド博士からライドロンの設計図を？」

「ええ。貴方は、ワールドさんをご存じなんですか？」

「私は彼とは別の地方でクライシス帝国への反撃を伺っていたのですが、以前聞いた事があるのです。もし、この設計図を託せる相手が現れるとしたら、希望となる存在なのだと」

「希望…」

「事実、そうでした。貴方という存在が異世界に攻め入ったクライシス帝国と戦い続けてくれるおかげで、未来を見いだせなかった我々に火を灯してくれた：感謝しています」

頭を下げるレジスタンスのリーダーらしき男性に光太郎は首を左右に振った。

「：俺は、ただ戦っていたに過ぎません。たとえ俺の行動がきっかけになっただけとしても、実際に立ち上がろうとしたのは、貴方達自身の意思なんです」

「私達の…」

「ですから、誇ってください。自分達でこの世界を変えようとしたことを」

顔を上げた男性に微笑みかけた光太郎はゆつくりと手を差し伸べる。手は直後に握り返され、2人が頷いて強く握手する光景に、慎二は相変わらず誰とでも打ち解けるのが早いと感想を抱きながら岩陰からライドロンの様子を伺っている赤い少女へ顔を向けると…

「……………額に…触角が…」

震える声で呟き、それ以上の存在を多く見てきたはずなのにカルチャーショックを受けている魔術師、遠坂凜。さらにその後ではサングラスにマスク、ニット帽という疑って下さいと言わんばかりの変装で身を潜めているガロニアがいた。

彼女の場合は顔が知れ渡っているかは不明であるが、正体を隠すにこしたことはないだろう。

だがガロニアに取っては初めて目にするはずの人々…同じ世界の住人だ。そもそもパーソナルスペースが狭く、誰とでも話したくて仕方がないのだからそれが踏みとどまらせているのは、自分と彼等との、現在の関係。

支配者の娘と、それに抗う人々。

もしガロニアの立場を知った場合、今は光太郎と談笑している男が筆頭に、今いるレジスタンス全員が彼女の敵となってしまう可能性が高い。

…ここは大人しく凜と共に静観してもらおう方が正解だろう。

などと考えを巡らせている間に、どうやら光太郎の方で話を進めていたらしい。

「では、光太郎さん達は妹さんを助ける為に怪魔界へ？」

「そうなんです。なにか、知っていることがあれば…」

光太郎の質問にううむ…と顎に手を当てて考え込む男性に、ライドロンいじりに夢中だった少年の1人が挙手し、遠く離れた位置からでも届くほどの大声を放った。

「そういうえば一昨日くらいに例の山岳に向かっていく変な連中見たよ〜」

「あ、私も〜」

続けて手を上げた少女はライドロンの屋根に上がりアンテナを弄るを止め、滑り台の要領でフロントを滑って着地し、先ほどの少年と並ぶ。2人で偵察していた際に見かけた奇妙な集団が目についていたようだ。藁にも縋る思いで光太郎は少年たちに駆け寄ると膝をつき、視線を合わせると少年たちを警戒させないよう、ゆっくりと尋ねるのであった。

「詳しく、教えてくれるかい？」

レジスタンス達と別れた光太郎達は少年たちから聞いた座標を元

に、山岳地帯へと到着。

だがその地帯一体にも動植物の姿はなく、地面を覆っているのが砂から砂利へと変化しただけであった。

少年たちによれば、人1人が入るであろうカプセルを雑兵チャップ達为数人がかりで移送し、それに黒い衣服の女と、赤いロボットのよな怪人が同伴していたらしい。

黒い女は間違いなくマリバロンだと踏んだ光太郎は慎二達を連れて直ぐに出発。山岳の麓に洞窟を発見し、そこにライドロンとロードセクターを待機させ、最低限の荷物を持って行動を開始した。

先導する光太郎に続き、凜、ガロニア、殿が慎二となり周囲に注意を払いながら進んでいく一同。既にここは…いや、怪魔界に乗り込んだ時点で敵の勢力圏の中だ。いつ発見されてもおかしくはない中での移動に細心の注意を払って歩むため、自然と全員が無口になる中、凜は背後でずっと下を向いて歩く少女へと呼びかける。

「…ねえ、いつまでつけているの。それ」

「え…？あつ」

凜の指摘を受け、自分の顔を両手で触れたガロニアは、未だ自分がマスクとサングラスを着けていたままだとようやく気付く。慌ててマスクを外したガロニアは苦笑しながらポーチへとねじ込むと捲し立てるように口を開いた。

「そういえばもうあの方々とはお別れしたのでしたね。残念でしたわ、あのようにたくさんの方々から直接怪魔界の事をお話を聞けないなんて…あツ!？」

話続けるガロニアの方へと振り返ったと同時に未だ付けたままのサングラスを凜に強引に外され、思わず声を漏らした少女の目元は、

うつすらとだが涙ぐんでいた。

「えっと、あの…これは…」

「……………」

どうにか言い訳を思い浮かべようとするガロニアだが、それよりも早く凜の手がガロニアの顔に向かって伸びていく。思わず目を瞑ってしまおうガロニアだが、凜の指先が優しく、彼女の目元を拭っていく感触が伝わってきた。

「凜、様…？」

「あんまり溜め込むんじゃないわよ。貴方に取っては、少し辛かったんじゃないの？」

「っ…!？」

気付かれていた。だからこそ、気付かれないように目元と口を隠していたのに…

レジスタンスと出会った時。ガロニアは、ただ自分の身分を知られない為に隠れていたただけではなかった。

彼等の現状こそ、今の怪魔界の実態なのだと。それは、クライシス帝国の独裁によるものだと、嫌でも思い知らされるからだだった。

ごく最近に自分という存在を認識出来たとはいえ、自分の父が彼等を戦う道を選ばせてしまった事には、変わりはない。それも年端もいかないうちに子供たちに武器を握らせるような現実には、ガロニアに直視することが出来なかった。

ガロニアが直接手を下した訳ではない。だが、それでも納得などしてくれないだろう。この世界を死に至らしめた元凶の娘である自分を…

そして、それ以上に悲しかった。

人との繋がり、互いに思いやる関係に憧れるガロニアに取って、自分達の世界で完全に敵対する関係にある、帝国とレジスタンスに。

そんな自分の嫌な感情を、どうして目の前の女性は読み取ってくれたんだろう。

彼女にとっても、自分是最愛の妹が浚われてしまう原因であるのに…

ガロニアの抱いた考えも読み取ったのだろうか。凜は彼女の身体を引き寄せ、優しく包み込む。

「全く、お嬢様ってのはなんでこんなのかかりじゃないのかしら…」

「凜…様？」

「あのね、ここまで来てもうアンタの責任だつて言う輩なんて誰一人いないの。もう目的はただ一つ。桜を連れて帰って、実行犯に私達の妹に手を出した事を死ぬほど後悔させるの。いい？」

…後半は満面の笑みで言う事ではないなと思いつながらも口にはせず、2人の抱擁を見守る光太郎と慎二は立ち止まって周囲を警戒する。

このまま急ごうというのも、野暮というものだろう。

だが、光太郎達にはそんな時間も許されることは無かった。

「キャアツ!？」

「何事ッ!？」

突如として光太郎達の足元に火花が走る。悲鳴を上げるガロニアの頭を両手で庇い、攻撃が飛んできたであろう方へと顔を向けると、そこには銃火器を構えたチャップ部隊と、スカル魔が崖からこちらを見下ろす姿があった。

「貴様達……ここから先には行かせんぞっ!!」

光太郎達が目指すはるか先…

巨大な滝の付近に立つ白い宮殿の奥に設置されている玉座。

そこに腰かける存在は純白のドレスに煌めくアクセサリーを身を纏っているが、その装飾全てを飲み込んでしまう闇を宿しているかのような深い黒々とした瞳を持つ女性。年齢は恐らく20前後だろう。

「…なにやら、外が騒がしいな」

冷たい声を放ち、ゆっくりと立ち上がる女性を制するかのようになり、背後に控えていたマリバロンは女性の肩に手を乗せ、再び玉座へと座らせた。

「どうやら曲者がこの付近に現れたようです。既に討伐へ向かわせておりますので、何一つ心配はすることはありません」

「ガロニア様」

第44話

(まさか、怪魔界に來ただけでなく、ここまで嗅ぎ付けるなんて…)

マリバロンは偵察中のチャップからの報告を聞き、敵である間桐光太郎のあまりにも早すぎる行動に苛立ち、ギリ…と爪を噛む。

光太郎が怪魔界へ現れたと聞いた際には焦ったが、地球と同等の広さを持つ中で彼の妹のいる場所を見つけ出すなど出来るはずがないと踏んでいたのは間違いだった。あの男は、こちらの予想を上回る手段と力を持って我らの地球侵略を妨害してきたのではないか…だが、今回はそうはいかない。

なぜならば、もう手遅れなのだから。

「マリバロン」

「ハッ！お呼びでしょうか、ガロニア様」

自分の名を呼んだ新たなクライシス帝国の姫となった存在の前で跪くマリバロンはゆっくりと玉座へ座す女性を見上げる。

紫色に煌めく髪を持ち、吸い込まれしまいそうな深く黒い瞳を持つ女性：マリバロンにガロニアと呼ばれた女性こそ、今し方現れた間桐光太郎の妹、桜の成れの果て。

気に喰わないが、星騎士ジュピトルスの提案が成功し、その身をクライシス人へと化す『奇跡の泉』の効力と暗示で彼女は自分を完全にクライシス皇帝の娘、ガロニアと思い込ませる事に成功していた。

それまでの過程で、彼女がガロニアになるには相応しすぎる存在であると、マリバロンは思い知っていたのであった。

桜がガロニアと違う人物と判明し、ジュピトルスによって新たなガロニアへと仕立てあげる計画を立ち上げた直後のことだ。

桜の身を『奇跡の泉』の水へと浸からせる前に、彼女の心を完全にガロニアへと書き換える為にマリバロンは催眠術を施していたが…

「く…うう…」

鎖で壁に拘束された桜はうめき声を上げながらも、マリバロンの掌から放たれる紫色の光波：精神を操作する催眠術に抗い続けていた。時間が経つに連れて強くなる虚脱感に負けじと手を強く握り、唇を噛みしめながら自分を浸食しようとするマリバロンの催眠術へ拮抗させてる為に魔力の燃焼を続ける桜の姿は、術を続けるマリバロンと見守っていたゲドリアンを驚愕させるには十分過ぎるものだった。

何よりも2人が畏怖するのは、桜の瞳に宿る決して諦めようとしな
い強い意志。

今、桜が拘束されている場所は地球ではなく宇宙に浮かぶクライス
要塞。

例え間桐光太郎が場所を察したとしても乗り込むことはほぼ不可
能に近い。

救いはないこの状況の中で、なぜ少女は諦めることなく、抵抗を続
けているのか…

同時に納得し、思い知ってしまう。

当初は逃げ出したガロニア姫に代わる器として利用しようとした少女はただの人間ではなく、『間桐光太郎の妹』であると。

無論、光太郎のように常識を逸脱している能力や魔力を有している訳ではないが、意思の強さは本物だ。

当初は赤子の手を捻るように容易いと考えていた桜への暗示は難航を示し、ついには術による疲労でマリバロンが翳していた手を下ろしてしまおう

「ハアツ…ハアツ…ええい、なんとしぶといッ!!」

汗を拭い、桜を睨みつけるマリバロンは自分と同様に疲労し、魔力を消費しているのに関わらずまるで疲弊するどころか、ますます眼力を強める桜に戦慄してしまう。

なぜ、諦めない…？

疑問を抱くマリバロンは突如、背筋が凍るような寒気を感じたと共に、悍ましい声が放たれた背後へと急ぎ振り向いた。

「苦戦している様子ですなあ」

「ジュピトルス…殿」

蛙のようにギョロリとした両目は呼びかけたマリバロンではなく、桜へと向けられている。怪魔妖族屈指の実力を誇るマリバロンの催眠術を退けたガロニアとなる少女へ興味を抱き、この場へと現れた：と予測するゲドリアンであったが、ジャーク將軍の言った言葉がどうしても忘れられずにいた。

ば精神と肉体への負担は最小限に抑えられるはずだったが、今ジュピトルスがやろうとする事は彼女からその精神をはぎ取ろうとすることに他ならない。

「そんなもの後から『植え付ければ』よいのではないですか！『抜け殻』の方がガロニア様としての人格を植え付ける方が遥かに効率的でしようツッ!!」

目を見開き、興奮するジュピトルスの意見は最もだ。確かに時間をかけて催眠術により桜をガロニアと思込ませるよりも、最初からガロニアである人物を造り上げてしまえば手間は掛からない。だが、あくまで結果の話。

造り上げた人格：ガロニアであればこうするであろう、こう答えるであろうというデータを人間の脳にインプットすれば、確かに桜だった少女は自分をガロニアと名乗るだろう。だが、その為にジュピトルスが起こしている行動は効率の良い手段ではなく、自らの愉しみのためだ。

「さあ、絶望なさい、壊れなさい。貴女の苦痛を私に見せるのですよおツ!!」

ジュピトルスが桜の額を掴み、施していたのはマリバロンと同じ催眠術だ。だが、桜へ自分はクライシス皇帝の娘であるガロニア姫と思込ませる内容とは全くの別物。

桜の心をへし折る為に、失墜させる為に次々と残酷な映像を焼き付けていた。

勿論、現実ではなく幻想に過ぎないが、桜の脳へ直接叩き付けられる催眠術は、より現実に近いものであった。

手始めに産みの親である父と母が殺された。

自分を庇う姉の首がポトリと音を立て、目の前に落ちてきた。

自分を守る為に、下の義兄が蜂の巣となった。

聖杯戦争を生き残った仲間が、学校の先輩、後輩、教師が、首だけとなって桜の周りを囲っていく。

膝を付き、頭を抱えて目の前で起きた事を必死に否定しようとする桜だが、耳に入る断末魔の声も、身体に付着した赤黒い液体の暖かさも『本物』だ。

「あ、あ、ああ、あ…」

まともに呼吸すら出来なくなった桜が続いて目にしたのは、憧れの存在がか細く、「守れなくて、ごめん」と全身が刀剣によつて貫かれる最期を迎えた。

憧れの女性が自身の武器であるはずの鉄杭で首を刺され、先輩と同じように桜へと詫びて息絶えた。

そして、太陽の戦士となった義兄が輝く武器を手にこちらへと向

かってくる。

その姿に僅かながら目に輝きを取り戻した桜は戦士の名を叫ぼうと口を大きく開ける。

「光太郎兄さ——」

桜が名を呼びきる寸前だった。

武器を握ったまま、戦士の腕は鮮血を撒き散らしながら宙を舞い、その痛みで声を上げる前に戦士の胸に大きな穴が開けられてしまった。

ゆっくり、ゆっくりと倒れながら人間の姿へと戻っていく義兄は届くはずもない手を、桜へと向けながら大地に沈んだ。

「……………」

もう、言葉すら出ない。

目の前で掛け替えのない人々全てを奪われた桜は、音を立ててひび割れていく。心が決壊していく。その中から彼女を覆いつくそうと『絶望』が這い出ようかとするように。

その光景を、現実の世界でジュピトルスは高笑いを上げながら仕上げだと言わんばかりに、耳障りな高い声を桜の精神へと響かせた。

「最高です…実に最高ですよ貴女ツ！そうです、この者達があのよう
に死んだのも、そしてこの後に死んでいくのも、全て貴女が生きてい
るからなのですツ!!」

(私の…せいで…?)

塞ぎ込む桜の全身に亀裂が広がり、あと一カ所でもひび割れたら碎
け散ってしまう寸前、ジュピトルスの言葉に反応して指先がピクリと
動く。

「けど安心なさい！そんな未来があろうとも最早関係の無い話！貴女
の精神は潰れ、別人として生きられるのですからねえ！ああ、しかし
どの道貴女という存在…心が死んでしまうのだから意味がありません
んなあ!!」

「死後の世界で眺めていなさいツ！貴女の肉体に宿る新たな支配者に
よって地球が征服される様をツ!!」

ジュピトルスに取って、それは最後の一押しのもりだった。あの
まま放っておけば自然と桜は絶望によって完全に崩壊していたかも
しれない。もしくはジュピトルスの言葉が止めになっていたかもし
れない。

だが、間桐桜という少女を、ジュピトルスは見誤っていた。

(させ、ない…)

もはや立つことが出来ないはずの桜、血の海の中でゆっくりと立ち
上がる姿を見る。

(そ…んなこと、させないツ…!)

自分という殻を突き破ろうとした絶望という怪物を強引に押し込めた桜の身体に走っていた亀裂が僅かだが、確かに塞がっていく。

（必死になって兄さんが守ろうとしたものを…壊させたり…しない！私の身体でみんなを苦しませるようなことなんて…絶対に——）

「絶対に、させませんッ!!」

ついに立ち上がった桜の身体には綻び一つない姿で叫ぶ。それに呼応するように彼女を囲っていた幻は光となって消えていった――

「なんと…」

高笑いを続けていたジュピトルスの表情が凍りつく。同時に悲鳴ばかりを上げていた桜の呼吸が安定している様子を不思議に思ったマリバロンの耳に、少女の声が届く。

「なる…ほど。これが、貴方のやり口…なんですね。敵ながら…最低です」

「なぜ絶望しない…貴女は確かに…」

「ええ…潰れかけました。けど、諦めたくなかった…」

「……………」

「私のせいで誰かが苦しむなんて…そんな事、絶対に、認められませ
ん」

とうに笑いを終えたジュピトルスの問いに、桜は気力、体力共に消
耗した状態でありながらもはつきりと伝えた。そう思える程の強さ
をくれたのは、間違いなく家族の存在だ。

例え幻であり、近しい人々の死を垣間見た後であっても、自分は誰
かを苦しませる存在になる訳にはいかない。一度全てを失っても誰
かを守る為に今も戦い続けるあの黒い背中を見て、思ったことだ。

「……………」

ジュピトルスは指の隙間から見える桜の瞳を見た途端、あっさりと
手放すと反対の掌で桜の頬を平手打ちしてしまう。

乾いた音が室内へと木霊した後、桜はぐったりと項垂れてしまうの
であった。

「飽きました」

一言そういつて踵を返すジュピトルスは佇んでいたマリバロンへ
先ほどまで高揚した態度が嘘のように淡々と告げる。

「氣を失った今なら外部からでも暗示は可能でしょう。喜びなさい、
当初の貴女の思惑通りに事が進みますよ?」

「は、ハア…?」

「さてゲドリアン?先ほど面白い話を聞かせてくれましたねえ。なん
でもあつという間にクローンを生み出す怪魔異生獣を飼っている
か…」

今まで遊んでいた玩具を放り出し、別の遊びへ興味が移った子供のように間桐桜を自分の対象から外したジュピトルスはゲドリアンを連れ、部屋を後にするのであった。

どのような幻を見せていたのか、マリバロンには見当も付かない。だが、自分とジュピトルスの催眠術を退ける程の精神力の持ち主ならば…クライシス帝国を率いる存在に相応しいかもしれない。

「ガテゾーン聞こえる？プランBへ変更するわ」

『俺の催眠装置を使つてのプランか…準備は出来ているがいいのか？お前さんの手柄にしなくて』

今回の失態から間桐桜をガロニア姫へすり替える作戦は全てマリバロンが進める方針であった。その為当初の暗示を含め、マリバロンが行うつもりだったが、彼女が目覚めている間はジュピトルスですら暗示をかける事すらできなかつたのだ。

ならば自分の下らない意地など捨て、ガテゾーンが用意した催眠装置に委ねるほかない。

「構わないわ。これからクライシス帝国の支配者を生み出す為ならね…」

…
それに見てみたい。彼女がクライシス帝国を収める姿を、この目で

…

（そして暗示は成功し、彼女は自分をガロニア姫であると完全に思い

こんでいる)

後に奇跡の泉に身を浸し、肉体をクライシスの者とした桜は髪の色が紫へと変わり、肉体も成人女性まで成長している。そして今の彼女には、間桐桜としての記憶は、欠片も残されていないはずだ。

だが…

「…見てみたい」

「なんと、おっしゃったのですか？」

「見たいと言ったのだ。その侵入者達の姿をな…」

「な、何をおっしゃるのですか!?危険過ぎます!」

玉座へ座し、暗い瞳で自分を見下ろしているガロニアの申し出に慌てて否定するマリバロン。確かに間桐桜の人格をガロニアへと変えることには成功したが、もし間桐光太郎達と接触したことが切っ掛けで記憶を思い出すことがあれば…

先程完璧に暗示は成功したと自負していたが、相手は間桐光太郎だ。何を起こすが予想すら出来ない相手に、彼女を近づける訳にはいかないのだが…

「マリバロン…お前は、誰に向かい意見しているのだ」

ただ一言。

一言でマリバロンは身動き一つ取れず、自分を見つめる暗い瞳から目を逸らすことすら出来なかった。

彼女は予想通りにガロニアに相応しき存在。否、相応し過ぎた。

元々桜の持つ潜在能力がクライシスの人間となったことで解放さ

れ、今では自分ですら敵うかどうか分からない。

もしや自分は、とんでもない存在を生み出してしまったのかと自問するマリバロンに、ガロニアと化した桜の言葉が続く。

「もう一度言うぞマリバロン。私を、その者達の元へ連れて行け」

一方、山岳地帯で敵の大軍に発見された間桐光太郎達は…

『マスター、このような状況に相応しきBGMをコンピューター内に収録されているファイルから再生可能ですがいかが致しましょうか？』

「ごめん、ほんと申し訳ないんだけど今は静かにして貰えるかなッ!？」

仮面ライダーBLACKと変身し、洗脳されたマンモス怪人の牙を両手で掴み、押し合いながら空気をまるで読む気のないロードセクター・ネオの方へと顔を向けて絶叫する。

崖の上からはチャップ達の射撃、正面の上り坂から次々と襲い掛かるゴルゴムの洗脳された怪人達の襲撃に光太郎達は苦戦を強いられていた。

待機させていたロードセクターとライドロンを呼び出したまでは良かったものの、幅が5メートルもない山道と10メートル以上の崖からの攻撃ではどうしても彼等では相性が悪く、今では光太郎を援護する慎二の盾代わりとなっているのが精一杯だった。

「ちよつとなんなのよあのバイクツ!?こんな時にくっだらな話しかできないなんて…」

「それには全力で同意するけど、お前も期待を裏切らない事をやらなかったことをわすれんな…よッ！」

ライドロンの影に隠れ、変装中のガロニアを抱きしめながら弾丸の雨に負けじと大声を張る遠坂凜の言い分を肯定しながら自前のライフル銃に弾丸を詰め込み、一発狙撃しては再度隠れるを繰り返す間桐慎二の言葉に凜は言葉を飲み込み、ジト目で今唯一攻撃手段を持っている少年を睨む。

本来ならば凜も戦いに参加をする予定ではあった。彼女が最も得意とする宝石魔術を使った攻撃であれば頭上に群がる兵隊など一網打

尽だったろう。だが、ここで凜本人が最も恐れていた事態が発生して
いまい。

遠坂家固有スキル；うっかり

今回の桜奪還に備え、聖杯戦争後に補充した最高の宝石を準備して
いた。

準備していたのは良かったが、彼女は持参したボストンバッグに入
れ忘れてしまい、宝石の詰まった袋は今でも自分の机の上だろう。

(あくもうなんでいつもこうなるわけ!?)

今、こうして降り注ぐ敵の銃撃に怯えているガロニアを落ち着かせ
るために身を寄せてはいるが、いつまでも敵が同じ手段を使っている
はずがない。恐らく、今より強力な武器へと切り替えるはずだ。

「くっそ、せめて下からじゃなく同じ高さならあんな奴ら…」

弾丸を詰め直す慎二は苛立ちからそんな声を漏らした。彼の言う
通り、今の状況では自分達が圧倒的に不利だ。坂の上から襲い掛かる
怪人達は光太郎が何とかしてくれているが、崖の上の連中はどうしよ
うもない。

仮に光太郎がその跳躍力であるチャップ共の殲滅に向かったとし
ても、今度は自分達が怪人達の相手をしなければならぬ…

どうすればと頭を抱える慎二の言った言葉に遅れて反応したのは、
復帰してから主に迷惑しかかけていないバイクの合成音声だった。

『同じ高さというのは…今攻撃を仕掛けている敵と同じ、もしくは有利な場所となるのでしょうか?』

「あ? ああ、そうだよ。でも、それでこそ空でも飛べない限りは上の高さなんて…」

『では、やってみましょう』

あっさりと言ったロードセクターのボディに本体を分割するような隙間が走り、その隙間から光が迸る。

『モードSへ移行。変形を開始します』

後輪の左右に備えられていたブースターのノズルが下へと方向を向け、放射された火が車体をゆっくりと持ち上げる。

宙へと浮いた状態から変化は進み、前後のタイヤが車体の内部へと収納され、本体の左右から白いウイングが展開。さらに後部からロードセクターを浮かせているブースターとは別のノズルがせり出し、尾翼が左右、上部と姿を現した。

さらにヘッド部分が伸び、アタックシールドが展開したことで変形が完了。

ロードセクター・ネオに備えられた新たな力の一つ、スカイモード。

変形を終えたロードセクターは茫然とする一同を余所に、慎二の前へと移動する。

『どうぞ、いつでもフライト可能です』

「…最初からやれよそんなのがあるんだつたらさあああああツ
!!!」

久々に義兄以外の存在（バイクだが）に怒鳴り散らしながらも慎二がロードセクターに飛び乗った瞬間、凜達が瞬く間に上空へと移動。飛行能力を持たないチャップ達は自分の頭上に現れた敵に対し、急ぎ照準を向けるが…

「おっそいんだよツ!!」

今までのフラストレーションとロードセクターへの不満からか、次々と発射される弾丸は外れることなく敵を狙い撃ち続けていた。

「あれが…大門先生の言っていたロードセクターの力…」

出発する前に大門明から聞かされていた隠されたロードセクターの機能…自分達では解析できなかつたブラックボックスの中身の正体があれば、流石に驚いたと光太郎は空を駆けるロードセクターを見上げていた。

ちなみにこの時光太郎はカニ怪人にヘッドロックを仕掛けており、ロードセクターの能力へ驚きのあまりに力を込め過ぎて泡を吐き出しすぎているのに気付かなかったのは余談である。

「それにしても…」

崖の上の敵は何とかなっても、坂の上からやってくる怪人達の数は増える一方。このまま手を拱いては増援が増えていく。

せめてもう一手。この環境の中でも小回りが利く仲間がいてくれたら――

「――呼んで下さいッ！」

「え…？」

コウモリ怪人を殴り飛ばした光太郎はライドロンの影から身を乗り出したニット帽で頭を包んだ少女…ガロニアを見る。

どうやら崖のチャップ達は慎二を標的にしているようであり、今ではライドロンに攻撃は向けられていない。

危ないと身を屈めるように言う凜の言葉を聞かず、ガロニアは身体を震わせながらも、光太郎へと声を届けた。

「呼んでください光太郎様ッ！貴方様の仲間を…きつと、きつとこの世界に現れますッ!!」

「しかし…！」

彼女の言う仲間…光太郎と共に戦場を文字通り駆け抜けた仲間には、単体で時空を飛び越える能力を備えていない。自分が呼んだとし

ても、現れるはずが…と考える光太郎だったが、真っ直ぐ自分を見つめる少女の目を見て、その思案を変える。

「敵が襲ってくる直前までに、怪魔界で見た現実^ニに心を痛めていた少女…だが、何が切っ掛けだったかは分からない。

必死に身を奮い立たせ、初めて見る戦場で立つことすらやっとならずなのに…

今の彼女の目には、迷いがない。

光太郎はガロニアを信じて、虚空に向けてその名を叫ぶ――。

「慎二様…」

「つとに、勇敢過ぎるわ。いきなりあんなのに飛び乗るなんて」

「そうですね…それに比べたら、ワタクシは…」

「…言ったでしょう？今、何も出来ないとしても、貴女を責める奴なんていないって」

「はい…」

「でも、もし貴女が何か自分に出来る事があるなら、その時は全力を尽くしなさい」

「自分に、出来る事…？」

「今は怯えても、自分が見てきたものに目を背けたっていい。その後^ニに、ちゃんとした答えを持ち合わせるならね」

「……………」

いきなり変形したロードセクターへと搭乗し、崖の上の敵との戦闘

を開始した慎二の適応能力に呆気をとられながらも賞賛する凜に、ガロニアはそう尋ねた。

今、出来る事を全力で。

はつきり言って、これは受け売りだ。

だがその言葉を受けてから、衛宮士郎の意識はどこか変わり、より訓練に精を出すようになっていく。

そして自分も、それに乗じて訓練を厳しくしている事は周りには黙っている。

この言葉が、彼女にとって悩みを増やす枷となるのか、それとも…

「……………」

黙って目を伏せるガロニアだったが、それも僅か数秒だった。

再び彼女が目を開いた時、凜が見た瞳は…

身に覚えが有りすぎる、お人好し達と全く同じものだった。

「ライドロン様、お願いがありますわ!」

「ドウシタノダ?」

「ワタクシがこれからすることに、黙って協力して下さい!」

そして光太郎に仲間を呼ぶように叫んだあと、胸の前で手を組んだガロニアの身体を赤色のエネルギーが立ち上る。ユラユラと中を泳ぐエネルギーはやがて一定の高さまで上がると、まるで円を描くように回り出した。

円の中の空間が歪みだし、やがて大きな穴が展開された。

『補正マイナス値：転異空間の出口、固定完了。我々の世界までの到達まであと…』

「あ…う」

「しつかりしなさい、あとちよつとなんでしょっ!？」

ふらつくガロニアを支える凜の言葉を受け、再び作業に集中するガロニアの額に汗が溜まっていく。

ガロニアが今、やろうとしていることは自分の能力を持ってして、光太郎の仲間を地球から怪魔界へと呼び寄せる事。

地球と怪魔界のワープ空間を通ったデータを持つライドロンの座標データを基に空間へ干渉し続けるガロニアだったが、ワープ空間を固定させるには想像以上に力を消費してしまうのだ。

凜に支えられながらも、ガロニアは今自分に出来る事へ全てを注ぎ込んだ。

（今は、ワタクシに出来る事はこんな事だけ。けど、いつかは…）

目に焼き付いてしまった、本来ならば戦う必要が無かった人々が傷ついてしまうこの世界の現実。それに対して、今自分に出来る事など

何一つないだろう。

だが、今は無理でもいつかは…地球のように笑い合える日がいつか来るなら。

（こんなワタクシを許し、共に行動をしてくれる人がいるなら、いつか、絶対に…）

まだはつきりとは浮かばないが、いつか叶えたい目的。

その第一歩として、今、出来る事をやり切って見せる！

ガロニアが新たな目的を抱いたと同時に、ライドロンの声が響く。

『中継完了。地球と怪魔界との転異空間、完成』

「今です、光太郎様ツ!!」

「来いッ！アクロバッターツ!!」

2人の声が重なった刹那。

ワープ空間から赤い複眼を持ち、青く流れるようなボディを持った生体バイク、アクロバッターが出現した。

「やり、ました…」

「ガロニア…!?お疲れ様、頑張ったわね」

フラリと倒れたガロニアを抱きとめた凜は力尽きても笑って見せるガロニアの頭を優しく撫でるのであった。

その光景を見ていた光太郎は怪人数体を引き飛ばしたアクロバッターに搭乗、アクセルグリップを捻り、未だこちらに向かい続ける怪人達を睨んだ。

『準備ハイイカ?』

「ああ、反撃開始だツ!!」

第45話

「ええい、しつこいッ!!」

タキシード姿に歪なマスクで顔を覆う怪人と忍者のような風貌の怪人を切り伏せた赤上武は絶叫と共に背後に迫ったミイラへと回し蹴りを叩き込む。

倒れた途端に砕け散った硬貨になってしまった怪人に目もくれず、武は続いて出現した数十体の怪人へと走り出した。

「オフッオフッオフッオフッ…」

不気味な声を上げる怪人：ヤゴを思わせるシアゴーストは戦闘能力はさほど高くない。メディアの攻撃魔術、メデューサの鉄杭などで致命的な攻撃を叩き込めば爆発してくれる。

だが攻撃が浅く、地面へと転がる程度で終わってはさらに厄介な相手となってしまふのだ。

「オフッ!?!」

「くッ、しまった…!?!」

鉄杭を握った拳をシアゴーストの顎へめり込ませ、勢い良く振り上げたメデューサは敵が咄嗟に身体を引いた事で威力を殺していた事に舌打ちする。

地面へ落下したシアゴーストは立ち上がろうとせず、手足を屈めダルマのような恰好となると数度痙攣を起こしたように身体を震わせた。

「オフッ…オフッ…オフッ…」

直後、シアゴーストの背中がパツクリと割れ、中から後頭部にトン

ボを彷彿させる羽を後頭部に生やし、それまで丸みを帯びた体面のシアゴーストとは逆に鋭く、所々が尖った意匠を持つ青い怪人：レイドラグーンへと姿を変える。

シアゴーストの恐ろしさは他の怪人同様、集団で敵を責めるだけでなく、敵の強さに応じてその姿を変える事にあつた。

現れた当初はシアゴーストの能力を知らず、他の怪人達との入り乱れた戦いから戦闘能力を奪う事に徹していたが、見る見るうちに空が青い群れに囲われていくことに気付いた一同はシアゴーストに対しては全力で叩き潰す事に方針を変更。

この中で唯一飛行能力を持つメディアに狙いを絞るレイドラグーンをこれ以上増やす訳にはいかないのだ。

「ああもう、やっぱり見送りなんて来るのが間違っていたわツ!!」

自身に迫る怪人の羽に狙いを定めて空気を圧縮し、刃と化した攻撃魔術を飛ばすメディアは、羽を刈り取られ撃墜するレイドラグーンの末路などに目もくれず、ヘソクリである溜め込んでいた予備の魔力を消費しながら続いて迫る青い怪人の群れと地表からの攻撃に应对し、負傷した武とメデューサに遠隔で治癒魔術を施すという離れ業をやつてのけるが、相手の数が多すぎる。

思わず当り散らす様に大声を上げるが、言つた所で敵の数は減つてはくれない。それでも自分で言つた事に反し戦いの場から離れようともせず、魔力を練り続けるメディアの背後に、魔法陣が出現。新手の怪人が出現した。

「……!」

迂闊だった。

まさか、この世界に転移した直後から脱皮した姿…レイドラグーンが現れるとは。怪人は驚愕するメディアの隙を逃さない。

目の前の魔術師の命を捕食しようと伸ばした怪人の腕は、下方から飛来する矢によって阻まれた。

あらぬ方向へと腕が向いた事に首を傾げたレイドラグリーンが何だと下を向いた途端、今度は無数の矢が怪人の顔へと突き刺さっていた。

「まさかこのような事になっていたとはな…」

赤い外套を纏った弓兵は続いて番えた矢を魔法陣から無数に出現する怪人達へと向けて打ち放つ。矢を生み出し、射るといふ機械にも近い繰り返し、しかも正確さも求められる行程に一切の迷いもブレもなく放たれる一撃は怪人達へ致命傷を与えていった。

無論、そんな脅威となりつつある存在を他の怪人が放っておくはずがない。

男へと銃を構えたタキシードの怪人を、魔力で生み出した夫婦剣で吹き飛ばした少年の姿に、武は新たに戦列に加わった2人の名を呼ばずにはいられなかった。

「アーチャー殿、士郎殿…」

まさかあれだけの啖呵を切りながら自分の切り札を忘れるという失態を犯した主へ宝石を届けようとしたアーチャーは、息を切らし、屋敷の前で立っていた少年から今武達が陥っている状況に関して聞かされた。

自分がクライシスに囚われてから慎二や桜の勧めもあつて購入した携帯電話に送られたメールを見た士郎は急ぎ遠坂家へと向かい、協力を仰ぎに来たという訳だ。

自分に代わり、武達を助けてくれと。

クライシスへの転移に時間も無かった為、普段のような言い分が使えず送られた単純な内容からより危機感を覚えた士郎は全力で応える為に、この場へと立っている。

以前の戦いからしばしの時が経過しても未だ未熟という事は自覚している。だが、それでも今時分に出来ること全力をこの戦いでぶつけて見せる。

(アーチャーが空を飛ぶ怪人に集中するなら、それを邪魔させない事が、今俺がすべき事だ…)

手にした剣を前方へと放り、また剣を幻想させた士郎はアーチャーを狙う黒装束の忍者へと駆けていく。回転して自分に迫る剣の存在にようやく気が付いた忍者は腰に差していた刀で打ち払うがもう遅い。既に攻撃に最適な間合いまで迫った士郎に刀をへし折られ、一刀のもとに伏せられ消滅してしまう。

そして息も付く間もなく、新たに出現した白い猫の怪人の群れに向かい、剣を構えた。

(これで何とかなる、かも知れませんが)

戦況を盛り返した状況に安堵するメデューサは再びノロノロとした歩調で迫るシアゴーストの首を鎖で巻き付け、他の個体へと衝突させる。

爆発する中でメデューサはアーチャーと士郎が登場する寸前に目の前から消えたアクロバッターが行く先、呼んだ者の存在を思わず口にしていた。

「光太郎…」

「行くぞおおおおッ!!」

現れたアクロバッテリーに搭乗し、スロットルグリップを回す仮面ライダーBLACK：間桐光太郎はアクロバッテリーと共に再生ゴルゴム怪人達に向かい、爆音を轟かせて疾走。つられて突進する怪人軍団だったが、光太郎は急ブレーキをかけ車体の向きを強引に真横へと傾けた。

「ハッ!!」

だがアクロバッテリーは停止することなく、ガリガリと砂利でタイヤを摩擦させながら正面の怪人達にむけて前進して先頭を進んでいたネズミ怪人やシカ怪人を次々と跳ね飛ばしていく。

正面では体当たりが出来る怪人の数が1〜2体となってしまう為に、機体を真横に向けてより多くの怪人を巻き込む方法を選択したのだろう。

数体の怪人を再起不能にし、怪人素体を下敷きにしてようやく停止したアクロバッテリーのグリップを再度捻った光太郎は数メートル先の壁に向かい、アクロバッテリーをウイリー走行させる。前輪が壁へと接触させた途端に、斜度が80度以上あるにも関わらず壁を走らせ、2メートル以上登るとすぐに再度車体を真横へと向けて走行。

アクロバッテリーと共に壁を『横』に爆走させるといふ強引な走行に怪人達が慄く間に光太郎はアクロバッテリーから飛び降り、コブラ怪人の尾を握ると力任せに持ち上げ、自分を軸にて回転しジャイアントス

イングで他の怪人を吹き飛ばしながら、こちらへと向かっていた第2陣へとコブラ怪人を投げ飛ばす！

「おおおりゃッ!!」

コブラ怪人という砲丸を受けて地へと伏せていく怪人達はどうにか立ち上がろうとするが、さらに追い打ちとなる攻撃が迫っていた。

『ギャアアアアああアアッ!!?』

時間差で壁から落下したアクロバッターの下敷きになった怪人達の断末魔が響き、止めと言わんばかりにアクロバッターは顔を上げようとしたタمامシ怪人の頭部に後輪で踏み、猛スピードで回転。怪人の山から脱出すると同時に爆発を起こすのであった。

「うっわー、絶好調だなあいつら…」

下で繰り広げられていた戦いに戦慄すら覚える間桐慎二は目を義兄達に向けたまま器用に弾丸を補充させ、崖上からこちらに向けて銃撃を続けるチャップ達を1体、また1体と確実に打ち貫いていた。

『それにしても初めての空中戦にここまで対応されるとは驚きです。以前に経験があったのでしょうか?』

「……………」

ロードセクター・ネオの賞賛に慎二は閉口して狙いを定める。

そうでもしなければ、『あの時の恐怖』に身を竦ませてしまうからだ

…

それはライドロンが完成した間もない頃。その日も慎二は武による訓練を受けることになっていたのでが…

誰でも簡単に出来る料理レシピをダシにメディアから人避けの結界を学んだ桜によって誰一人いない河川敷。そこには慎二と武以外に2人の人物が参加していた。

「では、今日の訓練を開始するでしょう」

「おい…」

「今回はメデューサ殿と光太郎殿が協力してくれている。なので慎二殿も精を出して——」

「おいって言ってんだよッ!?なんだよこのでっかい鉄の輪はッ!?そしてなんで僕はその輪に両手両足を縛られているんだよおッ!!」

武は絶叫する慎二の言い分にはて、何処におかしい要素が…と慎二の訴えに疑問すら浮かんでいなかった。

慎二はこの時、本人の言うようにタイヤをそのまま人の身長以上に巨大させたような鉄製の輪の中で両手両足を縄で固定され、自分の意思では決して動けない状況に陥っていたのだ。これには流石の光太郎（変身済）とメデューサ（戦闘装束）も困惑するが、武の説明に納得してしまう。

「今後、慎二殿が敵と高所での戦いに備えたものだ。たとえば空を飛ぶ乗り物…飛行機といったか。その乗り物の上で敵と対峙した際に空中でも平衡感覚を失わぬよう、慣れて貰う必要がある」

「そんなアクション映画みたいな目に合う訳ないだろうガアッ!!」

「なるほど…」

「一理ありますね」

「何納得してんのッ!?そして何でさも有り得るみたいな言い方するん

だよお前らあッ!？」

慎二の訴えなどまるで耳に届かず、ついに訓練は開始されてしまった。

「…っ…っ…っ…っ…っ…っ…」

「良いか慎二殿ッ！回転にまけずしっかりと目を開けて周囲を把握でききるまで今回の訓練は終わらんぞッ!!」

もはや悲鳴すら上げられない慎二はメデューサの手により、自身を拘束する鉄の輪ごと空へと浮いている…というか回されていた。

「そしてメデューサ殿の次は光太郎殿に回して貰うッ！最終的には両手の拘束を解いて慎二殿の得意とする銃を浮かせた風船に命中出来るようにするぞッ!!」

これって虐待じゃね…？と気を失った振りをしても水をぶっつけられてしまう慎二は武によるメニューを一分一秒早く終わらせるために訓練へと励んだのだった。文字通り、命をかけて。

(そして何で言われた通りに出来てるんだよ僕は)

と、悠々と空で加速するロードセクターの機体上でもバランスを崩すことなくまた1体のチャップを狙撃する慎二はいつかあの3人の頭上に腐った生卵を叩き落としてやるという地味な報復を誓っていた頃を思い出していた。

あのいじめのおかげでこうして戦えているのだからまあ、いいかと

自己完結した慎二はチャップ達のいる後方で、巨大な滝とその付近に建つ巨大な宮殿を発見。さらに目を凝らせばその宮殿の出口から新車のチャップが武装してこちらに向かっているではないか。

「まさか、あそこに…」

「わかった、俺達も直ぐに向かう！」

慎二からの無線を聞いた光太郎は頷くと、後方でライドロンの影に隠れていた凧とガロニアに向けて大声で報告した。

「慎二君が崖の向こうで建物を発見した！桜ちゃんが幽閉されている可能性がある!!俺達は先に向かうから、ここで待っていてくれッ！」
「わかったわ、何かあったらすぐ知らせて頂戴ッ!!」

凧の言葉に頷いた光太郎はアクロバッターに搭乗し、もう怪人達が現れる事のなくなった坂道を駆けていく。その姿を見送った凧は隣で今も息を切らせているガロニアがライドロンに乗り込もうとする姿に思わず声を荒げて待ったをかけた。

「ちよつと、そんな身体でどうするつもりッ!？」

「止めないで…くださいまし。この先に桜さんがいるのなら、ワタクシは…」

「そんな身体で何ができるの？あなた、さつき時空の穴を開けるのに力を使い過ぎたんじゃ…?」

「それ、は…」

凧に手を掴まれたガロニアは光太郎達の向かった宮殿へと向かお

うとしたが凜の指摘を否定できず、目を逸らしてしまう。さらにそれの裏付けをしたのが、センサーを向けたライドロンによる解析だった。

『バイタルチェック完了：ガロニア、君ハ凜ノ言ウ通り体力モ著シク消耗シテイル。回復スルマデ動力ナイ方ガイイ』

「そんな…」

「ほら、待ちましよう。その変わり、あの連中がしくじったら私達の出番なんだからねッ！」

凜の励ましに、ガロニアはクスリと微笑んで頷くと、彼女に導かれるままライドロンのシートに腰をおろし、ゆっくりと息を整えていく。

しかし凜はガロニアを留める為に使った言葉が、まさか現実になるとはこの時、夢にも思わなかった。

「こいつはとんだ歓迎だな…」

ついに宮殿が見える位置までに接近した光太郎を待ち構えていたのは、怪魔界で量産されていたサイボーグ怪人の大軍だった。

アーチャーや武と戦ったサイボーグサイ怪人にサイボーグシカ怪人：さらにはどこから出現したのか、周囲にサイボーグタカ怪人の大群を従えた空中母艦まで現れている。

だが、ここまで戦力を上げて警戒をしているということは、その先にマリバロンが連れていたという人物が：桜がいる可能性が高い。ならば、こちらにも出し惜しみをする必要はない！

「ロードセクターツ!!」

『了解、ソーラーチャージシステム作動。エネルギーを照射します』

慎二を乗せて飛行するロードセクターは機体後部から小型のパラボラアンテナを出現させ、地上の光太郎へと向けると赤いエネルギーを照射。

左手をベルトに添えた構え、右手を天に翳した構えを取った光太郎にエネルギーが降り注ぎ、キングストーンが更なる輝きを放ったそこに現れたのは光の戦士。

仮面ライダーBLACK RXへと姿を変えた光太郎はさらに拳を力強く握ると眼前で腕を交差し、同時に振り下ろすとベルト『サンライザー』が幾つもの歯車を宿したベルトへと変化し、歯車の回転に伴い橙色の閃光が光太郎の全身を包みこんでいく。

「俺は悲しみの王子、RXツ!!ロボライダーツ!!」

光太郎が名乗ると同時に攻撃を開始したサイボーグ怪人達の容赦ない砲撃が降り注ぐが、光太郎はものともせず、関節からモーターの駆動音を響かせながら前進し、その手に光のエネルギーを結晶化させ、リボルケインを変形させたレーザー銃を握ると、前方から迫る怪人達へと狙いを定めた。

「ボルテックシューターツ!!」

自身の重量故にRX時のスピードを殺してしまった変わりにどのような攻撃も通用しない重装甲となったロボライダーには、サイボーグ怪人達の放つ銃火器は一切通用せず、敵陣へと歩みながら放たれる

ボルテックシューターの閃光はサイボーグ怪人を貫いた途端に爆発を起こす。

地上で待ち伏せていたサイボーグ怪人の陣に光太郎がたどり着く頃にはその数は半分にも満たず、接近戦を挑んでも光太郎が腕を振るうだけでサイボーグ怪人はその身が2つに分かれ、蹴りを受ければ数十メートル先まで吹き飛ばし、原型を止めていない状態で落下していた。

「…っ」

ここで初めて光太郎の動きが止まる。身体自体にはダメージはないが、光太郎の捉えられないスピードで次々と攻撃を繰り返すサイボーグヒョウ怪人の群れが現れ、攻撃をぶつけては距離を置く戦法へと変更したのだ。

光太郎のセンサーで位置は把握し、無限の射程を持つボルテックシューターで狙いを定められたとしても、1体ずつしか照準は絞れない。

「ならば、こちらにも相手に負けない速さで追いかければいいだけの話だ。アクロバッターっ!!」

主の言葉に従い、光太郎の前で停車したアクロバッターのグリップを光太郎が握った瞬間、変化が起こる。

光太郎の手首にあるアンクルリストから流れるエネルギーがアクロバッターの全身を包み、バツタの意匠を受ける姿から、白を基調としたロボライダー専用バイク『ロボイザー』へと姿を変えた。

ロボイザーへと搭乗し、急発進する光太郎を追って数十体のサイ

ボーグヒョウ怪人も追跡を開始する。その間にも他のサイボーグ怪人達は銃火器で攻撃を仕掛けてくるが、光太郎は正面を向いたままボルトテックシューターを握る左手を後方…怪人達に向けて次々と発射。その弾道は全て怪人の動力部を射抜き、機能停止へと追い込んでいた。

疾走するロボイザーと光太郎を追跡するサイボーグヒョウ怪人達が一定の距離となった時、ロボイザーの音声が光太郎へ指示を送る。

『射程距離内。撃ツナラ今ダ！』

「分かったッ!!」

光太郎は右グリップに備え付けられたボタンを押し込み、ロボイザーのマフラー部に備え付けられたロケット砲が火を噴き、サイボーグヒョウ怪人の脚部へ次々と命中。

敵の動きが止まったと同時に急ブレーキをかけ、ロボイザーをドリフトさせながらボルトテックシューターからエネルギー弾を立て続けに連射する。その全てがサイボーグヒョウ怪人の胸を貫き、巨大な爆発の中に怪人達は飲まれていった。

だが、まだ敵の攻撃は止まらない。

光太郎とロボイザーのいる地上へ爆弾を投下するサイボーグタカ怪人。そして小型空母からは新手のサイボーグ怪人が出撃する準備を整えている。

ボルトテックシューターで怪人1体を撃ち落とすことは容易いが、これではジリ貧となると考えた矢先、光太郎とロボイザーの付近に今まで慎二を乗せて飛行していたロードクターが着地し、バイクモードへと変形した。

『お困りのようですね、マスター』

「ああ、どうにかまとめて倒せる方法があれば…」

『では、試してみましよう』

突然の発言に光太郎と慎二は再度驚く間もなく、その合成音声を響かせた。

『モードBへ移行。変形を開始します』

後部のブースターで浮遊するロードセクターから飛び降りた慎二はまだ隠し玉を持っていた事に文句を言いたかったが、ロードセクターの変形に目を奪われ、声を発することを忘れてしまう。

前輪と後輪を内部へと収納後、ジェット機のノズルを思わせるヘッド部が上へとスライドし、巨大な銃身がせり出した。

機体後部に銃を銃口を挿入するような接続部が出現し、変形が完了了。

巨大は砲塔となったロードセクターは啞然とする光太郎の前方へと移動し、空中で固定すると自身の説明を開始した。

『バスターモード。マスターが今の姿へと進化したように、私も合わせて自身を変化させてみました』

「みましたってお前…」

という事はこの形態は今さつき完成したということなのか…？

慎二の疑問は積るばかりだが、今は空を飛ぶ敵の殲滅させることが先だろう。

「よし、頼むぞロードセクター!」

手にしたボルテックシューターの銃身をロードセクターに接続し、完全にリンクしたロードセクターはバーニアから火を吹かし、光太郎が狙う敵陣に向け、その巨大な銃口を向ける。

敵の動きに勘付いたのか、爆弾の降下を止めたサイボーグ怪人達は光太郎を直接叩く為に槍やかぎ爪を持って急降下するが、既に遅い。

ボルテックシューターと接続された時点で光太郎のエネルギーを取り込んだロードセクターは既にフルチャージ状態だ。

「いけえッ!!ハードブラスターツ!!」

光太郎が叫びと共にロードセクターが放たれたエネルギーの束は、接近したサイボーグ怪人を一瞬で蒸発させた。

そして収まることを知らない攻撃を放ち続けながら光太郎は手にしたボルテックシューターごとロードセクターの銃身を敵の空母へと向ける。

地上から天に伸びる光の柱は追いかけるように逃げ続ける怪人を次々と飲み込み、ついには敵の空母までがエネルギーに叩き付けられ、大爆発が起きる。

ロードセクターが放ったエネルギーを収めたその時には、光太郎達を狙う者は空には存在していなかった。

「なんとというか…すごいの一言だったな」

『そうでしょうか？もつと褒めて下さい』

『ロードセクター…君トイウ奴ハ…』

RXへと戻った光太郎は今し方起きた事にそんな感想しか漏らす事が出来ない所へ凶々しく悪乗りをするロードセクターの発言に、アクロバッターは呆れるしかなかった。

「まあ色々言いたい事はあるだろうけど…まずはあちらさんの苦情を聞くとしようよ」

慎二の言葉に視線を宮殿へと向けた光太郎の視界に入ったのは、数人のチャップを率いたマリバロン。

そして彼女の後方に立つ見覚えがないはずなのに、知っている人物が佇んでいた。

「桜、ちゃん…？」

「知らんな。そんな名前」

純白のドレスを纏い、紫色の髪を靡かせる女性は黒く冷たい瞳に光太郎の姿を映して、冷たく言い放った。

「私の名はガロニア。偉大なるクライシス皇帝の娘にして、地球の新たな支配者だ」

第46話

仮面ライダーBLACK RXこと間桐光太郎が思わず呼んだ名の少女：義妹である間桐桜と、自分達の前に現れたガロニアと名乗る女性は印象がまるで異なる。

桜が実妹である遠坂凜と同じ、父親譲りの黒髪とエメラルド色の瞳であるのに対し、ガロニアを名乗る女性の髪は鮮やかな紫色であり、光の反射を拒むような漆黒の瞳。

光太郎達に向けていた向日葵を思わせる明るい笑みを向けてくれる桜とは対照に、女性の表情は微笑みどころか喜怒哀楽、どの感情も読み取れず、冷たささえ感じる。

それ以外にも身長や体格も差異が見られるが、光太郎、そして慎二は確信する。

彼女は桜なのだ。

そして同時に理解する。

なぜ彼女がガロニアと名乗り、自分達を嘲笑するマリバロンと共にいるのか。

(そういう……とかよ)

心中で舌打ちする間桐慎二はあの悪知恵が働くマリバロンを始めとしたクライシスの連中が皇帝の娘であるガロニアを搜索せず放置するなどおかしいとは考えていた。

奴らは最もシンプルで、どこまでもこちらの神経を逆なでする方法で代役を作り上げたのだ。

ガロニアと似ている桜を洗脳し、姿を変えて『皇帝の娘』という象徴を生み出し、姫を逃がしたという失態を闇に葬るといった所だろう。

反吐が出る。

こうして自分達の目の前に連れて現れるだけでも慎二は敵への怒りを込み上げていくが、義兄のそれは自分との比ではないことは彼が握りしめる拳から聞こえる音で丸わかりだ。

光太郎の心を壊すため、例え偽物であつても桜の偽者を惨殺した光景は今も目に焼き付いている。

同じ過ちは二度と起こさせない。

今度こそ桜を救うために一歩前へ出た光太郎だが、それよりも早くマリバロンは桜の耳元でそつと呟いた。一体何をと、光太郎が思案するが遅かった。

あの女が口を開くことなど許さず、桜へと接触するべきだった。

そんな後悔を抱いた直後、紫色の魔力弾が光太郎へと叩き付けられてしまった。

「グワァッ!!」

倒れはしなかったものの、数歩後退して魔力弾が直撃した胸を手で押さえる光太郎は掌を自分に向ける桜の表情が初めて変化を見せていた事に気付く。

憎しみという感情で。

「貴様か：我らクライシスに仇名す輩というのは！」

「違うツ！俺は——」

「問答無用ツ!! 父上の名において、貴様を討ち取ってくれるツ!!」

光太郎の言葉に耳を貸さず、桜は次々と魔力弾を放つ。

「グっ!? 桜、ちゃん…」

「何度言えば分るのだ。私の名はガロニア、貴様の妹などではないツ!!」

否定の言葉と共に打ち出される魔力の塊は的確に光太郎へと叩き込まれ、防御すらさせる隙すら与えず打ち続けられた。苦悶の声を上げながらも前へと進む光太郎の姿を見て、慎二はあの桜が慕っている義兄に向けて躊躇なく攻撃するという驚きと同時に隠せなかった。

(…よほど根深く洗脳したってことかよ。それに、なんの媒体も詠唱もなしに魔力を攻撃に転換するなんて：奴らは桜の力まで弄ったのか)

ライフル銃を握る手に力を込めながら、どう切り抜ける方法を思案する慎二とは対象に、マリバロンは桜に成す術もなく攻撃される光太郎の姿を見て高揚感を押さえつける事に必死であった。

(まるで夢を見ているようだわ。あのRXが、雑草のようにしぶとく刃向っていたクライシス帝国の怨敵がガロニア様の攻撃に、手も足もでない光景が見られるとは…)

口を吊り上げ、光太郎が苦しみ続ける様を眺め続けるマリバロン。このまま光太郎が息絶えてしまえば地球侵略の邪魔者はいなくなり、さらにガロニアとして洗脳した桜を正気に戻そうとする人物を知る存在も抹消できる。

正に一石二鳥だ。

(本来ならばガロニア様によるRXの殺戮ショーを楽しみたいところだが、時間は多くかけられない)

もはや勝利したも当然とまで言える状況の中で、マリバロンは一つの不安を覚えていた。先ほど自分が耳打ちした後に、桜は光太郎に對し、こう発言していた。

『私の名はガロニア、貴様の妹などではないッ!!』

桜に施した暗示は『自分はこの怪魔界で生まれ、クライシス帝国の次期支配者となる存在』という内容であり、この場にいる地球人2人と兄妹であるという記憶は上書きされているはずだ。今『初対面である』間桐光太郎は自分達に仇名す者としか伝えていないのに関わらず、無意識的に桜は光太郎の妹であると口に出してしまっている。

未だ暗示が不完全なのか。それとも、暗示を覆してしまう程に、この2人の絆が強固なものなのか…

どちらにしろ、あれ程の攻撃を受け続ければさすがのRXでもそうは持つまい。なぜなら、光太郎は決して反撃できない。

彼にとつての弱点である大切な存在にその力を向けるなど、あり得ないのだから。

桜の放つ魔力弾の数と威力は時間が経つに連れて大きくなっていく。身体の成長に連動して魔力量も大きくなっていくのかとどこか冷静に分析している自分に嫌気がさしながらも、慎二は銃の照準を桜

へと向ける。

無論、桜を撃ち抜くためなどではない。足元などに威嚇射撃をして一瞬でも気を逸らせば、魔力弾の嵐から光太郎が離脱することが出来る。太陽の光を受けられない光太郎は傷を再生することができず、傷は増え、深まる一方だ。

一度攻撃に身を任せて吹き飛んだ方がまだダメージが少ないはずなのに、あの馬鹿は引くどころか、ジリジリと前へ進んでいる。何か考えがあつての行動だろうが、このままでは光太郎が倒れてしまうのが先だ。

「……………」

銃を向ける。こんな単純な作業、この半年で飽きる程実践してきたことだ。しかし、慎二ができたのは両手で銃口を前方へと向けるまでだった。

「……………」

照準がブレる。手元が安定しない。あれ程訓練を重ね、敵を打ち貫いたはずなのに。

(なんでだよ…桜を直接狙う訳じゃない。これまで通りに、撃てばいいだけの話だろ)

自分へ言い聞かせるように唱えるが、銃口はやはり安定しない。どうして狙いが定まらないのか…そんな結論、身体を張っている義兄が示しているではないか。

(桜を…傷つけられない)

もし狙いが逸れて、桜の身体を傷つけてしまったら。

自己鍛錬に加え、赤上武という鬼コーチの指導の元、慎二は聖杯戦争時よりも戦闘能力が上がっている。最初は発砲の衝撃で仰け反ってしまうライフル銃など、現在では片手で連射ができる程にだ。

だが、いくら武器の扱いに慣れようが、それは家族を、妹を傷つける為のものではない。

だからだろう。

その気になれば黒い手で弾き返せる攻撃を敢えて身体で受けているのは、弾いた攻撃が桜へ跳ね返り、ダメージを与えない為だ。こんな事だから、メデューサが過保護になっってしまうのも頷ける。

(…だからってこのままで良いわけないだろッ!!お前だって、傷付いてんだッ!!)

頭を振り、再度桜の足元へと狙いを付ける慎二。確かに桜を傷付ける事などできない。だが、同様にこれ以上、同じ家族である光太郎を放っておくなどできはしない。

引き金へと指をかけ、あとは力を籠めれば――

「慎二くん」

自分の名を呼ぶ義兄の赤い複眼は、真っ直ぐにこちらへと向けている。魔力弾が破裂する音に紛れながらもしつかりと届いた光太郎の声を聴いた慎二は桜に向けた銃口を降ろし、光太郎が視線で伝えた通りになるかを見守る事に徹すると決めた。

俺が、なんとかするから

(…駄目な時は僕は僕で動くからな)

結局は義兄に頼らなければならぬ自分の無力を痛感する慎二は、桜への元へ進んでいく光太郎の背中を見つめる事しか、できなかった。

(何なのだ、あの者は…)

魔力弾を何百発撃ちこんだかも分からない。だというのに、異形の男は避けるどころか反撃すらせず、自分へと歩み寄る姿に桜は脅威を抱き始めていた。

マリバロンは言っていた。

あの男こそ偉大なる父へ反逆し、多くのクライシス帝国の先兵を笑いながら虐殺した者だと。自分の命だけでなく、父の命すら奪い、怪魔界を征服しようと企んでいるのだと。

なのに、この男からは誰かを殺める事を楽しむような邪気はまるで感じられない。むしろこちらを安心させるような、暖かさを与えてくれる。それに、自分はそれをずっと前から知っているような――

(ッ!?!私、何を…)

そんなはずはないと攻撃を強めても、男は止まらない。

RXから強化される前のBLACKへと戻り、ダメージは倍以上受けても、男は止まらない。

強化皮膚のリプラスフォースが抉れ、複眼に亀裂が走り、触角を思わせるアンテナが折れても、男は止まらない。

ついには変身が解け、人間の姿となっても、男は止まらなかった。

衣服の所々が裂け、額から血を流し、片足を引きづりながらも男は歩むことを止めない。

遂には目の前に立つまで距離を詰めてきた直後、桜は相手の顔に向けて魔力弾を放とうと手を向けるがそれよりも早く、光太郎の手が桜の顔へと伸びた。

(やられるーッ!?)

身構え、思わず目を閉じてしまった桜に痛みが走る。

ほんの一瞬、額が弾かれたような小さな痛みが。

「え…」

パチリと瞼を開けた桜の目に映ったのは、額の前で人差し指を伸ばした光太郎が浮かべる、優しい笑顔。

「駄目だよ桜ちゃん…魔力をこんな事に使う為に、練習したんじゃないんでしょ？」

小さな子供に言い聞かせるようなゆつくりとした言葉。子供扱いされているという屈辱よりも、桜は光太郎の起こした行動に目を見開いて驚いていた。

(そうだ…私は、昔――)

どこかの家の養子になることが決まり、不安で仕方が無かった日々。

しかしその家には自分と同じくよそからやってきた年上の男のがいた。

最初は怖かったけど、思わず家を飛び出した自分を探して、手を繋いで帰ってくれた。

男の子をお兄ちゃんと呼ぶようになってある日の事だ。

お義父さんが大事にしているお酒の入った瓶を割ってしまい、怒られるのが怖くてどこかに隠れていたがあっさりとお兄ちゃんに見つかってしまう。

どうやら自分の泣き声を聞いて場所を特定したようだ。

もしかしたら怒られるかもしれないと、目を閉じ、手で耳を塞いでいた自分のおでこを指で軽く弾かれた。

痛みがほとんど無かった事へ逆に驚き、閉じていた目を開けたら、お兄ちゃんはこう言った。

『駄目だよ、ものを壊したんなら、ちゃんと謝らなくちゃ』

その後、やはり怒られたが、お兄ちゃんも一緒になって怒られてくれた。

お説教が終わった後、謝って偉いと頭を撫でてくれた。

あの、暖かく、大きな手で――

そうだ、私はあの手を…そしてこの人を知っている。

確か、名前は――

「光太郎兄さん…?」

桜の瞳に僅かな光が宿った時、光太郎の身体は真横へと吹き飛んだ。

「があッ!!」

「騙されてはいけませんガロニア様」

光太郎を口から放った衝撃波で吹き飛ばしたマリバロンは茫然とする桜の背後へと立つと両手で肩を掴み、囁くように呟いた。

「あの者は弱っている振りでガロニア様に近付き、幻影を見せたのです。ああ、なんと卑劣な男なのでしょう」

「てめええええッ!!」

あと少しで桜を正気に戻せたかも知れないところを邪魔したどころか、光太郎を侮辱する発言に激怒した慎二は迷うことなくマリバロンへと狙いを定めるが、マリバロンが鞭でライフル銃を切断し、慎二の首を絞めつける方が早かった。

「ガッ…グッ!」

「さあ、このまま絞め殺してくれるッ!!」

光の鞭をどうにか振りほどこうと手に掛ける慎二だが一向に解くことが出来ず、マリバロンは止めを刺すべく鞭を引こうとするが…

「やめよマリバロン…」

「ガロニア様…」

額を押さえ、瞳が漆黒へと戻ってしまった桜は苦しむ慎二と意識を失った光太郎を一瞥し、踵を返して宮殿へと向かっている。

「私を謀った者をそう簡単には死なさん。しばし休んでいる間に処刑の準備を進めておけ」

「はっ!」

額を手で押さえ、宮殿へと戻る桜を侍女達が迎え入れるが、桜は無視して私室まで足早に向かっていく。

(あれは…本当に幻術だったのか？それにあの男…なぜ、あれ程まで傷付いて笑っていられる…)

(どうにか切り抜けられたわね。後は…)

気を失った光太郎と鞭から解放した慎二は先ほどチャップ達が牢へと連れて行った。ならば、後は光太郎達が乗って来たバイク共を始末すればと振り返った先。

「いない…？」

見ればバイクを捕獲する為に動いていたチャップ隊が鎖や網を放り出し無惨にも倒れ伏している惨状だ。もしやこれはとマリバロンは付近に倒れているチャップの頭部を踏み、どのような状況だったかを強引に報告させた。

それは光太郎と慎二がマリバロンによって倒された直後、2台のバイク同士の会話であった。

『…光太郎ツ、慎二ツ…！』

『どうやら旗色が悪くなった状況ですね』

『2人ヲ助ケナケレバ…』

『待つて下さいアクロバッター』

周囲を鎖で振り回すチャップ達に囲まれていたアクロバッターはすぐにこのような連中を吹き飛ばし、救出に向かおうとしたが、ロードセクター・ネオに待ったを掛けられた。

『マスターが捕まってしまった以上、我らが向かった所でマスターの二の舞となってしまう』

『ナラバ、ドウスルノダ…』

両目のライトを強く点滅させるアクロバッターは今すぐにも光太郎の元へ駆け付けたいが、もしやロードセクターに考えがあるので、ヘッド部分を向ける。するとロードセクターはアイドリングで排気ガスを吹かし、今にも走り出す状態で告げた。

『マスター達が倒れてしまった今、我々に出来る唯一の策をここで使います』

『ソレハ一体…？』

『我々はバイク。ならば、その長所を最大限に生かす。準備は宜しいですか…』

『…マサカ、君ハ』

あまり的中して欲しくない嫌な予感を浮かべるアクロバッターは今にも網で捕獲しようと接近するチャップなどに気付けない。

『最近閲覧したコミックス類から、今の状況に最も相応しき台詞を応用。すなわち——』

『逃げるんだよオ——ツ!!アクロバッター——ツ!!どけーツ雑兵どもオーツ!!』

それはいかなる技術による賜物なのか。合成音声で感情的な声を発すると同時に囲んでいたチャップ達を引き飛ばし、逃亡の一手をとったのであった。

とつさの事のためロードセクターを追走するアクロバッターは一度彼のメモリーをデリートした方が良いのではと本気で考えたが、ロードセクターから送られた目指す座標：ライドロンの元へと向かう事によく意図が掴めた。

RXの変身を解いてしまった光太郎が再び光の戦士へとなるには、ロードセクターが持つソーラーチャージシステムが不可欠であり、しかもあと1度しかチャンスがない。

あの場で光太郎が立ち上がる可能性は低く、下手をすれば慎二と共に人質になっていたかも知れない。

そこでロードセクターが取った手段はライドロンや凜達と合流し、体勢を整えることであつたのだろう。

空を飛んだり、主を見捨てるような発言の裏で戦略を練るなどまったく、底の知れない方法ばかりを思いつくバイクになってしまったも

のだとアクロバッターはロードセクターの評価をどうすればいいのか判断しかねていた。

(シカシ、アノフザケタ音声ダケハ自重スルヨウニ言ワネバ)

それは、全てが終わってからでも良いだろう。アクロバッターはロードセクターに続いて大地を削りながらライドロンの元へ向かうのであった。

「また来ちやったか…」

これで3度目となると流石に慣れてくる。

自分以外が真っ暗であるこの空間。自分の深層意識だと理解した光太郎は自分は気を失っているという事態と、この後現れる存在も予

測していた。

『まさかこうも短期間に顔を合わすことになるとはな』

「ハハハ。同感」

光太郎が振り返るその先。

仮面ライダーBLACKの姿を借りたキングストーンの意味が佇んでいた。

『状況は、わかっているのか』

「うん。だから一分でも早く起きて桜ちゃんを助けに行かなくちゃッ！」

『…以前の落ち込みが信じられない程に前向きだな』

「う…忘れてくれるとありがたいんだけど。でも、そうだね」

一本取られたと苦笑する光太郎はキングストーンの指摘を否定することなく述べる。今自分がすべき事を。

「確かに、今の桜ちゃんは自分をガロニアだと言って俺を敵としてしか見てくれない。けど、『それだけ』だ！桜ちゃんは生きているのなら、いくらでも取り戻すチャンスはあるってことだしね」

満面の笑みを浮かべる光太郎の姿にキングストーンは楽天的であると苦笑すると共に、安心した。

妹に攻撃され、以前のように戦う目的すら失ってしまったのなら、これから言う事が無駄に終わってしまうところであった。

『光太郎…』

「ん？なんだい？」

どう桜を助け出すかを今いるメンバーでの役割分担など考えていた光太郎は不意にかけられた声の主であるキングストーンへと顔を向ける。

『今から言う事をしっかりと聞いておけ』

『これが私からお前に託せる、最後の力だ』

第47話

「む……」

「んだよ、思ったより早かったな起きるの」

「慎二君、あれからどれくらいたった？」

「2時間つてとこじゃないの？時計も取られたから適当だけど」

「そっか…傷は…うん、塞がってるな」

「回復力も随分上がったんな」

「あはは。お蔭ですぐにでも動けるよ」

「そいつは頼もしいことで。ならとつとと出よう」

「そうだね、ここは落ち着かないし…」

「……この空間を見て落ち着かないで済ますお前の神経を疑うよ」

ガロニアと名乗る間桐桜の変わり果てた姿によって多大なダメージを受けた間桐光太郎。桜が僅かながらも正気を取り戻した瞬間、マリバロンの不意打ちにより意識を失ってしまい、間桐慎二と共に虜と なってしまった。

そして目が覚めたばかりの光太郎へ慎二が辛辣な言葉を浴びせるのも無理はない。

現在光太郎達が投獄されている場所は宮殿内部にある場所、天井の高さは高さ50メートルは下らない薄暗い空間には違いないのだが、問題はその方法。

2人は両手首を背面で手錠を掛けられた上別々の檻の中へと入れられ、さらに檻が空間の丁度中央当たりの位置に鎖で吊るされている状態にある。

さらに下を覗けば鋭く輝く刃が見渡す限り上へと向いており、刃の隙間には禍々しい体色を持つ蛇がウジャウジャを身を唸らせ、見下ろしている慎二へ見せつけるように鋭い牙を光らせていた。

出口らしき部分も完全に溶接された状態にあり、脱出などまず不可能と諦める方が楽になる。

だがそれは、光太郎が目を覚まさなかった場合のみだ。

「それじゃ、始めるとしますか!」

「頼むよ。僕はもう当面細くてウネウネ動く奴は目にしたくない」
「了解!」

慎二の要望に応える為に意気揚々と答えた光太郎は手錠を引き千切り、腹部に銀色のベルトを出現させる。

脱出は決定的なものとなった。

「あの宮殿ね…」

遠坂凜は岩陰からそつと身を乗り出し、大滝の傍らに聳え立つ宮殿を見上げ、さてどうするかと呟いた。

2時間前

力を消耗したガロニアと共にライドロンの中で待機していたところへ舞い込んできた嫌なニュース。

洗脳された桜が敵として現れ、光太郎と慎二が囚われてしまった。

ガロニアがそれを聞いた際は取り乱してしまっただが、なんとか落ち着かせた凜は知らせを持ち帰ってきたアクロバッター達と方針を話し合うが、彼等の考えた事は揃いも揃って結論が同じである事に凜は眉間の皺を押さえ、聞き直す。もしかしたら聞き間違えの可能性があるので。

「ごめんなさい、もう一度言って貰える」

『聞き逃していたのですか？ならばもう一度、スロウリイに伝えますので耳の穴かっぽじってお聞きなさい』

「…アクロバッター、お願い出来る？」

『イイダロウ。凜、君二ハ陽動ヲシテ欲シイ。ソウスレバ勝手ニ光太郎達ハ逃ゲ出スハズダ』

「…え？私一人である人外魔境の連中を引き付けろってこと？」

凜はこちらの神経を逆なでする言い回しで答えるロードセクターを無視し、アクロバッターへと意見を求める。やはり凜は聞き間違えではないと知ると事の重大さに柄にもなく重圧を感じてしまった。

敵を引き付け、戦闘になるという事に対しては恐怖はない。怪人相手など聖杯戦争時に嫌という程味わっている。問題は敵の数だ。

今は最大の障害である光太郎と弟である慎二を捕らえたことで警備も手薄になっているのだろうが、先ほどの戦闘を見ればまだ敵は充分過ぎる戦力を保持しているのだろう。

乱戦中に突撃してきたかつてゴルゴムであった怪人の群れを相手に陽動であろうと戦いになるのは、正直不安だ。

『ソノ心配ハナイ。私ヤアクロバッター、ロードセクターモ一緒ダ』

「そりやライドロン達も一緒なら心強いわよ。けど…」

今、凜が不安に思う最大の理由は自分には圧倒的に火力が不足している事だ。

攻撃魔術への媒体として必要な宝石は手元になく、怪人相手にガン

トは役に立たない。さつきだつて自分に出来たのは力を消耗したガロニアと共に敵の攻撃をやり過ぎす事しかなかった…

彼女本来の力が発揮できない今、囚われてしまった光太郎と慎二の助力に、そして桜を助けることが自分に来るのか。

不安の色が濃くなってきた凜に対し、またもや声を発生させたのはロードセクターだった。

『おやおや、どうやら自信がないようですね。なんならここで待っていておかまわないのですよ?』

空気が凍るとは、このような事を言うのだろうか…

恐る恐る頭部を凜の方へと向けるアクロバッターは見た。顔に暗く影を差した額に青筋が立っており、鋭い眼光を今し方自分を侮辱するバイクへと向ける凜の姿を。

凜の身体から昇る黒いオーラは決して彼女の魔力とは無関係であると願うライドロンは無意識に数メートル後退しており、車内にいるガロニアは凜の姿を見て涙目になって怯えている。

明らかに機嫌を損ねてしまった彼女を前にしても平然とするロードセクターの音声は留まる事を知らず、続けて言い放たれた。

『しかし、ここで大人しくしているようであれば私は貴女に対するデータを変更せざるを得ません。今後貴女の肩書きを『冬木の管理人(笑)』と更新させてもらいましょう』

「なん、ですって…?」

『心苦しいのですが仕方がありません。どうぞこのまま何処かに隠れて——』

「…上等じゃない!」

ロードセクターの音声をかき消した凜は黒い髪を振り払い、力強く自分を蔑んだバイクを指さすと高らかに宣言する。

「そのやつすい挑発に乗ってあげる！宝石なんて無くたってその程度の事、なんなくこなす姿をその目に焼き付けてやるわッ!!」

『それは頼もしい。是非とも期待させて頂きましょうッ!!』

「フンッ！吠え面かくんじやないわよッ!!」

啖呵を切りズンズンと進んでいく凜が向かう姿を見て、アクロバクターはヤレヤレと彼女に届かない程度にロードセクターへと声を向けた。

『モウ少シ、オブラート二包ンダ言イ方ガアルダロウ…』

『いえ、私に入力されていたデータにはあの方法が一番彼女のコンディションを上昇させるとあります』

『…ソンナデータヲ何処カラ…イヤ、サツシハ付イタ』

恐らくロードセクターの改修に携わった人物によるものだ。どちらかは敢えて聞かなかったアクロバクターに、ライドロンの操縦席から降り立ったガロニアが凜の後ろ姿を見ながら尋ねる。その顔色は未だ優れない。

「凜様は…大丈夫なのでしょうか？」

『大丈夫でしょう。彼女は魔術だけが取り柄という訳ではない。培った経験や判断は慎二達とはまた違った大きな武器なのです。それに負けん気の強い彼女に私の挑発によってより——』

「あの、そうではなくて…」

凜の戦意が回復したのは自分の手柄という事を強調しての解説をするロードセクターへガロニアは遠慮がちに自分が訪ねている内容との食い違いを、凜の進む方角へ指を向けて伝える。

「凜様が進んでいるのは、目的地と逆方向では…?」

(つたく、ここにきてどうにも調子がでないわ…)

そんなやり取りを思い出す凜は慎二が持ち込んだ武器の入ったボストンバツクから手榴弾を拝借し、改めて自分の負った役割を確認した。

(時間稼ぎ、ね…侵入して2人を助け出すよりは遥かに気軽ではあるけど、逆にその信頼感が凄まじ過ぎるわ…)

アクロバッター曰く、二時間もすれば光太郎が回復し、勝手に脱出しているはずなので敵の注意をこちらに数分向けていれば十分ということらしい。

深く息を吐いた凜は岩陰から顔を出すと、何やら組み立て作業を行っているチャップ達へと目を向ける。赤色の十字架の両端に手首を拘束する金具を取り付けている様子から、光太郎達の処刑に使用する磔台なのだろう。

ロードセクター達から聞いた話から、恐らく光太郎と慎二を処刑するつもりなのだろうが、そうはさせまいと手榴弾を手に取り、凜は思い切り振りかぶった。

(狙いは敵の頭上…そこで上手く爆発すれば)

敵の注目は一気に逸れて、混乱するはずだろう。それに爆発した直後に岩陰に隠れ、移動しながらまた時間差で爆発させれば…

頭の中でプランを組み立てた凜は実行すべく、初手である手榴弾を放り投げた。弧を描いて手榴弾が目標に向けて真っ直ぐに飛んでいく光景にヨシツとガツツポーズを取る凜の背後に白い機影が現れる。

『見事な放物線を描いて飛んでいきますね、流石です』

「ちよッ?!いきなり背後に現れないでよねッ!…でもその通りよ。後はタイミングよく爆発すれば…」

『ああ、それはないでしょう』

『何せ安全ピンを抜いていないのですから』

「え…?」

それは彼女が手榴弾に関しての知識を有していなかったのか、単に忘れていたのかは定かではない。が、事実ロードセクターの言う通り、手榴弾は凜の予定していた位置で爆発することなく、礫台の作成に取り組んでいたチャップの頭頂部へと落下したのであった。

「グハアッ!」

地面へと沈んだチャップの声へと一斉に振り向いた他のチャップや怪人素体と、思わぬ事態に転がり固まってしまった凜はぼつちりと目が合ってしまった、しばしの沈黙が続いてたが…

「地球人だッ!!ひっ捕らえろッ!!」

作業を全て放り出し、手に武器を持ったチャップ達が一斉に凜とロードセクターに向かい駆け出した。

『ある意味、作戦成功ですね』

「やかましいわッ!!笑うんだッたらいつその事とことん笑いなさいッ!!」

『ハッハッハッハッハッハッハ』

「本当に笑いやがったわねこのバカバイクッ!!」

こうなったら仕方がないと、凜は慎二の持ち物であるボストンバツクを放り捨て、早口で詠唱を終えると今にも棍棒を振り下ろそうとするチャップの腹部に強化魔術で強化、硬化させた掌底を叩き込む。

鈍い音と共に地面へひれ伏した仲間の姿に動揺するチャップ達に対し、凜は拳を腰に当て、残る手を前方に向けて翳す構えを取ると今度は両足にも強化魔術を施すと口もとを歪めた。

「こうなったら、とことんやってやろうじゃないッ!!」

当初のプランとはほど遠い内容となってしまうが、これで敵の注意を自分に向ける事だけは成功した。さらに凜の左後方では彼女に接近していたチャップ達をアクロバッターがウイリー走行で次々と跳ね飛ばしてくれている。

「さあ、行くわよッ!!」

気合と共に凜は駆け出していくのであった。

「…ずいぶんと外が騒がしいな」

「もしかしたら、遠坂さん達が注意を逸らしてくれているのかも！」

「なら、とつとと脱出だ」

通路の角で、チャップ達が外に向かい駆け出していく様子に声を潜めて眺めていた慎二と光太郎はこの騒ぎに乗じての脱出を試みるが、光太郎だけが反対方向へと身体を向けてしまう。

「おい、どこ行くんだよ？」

「ゴメン慎二君…俺、もう一度桜ちゃんを探してみるよ」

「何言ってるんだ！…さっきも一通り探しても見つからなかったらうが！？」

あの悪趣味な牢獄から脱出した後、慎二と光太郎は敵の監視を潜り抜けて桜の捜索を行ったが全てが空振りに終わっていた。電子錠などセキュリティのレベルの高い場所へは踏み込むことが出来なかったが、外で騒ぎが起きていれば…

「今なら、見つけられる…そんな気がするんだ！」

「…あくもう！確認する部屋は一カ所だけだかなッ!!」

「ありがとう、慎二君！」

「……………」

『駄目だよ、桜ちゃん…』

「く、なぜあの男の言葉が頭に響く…!」

私室でベットに横たわっていたガロニアを名乗る桜は枕を壁に向かい投げ捨てる。音を立てずに床へと落ちた枕などに目もくれず、傷を負う事に構わずに自分へと近づき、自分に微笑みかけた男の顔をどうしても拭えずにいた。

なぜあの男の笑顔を見て安心する？

どうしてあの男を傷ついた姿を思い出す度に胸が痛む？

どうして…

「本当に、あの男による洗脳だと言うのか…?」

米神を抑える桜はマリバロンの言った言葉…自分を殺す為、同情を引くようにワザと傷付き、無抵抗となるように催眠術をかけたと言っていたが、桜にはそのような事をする男には思えなかった。

何時だって自分の決めた道を真っ直ぐに進む、あの人にそんな非道なことは…と、またも間桐光太郎を以前から知るような自身の記憶に頭を痛めていると、不意に誰かの話声が耳へと届く。聞こえた方へと目を向けると、どうやらドアの前で何者かが話をしているようだ。

(私の部屋の前でブツブツと話すなど無礼な…ここは一つ嚴重に注意を…)

思い立って桜がベットから降りて部屋のドアへと近づくとつれて声と会話がはつきりと聞こえてくる。どちらも男性であり、どこか聞き覚えのある声だなど考えた直後だった。

『~~~~』

『~~~~!』

(何だ…?)

言い争っている…いや、片方が怒鳴っているのに対し、もう片方は聞く耳持たずに何かを起こそうとしている所だろうか。会話の内容が気になってしまった桜は耳を傾けると…

『だから、止めろって言うてんだろ!』

『ほら、もしかしたら監視室にいる奴も出払っているかも知れないし…』

『何のための『監視』役だと思ってんだ!それに見るからにここは嚴重になつて…』

『じゃあ、猶更桜ちゃんがいる可能性が高いね!それじゃあ——』

『つて、何蹴りを繰り出す体勢になつてんだよお前はああーツ!』

そんな言い争いが壁一枚越しに響く中、桜は話の流れからこの者達は扉を叩き壊して中に入ろうとしていることだけははつきりと分かり、「セーの」と呼びかけた瞬間に扉を開放した。

「つて、あれ——?ごふうツ!」

目標が消失したことでバランスを崩してしまった者…間桐光太郎はバランスを崩して室内に転がり込んで顔を床面に強打してしまう。ドアを開ける操作をした同時に身を引き、衝突を免れた桜は転がり込んだ男と、解放されたドアの向こうで額を追抑えて深くため息をつく男を見て一瞬、呆けてしまうが急ぎ意識を切り替えて身を引くとその手に魔力を集中させる。

「痛てて…つて、桜ちゃん!?やったよ慎二君、ドンピシャだツ!!」

「言ってる場合かよ早く立てよ馬鹿野郎!!」

鼻を摩って顔を上げた途端に桜の姿を確認し、歓喜の表情を浮かべる駄兄の頭部に踵を叩き込む慎二だったが、ケロリと立ち上がる光太郎に対し、踵落としで自身にダメージを負う結果となってしまう。

敵の間抜けなやり取りにどこか既視感を覚える桜は手に蓄えた魔力を放つタイミングを逃してしまいが、またも自分に向かい手を差し伸べる男へ警戒心を強め、後方へと下がる。

「桜ちゃん…」

「違う！私はガロニアだ…クライシス皇帝の娘なのだ！」

「それは間違った記憶だよ。君は間桐桜…俺と、慎二君の大事な妹で、家族なんだ」

「か、ぞく…？」

(いいぞ…桜にかけられた暗示は強力だったみたいだけど、それでも桜の中にある記憶までは完全にかき消すのは無理だったみたいだな)

光太郎の言葉を聞き、掌で燻っていた桜の魔力が消失する様子を見て、慎二は黙ってその経過を見守りながら自分の仮説が正しいと判断する。あの時も、光太郎の名を呼んだことが確かな証拠だ。

「違う…私は…私は…」

「帰ろう桜ちゃん、君のお姉さん…遠坂さんも、君を迎えに来ているんだ」

「姉さん…が」

漆黒に染まっていた桜の目に、再び光が宿る。怯えながら、しかしゆつくりと光太郎に向けて手を差し伸べる桜。光太郎と桜の手が触れ合うまで、あと数センチ…息を飲む慎二が攻撃を避けられたのは、運が良かったとした言いようがなかった。

「…ッ!？」

背筋に悪寒が走った慎二は光太郎の肩を掴んだと同時に床へと転がり、その刹那に風を切る音と共に光太郎が立っていた場所へと赤く光る鞭が叩き付けられた。急ぎ振り返ってみれば、入り口に怒りのあまりに歯をギリギリとならすマリバロンの姿があった。

「貴様等…一度に飽き足らず二度もガロニア様に戯言を吹き込むとは…万死に値するわ」

「違う…この子は俺達の妹だッ！お前達の言うガロニアは別にいるはずだ!!」

「き、貴様…」

光太郎の言葉に息を詰まらせたマリバロンは鞭を握る力を強めると、再度光太郎達に向けて攻撃を放つ。狭い部屋の中を慎二の襟首を掴んで何とか回避を続けていた光太郎だが、ついに窓際まで追い詰められてしまう。

「もう後はあるまい！覚悟ッ!!」

「それは…どうかなッ!!」

「おい 何で 窓を蹴り破って…ッ テアアアアアアアアアアアッアアアッ!!」

マリバロンが最後の一撃を叩き込もうと鞭を撓らせた途端、光太郎は慎二を担ぎ上げると背後にあった窓を蹴破り、窓枠に足をかけ、身を乗り出すと躊躇なく飛び出した。

ちなみに桜の部屋は宮殿の中でも高所にあり、少なく見積もっても地表まで40メートルは有している。

絶叫する慎二だが、その落下は5メートルもない地点で止まってしまふ。息を乱して今自分が座っているのは空を飛ぶバイクの上であるのだと理解するのにはばしの時間を有してしまうのであった。

『まさか高所からのダイブとは、こちらの予想を裏切るその行動に感服します、マスター』

「まさか直ぐに拾ってくれるとは思ってもみなかったよ！」

スカイモードのロードセクターに着地した光太郎は軽口を叩きながら答えると、背後で罵詈雑言を飛ばす義弟を無視し、奮闘中の凜とアクロバッターのいる場所へと急降下。

ハンドルを握り、腹部にベルトを出現させた光太郎は仮面ライダーBLACKへと変身。地表へと接近するとハンドルを背後でようやく持ち直した慎二に任せ、出現した怪人へと飛び降り、右足を突き出して落下していく。

さらにロードセクターは機体の下部からソーラーチャージシステムの光を光太郎に向けて照射。怪人の頭部に光太郎のキックが炸裂し、着地したその姿は太陽の戦士。

凜を庇うように立つ姿…仮面ライダーBLACK RXは現れた敵の大群に向かい、その名を轟かせた。

「俺は太陽の子——ッ」

「仮面ライダーBLACKッ!!RXッ!!!」

「光太郎さん…」

「ありがとう遠坂さん、助かったよ」

「全く…冷や冷やもんよ」

戦いによって土まみれになった顔を拭いながらも笑顔で答える凜

に頷いた光太郎は怪人軍団を背後に現れたマリバロン、そして桜へと向き直る。

一瞬でも光の宿った瞳は再び漆黒へと染まり、こちらを睨む妹の姿に光太郎は無言で、凜は歯ぎしりを立てて隣で頬を緩ませるマリバロンを睨んだ。

「もう貴様達を誰一人生かしてはしない…マリバロンツ!!」

「ハッ！出でよ、トリプロン共ツ!!」

『オオオオオオオオオオオツ!!』

桜の命令に頷いたマリバロンの声に応え、地中から姿を現したのは3体の怪魔ロボットだった。左右非対称の同型である2号、3号。そして宙に浮かぶ小型の1号。どれもが蟹を連想させる外殻、2号と3号はそれぞれ大小の鋭い鋏を携えている。

ガチガチと鋏を打ち鳴らす2号と3号は光太郎を左右から急接近。突然の出現とその見た目からでは考えられないスピードで近づくことに判断が遅れてしまった光太郎は敵の拘束を許してしまう。

「ぐっ！しまった!?!」

『どうりやあああツ!!』

「うわあッ!」

トリプロン2号と3号によって放り投げられた光太郎は着地を試みるが、その先にあったはずの地面が突然消失し、大きな穴が開いてしまった。なんとか穴の縁に手をかけようと光太郎は手を伸ばすが、縁へ手が触れる直前、真上から降り注ぐレーザーによって弾かれてしまう。

「なツ…!?!」

「ハハハハハ…これで貴様も終わりだ！」

蟹の甲羅そのものが浮遊した姿…トリプロン1号が巨大なモノアイから再度パルスレーザーを連射。光太郎を穴へと落下させるため、壁に触れさせまいと手足を集中的に狙つての攻撃だ。

「う、わあああああああッ!!」

穴の中で木霊する光太郎の叫び声が消える頃には、光太郎は完全に穴の底へ姿を消してしまっていた。

「ぐッ!?ここは…穴の、底なのか…?」

落下した衝撃と時間からして地下500メートルと言ったところか…と身体を起こしてマクロアイを発動する光太郎は天井は既に塞がれており、その隙間も僅か数ミリもないと判明する。

そして状況はさらに悪化を辿るのであった。

「ッ!?壁が…押し寄せてくるッ!!」

それだけではない。光太郎にむかいゆっくりと押し寄せてくる左右の壁から大きな刺が幾本も飛び出しきた。このままでは圧死どころか串刺しになってしまう。

「こうなれば、ロボライダーで…」

言うと同時に両手を交差し、左右へ振り払うと光太郎はその身をロボライダーへと変化させる。壁と刺をまとめて叩き壊すべく手を引くが、壁へと吸い寄せられてしまった。

「なっ!? これは…電磁石…なんて、強力なんだ…」

壁に張り付いてしまった光太郎は指一つ動かすことが出来ず、必死もがく姿をあざ笑うかのようにマリバロンの映像が映し出された。

『ハハハハハ…良い気味め間桐光太郎。さて、もうなす術のないお前に最高のプレゼントを見せてあげる』

「な…に…!」

映像が切り替わり、映し出されたのは銃を構えたチャップ達に囲まれた慎二と凜、そしてトリプロン2号と3号によって取り押さえられたアクロバッターの姿だった。

あの場には映っていないのだが、ロードセクターも抵抗せず、スカイモードのまま浮遊することしか出来ないであろう。

『冥土の土産よ。この者達の死ぬ様を見ながら、あの世に旅立つがいわ!』

「やめろ…やめろマリバロン!」

ロボライダーからRXに戻った光太郎は必死になって声を向けるが、マリバロンは聞く耳を持たず、攻撃の合図を送ろうと口を大きく開く。このまま『撃て』とマリバロンの口から出てしまえば、慎二と凜、アクロバッターは――

最悪な未来が光太郎の中で浮かび上がる中、マリバロンの声はその場に現れた者によって止まってしまふ。

「お止めなさい、マリバロンッ!!」

地上に立つ誰もが、その声を発した方へと顔を向ける。赤い装甲騎ライドロンのドアから飛び出した少女：サングラスにニット帽という見るからに不審である少女が自分の名を呼び捨てにしたことが気に喰わないマリバロンは攻撃命令を中断し、鋭い眼を少女へと向ける。その射殺すような視線に負けず、少女は胸の前で拳を握ると先ほどと同様に：それ以上の気迫を持ってマリバロンに向かい声を放った。

「今すぐ慎二様達を解放なさい、マリバロンッ!!これは命令ですわッ!!」

「ええい黙れッ!どこの馬の骨とも分からない小娘などに命令される筋合いなどないわッ!!」

手にした鞭で地面を叩き、少女を睨むマリバロンに対し、少女はサングラスを外し、ニット帽を脱ぎ捨てた少女は黒い髪を靡かせ、戦闘が始まるまでの疲労など露程も感じさせない勇ましい佇まいを見せた。

少女：ガロニアの登場にはマリバロンは勿論、慎二や凜すらも驚愕するしかなかった。

「この顔…忘れたとは言わせませんわ。散々、カプセル越しに眺めていたのですものね」

「そ…んな…なぜ、なぜここに…」

この時、この状況で何故本物のガロニアがここに現れるのか…

脂汗が止まらないマリバロンは横目で自分の隣に立つ桜を見る。なぜ、自分が…と口になっているが、このままでは彼女が偽物である事がこの場にいる者たち：最悪クライシス皇帝の耳にまで届いてしま

う。

この状況を覆すには、マリバロンの取る方法は一つしかなかった。

「な、何を言うかこの『偽物』めッ!!」

「…ッ!?!」

「皆の者、騙されるなッ!あの者は無礼にも幼いガロニア様に化け、我らの心乱すという卑劣な手段に打って出たんだッ!!」

平静を装いつつ、ガロニアを指さすマリバロンは流れる汗など構わずガロニアを偽物であると断定。その言葉に混乱を見せていたチャップ達も怒りをむき出しにして慎二達に向けていた銃をガロニアへと照準を合わせてしまう。

「な、なんて奴らだよおいッ!」

「何やってるの、早く逃げてッ!!」

敵の出した最悪の手段…このまま本物であるガロニアと自分達を消してしまえば、桜が替え玉であるという事実を知るものは地球に残った武やメデューサ達以外にいらなくなってしまう。

逃げるよう促す凜だが、ガロニアは首を横に振り、変わらず決意に満ちた瞳でクライシス帝国を見つめていた。

「ワタクシは…逃げません!」

「なっ…!?!」

「ワタクシは、この目で見てきました…ただ桜さんを助ければそれで終わりと、そうすればワタクシの罪は消えると思っていました。けど、違いましたわ!」

光太郎と接触したレジスタンス。彼等がかつての怪魔界を取り戻すべく、戦っている。本来なら戦いに身を投じるべきではない女性や子供たちさえも。

このような世界などあつてはならない。ここまで一緒に行動して

くれた光太郎達が地球と、そして怪魔界の為に戦ってくれと言うのなら、自分は自分に出来る戦いを、この場で宣言しよう。歪めてしまった怪魔界を、クライシスの犯した罪を正すのが、自分の役割――
ならば、自分がすべき事は…

「ワタクシは…宣言します！クライシス帝国の次期後継者として、この星をかつての平和で自然と人が共存できる星へと戻すと！そして争い事で解決しようとする現皇帝と戦う事をツ!!」

「…ッ!？」

悪夢でも見ているのか…マリバロンはクライシス皇帝の血を引きながらも、皇帝の考えを完全に否定し、自分達とは相反する道を宣言したガロニアの言葉に完全に飲まれてしまった。

だが、マリバロンも後には引けない。彼女を偽物と決めつけてしまったからには、もう本物のガロニアを偽物として排除する他ないのだ。

喉の奥が震え、命令を中々繰り出せないマリバロンの頭上に突然立体モニターが出現した。

『これはこれは…姫様の偽物は現れたと聞いてみれば革命宣言…どこまでも楽しませてくれますねえ…』

「じゅ、ジュピトルス殿…」

モニター越しに映る醜く笑うカエル顔の星騎士はギョロリとした目を桜へと向ける。その爬虫類のように不気味な視線に勘付き、ビクリとした桜へ、ジュピトルスは口元を歪めて述べる。

『自分の偽物があのような戯言を口にするのはお気に召さぬでしょう。故に、姫自身で偽物を討ち取るが良いでしょう』

「ん、こいつ…!」

ついには迫った壁に両手で押し上げなければならぬ状況となつてしまった光太郎は突然現れ、どこまでも残酷な仕打ちをさせるのだとモニターに映る星騎士を睨むが、ジュピトルスはそれすらも気付いているように、口元を歪めると、ジュピトルスの言うままに手へ魔力を収束し始めた桜の顔を拡大して表示させる。

『見えますか間桐光太郎? これで彼女が本物のクライシス皇帝の娘となるのです。自分を偽物と知らず、本物を殺してしまうという、何とも愉快な展開なのでしょうか?』

「な…:にい!」

この通信はジュピトルスから光太郎に直接語りかけられているものであり、今必死に止めるよう呼びかけている慎二や凜、そして魔力弾を向けられても一步も後を引かないガロニアには聞こえていないのだろう。

『もちろん、これだけで終わらせるつもりはありません。本物のガロニア姫を始末した後はその少年と少女も同じように殺して差し上げますよ。彼等も妹の手で死ぬるのなら、本望でしょうしねえ』

「…お前…まさかこれが目的でえ…」

『フホホホホホホ…ようやく貴方の苦しむ声が聴く事が出来ましたねえ。ええそうです。あのよう状況になったのは偶然ですが、ここまで貴方を苦しませるよう演出したのは私です。私の愉しみの為にそうしました。なにか、いけませんでしたかねえ…？』

白々しく問いかけてくるジュピトルスは、さらに別の映像を光太郎の前で映し出す。場所は地球…冬木の外れにある採石場で未だ戦っている武達の様子であった。

「みんなっ…」

『健気ですねえ…ありもしない貴方達の帰りを待つて私の召喚する怪人達に戦い続けているのですから』

自分達が桜を救出すると信じて送り出してくれた武達は、正に満身創痍。

途中で駆けつけてくれたアーチャーや衛宮士郎はともかく、魔力を消耗したメデアは地上に降り、結界で身を守ることが精一杯。

刀を失ってしまった武は鉄拵えの鞘で敵と応戦。

メデューサは既に折れてしまった鉄杭で怪人に抵抗することが限界だった。

『どうですかあ？今死の縁に立ち、貴方の大好きな方々が危機を迎える中で何一つ出来ない御気分は…』

こいつは…どうしてこんなにも人々が苦しんでいる姿を見るのが楽しいんだ。

苦しませるのなら俺一人でいいはず。
なぜ、なぜなんだ…？

『さあお泣きなさい！後悔なさい！その姿でようやく私の味わった屈辱が張らされるのですからねえ！』

「侮辱…だと？」

そんな事をした記憶はない。とうとう肩の位置まで迫ってきた壁に圧迫される光太郎に、丁寧にもジュピトルスが応えてくれた。

声すら出ない、本当に下らない理由を。

『そんなこと決まっています！だって貴方、絶望をしなかったじゃないですか！あの娘のクローンを串刺しにした時、本来なら絶望に暮れて死んでいたはずなのに！貴方は！生き残った！！』

「……………」

『そんな事は許されない！私の手で苦しんだ者は皆平等に、死ななければならぬのですおッ！！』

熱の込めて持論を振りかざしているようだが、光太郎には良くわかった。

つまり、こいつは自己満足の為に、みんなを追い詰めたんだ。

俺が思い通りにならなかった、そんな理由で。

ガロニアさんを陥れ、

光太郎の腹部で赤く輝くサンライザーが銀色で流水のように洗練されたベルトへと姿を変え、キングストーンを宿す宝玉もBLACK時と同様に1つへと戻り、中央でより大きく輝く形状へ変化。

ベルトから流れる輝きはさらに光太郎の姿を変質させ、赤い複眼に口もとを完全に多う銀色のマスク、青、銀を中心としたボディへと変化させた。

完全に姿を変えた光太郎はその場で膝を着き、両手を交差させた途端、光太郎の身体は水色の液体状へと変わり、天上の僅かな隙間へと浸透。

一気に地上へと移動するのだった。

『さあ、殺して差し上げるのですッ!!』

地上で桜がガロニアに向けて魔力弾を放つ光景ばかりに目を向け、地下の光太郎の苦しむ姿が二の次となってしまうたジュピトルスは絶叫する中、桜の手の中で魔力がより強く圧縮されている。だが、当の桜には迷いが生じていた。

(あの少女の立ち振る舞い…そして強い意志。本当に、偽物なのか)

先程のマリバロンの動揺から、彼女がただの偽物ではないと考え始めた桜は、未だ逃げる様子もないガロニアを見る。

何者なのだ、彼女は…そして、自分は。

自問自答する中、突然自分の前に黒い背中が現れる。

「ガロニア様。あの娘の処刑はこのマリバロンにお任せください」
「マリバロン…」

小さく自分の名を呼ぶ桜の前に立ったマリバロンは余計な事をしたジュピトルスに敵意を膨らませながらも、これ以上事を拱く訳にはいかない、その手に赤い鞭を出現させる。

ここまで事態をややこしくしてしまったのは、自分の責任。ならばせめて帳尻は自分で付ける為に、今ここで本物のガロニアを殺す。

「お覚悟を」

逃げろと叫び続ける凜や慎二にも、背後に立つ桜にも聞き取れない程度に呟いた直後、赤い鞭はガロニアの胸を貫くべく直線を描いて伸びていった。

だが、その一撃はガロニアに届くとは無かった。

地表から噴出した青い液体に鞭は弾かれ、さらにその液体はガロニアの前に降り立つと一瞬にして人の形へと変わったのだから。

「な、何者だ貴様ツ！」

いや、もう聞くまでもないかもしれない。

今のこの時、彼女を庇い立てする存在など、たった1人しかいない。その形、その姿が変わろうとも、たった1人しか。

「俺は怒りの王子——」

「RXツ!!バイオ、ライダーツ!!!」

「…なにやらまた姿を変えてしまいましたか」

クライス要塞でバイオライダーの出現に冷めた目で見つめるジュピトルスはまたも期待外れと言わんばかりにモニターを見る。どうやらあの間桐光太郎という人物は苦しめれば苦しめようとするほど

に力を増してしまうようだ。

だが、今回はそうは行かない。

例え怪魔界をどうにかできたとしても、地球で危機に陥っている仲間を救う事など出来はしないのだからと、地球の様子に目を向けた途端、今度こそジュピトルスの表情は凍りついた。

自分が目を逸らしていたのは、ほんの5分程度。

その間に、何が起きてこうなってしまったのだ。

止めを差す為に、また新たに別世界の怪人を送り込んでいたはずなのに…

今、ジュピトルスの部屋で映し出されている地球の映像――

爆炎の中、紅い鎧武者が両手にした刀で次々と怪人達を切り裂いている光景が映し出されていた。

第48話

それは仮面ライダーBLACK RXが怪魔ロボット トリプロン達によって地中深くに落とされ、家族や仲間達を追い詰められる様を見せつけられていた時、地球で起きた事だった。

「ぐっ…こちらも、駄目か…！」

無尽蔵に出現する怪人相手に刀2振りで戦い続けていた赤上武であつたが、長時間に渡る戦闘の中で刀身が徐々に亀裂が走り、ついに砕け散ってしまった。

アーチャーの投影魔術によって生み出され、抜群の切れ味と強度を誇る業物であつたが、それでも怪人を相手には分が悪かつた…いや、光太郎達が異世界へと向かつてから数時間以上が経過した今まで持ち堪えた事だけでも御の字だろう。

武は直ぐ様に刀身を失つた刀を手放すと、刀を収めていた鉄拵の鞘を手にし、迫る怪人へと叩き付けた。

だが所詮は鞘。

怪人の攻撃が届く寸前に手足を払い、回避することが限界であり、武は攻撃する事すら出来ないでいた。

ついにはコートを纏ったモグラの怪人…モルイマジンの鍵爪で鞘を失ってしまった武は怪人達に囲まれてしまう。それでも諦めず己の拳を怪人の顔面に叩き付けるが効果はまるでなく、蚊に刺された程度にしか感じない怪人に拳を掴まれた武の腹部に怪人の膝がめり込む。

「が…あ」

身体を貫くような痛みに一瞬呼吸が止まり、膝を地へつけてしまっ

た武へ怪人達の容赦のない暴力が襲う。困ったモールイマジンの足蹴を受け続けた武はついに大地に伏してしまい、苦しくも立ち上がろうとするが背中を足で押さえられ自力では立ち上がれない姿を見て盛大に騒ぎ始めていた。

『いいよいいよ』

『楽しいよ』

腹が振ればかりに笑い続ける声が頭上から響く中、武は呼吸を荒くしながら顔を上げた目に仲間達の惨状が映ってしまった。

空を覆い尽くすレイドラグーンの群れを相手に同じ土俵で攻撃魔術を放ち続けていたメディアは地上へと落ち、尽きかけている魔力で結界を展開。敵の攻撃を受けずにいるのが精一杯だ。

地上からメディアを援護射撃を続けていたアーチャーだったが、続々と召喚される怪人達の数の方が彼の放つ矢よりも上回ってしまった、ついにはアーチャー自身が標的とされてしまう。

アーチャーの護衛に回っていた衛宮士郎は投影魔術の指南を受けていた賜物なのだろう。大きく息を乱しながらも手にした剣は欠けることなくまた1体の化け猫を粉微塵にすることに成功するがそれでも彼に迫る怪人の数の方が勝っている。

そして彼等に比べても体力、魔力、武器ともに消耗が激しいのはメディアサだろう。

光太郎達が怪魔界へとワープする寸前に出現した怪人達へ真っ先に攻撃を繰り出し、道を遮る怪人達を文字通りに全力で押し出したメディアサの攻撃は誰よりも苛烈を極めるものだった。

桜から自身の魔力を他の物体に込める術を参考にし、手持ちの武器である鎖と鉄杭を自身の魔力を纏わせて怪人を倒し続けていたが、常時魔力を武器へと伝わせる戦法は、魔力・精神力共に大きく消費させる。

短期決戦向けであるその戦法をあざ笑うかのように怪人の召喚は途絶える事を知らず、10度目の召喚が行われた時にはメデューサの鎖は全て引きちぎれ、鉄杭は半分に欠けてしまっていた。

「ク…アアツ!!」

体力・魔力ともに底を尽きかけ、全身に打撲や切り傷を負いながらもメデューサは手にした鉄杭の破片を逆手に持ち、怪人の眼球へと突き刺した。悲鳴を上げる怪人…巨大な槍を手にしたグールと呼ばれる怪人の悲鳴など気にかけることなく、メデューサは鉄杭を突き刺した状態から強引に下へと引きずり降ろす。

グールは目から顔、喉、胸を経由して抉られた傷から鮮血を撒き散らしながら断末魔の声を上げて地へと伏せる。

「ハアツ…ハアツ…ハアツ…」

もう形振り構わずに、敵を殺す為に戦う姿に戦慄を覚えながらも、武は彼女をあそこまで駆り立てる理由を理解していた。

「ま、けない…私は…」

光太郎が戻るまで、戦い続ける。

あれだけ気まずい状態となりながらも、やはり彼女は光太郎を思っている。

そして光太郎も、口では言わないがどうにか彼女と以前のような関係に戻りたいと願っているはずだ。

そんな光景をまた目にしたい。

(ならばこんな連中などに邪魔など、させる訳にはいかん!)

奮起し、立ち上がろうと手に力を込める武であったが、さらなる絶望が押し寄せた。

「あれはっ…!？」

空中に突如として現れる紫の円陣。さらに円の中で細かな文字や図形が羅列し、巨大な魔法陣が形成される。間違いなく、新たに怪人が召喚される前兆だ。

魔法陣が地表に向けて光を照射し、その光が止んだ場所には怪人の群れが雄叫びを上げ、武達を獲物として一斉に飛び掛かる…単純な力押しであるが、少数の敵に対してこれ程有効な手段はない。

異世界の怪人と言えど、同じ個体ばかりであれば戦っていくうちに攻略法が幾つも浮かぶのだが、立て続けに別の怪人が、それも数十体と現れてしまうとまたも敵の特徴を見極めるところから始めなければならぬ。

このイタチゴッコすら狙いだとすれば、こちらを苦しめる為なら手段を選ばないという敵の性格の悪さが伺える。

武が敵の分析に意識を回している間に、ついに新たな怪人の群れが姿を現した。

ずんぐりむつくりで灰色の体色。どこか愛嬌のある顔つきではあるが、それを忘れさせてしまう、鋭い爪を両手に持つ怪人を、武は知っていた。

「インベス…だと？」

それは武が戦極の世界にいた頃。突如として現れた男に惑わされ、多くの尊い命を奪った存在と成り果てていた時。変身時に使用するドライバーに蓄積されていたデータに『インベス』なる存在が記録されていた。

とある世界に存在する『ヘルヘイムの森』と呼ばれる場所に生息する生物であり、その正体は森で棲息する果実を食してしまった生物の成れの果て。その中には武と同様に人間だった者すらいた。

召喚されたのは初級インベスと呼ばれる個体ばかりのようだが、それでもあの爪によって傷を負ってしまえば、果実の種子が人体に入り込み、人の身体を食い破り、糧として繁殖を始めてしまう。その結果は…死だ。

もし、あの怪人に弱った仲間達が傷つけられてしまったら…

「みんなッ！あの怪人に——がッ!？」

『煩いよ』

『黙ってるんだよ』

武がインベス達の情報を伝えようと大声を上げたが、モールイマジに再度背中を足蹴されてしまい、遮られてしまった。インベス達の攻撃だけは受けてはならない。その忠告を新たな敵に警戒する仲間達へ知らせねばと手を伸ばすが、武の思いもむなしく、ついにインベス達が動き始めてしまった。

『シャアアアアアアアアア!!』

インベス達の行先は、やはりメデューサ達。そして武自身にも5体近くのインベスが声を上げて突進してくる。この場を脱して距離を

取りたいが、未だ自分を押さえつけているモールイマジンたちは離すはずもなく、鬱陶しそうに後からやってきた怪人達を見ながらぼやき始めた。

『なんだかこつちへやってくるよ』

『後から来て生意気なんだよ。でも…』

それぞれが斧やドリルといった異なる右腕を真上へと翳すモールイマジンたちは、遅れて召喚されたインベス達に手柄を横取りさせない為に直ぐにでも止めを刺すつもりなのだ。

『一足いつ!』

『遅かったんだよおツ!!』

「ぐっ…!」

ついに振り下ろされる最期の一撃。武の名を呼び、怪人を押しつけて駆け寄る者もいるが、どの道もう間に合わない。それでも諦めきれない武は唯一動く両手を頭部の上に翳す。腕2本の犠牲で済むのであれば御の字。後は足だけでも戦って見せる。

敵の凶刃が武へと届くその刹那。

武でさえ、腕を振り下ろす敵でも予想すら起きない結果が現れるのだった。

『おげえツ!』

『むぼおツ!』

背中に衝撃を受け、間の抜けた声を発して吹き飛ぶ2体のモールイマジン。

2体の怪人を吹き飛ばしたのは、今まで地に伏していた武でも、離れて怪人達に囲まれたメデューサ達でもない。

「なぜ…」

『……………』

「なぜ、インベスが、俺を助けたんだ…?」

無言で見下ろす武がぽつりと呟いた通り、まさに止めを刺さんとしたモールイマジン達に体当たりをしかけ、武の命を救ったのだ。

モールイマジン達が言ったように自分達で自分達で倒すつもりかと考えたが、それも間違いであると思い知る事となる。

みれば自分だけでなく、メデューサやアーチャー、メディア達の元へと向かったインベス達は彼等を囲う他の怪人にも同様に体当たりをしかけ、その鋭い爪で怪人を切り裂き、少数ではあるが背中に蟲のような羽を生やしてレイドラグーンと戦闘を始めた個体すらしる。

これは見境なく他の怪人に襲いかかっているのではない。

インベス達は、武達を助ける為に怪人と戦っている。

なぜそのような事が起きているのか理解できない武へ、1体のインベスが禍々しい爪を生やした手を伸ばしてきた。

思わず警戒してしまう武だが、そのインベスからはまるで殺気は感

じられず、武に手を向けたのも、攻撃の為ではない。

「こ、これは……」

驚愕する武の目に映ったのは、インベスの手に握られている一つの果実。武に取っては忘れる事すらできない、自分を破壊の化身へと変える道具……ロツクシードの前身である果実だ。

異様な食欲にそそられてしまうがもしこの果実を口にしたらが最後。今、武の目の前に立つインベスと同じ姿となってしまうだろう。

仲間を増やす為の行動かと思渡してみると、土郎の背後に迫ったミイラ……クズヤミーを腕で滅多打ちにするインベスも、疲労のため自力で立つことすら叶わないメディアを担ぎ、移動するインベスも果実を渡す素振りを見せていない。

ならば……

「俺が変身できると解つて……差し出しているのか……？」

『ウウウウウウウウ……』

武の問いに喉を鳴らしてその大きな頭をゆっくりと縦に振る。なぜインベスが助けてくれるのか定かではないが、この果実でロツクシードを成形し、変身できればこの場を切り抜けられる。活路を見出した武はインベスの持つ果実へと手を伸ばすが、ふと武の手が止まってしまう。

この果実を手にし、再び変身できるようになったとしても、戦極の世界でのように殺戮を好む卑劣な存在となってしまうのなら……

ここに居る怪人達だけではなく、メデューサ達や、助けてくれたインベスにまで手にかける可能性だってある。そして自我を保てたとしても、全てを破壊しろと呼びかけるあの声が聞こえてしまったら……不安に駆られた武が迷ってしまった時、果実を差し出していたインベスの身体がビクリと波打ち、全身が震え始めていた。

『邪魔するんじゃないよ…』

先程インベスの体当たりによって吹き飛ばされたモールイマジジンが、鉤爪で貫いていた。

さらに抉るように手首を返し、それにつられるようにインベスももたえ苦しむ声を上げる光景に、武は気が付けば己の拳をモールイマジンの顔にめり込ませていた。だが、既に力が尽きかけた重みの無い拳。モールイマジジンがダメージを負うどころか、武自身の拳に傷を増やしたに過ぎない。

『うざったいよおツ!!』

別個体のモールイマジジンに蹴り飛ばされた武は数度地面を転がっていき、止まった時にはもう立ち上がる力すら残っていない。息を乱す武が目にしたのは、戦局が変わりつつある光景。

インベス達の攻撃に最初こそは混乱した怪人軍団だったが、それでも数は圧倒的。空を飛んでいたインベスは羽を塗り取られ落下し、アーチャー達の援護に向かったインベス達も敵の標的とされ、追い詰められている。

まただ。

またも自分は判断を誤ったと、武は拳を強く握りながら己の判断力の無さを思い知る事となった。

(あの時…何の疑いも抱かず、果実を手にしていれば…)

これは、己の弱さ。

変身することで再び己を失うという恐れ。

自分を助けてくれたインベスを信頼出来なかった故の疑心。

どれもが、己の弱さだ。

(俺は…あれから何一つ変わっていない)

償う道を、一緒に見つけようという光太郎の言葉に甘え、慎二や桜へ戦う術を伝える日々はどこか満足していた。

それでは結局、変わらない。変わらないのだ。

自分の無力を痛感し、再び敵の猛攻の中で朽ち果てるしかないのかという考えが過った武の耳に、自分へ何かが接近する音が響く。

「お前…」

閉じていた目を開くと、モールイマジンに背中を貫かれたインベスが、ズリズリと匍匐前進で武へと近づいているではないか。

『邪魔、すんじゃないよー!』

『どくんだよー!』

さらに後方ではインベス数体掛かりでモールイマジンの動きを止めており、果実を手にしたインベスへ手出しさせないよう食い止めている。背中から血液を流すことなど構わず、手にした果実を武へと伸ばしていた。

「どうして…どうして、俺などの為に」

目元に涙を溜めて問いかける武。その果実を食すれば、傷が治るところか今の姿からより強い姿へと変貌できるはず。だというのに、このインベスは武へと果実を渡そうと譲らなかった。

「…っー!」

震える手で懐に手を伸ばした武は、以前自分を助けてくれた謎の戦

士の言葉を守り、常に持ち歩いていた道具を取り出すと、下腹部へ当て自動装着させる。

『お前が持つてるドライバー、無くさずに持っているだ』

あの言葉が、この時の為なのかは分からない。だが、今自分がするべきことなど、決まっている。

武は迷いなどなく、インベスの差し出した果実を掴んだ。

「ハハハ…」

白く霞がかつた空間に立ち尽くしていた武は、周囲を見渡す。仲間達は、怪人達は、自分を助けてくれたインベスはどこにいったのか？

ともかく移動しなければと動こうとした武は、背後から近づく気配を察知し、足を止める。

次第に大きくなっていく足音の方へと振り返り、霞の向こうから次第に濃くなつていく輪郭から、恐らく人間——男性だろうと推測する武は身構えるが、彼の前に現れたのは、予想すらしていなかった人物だった。

「お前は……」

「よっ。久しぶり…っていうのも、おかしいか？」

黒髪に、どこか人懐っこい笑顔を武に向ける男の服装は青いパーカーにチノパンという若者らしいものだが、武にとっては因縁の深い相手。否、恩人と言ってもいいだろう。

彼は、葛葉紘汰は暴走した武を止めてくれた戦士の1人なのだから。

それに…彼の纏う雰囲気から、自分と戦った時とは別の次元の存在となっている事も読み取れる。

「そうか…運命の巫女と共にお前は…」

「ん…その辺に関しての説明はしなくて済みそうだな。まずは、アンタが一番知りたがってる事から話してもいいか？」

「ああ…」

説明を始める紘汰に武はゆっくりと頷く。

紘汰がこの場に現れた理由。

それはとある世界、とある星での出来事だった。

広い草原の中。

星の統治者である『始まりの男』葛葉紘汰と『世界の破壊者』門矢士は上空に出現した魔法陣を見上げ、自分達の立てた策を再度確認する。

「いいか。以前にも話した通り、俺の目的である世界は何者か魔術によってその『道』を閉ざされてしまっている。俺や海東の力でも、その世界に踏み込むことができない」

「そして他の世界からは次々と怪人達がその魔術って奴で送られている。しかもその魔法陣は怪人だけを浚って人間や俺達のような存在は弾いちまう」

「その原因を取り除くには、術者本人を倒す以外に方法はない。だが、そんな連中が現れたからには間桐光太郎や他の国で戦っているライダーだけでは手に負えない」

以前に士が光太郎達の世界へと渡った時、光太郎以外にも10人の仮面ライダーが存在し、彼等とも接点を持つことが出来たが、この状況では連絡を取ることが出来ず、ライダー全員が集結することは難しい。

特にクライシス帝国の本隊と戦っている光太郎は明らかな戦力不足となりつつある。さらにこのまま時間が経過し、術者を倒すことが出来なければ確実に士が抱く『嫌な予感』が的中する可能性が高いのだ。

「こっちは世界へと渡れない。だが、向こうは求めている怪人だけを呼び寄せることが出来る。なら、敵の魔術を利用するまでだ」

士が顔を向けた先には、この星で生息するインベスの集団が雄々しく声を上げていた。

士と紘汰が取った手段。

それは紘汰の力によって敵の洗脳されない状態となったインベス達をあえて魔法陣により召喚させ、別世界にいる人物へ再び力を与えることであった。

「…頼んだぞ」

『……………』

紘汰が一つの果実をインベスに手渡すと、主の言葉を理解したその個体は力強く頷く。お任せくださいと言わんばかりに。

そして上空に出現した魔法陣がより強い光を発した直後、士と紘汰の前からインベス軍団は消失していた。

「そういう、ことだったのか。俺達を助けてくれたのは」

「…済まないと思っっている。もう戦う必要のなかったアンタに、またあの力を渡そうとするなんて」

先程の笑顔とはうって変わり、謝罪する紘汰を手で制した武。助けしてくれた紘汰が頭を下げる必要などない。以前の世界でも、現在の世界でも自分は救われてばかりだ。さらに言えば、この世界で一度変身した時も、恐らくこの青年が手引きしてくれたのだろう。

一時的に記憶を失った自分に、歩む道を見つけるきっかけになると考えて。

本当に、頭が上がらない。

「礼を言うのは、むしろ俺の方だ。こうして再び力を授かり、この世界の危機も、教えてくれた」

武の手にあるのは、赤い果実に黒い斑模様が走る錠前…ブラッドオレンジロックシード。例え再びあの『声』に飲まれそうになっても、もう負けない。

これだけの恩と後押しを受けながら、自分に負けることなど許されないのだ。

ロックシードを強く握る武の姿を見て、絃汰は再び笑顔を浮かべる。

「もう、自分に怯える必要はないよ。『変身』したアンタなら、そいつは使いこなせるはずだ」

自分の内面を讀んでいたかのように今の赤上武を肯定した絃汰は無邪気な笑顔を浮かべるが、存在が気薄となったかのように、透けている。

「つと…やっぱロックシードを通して話すのはもう限界か」

「そうか…お前は、別の世界から意識を送っていたのだな」

「ああ。魔術師をどうにかしない限り、話せるのはこれで最後かもしれない。だから、こいつも渡しておく」

「これは…？」

絃汰が武へと渡したのは2つの道具。どれも使い道は武にとっては理解できず尋ねようとしたが、それすらも讀んでいたかのように絃汰は説明した。

「それは俺の仲間…土が他の世界にいる人たちに頼んでどうにか手に入れた『力』だ。お前達なら、正しく使えろと信じてな…」

「正しく…」

「そして、俺が最後に出来るは、これぐらいだ…」

人間の姿から『始まりの男』となった絃汰の手から光の粒子がゆつくりと浮遊し、粒子は武が装着した戦極ドライバーの右側へと収束する。

「頼んだぜ、武。もう一人の、『鎧武』…」

「…今のは…幻ではないな」

手にしたロックシードも、絃汰から受け取った2つの道具も、どれもが実体だ。

今までのダメージが無かったかのように立ち上がった武は、未だ続く戦地の中で立ち上がり、苦しみながらも自分を見上げるインベスへと告げた。

「後は任せてくれ。俺がいる限り、もう誰も傷付けさせはせん！」

2つの道具を懐に収納し、決意を新たにした武はロックシードのポタンを力強く押し込む。

『ブラッドオレンジッ！』

ロックシードが開錠されたと同時に空間が避け、血のように紅く、黒い模様が走る球体が出現した。

「なんだあれは…！」

驚きの声を上げるアーチャーだけではなく、メディアや他の怪人達すら、その異様な存在へと目を向けてしまう。

そして彼等の驚きは、その程度では終わらない。

戦極ドライバーの中央へロックシードをはめ込み、上から錠を固定、『ロックオン!』の音声と同時に力強く爪弾かれるギター音が周囲へ響く中、その言葉を武は木霊させた。

「変身ッ!」

『ソイヤッ!!』

『ブラッドオレンジアームズ!!』

『邪ノ道オンステージ!』

球体が武の頭へと落下しと同時に全身を包む紺色のライドウェア。球体は前後左右と四方へと展開。

赤い果汁を思わせるエネルギーが飛び散った後には、鬼神の如く立つ紅い鎧武者の姿があった。

「武神鎧武、推して参るッ!!」

名を名乗ると同時に、その存在に茫然と立ち尽くしていたモールイマジン：武へロックシードを渡そうとしたインベスの背後から攻撃を仕掛けた個体へと走り、モールイマジンが正気に戻っていた時には、武は怪人の背後へと移動していた。

腰に収めた刀…無双セイバーを振り抜いた体勢で。

『き、がつけば…やられてたよおおおおおおおッ!!』

断末魔と共に爆炎の中へ消えた敵になど目もくれず、武は次の標的へと走り始めた。

インベスを複数で攻撃するシアゴースト達の背中に目がけ、無双セイバーの鏢に装備されているエネルギー弾を乱射、振り向いた直後に無双セイバーとブラッドオレンジアームズ専用武器、大橙丸の二刀で切り裂き、倒れたままこちらを見上げるインベスへと声を放った。

「すまないが、あの者をメディアア殿のところへ。傷を塞げば、まだ間に合うはずだ!」

『っ…!』

「頼むぞ!」

立ち上がり、頷いたインベスに傷を負った個体を託し、戦場を駆ける武。その駆けた後はすれ違った怪人の爆炎が次々と発生し、絶対的に有利であった怪人軍団の猛攻は傾きつつあった。

「なんなのですかあれは…あの者は変身できないはずではなかったのですかあッ!!」

ヒステリックに声を上げるジュピトルスは壁を叩き、エネルギーを纏った蹴りでタキシードの怪人を5体同時に葬った武を睨む。怪魔

界で姿を変えた間桐光太郎を苦しめる策は、彼の手の届かない地球で行うしかなかったが、これは予想外にも程がある。

このままでは武1人に全滅しかねないと考えたジュピトルスはある事を思いつく。

余裕を取り戻し、醜く口元を歪めた星騎士は、残った魔力で召喚する怪人を『1体』に絞り、ボスガンから聞いた暗号をデータベースで照合を開始した。

「フンッ！」

掛け声と共に二刀を左右から迫った怪人へ放り、それぞれが怪人の眉間へと深々と突き刺さった。手持ちの武器を回収などさせまいと上空から急降下するレイドラグーンの群れに拳を突き出す構えを見るが、左腕と左右の足を飛びついた化け猫達に取り押さえられてしまう。

武の首を狙うレイドラグーンとの接触まで、あと数秒を切った途端、武は右手でベルトに備えられた小刀カッティングブレードを3度操作。

『ブラッドオレンジスパークング!!!』

音声と共に展開していた紅い鎧が再度球体へと戻り、レイドラグーンの攻撃から頭部を守る事に成功する。だが、それだけでは終わらない。

アームズは球体のまま高速で回転し、アームズへと触れていたレイドラグーン達を文字通り『削り』とつたのだ。

その名の通り血で染まった球体が展開し、鎧武者となった武の姿に慄いた化け猫たちに、別方向からの衝撃が襲う。

武に組み付いていた化け猫達をインベスが引き剥がし、グール達が

手にしていた槍や鉾で化け猫を叩き伏せ、止めに自分達の爪で胴体を貫き、木端微塵とさせていた。

「そうだ！怪人達を倒す時は必ず複数で攻撃をしかける！そして傷を負った者は後方に下がりメデイア殿の応急処置を受けた後に戦線に戻れ！決して無理はするな！」

『シャアアアアアアアアアアアッ!!』

武の号令に両手を上げて咆哮するという応答を見せるインベス達に、メデイアは呆れながらも傷ついた者の治療を続けていた。

「まったく、人を便利屋のようにつかうなんて」

そう言いつつインベスの足に手を当て、回復魔術を施すメデイアにはもう疲労の色はない。インベス達に保護されてから手持ちの薬草もそうだが、ここまで怪人達が倒された際に起きた爆発を魔力へ変換し取り込んだことで開戦時以上の魔力を蓄えたのだ。

「何時の間にそんなものを…」

「ただ一方的にこちらが力を消耗するなんて、馬鹿げた戦いなどするつもりはありません」

「まったく…女狐であることにはかわりないな」

「ふん、言っていないさ…あれは？」

驚くメデューサにつまらなそうに答えたメデイアへアーチャーは皮肉を口にするが通じない様子だ。だが、当のメデイアはまた新たに発生した2つの魔法陣へと目を向ける。

「また増援…なッ!？」

治療を終えて立ち上がった士郎は驚愕の余り目を見開いた。

新たに現れたのは機械仕掛けの怪人：サイボーグサイ怪人とサイボーグマンモス怪人の量産機だ。

どれも超重量型であるが故に、以前アーチャーが倒す時すら全魔力を投じてやっと倒した相手が数十機も現れてしまった。だが、それ以上に目を引いてしまうのは、2つ目の魔法陣から現れてた1体の怪物：今まで召喚された怪人と違いがあるとすれば、大きさ。

30メートルは下らない大きさを誇るその怪物は黒い体色に3本の角、6つの目を持ち、猛牛を連想させる姿であった。

ある世界でギガンデスヘルと呼称されるその怪人は口から無数の火球を打ち放ち、標的である武達と自分の仲間である怪人たちすらも纏めて葬ろうと攻撃を続ける。

「ぐうッ！」

次々と迫りくる火球をどうにか切り裂いて直撃を避けてはいるが、ノシノシと地面を陥没させて迫るサイボーグ怪人達の射撃まで手は回らず、次第にダメージは大きくなっていった。自分のように鎧を纏わないインベス達は深手を負ってしまう。

どうにか下がらせて標的を自分1人に絞らせようとするが、そこで耳障りな声が当たり一面に響いてきた。

『何をしている！そんな血なまぐさい者などではなく、後ろで控えている者達を狙うのです！』

「なッ!? 貴様……!」

空中に浮かぶ立体映像……武に取っては忘れられない相手……ジュピトルスはカエルを思わせる顔で武を見つめると、愉快だと言わんばかりに、ギガンデスへと指令を下す。

『さあ……地獄で間桐光太郎を待っていないなさいッ!!』

大きく開かれたギガンデスの口元に、これまでにない程大きな火球

『…なっ…なっ…』

口をパクパクとさせるジュピトルスに、両腕が黒焦げとなった武は無双セイバーの切っ先を向け、先ほどとは全く逆の立場となったように告げる。

「そうしてただ後方に隠れているだけでなく、正面から挑んで来たらどうだ、『誇り高き星騎士殿』？」

ガロニアや光太郎から事前に自分を襲った者の正体を聞いていた武の挑発は完全にジュピトルスの理性を崩壊させることとなったらしい。口調などに意識を向けず、眼球を明後日の方へと向けて怒り心頭となったジュピトルスは残ったサイボーグ怪人とギガンデスへと命令した。

『者共おツ!!あの匹夫めを必ず私の前に引きずりだせえ!!ただし四肢を切り落とし、代わりに鉄棒を溶接し犬のようにしか歩けない状態で連れてくるのだアツ!!』

狂ったのか、それとも本性なのか。もはや判別の付かない叫びに従い残ったサイボーグ怪人達とギガンデスが前進を始める。

未だ数では圧倒的に不利。だが、武には負ける気などまるで起きない。

「さあかかってくるがいい!まとめて相手をしてくれる」

両手が黒く染まり、無理をしたために2つの武器の刀身は半分以上が溶けてしまっている。それでも、武は一步も引くつもりはない。

(守るためならば、いくらでも強くなれる。そういうことなのだ、光

太郎殿)

改めて光太郎の持つ強さの意味を知った武の心には、以前のように敵を殺せというの声など一切聞こえない。

心のままに、守る為に戦うと決めた武の存在を認めたかのように、それは『開錠』された。

「これは…?」

ドライバーの右サイドから聞こえた金属音に思わず目を向けた武が見たものは、ロックシード。それも今まで存在してなかったものがドライバーにマウントされていた事に驚きつつも武はロックシードを手に取った。

自分が見てきたロックシードとは違い、丸みなどなく角ばった印象を受ける。そして重さ以上にとてつもない力を感じるそのロックシードは、恐らくあの時託された物だろう。

『そして、俺が最後に来るのは、これぐらいだ…』

こうなる事を見込んで、ドライバーへと仕込んでくれたのだ。本当に、頭が上がらない。

「使わせて貰うぞ…絃汰!」

ドライバーからブラッドオレンジを外し、ライドウェアだけの状態となった武は新たに出現したロックシードをはめ込む、錠を落とす。

同じく空間がペラリと捲れて別世界の空間から球体が出現するシークエンスまでは同様だ。だが、今回現れた球体もロックシードと

同様に角ばった箇所が多くある。

カッティングブレードを落とし、キヤスバレットを展開すると『ソイヤッ!』の音声と共に球体は武の頭部目がけて落下するが、これままで球体のまま落下していたが武へと装着される寸前、部分的に展開。

展開を終えて改めて武へと装着された鎧は、胸部に大きな紋章が刻まれ、ベルトを越え、太腿まで覆う前垂れが展開。肩を覆う装甲もブラッドオレンジよりもより強固なものと変わり、黒焦げとなっていた手首も追加装甲が装着されていた。

さらに大きく変わったのは、頭部を包む鎧だ。単眼であるのは変わらないが口元を覆うクラッシュヤーは獲物を食い殺さんとする野獣のような牙の意匠となり、三日月を思わせた角飾りもより巨大で鋭いのへと変化している。

最後に出現したのは胸部の紋章が刻まれた旗が背中へ2本。

自身の存在を知らしめる為にはためくと、その姿の名を電子音声が大きく名乗るのであった。

『ブラッドカチドキアームズ!!!』

『いぎ、血祭りイ!!!』

『『『エイエイオーツ!!!』』』

第49話

間桐光太郎が義妹である間桐桜へ傷だらけにも関わらず必死に呼びかけ、桜の瞳が微かに輝いた直後。

クライシス帝国のマリバロンの不意打ちによつて意識を失い、牢獄で目を覚ますまでの間に光太郎は、『キングストーンの意味』と共有していた。

『よく聞け、光太郎』

『この先の戦いでロボライダーでも太刀打ちできない状況に陥ったその時は——』

『怒れ。その身に激流が走るような感情を解き放て』

『そうすれば、新たな力がまた一つ、覚醒するだろう』

『…お前にとって酷であることは分かっている』

『11年前…光太郎が人としての肉体を失い、さらに目の前で養父を殺された時、お前は怒りのまま、憎しみのままに怯え、命乞いをする怪人を容赦なく討ち取った』

『当時は知ってしまった真実への混乱と養父を失った悲しみで理性を失ったお前は、感情のままに力を振るった』

『以来、お前は口では敵では相手に怒りを向ける事はあるが、お前はどこかでその怒りを理性で押さえつけてしまっている』

『敵に自らの怒りをぶつける事は、悪感情であると考えて…』

『だが、お前は私に言った』

『たとえ苦しむことになろうが、感情を否定せず、捨てずに戦うのだと』

『そんなお前を見て、私は知った』

『感情は時として人間を縛る事もあれば、力を与えることもあるのだと』

『誰かの笑顔を守れたという喜び、大切な者達と共に未来へと進む楽しみ…』

『大切な者を失った喪失感に打ちひしがれながらも、同じ思いを誰にもさせないと決意させる悲しみ』

『そして悪の非道に対し、決して許さないと立ち向かう意思を与える怒り』

『自分を失わず、ロボライダーとしての力を手にしたお前なら怒りにその身を支配されず、新たな力を得る事が出来るのだと、私は信じている』

『光太郎よ、感情のままに怒れ』

『獣のように吠えた時、お前は新たな力を手にするだろう』

伝えるべき事を終えたキングストーンは踵を返し、光太郎の前から遠ざかっていく。

光太郎が目を覚ましたのは、その直後だった。

「俺は怒りの王子——」

「RXッ!! バイオ、ライダーッ!!!」

新たな姿の名を名乗った間桐光太郎の姿を目にした間桐慎二は、敵に囲われている状況にも関わらずそのような不安が一気に消し飛んでしまった。

「あいつ、また新しい力を…」

突然落とし穴へと放り込まれた光太郎の安否と、マリバロンの一撃で命の危険に晒されていたガロニアの無事が同時に解消された事に息を付くと、慎二は思考を切り替える。2人が無事であるならば、次は自分達の安全を確保せねばならない。同じ事を考えているであろ

うと遠坂凜の方へと顔を向けると――

「――い……」

「あ？」

顔を青くし、ブツブツと呟く凜の言葉に眉間の皺を寄せる慎二が耳を傾けてみると、呪詛のように今し方現れた光太郎の起こした現実を受け入れられない魔術師がそこにいた。

「ありえないありえない……流体操作で液体を操るなんてことはともかく、自分を液化化させてさらに元の姿に戻るなんてどれだけの詠唱と儀式の行程が必要が……」

「……………」

また始まってしまった。

遡れば光太郎が仮面ライダーに変身するというだけでどうすればああなるのだと疑問を抱え、魔術を基準とした妙な分析を始めてしまうこの優等生は、光太郎が起こす突拍子のない出来事にとにかく驚く。

同じ魔術師であるメディアなど、『光太郎だから別に』などと認識：いや、あれは諦めの一種だろう。ともかく受け入れているというのに、いつまでも慣れる様子はないようだ。

そしてその反応は味方だけとは限らない。

(まさか……まさかRXがさらなる力を手に入れるとは……)

ガテゾーンから齎されたデータを元にロボライダーでさえ出し抜く罠を用意したというのに、あの男はこちらの予想を全て覆す。これも光太郎を無駄に煽ったジュピトルスが原因であると怒りが込み上げてくる。

…だが、マリバロンは敵の新しい姿への警戒心、ジュピトルスへの憤り以外にも僅かながら安堵が心にあった。

もし、あのまま光太郎が現れなければ、自分はガロニアを…

「何を考えているのだ私はッ…」

頭を振るい、脳裏を過った悍ましい考えを否定するマリバロン。なぜ、自分は用済みとなったガロニアを気に掛けるなどという考えを持たなければならぬのだ。『本物』のガロニアは、すぐ横にいるというのに…

やはり一秒でも早くあの『偽物』を葬らなければならないと、地面を3度踏み鳴らす。

それはもしもの時に地中で待機させていた者達への合図であった。

「むッ!？」

バイオライダーとなった光太郎は足元が僅かに振動していると察し、ガロニアを背後に移動させた瞬間、光太郎達の四方の地面を突き破り、打ち上げ花火のように上空へと飛び出した4体の怪人が出現。

光太郎は頭上を越え自分達に向かい落下する怪人達へと目を向けると怪人達は武器を構え、笑いながら言葉を放った。

「フハハハハハ…冥土の土産に教えてやるッ！我は怪魔妖族きつての剣士、刃^バシン様だッ!!」

「振るう矛で幾千もの敵を貫いたタフガイ、怪魔妖族の矛天道ムテンドーつ!!」

「狙った獲物は決して外さぬツ！怪魔妖族射シヤランとは俺の事ツ!!」

「そして振るった斧で何者をも両断する猛者：怪魔妖族斧剛フゴウなりいッ!!」

『四身一体の攻撃、躲せるものなら躲してみよッ!!』

律儀に名乗りを上げた4体の怪魔妖族達の得物はその名に含まれている通りそれぞれ剣、矛、弓、斧を手にして眼下の光太郎とガロニアを捉える。4体による同時攻撃を受けた者で生き残った者などいない。どのような能力を持つかが不意打ちとならばなす術もないだろうと考えたガロニアだったが、光太郎は『防ぐ』という選択すら選ばなかった。

「トアッ!!」

4体の怪魔妖族の攻撃が迫る中、光太郎は地面を蹴り自ら自分を狙う怪人達へと跳躍。怪人達は愚かにも自ら死にに來たと考え、得物を握る手に力を込める。

他の怪魔妖族と違い、特殊な能力を持たずに武術のみで申し上がった4体にとって怪魔界を脅かす光太郎を討ち取ればマリバロンに認められ、貴族の一員となる大きな好機なのだ。

特殊な能力だけが取り柄でマリバロンへとすり寄る他の怪魔妖族を蹴落とす為にも必ずや討ち取ると決意を固めた4体の間合いへと光太郎が迫った時、怪人達は自らの目を疑った。

『な、なにいいいいッ!?!』

驚くのも無理はない。

光太郎の身体の輪郭が突如歪み、青く巨大な雫へと姿を変えると速度を変えないまま4体の怪魔妖族達へと急接近。

不規則な動きで4体へ次々と体当たりを繰り返す光太郎に怪人達是对応できず、我武者羅に武器を振るっても掠る事すら出来ない。

未だ落下中ということもあり距離を置くことも出来ない怪人達はさらに驚きを重ねる事となる。

「おげえッ!?!」

「な、なんだッ!?!」

「こ、今度は…?」

「蛇みたいに伸びるッ!?!」

光太郎の青白く光る身体がアメーバのように揺れると落下する4体を覆うかのように伸び始め、輪の形状となると次第にその輪は縮まり4体の怪人を拘束、さらに収縮を始めたのだ。

「おがあッ!?!」

「く、苦しい…ッ!?!」

ミシミシと4体が纏った甲冑へ亀裂が走り、苦悶の声を上げる4体の視界が急変。空が下へ、地面が上となる。

つまり、4体は頭から地上へと落下しているのだ。

「ま、まさかこれはあああ!」

「俺達ごと…!」

「ひっくり返したッ!?!」

そう、光太郎は怪人達を拘束しつつ反転させ、怪人達の頭部を地面に向けて落下させている。その結果は…

『ごばあああッ!』

「きやあッ!?!」

怪人達が落下した衝撃によって発生した風と土煙に押され、思わず目を瞑って悲鳴を上げたガロニア。土煙が段々と薄まり、ゆっくりと目を開くと落下地点にあるのは片膝を付いて着地した無傷の光太郎と、上半身が地面へと沈み、伸びきった下半身を痙攣させている怪人達の哀れな姿がそこにあった。

「ガロニアさん…!」

「は、はい!」

「君の思いは、聞かせて貰った。どこまで出来るか分からないけど、俺にも協力させてくれ」

「光太郎様…ありがとう、ごさいます」

ゆっくりと立ち上がり、振り向く光太郎の呼びかけに思わず緊張して返事をするガロニアだったが、仮面をしてもその下で優しく微笑ん

で自分の決意を認めてくれた光太郎へ涙を目元に溜まった涙を拭いながら感謝を述べた。

自分の抱いた気持ちを共にしてくれる人が傍にいる。たったそれだけでこんなにも暖かい気持ちになれるものなのかと。

「さあ、今のうちにライドロンへ。そして慎二くんたちを頼むぞ、ライドロン！」

「はい！」

「任せテモラオウ」

ガロニアを乗せたライドロンはタイヤで地面を削り、猛スピードで慎二達の元へと疾走する。2人を囲っているチャップ達は未だ怪魔妖族達が瞬殺されたことに茫然としている為、ライドロンが吹き飛ばすことは容易だろう。

慎二達の救出をライドロンに任せた光太郎は改めてマリバロンと桜の前に立つ怪魔ロボットトリpron達を見据えて構えるのであった。

「ムオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

大地を揺るがす程の咆哮を上げる武神鎧武…赤上武の猛攻は続いていた。

主戦力であり、唯一の遠距離攻撃も備えていた無双セイバーがその刃を失った為に徒手空拳でしか戦えないのであろうと考えた怪人達は一斉に武との距離を詰める。

ギガンデスの巨大火球を跳ね返したことによつてその大半を消失したサイボーグ怪人ではあつたが、数こそ少なくともその攻撃力と耐久力は健在。そしてレイドラグーンや化け猫といった怪人の群れも少数ではあるが生き残り、数にすれば150体。

さらにはギガンデスヘルも無傷で控えている状況で武の取つた行動は、敵陣への突撃であつた。

武器なしでは何もできまいと爪を向ける化け猫とシアゴーストは裏拳を受けて身体が上下に分断された。

真上からナイフを持って奇襲をしかけたマスカレードドーパントは顎に掌底を叩き込まれ、空の彼方へと消えた。

正面から突進をしかけたサイボーグサイ怪人は正拳突きで腹部を貫かれ爆発、背後に迫つていた他のサイボーグ怪人も誘発に巻き込まれガラクタへと姿を変えた。

接近戦では敵わぬとようやく悟つた怪人達は続いて槍など長物の武器を携えたグルル達がか中心となり、一斉に突撃する。敵の動きを見て武が次に起こした行動は、背部に備わつた1メートル弱である2本の旗を手に取り構えを取つたのだ。

何を血迷つたかと考える者もいたかもしれない。だが、伊達や酔狂で旗を所持しているのではない。

『ブラッドカドキ旗』の旗竿は武神鎧武を覆う鎧と同じ金属であり、布にはブラッドカチドキアームズから流れるエネルギーが伝達する事によつて振るつた瞬間に衝撃波を飛ばす能力がある。

故に武の持つ旗は飾りなどではなく、『武器』の一つであると怪人達は身を持って知る羽目となつた。

「うおおおおりやあああッ!!」

武の振るうブラッドカチドキ旗に接触した怪人達は骨が砕け散る音と共に吹き飛び、旗を振るって生じた衝撃波に飲まれた怪人は数十メートル先の崖へと衝突。

そして旗を高く掲げ地面へと突き立てた瞬間、地面へと伝わった衝撃が武を中心として一斉に爆発。

砂塵を舞う中、発生したクレーターの途中で立っていたのは武だけであつた。

「すごい…慎二には聞いていたけど、武さんはあんなに強かつたのか」「関心している暇があるのか衛宮士郎？赤上からの頼まれ事をさつさとすませ」

「わ、分かつてる!」

再び『作業』へと集中する衛宮士郎へ注意したアーチャー自身も表情には出さないが武が見せた力には驚かざるを得ない。あれが本来の赤上武の力。間桐光太郎とは異なり、力の源を内側に所持しているのではなく、外側から身に着けると変身方法は根本的に違うようだがあの姿、確かに仮面ライダーに近いものであろう。

「あの力が戻つた。なら、もう…」

インベスに支えられ、メディアの治療を受けるメデューサの小声が耳に入ったが、アーチャーの目は再度空を見上げる事となる。

「あれは…」

旗を後に続いていたインベスに一本ずつ託し、自身は再び拳のみで

怪人を鎮めていた武は前方へ佇んでいるギガンデスハデスの左右に巨大な魔法陣が出現に危機感を覚え、自分の渡した旗で怪人を滅多打ちする個体や、指示に従って複数で1体の怪人を倒していたインベス達へと命じた。

「下がれッ！再びくるぞッ!!」

武の言葉を耳にしたインベス達は対峙していた怪人達にあっさり見切りをつけ、士郎達が控えている後方へと一斉に駆け出した。その判断は間違いではない。

魔法陣から出現と同時に放った攻撃によって、その場で戦っていた者は武を残して消滅してしまっただから。

「また、化け物が…」

ギガンデスヘルの両隣に現れたのは、同じ名を冠しながら姿と能力が全く異なる存在。

巨大な羽を振るって咆哮する白い鳥を思わせるギガンデスヘブン。

海蛇のような長い胴体を持ち、鋭い牙を覗かせるギガンデスハデス。

巨大な敵が3体も立ち並ぶ姿はまさに圧巻。だが、武にはその場を引くという選択肢は存在しない。そして動きを見せたのはギガンデス達であった。

『ガアアアアアアアアアアッ』

同時に放たれる火球に両手を交差させて防御する武。ブラッドカチドキアームズは機動性が低下した変わりに防御面が向上しており、火球を受けても多少身動く程度の被害で済んでいる。だが、このまま動きが取れないようでは反撃もままならいと考えた矢先、自分が巨大な影に覆われていると気付いた刹那、武が上げた両手に申し掛かる巨大な手：接近したギガンデスヘルの手をどうにか受け止める事が出来た。

「ぐっ…」

だが、受け止めたただけだ。両手が完全に塞がれてしまった武を押しつぶそうと手へ徐々に体重をかけるギガンデスヘル。武の足元にある土が陥没を始める中、別のギガンデスが武を余所に移動を始める。その行先は、メデューサ達が避難していた崖の上。

「ま、まさか奴らッ!？」

『そう、そのまさかなのですよ!』

再びその醜い顔を立体映像で現したジュピトルスだが、先ほどとは違い、どこか疲労が見える。恐らく新たに召喚したギガンデス2体を呼び寄せた事によって魔力の大半を消費した影響なのだろう。

そうまでして苦しめたいのか。自分が目を付けた光太郎を。

『もはや貴方などどうでもいいッ!何の抵抗も出来ないあの亡霊上がりの人間共など一瞬で処理できる!そうすれば調子に乗っている間桐光太郎が嘆く姿を拝めると言うものですよお!』

過呼吸をおこしながらも、滝のような大汗を流しながらも自分の愉悦を求め続ける男は、まさに化け物に相応しい。そしてその悍ましい視線は迫るギガンデス達に身構えるメデューサ達にも向けられた。

『所詮は間桐光太郎の周りに集るしかできない役立たずを潰すなど、赤子の手を捻るよりも簡単なのですからねえッ!!』

「…っ！」

役立たず。

その言葉に強く反応してしまったメデューサは唇を噛みしめて下を向くことしか出来なかった。

（あの者の言う通りだ。私は…光太郎達が戻るまで戦うなど言っておきながら、この体たらく。私は…）

この戦いで知った自身の無力。有象無象に過ぎないと勘ぐった怪人達に追い詰められてしまった自分は、ジュピトルスの言う通り、役立たずなのだろう。

だが、メデューサとは全く違う反応を示す者がいた。

「役立たず…言ってくれるわね」

「ずいぶんと口が達者なようだな外道…」

「え…？」

思わずそんな声を漏らしてしまったメデューサの前で立ち上がったのはメデイアとアーチャーだ。ジュピトルスの言葉を受け、自分達を侮辱したことが許せず立ち上がったというのなら、まだ納得は出来た。

問題は、回復薬で魔力を補充していたメデイアはともかく、アー

チャーまでもが視認で切る程の膨大な魔力を身に纏っているということだ。

まるで聖杯戦争時のサーヴァントとしての全盛期…いや、それ以上の魔力を感じていた。

「2人に、一体何が…？」

メデューサの疑問に答えられる者は、この場にはいなかった。

「アーチャーに、メデア…？」

なぜ2人の名を口にしたかは分からない。

光太郎の意識の…それこそキングストーンと対話した深層意識の
そこで、彼等がいたような気となった。

だが、今は敵を倒す事が先決だと意識を切り替え改めて構え直す光太郎。

マリバロンの命令で前へと出たトリプロン1号のモノアイが妖し

く光ると、変化は起こった。左右非対称であるトリプロン2号、3号が肩を組むように接続し、その頭上から2体の頭部を覆うように1号がドッキングする。

より蟹の姿へと近づいたこの姿こそ本来のトリプロン。合体したことでパワーも数倍に跳ね上がったレーザーを光太郎に向けて照射する。

「っー」

横に転がって回避する光太郎は体勢を整えたと同時に自分の真横へと止まったアクロバッターを見る。

「よし、行くぞッー」

「任せテクレ」

光太郎がアクロバッターのグリップを握った途端、光太郎のアンクレットが輝き、そのエネルギーがアクロバッターを包む。輝きに包まれたアクロバッターのボディは大きく変化し、バイオライダー専用マシン、マックジャバーへと変わった。

「行くぞッ!!」

マックジャバーへと搭乗し、フルスロットルでトリプロンへと迫るがただ接近を許すトリプロンではない。その巨大なモノアイからパルスレーザーやハサミに備えられた怪光線、隠し武器として備えていた膝に機関銃を展開し一斉に砲撃を開始する。

高感度センサーにより誤差を細かく照準を修正し、間違いなくトリプロンが放った攻撃は全て光太郎とマックジャバーへと命中した。

だが：

「ねえ間桐慎二君…」

「なんだよ遠坂凛」

「どうやら私は夢を見ているようね。そう、夢じやなきやいけないのよ」

「残念だけど、あれは現実だあ」

「嘘よだって…だって…」

「どおして敵の攻撃全部が光太郎さんの身体を突き抜けているのよオオオオオオオツ!？」

凛の叫んだ通り、トリプロンの放った攻撃全てが光太郎の身体をすり抜け、背後で爆発しているのだ。それも光太郎だけでなく、彼が操るマックジャバーへも攻撃が通用せず、同様に攻撃がレーザー、弾丸全てが浸透しているのだ。

そして驚きの声を上げているのは凛だけではない。

攻撃を命じたマリバロンも光太郎の能力を知ろうとモニターを向けていたが、許容できない能力に分析も忘れただけ見ていることしか出来ないうでいた。

「なんということ…恐るべし、恐るべしRXツ！」

「いくぞッ！トアッ!!」

トリプロンとの距離を詰め、マックジャバーから跳躍した光太郎はトリプロンの頭上を飛び越え、着地したと同時に両手をベルトの前へと翳し、左側へ刀を抜刀するような構えのまま両手を移動する。

「バイオブレードッ!!」

光太郎が叫ぶと同時に手の中で光のエネルギーが凝縮し、一振りの剣が完成。左手に添えられ、右手に握られた両刃の剣『バイオブレード』

「トアッ!!」

「う、ごおッ!?!」

トリプロンが振り返ったと同時に駆ける2つの剣閃は金属で出来た巨大な鋏を切り落とす。両腕を失い、後ろへと下がるトリプロン。しかしさらに間合いを詰めた光太郎は両手でバイオブレードを構え、刀身が青く輝くエネルギーを纏った直後、逆袈裟斬りをトリプロンのボディへと叩き込む。

スパークカッター

太陽のエネルギーを瞬間的に込め、万物を切り裂く必殺技。

『お、おおおおおおおっ!!』

斜めに切り裂かれた傷痕から火花が散り、爆発を起こすトリプロンを背にし、片膝についてバイオブレードを構えた光太郎背後で、巨大

な爆発が起きるのであった。

これでトリプロンは倒した。後はマリバロンから桜を取り戻す。

それで終わると思われたが…

『お、おのれ…よくも2号と3号を…』

「むっー！」

煙が晴れた後、フラフラと揺れながら姿を現したトリプロン1号。どうやら爆発寸前に他のトリプロンを切り離して無事であったようだが、完全に無傷とは言い切れず、バチバチと火花を放っている。

「こうなれば最後の手段ッ!!」

「いよいよトリプロン0号ッ!!」

トリプロン1号が叫んだ瞬間、距離を取って戦いの行く末を見守っていた凜達が立っていられない程の地震が発生する。

「え、な、何ッ!?」

「また新手が現れるつてののか?」

「でも：揺れ方が今までとまるで違います!」

ガロニアの予測通り、2度に渡り地中から現れた敵は自分達と同じ程度の大きさであったが、3度目の出現となる怪人は、まるで大きさが違った。

地表を破り、最初に現れたのか鉢。それも合体したトリプロンとは比べものならず、優に2メートルは超えている。

そしてついに全身を現した敵の姿は、蟹だった。

それも大きく、人1人は平然と飲み込んでしまう程に巨大な蟹であった。

「これぞまさしく最後の手段：覚悟しろRXッ!!」

巨大蟹の頭部へ1号がドッキングしたことで完成した真のトリプロンはより強力となったパルスレーザーや全身に仕込まれたミサイルを一斉射撃。再び剣を構えた光太郎へと迫る。

「…っ!?!」

そして気付く。トリプロンが放ったレーザーは先ほどとは変わっていないが、ミサイルは回避したというのに一直線へと飛んで行かず、光太郎を追ってくる追尾ミサイルであった。

「くッ!」

「ハハハ…無駄だ。そのミサイルは一度狙った者に当たって爆発する

まで絶対に止まらないのだ！今貴様を追うミサイルは40基さらに60基以上が追えばどうなるか…

節足の装甲がすべて展開し、トリプロンが宣言したミサイル全てが発射される。

「これで合計100基のミサイルが貴様を狙う！さあ、避けきれるか！！」

「……………」

レーザーを回避しつつ、上空から迫るミサイルへと目を向ける光太郎は無言のまま数メートル先で立ち止まるとバイオブレードの構えを解き、両手を交差させて防御の体勢を取った。

「まさか、全てを受けきる気か？馬鹿め、私のミサイルはそれ程甘いものではないわあツ!!!」

そしてついに降り注ぐミサイルの雨。

断続的に続く爆発の中、光太郎の名を慎二達は呼び続けるが、爆音にかき消され誰の耳にも届くことは無かった。

「…あの鳥モドキは任せるぞ」

「それじゃ、あの蛇モドキをよろしく」

立ち並んだまま、視線を躲さずに2人は同時に動き出す。

メディアはギガンデスへブンへと飛翔し、アーチャーはギガンデスハデスへと向かい崖を飛び降りた。

「くらいなさいー」

魔力の散弾をギガンデスへブンへと放射。紫色に輝く魔力の雨に少なからず押されながらも、火球やレーザーなどで反撃するが全てが防御壁によって阻まれてるが、メディアがまるで意識を向けていない方角から火球が迫る。

どうにか手を翳して火球を出鱈目な方向へと飛ばす事に成功するが、安堵するより先に地上を走る男へとメディアは怒鳴り散らす。

「しつかりそちらの相手をなさい！私を巻き込まないでッ！」

「それは敵に言って貰おうかッ!!」

反論しながらもアーチャーは地上を走りながら番えた矢を放ち、新たに投影した矢を再び番える…さらに言えば投影した矢は全て名を轟かせた刀剣を変形させたものであり、通常の怪人なら一撃で葬る威力を誇る一級品だ。

苦しみ悶えるギガンデスハデスは火球を吐いて抵抗するが、アーチャーの鷹の目はそんな出鱈目に放たれる攻撃などカスリもしない。

「フツ…どうやら、いらぬ心配だったようだ」

「では、仕上げと行くかッ!!」

一端弓を手元から消滅させたアーチャーは白黒の夫婦剣を生み出し、ギガンデスハデスの両目へと投擲。既に関節という関節に刀剣から生み出した矢を受けてうまく身動きが取れないギガンデスは回避することが出来ず、眼球へ刀剣が突き刺さった瞬間、ギガンデスは喉が裂ける程の咆哮を上げる。

干将と莫耶を手放した時点でギガンデスの真下へと移動したアーチャーは黒い弓と、生み出した捻じれた剣を番える。

「I am the bone of my sword」

「偽・螺旋剣!!!」

アーチャーが番えた剣^矢を放ち、敵の胴体へと触れた瞬間、怪物は空間ごと削り取られ、跡形もなくその姿を消していた。

「これでッー」

空へと浮かぶメディアの頭上に展開された巨大な魔法陣。詠唱無しに瞬時で生み出す攻撃魔術とは違い、メディアでさえ魔法陣を完成させるのに5秒は要してしまう攻撃魔術だ。そこから放たれる光に撃たれれば、怪人など触れただけで蒸発してしまうだろう。それが、怪人であればの話だ。

『ギャオオオオオオオオツ!!』

目の前で大きな口を開け、ギガンデスヘルと堂々の巨大火球を生成するギガンデスへブン。それぞれの攻撃が衝突し、押し合いになった場合は力のない方が負ける。

「全く、こんな事私のやり口ではないというのに…けど、思い知らせなければならぬわね…」

魔法陣がバチバチと放電し、中央から出現した眩くも極彩色の光の柱がギガンデスへと迫る。ギガンデスも負けじと巨大な火球を放ち、両者の中間で轟音が起きると共に衝突。燻りながら拮抗するが、次第に魔力の光は弱まり、火球は収縮。遂にはどちらも完全に沈黙し、互いの攻撃は対消滅という結果となった。

「ハア…ハア…ハア…」

杖をギガンデスに向けたまま息を荒立てるメディアに向かい、ギガンデスは再度巨大な火球を生成する。同じ攻撃をしかけようとしても、魔法陣を出現させてから攻撃に移るまでの隙を、ギガンデスが見逃すはずがない。

「ふう…慣れない事はするものじゃないわね」

だが、追い詰められているはずのメディアは焦るどころか余裕を見せつけるようにその長い髪の毛を手で櫛上げる。さらに火球が膨ら

んでいく光景を眺めながらメデイアは告げた。

「大型の攻撃魔術をしかけながら、詠唱無しで他の魔法陣を組み立てる…理論は以前からあったけど、実際にやってみると意外と大変」

『……?』

「けど、やった甲斐はあったわ」

『ッ!』

ようやくメデイアの言葉を理解したギガンデスだったが既に遅い。

空中を浮遊するギガンデスの周囲には先ほどメデイアが生成した大型の魔法陣が帯電した状態で囲んでいる。それも無数に。

メデイアはギガンデスと攻撃をぶつけあつた最中にこの無数の魔法陣を既に設置を終えていたのだ。

「では、ごきげんよう」

メデイアが振り返ると同時に、魔法陣から飛び出した光はギガンデスを飲み込むのであった。

「アーチャー、メディア：貴方達のその力は…」

茫然と空を見上げるメデューサにはまるで理解出来なかった。彼等は聖杯戦争の終焉と共にその身を人間へと落とし、以前のように戦える程の魔力を有していないはずだ。しかし、ジュピトルスの言葉を受けた直後に2人の魔力は爆発的に高まり、その攻撃は聖杯戦争時とは比べものにならない程までに向上している。

まるで、光太郎がBLACKからRXへと進化したように。

トレース・オン
「投影完了…よし、成功だ」

「シロウ…？そ、それは」

アーチャーとメディアの戦闘に夢中となっていたメデューサは士郎が投影した剣を見て驚愕する。全員が回復している間にずっと右手に魔力を集中、凝縮させていたとは知っていたがまさか投影魔術を行使していたとは気づきもしなかったのだ。

(今の私には、それほど集中力が欠けていた、ということですね)

無意識に手を握る力が強まっているメデューサを余所に、士郎は手にした『それ』を本来の持ち主の名を叫んで、全力で放り投げる。

「武さんッ!!受け取ってくださいッ!!」

回転して迫る刀剣を武は振り向かず、腕だけを背後に伸ばして柄を掴みとる。それは紛れもない、ギガンデスの火球を受け止めた際に刀身の大半を消失した無双セイバーだ。

「…感謝するぞ、士郎殿ッ!!」

武の声が届き、笑顔で頷く士郎。

武の依頼で投影魔術により幻想の形として生み出した無双セイバー。自分の依頼を完遂した士郎の心意気に応える為にも、ようやく立ち上がったギガンデスの真正面に立った武は最大の攻撃を仕掛ける。

火縄大橙DJ銃の銃口からレールを展開し、そのレールを通じて銃口へ無双セイバーの刀身を差し込む。連動して銃のグリップ部がスライド、中から刃がせり上がった。

2つの武器が合体し、大型剣となった火縄大橙DJ銃の側面にドライバーから取り外したブラッドカチドキロックシードを装填。

『ロックオン』

ロックシードから流れるエネルギーが武器へ、そして武の全身に駆け巡っていく。

『イチ・ジュウ・ヒャク・セン・マン・オク・チヨウツ!!』

電子音声の数値が高まるにつれて大剣の刃を纏うエネルギーが高まり、その刀身は10メートルを越える。

『無量、大数ッ!!』

音声と共に振り下ろされた紅いエネルギーの刃はギガンデスを頭頂部から切り裂いた。

大剣を振り下ろし、武が踵を返した直後に、真つ二つとなったギガンデスは爆発の中に消えるのであった。

「…塵も残らなかったようだな」

煙が晴れ、光太郎が立っていた位置には巨大なクレーターが生まれ、その中には光太郎の影すら残っていない。

ふう…とゆつくりと息を吹くマリバロンは背後で口を押え、屈んでいた桜を起こすと改めてミサイルが降り注いだ場所へと目を向ける。

（流石にあれ程の攻撃を受ければ…だが何故だ。あの異様な能力を見たせいかな、私は何一つ安心できていない）

光太郎が液体のように身体を変質させ、物理的な攻撃を全て通過させてしまう新たな能力。それを見越して逃げ場のないところで次々

と爆発を起こせば生き残る可能性は万が一もありえない。
それでもマリバロンは不安を拭いきれないでいた。

「さて、では残る者を片付けるとするか…」

地響きを立てて慎二達のもとへむかうトリプロンの姿をみて、ガロニアを庇うように凜と慎二は前へと出る。その目には、光太郎を失ったという絶望の色がまるでない事に疑問を抱いたトリプロンはレーザーの照準を向けながらも尋ねた。

「小僧、なぜ落ち着いていられる？ 貴様等の希望であるRXはこの手で倒したのだぞ？」

「その言葉、そのまま返させてもらおうかね」

汗を流しつつ、口元を強引に歪ませた慎二は頭上でモノアイを光らせるトリプロンを睨んだ。

「どうして倒したって確信を持てるのかね？」

「何だと？」

「よく見なよ。アンタが打ち込んだミサイルの位置をさ」

「なんだ…まさかッ!!」

センサーで拡大した爆心地の中央。そこには、穴が。直径で2、3cmでしかない穴が確かに開いていた。

「そして、アンタたちが馬鹿みたいに飛び出した穴は、いくつも開いているんだぜ。一番近い場所は…」

「——お前の背後だッ!!トリプロンッ!!」

慎二の言葉に続き、トリプロンの足元に空いた穴から飛び出した青い液体はトリプロンの眼前で人型となり、輪郭がはつきりと形となった直後にトリプロンのモノアイへと手にした剣の切っ先を突き刺した。

「お、ががががあああああつあああああつ!!」

バイオブレードを引き抜いた光太郎は着地したと同時に地面を蹴り、トリプロンの巨体を支える右側の節足を切り落とす。その結果、片側の足だけでは支えきれないトリプロンは地面へと沈んでしまった。

「ま、まさか貴様…」

サブカメラに切り替え、光太郎を睨むトリプロンが慎二の言葉からなぜ光太郎が無傷で自分へ奇襲を仕掛けられたのかを推測する。

光太郎はミサイルが衝突するギリギリまであの場へと引き込み、当たる寸前に自分の身体を液体化させあの小さな穴から逃れたのだ。いくら誘導ミサイルといってもあのような穴を通れる訳もなく、地面へぶつかった瞬間に爆発。後のミサイルも同様だったのだろう。

そして地中の穴を辿り、自分へ奇襲が可能である穴まで移動したのだ。

「な、んという奴だ。だが、それでも俺はあツ!!」

移動が出来ず、地面へと沈んだ状態であろうが巨大な鋏を振るうトリプロンの攻撃を躲し、一端距離を置いた光太郎は右手を天に翳し、左手をベルトへ添えた構えを取る。

ベルトの中央が強く発光し、その姿はバイオライダーからRXと変わる。と続いて右手を前方に突出し、左手を腰に添えた構えを取った。

「リボルケインッ!!」

左腕を大きく回しながら広げた手を腹部のサンライザーへと翳す。

サンライザーの左側の結晶から幾層もの光の線が重なり、洗練された円形の柄が現れた。

柄を光太郎が掴むと同時に柄の中央にある赤いダイナモが光を迸りながら高速で回り出し、柄を引き抜くと光のエネルギーが凝縮されたりボルケインが姿を現す。

引き抜いたりボルケインを左手から右手に持ち替え、水平に構える。と、今にもレーザーを放とうとするトリプロンのモノアイへとリボルケインの先端を突き立てた。

「ウオオオオオオオオオオツ!!」

「ムウンッ!!」

さらにリボルケインを深く突き刺し、トリプロンの体内へ光のエネルギーを注ぎこんで行く。

トリプロンの体内で飽和状態となったエネルギーが火花となって関節部から漏れ始める。

「まさか、まさか0号ですら敵わないとはあああああああッ!!」

トリプロンからリボルケインを一気に引き抜き、断末魔の声を背にして光太郎は大きく光の杖を頭上で旋回。

両手首を頭上で交差し、左手をベルト サンライザーへ添え、リボルケインを握る右腕を振り払う。

残心の構えを取ったと同時に叫ぶトリプロンは大爆発の中へ消えるのであった。

第50話

「キイイイイイイイイイイイイイツ!!」

本来ならば低い声質を強引に高め、甲高い悲鳴を上げる男…かつて第四次聖杯戦争で顕現したキャスターのサーヴァントと同じ肉体を使役する木星の星騎士ジュピトルス。・

モニターの向こうで勝利の余韻に浸る者達の姿を目にし、その醜いカエル顔をさらに歪ませると画面へ五指に生えた鋭い爪を突き立てガリガリと削り、中継される地球の映像は歪なものへと変わってしま

う。

召喚した他世界の怪人はことごとく散っていき、ついには自身の魔力を限界までつぎ込んだ巨大怪人3体までもが倒されてしまった。しかも仮面ライダーとしての力を取り戻した赤上武だけではなく、人間として新生し、人並みの魔力しか持たないはずのサーヴァント達にもしてやられている。

最早何度己の口から何故だという言葉が出たか分からない。

怪魔界へと現れた間桐光太郎以外の者など取るに足らない連中ばかりのはず。怪人が繰り返して召喚され、疲弊していく様をこのクライス要塞から眺める…それだけで終わるはずだったのだ。

なのに。だというのに何だこの有様は。

「なんと使えない連中なのですか…手負いの人間5匹も駆除できないとは…」

召喚に魔力を多大に消費しながらも望む結果が得られなかったジュピトルスが口にしたのは、散った怪人達への役立たずであったという侮蔑。

他世界から一方的に呼び寄せ、自分の命令には絶対服従するよう洗脳した上で使い捨て、怪人を本来の居場所ではなく、本来戦う相手すらいらない世界で散らせ罪悪感を欠片も向けないその言い分はまさに外道という言葉が相応しかった。

ジュピトルスに取って、召喚した怪人は光太郎を苦しめる為の…自分の快楽を満たすためだけに用意したものだ。それが叶わず倒されてしまうのであれば彼に取って文字通り、役立たずだったのであろう。

「では、こちらの方へ出向いてもらおうとしましょう」

顎に滴る汗を拭い、別画面へと表示されているサイボーグ怪人の工場へと目を向る。とある協力者によって工場で生産過程にあったサイボーグ怪人を操作するパスワードを手に入れたジュピトルスはさらにもう一度入力しようと端末を操作する。

今、敵の増援が途絶え、打ち止めと思いい込んだ紅い仮面ライダーが変身を解き、他の連中が疲弊しきつたこの時こそ絶交の好機。再度サイボーグ怪人をあの場所へと転送し、今度こそ地獄を味あわせる…

怪魔界の様子は通信異常の為に把握できないが、もやは優先すべきは自分の思い通りに死ななかつた連中を始末する。

その一点しか頭に浮かばないジュピトルスは魔術を使い切った疲労も忘れ、キヒヒと奇声を口から響かせながら最後のボタンへと指を向ける。

「さあ…これで最後です！」

興奮気味に声を上げ、互いの無事を確認し合う武やメディア達の緩み切った表情が一変する。

そう確信したジュピトルスの期待は単調な音と赤い文字で表示された文字によって打ち消された。

『ERROR』

「…おや？」

もしや入力を誤ってしまったか…？

画面に表示された文字を見た事で一度落ち着いたジュピトルスは再度パスワードを入力。今度は間違いなく全ての文字を確認して決定のボタンを押す。

『ERROR』

3度、4度、5度と同じ行程を繰り返し、6度同じ文字が表示された途端に画面へ拳を叩き付けていた。

「なぜ、なぜ動かないiiiiiiiiiiiiiiiiッ!!」

額に血管を浮き出させ、ブルブルと身体を震わす怒り心頭のジュピトルスの背後に、大きな影が迫る。ジュピトルスの奇怪な姿や言動を見た者は背筋が凍るような悍ましさを覚えるとしたら、その者を見た時に抱くものは果てのない畏怖なのだろう。

形容し難い圧力を放ち、近づいた者の戦意をそぎ落としてしまう程の気迫を放つ男は、ゆっくりと口を開いた。

「余がガテゾーンに命じたのだ。サイボーグ怪人を操作する通信コードを全て書き換えよとな」

クライシス帝国地球侵略隊の最高司令官 ジャーク將軍の姿がそこにあった。

爆発した怪魔ロボット トリップロンを背に、構えたりボルケインを手から消失させた仮面ライダーBLACK RX：間桐光太郎は赤い複眼をマリバロン、そしてその背後に佇む間桐桜へと向けた。

「桜ちゃん…」

一言、義妹の名を呟いた光太郎は桜を庇うように立つマリバロンに向けて構え、ジリジリと距離を詰めていく。

（…RXの姿を保てるまであと僅か…その前に桜ちゃんを連れて出さなければ）

先の戦いで新たな姿、バイオリダーへと変身が可能となった光太郎だが、ロードセクターからのソーラーチャージシステムによるエネルギーの補充があったとは言えRXからの多段変身には想像以上のパワーを消費する。

さらに言えばバイオリダーの力を得る直前にもロボライダーへと変身しており、RXとしての姿を保つだけでも限界であり、リボルケインを手放したのもエネルギーの消費を僅かでも抑えるためだ。

敵に悟られる前に決着を付けなければならぬと内心で焦る光太郎の動きが止まってしまふ。なぜならば、マリバロンを庇うように一歩踏み出し、魔力弾の狙いを定める桜が光太郎へと迫ったからだ。

「桜ッ！」

「何度言えばわかるのだッ！私は間桐桜ではない、ガロニアだ！」

妹の名を叫ぶ遠坂凜の言葉を頑なに拒み、桜は掌にため込んだ魔力弾を光太郎へと向ける。

「我が軍の怪人たちを次々と倒し、次いではマリバロンを狙うなど、これ以上の狼藉は許さん！」

「が、ガロニア様……」

「……………」

桜が光太郎へと向けた怒りに、慎二はどこかで安心していた。例え記憶を入れ替えられ、自分達を敵として認識していながらも、彼女が怒る理由は誰かを傷つけようとする者に対してなのだ。

今回の場合はマリバロンの為であるというのが気に入らないが、心の奥底では彼女は変わっていないと確信させてくれる。

だが、桜の根本は変わっていないと判明しただけでは今の事態は解決に至れない。再び光太郎が桜の攻撃を受けながら説得する方法はマリバロンがさすがに見逃さないだろう。隣で自分の声が届かないことに歯噛みする凜を見ても何か手段を持っているとは思えない。

（くそ、どうする……？）

手詰まりなのかと拳を強く握る慎二の横を抜け、距離が縮めていく光太郎と桜の間に現れた人物の姿に、両陣が驚きの声を上げる。

「お前……！」

「が、ガロニアさん……！」

桜と光太郎の反応する中、両手を広げて間に立ったガロニアは一瞬迷いを見せるがすぐに決意を秘めた瞳へと変わり、魔力弾を構えたま

までである桜へと声を向けた。

「桜さん…もう、いいのです。貴女が今抱く怒りも、その力も、本来ならばワタクシが負うべき業。貴女はこれ以上、ご家族と傷つけあう必要はありませんわ」

「何を言う偽物め！これ以上侮辱するのであれば貴様から始末するぞ！」

手の中に凝縮された魔力をさらに高め、十分に距離を置いているガロニアが身じろぎ数歩下がってしまいが、ただそれだけだ。

しっかりと大地を踏みしめたガロニアは身体から赤色のオーラを放ち、桜の魔力による圧力と拮抗すると再び言葉をぶつける。

「ならば、何故光太郎様の言葉に強く反応するのです！」

「…ツ!？」

「そして光太郎様をお兄様と呼んだのは、例え記憶を上書きされたとしても皆様を心の奥底で覚えている何よりの証拠！思い出してください…貴女はクライシス皇帝の娘ではない。ここにいる慎二様や光太郎様…そして凜様の大切な家族なのです!!」

「わ…たしは…?」

手から魔力を消滅させ、額を抑える桜。一度光太郎を兄さんと呼び、自室で休んでいた際にぼんやりと頭に浮かんでいた見覚えのないはずの人々の顔。それがガロニアの言葉をうけ、はつきりとした輪郭を描き始めていた。

「桜っ！」

「…!？」

『桜』と呼ばれ思わず顔を上げたその先には、光太郎の隣へと駆け寄

り、自分へと呼びかける慎二と凜の姿。

「いつまでそんな恰好してるんだ！さっさと帰ってこい！」

「そうよ！貴女がいるべき場所は、そんなところじゃないでしょ!!」

「にい…さん、ねえ…さん」

「な、何…」

慎二と凜の言葉に反応し、ぼそぼそと彼らを『その名』で呼ぶことに目を大きくするマリバロン。一度光太郎との接触した後に暗示を強めたというのに、再び桜の中で記憶が戻りつつある。そうはさせまいと桜を連れてこの場を離れようとしたが、不意に上から風を切って急接近する機影に気づき、後退することで回避には間に合った。

だが自分の肩を掠めた自在に空を舞うバイクが再度自分へと接近すると赤く光る鞭を持ち、反撃を開始した。

『待ちに待ってた出番が来ました』

「おのれロードセクター…邪魔をするな！」

『貴女には分かるまい…前回台詞どころか存在そのものが無い物とされ、空に浮かんでいた私の気持ちだ』

「なにを分けのわからぬ戯言をッ！」

個人的な理由ではあるがマリバロンの相手を買ってでたロードセクターに託し、頭を抱える桜に声をぶつけるのは、光太郎だ。

「桜ちゃん！」

「あ…」

「帰ろう…地球ではメデューサーや武くん…衛宮くん達も帰りを待っているんだ」

「みんな…が」

光太郎の言葉を聞き、桜の中で歪んでいた輪郭がはつきりとした形で浮かび始めた。

自分に魔術を指南してくれたメディア。

何かと遠回しな理由を付けて紅茶の葉をお裾分けしてくれるアーチャー。

元氣いっぱいの部活の顧問である藤村大河。

何かと気を使い、実力を認めてくれる美綴綾子。

正義の味方を目指し、我武者羅となつて自分の道を突き進む、憧れの男性である衛宮士郎。

離れ離れとなつても自分を常に見守ってくれる実姉、遠坂凜。

今の世界で贖罪を見つげるためだけでなく、自分にも武術を手ほどきをしてくれる赤上武。

兄と共に戦い、姉と呼んで笑顔で返事をくれる手先が不器用でも優しいメデューサ。

ぶつきら棒でも常に先々の事を考え、自分にとって適格なアドバイスをくれる間桐慎二。

自分と同じ目に合う人を少しでも減らそうといつも全力で戦い、常に優しい微笑みで共にいてくれる間桐光太郎。

…どうして忘れていたんだろう。
私は、かけがえのない人々に対して…

手を差し伸ばしてくれる大好きな人々の元へ帰るため、一步踏み出した桜。

だが、そんな桜をあざ笑うように桜の心は不気味な軟体生物のような触手によって拘束さる。

その背後で、ギョロリと異様に大きい眼球を持つ男が口元を邪悪に歪める気配を感じながら。

「あああああああああああああああああッ!?!」

光太郎の言葉を聞いて手をゆっくりと彼らに向けた直後、桜は悲鳴を上げると自らの体を抱いて苦しみ始めてしまう。それと同時に紫色の魔力が全身が噴き出し始めてしまった。

「な、なんだよこれは!?!」

「魔力の暴走…違う!桜の魔力を全身に走らせて外側へ強引に排出してるんだわッ!!」

もとより身体に宿す魔力の許容量が大きく、さらにガロニアとしての記憶を上書きされた際に身体を成人まで成長させられた桜の魔力は無抵抗とはいえRXとなった光太郎を追い詰めるほどの域まで達している。

強化された膨大な魔力が手順もなく適量でもなく全身から激流のように漏れ出した際の苦痛は想像に絶する。

「な、何が起きている…知らん、私はこんなこと知らんぞ…ハッ!?」
ロードセクターと戦闘を繰り広げていたマリバロンは桜が苦しみのあまりにとうとう膝をついてしまった時、マリバロンの脳裏に桜へ暗示をかける寸前の出来事が走った。

ジュピトルスの暗示を跳ね除けたが直後に平手打ちを受けて気を失った桜をガロニアとしての知識・記憶を受け付けるために別室へと移動する途中。

桜を上に乗せたストレッチャーを止めたのは、先ほど部屋を出たジュピトルスであった。

「ジュピトルス殿。まだ何か」

「いえいえ、一瞬で用は済みますよ。一瞬でね」

そう言つてストレッチャーのグリップを持つチャップを押し付け、指先を桜の額へと触れたジュピトルスの口元は僅かだがつり上がっていた。

「もう結構ですよ。どうやら『姫様』はよほど深く眠りについている様子。狸寝入りではないかと気になっていたものでしてねえ…」

自分で気を失わせておいて何を言うかと喉まで出かかったマリバロンであったが、ここで事を荒立てることもないと口をつぐみ、桜の搬送を急がせる。

背後でジュピトルスが笑いを上げているのは、気のせいだと自分に言い聞かせて：

(まさか…まさかあの時に…！)

桜を真のガロニアと仕立て上げるといふ発端は全てジュピトルスから始まっている。だが、そのジュピトルスが桜を自滅させるような小細工を仕込む理由がまるで見当が付かない。

なぜ、自分たちの支配者となるべく存在にそのような目に合わせるのか。

マリバロンは知らない。

ジュピトルスは、自分が目につけた者が苦しむのなら誰であろうとその牙を向けるのだと。

「ああ、ああああああッ!?!」

「くそおッ! どうになからないのかよ遠坂ッ!?!」

「…出来るならとつくにやってるわよ。けど、もし漏れている魔力を強引に押しとどめても今度は桜の体内で魔力が暴発する可能性だつて捨てきれない!」

「くッ…!」

猶も身体から魔力を放出し続けている桜を前にして手も足も出せ

ない慎二と凜はようやく手を伸ばせば届くところまで近づいたというのに、妹が苦しむ姿を見て何一つできない無力感にかられてしまいが…

「ワタクシが…なんとかしますわ」

桜と同じ黒髪を放出される魔力によって靡かせるガロニアは、決意に満ちた目を桜へと向けたまま走り出す。その手には彼女の力の証とも言うべき赤いオーラを纏わせ、悶える桜の前に立つとさらに瞳を赤く輝かせ、桜を縛る正体を見た。

（彼女の額にある小さな『芽』…通常人の目には捉えることができず、特定の条件が起きる事によって魔力を暴走させるもの。これを取り除けば…）

ガロニアは両手で桜の頭部へと添えると、桜の身体から漏れ続ける魔力に変化が生じた。今まで桜から漏れていた魔力は紫色であったが、それに僅かながら赤色の魔力が混じっている。それはガロニアは自身の魔力を桜へと流し込み、桜の魔力と共に放出されていることが原因だ。

「あ、うう…！」

「ガロニアさんッ！君は…」

ガロニアの起こした行動が呑み込めない光太郎に、桜から目を背けず、それでも苦悶に満ちた表情でガロニアは説明した。

「今、桜さんの魔力を暴走させる原因を取り除くと同時に、桜さんが魔力切れを起こさないようにワタクシの魔力を送り込んでいます！」
「…！」

光太郎は絶句する。言うなれば今ガロニアは手術中に腫瘍の除去と同時に自分自身の血液を輸血している事に等しい。それがどれほ

どに負担が大きく、繊細な作業であるかは背後で驚愕に染まっている凛の表情からも伺える。

そうまでして、彼女は…

「お、お止めくださいガロニア様！」

「まり、バロン…！」

ここで中断するよう呼びかけたのは、桜の変化を受け入れきれず茫然としていたマリバロンだった。ガロニアを偽物として殺そうとして今更なにを、と罵声を飛ばそうとした慎二だったが、マリバロンの顔は単なる驚きなどではなく、完全に焦燥に駆られている。

「ガロニア様、貴女自身がご存じのはずです！貴女は高等な魔術を使えても、成長促進カプセルから途中で抜け出した影響で、放出した魔力を自然回復出来ない身体である」と！

「なッ…！」

それはガロニアを連れ戻さず、桜をクライシス皇帝の後継者に仕立て上げるもう一つの大きな理由でもあった。

本来、成人になるまで成長促進ビームによって身体を成長させたガロニアは、皇帝の後継者に相応しい能力を持った存在となるはずだった。だが、成長促進中にカプセルから抜け出したガロニアは肉体の年齢は16、7歳までしか育っておらず、その能力も不完全のままであつた。

その中でも大きな欠陥が、魔力の自然回復。初歩的な催眠術、転移術など高等な魔術を操ることができても自力で回復することはできずにいたのだ。さらにカプセルとデータが破壊されてしまった事により、再調整は不可能となってしまうている。

ガロニアのデータを見たジュピトルスはそれを理由に桜を真のガロニアにするべきだと論じ、反論するものは、誰一人としていなかった。

「…ライドロン」

『マリバロンノ言ツタ事ハ事実ダ』

「そんなんっ…!」

静かに名を呼んだ慎二の質問に事実を告げたライドロンの言葉に、凜も信じられず声を上げてしまう。

『…アクロバッターヲコノ世界へ呼ンダ後、彼女ノ様態ヲモニターシタガ、魔力ガ回復スル兆シハマルデ無カッタ』

「じゃあ、じゃああの子は…」

『回復シナイ魔力ハ文字通り、命ヲ削ツテ補ツテイルノダロウ』

アクロバッターの一言に、言葉を失ってしまう一同。だが、その沈黙を破ったのは、ガロニア本人であった。

「皆様…ワタクシがこのまま命と引き換えに桜さんを助ける…なんてそんな結末を迎えると考えていませんか？」

魔力を送り続けている弊害か、手が血で染まり、衣服が袖まで裂けてしまっているガロニアの声は聞くものを悲観にさせるどころか、目を丸くさせるものであった。

「ワタクシにはマリバロンへと申した通り…この怪魔界の人々と和解除し、自然豊かな世界へと変える義務があります！例え命を削るだとし

ても、捨てるつもりは毛頭ありませんわ！」

ガロニアは、笑顔で言い切った。聞いていた光太郎達は哑然としたが、次第に笑いが込み上げてくる。

「全く、誰に影響されたんだろうね…」

「間違いなくお前だと思っけどな」

最初に怪魔界へと踏み込んだ時、世界と人々の姿を見て思い悩んだ少女にあれほどの啖呵を切らせてしまったんだ。ならば、口に出した約束は守らなければならぬ。

彼女の起こす行動に、協力を惜しまないと。

光太郎は改めて2人の姿を視界へと捉える。常に魔力の消費と桜の中にある原因を取り除く為に搜索するガロニアへ助ける事があるとすれば、ガロニアへの魔力の補充だろう。

だが、彼女の持つ魔力の質が地球人と同じものとは限らない。下手に凜の魔力をガロニアへと流すことは逆効果を起こす危険性を孕んでいるかもしれないのだ。だが、それでも…

「それでも、この可能性に賭ける！」

「可能性って光太郎に何が——」

言いかけたところで、慎二は言葉を止める。

あるではないか。このような状況で、ご都合主義のごとく全てをひっくり返してきた方法が。

此度もまた、今の危機的状況を塗り替える光が光太郎より放たれた。

「キングストーンフラッシュユツ!!!」

「ッ!?!」

背中に当たる暖かな、そして失ったはずだというのに身体から溢れんばかりに満ちていく強い力。ガロニアはそれだけで理解し、感謝する。

自分を支えてくれる太陽のような存在に。

(見つけた…!)

桜に巣食う、まるで軟体生物のように絡みつく『呪い』

取り憑いた者の魔力を暴走させる恐るべき存在だが、見つけてしまえば取るに足らない黴菌のようなものだ。

ガロニアの赤い魔力を身に受け、蒸発した『呪い』を見て小さく息をついたガロニアは自分に向かい倒れてくる桜…その髪は紫ではなく、自分と同じ黒髪。体つきも以前と同じとなった為か服がダボダボであり、それでも自分より一回り…下手をすれば二回り大ききの異なる感触を味わいやや嫉妬しながらも彼女の耳元で囁いた。

「さあ、帰りましょう」

「これはこれはジャーク將軍、しばらくお姿を拝見しておりませんでした。すがどちらへ？」

「…クライシス皇帝に謁見するために要塞から離れておつたのだ。とある条件を認めて頂くためにな」

先ほどの激高した表情から何事もなかったように現れたジャーク將軍へと振り返つたジュピトルスは質問した内容に興味を抱いていたようであり、立て続けに尋ねる。

「ほほう、それは興味深い。司令官でありながら要塞を離れてまで皇帝に許しを得ることなど——」

途端、ジュピトルスは自分が左側へと傾いているという感覚に見舞われる。

(…はて?)

反対側に『あるべき』ものを失つた喪失感。

それは今まさにジュピトルスへと向けられたのだ。

「ガロニア様の代理を用意し、それが怪魔界、そしてクライシス帝国の未来の為とほざいたが、余は貴様が自分の為ならば敵どころか味方すら笑いながら殺す輩であることを忘れておらん」

「がぁ、ぎい…」

もはやヒューヒューと呼吸しか口から吐き出せないジュピトルスへ、ジャーク將軍の冷たい目は彼に対して一遍の慈悲を持ち合わせていない。

「現に先ほど怪魔界で起きた戦いの中で間桐桜に貴様の仕掛けた『呪い』が発動した。だが、貴様がしでかしたのはそれだけではない！」

「我らが戦力であるサイボーグ怪人の大多数を失わせ、怪魔ロボットネットワークスティーツカーの意思を奪い操るといふ非道。その上RXを倒すどころか奴にさらなる力を与えることに加担しよって！」

ダンツ！と劍の鞘を床にへと突き立てたジャーク將軍は自分の批難に何一つ言い返さないまま苦しみ続けるジュピトルスの背中目掛け劍を構えるが、震え続ける姿を見る事数秒。

劍を納刀し、踵を返してその場を去ってしまう。

「…この要塞から立ち去り、二度と姿を見せるな。余の部下を誑かし、利用することは許さんぞ」

振り向き、一度も目を向けなのまま部屋へ取り残されたジュピトルスは蹲ったまま喉を鳴らすようにうねり続けていた。

「ぎんぎんぎん…わ」

んか」

「間桐光太郎の首の隣に、貴方の首も並べるとしたら、さぞ愉快でしょうねえ……」

「よろしかったのですか、將軍？」

「そ、そうです！あんな恐ろしい奴を殺さず逃がすなんて……」

「……あ奴の当面の目的はRXとなる。今は一秒でも早くこの要塞から追い出すことが先決だ。処刑など、いつでもできる……む？」

ジャーク將軍の後に続いて通路を歩くガテゾーンとゲドリアンの疑問に答えるジャーク將軍は先の角で頭を下げ続けているボスガンを発見する。だが、歩く速度は緩めず、すれ違う寸前にボスガンへと声を向ける。

「よくぞ奴の起こした顛末を報告してくれたボスガン。おかげで皇帝に進言する際に判断材料として役に立ったぞ」

「は、ハハア……」

その後は言葉を続けることなくジャーク將軍と追いかけるようについていったゲドリアンは指令室へと向かっていったが、將軍に続いていたガテゾーンは振り向かないままボスガンへと言い放った。

「災難だったな。俺たち大隊長しか知りえないサイボーグ怪人プラントの指揮権である暗号コードを、あのサイコ野郎に強請られてちまうなんて」

「……………」

「ま、あの野郎に脅されちや渡すほかないかもしれんな…俺だったら、破壊されても御免だがな」

「っ……………」

「あんま気落ちなさんな。新しいコードは今度教えてやるからよ」

片手をズボンのポケットへ入れ、反対の手をひらひらと振りながらガテゾーンはその場から離れていった。

取り残されたボスガンは拳を壁面を思い切り叩き付け、まるで呪うかのようにその名を口にすする。

「おのれいガテゾーン…機械人形風情が私を侮辱しおつてえ…」

もう、その場には誰もいない。

ガロニアとなるはずだった桜も、本物のガロニアも、敵であるRX達も。

ただ一人佇むマリバロンは、桜が元の姿に戻ってしまった直後にライドロンに乗ってこの世界から逃げ出そうとする光太郎達を止めようとかけたしたが足元に放たれた銃弾を回避。猪口才など隠し武器である拳銃を構えていた慎二を睨むがその直後に腕に当たった攻撃によって足が竦んでしまう。

撃たれた痛みはそれほどではないが、言い表しようのない倦怠感が

身体を支配し、動けなくなってしまったのだ。みれば慎二の背後に右腕をこちらに向けた赤い服を纏った少女が睨んでいる。

資料にあった人間による初歩的な呪いであるガンド。

焦っていたとはいえ、地球人のそんな攻撃を受けてしまうとはと屈辱に染まるマリバロンだったが、本物のガロニアの声を聴き、体調など関係なしにその場から動けなくなってしまった。

『マリバロン…もう、貴女とは語り合うことはありません。ですが…』

『私がカプセルの中にいた時、ワタクシの成長を見守り、微笑みかけてくれた事は感謝いたします』

『…ありがとう』

そして光太郎達は地球へと逃亡してしまっただった。

(私は…)

体調も戻り、立つことが可能となったはいいが何故かマリバロンはその場から動けなかった。なぜ、ガロニアの悲しそうな目で言われた言葉がいつまでも自分を縛り付ける？確かに彼女の成長を見守るの

は自分の任務だったが、笑っていた記憶などない。

きつと、ガロニアが自分の都合のいいような勘違いをしていたに違いない。

そうに、違いない。

『マリバロン、聞こえるか？』

「ガテゾーン…」

『今回の一件、ジュピトルスとRXの戦いに巻き込まれてガロニア姫は死んだってことにするらしいぜ』

「そんな…!」

『それでもしなきゃ、お前をまた前線に立たすことはできんだと』

「…ジャーク將軍」

そうだ、自分が戦わなければならない。ジャーク將軍の元で宿敵RXを倒す。そして、証明するのだ。ガロニアに、今自分たちの戦いこそが、クライシス帝国と怪魔界の為であるのだと。

「すぐに戻るわ。次の作戦、手伝ってもらおうわよ、ガテゾーン!」

『やれやれ、了解だ』

もう、迷いはない。

マリバロンは戦う。忠誠を誓ったジャーク將軍のために。

「あれ…? 私」

「…おはよ、桜」

異空間を移動するライドロンの後部席で目を開けた桜が見たのは、

自分の顔を見下ろす実姉の姿だった。

「姉さん……こは……私は……」

「大丈夫、帰ったらゆっくりと話しましょう。ゆっくりとね」

優しく微笑む姉に頭を撫でられ、桜は再び瞼を閉じると、ゆっくりと寝息を立て始めている。

桜を膝枕する凜の後では力を使い果たしたガロニアが、操縦席では先ほども「最後まで油断できない」と見栄を張っていた慎二が眠りにについている。

起きているのは凜と、ライドロンを追走するアクロバッターを操縦する光太郎だけだ。

さらにそのあとにはロードセクターが走っているが、おそらく無駄話をしているのだろう。

ふあ……と小さくあくびをする凜も瞼が重くなり、目を閉じ始めた。

今だけは、眠っても構わないと、座席のシートに身を預けてしまう。

それでも、桜の頭に当てるその手だけは、決してどけることはなかった。

第51話

クライシス帝国の祖国である怪魔界へと乗り込み、間桐桜を救出して3日が経過しようとしていた。

間桐邸の地下

かつて当主であった臓硯が率し、肉体の一部でもあった刻印虫の住処でもあった通称『蟲倉』。以前はおびただしい数の刻印虫が蠢ぎ、孵化していたようだが臓硯が吸収の魔術を放棄して以来蟲は生まれず、臓硯が間桐光太郎へ打倒ゴルゴムの願いを託す為に敢えて敵対する素振りを見せた頃には、蟲倉には生息する刻印虫はいなかった。

臓硯の死後、倉の隅々に放置されていた蟲の亡骸は光太郎達の手で埋葬され、現在では倉は慎二と桜、そして赤上武の訓練場として機能している。

照明も蝋燭による薄暗いものではなく配線を強引に屋敷から引つ張りこみ、白昼色の蛍光灯で照らされた空間に立つ赤上武は簡易式の長テーブルの上に並べられた道具を見つめていた。

「ふむ…」

そこにはつい先日再び自分を変身させた戦極ドライバーとブラッドオレンジロックシード、そして異世界の星の統治者である男から託されたブラッドカチドキロックシードが並んでいた。

ブラッドオレンジロックシードは過去に使用したものと酷似しているが、中身は全くの別物と化している。おそらく前身であるヘルヘイムの果実を手渡した人物の違いなのだろうかと考えた武は過去に自分を利用した蛇を思わせる男と、躊躇しながらも力を与えてくれた自分を認めてくれた男を思い浮かべる。

もはや比べるまでもないと苦笑しながらも、さらに託された2つの道具に視線を向け、彼の言葉を思い出す。

「仲間たち、か」

武への説明中に彼が見せた、嬉しさと誇らしさ。彼の言う仲間たちというのは、それほど大きい存在なのだろう。同時に理解もできた。自分にも胸を張れる仲間たちと出会えたのだから。

「ならば、これは俺が持ち続けても宝の持ち腐れというものだな」

自分にはもう十分過ぎるほどの力と願いを託されている。これ以上望むのは贅沢というものだ。それに2つの道具は明らかに武の持つ戦極ドライバーやロックシードと規格が異なるため、武には使用できない代物。

ならば、自分以外の者が持つべきなのだろう。

「と、いう訳でお二人に受け取って欲しい次第なのだ」

「なんの脈絡もなく部屋に入って何が『と、いう訳』だよ。お前は光太郎か」

「に、兄さん…それはいくらなんでも…」

地下から地上へと出た武がまず尋ねたのは桜の寝室である。

ガロニアとしての知識と力を植え付けられた桜は精神面に問題はないものの、慣れない怪魔界から地球へ戻った際の気候の変化の影響の為か知恵熱を出してしまい高校を休んで療養中。

今ではベツトの上で身体を起こし会話する程度には回復し、隣で椅子に座りリンゴの皮むきをしつつ、突然出現した武へ厳しく接する慎二を窘めている。

ちなみに桜の言い分は「家庭内でも突拍子のない行動を起こす光太郎と同じ扱いにしては武に失礼である」という意である。

哀れ間桐光太郎。

2人の様子を見て確かに言葉足らずだったか…と頷いた武は怪魔界からの帰還後に行ったそれぞれの報告の中で深くは口にしなかった事象…他世界の人物と接触した事に関して、慎二と桜へ説明した。

「つまり、これは神様からの贈り物…ってこと？」

「確かに珍しい形はしていますが、私たちの世界でも見かけないことはなさそうです…」

「だが、俺も使い方をはっきりと聞いた訳ではない。いざと言う時に2人を守ってくれるかもしれぬ…と勘に近いものなのでな。御守りと思つて貰えればそれでいい」

お茶を濁すような説明をする武であったが、武は今慎二と桜が手にしている『それら』が何であるかは知っている。だが、今あるものだけでは機能しないという理由から2人には別世界に存在するものまでしか説明できないでいた。

だがこの時は慎二と桜…2人に道具を見せた武ですら気が付いていなかった。形状の異なる2つの道具を2人が無意識に手を伸ばし、

別々の道具を手にとっていたのだから。

『これは、自分が持つべきものである』と導かれたかのように。

それでは失礼すると寢室を後にした武の背中を見送り、溜息をついて彼の手から渡った道具を懐へとしまった慎二は思い出しかのよう
に道具と入れ替えに取り出したそれを桜へと差し出す。

同じく手にした道具を珍し気に眺めていた桜の表情が陽を浴びた
向日葵のように明るくなったかと思うと、直後に曇ってしまう。

慎二が差し出したのは、桜が普段肌身離さず身に着けていたリボ
ン。

あの日、雨が降り注ぐ中で桜が木星の騎士ジュピトルスに誘拐され
た際に解け、水たまりの中に落ちて泥だらけとなっていたリボンを慎
二が回収したものだ。しっかりと汚れを落とし、アイロンをかけて丁
寧に畳んで新品同様となったりリボンを受け取ることを、桜は何故が躊
躇していた。

「……………」

「遠坂に申し訳ない、ってんならもう許しは貰ってるよ」

「え……？」

「あの子のことだからリボンを手放した事を気にしてるかもしれな
いってな。それに、気にするような素振りを見せたら……」

「見せたら……きゃう!?!」

突然立ち上がり、指で額を弾かれ短い悲鳴を上げる桜。うくと涙目
となり、赤くなった額を手で押さえ痛がる義妹の姿を見て意地悪な笑
みを浮かべる慎二は桜の手を取り、差し出したままだったリボンを握
らせる。

「それで、強引にでも持たせろ…だと。はあー、これでアイツのパシリは終わった。あー清々した」

「兄さん…」

「…もう手放さなければいいだけの話だろ」

「はい…」

改めてリボンを目にした桜はそっと胸に抱き、幼き日の自分と姉を思い出した。遠坂家から離れ、間桐家の養子となることが決まり家を離れる直前に凜が無言で自分に渡したのは、一番初めに造った魔術品であり、微々たる魔力しか宿らないリボン。それでも、桜にとっては大切な宝物だ。

大切にすると誓ったプレゼントを意識を失ってしまったとは言え手放してしまい、姉への罪悪感を覚えるなどこの場にはいない凜にはお見通しだったのだろう。無論、リボンを回収した旨を凜に伝えた慎二もだ。

伝達役を終えた慎二は食べやすいサイズへ切り分けたリングを皿へ乗せると、無言で部屋を後にする。

すでに曇った表情はなく、愛おしくリボンを見つめて微笑む桜を横目で見た慎二も同様に、彼の表情は穏やかなものだった。

「っと…」

ゆっくりと扉を閉めた慎二の前を何者かが通過する。目で追ってみれば慎二の半分程度の身長生物達が整列してモップを走らせている光景が映った。

さらに窓から中庭を見下ろしてみれば草むしりや夕刊の回収、アクロバッター達の住まうガレージの屋上に登りゴミや枯れ木を回収など見た目によらずキビキビと働く生物達。窓枠に頼杖を付き、頼んでもないのに懸命になって働く生物達の名を口にした。

3体のインベスが達磨のように重なり、高所の窓ふきをする姿を眺めながら猫かぶり優等生の愉快的姿を思い出し笑いをする慎二は、インベス達の現在の状況も合わせて思い出す。

敵の召喚魔術によって呼び出されたインベス達はどうやら元の世界へと帰る手段はまるでなく、この世界へ残留する破目となったようだ。だがインベス達はそれすらも覚悟していたようであり、むしろ望むところという翻訳を聞いた時、彼等を見た目通りで判断していた慎二はその考えを改めるまでに至っている。本来ならば関係のない世界へ放り込まれ、途方に暮れていてもおかしくはない。

しかし主の願いでもあるのか、インベス達は共に戦う事を武に誓っていたようだ。後に聞いた戦いぶりからしても、それは確かなものなのだろう。

だがここで問題が発生する。せっかく決意を固めてくれたインベス達の生活の場をどうするか、という事だ。

それなら家でいいじゃないかと言う平常運転の光太郎の口をガムテープで閉ざし、目を覚ましたガロニアと戯れているインベス達を見つめる慎二に武からの進言が耳に入る。

どうやら異世界の神様から授かったブラッドカチドキロツクシードには武の戦闘力を向上させるだけでなく、インベス達に纏わる機能も宿しているらしい。

その一つが身体の縮小。

先ほど慎二が見た通常の半分以下までの身長どころか小指程のサイズまで縮めることが可能らしい。これならばタオルを敷いた段ボールにでもまとめて寝かせればいいと言った時には桜から「きちんとしたお部屋を用意すべきです！」と怒られてしまった。が、それはメディアお手製のドールハウスを受注して事なきを得たが：

そして少なくとも30体は越えるインベス達の食糧問題。これもどうやら想定済みであったのか、インベスの1体が所持していた高さ30センチ程の苗木を中庭の一角にある花壇へと植えた翌日。なにやら禍々しい色をした果実が実を結んでいたのだ。

武曰く、ヘルヘイムの森と呼ばれる場所の果実とほぼ同じ性質の実ではあるのだが手にとっても異様な程に食欲が沸くこともなく人間が口に含んでもインベス化しないよう品種改良されたものであり、純粹にインベスの食糧としての果実しか育たないようだ。

実が生るのは1日に1個としかならないが、先に述べた通りにインベス達の大きさを縮めて食べさせてしまえば逆に余ってしまうほどの備蓄にも余裕が出来るという訳だ。

だが、欠点として武の持つようなロックシードへの変質が欠如しているため、武は今以上にロックシードを増やすことができないらしい。が、あの武の事だ。再び変身できるだけで十分であると言いついに違いない。

一応外から見た人間の目につかぬよう、家の周りにはインベスが視認できないような結界を設けてはいるが、こうして庭中を小人が縦横無尽に動き回っている光景はそう見れるものではないだろう。

そんな自分らしくもないファンシーな考えを浮かべる慎二が次に見たのは中庭の隅で敷かれたブルーシートの上に置かれた椅子に座るガロニアと、その背後でせつせと「作業」に没頭していた光太郎だ。

「…つと。これで終わりだね」

「はい、ありがとうございます」

「…今更だけど、本当によかったのかい？せつかく桜ちゃんとお揃いだったのに」

「だからこそ、ですわ。ただでさえ顔が似ているのに、髪の毛の長さまで同じではこれから会うであろう方々が混乱してしまいますもの」

鍬鋏と櫛を台座に置き、合わせ鏡でガロニアに出来栄を確認する光太郎に、背中まで届いた黒髪を肩に触れる程度までのミディアムとなったガロニアは首を覆っていた布を解くと、ブルーシートの上に散乱する自身の髪を見つめる。

クライシス帝国を裏切り、光太郎達と共に戦うと決意したガロニア。しかしマリバロンの言う通りガロニアには自力で魔力を回復する術を持っておらず、桜にかけられたジュピトルスの呪いを解くために全ての力を使い切ってしまう。

キングストーンの光を浴びる事でその不調すら解決出来るものと慎二たちは考えていたが、あの光に出来たのは消費するガロニアの力をただ補充し続けていただけであった。

成長促進カプセルを出たその時点で、ガロニアは魔力を自然回復できないという形で完成してしまっている。それ故に、ガロニアが力を回復できることはもう不可能であると検査をしたメディアからの冷たい結論が今でも光太郎達の耳に残っている。

しかし当の本人はできない事は仕方がない、ならばできることをするまでと、どこまでも前向きに捉えて心配する光太郎達に満面の笑顔を見せるのであった。

そんな彼女の願いでもある断髪は、ある意味過去の自分への決別でもあり、決意の表れだったのかもしれない。意外な特技である散髪を披露した光太郎は手鏡を取って髪を撫でるガロニアを見て、本当に良く笑うようになったと感じた。

初対面では桜が自分のせいで誘拐されたと自責するばかりであったが怪魔界で見せた彼女の決意と覚悟は目を見張るものがあつた。今では何処を放浪しているかも知れない金色の王も、彼女を認めてくれるかもしれないと思う光太郎のに、まさに門を出ようとする長身の女性が映つた。

「メデューサー！」

ビクリ、と肩を震わせて立ち止まるが、振り返る様子のないメデューサーは手にした買い物バッグを握りしめる。どうやら中庭にいる光太郎へばれない様に外へ出ようとしたようだが失敗した様子である。呼びかけた光太郎も声をかけたのはいいものの、何を話せばいいのか分からず数秒間重い沈黙が走り、聞こえるのはインベス達かせっせと走る足音だけだ。

「えっと…買い物、なのか？」

「は、はい…今夜のおかずを…」

「一緒に行かなくて平気…？」

「それには、及びません…では、急ぎますので」

「うん…気をつけてね」

結局お互いに顔を合わせる事がないまま、メデューサーは足早に間桐邸を離れ、光太郎は無言で鉢などの後片付けを始めるのであつた。

「はあー、まだ碌に目も合わせられないのかよ…」

一部始終眺めていた慎二は2人の重すぎる会話に深く溜息を付くしかない。

事の始まりであるメデューサの過保護っぷりには以前から気にしてはいたがまさかここまで溝が深くなってしまふとは…聖杯戦争時での自覚なくイチャついていた頃が懐かしく思える。

「つーか何で身内の情事にここまで頭悩まさなきゃいけないんだよ…」

やれやれと今度こそ自室に向かう慎二。そして同時刻、方向性としては全く違うが、自分がまるで関わっていない人間関係に頭を悩ませている男がいた。

「——だと言うの遠野くんは…って、聞いてるんですか!？」
「あーはいはい聞いてますよお姉さまー。あ、すいません、これお代わりお願いしまーす」

町内で通に取っては隠れた名店となっているカレーショップ「メシアン」。店内で対面席に座している男は目の前で既に7皿を積む女性の愚痴を聞き流しながら店で唯一の甘味とも言えるヨーグルトドリンクを注文した。

ドリンクを受け取るまでの間に自分を誘った目の前の女性…大きな眼鏡にベリーショートの髪型、自分達が良く知る少年が通う学校の先輩でありその実態は聖堂協会の埋葬機関に属する代行者、シエル。そんな彼女が町で偶然見かけたからという理由で雑居ビルの2階に位置する店へと連れ込み、壮大な愚痴を始めてしまった訳だ。

(あー久々に表に出て今度こそ特大パフェに挑戦しようと思ってた矢先によ〜)

内心では面倒くさくて仕方がないが奢ってくれと聞いて喜んで着いてみればカレーの専門店。彼女の行き先なんて予想すらするまでもなかったのに…一生の不覚である。

吸血鬼と少年が仲睦まじい様子を見てストレス解消に愚痴とカレーがセットになっているだけならばただ聞いていれば済むと思っていたのだが…

「んっ、んっ、んっ…ぷはあ…ですからあく私がこの町に残って浄化し

ながらも外部からやってくるうゝ吸血鬼を相手しているというのに遠野くんはあのあーぱー吸血鬼と…って本当に聞いてるんですかあッ!？」

「だあーもう聞いている聞いているッ!! そうだよなお前は頑張ってるよな」

「そうなんですよお！なのに、なのに遠野くんは真祖が突然現れても迷惑そうにあしらってるのに実はそうでもないって顔してえゝ」

ダンッ!とスूपカレーを一気に飲み干したシエルの顔はほんのりと赤くなり呂律が不安定である。つまり…

(こいつ…カレーで酔ってやがる…)

これが極めるといふことか…といふか上級者過ぎる。

延々と聞こえる彼女の言う真祖…アルクエイド・ブリュンスタッドと遠野志貴が仲良くすることが大変お気に召さず、事を目にする度に本来の人格が表に出ている際に捕まっているのだ。

(まさか今日この女に鉢合わせすると予感して引つ込んだんじゃあないよなそうだよな…ってあー…外側もそうだけど『内側』もうるせえ…)

と、目の前で10杯目のスूपカレーを辛さ増し増しで注文する女性を横目で見ながら、自分の身体の中で起きているもう一つの騒ぎを聞き取り、一段と深く溜息をつく男…月影信彦の身体を借りているアヴェンジャーのサーヴァントだった少年アンリマユ。

だが思う。

こうして下らない人間らしいいざこざに巻き込まれることも、町を騒がしていた一連の吸血鬼事件を終結させてこそ実現したのだと。

それが、『自分達』の本当の意味での始まりであったと。

第52話

それは、一人の人間だった者が抱いた感情が叶う事無く、本人が認める事が出来ず、終焉を迎えた永い物語だった。

言葉だけを聞けば悲劇を連想させるが、その終焉を迎えるまでに起きたのは、数えきれない惨劇。

その者の心を占めた美しい吸血鬼に追われる為に男はその異様な力で幾人もの人生を本人の意思とは無関係に何度も歪ませ、狂わせてきた。

そして出会った瞬間に狂ったように笑い、殺意に向けた瞬間に殺されてきた。

何度も。

何度も。

何度も繰り返した。

誰にも彼の行動は理解されず、その者も理解を他人に求めないだろう。

悠久と思えた繰り返しが此度の出会いで恐らく最後であると双方が理解した中、それを彼の思惑とは別の形で終わらせたのは、1人の少年だった。

彼と違い魂を移し替える能力もなく、人の血を吸うことで人知を超えた力と魔術を扱えることなどできない。

少年はただ、人より「死」を理解し、「死」と隣合わせで生き続けていた。

そして彼と同じく、だが大きく違う感情を吸血鬼へと持ち合わせていた。

それが何であるのか、月影信彦は意味は知っていても、この時理解がまだ及ばないものだった。

朴念仁と同居人どもに笑われるが手近にあった獅子唐をかじることで黙らせた信彦であったが、それでも今回の件で認め、自覚できた事があった。

自分に…否、自分達にとってそれが大きな節目を迎えたのだから。

それでは思い出そう。

彼等が迎えた一つの結末を迎えた物語を。

「アル…クエイド」

探し求める女性の名を口にした遠野志貴は力なく壁を背にして座り込んでしまう。

丸一日休む間もなく走り続けたが、アルクエイド・ブリュンスタツドの影すら見つからない。魔眼殺しの眼鏡を外し、目に映るのは吐き気を催す「死の世界」を前にしても彼女の足取りを追う手がかりに繋がると考えたが、美咲町に潜伏しているであろう吸血鬼の死徒すら見当たらない。

もしかしたら、そんなものは最初から眼中になかったのかもしれない。

他の人間を襲い、血を奪う死徒を倒す事よりも、志貴はアルクエイドを見つけることが先決なのだ。

いつものように夜の見回りに繰り出した時。吸血衝動に駆られ、自分の血を吸おうと迫るアルクエイドに恐怖した志貴の声を聞いて間一髪思いとどまったアルクエイドであったが、直後に現れたシエルに、吸血衝動を抑える事が限界である存在に志貴の隣に立つ資格はないと断言されてしまう。

瞬く間に立ち去ったアルクエイドを追う志貴はシエルの言葉には耳を貸さず、なぜこんなにも必死に彼女の傍にいたいのかを考えた。

そして認めた。

アルクエイドと一緒にいたいと思うのは一度殺してしまった罪悪感でも、町に巣食う吸血鬼を倒すという正義感でもない。

好きだから。

相手が吸血鬼という種が異なる相手だとしても、アルクエイドという女性が好きだから、遠野志貴は共に行動し、戦えたのだ。

自覚した志貴は再び目の前に現れてくれたアルクエイドに思いを打ち明け、アルクエイドもまた受け入れてくれた。

相手が痛がるかも、などと言う遠慮などなしに強く抱擁し合い、唇を合わせ、身体を重ねた：

ベットの隣で志貴の手を握るアルクエイドの手は暖かく、彼に向ける笑顔はとても晴れやかだ。シエルの警告するような恐ろしい存在とは思えないほどに。

しかし志貴が目を覚ました時には、アルクエイドは姿を消していた。

シエルの言った通り、吸血衝動を抑えるが無理だったのか、吸血鬼と決着を付けるためなのか。だがそんな建前、志貴には知った事ではない。

再度立ち上がり、アルクエイドを探し始めた志貴はふと自分の通う高校へと足を踏み入れていた。

夕刻なのか周囲には誰一人姿を見かけなかったが、志貴は歩んでいくうちに小さな違和感が次第に大きくなっていくことに気づく。

(どうして、誰もいないんだ…)

本日は平日であり、夕刻ならばまばらにでも教室や廊下に学生や教職員がいるはず。それに窓からみる校庭には部活動に勤しむ生徒は影すら見当たらない。

自分以外、この校舎に誰もいない。

その事実をようやく理解した志貴の耳に、何かが落下した音が響いた。物音ひとつ聞こえていなかった為か、ビクリと肩を震わせてしまった志貴は廊下の奥へと身体ごと向ける。

照明一つなく、唯一窓から差す西日によつて照らされる廊下を転がってきたのは、どこの自販機で売られているような一本の缶コーヒー。

なぜここに缶コーヒーがなどと、間の抜けた疑問などこの10日間にも満たない中で死線を潜つて来た志貴は抱かない。

考えるとするならば、缶コーヒーを投げたのは、『誰』だという事だ。

缶コーヒーが志貴の靴に当たり、動きを止めた後に別の音が定期的に廊下の奥から耳に届き、それは間違いなく足音であると志貴は警戒する。短刀をいつでも取り出せるよう身構えるが、ついに姿を現した者の姿を見た途端、志貴は激しい頭痛に襲われ膝を付いてしまう。

黒いブーツにズボン、ボタンを留めず纏ったワイシャツの下から不気味なほどに白い素肌をさらし、さらに黒いマントを肩に羽織る男

は、肩に触れる程度までに伸びた真っ白な髪の毛をかき分け、『陽が当たらないように』影に留まりながら志貴を見つめていた。

「がッ…!？」

「どうした、飲まないのか？」

缶コーヒーを口に運び、何処までも冷たい眼差しを向ける男を、志貴は知っている。

数日前、夜中に襲い掛かってきた包帯だらけの男。まるで自分の『線』にめがけて刃を振るってきた時、同様に頭痛が起きたが、その時はシエルによって助けられ事なきをえていた。

しかし、それが初めてではない。

志貴はもつと前から、現れた男…吸血鬼を知っているのだ。

「———まだ思い出せない、か。どうやら親父の暗示は余程強力だったようだな」

「これじゃあ台無しだッ！俺からすべてを奪ったお前に———」

男が志貴に対して何やらわめいているようだが、何を言っているのかまるで分らない。だが、ただ一つ理解した事がある。

この男は、吸血鬼は自分を相当憎んでいるという事だ。

「……………」

ならば、こちらとしても都合だ。

この男が吸血鬼ならば：アルクエイドの敵ならば、この場で倒す。もう彼女が無理をする必要がないように。

志貴が短刀を逆手に持ち、男も口元を禍々しく吊り上げて手にナイフを握む。

同時に陽が沈み、廊下が闇に飲まれ始めた直後、2人は一斉に距離を詰めた。

時はしばし遡る。

「連絡が取れないとはどういうことだ？」

「うーん、情けない話なんだけど、昨日の戦いで俺が持ってた携帯電話：衛星にも通じて仲間たちと連絡をとれるやつなんだけど、それが壊れていたみたいなんだ」

（あーあれですね、月影信彦さんという根暗なお方を守った為に壊れちゃったんですねわかります）

「……………」

照れるように笑う筑波洋の言葉を受けた月影信彦は今回に限っては内面に潜むアンリマユの軽口に反論どころか制裁することすら出来ないでいた。

信彦と洋の前に現れたゴルゴムの大神官であったダロム、バラオム、ビシユムが融合し、さらに死徒として復活した怪人は信彦を再び創世王として祀りあげようとするが信彦は強く否定する。

再びゴルゴムに加担することを拒む信彦を強引に連れ去ろうとするダロム達の攻撃から守るために、仮面ライダーへと変身した洋は身を手して信彦を庇い、大きなダメージを負ってしまった。

変身が解け、ボロボロとなりながらも自暴自棄になりかけていた信彦を諭し、再び変身しようとするがこれを制して戦う決意を固めた信彦に後を託したのだった。

その後、特に潜伏先を決めていなかった洋は信彦と同じホテル：それも隣の部屋を借りて一夜を明かし、信彦の部屋でこの町にまだ潜んでいるであろうダロム達ゴルゴムの対策を話していたのだが、そこで洋が仲間達との通信手段を失ってしまったと打ち明けた。

「それに昨日の攻撃で俺の身体もちよつと不具合が生じてね。仲間達と脳波で通信することもできなくなってるんだ」

(ほえー、そんなことまで出来るんかね)

「だが、それ以外の連絡方法は持ち合わせているのだろうか？」

まだゴルゴムの世紀王として君臨していた頃、信彦は過去の仮面ライダーと呼ばれる者たちを調べた際に、彼等には大きな組織がバックアップしているはず。ならばもしもの時の為に自分の危機を組織に伝える何らかの方法を所持している筈だろう。

笑顔で頷く洋は申し訳なきように、窓へと目を向ける。信彦の質問には肯定している事は伺えるが、なぜそのように困った顔をするのだろうか。疑問に思った信彦は洋の視線を追うように窓へと顔を向けると…

「…おい」

「えっと…定時連絡をしなかった場合は緊急事態でことで応援が駆け付けてくれることにはなっていたんだけど」

申し訳なさそうに頬を指でなぞる洋は信彦から発する圧力に冷や汗を拭って、窓の外で逆さ吊りの状態でこちらに屈託のない無邪気な笑顔を浮かべ、手を振る青年の顔を見た。

信彦たちが利用しているホテルは先日死徒の捕食によって巨大な墓地と化してしまったセンチリーホテルに次ぐ高級地であり、信彦たちが泊まる部屋は最上階に当たり、地上からの高さは50メートル以上あったはず。

開くことのない窓の外から手を振る青年は洋と同年代に見られるが、その表情はまるで一回り若い少年を彷彿させる。

未だ肌寒いこの時期に背格好が緑と赤のまだら模様の腰布に、同じ色の半そでの上着のみである。だが左腕の腕輪…銀色の鳥を思わせる装飾と、腰に装着されたベルトを見て信彦は合点がいった。

間違いなく、筑波洋と同じ仮面ライダーであるのだと。

「洋、元気だったか!」

「お久しぶりです!まさか先輩が来てくれるなんて…」

「アマゾン、ちよつと丈二に聞きたいことあった。そしたら洋が大変だって聞いてここにいろー!」

「そうか、結城先輩が…」

場所をホテルの屋上へと移した信彦は再会を喜び合う洋と野生児のような男を遠目で眺めていた。そして視線を空へと向けると夕暮れの空を舞う軍用ヘリを発見する。

どうやらこの男をここまで乗せていたようであり、既に数百メートルは離れていながらも開放されたハッチから信彦をいつでも狙撃が出来るよう狙いを定めている。

未だ自分を危険視されていることには慣れていているが、魔術協会と聖堂教会以外にも自分と対抗しようと考え人間がいるのだなど、逆に関心するほどであった。

だが、意識を外へ向けていたためか自分でアマゾンと名乗る男が眼前にまで迫っていたことに遅れて気づいた信彦は急ぎ距離を置く。

「ッ!?何のつもりだ…」

警戒する信彦の反応など構わず、再び接近したアマゾンはクンクンと鼻を鳴らし、信彦の周りをグルグルと回り始める。

（まるでじゃれ付く犬そのものだなおい。仮面ライダーってのは変わり者の集団なのお前の親友含めて）

「……………知るか」

長めの沈黙の後に答えた内容はわれ関せず、というものだったが、その間にアマゾンの奇行は終わっていたらしく、目を瞑り今度は腕組をして畝っている。どうかしたんですかと洋が尋ねると、淀み一つない透き通った瞳を信彦とむけ、ゆっくりと口を開いた。

「…お前不思議だ。身体1つなのに、2人いる」

「ッ!？」

（おいおいおいおい…エスパーかよこいつ?）

これまで秋月信彦という身体に信彦とアンリマユの魂が内包されていると見抜いたものはいない。驚きを隠せない信彦とアンリマユは自分達を状態を見抜いたアマゾンに何故わかったのかと口を開きかけたが、さらに2人が予想だにしない言葉が発せられた。

「それに…ずっとそこに…もう1人…」

「さて、それはどういう…」

もはや混乱させることばかり言い放つアマゾンを問い詰めようとした信彦だったが、突如として気配が変わる。

まるで天敵を威嚇する猛獣のように、アマゾンがうなり始めたのだ。

「ッ!? ガルルウウウ…!」

突然八重歯をむき出しにし、信彦たちとは正反対の方角へと駆け出したアマゾン。何事だと顔を見合わせる信彦と洋はアマゾンの後を追う金網で仕切られた屋上の隅まで移動し、アマゾンが睨んでいる方角へ視力を強化して見つめると…

「なに…?」

そこは遠野志貴が通う学校であり、その校舎内の中で戦いを始めている者がいた。一人は志貴。片手に武器を持って相手の攻撃を必死になって弾いており、苦戦しているようにも見える。

志貴の相手は同じ得物で志貴と対峙しているが、男の攻撃は刃物による攻撃だけでなく、魔術も織り交ぜての戦法だ。

今、志貴が戦う相手は吸血鬼以外にない。そしてその吸血鬼に生み出された死徒：ダロム達が周辺に潜んでいる可能性だってある。

もし、遠野志貴が自分と何度か行動を共にしているのだと知り渡っていたのなら…

「ちいッ!!」

信彦に迷いなく行動に移した。

金網に手をかけ、路面を蹴ると足のみを部分的に強化・硬質化させ、隣のビルの屋上へと飛び上がった。

ホテルの屋上から自分を呼ぶ声が聞こえるが、そんなことに構わず、信彦は志貴のいる高校へと移動を開始。

ビルからビルへと飛び移る信彦は滞空中にふと空を見上げる。

志貴を発見した直後に陽は沈み、夜空を照らす月がいつの間にか、姿を現していた。

第53話

月影信彦はその強化された眼で少年と敵との闘いから目を離さないまま建造物の屋上を足場にして跳躍を続ける。

敵：恐らくは吸血鬼の出現に動揺した遠野志貴であったが開戦を合図として別人のような殺気と動きで敵を翻弄している。あれが、自分へあどけない表情を向けた少年と同一人物であるのかと疑うほどに、志貴の放つ『殺すための攻撃』は卓越していると信彦は思わずにいられない。

以前、シエルより信彦を追い詰めた死徒 ネロ・カオスが志貴によって倒されたと聞いた時は信彦だけでなく内側に潜むアンリマユさえ疑ったが、志貴の持つ直死の魔眼とあの戦闘を見れば否応なく認めざる得ないだろう。

一気に敵との距離を詰め、同時に得物を持つ手を肘で弾くと吸血鬼の顔にめがけ刃物を振るう。志貴の繰り出す攻撃に面をくらい、思わず後ろに下がり攻撃を回避するが、その一瞬で身体を屈め、敵の視線から消えた志貴は吸血鬼の足を潰すために短刀を真横へ走らせる。

その流れるような、そして恐ろしくもある志貴の動きに吸血鬼は同じ一土俵《武器》では不利と見て掌から紫色の雷を放ち、志貴の間合いから逃れると額の汗を拭い、捲し立てるように口を動かした。

聴覚の強化までは施していない信彦には吸血鬼が何と喚いているかは聞き取れない。だが、吸血鬼の言葉を聞いた志貴の動きが一瞬鈍ったその時――

「…ッ!?」

戦いの最中に破壊され、教室に空いた大きな穴から校庭へと落下し

たそれは、腕。

力なく、指を無造作に広げた状態で落ちたのは人間の左腕を見た信彦は急ぎ目を煙を上げる教室で膝を付く志貴へと向ける。

志貴は身体の一部を失っており、その姿を見て後方に立つ吸血鬼が不快な声を上げてあざ笑っていた。

志貴の腕を、吸血鬼が切断したのだ。

(おいおいやべえんじやねえか？あのままだと志貴っち、傷口からの出血のショックで…)

「いや、どうやらそれ以上に厄介かもしれんぞ」

(はあ？こんな時に何言つて…ああ、そういう事かよ)

信彦の口から出た事が腑に落ちたアンリマユは志貴の身に起きている不審な点に着目した。アンリマユが当初考えていた通りに片腕を切断されてしまった志貴は重症である事に変わりない。だが、その傷口に対して出血量が多すぎるとも少なすぎるともなさすぎるのだ。

それは校庭に落下した志貴の左腕も同様であり、腕の骨・筋肉・血管などをまるで無視したかのようにナイフが志貴の腕に食い込み…否、浸透したように、あっさりと斬り飛ばされていた。まるで予め折り目の付いた紙を切り離すように容易く身体と腕が離れ、出血という機能が『死んで』しまったように、だ。

思い返せば、志貴は吸血鬼の振るうナイフを異様な程に警戒していた。それは今のようになると予測していた故だったのかもしれない。志貴が恐れ、現在陥っている結果を知っていたとするならば…

「あの吸血鬼も…『視えて』いるのか」

(そんなポンポン魔眼持ちがいていいのかね…)

全く笑えない冗談だ。あのネロ・カオスを消滅させてしまうような異能がこうもぞろぞろとこの町に現れるなど、魔術協会と聖堂教会は目を自分などに向けている場合ではないだろう。

アンリマユの軽口に不本意ながら同意している間に志貴は再度立ち上がっていた。片腕を失い、バランスを取れない状態でありながら動きの俊敏さは段違いに上昇し、散乱した机や椅子を放り投げ、隠れ蓑として吸血鬼の死角から斬撃を繰り返していく。

(そうまでして、なぜ戦う…?)

志貴は真祖に力を貸すだけであって、彼自身に吸血鬼を倒す理由はないはずだ。この戦いすら、相手との相性を考えれば撤退し代行者に押し付ければ済むはず。

それでも志貴は立ち向かっている。力の次元が違う吸血鬼であろうと、自分と同じ能力を持った相手だとしても、引く事なく。

信彦には解らない。

なぜそうまでして、魔眼持ちという事を除き、普通の少年に過ぎない志貴が戦おうとするのか。

(こらッ、ボウツとしてる場合じゃねえだろうが！)

アンリマユの一喝にハツとした信彦は移動中に余計な事を過らせていたと気づき、舌打ちする。志貴が動く理由など今はどうでもいい。

信彦が今考えなければならぬのは、あの場へゴルゴム達が現れた場合の事だ。この町に到着して以来、何かと遭遇する回数が多かった信彦と志貴の関係をダロム達が知らぬはずがない。弱ったところを狙い、人質にすることなど容易に想定できる。

それにダロム達が死徒となった背景にはあの吸血鬼が関係あるはず。何が狙いであるかと問い詰めなければならぬと考えるが、この時信彦は自分の優先させた順位に気が付いてない。

ダロムと吸血鬼の関係性よりも、人質にさせないよう志貴の安否を優先させている事に。

志貴の視界外による不意打ちにしびれを切らせた吸血鬼は掌からより強力な攻撃魔術を放ち、志貴達のいた教室内が粉塵に塗れてしまう。あれでは戦況がはつきりしない。

校舎まであと10メートルで辿り着く距離まで接近した信彦の耳に、嫌な音が響いた。

信彦にとって忘れてたくても忘れられない過去。

ブラックサンと呼ばれた者と全力を持って挑んだ一対一の決闘。互いに力の全てをぶつけ合い、最後の一撃を放とうと構えたその刹那。ブラックサンを疎ましく考えていた創世王はサタンサーベルを遠隔操作し、宿敵の胸を串刺しにした、あの嫌な光景。

煙が晴れたその先で、まるで狂ったように泣き、笑う吸血鬼の前で膝を付く志貴の胸には、彼自身が使用していた短刀の刃が胸を貫いていた。

信彦は志貴が落とした短刀を拾い、彼の胸へと突き刺した吸血鬼の

白かった髪が漆黒に染まり、腰に届くまでの長髪へと変貌した様子や、気性の激しさが消え、別人となったように冷徹な目となっていたことなどどうでも良かった。

校舎から落下する志貴を受け止めるために、ゴルゴムとの戦闘に備えて控えていた力を開放する。シャドームーンとなった信彦は着地点点である看板に爪先を乗せたと同時に自分が踏みつけても壊れず、落下する志貴へと飛んでいけるだけの力を込めて蹴れるよう力場を形成。

信彦は看板を蹴ると真横へと飛び、地面へと迫る志貴との距離を一気に詰める。一秒もしない時間の中で、どうにか志貴の背中へと手を添えて受け止めた信彦だったが、志貴を抱えているのが自分だけではないと気づく。

志貴の右側から支えている信彦とは逆に、志貴の左側へと回り頭部へ衝撃が伝わらぬよう優しく手で包む黒いカソツクを纏った女性：かつて信彦を取り込もうとしたネロ・カオスを退けた聖堂者シエルであった。

「お前は…」

「今は話しかけないでください！」

志貴に衝撃を与えぬよう校庭へと着地した信彦は、目を閉じた志貴の頭部をゆっくりと地面に乗せて様態を確認するシエルに声をかけるが、ピシヤリと遮られてしまう。敵のナイフによって切断された腕や胸の傷へ手をかざし、診察する表情は鬼気迫るものがある。

人間の姿へと戻った信彦は視線を志貴達から破壊された校舎からこちらを見下ろし、不適な笑みを浮かべる吸血鬼…聖堂教会から「アカシャの蛇」なる異名で呼ばれるミハイル・ロア・バルダムヨオンを睨んだ。

「ククク…まさかかの世紀王と知己だったとはな。姫やその『出来損ない』といい、随分と交友関係が広いじゃないか、志貴」

髪をかき分けて笑うロアの顔を見て、シャドービームを放ち校舎ごと消滅させたい衝動に駆られる信彦は人間に戻ったのは早計だったかと考えてしまうが、まだ殺すわけにはいかない。この場から志貴を遠ざけ、その後にゴルゴムの潜伏先を聞き出した後にでも始末すればいいと思った矢先、後方から聞こえてきたエンジン音が次第に大きくなっていく。

見れば信彦達を追ってきたであろう者たちが急停車したバイクから飛び降り、駆け寄って来る。

「大丈夫かッ!」

「これは…!? ひどい、なんて事をするんだ」

アマゾンと共に志貴の姿を見て拳を強く握る筑波洋は信彦が見つめる先にいる存在へと顔を向ける。ロアの様子を見ただけで、洋はどのような存在であるかはつきりと判別できた。

「アイツがこの街に潜んでいた吸血鬼、なのか」

「どうやらそうらしいな」

「ガウ…アイツ、悪い奴!」

信彦を挟むように立った洋とアマゾンを品定めするかのように見回すロアはパチンと指をわざとらしく鳴らし、口元を嫌らしく吊り上げて口を開く。

「ほう…なるほどな。お前達があの中が言っていた…聞きしに勝る変わり者のようだな。仕込んでおいて正解だったか」

「……………」

ロアの意味深な言葉に目を細める洋はいつでも変身できるよう構

えつつ、背後で志貴を抱きかかえ、彼の左腕を回収したシエルに顔を向けないまま尋ねる。

「この場は俺たちでなんとかする。彼を…頼めるかい？」

「…もとより、そうするつもりでした。貴方達を囮にして、ここから離れる。その彼が、遠野くんのお知り合いであろうとも」

「そっか…」

シエルの考えに、咎めようとする者は誰もいなかった。仮面ライダーである洋とアマゾンも、そして先ほどから無言である信彦も。

ある意味、振るいにかけてたつもりでもあった。そうすれば自分達を何だと思っているのだと、何様のつもりなんだと、そんな言葉を言うてくれると期待していた。

そんな、少しでも利己的な台詞を聞ければ、彼等を置いていく罪悪感など膨らむはずがなかったのに…

シエルは半年前、今回の任務に付く直前に世界中を闊歩したゴルゴムとの闘いに身を置いていた。自分が所属する異端狩り『埋葬機関』や世界中の代行者が募り、全勢力を集めて当たった戦い。犬猿の仲とされる魔術協会ですら手を組まなければならなかった戦いで、彼女は地獄を見た。

どこからともなく現れる怪人達と何とか渡り合える自分以外の者たちが次々と身体を裂かれ、喰われ、命を落としていく様を見せつけられていた。

自分はある『特異性』の為に戦いの中で致命傷を受けても死ぬことはなかったが、他の者はそうはいかない。

こちらに助けを求めて手を差し伸べてる中、怪人に生きたまま溶かされてしまった仲間を見て激高したシエルは破損した最大の武器を放り投げ、黒鍵を握り怪人達へと迫ったが、多勢に無勢。複数の怪人に取り押さえられてしまったのだ。

首を跳ねようと腕を振り上げるカマキリ怪人を見上げるシエルは、再生したと同時に同じ目に合わせてやろうと考えを巡らせたその時

『ガヒィ…!?!』

シエルを押しえつけていた怪人の眉間に十字型の手裏剣が突き刺さり、開放されたシエルの身体を突然どこからか飛んできたロープが巻き付くと、強引に彼女を上空へと牽引された。

声を上げて驚くシエルを抱えたのは、両足裏から火を噴き上げて浮遊する異形の姿。シエル自身も噂話でしか知らず、教会の中では神よりに賜った肉体を捨てた愚かな存在と広められている死徒とはまた違った異端。

『カメンライダー』と呼ばれる者はその外見には似つかわしくない、優しい声を自分へと向けた。

「すぐに済む。少しの間我慢してくれ」

その直後、辺り一面に群がっていたはずの怪人たちの立つ場所へ巨大な雷が走った。直視したのなら目が潰れてしまうほどの、激しい閃光。光が収まった後には、原型を留めていない怪人の成れの果てが、地面へと沈んでいるだけであった。

怪人達が全滅という形で戦況が一気にひっくり返った地に仮面ライダーと共に着地したシエルは、距離を置くと手元に残った黒鍵の切っ先を自分を助けた戦士へと向ける。さらに先ほどの雷を放ったもう一人の異形が何かを言おうとするがそれは緑色の複眼を持つ戦士に手で制され、取りあえず納得したのか踵を返してその場を離れていった。

シエルを助けた戦士も後に続き、次の戦場へと向かう中、シエルはその無防備な背中に狙いを定めるが、黒鍵を投擲する事は、できなかった。

彼女にとつては、全ての異端が憎むべき敵だ。自分を今のように作り替えたのも、この手で地獄を生み出したのも、全て、全て、全て：

シエルは彼等がこの戦いで表に姿を現し、ゴルゴムが滅びた後に姿を消した後、彼等の素性を全て調べた。

自分と同じく、身勝手に身体を弄られ、人間で無くなったというのに。自分とは違い、人間に戻れないモノに成り果てたのに。

どうして誰かの為に戦えるのだろうか。

シエルと同じ境遇でありながら、戦う理由がまるで違う彼等に対して、自分が向けている感情は嫌悪か憧憬か。

判別がつかないまま、シエルは志貴を抱え、彼等に今言える最大級の嫌味を口にしては見たが、まるで効果は望めない。

いや、より自分との違いを見せつけられたと言うべきだろうか…

そんな考えを巡らせるシエルに、先ほどのお返しと言わんばかりに信彦の声が耳に入る。

「いつまで呆けている。さっさと行け！」

「っ…!?頼みます」

志貴を抱えたシエルは背後から聞こえる怨敵の声を聞こえないふりをしながら、地面を蹴つてある場所へと向かう。『まだ生きている』志貴を回復させる、唯一の方法に賭けるために。

「…私との因果よりも死にゆく者の看取る事を選んだ、か。随分と気に入っていたようだな。ハハハ、ハハハハハッ!!」
「その耳障りな声を今すぐ止めろ」

ロアの高笑いを制したのは、殺気まじりに睨む信彦だ。なぜ、自分でもここまで苛立っているのかはわからない。だが、信彦はあの吸血鬼が志貴の胸を貫いた瞬間から、殺さなければならぬと考えずにいられなかった。

信彦程ではないが、ロアに対して敵意を向ける他の2人を興味深く見下ろす吸血鬼はタクトを振るう指揮者のように、大げさに両手を広げて見せた。

「個人的にはお前達のような者を…私とは違った意味で永遠になるであろう存在を調べて見たいのだが、残念ながら今宵の宴には招待できない。言わば…部外者なのだよ!」

ロアが両手を振り下ろした途端に魔法陣が出現し、連動するかのようには街中に張り巡らされた『式』から魔力が学校へと収束される。

校舎全体を紫色の妖しい光で包まれた直後、信彦は異様な光景を見る事となった。

志貴とロアとの闘いで半壊した校舎が、時間を遡るかのように修復し、戦いが起きた跡など一つもない状態へと戻ったのだ。

「ハハハハ…これで私の『城』は完成だ。後は姫君を迎え入れる前に…」

「お前たち害虫にはご退場願おうか?」

彼等の身体にうつすらと浮かぶ『線』と『点』を眺め、ロアはナイフを逆手に校庭へと飛び降りるのであった。

第54話

永遠

その言葉を神聖であり揺るがないものであると胸に秘め、自らの命題としていた一人の聖職者。かつて法王庁に籍を置いていたミハイル・ロア・バルダムヨオンにとって、信奉する神こそが永遠の存在であると信じていたが、その信仰は接触した真祖によって打ち砕かれてしまった。

真祖の長に連れられて訪れた巨大な草原に、彼女はいた。

月明かりの中に一人佇み、長く金色に輝く長い髪をなびかせる一人の真祖を目にしたロアは、言葉で説明できない衝動に駆られた。横で誇らし気に最高の処刑人であると説明する真祖の言葉など耳に入らず、ただ『彼女』を目にする事しかできないでいたロアの価値観は大きく揺らいでしまったのである。

自身に取って絶対であった『永遠』を失ってしまったロアは、この日を境に別の『永遠』を幻視するようになってしまう。純粹に探求していた自分から『永遠』を奪った真祖に対して大きな憎しみを抱いたロアがその後彼の取った行動は、真祖と教会を大きく揺るがす大事件へと発展してしまう。

ロアは真祖の姫を誑かし、自身の血液を飲ませる事により死徒となり彼女の力の一部を奪って逃走、なり立てとは思えないほどに強い力を秘めた死徒となったロアは討伐に現れた死徒二十七祖の第九位を退ける程の実力を持ち、多くの死徒を統率し一大勢力をまとめ上げる。

これに対して力を奪われた真祖の姫は互いに天敵とも言える聖堂教会と共同戦線を張り、ついにロアを倒す事に成功する。しかし、既

に自身の魂を転生が可能であるように加工していたロアは幾度なく生まれ変わり、奪われた力を取り戻すために現れる姫との対峙を繰り返すこととなるのであった。

自分を墮落させた姫…アルクエイド・ブリュンスタッドへ強い憎しみを抱くロアは自身を『永遠』という概念に変え、此度で18度目となる転生を果たす。

異能の血を持つに加え、生物の死が『線』と『点』としてとらえる事が出来る眼を手に入れたロアはアルクエイドを今度こそ自らの手で葬るために暗躍し、『城』を完成させる。

その憎しみの裏に、別の感情が潜んでいるのだと、気づかないままに…

音もなく校庭に着地し、不敵な笑みを浮かべるロアは手にしたナイフの刃に湿った舌を走らせながら月影信彦達へと迫る。

信彦はロアが自分や隣にいる仮面ライダーと呼ばれる歴戦の者たちが揃っていても余裕を見せているのは、先ほど発動させた魔術により半壊したはずの校舎が見る見るうちに修復し、戦いが起きる以前の姿に戻った光景と関係があると睨んだ。何かの術式を発動させた事は間違いないので油断ならないと左右に立つアマゾンと筑波洋へと耳打ちすると、ロアは信彦達と5メートルもない場所で立ち止まった。

「何だ、かかってこないのか？」

「この学校全体に貴様が『何か』を仕込んでいるのは明白だ。それでも考えなしに挑むなど思っていたのか？」

「なるほど、それは正論だ。なかなかするどいじゃないか。奴ら…俺が死徒にしてやった連中が拘る理由が分かる」

「……………」

安い挑発に乗らずに応じた信彦の返答に顎に指を添えて関心する様子を見せるロアは過剰反応するであろう言葉を敢えて選び、信彦の反応を見るが様子は変わらない。どうやら自分の見せた行動に余程警戒しているのであろうと踏んだロアは、信彦がどこまで読んでいるかを試したくなつたと口をつり上げる。

「…ほう、どうやらお前は相手を過少も過大もせず分析をするようだな。以前に痛い目にでもあつたのかな？」

「貴様に話す理由はない」

「これは手厳しい。ならば、こんな事が出来るくらい——」

来るか、とロアの口が動くと共にシャドームーンへと変わろうとした信彦であったが、ロアの矛先は自分でなく、未だ不調である隣に立っていた者に降りかかった。

「があッ!？」

短く、くぐもつた声の方へと急ぎ振り向いた信彦が目にしたのは、足元の校庭の砂利が盛り上がり、石柱の形状となつて洋の腹部へめり込んだ光景であった。石柱の付け根には複数の魔法陣が浮かんでおり、これは誰によつて創造されたかなど明らかだ。

通常の間人であれば貫通しても可笑しくない攻撃にただ後方へ吹き飛ばされただけで済んだのは、彼が改造人間であった故からも知れない。だが、それでもダメージは大きく、攻撃を受けた腹部を抑えたまま起き上がれない姿を見て焦燥するアマゾンが駆け寄っていく。

「予測はつくよな？」

「洋ッ!?大丈夫かッ!?」

「よせッ!迂闊に——」

信彦が言うよりも早く、アマゾンの足元に無数の魔法陣が出現。思わず立ち止まったアマゾンは大地に足を付けたままでは危険と判断し、飛び上がろうとしたがそれよりも早く魔法陣から放たれた雷に身体を打ち上げられてしまう。断続的に放たれた雷にアマゾンは回避できないまま上昇し、雷が止んだ時には全身が痺れた影響で動けないまま、校庭の隅に配置された体育倉庫へと落下。塵芥をまき散らして崩壊した倉庫の残骸からアマゾンの血塗られた片腕のみが力なく露出していた。

「ふむ…やはり頑丈だな。本来なら最初の一撃でクロズミになっているところを原型を留めているとは…古代の技術も馬鹿にできないという訳か」

関心するようにつぶやくロアは信彦に目もくれず、倒壊した倉庫を眺めている。だが敵の呑気な態度よりも、信彦はロアが口にした情報が聞き逃せず思わず聞き返してしまった。

「貴様…知っているのか？」

「敵の情報など、調べない方がどうかしている。あの者たちは自分達の脅威がこの街に現れたと知って、聞いてもいないことをこれでもかと話してくれたぞ？」

「チッ…」

(おうおう、ご丁寧に全部筒抜けってどこかよ)

情報を提供した連中の悍ましき人相を浮かべて舌打ちする信彦。あの陰險な連中が自分を死徒へと変えた協力者に何も話さずにいるはずはないとは思ったが、まさか自分だけでなく他の仮面ライダーの情報まで流していたとはと、アンリマユは連中の節操の無さに思わず呆れ返ってしまう。

ならば、この状況を自分が一変させることすら敵は理解しているはず。

(コイツが起こした学校全体を包む術式…限定的ではあるが無限の再生と攻撃魔術を自動的に繰り出すことが可能なようだ)

洋への不意打ちに使用された石柱によって穴の開いた校庭、アマゾンを攻撃した魔術により焦げた地面は校舎と同様に修復が進んでいる。そこからロアがどのような効果を施しているかを推測した信彦はどうにか隙をつき、シャドームーンとなってキングストーンの光を放てば術式を崩壊させることが出来ると考えたが、途端に目があったロアの表情は再び歪む。

信彦の考えなど、とうに見抜いていると言わんばかりに掌を翳した直後、信彦と立ち上がるうとした洋の足元にこれまでとは別の術式が組み込まれた陣が現れる。

「な、何だ…これは…!?!」

「うぐ、けない…!」

まるで身体の中にある骨が鉛のように重くなったような感覚。改造されたことよって強化された筋肉でも腕を動かすことすら困難となってしまうた信彦と洋へ術式を放った張本人であるロアは高笑いと共に接近し、その正体を明かした。

「フハハハハハハ…こうも上手くとはな。笑いが止まらないな…」

「貴様…何を…」

「簡単な話さ。お前達2人は、その身体に本来宿さないものが組み込

まれている…金属や機械と言ったものがな。つまりだ、その術式は貴様達の体内にあるそれを『否定』する式なのだよ」

「…ッ!？」

思わず目を見張る洋はロアの言う事に驚くしかできなかった。確かに自分と信彦は改造人間であるために、身体には本来あるべき臓器や骨を失った変わりりに、人工のものによって補われている。ロアが仕掛けた術式はそれらの否定。今、洋と信彦の足元に現れた魔法陣がある限り、この拘束から脱出することすら不可能なのだ。

「だが、この状況でも打ち消してしまう存在に止めをさしておかなければな…」

「……………」

ロアは膝を付き、両手をダラリと下げながらも敵意を持った目で睨み続ける信彦へと近づいていく。手にしたナイフで自分の掌を切り、傷口から溢れる血液を刀剣の形状へと固定させるといふ異能を見せつけ、さながら死刑の執行人のように信彦を見下ろしている。

「ククク……ここに到着した際にどう変身を解除させようかと考えてもみたが、自ら元に戻ってくれるとはな」

「全く持って、同意見だ……」

未だシャドームーンでいられる時間に制限がある可能性から直ぐに人間の姿に戻ったのは早計であったと信彦自身も後悔している。だが、この姿でも短い射程であれば十分にキングストーンの光を浴びせる事が出来る。今信彦を拘束する術式と、ロアに光さえ当たれば上手くすれば滅ぼす事も可能だ。

この最大の好機を逃さないために表情を崩さず、ロアの接近を待つ信彦だったが、手を振り上げるロアに動きがピタリと止まってしま

「…ふむ。随分と落ち着いているようだな。どうやら何かを策があるようだな」

(うげ、読まれちまったか…)

自分の代わりに反応するアンリマユに過剰にするなど声を上げたところだが、この際構わない。今の距離でも十分に届くと力を開放しようとした信彦だったが、ロアが再度地に向けててを翳したと同時に新たな魔法陣が出現し、膝を付いた信彦と同じ背丈の群れが姿を現した。

「子供…けど、まさか!？」

魔法陣の中でもがく洋はロアが召喚した多くの子供たちの目が虚ろであり、生気がまるで感じられない様子から、彼らも血を吸われ死徒と成り果ててしまった存在だと気づく。自分の知らない場所で、これ程の犠牲者が生み出されていたと歯噛みするしかない洋の第一人、また一人が信彦の身体へと纏わりついていく。

「くっ、なんのつもりかは知らんが、こんな死体ごとき…!」

例え子供だった身体だとしても、もう元に戻れず、手遅れの状態であると知っている信彦は予定を変えずキングストーンの力で吹き飛ばそうと力を集中させるが、直前に吸血鬼の横やりが耳に入り、決定的な隙を与えてしまった。

「さて問題だ。その中に吸血されず、ただ催眠術にかかっている子供は何人いるだろうか？」

「——ッ!？」

ロアの言葉を聞いてしまった信彦の身体が硬直してしまった直後。信彦を正面から抱き着いている少女の背中を貫通し、信彦の腹部へと赤い刃がズブリと音を立てて突き刺さってしまった。

「かつて悪魔の軍団と呼ばれたゴルゴムを制する世紀王とは思えない反応だったな…正解は、ゼロだよ」

赤い刃がゆっくりと引き抜かれ、目の前の少女は服を残して灰となつていく様を眺めるしか出来なかった信彦は完全に動きが止まってしまった。ロアの仕掛けた術式によって身体を重くされたのではなく、身体を動かすための力が消失してしまった感覚…

「月影君ツ!!」

自分の名を呼ぶ、洋の声も遠く聞こえる。身体を支える力だけでなく、意識すら遠のいていく。恐らく、ロアが貫いたのは『点』それも、信彦の核とも言える箇所を先の死徒の少女ごと貫いたのだ。

「き、様…キング、ストーンを…」

「正解だ！ハハハハ…命の源を止められたと言うのにえらく冷静じゃないか！」

ロアから視て、他の『点』と比べて大きく、点から走る『線』が全身へと行きわたっている様子から信彦の命と同意義であるキングストーンに位置する部分。そこを貫いてしまえば信彦の生命は、自分の手で胸の点を貫いた遠野志貴と同様にもはや風前の灯だ。

だが、ロアはそんな事で目の前の男が死んでしまうのは面白くないと考え、ある名案が浮かんだ。

「許さない……お前、絶対に、許さないッ!!」

ロアの攻撃によって体育倉庫の残骸の下敷きとなってしまったアマゾンには意識を失っていたが、目が覚めた直後に彼が目にしたのはロアによって貫かれた少女と、今日出会ったばかりの青年の姿。

少女はその姿を灰へと変え、青年からは力のほとんどが消えてしまった。

アマゾンにとって信彦は珍しい奴だとしか印象がなく、少女など名前すら知らない存在だ。だが、彼にとって怒りを露わにする理由など、それだけで十分だった。

「もう少し眠っているッ!」

再びアマゾンに襲い掛かる雷の束。再度攻撃を受け続ければ動けなくなると踏んでいたロアだったが、アマゾンから放たれる怒気は益々高まるばかりだ。

「な、何だと……ちいッ!!」

今度は細々とした雷ではなく、アマゾンを中心に半径10メートルは超える魔法陣を展開。そこから上へ向かい巨大な火柱が発生する。骨まで残さず融解される事を期待したロアだったが、彼は思い知ることとなる。

を
いかに自分が仮面ライダーという存在を軽視していたということ

「ガ…アアアアアアアアアアアアツ!!」

「馬鹿な…あれだけの炎を浴びて…」

「アアアアアアアアアアツ!!マアアアアアアアアアツ!!!ゾオオオオオーンツ!!!」

瞬間、アマゾンの両目が赤く輝きを見せた。

その直後に夜空に浮かぶ月にまで伸びていると思われた炎の柱が二つに割れた。文字通り、切り裂かれたのだ。

その中央にいたのは、片手を地面に振り下ろした奇怪な異形。真っ赤な複眼にトカゲを思わせる頭部に背中の背びれ。緑色の体に斑模様を走らせた仮面ライダーは、ギロリとロアを睨み、駆け出ししていく。

負けじとロアは再び攻撃魔術を放つが火球や雷など、全てその手によって弾かれ、裂かれていく。

魔術を素手で弾き飛ばすなど、魔術師にとって常識離れな行動を起

こすアマゾンの姿に初めて焦りを見せるロアの様子を見て、信彦に潜むアンリマユは起死回生の策を信彦に伝えていた。

「正気か……」

（しゃあないだろ。あの野獣先輩がこつちに来るまでにこの陰険野郎は確実に俺たちを殺しに来やがる。なら、もうそこに賭けるしかねえ）

「……………」

確かに、キングストーンのを失ってしまった今の自分達には、それしか反撃を繰り出す手段はない。癪だが、ここはアンリマユの言う『賭け』に便乗するしかないのだろう。

「ええい、ならば……！」

「ぐ、これは……」

飛ばば一撃を許してしまう距離まで接近を許してしまったロアは苦し紛れの策として、信彦にしたように子供の死徒をアマゾンの周りに転移させ、動きを封じてしまう。幸いな事に、アマゾンはまだあの子供が既に人間でないことを知らない。

人間ではないのに、人間以上に他人を庇うというロアには理解し難い習性にこの時ばかりは感謝すると、ブツブツと独り言を繰り返していた信彦を再び見下ろすと、ナイフを振りかざした。

「さあ、今度こそ最後だ。僕となったお前の最初の仕事は、あの化け物と戦ってもらおうでしょう」

月明かりに光を反射させるナイフを逆手に持ち、信彦の喉元へと狙いを定めたロアが信彦の変化に気が付いた時には、ナイフを振り下ろ

した後であった。

「ケケケ…狙い通りにしてやんの」
「ッ!？」

信彦の変貌にロアの狙った場所は喉元からそれ、左肩へ深々とナイフが沈み、多量の血液をまき散らした。だが、ロアに信彦の肩から滴る血液を飲む余裕など無かった。

なぜなら、信彦と全く同様の痛みが、ロアの左肩に生まれていたのだから。

「ガアアアアアアアッ!?!な、何が…これを、貴様…ガアアアアアアッ!？」

「へ、へへへ…イタチの最後っ屁って奴だ。ざまあみな」

出血を起こし、ついに倒れてしまう信彦…否、身体の主導権を握ったアンリマユが所持する宝具による効果が確かに現れた事に、嫌らしい笑みを浮かべた。

かつてアヴェエンジャーであったアンリマユの所持する宝具『ヴェルグ・アヴェスタ偽り写し記す万象』

その効果は自分の受けた傷を相手の魂に写し、共有させるという下手をすれば自分の命すら失う可能性のある危険極まりない宝具なのだ。

本来ならば元であるアンリマユの傷が癒えない限り、相手の傷も消

える事はないはずだが、聖杯から解き放たれサーヴァントとしての力を失ってしまった代償なのか、その効果は瞬間的にしか現れることは無かった。

「き、様…よくも、よくもおおおツ!!」

既に傷口の再生を終えたロアは今まで見せていた余裕など見せず、怒りに駆られて立ち上がるロアは最早信彦を死徒へと生まれ変わらせる考えなど欠片も持ち合わせていない。

そして気づく。

信彦の胸にある点に、まるで重なるように存在する『2つの点』

自らの魂を加工し、転生を繰り返してきたロアにとってそれが何であるのか手に取るように理解してしまう。

「どうやら、貴様は俺が考えていたよりも稀有な存在だったのかも知れんな。だが、もうどうでもいい」

ドスリと、ロアは今度こそ信彦の胸をナイフで突き刺した。

「さあ、これで『片方』残りもすぐに――」

再度ナイフを天へとかざすロアだったが、言い切る前にナイフを手にした腕がふと軽くなっていた事に遅れて気づく。

見上げれば腕が肘から消え失せており、自分の前には息を荒立てる野獣が自分の変わりに腕を振り上げていたのだ。

地に伏せていた筑波洋が、ロアが信彦とアンリマユの策によって注意を逸らしている間に、アマゾンへ彼を囲う子供たちが手遅れであると、あの吸血鬼が消えるまで苦しみ続ける存在であると伝えるまでに2秒もかからなかった。

心の中で懸命に謝罪したアマゾンは、せめて彼等の魂だけでも救いたいと、その手を振るった。

「ケケエー……ッ!!」

雄叫びと共に腕の備わったアームカッターを振り下ろし、ロアは頭頂部から喉に至るまで切り裂かれた。

鮮血が舞う中、アマゾンは胸を貫かれながらもまだ信彦に息があると知ると、自分が持つ薬の中で何か効果のある物があるかと探ろうとするが、背後から感じた不気味な気配に信彦を掲げたまま後方へと飛び跳ねる。そこには…

「ガウツ!!お前…」

「ふう…たつぷりと流血したおかげでようやく頭が冷めてきたよ…感謝しなければな」

立ち上がり、ぱっくりと割れてしまった頭部を自身の手で左右から押し戻しながら再生させるロアの姿に警戒するアマゾンはジリジリと後退する。

今のままでは勝てない。

そう彼の本能が警告する中、ロアは額から垂れる自身の血をペロリと舐め上げ、ナイフを手に取った。

「さあ、続きと行こうか。なに、まだまだ姫が現れるまで時間はある。それまで——」

「ライダアアアアア——ッ!!!」

「むッ!？」

「ブレイイイイクツ!!」

ロアの言葉を飲み込んで唸る爆音と共に、洋は変身した姿で愛機、スカイターボに搭乗してマシンごとロアに体当たりをしかけた。

「ッ!？」

突如の攻撃に地面を数度バウンドしながら吹き飛ばすロアの姿に見向きもせず、洋はアマゾンへと顔を向けた。

「洋ッ!!もう大丈夫なのかッ!？」

「ええ、先輩が一度アイツの頭をカチ割ったおかげであの魔法陣が消

えたんです。それより、今は撤退しましょう！」

「…分かった。このままだと、コイツも…ノブヒコ達も危ない！」

「…逃げたか」

立ち上がった際には既に傷一つないロアはゆっくりと月を見上げる。

随分と予定は狂ってはいたが、自分の準備した『城』の効果は完璧な仕上がりだと実証することができた。それには、あの化け物共にも感謝しなければならぬ。

それに、もう…

「二度と…邪魔はされぬからな」

耳に響くエンジン音に、自分はバイクの後部座席に固定されて運ばれていると気づいた信彦は、うつすらと目を開ける。

その背中から自分を運んでいるのは筑波洋であり、その隣をまるで生物のような、アクロバッターと同系列と思わせる形状のバイクを走らせているもう一人の仮面ライダーだ。

しかし、信彦はこの場に誰か足りないや妙な喪失感があった。

消失したキングストーンとはまた別に、自分から何かが消えてしまったと。

「アヴェンジャー…：貴様、今どのような状態だ？」

このような時は、自分と身体を共用している存在に聞くことが一番手っ取り早い。いつものように軽口で帰って来るものと構えていたが、反応はまるでない。

「このような時に、寝ているつもりか…：返事をしろアヴェンジャー」

返事はない。

段々と焦りが大きくなる信彦の脳裏に、遠野志貴と同じ能力を持つロアと、彼が最後に自分へとしかけた攻撃を思い出す。

ロアが貫いたのが、もし自分の中にある『アヴェンジャー』という存在』であったのなら…

「アヴェンジャー…：！」

力の込められていない声でもう一度、自分の同居人へと呼びかける信彦であった。

返事は、やはりない。

第55話

「ハアツ…ハアツ…ぐう…」

息を荒立て、ブログ塀に身体を寄り添いながら進む月影信彦は苦悶の表情を浮かべ、額から滝のように流れる汗を拭う事なく、目的地を目指して進み続けていた。

「クツ!？」

短く声を上げて、膝を付いてしまった信彦は倒れまいと両手を路面へ突き立て、身体を支える。飛び散った汗がアスファルトを濡らす光景に、自分がこれほどまでに汗を流していたのかと初めて自覚するが、そんな呑気な事は考えている時間はないと付近の電柱をよじ登るようにして身体を立ち上がらせた。

ゆっくりと呼吸をする信彦はふと自分が纏った黒いコートの裾に付着した汚れに目を置く。ここまで移動してくるまでに何度か同じように倒れかけた際についた土埃があちこちへとこびり付いている。

『うつわー、真っ黒いコートなんてそれ何のキャラ作りだよ。ギャハハハハハ!』

『そんなん買っちゃってどういう心境だよ?もしかして自分は闇に包まれていくべきとか少年なら誰しも通る病に今頃煩わせてしまったん?これは是非とも銀髪嬢ちゃんとかに知らせないと…』

『すみません。もう永遠の厨二病だなんて思いもしませんからその手に持った煮えたぎる黒い液体の一气飲みとか止めてくださゴハアアアアアツ!?!』

そんな顛末を思い返してしまう信彦は、先の戦いから聞こえなくなってしまう喧しい声が否応なく駆け巡っていく。

(くそッ…)

舌打ちする信彦は、何故こんなにもアンリマユの声が聞こえない事に腹を立てなければならぬのか、自分自身でも理解することが出来ずにいた。自分が苛立ち、身体が思うように動けないのも、全てがあの吸血鬼…ロアによって自分達の『死』を視られた為だ。

ロアによって信彦の体内に宿るキングストーン。そしてアヴェンジャーのサーヴァントであったアンリマユという『魂』が内包する『死』をナイフで突かれた信彦は自力で立つ事すら困難な状態に陥っている。自分の命とも言うべきキングストーンを殺されてしまったのならば、当然だったのかも知れない。

だが、逆に疑問が浮かんでしまう。

(なぜ、俺は死なずに生きていられる?)

信彦は2度に渡りロアによって自分が内包する『死』を突かれていくというのに、生きている。さらに言えば、最初にキングストーンを突かれてしまった時点で信彦は死ななければいけないのだ。

「奴は…アイツと同じ『魔眼持ち』である事に間違いはない…間違いはない、はずなのだが」

実際に噂話を聞く程度しか知らないが、直死の魔眼で見られた『点』で突かれたのなら、その存在すら殺すことが出来る。もしキングストーンが殺されてしまったのなら、それを核として生きている信彦は同時に息絶えるはず。

だと言うのにこうして生きており、そして一步も動けなかったはず

が少しずつではあるが、歩けている。

(そして少しずつ…少しずつではあるが感じる。キングストーンの胎動を)

雑踏の中で人1人の心臓の鼓動を聞き取ることに等しいが、信彦には確かに聞こえ、感じている。キングストーンと共に数十年過ぎた信彦だからこそ感じるものかもしれないが、キングストーンは死んでいない。

さすがにシャドームーンへ姿を変えるところか自力で歩行することすら困難なほどに、その力は弱弱い。だが、これで一つの可能性が浮上した。

(俺がこうして生きているという事は、あの吸血鬼が目で見ているのは…『死』ではない。だからキングストーンは死なず、僅かながらでも回復を始めている)

片腕を切断され、胸を刺された少年…遠野志貴を連れて逃げた代行者。シエルもそれが分かっていたからこそあの場を急ぎ離れたのではないか。そんな疑問を抱いた信彦はさらに彼女が志貴を連れて行く先に目星が付いている。

恐らくまだ死んでいない少年の治療に向かう場所など、長期間この街に滞在するようになった信彦に思い当たるのは一つしかない。

(不穏な雰囲気にも包まれたあの屋敷…代行者は、あの屋敷で治療を行っているはずだ…)

倒れていた志貴を信彦が介抱し、一度だけ連れ帰った遠野邸。そしてロアがシエルに向けて言い捨てた言葉から、真祖の姫とはまた違う因縁を持つであろう彼女ならば、何か知っているはずだ。

そして、ロアの持つ眼の正体が掴めたのなら、まだ『彼』が消滅し

ていないという確信が信彦が持てるのだ。

「なにを…馬鹿馬鹿しい…」

普段から口うるさいと彼の苦手とする物を飲み、食べる事で黙らせるほどに、疎ましく考えていたはずの信彦の行動は、いつの間にかア
ンリマユの生存を確かめる為のものへと変わっていた。

口では否定しているものの、ようやく支え無しでも立てるようにな
っていた信彦の足は、少しずつではあるが遠野の屋敷に向けて一歩
一歩進んでいる。

可能であるならばもう少し足早に向かいたいところではあるが、無
理に動き、また倒れてしまったのならあの連中に見つかってしまう可
能性が――

「ガウ、見つけた」

遅かった。

軽く溜息を付いた信彦は路面に映る、街灯の影の元となっている者
へと目を向けた。

ブロック塀の上に、両足両手を乗せてこちらを見るのは、一瞬とは
いえロアを動揺させ、頭部を切り裂いた仮面ライダー、アマゾンで
あった。

ロアの『城』と化した学校から筑波洋とアマゾンによって連れ出さ
れた信彦は潜伏場所となっているホテルへと連れて行かれた。その
時かすかに聞こえた洋の声から、自分達が属する組織から医療スタッ
フを手配という内容だったはず。

口を強引に動かして断ろうとも本当に死にたいのかと、声を荒げた洋の姿に信彦は黙ることしか出来なかった。しかし攻撃を受けた直後と比べ手足に力を込められるようになっていた信彦はベットから這い出るとクローゼットの中から黒いコートを取り出し、隣室で連絡する洋と薬を調合するアマゾンに悟られぬよう部屋を脱走した。

しかしこうもあっさりとは発見されてしまうとは見通しは甘かったかもしれない。

このまま連れて帰らしてしまうと力の入らない拳で構えるが、アマゾンの言葉は信彦の予想を裏切るものであった。

「お前、何処行きたい?」

「何…?」

扉から飛び降り、信彦の前に着地したアマゾンはさも当然かのように胸を張って答える。その表情には、信彦が抱く疑いなど一切見せない淀みのない笑顔だ。

「ノブヒコには行きたいところある。けどそんな身体じゃ満足に歩けない。だから俺が運ぶ!」

「なぜ、そんな真似をする。俺が動くのは、俺の都合だ。貴様には関係が…」

「もう、君だけの問題でもないだろう?」

背後を見れば、ヘルメットを片手にこちらを見る筑波洋の姿があった。もう2人に見つかるのは時間の問題だったのだろう。

しかし解せない。アマゾンはともかくあれ程強引に自分の治療に専念するように言った洋がアマゾンと同じく自分を目的地である遠野邸に連れて行こうとするのか。その解答は信彦が推測するまでも

なく、本人の口から語られた。

「…満身創痍の君がそうまでして向かうという事は、何か理由があったの事だろうか？なら、止めるよりも一緒に行動した方がいいと考えたからさ」

「余計なお世話だ…それに、俺だけの問題ではないとは、どういう意味だ？」

「俺達の知り合いである君が傷を負い、動けなくなってしまった」

「ッ!？」

「洋、知り合いじゃなくて、友達！」

「ハハハ、そうでしたね」

両手の指を重ね合わせるように組むアマゾンの言葉に笑って同意する洋の言葉に、信彦は絶句する。この男は、会って24時間も経過していない自分にこうまでして世話を焼く。いや、自分の宿敵と同類であると考えれば、それは当然なのかもしれない。

アマゾンとの談笑を終えた洋は引き締めた顔で再度信彦と目を合わせた。

「君の言う通り、余計な事でもあると重々承知している。けど、そんな君の助けになりたいという俺たちの『勝手な都合』を許してもらえると、助かるよ」

終わると同時に、再び柔らかい微笑みを信彦へと向ける。目をそらしてしまう信彦は思う。本当に、仮面ライダーという連中はどうかしている。あの吸血鬼が持つ能力の解明と、アンリマユの安否などこの者達には関係のない話。だというのに、こうして踏み込んで、自分を手助けしようとする。だが信彦は不思議と彼等の姿を見て嫌悪感だけは浮かばずにいた。

「それに、あの吸血鬼に借りがあるのは月影君だけじゃない。この街に住んでいた罪もない人々、そしてあんな子供達すら犠牲にされたん

だ」

「そう、アイツは許さない。絶対にやつつける！」
(なるほど、な。こいつらには、それだけで十分なのか)

信彦とは違い、ただ調査に訪れ、知り合い1人もいないこの街に巢食う吸血鬼によって被害者が出たという事実。彼らにとってそれだけでも戦う理由ができているのだ。

トクンと、微弱だったキングストーンの力が一瞬だけ強まったと感じた信彦だったが、やはり力は戻らない。だが、今では軽く走れる程度にはなっているはずだ。そして顔色も平常に戻った事に気が付いたのか、洋は手を差し伸べる。

「さあ、行こう」

既に街灯しか明かりが灯されていない時間に2台のバイクが街でも有数である資産家の屋敷の前で停車する。ヘルメットを外す信彦達を迎えたのは、見覚えのあるカソックを纏う女性だった。

「待っていましたよ、皆さん」

「お前は…」

一度、信彦を死徒ネロ・カオスから救った聖職者はにっこりと笑うと門扉を開き、屋敷の中へと招き入れる。

「と、言っても私も皆さんと同じでお客様に当たるんですけど…当主の方から許可は貰ってます」

「そこでお話しましょう。吸血鬼と、世紀王が受けた傷についてのお

話を」

招かれた部屋は、以前に信彦が志貴を連れ帰った時と同じ客間であった。和服を着た少女から提供されたお茶に手を出す事もなく、対面に座るシエルの説明を待つ信彦と洋。

この家、何か変だと言ったアマゾンだけは窓際で夜空を茫然と見上げている。

部屋に到着するまでの間に、遠野志貴も一命を取り止め、先ほど意識が回復したとシエルから教えられた。現在は妹である遠野秋葉が話をしているらしい。彼が無事であると聞いた信彦は、やはり吸血鬼が持つ眼は違うものなのかと確信を高めてながら自分に話しかけるシエルへと目を向ける。

「さて、あの夜からここまで長いお付き合いになるとは思いもせずでしたね」

「御託はいい。さっさと話を始めろ」

「思ったよりセツカチなんです。でも、私も長く貴方たちと接触していたら上が何で抹殺しないとかと言いついては分かりませんし、ちやつちやと始めてみましょう」

信彦の辛辣な言葉に笑顔で物騒な発言で返すシエルの様子に、あの女なら言いかねないなど一度共同戦線を張った彼女の上司の攫みどころ無い性格を思い出した洋は苦笑するしかない。

紅茶の入ったカップを口に運び、一度息をゆっくりと吐いたシエルは引き締めた表情で信彦達を真っすぐに見据えて話を始めた。

「まずは、吸血鬼と遠野君の関係から説明しなければなりませんね」

シエルは語る。遠野志貴と吸血鬼ロアとの因縁浅からぬ異能を持

つ者達の昔話を。

第56話

七夜

本能的に『魔』を打ち滅ぼす衝動を内に秘めた退魔の血族。

その名は人以外の血を持つ『混血』達には蛇蝎の如く忌み嫌われ、同じ退魔組織に組する者達にとつてもいつ自分達が標的にされるかと戦々恐々としていた程である。

特に当主であり、最高傑作とうたわれた七夜黄理の戦いは得物がただの撥であるにも関わらず人体を容易く解体、身体を穿つ程の技術を持ち、彼の戦いを見た者は空間を立体的に使う体術を使い、その様は巢を張った蜘蛛であると例えるほどに際立っていたらしい。

さらに黄理には『浄眼』という特殊な眼を持ち、対象の思念を色として読み取る能力を持ち、人以外の者を色として捉える事が出来た故に、彼は手に取るように人でない存在を見抜き、殺すことが出来たという。

多くの暗殺を生業としていた黄理であったが、一児を儲けた後に組織を抜け、暗殺も引退。一族ごと七夜の森の奥へ隠れ住み、静かに生涯を終えるはずだった。

だが、黄理に恨みを持つ者が私兵を率い七夜の一族ごと皆殺しにしよう。

ただ一人生き残ったのは黄理の息子のみだったが、七夜を滅ぼした者の息子と同じ名前だったという気まぐれから暗示をかけた上で引き取り、親戚の一人として育てることとなった。

一族を滅ぼした者は、遠野槇久。その身に人ではない血と力を持つ混血の一族であり、遠野秋葉の父親だ。

そして槇久が養子とした七夜の子の名は、志貴。

「……………」

遠野家の客室でシエルから語られた遠野志貴の過去に、月影信彦達は無言で個々の反応を示した。

殺されかけたという恨みから当人だけでなく、一族ごと葬った槇久への怒りを表情に出す筑波洋とアマゾン。

そして信彦は無表情のまま、とうに冷めたお茶に浮かぶ波紋を眺めながら考えていた。

「…引き取られた遠野くんは平穏に過ごしていました。妹の秋葉さんと、そして同年代であった本当の長男…『遠野四季』と仲睦まじく、本当の兄妹のように過ごしていたようです」

ですが、とシエルは言葉を区切った後に手帳…遠野槇久の日記を開くと志貴に降りかかったさらなる悲劇を語る。

人でない血を色濃く継いでしまった四季はある日に突然『反転』…人以外である『魔』の血が強くなり、理性を失うと獣と化して付近にいた秋葉へと襲い掛かった。

これを身で挺して守った志貴は胸に大きな傷を負い瀕死の重傷を

負ってしまおう。

そこに駆け付けた槇久は遠野家の習わしである『反転した者への処理』として四季を殺害。だが、四季は所持している能力である『不死』と『共融』：頑丈となった身体と攻撃をした事で志貴から奪った命によつて生きながらえていた。

既に処理したはずの四季が生きていたと知った槇久は、反転した四季が自分を取り戻す事を期待し、一時的に地下の牢へと幽閉する。そして社会的地位のある遠野家の世間体を守る為に辛うじて生き残った志貴を本当の長男として、反転した四季を事故で死んだ養子として扱ったのだった。

そして日常生活に支障がない程度に回復した志貴の『魔』に対する反応を遠ざける為に彼を勘当し遠縁の家に預けるといふ借地を取った。

全ては自分と遠野家の為に…

だが、槇久に取っては想定外である事がそれ以前より起きていた。

四季は吸血鬼であるロアの転生先の肉体として選ばれ、成長すると共にロアの目的である『永遠』に取り憑かれた四季はロアとして覚醒し、『遠野四季』という人間をこの世から亡き者にした槇久を殺害する。

ついには自分に成りすまして遠野の人間として生きる志貴の胸を突き、遠野四季としての意識を完全に消し去ったロアは標的であるアルクエイドの出現を今でも自身の『城』で心待ちしているのであろう。

「つまり…彼には、もう……」

重々しく口を開く洋が考えているであろう言葉を理解しているシ

エルは目を瞑って頷き、手にした手帳をゆっくりと閉じた。

「はい。滅びてしまった七夜の生き残りである遠野くんには戸籍もなく、家族すらいません。そしてこの遠野の、人間ですらないんです」

この世界で認識すらされていない存在。それが、この街に行きついてから何かと遭遇し、自分をただの旅人として接していた少年の正体。彼が魔眼を持ち、退魔の一族の生まれであるという事実などよりも、信彦の脳裏には自身と志貴の共通点があるという意識が大きく膨らんでいた。

志貴も信彦と同じように『奪われた側』でありながら『奪う側』にされてしまったのだと。

見知らぬ存在の都合により全てを奪われ、そして本人の意思とは関係なしに恨まれる立場へと追いやられた。

ゴルゴムのシャドームーンとして悪意を向けられた信彦。
自分の存在を横取りしたと恨まれた志貴。

そんな2人がこの美咲町で何かと顔を合わせる事が重なるなど、何という皮肉だろう。

そう考えた信彦は立ち上がり、部屋の扉へと移動を始める。

「どちらへ？」

「目的は果たした。もう貴様に用はない」

「まだ貴方が受けた攻撃についての説明をしていないのですけど」

「…大体の察しはついた」

「その心は？」

「説明する義理はない」

「それもそうですね」

まるで温度のない会話を終えた信彦は扉を開けて部屋を後にする。退出した信彦を追うように洋も後へと続き、客室には窓際でじつとしているアマゾンと、手帳をテーブルへと置いたシエルが残されていた。

「…貴方は、追わないんですか？」

「うん、追わない」

「……………」

「……………」

しばし互いに無言となるが、耐え切れずに沈黙を破ったのはシエルであった。

「貴方達は…」

「ん？」

「なぜ、彼をあそこまで助けるのですか？いえ、彼だけでなく…」

なぜ、まるで関係のない人間なら誰隔てることもなく…と最後まで言い切ることなく疑問を区切るシエル。もし聞いてしまえば彼等に対する考えをまた改めなければならない。なので、彼等が敵であるゴルゴムの世紀王シャドームーンを助け、共に行動するのかを確かめる事にした。

世界を一時的でも支配した、彼等仮面ライダーにとって、敵以外の何者でもない信彦を。

同じく人でなくなった境遇だからか？

ゴルゴムが減びた今では、彼も被害者に過ぎないという憐みからか

?

「なぜって、何故だ？」

「え？」

「だから、何で何故なんだ？」

「あの、質問を質問で返すといのは…？」

「アイツら、シキを助けようとした。自分達が力を好きに使えないの分かってるのに、全力で助けに行った」

「それは…」

確かに今の信彦は自在に自分の力を振るえないだけでなく、姿を変ええる際には時間制限がついてしまっている。いつ彼を狙ってゴルゴムの残党が現れるかも分からない状況の中で彼は迷わず姿を変えて志貴を助けようとした。確かに言われてみれば少なくとも志貴に取っては敵ではないのだろうがと考えるシエルにさらなる驚くべく発言がアマゾンから飛び出したのだった。

「それに、お前も一緒にシキを助けた。だからお前が何故と言うのか分からない」

「っ……………」

「お前、ノブヒコと友達じゃないのか？」

「なッ…!？」

玄関を出た信彦はそのまま屋敷内の庭へと移動し、ちょうど志貴の寝室に当たる部屋の前に立つ樹木へと背中を預ける。彼の頭上には、ロアの支配下となった『城』に姿を現さなかったアルクエイド・ブリユ

ンスタッドが木の幹を足場にして志貴の様子を窓から伺っていた。

「…何よ」

「貴様に用はない。奴に察知されるぞ」

「アンタなんか言われなくなつて、分かつてるわよ」

距離が地上と木とでは距離があるにも関わらず、小声で会話を成立させる信彦とアルクエイド。

信彦は改造人間。アルクエイドは真祖。

互いに人以上に感覚が発達している故だろうか。そして、相手がどのような状態も手に取るように理解してしまう。

「…ロアに、やられたの？」

「…ああ」

アルクエイドの指摘に肯定する信彦はロアによつて貫かれた自分の腹部に手を添える。

シエルの説明を聞いた信彦は志貴から生命を奪ったロア…否、四季が持つ『共融』の能力からある仮説を立てた。

秋葉を庇った際に志貴から彼の持つ生命力を奪った時に、命とは別に志貴の力も奪う。もしくは、志貴が持つ能力を同じような形で反映されたとしたならば、ロアに『眼』の力が宿ったとしても不思議ではない。

そしてロアが視ているものが――

「何…しているんですかッ!!!今は絶対安静が必要なんですよ!!!」

『っ…………っ…………!?!』

思考を重ねている時に耳へ響く怒号。いや、実際はそれほど大きな声ではないのだろうが、志貴の様子を知る為に聴力を強めていた信彦とアルクエイドにとっては彼の部屋に現れたシエルの声は拡声器の数十倍以上に発したものに近く、手で耳を抑えて悶絶し、のたうち回りたいところを必死に我慢する。

互いにみつとも無い姿を晒したくないという意地なのか、部屋に現れたシエルが志貴に対する非難を続けて聞き続けた。無論、聴力を弱めた上で。

キングストーンの方が僅かながら回復し、なんとか動けるようになった信彦と違い、元より身体が丈夫ではない志貴にとってロアに点を突かれた時点で既に死んでしまったのではないかと信彦は考えたが、信彦同様に志貴も生き残っていた。

そして再び立ち上がり、ロアのいる学校へと向かおうとしたところをシエルに止められたらしい。

自分が考えていた以上に諦めの悪い少年であったと志貴の印象が信彦の中で変化する中、シエルは信彦へ語ったロアの情報を志貴へと聞かせている。

話を聞きながらも、感情が高ぶる事無く淡々と頷いて見せる志貴の言葉に彼の中にある空虚を僅かながらでも感じ取った信彦は同じく木の上で覗く真祖の姫へと視線を向ける。同じくロアに攻撃された志貴の身を按じている様子は、信彦の時とは雲泥の差だ。その姿を、どうしても宿敵と契約したサーヴァントと重ねてしまう。

あの冬木で起きた最後の戦いで最後の決闘に応じたあの者の背中を見つめる目と、全く同じ…

「——もともと彼女は死にかかっています」

ふとシエルと志貴の会話に意識を向けると、どうやら話題はロアからアルクエイドへと変わっていたらしい。

アルクエイドと共に吸血鬼を倒すという約束を優先するあまりに自分の身を軽んじる志貴に対してシエルが突き付けた残酷な事実。

アルクエイドはもはや手遅れであり、もう人の血を吸う以外に助かる道はない。しかし、決して吸血しないという近いを遵守し、弱り切った真祖には力をため込み、自分が有利である城で待ち構えているロアに挑むのはもはや自殺に近い。それでも、彼女は挑むのであろうと。

ならば一秒でも早くロアを倒さなければと叫ぶ志貴の声が途中で途切れ、床への落下音が響く。恐らく倒れてしまったのだろうがそれでも直ぐに立ち上がろうと身体に力を込めているのが分かる。だが、それでも身体が自由にならないのは、ロアに受けた攻撃の為だ。

「遠野くん、貴方はロアの攻撃で「命」をこっそりと削り取られているんです」

「いの…ち…?」

息を荒げる志貴の声は、シエルの説明に対して疑問を抱いてのものだ。だが、同じ能力を持つはずの志貴が、力を理解しているはずの志貴が疑問を抱くものなのか…?

腑に落ちない信彦は続けて語るシエルの声に集中する。それは、信彦が立てた仮説をさらに立証させるものであった。

「…平たく言えばエネルギーと言った方がいいでしょう。人間の身体を生かしているエネルギーを眼で読み取る事が出来るロアは、その蓄積されてエネルギーを削り、ゼロにすることが出来るようです」

「それが…死…?」

「エネルギーは生きている限り生産されていきますが、生産するための命までをゼロにする。ガソリンが切れて動かなくなるようなものですから厳密には死とは違うかもしれませんが」

「けど、結果的に生命活動が停止したのであれば、『死』と言えるのでしょうか」

なるほどな、と自分の考えと一致した事に信彦は続けて胸に手を当てる。

シエルの言う通りであれば、一度目の攻撃でキングストーンのエネルギーはゼロとなり、信彦は身動き一つとることが出来なかった。しかし、時間の経過と共にゼロであったエネルギーが段々と蓄積し、シャドームーンになれないものの、動ける程度までには回復している。

だが、問題は二度目の攻撃…魂であるアンリマユの存在はエネルギー体そのものだ。もし、シエルの言う通り、エネルギーそのものを削り取られてしまったのなら、アンリマユはもう…

無意識に拳を強く握る信彦に、アルクエイドは視線を壁を伝い必死になって1人で立ち上がる志貴から離さないまま尋ねた。

「失うって…:…どういう気分」

「なに…?」

「私、だいたい感覚が鈍ってるけど、以前貴方の中にあつた何か…:…それが何かは分からないけど、無くなっているのはわかるわ」

「……………」

あくまで、興味本位の質問なのだろう。そうでなければ、あれ程までに嫌悪を向けていたアルクエイドが信彦に向かい、質問を向けることなどありはしない。

「…貴様の言う気分という頭の悪い表現に当てはまるとは思えんが」

「頭が悪いは余計よ」

「フン…」

軽く息を吐き、月夜を見上げた信彦はゆっくりと口を開く。こうして素直にアルクエイドの質問に答えてしまったのも、相当堪えてしまったのだらうと考えて。

「…それまでであったものが、あつて当然と思つていたものが永遠に戻らない」

「永遠に…」

「喪失、と言つていいのか。それを忘れる事が出来る者もいれば、時間がいくら経過しようが、忘れない者も中にはいる」

過去に秋月信彦という人間を永遠に失ってしまった信彦は自分だけでなく、人としての身体を、家族を、人生を失つてきた。

そして今、身体を共有していた同居人を失ってしまった信彦の言葉は普段話すトーンより僅かながら低い。その様子から本人は決して認めないだろうがアンリマユの存在が彼にとっての『当たり前』となつていた事になるかもしれない。

(永遠に、失う…もし志貴がいなくなったら…そんなの、やだ)

アルクエイドは信彦の答えに、自分にとって失いたくない存在…志貴が身体に鞭打つてロアの元へ向かおうとする姿に、今すぐ窓を蹴破り大人しくしていると暗示をかけたが、今弱っている状態でシエルの前に出るわけにはいかない。

だが、次に聞こえた言葉にアルクエイドだけでなく、信彦すら目を見張るのであった。

「…もう法王庁の部隊がロア殲滅の為に動いています。それでも、ロアの元へ向かうのいんですか？」

「アルクエイドは今夜にでも決着を付けるつもりなんだ。こんなところでジツとなんて…くっ…！」

先ほど以上に息を乱す志貴に、シエルは素朴な疑問をぶつける。なぜ、そうまでして真祖アルクエイドの為に動くのかと。

殺そうとしたシキに対する恨みでも、人生を弄んだ遠野家への憎しみもなく、いつ死んでもおかしくない身体を引きずって…

「なぜ、そこまでして彼女に拘るんですか？それを聞かせてくれるのなら私はもう止めません」

自然と、聴力を高めてしまう信彦。

信彦も以前から疑問に思っていた。今のような状況に巻き込まれなければただの人間として生きられた志貴が、殺されかけながらも真祖と行動を共にしようとした理由。

あのブラックサンのように、困っている者がいれば放っておけないから、ただ無償で助けたいからというものでは、決してなかった。

最も単純で、最も分かりやすい理由。

それが志貴の口から語られた。

「…あいつは今までずっと一人ぼっちで、楽しい事がたくさんあるのも知らなくて、馬鹿みたいに独りだった」

「そんなの、寂しすぎるだろ？そんな意味のない人生は俺は許せない。だから、教えてやりたいんだ」

「当たり前前を当たり前前に感じられるように、あいつを幸せにしてやりたい。そんな事、他の誰にでも出来る事なんだろうけど、そればかりは他の奴に任せたくない」

「俺にはアイツしかいないんだ」

「俺は――」

「アルクエイドを愛してる。男として何もかも」

志貴という少年に驚かされてばかりであったが、ここまで驚くとは思ってもしなかった信彦だったが、すぐに考えを改める。自分は、とにかく知っているはずだ。

種の違いどころか、聖杯に召喚された過去の存在と心を通わせた人物たちを。

（全く…物好きは貴様だけではなかったようだな）

そう不適に口元を歪めた直後だった。

足場としていた幹を蹴り、空中を浮遊するアルクエイドを見た信彦は急ぎ後を追いつめた。

「あれ…月影君、どこに…？」

キヨロキヨロと信彦の姿を探していた洋だったが彼が今までいた場所は信彦がいた地点とは真逆の位置に当たり、明かりもなく探し彷徨っていたが、突如駆け足で移動する信彦が視界に飛び込んできた。なぜ走っているのか、体調は大丈夫なのかと聞くことは多くあるが信彦の行動の方が早く、結局は彼の言う事にただ反復して返事をするこゝとしかできなかつた。

「借りるぞー！」

「え、あ、うん…！」

門の付近に駐車させていたバイクに飛び乗ると差したままであつたキーを回し、グリップを数度乱暴に捻りエンジンを点火。急発進させると中庭に後輪によつて付いてしまった黒い跡に見向きもしないまま発進してしまつた。

「月影君が乗つたの…先輩のバイクなんだけど…」

「いや、そんな事より、何かあつたのか？」

アマゾンの愛機であるジャングラ―を爆走させながらも信彦はアルクエイドの姿を目で追い続ける。建物を足場にし、空中を停滞中に照れくさく表情筋を緩ませ、顔を紅潮させていたと思えば、何か、大切なものを得たかのような満面の笑みを浮かべる。

「どうやら志貴の言葉が彼女に火を付けてしまつたようだが、このままロアに挑んだところで結果は目に見えている。」

「こうして何故彼女を追いかけているのか自分でも理由は不明だが、アルクエイドをこのまま見過ごす事は出来なかつた。」

ロアのいる学校まであと数十メートル：アルクエイドにとってはあと一度跳躍すれば到着する距離まで迫ると、自分を追っていた事にようやく気が付いたのか、信彦が走る先に着地したアルクエイドは不機嫌ですと言わんばかりの顔を向け、手を腰に当てて仁王立ちをしていた。

ジャングラ―を停車させた信彦は殺気を孕ませた鋭く冷たい目よりはまだいいかと思いつつも、アルクエイドへと接近する。

「なによ、今最高に気分がいいところだったのに貴方と目があつたから台無しじゃない」

「随分な言われようだな」

こんな軽口を言い合うような間柄ではなかつたはずだったが、これで最後となるかも知れないからと、これ以上追求せずに信彦は尋ねた。

「…わかっているだろう？今のまま挑めば、お前は」

「ええ、そうね。私は死ぬわ」

あっさりとして、信彦の言うであろう結論を認めるアルクエイド。だが、彼女には悲観な感情は一つも見えず、逆に質問した信彦が眉間に皺を走らせる程だ。

「ならば、なぜ笑っていられる？今からわざわざ殺されてに向かい、奴を――」

遠野志貴を、悲しませるのか？

奴の本心を聞いた上で、それでも命を捨てるのか：信彦の言わんと

する事を既に理解していたかのように、アルクエイドは穏やかな表情を浮かべる。

「そう、ね。さつき貴方が言った通り：うぬぼれかも知れないけど、志貴に大きな『喪失』を与えてしまうかもしれない。志貴に、悲しい思いをさせてしまうかも知れない」

けどね、と言葉を区切ったアルクエイドは、これまで決して信彦に向けることのなかった笑顔を、彼に向けた。

「それでも、守りたいんだ。私を、人間でもない私を愛してるって言うてくれた大好きな志貴を！」

その後、ロアの城へと到着したアルクエイドは仕掛けられた術式や罫を全て力で薙ぎ払い、ロアとの闘いを始めた。

信彦は校門の外から攻撃が起こる度に破壊され、再生を繰り返す校舎を眺めることしか出来ずにいた。自分を失ってでも、守るものの為に全力で戦える。そんな輩が、吸血鬼にもいるとは…

彼女の決意に満ちた目を見て、信彦はかける言葉が何一つ見つからないまま、こうして彼女の最後となる戦いをただ、眺めることしか出来ない。

否、もし自分に力があつたとしても手を出すべきではないだろう。これはアルクエイドと、今自分の頭上を越えて校庭に着地した少年

によって決着を付けるべき戦いなのだから。

「つ、月影…:さん?」

「おや?いないと思ったらこちらにいらっしやっただのですか?」

驚く制服姿の志貴と、彼に肩を貸して飄々と言うシエルの登場に、やはりかと口走ろうとした信彦だったが、背後に感じた気配に冷や汗を流して振り返る。

「クククク…:勢ぞろいしておるわ、餌どもがなあ」

「貴様ら…:」

音もなく姿を現したのは、一昨日に自分へ接触したゴルゴムの残党…:一つの怪人素体に3つの魂を宿したダロム・バラオム・ビシユムの融合体だ。それに加え、身体の一部が欠けており、失った部分を他の動物の肉片で補っているゴルゴムの怪人軍団。

数は…:50は下らない。

「…:お前達は先に行け。ここは俺が何とかする」

「つ、月影さん!あれだけの数を1人でなんて」

「どうせ他の連中も後から駆け付ける。心配など無用だ」

「けど…:!」

自分の方がはるかに重症であるというのに…:とこれ以上この場に

留まらせない為の言葉を志貴へと向ける。

「見誤るな。貴様は、何のためにここまで来た？」

「…ッ!？」

「遠野くん。彼の言う通りです。まずは優先させることが、あるのでしよう？」

逡巡するが、あくまで一瞬だった。踵を返した志貴は一言、信彦に声を向けて吸血鬼の巣窟となった校舎へと駆けていく。

「…お願いしますー!」

志貴に続き、無言でその場を後にしたシエルの気配が消えた事を確認した信彦は、今更になって姿を現したのかとゆっくりと構えると、ダロム達はご丁寧にも説明を始めてくれた。

「…我らは死徒となった後、大望を2つ抱き、今日という日まで耐え忍んできたのだ」

「二つは貴様からキングストーンを取り戻し、ゴルゴム帝国を再び繁栄させる事」

「そして、もう一つは…」

3つの顔が一つに融合し、身の毛がよだつ風貌となった顔面の中でビシユムの顔が舌なめずりすると信彦の後で警戒する志貴と、はるか後方で戦い続けるアルクエイド達を見つめていた。

「今つぶし合っている吸血鬼どもを、まとめて喰らうためですよ」

ピクリと、信彦の眉が動く。

「調べてみれば、我らを死徒へと変えたあの吸血鬼も真祖も、高度な力を宿しているようではないか。それを互いに潰し合っているところを我らが食せばさらなる力を得られると言うもの！」

「それに不死身の肉体を持つ代行者、魔眼持ち、更にその家族も特別な力を持っているのではないか」

「ああ、はやく、はやく食べたい…そして私たちはさらなる高みへと至るのですよ！」

両手を天に掲げ、恍惚とした表情を見せるゴルゴムの3神官には、かつての威光などかけらもなく、ただ目の前にある餌をつけ狙うただの獣と化してしまった。背後に控えている怪人たちも、その被害者に過ぎないのだろう。

だが信彦にとって、そんな事はどうでも良かった。

「我らは全てを見ていた。貴様があの吸血鬼に腹を刺され、キングストーンのを失ったことも含め、全てな…」

「もしそこを退き、邪魔をしないというのなら命だけは助けてやるぞ？」

「けど、その前に額を地面を擦り付けて、この足の事を詫びてくれたらねえ！」

そう言つて醜い身体を覆うローブを捲ると、先の戦いで信彦に地面へと縫い付けられ、自ら切り落とした脚を見せる。その恨みを忘れなためか鉄パイプを差し込んで義足代わりになっているようだが…繰り返すように、信彦にとつて、自分に対する逆恨みの感情など、もはやどうでもいいのだ。

信彦が聞き逃せないのは、ダロム達が喰らうと言つた連中の事。

それぞれが苦しみの中でようやく見つけ、結論に至り最後の戦いを挑む中、それら全てを潰そうと考える不逞な連中に対して、信彦が向けるその感情は…

「——ん？」

「む？」

「許さん——」

「志貴の決意…アルクエイドの覚悟…」

「それらを邪魔し、侮辱する者を――」

「俺は…絶対に許さんツ!!」

信彦の叫びと共に、彼の身体は腹部から漏れる緑色の輝きに包まれる。

以前、筑波洋は言った。

もし、誰かを傷つけてしまう力を恐れているのならば、そんな自分を変えてしまえばいいと。

言うのは簡単だ。もし、そう易々と変われるようであれば、苦労などしない。

だが、そうでもしなければ奴らをこの連中から遠ざけられないと言うのなら、今すぐにでも変わって見せる。

その為の言葉を、月影信彦と、『彼』は知っている。

『んじゃあ見せてやろうじゃねえか。奴らの目ん玉が飛び出るくらい極上の奴をさあ!』

「言われるまでもない！」

五指を広げた左手を前方に突き出し、右腕を腰に添えた構えから大きく両腕を左側へと振るう。

重心を左半身に置き、振るった左拳を脇に添え、右拳を左頬の前へと移動。

ギチギチと骨が軋む音が響くほどまでに握る力を開放するかのよう
うに右腕を右下へ向け空を切り、瞬時に両手を左側に向けて突き出す。

「変——」

両手で扇を描くように左側から右側へと旋回し——

「——身ッ!!!」

右拳を腰に添え、左手で再度空を切るように素早く左上へと突き出した。

信彦の腹部にキングストーンを宿した漆黒のベルト『シャドー
チャージャー』が出現。

シャドーチャージャーから漏れる光が彼をバツタ怪人・そして強化皮膚リプラス・フォーンスで包んだ戦士へと変化させる。

だがそれだけでは終わらない。

さらに輝きを増したシャドーチャージャーから銀と黒の装甲が出現し、信彦の全身を包んでいく。

脚部と腕部に装着された黒く鋭い爪。

銀色の胸に走る世紀王の証であるエンブレム

緑色に輝く複眼――

「ば、馬鹿な…その姿は…!?!」

装甲の関節から余剰エネルギーとなった蒸気を排出する信彦は、自分の出現に驚愕する連中など目に暮れず、再び自分の中に現れた存在へと声を向けた。

「随分としぶとい奴だ」

『ヤッフウ！復活一発目からツン頂きましたあ！まあアンタがデレたら純粹に気持ち悪いだけだわなあ』

ケケケと相変わらず嫌らしく笑う声を聴いて、どこかで安心する自分がどうかしていると考えながらも、信彦はその眼を敵へと向ける。

「説明して貰う事は山ほどある。だが」
『わーってるって。まずはあのクリーチャーどものお掃除が先なんだろ？』
「フ…」

ジャキンと、脚のレッグトリガーを地面へ打ち付けた信彦…シヤドームーンは力強く構えた。

「あの世で後悔するがいい。俺達を敵に回した事をな…」

第57話

(全く…困った人たちです)

遠野志貴と別行動を開始したシエルは校舎の屋上へと到着すると目下である校庭の先…校門の前で怪人達と対峙する銀色の戦士へと目を向け、彼と同じ境遇にある戦士から言われた言葉を唐突に思い出ししてしまう。

自分と月影信彦は友達であるという、壮大な誤解。

言っている意味が分からず自分でも信じられない程に「彼とはそんな関係ではない」もなく捲し立てて客室を離れると真つ先に志貴の部屋へと向かった。

確かに彼には情報を与える為に数度接触している。だが、それは自分の任務に支障を出さないためにこの街から遠ざけるためだ。それに一度目的が一致しただけで、しかも志貴を連れて逃走する為に彼等を囮として扱った、なのに何故あのような解釈が出来るのだろうか。

志貴と同様に、彼等という存在に自分のペースが崩されてしまうと額に指を当てるシエルはすれ違う遠野秋葉の存在に気が付かないまま階段を昇っていく。頭を悩ます彼女が次に目撃したのは、絶対安静が必要な志貴が立ち上がり、どこかへ向かおうとする姿。どこに向かうつもりなのかは分かり切っているシエルは敢えて志貴に現実を知らせる事によって諦めさせるよう試みた。

だが、遠野志貴が真祖に拘る理由を聞いた結果、シエルはもう止めるという行為を諦めてしまう。

アルクエイドを心の底から愛しているという志貴の言葉を聞いてしまえば、もはや止めようがない。

この時、影でアルクエイドが自分達の…否、志貴の言葉を聞いており、彼女がロアの元へと向った直後にわざと自分に話させたのかと激高する志貴に半分脅される形で彼を連れて学校へと到着する。

着地した時に月影信彦とゴルゴムの残党が対峙している状況はさすがに想定外であったが、それ以上に信彦が志貴をアルクエイドの元へ急ぐよう促すとは思えない展開であった。

もう、彼女にとつて月影信彦は聖堂教会が虎視眈々と命を狙う対象として捉える事が、ロアを倒す事よりも遥かに困難となってしまう。

(本当に…やりづらくなりますね。しかし…)

学校の生徒として潜り込んだと同時に屋上へ設置した『切り札』へと目を向けるシエル。乱雑に積まれ、放置された備品の中に紛れたそれを覆った布を払うと、幾層もの拘束具で固められた縦長のケースが出現する。人1人が収まってしまおうと思われるそれは棺桶を連想させてしまう。

ゆつくりとシエルがケースの前に手を翳すとバチン、バチンと音を立て拘束具が開放されていく。

(このまたと無い状況を…利用させてもらいます)

ロアと戦い続ける死にかけている真祖を、動くことすらままならない少年を、人外共を引き付けている世紀王を…

全ては、自分の目的を果たすために…

「はっ、はっ、ハッ…」

呼吸の間隔がだんだんと短く、そして屋敷を出た時以上の頭痛が遠野志貴を苦しめている。

今、彼の眼に映るのは、無制限に広がる『死』の形。

志貴が背を預ける壁や廊下。その先の闇までに視えてしまう線と点。ズキリと額に走る痛みに耐え、線を踏まぬように歩む少年はただひたすら前へと進む。

(視過ぎたせいかな…以前アルクエイドが言っていたようにいつ脳が壊れてもおかしくない、か…)

生物どころか鉱物の死すら読み取る志貴の眼は対象の存在を死を見る代償として多大な負担が脳へと押しかかる。今彼に起きている頭痛は焼き切れる寸前に悲鳴を上げるエンジンのようなものだ。

いつ自分の気が狂ってしまうのかと不安に思えない日は無かったが、今回ばかりは今の状態に感謝しなければならない。

今の眼であれば、確実にロアを殺すことが出来るから。

ここまで連れてきてくれたシエルや、突然現れた怪人達を引き受けてくれた信彦に答える為にも。

何よりも、愛する女性をこの手で助けるためにも遠野志貴は立ち止まらない。

「——だから、ゴメン」

1人謝罪する志貴の行く手に現れたのは、ロアの犠牲者であり、僕に成り下がってしまった多くの生きた屍。

中には、信彦やアマゾンが一度手にかかる事を戸惑ってしまった子供も紛れている。

それでも、志貴は止まらない。

すれ違うよりも早く、速く、死徒の線と点へと刃を走らせ、解体する志貴は許される事と分かっている、止まらない。

もう助からないからと。せめて倒す事が自分に出来ることという吐き気が催す詭弁を口にするつもりはない。

彼はただ、自分の本心に従い、邪魔する者を殺しているに過ぎない。

だから、謝る以外に彼に出来る事は無かった。

その先に、誰よりも愛おしい女性を救うという己の為に。遠野志貴は進むしか道はない。

通った道は肉片で散りばめながら。時間をかけ、いずれは灰と化する死徒を殺し続けながら、校舎内で響く轟音を頼りに廊下を走り、階段を上がり、ついに校舎との連絡路で見つけた。

既に線と呼べる程の細いものはなく、点に塗りつぶされそうになっている白い女性の背中を。

「アルクエイドッ!!」

(これで10匹目ってか?)
「いちいち数えるな」

シャドームーンとなった月影信彦はゴルゴム3神官の融合体に命令され、向かってくるゴルゴム怪人を一撃の元に打倒していた。

彼の足元には怪人の破片などなく、あるとすればゼロ距離で放ったシャドーブームによって文字通りに粉碎された怪人達の黒い灰のみ。

(しっかしお優しい事で。今以上に苦しまないように全力でエネルギーを注ぎ込むなんてねえ。いくら変身できるようになったからと言って、力は有限だぜ?)

「不服か?」
(いんや。今以上に怪人に『優しい』手段はないだろうな)

なぜ、信彦がアンリマユの言うような攻撃手段を取ってしまったのか。それは自分にも見るも無残な風貌へと変わり果ててしまった怪人達の声を聴いてしまった故だった。

『ギギイ…痛…イ』

『身体ガ…勝手ニ…』

『死ニ…タイ…』

腕を振り下ろす度に血が飛び散り、足を踏み込んだと同時に膝から骨が突き出す。

死徒と成り果てたダロム達に身体の一部を喰いちぎられ、別の生物で補完された怪人達に自意識が残されたまま操り人形と化していたのだった。

自分の意思では動けず、前身に激痛を伴うような状態となって攻撃を続けるしかない怪人達。例えば肉体の一部が吹き飛んでも、強引にダロム達の念動力で相手へ特攻を強要されてしまう怪人達が唯一ある救いがあるとすれば…死だけだ。

得物であるシャドーセイバーで切り付けても、その程度では止まらない。シャドーフラッシュではダロム達の洗脳が解けても、怪人が持つ激痛からは開放されない。

信彦が取った手段は一撃で怪人を葬る他無かったのだ。

『ギギイ…アリガ…トウ』

かつて世界を震撼させたゴルゴムの怪人達が以前の主に向けた言葉。
自分を殺して礼を述べる怪人など、どこにいるのか。

信彦はただ己の胸に燻っている感情を抑えながらも、一つ一つの攻撃にエネルギーを集中させ、怪人を消し去ることしか出来なかった。

「ふむ…とうに3分を越えているというのに異変が起きないとは」
「どうやらこの短期間でキングストーンの力を物にしたということか」

「これは少々面倒な事になりましたね…」

また1体の怪人の腹部に手を当て、緑色の電撃を放つ信彦の姿を見るダロム達は予想外であるキングストーンの復活に警戒するが、直後にそれぞれの口を醜く歪める。

シャドームーン：いや、月影信彦は力を再び手にしたと同時に、弱点をさらけ出したと。

「何をやっているのだ！」

「馬鹿のように1匹1匹挑みおつて…！」

「一刻も早く倒すために、同時にかかりなさい!!」

順番に怪人達へと命令するダロム達の言葉に、2匹の怪人が同時に信彦へと走り出した。左右の腕の長さも重さも違うためか、バランスが取れず不格好な走りを見せる怪人達を早く解放せんがために両手へ緑色の力を込める信彦も地を蹴り、一気に距離を詰める。

「ッ!？」

信彦の掌が怪人達へと触れる直前だった。

怪人が突進する速さが変わり、信彦へと体当たりを仕掛けた。

(違うッ…これは…)

怪人達の動きが変わったのではない。信彦の前方で怪人を指揮す

るダロム達が念動力で怪人を背後から押し、信彦ごと吹き飛ばしている。そして、その程度で終わらせるダロム達ではない。

「ククク…律儀に怪人を消滅させるような方法ではなく、遠方から攻撃をしかければよかったものを…」

「しかし、それでは消滅には至らず怪人を余計に苦しませるなど下らん考えを持っていたようだな」

「覚えておきなさい。怪人の使い道など、これで十分なのです」

ダロム達の両目…計6つの目から放たれた怪光線が怪人達の背中へと命中、爆発を起こした。

2体の怪人の爆発を至近距離で受けてしまった信彦は防御も間に合わず、路面を数度バウンドしながら学校の門扉を打ち壊し、校庭の中心まで飛ばされてしまう。

(あ、あいつら…何の躊躇もなく…)

「……………」

地面を握るように掴み身体を起こす信彦の数メートル先。下半身を失った怪人だった者がピクピクと痙攣しながらも、何かを訴えるように信彦の元へ地面を引きずりながら移動していた。

早く、早く自分を…

そう聞こえたのは幻聴かもしれない。だが、信彦は爆発の余波で痛むことなど構わずに今すぐにでも手の平を向けるが、それよりも早く怪人の背中を踏みつける者が現れた。

「全く、道連れすらできんとは…」

「我々の飢えを満たす以外に何の役にもたたん連中だ」

「こんな者共を必死に守ろうとしていた過去が恥ずかしいばかりですね」

見上げれば、既に自分達の前へと移動したダロム達在必死にもがく怪人の腕首を掴むと、上空へと放り投げた。

「ぎ、様……」

弧の字を描いて落下する怪人の顔は恐怖に引きつっている。落下による痛みを恐れているからではない。

自分が落ちるその先に、まるで大穴のように口を広げて自分を飲み込もうとするダロム達が待っているからだ。

『——っ——っ!!』

手を伸ばす信彦は、断末魔を上げる怪人がダロム達に飲み込まれ、肉を、骨を噛み砕かれる音をただ聞くだけしか出来なかった。

「むう……やはり味がだいぶ落ちてしまったようだ」

「食するとすれば何も手をつけていないモノが一番か」

「次はうまくおびき出さないとね。最近だと妙に勘付かれていますって、いるのだから」

こいつらは、何を言っているのだ……？

気が付けば拳が不自然に震え、変身する直前にダロム達に向けた『何か』が再びこみ上げてくる。そして立ち上がるとする信彦だっ

だが、身に覚えのある不快感が再び信彦の身体から力を奪ってしまつた。

「ぐツ…!? 吸血鬼の、術式か…!」

(うそーんツ!? これまだ残ってたのかよツ!!)

信彦の囲う『否定』の魔法陣。本来生まれ持つはずのない人口の臓器や骨を持つ改造人間の動きを封じる術式に動きを止められてしまった信彦を愉快と言わんばかりにダロム達は笑い出した。

「これは傑作だ! キングストーンの力を取り戻したと言うのに、元人間が組み上げた術式に捕らわれるとは…」

「しかも丁寧はこの術式は吸血鬼が敵として認識した相手しか効果がないようだ…ならば、怪人共には効果はあるまい!」

「さあ貴方達! シャドームーンを痛めつけなさい! キングストーンさえ無事ならば何をしても構わないわ!」

身動きがとれない信彦達を囲う怪人達は次々に足蹴し、拳を振り下ろす。キングストーンの力を開放するにも続けて攻撃を受けては引き出すために集中すらできない信彦だったが、再び怪人達の声が聞こえてしまった。

モウ…シワケ…アリマセン

シャドー…ムーンサマ…

タスケテ：

奥歯を噛みしめる信彦は徐々に身体を起き上がらせようとするが、力を強める信彦に反応し、術式の効果がさらに強化された為に再び地へと沈んでしまう。

「なぜ、俺は立てない…」

(あんた…)

「なぜ、俺は——」

救えないのだろう。

以前は意地でも見せなかつた弱音。力を封じられたとしても、『あの者』ならば必ず立ち上がったはずだ。強引に傀儡と化した怪人たちすら、救えたはずだ。

だというのに、自分は立ち上がれない。

消滅させる以外に、救えない。

どうすればと身体にダメージを蓄積させていく信彦の強化された耳に、少年の悲痛な叫びが木霊する。

「アルクエイド!!」

同時に、これまで弱々しくもはつきりと感じ取れた気配が一つ。完全に消えてしまった。

死ぬ事を覚悟して、愛する人間を守ると笑顔で答えた真祖の気配が。

「——っ！」

緑色の複眼で修復されていく校舎の僅かな隙間から見えた光景。

腹部を貫かれ、少年の腕の中でぐったりと項垂れているアルクエイド・ブリュンスタットの姿。

もう自分の声が届かないと知った遠野志貴の絶望に染まった顔。

最後の別れぐらいは待ってやろうと、2人の姿を遠目に見て、満足そうに微笑む吸血鬼。

「……………」

知っていた。このような結果になるとは。

なのに、なぜ関係のない自分の胸が抉られたような気分にならないければならない？

先ほどとはまた違う疑問を抱く信彦の頭から、アルクエイドの姿と、志貴の顔が離れない。

とつくに解答の出たあの2人の結末に、なぜ自分は納得ができないのか。

怪人共から受ける痛みよりも、今胸に走る痛みの方がはるかに大きい。

その痛みが何であるかが分からないまま、信彦へ耳障りな声が届く。

「可能なら生きてまま飲み込みたかったのだが……まあいいだろう」

「うむ。例え死肉であっても真祖であれば間違いなく強力な力となるであろう」

「ホホホホ。ならばこの者をさっさと片づけてしまいませんか？」

……どうやら答えを出す前に、処理しなければならぬ問題が生じたようだ。

その為にはもう手段は選んでいられない。

未だ抵抗のある方法だが、目の前の外道共を駆逐できるのであれば、何だって使ってやろう。

そう強く誓う信彦に反応したかのように、彼の意識は奥底へと沈んでいく。

まるで何も無い暗闇の中。

自分の手を見つめる信彦は自分がシャドームーンではなく、人間の姿であると認識した。ここは信彦の深層意識であり、今の自分はただの精神体である事。背後に現れるであろう存在も予測がついていた。

「アヴェンジャーか」

「おおうツ!?脅かそうとしたのに先に声かけんなよ!」

いつも頭の中に響く不愉快な声の方へと振り返ると、そこには以前間桐光太郎の中に現れた聖杯としての姿を持つアンリマユが立っていた。黒髪に褐色の肌に様々な模様を走らせている少年。

かつて聖杯戦争へ参加した衛宮士郎の外見を被ったアンリマユへ信彦は眼を逸らすことなく、言い放った。

「奴らを倒す為にも、貴様の力を貸せ」

あの外道を葬るためには、もう自分だけの力だけではどうにもならない。その考えに至った信彦は以前のように自分と主導権を奪ったアンリマユへ協力を仰ごうと、この精神世界へと踏み込んだのだ。

「どストレートな口説き文句だなあアンタ。でもさあ、頼むんだつたらもつとそれ相応の…ってタンマタンマ！無し、今の無しだから頭を下げる体制をやめてくれって!」

もはや冗談にどなりもしない信彦が頭を上げてヤレヤレと額を拭くと、再び何かを含んだような笑みを浮かべるアンリマユは信彦の背後を指差した。

「ま、アンタがそんだけ頼むんなら俺だって協力は惜しまないさ。正直、俺もムカツ腹が立って仕方がないし。けど、俺よりも深く頼む相手がいるんでないかい？」

「お前より…?」

アンリマユの刺した方へと顔を向けた途端だった。

暗闇の中で一つの光球が舞い降り、緑色の輝きを放つをそれは段々と何かの形を成していく。

「これは…」

思わず呟いた信彦が目にした光球は、人の姿へと変わる。

肩を露出し、袖のない純白のドレスを身に纏い、雪のようにきめ細やかな肌。

まるで人形を思わせるに整った顔立ちに、深紅の瞳。

何より目を引くのは背中まで届く銀髪の髪。

外見の年齢は二十歳前後であろう女性は呆ける信彦と目を合わせ

ると、優しく微笑んで言葉を放った。

「こうして話すのは初めて…かしら？会えて嬉しいわ、信彦」

女性とは確かに初対面だ。しかし、彼女から感じる力。この力とは自分は10年以上の付き合いとなる。だからだろう。自然とその名を口から出てしまうのは。

「キングストーン…なのか？」

笑みを浮かべたままこくり頷く女性…キングストンの意思の出現に思わず警戒を強める信彦。なぜ、わざわざ自分に付いて回った少女と同じ…いや、外見からして彼女の出身であるアインツベルンのホルムクルスの一体と言った方が正しいだろう。それと同じ格好で現れたのか意図が読めず、無意識に顔が強張ってしまう。

だが、信彦の様子を見てキングストーンは段々と顔色が曇り、次第に困惑するようになってしまう。

「え…あれ…？」

ついには声に出してしまうキングストーンはその視線を信彦ではなく、こちらに背中を向けて必死に笑いを堪えているアンリマユへと向けた。

「ね、ねえアンリ？聞いた話と違うのだけど——」

「…っ！っ…！」

「ええっと、そんな無言で地面をバンバン叩かないで…」

「どういう事だ？」

「え？」

「説明しろ」

涙目でアンリマユに訴えるキングストーンへ鬼気迫る表情で尋ねる信彦に、先ほどの雰囲気など欠片もない女性の口からとんでもない事実を聞く羽目となってしまふ。

「えっと…実はアンリマユとは聖杯の光を浴びて、信彦の身体に宿ったところから時々意識の疎通をしていたの」

「その時に、信彦に話を聞いてもらいけどどうすればいいかって相談したの。そしたら——」

『あの兄ちゃんの好みの姿になれば一発だぜ！具体的には銀髪ロングのストレート。それに赤い瞳だな。参考に俺の前に聖杯の殻になった奴の外見を真似りやあもう鼻の下伸ばして話を聞くんでもんだ』

「——って」

「……………」
キングストーンと意識を交わしていたとは驚きだった。いや、自分

の場合は最近までキングストーンを拒否していたのでこれは仕方ない。

問題はアンリマユが口走った信彦の好みという問題だ。

ギギギ…と無表情で顔を向けて見ると、ドツキリ成功！などのテロップを掲げて爆笑する反英霊が、そこにいた。

「ブハハハハハハハハハッ！いい、いやまさかホントにその姿になるとは思ってたハハハハハハ!!それにごめんよ、項目に『見た目は10歳、頭脳は18歳』の合法ロリつて入れとくのわすれたハーハヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤッ!!!」

笑い声を耳にして頬を紅潮させていくキングストーンから離れ、未だに笑い続けるアンリマユへと音もなく接近する信彦は、これまでにない程に、静かに告げた。

「ここは、確か俺の深層意識、だったな？」

「く、ヒヒヒ…今更なに言ってるのアンタ…はー、腹いてえ…」

「つまりだ。普段貴様を罰している時のように自分が負うダメージなど配慮しなくて良いわけだ」

「あーそうだなあー…え？」

ようやく信彦の言わんとする事を理解したアンリマユの顔が一気に青ざめる。逃亡するにも既に時遅し。

彼の目の前には、不敵な笑みを浮かべ、拳の骨を鳴らす月影信彦が君臨していた。

「いいのだな…自分に降りかかる痛みを考えず、貴様を全力を殴って

も…」

「お、お手柔らかに…」

くしばらくお待ちください

「…その姿、どうにかならないのか」

「む、ムリなの。一度この姿として認識されてしまったら…」

しばし口を聞けなくしたアンリマユを放り投げた信彦は、両手で顔を隠すキングストーンへ今からでも姿が変更出来るのかと尋ねるがどうも無理なようであったので、別の疑問をぶつける。

なぜ、自分と意思の疎通を考えたのかと。

「だって…ようやくあの乱暴な人から完全に開放されて、貴方と一緒に自由の身となったのに、信彦ったら全然私の話を聞いてくれないんですもの…」

左右の人差し指の先をチョンチョンと突き合わせながら話すキングストーンの話は、信彦にとって余りにも痛すぎる内容であった。

キングストーンの言う乱暴な人…つまり創世王の野望に利用される事がなくなり、晴れて信彦の力となれると考えたのだが、信彦がいつか自分も創世王のような存在となるのではという不安と、旅の中で摩擦していく心情からキングストーンの力を拒絶されてしまった。

双方の相反する反応の為に信彦がシャドームーンへと姿を変えた際に不具合が生じ、この美咲町での様々な問題が起こってしまった訳だ。

(つまり…全ては俺が…)

そう、キングストーンは初めから信彦に力を貸すつもりだったのだが、当の本人が拒否し続けていたために余計な問題が発生していたのだ。全ては信彦の独り相撲。

この事実にもたも笑い出そうとするアンリマユへもう一撃くれてやろうとする信彦だが、残念ながらそんな時間はない。

わざとらしく咳をした信彦は簡潔にキングストーンへと尋ねる。
なぜ、自分に力を貸そうとしたのか。

「だって…形はどうあれ、私たちは一緒にいるじゃない？」

先ほどまで恥ずかしさの余りにむくれていた少女のような顔は、今はない。初めて顔を見せた時のように、キングストーンはニコリと笑う。

「今はこうして自分の意思を信彦へ聞かせることができるけど、結局持ち主を選べないただの力の塊に過ぎないの。今までの世紀王はゴルゴムの野望に巻き込まれて全てを失って、私の片割れと死ぬような戦いを続けてきた。ずっと、見たくもない殺し合いを見ているだけだった」

「私たちはずっと苦しんでいた世紀王たちに何一つ、助けることが出来なかった…けど、今ではこうして信彦が運命なんかに関われず、生

き続けてくれている」

「私たちにとって、こんな奇跡に等しいことはない。だから、自分の人生を歩みだした信彦の力になりたいと考えたの！今まで何も出来なかった分、助けになりたいの！」

その笑顔は、やはりあの少女を連想させる。運命に屈せず、生きていと願った、あの白い少女に。

「そうやってトキめいた時点であんたの負けだぜ大将……」

「何を訳の分からぬ事を言っている。腕をどけろ」

信彦の方に腕を乗せて眩くしたり顔のアンリマユへ言うと同時に蹴りをかます信彦。

そんないつものやり取りをする2人の間に立ったキングストーンはそつと両者の手を握る。

「もう大丈夫。こうして話ができただのなら、貴方が1人で何もかも背負う必要はない」

「……………」

「1人で全てを何とかしようとししないで。貴方には私やアンリ。それに、あんなに頼りになる人たちがたくさんいるのだから」

「自分と……私たちを信じて？」

自分を見上げて、にっこりと笑う彼女を見て、不思議と落ち着いてしまう。

彼女の手の温もりが、心まで落ち着かせているような感覚だった。それはアンリマユも同様だったようで、彼の表情も普段見せる悪戯小僧のものでなく、頬を指先で掻きながら恥ずかしそうに目を逸らすという珍しい光景を垣間見る事が出来た。

「そう、貴方達も力を貸してくれるのね」

キングストーンは視線を上へとむけると、三色の光球が、信彦達の周りをクルクルとじゃれ合う子犬のように旋回している。

これは以前信彦の危機を救った天・地・海の力たちなのであろう。

「3つの力に俺達3人の魂、ってか？これだけそろってりゃ負けるなんて、あり得ないだろう？」

「当然だ。負けるつもりなど、毛頭ない」

「フフフ…じゃあ、頑張らなきゃね！」

「では、真祖を最初に頂くとしようか」

「フフフ…どれほどの力が付くか、楽しみだ」

「貴方達はしっかりと痛めつけておくのよ！」

無抵抗である信彦を背にし、校舎へと進むダロム達であったが、足を一歩進めた直後。

背後から響く轟音に思わず振り返ってしまった。

そこには怪人達の姿はなく、術式で動きを封じられたはずのシヤドームーンが立ち尽くしていた。

「…どのような手段を使ったは知らんが、貴様が不利なことに変わりはないのだ！」

未だ健在である怪人達に襲い掛かるよう指示するダロム。もし、以前のようにゴルゴムの神官として、彼の持つ力を敏感に感じ取っていたのなら、これから起きることは気づいていたのかもしれない。

否、それでも予想は出来なかったのだろう。

それは、ゴルゴムの歴史を覆すことに等しいのだから。

「…いくぞ、キングストーン」

(ええ、信彦！)

「遅れるなよ、アンリマユ」

(へっ！誰にももの言ってるんだよ！)

両腕を交差し、勢いを付けて左右へと広げた直後にベルト『シヤドーチャージャー』から青、赤、紫の光球が飛び出し、信彦の頭上へと上昇。

やがて光球は色違いの狼のようなエネルギー体へと変化し、咆哮を上げると3匹がそれぞれを追いかけけるような形で円を作り、その円から放たれる眩い光が信彦へと降り注いだ。

その光を浴びる信彦：シャドームーンに変化が起こる。

両肩の円型であったプロテクターが牙を向く狼の頭部を模した形状へと変化し、黒い棘エレボトリガーが上腕部へと移動し、さらに腕と拳を包む巨大な籠手へと変化し、三本の鋭い爪が姿を現す。

脚のレッグトリガーが反転、爪先へと装着されるとさらに中央へ銀色の爪が追加され、狼の後ろ脚を連想させる強化ブーツへと変化。

胸部の装甲が狼の顔を模したプロテクターへと変わり、シャドーチャージャーの中央：エナジーリアクターを守るように青、赤、紫色の爪に覆われる。

額の一对のアンテナが三対へと変わり、緑色の複眼が強く発光。

本来世紀王としての肉体を鋼のボディへと追加改造され、さらにアンリマユというイレギュラーの魂と天・地・海の力が宿ったゴルゴムの歴史には存在しない新たな姿。

それは、キングストーンと心を通わせたことで生まれた信彦達の新たな力。

その名はシャドームーン・トリニティファング！

第58話

「……」

「どうしたんだ？こいつら……」

自分達を囲うゴルゴム怪人を背中合わせで対峙しているアマゾンと筑波洋は敵の動きが突然とまり、ある方向へと顔を向けた様子に構えを解かないまま同じ方角へと目を向ける。

数十分前、自分の友達であるジャングラールが見当たらない事に動揺したアマゾンだったが洋から月影信彦がアルクエイドの後を追う為に行ってしまったと聞くと急ぎ自分達も行かなければならないと、洋が搭乗したバイクの後部へと飛び乗った。

後から呼びかけるシエルの声が聞こえたような気がするが、戦う力を失ってしまった信彦を助ける為に2人は彼のアルクエイドと信彦の目的地である学校へと疾走。

だが、その道手を阻む者が現れた。

邪魔をさせまいとダロム達によって差し向けられたゴルゴムの怪人軍団の出現に、洋は突破しようとして愛機スカイターボを加速させるが地中・空中から不意打ちによりスカイターボは横転。とっさに飛び降りた2人は突破は困難と考え、もう一つの方法を選択する。

変身した2人は襲い来る怪人達を次々と倒していくが、数は一向に減らず、ついに囲まれてしまった時であった。

茫然とする怪人達は洋達を襲う事を忘れ、ただ一つの方向を見つめ続けている。それは、洋達の目指す学校へと一致していた。

（何かが起こっている。けど、これはチャンスだ！）

この好機を見逃すわけにはいかない。洋は脳波コントロールでスカイターボを起こし、自動運転で自分達へと向かわせるとアマゾンへと合図を送る。

「行きますよー！」

「おうッ！」

その場から跳躍し、スカイターボへと飛び乗った洋とアマゾンは未だ動きを止めている怪人達の間を向けて、その場から離脱。怪人達との距離を一気に離していった。

「追ってくる様子はない…一体、何が…？」

後ろへと目を向けて自分達を追いかけてくる怪人の姿が見られない事に安堵しつつも疑問を抱く洋の言葉に、アマゾンは行く先の…信彦がいるであろう学校の方角を見つめて答えた。

「多分…ノブヒコ達が、何かを起こした」

「月影君が…それに、『達』って…？」

「よく、わからない。けど、感じる」

「アイツらの心…一つになった」

「なんだ…あれは？」

渡り廊下の窓から校庭の中心に立つ、異様な存在に口アは口からそ

んな声を漏らした。

校庭の中央に立つ者は間違はなく、世紀王の片割れなのだろう。しかし、彼が纏っている雰囲気は2度自分が殺した時の存在とはまるで違う。その背中を……いや、今いる場所から見ると小さく見えてしまうあの姿を視界へと入って来るだけで身震いが起きてしまう。

先ほど真祖の姫をその手で下し、もう自分の脅威となる存在などこの世界にはいないと考えたが、あれは危険だ。しかし世紀王が目を付けているのは興味本位で死徒となったゴルゴムの連中であるため、後々の対応の為にここは静観するべきであろう。

それにと、抱きかかえていたアルクエイドの亡骸をゆっくりと寝かせる少年……遠野志貴へもう少し別れの時間を与えても良いだろうと口元を釣り上げた。

だが、それでもロアはどこかで安心しきっている。この城……街中に設置した術式から永遠と魔力が注がれる『大喰い』がある限り、相手がどのような力を持つのが、自分が何度殺されようが負けるはずがない。

故に気づかなかったのかもしれない。

自身が仕掛けた改造人間の動きを封じる『否定』の術式が発動しているというのに、今の世紀王へ何の効果も齎していない事に。

一歩ずつ、ゆっくりと自分達へと迫る信彦……シャドームーンの新たな姿にダロム達は様々な感情が入り混じっていた。

人類など遠く及ばない程に積み上げてきたゴルゴムの長い歴史の中で、世紀王がキングストーンが2つ揃わない状態でこれまでにない変化を遂げたという驚愕。

何が起こったかまるで理解が追い付かず、着実に自分達へと接近するシャドームーンのまだ見ぬ力への恐怖。

かつての創世王から授かった天・地・海の石の力を再び見せびらかせただけでなく、完全に取り込んだという憤怒。

(だが、力を強めたのは貴様だけではない！)

死徒となった事により多くの人間、そして怪人を取り込んだことでより以前より強力な力を手に入れた。ただキングストーンと3つの石の力を合わせた程度では自分達に敵うはずはない。

前回はシャドームーンの活動時間や不意打ちに気を取られ、片足を失う結果となってしまうが今度はそうはいかない。

あの後、より多くのゴルゴム怪人を呼び寄せ、血肉を嚼り身体能力の底上げし、念動力は数倍にまで膨れ上がっている。そう易々と遅れを取るはずはないのだ。

(そうだ、我らは負けん)

(このような出来損ないなどに、もうキングストーンを持たせるなど我慢ならん！)

(さあ、今すぐにでもこの首を――)

身構える三神官の融合体の思考は、次に起こした信彦の行動を垣間見て、凍り付いてしまう。

一步、また一步とダロム達へと近づくと信彦は歩む速度を変えぬまま常に攻撃をしかける為の間合いですら止まらず、ダロム達へ目もくれずに素通りしたのだった。

横切った際に攻撃を加える事もなく、相手を射殺そうとする殺気を込めた眼力を向ける事もなく、ダロム達がその場にいとまるで察知をしていないかのように、信彦は歩き続けた。

ようやく信彦が足を止めたのは、ダロム達の後方で控えていた怪人達と数メートル距離を置いた地点。ダロム達ではなく、自分達から始末するつもりなのかと怯える怪人達には、もはやかつての肉体を持つ個体はいない。皆、最大の武器である部位や一部分をダロム達に食い破られ、別の生物の肉体や臓器を強引に貼り付けられ生かされている者ばかりだ。

元に戻る可能性など、無いに等しい。

「怪人共…」

静かに告げる信彦の声にビクリと身体を震わす怪人達の様子に、どれほどの仕打ちを受ければあの獰猛な怪人達が怯えるのか。かつて秘密基地で見た姿は今では見えない。

信彦は控えていた20体近くの怪人に向け、両手を左右に展開し、ベルトの中央に輝く玉石の力を開放した。

「もう痛みには耐える事も、餌食となる恐怖に怯える必要はない。ただ静かに、逝くがいい」

『ア、アアアあ…』

信彦が照らす緑色の光を浴びた怪人達は、先ほどまでであった恐怖はない。

光に当てられたと同時に怪人達の全身を蝕んでいた痛みが和らぎ、心に刻まれた主に対しての畏怖すら消えてしまうように思えた。

そして怪人の身体は光の粒子となって、その輪郭を失っていく。これから死んでしまうという恐れよりも、やっと解放されるという安らかな表情を浮かべて。

シャドーフラッシュによって消え去っていく怪人達の姿を見届ける信彦へ、こんな言葉が贈られた。

ただ『ありがとう』と。

(けっへっへ。随分とデレなセリフを口走るようになったじゃねえの
(ふふふ。ほんとう、優しいんだから信彦は)

「寒気が走るような冗談はやめる貴様ら。いつまでも身震いする連中に気を取られないために行っただけだ」

アンリマユやキングストンの意思から送られる称賛にそっけなく答えた信彦は、背後で怒髪天をつき、今にも爆発寸前であるダロム達へと目をむけた。

『き、さ、まあああああああッ!!』

三つの口が同時に吠える。

「私を：我々よりも先に餌どもに：！」

「この場でどの怪人共よりも力を持つ我々を気にも留めぬというのかッ!？」

「このような辱め：！味わったこともないッ!!!」

彼等にとつては屈辱だった。未知の力を持ち合わせようとも見下していた相手に無視され：いや、注目も警戒もされず、自分という存在そのものを否定されていたに等しいと思ひ込んでしまったダロム達の怒りは頂点に達し、全力で信彦を排除せんと攻撃を開始した。

突き出した両手の指先からレーザーを。大きく開いた3つの口から破壊光線を。6つの眼球からは波状の怪光線を。

『くたばるがいいッ!!!』

もはや距離は2メートルもない間合いで無防備である信彦へと命

中し、信彦の身体に着弾すると次々と爆発が起きていく。以前に信彦を庇った仮面ライダーへ向けた一斉攻撃とは比べものにならない威力を誇る攻撃に、もはや原型すら留めていないはずだ。土煙が立ち昇る中、勝利を確信しているダロム達に、聞こえるはずのない声が耳に届いてしまった。

「気が済んだか？」

煙が晴れた後。ダロム達の前に立っているのは、傷一つどころか、銀色と狼を象った装甲に汚れ一つつかない世紀王の姿。彼の放った冷たい一言に、寒気を感じたダロム達の足元へドサリ…と鈍い音を立てて落下したものがあつた。

ゆつくりと視線を下へと向けるダロム達が見たものは、細切れにされた腕。

シャドームーンの両腕に装着された籠から生える3本の爪。その切っ先には、腕と共に落ちたと同時に池を作った血と同じものが付着している。落下した腕が自分達のものであるという結論に至ったころには、ダロム達は膝を付くと同時に、腕の断面を残る手で押さええて悲鳴を上げることしか出来なかった。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?!』

「…片腕程度で吠えるな。怪人どもは、全身至る場所を失っていたのだぞ?。」

『がぁ、あああああああぁ…!』

信彦の声などまるでとどかず、ダロム達はただ叫び続けるしかない。膝を付き、肩に走る激痛を叫ぶことでどうにか和らげようとして

も、傷口が塞がるまで時間がかかってしまう。

(一体…一体いつ、攻撃を仕掛けたのだツ!?)

(まるで捉えられなかった…いつ、我らは斬られたのだ!)

(これは…最後の手段を使うしか…!)

自分達に視認させない速度で繰り出された一撃。信彦が見せた力の片鱗を垣間見て顔中に汗を浮かべるとギョロリと複数の目が銀色の戦士を睨む。こちらが立つのを待っているかのような態度に再び怒りを滾らせるダロム達は望み通りに立ち上がると、残る腕で肉片と化した自身の片腕を驚掴むと自身の口へと放り込んでいく。口元やローブが血で汚れいく光景は常人であれば決して直視できないものだろう。

(うげえ…あれがホントの共食いだわ)

(あの…どうして私の両目を手で覆ってるのアンリ?)

(あんなの見ちゃあいけません)

「……………」

緊張感のない連中の会話に溜息を付きたい衝動にかられながらも、信彦は油断なく肩を上下させるダロム達を警戒し続けてた。攻撃を受け、自身の腕を食すという異常な行動に走っているが、それはまだどこかで自分に勝つ為であると信彦は睨んでいた。

先の攻撃と自分の言葉を聞いて逆上するようであれば、なりふり構わず襲い掛かってくるはず。だがこの怪物が取った行動は自身の腕すら取り込んで力を付けようとしているのだ。

いくら信彦達が新たな力を手に入れたとしても、自身でもどのような能力があり、どこで限界を迎えてしまうのかも分からない状態で油断などできない。

そう考えている間に身体の震えを止めたダロムが音もなく立ち上がると、変化が始まった。

ダロム達の身を包んでいたローブが膨らみ、内側から引き裂かれていく。そして焦りしか見せなかったダロム達の表情に余裕が戻り、口にせずとも何を言いたいかを信彦は読み取ることができた。ゴルゴムの秘密基地で散々眺めた、あの勝ち誇った顔だ。

ついにローブが完全に避けた途端に、一つであった肉体が3つの塊へと弾け飛び、信彦を囲うように『着地』した。

「その姿…」

自分を囲む者達の姿に、信彦は見覚えが無かった。

それもそうだろう。今、信彦の前に現れたのは彼が宿敵との激戦で傷ついた身体を癒す為に眠っていた時に起きた戦いの際、この世の悪意を身に注いだ姿なのだから…

「フハハハハハ…我らが何体の怪人の肉体を取り込んだと思っているのだ？」

「最初こそ1体の素体に三つの魂を宿していた我らであったが怪人達を取り込み、かつての肉体を取り戻すまでに密度を高めたのだ！」

「それもあの聖杯の中身に触れた時と同じ姿にね。しかも死徒となったことよってさらにパワーアップしているわ!!」

ダロムは三葉虫とカブトガニを併せ持った巨大なハサミを持つ怪人へ。

バラオムは四足歩行の鋭い牙を持つ獣の怪人へ。

ビシユムは大空を飛ぶ翼竜の怪人の姿となり、信彦を囲う形で出

現。

それは裏切り者であるブラックサンとそれに組するサーヴァント達との決戦の際。強引に起動させた聖杯から溢れる『中身』を身に受けた事で自分達の基となった生物に近い形態となった大怪人。

一度は敵に敗れはしたがあの時とは異なり自身の意思をはつきりと持ち、力や能力も伸び上がっている。それに、相手は1人…

「もはや勝つたも当然だあッ!!」

「さあ、私たちを怒らせた事を後悔するがいいわッ!

己のさらに強化された俊足で信彦へと迫るバラオムと、上空から怪光線の嵐を放つ。目には最早勝利しか浮かんでこない。所詮亡霊であつたサーヴァント達の連携に敗北したバラオムとビシユムにとつて現在でも遺恨であつた。その為に、最初から全力で相手を翻弄して戦い潰す。

バラオムは自身の最大の武器である脚で大地を蹴り、夜空を舞うビシユムは火力を持って信彦へと迫つた。

「これは少々厄介だな」

自分の速度以上のスピードで接近戦を仕掛けるバラオムや手の届かない空から攻撃を仕掛けるビシユムに対し弱音を口にしてみるがまるで困っている様子を見せない信彦は対策を次々に構築していた。

こちらの様子を見ているダロムはともかく、位置を把握させない為にわざと自分の四方八方でグラウンドを削りながら駆けるダロムと空に浮かび優位性に浸っているビシユムにはとうに10通りの攻撃方法が浮かんでいた。

まず手始めにバラオムを倒そうとした信彦だったが…

(ちよいと悪いけどよ、俺にやらせてくれない?)

「なに…?」

同居人からの提案に思わず顔をしかめる信彦だったが、普段チャランポランであるアンリマユの声にある思惑が混じっている事に勘付いた信彦が考える事数秒。

「…好きにしろ」

(クククク…もはや動くことすらできないか?)

身動き一つ見せない信彦の様子にほくそ笑み、攻撃を与えては離れるを繰り返していたがどれも手ごたえはない。相手を無駄に警戒して力を込められないだけど踏んではいるが、次の攻撃は違う。この自慢の爪で奴の背後から装甲ごと貫いて見せると腕に力を集中させ、地面が抉れるほどに強く蹴る。

一直線に信彦の背中を目掛け、その爪を突き出した。

「死ねえッ!!」

ビシユムの光線の雨をうまく回避しながらも信彦の背後を取り、叫ぶバラオムだったが、その腕に貫いた感触が伝わる事はなく、代わりに自身の顔面に激痛が走る結果が現れてしまった。

「が…あつ…」

ヨロヨロと後退するバラオムの食肉類となった顔が潰れ、鼻の骨など完全に砕けている。見れば信彦は背中を向けたままバラオムが狙った位置から身体をずらし、肘を背後へとむけている。全速力で標的に駆けた際に信彦の肘がカウンターを受けてしまい、より大きなダメージを受けてしまったのだろう。

「いやあ、ずいぶん煩い蚊が飛んできると思って適当に腕振るっちゃったら大当たり」

鼻を腕で押さえるバラオムはこちらに向けていた肘を両肩ごとだらりと下げ、首を傾けたままダルそうに振り返る信彦の姿に驚きを隠せない。

先ほどまで見せた世紀王らしき威厳はなく、だらしなく片足に体重を乗せて立つ姿は、まるで別人：何よりも大きな違いは、鮮やかな緑色の複眼が、漆黒に染まっている点だった。

「さあて、ここからは俺が相手をするぜ？そんなどこの誰かもわからねえ悪意を頼った格好なんて、流行んねえよ」

「おの、れいッ!!」

再び加速して視界に止まらぬスピードで消えてしまったバラオムに慌てる様子もなく身体の主導権を得たアンリマユはステップを踏み、黒い複眼を妖しく光らせる。

「なるほど、追いかけてっこってんら、受けて立つぜ！」

爪を収納した籠手ごと腕を下へと振り払った途端に、籠手はアンリマユの両腕を離れると回転しながら背中へと移動し、装着される。籠手の爪が伸びていた位置から僅かながら蒸気が噴き出し、段々と勢いは強まっていく。さらに狼の足をを思わせるブーツにも光が宿り、くるぶしに当たる部分からも蒸気が吹き始めた。

籠手がなくなり、五指が自由に動く事を確認したアンリマユは続いて自分の最も得意とする得物…黒く歪な短刀右齒嚙咬ザリチエと左齒嚙咬タルウイを両手に顕現させる。

「さて、いきますかッ！」

叫ぶと同時に背中と足首から火が噴き出したと瞬間、アンリマユの姿もまた消えた。

(な、何なのだ…何だったのだ今のは…)

信彦の出した異様な気配に飲まれたバラオムは猛スピードで再度敵の眼をかく乱させようと離れたが、再び標的がいた地点へと目を向けた時、姿を消していた事にようやく気が付いたのでった。

「や、奴はどこへ…！」

「やあ、僕シャドームーン！」

これは何の悪夢なのだろうか…今、自分が走っているのはマツハを越えた超高速の世界のはず。だというのに…

「いま、貴方の後ろにいるの…！」

そんなふざけたようで、とてつもなく冷たい低い声と共に、バラオムの背中に黒く、奇形の短剣が突き刺さった。

第59話

「が、ああ…!？」

背中に走る激しい痛みにも短く悲鳴を上げたバラオムの思考に様々な謎がせめぎあう。

あれは、誰なのだ。

攻撃を回避し、カウンターを叩き込んだ世紀王が振り返った時、バラオムの背筋に寒気が走った。本来緑色で輝く複眼が漆黒に染まっていただけでも驚きであるというのに、彼の言動、声色すらバラオムの知るシャドームーンと異なっている。

シャドームーンの『表』として現れた得体の知れない存在に背筋が冷たくなったバラオムは地を蹴り、再び相手の視界から消える事で距離を取ろうとした。目にも止まらぬスピードで翻弄し、敵対する者をいたぶる為ではなく、完全なる逃避の為に。

だがバラオムにとって誤算であったのは、彼と同等…もしくはそれ以上の速さで世紀王の姿をした者が追い付いてきたことだ。

聖杯の中身を浴び、怪人の基となった生物の本能が勝った強く、醜悪な姿。死徒となった事で獣の本能を押しさえつけ、自意識を保ちつつも強大な力を存分に振るうはずだった。

あの世紀王を一方的に屠り、手玉に取れるはずだった。

本来胸の内に溢れるはずだった優越感の代わり、バラオムにあるのは焦燥と、ゴルゴムで神官であった時と変わらぬ崇めていた存在へと抱いていた恐怖が、より強くなって刻まれてしまう。

「本当なら、吸血鬼にされた被害者であったんだろうけどよ…」

信彦へ見せる陽気な雰囲気など欠片も連想させない冷え切った声と共にバラオムの後頭部を五指で力強く握るアンリマユの表情は、変わらない。冷たい輝きを放つ黒い複眼の仮面も、その下の素顔も、変わらない。

「アンタらは、やりすぎた」

言い放たれた直後、背中の傷など話にならない程の激痛が顔面を襲う。

バラオムは超速で移動していた状態から、顔面を校庭へと押し付けられたのだ。

ガリガリと地面を肉食獣の顔で削り、皮膚と血液をまき散らしながら顔でブレーキをかけるバラオムは、自身の超速で生み出されたスピードと地面への摩擦。さらに後頭部をより強く押し付けるアンリマユによって校庭を深く抉りながら進んでいった。

バラオムの動きが完全に止まったのは、最初に顔を押し付けられた場所から20メートル以上進んだ地点。その間に出来上がった校庭の凹みにはまるで赤黒いペンキを塗ったような跡が残り、そしてバラオムは頭部が丸々と埋まった状態にある。

確認はしたくもないが、恐らく頭部の半分以上は削り取られているだろう。

背中へ突き刺さったままである短剣を引き抜き、止めを刺そうとするアンリマユは咄嗟に身を翻し、バックステップで今いた場所から離

れた途端、破壊光線の嵐が校庭の一部を炭へと変えてしまった。

「こっわっ！誰だよこんな不意打ち…ってああ、そういやお空にいたんでしたっけか？」

黒い複眼を空へと向けたその先に、夜空で両翼をはためかるビシユムの絶えず放たれる光線の猛襲をステップで回避を続け、背中に装着した籠手を再び腕へと戻し、出現させた爪で怪光線を切り裂くアンリマユはさてどうしたものかと悩む中、優しくも強い意志を秘めた声が囁かれた。

(アンリ、今度は私に行かせて！)

「一体…何が起きているの？」

バラオムの超速と自分の波状攻撃によって一時は有利に事が進んでいたと思われた。だが、思いもよらない信彦の変化にバラオムはまるで逃げるように超速で姿をくらませたようにも見えた。

だがその直後、同様に信彦の姿が消えたように見えたビシユムが続いて目にしたのは、激しく地表を削る音と土煙。何事かと煙の発生源と思われる先へと目を向けてた時には、校庭に頭を埋め、背中を2本の短刀で串刺しにされたバラオムの姿だった。

より速く、強くなっただけのバラオムがあんなにもあっさりと倒されてしまうとは…しかしビシユムは信彦の攻撃は自分へ絶対に到達出来ない位置にいるという自負から再び攻撃を再開する。全身から繰り出される光線技の嵐に、いくら姿を変えろが勝てるはずがないと。

「さあ死になさい！そして私たちの新たな力となる礎に——」

「残念だけど、それは叶わないわ」

ふと、ビシユムの耳に聞き覚えのない声が響く。地上から100メートル以上離れた空間で飛行する、自分の真上から。

月を背にし、大気を昇華するダイヤモンドダストを思わせる白銀の粒子を周囲に纏わせて浮かぶシャドームーンの姿があった。

「…ッ!？」

この空を制しているのは自分のはず。だが自分に向けて声を放った者はさらにその上から自分を見下ろしされていると、ビシユムは視線が合わせられる高さまで上昇し、自分が良く知る姿であるはずの、全くの別人を睨んだ。

シャドームーンの姿自体は変わらない。だが、その佇まいはビシユムの知る、自分達の支配者であった創世王を前にしても竦みもしない不遜な王としての威厳も、バラオムに見せた放漫な空気も感じさせない。

周囲に姿を変えて常に放たれていた自分への殺気もなく、それどころか仮面の下でこちらを憐れんでいる目を向けている事が分かる。

気に入らない。

なぜそのような目で見られないのかと、ビシユムは声色が完全に女

性のものとなり、赤色に輝く複眼となったシャドームーンへと物申した。

「何なのですかその目は…なぜそのような目で私を見るのですか！」

怒鳴り散らすビシユムへ、シャドームーンの『表』となった意思：キングストーンが語りだした。

「…ごめんなさい」

「…なんですって？」

「本来貴女やダロム達は、私達を手にした身勝手な王の都合によって生み出されてしまった。そして、自分の為ではなくゴルゴムの為と、長い年月を生き続けた」

「何を…何を言っているの!？」

ビシユムは知らない。今、彼女に言葉を送っている女性はゴルゴムという組織が生まれる以前から存在し、ビシユム達が大神官に至るまでの長い時間をずっと見続けていたのだと。

彼女が創世王の為に、大神官へとたどり着くためにどれだけの苦行を重ねてきたかも、その影に野心を秘めていたのかも理解している。それでも、キングストーンは彼女を責められない。

例え創世王の傍に立ち、権力を手に入れるという野望であってもそれが彼女にとって生きる希望であったのだから。ただ延命をする為だけに繰り返し返されてきた儀式に従い続けたビシユムを責める資格など、自分はない。

だが、今の彼女は違う。ただ己を満たす為に人を、同士である怪人を貪り続ける魔へと身を堕ちてしまった。

「だから…貴女を止めてみせる！」

「なにを分けの分からぬ事をツ!!」

理解の及ばない言葉の羅列に業を煮やしたビシユムは攻撃を再開。暴風と光線の嵐が標的へと迫るが、その全てを風に乗って舞う木の葉のような動きで回避されてしまう。

「何ッ!？」

その動きに驚きを隠せないビシユム。闇雲に攻撃を続けるビシユムには、自分の攻撃を避けられるのかという疑問だけしか浮かばず、そもそも何故飛行能力を持たないシャドームーンが宙に浮いていられたのかへと考えに至ることは無かった。

その代わりに、地上で戦いの状況を冷静に分析していたロアとダロムのみが、そのカラクリを見抜き、改めて世紀王の力を思い知る事となる。

「…ビシユムは気づかぬが、シャドームーンの周りに舞う光の粒子：あれは一粒一粒がキングストーンによって生み出された魔力の塊」
「それを足に纏わせることでさも浮いているように見せている。しかも世紀王が通る先々に粒子が集まってあのよう空中を滑っているかのような動きが可能、というところか。飛行でも浮遊でもなく、空を駆ける為の足場を作り出す物体を生み出すとは。全く…」

なんと恐ろしいと、ダロムとロアは同じ見解に至った。あの物体にはさらに様々な応用が可能であろうとも考え、現にシャドームーンの眼前で粒子が展開された事により、ビシユムの放った怪光線は泉に広がる波紋のように打ち消されてしまっている。

攻撃を弾かれ動揺するビシユムだが、所詮は回避と防御しかできないと思ひ込み、さらに攻撃を強める。もし、この時ビシユムが攻撃をしかける事ばかりに集中していなければ、背後に迫った狼の牙に気が付くことができたかも知れない。

「があッ!？」

突然肩へと走る激しい痛みを耐え切れず声を上げたビシユムは攻撃を止め、自身の肩へ牙を食い込ませる獣の姿に目を見開いてしまふ。

銀色の頭部に、首から下は半透明であるが間違いなく狼。だが、一体何処から現れたのかと考えるがビシユムだが、狼の噛みつきは一層に強まるばかりであり、ゼロ距離で怪光線を浴びせても怯みもしない。ついには流血まで始めた頃、視界へと移ったシャドームーンの姿を見てようやく狼の正体を知ることとなった。

(肩のプロテクターが左右で違う…!いえ、まさか…!)

ビシユムの勘は当たっており、その解答がまさに敵から打ち出されようとしていた。

「行きなさい!」

キングストーンの意味に答えるように狼の頭部を模したプロテクターが分離し、風を切りビシユム目がけて弾丸の如く飛んでいく。その途中、狼の瞳が強く輝くと同時に白い光が全身を包むと今ビシユムへ食いついている狼と同様の姿へと変化し、空を蹴って標的へと迫る。

「小癩な…ああああッ!？」

迫るもう一匹の狼を迎え討とうと口を大きく開くビシユムだったがそれよりも早く肩へと食いついていた狼が動きを見せていた。肩から離れ、より大きく開けた口からビシユムの耳へと響く狼の咆哮。発せられた叫びは超音波となりビシユムの鼓膜や三半規管へと達し飛行する身体のバランスを完全に狂わせてしまう。

そして空を駆ける狼は苦し悶えるビシユムの翼へと飛びつき、羽を食い破ってしまう。

「ああああああああ……！」

要の翼を千切られてたビシユムは校庭へと落下。巨大なクレーターの中央で翼をどうにか再生させようと意識を集中させるが、キングストーンはそのような時間を与えない。

遠隔操作で飛ばした狼達を呼び戻すと両腕のに装着された籠手の爪を収納。爪のあった箇所へ身体を再び消失させた狼の頭部が接続される。

両腕の狼を眼下でもがくビシユムへと向け、2つの口へ空中を待っていた白銀の粒子…キングストーンの魔力が収束されていく。そして胸部の狼の頭部を思わせる装甲も口を開くと同様に力をため込み始めた。

「ひい……！」

「これで、終わりにしましょう……！」

悲鳴を上げるビシユムを見てキングストーンが静かに呟いた直後、3つの口から発射されるエネルギーの束。狙いは乱れることなくクレーターの中心へと到達し、大爆発を起こした。

爆発を見届けたキングストーンは狼の頭部を再び両肩へと戻し、籠手から爪を出現させるとゆっくりと降下する。自らの意思で戦い、相手の命を奪った事に僅かながら戸惑いを見せながらも、ビシユムとの決着を付けたことに安堵するが鋭い指摘が彼女の意思へと届く。

(まだ終わっていないぞ！)

「え…？」

「ハッ…ハッ…ハッ…ハッ…」

信彦の意識が告げたように、燃え上がるクレーターから上半身のみとなったビシユムは片腕で身体を引きずり、離脱しようと蠢く姿を視界へ捉える。

（死ぬ…このままでは死徒とはいえ死んでしまう…！けど人間を、怪人を食べさせれば…）

ビシユムは自分へと迫る死への恐怖から再び人を喰らおうと学校外を目指す。幸いにも落下した場所は校門の付近であり、すぐ近くの民家など少なくとも人間は3、4人はいるはずだろう。

だが、ビシユムの進路上へ妨げるように立つ人物へ思わず顔を引き攣らせるが、その者の顔を確認した直後に緊張の糸が切れたように、安心しきった声を向ける。

「ああ…ダロム」

「……………」

自分の名を呼ぶビシユムの視線へと合わせるようにダロムは膝を付き、彼女を抱え起こした。蒸発してしまった下半身から血が流れ続けるビシユムは震える手でダロムの肩を掴み、今彼女が最も望むものをこの場へ用意するように願う。

「お願いします…生きの良い怪人などと贅沢はいいません。血を…人間の血を私に下さい。生きたい…私は生きたい…」

懇願する同志の姿にダロムはゆっくりと頷いて見せた。その様子に涙を流して喜びを見せるビシユムの耳へ、自分でも信じられないほどに冷酷な言葉が届いた。

「ビシユムよ…お前は死なん」

「永遠に私の中で生きるのだからな」

直後、ダロムの胸が真っ二つに割れると、肉体の内部から無数の触手が飛び出し、ビシユムの身体を拘束してしまう。ダロムの行動が自分をどうするつもりであるのかと瞬時に読み取ったビシユムは懸命に身体を揺らし抗うが、触手を振りほどくことが出来ず徐々に、徐々に、ダロムの割れた胸部へと引きずり込まれていく。

「ダロム！なぜ…何故なの!？」

「安心するがいい…お前を取り込む事で私の力はさらに高まる。バラオムと共に見届けるがいい…」

「…ッ!？」

不気味に歪むダロムの口元を見て、ビシユムは顔をバラオムが倒れているはずの地点へと向けるが、既にその姿はない。

つまり、ダロムはビシユムと信彦達が戦っている間に既に…

「おのれ…おのれダロム！」

「フハハハハ…！泣け！喚け！それが最高の味付けとなるであろう！」

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！」

響く断末魔と、肉と骨が噛み砕かれていく耳障りな音。

信彦の内側…精神世界でキングストーンは否応なく聞こえてしまう音に対して、目を閉じ、両手で耳を覆い目の前で起きた悪夢を必死で背ける。だが記憶に焼き付いてしまった。

憎い相手ではなかった。ただ、これ以上の非道を止めて欲しいためにと、戦ったつもりだった。

「どうして…あんな惨い事を…」

確かビシユムは同じ事を繰り返していたのかも知れない。それでも、あのような最期を迎えなければならぬとは限らなかったはずだ。

「仕方ねえんだ」

目に涙を溜める女性の肩を、黒い少年は優しく手を置くと、まるで本来の持ち主の感情に煽られているかのように周囲が緋色に染まっていく光景を目にする。

「アイツらは、吸血鬼に目を付けられた時点でこうなる決まりだったんだ。そう、納得するしかねえ」

「アンリ…」

「それに、こんな胸糞悪い喧嘩にケリを付けたいのは、何よりアイツが望んでることだしな」

「……………」

目元の涙を手で拭うキングストーンは、胸の前で手を組むと祈るように、身体の主導権を手にした本来の持ち主の勝利を祈る。どうか、あの者達を止めて欲しいと…

「信彦…」

「ダロム…」

緑色の複眼を光らせる信彦は、ビシユムを喰らい尽したダロムと相対する距離まで迫っていた。

「貴様は、あの時死んでおくべきだった」

どのような戦いが繰り広げられたのかは、信彦は知らない。ただ、宿敵とその仲間達が死闘の果てに倒した事は間違いないだろう。

その時に、信彦の知るダロム達大怪人は、死んだのだ。今日の前に

いるのは、その皮を被った外道に過ぎない。

「フン：何を言うか。私は貴様や真祖をも倒し、喰らう事で創世王を越え、新たなゴルゴムの伝説を作り上げるのだ！」

「伝説など、もう必要ない」

爪を光らせるシャドームーン・トリニティファングはゆっくりと構える。

「貴様の命も、ゴルゴムの歴史も、今ここで完全に潰える」

「それが俺の、世紀王としての最後の務めだ…！」

第60話

「はは、ハハハ…！まさか共食いとはな。このような事、18度も転生してきた中で初めてのケースだ！やはり人間と違い、別の生物が混じっているためか…」

同志であったバラオムとビシユムを喰らい、自らの力としたダロムの姿を校舎内から眺める吸血鬼は自身でも想定外の事に額を手で押さえ、笑い出した。

かつての同胞を食し、かつての主に反旗を翻す。それもこれも、自分が生き長らえる為…

なんて、なんて面白い。

此度の転生で怪人の死徒化などという気まぐれの結果で生まれたものが、とてつもない怪物を誕生させてしまった。この先、ダロムがどこまでの進化を遂げるのか…

眺めてはみたいが、恐らくあの化け物は今対峙している世紀王だけではなく、自分も狙ってくるであろう。この時ばかりは親である自分に逆らえぬよう枷を加えなかったのが悔やまれるが、城にいる限り自分に敗北はない。

それにと、未だ命を失った真祖の前から動けずにいる遠野志貴へと目を向ける。

(俺と同じ『死』を見るこいつを配下に置きさえすれば、一刺しで塵へと変えられるだろう。そうだ、俺は労する事なく全てを手に入れる…)

既に勝利は約束されている。最大の障害であったアルクエイドを自らの手で倒したロアには、もはや敵など存在しないと豪語するまで

にある。

だが、余韻に浸れない原因がただ一つだけ。

世紀王の存在だ。

『否定の術式』によって動けぬ状態で死の『点』を2度も突いたというのに、奴は生きている。志貴の場合は死の恐怖を味合わせるつもりで僅かに『点』をずらしていたが、世紀王は確実に点の中央に刃物を通したはず。

(もしや…世紀王の持つ玉石は死ぬという概念すら通じないモノなのか?)

そのような神秘が存在するならば、自分の手に収まるのが相応しいだろう。それに、どうやら心許している志貴を盾にすれば世紀王も容易に手を出せないはずだ。玉石を残し、自分の配下となった志貴に全身を解体させるというのもまた一興だろう…

僅かながらの不安があろうが、手札は全て自分の手にある。

そう強引に自分を納得させたロアは再び怪物同士の戦いへと目を向ける。

様々な思い違いをしているのだと、理解できないまま…

「ぬう、うおおおおおおおッ!!」

メキメキと音を立て、身体に亀裂を走らせるダロムの身体に異変が生じる。

白い甲羅を突き破り、翼竜の羽が現れ、さらに腰から肉食獣と思わせる足が生え、ギリシヤ神話に登場する半獣人ケンタウロスのような四足となった。

だがその前足は虫の節足を巨大化させ、特有の筋肉や産毛を生やしており、後ろ足は細ながらも力強く大地を蹴る肉食獣の特徴が現れた者だ。

そして顎が肉を裂きながら左右に分かれ、その下から信彦が嫌と言うほどに見覚えのある白く、皺だらけの顔が出現する。

大神官としてローブの下にあった、ダロムの顔だ。

「フハハハハハ……どうやらこれが私の完全な……いや、究極の姿となったのだ！私は大怪人を越え、超怪人ダロムとして生まれ変わったのだ！」

バラオムとビシユム。

2体の大怪人の力と特徴を吸収した超怪人ダロムは両腕のハサミを夜空へと掲げ、自分の内からみなぎる力に酔いしれるダロムは先ほどから自分の進化に声一つ漏らす事の出来ないシャドームーン……信彦を見下ろす。

「フフフ……私の力に恐れをなして声すら出なくなったか？」

「……………」

「ならば、一撃で終わりにしてくれるわあッ!!」

巨大な翼で羽ばたき、一瞬にして数十メートル上昇。そしてビシユムと同様に破壊光線の嵐で蹂躪する……

そんな都合の良い展開を思い浮かぶ前に、ダロムの翼は切り裂かれていたのだ。

「があ…!?!」

飛び散る鮮血と共に落下したダロムは倒れないように四足で踏みとどまるが翼を切断された痛みは消えない。翼の再生までには至らないが傷口を塞ぎながらも自分を襲った攻撃…間違いなく、数メートル先に立つシャドームーンから打ち出されたものだ。

バラオムと同じように、超速で接近。翼を攻撃して元の位置へと戻ったのか…否、そうであったのなら先ほど見せたように複眼の色が代わり、腕に装着された籠手が背中へと接続されていたはず…

だが、シャドームーンに変化はない。ダロムが超怪人と化した時と変わらず、身動き一つ見せていなのだ。

「ハア…ハア…ハア…」

「どうやらこちらを眺めている吸血鬼のように急激な再生はできないようだな」

「ッ!？」

息を荒げるダロムの耳に信彦の声が響くと同時に、右腕を振り上げる姿が黒い眼球へと映し出される、爪へ緑色の光を纏わせた信彦が勢いを付けて腕を振り下ろした直後、3つの真空波が風を切り、ダロムへと迫った。

「ぬおおッ!!」

身体を横へと転がし、回避行動をとったダロムが数秒前に膝を付いていた場所には、獣の爪によって抉れたような痕が3つも刻まれている。これが翼を切り刻んだ攻撃の正体だと悟ったダロムへ信彦は既

に10を超える真空波を繰り出した。

「舐めるなァッ!!」

真空波が目前へと迫ったダロムは地を蹴り、高速で移動を開始。目標を失った真空波は直進し、数十メートル先に位置する体育倉庫へと直撃。建物本体や中に備えられていた用具を切り刻み、吹き飛ばしてしまうがロアの城の領域にあった為か、即時に再生を始めている。

「…今度はバラオムの真似事か」

自分の周囲…目を凝らせなければ分からないが僅かに地面を掠れ、土が弾けている。それも左右前後、法則もなく敢えて音を発生させこちらを混乱させる魂胆なのだろう。

「そうして自分の場所を誤認させ、死角からの不意打ちを狙っているのだろうか…無駄なあがきだ」

両手の爪に雷を纏わせた信彦はその先端を大地へと突き立てる。次の瞬間、信彦の周囲一帯の地面に緑色の雷が走り、地表を焦がし始めた。

「がああああああああつあああッ!?!」

雷を収束させ、爪を引き抜いた信彦が振り返った先では、全身を焦がし、煙を上げるダロムが身体をガクガクと痙攣させる姿。どうにか立ち上がろうと腕に力を込めるが、腕が痺れ力が入らないダロムが顔を上へと向けると、そこに立つのは自分を見下ろすシャドームーンが無情にも喉元へ爪を突き立てている。

「シャドームーン…様…」

「貴様にその名で呼ばれる筋合いなど――」

腕を引き、ダロムの額へと狙いを定めた信彦はダロムの縋るような声など聞き入れず、

「とうに無い」

振り下ろされた爪がダロムの額を貫くまであと数センチ——。そこで爪の動きが止まってしまった。

いや、爪だけではない。腕も、足も、まるで身動きが取れないのだ。

「これは…」

「クククク…どうやら忘れていたようだな…私が最も得意とする念動力を！」

白く不気味な口元をさらに醜く引き攣らせたダロムは立ち上がった。どうやら雷によるダメージは既に回復していたらしく、逆に信彦を見下ろすと額の触覚を鞭のように振るい信彦へと叩き付ける。

「っ！」

「フハハハハッ!!どうだ動けまい!さらに強化された私の念動力により、貴様是指一本動かすことができないのだ!」

信彦の首と胴体を縛り、持ち上げると高笑いとともに地面へと叩き付ける。土埃の下で未だ身動きが出来ない信彦の背中をダロムは一方的に叩き、叩き、叩き続けた。

無防備の敵を一方的に攻め立てるという快感に酔いしれるダロムは気づかない。攻撃を受け続ける信彦が驚きはしたものの、一切苦悶に満ちた声を上げていない事に。

その緑色の複眼が、より強い光を放っていることに。

「さあ、次はどうしてくれようか。触手で貫かれないか？ハサミで身体中の骨を粉々に砕いてくれようか？」

「一つ、忠告しておくぞダロム」
「なに？」

冷や水を被されたかのように高揚した気分がそがれたダロムは、自分の攻撃を受けながら声色一つ変えない信彦の言葉に思わず返してしまう。

「俺が動けなくなった時点で、貴様は止めを刺すべきだった」

「そうすれば、『奴ら』が到着する前に決着がついていたのかも知れん」

何を言っている——信彦へそう反論しようと口を開きかけたダロムだったが、発することが出来なかった。

突然自分を横切った奇声と、額の触覚を切断された痛みによって。

「ケケエエエエ——ッ!!」

数分前

バイクを校門の前で停車させた2人の仮面ライダー、筑波洋とアマゾン。校庭で繰り広げられていた戦いに思わず声を漏らしていた。

「あれは…月影くん、なのか？」

「ガウ…間違いない、ノブヒコ達だ！」

スカイターボの後部から飛び降りたアマゾンは確信を持って校庭の中央に立つシャドームーン・トリニティファングの姿を見て頷いて見せた。

洋も以前見た時とは形状が異なる部分が多いが、月影信彦が変身した姿であるのはわかる。しかし、初見で彼が信彦であると断言できるこの先輩は、やはりすごい人であると感じる半面、どうして彼1人のはずなのに複数形で呼ぶのであろうという疑問も残るが、洋に質問する時間が許されないようだ。

「なんだ…今度は月影くんが一方的に…くッ！」

「入ってはダメだッ！」

急ぎ手助けしようと校門を潜ろうとした洋だったが、アマゾンに制される。なぜ止めるのかと尋ねようとしたが、自分が校門へ近づこうとした瞬間、地面に小型の魔法陣が無数に出現した光景に、数時間前に自分がどのような目にあつたかを嫌でも思い出してしまう。

吸血鬼によって仕掛けられた魔法陣により、自分と信彦はまるで身体が鉛のように重くなり、一步も動くことが出来なかった。

これでは例え飛行しようが、敵の術中に嵌ってしまう。どうすれば、と考えた洋は同じ状況の中で唯一自由に動けた者へと目を向ける。

どうやら考えは同じようであり、視線を交わした途端にアマゾンは頷いて見せる。

敵は動けない信彦に止めを刺さんとしている。今からアマゾンが走るので間に合わない。

ならば、間に合う方法でアマゾンに向かわせるだけだ。

「先輩ッ!!」

「わかったッ!!」

後輩の合図にその場を飛び上がったアマゾンは洋の頭上へと落下。アマゾンを受け止めた洋は身体を僅かながら浮かせつつ、高速で旋回を始めた。

回転の速度は留まる事をせず、見様によっては道路のど真ん中で竜巻が発生しているのだろう。

これが彼、筑波洋が長い闘いの中で生み出した99の技の一つ――

「竹とんぼシュートッ!!」

洋の手を離れたアマゾンは打ち出された大砲の如くダロムへと飛んでいき、腕のアームカッターを前へと翳す。

「ケケエエエエ――ッ!!」

目標に狂いなく、敵の触覚を切断することに成功したのであった。

「ぬ…才おおおおおおおッ!?!」

思いもよらない相手の出現と攻撃の痛みに集中力を完全に乱してしまったダロムは額を抑え絶叫する。そして、信彦の動きを封じてい

た念動力も解除される結果となった。

その隙を信彦と、着地したアマゾンには逃さない。

「はあッ!!」

「ケエッ!!」

気合いと共に繰り出された2人の攻撃。アマゾンは振り上げたアームカッターでダロムのハサミごと右腕を、信彦の振り下ろした両腕の爪で前足2本を完全に切断。

鮮血をまき散らしながらダロムは大地へと沈む。

「があッ!?お、おのれい……!」

「こんどこそ最後だ、ダロム」

「き、貴様…今になって私を倒し、正義の味方を気取るつもりかッ!?そんなことで、貴様の罪は消えるとも思っているのかッ!!」

「……………」

ダロムの放つ問答。

信彦が旅の中で、次々と耳にした拒絶と、未だ晴れないゴルゴムによる深い業。その中で目的を失っていた信彦の心は摩耗し、己の死に場所を当てもなく彷徨っていた。

現実には信彦は真祖の姫と接触した際に敢えて反撃をせず、死を待ち続けるだけであった。

自分という存在を呪い、自分の力を畏怖し、自分を恨む者に殺される事を望んだ哀れな王。

だが、それはこの街へとたどり着く前の話だ。

「そうして、俺が動揺すると狙ってのことか？」
「…っ!？」

凶星を突かれたダロムは唯一残った手段…ビシウムやバラオムのように、胸部から無数の触手を解き放ち信彦を取り込もうと企んでいたが、完全に見切られていたようだ。

「だが、貴様の言う事は最もだ。俺は世界を滅ぼしかけたゴルゴムの王であり、王でありながら自身の存在を否定している、あの英霊が言った通り、キングストーンを収めるための『器』にしか過ぎなかっただろう」

初対面で既に自分という存在のあり方を見抜いていた黄金の英雄王。奴はどこまで見越して、あの言葉を向けたのだろうか。

あの時はただ敵対した者の戯言だと笑い飛ばせただろうが、今なら言い返せる。

奴の言った事は正しくもあり、間違っているのだと。

「だがな」

「俺が器であろうが、忌むべき力を持っていようが、これが俺自身であることに変わりない」

「ならばこの力は存分に振るおう。貴様のように命を、尊厳を蹂躪する外道共にな」

信彦の放った言葉を聞いた2人の戦士は、仮面の下で優しく微笑んだ。

性格的には、決して正義の為と口にはしないだろう。

だが、彼は言った。言ってくれた。

それは十分過ぎるほどに誰かの為に戦うのだと。

「ぎ、さ、まああああああッ!!!」

最後のあがきなのだろうか。残る後ろ脚で立ち上がったダロムは唯一の武器となった左腕のハサミを巨大化させ、信彦を切り裂こうと迫る。

「神聖なるゴルゴムの力をッ!!!世界の王として貴様にその力を与えた我らに対してなんたる——」

「そうだ。これは、俺から全てを奪った貴様たちへの、俺の復讐でもある」

両腕の爪を摩擦させ、飛び散った緑色の火花が弾ける。

火花は次第に肥大し、巨大な光玉となると爆せ、無数の光の鎖と
なつてダロムを縛る。

トリニティファンクとなつた信彦が放つシャドービームの変形に
より拘束されたダロムに対して、信彦は腕を左右に展開。籠手をベル
トの左右へと当てると中央のエナジーリアクターが強く発光する。

右腕をベルトに添えたまま、左腕を前方へと突き出した構えから両
腕を左側に大きく振るい、左腕を腰に、右腕を左頬の前へと移動。

右手首の角度を変え、ジャキンツと爪と籠手による摩擦音を立て、
その場から高く跳躍する。

「貴様たちゴルゴムがかつて夢見た世界征服という野望。自分達が認
めた者以外は抹殺するという非道。俺は、それとは真逆の為にこの力
を役とする」

満月を背景に浮遊する信彦は身体を屈め、両足を前方へと突き出し
た状態で拘束したダロムへと落下する。

「それが俺の、貴様達に対する——」

「最大の復讐だツ!!!」

咆哮する信彦の両足へ光が宿り、やがて全身を包んでいく。

それは口を大きく開けた狼の頭部を思わせるオーラを纏い、信彦：
シャドームーン・トリニティファングの必殺技が放たれた。

シャドーフアングキック

進化した信彦のキックを受けたダロムは光の鎖を引きちぎりながら後方へと吹き飛び、校庭に身体が接触した途端に二転、三転と転がっていく。

ようやく動きが止まった時には身体のあちこちで小規模の爆発を起こしている。それでも、身体を震わせながらも立ち上がって見せた。

「ば、馬鹿な…この私が…数千、数万年生きたこの私が…吸血鬼となったこの、私ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

着地した信彦が踵を返したと同時に、燻ったエネルギーが火種となった事によりダロムは大爆発の中に消えるのであった。

夜空へと立ち昇る煙を背にする信彦は通常のシャドームーンへと戻り、今の今までこちらを傍観していた者へと目を向ける。

目があつた途端に焦りを見せる様子から、どうやらロアは自分とい

うイレギュラーに対しての対策は練っていないなかつたと読み取った信彦は戦いの最中でありながら読み取った『城』の領域へと踏み込んだ。

「随分と表情が変化していたようだな、吸血鬼」

「なっ——!!」

ロアは思わず後ずさる。

なぜ、校庭にいたはずの世紀王が、この渡り廊下の…自分と志貴、アルクエイドの間に立っている？

この城の中では自分以外に転移魔術など使用できないはず。考えられるとしたら…

「まさか、城の式を…!」

「さすがに壊すまでには至らなかつたが、読み取り、『通路』を作る程度なら簡単だ」

なんて奴だ…ただキングストーンの力だけでなく、こちらの魔術すら把握し、利用するなど反則にも程がある。

だが、この式は破壊できないと自ら公言したからには、まだ勝機がある。それに、自分には『死』を読み取れるという無敵の力があるのだ。それさえあればとナイフを握る力を込めるロアに対し、信彦は右

手にシャドーセイバーを顕現させる。

一刀の元に伏せようと金属を打ち付ける足音を一度鳴らした時、背後からそれまで呼吸をしていたかも怪しい人物から声をかけられた。

「待ってください、月影さん」

「そいつとは、俺が戦います」

立ち上がった遠野志貴が、ナイフを構える姿があった。

第61話

(いいのかねえ、あの少年に任せて)

「不服か？」

(いやいや。あれじゃ戦う以前の問題じゃん?)

(ええ…アンリの言う通りかもしれない。いいの、信彦?)

「……………」

シャドームーンの主人格となった月影信彦は自身の内側から呼びかけるアンリマユとキングストーンの意見を聞きながらも、覚束ない足並みで吸血鬼ロアに向かう遠野志貴の背中を見る。

自分がロアと戦う。

そう言った少年の目を見た信彦は手にしたシャドーセイバーを消失させると金属を打ち付けるような足音を立て、ロアに背を向ける。彼の行動をまるで理解できず、驚愕に染まったロアの表情にまるで興味を示さない信彦は志貴とすれ違う間際に、声を交わす。

「アルクエイドを、頼みます」

「…いいだろう」

既に真祖の姫の命はとうに尽きている。そんな事は志貴も、信彦も十分に承知している現実であった。しかし、彼女は既に死んでいたとしても志貴は彼女に戦いの余波が及ぶことを良しとせず、信彦も志貴の願いをくみ取り、安らかな表情のまま眠るアルクエイドの前へと立つ。

これから起きる戦いから、アルクエイドを庇うかのように。

(ありがとうございます、月影さん)

そして振り向かなくても、自分の願いを聞き入れてくれた不愛想な知人の行動が読み取れた志貴は心の中で感謝を述べると表情を引き締め、逆手に持った短刀を前方に立つ敵へと向ける。

あと一つ、奴にはつきりさせるべき事がある。それを知れば、もう…殺すだけだ。

「は、ハハハ…ハハハハハッ!!正気が世紀王?そんな死にかけの人間に私の相手をさせ、自分は高見の見物を決め込むというのか?」

「……………」

「酷い話じゃないか。なあ志貴?あれだけの力を振るえるというのにもはや武器を構えるのがやつとのお前を、見捨てるつもりらしいぞ?」

信彦が志貴の要望通りに剣を収め、アルクエイドの元へと移動する姿に拍子抜け…いや、安堵からきたものなのだろう。盛大に笑うロアは信彦が渡り廊下に現れた直後に頬を通過した汗を拭う。自分の想像を超えた進化を果たした怪人を一撃で粉碎した文字通りの怪物など相手が悪すぎる。それに引き換え、自分と同じく『死』を視る力を持つているとしても、遠野志貴は所詮人間止まり…吸血鬼である自分に敵うはずなど、ありえないのだ。

事実、こうして掌から放った魔力弾を足元へ着弾させた際の余波で、志貴はだらしもなく膝を付いている。

「…っ!」

「そろそろどうした？こんなもの、指で弾く程度の力だぞ、志貴？」

志貴が立つ位置から僅かに離れた廊下や壁に向けて魔力の雷が衝突し、衝突した爆発で横殴りを受けたような衝撃に見舞われる。ロアの攻撃で削られた箇所はビデオの逆再生された映像のように傷一つ残らない状態へと戻り、志貴だけがダメージを残したまま立ち尽くしていた。

ダラリと両腕を下げたまま立つ志貴の姿に口を釣り上げるロアは、後方で腕を組み、彼の背中を黙したまま見つめる信彦へと告げる。

「どうだ世紀王？これでもお前は傍観に徹するつもりなのか？」

「……………」

「随分と冷たいじゃあないか。あれ程心許したというのに、その姿を見てもお前を未だ人の名で呼ぶというのに……このような希少種、そうは現れないぞ？」

攻撃をしかける素振りすら見せない姿を見て、余計な言葉まで口走る吸血鬼に対し、信彦の反応は淡々としたものであった。

「……お前たち吸血鬼という輩は、戦いの最中に口を開くことが余程好きだよだな」

「なんだと……？」

「いや、それとも己の優位性を語り続けなければ戦う事もできないのかも知れぬな。ダロム達のように」

「き、貴様……！」

呆れ半分と言うべきか。先の戦闘で散々聞かされていた戦う相手を見下し、自分が如何に優れているかという自慢話に嫌気を見せる信彦へ、思いもしなかった反撃に犬歯をむき出しにするロアであるが、振り返り討ちとなることを重々承知しているために手を出すことができない。

さらに信彦の内側では援護射撃が続いていた。

(そうよ信彦！もつと言ってやりなさい!!)

(なんなら俺が止めを決めちゃってもいいかい？湯でタコみたいになり真っ赤になって心へし折る強烈な奴！)

「黙ってろ貴様ら」

キングストーンとアンリマユの声援をピシヤリと遮った信彦はビキビキと顔中に血管を浮かべるロアに対し、自分はこの場から動くつもりはないと改めて宣言する。

「先ほど言った通りだ吸血鬼。俺は志貴とお前の戦いが終わるまでは、お前に手出しするつもりはない」

「…ちっ」

はつきりと告げた信彦の言葉に舌打ちしたロアは先に片づけなければならぬ標的へと目を向ける。既に死に体であるにも関わらず倒れずに、自分へと迫る志貴は自分と同じ眼を向ける。

ロアは自身と同じ能力を持つ志貴を支配下に置き、手駒として利用するつもりだったが状況が悪すぎると判断し、志貴を殺害した上でこの場から逃げ出す算段を組み立て始める。

先ほど信彦が見せた通り、この学校全体に広がる術式を通路とし、目の届かない場所へと転移すればいいだけの話だ。表にいる仮面ライダー達の位置も概ね把握しているロアには死角などない。

そうと決まれば後は実行するのみ。ロアは掌に魔力を凝縮させ、志貴を燃やし尽くそうとその手を向けるが、その寸前に飛びだした志貴の声に思わず目を丸くしてしまう。

「なぜ、アルクエイドを殺した」

「……………」

「お前の狙いは…アルクエイドを自分のものにするつもりだったんだろう…なぜ殺したんだ」

何度も転生し、彼女の前に現れたのも、ロアはアルクエイドの事を…そう考えていた志貴の思考は、ロアの返答に凍りついてしまった。

「ああそうだな…だがな志貴。私が手に入れたかったのは…対面したかったのは完璧であり、永遠の存在である姫君だ」

「あのように墮落し、無駄なものを取り込み過ぎたものではない」

無駄な…もの？

「星の触覚であるはずの真祖が人間側に寄り過ぎた…そして unnecessary 感情を持つようになった。そんな一介の吸血鬼にすら劣る真祖など、生かす価値はない」

「ゆえに、処分してやったのだ」

無駄なもの…志貴が知るアルクエイドはこれまで経験の無かった、自分達人間にとっては当たり前前すぎる事一つ一つに驚き、感動していた。

嬉しい、楽しいという感情は真祖の処刑人として生まれたアルクエイドにとっては、確かに無駄なものだったのかもしれない。

だが、志貴は認めない。

無駄だと吸血鬼が言い放ったアルクエイドが得た経験は、決して無駄なものではないのだと。

「さあ、質問には答えてやったのだ。そろそろ死んでくれ」

自分をいたぶるかのように放たれる魔力の雷に肩が貫かれ、足は焼かれる。

痛みは感じるが、それは身体を刻まれ、神経が悲鳴を上げているからではない。

時間の経過と共に、より色濃くなる『線』と『点』に世界が覆われている。頭痛は止まらない。

廊下や壁にはもはや濁流のような線が走る。頭痛は止まらない。

天井は触れるだけで今にも崩れしまいそう。頭痛は止まらない。

奴の放つ魔術にすら見えてしまう、点と線。

頭痛は、止まらない——

「な……」

ロアが放ったのは、魔力を凝縮したバスケットボール程の大きさを持つ魔力弾だった。これを受ければ、志貴の身体から全身の血が沸騰し、神経を焼き切った後に絶命する威力を誇っていたはずだ。だが、その魔力弾が消えた。

弾かれたのでもなく、防がれたのでもなく、文字通り消えたのだ。

「…何をした？」

立て続けに廊下を魔力の雷が幾つも駆けていく。結果は魔力弾と変わらず、志貴の前に到達する前にかき消されてしまう。

城の術式は解除されていない。だというのに、なぜ魔力が消えてしまおう？

「教会の女か？それとも、真祖から概念武装でも施されたかつ!？」

乱雑に放たれる魔力は消える。消えてなくなる。

不可思議な現象に焦りを見せるロアに足を引きずりながらも一步步つ前進する志貴はボソリと、当たり前のように呟く。

「…殺したんだ」

「死を視ているお前にも、理解できるだろう。お前の出した魔力の『点』に、刃を通しただけだ」

志貴の余りにも無知に等しい説明に高笑いするロアは否定した。自分でも分からないに程に、必死に彼の言葉を、全力で否定した。

「は、ハハハハハ…！何を言うかと思えば…いいか志貴？生きていなければ命はない！命の源である箇所は生物でなければ持ちえない！そんな戯れ言を鵜呑みにするとも思ったのか!？」

ロアの咆哮に志貴はようやく自分が抱いていた違和感の正体をする。ようやく、あの吸血鬼との違いを理解できた志貴は蒼く輝く瞳を吸血鬼へと向け、口を開いた。

「合点がいったよ吸血鬼…俺とお前とでは、視ているものが違うんだ」
「な、に？」

「お前はただ命を…人を生かしている部分を視ているだけだ」

志貴の説明に、離れて様子を伺っていた信彦もやはりな、と顎を手に当て納得したような動作を見せる。

（オイオイどういうこつちやよ信彦君！俺にも分かるように説明しておくれ！）

「五月蠅いぞアヴェンジャー」

（呼び方!?呼び方が戻ってんじゃん!?!）

（信彦：私からもお願い。彼と、吸血鬼は同じ直死の魔眼を持っているのではないの?）

信彦の冷たい応答に納得のいかないアンリマユに続き、キングストーンも志貴や信彦が何故、納得できたのかを知るためにも尋ねる。隣でしゃがみこんで指先で『の』の字を書き続けるアンリマユと違い、キングストーンは赤い瞳で真っすぐに見つめて信彦の反応を待つ姿に、信彦は一度溜息を付いて説明を始めた。

「…何よりの証拠は、お前たち2人が生きていることだ。もし志貴と同じ魔眼で貫かれていたのならお前達はもちろん、俺もとうにこの世にいない」

それが、同じ対象の殺すことでも、全く異なる結果を出す2人の眼の違いだ。

一度目に信彦がロアに刺された際はキングストーンのエネルギーがほぼゼロの状態となったが徐々に回復し、現在のように変身や戦闘も可能な状態となっている。

二度目：魂であるアンリマユが貫かれた際も彼の存在させる力がゼロとなった事で信彦との意思疎通ができない状態へと陥ったが、消滅までは至っておらず、キングストーンと信彦の意思が共鳴した際に発生した膨大なエネルギーによって回復した。

(じゃあ…)

「奴が突いたのは、『死』ではなかったということだ」

(でもよ、敵さんはあの性格だぜ？わざと点をずらしたってのも考えられるんじゃない？)

「あの性格だからこそだ。奴は自分の目的以外は徹底的に排他する姿勢が見られた。だからこそ、俺達を動けなくする術式を組み立て…確実の点を突くための舞台を用意した」

復活したアンリマユの問いに分析した敵の心理を元にロアの性格を見抜いた信彦は、自分達を消すつもりで点をついたと確信している。だからこそ、ロアは怯え始めているのだ。

自分が視ているものとは、まったく別の世界を視つづけていた志貴の眼を。

「…お前は、死を理解なんてしていない。だから俺や月影さんを殺せず…弱り切った女しか殺せない」

「黙れッ！」

先ほどとは比べものにならない程の魔力の渦。消されてしまうのであれば、対応できぬ程の魔力を叩き込むという戦法に出たロアであるが、焦りはより強まっている。

「まだだ…まだまだまだだ!! 死ね、死ねッ! 死ネッ!!!」

魔力ならまだ無尽蔵にある。このまま打ち続ければ、志貴の身体は微塵も残さず消すことができるはずだ…だからこそ打ち続ける。もはや世紀王や退路などどうでもいい。あの眼で自分を視る人間を殺しさえすれば…

だが、魔力は再びかき消された。

そしてロアの放った攻撃魔力が消滅したと同時に廊下や壁、天井に駆ける大きな亀裂。その亀裂は再生されることなく深く、くつきりと痛々しく残っていた。

ありえない現象を目の当たりにしたロアは必至になって否定する。絶対に起きてはいけない術式の崩壊が、まさに起こってしまったのだから。

「莫…迦な！術式が、消えただど!? 一度発動すれば解除は不可能のはずだッ!!」

パラパラと天井から落ちる粉末の音に紛れて響く、小さく、だが確かに存在する何者かの靴音。

静かに、静かに音を立てて歩み寄るその者の眼は、額から流れる血で濡らしても、蒼いままであった。

「――死を視ているのなら、とても正気でいられない」

「地面なんて無いに等しいし、空はいつ落ちてくるかもわからない」

「物事の死を視ているということは、いかに世界があやふやで脆いという事実を突きつけられているという事だ」

「一秒先の世界がすべて死んでしまうかもしれないという錯覚を、お前は知らない」

「それが、死を視るという事なんだ」

あの教会の女はこう例えていた。

今代のロアは車で言えばエンジンを動かすためのガソリンを丸ごと消してしまう能力を持つと。確かに車を動かすためのエネルギー

がゼロになった時点で、それは死と言えなくもない。

だが、志貴の眼はガソリンどころか、そのエンジンを殺す。

壊すのではなく、殺すのだ。

同じようでも、結果はまるで違う世界を視る目。

命と死。

それが、2人の最大の違いだった。

「み、見るな…私をその眼で視るなッ!!」

接近する志貴に対し、ロアの表情が恐怖に染まる。口元は笑いながらも目の焦点が合わず、足は無意識に、後方へと動き始めていた。

だが、志貴は吸血鬼^敵の言葉など、聞くつもりはない。逃がすつもりも、ない。

「いいか吸血鬼——」

「これがモノを『殺す』っていうことだ」

膝を着き、廊下のある1点に突き立てられた志貴の短刀。

そこは、廊下全体に『線』を張り巡らせる大きな『点』の中央だった。

瞬間、鉄筋コンクリート製地上4階に位置するはずの渡り廊下は脆くも崩れ去り、廊下を足場に使っていた志貴とロアは破碎された破片と共に地上へと落下する。

「こ、こんなことが…！」

背中から落下するロアの視界に映る建物であったものの多くの破片と、それを足場に跳躍し、こちらへと迫る志貴の姿。

苦し紛れに放つ魔力を打ち消して迫る姿に、ロアは思わず口走ってしまった。

「ば、化け物…！」

人間相手に、化け物^{吸血鬼}であるロアが、そう口にしてしまった。

(…恐ろしくないだろう。お前が何度も通り、馴染んだ^死道だ)

(違う所があるとすれば、一つだけ…)

ロアの胸に、点に、志貴の握った短刀の刃が突き刺さる。

(今度はもう、帰ってこられない)

地響きを立て、2つの校舎を繋ぐ渡り廊下は、完全に崩れ去ってしまった。

(う…)

ズキズキと走る頭痛で意識を取り戻した志貴はゆっくりと目を開く。どうやら破片に押しつぶされる事なく、生きていられるような落下をしたらしい。

だが、どの道自分は終わるだろうという事も悟っていた。

(死を、視すぎたか)

アルクエイドから以前に無理をして死を視ない様に忠告を受けていた。生物どころか無機物の死を理解しようとするれば、脳に大きな負担が掛かり、使い物にならなくなると。

だが忠告を無視して無機物どころか、『存在』の死すら見ようとした

のだ。

これでは、身体が無事でも脳がダメになる可能性も高い。

(でも、結局こうなるなら…もっと早くロアを倒すんだった)

そうすれば…アルクエイドには別の未来が――

「あ、あ、ああアアアアアアアアッ!？」

突然耳に響く奇声へ、その発生源であろう方向へと顔を向ける志貴。未だ色濃く『死』を視てしまう彼の目は、驚きの余りに大きく見開いていた。

「お、前…まだ…!」

「キキキエル消江ル私ガ消絵る」

下半身を失い、片腕を失い、もはや理性すらも残っているかも怪しい声を上げて迫るロアの身体から、僅かながらに鱗粉のようなものが浮き始めている。恐らく他の吸血鬼と同じように身体が灰となっているのだろうが、それでも動き続けている。

なんという、生への執念。

「く、そ…身体が、動かない…」

このままでロアが消えるより先に自分が殺されてしまうと察した志貴であったが、現状では対処できる武器おろか、指一本動くこともできない。

「私ハ消えナイ 私トお前は繋がってイル!」

「あぐっ……！」

「ソウすれ ば マダ……！」

ついに足を掴まれてしまった志貴は、身体が消えかけている自身の意思を移そうとするロアが自分の顔に向けて伸ばす指を見る。もし、掴まれてしまったら自分は、ロアになつてしまうのか。

「こ、の……」

「無駄 だ も う助けな ド——」

ロアの指先があと数ミリで志貴の額へと届く直前だった。

「ギイツ!？」

突如ロアの動きが止まったと思えば、ゆつくりとロアの身体が持ち上がっていく姿に志貴は、ロアから自分の窮地を救ってくれた銀と黒の装甲を纏った者の名を力なく口にする。

「月影……さん……」

ロアの頭部を掴み、つるし上げる信彦へ消えかけながらも敵意を消すことのない吸血鬼はもはや理解もできない言葉を放ち続けるが、信彦はそれでも律儀にも答えるのであった。

「世紀 王!? 私 のっ邪 魔 ヲす るな」

「言っただろう。お前と志貴の戦いが終わるまで、俺は手出しをしな

いと。だが…終われば話は別だ」

「が、ガガガアアアアアッ!？」

ロアの全身に走る緑色の閃光。本来ならばこれで蒸発させるつもりでいた信彦であったが、電撃を中断させると無造作にロアを背後へと放り投げる。

「安心しろ。俺は止めは刺さん」

「——そう、俺はな」

放物線を描いて落下するロアは地面へと衝突することは無かった。

ロアが落ちるであろう位置に、これまで身を潜めていたものが立っていた。彼女はこの機会をずっと、数十年以上待ち続けていたのだから。

「ガあッ!？」

うめき声を上げるロアの胸から生える鉄の杭。

ロアの背中から巨大な武器：転生批判の概念を持つ概念武装『第七聖典』で貫いたシエルは標的を捉えた瞬間、迷いなくその力を解き放つ。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

上空に向けて放たれる衝撃は夜空を駆け、第七聖典に囚われていたロアの姿は、断末魔の声とともに完全に消失していた。

第七聖典を振り下ろしたシエル：志貴の知るカソックとは異なる衣装に身を纏った彼女は学校で見せた優しい微笑みを、志貴へと向ける。

「はい、これであの人を殺したのは『私たち』です」

「え…先輩、何を言ってる」

「ですから、ロアを殺したのは私とそこの銀色の人なんです。どんな人でも、殺人はいけませんよ？遠野くんは『こちら側』に来てはいけません！」

ちやつかりと自分を巻き込んでいるシエルに何も言わないまま信彦は踵を返し、離れて行く。その手から僅かながら緑色に輝く粒子を放ち、志貴の血で汚れた眼に届くように仕向けて。

（なんだかな〜最後に出てきて美味しいトコ持つてくのはなんだかな〜）

（いいじゃない。彼女にも色々あったようだし…）

「そうだ、誰が止めを刺そうが問題ではない」

「それに…まだ面倒事が残っている」

後頭部へ優しく手を添え、介抱するシエルへ志貴は彼等の言い分に笑いながらも皮肉を口にした。

「先輩…それ、詭弁だよ」

「はい、そうですよね」

否定しないシエルはそれでもと繋げる。

「たとえ詭弁でも何となく救いがありそうじゃないですか」

困ったように浮かべる笑みが、言葉が、彼女に少し似ていた。

『私ね、もしもって話は好きだよ？』

『たとえ詭弁だったとしても、どこかに救いがあるみたい——』

「…そうだね」

「なんとなく…どこかに救いが残されているのなら——」

それは、どんなに幸せなことだろう…

もう手の届かない彼女の姿を浮かべて、志貴は意識はゆつくりと失うのであった。

第62話

「いってらっしゃいませ、志貴様」

そう言つて一礼し、再び頭を上げる使用人の顔を見た遠野志貴は、頷いて返事を返す。

「うん。行つてくるよ、翡翠」

玄関先まで見送られることに最初は気恥ずかしいものがあつたが、今ではこうして登校前に彼女の送迎が当たり前前と思ひ始めているあたり、慣れつて怖いなど考える志貴は学生鞆を握りなおして一路学校へと向かうのであつた。

「志貴様…」

「ウフフフ〜今朝もお勤めご苦労様ですね〜翡翠ちゃん」

段々と小さくなる志貴の背中を見送る翡翠の背後に現れた彼女の双子の姉、琥珀は口元を手で抑えながらからかうように耳元で囁く。が、姉の出現に特に驚く様子を見せない翡翠は表情を変えないまま今朝から志貴の起床に始まり朝食・出発までいつも通りである事を自身に確認させるように呟いた。

「今日もいつも通り、でした」

「…うん、秋葉様から逃げるように食卓を立ち去るまでもが、いつも通りでしたね」

自分が現れた事への反応が薄い事に若干の寂しさを感じながらも、翡翠の言葉に同意を見せる琥珀の余計な一言に、さらなる人物が反応する事となる。

「誰が、誰から逃げたというのかしら…」

聞こえるはずもないのにズシン…という重々しい足音が聞こえてしまった2人が振り返ると、背後には腕組みをして面白くないという表情を隠そうともしない遠野秋葉が目を細め、使用人二人へと迫っていたではないか。

「…琥珀。下らない憶測を口にしてている暇があるのならさっさと仕事に戻りなさい」

「え、ええ…私だけですか？それなら翡翠ちゃんも…って翡翠ちゃんがないッ!？」

慌てて見渡してみれば、纏ったメイド服をはためかせる事無く、真つすぐと伸びた姿勢のまま早歩きで屋敷の中へと戻る妹の姿に琥珀は驚愕する。まさか翡翠に見捨てられる日が来るとはお姉ちゃん悲しい…と、目頭を押さええヨヨコとワザとらしい泣き真似をする琥珀の姿に目頭を押さええる秋葉は殿下の宝刀を突きつける。

「琥珀…これ以上下らない事に時間を割くようであれば、貴方の部屋にある怪しげな薬、全て処分するわよ？」

「ええッ!？」

「それが嫌だったら今すぐに仕事を…」

「宜しいんですか？もうすぐ秋葉様がお望みするような成長促進剤が完成するというのに…？」

「なっ…!？」

「はあ、残念ですね…これさえあればあのお方もイチコロだったはずでしたのに…」

涙目から反転、何か良からぬ事を企んでいる濁った瞳へと目の色を変えた琥珀の発言に、両手で胸を覆う秋葉は慌てるように口を捲し立てる。

「よ、余計なお世話よツ!!放っておけば大きくなるんだし、それに兄さんはそんな事で判断するような人じゃ……!」

「おやおや〜?私は秋葉様の可愛らしい胸囲や志貴さんの名は一言も口にしておりませんが……?」

「っ……!?!」

迂闊。またもや琥珀の口車に乗っていらぬ事を口走ってしまったと手で口を押える秋葉であったが時既に遅し。どこから取り出したのか、琥珀の手にはマイクロレコーダーが握られている。何時から録音されていたのかなど気が回らず、自分の発した言葉の羞恥と琥珀への怒りで顔を一気に紅潮させた秋葉は犬歯をむき出しにして無礼な使用人へと咆哮した。

「こ・は・くう〜!今すぐそれを渡しなさいツ!!」

「キヤー秋葉様こわ〜い!」

そそくさと撤退する琥珀を追わずに深く溜息をついた秋葉はどうも見えなくなってしまうた志貴が通った道へと目を向ける。翡翠や琥珀の言った通りに、志貴の様子はいつも通りだ。

この遠野家に戻り、戸惑いながらも生活に馴染もうとしてくれている……そう、以前のように。

だが、秋葉は逆にあのような事が起きていつも通りでいられることが疑問であった。

(兄さん……)

いつも通り。

そう振る舞っているだけで、志貴はうちに秘めている感情を抑え込んでいるだけではないだろうか……?

秋葉がそう考えてしまったのは、戦いを終えた志貴が意識を取り戻

した時だ。

秋葉が志貴へ自分達遠野家がどのような非道を行ってきたかを説明した時には話した秋葉自身が驚くほどに志貴は落ち着きを見せていた。いや、自分の素性を知った事で逆に納得をしていたのだろう。

だが、秋葉は見た。

琥珀から志貴が意識を取り戻したと聞き、部屋へと駆けこんだ時に、一瞬ではあったが志貴の顔から読み取れたのは、失意。

とても大切なものを失ってしまったかのような表情にどう声をかければいいかと踏みとどまってしまった秋葉だが、彼女が部屋へと現れたと気がついた志貴が普段通りに振る舞う為に、自分も『普段』を演じて接するしかなかった。

志貴にとって、それほどの何かが今回の戦いの中で失われてしまったのだろうか…

(いつも通り…か)

黒板へ板書する教師の声を聞き取りながらも志貴は自身の掌をジツと見つめる。死を見続けた影響なのか、魔眼殺しの眼鏡を着用しても死の線が視えてしまい、ロアとの闘いの時はさらに色濃く世界の全てが『死』で満たされていると思えるほどに、線と点しか視界に映らなかった。

だが、戦いから二日後。眠り続けていた志貴が目を開けた時には視

界に映る線や点は以前より少なくなっており、あれ程頻繁に起きていた頭痛すら無くなってしまっていた。

カタカタと風に押される窓へ、ふと目を向けるとサツシに挟まった一通の封筒を見つける。身体に鞭打って封筒を回収し、開けてみると世話になった人物から今回の顛末について記された内容であった。

最初の疑問であった志貴の眼に関して、どうやら手紙の送り主よりも先に手をつけてくれた人物によるものらしい。

「月影さん…」

志貴が呟いたその人物はロアの消滅を見届けた後に、その手から緑色の光を志貴に向けて放っていた。光は志貴の眼へと付着すると限界以上の力を発揮した魔眼の力を急速に引き下げると同時に、モノの死を理解する為に強引に回線を繋げた事によって起きていた脳への負担も和らげてくれたらしい。

その説明を見ただけでも、やはりすごい人なんだ…と読み進める中、シエルの『私の仕事を取らないで欲しいです!』という愚痴に思わず笑ってしまった。

他にも自分を助けてくれた月影信彦以外に現れた仮面ライダーという存在や、戦いによって崩落した校舎への対応…そしてシエルは次の任務があるので自分と会うことはないだろうという一文で締めくくられている。

そして数度手紙を読み直しても、アルクエイドに関しての内容は記載されていないかった。

「いや、昨晚は珍しく姉貴とやりあっちゃまって…」

「一方的に一子さんにやられてただけだろ?」

「遠野よ…世の中には言っていない事と言うまでもない事があってだな…」

気が付けば授業はとうに終了しており、志貴は同級生である乾有彦の誘いに乗り食堂へ。互いに注文したうどんを啜りながら他愛もない話を交わす中、志貴はとある質問を有彦へと向けた。

「なあ有彦。シエル先輩って人に聞き覚えあるか」

「あん？しえる？うちの学校に留学生なんていたか？」

「いや、気にしないでくれ」

聞くまでもなかったなと心中で呟き、志貴は油揚げを箸で器用に裂きながら離れた席で友人達と談笑する弓塚さつきの姿を見る。吸血鬼との鬨いが表面化する前はシエルや有彦、そしてさつきと共にこうして昼食や共に遊ぶ計画も立てていたのだが：

「どうやらシエルはこの学校を離れると同時に『シエルという生徒が存在する』という暗示を解除して学校を後にしたらしい。

あの当たり前に思える生活が、志貴は本当に楽しかった。シエルにとってはロアを討伐する任務の一環であったのだろうが、志貴にとってはかけがえのない日々になるのだろう。

だが、彼の胸にはぽっかりと、穴が開いたような虚しさが残っていた。

『志貴！』

そう笑いながら志貴の名を呼ぶ吸血鬼はもう、存在しない。

分かっているのに。彼女の身体が死で染まった姿をこの眼で視た

はずなのに、認められない自分がいる。

彼女：アルクエイド・ブリュンスタッドという存在は、志貴の中で大きくなりすぎてしまった。彼女の事をこの先忘れることなどできないし、彼女以上に愛せる人を見つuckerなど、不可能だろう。

だからこうして窓際から校庭を見下ろして見ると、以前のように不法侵入した彼女の姿が目には浮かんでしまう。

(あの時もこんな午後の授業だったっけ…)

机に頬杖をついて校庭を眺める志貴の眼には元気よく手を振って自分の存在をアピールするアルクエイドの姿に、もう同じことをするなど言ったのに相変わらず人の話を聞かないなああと口元を緩ませて視線を黒板に戻すが、ふと全身が硬直した。

(ん…?)

今、自分は何を見た？

確かにふとアルクエイドがいたような気がして後ろを振り返ってしまう事が幾度があったが、ああもはつきりと見えてしまうものなのか。もしや幻視する程までに心へのダメージを追ってしまったのやもと、自分の状態を確認する為に再度校庭へと目を向ける。

本日の午後一番の授業では、校庭を利用した体育は実践されなかったのか、生徒や職員の学校関係者は1人も居やしない。そう、学校の

関係者は。

校庭にいるのは、金髪赤眼の白いセーターと足首まであるスカートというシンプル過ぎる服装の女性ただ1人。

頬を抓り、眼鏡を上げて何度も目を擦っても、あれは幻想などではない。

「あッ…!?!」

気が付けば、ガタンつと大きな音を立てて立ち上がっていた志貴に授業を進めていた英語教師やクラス一同が注目している。これはまずいと察した志貴はどうにか言い訳を考えようとするが、志貴よりも先に動いた人物がいた。

「んだよ遠野、そんな慌てて立ち上がるほどに体調崩したのかあ？」

「あ…え…?」

「ごりやあまずいっすよ先生。遠野の奴しつかりと答えられないくらいの状態になってるみたいだし、早退させた方がいいんじゃないかあ！」

なんともワザとらしく声を上げる有彦に、教師も訝しげではあるが溜息をつくと気をつけてなと言って早退を了承。有彦のしてやったりという顔がどうにもおかしく、笑いを堪える志貴は鞆を取ると怪しまれない程度で速度で教室を飛び出る。

今度何か奢ってやらなきやな…

親友への感謝を述べながら、志貴は校庭へと急ぐ。

あれ程重かったはずの足が軽やかに動き、いつも自分を苦しませる

動悸すら気にならない。

階段を駆け下り、よろつきながら靴を履き替え、未だ校庭から教室を眺める真祖の姫へと駆け寄る志貴。彼の足音にようやく気が付いたアルクエイドは先ほどとも変わらない満面の笑みを浮かべ、抱擁を待ち構えるようにして両手を広げる。

が、志貴の手は彼女の手首を掴むと強引に彼女を引きずって門の外へと連行したのであった。

ふう…と灰に満たしたタバコの煙を吐き出す信彦は今しがたこちらの警告を無視して学校に侵入し、やはりというべきか志貴によって連れ出される姿を見てだから言っただろう…とつぶやく。

校門前のガードレール付近で恐らくどうしてアルクエイドが生きているのかという質問攻めになっているであろう様子が見える。彼等からは見えない位置であるコンクリート塀に背中を預ける信彦に、隣に立つ女性は面白くないと言わんばかりに頬を膨らませていた。

「…ああなる結果は目に見えていただろう。なぜついてきた？」

「…万が一。万が一にあのアーパー吸血鬼が吸血衝動に駆られた際に遠野君を襲う可能性があったはず。なのに、なのに…」

もし彼女がハンカチを所持していたのならくやしきの余りに口で挟み、千切れるまで引つ張っていたに違いない。そんな形相を浮かべる様子に信彦の中に存在する者達は笑うべきなのか、呆れるべきなのか迷うほどだった。

(つたく、失礼な事いっちゃうねえこのお姉さんは)

(全くよ！みんなですうならないように頑張ったのに！)

全てにおいて同意はできないが、確かにあれ程の事をした後にもそのような事を言われるのは癩に触るかもしれないな…と自身でも珍しく不機嫌となりながらも、ロアが消滅して数時間後の事を思い出していた。

「始めるとするか…」

意識を失った志貴へキングストーンの方が凝縮された粒子を放ち、僅かながらの治療を施した信彦は校舎の中で横たわっていたアルクエイドの身体を回収し、とあるビルの屋上へと移動していた。

アルクエイドの身体は薄く輝く緑色の光に包まれ、そして同じ緑色を纏った光玉が彼女の周りを右往左往と彷徨っている。

「…むんっ！」

信彦が翳した手から緑色の雷が床へと放たれ、それは寝かされているアルクエイドを囲うように走っていく。やがて雷が走った後には円形の魔法陣となり、彼女を中心とした半径5メートル弱の術式が完成した。

淡く光る魔法陣の中央に寝るアルクエイドがロアによって貫かれた傷がみるみるうちに塞がっていく様子を確認した信彦は続いて両手を左右へと展開。腹部のベルトに宿るキングストーンの輝きを強めると、首元に冷たい感触が走った。

「何のつもりだ？」

「それはこちらの台詞です。貴方は一体、何をするつもりですか」

振り返らなくても背後に現れた者が誰であるかは分かる。信彦の首へと黒鍵を突きつけているシエルはこれから信彦が起こそうとする事：彼が敵対する理由のない真祖を完全に消し去ろうとするのは考えにくい。ならばその逆であれば、じっくりくる。

「まさかと思いますが、あの吸血鬼を蘇生させるつもりですか？」

「説明の手間が省けたな」

否定すらするつもりのない信彦の回答に対し、黒鍵を持つ手を強めるシエルは現実を突きつける。彼が真祖が蘇らせようとしているのは、彼の為であるとわかっている。だが、仮に蘇生が成功したとしても志貴に待っているのは、悲しい別れだけだ。

「彼女の周りを浮遊する球体：ロアがアルクエイドから奪った力の欠片で間違いないでしょうか？」

「……………」

「無言は肯定とみなします。どういった理由で彼女へ力が戻らない様に貴方の力で分断しているかは不明ですがあのまま力を取り戻し、蘇ったとしても彼女の吸血衝動はもう止まらない。もう、目に留まる全ての者の血を欲してしまう可能性だってある」

だから無駄なのだ。彼女が生き返ったとしても、待っているのは地獄が永遠の眠り。志貴にさらなる悲しみを与えるようであればもうこの場で…と呼吸すらしていない吸血鬼へ視線を向けるシエルは、信彦の言葉に自身の耳が正常に機能しているかを疑ってしまった。

「その吸血衝動を可能な限り取り除く方法があるとすれば、話は違っ

てくるだろう」

「なっ…」

何をあり得ない事を…真祖の抱える吸血衝動は、そこらにいる吸血鬼や吸血種の比ではない。理性では決して抑えられない欲求を力の半分以上も費やして押さえているのだ。その吸血衝動を消し去る方法など、あるわけがない。それが真祖を知る者にとっての常識なのだ。

その常識を偉そうに高説したくもなるが、今シエルの前に立つのはその真祖の力すら凌駕する伝説の世紀王。異端に対する力量も術も、悔しいが遥かに上の存在だ。

「そんな事、不可能です」

だからこの台詞は、単なる苦し紛れだ。ややり出来ないと言われた時に、大いに笑う為に言い放った言葉ではあった。しかし、信彦の答えはシエルの予想を大きく、悪い意味で覆すものであった。

「…お前は、真祖の元となった存在を知っているか？」

「突然何の話ですか？」

「知らないというのなら詳細は省く。真祖の元となった存在は、地球の触覚となる真祖に自分を参考にして生み出すように提案した。そこにどのような意図があったかは知らんがな…」

事実、真祖のモデルとなった存在…紅い月は地球を掌握とするという思惑を抱えていた事もあり、自身の後継者を地球の触覚にしようと企んでいた。その考えを知ってか知らぬか、地球は紅い月を参考に創造したが、生まれた真祖は吸血衝動という欠陥を抱えるという結果を孕んでしまった。

「そしてアルクエイドもまた、吸血衝動を持って生まれてしまった。

だが、今は吸血鬼から奪われた力が戻ろうと本能的にアルクエイドへと接近している」

「ですが、その力が戻らない様にあの球体に閉じ込めているのは、貴方でしょうか？」

信彦の説明に無自覚にも聞く体制となつているシエルは自分でも気が付かぬ間に黒鍵をさげ、今もアルクエイドの中へと戻ろうとする力の塊ではあるが、シエルのいう通りに信彦の力によつて戻ることが出来ず、アルクエイドの身体にぶつかっては弾かれてしまう状態だ。

「そうだ。そして奪われた力が戻した途端に、力を馴染ませるためにアルクエイドの身体は全身に力を通すためのパスが通じる。魔術師で言えば、魔術回路のようなものだ」

確かに数世紀に渡つて奪われた力…それもロアの中にあつたものであれば元の状態になるには時間もかかつてしまうだろう。なるほどと納得する半面、これから信彦が起こそうとする事が読めてきたシエルの顔色はだんだんと青くなつていく。

「まさか…貴方は、力が馴染む前に、彼女の身体を創り変えるつもりですかッ!？」

「そのつもりだ」

「なんて事を…！分かつているのですか？星の触覚である彼女は、地球の精霊そのもの！そんな存在の身体をいじってしまうとなれば、彼女は地球のバックアップは受けられず、逆に死んでしまう可能性だけである！いえ、それ以前に——」

「地球側である彼女を創り変えようとする貴方が、『地球の敵』として認識される可能性だけである！」

「……………」

それは地球が持つ『抑止力』の敵対行動と同意義であると、シエルは言いたいのだろう。

もし、信彦が地球の敵と判断されてしまった場合は、これまでの魔術協会や聖堂教会とは比べものにならない…まさしく『星そのもの』に命を狙われる可能性がある。

だがそんなことは百も承知だ。

狙われる事にはもう慣れている。それが人間から、人間以外に変わってしまうだけの話だろう。

そして、そうまでしても信彦が見たい光景があるからだ。

「言いたい事は、それだけか？」

「…それで、いいのですか？ 貴方は？」

「だからこそ、俺はこうしている」

「随分と…いえ、困ってしまう程にお節介なんですね」

ふう…と困った笑みを浮かべたシエルは後を振り向くとビルの屋上を囲う鉄格子へと飛び乗り、振り返らずに呟いた。

「今、私は何も見ていません。任務も終了しましたし、家に寝かせてあげるカレーを食べに帰るとしましょう！」

そんな捨て台詞にも聞こえない言葉を発して、シエルの気配がビルから消える。ようやく邪魔者がいなくなったところで、術を再開できる。

(さあて、どうなることや俺らの運命)

(でも、私たちならきつとなんとかできるわ)

「そうなるように…力を全力で注げ」

「頼むぞ…お前達」

信彦の言葉に答えるように、腹部のシャドーチャージャーから眩い光が、アルクエイドによって放たれた…

「くう…まさか成功してしまうなんて…」

「お前の期待は一体どちらに向いていた？」

感極まって今度こそアルクエイドを抱擁する志貴の姿に涙目となっているシエルに思わず声を出してしまった信彦は、その強化され

た視力で遙か先：信彦達のいる位置が10キロ程離れた位置でバイクに跨る2人の人物を捉えた。

今回の件で自分に余計な事を吹き込んでくれた筑波洋と、意識を取り戻した真祖と何かと信彦を友達にしようとしていたアマゾンだ。

特に後者は互いに頑なに断る姿を見て最初は躍起になっていたものの、何故か直後に自分は何もしなくても安心だとそれ以上何も言わなかった。

もう諦めたのか、互いに言いたい事を言い合っている関係に何かを見出したのかは不明だが、最後に信彦へところ告げた。

『お前、もつと友達増やすべき。そうすれば、もつともつと強くなれる！』

なにを下らん：と返すことができずに真祖をこの場へと連れてくる形で別れたのだが、どうやらあの様子では2人はこのまま立ち去ってしまうのだろう。

特に交わす言葉などない。それは相手も同じだったのか、信彦が視線を合わせた途端に微笑みを浮かべて機体を反転させ、いずこかへと走り去ってしまう。

(おいおい、世話になったんだから挨拶ぐらいしろっての)

「された覚えはない。あいつらが勝手に寄ってきただけだ」

(もう素直じゃないんだから…)

アンリマユやキングストーンの指摘など耳にも入れず、信彦はその場から離れていく。もう見たい光景は見れたのだ。後はこの場を去るだけのつもりでいた信彦を、呼び止める少年の声が響く。

「月影さんッ！」

信彦は振り返らないまま足を止める。どうやらアルクエイドから自分がどうやって助かったのかを聞き、さらには彼の眼を処置したことも知らされてしまったようだ。さらに回りを見て見れば、志貴へと伝えたであろう張本人であるシエルの姿もない。信彦は知らないが、彼にはもう会わないだろうと言った手前、姿を現せないのかもしれない。

「あの…俺は未だに貴方が一体どのような人なのかはわかりませんが、先にこれだけは言わせてください！」

「ありがとうございます…本当に、ありがとうございます！」

その言葉に、信彦は理解できない感情がこみ上げる。どう反応すればいいのか、どう言い返せばいいのか、この時の信彦の口から出たものは、相も変わらずの捻くれたものだった。

「俺が勝手にやっただけのことだ。礼を言われる筋合いはない」

「…わかりました。なら、俺は一方的に言い続けますよ！受け入れてもらえるまで！」

返す言葉が見つからない信彦はそのまま足を進める。だと言うのに、少年の言葉は止まらない。

「もし…もしもう少しこの街に居てくれるのなら、何でも言っただ

「さい！俺やアルクエイドも全力で手伝いますから！」

「ちよ、ちよつと志貴！私は嫌だよ!？」

このままでは何時までも呼びかけられ、余計に注目されてしまう。そう考えた信彦は、やはり振り向かないまま答えた。

「…この街に、怪人が隠れ家として使った場所や、仕留めていない連中がいる可能性がある」

「そいつらの居場所を突き止める為に…案内人が必要かも知れんな」

「…！はい、任せてください」

背後で志貴とアルクエイドの言い合いが聞こえるが、この際は無視しよう。なぜならば彼には今すべき事が出来てしまったからだ。

既にこの街全体を地図がなくても把握できる信彦へ、アンリマユが爆笑しながらからかっているのだ。このツンデレさんめと。

確かこの先に以前アンリマユを完全に黙らせた中華料理屋があったはず。

今後の事は、そこで食事を取りながら考えるとするか…

「なあんて2か月ちかく回想していた気分になっちまったけど…」

「アハハハハハ！何をいつてるんですかつまらないですねもつと面白い事を言ってくださいよ！」

「今度はカレーで笑い上戸になってやがる…」

ふと数週間ばかり前に起きた出来事を思い出していたアンリマユはあの後にあっさり志貴の前に現れ、アルクエイドと血で血を洗う戦いを何度も繰り返しているシエルの愉快な顔を眺めていた。

あの蘇生以来、吸血衝動が表にでる様子がないアルクエイドや志貴達と行動する機会が増え、最近では雑談の方が勝っている程だ。だが、信彦達もただ遊んでいる訳ではない。

こうして愚痴を着にしている聖堂教会の女と接触したのも、ある意味狙い通りではあった。

(アヴェンジャー、代われ)

「あん？もう碧月ちゃんのお楽しみは終わりがい？」

(…単に話に付き合っていただけだ。さつさと代われ)

「へいへい」

ちなみに碧月というのは、キングストーンの意思につけられた名前である。碧みどりに月とキングストーンを連想させる言葉から取った名前だが彼女は大変気に入り、名づけ親である信彦へ毎日名前を呼ぶように迫るほどである。

「ふう…おい、そろそろ本題に入らせてもらおうぞ」

「あれくさつきまでの愉快的口調はどこ行っただんですか？」

「貴様だけには言われたくない」

どうにか主人格となった信彦はシエルに強引に水を飲ませ、自分だけでなく、シエルまでがこの街に残っている理由を尋ねた。

「あの吸血鬼の一件から数か月…俺は怪人共の住処を。お前は死徒が長期間滞在した場所にはさらに吸血鬼が寄り付く為という名目で居座っているな」

「まあ、浄化するという意味では間違っていないんですが」

「だが、俺達が調べた限り目星の付いた場所には怪人共の姿もなく、それどころかダロム達が集めていたであろうデータすら残っていない。まるで痕跡を消した後のようにな」

「お前も…同様ではないのか？何者かに、吸血鬼と、奴らが持っていた何かが消されてしまったのではないか？」

信彦の指摘に一度大きく見開いたシエルの眼がだんだんと鋭さを増していく。どうやら当たりだったようだ。

「……この場を奢ってくれる手前、開示できる情報だけを教えます」

奢るとは一言も言っていないのだが、この際は仕方がない。無言で頷く信彦へ、シエルはその元凶であろう名を告げた。

「クライシス帝国。その者達が大きく関わっている可能性があります
す」

第63話

丑三つ時を回ろうとする時刻。月明かりを頼りに港のコンテナ置き場を進むその者は全身をボロ布で覆い隠し、自分が最も好む香りを求めて足を速めていた。一刻も早くその先で起きているであろう何かを求めて、鼻歌を口ずさむ程に心を躍らせている男の風貌は闇夜という効果も相まって不気味と言っても過言ではない。

本来長身である男は頭を前方へ乗り出すような猫背であり、布の合間から唯一伺える両目はカエルの如く飛び出ているように見えてしまう。

何より目を引いてしまうのは、男には右腕がない。

肩から先にあるべき腕が存在しない為に、本来腕まで覆うはずの布が不必要に揺れ、音を立ててしまっているが男にはそんなもの気にも止まらない。

今は一秒でもはやく、自身の鼻孔をくすぐる香りの元へと辿り着かなければならないのだ。

謎の使命感に燃える男はアスファルトを踏み鳴らし、靴底がカツカツと音を鳴らして進んでいくが、次第に男の靴音が変化していく。

最初こそは靴と路面によって打ち鳴らす音であったが、次第に音は小さくなると切り替わるように水たまりへ足を踏み込んだようにパシヤリ、パシヤリと飛沫が生じるものへと変わった。

無臭の水と違い、独特の嫌な臭いを醸し出すそれは靴に付着し、時間が経つに連れて赤黒い塊へと変化していく。

しかし男は不快に思うどころか、むしろ嬉々として液体を跳ねさせている。

もつと、もつとこの音を聞きたいと。

男が踏みしめているのは、人間の血液だった。

「お、おとおおとおおっお……！」

歡喜に震える声を響かせる男の視界に広がるのは月に照らされ、冷たい輝きを反射させる血の海と、四方八方へ散らばる血液が詰まっていた生物の破片……常人が見れば正気でいられない光景に、男は笑いを抑えられない。

手近にあつた生物の頭部を広い上げ、恐怖に引きつったままに最期を迎えた顔を舐めるように観察する。あわよくば、この生き物の首がポトリと床へ落ちる瞬間を見届けたかったものだと思われれば、狂った思考を働かせているうちに、この惨劇を起こした張本人の姿を発見。

「これはこれは……姿形を変えど、このような事が出来るのは貴方しかおりませんでしたね」

「……この状況を喜んでいる君こそ、ジュピトルスに間違いないな」

男……ジュピトルスの声に反応した人物はゆっくりと振り返る。

「久しぶりですな……水星のマキュリアス」

その一室に立つボスガンは雑兵チャップの差し出した一振りの剣を受け取ると、鞘からゆっくりと引き抜く。

罫元から剣先に至る所々に雷雲を走る稲妻のような意匠を持つ剣の名は、怪魔稲妻剣。四大隊長の中で随一とうたわれる剣の腕を誇るボスガンが時間をかけて完成させた逸品だ。

刀身を眺め、鏡面のように映る自身の顔を見てニヤリと口元を歪ませるボスガンはパチン、と指を鳴らし、別のチャップへと合図を送る。ボスガンに向けて敬礼したチャップが手にしたコントローラーを幾度か操作すると、モーターの駆動音と共にクライシス帝国の宿敵が姿を現した。

「……………」

ボスガンの正面に立つその姿は紛れもない間桐光太郎の変身するロボライダーであった。だが本物ではなく、ガテゾーンが提供したデータを元に作り上げられた模造品である。

その硬度は直前のテストでも怪魔ロボット達による一斉攻撃でも傷一つ付ける事が叶わなかった程に再現されていたが…

「ヌオオツ!!」

怪魔稲妻剣の柄を両手で握り、上段から一気に振り下ろす。ボスガンの放った攻撃がロボライダーの胸部へと命中。走った斬撃による傷口から漏電が起こり、やがて全身に駆け巡っていく。

ついには立つことさえ不可能になったロボライダーは前のめりに倒れ、複眼に灯る赤い輝きが消え失せてしまった。

「フフフフ…見事な出来だ。これされれば如何にロボライダーになったRXだろうが、私の敵ではない…」

事切れた人形のように動かないロボライダーの背中を踏みつけるボスガンは先日怪魔界で起きた騒動の影で自分がジユピトルスと密約を交わしていた事が明るみになる事を恐れ、ジャーク將軍へとサイボーグ怪人プラントを無断で使用していると報告。それも、自分は脅されてプラント起動用のパスワードを教えてしまったと偽って…

何とか將軍による処分は免れたボスガンであるが、その直後に聞かされたガテゾーンから皮肉を込めた憐みを侮辱として捉え、名誉を挽回する為に仮面ライダーBLACK RXを倒す事を画策する。

自分が自ら出向き、RXの首を持ちかえればガテゾーンを見返すことは勿論、地球侵略作戦へ大いに謙譲したという事になればジャーク將軍を蹴落とすことも夢ではない。

だからこそ作戦は完璧に遂行せねばならないのだ。

「ガイナニンポー！」

「キキイ！ここに…」

猿の鳴き真似と共に姿を現した怪人：西遊記の孫悟空を思わせる風貌に白い毛で覆うガイナニンポーは背後に2体の怪人を引き連れていた。

「怪魔獣人候補生…トンドンにパーカスよ…」

『ハハアツ!!』

ボスガンの呼び声に応えた2体の怪人。トンドンは肥満体で鼻が大きく潰れた異様に大きい耳をヒクヒクと動かし、パーカスは真逆にゲツソリを痩せており、鋭いクチバシに頭頂部が皿を乗せているかのように剥げている。

ますます西遊記の特色を濃くしてしまう2体の怪人達へボスガンは剣を鞘へと納め、2体が待ち望んでいた言葉を放つ。

「これより貴様らに指令を下す。これに成功した暁には、怪魔獣人の称号となるガイナの名をさすけよう」

「おお…この強靱な肉体を手にし、ついにその名を授かる時が…」
「ブヒヒヒヒ…これでニンポールの兄貴と肩を並べて暴れられるつてもんだぜ！」

ボスガンから報酬として怪魔獣人の称号を預かると聞き、胸を高まらせるパーカスに同意するトンドンは耳障りな笑いを木霊させる。そして2体が聞いた指令の内容は…余りにも簡単過ぎる内容であった。

これは称号も何もせず貰ったも当然だと部屋を後にするトンドンとパーカスの気配が消えた後、残ったガイナニンポールは自分に下された指令に頷いた後、気がかりである点を主へ尋ねる。

「俺が狙うのがあの者であり、連中を2人に任されたのはまあ納得です。ですが残る最後の標的は、どうするおつもりで…？」

「心配する事はない、既に手は打ってある。お前は存分に相手をしていくがいい…」

「私はこの手で、奴が身動き一つ取れない所をいたぶった上で、地獄に送ってやる」

「覚悟している…RX」

光太郎を縛り付けて、彼の気持ちを汲み取ることができなかつたと自責するメドゥーサ。

互いを思い過ぎた故にすれ違ってしまった二人はどうにか話をする機会を伺っていてもいざという時に面と向かつて話す事が出来ず、食事時など互いに視線を合わせないよう必死になり、桜が腕によりをかけた手料理の味すら分からないでいた。

このままではいけない事はわかっている。だが、気まずさから彼女に近づくことすら躊躇してしまう光太郎へ、親友の容赦のない感想が降り注いだ。

「気まずくて謝れないとか、小学生かお前」

「……………返す言葉もございません」

もはやグウの音もでない弱気の光太郎へ、後頭部をガリガリとかきながら大輔は仕方がないと呟くと、応援を要請しようと一度手を拭い、携帯電話を手取る。現在客は光太郎ただ一人のため、数分の通話ぐらいなら問題との判断だ。

「ダイ君、誰に…?」

「こういう時は、おんなじ女に尋ねりや即解決つてもんだ」

「ハア……………」

間桐邸の中庭で箒を手にしたまま小さく溜息を見せるメドゥーサの姿に、これから外出しようとする玄関の扉を開けた間桐慎二はいよいよ加減仲直りしろよと叫びたい本音をどうにか抑え、黙って門の外へと向かっていったが、その反対側で仁王立ちし、視線を下へむけて叫ぶ赤上武の行動に我慢出来ず全力を尽くしてしまった。

「よおしッ！そのまま2体1組で交互に突きの鍛錬だ!!」

『ミイツ!!』

「よしじゃないんだよ何やってんだよお前はあッ!!」

腕組する武の視線の先には、親指サイズまで身体を縮小させたインベス達が号令に従って武器を使った訓練を行っていた。が、流石に小さくなったインベス達に合わせた武器を用意することは困難であった為に間桐邸にあった綿棒を持たせていたのである。

これならばインベスが怪我することなく訓練できるという桜の意見に素晴らしいと太鼓判を押す武の姿を思い出す度に頭を痛くする慎二だが、今はそんな事二の次だ。

「む、どうしたのだ慎二殿。そのように怒鳴っては通行人に見られてしまうぞ?」

「おかしいなあ。僕から見たら地面に向かって号令飛ばしているお前の方がよっぽど注目浴びるはずなんだけどおかしいなあ」

目元をヒクヒクと動かす慎二の言動に『何かおかしなことを言ったのだろうか』と首をかしげる武を真似るように、訓練中であるインベスたちも首を傾げた状態で慎二を見上げている。

これでは訓練を強引に中断させた自分が悪いようではないかと拳を震わせる慎二を鎮めるように、状況を見守っていたメドゥーサによ

る助け船が入った。

「タ、タケル、シンジが言いたいのにはインベス達に訓練を課するのは間違
いではないのですが、指導するタケルの姿を不審に思われてしまう事
を心配しているのです…」

「それは盲点であった…かたじけない慎二殿」

「…心配なんかしてないよツ!!」

メドゥーサにフォローされた慎二は謝罪する武に顔を向けないま
ま門扉へと向かっていく。ふと今日が休日である事を思い出したメ
ドゥーサは慎二の目的地が何処であるかを問うと、やはり振り向かな
いまま答えた。

「シンジ、今日はどちらへ…?」

「…覚えのない約束をさっさと片づけにいくだけだよ。つたく、せつ
かくの休日だつてのに…」

ぶつぶつと文句を言いながら門の扉に手をかけた慎二は、振り向き
ざまにメドゥーサの姿を見る。

やはりそうとう参っているのか。以前感じられた『らしさ』が今の
彼女には、まるでない。

戦いの中で見た毅然とした雰囲気は消え失せ、何かに怯えるような
…そう、慎二が出会ったばかりの人見知りであった桜を連想してしま
う。

それ程弱り切ったのは、義兄とこ一週間…いや、桜が誘拐された直
後から真面に話せていない事に間違いないだろう。気まずいのもそ
うだが、彼女は光太郎に負担をかけていたと思ひ込み、今以上に状況

が悪化する事を恐れている節がある。

もし、今以上の刺激がメドゥーサに起きてしまったら…

(何考えてるんだよ僕は…)

以前、そんな予感を抱いたばかりに今のような状況になってしまったのではないか。頭を振る慎二はこれ以上考えても仕方がないと外出するのであった。

「では、我々は地下で訓練を行うとしよう」

膝をついて、手に取ったバスケットヘインベスが乗り込む様子を見守る武は浮かない表情を浮かべるメドゥーサへ何か声をかけるべきかと迷うが、この家に居候して間もない自分に、それが許されるのであろうかと躊躇する。それに男女の問題だ。別世界で戦いのみに身を投じていた自分では解決にも至らないかもしれない。

どうすればいいのかと頭を働かせていると、自分に次いで居候となった人物が玄関から現れた。

「光太郎兄様ー?」

ドアから顔を覗かせるガロニアは、間桐邸で暮らすようになってからの呼称で光太郎を探すが、間が悪すぎた。ビクリツと握った筈の柄に亀裂が走るまで握りしめてしまうメドゥーサの様子にこれは重症

だと判断した武は立ち上がると、メドゥーサに変わりにガロニアへと答える。

「光太郎殿であれば、外で御友人のところへと言っている。どうかされたのか?」

「あ、はい。先日お借りした本と課題が終わりましたので、続きを出してもらおうと探していたのです」

はにかみながら両手で「高校1年の数学」と書かれたテキストを見せてくるガロニアに笑い返す武は、先日ガロニアを高校へ通わせるといふ話を思い出した。

慎二や桜の通う穂群原学園の編入試験の為、勉学に励むガロニアは元々物覚えが良かったのか、小学生の漢字から始まり、現在では高校1年生の範囲まで網羅している。このまま上手くいけば、通学中の勉強に関しては問題ないだろう。後は遠縁の親戚として誤魔化し、学校でも慎二や桜、協力を申し出た遠坂凜がフォローすればとりあえずは大丈夫であろうという判断だ。

しかし彼女は桜と瓜二つ。親戚であると説明しても無理があるのは重々承知はしているがガロニアへ編入の提案をした時の、あのキラキラと輝き希望に溢れた瞳を見てしまったら撤回など出来るわけなかった。

「そうですか…」

「なに、午後には戻るであろう」

「そう、ですわね。ワタクシ、少しでも早く学び舎へと通いたいと焦っていたみたいです」

しょんぼりと表情を曇らせる姿を見たメドゥーサは、どうにか彼女を元気づけようとする提案を持ちかける。それは同時に、自分の現状を打破しようとの思いも込められていたのかもしれない。

「では、光太郎の通うキャンパスを見学する、というのはどうでしょうか？」

「え……？」

「シンジやサクラの学校は休日と言えど学生以外の立ち入りには色々許可を得なければいけません、大学のキャンパス内を歩く分には、問題はないはずです」

「はい……ぜひお願いします、メドゥーサ姉様！」

他の人間から見て怪しまれない様に『様』で人の名を呼ばぬよう伝えた後から間桐家の年上に対して『兄様』『姉様』と呼ぶようになってしまったが、これはゆずれないのだろう。

ちなみに桜は以前通りに桜さんで通し、訪問した凜を『凜姉様』と呼べた際にはおかしなスイッチが入った為、アーチャーに頼んでお引き取り願った。

どの道学校では盟約に従って赤の他人として遠坂先輩と呼ぶ事になるのだが……

では行きましよう、2人で出かける様子を見守る武は、メドゥーサが普段光太郎が通う場所に立ち、同じ空気を吸えば和解するきっかけが生まれるかもしれないと考えたのだろうと推測。

それが少しでも問題が解消される事への近道であれと祈るばかりだが、やはりそうはいかなかった。

同時に、この日は間桐家の人間が大きな変化をもたらす日でもあった。

第64話

「ここが…光太郎兄様の通う大学ですね…！」

両指を口の前で合わせ、歓喜の声を上げるガロニアは周囲に並び立つ校舎を見上げた。

一秒でも早く間桐慎二と間桐桜と同じ高校に通いたいと願うガロニアの姿を見たメドゥーサは少しでも学校という雰囲気を感じて貰おうと、出入りしても特別な制限のない光太郎が在籍する大学へガロニアと共に足を運んでいた。

その際、大学までの道のりを電車やバスで移動したいというガロニアの希望もあり、待機する事となったアクロバッター達ビークル勢は少々がっかりしたという。

「見てくださいメドゥーサ姉さま！あの天井が半球型になっている建物…図書館と書いてありますわ！」

「ええ、何でもこの大学を卒業したデザイナーの方が携わっていると…」

「母校の為にその力を振るうなんて…素晴らしい…」

一度桜と入れ替わって侵入した穂群原学園とはまた違う設備や研究棟をキラキラとした目で眺め、また一つ新たな建造物を見つけてはメドゥーサへと報告する姿はさながら初めて遊園地に訪れてはしゃぐ子供のように思える。

いや、恐らく遊園地でも同じ行動を取るのだろうか…

あの建物の中でどれ程の人が、どのような講義や研究をしているのだろう。その中で、きつと多くの人たちが関わり、繋がりを紡いでいく…

ガロニアが抱く夢…怪魔界を争いのない平和な世界へと導く第一

歩として学び舎での人々を間近で知る為に決めた学校通いもこれではますます待ちきれない。そろそろ戻っているであろう光太郎に次の課題を教えて貰う為に帰宅したい反面、もう少しこの場を楽しみたいという気持ちに揺れるガロニアの後ろ姿を眺めるメドゥーサはどこか浮かない表情を浮かべていた。

(光太郎が普段過ぐす場所にくれば、何かあると思いましたが…)

未だ溝が埋まらない光太郎との関係。光太郎が通う大学に訪れ、同じ空気を吸えば彼と話せるきっかけが見つかると考えたメドゥーサだったが、逆に分からなくなってしまうた。

メドゥーサは、間桐家に住む光太郎しか知らない。彼がこの大学でどのような講義を受け、どのような学生生活を送っているのだろうか…？

以前通りの関係ならば目を瞑っていたとしても見える彼の笑顔。だが、今のメドゥーサの頭には靄のようなものがかり、光太郎の顔を曇らせてしまっている。

(いや、恐れてはダメです。どうにかしなければ)

頭を振るい、弱気な考えではダメだと自分に言い聞かすメドゥーサ。塞ぎこんではいけないと顔を上げた時、通りすぎる学生の会話が耳に届いた。

「あれが噂の間桐先輩？かっこいいよね〜！」

「ほんとほんと〜！」

(光太郎…？ダイスケの家にお邪魔しているはずでは…)

休日中にも関わらず、手に筆記用具や参考書を手に移動している様子から図書館の利用者なのだろう。2人組の女生徒がまるで有名ア

アイドルでも目にしたようにハイテンションで騒いでいたが、続けて聞き逃せない言葉が放たれてしまった。

「でも噂本当だったんだね。間桐先輩がミスコン優勝の紫苑先輩と付き合ってるって」

(え……?)

「お似合いだよね。さすが我が大学のベストカップル！」

(え…………?)

普段のメドウス姉ならば、そんな事は笑い飛ばすふりをしながらも光太郎に詰め寄り、弁明を聞かせるというだけで済んでいた話だったろう。

だが、今の彼女は光太郎と紫苑良子との関係を知っているながらも適格に判断する事が出来きず、気が付けば生徒が歩いてきた方へと走り出していた。

「……っ！」

「メドウス姉さま！あそこに休日でも営業しているオープンカフェが……姉様？」

ただ一人残されてしまったガロニアの心情を現すかのように、季節に反して冷たい風が吹くのであった。

(光太郎：そんな事、そんな事が…)

走るメドゥーサが思うのは、聞こえてしまった事への否定。光太郎と、友人である良子が男女の仲ではないし、第一に良子には大輔という相手がいるはずだ。だが、今でも思いを打ち明けられずに彼の親友である光太郎に相談しているという事実も知っているメドゥーサに、嫌な予感だけが膨らみ続けてしまう。

同時に、下らないと一笑付してしまうような考えすら、メドゥーサの中で生まれてしまった。

もし、光太郎がこんな自分を見限り、良子を選んでしまったら…

(……………)

ズキリと、胸が痛む。

そんな考えを…光太郎を疑う考えを抱いてしまう自分がとても嫌になる。この醜い感情を抱いてしまう自分は、神話の時代と変わらぬ、化け物ではないのだろうか。

「私は、なにを…!」

思ってしまった邪な考えを消し去る為にも、メドゥーサは走る。もう気まずいという言い訳など、どうでもいい。生徒たちから聞いてしまった事実を、光太郎本人から聞きたい…違う、否定して欲しいという願望を抱いて、メドゥーサは走り続けた。

「光太郎…!」

見つけた。

10メートル程先にある中庭のベンチに腰掛け、隣に座る誰かと話しているようだが、植栽の木が邪魔して誰かまでは判別がつかない。友人の家に行っているはずの光太郎がなぜここにいるのか。

女生徒の言った言葉は真実なのか。

尋ねたい事は幾つもある。

：いや、それ以上に、光太郎の声を聴きたい。彼と話することができれば、この嫌な気分も四散するはず。あと数メートル進めば、光太郎と話が――

「――やっぱり――リョウちゃんは頼りになるや」

メドゥーサの足が、その場で止まる。彼の口から聞こえたのは生徒たちの話題となった、光太郎の幼馴染みの名前。ならば、今光太郎と話している相手は、本人に間違いはない。

「――、メドゥーサには――聞かせないさ」

途切れ途切れでしか聞こえなかったが、何かに悩んだ光太郎は自分ではなく、良子に頼った。

そして…自分には、聞かせられないような話を…良子に聞かせている。

心臓を締め付けられるような感覚に陥ったメドウーサは今にも崩れ落ちる事を耐え、周囲の目など気にかけることなく跳躍。

建物の屋根を足場として移動を開始した。少しでも遠くへ逃れるために。

(私は…私は…)

考えてしまった嫌な予感が現実となってしまうた。そう考える他無かったメドウーサは当てもなく、ただひたすら跳び続ける。

あの場に切り込んで光太郎に話を聞くという選択肢は選べなかった。聞くことすら、怖くなってしまった。

もう、自分は頼りにならないという言葉が光太郎本人から直接聞かされるのが、どうしても嫌だった。

(もう、見えない…)

以前、光太郎から綺麗だと褒めてくれた瞳から漏れる涙を散らしながら飛び続けるメドウーサには、もう見えなくなっていた。

あれ程見慣れたはずの、自分に向けられた光太郎のまぶしい笑顔が。

今は、もう全く見えない。

メドゥーサが大学内で光太郎を発見する直前。

「…暇つぶしに大学で勉強していて、ほんっとーに珍しく大輔君から電話があったと思ったら…」

『悪いけどさ、コータの相談に乗ってくれないか？俺には無理っぽくてさー』

「…私には用事なのに電話をよこしたという不満半分と頼られた嬉しき半分。このせめぎ合いはどうすればいいのかしら」

(やばい相談できる空気じゃない)

大輔の店で食事中だった光太郎は突如彼の勧めもあって良子にメドゥーサの件に関して相談するように言われるがまさに大学までバイクで移動したのだが、当の本人は浮き沈みが激しい状態となっていた。

それに今回の相談内容も考えてると、なかなか話を切り出せない光太郎だったが、そんな良子が深く溜息を洩らした後、光太郎に困った笑みを浮かべるとヘルメット片手に立ち尽くしている幼馴染みへ自分の隣座るよう勧めた。

「立ちっぱなしじゃ話もできないでしょ？座ったら？」

「え…大丈夫…なの？」

「もう整理は付けたわ。せつかくここまで足を運んだっていうのに、

私がいっまでも不機嫌だったら話が進まないじゃない」
「リョウちゃん…」

ベンチに腰掛けた光太郎は、とある人物と気まずい関係になってしまったと打ち明ける。良子は最後まで口を挟まずに、光太郎の説明を真剣に、頷きながら聞き続けた。

「まるで小学生ね」

「うぐ…ダイ君と同じ感想を…」

「でも、光太郎君はいっまでも今の状態を続けるつもりはない。だからこそ私のところに来たんでしょ？」

「うん…」

到着前に購入していた缶コーヒーを煽る光太郎に、良子は笑いながら思った。普段悩み事など絶対に他人に見せない光太郎が、こうも誰かを頼りにするなど本当に珍しい。

それに望んでもいないのに、良子本人は周への面倒見の良さから恋愛相談も多く、経験もないのにと思いつつも親身になって話をしているうちに、数々のカップルを誕生させてしまったのだった。

望んでもいないキューピットという二つ名を隠し続けていた良子だが、昔から影で自分達を助けてくれていた幼馴染みのためなら、この力を存分に振るってみようと視線を下へ向ける光太郎の肩を叩く。

「任せなさい。あくまで解決するのは光太郎くんとメドウスさんだけけど、アドバイスくらいなら私にも全力でできるから」

「…ありがとう」

「でも、お礼はしっかりしてもらおうよー！」

「ハハハ。任せてよ。やっぱり、こういう時リョウちゃんは頼りになるや」

「けど、私にこう言われたからというのは、厳禁よ。ただでさえ関係がデリケートな時に他の女の人の名前を聞いたら、女の人は色々と勘繰

られちゃうんだから」

「うん。どの道、メドゥーサには恥ずかしくて聞かせないさ」

「あら、やっぱりカッコつきたい？」

「もちろん——ん？」

慎二などから見れば『恥ずかしい質問』に部類する内容に即座に頷いた光太郎は、背後で何者かが跳んだ気配を感じ振り返ってみるが、誰の姿もない。

だが、この場にいるはずのない人物の名を口に出してしまった。

「……メドゥーサ？」

「……………」

気が付けば、人気のない公園へと訪れていたメドゥーサはブランコに腰を下ろし、泣きはらした目を擦っていた。

忘れようとも、耳にから離れない光太郎の言葉。だが、事実でもあ
る。いつまでも子供のように会話すら逃げていた光太郎が自分に愛
想をつかしてしまうのは、当然のこと。

そう思い込み途方に暮れるメドゥーサは、今後自分がどうすればい
いかを悩んでいる時だった。

「どうしたのお姉さん？こんなところで一人でいてさ」

いつの間にか接近した男性に声を掛けられていた。

メドゥーサは一般人が近づいていたことに気が付かないなど、とことん落ちぶれてしまったと自嘲しながらも男性の声に応える。視線は相変わらず下に向けたまま失礼ではあるが、このような顔は例え光太郎にだって見せられない。

「いえ別に…なんでもありません」

「え〜こうして会ったのも何かの縁だからさ。話してごらんよ。もしかしたら、何かすすきりするかも知れないしさ」

「お構いなく。私はこれで——」

立ち上がろうとした瞬間、メドゥーサは全身の筋肉が強張ったように動けない事に気づく。それだけではない。冷や汗を流し、今までブランコの鎖を掴んでいた手も震えているではないか。

(な…)

なぜこのような状態に陥ったのかまるで理解できない。心音も外部に漏れているのではないかと思えるほどに早く、大きく聞こえてしまふメドゥーサに、男は再び声をかけた。

「…どうしたんですか？まるで蛇に睨まれたカエルのように動かなくなっていますけど？」

「…!？」

口調は先ほどと変わらない。純粹にこちらを心配しての、優しく柔らかい声だ。

だが、メドゥーサの動悸はさらに強まり、呼吸すらままならない。なぜ、声を聴いただけでここまで自分の身体に異常をきたしてしまうのか…メドゥーサはギギギと壊れた人形のように、ぎこちない動きで

動けない自分を見下ろしているであろう男性へと顔を向けた。

そして理解したと同時に、疑問が生まれる。

なぜ自分が、男性の言う通りにまるで身動きが取れなかったのか。

なぜ、『この男』がこの世界に…いや、この時代に存在するのか。

「くっ…！」

身に力を振り絞り、その場から離れる事に成功したメドゥーサは手に鎖を顕現させ、未だにこちらへ微笑みかける男へ向かい攻撃をしかけるべき手を振り上げる。

鎖の先端にある釘で男を貫こうとしたよりも速く、男が既に動いていた。

ジャラジャラと音を立て、細かく切断された鎖と共に公園の地面へと流れる、赤い液体。

「か…ああ…」

自身の胸にくつきりと刻まれた深い傷から流れる血を見て、膝をつくメドゥーサは確信した。

遠くなる意識の中で、やはり変わらず笑顔のまま手にした鎌剣を煌かせる男の名を呼ぶ。

「あ、あなたは…」

「ペル、セウス…」

それはかつて神話の時代、メドゥーサの首を切り落とした英雄の名前だった。

地へと沈み、意識を失ったメドゥーサに向けて、鎌剣…ハルペーを翳したペルセウスと呼ばれた男は笑顔のまま、彼女の言葉を否定する。

「ああ、確かにこの身体は彼のものだろう。だが、あいにく『魂』は違っていてね」

「ワタシの名はマキュリアス。かつてクライシス帝国の、水星の星騎士と呼ばれた男さ」

第65話

彼の人生は恵まれていた。

いや、恵まれ過ぎであったのかも知れない。

裕福な家庭。

優しい両親。

約束された将来：

彼が歩む道には何の障害もなく、望むものは全て手に入れてきた。

だからだろう。

彼は自分の人生に意味を見いだせず、心の中に『何か』が蓄積していった。

望めばどんな物も手に入り、喜びを感じたのは幼少の頃まで。成長してしまえば、逆に恐ろしさすら浮かんでしまう。

なぜ、どうしても簡単に入ってしまうのだろうか。

彼が少年時代に夢中になった絵本や冒険譚には、苦勞して手に入れたこそ価値があると主人公たちが言っていたのに、彼には何一つ感動を得る事が出来なかった。

それは、彼を囲う人々と、家族にすら言える事だった

彼が何をしようと咎めようとせず、笑いしか浮かべない親。

その親の怒りを買わぬよう媚びへつらう使用人達。

決して彼より上にならないよう仕組まれた同年代の子供。

彼が父親と同じ『水星の星騎士』を継承した時、周囲から送られる賛美とは裏腹に、心の中は伽藍洞と化していた。

そんな時であつた。

哨戒の任務として小さな村の警備に当たった際に1人の少年と出会つたのは。

両親は既になく、その目は生まれつき光を失つていながらも懸命に生きる姿に、彼は衝撃を受ける。

周りの住民から厄介払いされながらも恨み言一つ見せることなく、唯一の理解者である教会の神父と日々生きられる事を感じ、全ての人の幸福を願う姿は、その見た目からは考えられない程に、『生』が感じられた。

だからだろう。

村へ移住した者と偽つて彼と接触し、数日に一度教会を訪ねては時間をかけて会話する事が楽しみとなつてしまった。

そして話をすればするほど、少年の器の大きさを思い知り、いかに自分が矮小な存在であるかという事を。だが、そんな自分を少年は諭した。そんな自分にも、生きて何かを成し遂げようとするきつかけ…使命感を抱くことが出来るのだと。

今にも涙を流しそうになってしまった彼は少年と約束する。

きっと、少年に胸を張れるような生き様を見つけ、その時は最初に少年へ打ち明けるのだと。

だが、その約束は果たされる事はなかった。

翌日、村の住民全てが行方不明となる事件が発生してしまった。

必死に住民の：否、少年の行方を捜索し、たどり着いたその先で彼が見たのは、地獄としか言い表せない光景だった。

ある者は骨のみとなり、またある者は手足を魔物のそれに付け替えられていた。

後に怪魔獣人と呼ばれる怪人を誕生させる実験場であったその奥に、少年だった者がいた。

首から下を失い、培養液の中でずっと閉ざされていた目を開けた、少年の頭部が。

彼は実験に関わった者を全て殺した。

命乞いをする科学者も、実験に加担していた帝国の幹部も。

権力と地位を引き換えに彼が生まれる前から研究資金を提供して

いた両親を始めとした一族全員を。

地凶にも存在しない小さな村の住民であれば、この怪魔界から消えても支障はない。そんな理不尽な理由で彼が尊敬する少年の命を奪ったことを、彼は許せなかった。

そしていつしかこう考えるようになってしまった。

少年が願った誰もが幸福でいられる世界を、憧れである少年の『生』を奪ったクライシス帝国：水面下で戦いを世界に広げようとする者達を皆殺しにしてみせると。

平和を脅かす『戦う者』であれば誰であろうと、何者であろうと根絶やしにすると。

彼が決意したと時を同じくしてクライシス帝国に反旗を翻す者：自分と同じ星騎士の称号を持つ者達が接触を求めた。

それぞれの思想は異なろうが目的は同じ。そう呼びかけられた彼は同意する。

クライシス帝国が滅びた後、彼等をも殺すという決意を秘めて。

彼は思った。

こんな自分でも、どのような形であれようやく『使命』を持つ事が、生を実感する事が出来るのだと。

彼は理解している。

こんな自分を、あの心優しい少年は決して認めず、許さないのだろうと。

それでも、もう彼は止まることはできない。

彼：水星のマキュリアスがアルスやジュピトルス達と共に他の星騎士と壮絶な戦いを繰り広げるのは、この数日後であった。

マキュリアスが得た新たな肉体は、怪魔界とは異なる世界の英雄が元になったようだが、彼にはその人物とどのような共通点があるかなど興味はない。せいぜい、自分の立場に何かしら思うところがあつた程度なのだろうと結論づけたマキュリアスは、自分を解き放つた言葉にある『間桐光太郎』という人物を捜す事なく、夜の港へと訪れていた。

そこで見かけたのは、黒ずくめの男たち：暴力団らしき者達と外国人による拳銃密輸の場面。

マキュリアスは深く溜息を付いた。

ああ、この世界にも少年が願う平和を蝕む害虫が生息しているのだ

と。

掌に鎌剣を顕現させたマキュリアスの取った行動は、怪魔界と変わらない。

平和を壊そうとする者は、皆殺しにするだけだ。

人間共の解体には、10秒もかからなかった。

「ホホホホ……見事な手際ですねえ。流石はマキュリアスです」

「……………」

うんざりとした表情を浮かべ、鎌剣の先を突然現れたかつての共犯者へと向けるマキュリアス。怪魔界で起こした謀反はあくまで帝国を滅ぼすまでの利害の一致であり、慣れ合うつもりはさらさらでない。少年の望む世界に、誰よりも殺戮を好む存在をこの機に始末してやるうかと考えた途端、カエルのような風貌を持つ男はある提案を持ち掛けてきた。

「私は間桐光太郎を知っています。そう、かつて貴方が認めた少年が愛した怪魔界の平穩を邪魔する輩の、ね」

ピクリ……と僅かながら目元を動かしたマキュリアスの反応に口元を釣り上げるジュピトルスは説明を続ける。

「怪魔界が危機的状況にあるのは貴方も知っているでしょう。その危機を回避するためにこの星への移住が計画されているのですが、それを邪魔している存在こそが間桐光太郎なのです」

「そう…崩壊の危機に面している怪魔界の『平和』への一番の弊害となる男なのですよ…」

「……………」

マキュリアスが聞き逃す事の出来ない言葉を選び、標的を自分からクライシス帝国の怨敵へと向けさせようとするジュピトルスは、彼が何のために帝国と決別した知っている。

知っている故に、マキュリアスが狙うべき敵は自分ではなく、間桐光太郎…仮面ライダーBLACK RXへと向くという確固たる自信があつてこそ、その名を告げたのだ。

事実、クライシス帝国の地球侵略作戦を妨害し続けている限り、怪魔界による支配した後に訪れるであろう『平和』は遠のいていく。ならばマキュリアスは間桐光太郎を見逃すはずがない。

だが、ジュピトルスはあくまでこの男を利用するだけだ。

間桐光太郎を、自分の考えた方法で倒す為に…

「いいだろう。目覚めたばかりのワタシにはまだ状況の把握ができていない。だから今回ばかりは君の口車に敢えて乗ってやる」

「話が早くて助かりますねえ。では、まず手始めに…」

「あなたは…ペル、セウス…」

かつて神話の時代に自分の首を跳ね飛ばした英雄の名を口にしたメドゥーサは鮮血をまき散らし、音を立てずに地へ沈んだ。

滑らかな紫色の長い髪を自身の血で染めていく女性を見下ろすマキュリアスの胸に、自身では分からない痛みが走る。まるでメドゥーサを倒した事に、悔いているかのような罪悪感が胸に広がるが、それでも一瞬であった。

(この身体の持ち主の痛み…といった所だろうか)

鎌剣を消失させたマキュリアスは自分のものではない痛みへ興味をしめさないまま、自分の行動を影に隠れ傍観していた者へと告げる。

「終わったよ。君の言う通り、まだ殺してはいない」

「ホホホホ…これは重畳」

公園に設置されている遊具の影から現れ、相変わらずボロ布で身体を覆い隠すジュピトルスは意識を失ったメドゥーサの髪を驚掴みし、持ち上げて見せた。それに合わせて僅かながら顔が地面から浮くメドゥーサの表情が痛みによって歪むが目を覚ます様子が無い事から確かに意識を失ったと判別したジュピトルスはギョロリとした眼球をマキュリアスへと向ける。

「さて、では最後の仕上げに必要なもの…それも貸して頂いてもよろしいですか？」

「……………」

ニヤニヤとするジュピトルスに目を細めるマキュリアスは無言のまま懐から布袋を取り出し、ジュピトルスへと投げ渡した。異様に爪が伸びた手で掴んだジュピトルスは約束とは言えど、あっさりと自分に『宝具』を譲渡したに疑問を抱くがマキュリアスは予測していたかのように答えた。

「ワタシはそのようなモノが無くても今持つ『宝具』だけでも十分に戦える。そう…君をこの場ですぐにも殺すこともね…」
「恐ろしい御方だ…ならば、さっさと要件を片づけるとしましょう」

手にした布袋へ自身の魔力を流し込み、禍々しい輝きを放ち始めた。袋から放たれる波動を意識を失っても感じたのか、メドゥーサは震え始めていた。

「そういえば、先ほど随分と君らしい作戦を聞かされたが…他の者達はどうするつもりだ？」

「ご心配には及びません。『協力者』がしっかりと動いてくれています」

「そう…しっかりとね…」

「おーい慎二ー！」

「おっそいんだよ！待ち合わせに10分も遅れてんじゃん!!」

「男のくせにそんな細かいこときにするなっつての。自分もさつき着いたばっかりとか、気の利いたセリフ言えないの？」

「こつちの都合に有無を言わさず約束をこじつける相手じゃなかった

らなあ…」

新都のバスターミナル

ゆつくりとした足取りで現れた同級生である美綴綾子の発言に苛立ちを隠そうともしない間桐慎二は人差し指で米神を突きながら腕時計を睨む。これから向かう喫茶店とはあるイベントの実施中により昼時を過ぎても込み合っているのだと噂で聞いたことがある。

並ぶ時間も含めて、1分でも早く解放されたい慎二にとっては1分という時間すら惜しいのだ。

怪魔界でのいざこざがようやく落ち着き…いや、まだ若干懸案事項が残っているがやつと魔導書を落ち着て読みふけると思った矢先、綾子からメールが贈られてきた。開いてみると…

『前ミーティングをサボった貸しの件、今度の休みで。返事は『はい』か『イエス』、もしくは『了解』しかきかないからね』

見の覚えのない慎二が『何のことだよ?』と返信した3秒後、彼の顔色は蒼白となった。

『部内どころか、学校中に妹を密室に連れ込んで泣かせた間桐慎二っていう噂、聞いてみたい(笑)』

眩暈を覚えた慎二は思い出した。そういえばガロニアが桜に変装して現れた際、綾子を撒く為にそんな口約束をしたような記憶が、わずかだが蘇る。

どうにかあの場から綾子を離す為の口実のつもりだったが、まさかこうもすっかりと覚えていたとは…さらに彼女の学校生徒への影響力を考えると本当に噂を流しかねない。

これはさつさとその約束とやらを果たし、いらぬ風評が広まる事を防ぐためにも慎二は不本意ながらこの場へと訪れる。だが、そんな自分へのダメージを気にしつつも、慎二は綾子が待ち合わせに遅れるという珍しい場面に出くわしていた。

毎度の弓道部の集まりや試合会場にはいの一着に到着し、遅れてやってくる連中へ叱咤する姿をよく衛宮士郎と見かけたものだった。今回に限って遅れてきた綾子へ問いただしてみたが。

「女子にはいろいろと準備があるもんなの！」

という力強い一言でこの話題は終了。足早に例の恥ずかしいフェアを実施中の喫茶店へと向かう綾子を追いかけ、慎二は納得しきれないまま付いていく他なかった。

余談ではあるが、綾子は家を出るギリギリの時間までどの洋服を着て行こうか迷っていたとかいないとか…

(にしても、これって本当に何なんだよ…?)

信号待ちをする中、隣で上機嫌である綾子に察知されぬよう慎二は胸ポケットに忍ばせた道具を弄る。

赤上武から『御守りだと思え』と言われ、取りあえず持ち歩いてはいるが使い道が未だにさっぱりであった。色々と使い道を試行錯誤

しても反応も示さないため、武の言う通り御守り程度にしか…いや、御守りとして機能するかも怪しい。

「なにポーっとしてんの？信号変わったよ」

「…ああ、悪い」

綾子に促され、信号を遅れて通過する慎二は取りあえず持ち歩く御守りへの思考は放棄し、目の前にある問題へと意識を向けるのであった。

数十メートル先にある建物の角から彼等の様子を伺う存在に気が付かないまま。

「ブヒヒヒヒヒヒ…あれが間桐慎二か…」

ボスツという鈍い音と共に少女の放った矢は的に当たる事なく、本来狙った箇所を囲う安土へと落下してしまう。

「…やっぱりまだ本調子じゃないみたいだな」

「はい…すみません先輩。折角のお休みなのに道場まで付き合ってもらって」

そう言っつて間桐桜は自分の射を分析する衛宮士郎へ礼を述べると困ったような笑みを浮かべる。怪魔界から帰還した桜は一時期体調を崩していたが現在は回復。弓の感覚を取り戻すために顧問である藤村大河女史の許可を得て弓道場へと足を運んだのだが、矢を放つの

はこれで3度目。そのどれもが的に当たる事無く安土へと沈んでしまっている。

「少し、休憩しよう。確か備え付けのお茶が切れていたはずだから外で何か買ってくるよ」

「あ、先輩。今お金を…」

「後でもいいよ。じゃ、しっかり休んでろよ」

靴に履き替えた士郎は校内の自販機のある場所へと向かう。道場の外へと出た士郎を見送った桜は弓を静かに床へと置いた後、まだ射ていない矢の中央を持つと射場の隅に設置されている縦長の箱…数十本の矢が収納されている矢立箱に向かい放り投げた。

「入っちゃった…」

桜の放った矢は他の矢で密集されている小さな隙間に音を立てることなくすつぽりと収まった。10メートル以上離れているにも関わらず…

(やっぱり…怪魔界で何かされて以来、なのかな)

指先を見つめる桜は、自分に起きた異常の原因をそう結論付けた。

一度クライシス帝国でガロニアの替え玉とされた際に、桜は記憶を上書きされ潜在能力を強引に引き出され、身体も成人にまで成長させられてしまっていた。光太郎や本物のガロニア達によってその元の状態に戻る事はできたが、地球に戻った直後に体調不良を起こしたが、それは実際には単なる不調ではなく、ガロニアであった時の『感覚』が元に戻った桜の身体に馴染まなかった為に起きたものであった。

浚われる前に比べ鋭くなった五感に、増大した魔力量。

身体は間桐桜に戻る事はできたが、能力はガロニアのままとなつてしまった桜は不安を覚え、以前とどれ程異なるかをこの数日間、誰にも言わずに試していた。

義兄によって作られた赤い手甲は怪魔界から戻る前と同じ要領で魔力を込めた途端に煙を上げ、術式が刻まれた爆発式の矢は番えた段階で燃え尽きてしまう。

さらには視力も『見え過ぎて』しまったのか、距離感がまるで異なっていたために的へと当たる事無く全てが外れてしまっていた。

この変化は一時的なものなのか、それとも永遠に続いてしまうのか…自分の知らぬ間に起こってしまった自身が身に着けた力に困惑する桜は、思わず光太郎の姿が浮かび上がる。

「光太郎兄さんも、こうだったのかな…自分が、自分でなくなっていく怖さを、いつも…」

その恐怖を、光太郎は幼いころに半年以上も一人で味わってきたと聞いている。今なら分かる。今まであった自分が、まるで世界から切り離されてしまったような戸惑いとこの力で誰かを傷つけてしまうかもしれないという自身への恐れ。

桜は無意識に道着の胸元を…武に託され、御守りとして紐で括り首から下げていたモノを抑える。

もし、武の言う通り御守りであるのなら、どうかこの力を抑えてほしいと節に願う。

そんな桜を、学校の屋上から見下ろす怪人の影があつた。

「間桐桜…俺好みの女ではないか…」

「ふむ…土郎殿は不在か」

武家屋敷の前で立ち往生する赤上武は顎に手を当て、今日の目的は果たせぬかと踵を返そうしたが、聞き覚えのある声に思わず立ち止まる。

「あれー？確か桜ちゃん家に最近暮らすようになったっていう確か…赤上さんでしたか？」

「む？..」

呼び止められたと振り返った先には、衛宮土郎の姉貴分であり、慎二・桜の通う穂群原学園の教諭である藤村大河の姿があつた。確か以前尋ねた際に挨拶を交わしたが、自分を『大河ちゃんって呼んでみて！』と何度もせがまれた記憶がある。

どうやら武の声に誰かを連想していたようだが、そこは土郎によつ

て制止されたが。

「今士郎は出かけているんですけど、何か用ですか？」

「いえ、少し野暮用といいましようか、しばし鍛錬の為に道場をお借りしようかと……」

「あ、なら中で待ちますか？私、合鍵持ってますし、士郎には後から言っておきますからー！」

「そんな……ここは家主に直接断りを入れなければ……」

「固い事言わない言わなーい！今開けるのでちよつち待ってて下さいねー！」

武の遠慮など却下し、門の鍵を開けようと鍵を取り出す様子に、思わず苦笑する武。

本当に、間桐家の人々からよく聞かされている通りにマイペースな人間だと。

本当に、よく化けていると。

「何者だ、貴様」

ピタリと、鍵を差し込んだ腕の動きが止まる。だが大河はにっこりと笑ったまま武の方へと振り返ると彼の言葉に動揺することなく、口を開いた。

「もく何の冗談ですか？やや、もしかして新手の遊びかなにかで——」

「先ほど俺を呼び止めた時、貴様は何の気配も発しなかった。ただの一般人である藤村殿が、絶つ必要のない気配をな」
「……………」

武の指摘に無言となった大河の表情から笑顔が消える。そして、だんだんと醜悪に顔を歪め始め…

「キイツ!!」

「ぐっ!?!」

突然武の顔に向けて手にしていた鍵やバックを投げつけられ、怯んでしまった途端に大河の腕が武の懐へと差し込まれる。瞬時に手を抜いた直後、大河はその場から飛び上がり、衛宮家の門の上から武を見下ろしていた。

「キキキキキキ…噂に違わぬ勘の鋭さよな…俺の変装を見破るなんて流石だぜ!」

口調どころか、声色すら変わってしまった大河…否、大河に化けた者が片手で弄んでいるモノを見て、武は思わず自分の懐をのぞき込む。

ない。

変身に使用するため、常に持ち歩いていたものが…

「貴様…ドライバーをツ!!」

「キキキツ!お前が変身する為にはこいつが必要だって事も調べ済みだ!さあ、これからかわいがってやるぜ…」

大河がその場で飛び跳ね、後ろ向けに反転し着地したその姿は――

「この最強の怪魔獣人、ガイナニンポー様がなあツ!!」

第66話

「…と、いった感じよ。できそう?」

「う…あ…うん」

大学の中庭で幼馴染みである紫苑良子から施された助言を受けた間桐光太郎はそんな曖昧な声を漏らす。

気まずい仲となつてしまったメドウーサと和解するため良子からのアドバイスを聞いてはみたが、果たして自分に出来るのであろうかと自信のない返答を見て、やっぱりなと良子はクスリと口元を抑えて微笑んだ。

「でもそうね。光太郎君には少しハードルは高かったかしら?」

「いや。でも、いつも間近で先生のお手本をいつも見ていたから何とかなるかもしれないな」

「もう…からかわないの!」

そう言つて頬を赤くする良子の反応に笑つて見せる光太郎ゆつくりと息を吐くと改めて感謝の言葉を述べる。

「ありがとうリョウちゃん。どうにかやってみるよ」

「うん、その意気よ。最初にも言った通り、光太郎君次第なんだからね?」

「うん!」

「——さま〜…」

「…うん?」

決意表明とそして力強く頷いた光太郎の耳に、ここにはいないはずである少女の声が届く。はて、あの子は確か家で勉強中だったはずではと光太郎が振り向いた先。

「光太郎兄様〜！」

「が、ガロニアさん…！」

自分に向かって駆けてくる少女…間違いなく桜と瓜二つであるガロニアだ。なぜ大学に、そして泣いているのかと疑問が次々に浮かび上がるが…

「あの子…桜ちゃんじゃ、ないわね？」

「えッ!？」

良子の言葉に思わず声を上げて驚いてしまった光太郎だが、自分の動揺した後で、今更だと思いつつもなぜそう思うかと尋ねてみた。

「ど、どうしてあの子が桜ちゃんじゃないと…?」

「うん…最初は桜ちゃんかと思ったんだけど、声も違うし、足の運びとか重心とか…」

と、常人ならばまず目に留まらない部分に関して指摘する良子を見た光太郎は、確か彼女の実家は空手道場だったな…という情報を思いですが、彼女はそれよりも決定的な異なる点を見つけていたようだ。

だがそれは余程言いづらいことなのか。良子は気まずそうに彼女の身体のある一点を見つめ、光太郎に察してくれと言わんばかりに横目で見てくる。

「あく…ほら、それは…個人差ということだ…」

「うん…そうよね」

ガロニアが桜と外見が唯一異なる点に関しては、現在間桐家でもタブーと化している。以前にメドゥーサと共に風呂へ入った時など、彼女はこの世全てが信じられないといじけてしまった程だった。

「光太郎兄様…どうなさったんですの?」

「いや！なんでもないよ…とこころで、どうして大学に？」

2人の思惑に気が付かないまま、ガロニアは光太郎の前で立ち止まると、涙を拭きながら順を追って説明する。

ガロニアの気分転換の為にメドゥーサが大学まで案内してくれた事。そしてガロニアが大学内の設備を見て夢中になっている最中に、メドゥーサが姿を消してしまった事…

あのメドゥーサがガロニアを置いて居なくなってしまうなどありえない。もしや何かあったのかと思案する光太郎だったが、まず蚊帳の外となった良子に説明を済まさなければならぬ。

「光太郎君、えっと…この子は？」

「あ、ああ！彼女はガロニアさん。うちの遠い親戚で——」

良子にガロニアの説明をする途中、光太郎のズボンのポケットから携帯電話が震えだした。ごめんねと良子に断り携帯電話の画面を見ると、「非通知」の表示。嫌な予感を抱きながらも通話のボタンを押して耳に当てた途端、その予感は当たる事になってしまった。

『…間桐光太郎だな』

「その声…貴様は」

『これから言う所に、1人で来い。身内の命が大事ならな…』

「…!?!」

その後、指定の場所を告げた相手に電話は切られた直後、光太郎は慎二・桜、そしてメドゥーサの携帯電話へとコールするが、出る様子がない。最後のメドゥーサへの連絡が留守番電話への音声へと切り替わった時点で通話を切ると、光太郎を心配した様子の良子に困ったような笑みを浮かべる。

「ごめん、少し用事ができちゃったんだ」

「大丈夫、なの？」

「大したことはないさ。今日はありがとうね、リョウちゃん」

「あ、待ってよ光太郎君！」

ガロニアを連れてその場から駆け出してしまった光太郎の名を叫ぶ良子であったが、光太郎は耳を貸すことなくその場から離れていくのであった。

「そ、それではメドゥーサ姉さまは……！」

「うん。クライシス帝国に捕まった可能性が高い。それに、慎二くんや桜ちゃん達の身にも何か起きているかも……」

家にいるはずであったメドゥーサとガロニアがここにいるということは、全員が外に出たという事になる。赤上武に関しては変身が可能となったのでひとまず心配はいらないと考えた光太郎は、相手の要求どおりに告げられた場所へと行くと決めた。罨であろうが、今は踏み込むしかない。

「ガロニアさん。これからここにライドロンを呼ぶ。君はライドロンの中に隠れていてくれ」

「兄様。けど……」

光太郎の意図は理解できる。怪魔界の一件で力を使えなくなってしまうたガロニアが光太郎と共に行動しても、状況を悪化させてしまうという事を。それでも、本来なら敵である自分を受け入れてくれた人々の為に、何かをしたいと考えるガロニアの肩に、光太郎は優しく手を置いた。

「大丈夫。必ずみんなと一緒に帰って来るから、ガロニアさんは安心

して待っていてくれ」

「絶対…ですよ？」

「ああ、約束する！」

涙目で見上げるガロニアに力強く頷いた光太郎は、その後大学近くに到着したライドロンにガロニアが乗り込み、間桐家の『倉庫』に向かうのを見届けると、敵の指示した場所へと向かう。拳を強く握りしめて…

「ぐっ…！」

「キキキ…頑張るじゃねえか？」

短く声を上げた赤上武は身体を真横に転がし、どうにか敵の攻撃を回避する。片膝を付いて息を整えようと短く呼吸をするが、状況は悪化するばかりだ。そんな武をあざ笑う怪魔獣人ガイナニンポーは変わらず衛宮家の屋根の上から見下ろし、その手にある戦極ドライバーを弄んでいる。

しかもただ見ているだけではない。

「キキ…さらに10体追加だ」

ガイナニンポーが自身の頭部から数本の毛を抜き取り、口の前に翳すと息を吹きかける。ガイナニンポーによって飛ばされた白く細い毛は本人から離れていく度にみるみる太く、大きくなっていった。

地上へと接近する間際に四肢が生え、着地する頃にはガイナニンポーと瓜二つである猿型の怪人が奇声を上げて武を取り囲むので

あつた。

「これで、何匹目だ…」

全く面倒など立ち上がる武は自分へジリジリと迫ってくるガイナニンポーの分身怪人に向けて構えを取る。

ドライバーを取り戻そうとガイナニンポーへ跳びかかった際、突如怪人の背後から別の怪人が現れ、武を捕獲すると衛宮家の中庭へと叩き付けられてしまった。痛みには耐えながら顔を上げる武の目に映つたのは、中庭で待っていた獲物が現れた事に狂喜する分身怪人と、敵陣の奥…障子が全開となった客間の中で倒れている女性…藤村大河の姿があつた。

いや、定期的に呼吸…というより豪快なイビキを立てている様子から敵に眠らされた訳ではなさそうだと安堵する武

事実、当初は衛宮邸内にいる藤村大河を襲い、彼女の意識を奪った後にその姿を借りる予定だったガイナニンポーであったが、侵入してみれば標的は休日であるという気のゆるみのためか、大の字になって昼寝をしていたのである。

そして武は自分の心配を始める。自分の周りには分身怪人数十体と、胡坐をかいてニヤニヤと笑う敵のボス猿一匹。状況だけを見れば最悪だ。

「キツキツキ…気づかれた時はどうすればいいかと思つたがこりや楽に任務をこなせるなあ」

「任務…だど？」

睨みながら聞き返す武の姿が余程愉快だったのか、ガイナニンポーは指先でドライバーを器用にクルクルと回転させながら自分の目的

を告げる。

「ああ！俺に下されたのは貴様の抹殺！変身さえしなければお前はただの人間にしぎないからなあ。RXなんざ相手と考えたらぞつとするぜい。それに、弟分たちなんざもつと楽なことだしなあ」

「ならば…狙われたのは俺だけではないという事か」

「おおう、いい勘してるじゃねえの。そうよ！今頃ボスガン様の命令で今頃トンドンやパークスは非力な小僧と娘を追い回している頃だろうぜ！」

「慎二殿と桜殿か…」

段々と読めてきた敵の狙い。なら、もうこの猿に翻弄される時間など1秒ですら惜しいと考えた武は懐へと手を伸ばす。

その手に握られているのは、血のように紅いブラッドカチドキロツクシード。

「おいおい何のつもりだい？そいつを使うための道具はここにあるんだぜい？」

「ああ。確かに変身するにはそのドライバーは必須だな。だが、それだけが能ではない」

武の意味深な言葉が理解できず、圧倒的に有利であるはずのガイナニンポーは息を飲む。一体、何を企んでいるのかと…そんな敵の情緒など構いもせず、武は掲げたロックシードのスイッチを押し込み、解錠した。

「見せてやろう。異界の神に託された力を…」

「来たか…」

薄暗い倉庫の鉄扉がゆっくりと開かれる。背後の日光によって大きな影を作る人物の姿を見たボスガンは長身の身体に不似合いである小さな口元を歪ませると、現れた敵：間桐光太郎と十分な距離を取って相対した。

「フフフフ…ここはよく来たと褒めてやろうではないか」

「ボスガン…い！」

今までと違い、幹部本人が出張ってきた事に警戒を隠せない光太郎だが倉庫内に踏み込んだ途端、鉄扉が勢いを付けて閉鎖されたと同時に倉庫内全ての窓のシャッターが下り始めた。

どうやら光太郎をRXへと変身させる日光を完全に遮断するための行動のようだ。前回のゲドリアンは単なる暗幕だったが、これを突破するには骨が折れると考えながらもまずは敵の狙いを知らなければない。

光太郎は電話で聞いた内容：家族の名を使ってまで自分をここまです呼び寄せた理由を問いたです。

「ボスガン…俺に一体何の用だ？」

「知れた事…クライシス帝国の宿敵である貴様をこの私が、クライシス貴族の名の元に打ち倒すためだ！」

敵として真つ当な理由だろう。だが、光太郎にとっては度し難い理由であった。

「俺が狙いであるなら、俺だけを狙えばいい。だがその為に慎二君やさくらちゃんの名を使い呼び出すなど、許さん！」

「フン…誰が名前だけで貴様を炙り出すと言った…？」

右手を前方に翳し、左手を腰に添えた構えに移行した光太郎の動きが止まる。ボスガンの言葉と動揺したと見抜いた表情が、光太郎に嫌な予感を引き立てさせた。

「…どういう事だ？」

「よく聞け。今貴様の身内1人1人に我が怪魔獣人の刺客を差し向けている。ある程度痛めつけろと命令してな」

「何ッ!？」

「それに先ほどの報告によれば、赤上武から変身するベルトを奪い、優位に立っていると耳にしているなあ」

「武君が…」

「間桐光太郎よ…赤上武にも2人同様、『痛めつける』という命令しか下していない。命令を『殺せ』と変えない為には、貴様はどうすればいいか分かっているな？」

「……………」

醜く口元を歪めるボスガンの言葉に無言となった光太郎はゆつくりと構えを解く。光太郎の姿に高笑いするボスガンはカツカツと靴音を鳴らし、猶も無言で通す光太郎の前に留まると腰に差していた剣を鞘ごと引き抜き、鞘の先を光太郎の側頭部へと叩き付けた。

土埃を立てて滑っていく光太郎は立ち上がるようにするが、その背中をボスガンに踏みつけられてしまう。

「フハハハハ…言い様だな間桐光太郎！いいか、少しでも抵抗する素

振りを見せてみる。その時は貴様の家族が血を見る事になるのだからなあ!!」

ボスガンは無抵抗の光太郎に鞘に納めたままの剣を何度も、何度も叩き付けた。この場にはいない慎二達の命は自分が握っているという光太郎へ最も有効であり、一番に彼が憎む手段をもってボスガンは攻撃を続ける。

非常照明しか点灯しない空間に、光太郎の身体に打ち込まれる鞘の音だけが響いていた。

(さい、あくだ…)

冷たいアスファルトに転がる間桐慎二は全身に走る痛みで痙攣する自身の指を見つめながら、心の中でそうぼやく。

同級生である美綴綾子と外出している最中に、物陰から自分達を見

る異形の姿を発見できたのは、全くの偶然だった。

携帯電話を操作する振りをしてカメラを起動し、自分を見つめるブタのような怪人を撮影した慎二は咄嗟に行動に出る。急用ができた綾子の返事を待たずにその場から駆け出し、裏通りを通過すると黒い服をきた男たちが追走を始めた。

逃げれば逃げる程人数が増していく男たちに業を煮やした慎二は付近の地下駐車場の看板を見つけ、迎え撃つと方針を決定。

一足先に駐車場の入り口へと辿り着くと、手持ちであった極細のワイヤーを地上から数センチの位置に張り、トラップを仕掛ける。

駆けこんできた男2人は設置されたワイヤーで盛大に蹴躓いた直後、起きるのを待たずにスタンガンを首元に当てて電気ショックをお見舞いさせる。ビクビクと身体から煙を上げて痙攣させる男たちの顔から皮が剥がれ、クライシス帝国の雑兵、チャップの顔が現れた。

「やっぱりねえ」

スタンガンを収納する慎二は予想通り過ぎた敵の正体へ関心を向けることなく、移動を開始。続けて現れる人間に変装するチャップを閃光弾、トラバサミ、くくり縄など何処に隠し持っていたのかと疑問に思う装備で次々と湧き出るチャップを撃墜していく慎二は駐車された車の影に隠れ、チャップ達の足音に舌打ちしながら拳銃へ魔力の詰まった弾丸を補充していく。

「全く、しつこいったらないな本当…」

愚痴を零しながらもこの場へ未だ現れない怪人：義兄もいない今の状況でどう切り抜けるかを考える中、一番迎えたくない状況を告げる声が無人の駐車場へと木霊してしまう。

「ちよっと、話してよー！」

「ブヒヒヒヒヒヒ…元気のいい小娘じゃねえか！」

(美綴…！)

巻き込まないように離れたはずの綾子がなぜここに…：そう考えずにいられない慎二ではあるが、普段の行動力を考えれば自分を追ってきた途中でクライシスに捕まったという流れという結論に至る。

「小僧！随分とやってくれたなあ…だが、ここにいる娘を命が欲しければ出てくることだな!!」

(野太い声で随分とお約束な事を言ってくれるな…)

深く溜息をついた慎二は拳銃を床に置き、両手を上げて車の影から出る。出てくるよう言われた時に幾つか案を思い浮かべたがどれもがリスクが高い。最善の方法が、もう言われたままに出ていくしかなかったのだ。

「ほう、よく出てきたな。そんなにこの娘が大事か？」

「はあ？寝ぼけた事言わないでくれるチャーシュー野郎。僕はもう少し御淑やかな——」

言葉を待たず、チャップが手にしたこん棒が慎二の腹部へとめり込む。目を見開き、呼吸を強引に止められてしまった慎二へチャップ達の容赦のない攻撃が一斉に降り注いだ。

「ブヒヒ！そうだ、コケにされた分、存分にやり返してやるがいい！」
「し、慎二！慎二イ——!!」

あざ笑うブタの怪人…：トンドンが笑う中、腕を背後で縛られて身動きの取れない綾子は泣き叫ぶしか出来ない。そんな彼女の声を痛めつられながらもしつかりと聞こえている慎二は、ただ今の状況が気に

くわなかった。

(まったく、泣いてるんじゃないよ…普段僕が衛宮の馬鹿や遠坂に言われている時みたいに笑ってろってんだ。そんな顔…見たく——)

「どれどれ。今度は俺も遊んでやろうじゃあねえの」

「が…ああ」

顔や腕に青あざが広がる慎二の頭部を掴み、持ち上げるトンドン。ただの人間を痛めるけるという、簡単過ぎて疑いすらしてしまった任務だがこうも簡単に成功させてしまうとは、笑いが止まらない。自分など動かず、チャップだけでなく物足りただろうが、少しは働いた証を残しておかなければならない。

そう、兄貴分と同じ怪魔獣人の名を、『ガイナ』の称号を得る為に。

「そおらよッー！」

トンドンの掛け声と共に振り上げられた慎二は身近にあつた外国車のボンネットに背中から衝突。窓ガラスが飛び散る中、ズルズルとボンネットから滑っていく慎二は砂袋と似たような音を立てて、アスファルトへと落下した。

ピクリとも動かない慎二の額からゆっくりと血が流れ、小さな池を作っていく。痛々しい慎二の姿に、綾子は悲鳴を上げるしかなかった。

(さい、あくだ…)

痛め付けられた為か、感覚が酷く鈍い。このままもう一度同じ攻撃を受けたら、命はないな…などと冷静に自分の状態を分析する慎二に、嫌と言うほどに聞きなれた声が、聞いたこともない悲鳴が頭に響

いて来る。

「離して！慎二、慎二イ!!」

(うる、さいいな…何度も人の名前、連呼するんじゃない…よ)

そんなことされたら、立ち上がらなきゃならないだろ…と力を込めるが、まるで起き上がれない。それはそうだろう。日頃武によって訓練を受けている慎二ではあるが、それはあくまで人間の、高校生が許容できる範囲での話だ。

義兄のように超人的な肉体や力を持ち合わせておらず…ましてや魔力回路を持たない慎二には肉体を強化する事もできないのだから。

(なんだよ…こんな事、光太郎は毎回味わってるじゃんか…なのに僕は…立つことすら…)

己の限界を痛感する慎二は自身の情けなさに怒りがこみ上げてくるか、もう手を強く握ることすらできない。

(もう、待つしかないのかよ)

このような時、決まって来てくれる義兄…光太郎の存在が目には浮かぶ。颯爽と現れ、苦戦しつつもその力でこちらの予測を遥かに上回る方法で敵を撃退する、ヒーロー。

もう自分の役目は果たしただろう。後は、目が覚めた後に義兄の事後報告を聞くしかない、重たくなった瞼を閉じようとする慎二であつたが…

「トンドン様、この地球人の娘はどうします?」

「命令にはあの小僧を痛めつけるとしかなかったしなあ。まあいい、殺すか」

——おい、今何て言った？

——美綴を殺す？今日をただの休日として楽しんでた、ただ巻き込まれた美綴を殺すと言ったのか？

——そんな事、許されるはずがない！

「……」

不思議と腕に力が籠る。ガクガクと震えているが、ほんのわずかだが、慎二は自身の両腕で身体が持ち上げ始めた。なぜ、あの同級生の命が危うくなったと知った途端に力が入ったのかは分からない。

気に入くない。

あのブタの言った言葉が、とことん気に入らなかつたに違いない。そう自分を納得させる慎二は両腕を伸ばし切った時であった。

「がッ!？」

上半身が持ち上がったままでは良かったが、手首が身体を支えきれずにアスファルトへ吸い込まれるように倒れてしまった。

(は…ハハハ…本当に、アイツみたいに行かないな…)

ボヤける視界の中で、震えてながら自分の名前を叫ぶ同級生の顔が見える。普段の凛々しい姿からは想像できないような泣き顔が、何故か分かってしまう。そんな顔、させるつもりはなかったのに…

もう自分を嘲笑する力すらない事に悲観する慎二の耳に、カタン…と胸ポケットから落下したものが目に入った。

「こ、れは…」

それは武から御守り代わりにと渡された、異世界の人物から託された道具。今でも用途が分からず、ただ持ち歩き続けていたものに、慎二は必死に手を伸ばす。

(もう、何か出来るとしたら、これしか…)

照明に反射するそれに向かい、慎二は万感の思いと共に、震える指でつかみ取る。

(頼むよ…もう、これしかないんだ)

どう使うかは何度も試した。

間桐邸にある文書を読み漁り、義兄がライドロンの設計図を抽出したパソコンとどうにか接続し、メディアに頼んで分析すら頼んだこともあった。

それでも、この道具は何も答ええない。

そもそも、本当にこれは武の言う異世界の人々が扱う『力』であったのか？

疑問を抱きながらもこうして持ち歩き続けたのは、なぜか持ってい

なければならぬと感じたからだ。

理由は分からない。だが、その理由が明かされるとされるのなら、今なのだ。

(別に僕の身体を治せだなんて望まない。あの怪物を倒せとも頼まない。けど、せめて、せめて——)

「美綴の泣き顔だけは、止めてくれよ」

そう慎二が口にした瞬間、彼の意識は『此处』ではない『何処か』へと飛んでいき——

『彼等』と出会った——。

「ブへへへへ…さあどう料理してやろうかあ。若い女を殺すのは、ずいぶんと久々だからなあ。まずはコイツで血をたつぷりと流してもらおうかあ」

口を涎まみれにするトンドンが手にした武器：馬鍬と呼ばれる九本の歯を持つ熊手に似た武器を綾子にチラつかせる。チャップから解放されたものの、壁に追い詰められ、自身に迫る窮地に震えるしかなかった綾子だが彼女の反応は別のものへと変わる。

トンドンの背後の、さらにその向こうで立つ少年の名を呼んで。

「慎二…？」

綾子の声を聴いた途端に一齐に振り返るクライシスの一同が見たのは…自分達の手によってボロボロとなりながらも、依然として立つ間桐慎二の姿だった。

「よお…盛り上がつてるとこ悪いんだけどさ、そいつ離してくれる？
僕の方が先約なんだよ」

「お前…死なない程度に痛めつけてやったが、なぜ立ち上がった？」

「野暮な事聞くなよ。僕は女の子の前でみじめな恰好をさらしたくないの。まあ、そんな面じゃ永久に理解もできないだろうけどさ」

「…取りあえず俺を馬鹿にしているって事だけは分かったなあ」

トンドンが腕を上げた途端に慎二はチャップ達によつて囲まれてしまう。再び綾子に害を加えると脅すこともできるが、そんな必要もないだろうと考えたトンドンと、慎二に逃げるようにと声を張ろうとした綾子の目が同じ場所へと留まる。

慎二の下腹部に、先ほどまで存在しなかった装飾品が…ベルトが装着されていたからだ。

「なあ美綴…これから起きること。学校の連中には言うなよ」

そう言つて、右手に持った『それ』を前方へと翳す。

「こう叫ぶの、結構恥ずかしいんだぜ…」

普段、真面目な綾子をからかう時と同じ笑みを見せた慎二は手にした『それ』の下部に位置するボタンを、人差し指で力強く押し込んだ。

《TRIGGERッ!》

一度聞けば暫くは忘れられない声を放ったそれ：見ればUSB端子に似た青い道具を慎二はベルトのバックルへと装填。

直後、心臓の鼓動にも思える待機音と、ベルトから放たれる青いオーラを放ちながら慎二はゆっくりと両手を左右へと伸ばし、両足を重なるような位置で垂直に立つ。

慎二の全身がまるで『T』を描くような姿になると、その言葉を静かに告げる。

「変身——」

その刹那、右手を左上に、左手を右下へと素早く突き出す。その際、左手によってベルトの一部が倒され、再びあの声が周囲へと響き渡った。

《TRIGGERッ!》

ベルトから放たれたエネルギーが慎二の全身を包んでいく。

青の装甲で全身が包まれ、左胸に特殊な形状をした銃を形成。

最後に顔を包んだマスクには赤い巨大な複眼と、『W』の文字を連想させるアンテナが額へ出現する。

変身を完了させた慎二の姿に戦慄を覚えたトンドンは、あの名を。クライシス帝国の怨敵の名を口にしてしまう。

「か、仮面ライダーだとッ!？」

敵が動揺する中、未だ状況が視えない綾子は先ほどまで自分を追い詰めていた敵が慌てふためく存在を都市伝説としか知らなかった。その存在が、今日の前にいる。

「仮面ライダー…慎二が?」

敵や綾子の言葉を聞き取った慎二は、床に散らばったガラスに映る自分の姿をみて、なるほどと唱えると同時に、左胸に装着された武器…トリガーマグナムを手を取った。

「なるほどね…ま、僕が名乗るなんて烏澁がましいけど、お前たちをビ

…」
ビってくれるんならそう名乗るかな？さっきから煩い声にちなんで

「仮面ライダー…トリガーってね」

慎二は、その銃口を敵へと向け。

「覚悟しろよ…」

「^{ターゲット}標的は…お前だ！」

第67話

「うわあああああああああッ!?」

絶叫と共にまるで底の見えない暗闇に落ちていく感覚に見舞われる間桐慎二。

慎二は直前までクライシス帝国の刺客、トンドンや雑兵チャップ達の手で痛めつけられていたが、懐から落ちた青いUSBメモリに似た道具に触れた途端、急に慎二の周りは闇に包まれると落下を開始。

止まる事無く落ちていく慎二であったが、逆に疑問が浮かぶ。

このようなところに落ちているのは勿論だが、重力がある限り、落下する速度は次第に増していくものだ。

だが、今の自分は一定の早さで真下へと落ちており、今以上に速度が上がる様子はない。

「だからって、ピンチなのは変わらないじゃんかあッ!?」

折角不可思議な状態であると気づいたところで地に足を付けられないようでは意味がないと絶叫する慎二は先ほどのダメージも重なり叫ぶだけでも身体が痛む。

だからだろう。このような状況で横から声を駆けられたことに、ただ驚くしかできなかつたのは。

「今自分が陥っている状態を分析した上でさらに否定の言葉へと繋いでいく…なるほど、これがアキちゃんの言っていた『乗りツツコミ』というものか。興味深い」

「…!？」

思わず声の聞こえた方へと顔を向ける慎二の視界に映ったのは、少年だった。

跳ねた黒い髪をクリップで止めているという適当なセットにストライプの長袖の上に袖なしのロングパーカーを纏った少年は顎に指を当て観察するように慎二を見つめている。

慎二のすぐ隣で、同じ速度で落下しながら。

「な…!？」

「ふむ…恐らく聞きたい事は山ほどあるだろうがもう少し我慢したまえ。そろそろ『辿りつく』はずだ」

「なにを言ってる——痛ッ！」

少年の言う事がまるで理解できない慎二が食って掛かろうとした直前、固い感触が慎二の背中へと伝わる。今さっきまで体感していた落下中からは考えられない程に身体へ走る痛みは大きくなり、椅子から転げ落ちた程度だ。

なぜここまでダメージが少ないのかと疑問を抱く前に慎二は自分の落ちた周辺へと目を向ける。薄暗い照明に照らされるその場所は、何かの格納庫なのだろうか。

金属製の階段の上には統一性がまるでない記述がされているホワイトボートに、並べられた簡易テーブル…ここは自分が踏み込んだ地下駐車場ではないことだけは理解した慎二へ、あの少年が片手にハードカバーの本を片手に手を差し伸べていた。

「やあ間桐慎二。君の事はここに来るまでに検索済みさ」

「検索…？」

訳のわからない言葉を放つ少年の手を掴み、立ち上がった慎二だったが不意に違和感を覚える。先ほどまでであった痛みがまるでないや、それどころか手や足を見ても間桐慎二の身体である事は間違いないが、『自身の身体』であるという感覚がないのだ。

妙な例えかもしれないが、自分が操作しているゲームキャラクターの視線で見ている…そのような感覚だ。

そしてこちらの内情を察しているかのように、少年は階段の上から慎二へと話しかけてくる。

「おかしな感覚であるのは当然さ。君が僕たちの渡した物にある条件を満たして触れた時、君の意識は『地球の意思』を通して限定的にはあるが『世界』を越えてこちらへとやってこれたんだ。だが意識だけが『こちら側』に來ても意味がない。なので、仮初ではあるが『惑星の本棚』にあるデータで君の肉体を構築した。だから、自分の身体ではない、という感覚は間違っていないよ」

「はつきり言うけどさ。全然わかんないよ」

「だろうね。そして君が今一番知りたがっているのはそこじゃない」
「……………」

「その沈黙は、肯定をみなそう」

慎二の反応を見て愉快であると言わんばかりな笑みを浮かべる少年は、網目の金属床を靴底で踏み鳴らすと奥へと進んでいく。目を細める慎二は、少なくとも自分に危害を加える事はないであろう少年の後を追いつ、階段を駆け上がると、少年は慎二が来るのを待ち構えたように、ドアノブを握っている。どうやら慎二が後を追つてくると踏んでドアを開けずにいたらしい。

「さて、君をこの世界へと呼んだ理由は、この扉の向こうにいる男に聞

いてもらおう」

「……………」

「そう警戒しなくても大丈夫さ。僕の相棒は、そんな危険な奴ではない」

そう言い切れるということは、余程信頼している相手なのだろう。だが初対面である人間にそこまで無警戒で会合するほど、慎二は愚かではない。こうして自分をまっていた少年にも、敵意は向けられていないと判断しただけで信用まで至っていないのだ。

この扉を開けたら突然銃撃が襲ってくることも覚悟をして、少年の開けるドアの向こうに見える景色を見据えた――

室内の空気を整える為にゆつくりと回転する天井のファンに、恐らく持ち主の趣味で持ち込まれたダーツ・ビリヤード台を始めとしたレトロなゲーム類。客を持成すよう設置されたソファアーやテーブルを窓ガラスから照らす陽の光が優しく照らしている。見るに、どこかの事務所なのだろうか。

「連れてきたよ。彼が門矢士の言っていた――」

室内を見回す慎二を他所に、さらに奥へと進む少年の動きが止まる。表情も慎二に見せた掴みどころのない微笑みが一変。無表情のまま固まってしまっている。

様子がおかしいと首を傾げる慎二は少年の背後から部屋の奥を覗いてみると、その部屋には英文の背表紙で並べられた本がズラリと佇む本棚に、白と黒…二色の正方形に交互に配置されるチェッカー模様の壁。

その壁を背に、大きなデスクに座る男が1人…

「グス…ま、まさか…こんな展開になるなんてよお…」

ティツシユボックスを片手に、テレビを眺めてオイオイと泣きじやくっていた。

「ちよつと待っていてくれ」

慎二が立つ客用の部屋から大泣きする男の部屋へと一歩踏み込んだ少年は部屋を隔てるカーテンをシャツという切れの良い音を立てて隔てると、男の元へと向かっていく。

状況がまるで掴めない慎二には、カーテンの向こうから聞こえる2人の会話へと耳を傾けることしか出来なかった。

『何を見つともなく泣いているんだい?』

『いやな。亜希子の奴が前々から言ってた泣けるドラマつてのを見てたんだよ。最初は下らねえと馬鹿にした俺が愚かだったよ…』

『創作物に対して感情移入とは…やはり君のハーフボイルドは相変わらぬか』

『んだよ、ケチ付ける為に話かけたのか？依頼も一通り終わったんだし、今日はこのまま…』

『いや、門矢士の言っていた世界からの客人がそこで待っているんだ』

『ハアツ!?バカお前そういう事は先に言えつてのツ!?!』

『やれやれ…』

少年の呆れたと言わんばかりな呟きの中でドタバタと物を動かす音が立て続けに響いている。何だろう、散らかった部屋へ義妹が向かっていると察知した義兄の行動と同じパターンだなと途方に暮れる慎二。

ようやく音がやんだと同時にカーテンが開かれ、少年が苦笑いで「待たせてすまない」と小さい謝罪を聞いて、慎二は部屋へと足を踏み入れる。デスクの向こうにあるチェアをゆっくりと反転させ、ソフト帽で視線を隠す男がゆっくりと口を開いた。

「よお…待っていたぜ」

空気が、まるで違う。

立ち上がった男はソフト帽を片手で押さえながら、縁の下から覗かせる鋭い視線を向ける。男の放たれる迫力に、常人ではただならぬ気配と立ち振る舞いに威圧されてしまうだろう。

あくまで常人ではあるが。

「なに気付ってんのおじさん？全然決まんないよあんなの見ちやった後じゃ」

「コラアツ!!誰がおじさんだ誰がツ!!」

慎二の一言ですぐにポーズが崩れてしまった青年はドラマを見て号泣していたと同様に感情を爆発させる。こいつはあれだ。遠坂と同類だ：と心中で嘆きながら慎二は深く溜息をつく。青年とのやり取りを傍観し口を押えて笑いを堪える少年を睨みながら頭をガシガシを搔くと自ら尋ねる方針へと決めた。

「これの正体、アンタなら知ってたよな？」

そうやって彼等に見せつけるように掲げたのは、青いUSBメモリ。赤上武に渡されたメモリを目にした男の表情は変わる。先ほどの見栄を張った気取りとは違う、本当に鋭い視線だ。

「いいぜ…説明してやる。お前が手にした、記憶の力についてな」

青年の見せた表情に今度こそ息を飲む慎二は、青年が語るメモリの秘密に、茶々を入れる事なく聞き続けた。

ガイアメモリ。

地球の中にある様々な生物や物体の『記憶』と『力』を内包した生体感応端末。使用する人間に大きな力を与え、超人へと変える危険な道具であった。

それぞれに固有能力を宿しており、火を操り、その名に関する動物と同じ肉体を得るなど様々ではある。そして長期間使い続ければ使用者の精神が汚染され、力を振るうだけの存在と成り果てる可能性すらあるのだ。

「…そんな物騒なもん、うちの居候に預けたって事」

「力は所詮力だ。使用する人間の心によって、そのあり方は変わってくる。そんなの、お前さんが一番わかっていることじゃないのか？ 仮面ライダーの家族として」

指を鳴らし、自分を指さす青年の指摘に顔を逸らしてしまう慎二。どうやら自分だけではなく、義兄の情報までが伝わっているようだ。

「そこで質問するよ間桐慎二。君は偶然なのか必然なのか。君の言う物騒な力を持ったメモリを手に行っている」

「君は、その力をどう使う？」

「……………」

尋ねられた少年の質問に、慎二は黙って思考する。これは、試されているのかも知れない。強靱な力を手にすることが出来るのなら、使い道は人それぞれだ。義兄のように正義の為に使うも、悪を成す為に利用するも、人それぞれ。

それも、恐るべき力を秘めた道具と知った後ではガイアメモリに対する印象は大きく変わる。このメモリがあれば、力が手に入る。ならばと、慎二は口元を釣り上げて応えた。

「そんなの決まってるじゃん。せっかくある力なんだ。好きなように、有効的に使うしか他ないだろ？僕自身の為にもね」

「なるほど…ガイアメモリの特性を聞いた後としては、合理的な答えだ」

「……………」

慎二の解答に質問した少年は、肯定しながらも期待した解答とは異なる内容に落胆を隠せない態度であり、一方の青年は慎二の言葉を目を閉じ、口を開くことなく聞き続けていた。

どうやら慎二にある可能性を見て質問をしたようだが、慎二から出た言葉は今までガイアメモリを悪用した人物たちと同じだったのかも知れない。当初は破壊以外の目的で使用しても、結局はその力に溺れ様々な末路を見てきた彼等にとって聞きなれた言葉であったは

ずだろう。

だが、慎二の解答はそれだけではなかった。

「そりやそうだろ。もし、これで僕が強くなるってんなら…」

「美綴の泣き顔を…とつとと止めなきやならないんだ」

それが、慎二の本音。

大人しく説明を聞いていたのも話をさつさと進め、元の世界へと戻るためだ。恐らく彼等はガイアメモリを所持していた自分が使うに相応しいか確かめる為にこんなまどろっこしい手を使い、別世界へと呼び出したに違いない。

このまま先ほどの問答でガイアメモリの力を使用できるのならば御の字。だが、彼等の判断で使用できないのであればそれまでだ。

だからこそ慎二は見繕うことなどせず、ガイアメモリに対する印象を隠さずに告げた。青年の言う通り、力は所詮力。あれば有効に使うし、なければそれ以外の方法で切り抜けるしかない。

しかし、慎二にとって誤算であったのは、1秒でも早く話を切り上げたい為に、本音を漏らしてしまったことだった。

（あれ？今僕えらく恥ずかしい事言わなかった…？それに、何で美綴の名前を…）

自身の発言に耳を疑った慎二が慌てて訂正しようとするも既に遅く、慎二の発言にキョトンとした少年の顔は見る見るうちに悪戯小僧のような笑みを浮かべ、さらには青年は目を見開き、急に立ち上がると表情を強張らせて慎二へと迫った。

「お前ツ!!」

(な、いきなり殴るとか……!)

慎二の肩を掴んだ青年が腕を振り上げる姿を見た慎二は思わず頭上で腕を交差させ、防御の体制に移る。まさか自分の言った事が気に入らないが為に暴力で……と衝撃に備えるが未だに痛みはない。痛みがない代わりに、慎二の腹部で金属同士が接続された音が響く。

ゆっくりと目を開けて見れば、青年の振り上げた手には機械仕掛けのバックルを掴んでおり、それを慎二の下腹部へと当て、装着させていたようだった。

そのバックルを上から見上げると、何かの挿入口が右側にあるのみで、左側には何もない、左右非対称という造形だ。

それに、形は異なるものの、バックル……否、ベルトには慎二が良く目にしたものと近いものを感じた。

「合格だ」

「は……?」

ベルトを装着させ、踵を返した青年はソフト帽を手で押さえながら告げた言葉に、思わず変な声を漏らしてしまった慎二へ、隣へ移動し

た少年が補足する。

「すまないね間桐慎二。彼はああいう渡し方しかできないのさ」

「渡すつて、このベルトを？」

「ああ。恐らく君は既に察していたと思うが、僕たちが君をここへ呼び寄せたのは、そのガイアメモリを託すのに問題がないか、試すためだ」

慎二の予測を敢えて口にする少年は、さらに続けた。それは慎二の本音をさらに明確化させる材料となってしまう。

「ごちらの世界へメモリの使用者の精神体を呼び寄せる条件：それは、『誰かの為に力を持ちたい』という思いに感応することだった。だが、その場しのぎの願いだったとも言い切れない。だからこそ君自身から、その使い道を聞きたかったのさ」

「ちよつと待つてよ！さつき言ったばかりだけど、僕が言ったのは自分の……！」

「そう。誰かを守る事ができる。そんな自分になるため、だろ？」
「っ……！」

もはや隠し切れない本心を気づかれてしまった慎二へ、再び顔を向ける青年は告げる。

「誰かを守りたいって気持ちは、恥じる事はねえ。力が有ろうが無かろうが、その思いがある限り、人間つてのは戦える。お前の兄貴に見劣るところなんざ、何一つないんだよ」

「あんた……いや、まさかアンタも……」

義兄である光太郎とも、武の持つドライバーとも異なる形を『それ』を持ち、さらに武の言う『協力者』とならば、彼等も、義兄と同じ……

その結論へと辿り着いたと同時に、慎二の手がアルファベットや数字の形をした粒子となって拡散し始める。どうやら少年の言っていた仮初の肉体が崩壊を始めてたらしい。

「有意義な時間だったよ間桐慎二。そのドライバーとメモリがあれば、君は十分に戦えるはずだ。美綴綾子を守る為にもね」

「全てを検索済みって本当だったよかよ…何もんだアンタ達？」

「ま、2人で1人の探偵つてとこだ。そして覚えとけよ慎二。どんな力を手になしようが、お前はお前である事を忘れるんじゃないぞ」
「はッ」

輪郭を失いながらも青年の言う事を鼻で笑う慎二は、メモリを2人の前へと翳し、宣言する。

「当たり前前の事、言わないでくれる？どんな力を手にしたって僕は間桐慎二っていう、魔術書を読む事だけが取り柄の人間だよ」

「それと…認めたって事とベルトの事…礼だけは言っておくよ」

「ありがとう」

不器用な感謝を述べた慎二の肉体は消滅し、彼の意味はガイアメモ

リとベルトと共に元の肉体へと還った。その様子を見守っていた少年は横目で隣に立ち、満足そうに頷く青年へと尋ねた。

「…良かったのかい？ 門矢士の頼みで予備パーツから組み立てたロストドライバーはともかく、異世界の人間にガイアメモリを託すなんて。それにあれはただのメモリじゃない」

「僕たちの街を一度は地獄へと変えた事に加担した悪魔の力だ」

少年の鋭くなった瞳を青年へとぶつげながら、過去に体験した戦いを思い出す。激戦の末に高笑いと共に散った敵が使用していた26のメモリが砕け散る様を、少年は確かに目にしていたはずだった。

だが、1つだけ破壊を免れ無傷の状態で見え、彼等の監視下へと置かれていたのだ。

「確かに、あのメモリのせいで俺達の街はたくさんの涙を流した。不安は拭いきれねえ。だが、あのメモリが残ったは、慎二に使われる今という時の為に生き残ったのかも知れない」

「今の為に…？」

「ま、俺の勘だがな」

「はあ…全く君らしい答えだ」

ニヤリと笑う相棒の、相変わらずな様子に溜息をつく少年も、あとは祈るしかない。

彼が、間桐慎二がトリガーメモリと共に戦い抜いてくれることを。彼の大切な人々を守る為にも。

「それじゃあ、僕たちは僕たちの仕事を続けようか、翔太郎？」

「ああ、頼むぜフィリップ」

「さあ、検索を始めよう。キーワードは——」

—— 『別世界』

—— 『魔術』

—— そして…

2人で1人の探偵…左翔太郎とフィリップ。

彼等は風の街、風都を守りながら異世界で起きている戦いへの助力を続けていく。

自分たちと同じ力を持つ新たな仮面ライダーの無事を祈りながら。

第68話

美綴綾子が間桐慎二という少年の存在を知ったのは、高校の入学式にまで遡る。

桜舞い散る中、新たな学校生活へ期待に胸を膨らませて参加した入学式に、ひと際存在感を放つ新入生代表であった遠坂凜。壇上に上がり、挨拶をしっかりとこなした後に親友となるべく少女よりも、綾子は次席である少年へと目を向けていた。

入学式までの待ち時間に振り分けられたクラス内で早速複数の女子生徒に囲まれ、どこの学校出身やら携帯電話の番号交換やらと嫌な顔一つ浮かべることなくヘラヘラと応じる姿を見て『なんて軽い奴』というのが第一印象。

彼が入試で遠坂に次ぐ成績を収めて合格したと知った時は、世の中どんな奴でも特技の一つぐらいはあるものだと思ってくれた感想を抱いていた綾子の見る目が変わったのはその後の事だ。

女性徒と共に下駄箱を抜け、どこか入学祝いに遊びに行こうなどと言う会話が響く中、当の慎二はまた今度ねとやんわりと断りを入れた直後だった。

急に立ち止まった慎二に「どうしたの？」と顔を覗き込んだ女子が小さな悲鳴を上げて跳び引いてしまう。靴を履き替えたばかりの綾子は慎二の後ろ姿しか見えなかったが、どうやら彼は女子が涙目となってしまう程の険しい表情を浮かべていたのだろう。

慎二の視線の先：校門の傍で黒紙の少女——背格好からして中学生に見える——が厳つい男2人に絡まれているようだ。遠目から見て少女は笑顔で男たちの誘いをスルーしているようだが、ついに痺れを切らした男たちが強引に少女を連れ出そうと手を伸ばす。

我関せずと遠くから眺め、そして通り過ぎていく男共の姿に呆れながら綾子は鞆を放り投げて駆け出していく。入学直後に暴力沙汰と

はいい噂が決して流れない事を覚悟しての突撃であったが、彼女が駆け出した直後に響いた男子の大声に思わず足を止めてしまった。

見れば先ほど鋭い視線で女子を泣かせた男子生徒、間桐慎二が校門に向かい歩きながら、携帯電話に耳を当てワザとらしく大声で会話をしている。それも、警察に向けてである。

少女に迫る男達の特徴と、学校の住所を大声で：校門の先どころか、部活中の先輩方もついつい注目してしまう程の音声に誰もが呆気に取られた事だろう。

通話を終え、携帯電話を耳から離れた慎二が動揺する男たちの前に立ち、あと数分で到着する旨を伝えると一目散に立ち去ってしまった。

後に知った事だが、慎二は通報する素振りしただけでただ携帯電話をかざしただけであつたらしい。

男たちを追い払った慎二は続いて首を傾げている少女の脳天へ手刀を叩き込む。不意打ちを受け可愛い悲鳴を上げる少女は痛む頭頂部を両手で押さえながら上目使いで慎二を見上げると、こんな会話を始める。

「な、何するんですか兄さん!？」

「何でじゃない！来なくていいって言ったのに何しに来た訳？せっかく衛宮の馬鹿以外に知り合いのいない高校受けて平和に過ごそうとしてたのに…いまので早速無駄な注目浴びちやっただじゃないか！」

「そ、それはごめんなさい…まだ中学の事気にしてたんですか？」

「あのなあ…卒業した光太郎達が『あれだけ』の事やらかした後で入学した僕らがどんな目で見られたか桜も身に染みてるだろ？」

「えつと…みんなから期待に満ちた眼差しを向けられてましたね」

「それだけじゃないだろ！尾ひれ羽ひれがついて、しかもどれもがあ

りえそうだから困る伝説作ってくれたおかげで僕は弟だってだけで3年間いろんな連中に絡まれたんだぞ！」

「でも皆さん兄さんの罫…頭脳戦でなんとかありませんでしたし」

「わざわざ言い換えなくていいよ蒸し返えさせないでよ…脱線したけど、入学祝なんて帰ってからできるんだからわざわざ桜が迎えに来る必要なんて…」

「光太郎兄さんも来てますよ?」

「だから何だよ!?!じゃあさっきの連中追い払うのだって光太郎がすればよかつたじゃん!その光太郎はどこほつつき歩いてるんだよ!!」
「慎二兄さんの担任の先生に挨拶してくる!つてさっき校門を飛び越えて…」

「どうしてその発想に辿り着くんだよ普通に入れよあの駄兄!なに人様の入学初日に身内が不祥事起こしてんだよ!」

『……………』

先ほどの男共を追い払った姿を吹き飛ばしてしまう会話劇をかます間桐慎二と、その妹なる桜。その内容からしてどうやらもう一人、兄である人物が学校へと侵入しているようだ。

慎二を取り囲んでいた女子達を含め、一部始終を傍観していた生徒一同はただただ妹の言葉に絶叫する慎二を呆けた顔で見つめ、棒立ちすることしか出来ない。

さらに言えば、学校の窓から桜を発見し、ナンパをしかけた男に何かの狙いを定めていた遠坂凜も同じ状況にあったらしい。

その後、職員専用の出入り口から姿を現した青年…慎二の兄である間桐光太郎が入学おめでとう!と走りながら近寄ると祝福された本

人は手に持った鞆を顔面へと叩き付けられてしまう。

見ているこちらが痛いと呼びたい程の衝撃を受けたにも関わらず、光太郎はけろりとしておりちよつとしたざわめきが起きたが、そんな事は光太郎と慎二の会話で吹き飛んでしまう。

「どうしたんだい慎二くん？人の顔を鞆でぶつなんて、関心しないよ？」

「人道説く前に自分の行動を顧みろよ！何学校に踏み込んでんだよ勝手！」

「いやー流石の進学校だね。俺の卒業した高校とは設備も大違いだ」

「僕は感想聞いているんじゃない！何で入ったかって聞いてんの!!」

「そうそう！慎二君の担任って、衛宮君の知り合いの藤村さんだったんだね。さつきも話ただけど、相変わらず愉快な人だね」

「頼むよ聞いてくれよ人の話を!!」

「どうしたの慎二くん？入学式で疲れちゃったのかい？」

「…もういいよそれで…」

意気消沈する慎二はこれ以上追求すれば自分が疲れるだけであると悟り、肩を落として深く溜息をついた。哀愁漂う慎二の様子を見て彼の兄と妹は顔を見合わせて首を傾げている。どうやら慎二の疲れる原因を把握できていないようだった。

桜に近づき、強引に連れ出そうとした男たち。それを追い払った経緯を聞いた光太郎の猛省を眺めて少しは気が晴れた慎二は2人を連れて帰路へとつく中で…

「遅くなりましたけど、慎二兄さん。先ほどは助けてくれてありがとうございます」

「ほんつと今更だな。次はないよ」

「そうは言いつつ、慎二くんなら助けてくれるもんね！」

「うっさいー！」

嵐の如く現れた間桐慎二の兄妹の姿に未だ足を動かす事の出来ない穂群原の生徒一同。

(なんだ…)

綾子は未だ不満を口にしながらも光太郎・桜と肩を並べて帰る慎二の姿を見て、彼に抱いていた印象を変えざる得なかった。

(家族思いの奴じゃん)

ナンパされも笑顔で対応した妹への小言もエキセントリックな行動を起こす兄への仕打ちも、裏を返せば2人を心配しての事だ。ただ心配させるなど言うだけなら誰にでも出来るが、案じてこそ怒れるというのは、結構難しい。特に兄の方は不法侵入として扱われてもおかしくない展開であった。

それに、他の誘いを断っていたのも、迎えに来た家族との時間を優先させたからと、綾子は判断する。文句を続けながら歩く背中を見て、はにかみながら。

「楽しくなりそうだな、これから」

それが、言葉を交わす以前に見た間桐慎二の姿だった。

同じクラスメイトとして、部活仲間として過ごすうちに間桐慎二という人間を知っていく綾子は次第に、彼にはある『目標』を持っていると聞く。それがなんであるか、1度聞いたような気がしたがはっきりとは思いつけな。思い出せないが、目標に向けて邁進する慎二を見たい。

そのような事を、考えて始めていた。

「――変身」

慎二の発した言葉の通り、彼の姿は人ではないものへ変わった。

全身を青いスーツで包み、素顔を隠す仮面には赤い巨大な複眼と銀色のアンテナ。左胸にマウントされていた拳銃を手にし、銃口を敵へと向ける。

「ターゲット標的は…お前だ！」

言うと同時に地下駐車場内へ響く銃声。慎二の放ったエネルギー弾は未だ動揺するトンドンの胴体へと命中する。

「オガアツ」

トンドンの身体へ着弾したエネルギーは弾け、小規模ながら爆発を起こした。見かけ以上の威力に数歩のけぞるトンドンはエネルギー弾が当たった箇所を手で押さえ、踏み留まると次の攻撃へと警戒するが…

「…つてえ」

攻撃を仕掛けたはずの慎二が、拳銃…トリガーマグナムを持つ右手

首を左手で抑えいた。

慎二がトリガーマグナムの引き金を引いた瞬間、エネルギー弾は狙いから外れることなくトンドンへと命中したが反動は大きく、手首へ大きな負担をかけてしまう。

「ぶ…ブハハハハ。なんだ武器に振り回されるとは情けない奴。手前からでやっちまえ!!」

腹を抑えあざ笑うトンドンの命令を受けたチャップ達棍棒を振り回し、慎二との距離を詰めていくが、当の慎二はトリガーマグナムを再度左手にマウントし、痛みの走る右手し振り握っては開いて調子を確かめている。

「ああそうだね。気取って片手撃ちしようとしてたなんて扱えないうちは笑い話だ。だから…」

手首の痛みが引き、握力に問題ないと察した慎二は再度トリガーマグナムを手にとると接近戦を仕掛けるチャップ達へ狙いを定める。両手でしっかりとグリップを握って。

「慣れるまでは基本通りにさせてもらうよ!!」

両手でトリガーマグナムを固定したことで放たれるエネルギー弾全てがより正確に放たれ、駆け寄るチャップ達を次々と貫いていく。トリガーマグナムの銃口が火を噴くと同時に1体、また1体とチャップや怪人素体がアスファルトへ沈んでいく光景に、当初は武器も碌に扱えないと踏んでいたトンドンの表情は次第に焦りへと変わっていった。

「ハ、このままでは…おい！」

隣に控えていたチャップは耳打ちするトンドンの指示に大きく頷

いた後、他の数体を連れて足音を立てずに銃撃戦が繰り広げられている通りとは逆の方へと歩んでいく。

どうやら不意打ちをしかけようと行動を開始した敵のやり口を伝えようと大声で慎二に知らせようとした綾子だが、トンドンの腕によつて口を押えられてしまう。

「騒ぐんじゃねえよ…殺されたくなければな」

「そらあー！」

また1体のチャップの胸を貫いた慎二は大地に沈み、燃え上がる姿を確認すると距離を取る敵へと照準を定めるが、おかしい。トンドンとかいう敵の大將に命令された通り、考えなしに突撃をしかけた敵の動きがピタリと止まっている。相変わらず棍棒を掲げ、レーザー銃などで慎二を狙ってはいるが今以上に接近する気配はない。

だとすれば…

「まあそうするよ…なッ!!」

天井へトリガーマグナムを向けて1発。直後にガシャンと何者かが倒れ、痙攣をおこしアルミの点検口を振動させる音が耳へと届く。どうやら天井裏に潜んでいた敵をしとめる事に成功したらしい。

だが、それだけすむはずがない。

同じく天井へと潜んでいたチャップが別の点検口を蹴破り、飛び降りると慎二に向け棍棒で刺突する態勢へと移っている。左右から同時に迫られたこの状況で、両手でトリガーマグナムを構える時間はな

い。
ならば、別の方法で撃退するのみ。

まずは右から近づいたチャップの棍棒を僅かに下がる事で回避し、チャップの顔に向けて肘打ちを叩き込む。白い仮面がひび割れ、グラリと背後から倒れるチャップなど目もくれず今度は逆方向から迫るチャップの胴体に向け、左足を突き上げる。

くの字に身体を曲げたチャップの高等部ヘトリガーマグナムのグリップを握ったまま拳を下ろし、鈍い音を立ててチャップは意識を失うのだった。

(いける……このままなら)

これまでチャップと戦う事は幾度もあったが、ここまで圧倒したのは初めてであった慎二の胸の内に、そんな可能性が膨らみ始める。

義兄を待つことなく、1人でこの連中を倒せるのかも知れないと……

(そうだ……このままあいつらを……！)

「そこまでだ小僧」

「し、慎二……」

その時だった。チャップ達に左右の肩を掴まれ、トンドンの武器に喉元を向けられた綾子が力なく慎二の名を呼んだのは。

「随分と手下を減らしてくれたな……だがな、今この状況を見てお前がどうすればいいか、分かっただら？」

「……………」

ニヤリと醜く口元を歪めるブタの怪人に、慎二は無言で敵の要求へ

応える。カラン…という乾いた音がアスファルトへと響いたのは、慎二が手にしたトリガーマグナムを放り投げた為だ。

「慎二…！」

「ブハハハハ…話が分かるじゃねえか…だがな、この俺に生意気にも攻撃を当てた事は許せねえ!!」

綾子の首筋に当てていた武器を引き戻したトンドンは、武器を投げ捨てた慎二へ一気に距離を詰めると武器である馬鍬を胸板へと叩き付けた。

「ガッ!？」

短い悲鳴と共に、慎二は攻撃を受けた場所から火花を散らし、背中をアスファルトへと付けてしまう。慎二が立ち上がろうと手に力を込めるよりも早く、トンドンが慎二の胸を足で押さえつけ、馬鍬を複眼へと向けてしまう。

「変身した時はたまげたが…どうやら人質の娘の存在を忘れて戦うなんぞ、どうやら力を付けた事によって舞い上がったためだなあ!!」

「ぐ…！」

メリメリと音を立て体重を足に上乗せするトンドンの言葉に慎二は反論できないままうめき声を上げることしかできない。なす術もなく、化け物に踏みつけられる姿に、綾子の表情は絶望へと染まっていた。

慎二がああなったのは、自分の責任だと。

好奇心に任せて自分と離れた慎二を追いかけた結果、こうして敵の

手中に落ち慎二を追い詰める事に加担してしまったのだから。

悔しい。

悔しくて堪らない。

唇を噛みしめて悔し涙を流すことしか出来ない自分が、どうしようもなく、情けない。

「おいおい……らしくない顔しないで貰える?」

「え……?」

いつも学校で聞かせる軽口を聞き、俯いていた綾子の眼はトンドンに踏みつけられている仮面ライダーへと向けられた。見えないはずなのに、あの仮面の下では慎二が笑っているように思えてしまう。

「何か勘違いしてるかも知れないけど……お前が絡んでいようがいまいが僕はこうなってた……お前が、気にする事じゃないんだよ」

「なに言ってるのよ! だって現にアンタ、苦しんでんじやない! 私はそんなの……慎二が苦しんでる所なんて、痛がる姿なんて見たくない!!」

「あーそう。なら、ここいらで終わらせないと……」

軽々しく、飄々とそんな事を言っただけだ。

「てめえ……今の状況分かってるのか! ああ!?!」

「があ……!」

慎二の放った言葉に怒りを露わにするトンドンはさらに慎二を踏みつける力を強め、スーツの上から慎二の内臓……否、心臓を踏み抜こ

うとするが慎二は擦れた声となりながらも口を閉じる事をしなかった。

「ああ…お前の言う通りだよ。僕は変身できた事で舞い上がった。不覚ながらね…けど、僕は自分の戦い方を、一変たりとも変えてはいない」

「ああ?」

「…曲がりなりにも僕をいたぶりに来たんだったら、敵の戦い方を把握してるもんだろ?」

「何を…何を言っている!」

明らかに自分の方が有利であるというのに、あともう少し足に力を込めれば青いスーツを貫き、心臓を踏みつぶせるというのに、慎二の言葉に不安を拭えないトンドン。指揮をするボスガンからの命令はないが、今すぐにでもこの人間を殺さなければならぬと考えた矢先、再び慎二の言葉が聞こえてしまった。

「そうだなあ…僕の戦いってのはいつも地味でね。光太郎が戦ってる相手の弱点探したり、どうにか罠に嵌めたり…そして——」

「時間稼ぎが多かったね」

瞬間、駐車場内に響く爆音。

一体何事かと周囲を見回すトンドンが見たのは、慎二を追い詰める為に下ろしていた出入り口のシャッターを突き破り現れた赤い2つのライト…否、赤い眼を輝かせてこちらへと迫りくる生体バイク、アクロバッターの姿であった。

「者共！撃…」

「させないよー！」

トンドンがチャップ達へ爆走するアクロバッターへ一斉射撃を指示するよりも早く、慎二が腕を振り上げると、チャップ達の頭上から泡状の液体が降り注いだ。突然の目くらましに武器を手放してしまふチャップ達をアクロバッターは次々と跳ね飛ばす！

乱入者の登場に慌てふためき、綾子を捉えていたチャップ達も武器を向けるが、既にワイリー走行で迫っていたアクロバッターの前輪による横殴りで壁へと衝突してしまった。

『サア、今ノウチニ逃ゲルノダ!!』

「ば、バイクが…」

見慣れた反応の中では一番大人しいリアクションだなと呑気な感想を抱く慎二に、トンドンは表面上は冷静を装いながらもチャップ達を妨害したのは慎二だと確信し、目を血走らせて問いただす。

「てめえ…あれをどうやって差動させた!？」

「尋ねる前によく見てみるよ。あっちの差動レバーをさ」

「…ッ!？」

慎二の言う通り、チャップ達に降り注いだ泡消火剤を差動させるレバーに、何やら絡みついているのが分かる。それは慎二がこの場所に張った罠などに使用された透明のテグスが巻き付いており、その先をたどってみると今トンドンの足元にいる慎二へと続いていたのだ。

つまり、トンドン達が現れる以前から慎二によって仕掛けられた罠だったのだ。

「ま、まさかお前！最初からこうなるように…」

「その通り。だから、お前がよそ見している間にこんな事だつてできるのさ」

そう言つてトンドンが慎二へと顔を向けた時、重い銃撃が幾度と自分の身体へと叩き込まれた。

慎二が両手で構え、射撃したのは放り投げたはずのトリガーマグナム。

「お、のれ…お前、その銃を捨てる前に既に」

「ご名答。折角の武器をただ手放すだけなんてナンセンスだからね。つても、本当に捨てたとしても他にもやり方はあつたけどさ」

トリガーマグナムのグリップには、泡消化設備を差動させたと同様のテグスが結びついていていた。慎二は敢えてトンドンの視線を差動レバーへと向けさせた時に放つたトリガーマグナムを回収していたのだ。

「悪いね。いくら変身しても、強力な武器を手にしても、何時だつて僕の一番の武器は頭こゝなのさ」

至近距離で受けたダメージは大きく、ヨロヨロと後ろへ下がるトンドンからようやく解放された慎二は立ち上がり、コツコツと自分の側頭部を指で突くと即座に武器を構える。そして、トンドンはまだ倒れない。

「ま、まだまだ：そんな攻撃じゃあまだ俺は倒れんぞ!!」
「だろうね。見かけどおりに中性脂肪が厚くて決定打になってなそうだし、だから——」

『決定打』を打たせてもらおうよ」

宣言した慎二はトリガーマグナムを真上へと放り投げる。今度は自分の意思で武器を捨てるなど、と空中を舞うトリガーマグナムに視線を向けるトンドンの意識の外で、慎二は行動へと移る。

ベルトのバックルからトリガーマモリを引き抜き、ベルトの右側に備えられたスロットへ装填、側面のボタンを掌で叩き付けると迸る青色のエネルギーを放ちながら変身時に放たれた同じ声：ガイアウイスパーが木霊する。

《TRIGGERツ！MAXIMUM DRIVEツ!!》

マキシマムスロットから流れるトリガーマモリのエネルギーが慎二の身体全体を包んでいく。

身体を屈め、アスファルトが碎ける程に力を込めて蹴り上げた慎二の身体はマツハを越える速さでトンドンへと接近する。

トリガーマモリの特性は、使用者本人の『射撃能力』を向上させるもの。トリガーマグナムという強力な武器扱えるのも、このメモリが

あつてこそ可能なのだ。

そして、慎二はこのメモリを使用し、『自身を射撃する』という攻撃に打って出た。

だが、このままでは弾丸のようなスピードで敵に迫る体当たりで終わってしまうだろう。

そんなもので、この攻撃を終わらせるつもりはない。

慎二は猛スピードで敵との距離を縮める中で身体を前転させ、右足を突き出した態勢へと変わる。

身体全体ではなく、ただ一点に突進力を集中させたその技は、義兄が最も多くの敵を打倒した技でもあった。

「これが僕の…」

「ライダーキックだツ!!」

トンドンには理解できない。

自分の胸に突き刺さり広がる激しい痛みと、一瞬の自分で自分に迫り視界を覆う敵の姿が。

「う、がああああああアツ!?!」

絶叫するトンドンが叩き込まれた慎二の攻撃に吹き飛ばされると同時に、攻撃を仕掛けた慎二本人もその反動で技を発動させた場所まで飛ばされてしまうが、それすら予測していたかのように着地、腕を掲げ、広げた掌で先に放り投げ、落下したトリガーマグナムを掴む。

遠目から見ていた綾子には慎二が武器を放り投げ、再び手にした時には敵が勝手に吹き飛んでいたようにしか見えていない。この一瞬で、慎二は何をやったのだろう。

その疑問に、応えられるものは誰もいない。

「さっきのは、よそ様の車に身体をぶつけてくれた僕の仕返しだ。そして…」

マキシマムスロットから抜いたトリガーマモリを、続いてトリガーマグナムのスロットへと流し込む。

《TRIGGERッ！MAXIMUM DRIVEッ！！》

ガイアウイスパークが木霊する中、エネルギーのチャージ音を響かせ、銃身を起こしマキシマムモードへと移行させたトリガーマグナムをゆっくりと頭上へと掲げ、両手でグリップを握るとフラフラと立ち上がるトンドンへと狙いを定める。

「こいつは、アイツを泣かせた分だ……………」

静かに、本人に聞こえぬ程度に怒りを込めた最大の攻撃を放つ為に、慎二は引き金を引く。

「…ライダーショット！」

エネルギーが凝縮された1発の弾丸。

華麗で真つすぐな弾道を描くその一発は、トンドンの胴体を完全に貫いた。

「そ、そんな…バカなあツ!!」

断末魔の叫びをあげ、トンドンはその名に怪魔獣人の誇りでもある『ガイナ』を付けることなく消滅させるのであった。

「じゃあ、慎二がゴルゴムを壊滅させた仮面ライダーじゃないの…?」
「そんな大層な事やらかしたのは別人で十分なんだよ。僕がなったのは、さっきが初めてだ」

あれからトンドンの爆発によって本格的に消防危機が発動してしまい、妙な疑いを持たれる前に駐車場を離れた慎二は連れ出した綾子に事の顛末を説明した。だが、それでもやはり納得しきれることではないだろう。

バレてしまった手前、隠し通すよりも説明した方が良いのか考え者だったが今はその時ではない。

「悪いけど、説明はまた今度だ。本当に、今度は急用だからさ」

アクロバッテリーから聞かされた最悪なニュース。追い詰められている光太郎の脳波を受信したアクロバッテリーの話では、どうにも火急の事態となっているようである。

アクロバッテリーに搭乗し、ヘルメットを装着する慎二に、綾子は服の袖を掴んで尋ねた。

「…ねえ、今回の騒ぎも説明も全部ひっくるめて終わったら…今日の埋め合わせをして」

「こりないねお前は……わかった、わかりましたから睨むのをやめて下さい」

そんないつものやりとりを交わした慎二はもう一度聞く。

自分の、あのような姿を見てどう思ったのかと。

「なに言ってるの？そりゃ怖かったけど、私を助けてくれたのも、こうして目の前にいるのも、間桐慎二なんですよ？」

「ああ…そうだな」

あの異世界人達に言われ、そして肯定したものと同じ言葉。

それがどうして自分以外から言われたら、こんなに落ち着いてしま
うのだろうか。

(光太郎も、こんな感じだったのかな)

聞いてみようと考えたが、やっぱりやめたとスツパリ諦めた慎二は
今度こそアクロバッターと共にその場を離れる。

彼の背中を見守る綾子はただ祈った。

もし先ほどと同じように戦いへと赴くなら、無事でいて欲しいと。

仮面ライダートリガー…間桐慎二の身を案じて

第69話

絶望

失意の底へと沈んだ人間が、自力で立つことすら困難な状況に陥った時に、浮かぶ言葉だろう。

衛宮士郎も幾度となく味わったその言葉に抗い、それに負けないよう自分を磨き上げてきた。

それは彼だけはない。

望まない運命を架せられた間桐光太郎も、魔術の才能がないと烙印を押された間桐慎二も、そんな言葉など知らず、縛られずに戦い抜いてきたのだろう。

聖杯戦争の中で己の為、誰かの為と戦いに身を投じた者達全員が、それまでの自分を乗り越え、戦えていたのである。

そして、陽炎の向こうで士郎に背中を見せる人物も、その1人だ。

無残にも傷だらけとなってしまった士郎を庇うように立つその姿は、普段見せる大人しい印象を燃え盛る炎のようにかき消してしま

間桐桜の姿を見て、素直にそう思えてしまった。

「このおッ！」

絶叫と共に振るわれた士郎の斬撃を受けた怪人素体は鮮血と機械部品をまき散らしながら音もなく校庭の土へと沈み、その身体を炎で包んでいく。だが、士郎にはそんな光景を眺め続ける余裕はない。

士郎を囲う怪人素体や雑兵チャップは頭数だけでは圧倒的に有利だというのに、敵である士郎へ一斉に跳びかかることをしない。

今、彼が今いの一番にしなければならぬ事。それに移ろうとしたときだけ攻撃を仕掛けてくるのだ。

要は、時間稼ぎ。

自分とは違い、決して手を出してはならない者達と敵対してしまっ

た桜の援護に向かわせない為の。

(くそ…)

悪態をつくしか出来ない自分への苛立ちを募らせる土郎はチャップの振り下ろした棍棒を夫婦剣で受け止めながらも、焦燥に駆られ何とか攻撃を回避する桜へと目を向ける。

そして、そんな桜の姿を醜い笑みを浮かべ屋上が眺める怪人…パークスと名乗る外道を睨んだ。

事が起きたのは数十分前。

桜の頼みで同行した弓道場での個人練習を終え、着替えた土郎と桜が鍵の返却の為に職員室へと向かおうとした直後の事だ。

物陰から突然現れたチャップ達は土郎達へと襲い掛かる。

咄嗟に莫耶を投影した土郎はチャップを斬り伏せ、自分と同じく襲われた桜の無事を確認しようと振り返った途端、彼女を見た土郎は一瞬呼吸を忘れてしまう。

敵であるチャップが地に伏している事はそう不思議ではない。桜もゴルゴムとの闘いや聖杯戦争を生き抜いてきただけあって、護身術も身に着けている。だが、桜が行ったのは読んだ通りに身を護る術ではなく、相手を完全に叩き伏せるものだった。

地面に沈み、痙攣するチャップの顔面を覆うマスクは全体にひび割れている。強い衝撃をその顔に受け、意識が刈り取られたのだろう。

中には腕や足があらぬ方向へと向いてしまっている者もいる。

さらに壁に背をつけ、自身の同胞を再起不能にした存在に追い詰められたチャップは震えながら止めるよう懇願したが、返答は無言で返された。

チャップのマスクがひび割れるほどの威力を持つ掌底が顔面に叩き付けられるという形で。

ズルズルと背中を壁で引きずって倒れる敵の姿に、攻撃した者…桜の表情は黒い髪に隠れて読み取れない。ただ…口元だけが、土郎の知る桜とは全く異なる笑みを浮かべているということだけが分かった。

見た者の背筋が凍ってしまふような、冷たい微笑みを。

「さく、ら…?」

「…え?」

小さく、警戒するように自分の名が呼ばれたことに反応した桜は、自分の眼下で虫の息となった敵の姿を初めて目にしたかのように飛び引く。辺りを見回せば他にも倒れた別個体のチャップが数体。一体いつの間にも現れ、誰が倒したのかと土郎へ尋ねるが、土郎の反応に桜はただ混乱するしかない。

「桜…覚えてないのか?…こいつらはお前が倒したんだぞ?」

「私が…そんな…」

信じられない…と口を手で押さえる桜。土郎と共に職員室へ向かう中、突然チャップ達が現れたまでは記憶にある。しかし、直後に自分はボロボロとなったチャップを見下ろしていた。

敵の不意打ちに混乱して記憶が飛んだ…などという事はある得な

い。このような事、認めなくてはならないが既に日常茶飯事と化している桜にとつて驚くことであっても記憶が曖昧となるまでのことではない。

一体、何故…そう自問する桜の不安を拭うためにどう声をかければよいのか迷う士郎よりも先に響いた声に、2人は咄嗟に聞こえた方角へと顔を向けた。

「なるほど…戻ったと聞いてはいたがまだ『残っている』ようだな…さて、この誤算をどう判断すべきなのか？」

探るかのような声を放つ異形…不気味な程に細い体躯と光に反射する頭頂部。鳥類を思わせる鋭いクチバシを持つ怪人は見る相手を不快にさせる視線を桜に向ける。全身を嘗め回すような眼光に先ほどとは違う意味で身の危険を感じてしまう様子に勘付いた士郎は彼女の前へと移動し、得物の切っ先を怪人へと向けた。

「さっきの連中は、お前の差し金か？」

「…ツチ。野郎なんざに答えたくはないがその通りだ。兄者と我が主の命により、その娘を痛めつけるつもりだったのだがな」

士郎達の周りで転がるチャップや怪人素体…特に桜に倒された個体へと目を向ける怪人は一つの可能性へと辿り着く。もし事実であるならば、方法を変えなければならぬ。

「貴方は…私に何が起きているか知っているんですか？」

「桜…？」

士郎の隣へと移動した桜は敵の目的である自分に、何が起きている事を知っている。素直に敵が教えてくれるとは思えないが、現状は敵の思い通りにならないと自身の事情を知る大きな好機であると考える桜に、敵は愉快と言わんばかりに答える。

「クハハハハ…面白い事を言う。そんな事、自分で分かっているんじゃないのか、お嬢ちゃん？それを確かめる為に今日は学校まで足を運んだんだろうが」

「っ…」

「家でも散々試して気づいたんじゃないのか？もう、今の自分は前の自分ではないって」

怪人のいう通りだ。

異常なほど高まった魔力の容量。

研ぎ澄まされた五感。

自宅の地下室でこれまで使用してきた魔道具が全て使い物にならなくなり、弓道場では強まってしまった視力のズレによりのへかすりもしなくなってしまう。

原因の心当たりは、ただ一つしかない。

「まあ言っても構わないな。お嬢ちゃんもこう考えてるんだろう。いや、さっきの戦いで結論に至ったってところだろ。お前さん——」

「自分の中に、まだガロニア様の力と意思が記憶が残ってるな？」

後に聞いた話だが、桜はクライシス帝国から逃げ出したガロニアの代用として拉致され、その身体と記憶を帝国の支配者、ガロニア姫として上書きされてしまった。

間桐光太郎達による必死の呼びかけと本物のガロニアの協力を得て、元の姿に戻り記憶も呼び覚ます事に成功したと思われた。

だが、ガロニアとしての能力は完全に抜けきれておらず、僅かにでもガロニアの意思が桜の中に残っているのだとすれば…先のチャップを素手で倒し、嗜虐性を垣間見せた事が頷ける。

敵の指摘と自分の推測が重なってしまった事に、桜はズシリと自分の身が重くなった感覚に陥る。

身体能力が上がってしまっただけならば、まだ誤魔化しは利く。しかし、怪人の言う通りガロニアだった時の意思がまだ自分の中で生きているのなら…いつ、また義兄達の敵に回ってもおかしくないのだ。

「……………」

「桜。逃げるぞ」

「えっ…?」

「さあ…」

士郎に腕を掴まれた桜は彼に引かれるがままに弓道場の前から走り始めた。

この場からまずは離れなければならない。

聞き入っていた情報を処理しきれない士郎は、今の桜をあの怪人と顔を合わせたままではいけない。そう告げた直感に従うしかなかったのだ。

「キキキキキ…逃げられるかな？このパークス様が既にしかけた檻の中から…」

「な、なんだこいつらは…」

衛宮邸の屋根から中庭を見下ろす怪魔獣人ガイナニンポーは自分が本来眺めるはずの殺戮ショーとは、真逆の光景に息を飲むしかない。

ガイナニンポーの標的である赤上武から変身の要ともいうべき戦極ドライバーを奪い取り、本来の力を出せないまま分身体の餌食となる。そうなるはずだったのだが。

「さあいくぞー！お前たち!!」

武が叫ぶと共にブラッドカチドキロックシードを解錠。武の懐に潜んでいたのだろうか。指先程の大きさである生物2匹が飛び出し、見る見るうちに巨大化。

情報にあつた『インベス』なる怪人が姿を現したのだ。

それだけであるなら、まだ勝機があつただろう。

しかし、飛び出したインベスの身体が強く発光。

光が止んだ後にはダルマに手足が生えたような面影は欠片もない怪人の姿があつた。

片や強靱な身体を持つ龍の頭部を持つ怪人。

片や俊敏性を誇る脚と鋭い爪を持つ虎を思わせる怪人。

セイリユウインベスとビヤツコインベスと化した2体は突然の變化に怯えるガイナニンポアの分身体を次々と屠っていく。

「な、なんなんだそいつはあッ!?!」

「ならば教えてやろう」

「…ッ!?!」

背後から聞こえた敵の声に思わず振り向いてしまったガイナニンポアの顔に迫る鉄の塊。鈍い音を立て、武の鉄拵えである鞆がガイナニンポアの鼻へと叩き付けられた。

「ギギ…」

鮮血を鼻から散らすガイナニンポアは出血を止めようと掌で押さえ、突然自分と同じ位置へと現れた武と距離を取るために慌てて後ずさる。さらに武の手には、先の不意打ちで思わず手放してしまった戦極ドライバーが握られている。

「このロックシードにはインベスを縮小・巨大化させる以外にも、彼等を一時的に上級インベスへと進化させる能力を備えている。さて、未だこちらにはもしもの時の為と思い連れてきた者達が控えているが…あと何体いれば事足りるかな?」

「…!?!」

今以上の戦力を投入できると宣言する武の視線を追うガイナニンポア。その先にあったのは、半数以上の分身体を血祭りにあげる、上級インベス達の姿。これが報告にあった通り、数十体のインベスが進

化したとばれば…

「キキイツ！お、覚えてやがれツ!!」

戦略敵撤退。このままでは武が変身するまでもなく、敗北してしまうと悟ったガイナニンポーは迷うことなく敵全逃亡を選択した。当の武はいつでも変身できるよう装着した戦極ドライバーと手にしたロックシードを下げ、深く溜息をついた。

「助かったと言うべきか…もともと連れていたのはあの2体だけであつたが、上手く誤解してくれたようだ…」

ハツタリを成功させた武は全ての分身体を倒し、その亡骸を山ずみにするインベス達へと呼び掛ける。

「龍一郎、虎次郎。そやつらは元々毛から生まれたものだ！食料にはならんで盛大に燃やしてしまえ！」

『グレアツ!!』

その後、いつの間にか衛宮家の居間で眠りについていた藤村大河は、何やら焦げた臭いによって目が覚め、その原因を探してみるも何かを燃やした後はどこにも見当たらなかったそうなの…

「きやあッ!!」

「桜ッ!?この…」

パークスから逃れようと桜を連れ校庭まで逃れ、校門が視界へと移ったときであった。

門を塞ぐように大勢の人間が現れた事に驚き、思わず足を止めてしまったがそれが決定的な隙となり、桜が囚われてしまった。その者達は校門を多勢で塞いだ人物と同じ…穂群原学園の生徒たちだ。

休日と言えど部活動や自習の為に訪れた生徒。その監督者として休日を返上して勤務する教員たちが虚ろな目で士郎や捉えた桜を睨む。その中には、生徒会長である柳洞一成の姿もあった。

「一成…いったい何が…」

「なあに、簡単な催眠術さ」

士郎の疑問に答えたのは、パークスと名乗る怪人。屋上からこちらを見下ろし、高見の見物としゃれこんでいるようだ。

「てめえ…なんて卑怯な真似をッ!!」

「卑怯なんてとんでもない!物事を効率よく進めるだけだよ!!それに、お前の相手はそいつ等じゃあない」

「何を…くッ!?!」

地中から飛び出した腕にギョツとした士郎は跳び引き、土を内側から突き破って現れた怪人素体へ咄嗟に投影した夫婦剣を構えるが、敵の出現は終わらない。

みれば、自分を囲うのように次々と地中に穴が開き、そこから素体

とチャップ達が姿を見せていく。

(くそ…)

悪態をつく土郎は自分を囲うチャップ達の奥…催眠術にかかり、戸惑う桜へジリジリと迫る学校関係者たちの様子を見るが、やはり尋常な様子ではない。

「桜ッ！どうにか意識を刈り取る程度の当身で気を失わせるんだ!!そうすれば…」

この場を切り抜けられると期待した土郎だったが、それすらもパークスは読んでいたのだろう。怪人の高笑いと共に放たれた言葉に、土郎は眼を見開くことしか出来なかった。

「キキキキキキ…！そいつは無理な注文つてもんだぜオスガキ！その娘、何のために今日はお前を突き合わせたのか忘れたのか？」

「何…?」

「お前もチャップ共を見たらあの加減知らずに出された攻撃で、ボロ雑巾になった連中を…もし娘が人間共にその当身をやらかす時に少しでも加減を間違えて見ろ…意識を失うどころか、命が失われちまうぞ」

「なっ…!?!」

もし、パークスの言う通りに未だ自分の身体能力が上がっている事に戸惑い、傷つけてしまうと考えている桜が、生徒たちに攻撃する…否、触れる事すら恐れているかもしれない。

確かに桜は襲い掛かる生徒や教員から逃れているものの、一切自分から手出しはしていない。それに、表情を見ると自分以上に焦燥しきっている。あのままではいずれ、捕らわれてしまうと危惧する土郎

へさらにパークスの追い打ちが迫った。

「だがなあ。一度でも攻撃しまえばもう『慣れ』ちまうんじゃないかあ？そんで人間どもをいたぶるのが『愉しく』なるんじゃないですかねえ…さつきみたいによお」

士郎の脳裏に蘇る、あの冷たい笑み。

チャップ達を問答無用と叩きのめした攻撃を一般人である一成達に向けてしまえば…

「桜ッ!!」

「キキキキキキ…最高だねえ！攻撃できずに怯える姿も、攻撃した後に嗜虐心溢れるガロニア様と化するってのもそれでよし！さあさあ、俺を楽しませておくれよお嬢さん!!」

ここまで敵に対し怒りを向けた事はあつただろうか。

衛宮士郎は手にした夫婦剣を強く握るしかできない自分を呪いながら、ただ自分の壁となるチャップ達を切り伏せることしか出来ない。

(どうすれば…どうすればいいッ…！)

(どうすれば…どうすれば…！)

士郎と全く同じ心境である桜は、ただ生徒の攻撃を回避することしか出来ない。頭上でパークスが叫んだ通りに自ら攻撃を当てること

などできない。このままでは自分だけでなく、士郎まで…

「あッ!？」

躊躇から、ついに1人の女生徒により羽交い絞めとなつてしまった桜に、鉄パイプを持った一成が迫る。呼びかけても返事は、ない。

こんな時、義兄なら…光太郎ならばどうしたのだろうか。

光太郎なら、何と言つてくれるだろうか。

この場にはいない義兄と同じ、望まない力を持つてしまった桜の頭を狙い、鉄パイプを振り上げる一成。その瞳には何の感情もない。

懸命に桜の名を呼ぶ声が聞こえるが、もう桜にはただ謝るしかない。

巻き込んでしまつて、ごめんなさいと。

「うおおおおおおおおりやあああああああああッ!!」

この場には似つかわしい、そんな雄叫びが桜の耳に響く。直後に頭頂部へ強い衝撃を受けた一成がビクリ…と一瞬震えた後に力が抜けたように倒れてしまった。その背後に立っていたのは…

「やあやあー遠からんものは音に聞け!!近くば寄って目にも見よ!!!可憐な少女をいたぶる百鬼夜行を叩く冬木のクロヒヨウ——」

「蒔寺 楓とはあ、私の事だツ!!」

ジャージ姿でトラバーをブンブンと頭上で振り回した拳句、彼女の特異とするカンフー的なポーズでズビィツという効果音を自身の口から放った蒔寺楓は満足と言わんばかりに「決まった…」と呟くが彼女の行動は敵味方問わず、時間を完全に止めてしまった。

「ん…?」

余りにも静かであることに辺りを見回す楓は手にしたバーの先端を倒れた一斉の頭部でグリグリと押し付けながら周りへと呼び掛けた。

「おいおい。何だよこの空気!せっかく真打ち登場つてのに、なにシカトしてんだよー。あ、間桐大丈夫か?」

「え、は、はい…ありがとう…ごぞいます?」

思わず尋ねてしまう桜はさらに混乱してしまう。この学校にいる

人間全てがああ、の怪人の催眠術にかかったのではなかったのだろうか……そう疑問を抱く桜の前に、生徒をかき分けて現れた士郎が現れた。

「桜！早くこっちに！」

「先輩ッ！」

「あ、衛宮この野郎！ヒロイン横取りするつもりかよおツ!!」

「なにを分け解らん事を……とにかくこっちだ！」

「なんだ……なぜ俺の催眠術にかかっていない。なぜ、俺様の計画を邪魔をする……」

ギリギリと強く歯ぎしりを起こすパーカスの眼は、催眠術にかかった人間の包囲網を抜け、体育倉庫付近で落ち合う士郎達へと注ぐ。そこには、さらに女生徒達の姿があった。

「氷室先輩、三枝先輩！」

「お前達……意識があるのか？」

楓と同じくジャージ姿である氷室鐘と三枝由紀香。彼女達は同じ陸上部であり、本日も練習に勤しんでいたはずだが……

「……衛宮氏も知っている通り、我々は先日楓の無茶に付き合わされて怪我をしてしまったってね。大事はなかったが1週間の検査入院を言い

渡されたのだ」

「そ、それで突然復帰するのは辛いだろうって学校外をランニングするよに部長から言われて…私は、自転車で2人のタイムを計ってたんです」

「それで奴の催眠術から逃れられたってことか」

不幸中の幸いか、彼女たちが学校に戻った際には既に術の施しが終わっており、校門を潜って最初に目にしたのが、見るも不気味な怪人が高笑いする中、人々に囲まれて涙目となっていた桜の姿だったのだ。

部活は違えど怯える後輩は放っておけねえと2人の制止も聞かずに体育倉庫から備品を取り出した楓は突撃した、という事だ。

「それで俺は氷室が投げてくれたハードルで混乱した連中を叩いて、桜達のところに行けたってとこだ」

と、ワザとらしく手にした『木刀』を翳して見せる士郎に、桜は苦笑して納得した振りをした。恐らく、楓が現れた瞬間に夫婦剣を消失させ、投影したのであろう。

「貴様ら…よくも俺の邪魔をしてくれたなあ…」

催眠術にかかった生徒やチャップ達を連れ、桜達へと接近するパークスの表情は、見るからに怒りを醸し出している。随分と勝手な言いぐさであるとし郎は投影した木刀を握る手に力を込めるが、彼は自分に並ぶ褐色肌の少女…同じくバーを構える楓に思わず強い口調で投げかけてしまった。

「何やってるんだ！そんなもんでアイツと戦えるわけないだろう！さっさと——」

「はん！さっつきは能面たちに囲まれて何も出来なかった奴に言われた

ねー」

「ぐっ…」

反論できない士郎だったが、よく見ればバーを握る彼女の手はかすかに震えている。震えるほどに恐怖しているはずなのに、なぜ未知の存在である怪人の前に立っていられるのか…

その疑問に、彼女本人の口から語られた。

「もし、この場で学校の連中を放って逃げ出すなんて、仮面ライダーに顔向けできねーだろ」

「仮面…ライダー…」

意外な人物から出たその名を口にした桜は、自分を庇うかのように前にでた鐘が告げる補足へ耳を傾ける。

「楓はな。自分と同じ黒いという理由で仮面ライダーたる人物を信奉しきっている。どうやら彼と同じように、巨悪に屈する事をよく思えず行動してしまったらしいな」

はあ…と友人の起こした無茶にとぼつちりを受けてしまった鐘はこの状況下で溜息しか出ないのも頼もしい。由紀香など先ほどから物陰に隠れてブルブルと震えており、こちらが正常な反応であろう。

ただ…楓の言う仮面ライダーという偶像は、桜もよく耳にした都市伝説のものに過ぎないのであろう。

絶対無敵の、正義の味方。

本当は違うのに。

自分では望まない力を無理やり押し付けられた、誰よりも優しい人なのに…

そして、今まさに自分も望まない力を持つてしまっていると…悲観に暮れる桜の耳へ、さらに最悪なニュースが飛び込んでくる。

「キ…キキキキキ！仮面ライダーあ？それはもしや今頃、我が主によつて処刑の真つただ中にいる奴の事かあ？」

あえて聞かせるように大声で喋る怪人の言葉に、士郎は直感する。あの人が簡単に敵の思うようになるとは考えられない。ならば…そうさげる得ない状況に陥ってしまった時のみだ。

なら、今の状況はその為に…
見るべきではないと分かっているながら、後を見た士郎は、見てしまった。

自分の為に、義兄はまた危機に陥ってしまったと絶望に染まる、桜の顔を。

「ふざけんな…仮面ライダーが、私たちのヒーローがそんな目にあうもんかあッ!!」

「よせ、蒔寺ッ!!」

士郎が制止すると同時だった。

パークスが腕を振るっただけで起きた強風により、楓と後に続いていた士郎が吹き飛ばされ、校庭を二転、三転と転げて体育倉庫の壁間際でようやくその動きが止まる。身体のうちこちに痣を作り、小さくうめき声を上げながらもまだ立ち上がりとうする楓に駆け寄る桜達。

士郎はどうか自力で立ち上がったが、度重なる投影と戦闘で魔力を著しく消費してしまい、疲労困憊となっている。

「どうして…どうしてそこまでして」

そんな中、再びバーを手にして立ち向かおうとする楓に桜は尋ねる。彼女は改造人間でもなければ、魔力を扱う魔術師でもない。ただの人間であるはずなのに、どうして立ち向かうのか。

「だってよ…仮面ライダーだって、あの時…新都が大ピンチの時に立ち向かったんだぜ」

「それは、あの人すごい力を持つてるから…」

それは、普段ならば決して言わない言葉だった。

桜は光太郎が、仮面ライダーが表面的な能力でしか評価される事を認めなかった。光太郎の気持ちも知らず、知ろうとせずただその力だけを称える事に嫌悪すら抱いていたはずだ。

だが、今は自分がそんな言葉を咄嗟に呟いてしまった。

そんな言葉を、以前なら簡単に否定できははずなのに、今は何も浮かばない。

望まない力を手にして、義兄の気持ちを痛いほど分かるはずだったのに…

自分は、自分の信じるものをこうして否定してしまった。

そう、自分自身に絶望し、ひび割れていく感覚に陥る桜の手を握った楓の言葉に、その黒い感情は四散されてしまう。

「ああ…確かにあの人はすんげえ力を持つてるだろうよ。けどな、あの人は立ち向かった。何十…もしかしたら何百だったかもしれない化け物相手に、立ち向かったんだよ。例えすんげえ力を持つてたとしても、そんな事できない」

「え…?」

「私が憧れたのは、あの背中…何が何でも、誰かを助けてやろうと力を振るうあの姿なんだよ」

心が、軽くなる。

分かってくれていた。この人は…分かってくれていた。

「だからな間桐。私が仮面ライダーに憧れてんのは、力を持つてるからじゃない。その力を、どういう風に使っているか知ってるから、憧れたんだ！」

その使い方など、聞くまでもない。

なぜなら、知っているから。仮面ライダーの家族である自分が、誰よりも知っているからだ。

そうだ。

なぜ悩む必要などあったのだろうか。自分に力があるのなら、それは使い方を間違えなければいいだけだ。

そんな事に悩んでいたこと自体が、馬鹿らしい。

この先輩には、感謝しなければならぬと桜は思う。

この人の声を聞けたからこそ、自分は自分の中で『あの人』に会えたのだから…

「蒔寺先輩」

「なんだ間桐！これからが私の——」

「ごめんなさい」

楓の首筋にトン…と優しく手を当てた途端、楓はガクリと項垂れてしまうが、寸でのところで桜に支えられ、ゆっくりと地面へと寝かされる。

「え…?」

「何が…」

続けて鐘、由紀香も同様に首筋への当身で意識を奪い、身体を寝かせた桜は、膝をつく土郎の横を抜けるとパークス達と対峙する。

「桜…」

「ありがとうございます先輩。私、頑張ってみます」

「頑張るって…」

自分に向けたあの晴れやかな笑顔。何か、大事な事に気づき、疑問が晴れたような顔を見た土郎は何故が落ち着いた気分へとなる。まるで、光太郎がこの場に現れたかのように。

「ふん。どうやら観念して俺に痛めつけられる覚悟が付いたってところか?」

「すいませんが、そんな事は御免こうむります。それに、降参するなら今のうちです」

「ブキキキキキ!何を言い出すかと思えば、気でも狂ったか?」

噴き出して笑いあげるパークスに、桜は胸元へ手を入れ、そこから紐で繋がれたモノを取り出すと、やはり微笑んだままに答えた。

「そうですか。なら、お付き合い願います」

紐から外したそれに右手の中指を通し、腹部へと翳した。

《ドライバーオン、プリーズ》

桜の腹部を銀色のベルトが囲い、人の手を象ったようなバツクルが

出現。ベルトの左側には、右手にはめたモノ…指輪が幾つも取りつけたホルダーが常備されており、桜はその中から紅く輝く指輪を選択。左中指へとゆっくりと通し、続いてバツクルの左右に設置されたレバーをそれぞれ上下へとスライドさせた。

《 シャバドウビタッチヘンシーンツ！シャバドウビタッチヘンシーンツ！ 》

ベルトから陽気な声が響き渡る中、桜は真つすぐ敵を見据えたまま指輪の紅い石の上に付けられた銀色のバイザーを下ろす。下ろされたバイザーにより、その石は『仮面』を装着した状態へと変化。

そして唱える。

義兄が望まぬ力で戦うと覚悟を決めた時に囁く、あの言葉を。

「変身」

左腕をバツクルへと翳し、赤く輝いたベルトからまた新たな声が木霊する。

《フレア、プリーズ！》

《メラ、メラ、メラメラメラア！！》

声が周囲へと響く中、桜は指輪を装着した左手を頭上へと掲げた。

すると指輪を中心に赤い魔法陣が出現し、ゆっくりと降下を始める。

赤い魔法陣を通過した桜は、その姿を変えていった。

手足を包む黒いスーツ。指にはめた指輪を象った仮面に、太腿まで深くスリットを走らせたロングスカートを翻した桜の姿に、敵も、士郎も驚愕する。

その姿に、驚きの声を上げたのは敵であるパークスだった。

「な、何だ…何者なんだお前は…」

「…あの人のように『魔法使い』とは名乗れません。だから、この名を
使います」

「仮面ライダー、メイガス」

第70話

「あれ…？」

自分は学校の校庭におり、怪人達に追われていたはず。そのはずなのに…

「どうして、家の中庭に…？それに」

目に映る自分以外の建物、植物、果ては空の色までがセピア色となっている。

見慣れた風景に異変が生じているはずだというのに、間桐桜は違和感を覚えることはなかった。

(なんだろう…不思議と穏やかな気持ちになってる)

この場所に立っていることが、むしろ心地よい。そんな不思議な感覚で一步踏み出した桜の頭上に、幻想的な光景が展開される。最初こそは驚いた桜ではあったが、それがなんであるかを理解した彼女は思わず声を漏らしてしまう。

「わぁ…」

空から降りてきたそれは、一枚の写真のように切り取れた桜自身の記憶。桜の周囲に降下し、さながら美術館に並ぶ絵画のように並ぶ場面に映る桜は、様々な表情を浮かべている。

遠坂の家族と過ごして笑った時

転んで膝をすりむき、泣いてしまった時

姉と別れて、悲しみにくれてしまった時

自分を家族として受け入れてくれた光太郎と出会った時

そのどれもが間桐桜という人間を形成させるに至った記憶ばかりだ。

幼き頃やつい最近の出来事まで、様々な記憶を描く場を見てアルバムを捲るように、思い出していく。

そして次第に自分の置かれた状況を冷静に考え出した桜は、一つの結論へと至る。今、自分が立っているこの場所は…

「ここは…私の…」

「そう、君の内側にある精神世界…『アンダーワールド』と呼ばれる場所さ」

不意に桜の予測を肯定する男の声。自分しかいないのだと思い込んでいた桜は突然発せられた声に思わず振り向く。

セピア色に染まった世界に浸食されず、桜と同じようにはつきりと像を映し出している男は中庭の一角に設置された椅子に腰かけ、紙袋を片手に何かを頬張っていた。

指先に着いた白い粉末…おそらく男が食してたドーナツに塗されている砂糖を舐めとると立ち上がり、桜へ目を向けながら紙袋を適当な戸棚へ置く感覚で腕を自身の横へと動かす。

その直前、男は掌を象ったようなベルトのバックルに手を翳す。す

ると男の手にはめられた指輪とバックルが輝きを放ち、どこからともなく音声が響いた。

《コネクト、プリーズ！》

「えッ!？」

音声が消えた途端だ。紙袋を持つ男の手の前に30センチほどの魔法陣が出現し、男は迷うことなく袋ごと手を魔法陣へと伸ばした。桜が驚きの声を上げたのは、その先の現象。魔法陣を通過するはずの男の伸ばした手が消え失せたのだ。

だが男の表情には苦痛は見られず、むしろ驚く桜を見て笑っている。

「ああ、大したことないよ。別の場所に置いただけさ」

そして腕を引き戻すと手は五指もしっかりと健在しており、消えたのは男が持っていた紙袋のみ。詠唱もなしに空間操作を行う青年に、桜は声を絞り出して尋ねてみる。男は、笑顔で桜からの質問に答えるが、その返答は桜をますます混乱させてしまうものであった。

「あ、貴方は…一体…」

「俺？俺は、魔法使いさ」

得意げに告げる男の声に、桜へ衝撃が走った。

「ま、魔法使いッ!？」

男から出たその名は、少なからず魔法を扱う者である者…衛宮士郎ですら驚愕に値するものだ。

魔法では決して辿り着けない領域へと達し、世界で5人といないとされる『魔法』を使役する人間が、今日の前にいる…ならば、あのような高等な術を詠唱無しに使えるのも納得だ。

羨望の眼差しを向ける桜に自身の想定した反応を示さなかった事に首を傾げる男は、ふと今回の依頼者から言われたことを思い出した。

「あくそう言えば士からいらん混乱を招くからこの世界でこの名前は使わなつて言われてたっけ…?」

「…?」

あちやくと額を抑える男の言葉に今度は桜が首を傾げるが、咳払いする男は話題を変える為に、この場所へと現れた理由を語り始めた。

「さて、俺がどこの誰だかは置いて…君、間桐桜、ちゃんだっけ?」

「は、はい…」

「もし、さつき俺と同じような力を扱えるとしたら…どうする?」

男の質問を理解することに、しばしの時間を有した。桜とて魔術師の端くれ。この男が見せた魔法…否、魔法がどれほど高度なものかは伺える。しかし、初対面の人間を疑い一つ持てないほど桜も不用心ではない。義兄の教えではあるが、こちらに何かを突きつけてくる人間

には、まず信用に足りる条件を聞き出さなければならぬ。

「どうして、私なんですか？」

「そうだな。君が絶望しなかったからかな？どんな状況に陥ろうと、君は諦めるということをしなかった」

そう言つて、男は自身の横に現れた桜の記憶を指さす。

男の指示に従ったかのように浮かび上がったのは、桜自身も覚えのある出来事。

間桐の家に養子となり、義兄となった慎二へ接しようとも接触を拒絶され続けた日々。光太郎すら匙をなげかけた時でも桜は毎日の挨拶を続け、コミュニケーションを凶ろうと呼び掛け続けていた。

光太郎とシャドームーンの一騎打ち。創世王の横やりによって一度は死んでしまった義兄の最期を見て気を失ってしまうが、あくまでそれは光太郎が殺されたという場を見た為。目を覚ました桜は慎二と共に光太郎が生きていると信じ切り、搜索を開始した。

創世王を倒し、運命に終止符を打つたために残つて戦う選択をした光太郎を待つ中、約束を果たせず、そして別れを告げずに自分は消えてしまうという不安に駆られるライダー…メドゥーサへ、光太郎は必ず約束を守る為に帰つて来ると断言した。

怪魔界へ連れ去られ、ガロニアの記憶を上書きされた時。ジュピトルスによって幻影と言えど、家族や近い人々が次々と虐殺される光景を見せつけられても、心が折れることなく、ジュピトルスを挑発し

た。

桜は気が強い人間ではないのかもしれない。だが、それを補う以上に強い意思を持ち合わせている。

だからこそ、彼女には可能性があった。

その可能性を確かなものとする為に、男は表情を一変させる。

「…俺の住む世界では魔力を持った人間が完全に絶望してしまった時、その身体を『ゲート』として食い破り、生まれる怪物がいる」

「怪物…？」

「そいつら名はフアントム——」

「君の背後にいる奴が、そう呼ばれている」

言われる前に、気づくはずだった。

言われるまで気づかない方が可笑しいほどに、その怪物は巨大だったのだ。

銀色の身体に所々紫色の水晶が鋭い棘のように生え、1つの胴体に

9つの首を持つ蛇の怪物…ギリシヤ神話に登場するヒュドラを思わせる怪物が、桜の背後で雄叫びを上げる。

「なっ…!?!」

怪物を見上げた桜と、一つの頭部が目を合わせた途端、怪物は大きく口を開き、桜へ食らいつこうと伸ばしていく。悲鳴など上げる暇もない桜は身体を前へと転がし、どうにか怪物の餌食となることは回避された。

だが、一度目を付けて獲物を逃がす獣はいない。ずりずりと身体をよじりながら接近する怪物に後ずさる桜へ、かすかな声が届いた。

「ダセエ…」

「ココカラ、ダセエ…」

「ワタシハ…ワタシワ…」

「声…それに出せて…」

突然襲い掛かったと思えば、雄叫びに紛れてかすかに聞こえる女性の声。自分を襲い掛かる事と何か関係があるのかと考えを巡らせながら後方へ下がる桜へ、傍観に徹した男が捕捉する。桜の動きをピタリと止めてしまうような事実を告げる形で。

「あの怪物…外見からヒュドラファントムとも名づけるかな。あのファントムは君の絶望の象徴とも呼べる存在だ。どうやら君を食い

殺し、現実世界に飛び出そうとしているらしい」

「そして…君の中にいた『ガロニア』でもあるんだ」

一瞬、呼吸が止まる。

「どういう…こと、ですか？」

怪物…ヒュドラが接近する恐怖よりも今しがた男が唱えた情報が桜の動きを封じる。なぜ、既に消えたはずの『ガロニア』があゝの怪物となってしまうのか…

怪魔界で桜をガロニアとして仕立て上げたのは、本物のガロニアに施された成長促進システム内にある睡眠学習装置から予測され、組み立てられたガロニアの疑似人格に過ぎない。そのデータを桜の記憶にインストールされたことで、自身はガロニアであると思いついた桜が完成した。

だが、その時すでにクライシス帝国ですら予測できない事態が発生していた。

桜をガロニアの器として相応しい肉体とするために、クライシスのマリバロンは『奇跡の滝』と呼ばれる滝へ桜を三日三晩浸らせることにより、肉体を成人まで成長させ魔力も本来の数十倍にまで膨れ上げた。

予想以上にガロニアの人格を定着させたが、その成功も怪魔界に乗り込んだ光太郎達や本物のガロニアによって失敗に終わる。

終わるはずだった。

「…君の魔力との相性が良すぎたんだ。ただのデータだった人格が桜ちゃんの魔力を得て、確かな『意思』となった。そして本物のガロニアちゃんの手で君が元の身体に戻った後もここ…アンダーワールドで浮遊霊のような存在となり、後に君が聞いた説明…桜ちゃんがお兄さんたちを殺しかけたという恐怖や不安を吸収し、あの姿となったんだ」

負の感情は、絶望へと直結することもあるからねと告げた男は再び指輪を付けた手をバツクルに翳し、虚空へと手を突き刺し、引き抜くと彼の手には一振りの剣が握られていた。

鍰元が握り拳となっている銀色の刃…剣の柄を桜へと向ける。

「あの…これは…」

「あのファントムは君を狙っている…そして、決着を付けるのは君自身だ」

桜は瞳を震わせ、躊躇しながらも剣の柄を手取る。

もし、あの怪人の言う通りガロニアの自分の中で未だ息吹いており、男の言う通り、自分を食い破り現実世界に進出するような事があれば…こんどこそ義兄達の敵となりかねない。

だどするのなら…

「ダセエ…」

剣を両手でしっかりと握った桜は一步、また一步ヒュドラへと近づく。息を飲む桜の背中を黙って見つめる男は、ただ彼女が下す決断を待つ。彼女が、自身の絶望へと、どう向かうのかと。

「……………」

ついに攻撃が出来る間合いまで迫った桜に、ヒュドラも幾つもの頭をうならせ、そのうちの1頭が牙を向く。桜が攻撃するよりも早く、迫る蛇の頭を見やった桜は手にした剣を――

足元へと、放り投げた。

『ッ!?!』

これに驚いたのは、食らいつこうとしたヒュドラの方だ。だが武器を捨て、戦意を失おうがやることは変わらない。甲高い声を上げ、少

女の肩へと牙を突き抜けたと同時に鮮血が溢れ、ヒュドラの口内に暖かい液体があふれ出す。

そして、喉を潤す赤い血よりも、暖かい温もりがヒュドラの頭部を包み込んだ。

「ごめん、なさい…」

「…ッ!？」

桜の言葉に食らいついた頭部だけでなく、次に胴体や手足を喰いちぎろうとした頭部が動きを止める。

ドクドクと流血が止まない中、桜は自身の肩に喰らいついた頭部を優しく、優しく抱きとめていた。

「私が、クライシスに捕まったから…私が、貴女の事を知って怖いと思ってしまったから…貴女を閉じ込めてしまった。そして…」

「貴女を怪物に変えてしまった」

ガロニアの意思がファントムとなってしまう事など誰も予測す
らできない結果。それでも、桜は自分の責任だからと、『彼女』へ謝罪
する。

そして、これから言う我儘を改めて謝罪した。

「それに、私にはまだやるべきことがあるんです。だから、この身体を貴女にあげる事はできない。でも、いつか絶対に助けると約束します」

ヒュドラの牙がゆつくりと桜の肩から抜けていく。嘔き出した血にまみれた顔は凍てついたこちらの感情を溶かしてくるような暖かな微笑みを浮かべた桜は両手でジツと見つめるヒュドラの顔を両手で包む。

「だから…もう少しだけ、待って下さい。そしたら、もう一人のガロニアさんと一緒にお話しましょう」

『……………』

桜の手を振りほどくように強引に頭部を引き上げたヒュドラの姿が、段々と臃げになっていく。そんな中でも、桜を睨むことはやめない。一方桜は、18の鋭い眼に貫かれながらもやはり微笑みを絶やさない。

ついにヒュドラの姿が完全に消失した時、再びあの声が響いた。

《ヒール、プリーズ!》

光の灯った指輪をはめた男の手が桜の肩へと触れた途端、痛みや傷が完全に塞がり、穴の開いた衣服すらも塞がっていた。時間を要する自分の治療魔術とは比べものにならないと感心する桜へ、今度は男が謝罪する。

「ごめんな、桜ちゃん」

「え…？」

「俺、君を試していた。本来、倒すべきファントムに向かわず、君の出口を伺っていたんだ…」

常に明るい表情を向けていた男が、初めて見せる暗い顔。本来、彼はヒュドラから桜を護り、そしてヒュドラを滅する事が本来の仕事であった。

だが、男が桜に見せた魔法を扱うには、自身の中に喰食うファントム：絶望の象徴を抑え込み、その魔力を活用して空間操作などといった魔法が行えるのだ。

そして…桜に武器を与えたのは、自身の絶望とどう向き合うかを確かめる為でもあった。もし、自分や肉親の為に自分の絶望を恐れ、否定するのであれば、あのヒュドラは彼が倒すつもりでいた。同時に、それは彼女には自分と同じ力を与えない事と同意義でもある。

（本当なら、この力を持たないような選択が一番いい。けど、この子は…）

自身の絶望を、受け入れてしまった。それも、救いの手を伸ばすという男が想像すらしなかった方法で。

彼が力を手にする事ができたのは、絶望を乗り切り、絶望に負けなないものを持ち合わせていたからだ。自分とはまた違う道を見出した桜の姿を見て、男は決心する。同時に、今は自分の中にいる少女へと静か詫びる。

(ごめんな。もうただ士に頼まれたからってだけじゃなくて、俺自身がこの子の行く末を知りたいと考えている)

(もう、俺達みたいな奴を生み出さないつもりだったのにな…)

目を瞑り、本来は渡すつもりではなかったものを再び開いた亜空間から取り出し、塞がった傷跡にまだ関心が抜けない桜の手を取る。

「え、あの…!」

「ああ、君の考えるようなものじゃない。安心していいよ」

再び笑顔となった男が桜の手を取り、彼女の左手の中指へと通したのは、指輪だった。手を取られ、指輪を見た瞬間に乙女であれば誰でも抱いてしまうだろう事を咄嗟に男が否定してくれたおかげで一瞬息が詰まっただけで済んだ桜は自分に託された指輪がなんであるかを尋ねた。

「それは魔法の指輪だ。俺の仲間である指輪職人…つても見習いだけど、そいつが作った一級品だ。ちゃあんと、その師匠も太鼓判は押してるから、安心していいよ」

「で、でも…」

「大丈夫。桜ちゃんなら、使いこなせるはずさ」

「そんな…私はただ、嫌なだけなんです。私の周りの人が傷ついて欲しくない…私のせいで傷ついて欲しくない…」

仮面ライダーの戦いを理解してくれている蒔村楓の言葉のおかげで失意から立ち直った桜だが、やはり不安は拭いきれない。自分の力が未だ抑えられない上に、指輪の力が重なってしまったら…と視線を下へと向けてしまう桜へ男は言う。

「前へ進むには、今を受け入れるしかないよ。どんな力があるうが、君は君なんだから」

「え…?」

「それを、さつきはつきりと証明して見せてくれたじゃないか」

にっこりと笑う男の言葉には、偽りはない。だから、そんな気になっってしまうのは目の前の男も同様な道を歩き、辿り着いた一つの結果なのだろう。そう…人としての人生を奪われた義兄が、義兄のまま生きてくれたように、自分は、自分なのだ。

「…はい、ありがとうございます」

「うん！いい笑顔だ。その笑顔と力がきつと誰の助けになる。そして――」

「君は誰かの『希望』になるんだ」

男が宣言した直後、桜の周囲が光の粒子で包まれていく。どうやらこの世界でいられる時間が限界を迎えていたようだ。

「あ、あの…これは…」

「大丈夫！ここは元の世界とはずれた時間にあるからね。アンダーワールドに来る前から向こうでは1秒も経過していないはずだよ」

聞けば聞くほど、とんでもない事を言ってしまう人だ。もし姉である凜に報告したところで、信じてもらえるだろうかと苦笑する桜は、自身の指にはめられた指輪…ウィザードリングを男へと翳した。

「私、頑張ってみます！今の私で、できる事を！」

「ああ！頑張れよ!!」

満面の笑みで頷いた桜の姿が完全に消えた後、ふいふと息を漏らした男は振り返りながら再び姿を現した存在へと目を向ける。

「今度は俺に何か用かい？ファントムちゃん？」

灰色の空へと浮遊する9頭の魔物、ヒュドラ。男の前へと降下しながら怪物の輪郭が粒子となり、人間と変わらない形へと収縮していく。

着地する頃には完全な人の姿となり、同じ視線となった男を睨む。

肩を大胆に露出した紫色のドレスを纏った女性…その姿は桜がクライシス帝国に捕らわれた際の姿…成人となり、紫色の髪となった桜と瓜二つであった。

目つきは鋭く、今にも男を噛み殺さんとはかりに殺気まみれだ。

「フン…よくも私の世界で好き勝手やってくれたな。さっさと消えろがいい」

「おおコワ。ま、言われなくてもそろそろ限界だしね」

女性の厳しすぎる第一声を聞き大げさな反応を示す男の手が、桜同

様に粒子と化していく。

彼が桜のアンダーワールドへと入れたのは、彼女が持ち歩いていた指輪：赤上武に託されたものに自身の意識を移していたからだ。そして長時間本来の肉体から意識を飛ばしておくことなどできない。この粒子化は、肉体へ強制送還が始まった前兆なのだろう。

「そんなじゃ、俺はこれでいなくなるけど、桜ちゃんのサポート、頼んだぜ」

「何をたわけた事を：誰があんな小娘に協力などするか。この肉体は私がいずれもらい受ける。だから今回だけは手を引いてやったのだ」

と、豊かな母性の象徴の下で手を組み、顔をそらすファントムに対し、男はくつくくと笑いながら告げる。

「全く素直じゃないねえ。桜ちゃんがアンダーワールドに来る前だって、あの子の事助けといてさ」

「なっ…!?!」

「あの時…まだ自分の力に怯えてる桜ちゃんを傷つけない為に表に出て、助けてやったんだろう?」

最初に襲撃したチャップを倒した時。あれはパークスの言うガロニアの残滓によるものではなく、ファントムと化したガロニアによる行動だったのだ。

それを見抜かれたことに思わず動揺した彼女の発言はしどろもどろとなり、益々男の予測を確信めいたものへと代えてしまうだけであつた。

「な、何を言っているのかさっぱりだ! さっさと消えろ!! さもないと

かみ殺すぞ!!!」

シャーっと彼女の背後に無数の蛇の頭部が見えた男はやはり笑いを絶やさなのまま、彼女へ何かを放り投げる。受け取ったファントムが見たのは、桜に渡したものと同じ指輪だ。

「そいつはちよつとした保険だ。もしもの時に使ってくれ」

「だから何故私に…ええいもういい！まだ消えぬというのなら私が消える!!」

また言い返さると考えたのか、耳まで真っ赤にしたファントムは宣言通りに男の前から消失した。

パークスや男…そして桜に植え付けた人格は、本物のガロニアが将来なるであろうと予測して組み上げられたものだ。

だが、組み立てたマリバロンや男は失念していた。

どう成長を遂げようが、冷徹な言葉を放とうが、基となったのは、ガロニアであるという事を。

「さて、今度こそ戻んなきゃな。何時までも凜子ちゃんに心配かけるわけにはいかないし」

別の指輪を装着し、ベルトのバックルへと翳す前に男はもう一度アンダーワールドを見回した。

「じゃあ、また会おう。今度は、同じ魔法使い同士として」

《テレポート、プリーズ》

男：指輪の魔法使い　操真　晴人は自身とはまた違う希望を見出す少女に再会を誓い、この世界を後にした。

第71話

間桐桜という少女と初めて会ったのは、衛宮士郎が中学生の頃。

色々と息詰まる出来事が重なり、陸上部の許可を得て高跳びを永遠と繰り返していた時だった。

何時頃から見られていたかは分からない。

校舎の窓から士郎が助走し、棒を背にして地を蹴る直前までの行程を手に汗握る観客のように見守り、棒が身体に触れて士郎と共にマツトへ落下すると自身が失敗したかのように下を向く。

そんな感情表現が豊かである観客の姿に気が付いた士郎は、ただ自身の行動に一喜一憂する少女に、何故か応援されているように見えてしまった。

士郎が何度も起き上がり、飛べないという結果を出すに合わせ、次こそはという期待、跳躍までの興奮、失敗した時の落胆を繰り返している。

これはいつまでも失敗できない。

見守ってくれる少女の期待に応えようと力み過ぎたのか、士郎は跳ぶ目測を誤り高跳び台へと衝突し、音を立てて落下してしまった。

直ぐに立ち直ろうとしたが針で刺されたような痛みが足首に走る。

靴下を捲り、赤い腫れを見てやってしまったかと痛みに耐える土郎は自分を見守ってくれた少女がいた廊下を見ると、既にその姿はない。どうやら期待に応えられなかった自分に愛想を尽かされたかたと苦笑する土郎はこの後どう高跳び台を片づけるかと痛みが引かないまま立とうとした時、こちらへ駆け寄る者の姿を目に捉えた。

「あの子…」

見れば、窓越しに土郎の飛ぶ姿を見つめていた少女が両手で救急箱を携え、茫然とする土郎の隣に座ると処置を始める。大丈夫だと言おうと土郎だったが、窓の奥から眺めていた表情とは打って変わり真剣な顔で治療する姿に口をつぐみ、少女へと全てを委ねたのであった。

「はい、これで大丈夫です！」

「ありがとう。随分と手際がいいんだな」

「ええ。兄さんがよく怪我をして帰って来るのでそれで…でもすぐに治っちゃうんですけど」

段々と尻すぼみする少女の言葉に後半は何と言ったか聞き取れなかった土郎であったが、何にせよこうして手当をして助かったと感謝せねばならない。早速感謝を伝えようとしたが、少女は救急箱の蓋を閉めると失礼しますと一言添え、携帯電話を耳に当てる。

それから相手と2、3言葉を交わすと土郎が使用した高跳び用のバーを拾い上げた。少女の意図を察した土郎は慌てて少女を引き留める。

「な、なあ。それは俺が使ったものなんだ。だから後片付けなら俺が…」

「いけません！ただ湿布を貼っただけなんですから変に負担をかけてはダメです！それにお手伝いをお願いしたから先輩はそこでじっとしていて下さい」

お、応援つて…とその時自分を先輩と呼ばれてたことで少女が後輩であると理解した士郎は。パタパタとバーを掲げて体育倉庫へ走って行く後輩の後ろ姿を眺める事に夢中だったのか、背後に立つ人物の接近に気づけなかったようだ。

「怪我人がいるからお手伝いお願いしますと来てみれば…よりもよってお前かよ」

「え…？間桐…？」

見上げると、癖のある髪型をした同級生、間桐慎二がポケットに両手をつっ込んだまま慎二を見下ろしている。

1年時の文化祭準備期間中。士郎からしてみればちよつとした諍いを止める為に看板の修理を押し付けられた彼の傍に立ち、「何あんな無能な連中に使われてるんだよ」などの悪態をつきながらも手伝ってくれた同級生。

それが縁で何かと話すようになった、まだ下の名前で呼ぶような仲ではない少年は深く溜息をつく。士郎の横を抜け、高跳び台を持ち、体育倉庫へと向かっていく。

「おい、それは…」

「妹から聞いてないのか？お手伝いだよ僕は…」

まったく、何で僕がとブツブツと言いながら片づけに向かう途中、倉庫の中からピョコリと顔を出した桜を発見した慎二は尾を振る子犬のように近づく妹の額を指先で弾く。「あう！」とかわいらしい悲鳴を上げ、上目づかいで睨む妹など眼中に入れず無言で体育倉庫の中へと消えていく。

「兄妹…だったのか」

彼とは良く話すようになったが、妹がいるとは知らなかった。やり取りを見るからに…：それどころか妹の呼び出しにこんなにも早く応じる事から関係は良好なのだろう。弾かれた額を片手で抑え、残る手で倉庫から引つ張り出した台車を押して土郎へと向かう少女。恐らくマットをこれで運ぶつもりなのだろう。

「うう…ひどいです慎二兄さん」

「あの、なんだか悪いな。手間かけさせちやつて。ええと…」

「あ、そう言えば挨拶がまだでしたね」

「私、間桐桜と言います！」

夕日に照らされた彼女の笑顔は、ただ眩しかった。

それから彼女に何かお礼をさせてくれと伝えたら料理を教えて欲しいという切実な願いから今の関係に至っている。

自分以外が傷つくことを極端に嫌がる…いや、怖がると言った方が正しいのかもしれない。聖杯戦争後に実姉である遠坂凜から聞かされた間桐と遠坂の盟約。それにより、桜は幼い頃に本当の家族と引き離され、会う事を禁忌とされていた。

だが、彼女と同じく養子となった光太郎と接する事で、家の中で孤独となることなく成長を遂げた。

その光太郎から言わせれば、自分は桜のおかげで人としての感情を思いだしたと聞いた事もあり、間桐兄妹は血の繋がりはなくとも支え合いながら生きてきたのだと少し羨ましくも思えた。

そんな事真に受けるなど言い張った慎二も決して口に出さないが義兄と義妹の存在がなければどうなっていたかわからないと口から漏らし、今のは忘れろと必死になったのが微笑ましい。

ただ優しいだけでなく、どのような絶望を叩きつけられても、希望を持って跳ね返す意思の強さを持った少女。

だからだろう。

彼女が義兄と同じ戦士へ姿を変えても、驚き以上に納得してしまっただのは。

「か、仮面ライダー…」

仮面ライダーメイガスと名乗り、変身を遂げた桜の姿にパークスは嫌な汗を拭う。非力な人間を追い詰め、自身の好きなように痛めつけるだけと聞かされていたパークスにとって、クライシス帝国最大の敵と同じ名の戦士とは相手が悪すぎる。

ここは安全圏から追い詰めるしかないとパークスは引き連れたチャップ・怪人素体たちの後方へとジャンプし、未だ催眠状態にある学校の生徒や教員たちに命令を下す。

「さあお前達！仮面ライダーへ一斉に攻撃を仕掛けろ!!」
「なッ…!」

パークスの指示に従い、学校内から持ち出したであろうスコップやパイプ椅子等を掲げると桜に向かい走り出した。声を荒げ、敵の取っ

た非情な手段に彼女を助けよと足に力を込めるが、ダメージの蓄積により立ち上がれない。

「くっ…」

ただでさえ力が強まってしまった桜が仮面ライダーへと変身したのだ。誤って攻撃を…下手をすれば触れてしまっただけで一般人は大怪我を負ってしまう場合だっでありうる。

だが、士郎の抱く危惧は杞憂に終わる。

「っ…」

静かに息を吐くと同時に、桜も生徒たちに向かい走り出した。桜の行動には士郎も、敵であるパークスすら予想外である。黒いロングスカート靡かせて駆ける桜と先頭を走る生徒…時村楓の攻撃により倒れていたはずの柳洞一成の振り下ろしたスコップを僅かに身体を逸らすだけで回避。一成の横をすり抜け、続けて迫るジャージ姿の男子2人が同時に仕掛けた攻撃への対処に移る。

武器を持つ手首をそつと掌で押し、軌道を逸らし空ぶつた途端に2人の間を抜け、さらに迫るイーゼルを持ち上げた女子生徒の追撃を右足を軸に反転したことでかわす。

生徒たちに一切危害を加えることなく、全ての攻撃を避けた桜が群れを抜けた時、それは起こった。

「な…に…？」

最後尾の生徒が竹刀で繰り出した突きを手首を弾き、竹刀を宙へ舞う間にすれ違った直後だ。先に攻撃をした一成を始めに、次々と生徒たちが膝を付き、土埃を起こして倒れていく。桜は攻撃を回避し、生徒たちの間を抜けたただけでなく首筋に当身することで意識を奪って

いたのだ。

(あんなにもいた人間の攻撃を最小限で回避しながら、そんな事を…)

眼前に迫った凶器を刹那で回避し、次に来るであろう攻撃を肌で感じる。そして楓たちの意識を奪った際にみせた加減をさらに調整しての当身。これも彼女の五感が異様に発達してしまった故にできた芸当だろう。桜は恐れていた自身の力を仮面ライダーとなったことにより完全に使いこなしている。

「ちい…だかな。お前はただ動けぬ人質を増やしたに過ぎん！」

戦力を半数以上失ったパークスは、残るチャップ達を倒れた学生たちに向かわせる。意識を失った人間を逆に人質とし、桜の動きを封じようという魂胆なのだろうが、動きは桜の方が早かった。

バックルの左右にあるレバーをスライドさせ、手を象ったバックルが反転。右手の形から左手の形へと切り替わる。

…
《ルパッチマジックタッチゴー！ルパッチマジックタッチゴー！》

変身時とは異なった音声流れる中、ベルトの側面にマウントされたホルダーが指輪を取り外し、右中指へと嵌めた桜はバックルへと翳す。

《プロテクション、プリーズ！》

バックルの中央にうつすらと魔法陣が浮かび、指輪をはめた右手へ光を宿らせ、チャップ達の標的となった気を失った人々へと向ける。桜の手から光球が放たれ、生徒達の真上へ到達するとさらに光が強くなった直後、魔法陣へと変改。魔法陣は円柱型の結界を形成し、人々をすっぽりと包んでしまった。

「うわあっ!?!」

「ち、近づけない…?」

結界を乗り越えようと体当たりやライフルの引き金を握るチャップ達だった。突破できず弾かれるか、反射された弾丸の餌食となるしかない。

まさか、あのような強力な魔術を扱えるとは…茫然とするパークスの耳に、凜とした桜の声とさらに魔術を発動させた音声が届く。

「もう、関係のない人達を巻き込む事は許しません!」

《コネクト、プリイーズ!》

桜のアンダーワールドで操真晴人が見せた空間操作の魔術。

桜の真横に展開した魔法陣の向こう側である亜空間から桜が取り出したのは、長物の武器。

反り上がった刃と鏢元には握り拳を思わせる黒い装飾。頭上で数度回転させ、石突を校庭へと叩き付ける。

銀色に輝くそれは、薙刀のそれに近い形状の武器であった。

「はあッ!」

掛け声と共に武器を一閃。

2体のチャップを真横に振るった薙刀で吹き飛ばし、背後から棍棒を構える怪人素体の眉間へ石突をめり込ませる。

ならばと前後左右から同時に迫るチャップ達であったが、桜は棍棒の雨を受ける寸前に飛び上がり、グルグルと身体を回転させながら着地。

敵へと振り返りながら薙刀の鏢元にある拳型の装飾を展開。親指を起こす事で左平手となったことで音声が届り響く。

《キャモナ・スラツシュ・シェイクハアンズ！キャモナ・スラツシュ・シェイクハアンズ！》

桜はハンドオーサーを左手で握り、魔力を薙刀へと送り込む。指輪を通して桜の魔力は炎へと変換され、刃を纏う。

《フレア…》

《スラツシュストライク！メラ・メラ・メラアツ！！》

「ヤアアアアアアツ！！」

高熱と炎を放つ薙刀を構え、真横へ振るうと共に片足を軸に一回転。

桜の放った攻撃は炎の衝撃波となり、間合いにいたチャップだけではなく、離れて銃器を構えていた怪人素体すらも奔流に巻き込まれてしまった。

薙刀の石突を今度は静かに地面へと着けた時には、彼女の周りに立っている敵は存在しなかった。

「すいっ…」

桜の戦闘力に、そんな言葉を漏らすことしかできない士郎。彼女は元々魔術師としての素質は十分にあり、なおかつ光太郎の元で戦いの手解きを受けていた。そんな彼女が仮面ライダーとなったのだから、もはやこの場で勝利を収めたも当然だと気持ち振る上がった、その時だった。

「は…あ…」

ガシャン、と音を立てて薙刀が落下としたと同時に崩れ落ちる桜。どうにか両手を地面について身体を支えて倒れる事は免れたが激しく両肩を上下させている。

「桜ッ!!」

立てる状態まで回復した士郎は彼女を介抱しようとかつていくが、士郎よりも先に敵が彼女を見下ろす形で立ち尽くしている。今まで安全圏から戦いの行く末を眺めていたパークスがここぞとばかりに桜の襟を掴み、乱暴に持ち上げていく。

「うう…」

「キキキキキ…どうやらまだその力を完全にものとした訳じゃあなさそうだなあ小娘。俺には見えるぞお…お前の中で不必要な程の膨大な魔力が渦を巻いて、お前の動きを鈍らせているのがなあ」

パークスの予測通り、桜は変身に使用する指輪にセットされた魔法石と呼ばれる鉱石の影響でさらに魔力が増強。そして指輪を通して魔力を織り交ぜた攻撃を発動させる際の消費と回復の繰り返し、まだ桜の肉体に馴染みきっていないのだ。

「そんな中途半端な奴に、この俺様が敵うわけねえな…カアツ!!」

「キヤアアアアアアアツ!?!」

パークスの口から発射された魔力弾をゼロ距離でぶつけられた桜は吹き飛ばされ、校庭を二転、三転と転がる事でようやく止まる事ができた。立ち上がるうと震える腕に力を込めるが、体内で溢れる魔力によつて全身に痛みが走り、上手く立ち上がれない。

そんな桜へ追い打ちをかけるべくパークスは目を全開まで見開き、円型の波を桜へと放つ。

「キキキキキ…俺にも魔術の覚えがあつてなあ…あの人間どもを操る催眠術なんて生ぬるいものじゃない。お前の魔力をさらに暴走させる為の起爆剤みたいなもんだなあ」

「ぐっ…あああああツ!?!」

「こうして俺は魔術を扱う奴の魔力の流れを操り、自滅させてきたんだ。お前もその一人にしてやるぜ!」

パークスの魔術を浴びる桜の絶叫が校庭へ響き渡る。胸を押さえ、もがき苦しむ様をパークスは口元を吊り上げてさらに魔術を強めていく。もつと苦しめ、もつと苦しめと。この娘の喚き声をもつと聞きたいと愉悦に浸る外道に、耳障りな声が響いた。

桜が気を失えば、当然あの結界も消えるだろう。そうすればもう自分を邪魔するものはいなくなる。そして皆殺しにした後に桜を催眠術をかけ、自分の奴隷にすれば…。

鬼畜同然の妄想を繰り広げるパークスは知らない。

それが自分を追い詰めてしまう言葉になってしまった事を。

「…ない」

「あ?」

「させ、ない…!」

「そんな事、絶対に…させません…」

弱り果てた桜から響く、低い声。どうやらまだ意識を失ってなかったかとパークスが彼女を痛めつける為に触れた瞬間。パークスは高熱の湯に触れたかのように桜を手放した。

「アチイツ!!」

ゆっくり、ゆっくりと立ち上がる桜の身体から炎が沸き立つ。比喻

ではなく、実際に彼女の身体が燃焼しているのだ。さらに驚くべき事が、桜の体内で起こっていた。

「な、なぜ…なぜ小娘の魔力が安定しているんだ…」

そう、パークスの分析では桜の体内では魔力の循環が強弱と安定せず、それ故に身体に不調を起こす結果となってしまったのだが、今では膨大な魔力も一定の流れを保っている。

(なぜ…そんな事が)

「随分と不思議に思っているようですが…教えてくれたのは貴方ですよ。」

低い声のまま、仮面のせいでもまるで表情がまるで読み取れない桜の言葉にパークスが混乱する。なぜ自分が敵を助けたことになる？自分がした事と言えば、相手の魔力を操り…

「お、お前まさか…！」

恐る恐る声を上げるパークスは最悪な予感を抱いた。もし、自分の抱いた通りの事を少女がしでかしたのなら…

「ええ。貴方の考えている通りです」

ゆっくりと。いつの間にか装着した指輪をはめた右腕を、ゆっくりと翳す。

「貴方の『体内に流れる魔力を操る』という術。盗ませてもらいました」

その指輪は『シーフ』

相手が能力をしかけた際に発動させると、自らの術へとして扱える力を秘めた指輪であった。

「て…めえ…よくも、よくも俺様の術を…」

いくら指輪の力があつたと言えど、自分の術をこうも簡単に盗む相手を許せる魔術師は存在しない。このパークスも同様なのだろう。掌に武器を顕現させたパークスは、先ほどの士郎同様に桜へと走っていく。

「この、小娘ガアアアアアアアアアアアアアツ!!」

そして怒りのあまりにパークスは失念していた。パークスすら恐れていた膨大な魔力を従えた桜の怒りは、自身以上に苛烈で、むき出しであるという事を。

《ビッグ、プリーズ!》

新たな指輪に魔力を通わせた桜の眼前に魔法陣が出現。迷うことなく手を…それも掌底として叩き込む。

「ぶばあッ!」

無様な呻き声をあげたのは、パークスであった。

なぜ、目の前に突然『壁』が現れたのか…鼻を抑え、後ずさるパークスはさらに全身が何かに拘束…否、掴まれていることに驚愕した。

「な…なあッ!?」

パークスは、魔法陣を通過した事で数十倍も巨大となった桜の手に掴まれていたのだ。先ほどもぶつかつたのは壁などではなく、桜の掌だと勘付いたのも既に遅い。

さっきのお返しとばかりに放り投げられたパークスが顔面から地面に落下。急ぎ起き上がると、敵はこちらへゆっくりとした足取りで迫っている。おまけに手放したはずの武器を手にし、油断なく構えている。

「ちい…だがなあ、これで終わる俺様ではないぞおッ!!」

頭部に残る少ない毛髪を引きちぎり、息を吹きかけると血つて言った毛は段々と膨らみ、四肢が生えるとパークスとまるで変わらない姿へと変わっていく。

分身。それも彼の仲間であるガイナニンポーとは違い、完全に同じ姿を十数体も作り出したのだ。

「キキキキキキキキ…この術をニンポーの兄貴に伝授したのは俺なんぞでな…さあこれで一気になぶり殺しに…」

《《コピー、プリーズ!》》

「あ…?」

見れば、同じく桜も分身を行っていた。音声の通り、桜も全く同じ

姿の分身を作り出している。

「キキキキキキ…猿真似なんぞしやがって、だがなこちらの方が圧倒的に」

《《《コピー、プリイーズ！》》》》

「有利な」

《《《《《コピー、プリイーズ！》》》》》》

「状況に…」

《《《《《《《《《《《コピー、プリイーズ！》》》》》》》》》》》》

パークスが言い淀むまで続けられた桜の分身魔術。とうにパークスの分身を越えた人数となった桜はパークス達を取り囲み、寸分たがわず、同じ動きで新たな指輪をホルダーから取り出した。

『姉さんとメディアアさんが言っていました』

エコーのかかった声で語られたのは、以前に姉である凜とメディアアに戦いの際に敵が今回のように分身し、本物を見つけ出すための手段。武のように本人が放つ気をつかみ取るでもなく、義兄のように特殊能力を使い見分ける術を持たない桜が基本的に戦闘スタイルに近い2人に話を聞いた時、全く同じ返答で反応に困った時があった。

爆風に飲み込まれぬよう腕で自分の顔を庇う士郎はやがて消失した火柱の中でただ一人立つ桜の姿を見てホッと一息をつくが、桜から未だ警戒が解かれる様子はない。

(倒した手ごたえがあつたけど……1体だけ、取り逃がした)

それが分身であるのか、本体であるのかは定かではない。しかし見るからに怪人素体とは違い自身の意思をはっきりと持ち合わせていた分身がこのままおめおめと引き下がるはずがないと、桜は再び薙刀を握る。

そして桜の予測した通り、攻撃を逃れたパークスの本体が自身の身体を透明と化して桜の背後に迫っていた。

(キキキキキ……このまま背後から串刺しにしてくれる)

自分に施した魔術は見えなくするどころか、臭いや身体を動かした際の音すら消してしまうものなのだ。いくら五感が発達しているとやえど、気づくはずがない。あとは手にしたナイフでこの娘の首を切り裂けば……

既に当初の目的が頭がないパークスが桜へ不意打ちを仕掛けるまであと一歩という間合いまで迫る。後はナイフの一突きで少女の命が終わると口を引き攣らせたその時。

ベチャリ……と深い音が自身の頭上から聞こえる。

何かと触れて見れば、それは赤い液体。血液ではないようだがこの独特の臭いは、恐らくペンキ……

(な、まさか…！)

頭上を見上げれば、学校の上空を旋回する飛行物体が一つ。

『どうやら姿は消せても体温までは消せなかったようですね。チョコよりも甘い』

アクロバッターと共に出動したロードセクター・ネオはスカイモードへと変形し、敵に察知できない距離まで上昇し、桜の耳の裏に装着された高性能小型インカムにより状況を把握していたのであった。

いくら透明であろうと付着物まで消せる事はできない。桜は回し蹴りで背後に立つパークスを蹴り飛ばし、立て続けに指輪を装着し、ベルトへ手を翳した。

《バインド、プリーズ！》

「の、のわああああッ!?!」

小型の魔法陣がいくつも出現し、中央から無数の鎖が射出。透明となったパークスに巻き付き、完全に動きを封じてしまう。

「こ、こんな鎖(くさり)のときに…!」

「もう、逃がしません！」

薙刀の鏢元にある拳をスライドし、柄部の中央で固定。本体がくの字に曲がり、刃の先端と石突の間に光が走ると、弦にとって繋る。

弓となった武器：メイガスソードボウをアローモードへと移行させた桜は再びハンドオーサーを左手で握る。

《フレア！シューティングストライク！！メラ・メラ・メラアツ！！》

弓を構えると桜の前に炎で形成された矢が出現。迷いなく手に取った矢を番え、透明の魔術が解かれてしまったパークスへと狙いを定める。

「貴方のように、笑って誰かを傷つける人を…絶対に許さない！」

桜の咆哮と共に放たれた矢はさらに纏った炎を滾らせ、未だ拘束を解こうとする怪人の胸を貫いた。

「があ…！」

煙を上げる胸部に開いた小さな穴。段々と煙が濃くなるにつれて肉を焼く炎が大きくなり、やがて胸から拡散しパークスの全身を包み込んだ。

「こ、この俺が…小娘ごときにいいいいいいいいッ!?!」

自身の敗北を認められないまま、パークスは爆発の中でその命を散らしたのであった。

《ヒール、プリイーズ!》

「はい、これで完了です」

「ありがとう桜。俺は取りあえず大丈夫だよ」

「良かったです。でも、本当に大丈夫ですか？」

「ああ。見る限り、怪我をした人はいないみたいだしな。全員を校舎の中へ運ぶぐらい俺一人で大丈夫だ」

桜の治癒魔術を受けた士郎が言い出したのは、操られた人々を校舎内へ移動させるという内容だった。危機を迎えている光太郎の救助のためにも、今戦える力を持つ桜が向かった方がいいとう士郎へ最後まで異を唱えた桜だったが、今自分に出来る事を考えてくれと言われてしまえば、言い返すことができなかった。

優しい桜の事だ。全員が…特に自分に立ち直らせるきつかけを作った楓が起きるまでそばに居たいと言いつ出す事だろう。けど、彼女の優しさから生まれる強さを生かすのは今、ここではないと考えた士郎は彼女を送り出すことに決めたのだ。

『では、準備はよろしいですか?』

「はい、お願いします」

ロードセクターへと搭乗し、桜がヘルメットを装着するとロードセ

クターはエンジンを点火させる。

「じゃあ、急いでお願いしますー！」

『無論です。もしも白バイなどに止められたとしても既に桜嬢の偽造免許証も常備。登録のデータ改ざんも数秒で…』

「…やっぱり裏道からお願いします」

相も変わらず変な思考になってしまったロードセクターに乗り、校門の向こうへと去っていく後輩を見送った土郎は、陽の傾きかけた空を見てあの日を思い出す。

ただの後輩だと思っていた少女が、いつの間にか女の子となり、そして仮面ライダーとなって戦うようになっていた。

自分も負けられない。あの背中に負けない為にも、並び立てるようにならなくてはならない。

その為にも、今自分ですべき事を全力でやるべきだ。腕まくりをした土郎は気合いを込めて行動に移る。

「さあて、始めるか！」

第72話

クライス要塞の通路にカツカツとヒールを打ち付ける音が響き渡る。

情報参謀マリバロンは優れない表情のまま、手元のパッド型ツールに記載された情報を見つめた。

(ダメだ…集中できない)

歩きながらでの作戦立案は効率的ではない。そんな当たり前の事
に実行した後に思い知るなど、自分はどうしてしまったのだと頭を悩
ませる原因を探るが、思い当たる節はあれしかな。

前回の戦いでガロニアが自分の前から立ち去る寸前に見せた、儂い
表情。

あの顔が脳裏から離れず、情報収集も間桐光太郎抹殺に向かわせる
怪魔妖族の選定もままならない。

(ジャーク將軍の情けを受けて戦線復帰を許されたというのに…どう
したというのだ、私は…)

成長促進カプセルを途中で抜け出した事でクライシス皇帝の後継
ぎとしての資格とも言うべき強大な能力を失い、さらに本国へは戦い
の中で死んだという虚偽が報告された。

マリバロンは自分を庇ったジャーク將軍への感謝しきれない恩恵
に感謝をしながらも、ガロニアの言葉が突き刺さる。

『…ありがとう』

「…っ！」

ガロニアは自国を捨て、間桐光太郎と共に地球へと向かった。能力を失ったという以上に裏切り者である彼女に何の感情も浮かばない。浮かばないはずなのに、ガロニアの言葉を思い出す度に胸が痛む。そんな二律背反に苛むマリバロンは聞きなれた奇声を通りかかったモニタールームから聞こえると足を止め、自動扉を開放した。

「ゲドリアン…何を騒いでいるの？」

「ゲルー！マリバロンか…」

「いったい何を叫んで…これは?!」

入室したモニタールームで牙隊長ゲドリアンが興奮して見入っていたのは、間桐光太郎を一方的に攻撃するボスガンの姿であった。

変身もせず、人間の姿のままボスガンの攻撃を抵抗せず受け続ける姿に違和感を抱くマリバロンであるが、彼女の最もな疑問にゲドリアンは不満を交えてながらも説明する。

「ボスガンの野郎、どうやら間桐光太郎の身内にそれぞれ離れた場所で刺客を差し向けたみたいだ。もしボスガンの言う通りにしなければすぐにでも殺すと脅してな。くそそう、俺様も同じ手を使っていければ…」

先手を取られ悔しがるゲドリアンの心情は他所に、マリバロンはこの場にいたであろうもう一人の隊長の姿を探すが、姿がない。

「ゲドリアン、ガテゾーンはどこに？」

「あん？ガテゾーンもさっきまでいたんだがよお。妙な事言っ出ていきやがった」

「妙な事？」

「ああ。ボスガンに手柄は横取りされてしまったし、そうなればあの

RXが苦しむ姿を見るしか楽しみなねえ。だつてのにガテゾーンは…」

『こんな結果の見えてる戦いに興味はねえ』

「なあーんて気取った台詞吐いて出ていきやがった。確かにボスガンの勝ちで終わるけどよおー…あれ?」

ゲドリアンが振り向くと、話を聞かせていたはずであるマリバロンの姿はなく、ただモニターから聞こえるボスガンの光太郎を打ちのめす打撃音だけが響いていた。

「…ふう。ロボライダー相手にはフレーム自体の硬度を上げる必要があるが、バイオライダーはデータが足りんな」

自室でもあり、自身が率いる怪魔ロボットの開発ルームでもある空間で機甲隊長ガテゾーンは端末で自分で知り得たデータ…自身で開発し、そして敵であるカメンライダーに敗れた際に送信されたデータを基に、新たな部下の設計に勤しんでいた。

そんな折、扉を開いて入室した者が現れたが気にも留めず、振り向かぬまま来訪者へと声をかける。

入室の許可を得ずに自分の部屋に入って来る者など、ガテゾーンは2人しか知らない。

もう扉の前に立つ前からその隠し切れない覇気を放つ上官であるジャーク将軍。

そしてもう一人は…

「何か用か？マリバロン」

「ボスガンが間桐光太郎と戦っているわ。いえ、あれは戦いとは言えないわね…」

恨むべき敵が痛めつけられている。手柄はボスガンのものとなつてしまふのが惜しいところではあるが、自分達に煮え湯を飲ませ続けた光太郎が苦しむ様を見るのも一興であると、以前の自分なら考えていたはずだ。

だというのに…なぜ釈然としない。

特に光太郎が苦しむ光景を見て、我が身が切り裂かれるような同情を向けている訳ではない。ただ、マリバロンが気になるのはその結果。もし、間桐光太郎が死んでしまえば…

なぜ一番に喜ばなければならぬ未来に不安を覚えてしまふのか、マリバロンは理解ができなかった。

だからだろうか。

あれ程敵である光太郎を倒す事に執念を燃やしていたガテゾーンが、結果が目に見えていると既に興味を失っている理由を聞き、自分が抱く曇りのような陰りを打ち消す切っ掛けが得られるならばと期待し、部屋へと訪れた。

「ああ、ゲドリアンにも言ったが、もう戦う前から決着が着いているような戦いには興味ねえよ。いやまてよ…どんな攻撃を放つかは興味はあるが、そんなのは後で確認すればいいか」

「ガテゾーン。興味を抱くのは勝手でしょうか、それで間桐光太郎が死んでは今後生かす事が…」

「どうやら勘違いしてるようだが、俺が言った決着つてのは、ボスガンが勝つって意味じゃねえよ」

「え…」

つまりはガテゾーンはボスガンが勝利すると判断したのではなく、間桐光太郎が勝つと確信しモニタールームを後にしたということなのか。真逆であるガテゾーンの考えに疑問しか浮かばないマリバロンは作業中であるガテゾーンの肩を掴み、食入るように尋ねる。なぜ、敵である光太郎に対して、そのような考えを抱いたのか。

「どういう、意味なの?」

「そのまんまの意味だ。あいつは勝つ。必ずな」

それはまるで…このような言葉を敵に向ける事自体がナンセンスではあるが、『信頼』しているようではないか。

「どうやら納得いかないみたいだな。なら、そこで見てろよ。大分時間経っちゃったが…結果は変わらねえよ」

人間であれば、口元を釣り上げていたであろうガテゾーンは不敵に言う。と室内に設置されたモニターの一つを起動させる。そこには、変わらずにボスガンに一切抵抗せず攻撃を受け続ける間桐光太郎の姿があった。

あれを見ては光太郎が勝利すると到底思えない。彼女の考えを読み取ったのか、ガテゾーンは作業を止めるとマリバロンの隣へと並び立つ。

「やはり…わからない。貴方はどうして間桐光太郎が勝つと確信できたの?」

「なあに。見れば一発さ」

「奴の目を見ればな」

「ハア…ハア…ハア…ハア…」

室内を暗幕など生ぬるいものではなく、陽を差す箇所全てを特殊金属で加工した壁を張った事で光太郎をRXへ姿を変えさせない工作を施したこの工場に欠点はない。それを証拠に光太郎はRXへと変身できず、さらには自分の仕向けた刺客を向け人質を取ったことにより光太郎の動きを完全に封じている。

ボスガンの脅迫に光太郎は言われたように無抵抗のまま、なすがままににされていた。最初こそは自分の言われるがままサンドバックと化した光太郎を痛めつける事に高笑いしていたボスガンであったが、次第に笑う余裕がなくなり、むしろ焦りすら浮かんできてしまったのだ。

「ぐう…」

息を乱し、眼前で立ち尽くす光太郎の姿は、見るも無残なものだ。鞆に納めたままの剣に殴打され、衣服のあちこちは擦り切れ、袖から露出する腕には打撲が走る。額や口元からは血が流れ、目にするだけでも痛々しい。

だが、そんな状態になつてまでもボスガンが光太郎を嘲笑せず、むしろ危機感すら抱くようになってしまふ。

「き、貴様…その目を…」

柄を両手で強く握りしめたボスガンは、光太郎の顔目がけて全力で真横に振るう。

「その目を……やめないかあッ！」

激高する感情を込めて振るった一撃。頬骨まで砕いたとも思わせる音を立てて光太郎は仰け反るが、ゆっくりとした動作で顔を再びボスガンへと向ける。

「ぬう……！」

再び無言で見つめる光太郎の瞳に、ボスガンは戦慄した。

痛めつけられ、許しを乞うでも、兄妹を人質に取った事への怒りもない。

何の感情もこもっていない瞳でただ見つめる。

黙って、ただ見つめるだけだ。

見られているだけ、圧倒的に有利な事には変わらないボスガンは、この男に屈辱を与えようと盛んでいたが逆に自分が追い詰められていると感じてしまう。

だからだろう。

気が付けば息が乱れ、剣を握る掌は汗ばみ、何かを企む際に浮かべていた笑いを浮かべることすらできないでいた。

なぜだ。なぜ手出ししない光太郎に、時間が経つたびに自分が不利となっていくのか……

「……………」

ただ無言。言葉一つ発しない光太郎に焦りから別の感情へと切り

替わる寸前に、ボスガンは大声で控えていた怪魔獣人を呼び出す。

光太郎に抱いた別の『感情』を、認めるわけにはいかないのだ。

「…ガイナカマキルツ！ガイナギンガム」

「ははあツ!!」

ボスガンの命令に従い、天井から舞い降りた2体の怪魔獣人。赤い巨大な複眼と手に鋭い鎌を持つガイナカマキル。背中の甲羅に鋭い棘を持つカミツキガメを思わせるガイナギンガム。

ボスガンの背後に着地した2体に息を整えたボスガンは今もなお立ち尽くす光太郎を指さした。

「さあ、憎きRXはあの様だ。貴様たちの手柄とするがいい…」

「おお、まさかそのような重要な役割を我々に…」

「ケケケ…こいつは褒美が楽しみだあ」

ノシノシと光太郎へと迫る2体の怪人に背を向けたボスガンは悟られぬように汗を拭う。このまま光太郎がああ2体に殺されるのであれば、それでいい。

（ふん…あのように反撃の意思を欠片も持ち合わせぬ者など、私が倒す価値もない…）

そう強引に自分を納得させるボスガン。後は光太郎が死んでしまえば、首をジャーク將軍に投げつけさえすれば自分の地位も約束されたも当然。

クライシス皇帝から賜る次期將軍の座が目に見えてきた。見えてきたはずなのに。

(なぜ…不安が消えん)

ボスガンはもう光太郎を視界に入れなければ、収まるものかと考えていた。しかし、背を背けても、怪人に後を押し付けても、光太郎が放つ視線はまるで消えない。

いつまでも…もしくは死んでもあの『目』から逃れられないのではないのか…

依然に高まる『感情』をはつきりと認める前に、殺さなければならぬ。そうでなければ…

「何をしている！さっさと殺すのだ!!」

「は…ははあッ！」

「死ね！RXっ!!」

上司の発破をかけられ、光太郎へと駆けていく2体の怪人。持前の爪と牙で光太郎を切り裂こうと飛び上がった、その時だった。

「ん…?」

かすかに足元が揺れていると気づいたのはボスガンだった。ただの地震かと思われたが揺れは段々と大きく、激しくなっていく。

「こ、これは…!?!」

振動する床面が次第に亀裂が広がっていく。その中心は、怪人たちに今にも殺されようとする光太郎の数メートル手前。

そして床を突き破り、現れたのは2本の強靱な顎を持つ赤い機体。

「ぎげえッ!？」

「ガアッ!？」

突如出現した機体に突き飛ばされた怪人は奇声を上げて床に落下。機体は牙を収納すると、光太郎の前でゆっくりと停車。光太郎は地中から自分を助けに現れた機体と、その運転席に座る少女の名を思わず口に出してしまう。

「ライドロン…それに、ガロニアさん!？」

「ご無事ですが? 光太郎兄様!？」

運転席から飛び出たガロニアは携帯の救急箱を片手に茫然とする光太郎の前に立つと、一体どれを使ったらいいかと迷う中、光太郎はなぜここに現れたのかと、ライドロンへと視線を向ける。

『…君ノ状態ヲ把握シヨウト脳波ヲ受信シタ時、トテモ弱ツテイル状態ダツタ。ソレヲ知ツタ彼女ニドウシテモ連レテ来テ欲シイト言ワレテ断レナカツタ』

「ごめんなさい。でも、ワタクシは嫌なのです。こうして兄様たちが傷つくことも…そして、卑怯な手を使う者を見過ごすことも…!」

俯いて光太郎に謝罪するガロニアの声が、次第に怒気が含まれてたものに変わっていき、その行き先は突然の乱入者に引き飛ばされ、未だ地面を転がっている怪人達にさっさと立てと命令するボスガンへと向けられた。

自分が睨まれていると気づいたボスガンは、少女が間桐桜ではなく記録上は死んでいるはずのガロニアだと判断する。既に力を失っているガロニアなど恐れるに足らんと睨み返そうとした。だが、できなかった。

それが何であるのかはボスガンには分からない。彼女に目を向けられるだけで、先ほどの光太郎とは別の迫力がボスガンの足を竦ませ

いたのだ。

「ボスガン：…クライシス帝国の4大隊長に身を置きながら、卑劣な手段をもって敵をいたぶろうなど、貴族の風上にも置けません！恥を知りなさいッ!!」

「っ…!?!」

ガロニアの言葉が、ボスガンに重くのしかかる。力を失ったとはいえクライシス皇帝の血を継ぐ者が放つ凄みに、圧倒されたボスガンであったが、それよりもボスガンの激情が勝ってしまう。

「この、私を侮辱するか！裏切り者の分際でえッ!!」

今の今まで光太郎をいたぶった剣から鞘を抜き、放り捨てる。

刀身にエネルギーを蓄えた怪魔稲妻剣を構えたボスガンは、衝撃波を放ちガロニアを葬り去るべく握る力を込めると、彼女の前に出ようとする光太郎へと釘を刺した。

「忘れたか間桐光太郎！貴様の兄妹どもの命は私が握っていると——」

「ぼ、ボスガンさまあッ!!」

怪魔稲妻剣の切っ先が天を向いた直後、工場の奥から慌てふためき自分へと駆け寄る怪人へとボスガンは目を向ける。なぜ、指令を下してたガイナニンポーがこの場に現れたのか。

「ぎ、貴様!?!赤上武はどうしたのだ!」

「そ、それが…」

見れば鼻や口の周りを血で汚しているガイナニンポーは何かに怯えているように震えあがっている。その答えは、おのずと現れた。

ドオンツ：

「ひいッ!？」

「むっ?。」

背後から響く轟音。そこは完全に封鎖した上に溶接された工場の出入り口扉だ。光太郎を逃がさぬために、全ての出口を完全封鎖されたこの工場では、あの扉が唯一目に留まる箇所。

ボスガン達ですらワープ装置を使わねばこの場に入る事が出来ない程に頑丈な作りとなっている扉から何度も、何度も大きな音が響き渡る。

「何者かは知らんが無駄な事だ！その扉は例えロボライダーのパワーですら壊すことは出来ん!!」

ボスガンの言葉に反応したのか、扉を叩く音はピタリと鳴りやむ。どうやら諦めたのかと胸を撫でおろすガイナニンポーであったが、叩く音の代わりに最も聞きたくない音声が聞こえてしまった。

『ブラッドオレンジアームズ!』

「なッ!？」

『邪ノ道オンスタージ！』

電子音声が名乗りを上げた直後、扉に左右から斜めに切り裂かれた剣線が走る。

ずると音を立てて床に落下した扉の向こうには、紅い鎧武者が両手に持つ刀を振り下ろした姿が夕日に照らされていた。

赤地に斑模様の黒を走らせる複眼を煌かせたのは、赤上武が変身した仮面ライダー、武神鎧武だ。

「ほお…どうやらここで合っていたようだな。慎二殿が作った発信機も大したものだ」

長刀を腰に納め、液晶画面のついた追跡機を見せ着けるように翳した武の言葉に啞然としたボスガンは、同じく呆けるガイナニンポアの腰に点滅するボタンを発見する。どうやら先の戦いで戦極ドライバーを奪い返した際に取り付けていたようだ。

「こ、この馬鹿者めがッ!!」

「も、申し訳ありません…」

「駆け付けたのはいいが、それでも貴様たちが不利であることは変わらん!! いいか赤上武よ…もし貴様が——」

「おかしな真似をしたらこの場にいらない2人はどうなるか、という脅し文句であればもう無意味というものだ」

「な、に——!?!」

「なぜならば…その2人なら俺のすぐ後を追って来ていたからだ!」

武の言葉に続き、彼の左右から爆音を響かせる2台のマシンが駆け抜ける。

マシンたちは敵であるボスガンや怯えるガイナニンポーなど目もくれず、ようやく立ち上がったガイナギンガムとガイナカマキルを引き飛ばし光太郎とガロニアの前で急停止する。

「あの者達…まさか!?!」

2台のマシン…アクロバッテリーとロードセクター・ネオから飛び降り、ヘルメットを投げ捨てたのは人質となっているはずの2人。

「大丈夫ですか、光太郎兄さん!」

「まったく、いつもに増して酷いやられようだなおい」

間桐桜と、間桐慎二が駆け付けたのであった。

第73話

「慎二君…桜ちゃん…」

傷だらけである自分の姿を見て駆け寄る義弟と義妹の名を弱々しく口にする間桐光太郎。2人の命を握っていると脅迫したボスガンから受けた攻撃が後になって響いた訳でも、無事である事に緊張の糸が切れた訳でもなかった。

慎二と桜が生きて、自分の前に立ってくれている事に光太郎は胸を撫でおろすべきなのだろう。

しかし、相反して光太郎の表情は暗いものだ。彼の様子に慎二と桜は怪訝な顔を浮かべるが、次に聞こえた光太郎の言葉で、理解してしまった。彼の抱いた思いを。

「なって…しまったんだね…」

「っ…」

「……………」

ぼそりと光太郎の口から漏れた一言に、全てが込められていた。

義兄の顔を見て察した桜は息を飲み、慎二は無言で目を逸らす。

離れた場所から不穏な空気を醸し出す間桐兄妹を見る仮面ライダー 武神鎧武…赤上武は自分を見て警戒する怪魔獣人ガイナニンポーなど視界に入れず、数日前の出来事を思い出していた。

「俺は反対だ」

短く言い切った間桐光太郎の目は、いつになく鋭いものとなっていた。敵であるクライシスの怪人が現れたとしても同じ目つきにはならないだろう。

彼を知る人間ならば到底信じられないであろう怒気を込めた視線を受けながらも、赤上武は深く息を吐いた。

彼の性格：いや、彼の辿った道を考えればまず頷くとは思えない話を武は提案したのだから。

（光太郎殿なら、当然の反応だろう）

武が光太郎に示したのは、異界の協力者 葛葉紘汰から受け取った2つの道具：ガイアメモリとウィザードリング。

そのどちらも、ただの人間を戦士へと変える力を持つ。戦士の名は、異世界でもこう呼ばれてしまうのだ。

『仮面ライダー』と。

武は2つの道具を慎二と桜に託し、両名にこれから先現れるであろう怪人達と互角以上の戦いができるようにと光太郎に話したのだが先の発言通り、光太郎は良い顔をせず：逆に反対の意を表した。

「武君の言う通り、その道具があれば慎二君と桜ちゃんは強くなれる。けど、それは人間の範疇を完全に超えるものだ。俺は：賛成できない」

光太郎の懸念は武も理解できる。大きすぎる力は人間を必要以上

に危険な存在へと昇らせてしまうのだ。現に武も変身時に使用するロックシードの力に溺れたことで悪鬼羅刹と成り果て、取り返すのつかない悲劇を生み出してしまった過去がある。

送り主が信頼たる人物からであっても、突然手に入ってしまった力に魅入られてしまう可能性も決してゼロではない。

そして、大きな力はより大きな力を呼ぶ。

これまでの戦いで慎二と桜は敵の雑兵ごときであれば難なく倒す程の実力を身に付けてきたが怪人となればその場を離れ、光太郎のサポートに回っていた。しかし、互角以上に戦う力を入れた時、あの2人は確実に戦うだろう。

心許した友や、憧れた人。大切な人々を護る為に。

だからこそ、光太郎は受け入れられない。

仮面ライダーの戦いは常に死と隣り合わせであり、この先クライシス帝国との闘いは激しさを増す一方のはずだ。

怪魔界へと桜を救出に向かった時も、光太郎の新たな力が覚醒しなければ敵に捕らわれた桜どころか、同じく助けに向かった慎二ですら死んでいたのかもしれない。地球に残った武も、敵の戦法を利用した協力者の救援が無ければ全滅していたはずだ。

辛勝とはまさにこの事。敵は必ず自分達を研究し、上回る手段で打って来るだろう。

例え力を手にいれたとしても、この先に現れる敵に太刀打ちできなかつたら…

光太郎の脳裏に、偽物とは言え桜が星騎士の1人に惨殺された光景が蘇る。

桜のクローンが胸を貫かれ、心臓を握りつぶされた拳句に無残に命を散らした後継を。血の池に沈んだ亡骸を、狂ったように笑い眺める敵の姿を。

(…っ)

あんなことを、決して繰り返してはいけない。起こしてはいけない。

慎二と桜には、これまで通りの生活を。そして戦うとしても『人間』のまままでいて欲しい。

あの名を名乗った瞬間から、2人は戦い続ける覚悟を背負わなければならぬ。光太郎のように肉体そのものを作り変えられるのではなく、外的要因によるものでも力と姿は、紛れもなく『異端』となってしまう。

そうなって欲しくないと願い、拳を強く握る光太郎。だが、どこかでそれとは違う考えを巡らせていた所を、武が指摘してしまった。

「…光太郎殿の考えも痛い程分かる。しかし、だからこそあの2人は力を持つべきではないだろうか？」

「それは…！」

光太郎が言った真逆の意見を出す武の意見に、光太郎は口を噤んでしまう。武の言い分はまさに光太郎が浮かべてしまったもう一つの結論だったのだから。義弟と義妹には戦う力を持たせたくない。しかし、力は何も戦う為だけに存在する訳ではない。

「力を制するには、同じ力しかない。それは、光太郎殿が一番分かっているはずだ」

「……………」

「乱暴な言い分だと、俺も分かっている。だが、今のままでは2人は自分の命すら守れないかもしれんのだ」

語気を強める武。

敵は狡猾にして残忍。ゴルゴムの時のように、光太郎の目の前で慎二や桜の命運をチラつかせるのではなく、遠く離れた場所：宇宙や異世界まで連れ去られてしまった場合には、光太郎に駆け付ける手段はない。

そのための抑止力であるという武の意見に、光太郎は逡巡するばかりで反対も、賛成もできない。

「…慎二殿も桜殿も、力に溺れるような弱い心を持っている訳ではない。光太郎殿を見て力を持つ者の覚悟と恐れを、誰よりも理解しているはずだ」

「俺を…？」

ゆっくりと頷いて見せる武は、光太郎のいない場所で慎二と桜から聞かされていた。光太郎が戦いを終えた時の疲れ切った表情や、ふとした時に吐露した後悔を。

まだ仮面ライダーと名乗り出したばかりの頃。敵対する怪人を倒す、自分の行動は本当に正しかったのか。彼等も自分同様に利用される為に本来の姿を変えられただけではないのか。力を持たされた故に全てを失い、敵を倒す事に慣れていく自分という存在は、間違っているのではないか…？

光太郎が口に出さなくとも長い年月を共に過ごした慎二と桜には、

彼の抱く本来持つべきではない忌むべき力への葛藤が痛いほど伝わっていた。

『だからって、気を使ってほしいって訳じゃない。知ってほしかっただけだ』

『光太郎兄さんがどんな気持ちで戦っているのかを。同じ、仮面ライダーである武さんに…』

人間には過ぎた力を知る慎二と桜だからこそ、協力者に提供された力を持たせるのだと、武は確信を持って光太郎へと進言したのだ。

（あの後、2人には御守り代わりだと持たせ、使用方法は伝えたかった。だが、放たれた刺客を退けてここにいるという事。そして光太郎殿の言葉に反応したという事は…）

間違いなく、慎二と桜は変身したのだろう。

光太郎はメモリとリングを持たせることへ最終的には了承した。しかし、2人が自ら使い方を気づくまで決して真実を伝えないという条件を付けての事だったが、結果2人は気づいてしまう。

結局、彼等をまた大きな戦いに巻き込む事になってしまったと下を見る光太郎に続き、かける言葉を失ってしまった慎二と桜。

訪れた沈黙を破ったのは、やはり2人だった。

「光太郎…勘違いするなよ。僕たちは、自分で選んだんだ」

「…はい。誰かに言われた訳でもなく、私達が望んで手にしたんです」
「けど…」

力なく声を発する光太郎へ、慎二と桜はそれぞれ託された道具を…
ガイアメモリとウイザードリングを手にした。

「それに、送り主にも言われたよ。力つてのは使用する奴の心で左右されるって。光太郎は僕らがそんなことでブレる腑抜けだと思つたのか?」

「そんな事…!」

慎二の質問に反論しようと顔を上げる光太郎は、続けて笑顔で語る桜の言葉に目を丸くしてしまう。

「安心して下さい。力を持って、姿が変わったとしても私達は私達です。そう教えてくれたのは、光太郎兄さんですよ?」
「…っ」

言葉が出ない。

光太郎の危惧は今でも変わりない。戦い続ける存在『仮面ライダー』となつてしまった慎二と桜は、この先否応なく戦う事になるだろう。

それでも、慎二は力に負けenいと言つた。桜は変わらないと言つた。

「これは先の話…もし、僕らが光太郎が恐れたような展開に陥ったら…全力で止めてくれ」

「その代わり、光太郎兄さんが変な考えを持った場合、私達が絶対に止めて見せます！」

だから、心配は無用だ。

そうだ。

これまでの戦いでも、散々2人には助けられたというのに、光太郎は2人には力を扱えないと勝手に決めつけ、最悪な方向へとばかり考えいた。これでは、武の方が2人を理解していたと言えるだろう。

(全く、情けない長男だよ…俺は)

「なっ…!?!」

「兄さん…?!」

慎二と桜は不意に自分達の後頭部に手を回し、抱き寄せた光太郎の行動に驚き声を上げてしまいが静かに呟く光太郎の声を聞き、身を委ねてしまう。

「ごめん…ありがとう…」

「…暑苦しいんだよ。ったく…」

「フフ…」

抱擁され文句は言いつつも振り払わない慎二がついおかしくて

笑ってしまう桜。こうして、義兄に抱かれるのはいつぶりだろうと思
い出す桜の耳に、金属同士が強くぶつかり合う音が響いた。

「ええい、相手は1人なのだぞ!?何をもたついている!!」

「全く無粋な輩共だ。兄妹が絆を深め合っているというのに…」

呆れたと言わんばかりに溜息を吐く武はそんな声とは裏腹に、次々と攻撃を繰り出す怪魔獣人たちの猛撃を紙一重で回避し、無防備である光太郎へと襲い掛かろうとした敵を1人で防いでいた。

指揮官であるボスガンがバイクから降り、光太郎の元へ2人が駆け寄って会話を始めた辺りから不意打ちをしかけるよう命令を下すが、読んでいた武に阻止され今に至っている。

二振りの刀でガイナカマキルの鎌を、ガイナギングムの爪を、ガイナニンポーの棒を防ぎ、弾く武の戦闘を見て改めて脅威を抱くボスガンだが、反撃はできまい。このまま消耗したところで自分が止めをさせば…

怪魔稲妻剣を両手で構えるが、本来の標的である怨敵の声が工場内に響き渡る。

「ボスガンッ!!」

「ぬうッ!？」

その一声に、名を叫ばれたボスガンや戦闘を繰り広げていた怪人達が同時に顔を向ける。武だけが振り向かず、仮面の下で静かに笑みを浮かべていた。

間桐光太郎を中心に、右隣には間桐慎二・左隣には間桐桜が並び立つ。その表情に、武が見た迷い等は一切もない。

むしろ垢抜けたように晴れやかな表情だ。

「おい、敵に向かって笑うなよ気持ち悪い」

「ハハッ手厳しいな慎二君」

「武さん一人だけじゃ大変なんです。早く助けましょう」

「ああ、そうだね」

間桐家で見せる日常のやりとりを見せた3人は、異なる動作を始めた。

懐から取り出したガイアドライバーを腹部に当て、自動装着させた慎二はガイアメモリのスイッチを力強く押し込む。

《TRIGGERッ!》

メモリをドライバーへ装填し、鼓動を思わせる待機音が鳴り響きく。

《ドライバーオン、プリーズ！》

右手の中指に指輪を装着し、腹部へ翳しメイガスドライバーを召喚。さらにバックルの左右にあるレバーをスライドさせた桜は、続いて左手の中指にフレアのリングを装着。指輪のバイザーを下ろした。

《 シャバ・ドウビ・タッチ・ヘンシーンツ！シャバ・ドウビ・タッチ・ヘンシーンツ！ 》

「……………」

目を閉じ、力を集中させた光太郎の腹部に赤い王石を宿したエナジーリアクターを中心としたベルトが出現。これまでと違うベルトの出現に驚く2人に、光太郎は悪戯を成功させた子供のような表情を浮かべる。

「どうせなら一緒に、ね？」

「ったく…」

「兄さんったら…」

これから叫ぶ言葉は、戦いに赴く自分の心と、姿を変える為のもの。だというのにこの緊張感の無さは、流石と言うべきか。

苦笑を浮かべる桜と目を合わせた光太郎は共に頷き、呆れながらも待ってくれる慎二へと視線を移すと、やはり同じく頷き合う。

そして光太郎が左手を腰へと添え、右手を素早く左下へと空を切り、腰へと引き戻すと同時に左手を右上へと突き出す。

扇を描くように腕を伸ばしたまま右から左へと旋回。

その言葉は、同時に叫ばれた。

『変身!』

《TRIGGERッ!》

装填したドライバーの一部を押し倒し、解き放たれたエネルギーを纏った慎二は青い装甲に包まれる。

《フレア、プリーズ!メラ:メラ:メラ・メラ・メラア!!》

バックルへと翳し、輝きを放つ指輪を装着した左手を点へと向け

る。頭上に出現した魔法陣を通過した桜の身体を魔法石で編まれた鎧と黒いスーツを纏う。

ベルトから放たれた光により、光太郎の身体は一瞬バツタ男へと変貌した直後、強化皮膚リプラスフォースで覆われた。

「な、なんだと…」

ボスガンは悪夢を見ているのかと声を絞り出す。

茫然と眺めていた怪魔獣人も同様だ。

この場にいる仮面ライダーは間桐光太郎と赤上武の2人だけだったはずだ。だが、目の前に並び立つ者達…容姿はまるで異なるが、全員が仮面ライダー。

青の身体に赤い複眼を持つ仮面ライダートリガー。

黒いロングスカートを靡かせる仮面ライダーメイガス。

そして黒曜の戦士、仮面ライダーBLACK。

「さて、敵さん同様してるようだが、まだ終わりじゃないよな？桜」

「はい、当然です！」

胸に装着されたトリガーマガナムを握る慎二に同意した桜は空間操作によりメイガスソードボウを亜空間から取り出し、アローモードへと移行。

合図一つすることなく、同時に光太郎の頭上を狙い撃つ。

当然、慎二たちに打ち抜かれた天井は爆発音とともに大穴が空き、穴からは橙色の光が降り注ぐ。

既に夕刻となつてしまつたが、それは紛れもなく太陽の輝き。

光を浴びた光太郎は天へと手を伸ばし、唱えた――

「太陽よ…俺に力をツ!!」

光太郎の赤い複眼の奥で光が爆発する。

体内に宿つたキングストーンのと光太郎へと降り注ぐ太陽の力が融合した『ハイブリットエネルギー』により光太郎のベルトは2つの力を秘めた『サンライザー』へと変化。

サンライザーから放たれる2つの異なる輝きが光太郎の全身を包み、彼を『光の戦士』へと進化させた。

黒いボディの一部が深い緑色へと変わり、胸部には太陽の力をエネルギーへと変換する『サンバスク』が出現。よりバツタへとイメージが近づいた仮面、より強く光る真つ赤な目を思わせる複眼と一對のアンテナ。

再び右手を天に翳した光太郎は敵に向かい、名を轟かせた。

「俺は太陽の子ッ！」

「仮面ライダーBLACK!!RX!!!」

ついにその姿をRXと変えた光太郎は動揺するボスガンを指さし、これまでの策略に対する怒りを込め、言葉を発するのだった。

「ボスガンッ！貴様のような卑怯者は俺達が断じて許さん…覚悟しろッ!!」

第74話

「ボスガンツ！ 貴様のような卑怯者は俺達が断じて許さん…覚悟しろッ!!」

間桐光太郎：仮面ライダーBLACK RXの叫びが工場内に木霊する。

天井から差し込む橙色の輝きに照らされたその姿と迫力は、まもなく沈もうとしながらも最後まで輝き、地表を照らし続ける太陽そのもの。

そして彼の傍らには2人の新たな仮面ライダー、トリガーとメイガス、ボスガン達と光太郎の中間に聳え立つ武神鎧武。

光太郎の放った言葉に同調するかのように、それぞれが手にした武器を強く握り、クライシス帝国の怪魔獣人たちを睨む。

ボスガンの中でなぜ、こうなつたと幾度も繰り返される。

立てた作戦は完璧だった。

非力でただの人間に過ぎない間桐慎二と間桐桜を人質に、騙し討ちにより赤上武から変身能力を奪い、間桐光太郎を変身させないまま抹殺する。

一体、何がいけなかったのか。

ただの人間だと決めつけ、下級の怪人を向かわせたからか？

ベルトさえ取り上げれば、戦う手段はないと決めつけたからか？

変身させずに脅迫した間桐光太郎を、すぐさま始末しなかったからか…？

だが、そんな疑問は光太郎の放った一つの言葉にかき消される。

卑怯者

敵である光太郎を追い詰める為に策を講じたに過ぎないボスガンから見れば、侮蔑以外のなものでもない。地球侵略部隊の中で唯一の貴族である事を自負するボスガンは自分を侮辱する者を決して許さない。

侵略作戦を開始する直前、ジャーク將軍の命令により光太郎をクライス要塞へと招くと聞いたボスガンは、將軍が謁見するに相応しい男であるのか光太郎の力を試そうと戦いを挑む。しかしキングストーンを封じてしまえば自分の足元に及ばない存在であり、クライシス皇帝に選ばれた自分には決して敵わないと分らせるため、徹底的に痛めつけた。

以来、自分は光太郎に勝っていると思いつつボスガンが放った刺客である怪魔獣人は連戦連敗。

不甲斐ない部下の失態に頭を悩ませる日々の中、特殊な能力を利用するため密約を交わしていた星騎士ジュピトルスの暴走により危うくなった立場へと追い込まれてしまう。

名誉挽回の為に自ら前線へと出たボスガンを待っていたのは、間桐光太郎の弱点であるはずの人間2人までもが仮面ライダーとなってしまうと予測すらできない事態と、先ほどの罵倒…

込み上げた怒りが頂点に達したボスガンは怪魔稲妻剣の先を全ての元凶である光太郎へと向け、立ち並ぶ仮面ライダー達の姿に呆けている怪魔獣人たちへと指令を下す。

「何をボサツとしている！今すぐにもRX達を叩き潰せえツ!!」

背後から突然響いた上官の怒鳴り声にビクリとさせた獣人たちは続くように咆哮。狙いを定めた敵へと駆けていくのであった。

「ほう、今度は正面切つて挑んでくるとは…戦いを挑む度胸はあつたようだな？」

「喧しい！貴様なんぞ俺の棒術だけでも打ち倒してくれる！」

仮面ライダー武神鎧武…赤上武へと棍棒を向けるガイナニンポーは敵の頭上を飛び越え、背後に着地するとすぐさまに真横へと前転。視線で追う武の不意を突くため四方八方、素早い動きで翻弄しようと動きを早める。最初の数度は武も目で追ったものの、以降はまるで動きを見せずにいた。

(キキキ…どうやら俺の超スピードに付いてこれないようだな)

優越感に浸るガイナニンポーであったが、この男は変身する手段を奪ったというのに慌てるどころかインベスという隠し玉を持ち合わせ意表を突いていき。また何か妙な手段を取られる前に一気に決着をつけてみせるとガイナニンポーは微動だにしない武の側頭部目掛け、棍棒を振り下ろし――

「ギギヤアツ!?!」

悲鳴と共に床へと落ちた。

「あ、がが、なあ…!?!」

胸に走った痛みと弾けた光に目が眩んだガイナニンポーはなぜ自分は痛む目と胸を押させて苦しんでいたのか、何が起こった事すら分からなかった。

辛うじて見える目で獲物を見れば、敵は立ち位置を変えず、手にした武器だけを自分が飛んでいた方へと向けている。武の持つ無双セイバーの唾：内臓銃であるムソウマズルからは煙がユラユラと昇り、引き金を引いた武は床を這いつくばる怪人へと目を向けた。

「いくら相手の目を眩ませるために素早く動こうと、滾らせた殺気を消さなければ意味はない。自分の位置を教えているようなものだ」

呆れたものだとは呟く武は棍棒を杖替わりによろよると立ち上がるガイナニンポーへ向き直り、西日に反射して煌きを見せる二刀を構えた。

「関係のない藤村殿を巻き込んだ報い：今度こそ受けてもらおうとしよう」

「兄さん、頼みます！」

「無理するなよ。お前が扱ってるのは、間桐にある魔術書じゃ何一つ解明できないもんばっかりなんだからな」

「はい！」

カマキリ型の怪魔獣人ガイナカマキルへと駆けだす桜はドライブのバックルをスライドさせると緑色の指輪を装着した左腕を翳す。

《トルネード、プリーズ！ビュン！ビュン！ビュン！ビュン！ビュン！》

桜の前方に緑色の魔法陣が現れ、そこを通過した桜の赤い仮面とボディ部分が指輪と同じ色へと変化。

赤から緑へ。

炎から風へ。

ベルトが放つ音声の通り吹き荒れる竜巻のように激しい風を纏い、身体を浮かせたメイガスは『フレアスタイル』から『トルネードスタイル』へと形態を変え敵へと突進。

薙刀型へと戻したメイガスソードボウを構え、鋭い鎌を振り上げる。ガイナカマキルへと肉迫する。

「ハアッ！」

気合いと共に刃を横薙ぎに振るう桜の攻撃をガイナカマキルは両腕を交差させて受け止める。形態を変えた事によりスピードが上がっているようだが、その分威力は弱い。

これならば自慢の鎌ですぐにでも真つ二つにできると意気込むガイナカマキルは押し返そうと両腕に力を込める寸前、足首へ重く激しい痛みと同時に破裂音が響いた。

「ギギイッ!？」

ヨロヨロと後退するガイナカマキルは自分の足に攻撃を仕掛けた犯人：狙撃した慎二に目を向ける。しかしガイナカマキルは慎二へ

攻撃する暇はない。続いて自分の真横へと移動した桜が頭頂部目掛け振り下ろした攻撃を慌てて右手の鎌で受け止め、残る左腕の鎌で反撃を試みるがやはり動きを見せる直前に慎二の狙撃によって阻まれてしまった。

桜が注意を逸らした隙に、慎二が銃撃。

桜がどのような方角から攻撃しようと、慎二は確実にガイナカマキルが注意を向けない場所を狙い撃つ。

完全な連携だが、一歩間違えれば慎二の攻撃は桜に当たりかねない。それでも攻撃が成り立つのは、慎二ならば絶対に自分の動きを予測して狙撃すると踏んで敵を翻弄する桜と、桜ならば自分がどこを狙うか分かって斬撃を繰り返すと照準を合わせる慎二の口に出す必要のない信頼関係があつてこそそのものなのだろう。

敵を確実に追い詰めるこの戦術には、もう一つの理由があつた。

（最小の動きで敵を止めをさせる状態まで追い詰める…それが、今の僕らの限界だな…）

そう思考する慎二は、トリガーマグナムの引き金を引くたびに走る衝撃に耐えながら狙いを定める。

仮面ライダーへと変身し、光太郎のサポート以上の戦闘能力を手にした慎二と桜であつたが、その負担は大きすぎた。

小型であるにも関わらず、両腕でしっかりと固定しなければ性格な狙撃どころか反動によって手に痛みが走ってしまうトリガーマグナム。先の戦闘の際に放った必殺技の反動によるダメージが蓄積された慎二には、撃つ度に悲鳴を上げたい程の反動が走る。

桜も同様だ。ガロニアとなった副作用で魔力が大きく増幅したとはいえど、桜は変身、攻撃、さらに必殺技全てにおいて魔力を多量に消費していく。魔法石の指輪に宿る力の補助もあるが、慣れない桜には

負担が大きく、ゆえに初の戦闘で見せた指輪を使用した特殊な攻撃は繰り返していかない。

敵に悟られる前に決着を付ける。光太郎への説明は、その後でも十分だろう。

「うぐぐ…調子に乗るなよッ!!」

全身に銃痕を作るガイナカマキルはただ黙ってダメージを蓄積させた訳ではない。1対2という不利な状況ではあるが、敵の分析はある程度完了した。

緑の仮面ライダーはすばしっこいが攻撃は軽く、しかもその攻撃は青の仮面ライダーの銃撃を確実なものとするためだ。

ならばどちらを先に始末するかなど、一目瞭然。

「キエエエエエエエエエエエエツ!!」

桜の何度目かになるかも分からない攻撃を無理やり弾いたガイナカマキルは両腕を左右に伸ばし慎二へと迫る。

素早い仮面ライダーは後でゆっくりと始末すればいい。先に、チクチクと攻撃する仮面ライダーを先に葬り去れば確実に勝てる!

そうすれば新しい仮面ライダーの首を2つも持ち帰ることができると走る脚に力を込めるガイナカマキルであるが、自分が迫っているというのに手にした銃で肩を叩き、余裕の態度を見せている。何を企んでいるかは知らんが、武器をこちらに向けずに待ち構えるという態度に激高したガイナカマキルはさらに大地を踏みしめる足を強めた。

ガイナカマキルが後悔する。

この仮面ライダーを相手にするのではなかったと。

「ッ
!?!?!?!?!?!」

声にならない悲鳴を上げるガイナカマキルの足に、慎二の銃撃とはまた違う痛みが走る。

正確には足の裏に棘が突き刺さる刺激が無数に発生し、後退して地面を踏みつけければ踏みつける程痛みは増し、深くなっていく。一体何がガイナカマキルは踏みしめた場所を見ると薄暗い倉庫内では分かりずらかったが無数の黒い『何か』が散らばっている。

まきびし
撒菱である。

「そう素直にひっかかってくれるなんて、こっちは逆に予想外だったよ」

あの攻撃の中で、いずれは自分の身に迫るであろうと予感し、さらに罠を張り巡らせた慎二は再び両手で銃を構える。それだけではなく、背後から響く弦をゆつくりと引く音。桜がメイガスソードボウをアローモードへ変形させ、狙いを定めていたのだ。

「お、のれ…小細工をつ…」

「手段について、お前達にどうこう言われる筋合いはないね」

「私たち…怒っているんですからねッ!!」

鎌である自分の手では突き刺さった撒菱を抜くことができず、もがくガイナカマキルへ上回る怒気を見せる2人の仮面ライダーは容赦なく敵の前後目掛けて容赦なく、その一撃を放った。

「トアッ!!」

「ぐうッ!」

ガイナギンガムの胸板へ光太郎の拳がめり込み、くぐもった声が上がる。続いて回し蹴り、再度ストレートパンチと怪人を追い詰める光太郎だったが、敵が突如自分に背中を向けた事を警戒して後退すると同時にガイナギンガムの甲羅から生えた無数の棘が火を噴きだして迫って来る。

ミサイルの如く飛び交う棘は瞬時に再生、そして発射を繰り返していき、迫る棘は数えるのが馬鹿らしく思える程に大量だ。

回避は間に合わないと判断した光太郎は眼前で両腕を交差し、左右へ一気に振り下ろす。

腹部のサンライザーが光を放ち、形状を2つの赤い宝玉から歯車へと変えていく。

さらに橙色の光を放つ光太郎の姿もRXからロボライダーへと形態を変化。

赤い複眼を発光させ、右手に握るレーザー銃、ボルテックシューターを次々と連射。迫りくる棘のミサイルの飛ぶ速さ、個々の間隔、全てを一瞬で計算した光太郎にミサイルは全て撃ち落としていき、灰となって舞い落ちていった。

「ッ!」

驚愕と共に振り返るガイナギンガムへとボルテックシューターを向ける光太郎。この一撃で決まりと引き金に力を入れようとした矢先――

「この時を待っていたのだあッ!!」

「ガアッ!?!」

背中に叩き付けられた斬撃。

思わずボルテックシューターを取りこぼしてしまった光太郎へさらに攻撃は続く。

同じ個所へ何度も、何度も切りつけられるこの下賤な方法。先ほどガイナギンガム達へと指示を飛ばした後、どこかへと立ち去ったのかと思われたボスガンが怪魔稲妻剣を持ち、光太郎へと奇襲をしかけたのだ。

「ボスガン、貴様っ…!」

「フハハハハ…思い知ったか怪魔稲妻剣の威力を!ロボライダーの硬度を越えるこの切れ味…素晴らしいではないか…」

ブスブスと背中から煙を上げる光太郎は膝を付き、確かに武器の威力は凄まじいと素直に認める。ロボライダーの身体にダメージを与えたのは、初めてだ。しかし、こんな事で屈するわけにはいかない。

成功させた不意打ちに酔いしれるボスガンに、光太郎はさらに挑発をしかけた。

「ボスガン…やはり俺の言った事は正しかったようだ」

「何…?」

俯いたまま何をほざくのかと敵の遺言を待つボスガンの余裕は、脆くも崩れ去る。

「貴様は貴様の言う貴族でも何でもない…ただの卑怯者だッ!!」

ブチブチとボスガンの中で何か破裂する。最早敵の言葉に耳を貸すのも下らない、一刻も早くこの男の首を切り落としてくれると、怪魔稲妻剣を大きく振り上げたボスガンと光太郎の姿はさながら死刑囚と首を跳ねる執行人のようにも見えるだろう。

これで、宿敵を自分の手で葬ることが出来る。息吹き始めていた『あの感情』を拭うことができる。

万感の思いと共に振り下ろされた怪魔稲妻剣が光太郎の首に迫るが、変化が起きた。

光太郎の身体が青い液状へと変わり、剣は首を刎ねるところか、液体を突き抜けて地面を叩く。

「こ、これは…!」

液体はボスガンの頭上を飛び、離れた箇所へと落下すると同時に形を成していく。そのプライド故にガテゾーンから提供された情報に目も向けなかった中であつたあまりにも未知数であるRXの新たな姿。

バイオライダーとなつた光太郎は右手にバイオブレードを顕現させ、啞然とするボスガンへと言い放つ。

「貴様の怪魔稲妻剣は、もう俺には通用せん!」

「何を馬鹿な…この剣がただ敵を切り裂く為のものでも考えていたかあッ!!」

剣にエネルギーを蓄積させ、光太郎へ電撃を照射。剣の名の通りである稲妻に身体を液体と化することができても、この電撃は防ぐことなどできまい。そう高を括るボスガンは再度驚くこととなった。

「むうんッー」

迫る電撃に光太郎はバイオブレードを突き立て、そのエネルギーを全て集中させる。避雷針となった刃に全ての電撃が収集された刹那、光太郎はバイオブレードを真横へ振るう。

バイオブレードへと集ったエネルギーは拡散し、ボスガンの足元へと次々に落下、爆発を起こしていく。不意の出来事に思わず両手で顔を覆うボスガンはその隙に光太郎が自身の真上へと飛んで来たど気が付いたのは、光太郎がバイオブレードを振り下ろしたまさにその時だったのだ。

「があッ!？」

反射的に怪魔稲妻剣を振り上げるが既に遅く、バイオブレードがボスガンの手首へと叩き付けられる。剣の落下した、乾いた音が響く中でボスガンは叩かれた手首を抑え蹲りながらも油断なくバイオブレードを構える光太郎を睨む。

「ぐう、己…：貴様たち、確実にRXを倒せ！失敗は…：許さぬぞッ!!」

自分の部下に全てを押し付けたボスガンの姿が消える。

最後の最後まで自身の力で戦う事のなかったボスガンの指示に従い、こちらへと駆け寄るガイナギングムの姿を見て衰れとも思うも光太郎は思考を切り替え、姿をバイオリダーからRXへと戻り、右手を前方へと翳し、左手をベルトに添える。

「リボルケインツ!!」

『ブラッドオレンジ、スカツシユツ!!』

「ぐはあッ」

エネルギーを込めた大橙丸によつて棍棒ごと胸を切断されたガイナニンポーは血をまき散らし、悲鳴を上げるが武は尽かさず大橙丸と無双セイバーの柄を連結。最後の一撃に打って出ようとしたが、敵の表情を見てロックシードに伸ばしたその手を止める。

「何を笑っている」

「き、キキキキ…最後まで食えない奴だ…だがな、だからこそこの手段が取れた訳だ」

ガイナニンポーの掌にあるのは、白い毛髪。それも無数にあり、これが何を意味するか武は嫌という程に味わっている。

「もうてめえの相手をしてる暇はねえ。ボスガン様からの、最後の命令だからなあッ!!」

現れたのは、ガイナニンポーの分身体。しかし、武に見せたような手順を踏んでいたかったのか、全てがやせ細り、眼球が今にも零れ落ちるほどに大きく飛び出した不気味な猿型の怪人が数十体出現した。

それも、現れたのは武の前だけではない。

「な、なんだこいつらッ!？」

「兄さん、あの怪人、光太郎兄さんの方へ…!？」

今から数刻前。

弱り切ったガイナカマキルに止めを打ち込もうと慎二はベルトのガイアメモリに、桜は指輪のホルダーへと手を伸ばした時だ。

何かを悟ったように顔を上げたガイナカマキルは背中から羽を展開。急上昇すると、思わず目で追ってしまった慎二と桜の前にガイナニンポーの分身体が現れ、慎二達の手足へと纏わりついたのだ。

「まさか、奴の狙いは…!？」

なりそこないの分身体を切って捨てる武は、耳だけを向けていた光太郎とボスガンの戦いで、敵が最後に捨て吐いた言葉を思い出す。

確実にRXを倒せ。

その命令を実行するというのならば、3体同時に…

「光太郎殿ッ!!」

「トアッ!!」

「ぬおッ!？」

ガイナギンガムの腹部へリボルケインを突き刺し、エネルギーを注ぎ込むためさらに強く押し込む光太郎の右手首を、ガイナギンガムが強く握る。

リボルケインが突き刺さった時点で敗北が決定的となったというのに、ガイナギンガムは握る力をさらに強め、自身の首を2メートル以上伸ばした。突然の行動に面を喰らう光太郎は急ぎ離れようとしたが、さらに両足を何者かに押さえつけられてしまった。

「き、キキキキ…逃がさないぜえRX!」

「お前は…ぐうッ!」

「お前を倒す…ボスガン様、からの、命令だ…」

蛇のようにうねる長い首で光太郎の首を絞めつけるガイナギンガムの囁きが光太郎の耳元で不気味に響く。完全に身動きを封じられてしまった光太郎へ、さらに着地したガイナカマキルが迫っていた。

「さあ、その背中に突き刺してくれるわあッ!!」

鎌を振り上げ、全力で駆けるガイナカマキルの姿を目にする武達の叫びが木霊する。3人は必死にガイナニンポールの分身体を退け、助けようとするが敵の数が多すぎた。

そして光太郎は変身前にボスガンから受けたダメージ回復に力を使い過ぎてしまい、さらにロボライダー、バイオライダーへの多段変身を繰り返した為、この場を切り抜けられるであろう液化能力を持つバイオライダーへの変身が不可能となっていた。

やはりRXへの変身時に、夕陽を一瞬浴びただけでは完全なパワーを發揮できないのだ。

唯一のパワーチャージを施せるロードセクターやアクロバッターも分身体に囲まれ、光太郎の元へ駆け付けることはできない。

(だからと言って、諦めてたまるか…！)

このまま負ける事など許されない。

まだ慎二たちが手にした力についての詳細を聞いていない。

助けてくれたガロニアにお礼を言っていない。

武へ頑なに力を渡すことを拒んだことを謝っていない。

そして…メドゥーサを助けていない！

「まだ…終わっていないんだッ!!」

赤い複眼を強く輝かせる光太郎。

確かに自分の動きは封じられ、首、右手、両足は完全に動けない。この状態では敵の思う通りに、背中から貫通されてしまおうだろう。

だが、敵は忘れていた。

光太郎の『左手』を封じる事を。

「うおおおおおおおおおおおッ!!!」

咆哮と同時に光太郎は左手をサンライザーの左側へと翳す。

光太郎の叫びに応えるかのように幾層の光の線が重なり、銀色の柄を形成。

ゆつくりと引き抜き、中央に位置する赤いダイナモが回転すると同

時に光が迸り、圧縮された光の刀身が姿を現した。

「あれは…リボルケインツ!?」

「2本目…二刀流なんて反則だろ!」

桜と慎二は敵を吹き飛ばしたながらも義兄が起こした無茶な行動に叫ばずにはいられなかった。

ただでさえ高エネルギーが圧縮されたりボルケインを、ダメージを負った状態で2つも創りだすなど、無茶にも程がある。

しかし、だからこそ敵すら予測を許さなかったのだ。

2本目のリボルケインを逆手に持ち、今にも自分に鎌を振り下ろそうとしたガイナカマキルの腹部へと突き刺す。強引に自身に宿るエネルギーを流し込むと、その左腕のアンクレットがパワー 스트ライプスへ、RXからBLACKへと戻ってしまっていた。

「ぐう、うおおおおツ!!」

それでも構わない。

エネルギーの注入を止めない光太郎はガイナカマキルが両腕をだらりと下げ、背面から倒れる姿を確認し、尽かさず自分の両足を掴むガイナニンポーの背中へとリボルケインを突き立てた。

既にサンライザーから下は、BLACKと化している。

「これで…最後だああああ!!」

渾身の叫びと共に放たれるエネルギーが、ガイナギンガムとガイナニンポーの関節部から火花となって吹き荒れる。

「ま、まさか……このような……」

「お、弟分たちよ……今、そっちに……」

『ぐあああああああッ!!?』

自分を拘束する力が弱まった途端に2本のリボルケインを消失させ、光太郎は転がりながら怪人達から遠ざかる。

直後、怪人3体の身体は大爆発の中に消えたのであった。

「はあ……無事でよかった……」

ガイナニンポーが倒されたことよって分身体は消滅。どうにか戦いを切り抜ける事が出来た一同は変身を解除し、工場から離れ新都と深山町を跨ぐ未遠川の付近へと移動していた。

「しっかし、敵さんも随分凝った手を使ってくれたな」

「はい。でも、何とかなりましたね」

ようやく一息つけると踏んだ慎二と桜であったが、ここに本来いるべきもう一人の姿がないと思出しハツとする。

「光太郎兄様…その…」

「大丈夫だよガロニアさん。みんな無事だったんだ。きつとメドウスだって…」

光太郎の顔を覗き込むガロニアに心配させまいと、笑って少女の頭を撫でる光太郎は、先ほどから黙っている武へと目を移した。

「…武君？」

どうにも様子がおかしい。まるで何かを警戒しているかのように武の視線は鋭く、月夜に照らされる未遠川を睨んでいた。

「気をつけよ…どうやらまだ終わっていないようだ」

武がそう警告した直後、光太郎達の周辺が濃い霧に包まれる。

光太郎は庇うようにガロニアを背後へと移動させ、慎二と桜は尽かさず変身出来る態勢となる。靄が段々と広がり警戒心を強める一同は、電子音を放つライドロンの方へと目を向ける。

『巨大物体、2体出現。川ノ方角ダ』

「何ッ!？」

ライドロンの示した方角へと目を向けた光太郎が見たのは、うつす

らと聳え立つ2体の怪物。

1体はよく見れば海生物の皮膚と軟体生物を思わせる触手を無数に生やしている。この場にいる全員が誰が関係しているのかは直ぐにでも理解できた。

「木星の騎士…たしかジュピトルスだったっけか？」

「じゃあ、もう1体は…光太郎兄さん？」

最も得意とする大海魔を召喚させたのはあの変質者であろうと判断した慎二と、もう1体の怪物を見つめ、光太郎の名を呼ぶ桜だったが、反応が薄い。

見れば、光太郎の目は見開いており、唇は微かに震えている。

怪物は大海魔と同じ程ではないが、それでも数十メートル以上はあるだろう。

特徴としては無数の触手…靄のせいではつきりと見えないが動きから見て蛇とも連想させるような動きを見せ、その中央には赤く、巨大な一つの眼が備わっている。

見るだけでも危険だと分かるその怪物を見上げる光太郎の一言に、桜達は息を飲むしかなかった。

「メドゥーサ…？」

第75話

「はあー、こりやまた随分派手にやらかしたなああの偏執狂」

ビルの屋上：給水タンクの上で胡坐をかく金髪碧眼の少女が突如発生した靄に移る巨大物体を見て眩いた。

かつて一度限りの共闘した同胞が放つ力を感じた火星の騎士アルスはファミレスでの食事を中断し、一目見ようと目を凝らせば事の発端であろう変質者と、もう一人の危険人物を発見。

どちらも冬木を二分する鉄橋の上に立ち、何やら会話もせず一心に川の方へと目を向けているではないか。

「なるほど…連中も奴を狙うのも当然と言えば当然か。さて…」

アルスはもう手を取り合って同じ道を歩むことは決してない者達へと向けていた碧眼を突如として現れた2体の巨大生物へ、そして河川敷に立ち尽くす男：敢えて取り逃がした『獲物』へと向ける。

「ここで潰れるのか、それとも状況をひっくり返すのか：見せてもらうぜ、間桐光太郎」

ガサリと真横に置いたビニール袋の中から屋上へと登る直前に購入したスナック菓子を無造作に取り出し、目を向けないまま封を切るアルス。観戦する準備は万端だったようだ。

「フフフフフフ……こう眺めると壮観ではありませんか」

「君の考えは相変わらぬ理解に苦しむ。あんな醜悪な化け物呼び出すために、治ったかもしれない片腕を犠牲にするなど」

「慣れてしまえば、これと言って不便ではありませんがねえ」

鉄橋の梁に立ち、夜風に当たりバサバサと自身を覆うボロ布をはためかせるジュピトルスの歪んだ笑みを横目で見ると青年は表情を崩さぬまま嫌悪感を隠さずもの申しているが、ジュピトルスはさほど気にする様子もなく今は無き腕が生えていたはずの肩を撫でる。

「1年前に勃発した聖杯戦争とやらで私の肉体の基となった者は自身の肉体を依り代としてあの大海魔を召喚したようですが、私は片腕で十分に事足ります。それに、あの腕には貴方の協力もあって十分過ぎる程の魔力を凝縮されていますからねえ」

（よく言ったものだ。ワタシが切り刻んだ人間の死肉^{ゴミ}を魔力に加工しただけのことだろう）

内心で反論する星騎士マキュリアスが指摘するのは、どんな形にしてジュピトルスに協力した訳ではないということだろう。そしてマキュリアスが嫌気をさしているのはあくまで人間の亡骸の臓物や血液を利用した魔力の精製方法であり、マキュリアスが殺害した人間を利用したという鬼畜にも劣る性ではないのだ。

「それにしても、まさかあのような化け物が間桐光太郎の傍にいたとは……彼も飼育慣らす事に苦労をしたことでしょうねえ」
「……………」

続けてジュピトルスが口にしたのは、大海魔の横に佇む無数の蛇を髪の毛のように生やし、大きく、禍々しい赤い眼を持つ怪物……ギリ

シヤ神話に登場するゴルゴンと化したメドゥーサ。

人間の姿であったメドゥーサをあのような姿へと変えたジュピトルスによれば、あれが彼女の本来の姿であると語った。

彼女の心の奥底：深層意識に押し込められていた殺意・破壊の衝動と理性を『裏返し』た事によりあの姿へと変えることが出来たのだと、ジュピトルスはメドゥーサへ施した過程を思い出し口元を歪に歪める。

「理由は知りませんが、彼女の精神状態はとても不安定でしたねえ。さも信じていた者に裏切られ、そう疑ってしまう自分に絶望したような……ええ、とても愉快的状態でした」

「……………」

「それ故か、彼女の隠された本能を引き出すのは容易でしたよ。貴方がくれた『宝具』のおかげで」

どう投げかけられても無言を通すマキュリアスの胸に走る小さな痛み。

マキュリアスが抱いた痛みではなく、恐らく身体の基となった英雄……ペルセウスの痛みなのだろうと推測した。

はるか神話の時代。

本来であれば女神の一柱となる可能性を持った女神は、最愛の姉2人を狙う人間達を次々と殺し、血を吸い続けた事によつて身も心も魔へと堕ちた。

ついには守るべき存在であった姉2人も飲み込んでしまった怪物は、神々に乗せられて現れた1人の男とその道具により、姉達と平和に暮らしていた頃という悪夢を魅せられる中、首を切り落とされた：

それが後にペルセウスの英雄譚に登場する『ゴルゴンの怪物』の末路であった。

怪魔界で魂を封じられていたマキュリアスは己の出生への皮肉と
言うべきか、近しい性分を持つペルセウスの肉体を得て現界。手にし
た大振りの鎌や、あともう一つの宝具以外は必要ないと手放そうとし
た宝具がジユピトルスの目に止まってしまおう。

『鏡像結界の袋』

ペルセウスが魔物と化したメドゥーサの魔眼を反射させ、断られた
首が入れられたとされる袋である。

『外』と『内』の概念を反転させる力を持ち、ペルセウスがメドゥーサ
に勝利する一因である袋を手にしたジユピトルスは、あろうことかマ
キュリアスの一撃によって瀕死となったメドゥーサの体内へと押し
込んだのだ。

さらにジユピトルスの魔術が上乘せされた事にて、袋の持つ力も
『概念』から『思念』・『感情』へも効果が発動されるようになり、彼女
が聖杯戦争時代に召喚され、出会ったマスターと過ごしている内に限
りなくゼロへと近づいていた暗く、血を欲してしまう殺意が一気に膨
れ上がってしまう。

逆に殺意を抑え込んでいた理性がゼロとなったメドゥーサの身は
神話と変わらない、巨大な姿へと変貌。光太郎達に前へと現れ、巨大
となり、強大となった魔眼キュベレイで見下ろしている。

ただ、喰らう為に。

「さて、間桐光太郎：貴方に殺す事ができますかな？」

「今日の前に聳えるのは、貴方が愛した女性ではなく、無差別に生き物
を喰らう化け物なのですからねえ」

「まったく、いきなりの呼び出しがあつたと思えばあのようになつてゐるとは……」

「そうね」

「こちらは予告なしに來訪した聖堂教会の査察官をようやく隣町まで追ひ払つたばかりだと言うのに」

「そうね」

「せつかくの休日は潰されたおかげで、以前から計画していた君ご自慢である工房の整理もままならん」

「そうね」

「……聞いているのかね、凜」

「そうね」

「……………」

戦闘服である赤い外套を纏つたアーチャーはパートナーである遠坂凜の返答が同じ言葉の切り替えしになつてしまつてゐる事に眉を寄せる。普段ならば自分と同様に愚痴や査察官への不満を口にするというのに随分と大人しい。

事態は一刻を争うと聞かされたアーチャーは時間がないため彼女を抱えて建築物の屋根を足場として夜空を跳躍。聖杯戦争時、幾度と

なく同じ事を繰り返したというのに、凜の反応はどれとも違っていった。

今更高所恐怖症だったともいうのか…

もしそうだとしても気の強い彼女の事だ、相手はもちろん自分から弱みを見せるべきではないと気を張っていたのだろう。

ここで突くのは野暮というものだろうと結論付けたアーチャーは目的地となる深山町と新都の間である末遠川へと急ぎ移動するが、その一方で先ほどから顔を全力で逸らしている遠坂凜は今既に大きな戦いを迎えていたのだ。

(近い近い近い近い近い…なんでよりもよってこんな掴まり方を指定してくんのよあーもう顔が熱いツ!!!)

という乙女と化した凜の体勢は背中と膝裏をアーチャーの手で支えられ、自身はアーチャーの首に手を回してしがみついている形で抱き上げられている。

以前のように凜の腰に手を当てて移動する方法も出来なくはないが、より安定した姿勢の方が彼女を振り落としてしまう可能性が低いというアーチャーの申し出に賛成した凜であったが、まさかこのような恥ずかしい恰好となるとは夢にも思えず、ただ一人悶える姿を懸命に隠すことしかできない。

聖杯戦争時にアーチャーによって支えられて街を飛び回っていた頃には一定の距離はあったのだが、彼の首に両手を回している関係から吐息が耳に当たってしまうほどに顔が接近しているのだ。

とにかく言われたことには簡単な返事をしなければこの自分の顔が今、どのようになっていのかをこの唐変木に悟れてしまうと首が痛

むのも忘れて首を逸らしていたが…

「凜、結界に入るぞ」

「え…?」

アーチャーの低い声に反応した凜は、自分達が一般の人間にはまず察知される事のない空間へと踏み込んだと気づき、先ほどまで大いに乱れていた心を一気に沈ませると分析へと移る。自身を少女から魔術師へと切り替えたのだ。

「そう…これだけ大きな人避けの結界を張らなきゃならないとなると、余程の事なのね」

「どうやら聖杯戦争の際に予め仕掛けておいた術式が功を成したようだな。周囲に人間の気配はない」

「邪魔者をどかしてくれる変わりに自分は働かない、か。まあ、それだけでも十分よね。なんとたって…」

街の一部を飲み込むほどの巨大な結界を巡らせたメディアに連絡と協力に感謝しつつも、凜は視界に捉えた『敵』を見る。

「あんなのが相手じゃ、魔力がいくらあったって足りやしないわ」

「おい…今何ていったんだよ光太郎…」

「あれが…メドゥーサ姉さんって…」

光太郎の呟いた名を聞き、どうか自分の勘違いであつて欲しいと声を義兄に向ける慎二と桜だったが、彼の反応を見る限り間違いはない。

ただ一人、メドゥーサの素性を知らないガロニアだけが周囲の反応についていけず、ただただ動揺するしかなかった。

「あ、あの…メドゥーサ姉様が、あの巨大な生物とは、一体…？」

「…後程説明する。光太郎殿、今は…」

武の言葉を聞き、ゴルゴンの怪物と成り果てたメドゥーサを見上げていた光太郎は一度大きく息を吸い込み、全てを吐き出す程の大声を放った。

「ロードセクターツ!!」

「了解です。さあ、月夜の空を——」

「急げツ!!」

「…………モードSへ移行」

軽口を遮られ、大人しく光太郎の要望通りに飛行形態へと変形したロードセクター・ネオは主人が飛び乗った途端に急上昇。メドゥーサの巨大な眼を目指して飛翔していく。

「兄さん…」

「…今は情報が足りない過ぎる。まずは光太郎を見てどんな反応を示すか知る必要がある。だから僕たちは…」

飛び立った義兄と、変わり果てたメドゥーサの安否を気遣う桜に、警戒の色を強めた慎二の声が耳に響く。見れば水面から這い上がる不気味な影がゆつたりと姿を現した。

人間と変わらぬ大きさのヒトデのような海魔の群は鋭い牙をガチガチと鳴らし、慎二達を喰らおうと飛びかかる。ガロニアを下がらせ、身構える武達だったが、風を切る音と共に自分達を横切った攻撃が海魔を貫く。絶叫と共に燃え上がる敵に驚きつつも、振り返った先にいた者達の姿に桜は笑顔と共に名を叫んだ。

「姉さん！アーチャーさん！」

「全く、なんでアンタ達っていつも騒動の真ただ中にいるのかしら…？」

それぞれ凜はガントを、アーチャーは黒い弓から矢を打ち出した態勢を解いて桜達の元へ駆け寄ると、説明を求めた。

ゴルゴンと化したメドゥーサに突然現れた大海魔とその眷属らしき個体。

頭を抑える凜にアーチャーは冷たくも、街の管理者として出す答えを確認した。

「凜。分かっていると思うが、事態が事態だ。もし結界の外に出てしまふようなことがあれば…」

「…分かっているわよ」

人避けの結界の恩恵により、当事者以外にあの巨大な生物の存在は感知されていない。だが、もし移動を始め、結界の外へと出てしまふ多くの人間に姿が露呈してしまえば、混乱は避けられない。

先ほど帰ったばかりの査察管がこの件を耳にすれば、冬木の管理人は無能であるという烙印を押され、外部からの監視…下手をすれば我

が物顔で駐屯する輩が住み着く可能性すらある。自分達は絶対であると言って聞かない連中だ。そんな輩が偉そうな顔をしてこの街を闊歩することも勿論許すつもりはないが、この場所は多くの敵に狙われている。

その大たるクライシス帝国を目の前にしたらあの連中は犬死どころか逆に利用される恐れすらある。

(なんであの連中の心配なんてしなくちやないのかしら…)

自分の沽券以上に犠牲者を増やさない為の割合が大きいなど、自身のお人好加減にうんざりする凜は、由々しき事態を避ける為には騒ぎが大きくなる前にあの大海魔も含め、ゴルゴンとなったメドゥーサをどうにかするしかないと判断する。

それがこの場にいる者達の逆鱗に触れる事になろうが、やるしかないのだ。

「けど、そうなる前に何とかすればいいんだろ？」

「え…？」

「姉さんの立場も分かってます。だから、頑張つて終わらせましょう！」

自分は何も言っていないのに、どうしてさも聞いたような言葉を投げかけられたのか疑問に思う凜へ、アーチャーは口元を歪めながら両手に夫婦剣を顕現させた。

「どうやら、君は余程顔にしやすいのであろうな」

「うるさいわね！」

こちらの顔を見ただけで気づかれてしまった。桜達にとって、大事な家族に手をかけようととまで考えていた自分の考えを。

2人は表情からその人物が抱いているだろう考えを読み取る事に

長けているのかもしれない。その観察力を培った相手であろう人物は今、凜の考える最悪の事態を迎えさせない為にも今、立ち上がっているのだ。

自分も負けられない。

そう強く決意するのは、凜だけではなかった。

「では、俺はあの大物を切り崩すでしょう！」

『ブラッドカチドキ！』

戦極ドライバーを装着し、ロックシールドを解錠した武の肩から、これまで隠れていた2匹の初級インベスが飛び降りる。

「行くぞ、お前達…変身！」

戦極ドライバーへ装填したロックシールドを固定。カッティングブレードを下ろしてキャスパレットドが展開された瞬間、空間を切り裂いて武の頭上に現れた紅く、所々が黒い金属の果実が鎧として展開。武へと装着された。

『ブラッドカチドキアームズ！』

『いぎ、血祭りイ!!!』

『『『エイエイオーツ!!!』』』

電子音が鳴り響き、武を重装甲の鎧武者へと変えたロックシールドはさらに縮んでいたインベスを元の大きさに戻しただけでなく、2体を一時的に上級インベスへと進化させた。

身体が閃光に包まれた2体はそれぞれ巨大な翼を持つスザクインベス、亀の甲羅を思わせる重々しい装甲で覆われたゲンブインベスへと姿を変える。うちスザクインベスは翼を羽ばたかせ、少しずつ浮遊すると武を見てゆつくりと頷き自身の背中を向ける。

同じく頷いた武がスザクインベスへと飛び乗り、片手に専用武器である火縄大橙DJ銃を構え、うねる声を上げるゲンブインベスへと指示を送った。

「俺は羽三郎と共に本体を叩く。玄四郎は皆と共に雑魚を迎え撃ち、ガロニア殿を守るのだ！」

『ガウー！』

返事とも言うべき咆哮を聞いた武はスザクインベスと共にこちらへと巨大な触手を向けた大海魔へと向かっていく。

まさかあそこまで怪人と意思疎通を見せるとは驚きであったが、進んで本体を狙ってくれるとは有り難いと、凜はスカートのポケットから今度こそ忘れずに持ち出した宝石を手にして再び沸いて出た大海魔達を睨む。

(後方支援を慎二と桜に任せて、私とアーチャーで前に出れば…)

その戦法である程度時間は稼げるだろうと踏んだ凜は、慎二と桜へと指示を送ろうとしたが…

「2人とも、取りあえず――」

「遠坂、後任せるぞ」

「ゲンちゃんも、2人に協力して下さいね！」

「ちよツ…」

凜の言葉を聞かず前へと駆けだした慎二と桜の姿を見て、思わず手を伸ばしたが、見れば2人の腹部に見覚えのあるようなベルトが巻かれている。

だが、牙を向いている海魔に接近する2人の助けが先であるとガントを打ち出す体勢に移る凜だったが、それは杞憂へと変わってしまった。

《《TRIGGERッ!》》

「え…?」

《《シャバ・ドウビ・タッチ・ヘンションッ! シャバ・ドウビ・タッチ・ヘンションッ!》》

「え…?」

『変身!』

《TRIGGERッ!》

《フレア、プイリーズ!メラ…メラ…メラ…メラ・メラ・メラア!!》

「え……………?」

仮面ライダーへと変身を遂げた慎二と桜はそれぞれの得物を持ち、河川敷に群れなす海魔との戦闘を開始する。

戦いが終わった直後に、持ち合わせていた疲労回復や魔力の補充に使われる薬草を元にしたサプリを服用し、ある程度回復を施していたのが幸いしたのだろう。

全力で戦える2人はトリガーマグナムから火を噴かせ、桜はメイガスクロスボウに炎を纏わせて振り回していた。

「まさか…あの2人が仮面ライダーになっていたとは…凜?」

流星に表情を崩して驚愕するアーチャーは見てしまった。

どこか全体的に白くなった自分のマスターの口から、何かが飛び出してしまっている姿を…

「メドゥーサッ！聞こえるか、聞こえているのなら、返事をしてくれ
!!!」

飛行するロードセクターと共にメドゥーサの頭上から既に何度目
かも分からなくなるほど呼び掛けを繰り返している。

光太郎はその強化された視力でいかなる反応も見逃さまいと目を
凝らしているが、応じる様子はない。

しかし変化はあった。メドゥーサの髪と化している無数の蛇達の
視線が、常に光太郎へと向き始めている。それも獲物を見つけたと言
わんばかりに、鋭い目つきとなって。

「くそ、時間ばかりが経過している。このままだと…」

(…た…う)

「え?」

(…ろう)

「声…まさか、メドゥーサなのか!？」

微かに光太郎の頭に響く、誰かの弱々しい声。

その声をメドゥーサの声であると確信した光太郎はさらに声を強
めて眼下にいるメドゥーサへと呼び掛けた。

「メドゥーサ…聞こえている。聞こえているぞ、メドゥーサツ!!」

(こう…たろう)

(おね…がい、です)

(私を…ころ、して…)

第76話

目の前に現れた巨大生物の正体がメドゥーサであると間桐光太郎は即座に見抜いていた。

まるで異なる姿であっても、彼女がメドゥーサであると確信をもって彼女の名を口にした。

以前に彼女の過去を夢で見た時と、まるで同じ姿をしているという理由もあるが、そんな記憶に頼らずとも光太郎には分かってしまった。

分かって、しまうのだ。

だからこそ、今の彼女がいかに危険な状態であるかも。

彼女から感じられたのは、目に映るもの全てを殺しつくし、食らいつくそうとする狂気。光太郎は彼女が今の姿になってしまったかへの疑問はない。それも彼女の顔の一つであるを知っていたから。その代わり、なぜ今まで見せる事のなかった殺意を全面に出してしまっただかという点にある。

疑問に駆られる中、武の言葉で正気を取り戻した光太郎だが普段なら苦笑いを浮かべるだけで終えるロードセクターの軽口にさえも強い口調で抑え、飛行形態のロードセクターへと飛び乗り飛翔。

光太郎は叫んだ。自分の声が届くかどうかは分からない。それでも、ひたすら叫び続けた。

彼女の記憶を垣間見た時、あの姿となった彼女は既に『手遅れ』という状況だった。

最愛の姉2人の姿も見えず、声も届かず。

そして、飲み込んでしまった。

もう、メドゥーサにそんな事はさせない。そんな悲しみを背負わせない。

光太郎は呼び続けた。まだ彼女に少しでも狂気に捕らわれず、理性が残っているのなら。まだ自分を見失っていないのなら。

縋るような思いで叫び続ける光太郎にメドゥーサの声が届く。

自分の願いが通じたのかと淡い期待を抱いた光太郎の耳に響いたのは、心の何処か言われてしまうと覚悟をしつつも決して聞き入れたくないメドゥーサの願いであった。

(わたしを…ころして…)

「何を…何を言っているんだメドゥーサッ!？」

やっと聞くことができたメドゥーサの言葉。

弱々しくも、確かに聞こえた声がそれだった。
なぜだ？ どうしてだ？ と疑問を抱くまでもない。
声に出して尋ねたのは、その答えから逃げる為。

魔物となったメドゥーサは、もう止まらなないと光太郎は知っていたから。

夢で見た、ゴルゴンの姿となったメドゥーサはもう自力で止まることはない。

最愛の家族の声すら届かなかつたのだ。

彼女が殺戮を止められたのは、その首を失った時：即ち、殺されてるまで止まることができずにいた。

今回魔物となつて自意識を保っている事は奇跡に近い。しかし、いつまた殺意の衝動に飲まれて光太郎や慎二達を喰らおうと襲いかかるか分からないメドゥーサは、自分の意思があるうちに收拾をつけるため、接近した光太郎へ願った。

殺してくれるようにと。

他にもう、手段はないのだから。

(お願い……します。もう、時間がない。私はもう少しで、ただ殺す為に殺す化け物になってしまふ……だから、その前に……)

「メドゥーサ：俺に、君を殺せと言うのか……？」

メドゥーサの巨大な眼に映る、光太郎が困惑する表情。分かっていった。自分を殺すように頼むなど、彼を苦しませるだけである事など。

あのペルセウスと同じ顔、同じ武器を持つ男に切り裂かれ、自身の体内に埋め込まれた宝具鏡像結界の袋により自身の奥底にあった殺意が大きく膨れ上がってしまったメドゥーサは何時光太郎に襲い掛かるかも分からない。

手遅れとなる前に自分は死ななければならない。

だが、それ以上に：

このような醜い姿を、光太郎に見られなくなかった。

愛する人に、血を欲する化け物である自分の姿など：

だから、一秒でも早く光太郎の手で自分の命を光太郎に終わらせて欲しい。こうしている間にも、鏡像結界の袋によりメドゥーサのドス黒い感情は膨れ上がっていく。

今ならまだ間に合うと、光太郎に頼んでも、彼は否定した。

「そんな事、できる訳ないだろうツ!!待っていてくれ、今すぐにツ…」

そうやって、両の拳を右頬の前で力強く握りしめる光太郎は変身を試みるが、メドゥーサには一目みれば分かる。

今の彼には変身する程の力は残されていない。

大方、無理をしてキングストーンの力を使い果たしてしまったのだろう。本当に、無茶ばかりをする人だ。いくら自分が強く言ってもその場で謝罪をするだけで、同じ事を繰り返す。

自分がどうなろうと、決して諦める事を知らずに挑んで行く。それが、間桐光太郎という人間。

こんな姿となった自分までも助けてくれようとする。

彼は自分にとって大事な――

だいじな――

だいじな――

ダイジナ…

ダイジナ…シヨクジ…

「くっ…力が入らない…」

やはりボスガンに負わされた怪我を変身時に強引に癒し、リボルケインを2本生み出すという無理が祟ったのかも知れない。

考えて見ればRXへと至るに必要な太陽の光もほんの一瞬しか浴びていなかった。ロードセクターによるエネルギーチャージも考えたが、ガロニアの護衛もあり、あの場を切り抜ける方法はなかった。

加え、現在空となっているのはあくまで『キングストーン』の力。RXとなる為の『ハイブリットエネルギー』はキングストーンと太陽のエネルギーが交わり、初めて誕生するエネルギーだ。現状でロードセクターから太陽エネルギーを照射されても、キングストーンが相当量の力を有していなければハイブリットエネルギーが精製されない。

焦りが加速する光太郎の頬に、暖かい液体がパシヤリと水音と共に当たる。

「なッー!?!」

それが自分の肩から噴き出した血液だと理解したのは、激しい痛みに襲われ反射的に変身するための構えを解き、傷口を抑えてたと同時に、その原因とも言える蛇が…メドゥーサの身体の一部であるうちの一匹が光太郎の血肉を飲み込んだ光景を見た為であった。

口元から滴り落ちる血を細い下で舐めとった一匹に続き、次々と無数の蛇が光太郎へと顔を向ける。今まで大人しくしていたのは、メドゥーサの制御が行きわたっていたからなのだろう。

全ての蛇が、獲物を前にしたかのように鋭い眼光を光太郎に浴びせていた。

『どうやら味をしめられてしまったようですね』

「そう、らしいな」

ロードセクターと光太郎の会話を皮切りに、無数の蛇が身体をうねらせ、一斉に襲い掛かる。蛇の行き先をセンサーで察知したロードセクターは急上昇し脱するが、長い首を自在に曲げ有れる蛇たちにとっても急な軌道の変更など容易く、すぐ追い付かれてしまった。

『ところがぎつちよん』

変則的な動きに負けるロードセクターではない。口を大きく広げて迫る蛇達に対し、マシン下部に位置する着地制御用のバーニアから火をふかし、目くらましされたうちにその場を離脱。全方向から迫る蛇の動きを分析し、僅かな隙間を急加速することで強引に抜けていく。

減速なしの突然過ぎる反転や旋回など、運転する光太郎の安否を無視したトリッキーな動きに蛇達は翻弄され、中には蛇同士で絡まってしまう個体まで現れた。

動きをみせる度に『あまいな』『それは読んでいたさ』などいちいち言葉を発するロードセクターはふざけた言動に走りながらも、常に光太郎の状態に気をかけていた。

蛇の：メドゥーサの狙いはあくまで光太郎。改造人間ゆえあつてロードセクターの飛行によって身体への負担はそれほど大きくはない。だが、先の戦いのダメージは拭いきれておらず、メドゥーサへ必死に呼びかけを続けている。

本来であればこの場を離脱し、主人である光太郎の身の安全を図るのが機械としての役割であるのだろうが、ロードセクターはそんなマニュアルに沿った動きは見せない。彼の望みは、今も自分と光太郎に迫る彼女を助けることなのだから。

彼を護ると同時に、彼の目的を果たす為に全力で補助する。

地表で慎二の背後に迫った海魔を引き飛ばすアクロバッターや、車

内にいるガロニアを護るライドロン達と同じ願いであった。

『さあマスター、続いて華麗なアクロバティックをお見せするのでしょうか』

「…ほどほどにね」

「ふーん、よく避けるなああのバイク…バイクなのか？」

既に4袋ほどスナック菓子を消費したアルスはどこぞで入手した双眼鏡を片手に5袋目となるわさび味が売りであるスナックを口へと放り込み、戦況を見守っていた。

「しかし、まだ『本体』が動いてない、か…余程自製の聞く奴だったんだろうが…」

「そろそろ限界だな」

アルスの言う通り、これまで微動だにしなかったメドゥーサの本体が僅かながらも移動を開始。行く先は…新都だ。

「いけない…！メドゥーサッ!!止まってくれッ!!」

(まだ…分からないのですか。もう私は…止まれない。もう…止まれ

ないのです)

「メドゥーサ：それでも、俺は——」

君を止める。

そう叫ぼうとした光太郎の口がピタリと動きを止めてしまう。いや、口だけではない。首も、腕も、足も。まるで動かないのだ。光太郎の身体が『石』にでもなってしまったかのように、固まってしまったのだ。

(ま、まさか…)

見れば、メドゥーサの巨大な瞳：石化の呪いが放たれるキュベレイが怪しげな光を放ち、光太郎の身体を硬直させてしまっていた。キングストーン力が弱まり、加護が受けられない光太郎はメドゥーサの魔眼に抗う手段もなく、依然旋回飛行を続けるロードセクターのハンドルグリップを握り続ける事などできる訳もなく。視線をメドゥーサに向けたまま川のだ真ん中へと落下していった。

自分の名を叫ぶ仲間達の声がかすかに聞こえるが、光太郎はメドゥーサの声しか聞こえない。

もう、諦めてくれと願う彼女の悲しい声が。

(もう…分かったでしょう？私はもう、目の魔力すら抑えられない。見た者全てを石に変え、血を飲む悪鬼となるのです)

(だから…貴方は立ち上がれる。私の魔眼を破り、私を倒す力を取り戻す)

これは、メドゥーサにとっては賭けだった。

力の弱まった光太郎を再び変身させるためには、逆境の中で彼の持つ力を爆発させるしかない。光太郎の戦う姿を見てきたメドゥーサだから分かるのだ。シャドームーンに追い詰められた時のように、創世王を倒した時のように。きっと彼は自分の呪縛を破り、立ち上がる。

そして…多くの人々を自分から守るのだと。

(光太郎…)

(貴方は、貴方が大切に思う人達を守って下さい。これからも…)

「…ッ!？」

光太郎の目に、そんな言葉を笑顔で自分に伝えるメドゥーサの顔が浮かんだ。

涙を流して、笑っている顔を。

そんな彼女に手を伸ばせないまま、光太郎は川へと落下。巨大な水柱が生まれた後、そこから光太郎が浮かび上がる様子は、ない。

「光太郎殿ツ!?今そちらに…くツ!?」

スザクインベスの背に乗り、大海魔への攻撃を続けていた赤上武であつたが、巨大な触手による攻撃を回避しながらの射撃にあまり効果は見られない。それに加え、どういうカラクリか攻撃を受けた箇所は即時再生。もしくは身体を経由して這い上がってきた海魔が傷口へと張り付き、身体の一部と化してしまう。しかも強度が増すというオマケ付きだ。

距離を詰めて火縄大橙DJ銃の大剣状態での必殺技を叩き込みたいところだが、技を放つ際に自分の身体から漏れる余剰エネルギーによつてインベスを傷付ける可能性すらある。

大海魔は自分や河川敷で個体と戦闘を続けている慎二や桜達に狙いを定めてくれてはいるが、抑えるだけで光太郎の援護にも迎えない。これが敵に狙いだとすれば、思惑通りに事が進んでいると嫌らしい笑みを浮かべている事だろう。

「どうにかしなければ…」

武の視線は光太郎が沈んだ川と、新都へと進むメドゥーサへと向けられていた。

(俺の…大切な人々…)

水中で時間と共に沈んでいく光太郎に聞こえたメドウーサの切なる願い。

彼女の言葉を聞いて以降、ゴルゴンとなったメドウーサと止める為に様々な考えを巡らせ、迷いがあった光太郎の胸の内に、ある感情が滾る火の如く大きくなっていた。

高ぶる度に失った感覚が戻り、力がみなぎる。相変わらずキングストーンの力は弱弱しいが、そんな事は関係ない。

水中で揺らめく月を見上げる光太郎へ、証明のような光が当たる。見れば形状を変えたロードセクターが後部のスクリューを回して光太郎へ接近していたのだ。

『第三の形態サブマリンモード：アクロバッターがマックジャバーへと変身した際に死に設定となるはずでしたが以外な出番がありました』

(自分で言ってしまうんだ…)

翼やノズルを収納し、展開したアタックシールドからさらに強化ガラスで操縦席を覆うその姿はまさしく小型の潜水艦。はたしてこのバイクはどこまで隠された機能があるのであろうか。

そして余裕を取り戻した光太郎はロードセクターのボディに触れる。それだけで、ロードセクターは光太郎の考えを理解した。

『まだ、諦めないのですね』

無言で頷く光太郎の口から、僅かながら空気が漏れて地上目がけて昇っていく。

『いいでしょう。向かおうではありませんか』

「あーもうしつこいッ!!こいつらいつになったら打ち止めなんだよ全
く!!」

「やはり本体を倒さない限り、止まらないんでしょうか…?」

河川敷でなおも続く海魔との戦い。一匹一匹はさほど力もなく、慎二も身体への負担が大きいトリガーマグナムでの射撃を減らし、徒手空拳で海魔を撃退していた。さらにトリガーマグナムは硬度の高い金属で作られていると気づき、接近した海魔を銃床で真上から叩き付ける光景を見て、桜は力を貸してくれたという面識のない探偵二人に詫びを入れたという。

そして桜は黄色の指輪を使用。指輪の色に合わせ、仮面とボディが黄色に染まったフォーム：ガイアスタイルとなり河川敷の土を盛り上がらせては海魔達へと降り注ぎ、圧死させるというとんでも技を披露。慎二は桜に力を貸してくれたという面識のない魔法使いになんてモノを押し付けてくれたんだと恨み言を言いたくなかったという。

そんな2人を見て未だ現実に戻れない遠坂凜をゲンブインベスと共に護衛するアーチャーは、本日2度目の水柱を目撃する事となる。ただし今度は落下によるものではなく、水中から急上昇によってのものだ。

ロードセクタースカイモードに乗る間桐光太郎。決意を込めた目で新都を目指すメドゥーサに向かい、再び彼女の名を叫んだ。

「メドゥーサッ!!」

(決心…して、くれたのですね)

「ああ…決めたよ、俺は！」

殺意に飲まれていくメドゥーサの意思は、安堵する。

そう、これでいいのだと。

未だ変身する程の力はないのかも知れない。それでもきつと光太郎は自分を倒してくれる。

もうこれ以上殺意を抑えることはない。

そうして、残ったメドゥーサの意思はゆつくりと深淵へと沈んで

……

「このっ…頑固者おおおおおおおッ!!!!」

いくはずもなく、むしろ殺意そっちのけで目を見開いてビビッてしまった。

罵倒である。というか悪口である。

それは他で戦っていた者、傍観してた者も同様であり、本能のまま戦う海魔ですら光太郎の咆哮に驚いて上を見上げる程だ。

「意地っ張りッ！石頭ッ！ええつとそれから…が、頑固者ッ！！」

どこか言葉を選びながら叫ぶ義兄の姿に、肩を並べて見上げる義弟と義妹は、あるがままの言葉を放った。

「あいつ、罵倒のレパトリー少なすぎだろう。普段他人を罵ることしないし」

「はい…しかも、同じことを言っちゃいましたね…」

「あんたらまずこの状況で悪口を口走る兄の奇行を疑いなさいよッ！！」

復活した遠坂凜渾身の叫びを上げる姿にただ一人冷静でいるアーチャーは見た。新都に向かっていているはずだったメドゥーサが動きを止め、光太郎が飛行する方へと身体を向けている姿を。

(もしや…これが狙いだと言うのか？間桐光太郎…)

「は、ハハハハハ…何を血迷ってあのような戯言を…そんな言葉、もうあの化け物に届くはずが…」

「いや…そうでもないらしいぞ」

「はい？」

鉄橋で光太郎の行動に一瞬驚きはしたものの、すぐに冷静さを取り戻したジュピトルスであったが、隣にたつマキュリアスが無表情のまま指さす方へと目を向けると、震えている。

あのゴルゴンの化け物が震えているのだ。

それは恐怖による震えなどではない。

どちらから言えば…「怒り」だ。

『な、何をこんな時にそのような言葉を…それに、私のどこが頑固なのですかッ!?!』

「だってそうだろうッ!!君が持っているマウンテンバイクが不調だった時に変わりの自転車を使えと言ってもこれでなければダメだと断るし、食卓に納豆と梅干が並んでも絶対手を出さないじゃないかッ!!」

『それを言うのなら貴方だって幼少から苦手の漬物をこっさりシンジに食べて貰っているではないですかッ!?!』

「お、俺の話はいいじゃないかッ!?!」

『先に言ったのは光太郎の方ですッ!!!』

「え…なに？口喧嘩…？」

「よもやあんな状態で痴話喧嘩を繰り広げるとは、恐れ入ったよ全く」

ああ言えばこう言うの応酬が続く光太郎とメドゥーサのやり取りに、もう眉間を指で押さえる凜とは対象にアーチャーは関心を示していた。

もしかしたら気づく者もいるかもしれないが、光太郎の言葉に反応して以降、メドゥーサが持つ殺意の衝動は徐々に失われている。敢えて暴言を浴びせる事によってメドゥーサに呼び掛けて殺意を薄ませる。もしこれを考えての行動であったのなら、彼女の理性を取り戻すためだとしたら、本当に大したものだ。

そして恐らく同じ心境にいるだろう彼の兄妹へと目を向けて見ると…

「兄さん…説明して貰えますか…？」

「いやあの…利害の一致と言うか…」

「なら、慎二兄さんの苦手なものを光太郎兄さんが代わって食べていたということですか…」

「…はい」

なにやら別の戦いが始まっていた。

正座する慎二を腕組みする桜が見下ろす形ではあるが、どちらも仮

面ライダーの姿であるのでどうも決まらない。

しかも桜は宝石のように美しい仮面とは裏腹に、背後で真っ黒なオーラを纏っているため海魔すら後ずさる始末だ。

アーチャーは見なかったことにして、その視線を光太郎達へと戻す。

互いに言いたい放題である光太郎とメドゥーサ。

その中で普段は気にする素振りすら見せない所まで言い合いになる中、感情のまま怒声を響かせる光太郎は、戦いが始まる直前まで自分の話を聞いてくれた幼馴染みである紫苑良子のアドバイスを出していた。

——光太郎君が今、メドゥーサさんとすべき事……

——思いつきり喧嘩しちやいなさい！

——と、言っても殴り合いなんかじゃないわよ。そう、口喧嘩ね

——多分だけど、光太郎君の事だから何かあっても悪いのは自分

だ、原因は自分にあるっていつも謝ってばかりなんでしょ？

——それは潔く見えるようだけど、反対に本当に自分の話を聞いてくれているのかって不満に思われてしまう事があるの

——そして言い返して欲しい。自分に話して欲しい。ちゃんと、自分と向き合ってほしい

——そんな願望が隠れている時もあるものよ

——それにお互い言いたい事を言い尽せばガス抜きにもなるし、不満も少なからず失われていく

——悪い方向に囚われがちだけど、喧嘩というのは決してダメリットだけではないわ

——そうやって喧嘩しているうちに、今まで知らなかった事も見える時もある

——だから光太郎君？

——今度メドウーサさんに怒られたときは、思いつき言い返してやりなさい！

(ああ、本当に言う通りだよ、リョウちゃん。本当に、こうしてメドゥーサの本音を聞く事が出来る。言うことが出来る)

感情をぶつけ合って、得られるものが確かにある。自分の癖に対しての辛辣な評価もあれば、自分のこんな所まで見ていてくれたのかと。不謹慎ではあるが、嬉しさを感じてしまう光太郎だったが、それは全てが終わった後の話だ。

今、これから光太郎はもう一つの賭けに出る。

「メドゥーサは俺に自分を犠牲にするなど言うけど、今のメドゥーサこそ自分を犠牲にしてるんじゃないかッ!!」

『っ…！それは光太郎も知ってるでしょう！もうこの姿になってしまえば、私は…』

「メドゥーサッ!!!」

これまでもない大声でメドゥーサの言葉を遮った光太郎の続く言葉にはもう怒気はない。むしろ、興奮状態にあるメドゥーサを包み込むような、優しさが含まれていた。

「君は言ったよね…俺に、俺の大切な人々を守るようにと。なら、その中に、君もいなくちゃいけないんだ」

『光太郎…私は…』

「だから、俺はこれからも大切な人々を守っていく。その為に戦っていく。でも、隣に君がいないとその約束は守れない」

『こう、たろう…』

徐々にだろうか。彼女の殺意が無くなっていくと同時に彼女の中で湧き上がる力と、それを邪魔する何かが見える。恐らく、あれがメドゥーサを狂わせた元凶なのだろう。

「以前、言ったよね…君が俺を守る代わりに、俺が君を守ると。そして、互いに遠慮しないって」

『……………』

「けど、その約束はいつの間にか薄れていた。一緒にいる事が当然見たいに思えて、互いに分かり切ったつもりになって、話す事ができなくなっていた…」

だから、こじれ始めてしまった。互いに説明もせず、反論もせず、そして、目を逸らしてしまった。

「だから、俺はもう遠慮しない。これかも、きつと今以上に無理をする！そしてメドゥーサに心配をかけるし、怒られる！そして、メドゥーサには容赦なく言って欲しい。これからもずっと」

繋がっていく。かつて、聖杯戦争時に強く結ばれ、今では僅かなが

ら感じる事のできなかった、2人の繋がりが。

「だから、戻ってきてくれ。いや、違う——」

意を決した光太郎は叫んだ。『お願い』するのではない。完全な自己都合であり、我儘である。自身の本心を叫んだ。

「戻ってこいッ!!俺の隣にッ!!メドウーサアアアアアアアッ!!!」

僅かな静寂な後。ゴルゴンの巨体は閃光へと包まれる。

その赤く、暖かい輝きに慎二と桜だけではない。凜とアーチャーにも見覚えがあった。

「キングストーンの光…」

聖杯戦争時。魔術回路を持たない光太郎は祖父により手の甲に刻まれた令呪を通して体内に宿るキングストーンの力をメドウーサに注ぐ事によって現界させていた。

時間の経過に連れて2人を繋ぐパスは魔力以上に強まり、令呪無しでもメドウーサを現界させるに至っていた。さらに彼女の身体に満ちた力は疑似的ながらもキングストーンと同様の力を扱えるようになっており、創世王すら危惧を抱かせるものだった。

今回、光太郎が賭けたのは僅かながらも残る彼女の意思がキングストーンのを発揮させ、メドウーサの身体に巢食う敵が仕掛けた宝具を取り払うというもの。

しかし、結果は光太郎の予想を遥かに上回るものであった。

「本当に、無理な事ばかり思いつく人ですね。貴方は」

「ごめん」

「謝らないで下さい。こうして、また貴方の隣に立つ事が出来たので
すから」

それはいかなる奇跡だろうか。

光が止み、月夜が照らす下でゴルゴンの姿はなく、浮遊するロード
セクターの上には2人の人物がいた。

戦闘装束となり、美しく長い紫色の髪を風に靡かせ自分に謝罪した
人物に抱き上げられているメドゥーサ。

そして彼女の放ったキンググストーンの力が共鳴し、フルパワー状態
となった光太郎…仮面ライダーBLACK。

本来ならばもう向き合えるはずのない2人の姿が、ここにある。

「光太郎…言いたい事、話したい事が山ほどありますが…」

「ああ、先にあの怪物を倒そう…2人でツ!!」

光太郎の意気込みに応じるかのように、キングストーンはさらなる輝きを放つのであった。

第77話

一昔前の口説き文句に、『あなたは私の太陽』なんて言葉が用いられていたと手にした書物に記載されていた事があった。

その時は変わった例えですね…としか捉えていなかったし、そのような考えを誰かに抱く事はこの先もないだろうとメドゥーサは思っていた。

しかし、彼女は見つけた。

自らの『太陽』を。

(光太郎…)

深い闇へと沈みゆく自分を照らし、そして陽の当たる場所へと連れ出してくれた。

敵によって自身の中に植え付けられた理性を潰し、奥底に閉じ込めた殺意を膨れ上がらせた因縁ある宝具により、彼女の精神は押しつぶされる寸前であった。

もう、以前の姿も、心優しい人々との暮らしも望めない。そんな自分にできるのは、その人々の命を奪う魔物と化する前に自分を終わらせる事しかない。懸命に暴れ出さぬよう本能を自制する中、自分を倒すよう間桐光太郎に願うが、そんな望みは一蹴された。

それどころか怪物と化した自分を敢えて挑発し喧嘩へと誘導させた事によって、失いかけた理性を取り戻さず事に成功した。さらに言えば戻ったのは、理性だけではない。

会話も出来ず、目すら合わす事が困難な程にこじれてしまった彼との関係。

光太郎が次々と放つ言葉に最初こそムキにはなったが、ある意味自

分が待ち望んでいたモノだったのかも知れない。

気が付けば光太郎への反論だけでなく以前から彼に対して言いたくても言い出せなかった彼への不満が、その先にある思いが溢れるように光太郎へとぶつけていく。

光太郎へと、伝わっていく。

最初からこうして言葉にしてぶつけ合えば良かったのに。彼の優しさに付け込んで、自分は言いたい放題。彼がどう思うかを聞く事を失念していた。

いつか分かってくれる。理解してくれるなんて押し付けもいいところだったのだろう。

互いの不満点を次々と露わにしてく中、ようやく彼の本音を聞く事が出来たという嬉しさとその反面、いかに彼を追い詰めていたかと猛省する自分に、光太郎は言ってくれた。

自分の隣にいて欲しいと。

彼の言葉は、どうしても自分の心に押し掛かった重荷を払いのけてくれるのだろう。

どうしても、いつも自分を救ってくれるのだろう。

光太郎の声を聞き、暗闇の中にいた自分に一条の光明が包まれた、その時だった。

サーヴァントから英霊の力をわずかながら扱える人間へと転生した際に、ただ光太郎の状態が把握できるだけに留まっていたキングストーンの力。

自分と光太郎を紡ぐ赤く熱い力が、強く胎動を始めた。

キングストーンの輝きによって失われた熱を取り戻し、自分を縛る

忌まわしき布宝具を焼き払ってくれた。

その途端、眩い光に包まれた直後に身体を支えるゴツゴツとしていながらも、ある暖かい手に支えられていると感じて目を開けば…

暖かい光を灯す赤い複眼と、黒い身体を持つ仮面ライダーBLACK Kが…

光太郎が、そこにいてくれた。

「…どうやら、終わったみたいだな」

「良かった…ッ!? 慎二兄さん伏せてッ!!」

「うおっ!?!」

光太郎とメドウーサの姿に安堵する慎二だったが、桜の鋭い声を聞き反射的に屈むと慎二の頭上を風切り音と共に何かが通過する。桜のメイガスソードボウの柄であった。

薙刀の柄は慎二の背後に忍び寄る海魔の頭部に命中し、仰け反らす事に成功する。だがおかしい。軟体生物に近い身体構造を持つ海魔にここまで攻撃が当たった際の手ごたえ。まるで皮膚の下に硬い『骨』がしっかりと備わっているような…

「兄さん…」

「ああ、こいつら…」

立ち上がった慎二は目を見張る。川から次々と這い出たヒトデモドキと言えた海魔の身体に異変が生じたのだ。ミシミシと音を立て、身体の内側から何かが盛り上がっていく。軟体動物特有のしなやかさが失われ、触手の先端が五指となり、節々に関節が出現。

歯をむき出しにした顔もはつきりと「頭部」と思わせる形状へと変化した。

その姿は様々であり、人型、四足歩行、鳥類：中には骨が皮膚を突き破り、出来損ないとなった個体すらいる。だが、その個体すらも飛び出した骨を角代わりであると慎二たちへと向けている。

「進化…とはまた違うな。光太郎達に当てられたか？」

「そんなかわいいものには思えないのですが…」

「随分と余裕のあるようで関心ではあるが、油断はするな。雑魚どもがこのような様変わりをしたということは…」

アーチャーの視線を追う慎二と桜。そこには相変わらず聳え立つ大海魔が武による射撃を受け続け、ダメージを負うごとに再生を繰り返していただが、攻撃を受けた箇所から新たな触手が発生。さらに先端が五つに別れ巨大な手となり、表面も爬虫類を連想させる強固な皮膚へと変わっていく。

最後に頭頂部と思われる箇所がパツクリと真っ二つに割れ、新たな頭部が出現。ズリズリとせり上がり、体液まみれの長い大口には鋭い牙が並び、鋭い眼を覗かせると、大海魔は大気を震わせるような咆哮を上げる。

無数の触手と腕にワニの頭部を持つ姿へと変わった大海魔の変化に伴い、同じく変貌した海魔達が攻撃を開始する。

恐らくは光太郎とメドゥーサがまたも『自分の考えた結末』とは別の結果を生み出してしまった事への腹いせに力を暴走させたのだろう。

だが、厄介事以上の脅威とは、慎二と桜。そして攻撃を続ける武には思えなかった。

口から涎らしき液体を振りまき、足の骨が対象の長さでない為かぎこちない走りを見せる海魔の頭上に黒い戦士が右足を突き出した状態で落下。

海魔がどうなったかなどさほど興味のない慎二達は、ゆっくりと立ち上がって見せる黒い背中をこちらに向ける光太郎へと呼び掛ける。戦えるのかと。

「…当然さー！」

言うと同時に光太郎は駆け出し、接近した二足歩行の海魔の頭部に拳を叩き込み、敵が突如襲われたダメージに後ずさる時間も与えずに左足を軸とした回し蹴りが腹部へと炸裂。

文字通りに吹っ飛んだ海魔は後方で続いて走り寄る別の海魔もろとも河川敷へと転がると、光太郎の攻撃を受けた海魔の身体がひび割れ、やがて爆発。巻き添えを喰らった他の海魔も連鎖して次々と火が付き、砂利の上をのたうち回った後に沈黙した。

光太郎の攻撃は止まらない。

正面から迫る四足歩行型も左右から接近する人型…身体から皮膚を突き破った骨を武器として手に取った個体も、光太郎の身体に届かせるよりも早く、光太郎の拳と足が海魔を吹き飛ばす。

胴体に穴を開けた人型2体が燃える中、立ち上がるうとする四足歩行型の頭部を踏みつけて跳躍。光太郎は後続する海魔へと飛び蹴りをぶつけ、着地と同時に背後に立つ人型へ裏拳をお見舞いし、海魔は

身体を錐揉み状に身体を回転させながら川へと落下した。上つてくる様子は、ない。

『…ッ!?!』

光太郎の力を垣間見て、警戒を強める海魔たちは距離を置く。闇雲に近づけば光太郎の餌食になると考えたのだろうか、一定の距離を保ち、進軍を止めた海魔達に対し、光太郎も構えを解かずに対峙する。

だが敵の動きは直後に現れた。

「何ッ!?!」

地面から飛び出した触手が光太郎の脚へ、手へと絡みつく。

思わず目を下へと向ける光太郎は、自身を縛る触手の正体が他の個体と違い、軟体生物のままであった海魔が地中を移動したものだだったと気がついた時、光太郎を頭上から襲わんと鳥類型となった海魔が迫る。

「しまっ——」

「詰めが甘いですよ光太郎」

敵の強襲に思わず声を漏らす光太郎だったが、静かな囁きと共に鳥類型の頭部を鉄杭が貫き、脳漿をまき散らして落下していく。敵の末路を見届けた光太郎は手足に力を込めて触手を引きちぎり、本体が潜伏しているであろう地点へ赤い光を灯した拳を突き立てた。

『ギイツ!?!』

敵の断末魔が地中から響くと共にわずかに地面が揺れる。恐らく光太郎の攻撃を受け、地中で爆発したのだろう。

「ありがとう、助かったよメドゥーサ」
「どういたしまして」

飛行するロードセクターの操縦席から光太郎に迫る海魔へと鉄杭を投擲し、見事に命中させたメドゥーサは光太郎と背中合わせとなり彼に答えた。数えるのも下らない海魔に囲まれているというのに、メドゥーサの表情は柔らかい。

(身も心も、とても軽い。まるで羽のように、とても…)

こうして光太郎と一緒にいられるだけでなく、また戦える。それだけでも、彼女には負ける気がまるでしない。そう思えてしまう程であった。

(やっと、また隣に立てるんだな)

光太郎も同様だった。キングストーンの共鳴によって再度変身する事が可能となったが、今自分が力を取り戻す事ができた要因はそれだけではない。メドゥーサが隣にいてくれる。たったそれだけで、力が溢れてくる。そんな気がしてしまう。

「…いこう、メドゥーサッ！」

「はいッ！」

光太郎が腕を左右に展開し、ベルトの上で拳を重ねるとベルトの中央部が赤く発光。赤い光が右拳へと宿る。その拳を右側へと伸ばすと、背中合わせであるメドゥーサが左手を伸ばし、光太郎の拳へそつと手を重ねる。すると赤い光がメドゥーサの掌にも宿り、光太郎の拳から手を離れても継続的に光を放ち続けていた。

「トアッ！」

「ハアッ！」

同じタイミングで地を蹴る光太郎とメドゥーサ。一気に距離を詰めて放たれた光太郎のストレートパンチに身近で棒立ちの海魔の胴体を貫き、そのまま持ち上げると人型でありながら身長が3メートル近くある個体ヘラリアットの要領で叩き付けた。

爆発する2体の海魔に構わず、光太郎は次の敵へと狙いを定める。

一方、光太郎とは反対の方向へと駆けだしたメドゥーサは低空飛行で迫る鳥類型の額へと赤く光る左拳の指を伸ばし、敵の額へと突き刺した。

ズブリと頭部を両断させたまま手刀を胴体まで走らせ、振り下ろしたと同時に左右に分かれた海魔は爆発。同胞の最期を見てその場を離れようとした海魔たちだったが、直後に足の動きが鈍る。

脚だけではなく、腕も首も。動かなくなった訳ではないが鉛で縛られたように重い。

動きが封じられた海魔が最後に目にしたのは、妖しくも美しく、赤い瞳でこちらを見るメドゥーサが手刀を振り下ろす姿であった。

「…キングストーンの力に、弱まったとは言え任意の相手を石化させる魔眼。敵にとって最悪な組み合わせだな…っ」と！」

本来ならば無差別に石化させ、宝具を持って封印が施されていたメドゥーサの魔眼。しかし、キングストーンの力を取り込んだことで石化の呪いは封じられていたが、よもや石化の能力をコントロールできるまでに至ると思いきも思いつかなかった慎二は驚きを口にしつつもトリガーマグナムの引き金を引く。

爆散する敵の煙を払い、接近する海魔に膝蹴りを決めると自分の背後で奇声を上げる別個体を袈裟斬りで沈めた桜の歓喜に近い声が耳に届く。

「きつと、愛の力ですよね！」

「あーこれが終わったら好きなだけ本人たちに追求してくれ…」

仮面の下でキラキラとした瞳で言っているであろう義妹の意見を受け流す慎二は続いて海魔へと照準を合わせるが、突然の地響きによつてぶれてしまう。いや、そんなことよりもと震源である方角へと目を向けると…

「ちい…どうやら『奴』は変化を続けていたようだな…」

「何よあれ…反則じゃないッ!？」

夫婦剣で海魔を切り伏せたアーチャーに続き、霧の中で蠢く影を見上げた凜はそんな言葉しか浮かばない。

最初こそ円柱に触手が生えていただけに過ぎなかった大海魔であるが、触手の一部が腕となり、巨大な頭部を出現させた。そして地響きの原因…恐らく川の底に沈んでいたであろう無数の触手をまとめ上げ、結合させた事により太く、強靱な2本の脚を生み出し、立ち上がったのだ。

それこそ怪獣映画に登場する歩くだけで地震を起こしてしまう一歩を踏み出した大海魔は、ゴルゴンとなったメドゥーサに変わり、新都へと足を向けている。

「くっ…まさか…!？」

飛行するスザクインベスの背に立ち、砲撃を続けていた武であったが、打ち出された攻撃は現在は火傷を負わせる程度にしかならない。このままではいずれ人避けの結界の効力に関係なく、多くの人々にあの化け物の姿が感知されてしまう。

(こうなれば、奴の頭上に飛び乗り必殺技を近距離で放つしか…)

(聞こえますか…皆様?)

(っ…!?この声は…?)

まだ試していない…それも危険極まりない戦法に乗り出そうとする武であったが、スザクインベスに大海魔の真上まで飛ぶよう指示を出す直前、頭に声が響く。耳からではなく、直接脳へと呼び掛けるその声は、空にいる武だけでなく、地上で戦い続ける光太郎達へも聞こえていた。

「この声…ガロニア殿？」

今から数分前。

「なんて事でしょう…」

『巨大生物ハ新都ヘト向カツテイル。上陸スルノハ時間ノ問題ダロウ』

「何か、手立てはないのでしょうか。このままでは、皆様が…」

ライドロンの社内からモニター越しに光太郎達の戦いを見守っていたガロニアは胸の前で両手を握り、敵と戦い続ける光太郎達の無事を祈る中、ライドロンの車内で音が鳴り響く。

『コレハ…通信?アクロバッターヤロードセクタートハ違ウ信号ダ』

「え…？確か、あの2人以外に慎二様達の携帯電話でしかお話できないのでは…？」

『…秘匿回線。逆探知二モ時間ガカカツテシマウナ』

自分の通信機器を特定し、傍受を妨げるプログラムを掻い潜って通信を送る相手に警戒するライドロンであったが、ガロニアは迷いなく通話ボタンへと指を伸ばした。

「勝手な行動を謝罪しますわ…ですが、今の状況で我々に対して通信してくるという事は何か有益な情報か、それとももう諦めろという降伏勧告。しかし今回の首謀者が木星の騎士ジユピトルスであれば回りくどい通信などいたしません」

『ナラバ、前者ノ可能性ガ高イトイウ事力』

「その可能性に、ワタクシは賭けますわ」

やがて、ノイズが収まり、回線が安定するとライドロンの通信機へ落ち着きのある、男性の声が聞こえてきた。

『…こちらの通信に伝えてくれた事に、まず感謝しなければならい
な。私は…そうだな、今は『J』とでも名乗らせてもらおう』
「ごきげんようJ様。早速本題に移りたいのですが、よろしいですか
？」

『それはこちらとしても話が早い。早速だが、今から転送するデータ
を見てもらいたい。おそらく、君達の役に立つ情報となるだろう』

こちらの弱みを見せぬよう、強めの口調で主張するガロニアに対してJと名乗る男は動じることなく、発言した通りにライドロンヘデータの収まったファイルを送った。

「ライドロン様…」

『…ウイルス等ハ含マレテイナイヨウダ。解凍スル』

こちらのコンピュータにダメージを与えるものではないと判断したライドロンはモニターへデータを映し出す。そこにあつたものは…

「これは…サーモグラフィですわね？」

物体から放射される赤外線を分析し、熱分布を図として視覚化した画像…それも対象は、あの大海魔なのである。

『理解が早くて助かる。それは、我々が衛星から撮影したものだ。それを見ると中央にある一点。そのみが他と比べ異様に熱を発していることが分かる』

「確かに…」

Jの言う通り、画像にある分布図は、大海魔の中央部が高い熱を持つ眼球や心臓部よりも高温である事を記されている。さらに、ご丁寧にその一点から熱を全体に流しているという事もデータから理解できる。

「もしや…これがあの怪物の核だとするのなら…」

『その通りだ。そこを叩けば、倒す事も可能だろう』

希望を見出したガロニアではあるが、喜んでばかりはいられない。綻ばせた顔を引き締め、ブンブンと顔を左右に振って今一度Jへと問いかけた。

「それで、J様への見返りは、どうすれば宜しいのでしょうか？」

『見返り？』

確かにこれで敵を倒す糸口が見えた。だが、これ程の情報を無償で送られるとは考えられないガロニアは先手を打ったのだ。しかし、J

の解答に思わず妙な声を漏らしてしまった。

『そうだな…それでは、君達が勝利の二文字を勝ち取る、というのはどうだろうか?』

「はえ?」

『君の仲間達は、命を賭して戦ってくれる。ならば、我々にできる事は僅かながらでもそれを手助けするしかない。それでも、足りないぐらいだがね』

優しい声色を聞き、目をパチクリとするガロニアだが、その表情は穏やかなものへと変わり、顔は見えない協力者に対し頭を下げた。

「J様の心意気を疑うという無礼な振る舞い、誠心誠意謝罪いたします。同時に、感謝いたしますわ」

『…礼は不要だよ。我々も君達同様に祈り、掴みたいのさ。』『人類の自由と平和』をね』

その言葉を最後に、通信が終わる。後はこの情報を光太郎達へと伝えるだけなのだが、戦いの渦中にいる彼等にライドロンの通信機から発信しても、携帯電話を手にする余裕はない。ならばと、ガロニアは後部座席に収納されていたある試作品を手を取った。

それはヘッドホンに幾層ものケーブルが巻かれているような形状の道具であった。

『ガロニア。ソレヲ使ウツモリカ? マダ十分ニテストヲシテイナイノダゾ?』

「もう、新都まで怪物がたどり着くまで時間がありませんわ。それに…これが、ワタクシに今できることなのですから!」

(聞こえますか…皆様?)

「ガロニア、お前っ…あれを使ってるのか!？」

眼前に迫る海魔へゼロ距離でトリガーマグナムを放つ慎二の音が荒れる。今、ガロニアの声が耳ではなく脳へと直接聞こえるのは慎二とメディアが共同して開発中であつたある装置によるものだ。

思念送信機。

文字通り、人と人の会話を聴覚や口で行わず、思念のみで行う事を試みた機械。マスターとサーバーが念話で意思疎通を図れる事をモデルとし、ライドロンの開発以降、謎の発明癖を持つてしまったメディアと今後、いざと言う時の通信手段としての合作だったがのだが、一晩で組み上がった試作品に問題が生じてしまう。

装置は使用者の思念を無差別に送る事無く、心に思い描いた人間にのみ対象とすることが出来る。しかし、特定の人物達に思念を送る際に大きな負荷が脳に起きてしまうのだ。

距離が離れている程、思念を送る人物が多いほど、使用者への負担は比例して大きくなっていく。

だが、ガロニアは自身に申し掛かる負担を覚悟して、装置を起動させたのだ。

(慎二様…お叱りは後程。今は、あの怪物を倒す手立てを見つけた事を伝えさせてください)

「本当ですかっ!？」

(はい…信頼できる筋からの、確かな、情報…です)

驚く桜へ自信を持って頷くガロニアの声は、段々と弱まりつつあ

る。装置による負担が大きくなっているのだろう。敵を蹴散らしつつ、ガロニアがJたる人物から伝えられた敵の情報を耳にしたが、やはり最初に疑ったのは慎二とアーチャーであった。

「J、ね…あからさまに本名を伏せる奴は怪し過ぎるな」

「その点に関しては同感だな。我々を陥れようとしている可能性も考えられる」

「あんたらねえ…」

疑い深い2人に対して怒鳴ろうとした凜であったが、その意見は一変される。

「けどまあ、ガロニア^あが覚悟して伝えた情報なんだ。今はそれに乗るしかない」

「やれやれ…甘い事だ」

結局、謎の人物による情報よりも、ガロニアの捨て身の念話を信じて武器を構える2人に呆れつつも、身体を張った妹分に感謝しつつも、凜はありったけの宝石を手にした。

「…ロードセクターツ！ソーラーエネルギーを照射してくれツ！」

「光太郎。RXになって一体何を…いえ、貴方の事です。きつと無理をするのでしよう」

「うん。バイオライダーになれば、あの怪物の体内へ侵入できる。そして、ガロニアさんの伝えてくれた核を叩けば…」

光太郎の立てた、捨て身に近い案をメドウスは黙って聞いている。

その間に、上空からロードセクターによって照射された光により、光太郎の姿はBLACKから光の戦士、RXへと変わっていく。

ちなみに照射前にロードセクターが理解できない言葉を発していたが、2人の耳に届くことは無かった。

「…わかりました。しかし、条件があります」

「…内容は？」

「光太郎がああ怪物へと飛び込むまで、同行させて下さい」

「それは危険だ。メドゥーサはここで——」

「貴方が言ったのでしよう？光太郎」

光太郎の言葉を遮ったメドゥーサは、戦いによって傷だらけとなった手を、光太郎の手へと重ねた。

「貴方の傍にいたいようにと。そして、好きだけ意見するようにと。ですから、貴方から離れるという私の我儘を、決して譲りません」

「メドゥーサ…」

「それとも、早速も意見を変えるつもりですか？」

「俺の負けだよ…」

自分を見上げるメドゥーサの優しくも、少なからず悪意に満ちた瞳を見て光太郎は降参する。まるで勝てる気はしないと。

「じゃあ、行こうメドゥーサ。俺は、必ず帰って来る」

「必ず、ですよ」

決意を新たにした光太郎の手を強く握るメドゥーサ。互いにもう何の隔たりのない確かな繋がりを感じた2人に——

不思議なことが起こった。

「えっ…!？」

「これは…!？」

手を握り合う光太郎とメドゥーサの周りを光が奔流する。突然の現象に2人だけでなく、慎二や桜達も目を丸くする。

そして変化は続く。

光太郎の赤く輝く複眼とベルト…サンライザーがアメジストの如く、輝く紫色に染まっていく。

メドゥーサの外見に変化はないが、彼女の体内に聖杯戦争時と同様の…否、それ以上の魔力が渦巻き始めていた。

(これは…あの時と同じ…)

メドゥーサはかつて、光太郎が初めてRXとなった際に一瞬だけ自身の魔力が爆発的に高まり、敵を撃破した記憶がある。その後も自分と同様に、メディアやアーチャーも突然魔力が数十倍にも膨れ上がったと語っている。

以前から謎に思っていた魔力の増大。そして、ようやくその解答が得られたのだ。

(貴方だったのですね。光太郎…)

光太郎と意思を共にした時。同じ感情を爆発させた時に、それは起こる。

こちらの想像を、いつも超えた事を起こしてくれる。

今だって、不可能なんてないと、自分に思わせてくれるのだから。

「行きますよ、光太郎」

「ああ！」

「ペガサスッ！」

「ロードセクターッ!!」

メドゥーサが手を真横に振るうと同時に出現した魔法陣。彼女の血液を用いずに展開された陣から閃光と共に彼女の子とも言うべき天馬が頼もしき咆哮を上げて現れた。

ペガサスへと飛び乗ったメドゥーサを見送った光太郎は、続いて高度を下げたロードセクターへと搭乗。急ぎメドゥーサを追走する。

耳に風を切る音を走らせながら、メドゥーサは黄金の手綱を、光太郎はサンライザーからリボルケインを顕現させる。

そしてリボルケインを真横へと構え、空いた右手で柄から切っ先をゆっくりなぞるとリボルケインはその姿を変えた。

リボルケインの象徴とも言うべき、青い輝きはそのままに、メドゥーサの握る手綱と見分けがつかぬほど同じ形となったのだ。

さらに上昇を続けながらも並ぶ2人は無言で頷きあい、メドゥーサ

はペガサスの頭部へ、光太郎はロードセクターのハンドルグリップへ手綱を装着した。

「ロードセクター…君にも付き合ってもらおうよ。俺達の無茶に」

『私も自分の限界を知る良いチャンスに恵まれました。それに…これは初めてではありません』

「はは、そうだったな」

そんな会話を聞き、口元を緩めるメドゥーサに、光太郎は再度頷いて見せた。

同時に、上昇を続けていた2人は急旋回。地上から脅威となったと察知したのか、こちらを見て大口を開き、分身体である海魔を飛ばしてくるがもう遅い。

2人が手にした手綱は、騎乗した動物・乗り物のリミッターを外し限界以上の力を発揮させる宝具。

地表へと進む天馬とロードセクターはそれぞれ光へと包まれ、接近する海魔を次々と蒸発させた。

輝きが強まると共に加速し、地上から見る慎二たちにとっては、光の尾を引く流星と化した2人は互いに寄り添い、2色の螺旋となってガロニアの伝えた大海魔の中央：核であり、海魔の触媒である木星の騎士ジュピトルスの片腕が存在する箇所目指して超突進。

一筋の光となった光太郎とメドゥーサは、宝具の名を轟かせた。

『^{ベルレフオーン}騎英の手綱!!』

まさに、一瞬だった。

最後の抵抗として腕となった触手で迎え撃とうとした大海魔が構えるよりも速く、光太郎とメドゥーサは大海魔の背後にいた。

そして無理が祟ったのだろう。

河川敷へと着地した光太郎の姿はBLACKへと戻り、ロードセクターはボディのあちこちから煙を上げている。メドゥーサは比較的事務であるが愛馬であるペガサスが消失したために、バタリと砂利へと落ち、息を乱しながら膝を付いてしまった。

だが、2人は背後に立つ大海魔を振り返る必要はない。

なぜなら、巨大生物の身体の中央には、大きな穴が。まるで最初からあったかのように、整った円が身体を貫通していた。

悲鳴を上げる間もなく、核を失った大海魔の身体は灰色となり、ロボロと崩れ川の底へと沈んでいくのであった。

第78話

「ターゲットの消滅を確認」

「No.11、およびパートナーサーヴァント健在」
イレブン

「未遠川を中心に展開されていた広範囲の特殊フィールド、消失していきます」

巨大モニターから照らされる光が唯一の照明と化している管制室。次々とオペレーターの女性から報告される内容を全て耳へと入れる男性はキツチリと整えられた髪型に皺一つ見当たらないスーツと、まるで隙の無いサラリーマンと印象付ける姿だ。

しかし、そんな姿に不釣り合いである黒い手袋で包まれた右腕で付近の端末を数度操作。男はモニターの隅に展開される望遠カメラを間桐光太郎へと固定する。

「よくやった…」

分析を続けるオペレーター達に聞こえぬよう、そう小さく呟いた男は緩ませた。

「随分と遠回しな手助けをしたものね。貴方と同じライダーなら、名乗っても問題なかったのではないの、『J』?」
「そう意地悪を言わないでくれるか、アンリ?」

音もなく背後に現れたアンリと呼ばれる女性へと男は笑いながら振り返る。目つきはやや鋭いものの、それすら彼女の魅力の一つと思わせる容姿端麗な美女であるアンリエッタ・バーキンは身を包むコートの内側からメモ用紙を取り出し、男へと突き出した。

メモを受け取り、書かれた内容に目を通した男はやはりか…と目を一度瞑り、再びモニターへ顔を向けると変身を解いた間桐光太郎が笑

顔で兄妹達と接する場面が映し出されていた。

「…彼等の戦いを離れていた場所で眺めていた存在『星騎士』。少なくとも3体を確認したわ」

「一度は彼を瀕死の状態まで追い詰めた存在が3人…理由は不明だが傍観に徹していた、か」

「戦いが終わり、弱ったNo.11イレブンに襲い掛かる様子もなく、立ち去ったそうよ。理由は不明」

「敢えて見逃したか、それとも彼が見せた力を警戒したのか…」

アンリが示した情報と手近の写真付きファイルを見比べる男は、既に立ち去った星騎士たちが介入せず戦いを眺めるに留めた理由を探ろうとしたが、情報が足りない。写真も星騎士達を警戒して離れすぎた為か画像がブレてしまったものばかりであり、他と比べ解像度の高い写真が撮れたと思えば、中に写る金髪の少女は数キロ以上離れて撮影した者を察していたかのように、視線をレンズに向けて冷たい笑みを浮かべていた。

現状、戦力の大半を世界各地へと分散してしまった彼等にはクライシスと同等…それ以上の力を持つであろう星騎士たちに挑む手段がなく、こうして敵の戦力を分析に徹するしか方法がないのだ。

「風見をNo.11イレブンに接触した直後に呼び戻したのは早計だったかも知れないわね。2人が協力し合えば…」

「いや、風見ならどの道日本を彼に任せていたさ。珍しく褒めていた事だしね」

「…報告によれば『ようやく羽の使い方を覚えた雛鳥』としか言っていないさ」

「それでも、彼にとっては称賛に値する言葉だよ」

意味が分からない…そう言いたげに眉間へ指を当てる自分の副官を他所に、再び男は巨大モニターへと目を向ける。

(すまないが、もうしばらく耐えてくれ…世界中に散開したゴルゴムの残党やクライシスの別動隊…君達の戦いの影に隠れて暗躍する者達を叩くまで、俺達は僅かながらの手助けしかできない)

心中で自身と同じ道を歩んでしまった光太郎を憂う男は、自身の可能な限り光太郎達を影ながら支援すると決意を固くするのであった。

「ところで、『彼』のだけど…」

「…『ランス』が飛び出してしまった。というところだろうか？」

先ほどよりも重く頷くアンリの解答は、男にとっては予想通りのものであった。逆にアンリはなぜこうも男は納得してしまうのか、疑問しか残らない。

いつ『あの情報』がランスと呼ばれた者の耳に入ったかは分からない。無線による呼びかけも全く応じず、誰にも言わず姿を消した事にパートナーである彼女が放つ無言の圧力に他の隊員達は怯える他なく、上司であるアンリの頭痛の種がまた増えてしまった訳だ。

「…全く、命令無視の常習犯が今度は無断でいなくなるなんて…滝が変に庇い立てしななければ今頃軍法会議ものよ。周りに示しがたたないわ」

「そう言わないでくれ。躍起になっているのは、彼だけじゃない。俺達も同じなんだ。彼の気持ち…分からない訳ではないだろう？」

「…そうね」

「それに、どうやら思ったよりも近いところにいるらしい…」

「え…??」

大海魔が完全に消え去った事に呼応して、河川敷に溢れかえった海魔の変異体達は次々と灰となっていく。川の方角へ油断なく銃口を向ける間桐慎二や武器を強く握る間桐桜であったが、再び新しい海魔が出現する様子はない。

「…終わった」

「見たいですね」

慎二の呟きに同意した桜はそろい自分の腹部に手を当てるとそれぞれがバツクルからメモリを引き抜き、レバーをスライドさせると仮面ライダーから人間の姿へと戻る。2人は離れた位置でヨロヨロと支え合いながら立つ光太郎とメドゥーサの元へと走った。

「光太郎兄さん！大丈夫ですか？」

「メドゥーサ…怪我は？」

駆け寄る義弟と義妹の姿に、変身を解除した光太郎とメドゥーサは心配させまいと笑って答えるが、少しばかり本音を漏らしても構わないだろうと返答すると。

「大丈夫…とは言えないかな？」

「同感ですね。立っているのが、少々堪えています」

「なら無理せず座つてろよ！今ライドロン呼ぶから！」

「どうしてそんな状態で立とうとしたんですか！治療しますからとにかく大人しくして下さい！」

怒られてしまった。

その後も久々に年下組から揃って雷を受けてしまった光太郎とメドゥーサは目を合わせると、つられて吹き出してしまう。何がおかしいんだとその後も慎二と桜にガミガミと怒られる2人の姿をライドロンから降りたガロニアはじつと眺めていた。次第に段々と視界と揺らいでいる事に違和感を覚え、何事かと慌てふためくとガロニアの肩に手を置き、そつとハンカチを差し出す赤上武の声が響いた。

「良かったではないか。見たかったのだろう、あの関係を」

「…はい」

ガロニアが桜と入れ替わった頃から亀裂が入ってしまった光太郎とメドゥーサの関係。ガロニアは自分が事の発端となってしまったのではないかと慎二に相談したが、「あんなもの一時的に過ぎないし、そのうちこつちがイラつくくらいに仲直りする」と責めることなく、待っているとした言われなかった。

その通りだった。

光太郎とメドゥーサが共に笑い合う姿を目にし、無意識に涙を流してしまったガロニアは武からハンカチを受け取り、そつと目元に当てる。そんなガロニアを励まそうとしているのであろう。ロックシードの効力が解け、上級から下級へ、さらに小指程の大きさとなったインベスがガロニアの両肩に乗り身振り素振りで元気づけようと躍起になる姿があった。

「フフツ…感謝いたしますわ」

微笑むガロニアにつられて武も、光太郎とメドゥーサが本音をさらけ出したことで以前よりも絆を深めることができたのであろうと安堵して口元を緩める。

「雨降って地固まる、か」

自分の世界でも通用した言葉であったが、まさにあの2人の為にあるのだろうか思えなかった。

「ま、良かったんじゃないの？今後不満を言い合えるのって、ストレス溜まらないでしょうし」

「その言い分だと、君はストレスを持ち合わせていない事になるんだがね」

「言っただって通用しない相手もいるのよツ!!」

「ふむ。それは困った——ツ!?下がれ凜ツ!!」

腕組をして実妹たちのやり取りを見て呆れつつも、どこか羨望の眼差しを向ける遠坂凜の肩を掴み、自分の後方へ下がらせたアーチャーの眼前に、身体の一部を灰化させながらも襲い掛かる海魔が出現した。

地中に潜んでいた個体らしく、所々の肉がなく骨格が露出した状態であるがそれゆえなりふり構わず襲い掛かって来る。

「ちい……!」

「アーチャーツ!?!」

手に魔力を込め刀剣を投影するアーチャーであったが、彼が攻撃を仕掛けたと同時に恐らく敵の牙が届き、頭を喰いちぎられる。そう嫌な未来しか見えない凜は思わず彼の名を叫ぶと同時にあった。

「ギギャツ……!?!」

「なっ……」

「あれって……」

海魔が口を大きく開いた直後、頭上から飛来した『何か』に海魔の頭頂部へ突き刺さるだけに留まらず、その先端は地面をも貫いた。

海魔を串刺しにしたそれは、紅い槍。

その槍をアーチャーと凜は嫌という程その目に焼き付けている。

そしてこの槍の担い手は神話の時代も現代でも、たった一人しかない。

「つたく、腕鈍ってんじゃねえのか？弓兵さんよ」

灰となった海魔の姿など目もくれず、槍を放った青い男に目を向ける。

見慣れぬ私服姿と青い髪を首の当たりで適当に結んでいる男の不遜な態度は変わらない。

「よう嬢ちゃん、ちったあ妹さん見習って貞淑つての身につけたか？」

「いきなり何わけわからぬ事口走ってんのよ。けどまあ、助けてくれたんだから聞き逃してあげる。助かったわ、ランサー」

「私も感謝だけはしておこう。おかげで命拾いをした」

「あーテメエにそう言われんのはなんだか気持ち悪いな」

ガシガシと手で後頭部をかくランサーは真紅の槍を回収し、柄で肩を叩くその姿は聖杯戦争時と変わらない。だが、どこかで違和感を覚えるアーチャーはマスターである女性と共に、とある特殊部隊で厄介になっているとしか説明の無かった男がなぜ自分達の目の前に現れたのかと疑問を抱く中、ランサーは続いて光太郎達の元へ悠遊と向かっていった。

眉間に皺を寄せるアーチャーは衣服の袖が引かれていると気づき、顔を向けると凜が怪訝な表情を浮かべ、慎二をからかい、ガロニアに

言い寄るところを桜に咎められるランサーの姿を見て呟いた。

「…明日、私たちに聞きたい事があるらしいわ」

「聞きたい事？」

「ええ、さつきすれ違いざまにぼそつとね。その時のランサーの声。とても…」

「とても、冷たかった」

「まさかもう日本に辿り着いてたとはな…流石の行動力だ」

「何を褒めているの…居場所が分かったのなら今すぐ村雨達に——」

「いや、彼も1人ではどうにかできないと思いかつての戦友に助けを求めたんだろう。それに、いい機会でもある」

踵を返し、待機中の人員に連絡しようとするアンリを引き留めた男は変わらず静かな声で告げる。

「これで彼は変わるかもしれない。かつて俺自身も経験したことを、ね」

男…結城丈二はモニターに映るランサーを見つめるのであった。

第79話

木星の星騎士ジュピトルスは黙って、自身の召喚した大海魔が灰と化して消える光景を眺め続けた。ただ目を凝らし、既に原型を留めない大海魔とその母体が滅したことに連なつて消滅する無数の海魔の姿を、ただ黙って。

隣に立つ水星の騎士マキュリアスは、自分の知るジュピトルスとは表情がまるで異なる姿に違和感を覚えていた。

一師団の長であつたジュピトルスはその狡猾さも相まつて敵全てを血祭りに上げた際は味方でさえ怯える程の不気味な笑みを浮かべ、その日の晚餐は敵対した者の死肉を喰らうという噂が広まつた程である。逆に目的を達成できたかつた際には不機嫌な子供を思わせる癩癩を起し、作戦に参加した者を憂さ晴らしとして惨殺を繰り返すなど、彼が起こす戦いの結果には必ず敵味方に多大な犠牲が発生していた。

だからだろう。ジュピトルスの策を幾度となく退けた間桐光太郎達に対しては煮え湯を飲まされ続けていたはず。ならば此度も同じように怒りに震えるに間違いないと思われたが、ジュピトルスほどの感情も爆発させる様子が見られない。

「…認めましょう。ええ、これは認めざるをえない」

「……………」

「私は思い違いをしていたようです。あの男を倒す為に必要なのは精神的に追い詰める事ではなく、正面から叩き潰す力であると」

大海魔が完全に消失した後初めて放たれたジュピトルスの声。望まぬ再会の中でマキュリアスが解体した人間の頭部を眺めて恍惚とした顔は、そこにはない。

どう相手を苦しめるかを念頭におき、その様を眺めるカエルの眼球を連想させる瞳に映るのは、ある決意。

自身の愉悦の為ではなく、純粹に相手を倒す為に戦う決意を固めた

者のみが見せる事の出来るもの。

自分の為である事には変わりないが、目的は大きく違う。

ジュピトルスはこの地球に降り立ち、初めて全力をもって倒さなければならぬ『敵』を見つけたのだろう。

相手の顔を苦痛に歪ませ、絶望させなければ殺しても意味がないという信条まで捨て去って。

「私はしばし姿を消しましょう。あの男を…間桐光太郎を確実に倒す力を身に着けるまで」

「つまり…姑息な手段を使わず真つ向から挑むということか？」

「左様。我が策や異界の兵を使つての勝利などもはや無意味。私自身の手で間桐光太郎の…仮面ライダーBLACK RXの首をもぎ取らねば…意味がない」

静かに告げ、踵を返すジュピトルスはゆっくりと浮遊しその姿が揺らいでいく。

「……………」

だが、ジュピトルスの背後に立つ青年の顔に暗い影が差す。

マキュリアスはその手に巨大な鎌を出現させると音を立てることなく振り上げ、背中を向けるジュピトルスへと狙いを定めた。

今回の戦いでジュピトルスを生かしておいたのは、あくまで自分の理想の障害となる者…怪魔界を脅かす存在たる間桐光太郎の力量を確かめる為。自分に使命をくれた少年の為に、争いを広げる者は誰一人例外なく殺すと決めた自分と、快樂の為に殺すジュピトルスは相いれない。

怪魔界で起こした謀反と今回はあくまで利害の一致。マキュリアスには、ジュピトルスを生かしておく理由はないのだ。

ない、はずだった。

気が付けばマキュリアスはメドゥーサを切り裂いたハルペーを

ゆっくりと下げ、この場から消えようとするジュピトルスに背中を向けてしまう。なぜこの殺人狂を見逃そうとしたのかは、自分でも分からない。

ただ、過去に見たジュピトルスとは明らかに違う表情を見た為なのか。

理由は、やはり分からない。

「私を殺さずに見逃してくれる事には感謝します。お礼とは言えませんが、貴方の耳に届くような『愉しみ』はしばし控えるとしましょう」「信用しろというのか？貴様にとっては生きる糧でもあるだろう」

「否定はしません。しかし、それ以上の目的が出来たというだけの事です」

「…そうか」

おそらく、怪魔界ですら一度たりとも成り立たなかった同じ星騎士としての対話。

覚えているのは、クライシス軍本部の円卓で告げられた命令に黙って頷く自分と、その過程でどれ程の人間が殺せるかのかと笑いながら訪ねるジュピトルスを窘める若き金星の星騎士。そして、さらにその者を優しく諭す2人…

謀反を共謀した時でさえ、言葉を交わすことは無かった。

そして、悪いものでもないと考えてしまった自分が、どうかしているだけだ。

今さら関係を築けるとは思ってもいない。ジュピトルスですら、この場にはいない星騎士も同様だろう。

彼等が何者かに魂を開放され、各々の目的で間桐光太郎を抹殺するという、利害が再び一致したに過ぎない。

だから、言葉らしい言葉を交わすのは、これで最後だ。

「…確認したい事がある。ヴィルムスは間桐光太郎と対面した時、クライシスに下るよう言っただけなのか？」

「そのようですねえ。結果は今にいたしますが…」

「それ以外に、何もなかったのか？」

「ええ、そのようです」

「そうか…」

ジャーク將軍の若かりし頃の名を出したマキュリアスの質問は、ジュピトルスも抱いた謎であった。恐らく、自分達より早く接触した火星の星騎士も同じ疑問に囚われているはずだろう。

いやと、頭を振るマキュリアスはそんな疑問を持つ事こそ下らないと鎌を手から消失させる。

経緯はどうあれ、今自分がすべき事は間桐光太郎の抹殺。

自分の理想を成し遂げる為に。そして…

「報復はしなければならない」

「フッフ…それでは、どちらが先に成し遂げるか競争となりますな…」

静かに、そして冷たい声で放たれたマキュリアスの言葉に同意したジュピトルスの気配が完全に途絶える。彼が何処に行き、どのような力を身に着けるかはマキュリアスに見当もつかず、興味もない。

「ならば、私もしばし様子を見るとしよう。あの男を倒すにはそれ相応の準備が必要なようだ」

「はあく。随分すんなりと引き上げたなあ。あの変態ども」

かつての同志に辛辣な評価を口にするマルスはガサガサと自分で食し、散らかしたスナック菓子の袋やペットボトルの回収を始める。

光太郎が相方の女を救出し、さらには宝具を発動させた光景を垣間見たアルスはつついっつい熱くなって隠れ家の買いだめ用であったファミリールパツクの菓子類まで手を伸ばしてしまった。

あんな事、興奮しない方がどうかしている。

怪物が消えた後に、アルスは別の場所で眺めていた2人が光太郎に襲い掛からないかと手に白銀の剣を顕現させ、すぐにでも突撃する準備を整えていたがあっさりと姿を消した事に拍子抜けしてしまう。が、おかげで横取りされずに済んだという安心感の方が大きい。

「そうだよな。あの時と違って、もうお前には迷いはない。ああ、お前は自分で言った通り、『守る為に戦う』という考えを変えることなく、それどころかブレがなくなっただ」

ゴミが詰まったビニール袋を固結びし、ポンポンと片手で遊ぶアルスの口元を歪める。

出会った当初は自分の放った指摘に随分と動揺し、力を発揮できないまま潰れてしまっていたが、今見る限り間桐光太郎という男は迷いを乗り越え、さらなる力を手にした事が分かる。

それに、本来ならば殺す他ない相手を助けるといふどんでん返しを披露までして。

「ああそつだ。そういう相手じやなきや意味がない。お前が強ければ強いほど、倒した俺を誰も無視できなくなる。存在を認めざる得なくなる…」

それは誰に向けたのか。ゴミを一まとめにしたアルスは屋上から、自分と戦うに相応しい力を身に着けた光太郎を見る。

傷だらけでも、笑いながら家族と無事を喜び合う姿に、アルスの表情は一瞬別のものへと変わった。

ようやく倒すべき敵を見つけた事に高揚した笑いから、寂しさを目に潜めた微笑みに。

「…ま、今日は前祝いだ。あのファミレスのハンバーグ、何皿いけっかなあ〜」

クライス要塞の指令室にて、巨大モニターを眺めるジャーク將軍の

後方で片手を負傷したボスガンは跪き、今回の作戦失敗への弁明を始めていた。

「も、申し訳ありませんジャーク將軍！まさか間桐光太郎以外の者が仮面ライダーへと変身するという予想外の事が…しかし、あの男を追い詰めた事は間違いなく、次も同じく——」

「もうよい」

「なッ…」

もはや言い訳にも届かない説明を続けたボスガンの言葉をジャーク將軍は一言で遮る。もはや、自ら前線に出てまで失敗した自身は今まで以上の罰を受けるのかと最悪の予感を募らせるボスガンへと振り返るジャーク將軍の表情は、何も無い。その予感とは別のものがあった。

作戦失敗による怒りは無い。無言で自分を見つめる黄金の將軍は、ゆつくりとその重い口を開いた。

「此度は災難で合ったなボスガン。今は傷を癒し、命を落とした怪魔獣人達に手向けの華を添えるがいい」

「はっ？」

なぜ、ジャーク將軍が怒りを向けるとはまるで逆に、自身の身を案じているのか、ボスガンには理解できない。身に覚えのない慈しみには、怒りを向けられる以上の恐ろしさと不気味さがある。

「じゃ、ジャーク將軍！なぜ、今回に限り私めへのお咎めが…」

「当然であろう。今回に限りそちへの罰はないものとする。そちは、あのジュピトルスに利用されたに過ぎないのだからな」

「なッ——！？」

なぜ、この要塞から消えたジュピトルスの名が出てくるのかと、ボスガンの背中に嫌な汗が流れる。確かにジュピトルスとは今回で共謀は最後だという口約束の元、光太郎の弱点である家族の情報と引き換えに、最大の弱点であろうメドゥーサを人質にとるように依頼はした。

しかし、それはあくまでジュピトルスを利用する為。間桐光太郎が怪魔界へ出現した際にジュピトルスへとサイボーグ怪人の操縦方法を漏洩した疑いを逸らす為に、今回はジュピトルスとの縁を切つて捨てる為、そして自分の功績を得るための作戦だったのだ。

それが逆にジュピトルスに利用されるなど、ありえない事。そう信じて疑わないボスガンの心理を読み取ったのか、ジャーク將軍はボスガンが光太郎に攻撃を受け、引き下がってからジャーク將軍への謁見するまでに起きた一連の出来事を巨大モニターへと映し出した。

ボスガンは怒りに震えた。

ジュピトルスは確かにボスガンの要求通りにメドゥーサを浚ったのだろう。しかし、その先はまるで話が違ったのだ。

怪魔獣人達を倒した光太郎達に休む間を与えずにジュピトルスは2体の巨大生物を放ち、戦闘を開始した光景を目の当たりにしたボスガンは、ジャーク將軍の言った言葉の意味をようやく理解した。

ジュピトルスはボスガン達の戦いで疲弊した光太郎達を一気に叩く為に敢えて自分の提案を引き受けた。メドゥーサを人質に取ると了承したのも、間桐光太郎を精神的に追い詰める為。

利用したつもりが利用されていた。

ぶつけようのない怒りに駆られるボスガンに、さらなる追い打ちがジャーク將軍から放たれてしまう。

「そういうことだボスガンよ。今回そちは奴目にまんまと謀られたと

いう訳なのだ」

「そ、それは…」

「あの者は怪魔界きつての狡猾さを持つ策略家でもあった。あの者の狙いが見抜けぬうちは——」

「余に成り代わろうなど、夢として終わってしまうぞ?」

ボスガンの心臓が強く握られたような圧迫感が迫る。

なぜ、胸の内に秘めた自分の野望が將軍の耳に届いているのか。これは同じ隊長の者達にも、ジュピトルスにさえ明かしていないのだ。

思考がグルグルと渦を巻くボスガンは怒りが先立ち、ジャーク將軍の言葉に自身ですら驚く行動に移ってしまう。

「その貴族としての誇りと劍の腕を余は買っておる。しかし、余の上を目指すというのならばさらに器を持つよう精進するのだな。でなければ…そちは『間桐光太郎に言われたような存在』で終わるであろう」

「ッ!?!」

今でもそれは耳から離れない。あの、特殊能力に救われたに過ぎない間桐光太郎に言われた屈辱的な言葉…

『貴様は貴様の言う貴族でも何でもない…ただの卑怯者だツ!!』

頭の中で沁みついた侮辱。それを過らせた將軍の言葉を聞き、頭に血が上ったボスガンは腰に納めていた怪魔稲妻剣を一気に引き抜くが、柄を持つ右手に違和感を覚える。

(軽すぎる…)

剣特有の重さが全く感じられないボスガンは剣へと目を向ける。この日、何度目驚いたか自分でも分からない。ボスガンが知る中でも最高の切れ味と硬度を誇る怪魔稲妻剣。

自慢の剣が、真つ二つに折れてしまっていたのだ。

折れた刀身はヒュンヒュンと風切り音を立て宙を舞っており、ボスガンと離れた位置に落下。刃の表面に、言葉に出来ず驚愕するボスガンの姿がくつきりと映し出されていた。

「こ、これは…」

「言ったであろう。精進せよと」

ハっと、自分の横を通り過ぎ、部屋を後にしようとするジャーク将

く抱き上げた武が、現在彼女の私室へと運んでいる。

そして今回の戦いで恐らく一番疲労が溜まっているであろうメドゥーサを休ませるために、部屋の前まで光太郎が送迎すると申し入れ、メドゥーサも快諾。部屋まで肩を並べて移動していた訳だ。

部屋の前までたどり着き、ドアノブを握るメドゥーサを光太郎は呼び止める。

何であろうと光太郎の正面を向くメドゥーサが見上げた先の光太郎の顔は、神妙な面持ちで彼女から視線を逸らすことなく、ゆっくりと口を開けた。

「メドゥーサ…本当にゴメン」

「光太郎、もう大学での出来事は私の誤解で…」

「いや、その事じゃないんだ。一度、君に暴力を振るった事…」

「暴、力…?」

今まで光太郎に暴言を覚えきれない程ぶつけてきたメドゥーサではあるが、光太郎にそういった類を向けられたことはまるで覚えがない。顎に手を当てて思い当たる節を探るメドゥーサは、光太郎との亀裂が確かなものとなってしまった原因を思い出す。

桜が誘拐されたと知り、星騎士との闘いのダメージが抜けきれないまま向かおうとした光太郎をメドゥーサが止めようとした手を彼が強く叩いてしまった。

あれを暴力として扱ってしまうとは…どこまでも優しく、誰を傷つける事を恐れる人だと改めて思うメドゥーサは、ある事を思いつく。

このぐらい、構わないだろうと。

「そうですね。あれは少し堪えました色々」と

「ぐ…」

「ですので、少しばかりお返しをしても宜しいでしょうか？」

「…ああ、思いつきりやってくれ」

少し意地悪が過ぎただろうかとメドゥーサは両目を閉じて歯を食いしばる光太郎を見てクスリを笑ってしまう。身構える光太郎に対して、メドゥーサは両手をそつと彼の頬へと当てる。

（まさか頭突きとは…けど、あの時は手加減なんて出来なかったし、それぐらいは…）

彼女の細く冷たい手が両頬が掴まれた事から受けるであろう痛みを予測する光太郎だが、このままではメドゥーサにも痛みが伴ってしまう。なので他の方法を提案しようとしたが、それは叶わなかった。

光太郎の口が、柔らかく、暖かい何かに塞がれてしまったからだ。

時間して数秒か、もしくは数分だったかもしれない。

呼吸の方法すら忘れてしまう程の衝撃に固まってしまった光太郎から顔を離れたメドゥーサは、足早に離れると自室のドアを開き、半分顔を見せながら告げる。

「これでお相子ということにしましょう。では、お休みなさい」

それから10分後

「兄さん!?!どうしたんですか!?!何があつたんですか兄さーんツ!!?」

「もしや敵襲か!?!おのれどこから入り込んだのだ…!」

「メドゥーサツ!光太郎が部屋前で倒れて息してないんだけど何か知ってるかツ!?!」

メドゥーサの私室の前での大騒ぎ。

耳まで真っ赤に染まった光太郎を涙目となり懸命に揺さぶる桜と、敵の襲来だと思ひ腰に戦極ドライバーを当てた武は室内の搜索へと駆けまわり、慎二は扉を乱暴にノックしてメドゥーサに事の手がかりを聞こうとやつきになっていた。

とうのメドゥーサはというと、光太郎から離れ、扉を閉めた途端にベットへとダイブ。枕で顔を押し当てたまま身動きが取れないでいた。

(ダメ…こんな顔じゃ…部屋を出られない…)

自分でも把握できるほどに顔が熱く、そして緩み切った顔となっているに違いない。

こんな顔、見せる訳にはいかいがない。だから早く戻れと考えるほどに、自分が光太郎にしてしまった事が繰り返し脳裏に蘇るといふ悪循環。結局その日にメドゥーサは部屋から出ることは無かった。

こうして間桐家の一同は新たな局面を迎えながらも、以前の通り、もしくはそれ以上に騒がしいまま一日を終えたのであった。

「…チツ」

最悪な目覚めについ舌打ちするランサーはベット代わりであるソファーから起きると、カーテンの隙間から差し込む陽の光に思わず目を細める。小さく息を吐くと足元に広がる…というよりも散らかした衣類や資料を踏みつけながら洗面台へ。

ジャバジャバと蛇口から流れる冷水で顔を流し、タオルで拭うと再び広間へと移動すると室内をぐるりと見回す。

ランサーが滞在する場所は、つい数か月前まで自分のマスターを匿うために利用していた洋館と同じ作りである『双子館』と呼ばれる場所だ。

その名の通り同じ建物が冬木の新都と深山町にそれぞれ建っており、深山町の双子館は遠坂凜の住む館のすぐ近くにあるのだが、現在は魔術協会に譲渡されてしまった為、下手に利用が出来なくなってしまった。

そのため半ば放棄されていた東側と名付けられた双子館を使うよう管理人に言われたランサーが室内へ一歩踏み込んでみれば、館内は清潔を保っている。

どうやらあの弓兵が時間を見つけては清掃の為に足を運んでいるようであり、ご丁寧水道電気はもちろん、日持ちする数日分の食糧が備蓄されていた。

(これで酒でもありや文句なしなんだけどな)

口にくわえたタバコに火をつけるランサーは床に放った資料を拾い上げ、パラパラと捲るたびに目の鋭さが増していく。

先ほど夢に見た自身の『獲物』を思い出していく度に…

「……………凜」

「なによアーチャー？」

「…本当にこれは必要なことなのかね？」

「あ、当たり前でしょ…クツ…」

「ならばなぜそうも笑いを堪えているのか聞きたいものだな、マスター」

眉間に皺を寄せるアーチャーは自分の身に降りかかった不幸を笑う少女に不満を募らせながらも、言われるがままに従う己を呪う他ない。

「えつと…あまりに気しない方がいいよ…??」

「貴様は平気だとも言うつもりか、この状況を…?」

「ごめん…」

耳に響く心配の声に苛立ちを含め答えたアーチャーへと謝罪する間桐光太郎。光太郎自身も現在自分が置かれている状況には疑問しか残らず、巻き込まれてしまったアーチャーに心の中で謝り続けるしかない。

確かに変身した光太郎…仮面ライダーBLACKとアーチャーが額を密着させているというのは、明らかにおかしい状態なのだから。

なぜこのような羽目になったかという経緯は昨日の大海魔を消滅させた際に、光太郎とメドゥーサが宝具を使用した事だ。

現在では聖杯による召喚時の半分にも満たない魔力と戦闘能力を宿していなかったメドゥーサが一時的とは言え聖杯戦争時と同様：それ以上の魔力を発揮した可能性がある。

その謎を突き止めるためにまず光太郎の身体を調べなければならぬと躍起になったのは遠坂凜であったが、既にある程度の仮説を立てた人物が現れる。

先の海魔との闘いには参加こそしていなかったが、人避けの結界を展開し、戦いの一部始終を見守っていたメディアだ。

「恐らく、大聖杯に触れたことが原因でしょうね」

創世王を倒し、シャドームーンとの決着を付けた光太郎が最後の力を振り絞り破壊した大聖杯。

大聖杯を破壊した際に漏れた膨大過ぎる魔力とキングストーン。そしてクジラ怪人から託された生命の結晶によりサーヴァントであった者達は一個の命として再び世界へ根を下ろす事が出来た。

だが、ここである副作用が発生した。

魔力の海と化した大聖杯を破壊する為に、自らを火種として大聖杯に飛び込む形で触れた光太郎へ、僅かながら大聖杯の『残滓』が残ったのだ。

元々大聖杯の魔力により召喚、現界されていたサーヴァントとは契約とはまた違うレイライン：深層意識のさらに下で繋がっているとというのがメディアの見解である。

故に、レイラインを通じてキングストーンの力がサーヴァント側へと流れ、共鳴したことで魔力が爆発的に高まったとすれば過去に起きたアーチャーやメデューアが聖杯戦争時以上の力を一次的に有したと納得のできる意見だ。

そして光太郎はメドゥーサの宝具を投影とは別の形で複製し、その威力は倍以上とされている。

今後より厳しい闘いに備えていつでもあの力を出せるようにした方がいいだろうという凜の発案の元、放課後に衛宮邸の中庭で行われているのが、この『実験』である。

光太郎と同じ動き、近い距離を置けばラインが繋がり、魔力が高まるのではないかという可能性の元、凜は様々な手段を講じて光太郎とアーチャーを同調させようと試みる、のだが。

「だからと言ってああも密着したら心穏やかじゃないわね」

「頼むから直接言ってみてくれよ美綴」

縁側に並んで腰かける美綴綾子の率直な感想に、間桐慎二は米神を抑えながらも同意した。

慎二は綾子と約束通りになぜ、自分が仮面ライダーとなり、あのような連中と戦っていた理由を、桜や衛宮士郎、そして街の管理人である凜も交えて説明した。

まだ作り話の方が納得のいく途方もない内容であるが、先に実物を目にしてしまった綾子にはすんなりと受け入れてられている。そして話した内容はあくまで間桐家の者達が仮面ライダーであるということに焦点を置き、魔術や聖杯戦争に関しては詳しい話はしていない。

凜が『こちら側』を知ることが、それだけで何者かに狙われてしまうという可能性を考慮しての事であり、親友の命を守る為でもあった。

綾子も凜の判断は納得しており、お互いやりやすいだろうと笑って言う姿に、凜もつられて相変わらずねと微笑みを浮かべる。こうして理解者がいるだけでも、凜や魔術にかかわる者にとっては救いでもあるのだ。

が、そんな綺麗に収まりつつあった後に親友のあんな姿を見てしまうとうぐうの音もならない。

第3者から見れば罰ゲーム以外の何物でもないだろう。しかし、僅かな可能性があれば試してみなければ分からないという凜の強弁に、アーチャーと光太郎は溜息交じりに従っている。

「はあ…私たちの世界を救ったヒーローさんになんて事させてんのよアイツは…」

「…美綴。悪いけど、その肩書はあいつの前で言うのは止めてもらえるか?」

「え?だって、光太郎さんは…」

「確かに傍からみればそうなんだろうね。けど、アイツはそう呼ばれる為に戦ってきたんじゃない。そうせざる得ない状況と、性格だっただけなんだ」

「…そっか」

綾子には間桐家の人間が、メドゥーサとガロニアを除き変身できるという説明はしたが、光太郎がなぜ変身できるようになった過去には触れていない。

彼の過去は、例え自分達の事情を理解してくれた者であっても聞かせたくない。それが、変身した自分を間桐慎二と呼んでくれた綾子であつても。

そして光太郎という人物の誤解を解きたいという思いもあつた。

光太郎の戦歴を見れば、確かに英雄とも呼ばれるような存在なのだろう。だが、決して彼は領かない。敵とは言え、数多くの敵をその手で殺し、親友を手にかけてまで戦い抜いた光太郎には、その名は汚名に他ならない。

「だから、変な色眼鏡でアイツを見ないでこれまで通りにしてくれろと助かる」

「フフツ…」

「なんだよ…」

「慎二って、本当に家族が大好きなのね。昔から」

「ハア？なんでそんな結論にいたる訳？」

「あーあ、私もこんな年上思いの弟が欲しかったな」

「既にいるだろお前にも弟が。ていうかさっきの話まだ終わってないぞー！」

何か弱みを握り、得意顔となった綾子とムキになった慎二のやり取りは、お茶を運んできた桜と家主である土郎現れるまで続いていた。

下らないやり取りの中でも、慎二は綾子に感謝していた。こうしてじゃれ合いにする事で、光太郎の話を逸らしてくれた事に。

一方、衛宮邸の離れでは、ベットに横たわるメドゥーサへメディアが簡易的な診断とカウンセリングを行っていた。

先日の戦いの後に魔力切れを起こしたメドゥーサは翌日に驚異的な回復を見せたが、枯渴した魔力がそう簡単に戻るわけがないと踏んだメディアがこうして調べるに至っている。

「じゃあ、今日も朝食は以前と変わらない量を食べてきたということね」

「は、はい。あの…その質問は必要なのでしょうか？」

「知っていて損な情報なんてないわ。私たちのように、突然現世に留まるようになった英霊は猶更ね」

「はい…」

そう言われてしまえば何も言い返せないメドゥーサの横で、メデアはサラサラと手に持った大学ノートにペンを走らせていく。眼鏡の位置を直してブツブツと呟くメデアの表情は真剣そのものだ。

メデアの言う通り、メドゥーサ達サーヴァントが命を得てこの世界に留まっているのは、正しく奇跡そのものだ。だからこそ不安に思ってしまう事がある。

この命は、人間と同じように終わってくれるものであるのかと。

魔力を必要以上に失った場合。逆に過剰な魔力を体内に宿してしまった場合。そして今回のように、光太郎と共に強大な魔力を持って宝具を使用した場合。

もし、自分達の命が削られてしまう可能性が1パーセントでもあるとするならば、メデアは全力で回避する方法を見出そうとする。

愛する男性と共に過ごす幸福な時間を過ごす裏で、メデアは不安に思ってしまう。夫である宗一郎と共に生きる時間が、ある日突然終わりを告げてしまうのではないかと。

だからこそメデアは自分達に害が及ばないような戦いには積極的に参加せず、最低限な協力しか申し出ない。彼女にとっては、宗一郎がいる世界が全てだからだ。

今メドゥーサの診察を行っているのも、以前自分も体験した光太郎との同調による魔力増強が起きた自身への影響を知る為。影響が、自

分の命にどう左右されるかを知る為。

周りにどう言われようが、彼女は自分の都合を優先させる。自分が今掴んだ世界を続かせる為にも。

メドゥーサには否定できない。彼女が抱く思いは、痛いほど理解できる。昨日までのような亀裂も生じていた光太郎とは、共に…可能ならば彼の命尽きるその時まで一緒にいたい。

だからこそ、こうしてメデイアの診断には応じ、自分の身体に起きた事を理解しておきたい。

光太郎と共に、生きていきたいから。

「さて、それくらいにして次の実験に移るわよ！」

「絶対…楽しんでいるよね遠坂さん」

「今更…何を言っている…」

両手を膝につく光太郎とアーチャーに肉体以上に精神的に疲労が絶えずにいた。先ほどの額を合わせる他にも長時間手を繋ぐ、一緒にベットで横になるなど一部の人間にしか需要がない内容の実験が繰り返され、2人の精神はゴリゴリと削り取られていく一方。しかし、こんなものはまだ序の口なのである。

「取りあえず、これを一通り終わるまでは今日は終わらないわよ」

2人の前へ凜が翳したりリストを見て本人だけではなく、見守ってい

た慎二たちも戦慄する。

パールツク、二人羽織、二人三脚、組体操、カラオケのデュエット、ツイスターゲーム、シンクロロナイズドスイミング、卓球・テニス・エアホッケーの無限ラリー、社交ダンス全般、手漕ぎボート…

様々なジャンルで二人一組による催し物が描かれたリストを手に、口を三日月に吊り上げるアカイアクマの姿に恐怖する光太郎とアーチャー。仮面の下で蒼白になっているであろう義兄を救う為にも、そろそろ姉の悪ふざけに終止符を打とうと背後に黒いオーラを纏わせた桜が立ち上がると同じタイミングで呼び鈴が玄関より響く。

誰であろうかと士郎が玄関へと向かい、引き戸を開けると青い男が手に大量の土産を持ち現れた。

「よう、邪魔するぜえ」

ランサーの来訪により、凜の企てた実験は取り止めとなった事で胸を撫でおろす光太郎とアーチャーの2人。ランサーが持ち込んだ海外の置物や魔除けの悍ましい仮面。それに見たこともない食材に目を鋭くする士郎と桜を他所に、客間へと訪れたランサーと凜は対面する形で座る。同室を希望した光太郎とアーチャー以外は、メディア達にいる離れへと向かっていった。

「随分と楽しそうにしてるとこ、邪魔してすまねえな」

「いいのよ。もともと貴方との話をするまでの時間潰しでもあったし」

話の邪魔にならないよう客間の隅に立つ2人としては聞き捨てならない凜の発言に物申したいところではあるが、ランサーの話の方が先決だ。

アーチャーとしても、凜と自分の危機を救ってくれたランサーの依頼を無碍にはできない。

「さっそく話を進めるぜ。嬢ちゃん、この女を知ってるか」

胸ポケットから取り出した一枚の写真を取り出し、テーブルを滑らせると凜は自分に向かってくる写真を押さえつけ、ゆっくりと捲る。捲りながらもランサーの顔を伺うが、彼の眼は戦いの最中に見せたような好戦的なものではなく、さらに鋭さを増している。

これは余程の事だと安請け合いました事に後悔しながらも写真に写る人物を目にした途端、彼女の目も同様に鋭いものへと変わった。

「…質問を質問で返すのはマナー違反だと十分に分かっているつもりだけど…なぜ、貴方が彼女を追っているのかしら?」

「仕事上と、俺の個人的な都合でそいつを殺さなきゃならん。それだけの事だ」

「…そう」

ランサーの物騒な物言いに、さも当然と頷く凜の反応を見た光太郎とアーチャーは目を合わせると、その視線は凜へと注がれた。

写真に写る金髪の少女。見た目からして桜と同年代と言ったところだろう。しかし、カメラへと視線を向けた彼女の笑みはどこか歪で、瞳は濁った光を反射させている。

「…彼女の名前は、エミリア・シユミット。魔術師よ」

「その危険な考えと行動ゆえに魔術協会から永久追放されて、死んだはずのね」

第81話

エミリア・シユミット

その名を遠坂凜が聞いたのは今から数年前。まだ中学生になり立ての凜が自分の後見人であり、兄弟子である神父から八極拳の指導を受けていた時だ。

聖堂教会の『お使い』を終え、帰国した神父は自分の不在中に怠けていなかったか確かめてやろうと、ややハードな修練を終えた凜が教会の中庭でゼエゼエと息を切らせる中、彼女とは逆に息一つ乱す様子のない神父のニヤケ面が気に食わずついボソリとこの麻婆神父…と小声が聞こえてしまったのだろう。

まだ軽口が叩ける元気があるうちは動けるだろう？と第2ラウンド予告と共に構えを見た凜は急ぎ話題をすり替える為、今回の外出について聞くことにした。

「こ、今回は随分と長かったのね」

「なんだ、心細かったとしても言うつもりかね？」

「天地がひっくり返ったってそんな事ありえないわ。いつもだったら2、3日でお勤めを終えてくるアンタにしては随分と長かったなと思っただけ」

「確かに、君の言う通り長く滞在しただろう。だが、生憎私への依頼は神父不在となった教会の管理を一時的に任されていたに過ぎない。その教会を任されていた本来の神父が遺体となってしまったては、放つてはおけまい」

話題を逸らす事には成功したが、それは決して穏やかな代理業務とは程遠い、血生臭い展開であった。凜の目つきが変わった様子に、先ほどは違った微笑みを見せる神父はカソックを纏うと、教会の中へ凜

を誘うように扉を開いた。

「君もいずれは倫敦の時計塔を目指すというのであれば、知って損はない話だろう。なに、『悪い例』とはどこにでも転がっている話だ」

凜の兄弟子：言峰綺礼がとある国に呼ばれたのは、聖堂教会に属する教会で一時的に代理業務を行うという、至極簡単な依頼であった。訪れる信仰者たちのためにミサを開き、自身の罪を嘆き、神へ許しを乞う者を導くという神父本来の務めを果たしていた。

だがそれは、彼の『本来受け持つ仕事』が既に解決してしまったのであった。

「つまり…『代行者』として向かったつもりが、着いた時には既に事が解決していたわけか」

「そういうことになる。そして天に召された神父の代わりを手配する期間、私が代行を務めていたという事だ」

「…アンタが呼ばれる事はそうとうまずい相手だったの？」

「私の実力を買ってくれるとはありがたいが、特段手強い相手であったのではない。相手の方が上手であっただけの話だ」

「その、相手というのが…」

「魔術師エミリア・シュミット。外見の年齢だけで言えば、同年代に当たるところだ」

「外見…？」

場所を礼拝堂へと移した凜は綺礼の言葉に眉をひそめる。魔術により肉体の成長を遅らせるなどという話は良く聞くが、そんな事は人

それぞれであり、魔術師も然りだ。その魔術師である女性が自らの意思で自身を若く見せようとするならば、こちらが指摘する権利が：それ以上にとやかく言う筋合いもない。しかし、綺礼がわざわざ口に出すという事は何か裏があるのかと推測する凜へ、神父は写真付きの書類を突き出した。

「ちよつと……こういうのって誰かに見せたらまずいんじゃないの？」

「既に事の済んだ案件だ。君がこの資料の内容を誰かまわすに吹聴するというのがならば、話は別だが？」

魔術師ならば最低限の常識である秘匿をなんだと思っっているんだと嫌な笑いを浮かべる綺礼の手から資料を乱暴に抜き取った凜が最初の注目したのは、件の魔術師エミリア・シュミットの顔写真だ。

絹のようにきめ細かく、美しい金髪に整った顔立ち。十分に美人だと言える条件を揃っているのだが、そんな印象を消してしまう程に彼女の目はこちらを萎縮させるものだった。

見た者を飲み込んでしまうと思わせるその目は何処までも暗く、濁った光を見せるエミリアの目は写真に写っているだけでも身を竦ませる。さらに写真の中の彼女は笑っている。しかし、決して柔和な表情ではなく、狙っていた獲物を見つけて狂喜き、追い詰めていく悪魔を連想させる、悍ましい表情。

背筋に冷たいものが走った凜は写真に移るエミリアと視線を合わせぬよう書類へ目を走らせるが、読み進めていくうちに、彼女が孕んでいた異常が次々と浮き彫りとなっていく。

魔術師の家系で4代目に当たるエミリアは特別抜きで才能を持ち合わせている訳ではなかった。その代わり、彼女の家系にある魔術系統とは別である『転換』の魔術を食るように学び、当主である父親との間に確執が深まっていったが、それはあっけなく終わりを告げる。

エミリアは父親を殺害した上に魔術刻印を自身ではなく、あろう事か家畜の体内へと『転位』させて姿を消したのだ。

当確を現さなかったものの、代を重ね、次代へと託すべく魔術刻印を、魔術師としての家系を捨てたエミリアが次に起こしたのは、連続殺人。それも、自分と同じ年代の少女のみを狙ったの犯行だった。

「……………」

「ちなみにだ。その写真に写っているのはエミリア・シユミット本来の顔ではない」

「ほんらい、の…」

「言っただろう？ 外見は君と同じ年頃だと。だが、最初に彼女が殺人を犯してから、数十年が経過している」

「…」

「はたして、その顔の持ち主は『何人目』であつたのだろうか」

綺礼の言葉を聞いた凜は資料の頭から再度読み直した。

見落としていたがエミリア・シユミットが誕生したのは、今から50年以上前。父親から始まった殺人は最初こそ当時は大事件ではあつたが、年が経つにつれてその動向は世間では目に止まらないもの。事故や神隠しを隠れ蓑にした誘拐へと手法が変わっていく。

そして綺礼の言った『何人目』という言葉の意味。

さらに読み進めて、彼女が行つた数々の殺人の原因を理解してしまつた凜は、資料を思わず握り潰したい衝動に駆られてしまつた。

「つまりこのエミリアは…自分の理想の姿を作り出すためだけに…無関係の人間から『部品』を奪う為だけに、殺し続けたって事？」

自身の言つた言葉に吐き気すら覚える凜へ綺礼は答ええない。つま

り、肯定という事だ。

何をきっかけにエミリアが凶行に走ったかは定かではない。

他人の肉体を自身に移植する際に必ず拒絶反応が起こる。そこでエミリアは転換の魔術を応用した。例えば、手首を移植する際に異なる神経や細胞組織を無理なく接続できるよう『最初から馴染むもの』として接続部分を転換すれば、拒絶反応はおこらず、最初から自身の肉体であつたかのように馴染ませることができる。

本来ならば魔力、靈魂、精神といったものを別のモノに移して定着させる魔術をエミリアは別人の肉体を自分の肉体を移植し、本来の身体であるように扱えるよう自分自身を転換してしまったのだ。

そして自分が理想とする顔を手に入れえる為に殺した。気に入った指輪が似合う指を手に入れる為に殺した。陽の光に当てられて白く輝くような肌を手に入れる為に殺した。

魔術師にとって最高最後の目的であるはずの『根源』に辿り着くという指針すら外れて、彼女は殺し続けた。

無論、自身の魔術の秘匿すらせず殺人を繰り返す彼女を魔術協会は認めるはずがない。いずれ時計塔へと進むべく父親が便宜を図らせていたが全てを白紙に戻し、シュミット家を完全に除籍した上でエミリアの処分を決定した。

しかし、次々を顔を変える彼女の足取りを追うのは難航する。

それもエミリアが魔術師の追手から逃れる為ではなく、単により自分を美しく見せる為だけに殺人を犯し、その遺体すら予備の部品として保管し続けていたからだ。世間では行方不明となっても遺体が見つからず、手がかりを見つげるところから始めなければならない。

こうしたイタチごっこが数十年繰り返される中、エミリアの足取り

があつさりと掴めたのは、他でもない聖堂教会からの伝達であつた。

エミリア・シュミットが死徒と手を組んだのだと。

肉体を常に瑞々しい姿で保つ事ができても、寿命までは保てない。美しくあり続ける為に老いゆくのではないかと考えたエミリアは永遠の命を手に入れる為、そして肉体を最高の状態で保つ為に吸血鬼となることを選択した。

死徒と手を結び、あまつさえ死徒になろうとする者を生かしておく理由はないという聖堂教会の伝達に魔術協会は冷戦状態にある教会へ借りを作つてしまふという不名誉に耐えながらも、エミリアを死徒と同列と考えて処分するよう依頼。

そしてエミリアは吸血鬼となる事無く、聖堂教会の実働隊、代行者たちによつて殺されたのであつた。

「死徒と魔術師が手を組んだ……だけにしてはアンタを呼ぶなんて、現地の人達は余程人手不足だつたつてこと？」

「それもあるが、単に数があちらの方が上だつたに過ぎない。幸運にもエミリア・シュミットは自分の『予備』を大量に抱えていた。それを元にリビングゲッドを作り上げていたのだろう。そして彼女は今まで立ち寄つた土地の魔術師たちから『魔術回路』を奪い、自身に転移させ、本来の持ち主たちが培つた魔術を用いて対抗したようだ」

「…下劣の極みね」

「だが、あくまで使えるというだけで極めた訳ではない。例え二重属性となろうが、それぞれの手から別々の魔術を使えようが、ただそれだけの事。私の到着を待たずに殺されたのも、所詮はその程度だつたにすぎないという事だ」

「……………」

つまらなそうに答える綺礼だったが、凜は未だエミリアに対する嫌悪感は消えない。人間としても魔術師としても、彼女の犯した罪は決して許される事ではない。

魔術師にとつて自分自身、そして一族の誇り・願いである血統を捨て、根源にすら見向きもせず、自分を作り変えていくエミリアには怒りすら抱くほどだ。

そんな凜に対して、綺礼は資料を取り上げると丸めてカソツクのポケットへとねじ込んでしまう。

「言ったであろう。何事にも悪い例というのはある。世界中にいる魔術師全てが、同じ願いを抱いているという訳ではない。叶いもしない夢を追う輩もいるぐらいなのだからな」

最後はまるでそんな人物を見たような言い方をする綺礼に対して、凜は最後の質問をぶつけてみる。もうこれで、エミリアに対する案件を知る必要すらないだろうからと。

「アンタは……どう思った訳？このエミリアっていう魔術師を」

「自分の欲望に従い、正直に生きた、という事だろう。だからこそ——」

「彼女とはじっくりと話を聞いた後に処分してみたかったがね」

こちらに顔を見せてはいなかったが、恐らくは笑っていたのだろう。なぜ、魔術師と人間のルールからも外れたエミリアに対して綺礼があのような発言をしたのか、凜には理解できなかった。

「…私が知っているのは、こんなところよ」

凜の説明に、エミリアの名を初めて知る者達は黙る他ない。

まさか、人間でありながら道を外れた者が存在するなど、光太郎には考えられなかった。しかし、ここでランサーが凜に向けて言った言葉への疑問が残る。ランサーは彼女を殺さなければならぬと言った。だが、凜の話を聞く限り、凜は直接見たわけではないのだろうか、エミリアという人間は既に死んでいる。

ならば、導き出される答えは…

「彼女、生きていたのね」

「残念ながらな」

あっさりと返すランサーの解答は、戦慄すべき内容だった。忌むべき魔術師が生きている。さらに言えば、ランサーが彼女を追っているという事は、彼が今身を寄せている場所と大いに関係しているはずだと、光太郎はランサーへと視線を向ける。

光太郎の視線に気が付いたランサーは、目の前に置かれた湯呑を揺らしながら出た言葉に、一同は驚きを重ねるしかなかった。

「…黒い兄ちゃんの考えてる通りだ。エミリアは『組織』に身を寄せていた。それも、怪人を生み出すプラントにな」

「なら、エミリアは人間だけじゃ飽き足らず怪人の身体を…?」

「そういうこった。そして、そのエミリアが日本に潜伏してるっつー情報が入ったんで、俺がここにいる」

「最悪だわ…」

誰しも凜の眩きに同意する他ないだろう。もしや先日この街にやって来た教会の査察官が何かと異常は起きてないかと尋ねてきたのはこの件だったのかも知れない。再び頭痛の種が舞い降りてきてしまった凜に変わり、彼女の傍らに立っていたアーチャーが別の疑問をぶつける。

「ランサー、先ほど貴様は仕事と個人的な都合でエミリア・シュミットを殺すと言っていた。何かあったのか、エミリアとの間に」

「さてな、今の時代に取り残されてから、このかた女との関係に絶えない日々なんでね。その一つとでも考えといてくれや」

湯呑を飲み干したランサーはアーチャーの問いをはぐらかせると立ち上がり、首元を手で押さえゴキゴキと鳴らす。

「どうやら嬢ちゃんたちはエミリアの場所に見当なかったみたいだし、この辺で失礼しとくぜ。何かわかったら連絡頼むぜ」

懐から取り出したメモ帳にサラサラと連絡先である携帯電話の番号を書き込み、食卓へ静かに置くと、手をヒラヒラと振って玄関へと向かっていった。静かに開閉される引き戸の音を、居間にいる光太郎達は黙って聞いている事しかできなかった。

衛宮邸を離れていくランサーは、別のポケットから何かを取り出す。それは、ホルダーに纏められた数本の鍵であり、一本一本に持ち主のイニシヤルであろうアルファベット文字が刻まれている。

『へっへっへ…今回も俺の総取りつてとこだな』

『てんめえ、またイカサマ使いやがったな!』

『いえ、これは彼の手を見抜けなかった我々の失態でもあります』

『だから、次は徹底的に狙ってやろうじゃないの』

『それはいい。今度は僕も参加していいかな?』

『構わねえが…使うんじゃないぞあの手を』

『アハハ…こんな事に使ってはバチが当たるって』

思い出すのは、戦いの中にあっただけありふれて、当たり前になりつつあった者達との日常。

だが、もう永遠に帰ってこないと理解しているランサーは再び鍵の束をポケットへ収納し、当面の間住まいとなる館へと足を進めるのであった。

『ウフフフ…ご協力感謝しますわあ』

「…私は上の命令に従っているに過ぎない。邪魔をしなければ、それでいい」

『えー、それだとおんぶに抱っこ言うかー。私何もしてないみたいじゃないですかー』

「なにもしなくていいのだ。私の作戦が終わるまで、身を隠しているがいい」

照明一つない洋館の中、2つの声が木霊する。

片や少女ではあるのだが、その声はどこか機械じみたようであり、室内で反響する。低い声を持つ男性は少女の申し入れを断ると窓際へと移動。月明かりで照らされたその姿は老人であり、長い白鬚を蓄えた口元へ丁寧に皮を剥いた果物を運んでいく。

『ふ、フフフフフ…』

男が無造作に捨てる黄色い皮を見る少女は口元をつり上げ、濁った瞳で協力者を見つめるのであった。

第82話

「ふう…」

衛宮邸を立ち去った後、間桐光太郎は縁側に座ると小さく息を吐き、先ほどランサーが遠坂凜へ、冬木の管理人として尋ねた内容を思い返していた。

人間でありながら自身を理想の姿へと形作るべく、多くの人間を：自分の家族すら犠牲にした魔術師の行方。聖堂教会の代行者たちによって殺されたはずの魔術師エミリア・シュミットを探すというランサーは凜が彼女が過去に多くの殺人を重ねた上で殺されたという事実しか知らないと聞くと、その場を後にする。

もし、情報を耳にしたら自分に知らせるようにと立ち上がり、衛宮邸を離れるランサーへ光太郎は呼び掛ける。

『教えてくれ。そのエミリアという人と、一体なにが…いや、『なにを』されたんだ？』

『さっき言った通り、仕事の一環だよ。ちよいとばかり俺の都合も含めてだけどな』

『しかし…』

『悪いがよ。この件に関しちや俺一人で片づけたいんだわ。んじやな』

振り返らないまま、光太郎の質問に答えるランサーはいつも通りだった。そのいつも通りが、光太郎の胸中を不安にさせる。凜から告げられた敵の情報を聞くランサーは、以前間桐家に訪れた際にゴルゴムについての説明を欠伸を噛みしめながらも適格な質問を上げ、しっかりと情報の整理を行っていた。

だが今回はそんな様子は一切なく、無表情で瞬きすら許さないように凜を見つめて傍聴していた。凜の表情を見て、自分に対して隠し事

…エミリアの情報をごまかしてないのかと見定めるような視線に気づいているのは、自分と恐らく――

「奴にも困ったものだ」

そう言って自分の背後に立つ黒いワイシャツにズボンを纏ったアーチャーが呆れたと言わんばかりに呟き、自分を見上げる光太郎にかまわず語り続けた。

「エミリア・シュミットという魔術師と奴の間にどのような因縁があるかは知らんだが、確実に何かがあるだろう」

「やっぱり、そう思うかい？」

「そして、我々に手出しをさせぬよう…いや、遠ざけるよう凜や私、そしてお前にしか話をしなかったかも知れんな」

「……………」

光太郎の質問に見向きもせず答えたランサーの態度は、まさにそれだった。光太郎達に…いや、凜にエミリアの情報を求めたが、それ以上の事を彼は望まなかった。確かに彼の性格なら、獲物は自分で仕留めなければ気が済まないのだろう。

だが、光太郎は他にも自分達へ情報提供以外に頼らなかつた理由があるのではないかと考えるが、それを確認する術はない。

そして話をした相手も、変にランサーの事情に深入りせず、冷静に判断できる人物を選んでの事だったのろう。話を聞いていなかった者達の中には、そんな奴を放っていられるかと言いつつ少年がいたかも知れない。

「しかし参ったものだ。あのランサーが凜に頼りすぎるえないという事は、エミリア・シュミットは余程用意周到であり、予測の付かない方法で奴の目を掻い潜ってきた事になる」

「ああ。そして、この街で魔術師に関する事情に一番詳しい遠坂さん

を訪ねてきた、という事は……」

エミリアは、冬木にいる。

「……問題は、エミリアがいつ動き出すかだ」

「話を聞く限り、彼女は自分の肉体を一部分変える為だけに、対象となる女性から身体の一部を奪い、殺害する。そんな事、絶対に許せない！」

拳を手に打ち付ける光太郎。エミリアを追うランサーは1人で事を済ませようとするだろうが、危険人物が冬木に身を潜めているのであれば何時、誰が狙われてもおかしくない。

「ランサーには悪いが、こちらも独自に捜させてもらおう。事態は、もはや奴個人の都合で片づけられんだろう」

「そうだな……どうにかエミリアを早く見つけないと」

「……一応聞いておくが、相手はゴルゴムやクライシスではない。異常者ではなるが正真正銘、ただの人間だぞ？」

アーチャーの試すような発言に、立ち上がった光太郎は自分よりもやや高めであるアーチャーの双眼をしっかりと捉え、言い放った。

「例え人間であろうとも、自分の為に誰かを犠牲にする存在を放ってはおけない。それが人間であろうとも、そうでなくても、俺は止めて見せる」

今回の相手は、クライシスが生み出した怪人やロボットではない。アーチャーの言う通り、ただの人間だ。光太郎はそれまで、自分が力を振るう対象が怪人であるから戦えたという意識があった。しかし、

聖杯戦争開始以前にギルガメッシュから指摘された『相手は如何に力を持っていようが、姿形は人間だ』という言葉に迷いが生じてしまった。

過去の英傑と言えど姿が人間である相手に力を振るう。それでは、人間を襲う怪人と同じなのではないかと。迷いを持ったまま聖杯戦争最初の戦いがいざ始まろうとした際に、相手からの檄が飛んだ。

『お前さんがここに居るのはそうまでしなくちやならない事がある』

ランサーにそう言われた時、光太郎の覚悟は決まった。

無論、仮面ライダーとなつて人間に力を振るう事は避けたい。それでも、この力によつてエミリアの凶行を止めることが出来るのであれば、迷いなく力を発揮する。それが力を持つてしまった自分出来ることなのだからと。

「なら、私はしばし街の監視を強めるとしよう」

「え……？」

「凜の頭痛の種は、多くない方が良いのでな」

目を瞑り、ニヒルに口元を歪めるアーチャーは踵を返し、玄関へと向かう。段々と小さくなる足音を聞きながら、光太郎は再び縁側へと腰かける。

「じゃあ、頼りにさせて貰おう」

おそらく、何かあれば連絡をしてくれるはずだ。肝心な伝えるという言葉が抜けてしまつてはいるが、彼の言い方ならば絶対に自分へ情報を伝えてくれる。根拠がないが光太郎にはそう思つてしまつた。

「なら、俺は出来る事を考えなきゃな…」

自分の掌を見つめる光太郎は、ランサーが訪問するまでの間に凜によって強制された実験を思い出す。

あの大海魔を倒した力を引き出す実験は、当初メドゥーサと行う予定であったが『あの事件』以来、別の意味で気まづくなってしまった2人は目を合わすどころか、指先が触れるだけでお互い顔が真っ赤になるという非常事態に見舞われていた。

これには慎二達も呆れてしまい、メドゥーサは診察のみとなりアーチャーとの実験という流れとなったのだ。

メディアの理論上、大聖杯の欠片を体内に有する光太郎ならばこの世界に新生したサーヴァント全員と力を共有できるのだが、アーチャーとの実験ではまるで自分と繋がる様子は見られず、凜の思い付きによりお互いに傷を負うだけで終わってしまったている。

(力が繋がる為に、何か足りなかった。気持ちの統一…だけでは、あの力は発揮できないのか?)

何が足りなかったのだろうと腕を組みうねる光太郎に、離れの方から聞こえる足音が耳へと届く。この歩幅から言って、家主である衛宮士郎だろう。

「あれ、光太郎さんだけですか?」

「ああ、アーチャーは用事があって外に。それにしても衛宮君、ずいぶんな大荷物だね」

「ハハハ、遠坂から久々に課題出されてしまったもんで…」

見れば現れた赤毛の少年は段ボールを抱えており、中身は全て同じガラス製のランプ。これを以前のように砕かぬよう強化して来いと云った凜の手には士郎以外の人数分用意された紅茶の乗ったトレイ。どうやら女性陣のみでお茶会を開くらしい。

お茶請けに釘付けになっているセイバーと桜の様子を見て、ここには味方がいないと悟った士郎は凜から託されたランプを持って離れを去って今にいたるといふ。ちなみに慎二と綾子に関してはいつの間にかいなくなっていたといふ。どうにも綾子が「この前の穴埋め」と言い出して強引に慎二を連れ出したとか。

「俺も強化は久々なんで集中できる場所でやろうと…」

顎で示したのは士郎の工房とも言うべき土蔵だ。そう言えば彼の魔術をまともに見ていなかったなと興味を持った光太郎は同行を申し出ると、そんなに面白いものではないですよ？と苦笑する士郎についていくのであった。

重々しい扉を開けた先には、修理途中であろう様々な器具が数多く並んでいるが、不思議と気持ちを落ち着かせる空気が漂っている。なるほど、ここならば集中して作業に没頭できるのであろうと光太郎が中央にあるブルーシートへと目を向けると士郎が座り込み、さっそくランプへと手を伸ばしていた。

呼吸を整え、目を閉じたままランプへと手を翳した士郎は自身の中のスイッチを切り替える言葉を口にした。

「——同調、開始」

士郎の手が淡く光り、彼の魔術回路を経由した魔力がランプへと注がれていく。対象であるランプの構造を把握し、ガラスの硬度・照度をより安定させ、構成する物体を補強するが——

「あっ」

ガラス製のランプはあっけなく砕け散ってしまった。

(ずっと投影ばかりやってたから力の加減が…恥ずかしいところ見られちゃったな)

毒ガス衛星の爆弾を止めた際には強化の必要はなく基本骨子の解明までの行程で済んでいたが、最後の補強の部分で魔力の注入が行き過ぎてしまったようだ。以前はすんなりと上手くいったのと同じようにと見学者である光太郎にガラスの破片が飛んでいないかと確認しようとしたが…

「…衛宮君」

「すみません。破片とか、飛んでませんでしたか？」

「いや、それよりも今、魔術を発動させる前に、なんて…？」

「え…？」

「ごめん、衛宮君の言葉が、どうにも印象に残ったものだからさ」

「ああ、これは俺のスイッチみたいなので…」

光太郎の関心は、砕けたランプではなく士郎が口にした詠唱にあった。確かに士郎の詠唱は凜たち正統な魔術師と違うが、自身のスイッチを入れる為の言葉という意味では特段珍しいことではない。それでも自分の詠唱を不思議と思う光太郎の顔を見て、士郎はかつて養父に魔術を習う直前の出来事を光太郎に語ることにした。

長い時間をかけて頼み続けた魔術を教えて欲しいという士郎に根付けた養父から念願の魔術を教わる事となったあの日。士郎はまですイメージを描くための自己暗示。自分を凌駕する、スイッチとなる為の言葉を準備するといいと養父に聞かされた士郎は、魔術の説明の中で出てきたとある言葉が腑に落ちた。

『トレース？』

『モノをなぞるって意味さ。真似るとか、複製という意味もあるかな

？』

『ボタンを押すみたい…スイッチを入れるみたい…自分を、ト
レースする…』

以来、士郎は強化魔術・投影魔術を行う際でも同じ自己暗示スイッチを用いている。とくに変哲もないが、自分を別の自分へと切り替える為の言葉。

ある意味、光太郎の使う『変身』と近い部分があるかもしれないと笑いながら言う士郎だったが、とうの光太郎本人は士郎の説明を聞いた後、顎に手を当ててブツブツと呟いていた。

「そうか…それならもしかして…」

「あ、あの…光太郎さん？」

恐る恐る尋ねてみるとハツとした光太郎は急ぎ自分の質問に答え
てくれた少年の両肩を掴むと、真剣な眼差しで戸惑う士郎へと頼み込
んだ。

「衛宮君、君がその魔術を発動させる時の状況を、詳しく教えてくれ
！」

「え…？」

エミリアの件についてランサーが尋ねてから数日後。

実は体よく士郎を離れから遠ざけた凜からエミリアについての説
明を受けた桜とメドゥーサは後日慎二へと報告。また面倒な事が起
きたと額に手を当てる慎二であったが、話を聞いて以降新聞を注意深

く読み漁り、学校内外にいる女友達全員に何か変わったことは無いかと聞きまわっている。その光景を見て綾子の目が妙に鋭くなっていたというのは全くの余談である。

桜も負けじと最近新たな魔術：指輪から作り出したプラモンスターなる使い魔を使役して街の情報収集を、メドゥーサも開いている時間を利用して街の見回りを行っている。

こうしてそれぞれが動き出す中で本命のエミリアとは別に、珍妙な事件が起こり始めていた。

「バナナ…?」

食卓に座り、その日の朝刊を読む慎二の前にハムエッグとトーストを置くガロニアが興味深そうにのぞき込んできた。

「バナナがどうかしたのですか?」

「新都の銀行の金庫から挙って現金がなくなってる記事なんだけどね…全開になった金庫の前にバナナの皮が捨ててあったんだと」

「犯人が、その場で食べていったものなのでしょうか?」

「随分と余裕ある犯人だねそれだと」

記事によれば、金庫は電子ロック以外にも最後に鍵によって解錠されるものであったらしい。今回の事件では扉に破壊されたような形跡がない事から犯人が電子ロックを解除した後、鍵を開けてのではないかという警察の推測だ。

しかし金庫の鍵は手を付けられた様子はなく、複製も容易ではない。そのために銀行の従業員による自作自演ではないかという記者の考えで最後がまとめられているが、どうにもキナ臭い内容に目を細める慎二は器用に片手で新聞を広げつつ、反対の手でトーストをかじっていると、後頭部から衝撃が走る。

「お行儀が悪いですよ、慎二兄さん！」
「さ、くらお前…僕を何で殴った…？」

新聞を手放し、トーストの落下をどうにか防ぎつつもゆっくり振り返る慎二が見たのは満面の笑みで自分の頭部へと叩き付けた凶器を翳すエプロン姿の義妹。

「お前！調理道具で人様の頭を殴る方が行儀悪くないのかよ!？」

「大丈夫です。フライパンはしっかりと洗いますから」

「大丈夫の基準がおかしくない!? しかもその言い方、僕の頭の方が汚いってか!？」

もしその通りと言われてしまったら泣く他ない慎二の訴えを他所に、ガロニアはゆっくりとその場を離脱すると向かいの席に座り、今しがた自室から降りてきた武へと挨拶を交わすのであった。

「おはようございます、武様」

「ああ、おはよう。今朝は随分とにぎやかだな。慎二殿、また何かやかしたのかな？」

「なんでまず第一に疑われるのが僕なんだよ…」

「シンジの不祥事はともかくとして、まずは頂きましょう。せっかくの朝食が冷めてしまいました」

「メドゥーサこのやろう…」

理不尽な言いがかりを受けながらも後から席についたメドゥーサが席に着き、黙って朝食を始める一同。揃って朝食を進める中で武は夕刊配達のアルバイト始める、ガロニアの編入試験が来週に迫ったなど取り留めのない会話が展開される中、メドゥーサは本来自分の隣に座っているはずの青年が、数日前から開始した早朝の見回りから無事に戻る事を祈っていた。

「今朝も異常はなし、か」

新都のセンター街にてバイクに跨ったまま周囲を見渡していた光太郎はヘルメットのバイザーを下ろし、ゆっくりとその場から離れていく。

通勤ラッシュなどに紛れて女性を誘拐する可能性を配慮して自身の強化された五感を最大に生かして監視をしているものの、肝心のエミリアの姿は見えない。こちらを警戒しているのか、それとも狙うに値する女性が見つからないのか：

考えるほど難しい相手だと考える光太郎がバイクを走らせる中、道路の先で突然として人影が現れた。

「ッ!？」

急ブレーキをかけ、強引にバイクを真横へと滑らせた光太郎がバイザーを上げてその先にいる人物を見やると、それは数日前に現れたランサーの姿だった。

「ランサー、どうしたんだいきなり」

「お前らも嗅ぎまわってるみてえだな、エミリアを」

「…ああ」

ヘルメットを外し、バイクから降りてこちらに目を向けないランサーへと接近する光太郎へ確信をついた問いかけ。やや躊躇しながらも頷いた後、深く溜息を付いて頭をガリガリとかくランサーは諦めたかのようにぼやく。

「ま、わかつちやいたがよ…お前らが動かずにいられないって事は「
「だったら、この件は一緒に」

「悪いが、俺は一人でやらせてもらおうぜ。今回だって、できる事なら話したくもねえ案件だったからな」

「……………」

あきらかにこちらを拒絶するランサーの反応に光太郎は口を紡ぐ。一度やると決めた彼の性分から、これ以上協力を仰ぐことは不可能だろうと考えた矢先、ランサーが一度こちらを振り向き光太郎へと忠告を告げた。

「もし、エミリアに遭遇した場合、奴の目に気を付けろ」

「目……？」

「奴の目に……いや、視界に入るんじゃないぞ」

「ま、待ってくれ！それはどういう……」

光太郎の質問に答えることなく、ランサーは跳躍すると街灯を足場にしてその場を離れていく。立ち尽くす光太郎の耳には、早朝から走る車両が走行する音しか聞こえなかった。

第83話

「くっそう、犯人の手がかりが何一つ見つからん…」

「でも先輩、現場に残されたバナナが…」

「馬鹿野郎！そんなんで特定なんざできるか！ご丁寧に指紋一つ付いてない皮なんかをよお」

「そ、そりやそうですが…」

ここ、冬木警察署の刑事課では最近連続して発生した銀行強盗の犯人搜索を急務として捜査が続けられていたが、警察官を嘲笑うかのように犯行現場に残されたバナナの皮以外、証拠らしい証拠は発見できない。

オマケについて一昨日に被害が起きた3件目の銀行には警察官数名が張りついてたというのに、全員が眠らされ監視カメラは全て破壊された上に金庫の中身は空。そしてバナナの皮が残されるという事態に警察上層部は「これは我々への挑戦だ」と勝手に意気込むが、結局動くのは現場の捜査員。

こうして証拠もないのに証拠を掴めという命令に胃を痛める日々が続く、刑事歴20年を越える男性のストレスは重なるばかりで悪人顔と呼ばれる顔はさらに歪む羽目となってしまう。

空の金庫・残されたバナナの皮の2つだけの手がかりに男性と後輩刑事の口からは溜息しか出てこない。そんな折、調査室の扉をノックされる。

「どうも、失礼します」

「ああ…何か証拠になりそうなものは見つかったか？」

書類と睨み合ったまま、振り向かず適当な応対をする刑事の態度など気に留めず、紺色の作業着を着た小太りの男性は一礼すると律儀に刑事からの質問へと答えた。

「これと言って進展はありませんな。しかし、金庫の鍵穴に奇妙な形

跡が見つかったので報告にお邪魔した次第です」

「なんだと？」

「それ本当ですか!？」

鑑識の言葉に食いついた刑事2人に圧倒されながらも、手にしたバインダーに挟まれた調査報告書をゆっくりと読み上げる。それは確かに、奇妙で不可解な内容であった。

「鍵穴の中に、バナナと同じ成分が見つかった…だあ？」

「その通り。あくまで参考にと鍵穴の奥まで調べていましたら、本来あるはずのない成分が見つかりました。科捜研に回してみた結果、その成分はバナナの果汁と一致したのです」

「するってーと何ですか？犯人は鍵穴にバナナの実を押し込んで、さらに綺麗に抜き取って行ったって事ですか？」

「現状ではそう考える他、ありませんな」

「……………」

鑑識の報告に刑事と後輩は目を合わせると、ワザとらしく深く溜息を見せると鑑識の手からバインダーを取り上げ、鑑識の頭頂部を軽く叩く。

「あのなあ、俺達を知りたいのは犯人の手がかりであって、鍵穴にバナナを擦りこませるなんて犯人が起こした奇行なんざ二の次なんだよ！」

「確かに小さな鍵穴にバナナを突っ込んで、さらに綺麗に洗っていくなんてすごいですけどね」

「犯人をほめてんじやねえよ。ほれ、もう一回聞き込みに行くぞ！」

「あ、先輩待ってください！」

バインダーを鑑識へと放り投げた刑事は上着を持つと足早に部屋を離れ、後輩も慌てて追いかけていく。室内に残された鑑識は叩かれ

た頭頂部を抑えながらバインダーに記されたデータを見て、やはり取り合ってくれなかったかとしぶしぶと部屋引き上げるしかなかった。確かに鍵穴にバナナの成分が付着していたというだけでは、何の証拠にもならない。それでも、鑑識はこれが重要な手がかりではないかと確信をもっていた。

(まさかと思いますが、これも怪人の仕業では…)

危惧の劣化の為か、点灯と点滅を繰り返す照明が照らす薄暗い廊下を歩く鑑識はふとそんな事を考えいた。

彼ら警察や軍隊でも足元に及ばない悍ましき存在。かつてはこの日本だけでなく、世界までも震撼させた異形の怪物『怪人』。この不可解な事件にその怪人が絡んでいたとすれば、相当やっかいな事件なのかもしれない。

その予感当たっている。

しかし、彼等の常識がまるで通じない者までが与していようとは、想像すらつかなかった。

クライス要塞

指令室内の巨大モニターに映し出される映像に、4隊長とジャーク将軍は黙って視聴を続ける。映像の内容は、冬木市で発生した銀行強

盗の一部始終を撮影したものであり、床に倒れて眠る警察官など目にも留めず、金庫の前に悠遊と現れたその姿は、怪人であった。

緑色の肌は首元に白い体毛。マントを翻して腰布から取り出した一本のバナナを丁寧に剥きだし、金庫の穴へとゆっくり押し付けていく。鍵穴に入りきらず、潰れた余分な果実がボタボタと床に垂れていくが気に留めることなく押し込み続けると、怪人は掴んだバナナを右へと半回転。途端にカチリ、と歯車がかみ合った金属音が響く。

ゆっくりと引き抜かれるバナナの形状は、鍵そのもの。果汁が垂れる様子もなく、満足して頷く怪人は堂々と金庫を開放し、中に眠る札束と金塊へと手を伸ばした――

「まるで意味がわからん」

「何か文句でもあるのかしら?」

映像を見て率直な感想を述べたガテゾーンのモノアイをジロリと睨むマリバロン。今回の作戦を立案者として、彼の意見に不服と言わんばかりに剃刀のように鋭い眼をさらに細めると、調子に乗った他2名が続いた。

「まったくもってガテゾーンの言う通りだぜ!なんでただ盗むだけじゃなくわざわざ証拠として地球のバナナとかいう食いモンを残していくんだあ?」

「これではRXどころか、地球人にすら正体を見破られてしまう可能性があるではないか?なんと馬鹿馬鹿しい作戦だ」

ゲドリアンとボスガンの指摘にマリバロンは先にガテゾーンに見せた剣幕はなく、むしろ蔑むように2人へと目を向ける。

「これだから失敗続きの連中は視野が狭くて困るわ:銀行強盗なんて所詮はオマケ。重要なのは、これは人間の手で行われた事件ではない

と知らしめるためよ！」

自信に溢れるマリバロンの作戦は、こうだ。

通常の間には決して不可能な金庫破りとバナナという謎の証拠を見て、間違いなく怨敵間桐光太郎は動き出す。そして無謀にも犯人捜しをする光太郎を変身させぬまま『人間』のまま殺す。

確かに仮面ライダーであるRXを倒す事は難しい。しかし、変身前の光太郎は改造人間であつても所詮は全力を出せない状態。人間の姿であれば勝機はある。その為にもこの怪しげな事件を乱発させていたのだ。

「な、なるほど…じゃなくて、確かにおびき寄せるとはいいアイディアかも知れねえか、なんであるバナナを使っているのかって話だ！」

「これだから無知な者は困るわね。いい？私の情報網によれば、あのバナナなる植物は地球人にとっては食物でありながらも、昔から多くの者が不幸に見舞われているという曰くつきのものなのよ」

「な、なんと…そのような危険なものを地球人どもは食しているというのか!？」

「ええ。特にバナナの皮は踏んだら最後。どんな強靱な者でも無条件に転倒してしまうと言われているわ」

「げ、ゲルう…」

マリバロンのしたり顔で語られるバナナの恐ろしさに顔を青くするボスガンとゲドリアン。まさか変哲のない食物がそこまでの力を持つているのかと動揺する2人と得意顔でさらに解説をするマリバロンを見て、それはコメディの世界のみに通用するものだという事実を知るガテゾーンはただ無言で時を過ぎるのを待つしかなかった。

(まあ、あれだけへこんだ後だ。少しは吹っ切れたって事だろうよ)

「ガテゾーンよ」

「ハッ…」

盛り上がる3人ではなく、ガテゾーンのみを声をかけるジャーク將軍は振り向かぬまま、モニターに映る怪人の見つめながらも、今回の裏でもう一つの動きについてを訪ねるのであった。

「例の協力を申し出たという魔術師：今は大人しくしておるのか？」

「ええ。奴が動くは無駄に事が大きすぎますからね。今は『ビヤツ鬼』の隠れ家で大人しくしてますよ」

「そうか：くれぐれも監視を怠るでないぞ」

「イエツサー」

「あー、疲れた」

「もう、せっかく部活が早く終わったのに弛みすぎですよ兄さん！」

「うるさいなあ。今日は高体連の報告会に美綴と藤村が参加して休みだと思ったのに、自主練なんて言い渡しやがって…」

ブツブツと文句を言う慎二をいさめながらも隣を歩く桜は、恐らく部活が休みであるならば来る受験に向けての勉強と武による特訓に従事したかったのだろうと推測。

新たな力を使いこなそうと以前よりも数段厳しい訓練を武に申し出た慎二であったが、いざ特訓を始めてはいいが、終われば疲労困憊。そのままベットへと倒れこみ翌朝まで起きれない日々が続いていた。

しかし、訓練前には勉強や宿題を片づけているのはさすがと言えるだろう。そんな桜も今以上に魔力のコントロールができるようにと柳洞寺に住むメディアの元へ通い、料理を教えるという条件付きでア

ドバイスを貰っている。

少しでも早く、仮面ライダーとしての力を使いこなしたいと意気込む2人に光太郎は今でもあまりいい顔はしないが、それでも、義兄を助け、誰かを守れる力であるのならと訓練を続けている。そう言えばと、目的地であるマウント深山まであと少しの距離まで迫った桜が唐突に最近起きた事件について慎二へと尋ねた。

「そう言えば慎二兄さん。最近また起きた銀行強盗なんですけど」

「ああ？あのクライシスが起こした奇行ね。それがどうかした？」

「え……？」

「…何驚いてんだよ。あんなの連中ぐらいしかいないだろ。ゴルゴムの時だって」

「あ、はい。そうですね。マグロの事件の時もそうでしたし…」

奇妙な事件であるとは認識していたが、慎二の言う通りにクライシスが犯人であればすんなりと納得してしまう。

考えて見ればこのようなおかしな事件、敵であるクライシスしか思いつかないだろう。まだ聖杯戦争が始まる以前、謎の行方不明者や事件が起きる度に何かと光太郎がゴルゴムが原因だと断言していたが、追いかけてみれば事実ゴルゴムによる作戦が多々あった。

今回も目的が不明だが、良からぬことを企んでいるのには違いはない。しかし、こんな商店街の入口で考えても仕方がない事だと、2人は買い出しへと向かう。

「敵の狙いよりも先に今晚の夕食の買い出しです！何か希望とかありますか？」

ニコニコと笑いながら今夜の主食を尋ねる桜に、慎二はやれやれ

と彼女とは別の笑みを浮かべてしまう。クライシスの悪だくみと比べれば、桜の我が家の夕飯事情の方が桜にとっては大事件だ。

「そうだな。それに、まさかこんなところに敵が——」

「バナナをある分。全て頂こう」

「おいおいまたかあ？家にゴリラでも飼ってんのかい？」

「まあ、そんなところだ」

いた。

ものすんごく胡散臭い恰好で、立派な髭を蓄えた老人が。目の下の異様な程に濃い隈を走らせる怪しい老人が。

八百屋の店長が訝し気な顔もものともせず、ビニール袋から溢れんとばかりに満杯のバナナを受け取った老人は、今しがた買い占めた黄色い果物を見て頷くと、ゆつくりと店から離れていく。珍客に首を傾げる八百屋の店長はまあ売れ残るよりはいいかと空となった段ボールを片づける中、次の来客者であり常連でもある兄妹の姿を見て作業を中断した。

「おう、間桐さん家とこの。今日は2人が買い物係かい？」

「それよりもおじさん！さつきバナナを買った人がいたんですけど……」

「見てたのかい？あんな面白い物するの王様以来だせ。それも一週間ぐらい前から毎日とききたもんだ」

「一週間前……？」

確かバナナの皮を現場に残す銀行強盗が出没したのもその時期だったはず。目を合わせて頷いた慎二と桜は未だ商店街のど真ん中を闊歩する老人の追跡を開始する。

「でも、なんであんなにも分かりやすい人がいるのに、ここの人達は警察に通報しなかったんでしよう？」

「…光太郎が言ってたろう。あの王様がここによく出るって…」

「ああ…」

こちらの姿を察知されぬよう電柱の影に隠れる桜は隣で対象の姿を懐から取り出した青いデジタルカメラで撮影しながら、どこか諦めを含めた答えをだす。桜も目を逸らして納得してしまうのは仕方がないことだろう。

彼ならば秘匿など構いもせず自慢の宝物庫から様々なものをあつた場で取り出し、その度に光太郎が手品ですとごまかしていたと聞いた事がある。

今回はそれが幸いして、商店街の人々が怪しみ興味本位で後を追うなどというトラブルに巻き込まれずに済んだのだろう。

慎二は警戒心の薄い部分は考え物だと思いつつもカメラの解像度を上げ、より明確な姿を捉えようとしたが…

「…!?桜、隠れろ！」

「えッ？」

カメラで老人の後頭部を捉えた瞬間、老人は突如として振り返った。その目つきは、買い物で見せた好好爺の微塵もない、見た者を射抜かんとする鋭いものだった。

桜の肩を掴み急ぎ電柱に身を潜めるが、老人はこちらに迫る様子はない。こちらに目を向けただけで再び歩き始めた老人の姿に胸を撫でおろした慎二は再度標的の姿を見るが、今以上に近づくの危険だろうと次の手を考える。

「桜、一端引き上げて光太郎達と作戦を練るぞ」

「でも、あの人の後を追わなくていいんですか？」

「そいつはコイツに任せる」

と、ポケットから取り出したトリガーとは異なるメモリをカメラへと挿入。途端、カメラの一部分が展開され、蝙蝠を模した小型ロボットへと変形した。

「~~~~~」

電子音を鳴らしてパタパタと飛び回るその蝙蝠の名はバットショット。

慎二が他世界の仮面ライダーから託されたロストドライバーに内臓されていたデータを元にメディアが暇つぶしと称して作り上げたサポートガジェットだ。慎二のパソコンとデータを直結しており、追跡対象の位置はもちろん、映像まで送信できる。

「なら、私も」

《 ガルーダ、プライーズ 》

負け時と桜も指輪をドライバーへと翳し、小さな魔法陣から赤と銀で彩られた型枠が飛び出し、数個の部品へと分離。さらに空中で合体し鳥の形を形成。最後に指輪を胴体へとはめ込むとより勢いよく羽をばたつかせ、桜の周りを飛び始めた。

「ガルちゃんも、お願いね」

『~~~~!』

鳴き声と共にバットショットの後を追う桜の使い魔レッドガルーダ。2体が老人の後を追いつつ始めると慎二と桜は踵を返し、急ぎ間桐邸へと引き換えしたのであった。

「ふうん、ちゃんと餌がつれたのねえ」

照明が一つもない一室。部屋の中央に置かれた水晶玉に移るのは、慎二と桜が目をつけた老人と、それを追跡する敵の使い魔を見た声の主は口元を釣り上げた女性：エミリア・シュミットはクスクスと笑うとようやくこの茶番も終わりに近づいていると悟る。

彼等のとこの協力を終えれば、再び自分は美しさに拍車をかけることが出来る。

その為には、さつさと要件を片づけなければならない。

「さあ、いらっしやい仮面ライダー…私の為にも、さつさと死んでもらわないと」

暗がりの中。彼女の黒く、濁った瞳から怪しげな輝きが漏れていた。

第84話

「あの家か…」

義弟と義妹からの情報を元にある一軒家へと辿り着いた間桐光太郎。商店街で大量のバナナを購入したという老人：連日で発生した銀行強盗犯と同一人物である可能性が高いという慎二の言葉を聞いた光太郎は、1人調査へ訪れた。

足音を立てぬよう家の周囲を確認するが、カーテンは閉め切りとなっており中の様子は確認できない。

(ここは踏み込んでみるか)

周囲に人がいない事を確認したうえで、光太郎は柵を乗り越え中庭へと着地する。人工芝によって着地した音は吸収されても、光太郎は油断せず強化された五感を働かせ、ゆっくりと玄関へと歩み寄っていった。

(無人…か。明かりもないし、慎二君が言っていた老人以外住んでいないのか?)

光太郎はこの日、午後からの大学の講義が急ぎよ休講となったこともあり、帰宅して洗濯物を取り込んでいた。そこへ息を切らした慎二と桜が帰宅。2人の様子が尋常ではないと悟った光太郎は選択籠を地面に置き、耳を傾ける。

放課後、夕飯の買い出しに商店街へと向かった慎二と桜が見かけたという不審な人物。慎二がその人物像の説明をする最中、尾行させたバットショットとレッドガルーダが現れる。正確には、レッドガルーダによってボディの一部が凍結したバットショットが運ばれたという方が正しい。

流石に動けなくなったバットショットを抱えての飛行が限界であつたのか、フラフラと飛ぶガルーダはバットショットごと桜へと落下する。慌てて受け止めた桜は、自分の掌で任務を達成した報告を上げるガルーダに対し、微笑んで「ご苦労様でしたと労いの言葉をかけた途端にガルーダは指輪を残して消滅。残されたバットショットは凍結しているものの機能には問題なく、慎二は撮影された動画を再生する。

老人は冬木市内のとある民家へと入っていたところで急にカメラへと視線を向けたところで止まっている。おそらく、この直後にバットショットが攻撃を受けたのであろう。

結論。この男は人間ではなく、クライシス帝国の怪人だ。

光太郎はバットショット達が移動中に撮影した写真画像から家を特定し、単身偵察へと向かった。赤上武とメドゥーサはランサーが捜しているという魔術師の手がかりを探る為に家を空けており、ガロニアは編入試験の最終調整の為に家庭教師を申し出た凜のいる遠坂家へ。

そして不幸な事に慎二と桜の変身に必要とするドライバーや指輪は、より細かな調査が必要と考えた為にメディアに預けてしまった。急ぎ柳洞寺へ向かい、変身道具を回収すると言って慎二と桜は光太郎に無理はするなと釘をさすと、ライドロンへと乗り込んだであつた。

(そう言われたけれど既に現在地は家の中、と)

家のリビングへと足を伸ばした光太郎は怪しげな様子はないかと室内を見渡すとテーブルや椅子。大型テレビなど家具が設置されているが、どれも使用感がまるでない。ふと外から覗きこまれても人が住んでいると見せかける為だけに準備されたようだ。

「ますます怪しいな…」

光太郎は続いて2階へと続く階段を見上げ、足音を立てぬようゆつくりと踏みしめて登っていく。もし、罨が仕掛けてあるならば十分に気を付けなければと聴覚と触覚を強めようとしたその時。

『じゃあその前にご期待に応えようかしらあ』

無邪気な少女の声がどこからか響いた直後、光太郎の足元にあった階段が姿を消してしまう。

「なっ!?!」

階段が消失した為に足場を奪われてしまった光太郎。咄嗟に壁の手すりへと手を伸ばそうとするが間に合わず、底がまるで見えない落とし穴へと落下してしまう。

「くうッ!?!とにかく、着地しなければ…!」

明かりの灯らない落とし穴の底を探ろうと視覚を強化し、怪魔界で見たような針地獄はなく平坦な床と知った光太郎は着地しようと両足を地面に向けるが…

『残念、そこには足は付けられないわあ』

またも聞こえる少女の声。まさに少女の発した言葉通りに、着地点

としていた場所から炎が噴き出し、光太郎を飲み込もうと迫る。驚きながらも強引に身体を振じり、炎を回避した光太郎は背中から落下。

「くう…」

背中に走る痛みにも耐えながらも立ち上がった光太郎だったが、続いて風を切り自身へと接近する気配を察知し、危険を予感して前方へと転がる。直後、光太郎が先ほどまで立っていた位置に金属を打ち付けたような甲高い音が空間内へと響いた。

メドゥーサが得意とする鉄杭と同じものが自分へと向けられたのか…そう予感した光太郎が振り向くと、それとは予想外の物体が床へ深々と突き刺さっているではないか。

「ば、バナナ…?」

明かりが一切ないままではあるが、光太郎の目に映る物体の形状は紛れもなく果物であるバナナだ。何の冗談かとさらに注意深く観察するとバナナの突き刺さった部分が僅かに凍り付いており、バナナからユラユラと冷気が昇っている。

確か慎二達は商店街で大量のバナナを購入した老人をバットショットに追尾させ、そのバットショットが帰還した際には一部が氷漬けとなっていた…

顎に手を当てる光太郎はさらに自分が落ちたであろう空間の奥へと目を向けると、何かが積み上げられている。

台形に型どられた金属と紙の束。

まぎれもなく、ここ一週間で銀行から盗まれたという紙幣と金塊だ。

「そうか…犯人はバナナを金庫の鍵と同じ形状にした後に凍らせて、金庫を開けたのか!」

『あつはははは。大正かーいつ！よくそれだけで解ったわねえ。貴方、普段から余程ハチャメチャな事に関わってたんでしょお。じやなきやそんな結論にいたらないわあ』

「誰だー！」

目にした状況から金庫破りの手段を看破した光太郎にはちきれんばかりの拍手と共に称賛の声をあげる少女の声。家の階段を登るときと、この空間に着地をする寸前にも聞こえたその声の主は、光太郎の質問に答える為に照明と共に現れる。

突然の明かりに視覚を強めていた光太郎は思わず目を瞑り、段々と光に慣れて目を開けたその先に、彼女はいた。

ランサーが凜に見せた写真と何一つ変わらない顔。ゴシック調の袖なしドレスを纏い、ウエーブのかかった照明に反射する煌びやかな金髪。

そして目にした者を飲み込んでしまう底の無い暗闇を秘めた瞳を持つ少女の名を、光太郎は恐る恐る口にした。

「エミリア…シユミット…」

「あらあ。自己紹介する手間が省けたわねえ。それに、まさか仮面ライダーにまで私の名前が知れ渡っているなんて感激だわあ」

口元を三日月のように細く、長く吊り上げて微笑む顔に光太郎は思わず冷や汗を流す。写真を見た際にも抱いた印象だが、彼女は危険だ。実物を目にした光太郎はどうにか隙を見て彼女を拘束し、未だ息を潜めている者…自分に向けて冷凍されたバナナを放ったクライシスの怪人から逃れようとしたが、エミリアの声に身体を強ばらせてしまふ。

「無駄よお。私に近づけばあ、こっわーいバナナが何処からともなく貴方を狙ってくるんだから。ま、ギリギリで避けちゃうんだらうけ

ど」

「ッ!?!」

読まれた。

光太郎が今まさに行動に移そうとした考えのさらにその先を。

エミリアはニヤニヤと嫌な笑みを浮かべて焦りを見せる光太郎の表情を眺め、ゆつくりとした足取りで接近してくる。自分の行動の先まで口にするエミリアの言動に警戒しながらも光太郎は距離を置き、変身してこの場を脱しようと爪先に重心を置いたと同時に、再び彼女の口が開いた。

「あなたは私ともう一步前に出たと同時に後ろへと下がり——」

カツンと、エミリアがワザとらしくヒールの底を床へと叩き付けた音と同時に、光太郎はバックステップで後方へ着地。

「そして変身する為の構えを——」

右手を前方へと突き出し、重心を右足に置くと大きく両腕を右側へと振るい、右頬の前で両手で握り拳を作る。

「私の言葉通りの行動を取って、動揺する……」

「っ……!?!」

「そおよお。その素敵な表情も、『視』えていたの……」

頬を染め、恍惚な表情を見せるエミリアに対し、光太郎は構えたま

ま目を見開く。なぜ、自分はエミリアの言った通りの行動を取ってしまふのか。いや、光太郎が起こした動きはエミリアが口にした直後に、言った通りに起こしてしまっている。

光太郎の驚愕した顔を見てさらに口元を釣り上げるエミリアをさらに警戒しながらも、続けて変身の動作を続けようとするがその刹那。またもやエミリアの口が開いた。

「貴方は続けて右手を左下に向けて勢いよく下げるけど——」

ギリギリと握り拳を軋ませ、その力を開放するように右手を左下へと振り下ろしす光太郎。

「続けて左手を右腕に突きあげた直後に、身体から血が噴き出して激しい痛みが走るでしょう——」

下ろした右手を腰へと引き戻し、左腕を右腕へと突き上げたその時。光太郎の肩と腿から鮮血が噴き出した。

「なッ…!?!」

何が起きたのかと言う前に、光太郎はガクリと膝を付き、ドクドクと出血する左からと右腿へと突き刺さった物体を見る。やはり、先ほど床を貫いたと同様に、冷凍されたバナナが光太郎の肉へとめり込んでいた。

だが光太郎が不意打ちを受け、負傷した以上にエミリアの言葉が腑に落ちない。なぜ、悉くエミリアは光太郎の行動を言い当てたのか。歯を食いしばり、肩に突き刺さったバナナを掴むと掌に広がる冷たさなど気にもかけず、強引に引き抜く。

「……………」

再び肩から流血を起こすが次第に勢いを無くし、傷口で血液が凝固したと確認した光太郎は続いて腿に刺さったバナナへと手を伸ばすと、先日ランサーが自分へ伝えた言葉を思い出した。

エミリアの視界に入るなど。

「ま、さか」

「あらあ、察しがついたみたいねえ」

腿から抜いたバナナを放り投げ、果物らしからぬ高い音を立てて落下し、カラカラを床を走るバナナなどに目も向けず、出血が収まりかけている傷口を手で押さえる光太郎は指先を頬に目元に当て無邪気に、それでいながら目が合った者を萎縮させるような、異様な笑顔を向けた。

光太郎の行動一つ一つを言い当てたエミリアの持つ力を、光太郎は最初は心を読む。いわゆるサトリのような力と考えた。しかし、今までの彼女の口ぶりからそうではないと結論付ける。

エミリア自身が言っていた。光太郎が傷つく姿を見て

『その素敵な表情も、『視』えていたの…』

と語っていた。

つまり、ランサーが忠告したエミリアの能力は…

「未来視…」

「はあ〜い大正か〜い！そおよお、わたくしエミリア・シユミットは未

来が見れるのでーす！といつても1〜2分後ぐらいまでしか視れないんだけどねえ！」

未来視。

文字通り、その先に起こりうる事を先行して視界に映し出す能力。予知能力に近いものがあるが、この能力は2つに分類されると以前光太郎はメディアから聞かされていたが、今はそんな事を呑気に分析している場合ではない。

(最悪だ…)

なぜ彼女が今まで多くの追手から、そしてランサーからも逃げられたのか納得できた。

いくら綿密に立てた捕獲する作戦も罫も、直前になって知られてしまえば意味がない。

エミリアは、そうして逃げてきたのだろう。自分を追う者を嘲笑い、殺しながら逃げてきたのだろう。

だからこそ解せない。常に自分が優位な状況になりながら、なぜ彼女は記録上死んだことになっていたのかと。

流血も止まり、どうにか立てる程度に回復した光太郎は汗を拭いながらもこちらを見つめ続けるエミリアへその疑問をぶつけた。いつまた絶対零度にまで温度を下げられたバナナに投擲されるともわからないこの状況で、光太郎は聞きだした。

「な、ぜだ？」

「あらう？」

「君は、その眼を持っていていならば聖堂教会に狙われていたとしても逃げ切れたはず…なのに、どうして敢えて自分を死んだことにしたんだ？」

光太郎の質問が余程以外だったのだろうか？ エミリアはポカんと大口を開け、光太郎の質問を理解する事にしばし時間をかけてしまったが、その意図をようやく掴んだのだろう。今までに見て比べようのない、嗜虐的な表情と共にその理由を告げた。

「そうねえ、貴方も無関係って訳じゃないかもしれないわねえ」

「俺が…？」

なぜ自分が関係があるのかと口にする前に、エミリアは理由を言い放つ。

「スカウトされてたのよねえ。ゴルゴムに」

数年前。光太郎がゴルゴムの復活を祖父、間桐蔵硯に聞かされる以前の頃に遡る。

エミリアが最近購入したピアスに相応しい耳を持つ女性を吟味していた時、その者達は現れた。

白いローブを纏い、顔に入れ墨を入れた女性から接触を受けたエミリアはゴルゴムのメンバーとしての勧誘を受ける。

やがて世界を支配する組織に忠誠を誓い、エミリアの持つ転換の魔

術をゴルゴムへ技術提供すれば、好きなだけ好みの肉体を持つ女性を拉致してやろうと。

エミリアは迷うことなく頷いた。

家系と魔術刻印を平然と捨てるエミリアは、自分の技術がゴルゴムにどのように悪用されようが知った事ではない。用は、自分自身の命さえ保証されれば良かったのだ。

未来視まではさすがに把握していなかったようだが、それならば余計に好都合。エミリアはゴルゴムに自身と全く同じ遺伝子や魔術回路を持つ人形を造らせ、聖堂教会の代行者へと刈らせる。

だが、その人形はどうやら怪人素体を基にしていたため、猛獣の遺伝子も含めていた為が思いのほか抵抗し、斬首されるまでに数人ほど代行者は死んでしまったらしい。

しかし、これで魔術協会からも聖堂教会からも解放されたエミリアはゴルゴムの一員として晴れやかな道を歩む、はずだった。

数か月前、自分の一部に見合うであろう世界中から誘拐した女性をさらに選別している最終に流れた最悪なニュース。

ゴルゴムの神 創世王の死。

同時にエミリアの隠れ家となっていた基地が特殊部隊の突入により壊滅状態に陥ったのだ。

せつかく集めた女性たちも解放され、エミリアは基地を強襲した部隊とそれを率いる銀色の腕と赤い複眼を持つ戦士を見たエミリアは奥歯を噛みしめ、誰にも悟られぬよう基地を後にした。

だが転機はすぐにやってくる。

無傷であったゴルゴムの改造プラントに身を潜めていたエミリア

は地球のデータ収集に現れたクライシス帝国の幹部に接触。

クライシス帝国に忠誠を誓った彼女は、再び暗躍を開始したのであった。

「君は…自分の為に、この地球を売ったというのか…？」

「だってしかたないじゃない。私だって死にたくないんだものお？」

指先を顎にあて、身体をくねらせるエミリアはさも当然だと言わんばかりに答えた。

説明を受けた光太郎の拳に力が入る。

エミリアが自分を死んだと思わせ、その裏で次々と女性を犠牲にした中で、ゴルゴムの影があった。しかしゴルゴムが滅びた後も彼女は変わらず、自分の為に女性を殺し続けようとしている。

そんな事はさせない。

自身の状態など構わず、再び変身しようと腹部に力を集中させようとすが、彼女の眼は確実の光太郎の動きを予測していた。

「貴方は私以外のもう一人の位置を確認しようと身体を右へと転がし

——」

「そして迫るバナナを回避しようと今度は前方へと飛び出る——」

「そのまま今度は左側へと向かって転がり続け——」

エミリアが口にする光太郎の移動する位置へ適格に放たれる槍と化した無数のバナナ。負傷した手足がまだ思うように動かない光太郎の焦りだけが膨らみ続けていく。

「くっ、このままではいずれ——」

『——間桐光太郎』

「ッ!? キングストーン……」

『いいか。よく聞け。このまま——』

自身の体内に宿るキングストーンの意思の声を聞く為に、身体の動きを止めてしまった光太郎へ投擲されたバナナが迫る。危機を察する事ができたが既に遅く光太郎は衣服を床へと縫い付けられ、仰向けのまま動きを封じられてしまう。

「し、しまったッ!?!」

「と言った貴方に、無情にも敵の攻撃が突き刺さるの。そう——」

「貴方の心臓にね」

ズブリと、光太郎の胸に潜り込む黄色の細長い3本の果实。

「…っ…っ!?!」

口と胸元から赤く、暖かい液体を流す光太郎は痙攣した後に、ピクリとも動かなくなってしまう。

完全に動きが止まったと確認したエミリアは、耐え忍んだ感情を一気に爆発させる。

「アツハハハハハハハハハハハハ! 本当に、本当にさつき見た通りねえ。ついさつき、貴方が頑張って立ち上がった頃からその姿になるのが『視』えてたの!! もう笑うの我慢するの大変だったんだから!! す

ごいでしよう、私の眼は…ア—ハツハツハツハツハツハ!!!」

その閉ざされた空間で木霊するエミリアの笑い声。唯一同じ空間にいる光太郎は、ただ血を流し続ける事しかできなかつた。

第85話

「アハハハ…アーハツハツハツハ」

僅かながらの照明しか差さない空間内に響くソプラノ声を劣悪な高笑いに変えてしまう少女は胸を串刺しにされ、ピクリとも動かなくなった青年へもう届くことのない罵倒を浴びせ続けていた。

「ほおんとあっけなあい。これがゴルゴムの支配者を倒した世紀王う？クライシスの怨敵い？今まで挑んだ連中つて何手をこまねいていたのかしらあ。こおんな奴ー人始末できないなんてえ…」

口元に指を添え、口元から一筋の赤い液体を漏らす光太郎の頭部をヒールで踏みつける魔術師エミリア・シユミット。恍惚とした表情で今度はヒールの踵で眼球を踏み抜いてやろうかと脚を上げるが、背後に現れた男の声によって止められる。

「それ以上は止めておけ、魔術師。貴様の役割はあくまで間桐光太郎の行動を私に伝えるだけのはずだぞ」

「そう呼ばれるのは好きじゃないわあ」

「ふん…知った事か」

頬を膨らませるエミリアは上げた脚を暗闇から現れた老人に言われた通りに下ろすが、楽しみを邪魔された腹いせとして光太郎の頭部を足蹴し、クルリを纏ったスカートを靡かせると何事もなかったかのように笑顔を浮かべた。

「それでえ？…これで私のお仕事はおわりなんですよ？約束は守ったんだからあ、今度はマリバロン様に私のお願いを…」

「まだ任務は完遂していない。間桐光太郎を完全に葬りさるまでな」

「…貴方、目は節穴あ？こいつを殺した張本人が何を寝ぼけた事言っ

てるのよお。間桐光太郎は死んだ。もう私がこの眼で視た、『未来』通りにねえ」

口元を釣り上げるエミリアは光太郎は完全に死んだと確信するが、それでも老人は主の命令通り、例え死体であろうが間桐光太郎という存在を確実に葬り去るまでは殺したとは言い切れない。

「所詮は魔術師…いや、人間の見解だな」

「なによお、馬鹿にしてるのお？」

「まあいい。奴を処刑場まで運び出せ」

老人が指を鳴らした直後、空間の一部が扉へと変わり、開かれるとクライシス雑兵チャップ達が次々を現れ、胸部が血だらけとなった光太郎を数体で持ち上げると、他の個体に合図して黒い長方形の物体が運び込まれた。

「棺桶え？」

エミリアの言う通り、チャップ達が運び込んだのは黒に塗り固められた棺桶ではあるのだが、エミリアの知る棺桶とは異なり金属で覆われ、重量故なのか下部に車輪が設けられている。重々しい蓋はチャップ達が数人がかりでようやく持ち上がる様子からどれ程の重さなのかうかがえる。

棺桶に光太郎を放り込むと、ただ蓋をするだけでなく隙間を溶接するなどという徹底ぶりに呆けるエミリアの様子を見た老人は何も間違っていないと言わんばかりに説明する。

「間桐光太郎…RXの力の源は太陽の光。もし僅かにでも光を当ててしまえば立ち上がる可能性だってある」

「だ、だからあ！心臓を貫かれて生きている奴なんて…」

「いいか。これはマリバロン様の命令だ。否定するのならば、反逆行

動と思え」

「…ふん、わかったわよお」

カツカツとヒールを床に叩き付けその場を後にするエミリアの後ろ姿を見て老人は溜息をつくと、溶接を終えた上に鎖で棺桶を縛るチャップを見て、これでもまだ足りぬぐらいだと、幾度となくこちらの目論見を潰した怨敵の復活に不安をぬぐえずにいるのであった。

「…随分と優しい製作者な事」

日々バージョンアップを続けているPCの前で思わず呟いたメディアはブルーレイライトカットの眼鏡を外し、調査様に接続していた配線を慎二から預かったロストドライバーから引き抜く。光太郎から異世界からの贈り物と聞き、興味が尽きない逸品ではあるのだからいざ調べて見るとこの道具、ある程度機械の知識があれば難なくデータを抽出できる仕様となっていたのだ。

データの内容はロストドライバーの簡易メンテナンスの方法や摩耗部品のリスト。さらに疑似メモリと慎二が使用したガジェット的设计図が組み込まれていたのだ。流石に本体や慎二の持つトリガーメモリを真似て作るような事はできないが、時間を費やせば分析して作れない事もないだろう。

(けど、こうも簡単にデータを開示させるなんて、余程馬鹿にしているのか。それとも信頼しているのか。どちらにしても、助かるのですけど)

印刷された設計図から、もう2種類ほどのガジェットも部品が揃え

ば作成可能な状態にまで行きついている。だが、それでもプロテクトの掛かったデータが一つだけ内包されていた。

設計図のフォルダの中にただ一つロックがかかっているファイルがあり、それも解除用のパスワードではなんく、なにやらメーターのようなものが表示されているのだ。

僅かながら：それも数パーセントのみメーターが満たされている。

メディアはその数値とは別に、ドライバーから抽出したデータを重ねあわせて何かが一致していないか検証を始めようとするが、何やら外が騒がしい。

『これ慎二ーいきなり押しかけてくるなりメディア殿の部屋に向かうとは何事か！』

『だから緊急の用事だつて言つてんだろ!? 説教なら明日生徒会室で衛宮の入れたお茶啜りながら聞いてやるからさー!』

『衛宮のお茶か：つと話をごまかすではないツ！喝ツ!!』

『本当に緊急の用事なんです！ごめんなさい柳洞先輩!』

『むう：まさか桜くんまでそのような：それでは本当に窮する事だといふのか…!』

『お前ごんだけ僕を信用してないんだよツ!?!』

神聖なる寺の渡り廊下を騒ぎながら迫って来る愛すべき夫の生徒たちの声。そのうち2人は預かった道具が必要となった場合にすぐ取りに向かうと言っていたが、どうやら『必要な時』らしい。

深く溜息をついたメディアは調査を中断。預かったドライバーとガイアメモリ、そして部屋の隅で展開される直径15センチ程の魔法陣の中で宙に浮かぶ指輪：桜の変身に使用するウィザードリングを手に取った。

(こちらも原料となる特殊な宝石はなくとも、代用品で何かを造れそうね)

「…光太郎？」

「何か言ったか？」

「…いえ。それよりも、アーチャーが目を付けたという市民会館というのは？」

遠坂邸

洋室にて地図の置かれたテーブルを囲むメドゥーサ、アーチャー、赤上 武、そして主である遠坂凜はランサーが行方を追う魔術師が潜んでいるであろう場所を探中、アーチャーの眼に止まった怪しげな箇所がいくつか候補に上がったのだ。

一つは探すまでもなく、誘拐された場合に毎度連れ込まれてしまう廃工場：クライシスだけでなく、ゴルゴムとの闘いから利用されている場所であり、光太郎からギルガメッシュに買い取ってもらい、別の施設を建てて貰おうかとメドゥーサに愚痴った事があった。

二つ目は最近一人の老人が住み始めた一軒家。夜間でも明かりを灯している様子が一切なく、家としてではなく、隠れ家として利用されている可能性も十分にある。

そして三つ目。メドゥーサが地図上で指さした新都の市民会館。規模の小さいスポーツ大会やカルチャースクールなど多岐の行事を目的に建てられた場所であるが、ここ数日館内のリニユール工事を名目に閉館していた。だが、工事を予定しているというのに資材の搬入どころか工事の業者すら出入りをしていないのだ。

その代わりに怪しげな男が施設内を徘徊しており、黒いカーテンで室内の窓を覆っていたのだ。怪しいと踏み監視を強めていたアー

チャーは見逃さなかった。

カーテンを手にした男の1人が気を緩め変装をといてしまい自身の素顔を晒してしまったのだから。

「チャップが、なぜそのような事を…」

「現時点では分からん。それにこれだけ探してもエミリア・シユミツトの足取りが掴めない以上、市民会館で何かを企んでいるクライシスの連中と与しているという可能性も考えるべきだろう」

「…ランサー殿だけでなく光太郎殿の頭を悩ませてしまう状況だな」

メドゥーサの疑問に自身の予感を交えて答えるアーチャーの言葉に、武は苦笑すると腕組みする凜が満を持して集まった一同へと指示を出した。

「じゃあ、それぞれの場所に向かって調査しましょう。アーチャーと私は廃工場、メドゥーサと武さんは…」

凜はクライシス絡みであれば市民会館は光太郎に連絡した後の方が適切であろうと判断し、先に他の候補地へ分担し調査しようとした矢先、室内に電子音が鳴り響く。

失礼、とポケットから原因である携帯電話を取り出したメドゥーサは口を開いたまま固まってしまった凜に一礼すると、発信者の名前をみて即座に携帯を耳に当てる。

「シンジ、どうしたのですか?…はい…はい…こ、光太郎がツ!?!」

「…ああ、急いでその家に桜と向かったんだけど、もうもぬけの殻。おまけに…」

苦虫を噛みしめるような表情を浮かべる慎二は、床に膝をついて先ほどまで液体であり、当に凝固した赤黒い跡を不安そうに見つめる桜を見た。

メディアから変身道具を受け取った慎二と桜は急ぎライドロンで老人の住む家へと到着し、室内を捜す中で階段に落とし穴を発見する。念のために変身し、穴へ降りた2人が発見したのは床のあちこちに突き刺さったバナナと、池のように広がった何者かの血液。

先行した義兄の身に何が起きていると確信した慎二は情報交換の為にメドウーサへと連絡し、彼等も自分と同じ場所へ目途を付けていたと知ると電話を切ると急ぎ桜へと振り返る。

「桜、遠坂達がもう連中の行き先を幾つがピックアップしてる。そこに行くぞ」

「…はい」

静かながらも、確かな返事を聞いた慎二は桜と共にチャップが使用した扉から地上を目指す。光太郎の無事を信じて。

「よくやったわ、お前たち」

「はっ…」

「ふふん。私の手にかかれば当然よお」

市民会館の運動ホール。

学校の体育館などと同じスペースを持つその場所でクライシス帝国 情報参謀マリバロンは老人とエミリアに労いの言葉を向けるが、老人はともかくエミリアの態度に目を細めるマリバロンであったが

時間も惜しい。

自分の計画通りにノコノコと現れた間桐光太郎の処刑を實行しようとする日の為に準備した装置の起動させる。

「なあにい？そのごっつい機械…」

チャップ達が操作し、エンジン音を震わせる装置に興味を抱いたのか、エミリアは駆動音と共に首を下げるポラボナアンテナ状へ目を向ける。

「これは分子破壊光線発射装置。名の通り、この機械から放たれる光を浴びればその名の通り分子レベルまで相手を分解する恐るべき装置。もちろん、キングストーンもろともね」

マリバロンは光太郎を閉じ込めた黒い棺桶を横目で見つめながらも機械の能力をエミリアに伝えるが、とうのエミリアはごねる子供のように反対の意を唱えた。

「ええ〜もつたいなあい。せつかく生きの良い身体なんですから分割して怪人の素体なんかにつかつたらいいんじゃないんですかあ。わたしは、そういうの得意中の得意ですよお？」

「貴様…マリバロン様になんという態度を…！」

眉間に幾層もの皺を寄せる老人は怒りのままに懐から冷凍されたバナナを取り出し、エミリアに向けるが再びあの怪しげな輝きを放つ眼で老人を見つめる。

「好きなお投げなさあい。どんな角度が、何本同時に投げようが私には無意味なんだからあ」

頬に指を当て、歪んだ笑みを浮かべるエミリアの挑発にさらに怒り

を増す老人だったが、マリバロンは老人を手で制し、冷静にエミリアへと告げた。

「エミリアよ。確かに間桐光太郎を一時的にしろ動けなくしたのは大役だった。しかし、決して侮るのではない。間桐光太郎の肉体が完全に消滅するまで、我々に油断は許されないので」

言い切ったマリバロンはどうか怒りの鉾を収めた老人と共に再度発射装置の調整を指示する為に踵を返すが、エミリアは話を聞くどころか、より悍ましい笑顔を作り黒い棺桶へと視線を向ける。

（クライシスがそうまでいて警戒する、キングストーン…もしかしてえ、それを手に入れちゃえば私って無敵になっちゃうんじゃない？）

そこに起きる未来全てを見通す眼と、クライシス帝国さえも恐れるというキングストーン。この2つが揃えば恐れるものなど何もなく、魔術協会にも聖堂教会にも怯える事はない。うまくすれば、その2つを潰す事すら容易いであり、クライシスすら自分に従うかも知れない。

段々と肥大する自分の欲望に笑いを抑えられないエミリアの耳に、第3者の声が響き渡った。

「変わってねえな。碌でもない妄想に浸ってるお前さんの笑いはよお」

瞬間、彼女の『眼』に映った光景通りに事は起こった。

分子破壊光線発生装置の配線部分に風切り音と共に落下した真紅の槍。その途端に装置からは煙が上がりチャージ中だったエネルギーは全て四散。使い物にならなくなってしまった。

ブスブスと焦げる臭いと共に昇る煙を目にし、背後で慌てふためくチャップ達とは相反して冷徹な声と共にマリバロンは尋ねる。息を殺し、潜んでいた曲者に対して。

「何者だ」

「聞かれたからには、名乗っとくのが礼儀ってもんか」

マリバロンの声に反応し、照明の裏から落下した青い男は装置の上に音もなく着地すると配線部に突き刺さった槍を引き抜き、クルクルと回転させ自身の肩へと当てる。

「初めましてだなあクライシスの幹部さんよ。俺の事は取りあえず：ランサーとでも呼んでくれや。そして…」

ランサーは気の抜けた声でマリバロンに名乗るが双眸を別人に向けた途端に猛獣の如く鋭く、顔には血管が浮き上がっていた。

「殺しに来たぜ、エミリア」

第86話

現れた男：ランサーの只ならぬ殺気を肌で感じ取ったマリバロンは自分で調べ上げたサーヴァント達の認識を改めるべきと思いついた。

聖杯によって召喚されたサーヴァントはそれこそ神話や伝承に名高い、超人的な力を発揮することが出来た。しかし、聖杯という枷から離れたただの人間に身を落とした彼等には憎き間桐光太郎の補助が精々のはず。幾度かとしてつもない力を発揮したようだが、その力を常に維持している訳ではないと調べも付いている。

だが、この男は違う。

例え力を失おうとも、相手が自分よりも強大であろうと食らいつく。

勝利をつかみ取るまで殺しても死なない、危険な男であると。

どうにか刺激させぬよう事を進めようとするマリバロンであったが、隣に立つ女はあろう事かこの危険な男に対して与えてならない刺激を口にだしてしまったのだ。

「あらあ、お久しぶり。まあだ昔の事をズルズル引きずっているのねえ。もう3カ月も大昔のことじゃなあい」

「……………」

エミリア・シュミットは濁り切った瞳で見つめるランサーは無言で着地し、分子破壊光線発生装置へと突き立てた槍を強引に引き抜く。槍の先端から垂れるオイルを拭う事なく、隠しようのない殺気をただ、その身から解き放つランサーの口から、静かに言葉が紡がれた。

「要件はさっき言った通りだ。黙って死んでくれや」

「もう、つれないわねえ。せつかくまた会えたんだからお話しましよ
うよお。例えばあ…」

「右も左も分からない新入り君の胸を貫いて、最後にどんな顔をして貴方を見つめてたとかあ——」

瞬間、エミリアの足元が抉れた。

正確には、エミリアが1秒前まで踏んでいた床にランサーの投擲した槍が突き刺さり、衝撃と共に砕け散ったのだ。周囲のチャップは目にも止まらぬランサーの早業に驚き、警戒心を上げた手に持ったライフルを構えるがランサーは意に介さず、ゆつくりとした足取りで投げ飛ばした槍と、微笑みながらも後に下がるエミリアへとせまる。

「チツ：避けてんじやねえよ」

「いきなりひっどーい！球のお肌を傷ついちゃったら、どうしてくれるのお？」

「その便利な眼を使えばいらぬ心配だと思うがな」

「自惚れないでもられるからあ。あーんな攻撃なんて眼を使わずとも私の勘でじゅ・う・ぶ・ん」

「あーそうかい、そいつは野暮な質問だったな」

何気ない会話の応酬を口にする2人であるが、それぞれの表情はまるで異なる。

ランサーに登場した時に見せた殺気は薄れ、表情は読み取れないものの赤い瞳はエミリアから逸らす事なく、対するエミリアはそんなラ

ンサーの視線をとうに気づいており、なおも嘲笑を続けている。

異常とも思えるランサーとエミリアの対峙を見るマリバロンは分子破壊光線装置が破壊されたことよって、鹵獲した間桐光太郎：クライシス帝国の怨敵であるRXを確実に倒す手段を断たれた事に苛立ちながらも、思考を巡らせていた。

（忌々しいサーヴァントめ…どうやら狙いはエミリアのようだが、奴にはまだ利用価値がある。この場合は助力するべきか）

ランサーとエミリアの間にとのような因縁があるかなどは知った事ではないが、エミリアは地球人と言えどクライシスの協力者。手助けし、借りの一つでも作っておけば生意気な口も少しは紡ぐであろう。

無言で手を上げ、どうすればいいのかとどよめくチャップ達にランサーへ狙撃するよう命令を下す寸前であった。

ランサーがこちらに目を向けることなく、指先でなにかの文字を描いた直後。床から炎が吹きあがりエミリアとマリバロン達を分断する、壁と作り上げた。突破を試みようとするが吹き出す炎と熱は凄まじく、チャップ達は近づくことすらできない。

「馬鹿な…いくらサーヴァントと言えど、人間に堕ちた者にこのような魔術が…」

さらに言えば、彼は自らランサーと名乗った。だと言うのに、ただ指を振るうだけでこれ程の炎を生み出す魔術を使役するなどあり得ぬと、熱風から庇う為に袖で顔を覆うマリバロンの目に、キラリと鈍い輝きを放つ物体が映る。

釘だ。それも、ある一定の間隔を開けて無数の釘が床に突き刺さっている。さらに釘の上部には何かが結ばれており、それこそが炎を生み出す原因。発火の術式を細かく刻み込んだ布きれにガソリンを染

み込ませ、爆発的に炎を生み出す仕組みだ。これは以前に間桐慎二へとルーン魔術の手解きをした際に教えた基礎中の基礎であったが、まさか自分が使用するとは思ひもしなかったランサーは、手品の種に気づいたであろうマリバロンの反応を横目で見る。

(気づきやがった…あと一分持つてくれりゃあ御の字だったんだが)

ランサーがエミリアの言葉に逆上したと見せかけて彼女に向けて槍を放ち、轟音に他の連中の目を逸らした隙に床へと打ち付けた術式が仕込まれた釘に、火種となる発火の魔術を発動。大規模な魔術を行ったと誤解させ、動揺するうちにエミリアを始末させようという魂胆であった。

しかし、思った以上に敵が冷静であった事は計算外ではあるが、今噴き出している炎の持続時間こそ短い、そう簡単に打ち消せるものではない。

このわずかな時間に、確実にエミリア・シュミットを仕留めてみせると体勢を低くし、いつでも踏み込める構えを取る。

彼得意とする一撃必殺の槍を繰り出そうとする姿を見てもエミリアは身構えることなく、ただ可笑しそうにランサーを眺めるだけであった。

「ウフフ…どうしたのお、その自慢の槍で私を貫かないのかしらあ」
「……………」

「きつと貴方のことだからあ、私が見た未来を元にして避けるよりも速い攻撃を打ち込めば勝てるか思っていたりするんじゃない？」

僅かながら、ランサーの顔に動きがあった事をエミリアは見逃さなかった。

彼女の言う通り、ランサーの狙いは未来を見て攻撃を見抜こうが、それを上回る速度を持って穿つ方法。手の内を既に読まれているのであれば、それ以上の速さで仕留めればいい。

エミリアに見抜かれていた事は癪であるが、彼女自身が攻撃を視えているとしても避ける事はまず不可能のはず。それに、炎の壁もいつまでも保てる訳ではない。ランサーは意を決し、エミリアの心臓を突き穿つ為に重心を左足に置き、力強く踏みつけた。

エミリアとの距離が一気に縮まる。その変わらないニヤケ面のまま、胸を貫かれたという自覚がないまま殺す為にも人間の状態で出せる限界まで出し切る最高の一撃。

槍の先端が赤い軌跡となってエミリアの胸へと迫る中、ランサーの耳に異なる2つの音が届いた。

「残念ねえ。とつくに『視えて』いたのよお。あなたが……………」

1つはエミリアの声だ。相も変わらず、こちらの全てを見透かしていると言わんばかりに余裕を見せつけるような、ランサーの行動を憐れんでいるような、どちらにせよ彼を嘲笑う事に変わりない高い声を響かせる。そして、もう一つは――

「な、にい――」

ランサーの背中から響いた肉を貫く鈍い音――

不意の出来事に身体から力を抜いてしまったランサーが前のめりに倒れながらも、何が起きたのかと自身の背中を見るべく目を後ろに向ける。彼の視界に映ったのは、自分の背中に生える血液に染まった黄色い果実と、それを投げたであろう老人：否、真の姿を現した怪魔妖族ビヤツ鬼が不気味な本性を現していた。ビヤツ鬼は炎の壁の向こう側から冷凍バナナを投げつけ、ランサーの背後へと突き立てたのだろう。炎の向こうから、獣のような口を歪めるビヤツ鬼の声が木霊する。

「ふん、このような炎など、私の絶対零度まで凍結されたバナナの皮すらふやかす事もできんわ」

「ケツ、そいつは…申し訳ない、ねえ」

悪態をつきながらもついに床へと伏してしまったランサー。彼の手から離れてしまった槍は甲高い音を立て、床へと転がっていくが踏みつけて槍の動きを止めたエミリアは耐えに耐え続けた感情を、一気に爆発させた。

「アーハツハツハツハツ！そうそう、その無様な姿が『視えて』いたのよねえ！私に勝つつもりで、そして不意打ちを受けて無念その顔で私を見上げるの！本当に、本当に可笑しいわあ!!」

エミリアの高笑いにギリギリと脳髄を締め付けられるような頭痛に襲われるランサーの背後から迫る複数の足音。どうやら自分が倒れたと同時に炎の壁が消失し、武器を持った雑兵共が迫って来ているのだろう。

たかがバナナ一本でここまでダメージを受けるとは、エミリアの言う通りに自分は大分落ちぶれたのかも知れない。だが、それでもランサーには譲れない意地がある。

そう思い、ポケットにねじ込んである鍵束へと震える指を重ねたらランサーの脳裏に、あの日に起きた出来事が蘇る――

3ヶ月前。

とある武装組織に身を置いていたランサーへとある研究施設への潜入任務が言い渡された。

それは、彼が組織に属してから初めて指揮を任される任務でもあった。

「つーわけだ、足引つ張んじゃねえぞ手前ら」

「おいおい、おたくで俺らを指名しときながら随分な事言ってくれるじゃないの」

「そんなんだから相棒のレディに年中呆れられてんじゃないですか？」

「せ、先輩方！隊長に向かってそれは…」

「気にするな新人。ランススにとっては挨拶代わりなもんだよ」

「おいおい、ミーティング中にお喋りは現金だぜえ。隊長様の堪忍袋もそろそろ限界に近い」

ギヤング上がりで口の悪いジエイムズ。

口調は丁寧だが女好きのピーター。

一番年若いが度胸の据わっているユーゴ。

酒とギヤンプルには目がないロン。

いつも馬鹿笑いしながらも周りを見ている最年長のデーモン。

配属された部隊で、ただ使用するロッカーが隣だったというだけという関係から日中は互いの背中を守り、夜は共に酒浸りになるといいう日々が続く、友と呼べる間柄になるまでそう時間はかからなかった。

実際はこのチームにもう一人、ランサーが聖杯戦争を生き抜いたパートナーが参加するはずであったが、彼女は義手の調整の為に今回は不参加となっていた。今思えば、彼女にトラブルが生じた事は不幸中の幸いだったのかも知れない。

「んで、俺らに下された命令は工作員との連絡が途絶えた施設の調査。捕虜にされてるようなら救出、場合によっちゃ破壊ってことだ」

テーブルに広げた地図の一点を差すランサー。彼の指が置かれた場所は、本来何も存在しない。つまり、秘密裏に建てられた違法研究所なのだ。聞かされた話によれば、やぶれた怪人の残骸を回収、そこ

から兵器への転用やクローン再生など目論んでいる連中が潜んでいるという。

「なんだよ、いつもの任務と変わりねえじゃねえか。爆弾しかけてボンツで今回もおしまい。楽勝じゃねえか」

「いいやジエイムズ。それだったら先に潜入した工員がとつくにやっている。ならば、それ以外に何かがあるという事だ」

軽口を飛ばすジエイムズを制したデーモンは顎に手を当て、他に何かがあると資料を睨むが、彼が求める情報はそれ以上に得られることは無かった。デーモンの意見に同意するロンは愛銃を取り出し、隣に立つユーゴへ撃つ仕草をして意見を聞いた。

「確かに、ご老体の言う通りだろうよ。だが、それでこそやり遂げた後の酒は旨いというものだよ。なあロン？」

「お酒に関しては勉強中ですけど、これは僕らにしかできない任務です。そうですよね隊長」

力強い意思を秘めた目で訴えてくる最年少の兵の姿に、ランサーとピーターは互いに見やりながら静かに微笑む。そう、これは自分達にしかできない任務だ。

戦えればいい、なんて入隊した当初とは別の思いが育み始めたランサーは、この連中とならば乗り越えられない戦いはない、そう断言できる、はずだった。

「おいおい…悪趣味にも程があんだろ…」

謎の施設に侵入し、捕らわれたであろう作業員の救出にジエイムズ達に向かわせ、自身は単独で怪人達が潜んでいるであろう研究室へ足を運んだ。だが、彼が見たものは怪人の残骸などではない。むしろ、怪人の残骸であつて欲しかった。

「人間の手足……それにどれもごく丁寧に冷凍保存されているとはな」

ランサーが目にしたのは、ガラスの向こうに並ぶ人間の一部分。どれも指、二の腕、爪など事細かく小分けされており、中には臓器部分までが並んでいた。どう探しても、五体満足である人間は見当たらない。

肉体の形を見る限り、この場にあるのは女性だけのようだが、こんな所が存在すると思うだけで気分が悪い。ランサーは制御系に携わっているであろう端末を発見し、槍を振りかぶった直後、何者かの気配を察知して急ぎ振り返る。

「……………」

「ロン……何があつ——」

いつの間にか自分と同じ部屋に入ったロンの表情はヘルメットを装着しているために読み取れない。様子がおかしいと踏んだランサーが呼びかけようとした途端に、彼の言葉が止まる。

ロンが、無言でランサーに向かい攻撃を仕掛けてきたからだ。

いや、彼だけじゃない。

「お前ら——」

気が付けば、共に侵入してきた仲間達5人に囲まれていた。それぞれ得意とする武器：ランサーと同じく長物や打撃武器、中国拳法の構えを見て、ランサーは察する。彼等は本気だ。本気で自分を殺そうとしている。

（催眠術にやられた、か。なら、悪いが意識を刈らせてもらうぜ！）

駆けだしたランサーへ同時に攻撃をしかけてくる5人に対し、全ての攻撃を寸前で回避するランサーは一番身近にいたジェイムズの後頭部に槍の柄を叩き込む。以前の模擬戦でもこれにより数時間眠らせた荒業だったが、飛んだのは意識ではなく、部隊特有である、フルフェイスであるヘルメットだけ。

最初こそ攻撃を受けて項垂れていたジェイムズだったが、ゆっくりとした動作で顔を上げ、ランサーへと視線を向ける。ジェイムズの表情を…彼の姿を見てランサーは息を飲む。

「っ……」

ジェイムズの額から、何かが生えている。いや、生えているとは言いがたい。今も懸命になって、彼の額に開いた穴へと生々しい音を立てて入り込もうとする幼虫のような生物が蠢いている。ジェイムズの両目、耳、鼻、そして口から絶えず血が流れており、人の声とは思えない音声が、喉から漏れ続けていた。

「あ〃、あ〃、あ〃、あ〃……」

それは他の4人も動揺だった。

白目を血液で染めた5人は一歩、また一歩とランサーへと接近していく中、室内のスピーカーからこの悪夢とは不似合いの少女らしき声が響いた。

『どおかしら侵入者さあん？お出迎えのお茶代わりには刺激が強かったかしらあ？』

「何…こいつらに何をしやがった!?」

『どおもおももないじゃなあい。人の家に土足で踏み込んだ君達がいけないんだぞお?』

「訳わかんないこと抜かしてんじゃねえ！この虫みてえな奴を今すぐどけやがれ!」

スピーカーから漏れる女性の声に怒声をぶつけながらも攻撃を避け続けるランサーは、この奇妙な生物が彼等をおかしくしている原因だと見抜き、取り除く方法を聞き出そうとするが、最悪強引に引っこ抜くという手段も考えていたが、その考えは直ぐに否定されてしまった。

『もう無理よお?だって、私の転位の魔術でその気持ち悪い虫の脳と、その人達の脳を完全に結合させちやっただもーん』

「ッ!」

『だから無理なお。どうしても止めたければ殺すしかないわねえ。それにい、その虫、人間に寄生して意のままに操るっていう怪人の試作品なんだけど、あるプログラムだけ仕込んであるですってえ』

『目の前にいる人間をお、ひたすら殺し続ける、ですてえ!』

『もしこのまま生かしておいてえ、近くの街なんかに行ったらどおーなるでしょう!キヤーツ楽しみイ!!』

僅かな希望が閉ざされた。彼等を、共に戦い抜こうと誓ったばかり

の同志をもう救えないという現実を突きつけられたランサーに迫られた選択は、もはや一つしかなかった。

「あ”、あ”、あ”、あ”、あ”……」

槍を力強く握る自分に、猶も奇声を上げて迫る5人に対し、ランサーは躊躇なく槍を放った――

『キヤハハハハハハハハハハハハハハハハ』

人の神経を逆なでする甲高い笑い声が木霊する。そこは遮られた空間だったこともあり、否応なく木霊する。

あと他に聞こえるとしたならば……

『すつごーい！というかひつどーい！本当に戦うとなったら容赦しない人なのねえあなたって』

『さすが神話に登場した英雄様ってだけあるわあ。だって……』

聞こえるとしたならば……

『味方だった人達をこうもあつさりと惨殺しちゃうんだもくん!』

自身が握る槍から滴れる、かつて『仲間』と呼んでいた者達を貫いた血液が、床一面に広がる赤い水たまりへと落下する音だけだ。

ピチャリ、ピチャリと…

「てめえ…」

静かにランサーの口から漏れる低く、怒りが込められた声を聞くスピーカーの向こうにいるであろう女性は、冷ややかに告げる。

『ちよつとちよつとお。私が悪いみたいに睨まないでくれるう?その人達をおかしくしたのは私だけどお、殺したのはあ・な・た・なんだからねえ。そこは間違えないでよお』

『この人殺し』

その後、駆け付けたランサーのパートナーであるバゼット・フラガ・マクレミッツが見たものは、一心不乱に施設内を探し回り、何も得られなかった苛立ちに機材を叩き壊すランサーと、敵によって人ですらなくなっていた同僚5人の亡骸であった。

さらに遅れて到着した司令塔である結城丈二により、今回の犯人であろう人物が特定された。

エミリア・シュミット。

ランサーからの報告と重ねあわせ、死んだとされる魔術師の姿が浮かび上がった。

その名を聞いたランサーは、拳を強く握りしめる。バゼットに指摘されるまで、自身の血がしたり落ちることに気が付かない程に。

以来、任務をこなしながらもランサーはエミリアの影を追い続けた。時には暴力的な手段を無表情で講じながらも、追い続けた。

そしてエミリアが日本にいると聞き、バゼットの制止を振り切つてまで日本へと飛び、ついに対峙するまでに至る。

だからこそ、こんな事で眠っている訳にはいかないのだ。

「く、う…」

「あらあ、まだ立てるのねえ。背中にまだバナナが刺さったままだつていうのに」

「あいにく…こんなもん笑い話にもならない状況でも戦ってたもんでね…ぐツ!？」

背中に刺さったバナナを自身で引き抜き、息を荒げながらも立ち上がったランサーに、止めと言わんばかりに再度両手にバナナを構えるビヤツ鬼に、マリバロンは待ったをかける。これ程の傷を負いながらも立ち上がった男は、疲弊しながらさらに闘士を燃え上がらせている。

その理由はなんであるのか。

力がないにも関わらず立ち上がった男に興味を持ち始めたマリバロンとは逆に、ランサーの姿が滑稽で仕方がないエミリアはなおもランサーの行動が可笑しいのが、笑いながらも問いかける。

「アツハハハハハハハ！何をムキになって立ち上がってるのお？あの時も言ったけどお、敵討ちなんて筋違いもいいところなんだからあ」

ここにきてまで、自身は無関係であり、あの5人を殺したのはランサーと言いつけるエミリアに対し、ランサーは額の汗を拭い、笑いながら告げる。

「ああ、その通りだ。奴らを殺したのは、俺自身だよ」

確かに、殺した。

いや、仲間と呼べる存在を殺したのは、これが最初ではない。

聖杯戦争以前の：それこそかつてアイルランドでその名を轟かせたランサーは、昨日の友が今日の敵など珍しくはないそれどころか、敵対する人物がかつての知人。ましてや血の繋がった者でもあった。

それでも、彼等はしつかりと自分と敵対する理由を持ち争う事になった。

だが、彼等にはそれすらも許されなかった。

自分を失い、ただの操り人形となってしまった彼等には、選択すらできなかつたのだ。

これを無念と以外に、なんと言えるのか。

だからこそランサーは：クーフーリンは誓った。

必ずあの魔術師をこの手で葬って見せると。友の無念を、この手で晴らして見せると。

「そういう訳だ。俺はこれしきの事じゃあ死んでやれないぜ、エミリア！」

力強く立ち上がったランサー。彼の姿に一部のチャップが慄き、マリバロンすら表情に出さないものの、見事だと内心で思う程に彼の姿は勇ましい。

「ふうん、そう。けど、どの道貴方の運命はもう決まってるの。私が見た未来——え？」

今まで余裕の態度を崩さなかったエミリアの表情が曇る。恐る恐る彼女が振り返るその先にあるのは、黒い棺桶。

「うそ…ありえない。そんなことありえない！」

「なんだ、どうしたのいのだ？」

エミリアの尋常ではない怯えように思わず声をかけたビヤツ鬼だが、直後にエミリアはマリバロンにしがみつき、懇願するように泣き叫ぶ。

「撃って！今すぐあの棺桶を撃って！！じゃないと…じゃないと！！」

彼女の反応を見て、何が起きるかと察したマリバロンは急ぎ命令を下した。首を傾げるチャップ達には分からないだろうが、マリバロンが持つエネルギーセンサーに膨大な反応が突然として現れている。やはり、時間を掛け過ぎてしまった。

「撃て！棺桶に向けて一斉射撃だ!!」

マリバロンの怒声に慌てて安全装置を解除した機関銃が、一斉に火を噴く。次々と飛び出す葉莖、立ち昇る硝煙。無情にもチャップ達に放たれた無数の弾丸は黒い棺桶に数百という風穴を開けていく。

やがて弾丸が尽き、すでに原型を留めない黒い棺桶からは煙がユラユラと昇っていく。

それでも、エミリアの怯えは消えない。

「うそよ…」

彼女自身が言っていた。

「こんな、はず…」

自分の見た未来は絶対なのだと。

「うそよおツ!!」

そして、自分の見た未来が起きて欲しくない願うのは初めての事であった。

棺桶の残骸から、煙とは異なる気体が漏れ始める。

それは火薬によるものではない、余剰エネルギーが変化して生まれたもの。

さらに強まる蒸気と共に棺桶の残骸を吹き飛ばしたのは、黒い腕。

残骸を払いのけ、むせる程の蒸気の中からその姿を現したのは黒い戦士。

赤い複眼とベルトを輝かせ、左胸のマークを煌かせたその戦士の名は――

仮面ライダーBLACK――間桐光太郎が、煙の中から現れたのであった。

第87話

時間は、間桐光太郎が敵の凶弾を受ける寸前にまで遡る。

「くっ、このままではいずれ——」

『——間桐光太郎』

「ッ!? キングストーン……」

『いいか。よく聞け。このまま——』

『無抵抗に敵の攻撃を受けろ』

「なっ——」

突然自分の頭に響くキングストーンの意思による指示に驚愕する光太郎。ただでさえ未来視を持つ難敵と暗闇からの攻撃に苦戦する中、あえて攻撃を受けるといふ声に混乱するしかない光太郎は反応が遅れ、危機を察する事ができたが既に遅く光太郎は衣服を床へと縫い付けられ、仰向けのまま動きを封じられてしまう。

「し、しまったッ!?!」

「と言った貴方に、無情にも敵の攻撃が突き刺さるの。そう——」

「貴方の心臓にね」

ズブリと、光太郎の胸に潜り込む黄色の細長い3本の果实。

「…っ…っ?!」

口と胸元から赤く、暖かい液体を流す光太郎は痙攣した後に、ピクリとも動かなくなってしまうた。

閉ざされた空間の中でエミリアの高笑いが木霊する中、光太郎の意識奥深くでは…

「いつてええええええええええ!!?すっごく痛い!今の俺、意識だけなのにすっごい痛いんですけどキングストーンさんツ!!」

『当然だ。今、お前の肉体は常人であれば死んでいるはずのダメージを負っている。それが精神体であるお前に反映されるのは当然の帰結だ』

「冷静に言わないでくれよ!いきなり攻撃を技と受けろって言われてこっちは訳がわからないし…」

『その訳の分からぬ方法があったからこそ、敵は我々が死んだと誤解

している。時間稼ぎはできるといふ訳だ』

「え…？でも、彼女には俺が死んだ未来が見えるって…」

『あくまであのふざけだ攻撃で倒れたお前の姿でも視えていたのだろう。ならば、その状況を作り出してやることで反撃の糸口を掴めるかもしれない』

エミリアと敵対した室内とは違い、本当に何一つ光が差さない…いや、光など差すことのないこの空間は、光太郎の深層意識。その中で胸を押さええて蹲って激しい痛みの走る胸を抑える光太郎に淡々と状況を説明するのは、仮面ライダーBLACKの姿を借りた神秘の石キングストーンの意味だ。

光太郎は外因による大きなダメージを受けた際に度々訪れるこの空間にもはや慣れつつあり、キングストーンとの会話にも違和感を忘れてかけていたが、今回キングストーンが立てた策を耳にして改めて彼の力の底知れなさを思い知る事となる。

『確かにあの果物はお前の胸に突き刺さっている。だが、その直前に心臓の位置を動かし直撃は避けている。臓器の急激な移した反動でやや出血は多いようだがな。おまけに瞳孔を開いたまま呼吸も止めているので体内全てが悲鳴を上げている』

「いや聞くだけでも滅茶苦茶痛いだよ!？」

『何を言う。例えば心臓に突き刺さろうとしてもお前の改造された心臓は通常の数十倍以上の熱を発している。冷凍された果実など迫った段階で解凍され、お前の胸と柔らかくなった果実が結合されたまま、痛みと不快感を織り交ぜた気分を味わう羽目になったのだぞ?』

「何その今の状態がまだマシンに思える状況…」

確かに改造された光太郎の肉体は普通の人間とは違うものになってしまっているが、今回は忌むべき改造手術に救われた形になってしまっている。

敵への対策が見つからない今、キングストーンの言う通りに倒され

たと思わせる方が得策だったのだろう。

『ただし、対策が浮かんだとしても戦える状態に回復するには時間がかかる。今突き刺さった果実の消滅させ、損傷している肉体の修復に全ての力を注ぎ込んでいるからな』

「え……？そんな事をして、エミリア達にはれないのか？」

『ああ、これを幸運と言っていいのか分からんが、連中はお前の身体を棺桶に放り投げ、どこかに運んでいるらしい。せつかくの偽装工作もあまり意味をなさなかつたな』

「あ、アハハ……そうか……」

そうそう会える訳でもないのだが、会う度にどこか人間味が増して……というよりもこれが本来の彼ではないのかと思いはじめた。光太郎は、ふと以前から抱いていた疑問をキングストーンへとぶつける。

「君は……何者なんだ？」

『それはお前が一番理解しているだろう。キングストーンの意味だ』

「いや、そういう意味じゃない。キングストーンが長い時間をかけて意思を持った。あれだけの力を発揮できる君たちならば、確かに納得のいく話だよ。けど、俺には……もつと以前からあるように思えるんだ」

「キングストーンという力の結晶が誕生する以前から……君自身の心が」

『……………』

以前から不思議に思っていたことだった。

キングストーンの出自を知るであろう創世王はもういない。そのため、キングストーンという石がいつ、どこで生まれたか知る者は不在のままだ。だから、長い時間をかけて神祕を宿したキングストーンが自らの意思を持ったとう憶測でしか語れない。

だからだろう。創世王の新たな肉体を選ぶ儀式から解放され、危機を迎える光太郎に声をかけ、力を授けてくれるキングストーンへ本人が言う力の塊に過ぎない石に、それ以前から確かな意思があったのではないか…

光太郎の質問を受けて無言を貫いていたキングストーン…BLA CKは赤い二つの複眼を光太郎に向ける。

『私は…むッ!?』

「どうした…これは!」

キングストーンと光太郎の全身に巡り、流れ来る『何か』
激流の如く込み上がる怒りと哀しみ、そして後悔。

キングストーンと光太郎の精神に揺さぶりかけるこの感情は、先日メディアから聞かされた光太郎に残る大聖杯の残滓を通して伝わる、サーヴァントによるもの。

そして脳裏に流れる、彼の記憶…

「そうか…そういう事だったのかランサー」

『未来視を持つ女を相手に、誰かを巻き込まぬよう単独で活動していたというところか。』

「キングストーン…悪いけど」

『解っている。話は後だ。そして治療を中断して変身、だな』

「ああー!」

仲間の危機を前にして光太郎の行動など言うまでもなく見抜いて

いたキングストーンは頷くと、光太郎の意識を覚醒させるため掌を翳す。黒い掌から光が広がり、周囲の風景も黒から白へと染め上がっていく。

『だがいいか。例え目覚めた後にRXとなってもお前の傷は完全には塞がらない。それ程の傷であるという事を注意して戦え』

「忠告ありがとう。でも、俺は負けない」

キングストーンの忠告に力強く頷いた光太郎の姿にキングストーンの意味もまた深く頷く。やがてキングストーンの意味の姿が消えると光太郎の意識は一度深く息を吐いた。

(結局、聞きはぐつちやつたかな…でも、今は！)

彼と出会えるのは、今回のような非常事態のみ。だから、もし次にかう事が可能な日がくるならば、改めて聞いてみたい。そう考えた光太郎は意識を切り替える。

右半身に重心を置き、両腕を大きく振るうと右頬の前で握り拳を作る。

ギリギリと音が聞こえる程込めた力を解放するような勢いで右腕を左下へ突出し、素早く右腰に添えると入替えるように伸ばした左腕を右上へ突き出す。

「変っ——」

伸ばした左腕で扇を描くように、ゆっくりと右半身から左半身へと旋回し——

「――身ッ!!」

両腕を同時に右側へと突き出した。

光太郎の腹部にキングストーンを宿した銀色のベルト『エナジーリアクター』が出現し、光太郎を眩い光で包んでいく。

その閃光は光太郎の遺伝子を組み換え、バツタ怪人へと姿を変貌させる。

だがそれも一瞬。

エナジーリアクターから流れ続ける光はバツタ怪人を強化皮膚『リプラスフォース』で包み込み、黒い戦士へと姿を変えた。

左胸に走るエンブレム。触覚を思わせる一対のアンテナ。真紅の複眼。そして黒いボディ――

仮面ライダーBLACKへと変身した光太郎は抉るような痛みに耐えながらも、自分を閉じ込める黒い棺を内側から破壊する。その行動が既に敵に読まれていたのか、銃弾の雨が降り注ぐがそんなものは通用しない。

敵の攻撃が止まると光太郎は自分に被さった破片を関節部から漏れる余剰エネルギーの蒸気で払い飛ばし、ゆっくりと立ち上がる。

光太郎を見て警戒する者、臆する者、そして傷を負いながらもニヤリと笑う者：様々な反応を見せる中、光太郎は足を屈め、その場から跳躍。

「トアッ!」

空中で前転し、音もなく着地した場所は背中からドクドクと流血を続けながらも立ち上がるランサーのすぐ隣。光太郎は自分達を囲いながらも距離を取るチャップ達に向かい構え、息を荒いままであるランサーへと声をかけた。

「大丈夫か？」

「へっ…らしくなく頭に血い登ってたところだっただんで程よく抜けたってもんだ。お前さんこそ随分手痛くやられたみたいじゃねえか…」

「ああ…だからこそ、借りは返さなきゃね…」

犠牲となったランサーの仲間達の為にも。

言葉にすることなく、決意を固めた光太郎はマリバロンの影に隠れる濁った眼を恐怖に染める女性を指差し、運動場に声を轟かせた。

「…魔術師エミリア・シユミツトツ!!」

「ツ!?!」

「自らの欲望の為に多くの人々から命と身体を奪ったことを、俺達は断じて許さんツ!!」

第88話

「自らの欲望の為に多くの人々から命と身体を奪ったことを、俺達は断じて許さんッ!!」

蘇った間桐光太郎が変身した仮面ライダーBLACKはマリバロンの背後に身を潜めていた魔術師エミリアシユミットへ向かって指を差し、力強く断言した。

自身をより理想のである姿へと昇華させるために女性の肉体の一部を奪い続け、さらにはランサーに仲間達を殺させるよう仕向けた嗜虐性に怒ると同時に、これ以上の犠牲を出さないための決意でもある。隣に立つランサーの過去を大聖杯の残滓を通し、垣間見た事を本意ではあったが、『彼等』を救えなかった無念は同じ。

ならば今光太郎に出来ることは、ランサーと共にエミリアを止め、彼女に加担するクライシスを倒す事だ。

「あんま気張んなよ、黒い兄ちゃん…」

「あいてッ」

「状況は不利って事は変わりねえんだ。それに、全力を出せる状態でもないだろうが」

「それを言うならランサーだって…」

突然後頭部をこざいたランサーの指摘にひび割れ、血がにじみ出る胸部を手で押さえた光太郎は背中からビヤツ鬼の投擲された冷凍バナナにより負傷を受けた痛々しい傷を見る。どうやら自分が立ち上がった時を同じく、所持していた消毒液やガーゼ、包帯を使い器用にも自身で応急処置を施したようだ。

「んなもんかすり傷だったの。こちとらはみ出た臍物を腹にしまって戦った時よりか何倍もマシだぜ」

「うわあ、神話通りだったのかあれ…」

る。どこの誰のものだったか分からない少女の顔は醜く歪み、口元は本来の倍以上の大きく広がっていると思わせる程に吊り上げ、絶えることなく甲高い声を発し続けていた。

真上を見つめたままだった顔をゆっくりと下げ、光太郎達へと向けられた瞳は、やはり濁ったままである。

「そおよ…私の未来視は絶対…何も外れてなんていないのよお…」

「何を言っている。現実にごうしてRXは生きて…」

「あれはあッ!?間桐光太郎がアンタの攻撃で倒れてた姿をはつきり見ただけえ…生死の判別なんてわかるわけないでしょうお?!?!」

ビヤツ鬼の指摘に絹のように輝く金髪をかき乱して声を荒げるエミリア。その迫力に思わず閉口するビヤツ鬼を視界から外したエミリアは頭部を傾けたまま、再び光太郎達へと瞳を向ける。

「そうよお…さつきだつて仮面ライダーが棺桶から飛び出す姿をこの眼でしかと視たわあ…そおよ、私の未来には何一つ淀みがない、完璧な未来なのおッ!!」

ガラスを金属で引つ?いたと同じ、それ以上と思われる不快な声を轟かせるエミリアの発言は、全て自身の行程させるもの。

確かに彼女の視た光太郎はキングストーンによる仮死状態に過ぎなかったのだろう。だが、彼女は自身が見た光景を光太郎の死と断定してしまっていた。これまで見た未来を100パーセント当ててきた彼女にとつては、初めて間違いを口にしてしまった事になる。

現実には『光太郎がビヤツ鬼の攻撃を受けて倒れた姿』という未来を見たことは間違いない未来だった。しかしエミリアは光太郎が死んだと口にしてしまった。そう思い込んでしまった。

現在に至るまで自分の視た未来を口にしてきたエミリアにとって

生まれて初めて異なる結果を放ったと同時に、初めて言い訳してしまっただ。

「耐えがたい恥辱を味わったと身勝手な敵意、殺意の矛先はやはり自分の未来視を弄んだ間桐光太郎だ。」

「間桐光太郎お…殺して上げるわあ…私自身の手で、貴方の死という未来を導いて上げるわあッ!!」

エミリアが何処からともなく取り出したのは、毒々しい紫色の液体が詰まった容器。それを迷うことなく首筋当てるとスイッチを押し込み、液体がエミリアの体内へ一気に注入される。

「お、愚か者ッ！それは試作品の肉体改造酵素…ッ！それを使えば元の肉体には…！」

「アハハハハハハ!!簡単よお、そしたらまた集めればいいわあッ！私に相応しい顔、私に相応しい肌、私に相応しい髪…この世界には、私を美しくする素材で満ち溢れているんだからあッ!!」

マリバロンの制止にも耳を貸さずに液体を身体へ取り入れたエミリアの肉体は、人間で無くなった。

多くの人間から奪った借り物の皮膚は焼け落ち、トカゲの鱗と似た浅黒い肢体が現れ、足はネコ科生物のように細く、強靱な脚力を持つものへと変貌。

指先から伸びた爪は一刺しで人間の肉体を貫通する鋭さを持つ刃となり、エミリアの最近お気に入りであった顔はゴキゴキと音を立てて変形し、鈍く光る八重歯が生える。

残ったものは、金髪の髪と、相も変わらず濁った輝きを放ち、彼女が生まれてから唯一持ち続けている両目だけであった。

「あは、アハハハハハハハハハッ!! さあ楽しみましょお、殺し合いましょおッ!? あなたもいいわよねえッ!」

完全に人間としての姿を捨て去ったエミリアは爪同士をキチキチと摩擦させ、変異する自分から遠ざかっていたビヤツ鬼へ同意するよう睨みつける。もはや脅迫にも近い眼力を飛ばすエミリアの迫力に押されながらも、背後にいるマリバロンへと目を向ける。いくらか逡巡を見せるマリバロンだったが、無言で首を縦に振る。ここで領かなければ、化け物^{エミリア}は自分達にも牙を向く可能性すらある。

もう、自身が視る結果以外に興味を示さない彼女は、止まらないだろう。光太郎の死という未来を形にしなければ。

(利用価値があると思いついたが、もう手が着けれられん。やはり地球人とは、奴隷以外に使い道はない…)

狂い笑いを続け、地を蹴り光太郎達へと接近するエミリアの姿を見たマリバロンは光太郎達に悟られぬよう、静かにその姿を消したのであった。

「アッハッハハハハハハハハハハッ!! それぞれどうしたのよお!」

「くうッ!」

「こ、のおッ!!」

一方的な戦いであった。

怪人と化したエミリアは俊足で自分の姿を追う光太郎とランサーを翻弄し、死角に回り込むと両手に生やした爪で刻み込む。振り返っても既に遅く、再び攻撃の間合いの外へと脱していた。

時折、挑発するために立ち止まり、腕をヒラヒラと振る姿を確認させたのちに再度姿を眩ます。あえて彼等の神経を逆なでするような戦法を取るが、2人はそんな挑発に感情を揺さぶられる余裕すらない。

彼女は確かに怪人へと成り果て、その力は増大しているだろう。数十年の間、聖堂教会と魔術協会から逃亡する中で身を護る為に体術も身に付けたに違いない。

だが、所詮はそれだけだ。かつて英雄として名を馳せたランサー：クーフリーンとゴルゴム、そしてクライシス帝国と戦い続ける間桐光太郎が決して敵わない相手ではない。

歴戦の猛者である二人が苦戦を強いられてしまっているのは、戦闘前に深手を負ってしまった以外にも、エミリアの能力にあった。

「…仮面ライダーは右に、そしてランサーは左斜め前に走るわあッ！ぼさっとしてないで援護しなさいッ!!」

「——ちいッ！」

舌打ちしながらもエミリアが示した箇所へと冷凍バナナを投擲するビヤツ鬼。怪人の手から離れた凶器である黄色の果実は狂う事無く、光太郎とランサーが移動する地点へと突き刺さり、爆発を起こす。

身をひねって回避するが立て続けにエミリアの攻撃。

続けて未来視による光太郎とランサーの行動が読まれ、ビヤツ鬼のバナナ、チャップ達の銃撃によって反撃が阻まれる。

ただスタミナが奪われ続ける2人の息はとうに乱れており、光太郎

は胸板から、ランサーは背中から血を再び流し始めていた。

膝を付き、激しく肩を上下させる両者を見て攻撃を中断したエミリア怪人達は愉快愉快と何度目かになるか分からない高笑いを見せる。なぜ攻撃しないと怒鳴るビヤツ鬼と口論を繰り返り広げる中、ランサーは隣で胸を押さえ、出血に耐える光太郎を見る。

(くそ…せめてコイツに回復させる時間さえかせげりや…)

ランサーは光太郎が太陽の光を浴びれば強化される事を知っている。しかしここは屋内であり本来陽の光を差すためのガラス戸が全て遮断されてしまった。ならば一度光太郎をこの空間から逃がす必要があるのだが、敵はそうはさせてくれない。

いや、自分以上に光太郎の変身を警戒している連中がそうも簡単に逃がしてくれるはずがない。

(こうなったら…やるしかねえか)

意を決したランサーは懐からルーン文字が刻まれた釘を取り出し

光太郎に、制止された。

「…なんのつもりだ、兄ちゃん」

「こちらの台詞だ。それは本来、時限式爆弾のような役割を果たす術式って以前慎二君に聞いた事がある。そんなものを、今手にしてどうするつもりなんだ」

「……………」

まさか見抜かれていたとは思わなかったランサーはそれならば話

は早いと自身の考えを述べる。

「いいか。俺がコイツを掲げて迫ればエミリアの奴が警戒して連中は散開する。そうすればお前さんはその隙に……」

「そんな事をしたらランサーはどうなる？ 確かにピンを抜いた手榴弾を持った人が迫れば身の危険を感じて敵は遠ざかる……時間が過ぎて爆発したら……その術式の威力は、アレよりも上なんだろう？」

光太郎は未だかき消されていない炎……エミリアを倒す為に設置した炎の壁へと目を向けた。光太郎の言う通り、本来であれば時限爆弾代わりである術式を刻んだ釘。見た目とは反比例した威力で幾度となく作戦を成功させてきた。

しかし、これを手にしたまま爆発させるなど自殺行為以外にない。自分を逃がす為にそんな危険な方法を取るなど、光太郎は認められなかった。

「いいんじゃない？ 好きにさせてあげなさいよお。むしろこの人はそおしたいんじゃないのお？」

二人の話に割って入ったエミリアは爪で自身を傷つけぬよう腕組みし、もはや少女の面影が無い般若を連想させる顔で嘲笑する。

「だってその人お。自分の采配ミスで随分と人を死なせたじゃない？ だからあ、今回も戦いで誰かが死ぬのが嫌なんですよ？ 誰かが自分のせいで死ぬくらいなら自分が……キャーッ！ カッ！ コイッ！！」

身をクネクネを躍らせて1人恍惚に語り続けるエミリアの言葉に、釘を握るランサーの手が無意識に強まる。

（ああそうだ……あの時、俺は俺と、連中という2班に分けての行動を

取った。何度も考えた。あの時、全員が揃って行動してりやあ、奴らは死なずに済んだ。俺の間違え一つで、連中は明日を迎えられなくなった)

ランサーが心中で独白する様子に勘付いたエミリアは畳みかける。未来視を使うまでもなく、この男の末路など変わらない。変わらないからこそ、止めが必要だ。

「そうよねえそうよねえ！きつと彼等も貴方を憎んでいるはずよお！だってだってえ、貴方に命令させられなければ、今頃だって――」

「黙れッ!!」

ビリビリと、天井に設置された照明器具、壁に設置されたバスケットボールのネットが振動する程の絶叫が響き渡る。エミリアの言葉を無言で受け止めていたランサーも、心地よく述べていたエミリアも、どのタイミングで攻撃をしかけようかと機会を伺っていたビヤツ鬼達すら呼吸を止めてしまう程の、咆哮。

膝を付いていたはずの光太郎が2つの足でしつかりと立ち上がった。呼吸は未だ落ち着かず、肩が上下する運動も止まらない。それでも、言わなければならない。隣で自分を見上げる男と、その仲間達を侮辱することだけは決して許せなかったから。

「…確かに、ランサーが仲間達と一緒に居れば、結果は違っていたかもしれない。今となつては、確かめようがない。誰にも…分かる訳がない…」

ギリギリと拳を強く握る光太郎は真つ赤な複眼を茫然とするエミリアへと向け、

「だが、これだけは言えるツ！彼等はランサーを決して恨んでなんていないツ!!ランサーは仲間を信じていたからこそ別行動を任せ、仲間達はランサーを信じたから受け入れたツ!!誰一人、ランサーを恨むはずがないんだツ!!」

これは、ランサーの記憶を垣間見て、確信した事だ。

見たのは一瞬であり、光太郎が見たものが全てでないかも知れない。

それでもはつきりと言える。

ランサーと仲間達に、遺恨など何一つないと。

「なによ…赤の他人であるアンタなんかになんでそんな事がわかるのよ」

「わかるさ。俺は、お前と違って仲間を信じられるからだ」

「なん、ですって…?」

「何度でも言ってるよ——俺は、仲間を信じている」

「自分以外を認められない、思う事すらできない、憐れなお前と違ってなッ!!!」

「キアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

立ち上がった光太郎を脅威と判断したのか、光太郎の言葉に我を忘れたのか。エミリアは絶叫と共に爪先を光太郎の喉目がけて突進する。

どんなに強がろうと立つ事がやつとの改造人間ごとき、自分の敵ではない。だからこれで終わりだ。これでもう雑音が耳に入ることはない…

余談であるが、いくつかある未来視の中には、本人の意に介さず、強制的に未来を見せるものがある。

もし、エミリアの持つ未来視がそちらだった場合であれば、長年の末に自身の意思で未来視の切り替えなどできるようにならなければ、このような結果とならずにすんでいたかも知れない。

あと一歩踏み込めば光太郎の喉を貫く…その一瞬、エミリアの耳に思いもしない音声が届いた。

《ドリル、プリーズツ!!》

エミリアと光太郎との中間地点。

床がメリメリと瞬く間に砕け、アスファルトの粉塵と共に飛び出したのは黄色い水晶のような仮面を纏った戦士。

だが、タイミングがあまりにも悪かった。

「な、何——ぶベツ!？」

「兄さん、無事で——きやうツ!？」

地中から姿を現した仮面ライダーメイガス：間桐桜の勢い余った登場によって彼女の頭頂部は光太郎へと迫っていたエミリアの顎にクリーンヒット。

エミリアは放物線を描き後方へと吹き飛び、チャップというクツ

シヨンへと落下する。

「い、痛い…」

「大丈夫、桜ちゃん？」

頭を押さえてしやがむ桜の眼に、黒い掌が映る。見上げれば心配していたはずの義兄が心配そうに見下ろす姿を見て急ぎ手を掴んで立ち上がった桜は傷だらけでありながらも生きている光太郎とランサーの姿に安堵し、改めて周りを見る。

「兄さん、今外では見張りの敵と兄さん達が押さえてくれています。あとは、目の前にいる人達を倒すだけです！」

「そうか…ありがとう」

この上ない増援が現れてくれた。今この場に変身した桜が現れ、他の敵を慎二やメドゥーサ達が戦ってくれている。

そして、桜が必要以上に大きく穴を開けてくれたという事はくれたということとは…

『そうです、私なのです』

「ロードセクター！」

『そろそろ皆様同じ描写は飽きてきた頃でしょう、巻きで参りますのでエネルギー照射シーンはカットカット』

「い、一体なんだっていうよお…」

「な、何という事だ…」

「なによビヤツ鬼のおじさん。一体何が…」

顎への一撃が響いたのか、足元で気絶しているチャップ達を踏みつけて、ヨロヨロと立ち上がったエミリアは怖気着いた声を漏らすビヤツ鬼の視線を追う。

資料でしか知らない、あの姿。

もし見かけたのであれば、即撤退せよと耳にタコが出来るほどに言われた存在。

仮面ライダーBLACK RX

太陽の光がない限り現れる事のないが、最近になって例外が発生した。

彼の背後に浮遊する、赤と白で彩られたバイクらしきマシン。

ロードセクターと呼ばれる特殊バイクによってBLACKはRX

へと強化されるのだと。

「桜ちゃん、他の連中を頼む」

「わかりました！」

RXとなった光太郎の言葉に頷いた桜はメイガスソードボウを手に顕現させ、周囲のチャップへと跳びかかる。彼女一人に任せて問題ないだろう。

だからこそ、自分達がやるべき事は一つ。

「おいおい、怪我人に何させる気だあ？」

「そんな事、微塵も考えてないだろ？」

「はん、本当に言うようになったじゃねえか…さっきの絶叫、振るえたぜ？」

心の底から、震えあがった。

どんな経緯で光太郎が自分の過去を見たかは知らない。だが本来ならばエミリアの言うように自分の責任で仲間を死なせ、彼等も自分を恨んでいると認めてしまうところであった。

だが、光太郎は否定した。エミリアが突きつけた可能性を、別の可能性で叩き壊してくれた。

事実はどうなのか、今では分からない。実際には彼等は自分を恨んでいるのかもしれない。

だが、光太郎の言葉によって脳裏に浮かぶ彼等の姿は最期の、無残な姿ではなくなった。

共に戦場を駆け抜け、生き残った事を喜び合う、当たり前となりつつあったあの日常。

あの日の中に、彼等はいる。

今は、それだけで十分だ。

その時、僅かながらも力が湧く。魔力が強まる。徐々に、失ったあの力が戻るような感覚が全身に駆け巡っていく。

「なんだ…？」

「どうやら、繋がったみたいだな」

「繋がった…？」

光太郎の放った言葉に首を傾げるランサーであったが、彼の複眼の奥にある輝きを見て、理解する。どうやら、彼は知っているようだ。なら、任せて見ようじゃないか。

「なんだか分かんねえが、お前さんが自信たっぷりと言うんだ。乗ってやるぜ」

「やれよ、光太郎！」

「ああっ！」

ト
レ
ス
・
オ
ン
「同調開始!!」

光太郎が叫んだと同時に、彼の身体に変化が始まる。

光太郎の赤い複眼とベルトの中央にある赤い2つの結晶が青へと染め上る。メドウーサと力を共有させた時と同じように、ランサーを象徴する青いオーラへと包まれる。

ランサーに外見の変化はないものの、光太郎から流れるハイブリットエネルギーをその身に受け、魔力へと変換される。それは、聖杯戦争時とは比べものにならない魔力であった。

「ハッ、こいつはいい！身体のキレまで良くなってきやがった。行ける行ける！」

そう言っつて拳を掌に叩き付けたランサーの服装が軍服のズボンにタンクトップという装いから、聖杯戦争時に見せた青い戦闘装束へと変わる。

だが、それでも足りないものがあつた。

「何かを忘れてないかしらあ、貴方？」

目を向けた先に立つのは、怪人達のエミリアだ。そして自分達の後方では両手にバナナを構えたビヤツ鬼がいつの間にか移動していたようだ。なにやら自信満々にこちらへと尋ねるエミリアの手には、長物が握られている。

先の戦闘で手放してしまった、ランサーの槍だ。どうやらランサーが光太郎と力を共有させている間に拾い上げたようだ。

「だめよねえ、貴方にとっては大事な大事な槍なんですよ？ 敵の心臓を必ず突き刺すって有名なものなんですよ？ こんな危険はものは……」

両手で槍の柄を握るエミリアはあらぬ方向へと槍を曲げる。ミシミシと音を立て、撓りながらも抵抗を見せていた紅い槍であったが、

「はい、パツキーンッ！」

擬音を口にするエミリアの手にあったのは、二つに分かれてしまった、ランサーの槍。

「ら、ランサーさんの槍が……！」

乾いた音と共に、無慈悲にも放り投げられたかつてランサーの相棒ともいうべき朱い槍。あの槍が、彼がどれ程頼りにしていたか桜は知っている。

だからだろう。エミリアが急ぎ回収し、彼から戦闘能力を奪うと同時、力を付けた彼の精神を少しでも削ろうとするために。

いくら魔力を共有させようと、英霊としての力を取り戻そうとも、十八番の戦法が使えないのでは、膨大な魔力も宝の持ち腐れというものだ。

「ざあーんねえーん！貴方の自慢の槍はもうこの世にありませえんツ！精々悔しがり——」

おかしい。たった今、この世界で彼の唯一無二であるはずの槍を叩き折り、戦う手段など小賢しいルーン魔術だけ。

だというのに。

なぜ、彼は笑っているのか。

「なあおい——」

「お前さん、一体『何を』折ったって?」

ランサーの手に魔力が凝縮、固定化されたことによって、それは顕現された。

形だけなら、先ほど折られた槍と全く同じ。

だが、担い手に握られたそれから発せられる禍々しき力には到底及ばない。

「…以前の時は自由自在に出せたんだがよ。人間なつてから出すだけでも精一杯で、形にするだけでも5分と持たねえ。そこで気を貸せて

くれたお偉いさんが贋作を作ってくれた訳だ」

クルクルと頭上で回転させた槍で空気を切り、エミリアへと向ける。

「コイツが真正銘の『ゲイボルグ』！その威力は…今から教えてやるぜ」

「死棘の槍…躲せるもんなら、躲せてみな」

「う、わあああああああああツ!!」

ランサーの挑発にエミリアが突き動かされたと同時に、ビヤツ鬼は絶対零度まで凍結させた人の身程の大きさを誇るバナナを剣のように構え、光太郎へと突進する。

「RX、覚悟おツ！」

「覚悟するのは…お前の方だツ！」

青く輝くサンライザーへと翳した手の中に現れたのは、リボルケインではなかった。柄はリボルケインのそれよりも長く、そして刀身は短い。一気に引き抜いた光太郎が手にしたのは、ランサーの魔力を受けてリボルケインが変形した槍：色こそ違えど、ランサーのゲイボルグと瓜二つであった。

背中合わせにそれぞれが相対する敵に向かい、光太郎とランサーは寸分の狂いなく、同じ動きを見せる。

腰を落とし、構えた槍の先には時間の経過と共に魔力が宿っている。

(なにが躲せるものなら、ですってえ!!?私の未来視は絶対!!いくら宝具だからと言って、狙った軌道さえ見えればこっちのものッ!ワザとギリギリに避けて、呆けたその顔を――)

エミリアがその両眼に魔力を通す。

これにより、エミリアは全てを見てきた。

自分を攻撃する者の動きも。

自分を陥れようとする罠も。

全てをその眼に見てきたのだ。

だからこそ、これから視る未来も絶対――

否定する術を、知らない。

彼女は、そうやってしか生きてこなかったのだから。

『刺^グし穿^イつ——』

(なんで…)

『死^ボ棘^ルの槍^グツ!!』

(なんで…)

それぞれ紅い軌道と蒼い軌道で放たれた槍は…

(なんで…未来は…外れないの?)

エミリアとビヤツ鬼の心臓を、確実に貫いた。

第89話

トレス・オン
同調開始

それは衛宮士郎が魔術を発動させる際に唱える言葉。遠坂凜達が魔術を使役する詠唱とは異なり、言うならば人間から魔術師へと切り替えるスイツチのようなものだというのが、本人からの話だ。

亡き養父から言われたように、自分を越える、切り替える為に用いているこの自己暗示に、間桐光太郎が興味を示したのは以外であった。

遠坂凜から久々に課題を言い渡され、追い出されるように彼女へ提供している離れから突き出された士郎は課題である強化の魔術を実践した時だった。

光太郎は見学を申し入れた時、下手な結果は出せないと凜に教えを受けた時とは別の意味で緊張したためか、失敗。恥ずかしいところを見られてしまったと気まずくなる中、光太郎は真顔で士郎の両肩を掴む。

自己暗示と、強化魔術を使用する時、どのような感覚であるのかと。

そして慎二から強化をする際に、まずは対象の構造を理解しなければならぬ事、自分の魔力を通す道を作る事をイメージすると聞いた光太郎はしばし目を閉じ、何かを掴んだかのような表情を浮かべると士郎へと申し出た。

『衛宮君のその詠唱、俺が使っても大丈夫かな？』

面を喰らった士郎であったが、別に構わないと了承した光太郎は急ぎ土蔵から飛び出すと、今しがた姿を消したアーチャーへと接触し、再度あの実験を行った。

結果は成功。

光太郎の体内宿る大聖杯の残滓を通し、RXのハイブリットエネルギーを魔力へ変換しサーヴァントの力を増大させる方法を確実にした光太郎は嬉しそうに士郎へ報告したと言う。

どうやら士郎の強化魔術を見て、メドゥーサと発動させた力はただ自分とサーヴァントの気持ちの一つにするだけではなく、光太郎の持つハイブリットエネルギーを相手へ送り、同時に大聖杯の残滓を通し相手からのレイラインを一時的に繋げる必要があると気づいたらしい。

「あの時はびっくりしたよ」

「確かに。光太郎兄様は魔術回路というものをお持ちではありませんから」

「お、詳しいなガロニア」

勉強しましたからと言って無邪気な微笑みを見せるガロニアに士郎も釣られて微笑み返す。この会話が自宅の居間であり、彼女の家族である桜や慎二とお茶を啜りながらの会話であれば言うことは無いのだが…

「何を無駄口を叩いている。敵の増援が来ないとも限らんのだぞ。娘もさっさと窓を閉めて状況を把握しろ」

「油断大敵、という事だ。緊張感を持たないのは良いことだが、少しは、な？」

赤い外套を纏った男と朱い甲冑の男の忠告に、二人は表情を引き締めてそれぞれの役割へと戻る。

男達：アーチャーと仮面ライダー武神鎧武こと赤上武の足元には市民会館を囲うように見張っていた敵が倒れている。それは士郎とガロニアが搭乗するライドロンの周りも同様であった。

遠坂凜と間桐慎二から光太郎の危機を聞いた士郎は編入試験を終えたガロニアと共にライドロンと駆け付け、一同と合流。別々の調査で連続強盗の犯人とランサーが探す魔術師エミリア・シユミットの潜伏先を突き止めた慎二達は手始めに見張りを一網打尽にし、

手にした夫婦剣を握る士郎は周囲に再び雑兵チャップや怪人素体兵が現れないかと警戒し、ライドロンの運転席に座るガロニアは膝上に乗せたノートパソコンを操作し、光太郎が連れ込まれた市民会館を確認する。この端末、外側は格安で入手した中古であるが自身の部品やOSはメディアにカスタマイズされた逸品である。それも現代の電子技術にまだ不慣れであるガロニアに合わせて、彼女が行いたい作業を音声で伝えるだけで人工知能：メディアが色々やらかした甲斐あつてもはや電子の使い魔とも言っても過言でもないAIが自動でこなしてしまう。

さらにはライドロンのスーパーコンピューターと直結させたことで市民会館の監視カメラをハッキングし、光太郎とランサーの居場所を把握することに成功し、地中から助けに行くという桜の誘導が出来たという訳だ。

全てがライドロン製造時の副産物であるのだが、通常のパソコンにインストールした場合にはその情報量と求められる演算量に耐えられずパンクしてしまう。そこでメディアは部品自体も魔術的な『何か』で用いて製造。その気になれば世界経済状況すら操作できるパソコンが生まれる事となる。

慎二曰く、世界中の技術者に喧嘩を吹っかけているというパソコン

を操作するガロニアが片耳に装着された無線に、無謀な発言の張本人からの通信が入る。

『僕たちの場所、分かるか?』

「あ、はい。慎二兄様とメドゥーサ姉様の所在位置は…地下の機械室通路です」

『桜の開けた穴から上手く入れ込めたようですね。では、例の反応が出た場所までの経路をお願いします』

別行動を取っていた仮面ライダートリガーこと間桐慎二とメドゥーサはコツコツと異様に足音の響く暗い通路をゆつくりと進んでいく。市民会館の内部を端末で調べていると、光太郎達がいる運動スペースとは別に、地下1階で生体反応を発見した慎二は光太郎の援護を桜に任せてメドゥーサと共に地下へと向かった。

エミリアが凜から聞いた通りの人物であれば…そう予測を立てた慎二はガロニアの誘導に従いある一室へと辿り着く。

「……ここだね」

ドアの左右へ素早く移動し、メドゥーサがドアノブへと手をかける。2人はゆつくり頷いた直後、メドゥーサは一気に扉を開放し、慎二はトリガーマグナムを構え室内へと踏み込んだ。誘導灯の頼りない緑と白の明かりしか灯らない室内にいたのは…

「ん、んっ?!?んーっ?!?」

冷たい床に転がされた複数の若い女性たちだ。エミリアの足取りを追う中、新聞の地方版へここ数日の間に女子大生が頻繁に行方不明という記事を見掛けていたが、この街に来てエミリアが大人しくしているはずがないという慎二の勘は当たっていたようである。

手足をロープで拘束され、口には猿ぐつわでまともに話せないようにしてまである。おそらく長時間この暗闇でエミリアやクライシスに脅されていたのだろう。慎二を見た瞬間、彼女たちは助けが現れた

という安堵はなく、むしろ慎二を見て怯えている様子だ。都市伝説で英雄扱いされている存在だとしても異形の姿には変わりない。精神的に不安定となっている彼女たちから見れば敵も仮面ライダーも一緒なのかもしれない。

「メドゥーサ、悪いんだけど…」

「…招致しました」

まだ部屋の外で女性たちに姿を見られていないメドゥーサは慎二の言わんとする事を理解し、戦闘装束から普段着へと戻る。同じ人間の姿のメドゥーサなら、少しは安心するはずだ。

「ん？」

予想通りにメドゥーサの姿を見て安心した女性たちが開放されていく中、慎二は女性たちの視線に入らない位置に設置された手術台を思わせる物体と、並列された様々な道具が置かれた机へと近づく。手術台には手足、そして胴体と首をしっかりと固定させるベルトまであり、道具に関しては切断に必要な刃物や切り取った部位を腐らせず保存するための溶液が並んでいた。これが何を目的に準備されたものであるのか、もう考えたくもない。

幸いにも周囲に血が付着した様子がない事から犠牲者はまだでていない。しかし残しておく必要もないため、いつその事全て燃やしてやろうかとトリガーマグナムを手術台に向けた慎二の視界に、別のものが映った。目の前に広がる手術用の道具とは異なり、円の中に様々な文字が羅列された木製の板。

紛れもない魔法陣であり、その内容を分析しようとしてトリガーマグナムを一端左胸にマウントした慎二が片膝を付いて文字を解読しようとしたその刹那。

「なッ——!？」

魔法陣が突然閃光を放ち、爆発してしまった。

「シンジツ―!?」

閃光と爆発に悲鳴を上げる女性たちを庇うメドゥーサは爆発に巻き込まれた慎二の名を叫ぶ。もしや侵入者に対する罠が仕掛けてあったのかと爆発元へと駆けるメドゥーサだったが、彼女が抱いた不安は、煙の中から青い身体が現れた事で杞憂に終わる。

「シンジ、無事でしたか!」

「まあね、つたく、びつくりしたよ」

「あの爆発は一体…」

「多分、魔術を使用した直後に魔法陣が自爆する術式が仕組まれてたんだらうね。後を追わせない為だらうけど、ほんと尊敬するぐらいに用意周到だよ」

「追わせない…?では、あの魔法陣は」

「ああ、転移用の術式が記されてたけど、妙なんよ」

慎二は振り返り、煙が晴れた後に残った黒墨となった木製の板へと視線を向ける。見れたのはほんの数秒程度ではあったが、内容に関して逃走に使う転位魔術に間違いはない。だが、どうしても慎二には納得できない術式だったのだ。

「転位する対象が、小さすぎる。あんなの、赤ん坊すら飛ばすことができないよ」

時はしばし遡る。

光太郎とランサーが放った宝具の攻撃によりエミリアとビヤツ鬼は胸を貫かれ、エミリアは穿れた胸より噴き出した血液の海へと沈む。対象にビヤツ鬼は吹き出す血液を掌で圧迫し、表情を歪めながらも片手にバナナの束を出現させる。ビヤツ鬼が触れたバナナは瞬間的に絶対零度まで凍結し、人間を簡単に貫く凶器となるだけでなく、爆弾へも変わる。ならば、死期を悟ったビヤツ鬼がやろうとする事はただ一つ。

(自爆する気か…！)

「私と共に死ねえ！RXツ!!」

「…ここで、死ぬつもりはないツ!!!」

両腕を眼前で交差させた光太郎の身体が青く輝いた直後、溶けるように人型の輪郭を失い、液化するとビヤツ鬼へ次々と体当たりをしかける。

「ぬっ、お、おのれいッ!!」

バイオアタックによりビヤツ鬼の手からバナナが抜け落ちたと確認した光太郎は液体から青い姿…バイオライダーへ変わったと同時にその手にバイオブレードを顕現。両手で構え、刀身でエネルギーを包むと気合一閃、逆袈裟切りを炸裂させる。

「トアツ!!」

「ぬ、うぐ…ガアアアアアアツ!?!」

光太郎が振り上げたバイオブレードを振り下ろし、踵を返した直

後。断末魔を上げるビャツ鬼は爆発の中に消えたのであった。

「兄さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫、ありがとう桜ちゃん」

チャップ達を殲滅させた仮面ライダーメイガス：桜が駆け寄る姿を見てRXからBLACKへと戻った光太郎は安心させるように優しい声を上げる。義兄が無理をした時の声ではないと胸を撫でおろす桜であったが、運藤スペースに響く声に、思わず顔を向けてしまった。

「はあ、ははははは、アハハハハ…」

「こいつ…」

異様な光景だった。

心臓を貫かれたエミリアは変貌を遂げた怪人を彷彿させる姿から人間に戻っている。本来なら、そのまま動かないはず。動いては、ならない生物のはずだ。

血液の水たまりの中でガクガクと腕を振るわせながら立ち上がるうとするが、血液に手を滑らせバシャリ、と音を立てて沈む。

それをもう、何度も繰り返している。

血の海の中を無我夢中に泳ぐという光景にも見えてしまい、見ているこちらの方が気が狂いそうだ。

「アハハハアハハハ…もう、この身体はダメ…でも、私は死なない。死なないの…完璧な、完璧な私を完成させるまではあ」

顔の半分以上を血化粧で染めた姿に戦慄する光太郎と桜であったが、むしろエミリアの姿を見て冷静となるランサーは彼女の頭部に狙いを定め、槍を振り上げる。

「アハハ ハハ ハハハハハハハハ ハハハハハ ハハ ハハ：残念ねえ…やるんだったらあ、もう一思いにやるべきだったわねえ」

エミリアは震える指先に魔力を込め、自らの米神へと押し付ける。まるで、ロシアンルーレットで拳銃を自ら打ち抜く姿のように。

「また、会いましょう——」

指先が仄かに光を見せた直後、エミリアの頭部は本当に打ち抜かれたかのように仰け反り、血液の中へと沈む。もう起き上がる事はなかった。

「終わった…のか？」

最後は犯人による自殺という歯切れの悪い幕切れとなってしまうと変身を解除する光太郎とそれに続く桜。だが、槍を消失させたランサーは否定する。

まだ、終わっていないと。

「やろう、逃げやがったか…」

遺体の髪の毛を掴み強引に持ち上げたランサーはそう呟いた。

エミリア・シユミットは本来家に伝わる魔術に関心を向けず、転換の魔術を極めようと躍起になっていた。その結果、自身の身体へ別人の一部を移植し、理想とする自分を完成させるために多くの人間を犠牲にする殺人鬼と成り果てた。

そのような危険人物を魔術協会、そして聖堂教会が放置する事などあり得ない。その為、エミリアは自分の身に何かが起きた場合の策を何重にも講じていた。

その一つが自分が深手を負った場合に、生き延びる算段：すなわち、自分の脳髓と眼球をいかなる時でも転換できるよう加工し、条件が揃えば予備の肉体へ転位させる事を可能としていたのだ。

現にエミリアは一度この手を使い聖堂教会の代行者へ自分は死んだと思わせ、ゴルゴム・そしてクライシスへと身を潜めて逃げ延びていたのだ。

今回も同じ手を使い、どうにか生き延びたエミリアは眼と脳髓が予め準備していた肉体に馴染むまで身を潜めるつもりであった。

(この国はもう駄目ねえ。どうやら目を付けられたようだし、あの仮面ライダーにも触らぬ神に祟りなしてやつう?)

心中で呟くエミリアに血が通った感覚が蘇る。どうやら転位には成功し、同じ日本ではあるが遠く離れた秘密基地：かつて暗黒結社ゴルゴムの補給基地だった場所を自身の工房として利用し、肉体といくつかの『部品』を保管していたのだ。

(まあ、連中がここをかぎつける事なんてまず無理だし。この近くでよさげな女の子を2、3人ゲットしたら中国辺りにでも――)

あの国にはまだ手を付けていなかったとゆつくり眼を開くエミリア。

彼女が目にするのは捕まえ、分解した女性の部品が浮かぶ無数のホルマリン漬けの容器。手・足・耳・胸・皮膚：自分を歓迎するかのよう
にブラックライトで照らされる愛すべき自分への生贄。

そのはずなのに。

なぜ全ての容器が壊されているのか。

なぜ、自分の手足は鎖で固定化されているのか。

未だ視力が回復しただけで、未来を視るには至らないエミリアには今の状況がまるで理解できない。

なぜ、どうして、なぜ、どうして。グルグルと同じ疑問しか浮かばない中、彼女の疑問に答える人物が現れた。

「待っていたよ、エミリア・シユミット。彼が冬木で君を発見したという報告を受けてから、今までね」

薄暗い照明の中、こちらへと歩み寄るその姿は先ほどまで自分と戦っていた戦士と共通する部分が多い。

最大の違いは、口元が露出しており、人間…それも男性の口が確認できる点だろう。

「お前の経歴を調べている内に、ある事実が判明した。とある組織に協力を申し入れて、死んだ以前の肉体を調べさせてもらった結果…脳と眼球がすり替わっていた事が判明した」

そう、たしかあの時は辺に疑いを持たれぬよう転換させる際に自分の脳と眼と、予備の肉体に入れておいた他人の脳と眼を入れ替えるように術式を組んでいた。

「だから公式にはエミリア・シュミットは死んだと発表されたが、裏では捜索が続けられていた。そして…ようやくたどり着いた訳だ」

男はベルトにマウントされたカセットを左手に取り、右腕の肘へと装填。すると男の右腕は銃器へと姿を変えた。未だ全身の神経が脳へとつながり切っていないエミリアは眼を開けるだけで精一杯であり、焦る事も、止めてくれと叫ぶこともできない。

必死に弁明を繰り返したい一心ではあるが、この男には伝わらない。複眼の向こうに映るのは、ランサーと同じ自分への激しい怒りだ。だが、男は銃身を下げ、あつけなく踵を返して引き返してしまふ。

「…彼以上とは言えないだろうが、私も同士を殺されたという怒りがある。直ぐにでも引き金を引きたいところだが…」

「ここは、協力者である『彼女』に任せるとしよう」

「お前を探していた時間は私や、ランス以上に費やしていたようだからね」

彼の背中が小さくなっていく中、入れ替わりに現れたのは、彼の言う通りの女性だ。カソックを身に纏い、ベリーシヨートが似合うその女性は服装に不似合いである重火器を抱え、笑顔でエミリアの前へと現れる。

「ごきげんよう。お久しぶりですと言っても、貴方の命を狙った多くの人間の1人ですので、覚えていてくれる訳がありませんよね」

覚えている。エミリアが限界まで見開いた両目と僅かに震える唇がそれを物語っている。

「せっかくの手柄を譲って頂いたようで大変恐縮なんですけどね。私が貴方に抱えている恨みなんて、さほど大きいものではないんですよ」

彼女の顔から笑顔が消える。

「3年程前でしようか。貴女が世間的に死んだとされた直前に、貴女は騙し討ちで1人の神父を殺しました。その方とは結構長い付き合いだったのですよ。若い頃は無理ばかりして、ご老体になってからは引き取った多くの子供達の親代わりとなって」

「異能である私を戦力扱いではなく、人間として接して、会う度にカレーを御馳走してくれて…」

独白する中、女性が掲げた重火器の先端がエミリアの額へと当てられる。

「あとはいつ迎えに来てても後悔はない、なんて言っておきながら私のお尻をジロジロ見てくる破綻した神職者でした…」

「あんな、屈辱な殺され方をされるような人ではありませんでした」

ああ…そう言えば、自分を追い詰めた神父の1人に、年老いた男性がいた気がする。

確か何番目か分からない顔に彼が放った黒鍵が掠ったから使い物にならなくなつて、その辺を通りかかった若い女の子を殺し、顔を取り上げた。

そして次に男性が現れた時、妙に馴れ馴れしく話しかけてきたっけ。少し慌てながら黒鍵を収納して、今日は帰りが早いな、なんて言いながら。

こちらが疑うくらいに隙だらけだったんで、喉と心臓を何度も隠し持っていたナイフで刺してやったんだっけ。

後から知ったんだけど、緊急で取り上げた女は、その神父が以前に引き取って育てていた女らしい。

ああ、そういう事か。結局は、この人間も顔で判断して油断する奴なんだと思つて、真っ二つにしたんだっけ。

協会のステンドグラスとかでよく見かける、神とそれに信仰する人間をなぞつて、右半身と左半身を壁い貼り付けたんだっけ。

妙にテンションが上がつてやつたちやつたけど、今考えて見ればやり過ぎたかなあ…

妙に冷静になるエミリアの額にようやく冷たい感覚があると感じた時、最期に、ようやく肉体に馴染んだ眼がエミリアに未来を見せた。

真っ暗だ。

ただ暗い、何処までも暗闇が続く空間が続くだけだった。

つまり、彼女の視る未来はもう何もないということなのだろう。

轟音と共に、エミリア・シュミットという人物の生は今確実に終結を迎えた。

第90話

鉄杭を打ち出した際の火薬の臭いが充満する室内に立つカソックを纏った女性：シエルが煙の向こう側でつい先ほどまで人間の形をしていたモノを見つめる事数秒。

彼女は何も言わずに踵を返して部屋を後にする。

(マスター、浮かない顔をしていますね)

「…少し、昔の事を思い出しただけです」

(昔?)

自分の頭呼び掛ける少女の声に、シエルは素っ気なく答えた。エミリア・シユミットが本当の意味で死を迎えた事に、シエルは数年前にあつた日本の神父の言葉を思い出す。

神父はシエルの知己であつた代行者が死んだ事により、エミリア討伐の補充要員として日本から派遣された者だったが、神父が到着していた時にはエミリアは既に他の者により討ち取られており、彼はやむなく本来の仕事である教会の管理を一時的に任される事となる。そんなある日、シエルは急ぎよ呼び出された神父を労う為付近の食堂へと神父を招待した。

その食堂にはバラエティに富んだメニューが売りであり、シエルは迷わず好物であるカレーを。そして神父は表情を変えぬまま麻婆豆腐を注文する。

どちらも時間を頂くことになりますとの店員の言葉に気に留めることなく料理を待つ事を決め、その間にシエルは彼に感謝を述べる事にした。いくら人手不足とはいえ、本来の仕事を蹴らせてまでこちらに派遣させ、尚且つ長い移動が終わつたと思えば既にエミリアは処分されたと聞かされればさぞ拍子抜けだったのであろう。さらに雑務まで押し付けのだ。これくらいの謝礼は当然と考えたシエルだったが…

「今回は本当にご迷惑を掛けました。遠路はるばる日本という国から

来てくれたというのに……」

「任務となれば仕方ありません。それに新たな管理者が見つかるまで教会を空けておく訳にはいかぬでしょう。神に仕える者としては当然のこと」

「そう言って頂けると助かります……」

「ただ、残念であったのは今回の犯人をこの目で見れなかった事でしょう」

「エミリアを、ですか？」

その時、無表情であった彼の口元が微かに歪んだように見えた。

「資料を目に通しました。彼女は自分を理想である姿となる為に家族を、そして無関係の年端もいかない女性たちを次々に手をかけたとか」

「ええ。本当に許せない事です。彼女の元の顔は存じませんが、他人の顔を手に入れたところまで——」

「そう、彼女は他人の肉体を手に入れ、自分の一部を高めた所で止まることなどない。いや、もう止まる事などできなかったのですよ」

「え——？」

自分とは違う論点に戸惑うシエルに構わず、神父は続ける。

「彼女にどのような経緯があり肉親を殺害し、他人の肉体へ執着するようになったかは本人には分かりません。ただ、これだけは言える。彼女がもしこの先も理想とする姿になろうとも、生涯他人から肉体の一部を奪い取る事は止められなかった。ゆえに、今の時点でエミリアを殺した事は最善と言えましょう」

彼の言う事と、自分が考えている事がズレている。違う、そもそもエミリアという殺人犯に対する人物像がシエルと神父ではあまりにも違い過ぎているのだ。

なぜ彼はそんな考えに至っているのかという疑問がよほどシエルの顔に出ていたのであろう。神父は、尋ねるまでもなく先ほどよりもやや声を低くして答えた。

「彼女は自分という『個』を磨き上げるといふ手段を放棄し、捨ててしまっている。それはもう自分自身という人間を鏡に映していない事に等しい。彼女がしていた事は身に付ける衣服や宝石を収集する事と変わらない」

何をふざけた事をとテーブルを叩いて神父を黙らせた内容であるにも関わらず、シエルはただ聞き入るしかない。なぜなら、ひどく納得してしまっただからだ。

もし、彼女が起こした殺人で自分の美しさに磨きをかける為であったのなら最初の数件で殺人は終わり、後は不老の魔術を施せばよかっただけの話。だというのにこの数十年間、女性を殺し続けたという事は、より自分を美しくする為という以上に、彼女は手に入れた容姿に飽きたから、次の肉体が欲しくなったというなんとも単調な理由で殺し続けたことになってしまう。

そんな輩が自分が嫌悪する異端ではなく人間から湧き出るとはと今更になり彼女の行動をさらに悔しがると同時に恐れすら抱いたシエルだったが、目の前に座る神父からさらに驚くべき発言に言葉を失ってしまう。

「だからこそ、残念でならなかった」

「彼女が命を失うその寸前にその事実を知った時。受け入れてさらに狂った本性を垣間見せるのか。自身という個を既に失っていたと絶望したのか」

「どのような表情を浮かべるか、是非とも拝見してみたかったです」

「あの直後に届いたカレー、なんとも味が薄かったものでしたよ」
（いや、ずいぶんと重い回想をしたオチがそれなんですかマスター!?!）
「いいんですよ。その重いお話もあつて、味わえなかったのは確かだったんですから」

その後、届いた食事を互いに無言で食し、解散となった。

それから数年。その神父は日本で起きた聖杯戦争とゴルゴムの日本侵略で命を落としたと聞いた時は、言葉に表せない感情が渦巻いた。たった一度の出会いであつたが、神父の考えがどうしても読み取れないまま分かつことになってしまったシエル。神職者として歪んだ考えを持つ彼を正したのか、それとも彼の真意を知りたかつたのか：

考えを巡らせているうちに、自分に手柄を建てさせてくれた人物の姿が目に入った。

「お喋りはここまでですセブン。黙っていて下さいね」

（フツ：それは振りとして受け取っておきましょう。そうすれば武器に話かけるといふ不審人物にマスターを仕立て上げる事に：フギヤアツ!?!）

手にした武装である第七聖典へ拳を叩きつけたシエルは聖典に宿る精霊セブンを黙らせると、隠れ家の出入り口で待つスーツ姿の男性

へと一礼する。右手を黒い皮手袋で包むこの男こそ脳髓と眼球を転送したエミリアの前に立ち、銃を突きつけた仮面の男の正体であった。

「どうやら終わったようだな」

「ええ。貴方がたの協力を得た事で我々聖堂教会の不始末にようやく終止符を打つ事ができました」

「今回ばかりは利害が一致したからという理由でそちらの上司が情報を与えてくれたおかげだよ」

「そうですね。あれだけの事が起こったのにも関わらず、未だ怪人への対策に現状のやり方だけで対応しようとするお上の命令を蹴って貴方達へと接触した一司祭《No.1》の考えは間違っていないかっただようです」

「最初は驚いたけれどね。まさかいきなり埋葬機関のトップから一般回線からの通信だったから」

関係者から見ればとんでも話を男性と繰り広げるシエルであったが、男の背後で防護服を着用した団体の姿を見て長居は無用と判断し、再度一礼する。

「では、人を待たせていますのでこれで失礼します。あ、もし連絡が付くようなら筑波さんとアマゾンさんによろしくお伝えください」

「ああ、伝えておこう」

優しく破顔する男性は遠ざかっていく女性を見送りながら、背後に控えていた化学班へと命令を下す。

「では取り掛かってくれ。もう一度言うが我々の目的はクライシス帝国の手がかりだけだ。もし未確認の遺体を発見した場合はサーモグラファイ装置で確認後丁寧に埋葬しろ。『例外』も含めてだ」

男の命令に頷いた化学班達は一斉に行動を開始。室内へと足音が遠ざかっていく中、新たに現れた人物は資料を片手に男の隣に立つと、彼の行動を予測しつつも呆れ半分という表情で口を開いた。

「随分と優しい事ね。あれだけ貴方達を貶した団体にあつさり手を差し伸べるなんて」

「困った時はお互い様と言うだろ？」

「もういいわ、他の連中に聞いても同じ回答だし。いえ、城だけは別ね」

男性に話しかける女性：アンリエッタ・バーキンは苦笑する相手を見てさらに深く溜息をつく、今しがた別の場所で起きた情報を男へと伝える。

エミリアの隠れ家に保存されていた予備の肉体に脳と眼が転送されたという事は、それ以前の肉体に激しい損傷を起こしたか、死んだという事だ。冬木に派遣したエージェントによれば後者であり、エミリアを追い詰めたのは間桐光太郎と、槍使いの男だという。

「…そうか、ランスが」

「どうにか目的は果たしたようね」

「そうだな。彼が戻った際には謝らないといけない」

「ランスに、貴方が？」

当然の疑問であった。仲間を殺ささなければならなかった状況に追い込まれた彼には同情するが、命令違反を犯して単独行動を取った事とは話が別だ。今回の事件がようやく終局を迎えるのだとすれば、指揮官である男は然るべき処罰を与えなければならぬ。だということに、この男はなぜ謝らなければならぬのか。

恐らくその疑問が顔に出ているのだろう。アンリエッタに向かい、男はやはり苦笑したまま説明を始めた。

「あの時、俺は彼を過去の自分と重ねてしまった。そう勝手に思い込んでしまったんだ」

「……………」

自身の右手首にそつと左手を重ねる男の言葉に、アンリは口を噤んで聞き続ける。

男の過去を知るアンリは、彼の言う復讐にランスが暴走しかねないと予想していたが、聖杯戦争と呼ばれる戦いで共に戦い抜いた人物たちと行動する事で、収まるものだと考えていた。

かつて復讐に走る自分を友が止めてくれたように、彼を止めてくれるのだと。

だが違った。

彼は復讐などに、最初から飲まれてなどいなかった。

エミリアへの恨みは、少なからずあっただろう。だが、それ以上に彼は仲間達の無念を晴らすに戦った。

自分の恨みを晴らす為に戦っていた過去を持つ自分と同じ扱いにしてしまうなど、恥ずかしいにも程がある。男：結城丈二はランスというコードネームを授けられた男を侮っていたのだろう。

だからこそ、彼が戻ってきた暁には謝罪しなければならない。

「…そう。貴方がそうしたいのならそうしなさい。私は私で彼へのペナルティを与えるから」

「相変わらず手厳しいな、アンリは」

「…ジョージが甘すぎるのよ」

特殊な戦闘服を着た集団は警戒していた。

脅威であったサイボーグ怪人や怪人素体は既に全滅している。この隠れ家にまさか1ダース以上の敵が潜んでいたとは思ってもしなかったが、既にその影はない。自分達の攻撃で根絶やしにはしたが、それはあくまで『奴』の撃ち外した標的を狙ったに過ぎない。

敵の残骸からバチバチと火花が散っても、奴に対して照準は外さない。

手頃な石に腰掛け、タバコに火を付けるといふ自分達ですら日常化している動作にすら目を光らせ、もし自分達に脅威が及ぶようなものなら…

「お待ちせしましたーッ！」

と、この空気をぶち壊すソプラノを放つ女性がこれまた不似合い過ぎる大荷物を掲げて黒いコートを纏った人物へと駆け寄っていったのだ。

「…随分と時間をかけたものだな」

「いやあ、あちらの司令官さんと積るお話もありまして、気が付いたらこの時間でした」

「ならこの場所に用はない」

「では、帰りましょうか！」

「…帰りまで付き合うつもりはない」

と、重火器を構えたままの部隊に目すら向けずにスタスタとこの場を去っていく2人の姿に唾然とする一同。だが、そんな彼等を見てもやはり中にはスナイパーライフルのスコープから目を離さない者もいる。協力者であるカソック服を着た教会の者と行動を同じにしようが、彼等にとって脅威である事には変わらない。

あのように常人のような振る舞いと言葉使いを見せるが、その力は彼等と共に戦う戦士と同じか、それ以上の力を持っているのだから。

彼らが見たのは、黒いコートを靡かせる青年が特定の構えを取り、銀色の戦士へと姿を変えた直後だった。

たった一撃。

ただ手を振るっただけで敵の大半が地面へと沈んだのだ。

彼が部隊に新たに参加した戦士というのならば頼もしい事この上ないが、あくまで今回は協力者の同行人に過ぎない。

それに加え、彼等を緊張させ、悪く言えば敵意すら与えてしまう十分過ぎる肩書を持ち合わせていたのだから。

ゴルゴムの世紀王、シャドームーン。

(なーんて目で訴えてるよなあ、あのへんなお面被ってる皆さん)

(もう、そんな言い方した駄目よアンリ。あの人達も信彦が友達になりたい！って言えばきつと手を差し伸べてくれるはずよ)

(うっわ何それ超見たい！この鉄面被が『僕、みんなと友達になりたいんだあ！』って恥押し殺して無理してるとこ超見たい!!)

「黙れ貴様ら」

タバコを携帯灰皿へと押し付けた月影信彦は自身の意識の中でしゃべり続ける2人の存在：自分と肉体を共有するアヴェンジャー

のサーヴァント、アンリマユとキングストーンの意思である碧月に冷たく言い放つが、当に彼の説教に慣れてしまった2人には効果はない。

そんな彼等の事情をなんとなく聴いていたシエルは苦笑しながらも今回同行した信彦に対して礼を述べる。

「今回は付いて来て貰ってありがとうございました」

「ならばもうアヴェンジャーを甘味で釣る行動は控えろ」

「あ、バレてましたか？」

「俺が眠っている間に随分と好き放題やったようだな」

彼が2本目のタバコを箱から取り出しつつ、自分の中にいるアンリマユに対しての嫌味も口にする。

信彦が身体の主導権を稀にアンリマユへ譲渡した時の話だ。好みの違いから普段辛いものしか口にできないアンリマユは自分の自由時間に好き放題食べようと財布の中身を見た所、中には札が一枚もなく、小銭が数枚。

どうやらアンリマユに譲渡する前に現金の殆どを銀行へ預けてしまったようだ。金を下ろそうにも口座の暗証番号は信彦しか把握しておらず、なぜ記憶を共有しているはずなのにこればかりはブロックされてしまうのであろうと絶望に暮れる信彦へ神の名を語る悪魔が現れる。

シエルは好き放題甘いものを食べる代わりに自分の手伝いをして欲しいと迫って来るが、苦勞するのは自分じゃないからとアンリマユはあっさり承諾。

その日は満足するまで甘味を堪能できたが後日、信彦へバレた際には一週間激辛メニュー地獄が続いたという。

「それはそうとして、いかがでしたか？クライシス帝国の手ごたえは」「今回はゴルゴムの残党を利用していた部隊に過ぎない。これで奴らの力量を凶れる材料にはならないな」

信彦がシエルの依頼をはつきりと断らなかつた理由がここにある。以前シエルに問うた、彼女が日本から離れない理由の一つ。ここ最近になって世間を騒がせる怪人事件の大本であるクライシス帝国の名を聞いた信彦は、どれほどの戦力を秘めているか確かめるべく同行する事に了承したのだ。

「美咲町で起きた吸血鬼事件の後処理に連中の足跡が見つかったとなれば、怪人を使徒化させたというデータも用いられた可能性がある。今後も用心しなければ……」

「冬木に滞在する仮面ライダーに危機が陥る、ですか？」
「……………」

信彦と対となる存在の名を話題に出すと、彼はいつも口を閉ざしてしまう。だからと言って、機嫌が悪くなるという訳ではない。信彦自身が、どう答えればいいか分からないのが現時点での答えなのだろう。

何も無理強いして答えを聞き出そうとは思っていない。彼がどう答えるのかは、彼自身がいつか答えてくれるはずだろう。

「すいません、困らせてしまいましたね」

「お前が謝るようなことではない」

「でも……」

「奴とはいつか巡り合う。それが戦いの先か、偶然によるものかの違いだ」

「そう、ですか」

それでもしなければ、自ら会おうともしないのだろうか、さらに踏み混んだ疑問を口にする事は止めるシエル。

以前かき集めた情報によれば、彼等2人は過酷な運命に飲まれ、戦ってしまった関係にある。彼の性格上、望んで会う事はまずないの

第91話

「へい、いらつしや…なんだ小僧に嬢ちゃんじゃねえか」

「いやあんた何やってんだよ…」

「あ、アハハ…」

ある日の放課後。部活が休みであり、本日は間桐家で食事を作ると決めた間桐桜は献立のアドバイスを貰うと共に制服デートという若干の下心を抱いて衛宮士郎と商店街マウント深山へと訪れる。

早速メインとなるサンマを入手しようと魚屋の前に止まった時、大変見覚えのある筋肉質で長い青髪を首の当たりで結んだお兄さんの姿があつたのだ。

まさかの対面に驚くより先に無礼な接待をするランサーに呆れながらも尋ねる士郎に思わず苦笑いする桜。店の奥側から察したかのように段ボールを抱えた店長が常連である士郎と桜へ、いつもの大声で新人であるランサーの紹介を始めた。

「そいつあ3日くらい前から働き出してねえ！週一だけど、よろしく頼むわあ」

そそくさと裏側にある冷凍室へと姿を消した店長の後ろ姿を見送ったランサーは両手を腰に当て、ニカリと笑い未だ状況が把握できない2人へ伺いを立てる。

「さて、どの魚をご所望だい？」

「ランサーが商店街でバイトお？」

「はい、私も先輩もビツクリしちゃいました…」

その日の夜。間桐邸の食卓ではそれぞれの分担された仕事をこなしつつ、間桐慎二は桜から聞かされた顔見知りの現状に怪訝な表情を浮かべていた。

サンマの焼き加減に目を向けたまま、桜はテーブルを乾拭きする慎二へと答える。確かあの男は謎の組織に身を置いているので給料なんてそれこそ公務員以上の金額が懐に入るはずだろう。だと言うのになぜ商店街の魚屋などに身を寄せているのかと疑問に思う慎二へさらなる情報が人数分の皿を準備するガロニアから告げられた。

「ワタクシも昨日お見かけしましたわ。その時はお花屋さんで働いていたようですが…」

「俺も見かけたぞ。2日前の早朝に本屋の前で荷下ろしをしているところを」

盛り付ける大根を摩り下ろす赤上武の言葉を聞き、そう言えば武も新聞配達のアルバイトを始めていたなと思いつきながらも、慎二は複数の仕事を掛け持ちするランサーの行動に疑問を抱く。そもそも、あんな去り際の台詞を口にしてなぜ冬木に滞在しているのかと、慎二は10日程前によく解決したエミリア・シュミットの顛末を思い出していた。

「どうやら、事は済んだみたいだな」

携帯電話をポケットに収納したランサーは、やれやれと運動場の壁へとよりかかり、見るも無残となった運動場を見渡した。床には大穴、あちらこちらには焼き焦げた痕、バスケットゴールなどビヤツ鬼の投擲したバナナの冷気によって氷漬けである。クライシス帝国により市民会館が偽装工作で一般人が立ち入りしていなかったことが唯一の救いだっただろう。

「ところで誰に電話していたんだ？」

「あん？まあ、今世話になってるトコのお偉いさんつてどこか」

「ああ、ランサーが所属している秘密組織だったね。そろそろどんな組織が教えてくれてもいいんじゃない？」

「バーカ、秘密を洩らしちゃ秘密じゃなくなるだろうが」

変身を解除した間桐光太郎の質問を濁すランサー。これは組織に身を置いた時点からの契約であった。ランサーが自身で言った通り所属する組織は表沙汰されていない事もあがるが、仮面ライダーであるとは言え、あくまで一般人である光太郎に知らせない為でもあった。

もしも光太郎と組織が接触する事となれば、組織が足取りを追っている者達…クライシスとは別の悪が光太郎だけでなく、彼の関係者を狙う可能性を配慮しての事であった。また、それ以外にも『そう易々と力を貸す訳にはいかない』という厳しい光太郎の『先輩方』の方針も一部含まれているらしい。ランサーの知る限り、光太郎は他人へ簡単に助力を求めるような男ではないのだがと思いつつ、こっそりと連絡を取り合っただけはいるのだが…

「ま、何だ…会話の内容ぐらかまやしないだろ…転位したエミリアを雇い主が始末してくれたらしい」

「…ツ…」

エミリアが自身の眼球と脳髓のみを他の場所へと転移させた経緯は遺体を見たランサーと、転移魔術の中継器とも言うべき魔法陣を見つけた慎二から聞いていた。心臓を貫かれてもなお、生きる事を諦めないその執念に圧倒された光太郎は、そんなエミリアがどうしてあの能力を自分の為ではなく誰かの為に使えなかったのかと考えてしまう。彼女が持つ魔術を応用すれば腕や足を失った人の為に役立てたのかも知れない。未来視を使えば、事故が起こる寸前に防ぐことができたのかも知れない。なぜ、誰かを犠牲にしてまで己の為にしか力を使ってしまったのだろうか……

恐らくそんな考えが余程顔に出ていたのだろう。ランサーは溜息交じりに目を下に向ける光太郎へと言い放った。

「あのな、どいつもこいつもお前さんみたいなお人よしとは限らねえんだよ。エミリアは自分の為だけに未来視の力を使い続けた。光太郎は他人の為に戦い続けた。違いなんて、それだけなんだよ」

「…分かっている、つもりだ」

「けど、納得しないって顔に書かれてるけどな。力の使い方ってのはな、僅かな違いでも決定的に正反対になる。こうと決めた奴ほど始末に負えねえ。いい意味でも、悪い意味でもな」

「……………」

「今回は光太郎とは真逆の考えを持つ輩が現れた。そう考えるようにしとけ」

エミリアによって拉致された女性たちを誘導し、桜にここ数日の記憶を封印するよう言い伝えた慎二は自分が言おうとした言おうとした事を伝えてしまったランサーに恐れ入ったと、自身の変身を解除する。彼も歴戦の戦士。光太郎の顔を見れば、その心中に何があるのかなどお見通しであったのだろう。

そのランサーがゴソゴソとポケットをまさぐり、取り出したのは小さな鍵の束だ。見るからに住宅などに使用する鍵ではないのだろう

が、ランサーの記憶を見てしまった光太郎は何の鍵であるのか、そして彼が所持している理由を知っていながらも、光太郎は尋ねる。

「その、鍵は…」

「ああ。お前も見ただろうが、『あいつら』が使っていたロッカーの鍵だ。こいつがなきや、中身も整理できないだろ」

悪戯っぽく笑うランサーだったが、その直後に憂いを秘めた表情を見せた事を光太郎は見逃さなかった。

「これで、敵を取ったつっつう報告も合わせられるってもんだ…」

ランサーは部下達の私物が収納されているロッカーの鍵を持ち歩いていた理由はそれだった。

殉職した隊員達はエミリアによって寄生怪人の幼体と同化されてしまい、他の人間へと転移する恐れもありその場で『処分』されてしまった。人として埋葬される事すら、敵わなかった。

彼等の家族に返せるのは、ロッカーに収納された私物のみ。持ち主によっては綺麗に整っている状態にあるものもあれば、小汚く詰め込まれていた状態もあっただろう。

だがランサーは彼等の鍵を持ち歩き、上司であるアンリエッタや相棒である魔術師から即引き渡すよう言われ続けても、返却することなく手放さなかった。

彼等の親族にはもちろん説明しなければならぬ。だが、ただ彼等が死んだという結果だけを伝えたくなかった。

彼等の無念は晴らせたと含めた上で、伝えたかったのだろう。

無論、そんな事で親族が納得するはずがないとランサーも承知の上だ。罵倒され、殴られる事すら覚悟を決めている。

それが、彼等を率いていたランサーの義務なのだから。

「つーわけでよ、これから組織に顔だして説教された後にでも行って

くるぜ」

「大丈夫ですか？治療もまだ済んでいないのに…」

誘拐された女性達への暗示を終えた桜がランサーへと駆け寄るが、手でこれを制する。流血は止まっているものの、生傷は痛々しいほどに残っている上に戦いで疲労は拭えない。だが、彼の表情は晴れやかだ。

「どうってことねえよ。それに、お迎えがわざわざ来て下さったんだ。お前もさっさと引き上げろよ？」

ヨロヨロと覚束ない足取りで出口へと向かうランサーの言葉に首を傾げる一同であるが、突如送られたガロニアからの通信で知る事となった。

『皆様、建物の上空に一台の飛行する乗り物がありました…あれって、ヘリコプターと呼ばれるものでしょうか!?ワア、あの細長いぷろぺらと呼ばれるものを回転させるだけで本当に飛べるのですね!』

『落ち着ケ、ガロニア。ヘリカラ降下シタノハ数名ノ人間ダ。ソノ者達ハ今シガタ建物ノ入口カラ出テキタランサート合流シタガ…ム?』
「どうしたのですか？ライドロン」

初めて目にするヘリの姿に興奮を隠せないガロニアに代わり、状況を伝えるライドロンが珍しく言い淀むと疑問を抱いたメドゥーサが尋ねる。恐らくヘリの持ち主たちはランサーが言っていた迎えにきた組織の人間達なのだろうが、もしや問題が生じたのかもしれない。ただランサーが所属しているからと言ってその組織が自分達の味方だとは限らない。今、外で見張りを続けていたガロニアや武。それに協力を買って出た凜やアーチャー達にもしもの事があったのならと焦りが強まるが、それは杞憂以上につくりと肩を落とす結果となる。

『ランサーガ現レタ人間ノウチ1人ノ顔ヲ見タ途端ニ蒼白トナツタ。直後ニソノ人物ニヨリランサーハ腹部ヲ拳デ強打サレ、氣ヲ失ツタ』

『あー…』

これには運動場に残された光太郎達全員が納得し、そろってそんな声を上げてしまった。それは外部で一部始終を見守っていた士郎と凜、アーチャーも同様であり、ランサーに手を加えた人物の正体など、ただ1人しかいない。ただ、その人物を初見である武はダメージが残っていると見えど英霊であるランサーの意識を一撃で刈り取る実力を警戒し、ガロニアなどただ混乱するばかりだ。

『…ランサーヲ倒シタ人物…ドウヤラ女性ノヨウダガ、ランサーヲ肩ニ担グト私達ニ一礼シテ、ヘリカラ垂ラサレタ梯子ヲ掴ンダ。ヘリハソノママ上昇シテイク』

『あの…ランサー様は大丈夫なのでしょうか？先ほども随分と顔色が悪くなったような…』

『心配いらないわよガロニア。あれは一種のコミュニケーションだから』

『そ、そうなのですか？地球人とは奥が深いものですね…』

『おいこら遠坂。ガロニアに変な事を擦りこむな』

凜の偏った入れ知恵に我慢しきれず割って入った慎二であるが、あの2人であれば間違いでないので自分の反論に力がないのがどこか悔しい。

バゼット・フラガ・マクレミッツ

聖杯戦争時ランサーのマスターであり、現在は同じ組織に属する仲間であるのだが、如何せん口より先に手を出してしまうという残念な

部分がある。今回もランサーは彼女に黙って組織から離れていたようであり、フラストレーションはかなり高まっていたはずだ。下手をすれば再会直後に強化魔術を施し、さらに大変丈夫である義手による鉄拳が炸裂した可能性もあったのだが、そこはランサーの言う雇い主が宥めていたのかも知れない…

『これを機に、手綱を握って欲しいものだ』

『確かに。共に過ごした時間が長いというのならば、彼女だけには話しておくべきであったのだろう』

無線越しに遠のくへりを眺めながらもそれぞれ言いたい放題であるアーチャーと武の言葉に苦笑するメドゥーサは光太郎の隣に立つと服の袖を摘み、ただ気まぐれなのか、それとも深い意味を込めたのかは定かではない言葉を光太郎の顔を見上げて呟いた。

「…だ、そうですよ。光太郎?」

「え、えつと…」

メドゥーサの瞳に映る自分の顔が怪我とは関係なしに痛々しい表情だなと思いつつも続く言葉が浮かばない光太郎のうろたえる姿に、慎二と桜は良い薬だと笑いを堪えるしかなかった。

そして現在。

本日の夕食は外で済ますと桜に言い伝えた光太郎と桜は行き付けである居酒屋へと赴き、自分達を呼び出した人物からの報告に驚くばかりであった。

「…じゃあ、ランサーはこのまま冬木に留まるのか？あ、ダイくんビールお代わり！」

「まあな。クライシスの連中には借りもある事だしな。連中を潰すまでの期間ってことで司令官殿は納得済みだ。俺もビール頼むぜ」

「しかし、よくそんな許可を得られたのですね。ダイスケ、私は八海山を」

グラスに注がれた冷たいビールを一気にあおるランサーに抱いたメドゥーサの疑問は最もだ。組織に属している身でありながら独自で行動し、罰を覚悟して戻ったというのに、何故こうも簡単に冬木へと舞い戻ってこれたのか。

同じ疑問を抱いている光太郎に注目される中、ランサーは冷やしトマトを口に放り込み、噛みしめながらも答えた。

「無論、ただこつちに派遣って訳じゃねえ。条件付きだよ」

「それは、どんな」

「こつちにいる間、組織からのギャラ全面カット」

なんとという恐ろしい仕打ちだ…組織からの支給される、彼が命がけで戦った報酬がゼロ。一部や半分が削れるという訳ではない。光太郎とメドゥーサも短期アルバイトの経験しかないが、労働した分の報酬が手に入らないという辛い気持ちは痛いほど理解できる。さらに事態はそれだけでは済まなかつたらしい。

「さらには口座も止められてなあ。こつちに来る為のチケットと戸籍渡された直後にだぜ？手が込み過ぎだったの！ハハハハハ！」

腹の底から笑うランサーに光太郎とメドゥーサの口は塞がらない。つまり、ランサーは冬木に到着した途端に無一文という事だ。住まいはどうやら引き続き無人の洋館を使用しているようだが、生活費など稼ぐ為にいくつものバイトを掛け持ちし、先日喫茶店の面接に合格し

たと聞くと、週に数回は通い続けようと無言で相槌を打つのであった。

「ま、好き勝手やったペナルテイらしいがその程度で済んだのは御の字つてとこだ。それに、俺の口座にある金で先日ぶっ壊した建物の修理費に回すような事を言っただけが良かったなああの姉ちゃん」

しかし、自分の追いやられた状況を笑い飛ばすランサーにどこか安心しながらも、ランサーが差し出したグラスに、光太郎とメドゥーサは手に持った自分達のグラスを優しくぶつける。

「つー訳だ。これからよろしく頼むぜ、ご両人」

「ああ、こちらこそ」

「よろしく願います」

クライス要塞

「つまり、その人間が余計な事をしなければRXに止めをさせた可能性があったということだ」

「ハッ。しかし、奴目のダメージを与えてから回復するまでの時間が以前よりも早まっているのは確か。確実に止めを刺すには今一歩力が足りませぬそれに、またもやサーヴァントと同じ力を発揮するという技を身に付けました」

「うむ…」

指令室にてマリバロンからの報告を耳にするジャーク將軍は顎を指先で押さえ、大敵である光太郎の能力向上に対する対策を悩む中、同じく報告を耳にしていたボスガンが声を荒げて物申した。

「甘いですぞ將軍！なぜ任務に失敗したマリバロンを罰する訳でもなく、報告で済ませているのですか!?!」

「おい、落ち着きなボスガン」

「黙れ人形めがッ！ジャーク將軍…ご決断をッ！」

全開の任務で同じく罰せられるどころか、星騎士ジュピトルスに利用されたと許されただけでなく、ジャーク將軍との圧倒的な力量を見せつけられた事でプライドを踏みにじられたボスガンは同じ將軍たちにはすら疑心暗鬼が生じ、以前より敵意を向けていたガテゾーンはもちろん、本心では見下していたゲドリアンにすら話かけられても聞く耳を持たずにいた。自身だけがこのような屈辱に甘んじているという事がどうしても我慢らず、ここに来て任務を失敗したマリバロンが將軍より罰を受ける姿を見て気を晴らそうとしたところ、ジャーク將軍はただマリバロンの話を聞くだけで終わろうとしている。

そんなことはさせない。

あの腰巾着だけでも苦しめようと拳を強く握るボスガンはガテゾーンの制止を振り切り、罰するように申し出た。だが、ジャーク將軍はボスガンに反して…否、むしろ冷淡な眼差しを向けていた。

「…今回はあくまでRXの実力を探る為のものであった。マリロバロンが見つけたという超能力を持った人間とビヤツ鬼という犠牲があったが、これで一步またRXとその連れに対する対策を見つける事ができる。無論、貴様にもデータは提供するつもりだ」

「な…っ!?!」

「…將軍に免じて、私への侮辱はなかった事にしてあげる。ありがとう」

くデータを受け取りなさい」

ただ一人、マリバロンの任務内容を知らなかったボスガンは言葉にならない圧迫感を感じると同時に、自分に向けられる異なる視線にようやく気付く。無言のガテゾーンも、影の中で口元を歪めるゲドリアンも。そして口では許すと言いながらも汚物を見るような冷たい瞳……

確かに今回の任務についての説明をすると耳にしていたかもしれない。だが、その全てを聞く耳を持たずに鍛錬場へと向かっていたボスガンには寝耳に水であり、完全に自身が原因で場の空気を壊してしまったことになる。

この場を収めるには、大人しくマリバロンのデータを受け取るしかない。しかし、彼が手放すことが出来ない誇りという鎖が邪魔をし、いつまでも手を伸ばすことができない。

だが、さらにかき乱す存在が現れてしまった。

「その者の言う通りではないか、ジャーク將軍。調査？犠牲？そんな事に拘っているために地球侵略が滞っているのではないか！」

靴音を鳴らし、指令室の奥から姿を見せたのは、男だった。黒い軍服に黒いマント。そしてヘルメットの下から放たれる見る者の心臓を射抜くような鋭い眼光。

指令室に踏み込む狼藉者であるはずなのに、四隊長はその場から一歩たりとも動くことすらできなかつた。

やがてジャーク將軍の前で立ち止まった男はその目をさらに鋭くし、声を放った。

「貴様たちの失敗に、皇帝は大変悲観されている。この始末、どうつけるつもりだ？」

「さすがは皇帝の代理人だと口にするだけはある。その横柄な態度だけは立派なものではないか」

男の殺気など涼やかに流すジャーク將軍は、挑発するかの如く口元を歪め、その名を口にした。

「クライシス皇帝直属の査察官ダスマダーよ」

第92話

「ん…」

うつすらと目を開く間桐慎二は、窓の向こうが未だ暗い事に安堵して再び目を閉じた。

(なんだよ…まだ夜中じゃん)

まだまだ起床時間まで余裕があると布団を被さる慎二。昨日は光太郎や桜たちと突然押し寄せたチャップや怪人素体達を相手に数時間も戦い続けていた。

相手はさほど力のない雑兵に過ぎないが、昨日現れた数は規模が違う。普段であれば怪人、もしくは指揮を執る敵幹部の取り巻きで10体近くであるのだが、昨日に限り現れた人数は300体。そしてそれ以上の個体である怪人素体を引き連れて現れたのだ。

敵に目を付けられたのはもちろん光太郎であるのだが、いくら雑魚ばかりとは言え、当日厚い雲に覆われ全力を出し切れない光太郎だけを集中的に狙う敵に対し、慎二と桜も仮面ライダーへと変身。

桜が指輪を使用した魔術により人避けの結界が張られた柳洞寺の裏山で繰り広げられた戦いはおよそ5時間にも渡り、最後の1体を倒した頃には慎二や桜は疲労困憊であることはもちろん、流石の光太郎も乱していた。

もはや一歩も歩けぬ慎二と桜を気遣い、全員でライドロンで帰宅する光太郎達を待っていたのは、彼等同様にどこか疲れたメドゥーサと赤上武であった。話を聞くと、光太郎達がチャップ達に襲われたと同時刻には間桐家で待機していたメドゥーサや武にも刺客が送り込まれていたらしい。間桐家の中庭へと侵入したサイボーグ怪人軍と武と訓練中であったインベス軍の大乱闘が勃発し、幸いにも敷地内の結界により周囲に騒ぎが漏れる事はなかったらしい。

そして光太郎達がチャップ達を撃退したと同時に怪人も引き上げ、

事なきを得たが数時間にも及ぶ戦闘にはさすがに堪えたらしい。

もはや料理をする気力もない桜に変わり、すこしばかり味付けの濃い野菜炒めを作ってくれたガロニアに感謝しつつも、全員は少し早めに就寝する事に。翌日午前中の講義がない光太郎はともかく、慎二と桜は早朝から部活の朝練が待っているのである。

無理する必要はないと言う光太郎であったが、そこは意地でも参加すると言い張ったのは慎二だ。もし光太郎の言葉に甘えてしまえば、あのお節介な部活の主将に変な心配をさせってしまうのだから…

と、言いながらももう少し寝ていたって文句は無いだろう。昨日は早く休んだ為か不思議と身体の負担はなく、ただ純粹に眠い。もう少し身体を休ませればあのお節介な義兄にモーニングコールされる事なく起きられるはずだ。

だから、寝相で振り払ってしまったであろう毛布を被り直す。いくら室内だからとはいえ、こんなにも『冷えて』いるのでは風邪をひいて――

(ましてよ…)

慎二は自分の身体を包む毛布の温かみに違和感を覚える。

(なんで…寒いんだ?)

確かにまだ毛布を被らなければ肌寒い日もある。しかし、身体が凍える程気温が下がるなど天気予報でも告げられていないはずだ。慎二は目覚まし代わりでもある携帯電話へ手を伸ばし、待受画面を表示させる。暗い室内でボヤリと浮かんだ明かりを見て、慎二の意識は一気に覚醒した。

「…ッ?」

慎二は我が目を疑う。

携帯電話に表示された時間は午前5時過ぎ。磁気的には室内にもう日が差してもおかしくない時間だと言うのに、窓から見える空模様は未だ暗い。だが、それよりも慎二の思考を凍らせたのは、今日の日付。

日付だけを見れば、未だ空が暗い事や室内が冷える事にも納得がいく。だが、それは本来あり得ない事。なぜなら、その日付は数か月も前…季節で言うならば冬の日付だったからだ。

「嘘だろ…!」

直前までその身を凍えさせていた寒さなど忘れ、毛布を払いのけた慎二は2度、3度と携帯電話の画面を見つめる。頬などを抓って自分は夢の住人ではないと確かめるなどせず飛び起き、早まる心臓の鼓動をどうにか落ち着かせようと室内の照明を点灯させる。しかし、それは慎二の動揺をさらに拍車をかける結果となってしまった。

「…なん、だ?」

今さっきまで自分が寝ていたのは慎二の自室で間違いはない。間違いはないのだが、ベットや箆笥といった家具の位置以外のもものが大きく異なっていた。

聖杯戦争時に使用して以来組み立てていた桜用の武具を作成するスペースも、祖父の書庫から引っ張りだした魔導書を収納されていた本棚の姿がない。まだ盗難になって荒らされたという事実の方がまだマシを考えてしまう慎二は背中に妙な汗を流れる。一体何が起きているのかと。

「何が起きてるんだよおい…!」

誰かに聞いて欲しくてつい漏れてしまった愚痴に頭を抱える慎二だったが、これはもうただ事ではない。なぜ自分は自室とよく似た場

所に放り込まれているのか。否、まだこれだけでは誰かのイタズラだとまだ考えれる。

もしこれが誰かによる悪ふざけであればと思い込むことで冷静さを取り戻した慎二はまず寝間着から学校の制服へと着替え、扉のノブをゆっくりと握る。この扉の向こうはきつと自分の良く知る空間であり、もしかしたら外では自分が酷く焦った様子を見てニヤニヤしている犯人が潜んでいるかもしれない。

むしろそうあって欲しいと願う慎二の希望があっさり打ちひしがれてしまった。

「……………」

慎二が見たのは明かり一つない廊下。それだけであれば慎二の知る屋敷と変わらないはずだが、空気が違う。瘴気のようなものが漂っているという訳ではなく、ただ単純に『重い』。

頭が痛む。

息を荒げ、思わず額を手で押さえる慎二はこの状況を早く義兄へと報告せねば…と考えた矢先であった。

「兄さん…?」

そんな自分の姿を見て心配したのだろう。暗い通路を通りかかった桜の声に安堵した慎二はこの異常としか言いようがない状況に誰が一人でも味方がいてくれるならばと、顔を上げた。

愕然とした。

今、慎二の目の前に立っているのは、義妹である間桐桜に間違いはない。間違えるはずもない。

しかし何故だ。

なぜ、実の姉とお揃いである黒髪でもなく、碧色の瞳でもなく――

桜の髪と瞳は、紫に変色しているのか。

「さく、ら…?」

「はい…」

「どうしたんだ…何があったんだよ!」

「え…?」

「なんで…なんでそんな色に染まってるんだよ桜!」

慎二は桜の両肩を掴み、今さっきまで自分の置かれている状況よりも、義妹の身に何が起きているのかを聞き出す方を優先させた。

桜に取って、髪の色と瞳は親に唯一残してもらった姉とお揃いのものだと以前話してくれた。古めかしい契約の下幼い頃に別離し、死んだ事すら人伝でしか知る方法がなかった。

それ程にまで彼女にとっては大切なもの。このようにふざけた色に染めるなど彼女が行うはずがない。あるとするならば、クライシスによる戦いで彼女に何かあったのか。それとも、仮面ライダーに変身した事による副作用なのか。

問い詰めようする慎二だったが、彼の慌てようにつられて困惑する桜が次第にその表情を暗くする。

「どうして…そんな事…今更言うんですか?」

「桜…?」

「兄さんは…知ってるのに…どうして…」

まるで泣き出すかのように俯いてしまう桜。前髪に隠れて、桜がど

のような表情をしているのか、慎二には見えない。

それに桜の口ぶりでは、彼女の髪や瞳が紫色となった経緯を知っているかのような内容だ。自身を持って言えるが、慎二に心当たりなど全くない。だからこそ余計に混乱してしまう。

異なるのは髪と瞳の色だけではなく、性格もだ。確かに間桐の養子となったばかりの頃は気弱で泣き虫だった記憶もあるが自分が留学から戻り以降、義兄に影響されてか随分と明るく、自分ですら恐ろしいと思える強い意思を持つ少女となっていたはずだ。

だが、目の前にいる桜はまるで違う。幼い頃の性格がそのまま今に成長を遂げたかのような気の弱さと危うさを抱えたような：こうして詰め寄る事により彼女は『何か』に追い込まれてしまう。そんな予感：そして悪寒を感じた慎二は気が付けば彼女の肩を強く握っていた事に気づき、手放すと数歩離れた。

「悪かった…肩、大丈夫か？」

「え…？」

これ以上桜を追い詰めてはいけないと謝罪する慎二が以外だったのか、暗い表情が消えた。慎二は桜の反応に疑問を残すが、今はそれよりも早く確かめなければならぬ事がある。

「桜、光太郎は起きてるか？」

「はい…？」

「なぜか僕の部屋の一部が違ったり、日付が巻き戻ったりしてる。もしかしたらクライシスの連中が——」

「あ、あの兄さん！」

「なんだよ、まだ説明の途中だぞ？」

「ご、ごめんなさい。兄さんの説明に分からない言葉があったので：それに…」

「コウタロウさんって…誰ですか？」

第93話

穂群原学園

ホームルーム前の教室内は登校した生徒たちが昨日の宿題や本日の授業中、教師から指名されたらどうしようかと戦々恐々するなど取り留めのない会話を遮断する鈍い落下音が教室に木霊する。

生徒たちの視線は一斉に注がれた席に座る男子生徒は、絵に描いたような不機嫌さを全身から醸し出していた。

肘を突いた左手で顎を支え、空いた手の人差し指でコツコツと机を突く生徒の名は間桐慎二。慎二の眉間はそのままで後は残ってしまった程に皺が寄り、犬歯をむき出しにした彼の表情は普段見せる落着きなど欠片も感じられないものとなっている。

だが、この教室で慎二の癩癩を起す事がいつもの事であるのか、生徒は再びガヤガヤと話題を戻していく。

(つたく、何なんだよこの『世界』は…)

内心で舌打ちしつつ、直前に自身へと向けられた生徒たちが興味本位で向ける目にさらなる苛立ちを募らせる慎二。本来彼が知る雰囲気とは同じようであるで異なる空間に1人でいる孤独感よりも、朝から自分へと降り注いだ厄災に対する不満の方がまさっているのであつた。

「は、ハハハ…おい…お前、何言ってるんだよ」

何の冗談だと続けようとする慎二は笑って見せようとした。自分でも呆れるほどに乾いた笑いを口から漏らす様子を見た桜は、改めて告げる。

そして慎二を追い詰めるように、いないはずの人物の名まで聞こえてしまった。

「ですから…コウタロウさんなんて人、私…知りません」

「私の家族は兄さんと…お父さんと…」

「お爺様…だけ、です」

嫌な汗が背中を通過する。心臓や胃袋が手で鷲掴みされるような不快感に覆われる。喉が渴き切り、妙な呼吸音が、耳に響いてしまう。

(やめてくれよ…お前は僕よりも長く愚兄の妹やってるんだろ…？？？65日も多く過ごしてたんだろ…？あんな奴を知らないなんて…それに……お爺様が…生きている？)

光太郎の存在を完全に否定しただけでなく、光太郎に全てを託して

逝った祖父が、間桐蔵硯が生きている。自分達の目の前で、完全に姿を消したはずの、あの祖父が。

もう思考が追い付かない。額を抑え、ヨロヨロと後退する慎二はやがて廊下の壁へ背中が当たると俯いて呼吸を荒げてしまう。尋常でない慎二の様子に、自分の知らない人物の事など一切振り払った桜は遠慮がちに慎二へと呼び掛ける。だが、彼女の接し方もまた慎二にとっては不可解なものであった。

「に、兄さんーだ、大丈夫…ですか？」

まるで腫物にでも触れるような、見知らぬ第三者に接するかのよう
に下からのぞき込んでくる桜は慎二を心配すると同時に、何かを恐れているようにも見えた。自分の知る桜ならば、額に手を当てた後に、
風邪であったのであればどうして出歩いているんですかと一喝する
所だろう。

今も返事を待っているかのように控えている桜との違いばかりに
目を向けてしまう慎二は違和感以上に、段々と何かが込み上げてい
く。

（違う…桜は僕を心配してくれているだけだ…けど…）

（なんで…）

（なんで…）

（なんで…）

(とてつもなく……鬱陶しい)

やがてそれは、本来抱くべきではない感情となって爆発してしまっ
た。

「兄さん、もし体調がすぐれないなら寝ていた方が…」

「——さう」

「え?」

「うるさいって言うてんだよツ!なんで一度言っただけで理解ができないの
かなあ桜ツ!!」

「す、すいません…でも兄さんの様子が…」

「はあ!?僕のせいだと言いたいのかよ!だいたいお前はいつも——
」

突然桜へと罵声を放った慎二の動きは止まる。彼の手は桜の顔へ
と向けて、まさに叩こうと振り上げられていた。制止した自分の手を
見上げた慎二は、今しがた桜に向かって何こんな子供じみた癩癩をぶ
つけしまった理由にまるで見当もつかない。

あまつさえ暴力さえも振るおうとしたなど…

「さ、桜…今のは…」

「ごめんなさい兄さん…許して…下さい」

自身でも抑えられない衝動に駆られてしまった慎二は手を下ろし
て弁明しようとするも言葉も届かず、顔を守るように両腕を翳し、ひ
たすら慎二へ謝罪を続けていた。

「さく、ら…」

震える桜へと手を伸ばそうとする慎二であるが、そこへ別の人物が現れる。もう聞くはずのない声が耳へと響く。自身の激情を桜へぶつけてしまい頭から抜けていたかもしれない。または、やはり空耳であつて欲しかったのかもしれない。

「朝早くから何を騒いでおる」

足音はなく、ただ杖が床を突く音だけが響く廊下の先。未だ日の差さない薄暗い廊下の奥で、近づいて来る妖しく光る瞳がぼんやりと浮かんでいた。誰かによつて妖怪などと比喩される外見は、その影だけでも見間違はずがない。慎二はあり得るはずないと己の記憶に残る、穏やかな表情で消滅したはずの家族の名を、途切れ途切れにだが口にした。

「お、爺…様…」

「なんじゃ。まるで幽霊にでも出くわしたように青い顔をしておつて。それとも、儂の容姿に対する比喩のつもりでいるのであれば見事な役者ぶりでもあるがなあ…」

口元を歪ませる間桐家の当主、蔵硯は石のように動かなくなった慎二の隣で立ち止まる。

「朝から喧嘩とは感心せぬの。間桐の家に住まうただ二人の兄妹。つまらぬことで諍いを起こす出ないぞ?」

「桜よ。本日も訪問があるのであればさっさと家を出るが良い。あまり衛宮の家主を待たせるものではないからのう」

「は、はい…では、行ってきます」

蔵硯の登場で我に返った桜は固まったままの慎二に数度目を向けながらも、1階へと繋がる階段を駆け下りていった。廊下にある掛け時計を見れば、成程。弓道部の朝練前に衛宮士郎の家で朝食を作りに行くのであればこの時間に起きて、出発しなければ間に合わないのだろうと、様々な要因が重なった事により、逆に冷静となった慎二は窓から門を抜けていく桜を見つめる。

深く息を吐き、我に返った慎二は今自分が知るべきはこの状況だと考え、改めて死んだはずの祖父へと目を向ける。

最後に隣で看取った父の話によれば、蔵硯の身体と、核とも言うべき刻印蟲も完全に消滅したと聞いていた。ならば、予め予備の肉体に意識を移していたという考えもあったが、自らへの戒めとして他人の命を糧とする事を断じ、いつ死んでもおかしくない状態にあったはず。しかし、慎二の目の前に立つ蔵硯は裏れているがとても死と隣り合わせにいるようには見えなかった。

慎二が思案する中、一匹の虫が蔵硯の耳たぶへと留まる。どうやら自分の使い魔であり、肉体の一部である刻印蟲が主へと報告を告げているようだ。蔵硯がゆっくりと頷くと、蟲はそのまま主の肉体へ沈むように一体化。不気味な光景に知っていたとはいえ顔を引きつらせる慎二へギョロリと暗い眼を向ける。

「慎二よ…桜はライダーを召喚したばかり。いくら貴様にマスターの資格を譲ったとはいえ魔力供給事態は桜によるものじゃ。あまり可愛がるでない」

また新たな情報が勝手に舞い込んで来たが、驚くのは二の次だと慎二はその情報をため込み、のちに整理しようと思む。桜が光太郎を知らないと言い、蔵硯が自分の幼い頃と変わらぬ不気味さを携えているという時点で仮説を立てた慎二は、念のために確認する。

桜が光太郎を知らないと言った時点で、光太郎を間桐邸に招いた蔵硯もその存在を知らないはず。ならば、その根本でもある原因だけで

も、聞いておかなければならないのだ。

「お爺様…ゴルゴムという言葉に聞き覚え、あるか？」

「ゴルゴム…」

一瞬眉を顰める蔵硯であったが、直ぐに曖昧な答えと共に先ほどから浮かべていた不敵な笑みを浮かべる。

「さてのう。随分と長く生きた中でそのような『単語』を聞いたかもしれぬし、聞かなかったかもしれないなあ」

「そうか…」

聞くべき事は聞いた慎二はフラフラとした足取りで階段を下つていく。

「どこへいくのじゃ、慎二」

「目を覚ましちやったからね。少し早いけど学校に行く準備」

「……………」

蔵硯の顔を見ることなくあつさり答え、階段を下る慎二を見る蔵硯の目は疑念に満ちていた。

先ほど、桜への暴力は控えろと言った際に、少なからず殺気を込めていた。いつもならば自分が登場した途端に怯える慎二のはずである慎二が臆して尻餅をつくどころか、平然と身支度に移るとは…

「まあ良い。あの出来損ない可愛に何があろうとも、この聖杯戦争は変わらぬ」

既に作り置きされていた朝食…恐らく桜が作ったであろうものを

平らげ、シンクで軽く水洗いした後に学校へと出発した慎二は移動中に携帯電話で可能な限り、調査を開始した。

自分が今いる場所は冬木市で間違いなく、10年前にも発端である大災害も発生している。

その代わりに、都市伝説であった仮面ライダーの存在は全くと言って言い程出てこなかった。

続いて自分が巻き込まれたゴルゴムによる怪事件も、道端で見かけるその爪痕も見当たらない。

何より季節が冬…そして蔵硯の言う言葉が正しかったとしたら…

(僕は…光太郎が…仮面ライダーが存在しない世界にいる)

慎二は人気がない裏路地に入ると鞆の中から一冊の本を取り出した。それは聖杯戦争参加者であるマスターが持つサーヴァントへの絶対命令権でもある令呪から創り出した偽臣の書。以前、もしもの為に光太郎が自身の令呪の一部を使い作ったはずの本がこうして手元にある。という事は、今も自分の近くにいてもかもしれない。

「メ…いや」

「ライダー…いるのか」

「……」

光が凝縮し、姿を現したのは慎二のよく知る姿の女性だった。だが、やはり違和感しかない。

慎二の声に応じて現れたライダーのサーヴァントは、桜と同じく紫色の髪と肩や腿を大胆に露出した妖艶な女性だ。大きな眼帯で目を隠してどのような眼をしているかは不明だが、無表情の奥に不満が見える。

慎二という偽りの主に使える事は本意でないという事だろう。こ

の世界の自分は何のつもりか分からないが、桜からライダーを借り受けてマスター気取りに従事しているらしい。

「何か御用ですか」

「お前は…」

「はい」

「いや、やっぱりなんでもない。霊体化して構わない」
「……………」

躊躇した慎二の言葉に従い、彼女は直ぐにその姿を消した。何の用もないのに呼び出したという不満は募るだろうが、かまいはしない。今、慎二が念のために聞こうとした質問の答えを聞きたくなかったからだ。

『光太郎という人物に聞き覚えはあるか?』

返答など、1秒もしないで帰って来るだろう。だが、敢えて聞かなかった。聞きたくなかった。

例えこの場が自分の知らない世界であっても、彼女から…メドウスアの口から光太郎を知らないなんて、慎二は聞きたくなかったからだ。

(さて、いくら考えても解決策が浮かばないまま学校に到着しましたっ)

幸いと言っているのか微妙な線ではあるが、慎二は無事学校にまでたどり着けた。どうやら地形事態は自分の知る深山町と変わらない

らしい。少しばかり早く到着したらしく、登校する生徒も少なく朝練に励む陸上部や野球部の姿が校庭に見える。

これなら教室で少しばかり考える時間が作れると思った矢先。

「ちよつと慎二！」

タオルを首にかけて道着姿の美綴綾子だ。自分を呼び止めた声や表情から、明らかに怒っている事は明白だ。

(…そう言えば朝練思いつきりサボってたんだな)

これは説教かまた例の喫茶店のケーキセット奢りで手を打つかと思案する慎二だったが、ズンズンと擬音が聞こえるような足音と共に歩み寄る綾子に突然と胸倉を掴まれてしまう。

「ちよ、ちよつと待て?!朝練抜けたのは悪かったけどそこまで…」

「はあ?アンタが朝練サボるなんていつものことでしょう!それより、私がない間に随分と酷い事してくれたらしいねえ」

綾子の目は怒りと共に軽蔑も含まれている。どういう意味であるか本日この世界へ来たばかりである慎二には皆目見当もつかない為、ただ綾子の怒りに耳を傾けるしかなかった。

それは、我が耳を疑うような出来事だった。

どうやら慎二…この世界の自分は昨日主将である綾子が不在である事をいい事に好き放題部員をいびっていたらしい。まだ弓や矢の扱いに不慣れである1年の男子に射場へと立たせ、慎二が満足するような射ができればどこかせないなどと言う下劣な指示を出し、晒しものにしたという。

おかげで退部を申し出る一年まで出てきてしまいそのツケが全て

綾子へと回ってきたのだ。

「アンタ…衛宮を部から追い出しただけじゃ飽き足らず、これ以上部を滅茶苦茶にするってんなら、私許さないからね!」

一通り文句を言った綾子は慎二を手放し、足早にその場を離れていった。

しばしその場から動けなくなった慎二は、今朝桜に向けてしまった感情が再び振り返ってしまう。

「なに…やらかしてんだよ、ここの僕は…一年に恥をかかせた?衛宮の馬鹿を部から追い出した?」

気が付けば、拳を強く握りしめている。

見覚えのない出来事に理不尽さを感じているのはもちろんある。だが、それ以上に気に食わなかった。

(なんで…よりもよって…)

『私許さないからね!』

この言葉が、一番堪えた。

そして教室に到着した慎二は苛立ちを隠そうともせず、隣に顔見知りの生徒が現れるまでそれは続いていた。

「よ、今日は随分と不機嫌なんだな」

「…衛宮」

「ん？どうした？」

笑顔で自分に返事をするこのお人好しは、どの世界でも変わらないのだろうか。ここにきて初めて安らぎを感じた慎二は桜に八つ当たりした時のような声を荒げる事なく、どうにか感情を鎮める事に成功した。

「いや、なんでもない」

「ん、そっか」

「桜…どうしてる？」

「いつも通りだぞ。朝食一緒に食べて、弓道部に向かった」

「ああ、そうか…衛宮」

「ん？」

「桜を、頼むぞ」

「なんだ、珍しいな慎二からそんな言葉が出るなんて」

「五月蠅い」

そして授業が開始され、慎二は過去と同様の内容に退屈しながらもノートにペンを走らせる。

学校から遥か離れたビルの一室から、双眼鏡で慎二の様子を伺い、ギョロリとした目を持つクライシスの妖魔一族ズノー陣はニヤリと笑う。

「どうやらうまく『溶け込んで』いるようだ…別世界にいるマリバロン様へと報告せよ！」

「ハッ！」

ズノー陣に命令を受けたチャップは巨大なコンピューターを使用し、通信を開始する。

「今に見ているRX…：貴様にかつて倒された恨み…：別世界で貴様の弟が消えるという絶望と共に返してやる」

「どうやら作戦は上手くいっているようだな」

漆黒の軍服を纏った男…：ダスマダーは通信機から届いた報告を聞くとき横目で自分を未だ警戒している四大隊長たちへと顔を向けた。

「何も警戒することはないだろう。これは実験だ。もし成功すれば、確実にRXを葬り去る事ができるのだぞ？」

「しかし、その為に一度死んだ私の部下を利用するなど…！」

不満をぶつけるマリバロンの声を押しつぶすかのように、ダスマダーは負けじと大声を張る。

「作戦が成功すれば無事に拾ってやるわ！そもそも私自身が指揮を取る羽目となったのも、貴様ら不甲斐ないからではないか!!」

何も言い返せず、歯噛みするしかないマリバロンにガテゾーンは庇うように質問をぶつけた。

「しっかし査察官さんよ、よくあんな手段をみつけたじゃねえか。R

Xの家族の魂を別次元に飛ばし、並行世界の同一人物に溶け込ませる事で存在そのものを消滅させるなんて手をよう」

ガテゾーンの言葉を誉め言葉と受け取ったのか、ダスマダーは口元を歪めて解説を始めた。

「ふっ……この星で我が密偵が回収したデータを基にしたのだよ。確か……自身の魂を加工する事に成功させた『死徒』の研究を利用したのだ。だが、どうやら研究はまだ不安定らしい」

「不安定、とは？」

「魂が完全に元の肉体を離れ切っていない為、僅かながらまだ生きているという事だ」

ボスガンの質問に答えたダスマダーは別のモニターを点灯させる。

そこに映し出されているのは、目を開けぬまま数日が経過した間桐慎二を心配そうに見つめる衛宮士郎や遠坂凛。

どうか目覚めて欲しいと慎二の手を握る間桐桜へ寄り添うガロニア。

そして義弟が目覚めぬ理由にクライシス帝国が関わっていると知り、怒りの表情を浮かべる間桐光太郎の姿があった。

第94話

間桐慎二が目覚めぬと最初に気が付いたのは、ガロニアであった。その日の朝。間桐桜は衛宮邸には向かわず兄達と共に朝食を取ろうとキッチンで鼻歌まじりに食材を切り分けている途中、食卓に人数分のコーヒーを並べていたガロニアに一番寝起きの悪い慎二を起こしてもらえないかと頼む。

毎回注意しても夜更かしして魔導書を読みふける癖がどうしても抜けない慎二を光太郎やメドゥーサと当番制で起こしていたのだが、現在は同居人も増え、起こし方もそれぞれで異なる方法と取っている様子だ。

光太郎の場合は元気よく…というより元気過ぎる大声で、武の場合はすぐに起きるか鍛錬時に『何か』を追加するという容赦なき選択を囁き、メドゥーサなど2度声をかけても起きない場合は掛け布団どころかベットごとひっくり返すという荒業をしかける。

以上の事から慎二がその日誰に起こされたのか食卓に現れる際表情を見れば明白であり、桜も少しばかり気の毒に思うのだが自業自得ということで納得させながらいそいそと味噌汁に豆腐を投入するのであった。

光太郎達と比べれば、まだガロニアは穏やかな起こし方をしてくれているらしい。と、言ってもガロニアも鍋蓋をお玉でガンガンと鳴り響かせるという、体育会系の合宿時に取り入れられた懐かしい方法なのだ、光太郎よりマシだと慎二の感想である。どこでそのような知識をガロニアが有したこともそうだが、一体義兄はどれ程のポリウムの声を発して起こしているのだろうか…

だが、桜の疑問も、平和な間桐家の朝食も青ざめた顔で階段を駆け下りてきたガロニアの言葉に一蹴されてしまった。

慎二が目を覚まさない。

深い眠りについた訳ではない。本当に、目を覚まさなかった。

光太郎やメドゥーサが乱暴に身体を揺すっても、目を開けることなく定期的に呼吸を繰り返すだけ。光太郎は直ぐにかかりつけである診療所へ慎二は運び込んだが、原因は不明。間桐家の主治医の話によれば、脳波や心音も人間が睡眠している状態と変わりないという。ただ、不審な点を見つけたと慎二の首筋へと指を刺すと、そこには虫刺されのような赤い痕がくつきりと残っていた。

「…蚊や蜂に刺された可能性もあるが、どちらかと言えば注射を刺した後の方に近い。もしかしたら、何かを投与された可能性もあるが…」

「あっ…!」

慎二が横たわるベット室をカーテンで遮り、深刻な面持ちで語る主治医の話に心当たりがあったのか、短く声を上げる桜へ一同の視線が集まった。

「桜殿。何か心当たりが?」

「は、はい。皆さん、昨日の戦い覚えていますか?」

「ええ、クライシスが物量で攻め込んだのですよね」

武の質問に答えた桜の言葉に、メドゥーサも頷いて見せる。

日頃のお礼と柳洞寺に住まうメディアへ手土産を持って訪問した際に敵が雑兵とは言え数百体という数で押し寄せ、光太郎達は場所を裏山へと移動して戦闘を開始。長時間の戦いの末に次々と出現するチャップと怪人素体を全て撃退したが、一度も敵幹部が姿を見せる事がなかった事に疑問を抱く光太郎は、肩で息をする慎二と桜に周囲を索敵すると言い残し、付近の森林へと踏み込んだ、その後の事であつ

た。

「っ…」

「兄さん、どうしました?」

「いや、何かに首が当たったような」

変身を解除した直後、首筋を手で押さえる慎二に見ましようかと尋ねる桜を空いている手で制した慎二は携帯電話を取り出す。

「なんでもないよ。光太郎が調べてる間にライドロン呼んじまおう」

「でも…」

「いいんだよ、どうせ気のせいだろうし」

長時間での戦いによる疲労も重なった為か、慎二の言葉に頷いてしまった桜は彼が連絡して3分もせず地中から現れたライドロンの後部座席で光太郎を待つ事数十分。何の成果もなしに戻った光太郎を乗せた赤い車両は一道間桐邸を指すのであった。

「もしかして、あれが原因で…」

「そのもしかして、かもしれないわね」

桜の言葉を遮り、診察室に姿を現した人物達の名を、ガロニアは思わず口にする。

「メディア様、クー・フリーン様…」

「だからその様ってのは止めてくれっての」

自身の呼び名に何処か気恥ずかしいのか。ランサー…クー・フリーンはボリボリと頭部をかき乱すと突然カーテンを開放し、眠り続ける

慎二をジツと見つめる。さらには慎二の頭部を鷲掴みし、持ち上げると主治医が見つけたという痕を見つける。

「どうよ、若奥様」

「あとでブン殴るわよ…そうね、連絡を受けた時点でもしやとは考えたいけれど…」

分析を始めたクー・フリーンとメディアだったが、光太郎はメディアの発言に疑問を抱き、視線を主治医へと向ける。慎二のカルテを運びこんだ主治医はどうやら光太郎の考えを理解したようであり、あっさり和白状した。

「ああ、最初に光太郎君から電話を受けた時点で私が連絡した。もし科学的な原因でないならば、魔術的な原因があると思ってね」

「いい迷惑だわ。以前宗一郎様の治療に携わっていなかったら断っていたところよ」

そこまで面倒見切れませんと言い切ったメディアは両目を閉じ、慎二の額に手を当てる。密着した慎二の額とメディアの手の隙間から紫色の光：メディアの魔力が淡く輝いた。どうやら慎二の体内に自身の魔力を流し、異常がないか確かめているのであろう。やがて魔力の光が消え、ゆっくりと目を開いたメディアの口から飛び出した言葉に間桐家の面々は絶句するには十分なものであった。

「魂が…肉体から剥がされているわね」

(さて…どうしたもんかね)

午前の授業は無事に終了…と言っても慎二にとっては過去に受けた内容とまるで同じだった為、受ける必要はなかった…とはいえ、とりあえずノートに教員が黒板へと記した板書をノート書き写す程度の事はしておいたが、慎二の思考は今後の方針をどうするかというところで占めていた。

慎二が置かれている状況…自分ではない間桐慎二なる人物の周囲は大きな変化はない。いや、この世界に光太郎が存在しないという時点で大きくズレが発生はしているのだが。

(まずは…やりたかないけど情報収集か)

今後の行動を決める為にも、自分ではない間桐慎二という人物像をさらに詳しく知る必要があるが、今朝の美綴綾子の態度を見ればこの世界で自分がどのような奴かは明白だ。それに自分はどんな人物なのかと聞いて歩くの妙な誤解を生みかねない。幸い同じクラスにいる衛宮士郎は慎二に嫌悪感を抱いている様子はなく、変に関係を拗らせている間柄ではないらしい。それに、彼の手の甲に未だ令呪の前触れである痣が現れない様子を見て、彼にはこれから同じ運命を辿るのかと考えてしまう。

だが、士郎の心配をしている場合ではないと考えを切り替え、慎二は購買部へと向かう。適当にパンと飲み物を見繕い向かった先は生

徒会室。本日は士郎が運動部に備品の修繕を依頼されている為、生徒会室にいるのは彼一人しかいないはずだ。

「…何用だ？貴様が楽しめるようなものはこの部屋に何一つ置いていないはずだが」

「固い事言うなよ。僕だって、たまには違う場所で食事を取りたい時だってあるさ」

「…ここは食堂ではない。そもそも生徒会に属していないお前がここに来るといふ時点で何を企んでいるかと怪しんでいるのだが」

「随分とストレートに言ってくれるね。あとそれ、衛宮にも同じこと言えんの？」

「衛宮は生徒会の協力者として特別に許されていし、許可も下りている。母校に貢献する生徒へ許される特権と言ったところだ」

「はいはい。どうせ僕は好き勝手にやってますよ」

「ふむ、どうやら自覚があるようで何よりだ」

開口一番に慎二へ手痛い挨拶を交わした人物は柳洞一成。この穂群原学園の現生徒会長であり、士郎の良き友人だ。元の世界では慎二とも気軽に話せる立ち位置にいるはずだが、どうやら綾子同様に慎二を快く思っていない方らしい。

慎二は一成の遠回しな入室お断りという主張を無視し、事務に勤しむ一成の対面する形で座ると、眉間に一層深く皺が刻まれた。

余程とは言わないが、相当嫌われているらしい。

(つたく、何やらかしてんだか僕は…)

封を開けた味気ないパンを食う慎二だが、幼い日の自分を思い浮かべればどこか納得する点もあった。

自分が誇り高き魔術師の家系の生まれであり、魔導書を読めるとい

うだけで後継者になれるはずだという壮大な誤解を抱いていた頃。その夢は留学していた頃祖父から届いた一通の手紙によって音を立って崩れ去り、一時帰国した時などそんな事情も知らない義兄と義妹に八つ当たりしてしまったのだ。

だが、敢えて祖父がその思想を砕いてくれたおかげで今の自分や光太郎達との関係も良好になった。

もし、この世界でそのような事が一切なく、上っ面だけの誇りばかり大きくなった自分が何かを理由に拗れてしまったのなら…はつきり言つて同情しか浮かばない。

（光太郎が間桐家に来なければ…僕もそうなっていたかも知れないって事か）

ただそれだけ。それだけで大きく分岐してしまった別の自分との違いに複雑な心境となる慎二に、目の前に座る生徒会長の声が耳へと届いた。

「そ・れ・で？ 一体何が目的なのだ慎二よ。お前のことだ、衛宮のいな
い今を狙つて生徒会室に入り込んだのも算段の内なのだろう？」

「はあ？ 僕を遠坂と一緒にするなよ、ちよいとお前に個人的な質問があるだけだよ」

パンのビニールを握りつぶし、袋へと詰めた慎二はあちらから話を振ってくれるとは好都合とばかりに口元を歪める。同時に綱渡りであるこの方法が成功するかどうかと不安に駆られながらも。

（さて、ここからだな…）

息を飲む慎二は冷静に勤めながらも、未だ警戒している一成へと質問を開始した。

「女子から聞いた話なんだけどさ、葛木がお前の寺に住み着いてるって本当か？」

「何？」

さらに視線を鋭くする一成に対し、慎二は内心質問がストレート過ぎたかと焦るが、眼鏡の位置を指先で戻した一成は隠す事でもないと質問に対する回答を続ける。

「確かに宗一郎兄：葛木先生は俺の自宅で居候という立場にある。それがどうかしたか？」

「いや何、寺の階段を登る姿を何度も見たって聞いてね。それに気になるのはここからなんだけどさ…」

ここまでくれば後は…と慎二は後詰めとして、どのような対応もできるよう、手足に力を込めた状態で、一成へと尋ねた。

「葛木の隣を女の人が歩いてたって聞いたんだよ。しかも、外国人の…その人について詳しく知りたいんだけど…」

「ああ、その人は宗一郎兄のっ——」

瞬間、一成の目の色が変わる。

何かに取り憑かれたように無表情となった一成は手元にあつたカッターナイフを握ると机の上に飛び乗り、慎二の胸目がけて突き立てようとするが、動きを予測していた慎二によって両手で手首を掴まれるが尚も慎二を殺そうと目を尖らせている。振り払おうとする一成の腕を必死に押さえつける慎二の表情は待っていたと言わんばかり

に笑い、恐らく聞いているであろう人物に対して告げる。

「やっぱり、暗示をかけていたみたいだねえ。揺さぶって正解だよ。けど、心配しなくても葛木に手を出すつもりもないし、アンタの願いの邪魔もするつもりはない……ただ、話をしたいだけだ！」

慎二の言葉を聞き入れたのか。一成の動きがピタリと止まり、カッターナイフを手放して直立不動になると、無言で慎二を見つめ始めた。

「……近いうちに尋ねるよ。その場所も、アンタの根城としている柳洞寺だ。何の不満もないだろう？それともう一回言っとくけど、僕は話をしたいだけだ。戦うつもりはないからね」

「キャスターさん？」

直後、一成は糸の切れた人形のように崩れ落ちるが、寸でのところで慎二が受け止める。深く息を吐いた慎二は取りあえず一成を元居た場所へと座らせ、どうにか事を進めたと額に流れた冷や汗を拭う。彼女から疑問を投げかけられたのは、その直後だった。

「何のつもりですか、シンジ」

霊体化を解いたライダーのサーヴァントの表情は、相変わらずだ。しかし、その声色には疑惑と怒りが込められている。それはそうだろう。今サーヴァント全てが揃っていないとはいえ、今は聖杯戦争の真っただ中だ。

だと言うのに、白昼堂々他のマスターならともかく、サーヴァントに話をしたいなど持ちかけるなどマスターにはあるまじき行為だ。ましてや正式なマスターではない慎二の行為など、サーヴァントから見れば錯乱したとは思えないはずだ。

「ああ、確かにお前の言う通り、僕の行動はおかしい。お爺様にバレたら殺されるレベルだ」

「それならなぜ…」

「お前、桜を助けたくない？」

「っ…」

ライダーの言葉が詰まる。まさか、桜を虐待した兄からそんな言葉が出るとは思ひもしなかつたからだろう。逆に慎二から言えば、自分が桜を助けると言って驚天動地という顔を見せるライダーの態度にショックを受けしまっているが、それはこの世界で仕方のない事と自分を納得させ、次の行動を移る。

「さて、次の相手もちよいと厄介だな…」

この世界に来てしまった理由と、自分が違う自分へと感化されてしまう原因を探るには、やはり魔術師による意見が必要だ。

この世界の祖父は信用できず、桜と対面するといつまた乱暴を働くか分からない。ならば、敵対者であろうとも元いた世界で頼りにした人物を尋ねるしかない。

そして、異なる世界であろうとも苦しむ妹を助ける事は、兄の役目だ。

「っー訳だ。実の妹を助ける為なら協力を惜しまないだろ」

「なあ遠坂？」

生徒会室の窓へと移動した慎二は廊下を悠然と廊下を歩く遠坂凜の姿を見るのであった。

第95話

095

「おえっ……！」

間桐慎二はトイレへと駆けこみ、先ほど目に焼き付いてしまった光景と、自身の脳へと浮かび上がった記憶……正確にはこの世界の間桐慎二の記憶を見て猛烈な吐き気を催してしまう。

喉がやすりで削られる方がまだマシだと思える胃液の逆流に耐え切れず、慎二の目元には涙が溜まっていた。

(なん……なんだよ、僕は……この、僕は……)

息を荒げ、乱暴に引きちぎったトイレレットペーパー口で拭うと頼りない足取りで自室へ駆け込み、ベットへと倒れる。

慎二は自身の行動に……否、この世界での間桐慎二の起こした事を知った。知ってしまったという方が正しいだろう。この世界でのメドゥーサ、ライダーのサーヴァントから聞かされた事実。学校の生徒会室で暗示をかけられた柳洞一成を通し、キャスターのサーヴァントへ対話を試みるという方針と、桜を救うという慎二の言葉に疑念を抱いたライダーから、聞かされた。

間桐蔵硯が桜に何をしたのか。

間桐慎二が桜に何をしたのか。

そして間桐桜が、どのような状態なのか。

ただ、今朝見た桜の容姿と言動から苦しんでいるとしか判断しなかった慎二はその根源を知る。ライダーのサーヴァントが困らせる

為に嘘を口にする性格ではないことは慎二は良く知っている。それでも確かめずにはいられなかった。

学校を終え、帰宅した慎二は聞かされた事実を確かめるべく、間桐邸の地下へと通じる扉を開いた。蟲蔵とも言われるその場所は、慎二の知る限り死滅しており、蔵硯が死んだ後に慎二と桜の魔術の実験場かつ訓練場となっているはずだった。

だが、それはあくまで慎二の知る世界での事。

「…っ！」

最初に聞こえたのは、蟲の体面同士が擦れ合う不快な音。その正体が数十、数百では収まらない蟲の大群とはつきり視認してしまった慎二は思わず後ずさってしまいが、この程度で恐怖するには至らない。彼は義兄である間桐光太郎の戦いを共にする中で、これ以上に悍ましい光景を目にしてきたからだ。

しかし、蟲が蠢く池の中央に立つ人物と目が合った途端に慎二は恐怖に染まる。

「う……あ……」

「なんじゃ……ここに用事があったて訪れたのであろう？それにどうした、常に見慣れたというのに何を今更怖気ついておる……」

「あ……はあ……」

暗闇の中でより不気味に輝く老人の眼光に、慎二の足が震える。心音が異常に早まる。

恐怖心が、心を支配していく。

「はて妙じやのう……今朝見た時は肝が据わったと感心したのだが、どうやら思い違いだったのかもしれない」

カサカサと顔中に蟲を這いよらせる蔵硯はニカリと口元を不気味

に吊り上げるが、直後に表情は一変する。

「直ぐに出て行くがいい。それとも…蟲どもの餌のなりたいか」

静かに言われた一言。だが、蔵硯の見開いた底知れぬほどに黒い眼を見た途端に慎二は逃げ出した。

なぜ逃げる必要はあるのか、慎二には分からない。あの程度の殺気、とうに慣れているはずだ。何度も殺されかけても、自分は恐怖に駆られて逃げた事など、ただ一度もないはずなのに…

しかし今は死にたくないという生存本能が勝っている。一目散に蟲蔵を抜け、見つとも無く転んでしまっても恥とも思わず、ただひたすら慎二は逃げた。

そして脳裏に過つたのは、見覚えのない記憶。

先ほどの蔵硯への畏れでこの世界に生きる『間桐慎二』の記憶が蘇ったのかは、定かではない。そう洞察する余裕が、今の慎二にはなかったからだ。

記憶の中で、慎二は笑っていた。

醜く、歪に。

誰も彼も見下して。

それが弱い自分を守る唯一の手段だと気づかずに。

そして自分には決して逆らわない桜への暴力が、一段と明確に浮かび上がる。

否、暴力だけの方がマシだった。暴力で、終わって欲しかった。

慎二は、抵抗しない桜を――

「っ——！！」

ようやく収まった吐き気が再度繰り返す。

必死に思い出さないように意識を別のものへと切り返そうとしても、余計により強く思い出してしまふ。

慎二はベットから立ち上がると両手を壁に当て、額を壁へと叩き付ける。

何度も叩き付けても、痛みが増すだけで消えてくれない。

(クソ、クソ、クソ、クソ、クソ、クソ、クソ、クソ、クソ…！)

額を叩きつけた回数が10を超えた頃によく痛みによって視界がぐらついた慎二は床へ大の字になって倒れた。

「なんなんだよ、くそッ…！」

「ご理解頂けたようですね」

腫れた額を手で押さえる慎二を見下ろす形で顕現したライダーのサーヴァントは、慎二の知る別世界の人物と同じと到底思えない程、冷たい声で囁いた。

「シンジがどう心変わりをしてサクラを助けると言ったのか、私には分かりません。しかし、あのご老体の発した殺気程度で身を竦ませる程度では到底不可能な話…」

「桜を思うのならば、大人しく聖杯戦争のマスターとして私の後にいて下さい。無論、屋敷から一步も出ないという方法もあります」

ようやく呼吸が落ち着いていた慎二の耳へ叩き付けられた声は、本人にとってみたら幾分かオブラートに包まれながらもこう言っているのだろう。

お前などに桜は助けられない。大人しく、自分の後ろで震えあがっている。

確かにそれが一番楽で安全な方法なのだろう。戦いはサーヴァントに一任し、マスターは身を隠す。あの愚兄のようにサーヴァントと共に最前線に立つという方が…いや、翌々思い出してみれば第五次聖杯戦争に参加したマスターは割と前に出ていたような…

そんなツツコミを思わず浮かんでしまった慎二の脳裏に、自分の忠告を散々無視してパートナーと共に戦った光太郎の、あの底抜けに明るい顔の輪郭がふと浮かんでくる。

そして考える。光太郎と共に歩んできた普段の自分なら、どうするか。あの義兄なら、悩む自分にどう声をかけてくるのか。そして桜が自分へと向けてくれた笑顔を思い出す。思い出す度に蔵硯への恐怖が、桜に対する罪の意識が段々と収まり始めていた。

(全く、どうして思い出すだけで震えが止まって来るんだろうね)

未だにあの光景は消えてくれない。もし元の世界に戻ったら当面は桜とガロニアの顔を見れる自身はこれっぽっちもありはしない。だが、慎二の行動方針に変わりないのだ。

痛む額を抑えて上半身を持ち上げた慎二は尚もこちらを見るライダーのサーヴァントへと顔を向けた。きつかけはどうあれ、彼女が『聖杯戦争のマスターなら…』と聞かせてくれたおかげで、取りあえず立ち上がる事はできそうなのだから、こう言わなければならぬだろう。

「ありがとうさん。助かったよ」

「…は？」

「ああ、別にわからなくて結構。僕が一方的にそう言いたかっただけだしね。それに、やっぱりアンタは優しいな」

「先ほどから一体何を…」

サーヴァントからすれば、先ほど慎二に向けて言い放った忠告は自尊心の塊である彼にとつて導火線に火を付ける事に等しく、最悪また桜へ八つ当たりのする可能性も高いと考えたが彼の反応は予想外にも感謝すらされてしまった。

本来なら黙って彼の命令にただ従うだけのはずだったが、今朝から見せる彼の行動は昨日までとまるで異なる。特に敵サーヴァントであるキャスターに対話を試みようとした際など、許可なく霊体化を解除して物申した程だ。

聖杯戦争の意味を理解できず、与えられた玩具に歓喜する子供という印象でしかなかった慎二が、とどころ元の性分をのこしたまま別人になったような印象を受けたサーヴァントに、慎二は不敵に笑いながら口を開いた。

「自分で言っただろ? 『桜を思うなら』って。やっぱり本当のマスターって事もあるんだらうけどアンタの事だ。心底桜を心配してんだろ?」

「…っ!?!」

言葉に詰まってしまった事をサーヴァントは後悔する。これでは慎二の私見を肯定したも当然だ。

わからない。

この少年は、一体何を考えているのかを。

「…わかつちやいたけど、混乱すると顔に出るよなやっぱり」

「い、いえこれは…」

「あー分かってる分かってる。僕が妙な事口走ってるもんだから理解できないんだろ?ちゃんとその辺説明するから」

慎二の言う通り、冷徹の表情が崩れ始めているサーヴァントの言い

分を聞くことなく、自身の目的を告げた。

「桜を助ける事は変わりない。けど、言っちゃ悪いがそれはついで。もののついでなんだよ」

「そんで僕の目的は、元いた世界に戻って、こんな目に合わせた奴の肩間に風穴を開ける事だ」

「魂が剥がされてるって…どういう事なんだ？」

慎二の容態を聞き、駆け付けた衛宮士郎の口から恐らくこの場にいる誰しもが思う疑問に、パイプ椅子に脚を組んで座るメディアが答える。

「言葉通りの意味よ坊や。彼の魂はこの身体から意図的に剥がされている。いえ、剥がされかけているという方が正しいわね」

「それは…まだ完全に慎二の魂は肉体から離れていないと受け取って言いわけ？」

士郎と同じタイミングで診療所へと現れた遠坂凜はメディアの口

ぶりから慎二はまだ助かる見込みがあるのかと尋ねながらも、ベットに横たわる慎二の手をずっと握り続ける桜と、祈るように両手を組むガロニアへと視線を向けた。

健気にも妹2人にここまで思われている慎二を一秒でも早く叩き起こしたい凜は改めてメディアへと顔を向けた。

冷静を装いつつもいつ感情が爆発するか分からない凜に少しは落ち着きなさいと言うメディアは、静かに切り出した。

「そうね。彼の魂を毛糸玉で例えるとしたなら、昨晚からゆつくりと毛糸を解き出し、別のどこかへと結びつけている。そして別の場所へと結びつけられた箇所へどんどん毛糸は丸く、大きくなりやがて本体に残された毛糸玉はなくなる…」

淡々と語るメディアの説明は分かりやすく、恐ろしいものだった。そのような自覚することすら難しい方法で魂が剥がされていたのなら、発見が遅ければ慎二はもう…

「その魂の行き先は、どうなってるんだ？それに魂の行き場所なんて一体どこに…」

「確かに、一番の疑問点はそれでしよう。通常、肉体から魂が抜けた場合は条件さえ揃えば元の場所に戻る事もある。動物の帰巢本能と同じようにその魂は肉体が死んでいない限り元の器へと戻る。臨死体験など呼ばれるものは、まさにそれでしようね」

「待って。さっきの貴女の説明通りなら、慎二の魂は別の場所へ移されてるって事になるの？」

「特段珍しい魔術ではないはずよ。転換、置換：魂そのものを剥がしように、飛ばしやすいうように加工してしまえば不可能ではないわ。先日そのこの槍男が追っていた魔術師も、そうやって生き抜いていたんでしよう？」

「…嫌な事思い出させんじえねえよ女狐」

士郎と慎二の疑問へと答えるメディアに声を低くするクーフリーンの嫌味など意に介さず、シオルダーバックから水晶玉を取り出した

メディアは指先で水晶を軽く弾く。すると水晶玉から照らされた淡い光が本来見えないはずのものを映し出した。

「こ、これは…!?!」

「慎二の胸に小さな魔法陣…それに、そこから細い線が伸びて…」

驚く士郎に続いて凜が口にした通り、慎二の胸…心臓の位置に拳程度の魔法陣がグルグルと回転を続けている。その円の中央から細く伸びる線…触れるだけで千切れてしまうと思える程に頼りない線は慎二の胸から1メートル程伸びた所で途切れている。いや、途切れていると言うより、糸が水中へ沈んでいるかのように波紋が生じていた。

間違いなく、この魔法陣が慎二の魂を引き剥がしている術式なのだろう。

「私が糸玉と例えたのはこういう事。行き先は分からないけど、彼の魂は次元を超えて別の誰かに結びつけられ、剥がされて続けているという事よ」

「次元を超えて…まさか、別世界に!?!そんな事が簡単に…!」

「できる相手じゃない。私達が戦っている相手は特に。貴女も先日殴り込みに行つたばかりなのでしよう?」
「う…」

思い返してみればそうであつたと凜は口を噤んでしまうが、メディアの放つた言葉に強く反応した士郎は自ら抱いた嫌な予感が外れて欲しいと願いながらもメディアにその疑問をぶつけた。

「なあ、別の誰かに結び付けるって…それは慎二の魂が別人に移されているってことなのか?」

「半分解、と言つたところでしょうね?」

「半分…?魂を別世界に飛ばした時点でもう敵の目的は…」

士郎の疑問への曖昧な答えを出すメディアに凜は言葉を切る。今、桜達に後ろ向きな状況を聞かせる訳にはいかないと考えての事であつたが、その点メディアは容赦がなかつた。

「そうね。魂を別世界へと飛ばした後に異空間転位を絶つてしまえばもう元の肉体には戻らない。けど、魂だけは永遠に彷徨い続けるでしょうね。敵がその程度で満足すればの話でしょうけど」

「なん…だよ…それ以上に、何があるんだ…」

肉体と魂を引き剥がし、もう元に戻らないようにする。それはもう対象を殺したも同然だと言うのに、敵はそれでは終わらない。メディアがそう告げているようにしか、士郎には聞こえない。

「私で敵であつたなら、こうするわね」

「別世界の同一人物と魂を結び付け、知らず知らずのうちに消滅させるように仕向ける」

表情を変えることなく、言い切つた。

メディアの言う事が理解できてしまった凜は口を思わず押える。未だ経過としては理解ができない士郎であつたが、最後に聞こえた『消滅』という単語だけは聞き逃せず、意思に反して声を荒げてしまった。

「消滅つて、慎二の魂が…なんだよ、どうしてそうなつちまうんだよ!? それに同一人物? 別世界の慎二に入ったからってなんでそんな——」

「落ち着きなさい衛宮君。私が…説明、するから」

「遠坂…」

士郎の肩を掴む凜も大声を上げた必死に自身を抑え込みながら告げた。凜の様子と、自分の背後で変わらぬ眠る慎二を見守り続ける桜とガロニアを一瞥し、目を閉じて深く息を吐く。落ち着きを取り戻して凜の話を聞き逃さぬように、彼女と目を合わせた。

「ん、よくできました」

同じく冷静さを取り戻した凜は一度柔らかく微笑むと、話を切り出した。

「いい？メデイアの言う別世界の同一人物の中に慎二の魂を入れるというのは、考えるだけでも最悪な手段なの。同じ肉体に2つの魂を宿すのではなく、完全な融合。上書きと言ってもいいでしょうね」

ここまで大丈夫と凜は確認を取ると、士郎は黙って頷く。

「今回の場合、慎二が入った別世界の慎二：仮にB慎二とも言いましょうか。B慎二の魂へこちらの世界のA慎二の魂が上書きされたとしても、どうしてもA慎二の魂は薄れてしまうの。それはもちろん肉体がB慎二の持ち物である事も大きな理由だけれど、同じ人物であつてもA慎二は肉体へ決して馴染めないの」

「馴染めない…？同じ肉体なのにか？」

「ええ。同じ身長、同じ体重、同じ遺伝子…どれも同じ条件であつても、魂と肉体が共に歩んだ『経験』までは同じではない。習慣、癖、それに知識や記憶…これらが異なってしまうえばまず肉体が魂を拒絶してしまう」

「そ、それじゃあこっちの慎二の魂は…」

「一時的には人格は保っていられるでしょうね…けど、徐々にB慎二の魂に浸食されて、いずれは…」

もう、それ以上言わなくても分かる。

魂は、言わば人間を構成する情報そのものだ。その情報と一致しないと肉体が判断したのならば、拒絶する対象となる。体内に侵入した病原菌に対して免疫細胞が食いつぶし、除去するように。

「なら…なら、この術式をなんとかできないのか？メディアの宝具を使えば…」

「もう既に、試したんです…」

希望を見出していた士郎が口にした手段は、有無を言わずに桜から否定される。振り向かないまま静かに告げる桜の声は、普段聞きなれたどの声よりもか細く、弱い。

「…最初に魔法陣の位置を知った直後にメディアさんは予備の魔力を消費してまで宝具を…破戒^ルすべき^ブ全ての符^{レイ}を使用して貰い、術式は消えました。けど、すぐに同じ陣が現れたんです」

診療所の医師が光太郎達に連絡を受け、すぐさまメディアへと依頼をしたのはこの為であった。もし慎二を蝕んでいる原因が魔術によるものであれば、メディアの宝具であればいかなる魔術も初期化し、打ち消すと期待された。しかし、メディア本人が嫌っている宝具を魔法陣へ突き立て消滅した直後、再び魔法陣が構成され、引き続き慎二の魂を異界へと送り始めていたのだ。

「どういう事…？メディアの宝具で消せない魔術なんて」

「ええ。己惚れる訳ではないけれど、私に消せない魔術なんてないでしょう。だから原因は別にあるのよ」

これまで口を挟まなかったメディアが再度慎二へと顔を向け、その細い指を向ける。

「恐らくだけど、彼の身体には術式を常に展開させる為の何か潜んでいる。本当に小さい…目に映らない程に小さい何かがある」

それが、慎二の身体から魂を引き剥がした本当の原因。

昨日の戦いで慎二が訴えた首の痛み。その箇所を見て医師が称した注射したような痕。この考えから至った答えは、慎二の体内へ術式を展開する何かがある。もしくは、何者かが侵入したという事なのだろう。

もし敵が顕微鏡であつても視認できない大きさだとすれば、今のメディアに対処する手段はない。それも、人間の体内となれば猶更だ。

「あの時…私が慎二兄さんの事をもっとよく見ていたら…こんな事には…」

「桜…」

「嬢ちゃんの責任でもねえだろう。奴さんの攻撃が小僧の首に当たった時点で、もう作戦は成功しちまつてんだ。それに…この程度で諦める奴でもないんだろう?」

まだ暖かい義兄の手を握る力を強めてしまう桜にかけるべき言葉が見つからない凜だったが、無礼にも作業机の上に腰掛け、結果論を述べるクーフリーンの向けた視線を追うと同時に、今まで姿を消していた慎二と桜の頼れる兄が姿を現した。

「そうだ…諦めるなんて、するわけない」

「どうやら…成功したようね」

「ほ、本当ですか!?!」

間桐光太郎の放った言葉から何かに勘付いたメディアとガロニアは別々の反応を示す。そして立ち上がりようやく一同に顔を見せた桜の目元には涙が溜まつており、光太郎は安心させるべく笑顔で頷いた。

「いやはや、ずいぶんと無理に付き合わされたものだな、赤上君？」
「いえ、これしきの事で慎二殿が助かる可能性が強まるのであれば安いもの」

光太郎に続き部屋へと入ったのはこの診療所の主である光太郎達間桐家の主治医と、二の腕をガーゼで押さえている赤上武だ。

「光太郎兄さん…じゃあ…」

「ああ。2人の協力のおかげで成功した。これで慎二君を助けることが出来る！」

桜と光太郎はどうやらそれで通じ合っているようだが、途中から合流した士郎と凜はさっぱりだ。思わず尋ねる凜は、あまりにも単純であり、無茶にも程がある方法に驚愕するしかなかった。

「俺は今から慎二君の体内に入り、魔法陣を展開する奴を叩き潰す！」

慎二は自分は異世界から意識だけ…もしくは魂だけやってきたという出鱈目な説明をサーヴァントへと告げ、どうにか納得してもらった後にとある人物にも同じ説明を終えると、柳洞時へと続く石段を上

り続けていた。

背後から刺さる痛すぎる視線をあびながらも。

「おい…そろそろ睨むの止めてもらえない？すんごい心臓に悪いんだけど」

「あら、取りあえずアンタの話術でどうキャスターを口説き落とせるか期待の眼差しを向けているんだけどね」

振り向いた途端に学校で見せる優等生な笑顔で無茶を告げるこの世界の遠坂凜へ反論することなく、深く溜息をついた慎二は移動を再開する。

慎二の視線がずれたと同時に、目を鋭くする凜は霊体化して自分の背後に控えているサーヴァントへ念話で語りかけた。

(どう思う？アーチャー…)

(期待に応えられなくて残念ではあるが、間桐慎二の言う言葉が全て正しいという確証はない。そして…我々を騙すための芝居であるという線も疑うのにも材料が足りんな)

(つまり、今のところは油断なしに様子見するって事かしら)

(他に方法はあるまい。それに、手を組む事は決してデメリットではないと思うが?)

(それ、慎二がアンタの真名を当てたからって事も含んで?)

(……………)

慎二はライダーのサーヴァントへと説明を終えると急ぎ学校へと引き返し、ちようど帰宅途中であった遠坂凜を発見する。凜の後姿を見て声をかけると立ち止まり、ワザとらしく溜息をついて振り返ったその顔は学校中の注目を集める優等生が満面の笑顔で『何か用かしら、間桐君?』と猫撫で声で尋ねる姿に悍ましさを感じながらも、慎二は単刀直入に話を始めた。

妹を助けたくないか？

その一言で凜の表情は一変し、慎二の手首を掴むと強引に体育館裏へと連行された。その様子を何名かの生徒に目撃されてしまったが、まあ異世界から来た慎二本人には関係ない。

目的の場所へたどり着くと、周囲に誰もいない事を確認した凜は威圧感に満ちた疑いと怒りの眼差しを慎二へと向ける。決して学校では勿論、外部にすら告げてはならない事を口走った慎二への言いたい事は山ほどあるのであろうが、まずは何故慎二がそんな事を口走ったのか疑問なのであろう。

この世界でも、妹は大事な存在であるのだと安心した慎二は、まず聖杯戦争に関して切り出した。

聖杯の正体や桜が陥っている状況。そして祖父蔵硯の狙い。説明の度に『なんでアンタがそんな事を…』という疑問が浮かんでいるが逐一解説が面倒だったが、自分が異世界から…それも聖杯戦争が終わった頃から来たと言った途端にさらに混乱が生じてしまう。

(ああ、元の世界と違って何の耐性もないんだっけ…?)

その証拠として慎二が用いたのが、彼女が契約したサーヴァントの真名を知っているという、ある意味ジョーカーとも言える手段だ。

言った途端に殺気を漲らせて顕現したアーチャーのサーヴァントに対し、慎二に付いてきたライダーのサーヴァントも姿をあかし、一触即発の雰囲気となりかけた。しかし慎二は自身のサーヴァントに霊体化するよう指示すると、凜へ少しでいいからそちらのサーヴァントと話がしたいと申し出る。視線をアーチャーへと向けると彼は無言で頷き、まだ殺すんじゃないわよと物騒な一言と共に凜は数十メートルほど離れていった。

「さて…久しぶりでいいのか？衛宮」

「貴様…一体どこまで」

「そう怒んなよ。さっきも言ったけど僕の目的は元の世界に帰る事と桜を助ける事。それ以外の事なんてお前らが勝手にドンパチすればいいだけの話だろ？」

「……………」

「別にこの事を遠坂に話すつもりはサラサラない。僕の話も信じてもらう為には、これ以外に思い浮かべなかったからね。だから、当面はまだ記憶を失った振りも続けても問題ないよ」

やがて、信用はするが信頼はしないという条件つきで協力関係となった慎二の次の目的が、柳洞時を拠点とするキャスターだ。

慎二から見れば、これが最大の目的とも言える。

恐らくキャスターであれば度々自分でなくなるという状況と、異世界へと戻るきっかけを見つけてくれるかもしれない。その為にはあちらにもまずは話を聞いてもらうだけの情報を提供しなければならぬだろう。

(つても初対面の頃は容赦なかったからな…こつちもそれ以上の対策を考えておかないと…)

そこで慎二の足が止まる。

「どうしたのよ、急に立ち止まって」

「なあライダー。寺の門に、誰かいるか？」

凜の質問を無視し、霊体化を解いたサーヴァントは慎二の言う門へと視線を向けるが、彼女は首を横に振る。嫌な予感を募らせる慎二へ、同じく霊体化を解除したアーチャーの一言に、慎二は階段を駆け上った。

「何者だ、あの連中は。あのような面妖な連中、キャスターの一見なのか？」

まさかとは思ったが、考えて見れば可能性はあった。自分の存在を異世界へと飛ばすだけでなく、監視する為にこの世界へと侵入していたのだとしたら――

息を切らせて階段を登り切った慎二の視界に映っていたのは――

傷だらけの姿で柱へ括りつけられているキャスターと、彼女により門番として召喚されたアサシンのサーヴァントに、彼女のマスターである葛木宗一郎。

そして彼女たちの周りには見覚えがあり過ぎる連中……クライシス帝国の雑兵チャップと3体のサイボーグ怪人。

「まっていたぞ間桐慎二……」

間桐光太郎によって倒されたはずの怪魔妖族　ズノー陣の姿があった。

第96話

定期的に周囲から響く音。これは間桐慎二の心音に他ならない。通常、他者の心音が耳に響くなど聴診器などの機器を利用しなければ聞こえるはずもないが彼はそんなものを使うまでもなく、聞こえてしまう場所に立っていた。

「見つけたぞ…」

バイオリダー…間桐光太郎は標的に向かい、そう短く言葉を切った。

慎二の体内に敵が潜んでいるかも知れないというメデイアの予想は恐らく正しい。そう判断した光太郎は慎二の体内へと潜り込むと決意。しかしバイオリダーの能力でゲル化し、さらには目に映らぬ敵を探し出し戦う事が可能であるのか試さなければ慎二が危険であるという医師の意見に赤上武が自身の体内に入り込めるか試せばいいと名乗り出る。

結果は成功。

バイオリダーとなった光太郎は身体をゲル化させ、医師が準備した注射器へと自身を注入。医師は光太郎が1ミリリットルにも満たない液体となつて注射器へ収まった事に驚きながらも、簡易ベットで横になる武の腕へ注射器を打つ。青色の液体全てが武の体内へと注入された後、液体は体内でさらに身体を収縮。血管内で血液を遮ることなく、それどころか血液の流れにのり移動することが出来た。

そして心臓へと辿り着いた光太郎はマイクロサイズのままバイオリダーへと姿を変え、体内に立つ事に成功したのだった。

そして現在。

同じく顕微鏡ですら存在を検知できない大きさとなり、慎二の心臓付近へと辿り着いた光太郎は同じく極小の敵へと相対した。

慎二の首筋から侵入したソイツは背中に三対六本の腕を持ち、そのうち二本の腕から巨大な光を発している。ミクロサイズとなった光太郎の視界ではただ光が敵の背後へと伸びているようにしか見えな
いが、間違いなく慎二の魂を剥がす為に展開された魔法陣の一部なの
だろう。

その証拠に魔法陣の遥か奥では、巨大な光の柱が天高く聳え
ていた。見上げても果てなく伸びるあの柱こそ、敵によって引き剥がされ
ている慎二の魂。

「侵入者発見、侵入者発見」

「侵入したのは、お前の方だ」

拳を強く握る光太郎は、モノアイを点灯させ、魔法陣を展開する腕
を微動だにさせぬまま残る腕をこちらに向けてくる敵：怪魔ロボッ
トへ静かに告げた。

「貴様は…絶対に許さんッ!!」

迂闊だったと、間桐慎二は目の前に映る光景を見て思わずにいられ

ない。

敵は自分の魂を異世界に放り投げるだけでなく、同一人物の肉体へ縛るといふ所業で終わつたと思ひ込んでいた。

クライシス帝国の仕業とするならば必ずどこかに穴がある。その為にもこの世界のキャスターへと接触し、自身がどのような状態にあるのか、あわよくば元の世界に戻る術を聞き出せればと事を進めていたが、敵はその言つて先を読んでいたらしい。

まさか過去に倒された怪人が、目的の人物達を捉えていたとは。

柱に括られているキャスターとアサシンのサーヴァント、そして柳洞寺の居候の身である葛木宗一郎達はまだ息があるように見える。普段ならばどうすれば救い出せるかと思考を巡らせるはずなのだが、全く頭が働かない。そんな慎二の姿を見透かしているのか、集団のトップであろう怪人は大声を放つ。

「くつくつく…大人しくしていれば楽に死ぬるといふのに、随分と足掻くではないか間桐慎二！」

「っ…」

ギョロリと巨大な眼球で睨みつける怪魔妖属ズノー陣に無意識に一步後ろに下がってしまう慎二に背後で見た事もない連中に呆気に取られていた遠坂凜からの苦言が飛び出す。

「ちよつと話が違うじゃない！私が聞いていたのはキャスターとの対話でしょ？何なのよあの連中は!？」

「あ、あいつらは…」

額に血管を浮かべ抗議する凜であるが、クレーム先である慎二の返事は歯切れが悪い。門の向こうに佇む謎の集団に関して慎二は知っているようだがこちらにはまるで情報がない。予想をはるかに上回る最悪な状況にフラストレーションが高まつてしまった凜は棒立ち

の慎二に物申す為に襟首を掴んで強引に自分の方へと顔を向かせるが、慎二の顔を見た途端に頭に上った血が一気に冷めていく。

「ちよつと…顔真つ青よアンタ？」

「そんな…事…」

口では否定しても慎二の目は焦点が合わず、血の気も下がっている。凜の言う通り、顔面蒼白だ。そこから読み取れる感情はただ一つ。

目の前に現れた集団に対する『恐怖』だ。

「…ああもうっ!!」

ガシガシと髪を掻きむしる凜は旨い話に見事釣られてしまったのかもしれないと自責するが、後悔したところで状況は変わらないと思考を切り替える。

実の妹が間桐家の養子となり肉親として接触が禁じられて以降、冬木の管理人として、1人の魔術師として自分に妹はいないものと考え生きてきた。だが、自分は異世界の同一人物だという寝言を口にする同級生の言い分を真に受けてしまいこの場に立っている。

だが、慎二の言葉に頷いてこの場に来ると決めたのは、自分自身だ。そのような他人に責任を押し付けるなど、心では考えても無責任な真似は凜には断じてできなかつた。

それに、僅かな可能性に縋りたかつたのかもしれない。妹を…桜を助けたいと。

だからまずはこの場を乗り切らなければならぬ。今凜が確認すべきことはただ一つだ。

「慎二、これだけ教えなさい…あいつらは——敵？」

もはや唇も震えて声に出せないのだろうか。慎二は凜の質問に何

度も頷くことでしか応じられない。それだけで、十分だった。

「アーチャーッ!!」

言うと同時に背後で境内で陣取る集団に目を光らせていたアーチャーが漆黒の弓を取り、剣を変化させた矢を放ったと同時に凜は指先からガンドを連射。

決して正攻法とも言えない攻撃であるが、敵はまるで動じる様子がない。

前衛であるサイボーグ怪人達の鈍い銀色の装甲へ凜達の攻撃が触れた途端にアーチャーの矢はあらぬ方向へと反れ、凜の呪いは四散した。

「……………」

「見た目以上の固さって訳…?それに魔術があんな弾け方するなんて」

「多分…魔術を防ぐコーティングが施されている…」

「慎二…?」

冷や汗を流し、細かな震えはまだ消えぬものの目つきだけは幾分かマシになった慎二の情報に耳を傾ける凜は視線を敵へ向けたまま、敵の正体よりもまず先にどうすれば勝てるのかと尋ねた。

「本気、かよ。あいつらは…」

「いいから!ここまで来たからには最後まで協力するわ。だから、教えなさい。勝つ方法を、知ってるんでしょ?」

「私からも、お願いします。マスター…」

沈黙が続いていたライダーのサーヴァントも手に鎖を顕現させ、敵と相対した。

「う、ぐう…」

光太郎は口から途切れ途切れに声を漏らし、片腕を抑えて膝を付いてしまう。敵は相も変わらず元の位置に佇んだままだ。

見れば光太郎の身体中に敵の攻撃によるダメージが蓄積しており、焦げ付いてしまっている。そんな身体に鞭打って敵に向かい一歩踏み込んだ途端。敵ロボットの腕が銃口へと変形し、光太郎の立つ位置とはまるで異なる方向へ銃口を向ける。

「クツ、トアッ!!」

銃口に赤い魔法陣が現れ、陣が高速で回転すると中央からエネルギー弾が発射される。敵の弾丸に向かい、飛び込んだ光太郎は自身の身体で受け止めた。

「ぐ、う…」

攻撃を受けた胸から煙を上げ音もなく落下した光太郎は自身の考えなしの行動に、慎二であればきっと説教が飛んでくるのである。と身体を奮い立たせる。敵は変わらず魔法陣を展開し、光太郎の行動を監視している。

敵のロボットと遭遇し、バイオブレードを手に取り一気に畳みかけようと突撃した光太郎であったが、敵ロボットは腕を銃口へ変形させ、あらゆる方向へと向ける。何のつもりか理解出来ない光太郎であったが、敵の狙いに気が付いた直後にその場が跳躍し、敢えて敵の攻撃を身体に受けた。

攻撃はそれで終わらなかった。

光太郎の回復を待たずに正反対に銃口を向け、次弾を発射。身体をゲル化させ、高速移動した光太郎がエネルギー弾に追いつくと再度人型に戻り、敵の攻撃を受ける…それをもう10回は繰り返している。

(迂闊だった…連中はこの事も狙って…慎二君の体内に侵入したという事なのか?)

心中でクライシス帝国の作戦は単純に慎二の魂を剥がすだけが狙いであった訳ではなかった。光太郎のように作戦を阻止しようと体内へ潜り込んだ相手へ攻撃を加えず、その周囲…即ち、慎二の肉体へと攻撃を仕掛けるようプログラムされていたのだ。

敵ロボットの攻撃程度ならばバイオライダーの能力で回避も、攻撃を素通りさせる事も可能だろう。しかし、その攻撃は決して回避してはならない。その攻撃を一撃でも漏らす訳にはいかない。その攻撃一つで、慎二の肉体が死に至ってしまうからだ。

敵は、慎二の体内という空間そのものを人質にしているに等しい。

遠距離戦が可能であるロボライダーへの変身も考えたが、変わった際に身体が元の大きくなり、慎二の身体を突き破ってしまう危険がある。RXも同様だ。だが、ただやられてばかりいる光太郎ではない。

(…敵は俺が近づこうとすればランダムに方角を決めるが、次の行動までに若干のタイムラグがある。勝機があるとすれば、その一瞬のみ！)

ゆっくりと身体を起こす光太郎はただ敵の攻撃を受けるだけでなく、突き入る隙を伺っていた。敵の攻撃が連射でなく単発であり次弾までの僅かな時間を狙い、敵を倒す。

息を深く吐き、一度慎二の心臓が強く脈打った刹那、敵の銃口が動く。

(右…！)

光太郎は身体をゲル化させ、敵の射線上へと移動。

銃口に魔法陣が出現し、エネルギーが放たれる。

人型へと戻り、眼前で腕を組みエネルギーの塊が身体へ叩き付けられる。

11回目となる攻撃に耐え抜いた光太郎は、再度身体を青い液体へと変えると一気に敵との距離を詰める。

幸いにも、先の攻撃で手放してしまったバイオブレードが敵との直線状に落ちておりこれを回収。ロボットまであと3歩という距離まで詰め、バイオリライダーとなって剣の切っ先を敵ロボットの胴体へと狙う。

あと2歩。

敵のモノアイが今までとは違う速度で点滅を繰り返す。予想外の行動に人工知能が混乱しているのかも知れないが、それならば好都合だ。

あと1歩…

光太郎は後悔した。

バイオブレードを手にとったと同時にエネルギーを込め、必殺のスパークカッターを打ち出せる状態にしていれば違う結果となっていたかもしれない。勝利に急ぐばかりに、光太郎は見落としていた。

敵が『何』を展開し、攻撃する際に『何』を銃口に出現させ、光太郎は『何』を消す為にここにいたのか…

「何ッ…!?!」

バイオブレードの切っ先は、敵ロボットに届かなかった。

光太郎の最後の1歩が踏み込まれる前に、展開されたそれによって止められてしまったのだから。

「魔力の…防御壁…」

赤い円と赤い文字の羅列により構成された魔法陣。

どのような意図があつて組み込まれたのかは定かではない。

敵は魔術を扱う。そんな事は慎二の魂を剥がす術式が展開されているという時点で理解していた事だったはずだ。

魔法陣が消失すると同時に、4本の腕全てを銃口に変形させたロボットのモノアイが光太郎を嘲笑うかのように怪しく輝く。

四つの銃口。

四つの魔法陣。

そして四つのエネルギー弾。

その全てが光太郎の胸へ突き立てられた状態で爆発した。

「ガ、アア……」

爆炎が晴れ、膝を付く光太郎。

好機を完全に逃し、鈍く輝く赤い複眼に敵ロボットの腕が再び起動し、魔法陣を展開される光景が映る。

光太郎は慎二を守る為、12回目となる敵の攻撃に被弾する事になるのであった。

慎二の指示に従った結果、敵の半分を倒す事に成功した。

慎二の指示は何一つ間違っていない。

先に潰しておくべき雑兵。サイボーグ怪人の弱点とも言える関節部への攻撃。

最適な助言により、凜とアーチャー、ライダー達は未知の敵攻略の糸口を全力で拾い続けたと言える。

しかし、それでも敵は半分残っていた。

「こ、んの……！放しなさいよおッ！」

「ちい、霊体化も無理か……！」

「私の力でも、引きちぎれませんか……！」

凜達を囲った複数のサイボーグモ怪人。5体のサイボーグ怪人の口から射出された糸……鉛色であるからワイヤーなのであろうが標的の身体に纏わりつき、動きを封じている。

人間である凜はともかく、サーヴァントであるアーチャーとライダーの動きを封じたワイヤーの節目節目は怪しい輝きを放っている。恐らく対象の魔力に作用し、拘束する術式が編み込まれているのである。

ここまで対魔術の装備を整えるなど、今までは考えられない。どうとう敵は本腰を入れたのかと思考する慎二へ影が差す。

慎二を見下ろせる距離まで接近した、ズノー陣だ。

「ヒャアッ!?!」

自身でも信じられない程に間抜けな悲鳴を上げ、尻餅をついてしまった慎二に傑作だとズノー陣は笑い声を木霊させる。

「クハハハハ…いい声でなくではないか。それは誰の声だ？魂を縫い付けられた間桐慎二か？それともこちらの世界の間桐慎二か？まあ、もうどちらにせよ関係のない話なのだがな」

「もうじき魂が消えてしまう貴様にはな」

こいつは、何を言っているんだ。恐怖と驚愕に染まる慎二の表情を見てどうやら気分を良くしたらしいズノー陣は冥土の土産であると語り始める。

慎二の魂は肉体から引き抜かれ、別世界の慎二の魂と融合している事を。

慎二の魂が完全に溶け合い、こちらの世界に生きる間桐慎二の魂へ浸食されてしまうという事を。

「…っ」

自分が消える。

そう理解した途端にカチカチカチ…と奥歯を何度も打ち鳴らした音が慎二の耳へ響く。

言われてみればその予兆は何度もあった。

怯える桜を見て、妙に苛立ち暴力を振るおうとしてしまった。蔵硯の目を見ただけで臆病風に吹かれた。

そして今も、怪人を前にして恐怖に怯えている。

いくら敵を前にして対策を考えようとしても、身体が震えてしまう。本能が逃げろと訴え続けている。

この世界の間桐慎二の意思に、違和感を覚えることなく当然と感じてしまっている。

「だが、それがどうした？別に間桐慎二という人間が死ぬわけではない。お前は別世界の記憶を全て忘れ、のうのうと生きていられるのだぞ？」

「生きて…」

「そうだ…お前の好きなように生きて、好きなように他人を利用し、お前が勝ち残るのだよ。この聖杯戦争にな…」

ズノー陣の言葉に僅かな希望を見出してしまった。

（そうだ…そうだよ。何で僕がこんな目に会わなきゃいけないんだ？僕はライダーに人を襲わせて、ドンドン強くして、この聖杯戦争を勝ち残って、一番にならなきゃいけないんだ）

（境内では相変わらず凜やサーヴァント達が囚われている。この場で見捨てて、連中が始末してくれば倒す手間も省けてくる）

(そうだ、それがいい！それに僕がこのまま引き下がるようであれば僕だけを見逃してくれるはずだ！ああそうだ、そうすれば僕は助かる！)

(勝てれば何だっていい！僕だけが勝てばいい！)

冷や汗を流し、どうにかこの場を切り抜ける算段が思いついたと口元をつり上がる慎二。彼の思考、完全に肉体の持ち主である間桐慎二のそれに近づきつつあった。

その様子を見て、ズノー陣はほくそ笑む。

もう少し。もう少しでクライシスの敵、間桐光太郎の弟である慎二の魂は消え去る。

調べて見れば、別世界の間桐慎二は自分本位で甘言を耳にすれば直ぐに誘いに乗るであろう愚かな人間だ。

あと一言、自分に従えば命だけは助けてやると言っただけで完全に飲まれるだろう。ズノー陣本来の能力である対象の夢を操る能力すら使うまでもない。

しかしこのまま止めを刺しても芸がないと考えたズノー陣は、起爆剤をもう少し加えてもいいだろうと合間に一言を添える事にした

「そうだ。お前はこれまで通り祖父の指示通りに動いていれば楽に生きられる。そしてあの妹もお前の好き放題に…む？」

途端、慎二の震えが止まったように見えた。

既に魂が溶けてしまったかと顔を覗き込もうと膝を付くズノー陣

だったが次の瞬間。

ズブリと、ズノー陣の左目に間桐慎二に指が突き刺さった。

「ぐ、オアアアアアアアアアアツ!？」

左目を抑えのたうち回りながらも後退するズノー陣が残る右目で慎二を睨む。

立ち上がったその姿は尚も震えているし、顔にも脂汗が滾っている。

だが、目が違う。

打算的で、自分の事しか考えられない者に、あのような目を持つ事などありはしない。

「悪いけどさ…僕にとってのお爺様は、強要するような頑固者じゃなかったよ…」

慎二の知る祖父は自身の抱いた理想を忘却してしまった自身を悔い、その願いを光太郎へ託して逝った。

彼にとっては、その祖父こそが自分の知り、信じる間桐蔵硯だ。

「それに桜は…逆に僕を叱ってくれる。こんな僕に、ちゃんと叱ってくれるんだよ」

桜は血の繋がった本当の家族と引き離されても、自分を兄として接

してくれた。慕ってくれた。

魔術の才能がないというコンプレックスを持つ自分に、しっかりと向き合ってくれる、本当に優しい妹だ。

確かにこの世界での2人は自分の知る祖父と妹ではない。それでも、彼にとっては家族なのだ。

自分を籠絡する為に、その名を使ったこの怪人は許すわけにはいかない。

だから、身体を強引に奮い立たせた。

小鹿のようにブルブルと震える足を叩き、強ばった顔には思い切り両手で頬をぶっ叩いた。

「お、のれい……たかが人間の分際でこのズノー陣様の目をよくもおツ
!!」

激情にかられ、武器を手にしたズノー陣を前にしても、慎二はもう恐れない。

消えかけている？だからなんだ。

そう宿命付けられたサーヴァント達は、最後まで戦い続けていた。

魂が飲まれる？だからなんだ。

魂を消し、その肉体を奪おうとした存在を、義兄は全力を尽くして退けた。

ならば自分にはできないのか？

そんなはずはない。

彼等との違いなど、肉体と持ちえた特異な能力。たったそれだけだ。

ならば、間桐慎二に出来ないはずがないのだ。

「じゃあ試してみなよ？そのただの人間がどこま抗えるのかをさあツ
!!」

もう、弱々しい自分には飲まれない。

そして必ずこの場を切り抜け、この世界の桜を救い、元の世界に戻って見せる。

慎二の決意に同調したかのように、彼の腹部にそれは現れた。

「え…？」

「そ、そんな馬鹿な…!?!」

慎二以上に、ズノー陣が驚きを隠せない。

慎二の腹部に巻かれたそれは、この世界には決して存在しないものだ。

「ロストドライバー…なんで？」

だが、慎二の知るロストドライバーと比べると若干色が薄く、存在が希薄にも思える。だが、指先で触れて見れば感触は確かなものだ。どういった経緯があつてこの世界の慎二の元へと現れたかは分からないが、これで何とかなる。

予めスロットに挿入されていたトリガーメモリーを強く押し込み、鼓動とも思える待機音がエネルギーと共に発せられてた。

「いくぞ…」

慎二はゆっくりと両手を左右へと伸ばし、両足を重なるような位置で垂直に立つ。

慎二の全身がまるで『T』を描くような姿になると、その言葉を静かに告げる。

「変身！」

その刹那、右手を左上に、左手を右下へと素早く突き出す。その際、左手によってベルトの一部が倒され、再びあの声が周囲へと響き渡つた。

《TRIGGERッ！》

ベルトから放たれたエネルギーが慎二の全身を包んでいく。

青の装甲で全身が包まれ、左胸に特殊な形状をした銃を形成。

最後に顔を包んだマスクには赤い巨大な複眼と、『W』の文字を連想させるアンテナが額へ出現する。

左胸にマウントされた銃…トリガーマグナムを手を取った仮面ライダートリガーは銃口を茫然とするズノー陣に向けて、こう告げた。

「^{ターゲット}標的は…お前だ！」

第97話

異変は突然だった。

「ウウ…ア、ア…」

眠り続ける間桐慎二がうめき声と共に呼吸を荒げた始めた。バイオライダーへと変身した間桐光太郎が慎二の体内へ侵入した敵を倒す為に入り込んでから30分以上が経過した。それまで変わった様子のなかった慎二の姿に見守っていた桜達へ同様が走る。

「し、慎二兄さん！ッ」

義兄の名を呼ぶ桜は手を握る力を一層強めるが、慎二の様子は変わらない。慎二の額から噴き出す汗を拭うメドゥーサはもしや体内に入った光太郎が敵との戦闘による事が原因かと不安を顔に浮かべてしまうが、隣に立つクローリーンに否定される。

「光太郎が戦っているのは確かだが、こいつが苦しんでいるのは別の要員だろうよ」

「別の…要因?」

「顔を見る」

眉間に皺を寄せるクローリーンに言われ、改めて慎二の顔へと目を向けるメドゥーサ。慎二の顔色は確かに悪い。だが、それは痛みによる苦悶ではなく、迫りくる何かに怯える恐怖によるもの。自分の知る間桐慎二は光太郎と幾多の戦いを乗り越えた経験によるものか、普通の人間に比べて大変肝が据わっている。

未知の相手に恐怖を覚えるよりも先に、どのように戦えるのかと考えるくらいに、だ。

その慎二の表情が恐怖に染まるといふ事は、異世界で余程の相手が

現れたのかという事か、それともメディアの言う通りに異世界に生きる間桐慎二への魂へ溶け込んでしまい、浸食されてしまっているのか。何方にせよもう猶予は残されていない。今は慎二の体内に入った光太郎が敵に勝利する事を信じるしかないとメドゥーサ達が考える中、1人だけ別の動きを見せる者がいた。

「ガロニア…一体どうしたの?」

「確かここに…ありましたわッ!」

持ち込んだポストンバックの中身…慎二の着替えなどを乱雑に放り投げ、何かを探すガロニアの行動を疑問に思った遠坂凜が尋ねるが、その声は目的のモノを発見したガロニアの叫びにかき消されてしまう。

ガロニアが手にしたのは、慎二が仮面ライダーへの変身に必要不可欠である道具、ロストドライバーとトリガーメモリだ。普段慎二が肌身離さず持ち歩き、彼の身を護ってくれていると考え、慎二の着替えとともに持ち出した道具を手にしたガロニアは慎二の容態を医師と共に見るメディアへと見せる。

「メディア様…ワタクシを慎二兄様の魂のある世界へ転送して頂くことは可能でしょうか?」

このまま光太郎を待つよりも、こちらから慎二を助けに行く方が早い。そしてメディアならば応じて貰えると期待感を膨らませたガロニアであったが…

「無理よ」

メディアの即答に絶句してしまうガロニア。確かにこのロストドライバーを異世界に飛ばされた慎二へと届ける事ができれば状況は一変するだろう。だが、その手段がない。

「嬢ちゃん。意地悪する訳じゃないが、メディアの言う通りだ。今の俺達にソイツを小僧の元へ届ける手段はない。もう、何度も議論した結果だ」

クーフリーンは慎二の胸から伸びる魂の行き先：異世界に繋がる数センチの門を目にしながらメディアと同じ意見を述べる。

メディアもクーフリーンもその手段を考えていなかった訳ではない。異世界へと渡れば慎二の救出も可能となる。だが、魔術に精通している2人であっても異空間転位の魔術を身に付けている訳ではない。それこそ、この世界に5人しかいないと言われる魔法使いか、慎二たちに仮面ライダーの力を預けた者：赤上武曰く神と呼ばれるものしかないだろう。

それに、慎二の魂が通過している門を拡大させるなどの方法も模索したが、敵も許す程愚かではないだろう。先ほどメディアが宝具によつて慎二の魂を刈り取る術式を初期化させたとしてもすぐに展開されたように、こちらが行おうとする対抗策を一手、二手先を読んだ手段を読んでいるはず。

仮に異世界への門を広げたとしても、こちらが門を潜った途端に門が閉じられ、次元の間を永久に彷徨ってしまう危険性だつてある。ミイラ取りがミイラになる事は避けたいメディア達の説明を聞き、ロストドライブを強く握るガロニアの目元に涙が溜まり始めていた。

それを身かねた衛宮士郎はどうか他の手段がないかと質問を続ける。

「なら、別の方法はないのか？あのライドロンに乗って以前は怪魔界に行けたんだろ？」

「それは元々怪魔界への正確な次元座標がライドロンに備わっていたからです。それに、坊やの魂を座標にして次元を跳躍する事も不可能よ」

「っ…」

先に結論を下されてしまった士郎は押し黙ってしまった。沈黙が続
き、室内に聞こえるのは苦しむ慎二の声だけだ。既に光太郎へ全て
を託してしまった善人が口を閉ざしてしまった中、このままでは最悪
の結果になってしまふのかと拳を強く握ることしか出来ない士郎の
耳に、かすかな声が届く。

「——せん」

「ガロニアさん…?」

「諦めたく、ありません」

ロストドライバーを胸に抱いて小さくても、確かにはつきりと告げ
るガロニアの言葉に、桜は思わず顔を向ける。ガロニアの目元へ涙を
溜めながらも、決して諦めを口にしない。

「だって…慎二兄様は苦しんでいる。苦しんでいるという事は、きつ
と何かに抗っているはずですよ。だと言うのにただ見ているだけ
なんて、ワタクシにはできませんわ!」

強く断言するガロニアに、メデイアは再度事実を口にする。それで
も、ガロニアは引き下がらなかった。

「言つたはずよ。私達にはもう待つしか手段は…」

「それでも、何かできるはずですよ! 慎二兄様の魂を辿つて、このドライ
バーだけでも届けるとか…」

「そんな、文字通り綱渡りの方法などできません。それに、魂はを辿つ
たとしても——」

ガロニアの訴えを聞き、眉間に皺を寄せるメデイアは彼女が納得す
るよう説明を促そうとしたが、口の動きがピタリと止まる。

今ガロニアが言いだした方法は不可能に近い。糸のように異空間

へ延びる魂はあくまで視覚化されているだけで実際に触れる事など
まずできない。だが、彼女の言い出した一言がメディアの頭の片隅へ
と置かれた情報を浮かび上がらせたのは間違いなかった。

「ちよ、ちよつといきなりどうしたのよ？」

尋ねる凜に目も向けず、メディアはシヨルダーバックからタブレツ
ト端末を取り出し起動させる。指で数度操作する手際の良さとは裏
腹のその表情は鬼気迫るものがあり、自分を無視するメディアに物申
そうとした凜が一步引いてしまう程だ。

（念のために端末に入れていたことが幸いしたのかしら？まるでこう
なる事を見透かしているようで癪に触るけれど…）

心中で毒づきながらもメディアは端末へ移動させたフォルダ内に
浮かぶ、先日プロテクトが解けたばかりのデータへ指を数度叩き付け
る。

それは、ロストドライバーに内臓されていたデータの1つであり、
慎二が使用しているデジタルカメラ型ツールガジェット『バット
ショット』を完成させた際に読み取れたパスワードによって解かれた
メッセージ。

つまり、ロストドライバーの製作者からのものだった。

——やあ。このメッセージが見れたという事は、僕の設計図通り
にガジエットの組み立てが成功しただけでなく、起動までできたとい
うことだろう。

——おめでとうという言葉と共にこのメッセージを送らせてもらうよ。

——ここでは僕たちがロストドライバーとメモリを預けた者がこれから陥るであろう事案を想定し、その対応策を幾つか記載させてもらった。

——僕の相棒は大変なお人よしでね。僕は必要ないと言ったのだけ心配で仕方がないらしく、僕がこの文章を作っている時も横で色々と言いながらアキちゃんにスリッパで叩かれているよ。

——けど、僕としては僕の住む世界ではまずありえないであろう事を想定して対策を練るという大変興味深い体験をさせて貰っているのですね。逆に楽しませてもらっている。

——話がそれってしまったね。それでは、次のページからその対策が乗せてある。ガジェットの設定図と共に添付した簡易な修理部品の一覧よりもずっと専門的なものばかりで、もしやそんな事は起こらない可能性すらある。

——けど、世の中には絶対はない、らしいからね。

——中でも僕が検索をしてもしきれない程の歴史と種類を持つ魔術と呼ばれるものへの対策は骨が折れたと同時にゾクゾクする内容だったよ。もしや僕のいる世界とそちらの世界では系統がまるで異なる可能性すらあると考えると、是非とも尋ねたい一心ではあるが、僕たちは今この街から離れるわけにはいかないからね。

——どれだけ僕たちの考えた対策でフォローできるかは定かではないが、これが役立つ事を祈らせてもらおう。

こんな文章で始まったPDFファイルだったのだが、その対応策というのが100を超えていた。その目次を見ただけでお腹いっぱいとなってしまったメディアは徹夜続きということもあり、そつと端末の電源を落とし眠りについたのであった。

しかし、その項目の中に一つだけ、今回のような出来事に当てはまる内容があると思いついたのは奇跡に近い。メディアは他の役に立つのか立たないのか分からない対策のページを次々と捲り、目的の項目へと辿り着いた。

CASE・76 メモリ使用者の意思・魂が敵の攻撃または魔術によつて奪われてしまった場合

(なんてピンポイントな事を…)

今まさに自分たちが欲している情報が記載されていた事に驚愕するメディアであったが時間が惜しいため、不安げに自分を見つめるガロニアの視線などに気にすることなく、読み進めた。

——僕たちが戦ってきた敵の中には単純な戦闘能力より、精神攻撃を得意とする者もいた。例えば人間の夢へと入り込む…などね。

——この項目で表題にある通り、ドライバーの使用者の意思、もしくは魂とも呼ばれる者が奪われてしまい、動かなくなった肉体と魂

が危機に陥った場合を想定して話を進めよう。

——①まず、魂の方に危機を迎えた場合

——状況としては、敵の魔術やそれ以外の方法で魂が抜かれてしまった場合に対して、条件付きで対応は可能だよ。

——その条件とはいうのは刈り取られた魂が肉体が双方ダメー
ジを追っておらず、完全に繋がりが切れた状態になっていない事。そ
して魂の行き先が何かのケースやヌイグルミと言った無機物でなく、
生物に宿っている事。

——ここまでであれば、十分に対応可能であり、その方法も簡単
だ。

——これはロストドライバーの発展型に備わった機能の解説に
なるけど、僕と相棒はそれぞれドライバーを装着し、メモリを同時に
装填すると1人のドライバーへ転送し、都合1人のドライバーに2つ
のメモリが使用される。その際にメモリを転送した者の意思・魂ごと
飛ばされるんだ。

——2人で1人の仮面ライダーになる事が可能ということだね。

——今回、僕たちが渡したロストドライバーにはこの特性を応用
させた機能を加えさせ貰っている。

——上記の通り、元の肉体から魂が離れ、魂が別の肉体に宿った
時に迎えた時に、その肉体にメモリを装填させたロストドライバーを
届ける方法だ。

——方法はいたって簡単。抜け殻となった肉体へロストドライバーを装着させるだけでいい。

——そうすれば、肉体と魂が繋がったラインをバイパスにして、ロストドライバーとメモリの『機能』を魂が宿った肉体へ飛ばすことができる。

——これが成功すれば、魂の宿った肉体は変身することができるはずだよ。

——ここで注意しなければならないのが、あくまで飛ばせるのはドライバーとメモリの機能：本物を飛ばせる訳ではないんだ。

——詳しい話をするとその話だけでもう10ページほど使わなければならないが、それは相棒から禁じられているからね。残念だ。

——これを読んでいる者が魔術に精通している事を前提にして話すと、そうだな…イメージとしては『投影魔術』と呼ばれるものに近いだろう。

——言わば形と力を備えたロストドライバーとメモリの複製を一次的に生み出し、使用させるという事さ。

——そして注意したまえ。この機能はドライバーへ加えた追加オプションの都合で使えるのは一度だけ。マキシмумも2回が限度だろう。

——あくまで、再現させるに過ぎないからね。

——だが、状況によってはこれで危機を脱する事は可能なはずだ。

——では、続いての解説を——

ここでメディアはページを一端閉じる。

なんて、出来過ぎた話。メッセージを残した者の説明は荒唐無稽過ぎるのだが、それが可能となっているという状況にメディアは思わず額に手を当ててしまった。最近は科学技術に染まりかけている自分ではあるが、その身はかつて神代の魔術師だった存在。

こうも簡単に状況をひっくり返す手段を既に想定させているとは、この作成者とは一度ジツクリと話をしたいものと思いつつ、メディアが文章に夢中になっている間も、律儀に待ち続けていた少女へと目を向ける。

「メディア様…あの…」

「どうやら、貴女の言う通り。諦めないと何とかなるみたいね」

「そ、それじゃあ…」

「説明はあと。これから、私の言う通りにそのドライバーを操作しなさい。そすれば…」

慎二は、別世界で迎えた危機を乗り越えることが出来るかもしれない。
い。

「ん…？」

間桐慎二は思わずそんな声を上げて自分の身体を見る。

確か自分は突如として下腹部に現れたロストドライバーを使用して変身した、はず…だとこののにドライバーを見下ろしてみればドライバーはメモリを挿入しただけの状態。さらに装填部を押し倒さなければ変身できないので、改めて押し倒そうとした慎二は自分の立つ周囲の状況に眉を顰める。

（確か寺の門にいたはずなのに妙に暗い。だってのに僕は自分の身体をはつきりと認識できる。これって光太郎の言ってた精神世界…なのか？）

思い当たる節を考えながら背後へと振り返るとそこにはもう一人、人間が立っている。

余りにも身に覚えがあり過ぎるその人間は、慎二に向けて明らかに気に食わないという感情をむき出しにして、吠えた。

「お前…一体何考えてんだよツ?!いきなり人さまの身体を勝手に使ってると思えば勝手に話を進めるし爺さんの機嫌を損ねるだけじゃない、聖杯戦争にも介入しやがって…」

「……………」

慎二は、見つめる。自分と同じ顔、同じ背格好で怒鳴る少年の言い分を黙って聞き、見つめていた。

彼は、間桐慎二。この肉体の、本来の持ち主。別の世界の、自分自身だ。

「なあ、速くあの化け物の言う通り逃げるんだよ。そうすれば少なくとも僕は助かるし、ライダーだって偽臣の書燃やしちまえば一端姿消せるんだぜ?」

汗を流し、口元を歪ませて迫る自分の顔を見て、果たして自分も同じように笑っていたのだろうかと思議に思う慎二の胸倉が突如として掴まれた。

「おい聞いてんのかよ『僕』ツ!?あれか、別世界で随分と美味しい目にあってるからって、僕の言う事なんて聞けないってか?」

「…見えたのか?」

「ああ見せてもらったよ!羨ましいたらないねえ、ずいぶんと回りに認められて、力を持ってチャホヤされて…ほんつとうにム力つくよお前は…!」

敵意を隠そうともせず奥歯を噛みしめる『間桐慎二』

どうやら慎二がこの肉体の主導権を握っていた際に、こちらの記憶が流れてしまったらしい。自分の私生活を覗き見されてしまったようだが、はてチャホヤされていたかと思ひ起こす。どれもこれも命を張った事か義兄達を怒鳴り散らしている事しか記憶にない…

(果たして『僕』は何を見てそう判断したんだ…?)

そう尋ねようとした慎二だったが、自分の衣服を掴む手は一層と強くなる。目の前に立つ自分の顔も、犬歯がむき出しになるまで、歪み切っていた。

「お前が…お前がそんなヨイシヨサされてる間に、僕がどんな目に合ったか分かるか…どんな惨めで、恥ずかしい目に合ってきたのか!!」

「っ…」

一瞬、頭に血が上ってしまふ。

この手を振りほどくことなど、簡単だ。逆に手首を掴んで地へ叩き伏せることだって出来るだろう。自分には、それだけの力を持っているのだから。

目の前の自分は被害者のような言い分の裏で、何をしてきたかも慎二は知っている。桜に、何をしたのかも…

だが、慎二は…

「…そろそろ離してくれる?」

「なんだって…?」

「時間がないんだよ」

そう言い、足払いしただけで自分は尻餅をついてしまふ。なぜ自分が尻餅をついたかも理解できないまま再び睨みつける間桐慎二など構う事無く、慎二はドライバーへと手をかけた。

「なんだよ…僕なんて眼中にないってのかよッ!僕だって…僕だってお前みたいなのを持ってりゃ…!」

この一言に、彼がどのような人生を歩んできたのか慎二に見えてしまった。

光太郎に出会えず、祖父から真実を告げられず、ただ自分は選ばれた人間と思ひ込んで周囲を見下し続けた少年。間桐慎二の、可能性の

「っ…」

それだけで、自分はここまで道を違えてしまったのだろう。

今更彼にどうこうすればいいなんて、導くことなど慎二には出来ない。
い。

だから、こう問いかけることしか出来なかった。

「なあ、お前だったら、この状況で真っ先に逃げるのか？」

「は、はあ？何を当たり前の事言ってるの!？」

予想外の質問だったのか。思わず声を裏返した解答を聞き、慎二は成程と頷いた。

「確かに、それが賢い選択だろうね」

「そ、そうだよ！あの状況で戦うなんて、馬鹿のすることじゃないか！」

「それにも激しく同意するよ。けどね…」

慎二は、ゆっくりとドライバーを倒す。そして、青いエネルギーに包まれたその身体は、仮面ライダートリガーへと変わった。

「僕は馬鹿な方を選択する。僕とお前の違いなんて、たったそれだけなんだよ」

脳裏に浮かぶもう一人の馬鹿の姿を連想する慎二の視界に映る『間桐慎二』は、慎二の言う事が理解できないままその姿が消えてしまった。

どうやら、最後まで自分の考えを知ってもらえないままらしい。

(光太郎見たいに、上手くないかないか)

溜息を付いた慎二は意識を切り替える。光太郎の経験則によれば、自分が現実世界で変身してから一秒もたっていないはず。

反撃は、これからだ。

「まあ見ててくれよ。馬鹿が見せる戦いってやつをさ」

誰かに聞かせる訳でもなく、慎二は強く宣言するのであった。

第98話

098

「変身」

その一言と共に、間桐慎二の姿が変わる。

全身青色のスーツに包まれ、赤い複眼を煌かせた慎二は銃を目前の敵に向けてこう言い放った。

「ターゲット標的は…お前だ！」

特有の形状を持つ銃口を敵へと向ける慎二の姿や言葉に、彼女は混乱せずにはいられなかった。

（え、なにどうゆうこと？ 慎二って魔術回路持っていないっていつてたわよねそうよねだから桜は間桐の家に養子にされちゃったのよね？ だってのになにあの好きなあの武器？ 何かの礼装？ 何かの魔術？ 慎二の言う別世界ってあんな魔術が主流なの？ もう何が何だか分からない誰か説明しなさい誰か誰かダレカダレカダレカダレ…）

頭頂部から煙を吹き出し、見るからに思考回路が色々とショートしている姿を遠目に身ながら、慎二は開いていた左手でトリガーマグナムを持つ右手へと添える。両手でしっかりと構えた銃口を凜程でないにしろ、なぜ変身できたのかと混乱するズノー陣へと向けられた。

「しまっ——」

気が付いた時にはもう遅い。慎二の指はトリガーマグナムの引き金を素早く2回引いていた。即ち、2発のエネルギー弾がズノー陣に向けて発射された事になる。不意打ちにより片目を潰され、慎二が変身したという不測の事態に判断が遅れたズノー陣は手を交差させて防御態勢となる。だが、耳元に風切り音が響いただけで数秒たつても自身の身体に痛みはない。

ゆっくりと腕を解くと、眼前には変わらず慎二がトリガーマグナムを構えたまま。ズノー陣は自分が生きているという安堵と共に、この近距離で狙いを外した慎二へ嘲笑する。

「く…くハハハハハ！手負いの俺にこの距離で外すとは、どうやらその大層な銃と姿は飾り物のようだな間桐慎二！」

「あつそ。そう思うってんならどうぞご自由に。こっちだって弾丸の狙いを見極められない奴に笑われたくないんでね」

「な、に…」

ズノー陣の笑いなど露程も反応しない慎二の発言に、ズノー陣の呼吸は止まる。もはや片目でしかとらえられない慎二はトリガーマグナムで肩を叩きながらズノー陣の背後を見据えていた。慎二の狙いは、最初から眼前にいるズノー陣ではなく…

「あーもう、慎二！後でゆっくりと説明してもらってからねツ!!!」

「そう激情に駆られながらも狙いを外すことなくガントを放てるのは、恐れ入ったよマスター…」

「同感です、アーチャー…」

振り向いた先では、サイボーグクモ怪人の特殊ワイヤーによって動きを封じられていた凜やアーチャー、ライダーが自由の身となり再度戦闘を再開する姿があった。

ズノー陣の足もとへ転がってきたクモ怪人だった頭部を見れば、ワイヤーを射出する口元が黒く焼き焦げている…

慎二の狙いはズノー陣ではなく、捕らわれた凜達の開放だったのだ。慎二の放った弾丸により開放された凜のガントが次々と雑兵チャップを屠り、ライダーの鎖に絡まれ動きを封じられたサイボーグ怪人の関節部に、アーチャーの放った矢が一ミリのズレなく関節部へと突き刺さる。

慎二が魔術をかき消してしまうコーティングを施したサイボーグ怪人相手への対応策として授けた戦法を忠実に熟すサーヴァント達の力量とヤケとなって魔術を振るう凜の様子にこれならばもう自身の戦いに集中できると、今度こそトリガーマグナムをズノー陣へと向けた。

「さて、いきなり嘘ついちゃったお詫びとして、今度こそ僕の的になってもらうよ」

「お、おのれ…：凶に乗るなあッ!!」

手に鉾を持ったズノー陣は、慎二の胴体に風穴を穿とうと突撃。だが、怒りの余りに単調となった動きなど、今の慎二には通用しない。

「…つらッー」

「ぬおッ!!」

慎二の腹へ鉾があと十数センチまで迫った直後。慎二はトリガーマグナムを振りかぶり、銃床を鉾の先端へと叩き付けた。軌道がずれた鉾は慎二の身体ではなく石垣を貫き、ズノー陣も思わず鉾の柄を握ったままつんのめてしまった。急ぎ鉾を引き抜かねばと足場に力を込めるズノー陣の頭頂部へ急に重みが押し掛かる。

ミシリ…と頭蓋骨へと走る痛みは何が起きたかズノー陣は理解する。

慎二はズノー陣が鉾を引き抜こうと躍起になっている最中、敵の頭部を踏み台にして背後へ着地したのだ。

「ば、馬鹿にしよってーっ!!」

屈辱的な慎二の行動によって頭に血が上ったズノー陣は引き抜き、未だ着地した体勢：石垣へ片膝を付いた慎二の背中へ向けて鉾を振りかぶる。

無防備な姿をさらした事を後悔させる：だが、それすら慎二の企みだったとズノー陣は思い知った。

「ご、ガアツ!？」

腕を大きく振り上げたズノー陣の胸部に生じる爆発の連続。何が：と立ち昇る煙の向こう側には、相変わらず着地した体勢のまま背中を向ける慎二。異なっているとすれば、トリガーマグナムを握る右腕のみが、ズノー陣に向けられていた事だろう。

「そらよおッ！」

ズノー陣へトリガーマグナムを向けたまま慎二は右足を軸に反転。トリガーマグナムを両手で構え、より正確な射撃可能な状態となって弾丸を連射した。ズノー陣の胸部の一点に叩き込まれたエネルギーの爆発は、銀色の鎧へ亀裂を走らせるだけでなく、ズノー陣の膝を地へ付かせるには十分なダメージを与える事に成功する。

「な、こんな、ことでえ…」

片目を失い、さらに満身創痕となったズノー陣の眉間へトリガーマグナムの銃口が突き付けられる。残る片目で睨みつけられる慎二だが、先ほど感じた恐怖はもう、微塵もない。

「さて、聞きたい事がいくつかあるんだけどね」

「まさかとは思うが…勝ったつもりか？」

「……………」

「忘れたか？我らの手には、あのサーヴァント共がいるのだぞ？」

「アイツ……」

手足を強化魔術で硬質化した凜は八極拳でチャップ達を倒しながら、ズノー陣の聞き捨てならない卑怯な手段に嫌悪感を露わにする。ズノー陣の言葉に従い、チャップ達は柱に拘束されているキャスターとアサシン、そしてマスターである葛木宗一郎のコメカミに銃を突き付けた。

聖杯戦争参加者である凜にとっては、競争相手が減る好機でもある。先の事を考えれば、この場で脱落させた方が効率的ではある。

しかし、彼女の性分がそれをさせなかった。それに、慎二の言葉を信じるなら、桜を救うにはキャスターの手助けも必要と慎二は言っていた。この場で彼女たちを見捨てる選択は凜に存在しない。どうかこの窮地を脱しようと考えこむが、彼女の考えを察したサーヴァントは普段と変わらぬ声色で主を宥めた。

「心配は不要だよ凜」

「アーチャー……」

「どうやら我々は間桐慎二に一杯食わされたようだ。先ほど怯えてばかりいたというのに、ここまで考えていたというのなら、大したものだ」

「どういう事……？」

「奴は私達に言ったな。『キャスター達は気にせず、回りの連中を叩け』と。だが、敵は初見の者ばかりで間桐慎二の助言があるとは言え手こずるのは必須。否応なく時間ばかりが経過するつまり……」

「時間稼ぎには最適であった訳だ」

「ふう…言うと思ったよやっぱりね」

「き、貴様…人質が死んでもいいと言うのかッ!？」

「さて…こう言ってるけど、実際どうなのさ若奥様あ!!」

慎二は銃口をズノー陣の額から離れたものの、どうにも敵の言動に呆れたという態度を見せる。ズノー陣は怒りを見せるが、矛先である慎二は見向きもせず別存在へと意識を向けている。ふざけた呼び名であるのだが、その本人を刺激するには十分な効果を齎した。

「全く…学校の時といい今といい…何かを見透かしたようなその態度、気に食わないと言ったないわッ!!」

何度目か分からない爆発に、凜は身を屈める。アーチャーに庇われ、ゆつくりと晴れる土煙のその向こうで浮遊するサーヴァントの姿に、彼女は一瞬呼吸を忘れた。

翼のように展開されたローブと、彼女の周囲に出現する無数の魔法陣。

自分の知る攻撃魔術とは明らかに次元が異なる光景に、改めてサーヴァントという規格外の存在に圧倒されてしまった。

「な、なぜだ…奴を拘束していた鎖は魔術を封じる術式とやらが組み込まれていたはずだぞ!？」

「あらお生憎様。私の動きを封じるといふそのアイディア事態は良かったし、木偶の坊たちへ同様の仕様にした事は私相手には非常に有効だったわ」

それが彼女たちが囚われた最大の原因であった。

柳洞寺を強襲したサイボーグ怪人達へ攻撃魔術を行使したたものの、その全てが拡散されてしまったキャスターに戦う手段もなく、素手と刀が武器である宗一郎とアサシンは苦戦の一方。その結果、数に勝るクライシスによって囚われてしまい、魔術を封じる鎖で拘束されてしまったのだが、彼女はそんな事で終わるはずがなかった。

「奸計にかけては随一と言って良いからな、あの女狐は。それに合わせて一芝居を儲けた者だが、これまた歯痒いものであったよ」
「お黙りなさいアサシン！」

罵られようともどこ吹く風であるアサシンのサーヴァント。同じく自由となった葛木宗一郎と共に混乱が生じたチャップや怪人素体へと斬りかかる。彼の生み出す刀の軌道は流れるように華麗であり、その後は敵の鮮血が散るばかりだ。そして宗一郎も拳をキャスターの魔術によつて強化され、チャップ達、そしてサイボーグ怪人の胸を貫くに至った。

「な、なぜだ…サイボーグ怪人には魔術を拡散するコーティングがされているはず…」

「確かに。そのおかげで私達は捕まるといふ事になったわ。けど、勉強が足りなかったわね…」

「どうせなら、常に術式が組変わるようにしておかないと、簡単に解析されてしまうわよ?…」

キャスターの放った言葉は、ズノー陣だけでなく、凜たちも驚愕に値するものであった。

つまり、キャスターは自分の魔術が通用しない術式やサイボーグ怪人の装甲へ通じるように自身の魔術を書き換えたと言っているのであろう。自分を縛り、力を封じる術式を解析し、それすら無効とする

術式の構築。これを詠唱無しに実践した神代の魔術師は次々と攻撃魔術を打ち放ち、敵を葬っていく。

「ば、馬鹿な…」

「形勢逆転、だね」

当初は圧倒的な有利に立っていたはずのクライシス軍団が、いまではサーヴァントとマスター達によって蹂躪される様子に慎二は素直な感想を述べると、ドライバーへ装填されたトリガーメモリへと手を伸ばす。

「あんたら…この世界には光太郎がいないから、仮面ライダーが存在しないからって高を括ってみただけど、それは見当違いもいいところだ」

《TRIGGERツ！MAXIMUM DRIVEツ!!》

引き抜いたトリガーメモリをトリガーマグナムへ装填。マキシマムモードへと移行した。

「ここには目的は違えど…絶対に負けられないっていう連中が集ってる。相手が悪すぎたよ」

エネルギーのチャージ音を響かせ、頭上で掲げたトリガーマグナムをゆつくりとズノー陣へと向ける。

「お、おのれ…間桐光太郎ならともかく…貴様のような脆弱な人間に…！」

「お前、そう言った時点で光太郎に敵わないって言ってるようなもんだよ」

「なっ…」

「せつかく生き返ったんだから僕をどうにかして光太郎を苦しめるなんて選択…取らなきゃよかったのにな」

「き…さまぁーッ!!」

今回の任務で下された命令以外に、間桐光太郎が手の届かない所で身内を苦しませると言う本心にあった目的を悟られてしまったズノー陣は我武者羅となって跳びかかる。

もはや狙い定める必要のない一撃を、慎二は静かに放った。

「ライダーショット」

圧縮されたエネルギー弾が、ズノー陣の胸を射抜く。

ゆっくりと倒れ、柳洞時の石段を転がるズノー陣に見向きもしない慎二はトリガーマグナムからメモリを引き抜き、メモリをドライバーに、マグナムを左胸へとマウント。

直後、石段の遥か下から爆発音が山中へと鳴り響いた。

第99話

間桐慎二が別世界で甦った怪魔妖族ズノー陣を討ち取ったと同時刻。

「……………」

慎二の体内で魂を別世界へ跳ばし続ける怪魔ロボットの攻撃を受け続けたバイオライダー……間桐光太郎は全身から煙を吹かせ、微動だにせず立ち尽くしていた。

両腕をダラリと下げ、沈黙する光太郎にロボットは銃口を向けたまま魔法陣を展開し続けている。

(思った……とおりだ)

赤い複眼で怪魔ロボットへ悟られぬ程度に睨む光太郎は攻撃を受けつつも敵の分析を続けており、先に発見した一度砲撃を放った直後に僅かなタイムラグが起きるという以外に突き入る隙を捉えていた。

(あのロボットが攻撃を放つ条件。それは、俺が僅かでも奴に接近しようとした場合)

光太郎が慎二の魂を引き剥がす術式を止めようと接近した途端に、光太郎とはまるで位置が異なる箇所を狙いを定め、砲撃していた。これは攻撃を回避すれば慎二が命を落とす事と光太郎に悟らせ、敢えて攻撃を受けさせるという算段まで立てられていたのだろう。

結果、敵の計算通りに慎二の肉体を守る為に光太郎は攻撃を受け続ける結果となってしまうた。

そして、もう一つ。

(攻撃を放ったと同時に、魔法陣が一瞬揺らいだ)

攻撃を防御する光太郎の目に映った、慎二の魂を別世界へと送り続ける魔法陣。ほんの僅かではあるが魔法陣を構成する陣が攻撃を放った直後…正確には攻撃魔術を放つ魔法陣が銃口に現れた時に、巨大な魔法陣にノイズのようなものが走っていた。

（あれは、魔力不足によって術式が維持できなくなった際に現れるものだって、以前慎二くんが教えてくれたな…）

魔術に関しては未だ不明点が多い光太郎へ、溜息交じりに解説された事があった。その中で、特に罨として仕掛けられた魔法陣には気を付けろと聖杯戦争時には注意されたものだ。

まとめると、怪魔ロボットには慎二の魂を肉体から離す術式、接近すれば慎二の肉体へ攻撃魔術・バイオブレードを貫通させない程の防御壁が備わっている。そして、常に展開している魔法陣と同時に別の魔術を行使した場合、魔法陣へと送る魔力が削がれてしまう。

どういった経緯でクライシス帝国が魔術を搭載した怪魔ロボットを開発したかは定かではないが、余程の隠し玉がない限り、魔術以外の機能は搭載されていない。

ならば、対応策はある。

「…ちよつと、正気なの？」

ロストドライバーのマニュアルを確認中であったメディアは突如、

そんな言葉を呟いた。

目を開かない慎二を見守っていた一同の視線が困惑するメディアへと集まるが、メディアは気にする素振りもなく手を額にあて、虚空に向かい言葉をぶつけている。

メディアの様子からして、ここにはいない誰かと念話によって言葉を交わしていると考えた遠坂凜は、その念話相手が誰であるのかと顎に手を当てて予想する。見る限り、念話はメディアからではなく、相手から送られているようであり、この緊急時にメディア相手に念話を送る存在など、ただ1人しかない。

「光太郎さん、ね」

「え…？けど、光太郎さんは魔術が使えないはずじゃ」

「忘れたの衛宮君？光太郎さんは大聖杯に触れた…以来人間になったサーヴァント達と深層意識のさらにしたで繋がっている」

「あつ…」

凜の予測に首を傾げた衛宮士郎だったが、彼女の説明で思い出す。

大聖杯を破壊したと同時に願いを叶えた光太郎は、契約していたメドウーサだけでなく、元々大聖杯によって形作られていた他のサーヴァント達ともレイラインが微妙に結ばれた状況となった。

そしてサーヴァント達は光太郎と意思を一つとした時、聖杯戦争時以上の力を発揮する事が可能となっていた。

「けど、それにはメドウーサやランサーみたいな心を合わせる必要が…」

「そうね、私も聞いた話でしか聞いてないけど…」

「あの2人、最初に怪魔界へ飛ばされた時にもうその片鱗を見せていたように？」

「そうだ…だから、先にしかけてくれ」

(全く…そんな状態でアレで仕掛けようだなんて、正気を疑うわ)

「はは…それは後で慎二くんと一緒に怒られるとするよ」

(フン…やるからには、結果を確実に出す事ね)

「…ああ！」

メディアの念話に力強く頷いた光太郎は、唱える。

「トレース・オン同調開始—!!」

光太郎の赤い複眼とベルトの中央にある赤い結晶が紫へと染め上げる。身体からは同様に紫色のオーラを放ち、怪魔ロボットへ向け、走り出した。

「ターゲット接近…」

機会音声を放つと共に、再度銃口を光太郎とは別の方向へと向け、魔法陣を展開しようとしたその時。攻撃も優先度の高いプログラムが実行され、攻撃用の魔法陣を展開できなくなってしまった。

「ターゲット接近——攻撃用プログラム実行…不可、術式再構築を最優先——」

AIは、魔法陣の維持…否、魔法陣を再び張りなおさなければならなかった。

何故ならば、慎二の魂を剥がす魔法陣がかき消されてしまったからだ。

光太郎と力を共有し、本来の力を発揮した宝具：破戒すべき全ての符によって。

光太郎が慎二の体内に侵入する際に数度、破戒すべき全ての符によって魔法陣の初期化を試みたが、直ぐに魔法陣が再構築され、慎二の魂を剥がし続けた。これは陣そのものを消しても発生させる原因である怪魔ロボットが健在であるがゆえなのだろう。

そして光太郎の性格を分析し、慎二の体内を狙うという攻撃もプログラムされていたが、魔法陣を維持する事が第一目的であるが為に連射ができず、魔法陣が安定した時にしか次の攻撃が繰り出せない。

ならば、魔法陣からどうにかしてしまえばいい。

魔法陣を一度消してしまえば、怪魔ロボットは攻撃よりも防御よりも先に慎二の魂を剥がす事を優先させる。魔法陣の生成に魔力全てを集中させるため、攻撃魔術も防御魔術も使用できない。

メディアの破戒すべき全ての符によって魔法陣が消された、今がその時だった。

「ウオオオオオオッ!!」

一気に距離を詰める光太郎に怪魔ロボットは銃口を向けるが、あくまで向けるだけ。魔法陣を生成している間は攻撃にまで魔力は回せない。

あと一步。

一步踏み込めば光太郎の握った武器の間合いとなるがその刹那、怪魔ロボットは自信の前に魔力による防御壁を展開した。

どうやら光太郎が接近すり間に術式を生成し、防御へと魔力を回せる余裕ができたようだ。

このまま光太郎の攻撃を防ぎ、先ほどと同じゼロ距離による攻撃を当てれば再び怪魔ロボットが有利となる展開となっていただろう。

光太郎の握る武器が、同じバイオブレードであった場合なら。

「くらえっ——」

それはメデИАと力を共有させた事により、バイオブレードを変化させた短剣。

雷を現すかのように歪であり、虹色でありながら毒々しい印象を持たせる刀身を持つ短剣。

キヤスターのサーヴァントであったメデИАを裏切りの魔女と言わしめた象徴として現れ、いかなる魔術も初期化させる宝具。

「^ル破^ル戒^ルす^ブべき^プ全^レて^イの^カ符^カ!!」

逆手に持った短剣で光太郎は防御壁を貫き、ロボットの胸へと突き立てた。

「エラー発生、術式プログラム消失、攻撃魔術…エラー、防御魔術…エラー、エラー、エラー、error、error、Error——」

刀身を引き抜いたと同時に次々と発生する機械音。ロボットの背後に展開された魔法陣は完全に消失し、モノアイは激しく点滅。どうやら怪魔ロボットに搭載された様々な魔術のプログラムごと破壊した事に成功したようだが、それだけでは終わらなかった。

「ガ…ガガガ…縮小回路…破損…ミクロサイズ維持…エラー…」

敵の身体が見る見るうちに膨らんでいく。いや、音声を聞く限り、元の大きさに戻ろうとしてるのだろう。このまま放っておけば、慎二

の身体を突き破ってしまおう。

「そうはさせるかッ！」

力の同調を解除し、複眼とベルトが再び赤くなった光太郎は怪魔ロボットの背後へと移動し、羽交い絞めにすると身体を液化。怪魔ロボットを包み込み、元来た道へと連れ出していく。

「…来たわ。急いで準備を」

「はい！」

「そらよ」

光太郎と力を同調させ、普段着からローブを纏った姿となったメデアは破戒すべき全ての符を慎二の胸へ一度突き立てた後に水晶球へ光太郎の行動を映し出していた。自身の宝具を他の誰かが使うという複雑が気分となるが、そんな事は一時的な事。今分かっているのは光太郎が敵の魔術を完全に破壊した事。そして、敵が本来の大きさに戻ろうとし、光太郎がその前に慎二の身体から引きずり出そうという事だ。

メデアの言葉に従った桜は慎二の口を開き窓へと顔を向け、同時にクーフリーンが窓を全開にした。

直後に慎二の口からビー玉程の大きさである何かが飛び出した。

みるみるうちに巨大化していくそれはゲル状となったバイオリイダーと怪魔ロボットであり、診療所の裏手である空き地へと落下した。

自力で立ち上がるロボットは慎二の体内にいた時と同様に、ひたす

ら機械音を鳴らし続けている。

「はあ、はあ、はあ…」

同様に空き地へと着地した光太郎の姿も攻撃によつて全身に焼け焦げた痕が目立ち、息を荒げている。だが、陽の光が差す屋外であれば話は別だ。

「ハアツ！」

気合一閃と共に立ち上がり、左手をベルトに添え、太陽をその手に掴むように右手を天へと翳す。

光に包まれた光太郎の身体は瞬時にバイオライダーからRXへと変わり、腹部のサンバスクへ太陽のエネルギーが急速にチャージされ、慎二の体内で付け続けていた攻撃のダメージは見る影もなくなり、回復した光太郎は敵へと目を向けた。

「リボルケインツ!!!」

左腕を大きく回しながら広げた手を腹部のサンライザーへと翳す。

サンライザーの左側の結晶から幾層もの光の線が重なり、洗練された円形の柄が現れた。

柄を光太郎が掴むと同時にダイナモの中央が光を迸りながら高速で回り出し、サンライザーから柄を引き抜くと光のエネルギーが凝縮されたりボルケインが姿を現す。

「トアっ!!」

リボルケインを左手から右手に持ち替え、水平に構えた光太郎はそ

の場から跳躍し、怪魔ロボットへリボルケインを突き立てるように落下。

「ギ…ガガガガガガ…！」

光太郎は着地と同時に怪魔ロボットの腹部へリボルケインを深々と突き刺す。そして担い手である光太郎のエネルギーがリボルケインを伝い、怪魔ロボットへと流れ込んでいく。

「ムウンツ！」

柄を握る力を強める光太郎はリボルケインをさらに怪魔ロボットへと押し込んでいく。敵が光のエネルギーを内包しきれず、背中から突き抜けたリボルケインの先端や身体の節々からエネルギーが火花となって漏れ出し始めていた。

「エラー…Error…エラー…」

もうその単語以外に言葉を発せなくなってしまった怪魔ロボットからリボルケインを引き抜き、光太郎は敵に背を向け円を描くような動きでリボルケインを振り回し両手首を頭上で交差。

そしてリボルケインを真横へと振るつたと同時に、地へ沈んだ怪魔ロボットは爆発の中で消えるのであった。

「なるほど、あれがRXの実力という訳か」

クライス要塞の指令室で一部始終の映像を眺めていたクライシス

皇帝直属の査察官ダスマダーは特に驚く様子もなく、そのように述べた。

自ら立てた作戦がこうして失敗した事すら予測の範囲内であると言わんばかりである態度を見て、どこか腑に落ちないという表情をする四隊長へと顔を向ける。

「今回はRXの実力を見るためであったが、存外たいした事ないではないか。あの程度の相手に苦戦を強いられていたとはなあ…」

「テメエ：俺の怪魔ロボット　クワトロスを強引に奪ってにおいて随分な言い方じゃねえか…」

「が、ガテゾーン落ち着けて…」

ワザとらしく両手を上げて自分達を見下す発言をされた上に、自身が開発中であった怪魔ロボットを利用された事に怒りを抑えられないガテゾーンをどうにか抑えようとするゲドリアンと同じく、ガテゾーンの肩に手を置いたマリバロンは疑問をぶつける。

「…魔術によってRXを追い詰めるという手段は感服に値します。しかし、なぜ地球人の魔術など利用したのですか？」

「その通り。地球人如きが開発した魔術など使わなくとも…」

妖術を誇るマリバロンから見れば、当然の疑問であったのだろう。自分達の力を侮辱しているとも取れたボスガンも反論しようとするが、それすらもダスマダーは一笑に付すときも当然とでも言うように語り始めた。

「そんな事か。ならば答えは簡単だ。地球人が自分達で培い、発展させた技術で身を亡ぼす…当然の帰結とは思えないか？」

僅かに口元を釣り上げるダスマダーの言葉に戦慄を覚える隊長たちであったが、今まで口を噤んでいたジャーク将軍がガテゾーン達を

庇うように割って入る。

「つまりは、今回RXの家族に仕出かした方法を今後も使うという事か？」

「その通りだ。今回はまだ実験段階に過ぎず、魂を完全に肉体から離す事は出来なかったが…その改良もじきに終わるであろう。今頃別の場所で解析が急ピッチで進められているのでな」

「それが終われば…対象は全ての地球人に向けるという事か」

「フツ…よく分かっているではないか」

流石はジャーク將軍と満足気に頷くダスマダーであったが、マリバロンは正気とは思えなかった。地球をクライシス帝国の支配下に置く為に邪魔者の抹殺は必要だ。しかし、だからと言って地球人全てを対象にするなどやり過ぎなのではと考えた時点で、マリバロンは頭を横に振った。

よりによつて、最初に顔を浮かんでしまうのかあの少女であるなんて…

マリバロンの額に手を当てる姿を見たガテゾーンはどう声をかけていいかと迷う中、ダスマダーの声はある報告によって中断される。

「見ているがいいジャーク將軍。貴様ではなし得なかった地球人の抹殺など、私がすぐに——」

「エマージェンシー！エマージェンシー！」

「…なんなのだいきなり！」

突如として小型ロボット チャックラムが指令室に現れ、同じ言葉を繰り返し始める。苛立ちを覚えたダスマダーは要件を言えと怒鳴ると、チャックラムは応じて報告を始める。

「秘密基地No.99が何者かに襲われ壊滅状態！壊滅状態！」

「No.99…私が魔術解析の為に人員を割いた場所ではないか！」

届いた情報に初めて嘲笑以外の表情を見せたダスマダーは指令室の映像を急ぎ切り替えるが、ノイズ混じりで映像は安定しない。

その代わりに、何かの破壊音。秘密基地で魔術を解析しているはずの私兵たちであろう阿鼻叫喚がスピーカーから響く。一体、モニターの向こうで何が起きているのか。

「…こつちに操作を渡せ。映像を安定させる」

「急げ！」

「へいへい…」

手を上げて申し出たガテゾーンなどに目を向けずモニターを睨むダスマダーの怒鳴り声に深く息をつきながらも、ガテゾーンは端末を操作。その直後に映し出された映像は、まさに地獄であった。

「こ、こいつは…」

「誰だ…誰なのだあの者は!？」

ゲドリアンとガテゾーンが指摘したのは、炎に包まれた基地内でも、見るも無残な姿となって床に散らばった護衛であったサイボーグ怪人の残骸でもない。

その中央に佇む、こちらに背中を向ける銀色の存在だ。

両手に真つ赤な刀身の剣を持つその者は、ゆっくりと振り返る。

「RX…いや、違う！」

「あの者は…もしや!？」

ガテゾーンはその者の巨大な複眼とアンテナを見て、大敵であるBLACKを連想したが、見れば複眼の色が異なる。BLACKの複眼

が赤色に対し、映像に映し出されている者の複眼は緑色だ。

基地を襲撃した者の正体を悟ったマリバロンの反応しかたのように、その者は剣を振り下ろした。

恐らく、映像を映るカメラを完全に破壊したのであろう。

指令室内に、再びノイズだけの音声が鳴り響いていた。

100話

シャドームーン

暗黒結社ゴルゴムの支配者である創世王の跡を継ぐ者として、同じく世紀王であるブラックサンと共に生み出された存在。

だがシャドームーンは創世王へ反旗を翻し、ブラックサン：仮面ライダーBLACKと共闘、激戦の末に創世王は倒された。しかし、その戦いの中でシャドームーンは命とも言うべき月のキングストーンの力を制御するベルトを傷つけられ、命は風前の灯となりながらも仮面ライダーBLACKへ一騎打ちを申し出る。

壮絶な戦いの中で全力をぶつけ合った結果、立っていたのは太陽のキングストーンを持つ者、仮面ライダーBLACK。

力を使い果たし、倒れたシャドームーンは崩れ落ちる大空洞でその姿を消した。

これが、マリバロンの情報網で知り得たシャドームーンの最期であつたはずだ。

だがシャドームーンは生きており、クライシス帝国の秘密基地を襲撃。壊滅させた姿をはつきりとモニターへと映し出していったのだ。秘密基地に配備されていたサイボーグシカ怪人10体に雑兵チャップが20人。サイボーグシカ怪人はガテゾーンの調整により、放電による攻撃力が30%も上昇しているにも拘わらず、その全てが全滅。

しかも映像では一瞬しか姿は確認できなかったが、シャドームーンの装甲は傷おろか汚れ一つ見られない。

基地を壊滅させたシャドームーンの調査を直ぐにでも始めなければならぬと拳を強く握るマリバロンなのだが映像が消えて以降、沈黙を続けていた男の放った怒声に思わず振り向いてしまった。

「これはどういう事だジャーク將軍ツ!?なぜ秘密基地が見つかっただ

けに飽き足らず、壊滅などしているのだッ!!」

「……………」

「貴様の不十分な指揮の結果がこの有様だ！それにあのように直ぐ倒されてしまうガラクタ共を警備にあたらせるなど、どう責任を取って

——」

なんと言う言いがかりであろう。

確かに結果としては秘密基地の一つが壊滅という手痛い結果となつてしまった。だが原因があるとすれば、壊滅した基地で隊長たちどころかジャーク將軍ですら知り得なかった魔術の研究を行った事がそもそも発端ではないのか。

生きていたシャドームーンはこれまでクライシス帝国の作戦に一度たりとも干渉を行っていない。だとすれば、どのような経緯があつたかは不明だがダスマダーが持ち込んだ魔術を追つてあの秘密基地に行き着いたという可能性が十分に考えられる。

だというのにダスマダーがジャーク將軍に対しての糾弾はただの八つ当たり。子供の癩癩にすら近い。しかし秘密基地の場所が知られ、敵の手によつて堕ちてしまった事実は間違いなく、ジャーク將軍の責任。地球侵略作戦の司令官として、ジャーク將軍はあえてダスマダーの罵声を浴び続けている。それこそが自分の責務であると口を噤み続けたが、ガテゾーンはその姿勢が気に食わなかったのだろう。さらに声を荒げる姿ダスマダーの暴言に、ついに我慢が出来ず口をはさんでしまった。

「よく言うぜ。そもそもお前さんが妙な術の解読なんざ押し付けなきや、こんなことにはならなかつただろうによ…」

マリバロンだけでなく、ほとぼりが早く冷めるよう願っていたゲドリアンとボスガンの背中が凍り付く。このような暴言を平然と述べられる者など、隊長陣の中でただ一人しかいない。

「…何か言ったか、機甲隊長ガテゾーン？」

「聞こえてなかったってんなら何度でも言ってもやるさ…テメエの不始末をこっちに押し付けんなって言ってるんだよこの黒ヘル野郎がッ！」

背後でゲドリアンのか細い悲鳴が聞こえるが、マリバロンは悲鳴すら忘れる程の驚愕が襲う。ガテゾーンの性格を考えれば、この激情に任せての発言は大いにあり得ただろう。彼自慢のサイボーグ怪人達の主導権を勝手に奪われ、そして無残にも破壊された。いや、それ以上にただのロボット兵に過ぎない彼の腕を買い、隊長にまで推薦したジャーク將軍を責め続けるダスマダーをこれ以上許せなかったはずだ。

しかし今回は相手が悪すぎる。クライシス帝国の支配者にて絶対である存在、クライシス皇帝直属の査察官。本人の言葉を借りれば、皇帝本人と言っても過言ではないのだ。

「…ジャーク將軍、貴様は部下に対して教育が行き届いていないようだな」

ジャーク將軍へ向けていた怒りが消え、無表情となったダスマダーは腰に携えた剣の柄へ手を伸ばす。

「私相手に言い度胸だ…この場でガラクタにしてくれるわ！」

「上等だ…返り討ちにしてやるぜ！」

ガテゾーンも負けじとホルスターに収納された愛銃を手に取り、いざ照準をダスマダーの眉間へと向けようとしたその時だ。ガテゾーンを引き留めようと手を伸ばしたマリバロンよりも早く、ジャーク將軍が臨戦態勢となったダスマダーとガテゾーンの間へ割って入る。途端に動きを止めた2人に対し、ジャーク將軍はゆっくりと口を開いた。

「双方武器を収めよ。ここは敵味方に分かれ戦う場所ではなからう」
「黙れジャーク將軍！私への侮辱は皇帝への侮辱と同義！この反逆者をこの場で処刑しなければならんのだ！」

「ならば、余の首を取るがいい」

「ジャーク將軍…!?!」

ジャーク將軍の仲裁に耳を貸そうともしないダスマダーはやはりクライシス皇帝の名を使い処刑を執り行おうとしたが、自らの首を差し出すと言うジャーク將軍の発言にガテゾーンは息を飲む。ガテゾーンだけではなく、マリバロン達も同様だ。

目を細めるダスマダーは抜刀はせぬものの、未だ殺気を収めないままジャーク將軍へ問いただす。

「正気かジャーク將軍？そのような無礼者を庇い、自ら命を捨てるなど正気とは思えんな」

「貴公も言ったであろう。基地を一つ失ったのは余の失態。ならばその責任を負うのは当然の事だ」

「馬鹿馬鹿しい。あの木偶の坊共を作ったガテゾーンの身一つを切りすれてばいいものを…」

「ガテゾーンが…ここに居る者たち全員いなければ、地球征服は成し遂げられんからだ。余が亡き後でも、この者達の力があれば必ず地球征服は成し遂げられ、クライシスに栄光を与えるであろう」

言葉がでなかった。庇われたガテゾーンや元よりジャーク將軍に忠誠を誓うマリバロンとゲドリアン、そして將軍の地位を狙う野心を抱くボスガンでさえ息を忘れるようにジャーク將軍の背中を見る。

特にボスガンは將軍に従う他の者は寛容であり、將軍を出し抜こうとした自分をぞんざいに扱うとばかり思い込んでいた。だが、將軍の言葉を聞いた今となっては如何に自身が如何に矮小な展望を持ちこの場に立っていたのだらうと胸に手を当てる中、ただ一人冷めた表情を見せるダスマダーは柄から手を離し、ワザとらしくジャーク將軍の

「ジャーク將軍、俺は…」

「もうよい。ガテゾーン、貴公はしばらく頭を冷やしているがいい」
「ですが、あの野郎はジャーク將軍を…!」

「良いと言っておる。要は結果を出せばいいのだ。わざわざ査察官が来るまでもなかったという事を本国へ、そしてクライシス皇帝に分かってもらえればそれでいい」

ガテゾーンに背を向けたまま受け答えをするジャーク將軍。ガテゾーンは今更ながら自身の失言によって、どれほどジャーク將軍の名を汚したかを思い知る。ガテゾーンにとって自分の開発した怪魔ロボットや基地のセキュリティは、自身の分身に近い。それをまるで消耗品のように扱うだけでなく役立たずという烙印を押し付けたダスマダーへの怒りは勿論だが、將軍への侮蔑は絶対に我慢できないものだった。

だが、その矛先は結局ジャーク將軍の首を絞める結果に繋がってしまう。言うべき言葉が浮かばないガテゾーンに変わり、どうにか話題をすり替えようとするゲドリアンが口を開く。

「そ、そう言いましたもジャーク將軍！ダスマダーの奴、またも自分が指揮を取ってRXを倒すなど」

「放っておけ。報告したデータを閲覧しているだけの者に、我らの敵に敵わぬと知るだけだ」

「奴を…仮面ライダーBLACK RXを討ち取る事が出来るのは我らなのだ」

別世界

再生怪人であるズノー陣を打倒した間桐慎二は変身を解除し、未だ不振の目を向けるサーヴァントとマスター達へ自分の変身は別世界で流行りの魔術礼装であると誤魔化しながら自分が陥っている状況を伝えた。稀代の魔術師であるキャスターの説明によれば、並行世界から一方的に送られる魂に出来る処置など何一つない、と言い切られてしまった。それをどうにかして欲しいと反論しようとした慎二であつたが、彼の身体に異変が起こる。

「これは…?」

「それが答えよ坊や。どうにか原因を排除した者達に感謝しなさいな」

戦闘により汚れてしまった髪を手で払うキャスターはさも当然だと言わんばかりに、慎二の肉体から漏れる細かな粒子を見つめた。淡く青色に輝く粒子が天へと上り、遙か頭上で形成された空間の歪みへと吸い取られている。これは、慎二の身体から魂が離れ、元の世界へと戻る現象のようだ。

キャスターが言う処置はない、というよりも処置する必要が無かつたという事。現実には元の世界では慎二の魂を剥がし続けていた怪魔ロボットが間桐光太郎によって破壊されている。ならば、魂は元ある場所へと還るのみ。

では自分は大人しく今という結果を待っていれば良かったのかと、慎二は大きく溜息を付いてしまうが、それは隣に立つサーヴァントが首を横に振る事で否定された。

「そんな事はありません。貴方が動いてくれなければ、この聖杯戦争に仕組まれた事を我々は知る事無く踊らされていたのですから」

「確かにね。それに間桐のぐろ老体にいい様に使われるなんて面白くないわ」

微笑むライダーと苦笑する遠坂凜。聖杯戦争に隠された本来の儀式、それを企てた間桐蔵硯の野望を慎二は戦いが始まる前に凜たちへと打ち明けていた。そして慎二の望みを叶えるという条件付きで、知る限りの情報をこの場にいる者達へと伝えてある。

未だ目撃されていないランサーとバーサーカーの真名とマスター、そして10年前から潜んでいる8体目のサーヴァント。

情報を共有し、協力体勢を取ればこの陣営が負けることはないだろう。聖杯も、キャスターがいれば穢れたものであっても正常に使いこなせるはずだ。

慎二が懸念していた聖杯の所有権に関しては、意外も問題はなかった。元よりアーチャー、ライダー、アサシンには願いはなく遠坂凜は聖杯戦争への勝利にしか興味はない。残るはキャスターが好きに使うという事になりそうだが、当の本人も自分であれば使えると分かっただけで乗り気ではない。

それはそうだろう。これは慎二のみが知り得ることだが、彼女の願いは、今叶っているのだからとマスターである葛木宗一郎を見る。この世界であつても、彼は変わらず無表情のようだ。

「それで、帰る前に聞いておきたいんだけど、セイバーのマスターって誰な訳？」

「あー…」

この質問はある意味微妙だ。慎二の良くしる人物がこの世界でも聖杯戦争に参加するという事ならば、この場で黙っていた方が得策だ。恐らく凜は桜の為を思っただけで巻き込まぬようあの手この手を尽く

すだろうし、アーチャーも賛成しかねない。本心から言えば慎二自身も自分が目に届かない所で殺し合いに参加はして欲しくないが、あの愚直なまでに誰かを守ろうとする知人は、必ず切り札となる。

なので、慎二はお茶を濁す事にする。

「…何もかも知った後だと面白くないだろ？扱いやすい奴だから心配すんなって」

「あら、それはいい事を聞いたわね」

「失態だな小僧。この女狐にそのような事を聞かせてしまうとはな」
「お黙りなさい！」

この関係も変わらないなど、自分の後に怪しく目を光らせるマスターへ苦言をようするアサシンに同意する慎二に、今度はライダーからの疑問が届いた。

「シンジ…『貴方』はどうしますか？」

「……………」

ライダーが尋ねたのは、この身体の持ち主。この世界の慎二の事だろう。彼は代理マスターとしてライダーを従えていたが、あくまで仮のマスターだ。ライダーの話を聞く限り、ずいぶんと好き放題やってきたようだが、慎二はしばし考えた後に、アツサリと答える。

「僕の事は放っておいてもらえると助かるよ」

「…良いのですか。そうすればまた彼は…」

「多分、そんな事する気にもならないだろうさ」

これは精神世界で対面した際に思えた事。

怪人への恐怖に抗いながらも戦うと決めた慎二の行動にまるで理解できないまま、拒絶したこの世界本来の間桐慎二。

ただサーヴァントを使役できるといっただけで喜び、ライダーに人を

襲わせる光景をニヤニヤと見てた彼であるが、仮面ライダーに変身して戦っている間はずっと震えていたのだ。

本当の戦い：否、本当の殺し合いを見て。敵に対し、躊躇なく止めを刺す為に引き金を引いた違う自分を見て、恐怖を抱いてしまったらしい。おかげでどんなに呼び掛けても、彼は全く答えてくれない。

だが、これで知ったはずだ。自身で戦う事とはどういう事かを。その為に分身の命すらかけなければならぬという事を。

この世界を去った後、当面は戦いの恐ろしさから聖杯戦争に関しては耳にすら入れたくなくなるのではないかというのが、慎二の予測だ。

「だから、もう僕は何もできないし、動けない。その代わり、というよりも押し付ける形になっちまうけど…」

「はい…サクラは、必ず御守りします」

ライダーが頷くと、同盟となったアーチャーとキャスターが続いて言葉を送る。

「間桐桜に関しては心配いらん。いや、どの道あんな話を聞いた後ではマスターが放っておかないだろうからね」

「そうね。身体に潜む蟲如き、私の術で綺麗さっぱり駆除しておくわ。これで貸し借りなしよ」

そいつは頼もしい。

そう言いかけた直後、この世界での間桐慎二の肉体へと張り込んだ別世界の間桐慎二の意識は、唐突に暗闇へと落ちた。

「三日ぶりね、慎二」

「美綴か…」

早朝

学校へと続く坂道の途中で、慎二は後から追いかけてきた美綴綾子の声に振り向くと、ぶっきら棒にそう告げた。

「聞いたわよ、学校にはインフルエンザって事になってるらしいけど、魂剥がされてたんだって？ほんと、聞けば聞くほどすごい事に巻き込まれてんのね」

「…頼むからもつと声を小さくして言ってくれませんかね」

健全な高校生2人が朝早くからする会話ではないだろうと話題を切り替える慎二であったのだが、実は魂が別世界に飛ばされたと聞いても全く見覚えがないのだ。

目を開けると、慎二は間桐家主治医が主である診療所のベットに寝かされており、身体を起こした直後に桜が泣きながら飛びつき、ベットの足もとではガロニアがワンワンと泣いている。

オマケに窓の外を見れば何と戦ったのであろうか、疲労困憊の光太郎がメドゥーサと武の肩を借りて、自分が目を覚ましたことに安堵した表情を見せていたのだ。

その後の診断の結果、メディアによれば別世界に行っている間の記憶は消えてしまっていたとの内容だ。あちら側で知り得た情報と経験は、あくまで本来の肉体と魂へと記憶されるもの。言うなればハードディスクレコーダーに突然入れた覚えのなく、フォーマツトされていないDVDへ録画は不可能だという事らしい。

なので慎二に異世界で別の自分になったという記憶は全くない。しかし、なぜだか桜に大変申しわけないと思い、退院後少し高めのアイスを買った事は記憶に新しい。

「ねー、だからどうだったのよ」

「だから覚えてないって…」

隣を歩きながら顔を覗き込んでくる綾子の顔をジッと見る慎二。別世界での記憶はないというのに、桜へ何故か詫びなければならぬという脅迫概念じみたものと同様に、綾子の顔を見ると何かが頭を過った。

今見せる綾子の穏やかな表情とは真逆である嫌悪、軽蔑と言った負の感情。それが自分へと向けられていたような気がしていたのだが

「な、何よ人の顔ジロジロ見て…」

「いや…やっぱりこっちの方がいいなってね」

「はあ?」

「いいから朝練行くぞ部長」

何となくはぐらかせた慎二は足早に学校へと向かっていく。後ろで何やら叫んでいる綾子に耳を貸さずに歩き続ける慎二はふと思っ

た。

ようやく戻ったのだなど。

第101話

いつの間に部屋を抜け出しかは定かではない。気が付けば、路地裏で身を屈めて吐き気を我慢している自分がいた。

どこか見覚えのある繁華街の路地裏に広がる、血と肉片の海。

それも人間一人分のものではない。複数の…少なくとも3人以上の人間が分解されたはずだ。

(でも…どうして…)

どうして、自分がこんなところに立っているのか。確か日付が変わった頃。ふと目が覚めてしまい、外の空気を吸いに行こうと部屋を、屋敷をでた直後に身体に異変が生じた事は確かだ。

自分の中に、自分以外の鼓動を感じた。

それがただの気のせいだと信じたかったが、時間の経過と共に増大するソレに耐え切れず膝を付いた時に、視界が暗転した。

目に浮かぶのは、真っ赤な月と、どこまでも辿り着くことなく広がる黒。

これが意味する事が何であるのか、何処であるのか知る由もない。ただ確かなのは、この惨状が現実である事。そして自分の手に血液が付着しているという事。ならば、自分が起こしたのか。自分が、殺したのか…?

妙な感覚に陥った後、顔も知らない人達を路地裏へと追い込み、顔の形も分からなくするまで殺し続けた…

(ほんとうに、ボクが…)

今考えられる最も簡単な推測を浮かべ、呼吸を乱した彼の背後から、何者かの靴音が響く。異変に勘付いた何者かが接近するが、彼は

動けない。自分が疑われしまうという焦りよりも、自分がこの惨劇を起こしてしまったのかという恐怖が勝っていたのかもしれない。

大きくなる足音。距離を縮めていく者に対してなにをする訳もなく、ただ振り返るだけの彼に彼女は学校の廊下で行き会ったように、軽い挨拶をするのであった。

「こんばんは、遠野くん」

数時間前。

美咲街の繁華街を歩くその人物を見て、すれ違った通行人たちは誰もが振り返る。

春を過ぎて、まもなく初夏が間近となり薄着へと切り替える時期へと差し掛かる中、その人物は黒いコートを羽織り、服装もグレイのタートルネックに黒いズボン、ブーツまで黒一色という徹底ぶりだ。だが人々が注目した点は服装ではなく、纏った人物にある。

陽の光に反射し、煌びやかな輝きを放つと思わせる白銀の長い髪。濁りなど一切なく透き通るような白い肌。

そして見た瞬間は驚き、見つめ続ければどこか暖かさを感じさせてくれる暖炉のように紅い瞳。

まるで絵画から抜け出したかのような輪郭と肢体を持つその美女に、性別の違いなど関係がなく見惚れていた。のだが…

「見て見てシエル！あのお洋服かわいい〜！志貴くんの妹さんに似合
いそうじゃない？あ！あっちにあるのって——」

「ちよ、ちよっと待って下さい！サイズが合わない靴でそんなに走っ
たら…」

「大丈夫！これくらならなんとも…きやつ!？」

街の風景や店頭を目にして、瞳をキラキラと輝かせる女性は同行者
へと呼び掛ける。天真爛漫に道を駆ける姿を見てシエルは注意を口
にするが、彼女の予測通りに女性は振りむいた際に足を滑らせ、尻餅
をついてしまった。

「もう、言わんこつちやないんですから…」

シエルは額に手を当てつつも女性へと駆け寄って手を差し出す。
キョトンと首を傾げる女性であったが、それが自身を起こしてくれる
ためであると理解し、笑顔でシエルの手を取った。

「アハハ、ごめんなさい」

ゆっくりと立ち上がる女性の靴は、シエルの指摘した通りに彼女の
サイズにはあっておらず、指2本ほど余裕がある程だ。靴だけではな
い。ズボンも丈が合わず裾部分を捲っており、コートの袖も彼女の手
首が隠れてしまう程に大きい。なぜここまで彼女に合わない衣服を
纏って外を歩いているのか、シエルは恐る恐る改めて彼女へと尋ねて
みる。

「あの…私が言うのも烏滸がましいのですが…服、どうにかならな
かったのですか？」

「え？別に寒くないわよっ…」

「そういう意味じゃなくてですね!？えっとあの…もう少し、貴方に似

合った服とか…」

「うくん。確かにそうかもしれないけど…」

シエルの指摘を受け、顎に指を当てて悩む女性。その仕草だけでも同性であるシエルさえ不覚にも可愛らしいと思える程である。

(見た目は私より上のはずなんですけど…何でしょうこの敗北感)

「あら、どうしたの？お腹すいた？」

「い、いえ！なんでもありませんから」

そう、とシエルの言葉を聞き心配する表情から優しい笑みへと変わった女性の顔は街中を駆けまわった少女ではなく、年相応に、そして慈愛に満ちた表情を見せる。心配させてしまったこちらが悪いような罪悪感が浮かんでしまうシエルは、話題を逸らそうと先ほど尋ねた服装に関して聞いてみるが、女性はどこか諦めたような声で応答する。

「…やめておくれ。もし私が服を着たとしたら、信彦に迷惑をかけてしまうもの」

「まあ、言われてみればそうですね」

「でも、いつかは普段とは違う色の服も来てみたいのも確かよ。その機会があったら、選ぶのを手伝って貰える？」

「それは、もちろんですよ。碧月さん」

「フフツ、ありがとう」

お礼を言う碧月の微笑みにつられて、自然と笑みを浮かべてしまったシエルは忘れていた。

この碧月という女性が、普段なら彼の…秋月信彦の体内に潜む3つ目の意思とも言うべき存在という事を。

世界を震撼させた暗黒結社ゴルゴムの世紀王シャドームーン。その素体として改造手術を受けた秋月信彦は支配者である創世王に国旗を翻し、自身の対極の存在である世紀王ブラックサンと戦い、そして散ったはずだった。

しかしブラックサン：間桐光太郎が大聖杯への願いによって復活。その際、大聖杯の一部となったアヴェンジャーのサーヴァント、アンリマユの魂を肉体を共有する。

その時、もう一つの意識…シャドームーンの力の源である世紀王の証、キングストーンの意味も胎動していたのだ。

そして紆余曲折の末、3つの意思は深層意識の中で互いの存在を認め合い、キングストーンの意味は碧月という名を信彦から与えられたのである。

「それにしても、不思議なのよねえ」

「何がですか？」

碧月とシエルは付近のオープンテラスで一服する中、碧月は注文した紅茶を一口飲んだ後、自分の視に起きた疑問を口にする。

「時々、信彦に代わってアンリが主人格になった時は信彦の姿そのままなの。けど、私が主人格になった途端に性格だけじゃなく姿までこの姿になるなんて…」

それはシエルも疑問に思った事だ。

彼女の意思が信彦の肉体に現れたのは、つい先日。甦った再生大怪人を倒して以来だったがその時はシャドームーンの姿であった為、複眼の色と声以外に変化は見られなかった。だが、人間の姿のまま人格が入れ替わった瞬間、碧月の姿は信彦とアンリマユが精神世界に現れた銀髪の女性へと変わってしまったのだ。

これには本人おろか周囲の人間も仰天。肉体まで女性へ変質していたので、本当に変わっているかと遠野家の浴室でシエルや秋葉が試

しにと入浴を共にしたところ、同性として：特に秋葉は燃え尽きるほどのショックを受けてしまい、使用人である琥珀にずっと励まされていたという。

オマケに先ほど述べた通りに誰も振り向くような美人であり、特に碧月の姿を見て一瞬とはいえず志貴が見惚れていた事でアルクエイドと秋葉は警戒心を強めている。

本人たちにもこればかりは原因は不明であり、以来人格が入れ替わる際は信彦本人の許しを得なければ碧月は表へ出られない決まりが出来ていた。

「信彦もイジワルよね！アンリなんて何度も表に出て女の子たちと遊んでいるのに…」

「…むしろ貴女を心配してのことではないでしょうか？」

信彦も様子見という事で碧月と人格を交代させたのだが、まず一目で盛大に転ぶ。慣れてきたと喜んだ拍子に転ぶ。初めて実物の自然や動物を見てはしゃいで転ぶ：本日の回数はそれほどで無かったが注力が散漫である事が目立ち、人格が信彦へと戻った際には肉体は男に戻ったが見知らぬ傷が身体中に出来ていたという。

今まで力の結晶であり、知識でしか世界を知り得なかったキングストーンが自らの意思で身体を動かさせたものだから、その感動も一入だろう。

信彦の許可もなく勝手に人格を入れ替わっては後程キツイ制裁を受けるアンリマユであるが、デメリットを受ける分、メリットを謳歌しているとも言える。それを見ている碧月の不満も分からんでもないシエルだが、ここは信彦への擁護という形で借りを作っておくと考えたシエルは、とにかく碧月のガス抜きへと集中する。

もしこのまま不満が溜まり、自分の言った通り女性の衣服を纏う事となり、いざ信彦へと戻った途端。あの人を視線だけで殺してしまうような男性が女性ものの衣服で身を包むという大事件が発生してしまうからだ。

アンリマユは大笑いするだろうが、その後にとどのような才チが付くかどうかは、シエルには分からない。だが、そんな考えは杞憂であったと碧月は微笑みを見て理解する。

「…でも、信彦には感謝してる。あれだけ『もう出るな』って言ったのに、こうして私を自由にさせてくれるんだから」

「それは、碧月さんのお手柄でもありますからね」

「私は結界を破っただけ。貴方のお手伝いをするとは決めたのも、全てを解決したのは信彦だもの」

数日前の事だ。

美咲町を一時期恐怖に陥れていた謎の連続殺人事件。その正体が吸血鬼である死徒ミハイル・ロア・バルダムヨオンが残した足取りを追っていたシエルは彼の工房と思われる場所へと辿り着くと、もぬけの殻であった。

何者かによつてロアが研究していた資料を全て奪われた後であり、必死の搜索の結果、とある組織によつて強奪されたことが判明する。それこそが美咲町からさほど離れた場所ではない場所へと秘密基地を構えていたクライシス帝国の者達だったのである。

自分1人では太刀打ちできないと判断したシエルは信彦へと協力を依頼。最初は断られると思ったシエルは様々な説得方法を持って挑んだが信彦はあっさり了承。拍子抜けしたシエルであったが一瞬も早くロアが遺したものなど根絶やしにしたい一心で秘密基地へと向かった。

シャドームーンとなった信彦とシエルを待ち構えていたのは視認できるほどにはつきりと魔力が渦巻く結界であった。六芒星の円陣がゆっくりと回転し触れた者を素粒子レベルまで分解する術式が組み込まれていた。恐らく、ロアの研究を応用させて組み立てたものなのだろう。

既にロアの研究が利用されてると危機感を強めたシエルの姿を見

て信彦は右手へと力を集中。シャドービームで結界もろとも扉を吹き飛ばそうとしたが、そこに待ったをかけたのが碧月であった。

そのまま攻撃をすれば秘密基地だけではなく、周囲一帯に騒ぎが察知されてしまう。

碧月の助言を聞いた信彦はそのまま人格を碧月へと委ね、シャドーームーンの複眼は緑色から緋色へと変わる。碧月は人差し指に魔力を集中させ、魔法陣の中心に軽く触れる。

ただそれだけ、結界は消失した。

あとは信彦の独壇場であった。襲い来るサイボーグ怪人や雑兵チャップを顕現させたシャドーセイバーで切り伏せ、白衣を纏った研究要員であるチャップが逃げまどう中、信彦はコンピューターや紙媒体の資料を燃やし尽くした。あの吸血鬼が遺した魔術が文字一片たりとも残らぬよう、燃やし尽くした。

これでロアが地上に残したものは完全になくなる。燃え尽きる秘密基地を見上げ、そう安堵すると共に何故が涙を流すシエルに言葉をかけることなく、信彦は無言で去っていった。

「でも良かったのかしら…もしかしたら、シエルは自分で決着を付けたかったんじゃない…」

「いえ、あれはあくまで事後処理に過ぎません。借りならば、貴方達の助力で当に成し得ているんですから」

いまでも感触はある。この手で、自分と家族の敵であるロアを葬った感触は、しつかりと。

だから、あれはあくまで事後処理。あれで全てに決着がついたから感極まって流した涙では、決してない。

これ以上感傷に浸ってはならないと、シエルは再度話題を変える。任務で渡り歩いた世界の話。信彦とアンリマユの可笑しなやり取

り。

女性2人の会話は止まる事無く続き、気が付けば日が傾き始めた時間となっていた

「あ、もうこんな時間…今日は付き合ってくれてありがとう。素敵なお休みになったわシエル」

「こちらこそありがとうございます。また自由な時間を貰えた時は言ってくださいね」

「ええ、ぜひ！」

「それじゃあ私はここで——」

別れを告げ、テーブルから碧月が立ち上がった瞬間であった。

「ッ!？」

「碧月さんッ!？」

碧月は足の力が急に亡くなったように崩れ落ち、呼吸を荒げる。背後から背中を貫かれ、心臓を鷲掴みされたような不快感。自分の名を呼び、肩を揺さぶるシエルの声など届かず碧月はオープンテラスの向こう…遊歩道を歩く人々の中でただ1人、自分と目を合わせた存在を発見した。目を合わせただけで相手の体温を下げてしまうと思える程に冷め切った目を持つその者は既に碧月に興味を失ったかのよう
に、人込みへと消えていく。

あの人物に、碧月は見覚えがない。しかし、何故か心の奥底である人物の存在を否定していた。

ありえるはずが無い。いるはずがない。あの人物は『いてはならない』はずなのだからと…

「…そんな」

「碧月さん！しっかりして下さい!!」

「あ、ごめんなさいシエル。大丈夫。大丈夫、だから…」

「そのようには、決して見えないのですが」
「……………」

そのまま無言となった碧月の肩を優しく掴んだシエルは、何も聞かずに彼女を拠点となるホテルまで送っていった。この場で説明できるような話ではないと、察してくれてたのかもしれない。碧月が目撃した人物が何者であるのか、まずは最初に話さなければならぬ人物たちがいる。

『あれは、何者であるか話せるか？』

ホテルの一室へと辿り着きコートを脱ぎ捨て、ベットへ倒れこんだ碧月の頭にそんな声が響いた。当然、そのような話になる。

『俺も気になるね〜もし俺らの知らぬ間に作ったボーイフレンドってんなら俺らの面接を通ってからじゃないと許しませんからね！』
『貴様は黙ってろ』

「フフツ…」

相変わらずの会話が頭へと響く。信彦は鋭い言葉の裏でこちらを気遣った質問をして、アンリマユは場を和ませてくれる。そんな彼等には、話しておかなければならないのだから。例え、自分に身に覚えのない事でも

「いいわ。でもごめんなさい。私もわからないの。でも、あの時の不安は拭えない…だから、話すわ。あの時感じた事を…」

身体を起こし、改めてベットに腰掛けた碧月は語る。あの時、自分が視た者と、その時に感じた不安を。

創世王の道具として扱われていたあの時とは違う。

今ではこうして自分を認め、話を聞いてくれる人が、いるのだから。

その数時間後、法衣を纏ったシエルは遠野志貴と鉢合わせる。

まるで彼とは違う雰囲気ではあるが、確かに『遠野志貴』である少年と。

第102話

「わからない?」

「ええ…」

月影信彦の質問にキングストーンの意味である碧月の答えがそれであった。

日中、シエルと外出中であつた碧月を襲つた謎の気配。ただ視線を浴びるだけで心臓を射抜かれたと感じる程の殺気を放つた人物は、碧月と目があつた途端に人の波に隠れて、去つていった。

「そんな熱烈な視線を浴びせたつてのに碧月ちゃんの記憶にないって事は、そいつはストーカーの可能性がりますなあ」

「すとーカー?」

「ありや知らない? ストーカーってのはね…」

「余計な話はいい。碧月、その者に見覚えはないが何故か雰囲気に見える。そういう事か?」

「うん。曖昧な内容でゴメンなさい」

「構わん。お前に走つた恐怖は俺と馬鹿にもダイレクトに伝わる。どれ程の恨みを持つていたか分かるぐらいにな」

「ちよつとー、ナチュラルに人を馬鹿と呼ぶのは失礼じゃありません?」

一筋の光しか差さない空間の中で、丸いテーブルを囲む信彦、碧月、そして馬鹿の烙印を押されたアンリマユは謎の存在について情報の共有を続ける。

ここは信彦の深層意識であり、以前に3人が意思を通わせて以降に対話が可能となつていた。唯一のデメリットとして、3人の意思が集まると信彦の肉体は意識を失い無防備となつてしまう点。今現在、ホテルの一室で碧月から信彦へと戻つた身体は腕を組んだまま椅子にもたれかかっているだろう。

しかし、肉体から魂が離れている訳ではないため、もし外敵が接近した場合でも意識を肉体へ戻す事も可能となっている。

「この街に滞在している間、俺と阿呆が表になって行動しているのがとんどだ。碧月が表になって行動は数回しかない」

「オマケに身体も女のそれになっちまうしなー…って、バカの次はアホってか？おいこら泣くぞ」

「つまり、碧月をしっている者に限定される。その姿を知る過去に聖杯戦争に参加したもののか。あるいは…キングストーンを知る者なのか」

悉く無視され続けテーブルにうつ伏したアンリマユに構わず人物像を組み上げていく。10年前に勃発した第四次聖杯戦争の生き残りが碧月の『基となった姿』へ恨みを持つ者を頭に浮かべたが、ゴム時代に調べた限り『聖杯となった彼女』に関係し、生存する人物は時計塔の講師しか思い当たらない。講師も彼女とは接点は薄く、恨みを抱くような関係ではなかったはずだ。

となれば、キングストーンに対して恨みを持つ者…これは正直難しい。ゴルゴムに恨みを持つ者など心当たりがあり過ぎるのだが、シャドームーンである信彦が対象であるのならともかく、力の核となるキングストーンへ敵意を向ける者は皆無とっていい程に、対象が思い浮かばない。

かつてゴルゴムに所属していた社会の重鎮、怪人、神官候補…その誰もがゴルゴムの崩壊と共にその地位を失った者ばかりであり、恨みを買っても不思議ではないが、それも碧月ではなく信彦へと向けられるものだ。

(思い当たらん…)

今思えば、この美咲町に辿り着く前に聖堂教会や魔術協会の手の者に紛れて信彦を襲ってきたが、その全てが取るに足らない相手ばか

り。そんな連中がキングストーンの意思である碧月を怯えさせるなどありえるはずがないと考えこむ信彦の耳に、今までテーブルにうつ伏していたアンリマユは顔を上げぬままふと言いつつ放った。

「あのよお、それじゃあ信ヒーが世紀王になる前の知り合いとかどうなん？」

「何を言っている。そんな者がいる訳が——」

信彦は途中、言葉を切った。

アンリマユの何気ない考えなしの発言であると頭ごなしに否定しようとしたが、ありえないと断言できない。信彦がそう考えたと同じ考えに至つたらしく、碧月も片手で口を押えている。

信彦が考えていたのは、あくまで自身が世紀王となった後に恨みを抱いた存在を懸念していた。だが、世紀王という存在は信彦が最初ではない。ゴルゴムの支配者、創世王によって見出された信彦と同じ世紀王は、何代もいたはず。

5万年という通常では考えも及ばないサイクルで繰り返されてきた戦い。その中でゴルゴムの民とも言える者が生き続けてもなんら不思議はない。

その支配者である創世王ですら、肉体を世紀王に移し替えていたといえど、生き続けていたのだから。

「ん？どしたのよお二人さん。なんか悪い事言っちゃったかしら僕ちゃん？」

「…碧月、どうなんだ？俺より以前の世紀王に関しては…」

「もしかしたら…そうだったかもしれないわ」

「すいませーん。そろそろ俺も混ぜてくれませーん？」

自分のふとした一言から何か思いついたと顔を上げたアンリマユであったが、またもや自分抜きで話を進める信彦と碧月の姿に、本当に泣きそうになったのは余談である。

「どういう事だ？キングストーンの意思であるお前には、これまでの戦いの記憶があるはずだろう」

「…『私達』がただの力の塊から自意識を持つようになったもうその時から、殺し合いが始まっていたの。私は、嫌だった。私達の力が、ただ殺し合いにだけ利用される事が。一創世王《あの人》の望みによつて次々と犠牲となつていく人々を目にすることが。だからいつしか私達はただ願われれば力を発揮するという機能しか表面に出さず、眠りについてしまった」

「……………」

「必死に止めるように訴えてきた。それでも聞く耳を持つてくれなかった。止める事が、出来なかったの」

目に涙を溜める碧月を見て、自分は無神経な質問をしたのかもしれないと信彦は強く拳を握る。

最初に彼女と意識を交わした時、言っていたではないか。

ようやく信彦や間桐光太郎のような人物と出会い、自分の意思を告げられるようになったのだと。失念していた信彦は目を閉じて、静かに碧月へと謝罪した。

「どうやら過ぎた話を蒸し返してしまったようだ。許せ」

「…うん。私こそ御免なさい。せつかく2人が私の不安を取り除く為に、聞いてくれたのに…」

「以前お前が言っただろう。お前に起きた問題は、俺達の問題でもあるんだ」

「信彦…」

無表情のまま視線をそらす信彦の不器用な優しさに、碧月は白い指先で涙を拭いながら感謝した。

「ありがとう…」

「……………」

「んじやーとりあえず結果としちやあ前回の世紀王さん、もしくは創世王を恨んでるやつかも知れないって事でOK? んじやあさつそく外出がてら調査に向かうとしましょうかね?」

と、静かな雰囲気をぶち壊す大声が響く方向へと顔を向けた信彦と碧月。そこには扉の外へと今にも出ようとしたアンリマユが邪悪な笑いを浮かべていた。

その扉は深層意識内ではあくまで分かりやすいイメージとして存在しているが、扉の向こうは表層意識への入り口。つまり、その扉を潜った者が主人格として肉体の主導権を握る事ができるのだ。

「貴様、いつもの間に」

「あーそこでいつの間にか言っちゃう? 別に? 俺はハブられていた事なんて微塵も気にしちやあいませんけど? ただいつもの3割増しで周囲にご迷惑を掛けちやおうって気分になってるだけだし?」

「アンリ、べつに私達悪気があった訳じゃ…」

「はーいつまりはナチュラルに無視していたって事になりまーすッ! こりやあ気が晴れるまで遊び倒すしかないじゃん!」

「さつそく本音を漏らしたな…」

「シヤラップこの野郎! てなわけでお二人さんは好きだけ話の続きをして後程レポートで提出してやがれ! アデュー!!」

完全に本心を信彦と碧月に悟られていながらも開き直ったアンリマユはテンション高めに扉を乱暴に閉じて、現実世界に向かったのであった。

「あいつめ…」

「…いいの? アンリ、だいぶ怒っていたようだけど」

眉間に指を当てて溜息をつく信彦の顔を覗き込んで尋ねる碧月に、力なく答えた。

「一応は奴の言葉もあつて切っ掛けを見つけたんだ。ならば、最初に口にした奴が調べにいくという筋が通る」

「フフツ。なんだかんだ言つて、彼抜きに話にした事を申し訳ないと思っているんだから。信彦は優しいわね」

「うるさい…それに奴の事だ。敢えて戯れ言を口にして、調査に向かうつもりなのだろう」

ホテルの一室。

目をゆっくりと開ける月影信彦の肉体を操る人格アンリマユ。身体を寝かせていたベットから上半身をゆっくりと起こし、手を握って開くといった一通りの確認を終えた後に盛大に叫ぶ。

「やったぜキャッツホーツ！久々の世界だ飲むぜ食うぜ遊ぶぜ!!!虫菌やカロリー計算なんざ置いといてこの辺のパフェを征服だ!!」

精神世界にて少しでもアンリマユへ期待を寄せていた信彦は激しい怒りに燃えていた事は言うまでもない。

「さてさて、それじゃあ信さんのアイデンティティーであるこの真っ黒コートを持つてつと…ん？」

クローゼットに収納されていたコートを手に取ったアンリマユの耳に、呼び出しを告げるインターホンが届く。はてルームサービスな

んぎ頼んだ覚えがないなと口にするアンリマユは出入り口のドアを何の疑いもなく開錠した。

「はいはいどちらさんで…」

「どうもこんばんは！先ほどぶりですね」

眼鏡をかけ、学生服姿のシエルが満面の笑みで立っていた。

「……………間に合ってますんで」

開けた際とは反対に勢いを付けてドアを閉じるアンリマユであったが扉の間にシエルが爪先を挟み込みこんで阻止してしまう。

「お、前さんどこの、訪問販売員、だって、の…」

「お話…くらい聞いてくれても…いいじゃないですかッ!!」

「うおおッ!?!」

ドアを閉じる為必死にドアノブを引くアンリマユだが、反対側から引くシエルの全力に敵わず、躓く形へ通路へと飛び出してしまった。見つとも無く転んでしまったアンリマユを嘲笑うかのようにオートロックの扉は静かに閉じる。

「ふう…さて、お久しぶりといっついていいんでしょうか？アンリマユさん」

「てんめこのカレー女…人さまがこれからプライベートを楽しもうって時にやってきやがって…」

「それは申し訳ありません。でも、貴方にとっても有意義なお話かもしれないですよ？」

「いやーそんな事言っただけ俺らをいい様に使おうってんなら…」

「あ、最近雑誌で紹介された甘味処を知っているのですけど」

「まずはそこに行ってから話を聞こうか」

ていよく買収されるアンリマユの行動に、精神世界の碧月はただただ、苦笑するしかなかった。

「志貴の様子が可笑しい?」

「ええ。実は先ほど路地裏でお会いしたのですが…」

場所は24時間営業のファミリーストラン。

季節限定のデザートを満足いくままに食したアンリマユに代わり主人格となった信彦はシエルより持ち掛けられた案件に目を細める。ちなみにアンリマユへの制裁は後程下されるという事で、現在子犬のように震えているようだ。

聞けば、血の臭いを嗅ぎ取ったシエルが向かった先にあつたのは、複数の人間だった残骸と、立ち尽くしている遠野士貴。しかもひどく混乱している様子であったようだ。士貴が死骸を見て狼狽していたという話に違和感を覚える信彦だったが、最近奇妙な事件に巻き込まれていたとはいえ元は一般人。短期間で死体に慣れるという方が難しいと切り替えるつもりでいたが、その意見はシエルも同様であったようだ。

「他に理由があるというのか?」

「はい。遠野くんが持つ短刀…柄に七夜と刻まれているナイフを覚えていますか?」

「…ああ」

「ナイフは彼の足もとに落ちていました。もちろん、ナイフに人を切断したような後はありませんでしたが、手に取って遠野くんに渡そうとした際、一瞬躊躇したんです。まるで初めて見たかのように」

その後、思い出しかのようにナイフを受け取った土貴の視線が泳いでいた事を見逃さなかったシエルはさらに気になっていた事を信彦へと伝える。

「遠野くんは普段見かける私服や学生服とは異なる姿でした。それも、真つ黒なコートを身に纏って…そう貴方と同じように」
「……………なぜそこで目つきを変える」

眼鏡の奥から伝わる殺気から逃れるように視線を外す信彦は、自分の横に畳んだコートに目を止める。まさかこの女、土貴が自分の物まねして着用しているとでも言うつもりなのかと考えていたが、彼女もそこまで浅はかではなかったようだ。

「まあ、冗談はともかく。明らかに彼の様子はおかしかったんです。何かご存じであればと思いましたが今日はお誘いしたんですが…」

「生憎と心当たりは欠片もない。アルクエイドあたりに聞け」

「あら。信彦さんは私と真祖の血で血を洗う争いをお望みで？」

笑顔でとんでもない事を言うシエルに構わず、タバコを銜える信彦は土貴が黒いコートに身を包んでいたと聞き、紫煙を吐きながら自分ではなく、この街に辿り着いて最初に戦った存在の姿を連想する。その身に無数の存在を宿していた敵を…

「そして、貴方にもう一つ伺いたい事がありました」
「…今度はなんだ？」

頭の中で連想した敵が大きく締めていく事を遮断したシエルの声に少なからずシエルに感謝しながら正面を向く信彦。正直、あれは彼にとって苦い記憶だからだ。全力が出せなかったとは言え、宿敵以外に苦戦を強いられるなど彼にとっては屈辱でしかなかったのだから。

「実は、遠野君が出くわした件以外も、もう一つ殺人事件が起きていたんです。表沙汰にはなっていないませんが、今週で4人の死者がいます」

あまり良い話ではないが、ここまで聞いてしまったらもう逃れられまい。覚悟をして信彦は利き続けた。

「私の使い魔も断片的にしか犯人の姿を捉えていません。唯一確認できたのが――」

「犯人は男であり、巨大な鎌を持っていたという事です」

第103話

103

日付が変わり、人間の言葉で表せば丑三つ時に迫ろうとする時間。月影信彦は当てもなく夜道を歩き続けていた。彼の行き先を照らすのは僅かな街灯と月明かり。だがその月も大半が欠け、ほっそりとした三日月のためか心細さを感じてしまう。

だが、信彦にとっては些細な事であった。こうして人通りもなく、不用心に出歩いていれば目的の存在に迫る事ができるからだ。

(まーつたく、自分自身をエサにするとはねえ。これでボウズだったらくたびれ儲けてて奴じゃん?)

「黙っている」

相変わらず口の減らない同居人に短く対応した信彦は速度を緩めずに歩き続ける。無論、襲撃に備え注意を払いながら、だ。

(それにしても懐かしいわね。こうして夜中に出歩いて、吸血鬼を探していたのよね)

(そーそー。あの時は信ひーったら孤高ぶっちゃってもう…)

「……………」

頭の中で数か月前の出来事を語り始めた碧月とアンリマユに構わず無言を貫く信彦。しかし、碧月の言葉通りに信彦は目的は行動を起こしている。以前はいらぬ誤解を抱く魔術協会や聖堂教会と鉢合わせしないために騒ぎを起こしていた吸血鬼を始末するという目的があった。

しかし、前回と異なり信彦が動き出した事には複数の要因が重なっ

たためだ。

碧月が感じたという殺気を放った謎の存在。

シエルから聞かされた普段とは異なる雰囲気醸し出した遠野志貴と惨殺死体。

そして、志貴とは無関係の場所で起きた殺人事件。

特に3番目の4人もの犠牲者が出たという事件は公になっていないという事に信彦は強い疑問を抱いた。

志貴が遭遇した遺体に関しては目撃者が出てしまったが既にシエルたち聖堂教会によって情報操作を行っているようだったが、首を刈られた事件に関しては未だ広がっておらずシエルは『公にできない』と口にした。その言い回しは情報が広がると『誰か』にとつて都合が悪くなるたなのだろう。

その『誰か』は現時点では不明であるが、他の2つも合わせ偶然に起きたとは考えられないというのが、信彦の考えである。

(なんだあ？いきなり推理始めるなんて今日から探偵でも始めんのかい？)

(あら、信彦が探偵なんて素敵！でも、浮気調査とか難しそう…)

(そらねー、こやつに男女の関係なんざ小学校からやり直した方か)

「論点をずらすな貴様ら」

自身の将来を勝手に確定しつつある2人に黙っていられず口を挟んでしまった信彦であった。

夜道を黙々と進む事数十分。

(オイオーイ。全然引かないぜ旦那)

「2分毎に同じ言葉を口にするな」

移動中、このような不毛な会話が繰り広げられているのは忍耐できぬアンリマユが原因なのか、アンリマユの不満を逐一計測する信彦の細かさが原因なのか。碧月は二人のやり取りに思わず笑いを堪える事に必死であった。同時に、安らぎも感じていた。

この二人が一緒にいてくれるのであれば、日中に見かけた人物と遭遇しても、もう大丈夫。恐れる事はない。

その考えが、ただの楽観視であったと彼女は思い知る事となった。

「っ!？」

信彦は背後から接近する物音に急ぎ振り返るが、視線の先には誰の姿もない。何者かが自分へ近づいたのは間違いないと判断した信彦は身構えたまま周囲を警戒するが、信彦の視線では見つかるはずがなかった。なぜならばその来訪者は、信彦の足もとへ現れたのだから。

「ナー」

(おやまあ、これはまた小さな刺客さんだこと)

確実にニヤニヤとしているはずであるアンリマユが言う通り、信彦が察知した存在は彼の足へと頭を摺り寄せている黒い猫なのだろう。夜中であるためか黒い毛並みは一層周囲に溶け込み、外灯の明かりで妖しく反射されることでようやく存在が掴める程度だ。

(少しばかり気を張り過ぎてないかい? だからニヤンコちゃんを近づいてもいねー不審者と間違えちゃうんじゃない?)

「……………」

今回ばかりはアンリマユに反論できずにいる信彦は確かに些か過敏になり過ぎていたのかも知れんと、視線を突如現れた猫へと戻す。黒い猫は信彦の足から離れると今度は床へと寝転がり、背中をアスファルトへと擦りつけている。いや、あれは腹部に触れるという合図なのかも知れない。

まるで今の自分とは正反対に無防備である猫から嘲笑いを受けているかもと誇大して解釈する信彦の背後から気の抜けた声が響いた。

「あくそこにいたのか。どーもすいません、それウチの猫で…」

振り向かない信彦の横を通り過ぎたのは、若い男性のようだ。猫の飼い主を自称する男は猫の前で屈むと手にした猫じゃらしをチラつかせる。

「こーらこーら。駄目じゃないかあ勝手にいなくなっちゃ…」

聞くだけでもこちらが脱力してしまうような男性の声に、不用心なのは猫だけでないと力のない笑いを浮かべるアンリマユ。今回信彦が身体を張って釣れた相手が小動物とそれを探し回っていた一般人では、見事失敗と言ってもいいだろう。

今日のところは引き上げた方がいい。信彦も碧月の不安を少しでも和らげるための行動だということは分かるが、シエルの来訪も含めて色々と焦り過ぎだ。

このまま踵を返し、ホテルでゆつくりと休むよう一言伝えようとアンリマユが口を開くより早く、信彦は動いていた。

今しがた現れた男性の頭頂部目がけて、信彦は右手に顕現させたシャドーセイバーを振り下ろしたのだ。

(ちよ——)

アンリマユは自分達に何も告げる間もなく攻撃を放った信彦を止めようとするが、もう間に合わない。なぜ、信彦が通りすがりの一般人に手をかけたのかという疑問は、さらなる驚きによってかき消される。

「っ…」

振り下ろされたシャドーセイバーの甲高い音に全身の毛を逆立たせた黒猫はとうに逃げ出し、暗闇の中へと姿を消した。その場に残ったのは剣を下ろしたままの信彦と——

「…背後からの不意打ちとは、随分と行儀の悪い。だが、殺すだけという点に関しては効率的ではあるな」

膝を付き、立ち上がりぬままま頭上へ掲げた巨大な鎌でシャドーセイバーを受け止めた男のみ。

「いつもまでも剣に力を込めたままでは疲れるだろう？」

「っ?!」

男は立膝。しかも振り返る事させず手に持った大鎌を回転させ、信彦の喉がけて刃を走らせる。敵の狙いを察した信彦は急ぎバックステップで回避。十分に距離を取ると、指先で自身の首筋へと触れた。触れた箇所には薄っすらとだが赤い線があり、血液が音もなく流れていた。

「回避したか。流石にあの程度では首を落とさせてはくれないか」

立ち上がり、振り向いた男の目を見た信彦はシャドーセイバーを握る手を自然と強めた。

冷たい。

男の瞳は目を合わせただけで相手を凍てつかせるほどに、冷たいと感じさせる。魔術協会や聖堂教会の刺客から向けられる『憎悪』や『妬み』などといった負の感情。それだけでなく人なら持ち合わせているであろうどの感情すら読み取れなかった。

「どうりで接近を許してしまうはずだ…」

(おいおいこういうこったよ。さっきだって猫の気配にだって敏感だったアンタが何で気が付かなかったんだ?)

「お前の言う通り。さっきまで俺は小動物の気配にすら大げさに反応した。それ程にまで周囲を警戒していたというのに、この男は突然現れて俺の横を通り過ぎた」

信彦の言葉に、アンリマユは遅すぎる寒気に駆られた。シャドームーンの姿を変えていなかったと言えど、月影信彦の五感は通常の人間のそれを遥かに凌駕している。だが目の前の男は信彦をもちやレーダーに近い察知能力を掻い潜って接近をするなど、アサシンの気配遮断スキルを持ってしなければ不可能な事だ。

「いや、そんなスキルなど必要ない。この男には、俺に何も向けていない。ただそれだけだ」

（ああ？ますます解らないんですけど？）

「…お前は道を通る時、足元に小石などあつたらどうする？いちいち殺意を向けるか？」

（おいおいこんな時にナゾナゾか？そんな抱くほど小石とは仲良くなれないっての。無視するか蹴飛ばすか…ってなあ信さん。このお兄さんって）

「ああ、その通りだ。この男、他の者にはどうかは知らん。だが、俺には全く興味というものがないらしい」

そう言つてシャドーセイバーを強く握る信彦の怒りがアンリマユへと伝わる。今まで散々悪感情を向けられていた信彦にとって真逆の対応だがそれはそれで腹立たしいのは間違いない。

だが、だからと言つて信彦が先手を打つ相手であるのかは疑問であつたが、シエルから聞かされた公にできない事件の手口を思い出した。

『実は、遠野君が出くわした件以外も、もう一つ殺人事件が起きていたんです。表沙汰にはなっていないませんが、今週で4人の死者がいます』

『私の使い魔も断片的にしか犯人の姿を捉えていません。唯一確認できたのが――』

『犯人は男であり、巨大な鎌を持っていたという事です』

(ドンピシャじゃねえかよ…)

率直な感想を唱えたアンリマユは信彦の咄嗟に出た行動が自衛にも繋がっていたとようやく理解する。もし同じ手口で4人もの人間が殺されていたのなら、もはや不意打ち以外に防ぎようがなかった。そして相手の手口以上に、その精神の方が恐ろしい。

人が人を襲う、または殺す時には必ずなんらかの感情が表面にでる。それが『殺意』というものだ。卓越した暗殺者ですら自らの気配を断つとしても殺す一瞬に対象へ『意識』が向けられ、一部の人間はこの意識を捉える事で回避できる。

だが、この男にそれはない。

そうでなければ、信彦が攻撃の回避が遅れるという事などまずありえなかったのだから。

(随分と面倒な相手が殺人犯だったみてえだなあ碧月ちゃん…碧月ちゃん?)

(あ…ああ…どう、して…)

(お、おい…どうしたってんだ?)

先ほどから静かであった碧月へと目を向けたアンリマユは焦燥にそまり、怯えている彼女の姿を見た。

(に、げて信彦…)

「何?」

(逃げて信彦! その人…その人なの!)

(昼間、遠くから私を見ていたのはッ!!)

意識の中で響く碧月の絶叫と同時に、男は動いた。

手にした大鎌を頭上で旋回し、風切り音と共に地面目がけ振り下ろすと、無数の斬撃が信彦目がけて飛来する。カマイタチとなった斬撃が迫る中、信彦は残る左腕にもシャドーセイバーを出現させると眼前で交差。刃から緑色のエネルギーを放出させ、自身に迫る風の刃と相殺させる。

攻撃が止まり、大鎌を肩で担ぐ男の表情は、やはり冷たい。

「見事なものだ」

本心から言っているとは到底思えない賛辞に、信彦は自分の番であるとシャドーセイバーを消し、右拳を腰に添え、左腕を前方に突き出した。

「ワタシの攻撃を半分も防ぐとは」

「ッ!？」

男の言葉を発したと同時に、信彦の全身から血が噴き出した。

「ば、かな…!？」

見れば手足。胴体に至ってまで無数の傷が刻まれ、信彦の衣服を血へ染めていく。遅れて全身に広がる痛みには耐えようと神経の遮断を試みるが、膝を付いてしまう方が早く、自身の血液で生まれた赤い水たまりへバシヤリツと音を立てて沈む信彦に男はゆっくりと近づいていく。

「先ほどの攻撃は視認できる斬撃と視認できない斬撃を合わせて放つ技。受けるのではなく、回避に徹していればそこまで傷つくことはなかったかもしれない」

「き、様。何者だ…」

こう言つて、キングストーンを全身に巡らせることで治癒を凶ろうとした信彦であったが、傷は塞がることなく血液が止まる事無く流れ続けていた。

「ぐっ…！」

「無駄だよ。この鎌…ハルペーで付けられた傷は彼女の力を使ったとしても塞がることは無いらしいからな」

男の言葉は、どこまでも信彦達の心を揺らし続ける。

ハルペー…ギリシャ神話の登場人物が持つ不死身殺しとされている神剣の一つであり、かのメドゥーサの首を斬り落とした鎌だ。もし、その鎌が本物だとしたらキングストーンの力による治癒が遮断され、自然回復でしか傷は塞がらない。

そして男は言った。『彼女』と。

つまりこの男はキングストーンの意思である碧月の存在を把握しているという事だ。

「動かない方がいい。君達の出現は想定外だが、ワタシの行動は君達にとってメリットでもあるはずだ」

「なん、だと…？」

何人もの人間を手にかけて男が突然言い出した事に傷の痛みも相まって分析が叶わない信彦に、男は淡々と告げた。

「この街で方針を決めようとした最中に相も変わらず醜い連中を見つけてしまつてね。そこでワタシが処理を始めた。ただそれだけの話だよ」

ますます分からない男の言い分に、血の池に沈んでいた信彦は震える腕で起き上がろうとするが、力が抜けてしまい、再び水音を立てて床へと倒れてしまう。

「ああ、いずれは君達も始末するから安心したまえ。これから最後の仕上げに向かうところだからね」

言うとなんどこからともなくマントを翻し、自身の身を包む。懸命に首だけを動かした信彦の目の前で、男の姿は徐々に薄れていった。

信彦の視線に気が付いたのか、男は消え失せる中で先ほど問われた事への解答を口にする。

「そう言えば名乗っていなかったな。この肉体と武器はペルセウスと呼ばれた男のようだが、宿る魂と精神は違う」

「私はマキュリアス。かつてクライシス帝国の星騎士であつた者だ――」

信彦の意識は暗転する。

押し寄せられた多くの事柄を理解できぬままに。

第104話

104

遠野志貴が山瀬明美という少女を知ったのは、ある日の昼食の事であった。

親友である乾有彦の提案で、最近席が隣になった弓塚さつきを誘い食堂へと向かった志貴。吸血鬼との闘いから少しは身体は丈夫になったかと思っただが、主治医からは相変わらず刺激物の摂取は厳禁と言われおり、仕方なしにきつねうどんの職権を購入する。

先に席を確保してしてくれた有彦とさつきが揃ってカレーライスを確認していたことに、少し口元が緩んでしまったのは、2人には内緒だ。

他愛のない事を大げさに語る有彦の話にクスクスと口元を抑えて笑うさつきと共に破顔する志貴であったが、彼の背後の席を陣取っていた女子グループの会話が耳に入ってきてしまった。

「じゃあ、明美のお姉さんまだ見つかってないの？」

「うん…」

「最近センチユリーホテルで起きた集団失踪と関係がなければいいんだけど…」

身に覚えがあり過ぎる、そんな会話が聞こえてしまった。

「ごめん、私もう教室に戻るね」

「あ、山瀬！」

友人の呼び止めも聞かずに食器の盆を返却に向かった山瀬明美は亜麻色の髪をポニーテールにした大人しそうな印象を与える少女だ。この時の志貴は知らなかったが、本来彼女はしっかり者で笑顔の良く似合う生徒であり友人の間では大のお姉さん子で有名であったよう

だ。

「遠野くん。山瀬さんが、どうかしたの？」

「え……？いや、なんでもないよ」

急ぎ顔を戻した志貴は食事を続けようとうどんに箸を伸ばすが、箸を并へつ突き立てるが、茶色の水面に映る自身の顔がそうではないと告げてしまっている。

「……………」

「あ、えつと…」

「ま、お前がなんでもないってんならそうなんだろうよ」

向かいの席から無言で睨みつける有彦だったが、もう話は終わったと言わんばかりにスプーンを口に運ぶ。彼のこういったところは、本当にありがたいと志貴は思う。

昼休み、午後の授業と順当に時間が過ぎていく中、志貴は板書をノートに書き写しながらも意識は山瀬明美…正確には、行方不明である彼女の姉へと向けていた。うどんをすすりながらも、席に残って話を続けていた明美の友人達の声に耳を傾けていた志貴は断片ながらも山瀬姉妹の情報を得る。

明美の姉は教師であり、行方不明となる直前は残業で遅い時間に職場を離れた。

母子家庭という事もあり、働いている母親に代わり面倒を見ていた姉を慕っていたが、そんな姉が行方不明となった直後は精神は不安定となり、数日学校を休んでいた程。それほど姉を慕っていたのだろう。

山瀬明美の事情を知ってしまった志貴は願う。

どうか、彼女の姉が吸血鬼の、死徒の餌食となっていないことを。

それ以上に、自分が殺したグルルの中に、彼女の姉が含まれていない事を強く願った。

そして志貴は思い知る。嫌な予感、嫌な現実を引き起こしてしま
うのだと。

「…っ?」

真夜中。

自室で目を覚ました志貴は意識はハッキリしているというのに身
体が異様な程に重く、倦怠感に飲まれていた。全身から汗が吹き出
し、呼吸もしづらい。ベットで横になつていてというのに、身体は常
に動いているかのように体力が抜け落ちていくような感覚。まるで
身体の一部が肉体から離れ、どこかで動いているような…
(なん、何だ…それに、無性に腹が減つて…)

昨日の夕食もそれほど食べたという訳でもないのに、飢餓感に陥る
志貴は腹部を片手で押さえながら枕元にある眼鏡を取ろうと手を伸
ばすが、真つ暗闇の中で探りをするまでもなく、眼鏡は志貴の手の
中へと納まった。

「はい、志貴」

「ああ、助かった——」

言い切る前に眼鏡を誰かによって受け取った志貴は固まる。この
部屋には自分しかいないはずだし、起床の知らせに部屋へと入る使用
人の翡翠が来るにもまだ早すぎる。

眼鏡をゆつくりとかけ、自分に手渡した相手は、何事もないかのよ
うに、笑顔でベットの隅に腰掛けていた。

「ヤッホー志貴。おはよう…でもないか。まだこんばんは？」

「あ、アルクエイド…」

「顔色悪いわね。まあ大体予想通りだけど」

「あのなあ、窓から勝手に入って来るなんてあれほど…」

人差し指を口元に当てて何か不穏な言葉を口にするアルクエイド。ブリュンスタットの登場に志貴はどうか大声を出さぬよう抑えながら窓へと目を向ける。アルクエイドと折り合いの悪い妹の秋葉によつて象が踏んでも壊れない窓（琥珀さんプロデュース）だったのだが、丁寧に鍵のみ破壊して入室したらしい。

言いたい事は山ほどある志貴であるがアルクエイドの笑顔を見てどこか落ち着いた事も事実だ。

「なにか、あつたのか？」

最近は諦めて玄関から尋ねるようになったアルクエイドが窓から侵入して自分に会いに来るとはよほどの事態と考える志貴に、アルクエイドは頷いて見せると、白く細い指で突然志貴の服を捲ってしまふ。

「なっ——」

「ちよつと確認するだけ」

「いや、だか…」

捲られた腹部にアルクエイドの冷たい指でなぞられ妙な声を出してしまふ志貴だったが、彼女の表情は真剣そのもの。1人妙な事を思い浮かべてしまった志貴は羞恥心から眼を逸らす。

（無自覚でこんな事するんだもんな…いや、勘違いする俺も俺だけど）

「やっぱり、『抜けて』いるわね」

「ん？なんの話だ？」

「志貴。貴方が以前死にかけた時、私がどう応急処置したか覚えてる?。」

一人納得している様子であるアルクエイドへ尋ねてみるが、アルクエイドは鋭い眼付きで質問を返してきた。

もちろん、忘れるはずがない。

志貴が初めて契約をした時…志貴に一度殺され、肉体の再生の為に力が枯渇した状態の時に現れた吸血鬼と戦った頃の話だ。

志貴は吸血鬼を殺したまではないものの、戦いで受けた傷で致命傷を負ってしまう。そこで死にかけて志貴に断った上でアルクエイドが敵の残滓ともいえるべき方向性のない命を志貴の肉体に寄生させ、一命を取り止めたのだ。

「…それが、どうかしたのか?。」

志貴にとっては良い過去ではないため、そっけなく返事をしてしまう。身体を貫かれ、無数の獣に全身を少しずつかじられていく感覚は今でも忘れられない。

それに——自分の目の前で食い殺されてしまった名も知らない女性の最期が目には焼き付いている。

『逃げろおおおおおッ!!』

アルクエイドの動きが封じられ、黒い獣の大群に囲まれていた志貴は、思わず叫んだ。通りすがりの女性を巻き込まぬよう声を張ったつもりが、逆に尋常ではない事態とみて助けようと接近させてしまっ

た。

そして、敵は不用意に近づいた獲物を見逃すはずがなかった。

『ちようど良い。切り裂かれて養分が足りなくなっていたところだ』

無慈悲に告げられた黒い死神の言葉に従って、黒い波となった獣が女性を文字通り飲み込んだ。

女性の悲鳴は、聞こえなかった。

ガリ、ゴリ、グチャという本来なら人体から聞こえてはいけない音が、志貴の耳へと響き渡る。

そして次の獲物を志貴へと定められた時、志貴の瞳に、『死の線』だけでなく『点』がはつきりと視認できるようになってしまった志貴は分解した獣の血の雨を浴び、狂ったように笑うと告げる。

『さあ、殺しあおうかネロ・カオス』

敵の身体から次々と湧いて出る猛禽類や爬虫類。そして幻想種すら顕現したが次々と『死の点』を突く志貴の敵ではなかった。

本能が敵わぬと言いながらも人間に恐怖する事を認めなかった敵：ネロ・カオスは肉体を戦闘向けに変形させ、渾身の一撃を志貴に向けるも、志貴にネロ・カオスの『存在』という点を突かれ、消滅した。

『お前が、私の死か』

不敵な笑みを浮かべ、黒い獣を総ていた存在は消滅した。

「ええ。確かに貴方にとっていい記憶とは呼べないものとは理解している」

「……………」

「あの時、志貴の身体を補強する為に寄生させた混沌の一部…それが志貴の身体から抜け出したわ」

あまりにも突拍子のない言葉に、志貴の頭は理解に追いつかない。暗い表情から一変し、驚愕した志貴はアルクエイドへと問い詰める。

「なっ…ちよつとまってくれアルクエイド。あれって確か宿主を失つてもう俺の身体に溶け込んだんじゃないのか!？」

「私もそう思ったんだけどね。けど、さつき会ったの。黒いコートを着た志貴そっくりに化けたソイツを」

「俺…そっくり?」

「ええ。最初は私も間違えて話しかけちゃったんだけど…」

一時間ほど前。

公園のベンチに腰を下ろす志貴の姿を見たアルクエイドは嬉々として近づいたが、自分を見てどこかよそよそしい態度を取りながら名を呼ぶ志貴を見て確信した。

彼は遠野志貴ではない。

判断した直後に爪を伸ばした志貴の顔をした『誰か』は身に纏った黒いコートを翻し、跳躍。アルクエイドと30メートル以上の距離を取るが、アルクエイドに取って一息で詰められる距離。

逃走を凶ろうとする『誰か』の動きを封じようとしたアルクエイドだったが、コートから飛び出した数頭の獣に動揺し、逃がしてしまう。獣は一秒もせず塵へと返したアルクエイドならばすぐに追いつけるが、その前に志貴の容態を確認しなければならない。

そして現在に至るといふ訳だ。

「じゃあ、俺の身体から…アイツの一部が抜け出したって事なのか」

「そうなんだけど…志貴。身体に何か異変みたいな事はない？」

「ああ、さつきまでは妙に身体が重かったんだけど、それも段々薄れてきたな」

「…動いてないのに、まるで身体を動かした後みたいな感覚は？」

「…それも、確かにあった。けど、どうしてアルクエイドが知ってるんだ？」

「うくん。どうも事態は面倒な方向に動いてるみたい」

腕を組み、唸るアルクエイドはどう説明すればいいかを悩む。当初は志貴の身体に関わる事であったので慌ててきてみれば、本人は最初こそ苦しんでいたものの体調を取り戻しつつあった。

理由の察してはいるが、どうも『奴』の事を認めてしまうようで癢にさわるが、説明を求める志貴に話さないわけにはいかず、観念して重々しく口を開く。

「…本当なら、今回の件は志貴の命に関わるはずだったのよ」

「関わるはず…だった？」

「それはそうよ。志貴の肉体と化したはずの生命が自我を持って行動を始めたとしても、結局は志貴の身体である事には変わらないの。だからアイツが行動する度に志貴の体力は奪われ、下手をすれば寿命そのものも吸われる可能性だってあったんだから」

聞けば背筋が凍り付くような内容だった。志貴の身体から分離したにも拘わらず繋がったネロ・カオスの一部に自分の命が吸われてしまう。最悪、死んでいてもおかしくない状況だったというのに、なぜ志貴は最初こそ不調であったものの回復しつつある。

アルクエイドはどうやらその原因に心当たりがあるようだが、どうにもそれを口にしづらいようだ。

「アルクエイド…何かしってるのか？」

「……………」

「知ってるんだな？」

「むう…」

口を尖らすアルクエイドは志貴の視線に耐え切れず、恐らく今回の原因となったであろう事柄を説明した。

「月影さんの力？」

「そうよ。ロアとの戦いで志貴は魔術に『線』と『点』が見えるまでに至って脳に多大な負荷をかけたでしょ？その魔眼殺しでも抑えられないくらいに」

「ああ。でも、月影さんが俺にキングストーンの力を送ってくれて助かったけど…」

「その力の行き先が、志貴の眼だけではなかったとしたら…？」

「あ…」

早朝

まだ周囲は暗く、ようやく日が昇ろうとする時間。

志貴は因縁深いあの公園にアルクエイドと共に訪れていた。途中で合流したシエルとアルクエイドの口論をどうにか仲裁しつつも到着した公園のベンチに、その者はいた。

「っ…」

息を飲む。

恰好だけであればネロ・カオス同様に黒いコートで身を包み、その中は漆黒でどうにか人の形を保っているに過ぎない。

問題は、その顔だ。

アルクエイドとシエルの話では、初見は志貴と同じ顔であったらしい。だが、今は違った。志貴の肉体の一部であった事から分裂した最

初こそ志貴と同じ顔と記憶を持ち合わせていたが、時間が経つに連れ志貴から完全に独立した存在となり、主核とも言うべき顔と意識を取り戻したのであろう。

だが、その顔は過去にフォアブローワインと呼ばれ、永遠という命題に縛られた魔術師でもなかった。

アルクエイドから、ネロという存在を一度殺している為に666の因子は死ぬ直前に取り込んだ生物を新しい主人核へと置き換えようとしていると聞かされた。

「だからって、なんで…」

志貴は強く手を握る。

ネロ・カオスが殺される直前に取り込んだ生物は、志貴の目の前で捕食された顔も名前も知らない女性だった。

確かに、今志貴達の目に映る黒いコードを纏った人物は、あの女性なのだろう。

しかし、志貴は女性の顔に最近知った人物の面影を重ねてしまう。

彼女とお揃いの髪型であるポニーテールに、色違いのリボン。彼女が成長したのなら、同じような顔つきなるのではないだろうか。

そう。ネロ・カオスの後継者となり混沌を引き継ぐ者は、志貴と同じ高校に通う山瀬明美の姉、山瀬舞子なのだから。

嫌な予感が、嫌な現実を引き起こしてしまった。

第105話

山瀬舞子の人生は、あっさりと終わりを告げた。

テストの採点や事務処理に時間を取られ、気が付けば終電が終わっている時間。自宅は歩いてどうにか帰れる距離ではあるものの、妹の明美へ送る誕生日プレゼントを買う予定が台無しとなってしまった。

明日こそは早く仕事を切り上げ、プレゼントを買いに行こう。舞子は急ぎ職場である学校を出て近道である公園を抜けていこうとしたが：

「逃げろおおおおおおおッ!!」

公園の中央から聞こえた少年の声。

尋常ではないとすぐに察した舞子は声が聞こえた方向へと走り出した。

もし、少年が危険な目に合っているというのであれば空手の有段者である自分なら助けることができるはず。

だが彼女が目にしたのは現実とは思えない光景。

深夜の公園を覆い尽くす無数の獣と、それらを従える黒いコートを纏った不吉な男。

彼女の命運は、そこで尽きてしまった。

男の一言で獣の群れは標的を少年から舞子へと変更し、舞子は悲鳴すら上げられないまま貪り尽くされる。

見上げた月が真っ赤である事を最後に、山瀬舞子の意識は途絶えた。

しかし、途絶えたはずだった彼女の意識は唐突に目覚める事となる。

黒いコートの男：ネロ・カオスを倒した遠野志貴の破損した肉体を補うためにアルクエイド・ブリュンスタッドはネロの残骸である混沌の一部を志貴の肉体へと寄生させた。

方向性のない生命である混沌はすんなりと志貴の肉体と同化し、数カ月もすれば完全に志貴の肉体へと変わり果てるとというのが、アルクエイドの見立てであったが、この後にアルクエイドですら予測が出来ない事が生じる。

吸血鬼ロアとの死闘を繰り広げた志貴の眼は、死を視過ぎた為に発生した脳への負担を和らげるためにシャドームーン：月影信彦はキングストーンの力を志貴へと注ぎ込む。

結果、魔眼殺しの眼鏡であつても相殺しきれぬほどに強まった直視の魔眼を抑え、頭の痛みも無くすことに成功する。だが、キングストーンの効力が及んだのは志貴の眼に留まらなかった。

キングストーンの光は志貴の肉体へと溶け込みつつあつた混沌へも届き、失いつつあつた力を復活させてしまったのだ。

力を取り戻した混沌は志貴の肉体から分離し、意識が朦朧としたまま町を徘徊。その時、姿は宿主であつた遠野志貴であつた為に路地裏で遭遇したシエルは声をかけ、混沌自身も言われるがままに自分は遠野志貴であると認識していた。

しかし、アルクエイドに『志貴ではない』と看破され、逃亡した混沌はとある民家の前で立ち止まった。

(鍵の隠し場所、相変わらずだなあ)

『山瀬』と書かれた表札を指先でなぞり、玄関前の植木鉢の下に隠された鍵で扉を解錠。深夜で寝静まっているであろう住人を起こさないように、忍び足でリビングまで移動する。

部屋を見渡し、なんら変わらない光景にふと口元が緩んだ。テレビの横に置かれたリモコンの定位置、カーテンの色、食器棚に置かれた

母と妹と…そして自分のマグカップを見つめて。

(ああ、そうか。やっぱりボクは…)

食器棚のガラスへ微かに映る自分の顔。それは遠野志貴などではなく、かつてこの山瀬家に暮らしていた『山瀬舞子』へと戻っていた。

666の因子を司っていたネロ・カオスの統率する意思は遠野志貴によってその『存在』を殺されてしまった。フォアブロー・ロワインという人格を失った混沌はネロ・カオスとなるべきあらたな人格が必要だったが、理性を持つ因子は彼以外全てが本能に従う動物であった為、理性を持つ者が必要であった。

それが、死ぬ直前に取り込んだ『理性を持つ人間』…山瀬舞子だった。

(こんな事、彼の『一部』になっっていなければ信じなかつたなあ…)

力を取り戻し、志貴から分離した舞子は首から下となる自身の身体に触れて、そう考えた。黒いコートの内側は再生を始めた無数の混沌でどうにか女性の形を保っており、触れて見ればコンニャクを思わせる妙な感触であった。

そして、意外に冷静に自分の状態を把握できたのは、志貴の一部であった事も起因する。

志貴の身体の一部を補っていた間、山瀬舞子としての意識は確かになかつたが遠野志貴としての経験が、彼女へと流れ込んでいた。

だからこそシエルやアルクエイドと接触してもぎこちなくではあるが対応することが出来た。2人だけでなく、家族や使用人。そして彼の命を救った不器用ながらも優しい人物も、舞子は知っている。その優しい人物こそが、舞子の意思を取り戻すきっかけとなったのだろうが…

「ハウツ!?!」

悲鳴を上げた舞子は自身の身体を抱きしめるように膝を付く。ポコボコと音を立ててコートの内側にある黒い身体：彼女に宿る混沌達が飢餓感により『食事』を求めて飛び出そうとしていた。

(ダメ……このままじゃ……)

一度殺された自分ならば分かる。獣の因子を開放したが最後。目の前に『餌』がある限り混沌は全てを飲み込み始める。きつと今眠りについているであろう母や妹も……自分と同じように。

(それだけは……ダメ……！)

立ち上がった舞子は冷蔵庫へと駆け足で移動し、収納されていたありったけの食料品を自身の腹へと押し込める。ビニール袋等で包装されていてようが関係なく次々に飲み込まれていく食料品。段々と空へと近づいていく度に、もしこれで満足しなければ、他の手近にある人間へと手を伸ばしてしまうかもしれない不安に駆られる舞子は一心不乱に食料を取り込み続けた。

「ハア、ハア、ハア……」

どしりを床へと倒れた舞子は天井を見つめながらも安堵する。冷蔵庫だけでなく乾きものであるインスタントの麺類も袋ごと取り込んだことで、どうにか静まることができた。周囲には飛び散った食料品の残骸が広がっており、もしこの惨状を妹や母が見つけたら強盗が入ったと思われるだろう。しかし、その程度の誤解で二人の命が助かったのなら安いものだと考えた舞子は立ち上がり、2階へ続く階段を登る。

『まいこ』と平仮名でかかれたネームプレートを見てクスリと微笑みながらゆつくりと部屋を開けると、カーテンの閉め切った室内は舞子が最後に学校へ向かった時となんら変わらない、以前と同じ様子だっ

た。

きつと、自分がいなくなつてからも母や妹が生きていると信じて日頃から掃除をしてくれていたのだろう。

(けど、もう必要ないんだよ、明美。お母さん…)

こうして自我を取り戻したこと自体が奇跡に近いが、もう長くは続かない。その証拠が、先ほどの飢餓感だ。今ならまだ抑えられるが、いつ獣たちが舞子の身体から飛び出し、人間を餌食にするかわからない。

そうなる前に、決着を付けなければならないと、コートのポケットに入ったモノを握りしめる舞子の耳に、聞きなれたドアの開放される音が、聞こえてしまった。

「お、お姉ちゃん…お姉ちゃん、だよね？」

「明美…」

パジャマの上にセーターを羽織つた妹の明美…直前まで寝ていたのだろうか、トレードマークであり姉とお揃いであるポニーテールを解いてストレートとなっている黒髪のあちらこちらに、寝ぐせが見られる。

舞子が名前を呼んで感極まった明美は涙を浮かべて飛びつこうとしたが…

「やっぱり…やっぱり生きてたんだね、お姉ちゃん！」

「来ちゃダメッ！」

「えっ…」

ピシヤリと言い放つた舞子の言葉に明美は固まってしまふ。あれほど慕っていた姉に拒絶され、歓喜から悲哀へと表情を変える妹に、舞子は諭すように、優しい声を向ける。

「明美…ごめんなさい。いきなり大声を出して。でも、聞いて。お姉

ちゃんは、死んじやったの。でも、今日だけは神様が家族にお別れしてきなさいって許しを貰って帰ってきたの」

幼い子供に伝えるような、陳腐な嘘を口にする舞子は幼い子供のように泣きじゃくる明美は混乱するばかりだ。

「なに、それ…全然分からないよ！お姉ちゃんが死んじやって、それでお別れなんて…」

「本当に、私は死んだの。もう身体もなくなつて、こうなつちやつたの」
「ひっ…」

舞子はコートを開放し、自身の肉体を明美へと晒した。悲鳴を上げることも無理もない程に、舞子の身体はどうか人間の形を保った『何か』であったからだ。

「だからこれでお別れなの。ごめんなさい。最後に明美の笑った顔が見れたらよかつたんだけど、これじゃあ難しいよね」

コートを翻した舞子は、立ち尽くす明美の横をぬけ、玄関へと目指した。

「それと、最期にお姉ちゃんとの約束。どんなに遅くなつても、夜の公園には近づいちゃダメよ」

「お、お姉ちゃ——」

その言葉にどのような意味が含まれているのか。尋ねようと明美が振り返った時には、舞子の姿はもうなかった。

もうじき太陽が昇ろうとする時刻。

舞子は人間として最後を迎えた公園のベンチに腰かけていた。

ここならば、『彼』は来てくれるだろう。互いの顔も良く分からないし、名前すら知らなかった同士であったのだが、この短期間は同じ身体を共有していた。

それに、互いに『嫌な記憶』として残っているのがこの公園だ。確かに、いや絶対に来る。

確信した舞子が外灯を見つめる事数分後に、彼等は現れてくれた。

「……………」

急いでこちらにやってきたのだろうか。舞子をなんとも言えない表情で見つめる遠野志貴の服装は下がジーンズではあるが上着は寝間着の上にジャケットを羽織った姿がどこか笑える。

鏡で志貴の顔を見てはいたが、こうして本人を目の前になると思った以上に幼い顔をしている。

彼が、この後自分の死神となるというのに、舞子は笑いながら立ち上がり、志貴と相對した。

志貴の左右に立つシエルとアルクエイドの表情は硬い。

それはそうだろう。一瞬とは言え、彼女を志貴と誤認した上に取り逃がしてしまった事に対して、2人は今回に限り妙な連携を見せている。

公園に向かう途中口論も起きてはいたが、今となつては些細な問題だ。

予めアルクエイドとシエルからは彼女の正体がネロ・カオスの残滓であり、後継者であるという説明は聞いている。そして、彼女を殺せるのはやはり自分しかないのだと。

ネロ・カオスを倒すには肉体を構成する獣を数匹殺しても、統率者であった人格を殺しても意味はない。消し去るならば、666の命を同時に奪わなければ幾度となく再生する。

以前は志貴の直視の魔眼により『ネロの存在そのもの』を点として突き、倒すことができた。

今回も同じことをすればいいだけの話だったが、志貴は戸惑っていた。

同級生である山瀬明美の姉が行方不明で、その時期がネロ・カオスとの戦った日と重なっていた。そして何より、自分の身体を補い、分離した今だから分かる。

目の前に立つ混沌となろうとする女性こそが、山瀬明美の姉なのだと。

無意識に拳を握りしめる志貴に、舞子はコートのポケットですっと握りしめていたモノを放り投げる。

ヒュンヒュンと風を切り、自分の眼前に迫ったモノを受け取った志貴は眼を丸くする。彼女が投げたのは、志貴のナイフだった。

舞子は志貴から分離した直後、まだ山瀬舞子と遠野志貴の意識が混ざり合っていた状態でナイフを手に取り、街へと徘徊していた為に、ずっと持ち続けていたのだろう。

志貴も突然にアルクエイドに連れられてきたために碌に確認せず外出したので、今の今までナイフの存在をすっかりと抜け落ちていた。

「…大事なものなんでしよう？しっかりしなさい」

「返す、言葉がないよ」

なぜだろう。これから殺し合うというのに、妙に親近感が湧いてしまい、笑ってしまった。

自身と同じ肉体であった為か、彼女が生前に教師という職業であっ

たためか、理由は定かではない。

しかし、こうして自分に武器を投げ渡したという事は、それが彼女の答えなのだろう。

志貴も理解している。

もう、舞子は人間に戻れない。放っておけば、センチユリーホテルで起きたように一夜で数百人規模の犠牲者を出してしまうかもしれない。

止められるとしたら、今しかないのだと。

そして…そうなる前に自分を消して欲しいというのが、彼女の答えである。

「さあ、私の命。消せるのかしら？」

偽悪的な言葉と共に舞子の身体がら顕現した漆黒の虎や狼。

爪と牙を尖らせて迫る獣に対し、志貴も眼鏡を外して駆け出していく。受け取ったナイフを逆手に持ち、蒼色に染まった眼は迫る獣の『線』を確実に捉えた。

「フツ!!」

息を短く吐くと同時に繰り出されるナイフの一閃で虎と狼は難なく二つの肉塊へ変わり、再び混沌へと溶け込んでいく。

自身の眷属が倒されたというのに、無防備に両腕を広げる舞子の様子に警戒するアルクエイドとシエルだが、志貴だけは分かっていた。

確実に、自分の『点』を突け。

自分という存在を許すな。

志貴も分かっている。

遠野志貴には月影信彦のような力はない。自分の眼を癒し、アルクエイドの吸血衝動を除去した万能とも思わせる、あの力は。信彦であれば、彼女をどうにかできたかもしれない。

自分には、殺すことしかできないのだから。ならば、彼女の望む事をしよう。

目前に迫った舞子は、静かに目を閉じる。

あとは、彼女の胸に映る『点』を突けば、終わる。

それで、終わるはずだった。

「お姉ちゃんッ!!」

「なッ——!?!」

驚きの声は、誰のものであったのか。そんな事にかまけている人物はこの場に誰一人としていない。

その人物は、どうしても突然現れ、去っていった姉の行方を捜して、最後に言った「公園」という言葉を頼りにここへ現れてしまった。

山瀬明美の登場に突然と目を向けてしまった舞子は自分を呪う。

直前に志貴によって切り裂かれた養分を補充しようと、彼女の意思に関係なく飛び出してしまった数匹の獣。突然の事に啞然としたシエルとアルクエイドはそれぞれ攻撃の構えを取るが間に合わず、対応できたのは志貴だけだ。

志貴は歩みの遅いワニへと飛び乗り、頭頂部からナイフを突き立てて再起不能にし、続いて頭上を飛び越えようとした猛禽類へナイフを一閃させたが、最後の一匹が間に合わない。

漆黒の虎が明美へ食らいつこうと大きく顎を伸ばし、明美も突然の事に思わず目を瞑ってしまう。

「させないッ!!」

虎は明美の頭を噛み砕く直前に舞子によって押し倒され、バタバタと手を動かすがしがみ付いた舞子によって未だに立ち直れない。

「お、お姉ちゃん…」

「舞子、下がって!」

必死の形相に明美は言われるがまま数歩下がるが、状況の理解が追い付かず、姉を見つめたままだ。

体躯を遥かに上回る大型の虎が相手だと言うのに、舞子は虎の首を締め付け、押さえつけている。もう、人間ではないという言葉を感じる他なかった。

「何をしているの…早くー!」

鬼気迫る声で発破をかけてくる舞子に、志貴はナイフを握る力を込める。

彼女の言う事は、分かる。

今のうちに自分ごと虎を殺せということぐらい、志貴にだって分かる。

だが、いいのか。今、目の前に同級生が…舞子の妹がいるというのに、彼女を殺してしまつて…

逡巡する事すら下らない事と分かっているのに、躊躇を見せる志貴を誰が責められるだろうか。

アルクエイドも、シエルも、そしてこの場にはいない月影信彦だつて今の志貴を責められない。

たとえ人間でなくなつたとしても、妹の前で、姉を殺すなど…

「ならば、ワタシが代行するでしょう」

音もなく現れた仮面を被つたソイツは、なんの迷いも見せずに巨大な鎌で虎ごと舞子の背中を突き立てた。

(なん…だ。なにが、起こつたんだ?)

志貴の思考が追いつかない。

数秒前まで、生きていた舞子も、虎もピクリとも動かない。いや、虎はどうに混沌へと溶け込んだはずだが、溶けたまま水たまりのように動かない。

そして、舞子は口から血液を流し仰向けに倒れていた。

「イヤアアアアアアアアアアアツ!!お姉ちゃん、お姉ちゃん!!!」

悲痛の叫びに我に返った志貴の視界に映ったのは、胸に大きな切り傷を残して倒れ、短く呼吸を繰り返す舞子と、膝について彼女を揺さぶる明美。

そして、明美の背後に立ち、鎌を振り上げる仮面をつけた男――
|。

志貴は自分でも信じられない程の瞬歩で男に迫り、ナイフを真横に走らせた。だが、男の姿はとうに無く、完全に安全圏である間合いにゆっくりと着地していた。

「危ないな。何をしてくれるんだ？」

「それは……こっちのセリフだ」

奥歯を噛みしめ、男を睨む志貴。

先ほどあつた躊躇など微塵も見せず、男を殺したいという衝動に駆られながらも、背後にいる明美達を庇うように、刃を構えた。

「うそでしょ……?」

アルクエイドの言葉にシエルも同様の心象だ。

突如として現れた仮面とマントを纏った男は、混沌となりかけている女性に重症を負わせた。

本来、こんな事はない。

攻撃を受けたとしても、混沌の命全てを奪わなければ死ぬことのない

いネロ・カオスになろうとしている舞子が傷を塞げず、今も血を流すなど。

(あの鎌が概念武装の一種…？いえ、それ以上でなければ傷を負わず事など…)

口元を抑え、必死に推測するシエルだったが、その思考は志貴の言葉によって中断される。

「なぜだ…」

「ん？」

「なぜ、あの子まで殺そうとした？」

志貴の差す対象が今も姉の隣で泣きじやくる少女…明美であると察した男は、現れた時と同じく静かに告げる。それが、さも当然であるかのように。

「救いだよ」

「救い…？」

「そうであろう？たとえ化け物となろうと姉の死というのは、彼女を永遠に縛り付ける。それは、とてつもなく残酷なことなのだよ…」

「何を…言っているんだ」

「ならば、その苦しみをこの場で絶つ事が、少女の幸福に他ならない。だからこそワタシは——」

それ以上は言わせなかった。志貴は再び地を蹴りたつた一歩で男の間合いへと入り込み、次々を攻撃を繰り出す。だが、志貴の攻撃を男は紙一重に回避しては再び距離を置いてしまう。

「難しいな。互いの攻撃が『必殺』となってしまう場合となると…」
「……………」

「ワタシの武器も君の眼程ではないが強力だね。自然以外の治癒ができぬ傷を作ることが出来るらしい」

「っ……！」

目を見開く志貴は合点が言った。今は少なからず頭が冷えて確認できたが、舞子の傷が治らず、液状となってしまうた虎を取り込み事が出来ない理由。

確かにロアはいくら獣を殺そうが、一度に因子全てを殺さなければ瞬く間に回復する。だが、もし因子のどれかに癒えない傷を負ってしまえばどうなるか。

「ネロとしての、構成ができない」

そう口走ったアルクエイドは妹に傷口を懸命に抑えられる舞子を見る。

それまでのネロであれば傷を負っても強引に命を練り合わせ、元の姿に戻ったであろう。だが、混沌による復元ができない傷を作ってしまったえば、ただ傷口から血を流すことしか出来ない。そして恐らく深々と突き刺さった傷は舞子だけでなく、複数の因子にも及んでいるはず。志貴とはまた違った形での『死』を与えたのであろう。

あの鎌が相手では、もう月の加護をほぼ断ち切ってしまったアルクエイドはもちろん、ロアの消滅によって不死身でなくなったシエルですら太刀打ちできない。

だが、そんな事は志貴には関係なかった。

「ッ!!」

ナイフを逆手に迫る志貴に今度こそ接近を許してしまった男は鎌の大振りが出来ず、志貴の攻撃を鎌の柄でどうか弾き、回避を続ける。

（まだまだ…まだ、まだ、まだ、まだ、まだ…あの時のように…こいつの

『点』を…)

頭に響く痛みなど無視し、攻撃を続けながら男の「点」を捜し続ける志貴。男の身体に走る線はやがて濃くなり、わずかながら点が現れ始める。

(まだだ…こんな小さな『点』なんかには用はない。必要なのは、こいつを直ぐに殺せる大きな『点』——)

直視の魔眼の力を全開まで引き出そうとする志貴。信彦に癒され、シエルからは使用を控えるように忠告されようが、今の彼はもう止まらない。

背後で明美の泣き声と、止めるように叫ぶアルクエイドとシエルの声も聞こえない。

ナイフの刃と鎌の柄が激しくぶつかり合い、火花が散る中で、志貴の頭痛はさらに強まる。

細かった『線』は太くなり、『点』は大きくなる。

そして…志貴の『蒼色』の瞳がやがて『碧色』へと変わった瞬間に、『視えた』

「え…?」

「貴様…見たな?」

男の身体の中に『ソレ』を見た志貴の動きが止まった瞬間を、男は

見逃さなかった。

男の膝が志貴の腹部へとめり込み、志貴は衝撃が殺しきれずに背後へと吹き飛んでしまう。砂利に身体を引きずられて身体が止まる頃には腹部の鈍痛と頭痛により立ち上がる事すらできなくなってしまう。

「があ、ふ……」

呼吸がままならない志貴の首筋に、鎌の刃が当てられる。

「死を見る君の両目は警戒はしていたが、まさか見るにまで至るとは思わなかった。世紀王も余計な事を……やはり、今日中に片づける事は正しかったようだ」

男の独り言の意味は理解できないが、このままでは殺される。手に持ったナイフに力を込めるが、胸を踏みつけられてしまっは動きようがない。息を切らす志貴を見下ろす男は今度こそ両手で鎌を持ち、振り上げる。

男の攻撃を警戒していたアルクエイドとシエルが急ぎ接近するが、もはや手遅れ。

振り下ろされた鎌が志貴の首を胴体から切り離そうと迫る最中、緑色の光球が男を噴き飛ばした。

「まさか……生きていたとはな」

吹き飛ばされながらも着地した男の視線の先に、志貴達も思わず振り返った。

砂利を踏みつける足音と共に現れたその男は、全身血だらけである

にも関わらず、隙一つ見せない佇まいで志貴の前に現れた。

「つ、月影さん……」

胸を押さえて信彦の名を呼ぶ志貴。

彼の纏うコートや衣服が血だらけであり、無数の傷口が全身に走っている。

そんな状態でも、彼の眼は敵への怒りに満ちていた。

思わずゾクリと寒気を感じてしまう彼の雰囲気は飲まれてしまう志貴に、信彦は告げる。

「下がっている志貴……交代だ」

第106話

106

月影信彦の登場に遠野志貴は息を飲む。いや、志貴だけでなくアルクエイド・ブリュンスタッドもシエルも。彼がこの公園に現れることには特段驚きはない。志貴達が反応したのは、信彦の状態だ。

普段から纏っている黒を統一とした服装：特に黒いコートがあちこちと破け、よく見れば血に染まっている。血の跡は衣服だけに留まらず、信彦の手首、そして左頬は赤黒く、皮膚が丸々と剥がされたかのような損傷だ。

今すぐにも治療をしなければならぬ程に痛々しい姿だと言うのに、信彦はまるで痛がる様子を見せない。

それどころか今の彼は変身せずとも敵を射殺す程の殺気を放っている。彼が放つ殺気に圧倒されないのは、姉であった山瀬舞子の無残な姿にただ泣くことしか出来ない山瀬明美と、巨大な鎌を肩に担ぐ仮面の男だけだった。

「さて、なぜお前は動けるのか。お前はワタシがこのハルペーで全身に傷を負わせたはず。動けるはずが…」
「ハルペー…まさか、不死殺しのツ!？」

男の声に反応したシエルは驚きのあまりに声をあげてしまい、混沌の後継者となろうとする山瀬舞子がなぜ傷をいやす事が出来なかったのか納得する。確かにかのペルセウスがゴルゴンの怪物を倒した鎌ならば自然以外の治癒を妨げてしまうだろう。

しかし、それではなぜ全身を切り刻まれたという信彦が立っているのか？

シエルの視線が信彦の背中へと向けられた時、先ほど仮面の男を吹き飛ばした緑色の光球が信彦の頭上へと戻り、さらに3色の光へと分裂。

「あれは…?」

やがて3つの光は信彦の前に降り立ち、四足の獣…狼へと姿を変えた。それぞれ青、赤、紫色の毛色を持つ狼たちは犬歯をむき出しにし、信彦が敵対する男に対して今にも跳びかかろうと喉を唸らせる。そして、みれば3匹とも美しい毛並みとは裏腹に赤黒く染まった口元をみて、男は合点がいく。

なぜ、この場に信彦が現れる事ができたのかを。

「なるほど。随分と乱暴な手段を取るのだな」

「……………」

1人納得する様子の男の発言に、志貴達は息を飲む。特に志貴は信彦の取った行動に思わず吐き気すら催してしまった。

「お前、その狼どもにワタシの付けた傷を喰い千切ぎらせ、傷そのものをなくしたな？」

本来ならば一度傷ついた傷は塞がらず、止血すらできずに全身から血を流し死ぬはずであった。だが、信彦は体内に宿る天・地・海の力を司る狼たちを顕現させ、男の言うように自身の身体に付いた傷を食い千切るように命令した。無論、反対の意思を見せる狼たちであったが信彦の再三に渡る怒号により、主人の血を味わう事になってしまった。

ハルペーによってつけられた傷は薄皮一枚などに留まらず血管や神経、下手をすれば骨にまで達するものもあった。

命令に従いつつも自分を思い、反対した狼たちに躊躇させぬよう自身の血肉が飛び散る中、悲鳴一つ上げない信彦。そして狼が噛み切り、ハルペーによる傷がなくなった一部をキングストーンの力を注ぎ、再生を開始する。だが、損傷した肉体組織の増殖させ、一から作り直す事は安易でなく、再生する間も出血と痛みが全身を走り信彦は

滝のような汗を流す。

それでも、信彦は耐え続けた。

こんな事で、最期を迎える訳にはいかないと。そしてこのような目に合わせた者に、相応の報復をしなければならぬと。

「なんて無茶を…では、あの傷は…」

かつて吸血鬼ロアであったシエルは頭や心臓を射抜かれようが死ぬことのない身体であったが、当然痛みはある。信彦の身体を見れば確かに動けるようになってはいるようだが、頬を見れば完全に再生しきれておらず、筋肉を覆う皮膚すらまだ満足に生成されないため血液が滴り落ちている。

それは、手足。または胴体も同じなのだろう。

やせ我慢などでは済まされない想像を絶するような痛みを耐え、あの男は…月影信彦は立っているのだから。

「敵ながら見上げたものだ。そこまでして立ち上がり、ワタシの前に現れるなど」

「……………」

「その熱意を評して一度だけチャンスを与える」

「これからそこにいる少年と少女を殺すのだが、邪魔しなければこの場は見逃してやろう」

「あ、あいつ何を言って…」

「落ち着けアルクエイド…」

男の言う少年と少女…先ほど舞子に泣きつく明美を殺そうとしたところから少女とは間違いなく明美を指しているのだろう。だが、この場に少年と呼ぶ対象は志貴1人。疑問よりも先に志貴の命を狙うという宣言に怒りを覚えるアルクエイドだが、敵がなぜ自分を狙うのか知る為に今にも飛び掛からんとする彼女を抑えた。

「…なぜ、その娘と志貴を殺す必要がある？」

「簡単な事だ。この街に哀しみのない平和で静かな街とするためだよ」

男の言う事に、まるで理解が追いつかない。

哀しみのない？

平和？静か？

男の行動からはまるで関連が見えない言葉に志貴たちが啞然とする中、信彦はただ黙って男の言葉を聞き続けた。

「この街へと辿り着いて一月ほど経つが…とても静かだ。人々は笑い、平和を謳歌している。だが、その裏でそんな平和を打ち壊そうとする輩が影を忍ばせていた」

「そう。魔術協会の者共だ」

男は語る。

この街に侵入した魔術師は4人。うち1人は名だたる魔術師の家で6代目となる若者であるのだが飛びぬけた才能があった訳でもなく大きな成果を出せぬまま時計塔の卒業試験が目前に迫っていた。

そこで目をつけたのが、極東の国で起きた事件だった。

以前、世界中にその名を轟かせた暗黒結社ゴルゴムの出自が日本であると聞いた魔術師は、どこかに利用できる何かが残っていないかと調査を開始した。

だがゴルゴムが滅びた後に痕跡はなく、秘密基地といった場所は全て特殊部隊によって抑えられ、何一つ掴めない状況が続く。何か、何か見つからないのかと魔術師が探し回る中、買収した聖堂教会の隠者からある死徒関連の方向書を目にする。

ただの人間が、2体の死徒を殺した。

それもうち1体が二十七祖であるネロ・カオスを滅ぼしたというのだから驚きだ。

魔術師は志貴の経歴を徹底的に調べた上で金で雇ったフリーランスの魔術師を従え、誘拐を計画。彼の眼球『直視の魔眼』を研究成果として発表し、あわよくば魔眼を取り入れれば自分を七光りと笑う連中の鼻を明かすことが出来る…

全ては自分の思うがままであると高笑いする魔術師であったが、それが人生最後の豪笑であった。

「では、魔術師4人を殺害したのは…!」

「ワタシで間違いないよ代行者。この平和な街を汚そうとする輩を片づけた。ただそれだけだ」

シエルの反応からして、彼女が信彦へ報告した身元不明の殺人事件に関しては、これが答えだったのだろう。男の説明では、志貴を狙った魔術師はどのような経緯かは知らないが聖堂協会との癒着があった。それを表沙汰に出来なかった為、信彦へはつきりとした説明はしなかったのだろう。

これで殺人の犯人ははつきりしたが、未だ分からないのは、なぜ志貴を殺さなければならぬという事だ。

「…お前は放つ殺気とは不似合いな程他人を気遣っているようだな」

仮面から差す視線が信彦の僅かな表情の動きを捉えたのか、信彦の疑問に応えるべく語り出した。

常人では、まるで理解できない自らの主張を。

「そもそも、魔術師共がこの街に巢食ったのは、その少年がいたからだ。ならば、二度と同じ事が起きぬよう原因を絶つ事は当然ではないか？」

同意を求めるように片腕を信彦へと向ける男の発言に、空気が凍る。

何一つ理解できないシエルは、膝をついたまま青い顔となった志貴に視線を向けた。男の言い分は、殺されてた魔術師たちがやってきたのは、志貴がこの街で暮らしているからだとなんの根拠もない能書きに思わず反論する。

「そんな事ありません！遠野くんにそんな責任は——」

「ああ、そもそも吸血鬼を見つけ出し、少年が力を発揮させるような機会がこなければ良かったのだよ。そうだろう、代行者……」

「なっ……」

「それに、その少年が吸血鬼である可能性が浮かんでいた時点で殺しておけば、この街は何者にも侵されず、その混沌すら近づくことはなかっただろう……」

「その混沌が起こした事件、知らないとは言わせんぞ？あの未だに明かりの灯らないホテルにた関係のない人間が、何人犠牲となった？」

「それはっ……！」

砂利を握りしめる志貴の顔はさらに暗いものへと変わってしまった。男の言う一言一言が心臓を鋭い刃物で少しずつ、少しずつ削り取っていくような感覚であった。

男へ必死に反論するシエルの声も自分を揺さぶるアルクエイドの

声も志貴には届かない。

（先生が言っていた…俺の眼は、何かを引き付けてしまう危ういものだって。だったら、本当に…）

自身の出生やロアへと変わり果ててしまった遠野四季に関しては、もう自分の中で決着が着いた事だった。だが、男の口から語られる魔術師や一般人に関しては、何も言えない。もし、男の言うように自分が原因でこれからも何者かが街へと侵入してしまった場合、自分の家族や関係者が巻き込まれる危険性だってある。

「そう、だからこそ死んでもらうしかないのだよ。この街の誰もが静かに、平和に暮らすように。ワタシに光明を与えてくれた者の為にも…」

ズブズブと精神が底の無い沼へと沈みかけていく志貴の思考だったが、またも信彦によって乱暴に沼から吊り上げられてしまうのだった。

「高説を説いているようだが、俺が聞いたのは志貴を殺す理由だけだ。貴様の自己満足な殺戮の理由など微塵も興味はない」

バツサリと、男の述べた思考を切り払った信彦に一同は眼を丸くする。

「…ワタシの話聞いていなかったのか？原因は彼に——」

「ならば黙って魔術師どもに志貴を拉致させておけばいいだけの話だ。貴様が殺す必要などなく、問題は解決する」

シエルは確かにと、不謹慎ではあるが信彦の言う事の方がはるかに効率がいい。シエルにとつては絶対に認められない事ではなるが、魔術師が実験の為に異能の人間を連れ去る事で街に宿るそのものを無くすという事はそう珍しいケースではない。

殺人という『事件』すら起きない事が一番世間を欺く事ができるのだ。

「そして、貴様は言ったな。そこにいる混沌の家族に哀しみを負わせえない為に、この場で殺すと。なら志貴が死んだ場合に嘆き、悲しみ、殺した貴様に恨みを持つ者が現れた場合はどうするつもりだ」
「殺すさ」

信彦の質問に何の迷いもなく、男は言い切った。その声には、何の感情も込められていない。

「その少年には確か妹と使用人がいたな。ならば彼を殺した後に悲しまぬようすぐに後を追わせなければならい。いや、それだけでなく遠縁の者や学友も合わせて…」

「なに、言っただアイツは…」

先ほどとは別の意味で凍り付く志貴は、男の言動への理解が追い付かない。

誰かの死に人間は様々な感情を表に表す。涙を流し悲しむ者も、殺人であれば怒り狂う者だっている。あの男は、そのような感情すら認めずに殺すのだと言い切った。

1人が死んで4人悲しんでいたのなら4人を殺し、3人怒りを抱くのであれば3人を殺す。

男はこの街に男の言う『平和』が訪れるまで、殺し続ける。今もブツブツと葬る対象を次々と増やし続ける中、月影信彦は遮る為に言葉を放った。

「もう貴様の下らない殺戮の言い分は聞き飽きた。それに、御大層な大儀を抱えているようで私念で殺戮を起こす者が放つ言葉に、何の重みも説得力もない」

「…なんだと？」

僅かながら、男の言葉に感情が込められていると志貴は読み取れた。

これまでどこまでも冷徹に、淡々と自分やその関係者を殺し、街に平穏を齎すと言った男に、初めて何かの感情が籠っていたと感じた。仮面の下に隠された素顔に浮かんでいるのは：『怒り』だろう。

「わかったような口を聞かない方が身のためだぞ？ワタシが平和を實現した暁には、もう一人と合わせて殺してやったのにな…」

静かに告げ、男は肩に担いでいた鎌を下ろし、両手で柄を強く握りしめる。どうやら問答の時間はこれまでのようだ。

口元を釣り上げた信彦は自身の体内に狼たちを戻し、纏っていたロボロの黒いコートへと手を伸ばす。

「確か、マキュリアスと名乗っていたな。悪いが、貴様のような小悪党に殺されるほど、俺は落ちぶれていない」

小悪党。

自身に致命傷とも言える傷を負わせ、治癒が不可能である恐るべき武器を手にした相手に対し、信彦はそう啖呵を切ってコートを脱ぎ捨

てた。

五指を広げた左手を前方に突き出し、右腕を腰に添えた構えから大きく両腕を左側へと振るう。

重心を左半身に置き、振るった左拳を脇に添え、右拳を左頬の前へと移動。

ギチギチと骨が軋む音が響くほどまでに握る力を開放するかのようには右腕を右下へ向け空を切り、瞬時に両手を左側に向けて突き出す。

「変——」

両手で扇を描くように左側から右側へと旋回し——

「——身ッ!!!」

右拳を腰に添え、左手で再度空を切るように素早く左上へと突き出した。

信彦の腹部にキングストーンを宿した漆黒のベルト『シャドーチャージャー』が出現。

シャドーチャージャーから漏れる光が彼をバツタ怪人・そして強化皮膚リプラス・フォースで包んだ戦士へと変化させる。

だがそれだけでは終わらない。

さらに輝きを増したシャドーチャージャーから銀と黒の装甲が出現し、信彦の全身を包んでいく。

脚部と腕部に装着された黒く鋭い爪。

銀色の胸に走る世紀王の証であるエンブレム

緑色に輝く複眼――

「それが、お前の……………」

仮面の下で信彦の腹部で輝くキングストーンを眩く、そして黒い感情を湧きたてる仮面の男…マキュリアスへ信彦は名乗った。

「我が名は、シャドームーン」

黒と銀の装甲を纏った腕をゆつくりと上げ、マキュリアスを指差す。

「貴様を断罪する者だ」

第107話

「ワタシを断罪する、か。満身創痍の姿であるというのにかかわらず、既に勝ったつもりでいるとは随分とめでたい思考の持ち主のようだな」

「好きに捉えればいい。結果など：直ぐに分かる」

仮面の下でほくそ笑むマキュリアスの挑発など意に返さず、シャドームーン：秋月信彦は掌の上に緑色の光球を生み出す。キングストーンの力を凝縮した輝きを放つ光球の出現に身構えるマキュリアスであったが、信彦の手は敵ではなく、背後へと向けられる。

信彦が向けた手の方向を見た志貴達は思わず顔を強張った。何故、敵であるマキュリアスではなく『彼女』へ攻撃を向けようとするのか。

「月影さんッ!? まっ——」

志貴が制止しようとして口を開くよりも早く、光球は放たれた。

信彦の攻撃がどれほどの威力を内包しているか嫌という程理解している志貴の脳裏に浮かぶ最悪なイメージ。光球が迫る先で倒れる混沌の後継者となってしまった山瀬舞子と妹である明美が光球に飲み込まれ、肉体を残さず全てが蒸発してしまう光景が。

「え——?」

短く声を上げた明美は、ようやく涙を止めて自分の周囲で起きた状況に目を向ける。

まずは突然目を瞑る程の閃光が自分に当てられた直後、姉から流れ続ける血がピタリと止まる。いや、よくみれば緑色の結晶が姉の傷口に入り込み、今以上流血を起こさぬよう圧迫しているのだろう。

そして登り始めた日の光とは別の、優しく明美達を包み込む黄緑色の輝き。それは、信彦の手から放たれた光球が巨大化し、舞子と明美

を外敵からの攻撃を守る球体の結界であった。

志貴は相変わらぬ説明不足である信彦に恨み言の一つもいなくなるが、今は最善の手でもある。傍から見れば巨大なボールの中でオロオロとしている口も聞いた事もない同級生の身の安全はこれで確保できた。

あとは、信彦が決着を付けるのみ。

「…随分と優しい事だな。かつては悪逆の限りを尽くしたゴルゴムの世紀王が、死にかけの化け物とその家族を守る為に力を使うなど」

「貴様の目的は志貴以外にもあの者達でもあったからな。嫌がらせでも思っておけ」

「フツ、ならば貴様を始末した後には殺すでしょう」

「随分と余裕があるようだな」

「当然さ。なぜなら…」

腰に巻いていた布を羽織ると、マキュリアスの姿が霞む。

「貴様は、ワタシを捉えることなく息絶えるのだからな」

既に闇夜でなく日光に公園全体が照らされていく中、マキュリアスの姿は完全に消失し、立っていた位置には影すら浮かばない。マキュリアスの姿を見失った信彦の背中に、ハンマーで殴りつけたような衝撃が走る。

「ぐッー」

前のめりになった信彦の胸部に走る、さらに強い攻撃。どうやらマキュリアスは姿を消した直後に高速で移動し、信彦へ次々と攻撃を繰り出しているようだ。

『んだよあのやろー！チートっぽい事しやがって!!どうにか探れねえのアレ?』

「無駄だ…奴が纏ったマントは奴の姿だけでなく気配そのものを遮断するようだ」

『かぁー、なにその宝具レベルの代物!?あいつサーヴァントかなにか!?!』

「似たようなものかもしれんな…」

信彦の精神の底で手立てがない事に苛立ち、声を上げるアンリマユは大げさにいいながらもマキュリアスと初めて対峙した際、なぜあれほど信彦が警戒した上に不意打ちをかけようとしたのか納得できた。

数時間前、突如として自分達の前に通りすがりの一般人を装って現れたマキュリアスは信彦の隣を追い越した際、なんの気配も発していなかった。

既にあの時、マントの力を利用して己の気配を遮断し、信彦に不信感を与える事が目的であったとすれば、敵は相当性格が悪いと分析するアンリマユは、背後で膝を付き、祈るようにキングストーンの力を信彦へと送り続けるもう一人の同居人へ目を向けた。

『碧月ちゃんよ、あんま無理なさんなよ』

『大丈夫…私よりの事よりも信彦の応援をしてあげて』

額の汗を拭わず、笑顔でそう答える碧月は信彦の身体に供給されるキングストーンの出力を強める。マキュリアスによつて癒えない傷を付けられた信彦は傷ついた肉体を抉り取るという強引な手段で傷そのものを排除したが、欠損した肉体部分の再生させながらでの戦闘は大きな負担を背負う。

キングストーンの意味である碧月はもちろん、そのような状態で戦う信彦も同様だ。

だが、アンリマユに出来る事はなにもない。

主人格である信彦と精神が入れ替わり、自分が得意とする戦法で相手の意表を突く事はできるだろうが、姿どころか気配すら消した相手

にとっては悪手でしかない。それに切り札である自身の宝具は今の状態の信彦に耐えられるはずがない。

碧月の言う通り、ただ応援する事しかできないのか…？

「らしくもなく拳を強く握りしめるアンリマユの精神に、敵の執拗な攻撃に耐え続ける信彦の声が届く。」

「何を肩を落としているか分からんが、いつでも代わられるように準備をしておけ」

『は…へ？』

「間拔けな声を出すな。奴の攻撃を見切れるのは遺憾ながら貴様しかない」

信彦の言った通り、シャドームーンの基本スペックを引き出せるのは信彦だが、反応速度や俊敏性に関してはアンリマユの方が秀でている。だが、いくら相手より素早く動けようがその敵が見えないのだ。

『いやいやいや。珍しくお褒め頂き恐悦至極ですけど？そもそも相手の攻撃見切れなきや意味がないんですかね？』

「だったらいらん心配だ…既に手は考えてある。あとは『餌』をぶら下げれば詰みだ。貴様がしくじらなければな」

『うわーおこの短時間でそこまで…んじやお聞かせ願いますかね…貴方様の策を』

幾度敵の攻撃を受けたのだろう。朝日に反射する銀色の装甲はひび割れていないものの、叩き込まれた攻撃の後がくつきりと残り、特に肩の円形であったプロテクターは完全にひしゃげてしまった。

一方的な攻撃をただ膝について傍観するしかなかった志貴は自身の顔へと手を伸ばすが、それを白い手が制する。

志貴の行動を見抜いたアルクエイドは首を横に振り、紅い双眸を向けると静かに告げた。

「だめよ志貴。いくらアイツに力を鎮めて貰ったと言っても眼の負担は大きい。さつきだって、無理して相手の『死』を視ようとしたでしよう?」

「けど、あのままじゃ月影さんが…!」

しかし、アルクエイドの言う事も事実だ。志貴は相手の『死』を読み取ってナイフを走らせたが、悉く攻撃を捌かれ、回避されてしまった。いくら敵を一撃で葬る眼で相手を見る事が出来ても、相手に届かなければ意味がない。

現に負傷しているとは言えあの信彦すら手も足も出せない状態だ。

「それでも、俺が視れば敵の位置ぐらい…!」

「それこそ止めておきなさい。もし、少しでも位置を知らせるような事をすればアイツはノブヒコじゃなくて貴方を殺すわよ」

冷たく言い放つアルクエイドの表情は険しいものだった。志貴の眼であれば姿の視えない敵であろうが、相手の『死』の線や点を捉えることで位置を把握する事ができる。そんな自分が不利になるような存在を、あのマキキュリアスが放っておくはずがない。

志貴が口にした瞬間、あの透明の鎌は志貴の首を身体から切り離してしまおうだろう。

志貴はただ、見ていることしか出来ないのかと公園の砂利を見つめると、彼の目線に合わせて膝を付いたシエルが優しく肩へと触れる。

「心配なのは分かりますが、彼がこの程度で敗れるわけがない。遠野君も、そう思いますよね?」

「シエル先輩…!」

「え、なにどうしたの? アイツの味方するなんて。好きになった?」

「何を藪から棒に途方もない勘違いしやがりますかこのアーパー吸血鬼はッ!?!」

頭上でギャーギャー口喧嘩を始めた2人のおかげで僅かながら落ち着きを取り戻した志貴であるが、不安は拭えない。信彦が駆け付ける前にマキュリアスと戦った志貴は相手の『線』と『点』を捉えようと脳への負担を顧みず魔眼の力を強めていた。その時に線や点とは異なる『何か』を視た。

ただ、志貴が驚いたのは視えた事ではない。なぜ、敵が彼と同じ『モノ』を内包していたかという事だ。

(月影さん…)

「まだ耐えるか。随分と頑丈のようだな」

マキュリアスの声だけが響く公園の中央に佇む信彦の装甲に赤い液体が染み付き始めた。銀色の装甲をいくら叩いても無意味と考えたマキュリアスは装甲で覆われていない関節部分に狙いを定める。だが、強化皮膚であるリプラスフォースも切り裂くのは容易ではない。

しかしマキュリアスは姿が相手に視えないという大きなアドバンテージから反撃を受けることなく一方的な攻撃を継続した結果、信彦に塞がる事のない傷を切り刻んでいった。

「さあ、次はどうする？もう立てぬよう足の健を切断してやろうか…」

「確かに、厄介な鎌だなそれは」

「ああ、ワタシも驚いたよ。これほどワタシの理想に近い武器はない。この肉体の基となった人物には感謝せねばならぬな」

「ついでに謝罪の方法も考えておけ。このあと、自慢の鎌は粉々に砕け散るのだからな」

「…なに？」

マキュリアスは信彦の放った言葉に思わずそう呟いてしまうが、ただの強がりだと一笑に伏す前に、信彦が続いて述べられた言葉と仕草

に、ついに閉口してしまう。

「1発だ」

腕を前方へと伸ばし、人差し指を天へと向ける。

「1発で貴様の鎌を砕いてやる」

正気とは思えない信彦の発言にマキュリアスは笑えばいいのか、憐れみを向ければいいのか判断に悩んでしまう。しかし、こうして自身に抗い続ける者へ向ける情けとして、マキュリアスは現実を突きつける。どのような手段を講じようが、勝ち目などないという現実を。

「何を言い出すかと思えば…強がりも程ほどにしておくがいい。それに…発言は正確にしなければならぬだろう？」

「君は、あと1発しか攻撃できないのだと」

ピクリと、信彦の立てた指が僅かに揺れたことをマキュリアスは見逃さない。

信彦へ初めて接触してからいままでマキュリアスは多くのダメージを与えてきた。ハルペーの鎌による癒えない無数の傷を負った信彦は自ら傷口を抉るといふ暴挙で傷を強引に塞いだが、その為にキングストーンを力を出し尽くし、シャドームーンへの変身。

おまけに死にぞこないである混沌の後継者の傷を塞ぐために力を注いでいる。

そんな状態で立っているのがやっとである信彦に残された力は、あと僅か。マキュリアスの言う通り、あと1回の攻撃が限度なのだろう。

「訂正は必要か？」

「見事な洞察力といったところか」

「…なぜ、それも冷静でいられる？圧倒的不利なのは、お前なのだぞ？」

「こちらとしては事実を認めたまでだ」

腕を下げた信彦はマキュリアスの分析を否定することなく、大したものだと言いたげに肯定する。信彦の足元には絶えず流れ続ける血によつて、赤い水たまりが生まれ始めていた。

だが、己の血が流れ続けようが、攻撃ができるのはあと1度が限界であると知られながらも毅然とした態度を崩さない。

不利な状況に追い込みながらも、悲鳴一つ上げない信彦へ次第に警戒心を強め始めたマキュリアスはもう言葉は一つ上げずに信彦の背後へと接近し、止めをさそうとするが、再び信彦の言葉に身体の動きが封じられてしまった。

「では、こちらの番だ。決定的な内容については未だ不明だが、貴様の分析結果を教えてやる」

「ずばり…貴様が目をつけた連中を殺戮する動機だ」

マキュリアスの仮面の下で、どのような表情を浮かべていたかなど、本人すら分からなかい。だが、明らかに信彦の告げられた言葉によつて、僅かながら崩れた。

「…面白い。聞いてやろうではないか」

一抹の不安に駆られながらも、マキュリアスは信彦の言葉を聞き入

る。遙か後方に待機している志貴たちや、落ち着いた直美も同様に、耳を傾ける。

「…そもそも貴様がこの街を守る為に殺戮という手段を講じていた時点で大きな疑問が残る。静かで、穏やかな街の平穏を崩そうとしている者を殺すと貴様は言った。だが、貴様が殺したのは魔術師だけであり、続いての対象は志貴だ」

「その何が間違いだというのだ？」

「対象の選別に間違っていない。だが、街の平穏を脅かす存在がそう言った者達に限定されている事がそもそもルール違反となっている。言っている意味が分かるか…？」

「……………」

『街の平和を脅かす』という定義は何も人を襲う化け物や魔術師だけではない。この街に住み着いている人間の中にも、それ相応の悪意を持った者共も潜んでいる。そんな連中も表立っていないだけで『平和を脅かしている』

信彦がこの街へ現れて一カ月。その一カ月の間で信彦は当初街に潜む吸血鬼の調査をする中で街の様々な『闇』を視た。

人を陥れて笑う者。

無抵抗の人間を痛めつけ快楽する者。

そして、誰にも察知されることなく殺人を起こす者…

だが、吸血鬼騒ぎが起きてそのような悪質な事件が鳴りを潜めている期間に起きた事件は、マキュリアスが起こした魔術師の殺人だけ。それまで、マキュリアスが起こしたであろう事件は何一つ信彦とシエルの耳に届いていない。

「つまりだ。お前はお前が『殺したい』と考えている対象しか狙っていないことになる。この街の平穏を守ると、大層な事を言いながら」
「何を根拠に…そのような出鱈目を口走る」

語気が強まるマキュリアスに構わず、信彦は淡々と述べていく。そう、このままマキュリアスを挑発する為に。

「お前自身で言っていたらどうか？」

『そう、だからこそ死んでもらうしかないのだよ。この街の誰もが静かに、平和に暮らすように。ワタシに光明を与えてくれた者の為に……』

「それまで淡々としか口走らなかつたお前がこの時だけ強く言葉にした時ピンときた。『ああ、コイツは誰かに強く影響を受け、さらにその誰かは何者かによって殺された』とな」

「っ……………」

「そして、その殺した連中というのが今回被害者となつた魔術師か、似たような事をした外道共といったところだろうか」

マキュリアスの脳裏に走るのは、生まれつき光を失つてしまった少年の無垢な願い。そして、少年の命を自己満足な研究などの為にすり潰した怪魔界の研究者共の口元を釣り上げた醜い笑い。

その研究者たちと同じ笑いを浮かべた魔術師を発見したマキュリアスは、正気を保てなかつた。そして気が付いた時には……

「貴様は殺した。魔術師どもの狙いを聞き、貴様の触れられたくない部分と重なつた結果、殺したんだ」

「なぜ、貴様…そこまで…」

「不自然過ぎるんだよ。貴様の殺戮は。そして、その『八つ当たり』を正当化させる為に、志貴を殺そうとし、その混沌になりかけにまで手をかけた」

「違う…ワタシはっ…！」

「魔術師共を殺した後になって気が付いたんだろう？これは自身が…いや、貴様の知る者の望むやり方ではない。その為に、軌道修正が必要だと」

信彦の考察は間違えではなかった。

美咲町に辿り着く以前も、冬木の港町へと降り立ったマキュリアスは拳銃密輸を行う暴力団を発見。その時に聞こえた残酷な会話と邪悪な笑みに我を失い、皆殺しにした。その場を同じ星騎士であるジュピトルスに発見されるが嬉々としてその亡骸を再利用すると申し出た事で後処理を押し付けることが出来た。

（違う。これは『彼』が望む平穏な世界とは相反するものだ。そんな事をこのワタシが行うはずが、行うはずが…）

そして、彼はこの解答に行きつく。

（そうだ…：このような事が起きてしまう原因を潰してしまえばいい。それだけはない。関連する全てを殺してしまえば…彼の望む世界が…）

マキュリアスが本来望む結果と、その手段がこの時に入れ替わってしまっていた。

自身ですら気が付かなかった顛末を、信彦は容赦なく告げた。

「そうだ。貴様は自分勝手な正義感を振りかざした上、正当化させるために魔術師共に八つ当たりし、志貴達を殺す標的とした」

「黙れい…」

「もう貴様自身気が付いていたのだろう？これは貴様の心酔する存在

を守れなかった負い目や償いではなく、ただ脳裏に浮かぶ最悪な記憶を打ち消す為に行った貴様の憂さ晴らしであると――…」

「黙れえツ!!」

瞬間、信彦の身体がくの字になって吹き飛んだ。血をまき散らし、砂利で砂ぼこりを立てながらも信彦は体勢を立て直し、油断なく構える。

「許さん…ワタシの行いをそのような下劣な文言で侮辱するなど、決して許さんツ!!」

「ふん…無感情かと思えば随分と分かりやすい表情をするようになったな」

「御託はもういい…確実に止めをさしてくれろ!」

再びその場から完全に気配が消える。先ほどと同じように信彦の周りでは何一つ、気配どころか物音すら聞こえない。だが…

「既に、条件はそろっている」

そう言って、右足の爪先を軽く地面へと打ち付けた。

(もう生かしては返さん。背後から奴の首を跳ね飛ばしてくれろ!)

棒立ちである信彦の背後へと移動したマキュリアスは握りしめた鎌を頭上へと振り上げる。この一撃で自分の心をかき乱した存在は死ぬ。力任せに振り下ろされた鎌は甲高い音を立てる。

正面を向いたままである信彦が手にした歪な短剣に受け止められるという形で。

「いよお、やっと捕まえたぜ」

「なっ……！」

マキュリアスの姿は未だ透明になれるマントを用いているので見えるはずがない。見えるはずがないのに、信彦は鎌を受け止めていた。

ダラリとだらしなく首を後ろへ向けた信彦の緑色であつたはずの複眼は漆黒に染まり、血液によって目立たなかったが銀色の装甲の上には文字にも魔物の絵にも見えるような入れ墨が現れていた。

「まったくキングストーンの力ってホントなんでもありだねえ。まさかソナーみてえに使うなんてよ」

「ソナー……だど？」

マキュリアスによって吹き飛ばされた直後、信彦はキングストーンのを右足へと集中。地面へ接触させ自身を中心にエネルギーを波紋状にして開放した。

そして自身へ接近する存在を例え姿が透明であろうと、気配を完全に遮断していようが、敵が確かに存在するものであるのなら探知が出来る。

自分へとあと一步という距離までマキュリアスが迫った瞬間、信彦は意識をアンリマユへと交代し、対処を任せたのだ。

「んでもって後は大まかなタイミング。こればかりは俺の勘だったんですけど？まあ上手くいって何よりって事だ」

「き、様……一体……!？」

「あーその辺は自分で調べてくれる？何せ俺は今からさ」

空いていた左拳に、眩しい緑色の光が宿る。

「この物騒な刃物をぶっ叩かなきゃならねえからなあッ!!」

アンリマユの叫びと共に繰り出された拳が、透明の刃へとぶち当たる。

先にマキュリアスの鎌をアンリマユが受け止めた際に生じた異常の高音が、鎌の破片と共に舞い散った。

第108話

不死身殺しの鎌ハルペー。

かつて神話の時代、英雄ペルセウスがゴルゴンの怪物へ挑む際にオリポスの神ヘルメスより与えられた武器であり、メドゥーサの首を斬り落としたとされる鎌剣。

「屈折延命」という不死系の特殊能力を無効化する神性スキルを有し、この剣でつけられた傷は自然ならざる回復・復元ができなくなる。

ペルセウスの肉体を基として地球で復活を遂げたマキュリアスにとって、便利な道具程度の認識にしかすぎなかった。癒えない傷を負わせれば、自分を阻む者は再起不能となり、誰であろうと邪魔となる者がいなくなる。

もし、この武器を星騎士の時に所持していれば自分に光明を与えてくれた少年を惨殺した研究者を癒えぬ痛み付け、少年が受けた苦痛を数百倍味合わせて後に殺したかったと考えるマキュリアスの胸に、瞬きほどの痛みが走る。

それはマキュリアスの肉体として顕現した英雄ペルセウスの傷心による痛み、だったのかもしれない。

自分の行いは確かに、過去に英雄と称えられた人物からすれば糾弾される事だろう。しかし、『座』から動けぬ者などに自分は止められない。世紀王へ告げたように、平穩を脅かす者、その原因となる者たちをこのハルペーで刻み殺さなければならぬのだから。

だが、マキュリアスの使命はそのハルペーと共に砕け散った。

鎌の破片が朝日に反射して宙を舞う中、マキュリアスは咄嗟に動くことが出来なかった。

神器とされるハルペーが砕けた事に関しては驚愕する事ではない。先にマキュリアスが考えていた通り、いかに特殊な能力があるのが道具は道具。使い続ければ摩耗し、武器の打ち合いで折れる事など十分に予測できる範囲だ。

動けなくなるほどに思考が鈍ったのは、その原因。

世紀王シャドームーンには、鎌を砕ける程の余力は残っていないはずだった。残っていないはずだと言うのに、シャドームーンは宣言通りに一撃でハルペーを粉碎。完全に油断を…否、一度傷付けた程度で侮っていたと思い知ってしまう。

そして、攻撃も終わりではなかった。

「そして、もう一丁…」

「なに…」

刃のない柄を握るマキュリアスの耳に届くボツリとした小さな眩き。視ればハルペーを砕いた拳とは逆の手。ハルペーを受け止める為手にしていた歪な短剣はどうに手放し、緑色の輝きを宿した拳を姿が視えないにも関わらずマキュリアスの顔面へと打ち出していた。

もう打ち出せないはずの攻撃へ一切反応できないマキュリアスの脳裏に、シャドームーンの発した言葉が蘇る。

『一発だ』

『一発で貴様の鎌を砕いてやる』

あの状況の中で自らの攻撃回数を口にするなど余程の自信過剰か、単なる強がりしかないと考えたマキュリアスは、優位である事も鑑みて後者であると決めて付けた。だが、それは単なる自尊心でもはつたりでもなかつた。

ボロボロの状態の中敢えて攻撃回数を口にする事で逆にその回数しか攻撃できないと『思わせる』ことが、彼の…彼等の作戦。武器が破壊され混乱している相手をさらに混乱させるなど、この者は何処まで先を読んで行動していたのだろうか？

その作戦に乗せられ、単なる強がりと決めつけたマキュリアスは、

自身でも『あと1発しか攻撃できない』と思い込んでしまったのだ。もうあの時から彼等の策に溺れていたのだと理解するには、もはや遅すぎていた。

「オラよおッ！」

「ガアッ!？」

雄叫びと共にマキュリアスの顔面へと叩き付けられるシャドームーンの拳。鈍い音が公園内に響いた直後、地面に2本の線が引きずられる跡とともに土埃が発生するという奇妙な現象が起こるが、それは信彦の攻撃を受けながらも耐えきった故に起きたのだと志貴は理解する。

その証拠に、空中に人の額であろう位置から突然と赤い染みが広がり、地面に向けて滴り落ちている。あれではもう、姿を消す透明のマントを身に付けようが意味がないだろう。

「どうだい気分は？血が出た事でわりと冷静になったりしてる？」

殴った手をヒラヒラさせてマキュリアスがいるであろう位置に向かい声を向けるシャドームーン：現在主人格となっているアンリマユは身体の様子を確かめると、内面に潜むキングストーンの力を管理する者へと確認を取る。

「どうよ碧月ちゃん、野郎に受けた傷は塞がってるのかい？」

『…ええ。あの鎌が壊れた事で受けた傷への効果も消えたわ…あと数秒で傷は塞いで見せるから、頑張ってアンリ！』

「そいつは結構！おおい、そのポニテの可愛い子ちゃん！お姉さんの傷はどうだい？」

「あ、えつと…」

信彦の作った結界の中で茫然と事態を見守るしかなかった山瀬明

美は突然声を駆けられ、言われるがままに横たわっていた姉、舞子の様子を見る。相変わらず呼吸が荒いままではあるが、今でも見慣れる事はできない灰色のみると、マキュリアスによって開けられた風穴は完全に塞がっている。

今まで流れる血液を塞ぎ止めていたキングストーン粒子は出番を持って余し、舞子の周囲を漂っている状態だ。

これをどう答えればいいか判断の付かず、あの銀色の怪人をどう伝えればいいか悩んだ末に明美は両手で頭上に大きく丸を描くジェスチャーで返答する。

「イエスッ！ってことはあちらに力を流さずに済むってことだわなあ信ひー」

『よし、代われ』

「アイアイさー！」

シャドームーン身体から黒い獣の入れ墨が消滅し、漆黒の複眼は鮮やかな緑色へと染まっていく。

「フンッ！」

主人格をアンリマユから月影信彦へと切り替え、山瀬姉妹を囲っていた結界を消失させ、気合と共に腕を振るった瞬間。シャドームーンの力が爆発的に強まった。

信彦は肉体を復元させながら山瀬姉妹を守る結界と、舞子の止血を遠隔操作する中で戦うという本来ならどちらかに集中力を注がなければならぬ行動を選択していたが、その原因となる鎌剣が砕けた今、全力で戦える。

関節から余剰エネルギーが蒸気として吹き出し、左胸のエンブレムが輝きが強い輝きを放つ。

調子を確かめるとうに拳を強く握った信彦は問題なくキングストーン力が体内を循環していると確認し、視線をマキュリアスへと向ける。

血液が染みついて位置が把握されては無意味であると判断し、透明になれるマントを脱いだマキュリアスは未だ額から血を流しており、露わとなった黒い瞳で信彦を見る。

マキュリアスの顔には信彦へ初めて接触した時に見せた偽物の笑顔でも、先ほど見せた激情もない。

まるでアンリマコの拳で砕けた仮面と共に、感情ごと壊れてしまったかのように、無表情だ。

「なるほど……あの者達を守る為に力の大半を使い、さらにその操作も怠らず残った僅かな力でワタシと戦っていたという事か。敵ながら見事と言う他ないようだ」

「……………」

「まさかジュピトルスと同じような見解になるとはな…確かに『お前達』を倒すには相応の力を身に付けなければならぬようだ…」

認めたくないがなと言いつつ切ったマキュリアスの輪郭が段々と薄まっていく。どうやらこの場から撤退するようだ。

「逃げるつもりか？」

「今回はそうさせてもらう。ワタシの使命を全うするには、まずお前という障害を潰す必要があるようだからな」

「…ならば、これだけは答えろ」

今回、偶然にも志貴たちが混沌の残滓との戦いの場に居合わせた信彦だったが本来の目的は別にある。その結果を知り得る為に、マキュリアスをこの場で逃がしたとしても、これはでは聞かなければならなかった。

「貴様はなぜ、俺を…いや、俺にいる存在を目の敵にしていた？」

「なんだ、そのような事か。かつてのワタシの身体を滅ぼした者に恨みの一つを覚えるのは当然の権利だと思うが？」

「何…？」

「彼女の持つ気配と魂は間違いなく同胞であり敵であった者…ワタシやジュピトルス達を倒す為、共に死んだ『月の星騎士』のものだからだ」

衝撃の言葉を残し、マキュリアスは今度こそ姿を完全に消したのであった。

「いやあ！離して！お姉ちゃんが、お姉ちゃんが…」

「落ち着いてください。確かに貴女の姉に見えるかもしれませんが――」

マキュリアスの鎌剣による効果がなくなり、傷が癒えた山瀬舞子は相変わらず立ち上がる様子はない。

戦闘が終了するまで妹の明美が倒れていた舞子の隣で見守り続けていたが、現在はシエルが直美を羽交い締めするような形で離され、代わりに志貴が舞子を見下ろすような形で見つめている。片手に短刀を持って…

「やあ…志貴くん…って言い方もおかしいか」

「……」

あの時、ネロ・カオスによって犠牲となった女性が目の前で微笑みかけている。彼女の死ぬ姿は志貴にとつて忘れがたい記憶の中の一つであったのだが形はどうあれ、こうして生きていた。

自分の肉体の一部として。

「さつきはゴメンね。あんな言い方をしなければ君は躊躇しちゃうんじゃないかなって…でも、無用な心配だった、かな」

「……………」

「君は躊躇はしても覚悟を決める事が出来る。『遠野志貴』は、そういう男の子だもんね」

「っ…」

息を荒くしながら優しい微笑みを見せる舞子に、志貴は何も答えることができない。

志貴と、志貴の肉体を補うために寄生していた混沌であった舞子。互いに言葉も交わさないまま、意思の疎通もないまま一つの肉体を共有していた両者。いや、志貴から見れば肉体の一部であった為にそのような考え方すら成立しないにも関わらず、舞子は志貴の在り方を理解していた。

だから、以前志貴の目の前で死んだ人間と同じ顔を持つ存在が現れたとしても、志貴ならば殺すことができる。彼は大切なものを守る為ならば、力を振るう事を厭わないと知っているから。

「だから…お願いするよ。もう…抑えるのも限界だから」

「限界…？それって…なっ!？」

顔を歪める舞子の言葉を志貴は直ぐに理解した。

マキュリアスによって貫かれた腹部の傷はとうに塞がっている。

しかし、治癒した事によって足りなくなった養分を取り込もうと彼女の体内に宿る獣の因子が『食料』を求めて胎動を始めていた。

舞子が弱った力で必死に押しえつけてはいるが、もう限界だろう。シエルが明美を自分から遠ざけてくれて助かった。もし、今の状態で介抱したのなら最初の犠牲者は彼女だったのだ。

「わかるでしょう？君がどうするべきか」

「ああ…解って、いるよ」

彼女の望みは、至極当然のものだ。人でなくなっても、人としての尊厳を失う事無くその生命を終える。他の誰かを貪る存在となるなど、ましてや愛する妹の前でなど御免なのだろう。

そして、志貴の本能も告げている。目の前で弱っている『存在してはならないバケモノを早く殺せ』と囁き続けている。きっと、正しい事なのだ。彼女をこの手で殺すのは。

だが、志貴の理性は真逆の事も告げている。

『本当に、彼女を殺していいのか』と

一度命を失ってもなお、山瀬舞子という確かな意思を持って彼女は再び現れた。アルクエイドやシエルの説明の通り、度重なる偶然の産物に過ぎないのかも知れないが、自分や妹である明美からしてみれば奇跡に近い。

ネロ・カオスを早く倒せていれば、彼女は犠牲になる事は無かった。そうすれば、妹と以前と変わらぬ日常を謳歌する事ができたはずだ。

志貴は短刀を握った右手をゆっくりと頭上に翳す。志貴の行動を見て、舞子は柔らかな微笑むとゆっくりと目を閉じた。

(俺は…)

もう、彼女を2度も殺したくない。

そう理性が強まる志貴であるが、彼に舞子を救う手立てはない。

志貴に出来るのは、舞子の望む通りに存在を殺すことしか出来ないのだから。

蒼く染まった瞳で舞子の死：『点』の位置を見極め、振り上げた右手に左手を添え、ピタリと止める。後はその刃を死の点に通せば全てが終わるが、志貴の動作は余りにも緩やかであり、彼を知るアルクエイドから見れば『遅い』とされてしまうだろう。

それが、志貴自らへの僅かな抵抗だったのかも知れない。

こうして動作を鈍らせている間に、彼女を殺さずに済む手段が見つかるかもしれない。

もう、あの時のような無念を味わう必要などないのだと。

(だめだ…俺には、やっぱり…)

他に手立てはない。

志貴には、彼女を救う事は、敵わなかった。

そう、志貴には。

「え…？」

振り上げた手首を冷たい感覚が走る。

見上げれば、短刀を握った腕を黒い装甲を纏った人物に握られてい

る。

「お前が手を出す必要はない」

これは、ギリギリまで舞子を助けたいという志貴の願いが、通じたのかも知れなかった。

「今回の件は、俺にも一因はある」

「ゆえに、俺が始末をつける」

第109話

あれから一週間。

照りつける太陽に初夏の兆しを感じながら、遠野志貴はたった一晩で様々な事が起こったと、教室内の窓際に座り思い出していた。

自身の身体の一部であった混沌が死んだはずの人物の形となって動きだし、その混沌が同級生の姉であり、そんな彼女を殺そうとした存在が、月影信彦に恨みを持っていた：

説明を受けた後でも理解するには暫く時間を要した。窓の外を見て溜息を深くつく志貴の様子に気づいた乾有彦はしばし志貴を見つめるが、見つめただけで隣の女子と会話を再開する。恐らく志貴の様子を見て自分が聞いても仕方がない悩みだと判断したのだろう。

そういう察しの良いところは、本当に助かっている。

肩肘をつけてグラウンドを見下ろすと、次の時間に体育でもあるのだろう。別クラスの生徒達が陸上競技の用具を持って、談笑しながら準備を進める姿が見える。その中に、先日の出来事に巻き込まれた山瀬明美の姿があった。

あれから山瀬明美とは、時折食堂で顔を合わせる。しかし、明美は常に友人たちと揃って行動する為、すれ違い様に挨拶をする程度で同伴にまでは至らない。その程度で十分だと思う。変にこちらと接してまた同じ境遇に巻き込まれる可能性だってゼロではないのだから。それに…あの時、彼女は志貴が自分の眼の前で姉を『殺そう』としたところをはつきりと見ている。

(本当だったら敵意を向けられても…仕方ないよな)

最悪、恨まれる事すら覚悟している志貴なのではあるが、数か月後に迫る文化祭実行委員会で彼女と同じ班となり、それなりの友好的な

関係となることを、志貴はまだ知らない。

それまでの間に一夏の悪夢を志貴達を襲うのだが、それはまだ先の話。来るべき日が訪れるまで、志貴達は今まで通りの日々を過ごしていく。

ただ、一点変わったことがあるとすれば、と考える志貴の耳に授業開始を告げる鐘が鳴ると共に、引き戸を開く教員の挨拶が届いた。

一週間前

「始末…月影さん、それはどういう——」

シャドームーン…月影信彦が告げた言葉を反復する志貴がその意味を確認すべく尋ねる前より早く、今も体内で蠢く獣達を抑え苦しむ山瀬舞子へ接近、緑色の複眼で見下ろした。

「月影…信彦さん…」

「時間がない。手短に済ませるつもりだが…その前に2つ質問がある」

「……………」

「二つ目だ。お前は、お前の妹とここにいる志貴を見て、飢餓感を覚えたか？」

「残酷な…質問ですね」

分かった上で聞いたのなら、志貴が抱く印象とは異なる性格なのだ

と舞子は今も躍動する自分の腹部を見つめ、途切れ途切れに応えた。

「見て、分かるでしょう…ボクの中にいるモノたちは今も密度を高めようとして、いる。このままでは明美や…志貴くんだけでなく——」

「それはあくまで貴様の中にいる獣の因子が養分を求めているに過ぎない」

「——え？」

「…もう一度訊ねる。貴様は、貴様の意思で妹と志貴を食したいと本能が訴えていたか？」

言葉に詰まる舞子。

数時間前、自宅へと赴いた時に襲ってきた飢餓感を抑える為に備蓄されていた数日分の食料を食ったが、それは舞子の中にいる数百以上いる獣の因子が欲した為。

このままでは家族はおろか周囲の人間達も巻き込んでしまうという恐れが先行し、無我夢中で食料を取り込んだ舞子であったが、思い返してみれば『舞子自身』が欲していなかった。

そして信彦の言う通り、マキュリアスの攻撃によって身体を貫かれた舞子の傍でずっと泣いていた妹の明美や、舞子が望んだ通りに躊躇しながらも殺そうとした志貴を『食べたい』とは微塵も思えなかった。

「…志貴という人間に融合した時間が長かった分、混沌であろうと食指そのものは変わっていなかったという訳、か」

「え…？」

「なんでもない。次の…最後の質問だ」

朝日に煌く複眼に、いくつもの顔が反射して映る。どこか怯えながらも、何かに期待してしまっている舞子自身の表情だ。

なんと情けないのだろうと、舞子は自ら課した決意の脆さに呆れながらも信彦の言葉を待った。

(でも、ボクは…)

例え自分の意思ではなかったとしても、混沌の因子によって数名の犠牲者がでてしまっている。自分は、生きてはならない存在。ならば、確実に死ぬ事によってこれ以上の犠牲は生まない為に、ネロ・カオスを倒した志貴の前に現れたというのに。

だが、押し留めた本心には抗えなかった。

傷ついた自分の隣で泣き続けた妹を悲しませたくない…違う。そんな事は方便だ。舞子は思ってしまったのだ。自分の為に泣いてくれる妹と、これから先も…

志貴が望み、舞子が求めた言葉を、信彦は静かに告げた。

「生きたいか？」

何の感情も込められていない、短い言葉だというのに、呼吸を荒くする舞子の目に涙が溢れる。

「はっ」

舞子の万感の思いが込められた返答を聞き入れた信彦は、掌にシヤドーセイバーを顕現させる。赤く煌く刀身の先を、何の躊躇も見せず

…

舞子の胸部へと突き立てた。

「あ…」

漏れた声が誰の者かは分からない。咳かれたその直後、舞子の黒い身体を突き破らんと胎動し続けていた動きが収まり、あれ程呼吸を乱していた舞子の動きもピタリと止まってしまう。まるで、事切れてしまったかのように。

信彦の予測がつかない行動に志貴を始め凍り付く一同であったが、一番に反応を示したのは、やはり彼女であった。

「いやあああああッ?!お姉ちゃあんツ!」

姉の元へ駆け寄ろうと暴れる明美をどうにか羽交い絞めで押さえるシエルであるが、彼女も信彦の真意は分からない。今回ばかりは、あの真祖すら助けた信彦も匙を投げて混沌の後継者を『消す』判断を下したのか…?

だが、こういった場合誰よりも感情的になり、信頼している信彦に行動の是非を問うはずの志貴が、動きを止めている。

信彦の行動が余程ショックであったのか、動きを見せない志貴に近づいたアルクエイドは気持ちを確認めようと彼の方に優しく手を置き、静かに尋ねた。

「志貴、一体どうしたの…」

「アルクエイド…あれは、どういう事なんだ」

「…教えて志貴。貴方の眼に、何が視えているの？」

生きたいと願う舞子を直後に殺したと考えた志貴は当然逆上して信彦に問いただすつもりだったが、彼の眼には…直死の魔眼に異様な光景が映った。

ただでさえ物体の『死』を視覚化して脳に送り続ける物騒極まりない眼が捉えたのは、舞子の身体に走る無数の点。点は『死』の数…即ち、それと同等の獣の因子が存在するとも言えるだろう。

以前、ネロ・カオスに奇襲をかけたようにとした際に殺しきれない程の死の点を視た時と同様に、ネロ程ではないが混沌の後継者だけあって、その数は膨大だった。

だが、志貴が視たのは彼女の身体に浮かぶ点の数が一つ、また一つ消えていく現象。否、点が消えているのではなく…

「点と点が、重なり合っていく…それで、点が減っているように見えるのか？」

「…そう。そういう事」

「そう言う事って…アルクエイドはこれが何だか分かるのか？」

志貴の漠然とした説明で理解したのか、アルクエイドは赤い目を細めて舞子に剣を突き立てたまま微動だにしない信彦の背中を見た。志貴の眼に映っている本来あり得ない現象は、間違いなく信彦が突き立てたシャドーセイバーから流している『力』によるものなのだろう。

「志貴、よく聞いて。貴方はネロの身体…混沌についてはある程度理解しているという前提で話をするわよ」

「あ、ああ…」

「今ノブヒコがネロモドキに行っている事…言うなれば因子同士の結合のようなものね」

「因子同士の、結合…？」

「私も断言できることじゃないけど、志貴が視たという点と点が重なっていくという事からそう判断するしかないの。ノブヒコはあとして力を送り込むことによって体内に存在している混沌の数百以上いる因子を洗脳して共食いさせている…もしくは強引に融合させているんでしょうね」

「強引に…融合？」

志貴の知る限り、ネロは666の動物の因子が一つの生命体として存在するその名の通り『混沌』であるのだが、それを融合させるなどありえるのかと疑問を抱くものの、今さら信彦の行動に常識など通用しない事を思い出すが、さらなる疑問が生まれてしまう。

なぜ、混沌の因子を融合させる必要があるのか？

「分からないって顔してる。志貴、以前ネロがホテルで『食事』をした事を覚えている？」

「…ああ」

嫌な事を思い出してしまう。自分が殺したことで消耗したアルクエイドを休ませるためにセンチユリーホテルに身を潜めていた2人を突如ネロ・カオスが襲撃。その際、食事と称して数百人の命を一瞬にして奪い去ってしまった。

志貴の表情を見て、思い出したであろうとアルクエイドは話を進める。

「あれはネロを含め666の獣がいた故にやった事。食事の量は過剰とも言えるけど、身体は一つでも、あくまで666の『食欲』を満たす為にやった事よ。けど、もしその数が極端に減れば…」

「減った分だけ、食べなくても済む…？」

これは簡単に因子の数が減れば減るほど、飢餓が収まるというだけの理屈だ。現に666という数では人間をダース単位で捕食してし

まうが、舞子の場合には冷蔵庫の他にインスタント食品を取り込んでいたが、それは数日分の量であり、数百人単位とは比べ量にないほどに少ない。つまり、現時点でもその程度の食糧で飢餓感を満たす事が出来ている。

さらに因子の数を極端に減れば、欲する食事の量が人間並みに収まる事になる。

「けど…それでも彼女は人間を食糧とするんじゃないのか？」

「その為の質問だったんでしょ？ほんと、どこまで見透かしてるのかしら」

「あっ…」

ここで志貴は信彦が舞子に問いかけた質問の意図を理解した。

今混沌の主人格である舞子は、人間に対して食したいという衝動は持ち合わせていない。むしろ、彼女は拒んでいるが故に自ら命を絶つように志貴へ願っていたのではないか。

段々と希望が湧いて来る。

もし、このまま上手くいけば…

「そうとは限らないわよ、志貴」

冷たい言葉に、志貴は現実へと引き戻された。

「今、ノブヒコがやっているのは、全ての因子を融合させるのではなく、あの人間以外の因子を融合させる事なの。その結果、決して混沌以外のものになりはしないわ」

「どういう…事だ？」

「恐らく志貴はこう期待してるんでしょ？あのまま因子を融合し続け、最後のひとつと人間の命を合わせれば、彼女は混沌ではなくなるって」

「…っ」

事実、アルクエイドの言う通りだった。あのまま信彦の処置が進めば、少なくとも混沌として、死徒として生きていく必要はなくなると思った。考えたかったのかもしれない。

しかし、現実主義者であるアルクエイドは容赦なくこの後に起きるであろう事実を志貴へと伝える。

「いい？もし志貴の思う通りに事が進んだとしても、最後に待っているのは数百の因子の融合体と人間の意思のせめぎ合いになる。どちらが身体の主導権を握るかという、ね。数百の獣の頂点にまで勝ち残った因子と、偶然にも呼び起こされた人間の意思では、もう結果は分かっている」

「それなら…月影さんはなんで？」

「そればかりは、本人に確認しなければわからないわ…」

アルクエイドとて、信彦の行動全てを把握している訳ではない。

突き立てた剣へ力を送り続ける直立不動となった信彦に、志貴は不安を抱きながらも、信彦を信じることしかできないでいた。

「くう…あと、何体…だ…」

シャドームーンの深層世界

そこでは突き立てたシャドーセイバーへ全ての力を注ぎ込む信彦と、それをフォローする2人の魂の姿があった。

『あーようやく片手の指で数えられるぐらいまで減ったぜ信ひー。いんやどれもこれも我が強くてマゼマゼすんもの一苦労ですねぇ』

軽口を叩きながらも額に汗を拭う事無く信彦のフォローに走るアンリマユは、ようやく見えたゴールに安堵しながらも未だ余談を許さない状況に気を抜けない状態だ。

舞子の願いを受けた信彦は咄嗟にアルクエイドの推測通りの方法を実行する。

だが、混沌に宿る因子の洗脳。舞子を因子から切り離し安全を確保させ、さらに融合させるなど先の戦いで結界を維持しながらの戦闘以上に集中力を要する状況に彼の精神は極限まで追いつめられ、普段茶化すしかないアンリマユに対してまで手助けをさせるまでに至っている。

そして、現在は信彦へキングストーンの力を注ぐだけである碧月にはさらに重要な役割が課せられ、緊張状態に陥っている。

『御しやすい動物を強くイメージしろ』

『イメージ…？』

『俺とアヴェンジャーは今から山瀬舞子以外の混沌を洗脳し、融合させる。だが、強引に融合させた際、どのような化け物が生まれるか想像がつかん』

『そこで碧月ちゃんにああのねーちゃんに成り代わって身体を乗っ取るうなんて考えないような動物になるように働きかけてながら力を注いで欲しいってわけ』

『で、でもそれならアンリの方が…』

『ま、そうだよなー。別に？俺でも良かったんだろうけど信ひーに猛反対されちゃってさー』

山瀬舞子を混沌に融合させるというリスクが高い手段よりも、舞子と混沌を共存させる方法を考えた信彦は、最期に残った混沌を舞子で

も扱える動物にさせる方法を思いついた。

だが、洗脳と融合に集中するため、どのような動物にするかまでは至らない。そこで碧月であればアンリマユと違い妙な生物にしないと考えた上で役目を任せただが、思った以上に緊張してしまっている。

それもそうだろう。もし、ふとした事から一瞬でも幻想種のイメージが混じってしまったら、もはや信彦達にも手に負えない。

因子の融合があと2体と迫った時、緊張をほぐそうとしたアンリマユはそっと碧月へと耳打ちする。

「へいへい碧月ちゃん！こんな時は、あの小動物に限るぜ…！」

「あのって…あッ!!」

碧月が思わず笑顔で声を上げた直後、ついに獣の因子は舞子を除き、一つの因子へと融合を遂げた…

「くう…」

「月影さん！」

これまで指一つ動かなかった信彦が舞子からシャドーセイバーを抜き取り、よろめきながら後退する所を志貴が支える。どうやら信彦による処置は終わったらしく、複眼と腹部に輝く緑色の輝きは、著しく弱っている。

「終わったんですが…」

「それは…これから分かる」

曖昧な返答をする信彦の言葉へと続くように、再び舞子が苦悶の表情を浮かべる。

「うう…あああああッ!!」

「お、お姉ちゃん! しっかりしてお姉ちゃんッ!!」

目を閉じ、汗を浮かべて声を上げる舞子にシエルを振り切った明美が駆け寄って姉の手を強く握る。それに反応したかのように、舞子はゆっくりと目を開けた。

「バカ…もう会えないって、言ったのに…」

「いやだよ…そんなの絶対いやだよ! 私…ずっとお姉ちゃんと一緒に居たい!」

妹による必死の呼びかけに少しずつ意思を取り戻す舞子の苦悶は未だ止まらない。そして、変化は起き始めた。

「う…あああああッ!!」

「お、お姉ちゃんのお腹が…」

明美は目を見開いて、姉の腹部を凝視する。先ほど、銀色の怪人が剣を突き立てる前も身体のうちこちが内部で別の生物が暴れているかのように膨らんだり縮んだりとしていたが今回は違う。腹の中に風船でも仕込んでいるかのように段々と大きく膨らんでいるのだ。

「ついに…か…」

そう呟いた信彦は膨らみ続ける舞子の腹から何が飛び出してくるのか見当もつかない。

確かに因子となるべく動物のイメージは碧月に任せしたが、その寸前にアンリマユが入れ知恵した事は眼に入っている。その結果、どのよ

うな生物をイメージしたのか…？

「う、生まれ、る…」

「生まれる!?ど、どどういう事なのお姉ちゃん!？」

全員が様々な思惑の中で息を飲み見守る中、舞子の黒い腹部を突き破って、とうとうその姿を現したのは…

「んんん、マन्दラム」

無駄に渋い声を発する、黒い謎生物であった。

「ほうほう、朝日と共に生誕した吾輩をこんなにも見目麗しゆうガールズやボーイに祝福されるとは、混沌冥利に尽きるってやつ?」

ぷうん、といつから手にしていたのか分からないタバコを噴かせるソイツの外見は、縮めた…というかデフォルメしたアルクエイドに猫耳が生え、おまけにどこもかしこも黒くなっている様子。

さらに上半身のみが舞子の腹部からはみ出ているというシユールな状況で、宿主である舞子へとその開いているか閉じているのか分か

らない目を向ける。

「ハイ主い。中々キュートないで立ちの中、こんな真つ黒黒なネコを宿す事になつちまつたけどその辺はノープロブレム。吾輩、空気を読む事だけなら自信あるからプライベートに口は出さないぜ」

「え、えつと…」

「二人の新たな人生を祝して夜明けのコーヒーとしゃれこむのはどうよ？」

自分の腹から生えている生物にどこなく口説かれている舞子は返答に困るが、そこに片膝をついて生物の頭部を驚掴みした信彦が割り込んだ。

「おおうこれは世紀王。以前はいきり立った吾輩たちが失礼を」

「…記憶があるという事は、貴様は間違いなく混沌の因子だったものか」

「イエス。けど、記憶があるだけで実感がないのよこれが。言うなれば混ざりに混ざり過ぎたおかげで以前の吾輩たちもどこか他人のようには思えちゃう」

「…確認する。貴様は、人間を食したいと思うか？」

その質問に舞子と、混乱していた明美も固まってしまう。見た目はあれだが、確かに御しやすい生物を作り出したことには成功したのだろう。

なぜこのような動物と言っているのか分からない存在をイメージしたかは後で2人に問いただすとして、今はこの生物に確認を取らなければならぬ。

いくら混ざり混ざって新たな獣の因子となったとはいえ、元は死徒だ。志貴と融合し、キングストーンの力を浴びたことで人間の血液を取り込んで身体を維持するという死徒の特性が無くなったとはいえ、その食指が人間に向いているのだとしたら…

「おいおいキングう、自分で血液を吸う必要のない身体にいじくつといてそんな質問はないんでなあい？それに吾輩ネコであるし、求めるものは同じ赤でもワインと決めてるし、食事もサバ缶を所望するね」

と、訳知り顔で告げる自称ネコを殴りたくなる衝動を抑えながらも、これで他人を殺して摂取するという最悪な展開は起こらないだろう。

心配そうにこちらを見つめる志貴に、複眼を向けた信彦はゆつくりと頷いた。

破顔して状況を伝える志貴の説明を受けた山瀬姉妹は互いに涙を流して抱き着いていた。猫型生物も自称通り空気を読んだのか、舞子の腹に引っ込んで今は身を潜めている。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん……！」

「明美、笑って。ボクは泣き顔より、笑顔の明美がみたいな……」

「うん！」

どうにか丸く収まったと複雑な笑みを信彦へと向けるアルクエイドは真逆に、先ほどから口を噤んでいたシエルは無表情のまま山瀬舞子を、そして人間へと戻った信彦を見つめていた。

第110話

死徒 ネロ・カオスの残滓であった混沌を強引に融合させた事によって誕生した謎生物。

色や性格はともかく、なぜアルクエイド・ブリュンスタッドに類似しているのかと自身の内にいる者達：碧月とアンリマユに尋ねた月影信彦。

「あれは何だ？なぜ猫とアルクエイドが混ざったようなものが生まれる？」

信彦は融合させた混沌を身体の持ち主である山瀬舞子でも制御できるような知能指数の低い、大人しい生物をイメージさせるつもりであったが、誕生したのがアレだ。既にキングストーンの光を浴びていた影響で舞子と同じく、吸血衝動はない事も確認済みではあるのだが、あのような珍種が出てくるとは想定外過ぎなのである。

『えっと…最初はアンリに言われて猫の姿を思い浮かべただけ…』

深層意識の中で問い詰める信彦に視線を泳がせて答える碧月は申し訳なさそうに答える。

数百いた混沌の因子を融合させ最後の仕上げに何をイメージしていいか躊躇した碧月はアンリマユの助言で猫をイメージしたが、その時にボソリと発案者の声を耳にってしまった。

『そーいや真祖の姫ちゃんも猫っぽい性格だわなあ…』

結果、猫とアルクエイドを同時に思い浮かべた碧月のイメージをそのまま反映されキングストーンの力を混沌に注いだ結果、誕生したの

がああ謎生物なのであった。

「貴様が元凶ではないかこの大馬鹿者」

『ちよっ!?無表情で蹴り続けるの止めて!アウチツ!?痛い痛いマジでマジで!!』

『ふ、2人とも。喧嘩はダメよ!』

表情筋がまるで機能せず、黒い影を顔に覆わせた信彦による制裁を受けるアンリマユの悲鳴が木霊する中、オロオロと仲裁を開始する碧月…

以上の月影信彦の深層意識で行われた緊急会議(?)をわずか数秒で終わらせた結果、生まれてしまったものは仕方がないという結論に至り、もし何かあった場合には今度こそ自分でどうにかすればいいと自身を納得させた信彦へ不安混じりに名を呼ぶ少年の方へと振り向いた。

「あゝ、月影さん」

「言っておくが、あれは俺のイメージでは——」

「えっと、ネコカオスの話じゃなくて…」

ネコカオス

どうやらあの謎生物の名前はそれで決定したようだ。

当初は色以外あまりにも特徴がアルクエイドと酷似していたので『ネコアルク』と命名されようとしたがアルクエイドが断固拒否。唯一ネコらしき特徴である耳とあの混沌から生まれたという事をかけてネコカオスとなった。まんまである。

しかし当のネコカオス本人は気に入っているらしく、早くも宿主である舞子に『カオちゃん』なる愛称を付けられ、『吾輩に触れちや火傷するぜ…』と無駄にダンディなセリフを吐きながら顎を撫でられ恍惚としている姿を見てどう反応すればいいか判断の付かない信彦へ、志貴は真面目な顔で話を続けた。

「あいつの…マキュリアスとか言いましたっけ？あいつと戦っている時に…視え、たんです」

歯切れの悪い言葉は、はつきりと見たわけではないという自信がないのか、それとも視えてしまったモノに心当たりがあり、そうでなくて欲しいのか。

志貴の反応からして、恐らく後者であろう。

「月影さんがここに現れるまで、俺は無我夢中でアイツの身体に走る線を切ろうとしました。頭痛なんかに構わず、線と点のはつきり見えようと構わず…そんな時でした」

「アイツの身体に…腹の部分に死の点とは違う、丸くて、『青い石のよなモノ』が視えたのが…」

後にシエルから聞き出した事だが、マキュリアスに肉迫した志貴の両目が直死の魔眼を発動させた時に見せる青色ではなく、緑色に染まった直後に志貴はあり得ないモノを目撃した表情を浮かべたという。

そして、マキュリアスは去り際にこうも言っていた。

『彼女の持つ気配と魂は間違いなく同胞であり敵であった者…ワタシ

やジュピトルス達を倒す為、共に死んだ『月の星騎士』のものだからだ』

碧月とマキュリアスが同じ存在。そして、志貴が視たという『石』を考えると、一つしか思い浮かばない。

「キングストーン…もしくは似た何かという事か」

本当に、マキュリアスの言う通りに碧月は星騎士と同じ存在。だとすれば様々な疑問が思い浮かぶが、それは後に考えればいいと思考を切り替えた信彦は俯く志貴の頭を軽く小突く。

「つ、月影さん？」

「お前が悩むような事ではない。奴の言う事が真実だろうが、奴が俺の敵である事には変わりない。再び目の前に現れるような事があれば、今度こそ引導を渡すだけだ」

「…はい」

「それよりも、今は自分の心配だけしておけ」

「え…？」

相変わらず無表情ながらもこちらを気遣ってくれる信彦の言葉を受けて先ほどの緊張がほぐれた志貴であるが、信彦の視線の先にある公園内の時計が指す時刻を見て硬直してしまう。

使用人である翡翠が起こしに部屋へとやって来る時間をとうに過ぎていないか。

「……………」

ダラダラと脂汗を流す志貴の脳裏に嫌な予感がどんどん膨れ上がる。

部屋を訪ねたら自分の姿がない事を不審に思う翡翠は当主である秋葉へと報告は確実であろう。そして…

『兄さん、ちょっとお話しマシヨウカ?』

満面の笑みであるはずなのに段々と声に重みが増していく秋葉の姿が目につかぶ。髪の毛が赤く染まり、ユラユラと黒いオーラを纏っていると思えてしまうのは気のせいなのだろう。そうに違いない。

「後生だアルクエイド!家まで運んでくれ!!」

「別にいいけど、どうしたの急に?」

だが、受ける罰を一秒でも減らす為にも早く帰宅しなければならぬ志貴は普段子猫でも抱く要領で志貴を連れ出すアルクエイドの移動方法が一番早いと判断し、普段は嫌がるくせに…と頬を膨らませるアルクエイドをどうか説得する志貴を後目に、信彦は変わらずネコカオスと戯れる順応性が意外に高い山瀬姉妹へと顔を向けた。

「邪魔をするようだが、今後の話をしたい」

信彦の呼びかけにハッと我に帰った姉妹はいつの間にか手にしていた猫じやしを収納し、信彦の声に耳を傾けた。

離れた場所で険しい視線をぶつけるシエルに振り向くことな

く……

そんな回想を終えた志貴の耳に引き戸を開けた音と共に現れた教員の声が教室内に響く。

「みんなおはよー！次はお昼だからもうちよつとの辛抱だよー」

「はーい舞子せんせー！頑張りまつす！」

「こらこら乾くん？いくらボクの妹が同じ学校の生徒にいるからって下の名前を呼ぶのは感心しないよ？ちやあんと『山瀬先生』って呼ぶように！」

「はいっすー！」

有彦の元気良すぎる返事にクラス一同が苦笑し、志貴も釣られて笑ってしまう。こんなにも早く馴染んでしまうという事は、以前の学校でも生徒との仲も良かったのだろう。

数日前、突如として美咲高校に美人教師が赴任したとの噂は瞬く間に広まった。

それが山瀬舞子である事を知った志貴は驚愕し、事の真相を突き止めようと休み時間に信彦の携帯電話へと連絡。するといつもに増し

てあっさりとした回答が待っていた。

『行方不明扱いの為、以前の学校では既に除籍扱いであったのでな。そしてかつてゴルゴムのメンバーだったそれなりの権力者を脅して志貴の学校で採用するよう采配した』

「で、でもなんでいきなり…?」

『その方が色々都合がいいからだ』

何が!?!と質問を続けようとしたがそこで始業のチャイムが鳴ってしまふ。この続きはまた後に聞くとして、一番の不安材料である舞子へと注意を向ける志貴ではあったが、それが杞憂で終わる事はこの数日間で理解した。

先ほどの生徒達との交流もそうだが、教員達とも既に打ち解け、既に複数の部活動から顧問として勧誘を受けているようだ。ただ、昼食の際は必ず鯖缶と一緒に食すという変わった所もギャップがあつていい!と一部の生徒達を盛り上げている…

シエルならばともかく、まさか信彦までにもこのような裏工作ができるとは思ひもよらなかつたと胸の内を語れたのは、昼休みの時だ。

「本当に、色々出来過ぎて驚きですよ」

「だよね。ボクも突然この学校で働けって言われた時はびっくりしたよ…」

昼休み。

特に待ち合わせの約束を交わした訳でもなく志貴と舞子は屋上で鉢合わせし、昼食を同伴していた。かつて同じ肉体を共有した故か、互いの思考が何となく理解できるのかも知れない、というのが信彦の

見解である。

肉体と人格は異なるが精神のみ限りなく同一体に近い…なんて小難しい補足がアルクエイドから言われたような気がしたが、こうしてかつて助けられなかった人と肩を並べて食事を取る事は奇跡に等しい。その奇跡を噛みしめながら志貴は購買で購入した焼きそばパンを口に運び、舞子は胸元からひよつこりと顔を出したネロカオスに切り分けた鯖缶の切り身を分け与えながらも、志貴に尋ねた。

「あの、志貴くん。物は相談なんだけど…」

「相談、ですか？」

普段ならば遠野君と教員らしい態度で接しているのだが、あの事件のみ知る人物のみになると舞子は志貴を下の名前で呼んでいる。特に抵抗はなく受け入れている志貴であるが、舞子の言う相談の内容と、口にする際の表情を見て、ある程度察しがついてしまった。

「その…信彦さんにお礼をしたいんだけど…志貴くん、彼の好きなものとか…知ってる？」

頬を赤らめて言う主の姿を見て、ネロカオスは確信する。

「ラブコメの波動を感じる…」

同じ頃、アルクエイド・ブリュンスタッドは上機嫌のまま待ち合わせの喫茶店へと向かっていた。

一週間前、志貴の要望通りに彼を家まで送った見返りとして、学校

帰りにデートの約束を交わしたのだが、余りにも待ちきれず待ち合わせまで5時間以上あるにも拘わらず、こうして来店したのだ。

志貴から教わった通りに入店して、先日試しに注文した店自慢のブルーベリーパイを摘まみながらゆっくりと待つとしようと思えば移動するアルクエイドであつたが：

「げ…」

思わず口からそう漏らしたアルクエイドの視線の先：窓際のテーブル席で見覚えのある人物がコーヒークップを片手に何かファイルらしきものに目を走らせている。爪先まで黒で統一された衣服とあの黒髪、間違いなく月影信彦だ。

幸いこちらには気づいておらず、席も間仕切りがある為目が合う事もないだろう。

しかし、志貴と待ち合わせしている時はいつも新聞に目を通しているのに今回はファイル：間仕切りから顔を覗かせてよく見てみれば他にも数冊のファイルが並んでいるようだ。あの資料に集中して自分の存在に気が付いていないのかは分からないが、このまま気づかれないというのも少し面白くないので何か悪戯でもしてやろうか考えた矢先、またもや面倒な人物が現れる。

（今度はシエルだ…）

未だ変装で利用している志貴の通う学生服姿のシエル。表情はこちらでは見えないがその目は今でも資料に目を見つめる信彦へと向いていると分かる。そして無言のまま信彦の対面である席へと座る姿を見たアルクエイドは、やっぱりノブヒコの事を好きなんじゃないかと勘繰りを始めるが。

「今回は随分と残酷な手段を選んだものですね」

普段と声色は変わらないのに、シエルの冷たい言葉にアルクエイドの思考は止まる。一体、彼女は何を言っているのか…

パタリ…とファイルを閉じた信彦はようやく自分の目の前にシエルが現れた事を認識したかのように顔を上げる。彼の表情は、変わらない。

「いきなりなんの話だ」

「二週間前のお話です。忘れたなんてオチはないようにして欲しいですね」

「……………」

言い逃れは許さない。そう目で訴えるシエルを前にした信彦はゆっくりと瞳を閉じ、ガクリと首が項垂れてしまうが、信彦の身に何が起こったか理解しているシエルに取っては特に驚くべきではない。

こうして、すぐに彼の『代わり』が表に出てきたのだから。

「たーつく。なあにが『お前の方が適任だ』だよ。体よく押し付けちゃってもー」

文句を言いつつ表に出たアンリマユはやる気なく頬杖で顔を支え、未だにこちらに鋭い目を向けるシエルを視る。

「さあてカレーのお姉ちゃん。ウチの信彦君に随分と辛辣なお言葉を浴びせたようだけどよ。誰一人欠けることなく救われたハッピーエンドだったんじゃないかねえ今回は？」

「…ものは言いようですね。ならば、こちらもはっきりと言いましう」

「あの場で、貴方達は全員を救ってなどいない。救ったとすれば…それは遠野君一人だけではないですか」

第111話

あの女は、何を言っているのだろう。

耳を傾けるアルクエイドは先ほどからシエルの言っている意味が分からない。あの口ぶりから今回特に見せ場がなかったから八つ当たりしているとは到底思えない。以前からではあるが、この場に志貴がない時に限り、あの修道女は信彦への当たりは強い。

その点は異端を許せない聖堂教会の一端であるのだが仕方がない部分ではあるはずだが、今回は一段と厳しい口調で信彦を責めている。

もう少し様子を見ようと、アルクエイドは耳を研ぎ澄ました。

「ほほう。そう言われちゃあまずはそのちの言い分を聞かねえと話になんないね。別に？むきになって熱く反論するつもりは微塵もねえけどな」

「そうですね。では先にお話させて頂きましょう」

一端呼吸を整える為、ゆっくりと息を吸い、ゆっくりと吐き出したシエルは眼鏡の位置を直すと相変わらず薄ら笑いを浮かべるアンリマユに向かい、口を開いた。

「私がなぜ、今回救ったのは遠野君だけであると言ったのは、まず遠野君に関しての事です。あのまま貴方たちが何もしなければ、遠野君は間違いなく、山瀬舞子を…混沌の後継者である彼女を殺していたでしょう」

「だろうな。アイツは普段良すぎるぐらいのお人好しだが、こうと決めたら実行する。つまりは殺る時は殺るってやつだ」

「そうですね。どのような事情があろうと、遠野くんはもうそれしか手段がないと理解した時は確実に手を下すでしょう。その結果、誰かに恨まれようと…」

最後の『恨み』に関してトーンを重くしたシエルに対し、アンリマユは信彦の飲みかけであるコーヒーに次々と角砂糖を投入し、程よく飲める状態までスプーンで掻きまわしながら答えた。

「んで、その恨む側つてのが妹ちゃんなわけだ。そうだろうなあ。どんな姿でも生きてる姉貴が目の前で殺されりゃあ恨むだろうし、最悪敵討ちなんてことにもなりかねない、か。例え姉ちゃんの方が望んで死にたがってたとしても」

「人間は理由さえあれば簡単に他人を恨みます。それが肉親ならなおさらですね」

知らないのだから、仕方がないといえばそれまでの話だ。

山瀬明美は何も知らない一般人であり、行方不明だった姉を慕うごく普通の少女だ。あのまま志貴が舞子を殺していた場合、間違いなく志貴へ憎しみを抱いていた事だろう。アンリマユの言う通り、姉が望んでいたと聞いても、感情は制御できはしない。

「そして、山瀬舞子を殺してしまった場合、遠野君自身が苦しんだことでしょう」

先でも述べた通りに、状況によって志貴は相手を殺す覚悟はある。しかし、殺した後を受け入れる程、彼は『慣れていない』。既に手遅れとなったグール達を幾人も手にかけて志貴ではあるが、あれほど人間としての意識がはつきりした対象は初めてだったはず。

それに加え、一度目の前で見殺しにした舞子を殺すなど、志貴にとって舞子を二度殺したも当然となるはずだ。

「自分の手で助けられたかもしれない人間をまた殺してしまった。受け入れるのにどれほどの時間をかかるかは分かりませんが、もしかしたら一生引きずってしまうかもしれない…そして、そうさせない為に

動いたのが、貴方たちだった」

「そんなヒーローぶった事をしたつもりはないんだけどねえ…どの辺りからそう考えたん？」

「…今思えば、マキュリアスによって傷ついた山瀬舞子を結界で守った時でしょうか。その時は、理由までは分かりませんでした」

惚けた口調で甘すぎるコーヒーを啜るアンリマユに即答するシエルは、その時の状況を思い出す。

マキュリアスの不意打ちによって体中に傷を負いながらも駆け付けた信彦は敵の凶刃から志貴を助け、周囲の状況を見渡しただけで状況を把握した。

志貴が信彦へと向けた眼差し。

かすかにキングストーンの力と混沌が入り混じった女性の身体を貫通した自分と同じ呪い。

そして、女性が過去に新聞記事で見かけた行方不明者の顔写真と同じであった事。

咄嗟に自身の回復を後回しにしてマキュリアスの持つ鎌剣の呪いに侵された舞子の命を持続させるべく、自身も重症である事にも関わらずに力の大半を注ぎ込んだのだ。その先に起こりえるであろう事を見越して。

「まったく、どこまで先の読んでいたのやら…あの時、貴方がその気になれば相手を血祭りにあげられたのでは？」

「ヒヒヒ、聖職者とは思えねえ言い回しだな。それこそ買い被りつてもんだ。あん時は全身オオカミちゃん達に傷口を喰いちぎられて悲鳴すら我慢してたんだぜ？一刻も早くあのナル野郎の鎌をぶっ壊して泣きつ面を拝みたかったんだよ」

「ですが、山瀬舞子を守らずに最初から全力をだせば…違ったんでは

ないですか?」

「過大評価だつてーの。それともあれかい? お前さんから見れば俺達は楽勝だつたと言いたいのかい?」

「その通りです」

「…明日は槍でも降るのか?」

ケラケラと笑うアンリマユの冗談に即答で頷くシエルの視線に耐えかねてまたも軽口を重ねるが、彼女は一向にその姿勢を崩さない。場の雰囲気を変えようと何か喋らねばと考えている間に、シエルから切り出されてしまった。

「貴方がその気になれば…と考えたのは、遠野くんや真祖がロアと対峙している時に貴方が怪人達に見せたあの姿…爆発的に力が高まつたあの形態なら瞬く間に倒せたと考えます」

シエルの言う形態というのは、トリニティファングを指しているのだろう。信彦・アンリマユ・碧月の意思と天・地・海全ての力が文字通り一つとなったシャドームーン最強形態といつても過言ではない。自身の城にいる限り無敵であると豪語したロアですら、その力の一端を垣間見て撤退を考えたほどだ。

いくら手負いの状態でも、確かにマキュリアスを屠ることなど造作もないように思える。

「あの姿はけっこう負担が大きくてねえ。初見の相手にホイホイ使わねえのが我が家の方針なんすよ」

「確かに信彦さんならそれもあるでしょう。けど、私には他にも理由があつたようにも思えます」

「その、理由ってのは?」

「…マキュリアスの持つ鎌剣ハルペーの呪い。それを確実に解呪する為にもただ相手を倒すだけは解決しない。そう考えたからではないでしょうか?」

「……………」

敵の特殊な能力：毒や高熱に身体が侵された場合は、その相手を倒せば打ち消される場合もある。ゴルゴムや過去の組織によって生み出された怪人などが多かったが、今回に限っては神話に登場した神によって生み出された武器。

使用する者を倒したとしても、呪いが解除されるとは限らないと考えた信彦達はマキュリアスの持つハルペーの破壊を優先させたのだとシエルは推測した。アンリマユが薄ら笑いを浮かべず無言であることから、間違いではないようだ。

「確かにねえ、あの鎌で付けられた傷つてば俺らの治癒能力じゃ全然塞がないんだもの。厄介なんでぶっ壊すのが一番だったからな」

「それも確かに理由の一つでしょう。けど、壊した後にもマキュリアスを倒す事もできたはずでは？」

シエルが戦いを振り返る限り、シャドームーンの主人格となったアンリマユによりハルペーが破壊された後、舞子から呪いが消え去り自身で傷を塞いだ事で結界を除去し本来の力を取り戻したシャドームーンには十分な余力があった。それこそ、捨て台詞と共に姿を消したマキュリアスと十分に渡り合える程の力が。

「だあかあらあ、あれは相当のエネルギーを消費するから——」

「そのエネルギーを、山瀬舞子を助ける為に取っておいた。話は戻りますが、彼女を助ける事が遠野君を助ける事と同意義である為、貴方は敵を見逃してでも力を残しておかなければならなかった」

声を遮れたアンリマユは黙るしかない。理由は一つ、シエルの立てた説が間違っていないからだ。

マキュリアスの撤退後、シエルの言う通りにある程度戦いの後に起

こるであろう事を予測していた信彦は、苦悩の末に舞子を殺そうとする志貴を止め、彼女を人間や他の生命に害のない存在へと変えた。

結果、志貴はかつて見捨ててしまい、ある意味自分の分身とも言える舞子を殺さずに済み、妹である明美から姉を殺されたという恨みを向けられずに済んだという訳だ。

「遠野君はこれで自身を追い詰める事も、誰かに恨まれる事もなくなりました。私が山瀬直美に暗示をかけるという方法もありましたが、それは遠野君が望まない方法でしょうし、結果としては最良だったのではないですか？ 貴方が敵を見逃したという代償はあったようですが」

「ちえッ。なにかと見透かしたような言い回しでなによりですわねえ」

「正解のようで何よりです。本当に、貴方達は遠野君には優しいんですわね」

「背筋が凍るようなお褒めの言葉ども」

創作のナゾナゾがあっさりと答えを出されて機嫌が悪くなった子供のようにいじけるアンリマユの横顔を見てクスリと微笑むシエル。

ここまで彼等が志貴を気に掛けるのは、かつての自身が多くの敵意を向けられた体験ゆえなのだろう。ゴルゴムの崩壊後、当てのない旅を続け美咲町へと辿り着くまでの間に信彦へと向けられたの様々な負の感情だった。

事情を知る者ならば信彦は創世王打倒に大きく献上した1人ではあるのだが、シエルの属する聖堂教会や魔術協会はそれを認めず、むしろ信彦こそが悪の象徴、根源であるとして命を狙ったのである。

刺客など信彦にとって取るに足らない相手ではあったが、逆恨みにも近い敵意や憎悪という名の攻撃は肉体に届かなくとも精神に届く。アンリマユに叱咤されるまで心が追い詰められていた信彦は、同じ境遇を志貴に向けさせない為に山瀬舞子を手にかけて済む方法を選択。その為に、あえてマキュリアスを見逃してキングストーンの力を温存した。

本当に、どこまで戦況を見据えての行動だったのだろうかとただ感服するしかないシエルにコーヒーを飲み干したアンリマユは尋ねた。

「んで？まさかこれで終わりってわけじゃないよな？」

「……………」

「あんた、挨拶代わりに『残酷な手段』ってどこにまだ一切触れてない。もうここまでできたら一切合切話してもらおうじゃねえの」

視線をシエルへと向け、完全に聞く体勢となったアンリマユ。単にさつさと話を切り上げたいという意図も取れるが、シエルも最初からその話をいの一番にするつもりだったのだ。今後の為にも、彼の認識を確認しなければならぬのだから。

「では、ここから一番の問題です。私は貴方たちに『残酷な手段』『救ったのは遠野君だけ』と言いました。その最大の要因は、貴方が山瀬舞子の命を救った事。それは問題の解決にはいたらず、むしろより大きな問題を引き起こしたからです」

(どういう事…?)

アンリマユとシエルの会話に耳を傾けたまま注文したドリンクをストローですするアルクエイドは、シエルの言う大きな問題に合点がいかない。

癪だがあの男によって自分や志貴は一命を取り止めた。そして単に寿命が延びただけではなく、志貴と同じ時間を共に過ごせるという意味も含んでいる。その点だけには恩義を感じるものの、やはり好きにはなれない奴だが、そんな信彦達が誰かを救うどころかささらに問題を悪化させるなどありえるのか？

(…って、こうしてシエルの言う事に疑問を抱いているあたり、私も無意識のうちにノブヒコを信じてるって事…?)

自身の分析にまさかねと苦笑するアルクエイドは意識を2人へと切り替えた。

「貴方達は山瀬舞子を助けたと同時に、混沌の残滓を脅威でなくした……これは功績に値するものでしょう。彼女が、以前の通りに『人間』であつたのなら」

「……………」

「そうです。貴方が助けたのは山瀬舞子という『人間』ではない。ネロ・カオスに養分として取り込まれ、主人格なき後に混沌の後継者となつた『死徒』を生かしたのですから」

シエルの主張にアンリマユはなんにも言い返さず、隠れて聞いていたアルクエイドはようやくシエルが普段よりも責め方が強いのか理解できた。

姿形だけなら、確かに山瀬舞子は人間に見えるだろう。その人格も魂も、間違いなく人間のものだ。しかし、『人間』ではない。本来だつたら人間とは相いれない明確な『敵』であるはずの存在。それが『死徒』のはずだ。

だが、今回はそれだけでは収まらない。

「短期間とは言え、人間である遠野君の一部でありキングストーンの力も重なって混沌が本来持つ吸血衝動などが消失したという前例のない事が起こりましたが、それによって彼女は……山瀬舞子は至ってしまった」

「人の血も肉も食さずに人としての精神を保っていられる。真祖すら生み出せなかつた完全な死徒に」

本来、死徒は人間の血を摂取し続けなければ身体が崩壊が始まり、死に至る。だが、舞子はキングストーンの力の恩恵で真祖すら免れない吸血衝動どころか混沌の因子が持つ飢餓感も克服してしまった。舞子の肉体はさらに他の混沌を融合・圧縮体であるネコカオスを宿すことで強靱な身体を持つだけでなく、不死の肉体をも手に入れた事になる。

「これがどのような意味を指すが、貴方も理解しているでしょう？」
「ほっとかないだろうなあ。どいつもこいつも」

吸血を必要としない死徒。

その存在がどれほど希少であり、認められない存在であるか属する立場によつては変わる。

神秘を追求する魔術協会からは被検体として。

異端を認めない聖堂教会からは抹殺対象として。

何も知らない人間からは化け物として…

最悪、信彦達の知る組織たちに狙われる可能性だつて捨てきれない。

シエルはこう言いたいのだろう。山瀬舞子は信彦が助けた事によつてより危険な存在へとなり果ててしまったのだと。確かに、そんな彼女を生み出した事は『残酷』な方法だったのかもしれない。

「…貴方が行った事は問題の先延ばし。今は家族と時間を過ごせるかも知れませんがそれもこの先数年間だけの話。人間として老いる事を失ってしまった山瀬舞子は周囲の人間だけでなく、家族からも離れなければならぬ時がいずれきます」

それは、ロアによつて時間を人間としての時間を奪われてしまった彼女だからこそ言える言葉だった。

「それが、俺達が『全てを救っていない』つてことか」

山瀬舞子は死徒として生きなければならず、妹の明美はそんな姉と長い時間共にいられない。なるほど、話を聞く限りあの場で助かったのは志貴だけだとは言えなくもない。

「貴方たちなら最初からそうなるかと予測はついていたはずですが、そうしなかった。彼女がいずれ孤独となる結果が分かっているというのに」

「なら、あのまま殺しといた方が彼女のためですからくなんてありません。たりのお言葉な無しで頼むぜ姉ちゃん」

「いえ、その通りですよ」

「ああん？」

「厳密に言えば彼女はもう既に死んだ存在です。偶然に偶然が重なった結果、あの死徒は生まれました。ならば、人間の紛い物として生きるのではなく、今からでもその命を絶つ事こそが彼女の為だと思いませんか？」

「…ハッ。なんだいなんだい。今度はよりらし過ぎる言葉を吐くじゃねえか聖職者。そんなに嫌いかい異端は？」

「ええ。殺したいほどに大嫌いです」

不穏な空気が周囲を包み、しばし沈黙がその場を支配する。シエルとアンリマユは無言で睨み合うが重々しい空気を打ち破ったのは深く溜息を吐いたシエルだった。

「全く…どこまでもゴイングマイウェイな人ですね」

「それ褒めてんの？ 貶してんの？」

「どっちもです。どうせ貴方たちの事です。その後の事もどうにかしてしまおうでしょう？」

そう言ってシエルはアンリマユの手元にあるファイルの束へと一瞥すると立ち上がり、再度低い声で彼等に告げる。

「覚えておいて下さい。この先、どのような連中が彼女を狙うかわからない。その時、より多くの人間が巻き込まれる可能性だってある。その時、貴方たちに相応の責任を負う事になりますよ?」

山瀬舞子を生かした責任が。

だが、シエルの質問に答えたアンリマユの…否、彼の解答はあの時と…山瀬舞子を助けた時と変わらないものだった。

「言ったはずだ。後始末はする。最後までな」

「そうですか。なら、最後まで任せますね!」

予測された答えだったのだろうか。シエルは打って変わり満面の笑みになると踵を返し、今まで居座っていた席を後にする。

「あ、それと上の命令で山瀬さんの監視するという事でまた学校に通いますので」

と、余計な情報まで残したシエルは今度こそ店を出ていく。妙に機嫌がよかったのは、山瀬舞子をただ監視するだけで済み、志貴と同じスクールライフを満喫できると踏んだからか…?と、考える事すら馬鹿らしくなり、信彦は再びファイルを展開した。

『ちよつとちよつとーなに美味しいトコ持つてくんですかねえ』

「ちようどいい休憩になった。もう用はない寝ている」

『うーわ辛辣う!面倒がって交代させられて、一生懸命答えたついでうの…』

『うん!アンリは頑張ったわよ、エライエライ!』

深層意識で練り広げられるオーバーな会話に耳を貸すことなく再びファイルに記される資料へと目を通す信彦へ、今度は先ほどから身を隠していた珍客が姿を現した。

「なにこれ？てろめあ？それにこっちは、ホムンクルスの製造に…あ、これロアが使ってた魂を固形化させる魔術じゃない！」

「勝手に見るなアルクエイド」

「ふーん…貴方、これで作った肉体にあの女の魂を入れるつもりなの？」

さらりと核心へと迫るアルクエイドの読みに、信彦は何も言わない。これだけ材料がそろっていれば、アルクエイドならすぐ辿り着く内容だったのだろう。ならば、特に隠す必要はない。

「…キングストーンの副作用か分からんが、山瀬舞子の魂は混沌の一部と言えど固形化されたものとなっている。それをあの黒猫と分離させた後に別の肉体へ移し、完全に馴染ませれば人間の平均寿命まで生きられることは可能だ。理論上はな」

「なんでそこまでするの？もう血を必要なく生きられるならもうほつとしてもいいと思うけど」

今度はお前が質問かと若干眉間に皺を寄せる信彦だったが、懐からタバコを取り出しながら視線を窓に向ける。確かにそれも一つの方法だろう。舞子から他の生物を喰らおうとする衝動を取り除いてしまえば、無害の動物と変わらない。

あのネコカオスが少々気にはなるが、害はまず起きないはずだ。だが、それでも信彦は譲らなかつた。

例え今回のように特殊なケースで殺され、怪物として再生しようが、それで人としての生を諦める理由にはならない。

そして改造人間である今の自分では決して叶わない。

人外へと堕ちたとしても、まだ人として生きる事がまだ可能であるならば。人間に戻れるのであれば。まだ間に合うのであれば。

自分の力で助けられるのであれば、迷う必要はなく全力を注ぐ。

それが今回、キングストーンの副作用で生き返らせてしまった自分が山瀬舞子に出来る『後始末』なのだ。

が、その理由をこの真祖へと説明する理由は無かった。

「お前には関係ない」

「たっぷり黙って出てくる意見がそれってどーゆーことよッ!?!」

ムキーンと怒るアルクエイドを他所に、信彦は加えたタバコに火を付けるのであった。